エキストラセンソリーな日々。

黒咲彼岸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エキストラセンソリーな日々。

【Ｎコード】
Ｎ９７２５Ｅ

【作者名】
黒咲彼岸

【あらすじ】
坂道を上りきった石ころは、もう転がり落ちるだけ――――自分の命にすら価値を見出せない少女に、他人の価値が理解できるわけもなく、自分を愛する人の気持ちもまた理解できるはずが無い。無垢すぎる手でもって命を蹂躙してきた少女は、その報いを受けることになる――――第二章最終章デッドスパート！　超能力×学園×ＴＳの変身能力で性転換した織神葉月を中心に描き出す、ＳＦシリアス。

序章－1　前日前夜。－Ｐｒｏｌｏｇｕｅ－

朝、とりあえず朝食に生ハムを載せたパンを頬張る。
理由は簡単で、他に食べられそうなものがなかったからだ。
冷蔵庫に入っているのは、バターやマヨネーズなどの調味的な物と牛乳に瓶に入ったクリオネだけだった。
・・・クリオネは別に食べるつもりで入れているわけじゃない。
友達がネット販売にてノリで購入したのを、そのまま置いていったせいだ。
要冷の観賞生物が瓶５本分入っているせいで、ミニ冷蔵庫はかなりスペースを取られている。
涼しげに海水を舞うあやつらがウラメシイ。
そもそもえさが特殊すぎて維持するのにもかなりお金のかかる生き物なのだ。
牛乳をコップに注いで一気に飲み干すと、パンクズの散った皿と一緒にすぐさま洗った。
一人暮らし、なんでもすぐにやってしまわないと後の方がしんどいものなのだ。
洗面所で髪を直して歯を磨く。時間は登校時刻の７分前。
僕はリズムよく事を済ましてアパートを出た。

――――場所は特別研究都市神戸、入学時の緊張感を少し解かした４月の中旬。
織神葉月（おりがみはづき）は超能力者になるべく、通う中学校へと歩を進めた。

超能力が科学者達の研究材料として特に注目を浴びたのは５０年ほど前のこと。

アメリカのソフィ女史が発表した論文と1つの薬の成分表がその始まりだった。

超能力を発現するために必要な脳の使用パタンを取得させるために有用な錠剤の原型が作られたことによって、この手の研究は急速に発展していった。

今では世界各地に多数の研究所が存在するほどである。

ソフィP・S　記念研究所はまさにそのシンボルだが、ロシアや中国、日本にもあり、ヨーロッパでも知られる研究所がある。

日本の場合、国の指定した市の地域丸ごとを超能力研究の特殊機関として運営するという方式で、国内に9箇所の特別都市がある。

実用化された薬『SPS』は国際機構によって認可された機関でなければ扱うことはできず、また誰でも効果が得られるわけではない。

認可機関での特殊訓練を受けた最低9歳、最高25歳までに限って薬の服用が許可されているのだ。

発達しきった脳では効果が薄く、いきなりの服用は脳に与える影響が大きすぎるために、少しずつ脳波を同調させることで慣らしていくためである。

故に大掛かりな能力開発をするためには、専門設備の整った子供を養育できる機関が少なからず必要であり、だからこそ市を丸ごと利用したこの体制が執られている。

日本ではSPSの服用は13歳からで、指定学校で教育を受けてきた生徒は中学校入学からオリエンテーション等を行った後に服用を許可される。

それが、今日。多くの認定学校がこの日服用行事を行う。

学校までは私鉄で3駅行った所から徒歩10分。

この時間、通勤する大人たちと通学する子供たちが入り混じり、不快度が急上昇する。

人混みが苦手な僕としては、アパートから徒歩で通える中学校が良かったのだけど、ＳＰＳ使用認定学校は近くになかったのだ。

もっとも、特別研究都市といっても普通の学校がないわけではないし、本来それを選ぶのは自由意志だ。

ただし僕の場合は両親がいないので奨学金を得て学校に通っていて、小・中学校一貫のその奨学金が、超能力者育成を推進するプロジェクトの１つであるため、学校の選択がＳＰＳ使用認定学校に限定されている。

融通が利かないものの、今だって、オプションとして付いてきた権利で改札をパスして乗車しているし、今や金銭的な不便は感じることはない。

隣の高校生が大音量で聴いている音楽を聴き流しながら、今日のことに思い巡らしているうちに下車駅に着いた。

『学園都市』。みもふたもない名称の駅だ。

もう少し、凝るとか限定するとかあっただろうと思う。いったいこの市だけで幾つ学園都市があるんだか。

ここで多くの学生が降りるものの、乗り込む学生も多い。彼らは”違う”学園都市に行くのだろう。

”この”学園都市には特に研究施設や認定学校が多いのだ。そういったものとは無縁の学生は逆に普通の学校のある方に散らばるという、シュールな光景がこの駅では広がっている。

駅を出るとかなり開けた広場がある。朝かなりの人数の学生が行き来することを考慮して作ったものらしい。

僕の今着ているワインレッドカラーのブレザーは祠堂学園第一中学、同じデザインで色が青っぽいのが第二中学で黄色っぽいのが第三、緑が第四と色違いの制服がちらほらあって、デザインで学園の、色でその中での区分けが分かるようになっている。

多数の学園が乱立しているため、見分けやすさを考えた結果らしい。

僕はもちろんワインレッド色の塊と同じ方向へ歩を進める。

と、その中で見慣れた顔を見つけた。
金の短髪をした不良な少年、四十万隆（しじまたか）だ。
身長は１７０ｃｍほどの高めで、控えめに筋肉質の体つきをしている体育会系な友人である。
よっと背伸びして後ろからその背中を叩く。
「やほーい、タカ。珍しく、早いじゃない」
軽く、挨拶。
「！あぁ、葉月か」
振り向いて、それだけ。せめて手を上げるとか「おはよう」と言うとか何らかの形で挨拶をして欲しかったな。
いや、「やほーい」が挨拶かと言われると自信はないけどさ。
「早いじゃない」
とりあえず重ねて問うてみる。
少なくても彼は今までの少ない登校日の内７回は遅刻するという怠惰な性格をしている。その他だってギリギリに来るのが常で、これほど早く登校というのはちょっとした驚きだった。
「そりゃあお前、今日は誰もが待ち望んでいた日だろうが。俺だってワクワクはするさ」
君ほどそんな言葉が似合わない人もそういないよという言葉を心中で口にしつつ、クスクスと笑ってみる。
「そうかもしれないね。つまり、そんな特別な日にも関わらずいつも通りに登校してきた僕の方がおかしいわけだ」
するとタカは口を半開きにした状態で、何か、その、ものすごく何か言いたそうな目をした。
「・・・お前が普通じゃねぇってのは、前から知ってたぞ？」
立ち止まった上、間をおいて失礼なことを言い出す。真顔だから余計に失礼さが引き立っている。
「えー、嘘だぁ。というか、僕は普通なつもりなんですけど？」
「なぁ、入学して二週目の事、覚えてるよな？」
別段記憶に古くはないし、この数週間で目立ったことなどあまり

ない。
　指していることはすぐに分かった。
「タカがキレてカッターナイフ振り回したやつね。
　それを僕が止めて今に至ると。ベタで美しい話じゃないか」
　あ、また微妙な顔をした。
「色々とはしょっただろ、それ。俺は鮮明に覚えてるぞ？
　カッター持ってアホンダラを追い掛け回してた俺を――――」
「僕が止めたわけだね」
「机を投げつけてきてな。まるで躊躇がなかったぞ。それで、俺が
『なにしやがる、てめぇ！先に殺されてぇか、この女男！！』つっ
てお前の方に向かっていった俺を――――」
「僕が静止させたわけだね」
「ダガーナイフ取り出してな。どこのどいつがブレザーの裏ポケッ
トにそんなもの入れるんだ？」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
　無言で顔を合わせる。少しの間笑いを堪えて、しかし笑った。
　本当に他愛ない、朝のじゃれ合いだ。
「でよ」
　と笑いを含んでタカが訊く。
「なんで持ってたんだ？あんなもの」
　ふむ。アレはただの趣味なんだけどね。
「護身用だよ、護身用。・・・世の中、物騒だからね」
　なんて、答えてみる。
　あー、全然信じてないな、その顔は。

　土足で上がれる我が祠堂第一の狭い昇降口を通り、自分たちのク
ラスである1‐Bに入る。
　少数を小分けする集中指導方式を取り入れているこの学校では一

クラス１５人ほどしかなく、教室も少し小さめだ。
　クラスメートが少ないのは人を覚えるのが苦手な僕にはうれしい限りなんだけど、女子の比率が高くて男子は肩身が狭い思いをしている。女子９人男子６人。３人だけでもその差は大きい。
「おはよー、今日はアレだね？みんな早いね？」
　そう言いながら、自分の席に着く。
「おはよう、葉月。なに、一週間もすればクラスの半数はだらけて駆け込み登校に戻るだろうさ」
　駆け込み登校。意味は分からなくはないけど、たぶんそんな言葉はないと思う。
「はよー、今日だけさー、今日げんてーい。明日からはいつも通りギリギリに・・・・・あぇ？明日もなんだかんだいって早く登校かなぁ？」
「みんな自分の能力自慢したいし、他人の能力知りたいしで、明日はそうなるでしょうね。というより、美樹、そのだらけたのやめてよ。
　・・・おはようね、葉月君」
「おはよう様～」
　皆、思い思いに声をかけてくれる。クラスで仲がいいのはいいことだと思う。まあ、この教室は女性中心社会だけどね。
　唯一問題があったタカもあの件以来静かなものだし、その彼だって元々そこまでコミュニケーション能力がなかったわけではないし。
「いいんちょー、今日の予定はさー、どんなのだっけぇ？早く帰れるぅ？」
　さっきからのこの間延びした声は細川美樹さん。艶やかな黒髪を重たげに流した半目な少女だ。ほとんどいつも机などに顔をべたっとつけて過ごしている変り種。あのままだと、背筋が悪くなると思うんだけどな。
「だーかーら、そのしゃべり方やめなさいって。
　今日は一時間目に身体検査やって、二時間目に最終確認の集会し

て、最後にＳＰＳを服用したら下校でしょう」
こっちは委員長。朝風椎（あさかぜしい）という名前で、どこぞの会社の令嬢だとか。一度会社の名前を聞いたのだけど、忘れてしまった。なんか独特な感じのところだった記憶がある。
ちなみに副委員長も女子で、その役を任されているのは長谷川亜子さん。委員長共々しっかりした性格をしているので、男子の権力は弱いというわけだ。
「じゃあ、はやく帰れるよねー、やったぁ」
頭を机につけたまま、ぶらんと両手を上げて喜ぶ美樹さん。ちょっと動作が怖い。
「でも、服用後は安静にしてろって言われてる。五時間後には寝ろって前のオリエンテーションで言ってたろう？」
と朽網釧（くさみくしろ）。小学校の頃からの親友で、一緒に色々怒られることをよくやった仲だ。ちなみにクリオネを押し付けてきた張本人でもある。
野暮ったく後ろで長髪を括っているこの引き篭もり気味の社会不適合者は、ネットを利用した小遣い稼ぎが得意でデイトレードまでこなしてしまうため、経済力だけが異常に高いから始末が悪い。家も相当裕福だ。
「別にいいのよー、どうせ寝るんだからー」
どうでもいいけど、横になってる状態って一番体が衰退するらしいよ、美樹さん。今の体勢も含めて何とかした方がいいと思う。既に手遅れな感じもするけどさ。
ま、思うだけで言わないんだけどね。
人を観察することは楽しめる性質だけれど、そこに入っていく気力はあまりないのが僕の欠点のひとつだろう。
口調はなるべく軽く、何も考えていない風に。自身の事を他人の意識に入れられるのを嫌い、必要以上に他人のことも気にかけない。
クシロ曰く、僕はそんな人間らしい。
他人に興味がないため、人の情報を覚えるのが苦手なんだろう。

自分から観察趣味で能動的に仕入れた情報は別として。
そうこうしている内に、チャイムの3分前。この学校、3分前着席推奨なのだ。
今年から始まった指導なので2、3年はやっていないため、あくまで”推奨”。強制できていない。
クラスメート共々、素直に自分に与えられた席に着いた。
こういうのを、治安がいいと言うのだろうか。

3分はあっという間に経った。
これから、ある意味儀式的な緊張を持って、変化がやってくる。
時が区切られ、新鮮味を得るような感覚は恍惚。
もちろん、僕にとっても。

中学校に付属している小型の体育館に、1年のAからNまでの14クラス全ての生徒が集まっている。
前方にある一段高い舞台で医学的な方面の主任らしい白衣の男性が何かを喋っているけど、この中でいったい何人が聞いているのやら。
命に関わる危険性はほとんどないとは言え、薬物の使用であるからには、ある程度の慎重さを必要とする。
幾度となく行ったオリエンテーションに今やっている最終確認。
必要性は誰だって理解しているものの、やっぱり同じ事を繰り返し言われるのは退屈だ。
僕は完全に聞き流している。
今、この怠惰な脳みそはくだらない想像しか巡っていない。
羽の生えた子豚3匹が槍やら銛やらをそれぞれ片手に、どこぞの海底都市に住まう狼たちを狩っている、そんな感じ。
海中だから羽の意味がヒレと同等分しかないし、最年少の子豚が魚群探知機と魚雷を搭載した船体に『煉瓦造』と明朝で書かれた戦

艦に乗ってるし、狼はトカゲの如く体をくねらして泳いで逃げてる。
退屈は人をおかしくするに違いない。それにどうにも眠くて敵わない。意識が天使な子豚に連れ去られかけている。
頭がこくんと揺れる。こくん、こくん、こくん。・・・こくん。
別に話は聞かなくても、大丈夫。委員長がちゃんと聞いてくれているだろうから、最悪、訊けばいい。それに彼女だったら、特別伝言する必要があるのなら言ってくれるだろうしね。
とりあえず、あの凶暴な子豚達に狼がどう反撃するのかを楽しみにしたい。

「・・です。２時間毎に・・温を測って・・・・さい。熱が・・・・・・たり、下が・・・・・・・・は学校に・・・・・れく・・・・・・・」

・・・・・。・・・・・・・・。・・・・ん・・・。ぁ。
意識が、完全に飛んでいた。
自分から手放した感があるけど、まあ、とにかく。
どうやら狼は長い間停戦状態だった山羊の一家と手を組み、サディスティックな殺し屋　赤帽子（あかずきん）を雇うことで何とか暴君子豚を退けることに成功したらしい。
・・・いやいやいや。そうじゃないだろう、僕？まだ寝ぼけているっぽい。
どうやら僕が寝ている間に主任の話は終わったらしい。
保健主任は退場し、学年主任の方が性格どおりの手短い指示を与えているところだった。
「では皆さん。４・４・３・３ずつで行きます。ＡからＤクラス、ＥからＨ、ＩからＫ、ＬからＮのそれぞれのグループが１０分毎に医務室に向かってくださいね。
まずは、１グループ目！」
この先生、余計なことを一切言わないから好きだ。散々「注意し

てください」云々を聞かされてきた身にとってはありがたい。
僕のクラスはBなので、今からもう移動を開始することになる。
眠気でだるさが残る体を立ち上がると同時に伸ばして、暑い体育館とおさらばだ。
春のまだ涼しさの残る風を楽しみながら、ぞろぞろと歩く。
６０人ほどだからそんなに数が多いわけではないけれど、やっぱり皆興奮したり、緊張したりしているみたいだ。
僕も、一応、そんな中の１人なんだろうけど、どうもそういったことを表に出すことは苦手。
既に見慣れた校舎や中庭を視界に入れて気を紛れさせながら、そんなクラスメート達についていった。
医務室、というか保健室は本校舎の入り口近くにある。学校自体がこういう施設だから、通常のものと比べてかなり大きいと思う。
といっても、僕は”普通の”学校なんて行ったこともないんだけど、教務室より大きいということはないだろうから。
出入り口が計3箇所あって、僕らは一番校舎の入り口に近い方から入った。
目に飛び込んでくるのは白い壁と銀の器具と機具。応急用のガーゼや傷薬、包帯なんかをしまっている棚や、保健医の机、待合のベンチに、簡易ベッドが仕切り付きで７つもある。
それでも余る室内空間は壁に仕切られてまるで見えないけれど、学校では使いそうもない高価な器具があるだろうことは何となく想像がつく。
前列の方で、Ａ組の生徒が保険医からＳＰＳを受け取っているらしい。
皆乗り出すからよく見えない。
まあ、すぐに回ってくるだろう。薬を渡すだけなんだし、そもそも１クラス平均１５人しかいないんだ。
後ろを見ると、クシロが欠伸をしていた。
僕が振り向いていることに気づいて、手をひらひら振る。

僕はくくっと笑って前を向きなおす。
彼が手を振ったのにも、僕が笑ったのにも意味はない。まあ、行動全てに意味があるわけでもないだろうし。
うん。相変わらず、無駄なことを楽しんでいる。
と、僕の番が回ってきた。
保健医のヘビースモーカーな隈目気味の彼女がほれ、と軽く渡してくれる。
チャック式の小さいビニール袋に一粒のカプセルが入っている。緑と白の色彩のチョイスは他の薬と区別するためだろうか。
それを持って先に進む。いつもはない簡易の長机あって、その上に水の入った紙コップが並べてある。
ＳＰＳを手にとって、よっと口に放り込んでから、水を一杯飲み干した。
さっさと真ん中の出入り口から廊下に出る。待つまでもなく、靴を履いている間にクシロも出てきた。
各自解散なので、２人して教室へ鞄を取りに戻る。
１年生の教室は１階。当然３年は３階で、４階には図書館や音楽室なんてものが詰めてある。
屋上部分は普通に開放されていて、基本昼食休みに憩いの場。ときどき外側から鍵を閉めて秘密の会合にも利用されるらしいけど。
これはコンピューター部の先輩から聞いた話。もっとも僕は帰宅部だし、この時期に既に部活に入っている生徒は少ない方だ。クシロがコン部で、そこに僕が頻繁に顔を出すだけ。だから正しくはコンピューター部にいる先輩、かな。
さて、そんなことはさておき。
「君は、いったいどんな能力をお望みなのかな？」
こんな状況にあれば誰だってするであろう、質問をしてみる。
皆朝のうちに、あるいはそれ以上前にやってしまっていることにも関わらず、僕らはこの話題をするのは初めてだ。
理由は簡単で、僕がそういった話を進んでしたがらないから。子

供染みた姿を露見することを、恥ずかしいと感じてしまうのだ。残念ながらこういうところに老けがきている。

「うぅん？」

相槌。こっちから振ったことに対する確認だろうか。

「そうだな。電磁的な・・・パソコンとかに応用できそうなのか、株の変動が分かる能力、ぶっちゃけ未来視かな。そのどっちか」

「魔人にする３つの願い事みたいなノリだね・・・・・『未来見えれば競馬で稼ぎ放題だぜ！』みたいな感じですか。

今でも十分稼いでるでしょ。そしてあんまり使わない」

んー、と彼は髪を掻いた。

「いや、そうでもない。１ヶ月に５００万も使えば消費癖がついて然るべきだろうよ」

確かに、普通に考えればそうなのかもしれない。でも、それは少なくとも年収が1千万以下の家庭なんかで言われる”普通”だ。

彼の場合、一人暮らしで年収は億を超えている。実際、彼が何で儲けているかはよく知らない。ネット関連で結構稼いでいる様ではあるけど、それだけで億単位を稼げるとは考えにくい。案外、どこぞの会社の社長なのかもしれない。

「で、その１ヶ月に何千万稼ぐの？貯金、増える一方でしょ」

「１つ何千何百なんてものそう買わないしな。電化製品は一度買えば何年か持つし、消費物はそもそもそんなに高くない。食べるものにも着るものにもこだわらないし・・・・・」

「お金なんて、使う以上はいらないよ・・・貯金が1兆を超えても働く必要があるとは思えない。というか5億でも一生分足りるでしょ」

何時だったか、一生に何円あれば遊んで暮らせるかなんてことを、幼稚ながら計算したことがあるけど、確か3億ぐらいだった。控えめに言っても１０億あれば十分なはずだ。

「あー、俺の住んでるところさ、あれ２０億以上したんだけど？」

「へぇ・・・いやいや、というかあそこ賃貸じゃないの！？」

てっきり超高収入者向けの賃貸マンションだとばかり・・・・・・
「言わなかったっけ。衝動買い？一括で買ったんだけどさ。地上から遥か37階の大展望、高いセキュリティーに好立地。買わなきゃ損」
一括で、中学・・・いや、小学生がそんなもの買うというのは、どんな光景なんだろう。たぶん、クシロの親父さんが色々面倒な書類とかはやってくれたんじゃないかとは思うけど。
「そりゃ随分な冒険したね、その年で」
「まあ、それ以外はあんまりでかい買い物はしてないよ。興味引いたもの片っ端から買ってはいるけどさ」
「それでも収入と支出が合ってないね。稼ぐことに執着しすぎだと思わないでもない」
「その分は、お前が持ってくだろう？なら、別に無駄にだってなってない」
・・・・・テイク・アンド・テイク。『取って、取って』だ。
いや、奪う、か。
そういった行為は楽だけど、苦しい。少量でも良心とかいうモノを持っている人間には。
僕がどうなのかっていうと、難しい話。とはいえ、少なくとも、嫌がる程度には・・・。
クシロは横を歩く僕の方をちろっと見て、ふぅと息を吐く。
「使わない金があるからと言って、俺は募金だの寄付だのする気はない。意味のない気まぐれでも起こさない限りね。
少なくとも、『お金がない』からと悲劇ぶる人間はこの国にはそういない。状況を打開できないほどの不幸が、この国内にあるとは思えない。
そして海外（そと）の話は遠すぎる。彼らを俺達よりも不幸だと決め付けるのは侮辱で、彼らにある困難は彼らが克服すべきだ。まあ、確かに富国でぬるぬると生きている俺らみたいな人間が、何らかの援助は出来るだろうさ。可能性の話では。

でも、それは彼らの全てを踏み潰すのと同時にでしかない。『善意の募金』だとか、『あなたの気持ちで救える命がある』だとか、それこそ胸のむかむかする言葉だよな。

そんな行為に善意なんてあってたまるか。くだらない。何も考えずに好意なんて行為ですることじゃないし、それで人の人格が値踏みされるわけがない。されると考えている奴こそが、薄っぺらい。

募金箱に小銭を入れることが、善意だなんておかしな話だ。いい事をした、なんて傲慢を得るために彼らを踏みにじっているんだから。それなら、それこそお釣りを財布にしまうのが面倒だから、なんて理由で入れた方がマシだよ。善意もなければ悪意もない。

募金、寄付、救助だなんて言葉が、善意なんかだけでは成り立たないって、知っている人は何人いるんだろうな。知っていて尚もその泥道を素足で歩く覚悟を持って行為する人は何人いるんだろうな。

世界には確かに、そんな覚悟を持った人間が、いるにはいるさ。でも、そんな人間は、のうのうと、この国に安住はしていない。それこそ、自分の足で、手で彼らを支えることだろう。

善意が偽善に見えてならない俺は、絶対にそういった行為は出来ない。引き篭もりの俺には、精神的にも遠すぎる。となると、あまりに余ったお金は溜まる一方というわけだ。

それは困るよな、お金が回らなければ、景気が悪くなる。景気が悪いと、文化もあまり発達しない。それじゃあ、俺はつまらないだろう？

だから、俺はお前にお金を配ってもらうわけだ。親友に単なる好意で小遣いを与えるだけ。俺の気まぐれ。

お前はさ、偽善を抱いて胸を張れる人間だから。お前がそれこそ募金でも寄付でも援助でもしてくれればいい、偽善でもってさ。

果たして俺の稼いだお金は無駄なく、意味あり、使われるだろう。

そうやって俺の代わりに俺のお金を方々に回すのが、ある意味お前の仕事なの。ギブ・アンド・テイク。だから、そのお礼としてお小遣いも含んでいるわけだ。

まあ、いったい渡したお金のどこまでが小遣い分かは不明だな。たぶん、全部なんだろうが」

なんて、最後はおどけた風に言葉を紡いだ。少し言い過ぎな感じがあるけど。

いつもより饒舌で、言葉遣いが雑になった、クシロ。・・・・・・優しい、僕の親友だ。

まあ、それだけじゃあないんだろう。

彼は善意という言葉を毛嫌いしている。小学生時代から、家庭が既に金銭的に恵まれていた彼はその類を理由に苛められていたから。

それに僕も関わっていたのだけど、あまりこの話は気が進まない。ただ言えるのは、苛めを行っていた彼らが幼稚であったように、当時の僕も相当幼かったということ。もとよりクシロと知友の仲だった僕は、その事実を知って激怒した。感情に任せて、彼らを叩き潰してしまった。

結果として、いきなり転校することになった生徒が多数出たし、彼らはトラウマに悩まされることになっただろう。

もっとも、だからと言って彼らに同情などはしないけれど。

ともかく、その件があるから彼は『善意』とか『募金』といった言葉に特に敏感だ。

そんな話を持ち出してまで、回りくどい慰め染みたことをしてくれる彼の好意に感謝して、おどけて返してやることにしよう。

「でもさ、クシロ。結局の話、使う分だけ稼げば問題ないよね」

なんて。

／

「でもさ、クシロ。結局の話、使う分だけ稼げば問題ないよね」

葉月はそんなことを言っておどけてみせた。

頭1つ分ほど低い位置にある葉月の表情を見るが、さっきまでの翳(かげ)りはない。

全くの失言だった。

葉月には両親がいない。幼い頃に彼は捨てられ、現在に至る。

織神の姓は引き取った養育機関の誰かがつけたものだが、名前の方は放置された揺り篭の中に一緒にメモが入っていたらしい。

そのくせ、誕生日は記載されておらず、葉月から8月、拾われた日から17日で8月17日をその日としている。

奨学金やらなんやらで、何とか軽減させてはいるものの、それらが十分だとはいえない。

小・中学校は義務教育であるし、当然身寄りのない子供も不自由なく通えるのが本来なのだろうが、現実はそう綺麗にいってはいない。

なにより彼の受けている奨学制度はある種の強制性をもってSPS服用を促す傾向が強い。

『通常の学校に通学できない程度』に制度内容が縛られているし、そもそもそれ以外の制度が紹介されたかも怪しい。

だいたいこの学校にでだって、本来は入れなかったのだ。

葉月がやり繰りできる金銭では、もう少し遠くにある『双芥(そうかい)中学』しかなかった。

ただ、この中学校は仄暗い噂が多すぎるのだ。

『校舎の数倍大きい地下施設が存在して、能力者の複写体(クローン)を製造している』とか、『SPSの大量服用による人体の変化を実際実験で研究している』とか、『生徒を生きたまま解剖して、瓶詰めにして保存してある倉庫がある』とか。それらに派生してヤバめの話が後を立たない。

そんなところに親友を行かすわけにもいかないので、強引に不足分やそれにともなって定期的に必要になってくる費用を俺が払っているのだ。

俺の師匠であるところの深香(みが)クルナさんがゲラゲラ笑いながら「火種がなければ煙も噂もたたないんだぜ、くっしー。後悔後に立たず、てな」なんて不気味なこと言ってくれたのも強く押した一因な

のだが、ともかく葉月の生活は、能動受動は別として、純粋に他人のお金の上に成り立っている。

当然、そこのところを気にしていないわけがない。だから、さっきのは失言だった。

俺の境遇は別として、あの年でバイトもしているし、今は俺のやってるような小遣い稼ぎにも手を出している。

・・・・・話題を戻そう。

「で、そういう葉月はどうなんだ？発火能力（パイロキネンシス）とか座標転移（テレポート）とか？」

「ん、発火系はいいかもしれないね。凍結系でもいいけど。転移系はごめんだよ。転移した先で、自分の体が変なところに突き刺さってたら嫌だし。

・・・・・物はいいけど、人は動いているからね。気づいたら手が誰かさんの胸に刺さってるなんてオチは避けたい」

変なところで想像力がいいよな。確かに座標転移（テレポート）なんてものは、考える以上に不便極まりないらしいが。

「強影念力（サイコキネンシス）は？あれも応用度が高いから、使い勝手はいいだろうけど・・・・・・」

「形に見えにくいのがね。派手なのがいいなー、分かりやすいし」

強影念力（サイコキネンシス）だって、派手だとおもうんだけどな。葉月はたぶん能力自体が透明なのを言っているんだろう。

それに葉月は軽い物言いで言っているように見えて、これで結構妙なところに考えをめぐらせているに違いない。

例えば、見えやすい方が威嚇に使いやすいとか、脅しに使いやすいとか、そんな類のものを。

まあ、必要になるような場面事態がなければ、それに越したことはないんだけれども。

「あー、珍しいのもいいよね。滑空自在（スカイ・スライダー）、反響氾濫（バウンディング・エコーボイス）、言霊・・・・・・」

「聞いたことないのが混じってる。滑空自在（スカイ・スライダー）？」

「マイナーだから。イメージとしてはスノボーかな、空気上を滑る

んだけど」

・・・マイナー以前に利用価値の良く分からない能力だ。

移動術としてもテレポートに比べて遥かに劣る。密室に置かれたら利用価値ゼロだ。そもそも目立つだけじゃないのだろうか。

「使えなさすぎる」

「そう？高層ビルから飛び降りたら気持ちよさそうだけど？」

無邪気な表情で聞いてくるが、俺はバンジージャンプなど一生やりたくない人間だ。３７階に居を構えていておいてなんだけど。

あと飛び降り自殺は、あまり高所から行うと落ちる途中で気絶すると聞いたことがある。能力を使う前に意識を手放して、そのまま墜落死などというバッドエンドが浮かんだ。

こいつがその能力を得たら、絶対にそんなことはやらせないようにしないと。

割と本気でそんなことを考えつつ歩いていると、教室に着いた。

１-Ｂのプレートが高所に掲げてある、そっけない引き戸式の外観。同じくして中も質素で味気ないものだったが、細川が常時ぼうっとしながら作った縫い物の類により妙なデコレーションが施されている。

『いなっちー』とかなんとか呼ばれる正体不明のモンスターがまばらに描かれたカーテン。見れば見るたび、謎が謎を呼ぶ彼女オリジナルの『いなっちー』なのだが、この下手としか言いようのないデザインはどうもわざとやってるらしい。カーテンに異常発生しているそのどれもが、同じように歪んだ線で描かれている。

教台にかけられた簡単な暗号の書かれたテーブルクロス。ちなみに解読すると『早く帰りたい』だの『眠たい』だの『永眠希望、人生夢の中』だのと書かれていた。解読した自分が馬鹿らしい。

その他、受け狙いとしか思えない奇怪な縫い物が色んな所にある。

教室にはいると、そんなモノ達とともに委員長が視界に入った。

どうやら待っていたようだ。鞄を肩にかけている。

「連絡。服用後は２時間毎に体温測って記録しろだって。葉月君、

寝てたでしょう」
本当に生真面目なことだ。俺も半分寝ていたけどさ。それ、前にも一応は言っていたし、わざわざ待ってまで言うものだろうか。
まあ、彼女らしいといえばそうだろう。有り難いことこの上ない。
「ありがとー、委員長」
寝ていたら、彼女が放っておかないことを知っていながら、笑顔で礼を言っている葉月。こういうところに微妙な腹黒さが出ている。
そんな葉月を横目で見てから、前に視線を戻す。
ん、なにか委員長がなんとも言えない顔をしている。
「・・・・・ねえ、その『委員長』っていうのやめない？」
彼女はそう切り出した。
「んん？」
と、葉月。
「ものすごく距離を感じるのよね。一人だけ肩書きで呼ばれるの」
ああ、そういえば俺も葉月も副委員長は苗字か名前で呼んでるかもしれない。
女子は愛称か名前だし、他の男子だって苗字だ。仲はいい。細川は『いいんちょー』と呼んでいるが、あれは親しんでのことだということは誰でもわかる。
「分かった。じゃあ名前で呼ぶよ、椎さん」
最後に音符記号を入れられるようなアクセントで言って、微笑む葉月。
委員長も微笑み返す。なんというか出来の良い息子を誇るような顔だ。
同じ笑みでも随分違う。委員長のものと比べて葉月のは無邪気すぎる。
もっともここで重要なのは、無邪気には善意も悪意もないということだが。
そこで、委員長の顔が葉月からこっちにぐるんと向いた。
「釧君もよ？」

いきなり話をこっちにもふってくる。何か声のトーンが低い気がする。・・・気のせいか？

さっきから心の中で委員長と連呼していたのがバレたのかもしれない。

ちょっと冷や汗が出た。

「了解ー。朝風、でいい？」

肯定の代わりに笑顔で答えるいいん・・・朝風。

男なら何かしらの感情を覚えるような微笑みだ。委員長は委員長でも、清純では決してないタイプの魔性の少女。

葉月もそういった所があるが、朝風よりも色が濃い。

朝風がそれを身にまとっているとするならば、葉月はそれそのものの原石だろう。

不純物を含みながらも、その量は絶大。そんな感じである。

ああいや、別に悪口を言っているわけではなくて、そういうところがスパイスになって面白い人間だということを――――

／

僕は用事を済ませたとばかりに去ろうとしているいい・・椎さんに手を振った。

横で何か考えているクシロ。何やら頭の中で失礼なことを言われている気がひしひしとするのだけど、後で問い詰めよう。

顔に出ていることを彼は気づいていないのだろうか？本当に分かりやすい人だ。

僕達が話している間もそうだったけど、皆続々と服用を終えて帰ってきている。

タカもその一人で、鞄を持った状態で待っていた。

「じゃあ、帰ろうか」

タカに声をかけて、教室を出る。

いつもこの３人でつるんでいることの多い僕達だけど、周りから

見てどう映っているのだろうか。
タカが言うところの女男の華奢なこの僕、不良ライフを往っている長身金髪のタカ、長髪色白引き篭もりなクシロ。
アンバランスを通り越して、接点が思いつかない組み合わせだ。
まあ、原因は朝タカが話したあの件なのだけど。
タカとクシロも気が合うようで、何よりだ。
「そういえば、明日の予定ってどうだったか？」
「検査とか・・・・・なんか毎年個人個人でやることが違うから、あんまり予定も日程も定まってないって言ってたよね」
「人によって能力は違うし、程度も違うしな。それを測定して、区分けして、別個のカリキュラム用意しなきゃならないらしい」
「せめて葉月に脅されない程度の能力が欲しいぜ」
「ははっ、何無理なこと言ってるんだ」
「脅かすも何も、そんなことした覚えがないけど？それとも何、２人して僕は悪人だとも？」
「あ、そういえばさぁ、検査が長引けばその分学校って平常授業ないよな？得じゃねぇか」
「残念だな、隆。定期考査の日程は変わらないから、授業がない分は自主学習だぞ？」
「げっ、いや、でも、できなかった分考査の範囲減るもんじゃないのか？」
「学校の授業スピードってある程度決められてるから。僕達の通っているような学校って、通常の授業に加えて特別カリキュラムがある分、キツキツだよ？」
「無理やり進めないと、普通の中学校分の履修ができないだろ」
「まじかよ・・・・・というか、お前ら文句とかないのかよ」
「残念ながらね、俺の家はそういうのに厳しいんだ。引き篭もるのは構わないけど、ある程度勉強は出来ときなさいってな。だから予習は欠かしてないの。
それに、葉月は小５の時点で高校までの知識は詰め込め終えてる」

「・・・・・お前らおかしいぞ。俺が悪いみたいじゃねーか」
そんな話をしながら、駅まで歩く。
何でも、笑いの絶えないのはとても良いことだと思う。
体が心地よさを感じるし、何よりいらないことを考える暇がなくなるから。
駅に着くと、僕とタカはクシロと分かれて、それぞれ反対方向へ行くプラットホームに行く。僕達2人はどちらかというと田舎方向に、クシロは賑わっている方向に。
元々僕はクシロと同じ駅が最寄の施設にいたのだけど、中学生になる際にこっちに越してきている。だから、クシロと電車に同乗しないこの状況にまだ慣れていない。
電車内でタカとさっきクシロとしたような能力談義をして、タカは2駅目に、僕は終点で降りる。
ちなみに話の内容は滑空自在（スカイ・スライダー）について。タカはこの能力に興味を持ってくれたようだった。
空を自由に徐行しながら昇り降りできる能力は魅力的だと思う。
さて、駅を出ると僕はまずここら辺で一番大きい本屋に向かった。
本当は安静にしておくべきなのだろうけど、本当に動かない方がいい服用後6時間以降までにその時の暇つぶしアイテムを買っておきたい。
この街には僕が知っているだけでも4つの本屋がある。しかも同じ店舗の支店が2つ。意味があるのかどうか知らないけど、品揃えがどこも同じようなもので、欲しい本がなければ電車で遠出しなければならない。
店に入って漫画やライトノベルのコーナーに行く。それなりにスペースを取ってくれていることが嬉しい。
『ＡＴＯＧＡＫＩ』という題名のもはや意味の分からない執念すら感じられるものと、『魔法少女と無理心中』というダークユーモアなものをほとんど何も考えずに購入。
クシロが渡してくれているお金なのだが、『お金を回す』という

ことで。
それを買ってから、ふと気づいた。冷蔵庫に食料がない。朝確認した時には、クリオネと調味料ぐらいしか入っていなかった。
どうせＳＰＳ服用後は食の量と時間を制限されているから、あまり食べれない。
おにぎりなんかでもいいだろう。
仕方なくコンビニで間食的なものを購入してアパートに帰った。

僕のアパートは7階建ての少し古ぼけた建物だ。
この建物、恐ろしいことにエレベーターがついていない。そして僕の部屋は７０１号室、毎日毎日アップアップしてる。
何でこんな不便な所を借りているかといえば、当然賃金が安いからで、部屋自体は綺麗な改装されているし、広い間取りになっているのも気に入っている。
激しい運動を避けるように言われているので、今日に限ってはものすごくゆっくりと上がっていく。
うん。改めて不便さをかみ締める羽目になった。
ただいまー、と誰もいないのに部屋の中に声をかける。
裂けるチーズ・スモークと飲むヨーグルト・ミルク味を冷蔵庫にさっさと入れて、制服を脱いだ。
上着とズボンをハンガーにかけて、シャツは洗濯籠へ。短袖短裾のラフで薄い服をタンスから出して、着衣する。
パイプ式の硬い簡易ベッドにボフンと体を思いっきり沈める。
あー、何もしていないけど疲れた。
「・・・・・・」
しばらく俯けの状態で顔を埋めて、ふぅっと息を吐く。
よし、買ってきた小説を読もう。

この後の数時間のことは別に何にもなかった。

小説読んで、チーズを食べながらテレビを見て、また小説読んでといった繰り返しだ。
１人では何のアクションもない。
言うならば、毎日の日常を繰り返しただけ。
違うといえば、２時間おきの体温測定ぐらい。

６時間はあっという間に過ぎた。既に９時間が経過している。
今日何回目かの体温測定のために体温計を耳に当てる。数秒でピピッと電子音がした。３６．４度。前のときは３６．３度だったから、あまり変わりもない。
この体温計は学校から事前に支給されたものだ。他にも色々とセットで貰ったのだけど、まあ、使う機会がそうある物は少ないと思う。
検査があるわけでもないのに入っているスティック式の検尿セットとか、超冷え冷えシート（体感０℃♪）とか。他にもどこかの試作品じゃないかと思われるものが数種類ある。
そのセットの入ったボックスをクローゼットの奥に入れて、僕は洗面所に向かった。
歯を磨くためだ。少し早いけど、そろそろ寝てしまおう。
安静がどうこう以前に、小説にしたってもう読んでしまったし、暇つぶしがなくなってしまった。
それに、すごく眠たかったし。
５分ほど歯ブラシを当てて、その後に歯間ブラシを使う。その後に洗浄液でうがい、最後に水で口を濯いで終わり。
手際よく日常の作業をやるのは、１つのコツ。あまり何か考えたり、面倒くさいと体を止めてしまうと、余計に動けなくなってしまう。何も考えずにパッパと終わらす方が楽だ。
寝る前にメールのチェックだけして、僕は眠りに付いた。

・・・、・・・・・。・・・。・・・・・・・・・・・・、・、・・・・・・

・・・・・。

仰向けになって、海底から上を見上げるイメージ。陽が射し、波に歪められた光が注ぐ。

静寂。それは一瞬で、いきなり爆音が響いた。

「畜生、山羊の野郎寝返りやがって！」

遠きに沈んだ大国の跡、その司令室で貫禄顔の狼が叫ぶ。

机を叩いた拍子に、定規やマーカーなどが跳ねた。

そこに1匹の若狼が慌てて入ってきた。乱暴に扉を開けて肩で息をしている。

「報告します！第3、第5倉庫に保管してある武器が底をつきましたっ！

残っている第7、第9もそれぞれ２０、３５%しかありません！」

誰も驚きはしなかった。先の豚との戦闘で疲弊しきった所をさらに彼らと山羊の連合軍に追い討ちをかけられているのだ。

「兵士の疲労も酷い・・・せめて、せめて彼らの士気を高めてやれれば・・・・・・」

彼ら狼の間には既に敗戦の空気が充満していた。それでも尚、残した家族や友人のために戦う兵士を労えるだけの策が欲しかった。決して犬死だなんて言わせたくない。

赤帽子（あかずきん）は既にこの地を去っている。戦争に次ぐ戦争に彼らの資金や資源は底をつきかけている。彼女を雇うだけの余裕はなかった。

それを含めて、もう狼達に策はなくなっていた。どれだけ請おうと欲するものはやってはこない。

「軍曹・・・っ！」

貫禄顔の彼が机の向こうにいる軍曹と呼ばれた狼に答えを求めた。

軍曹は苦渋に顔を歪め、搾り出すように言う。

「・・・・・全軍に伝えろ。我が国は、負けた」

貫禄狼は震える腕をもう片手で必死に押さえながら拳を握り締めた。眼鏡をかけた参謀はその眼鏡を外し、手で顔を覆い遥か天を仰いだ。年老いたご意見番の老狼は唸ってしゃがみ込んだ。そして、

先ほど入ってきた若狼は、
「そんなっ！将軍、参謀、軍曹も！そんなこと言わないでくださいっ！」
叫んだ。開きっぱなしの扉にもたれ掛かるように手を置いて、必死に叫んだ。
「悔しい気持ちは分かる。だが、これ以上尊い兵士を失うわけにもいかないのだ。解ってくれ」
参謀が彼の肩に手を置いた。
しかし、彼はそれを手で弾いた。
「今までに死んでしまった彼らはっ、どうなるんですかっ！
アーガンは、スズトラはっ、・・・ウラスベルは！どうなるんですかぁ！
皆、国のために、家族のために戦って、死んだんです！」
彼は涙を零しながら訴えた。ただ、若い感情だけが暴走している。
「シガエル・・・」
将軍は彼の方に真っ直ぐ視線を向けた。向けて、何も言えなかった。
「・・・頼みますから、そんな情けないこと言わないでくださいよぅ・・・・・・」
誰も何も言えなかった。

はた、と目が覚めた。何かすごい夢を見た気がする。
どうにも寝心地が悪い。汗が吹き出て、服が湿っている。額に手を当ててみると、結構熱い。熱があるのかもしれない。
体温計、体温計。耳に当てて、数秒後。・・・うん、３７．３度。確かに熱がある。
どうしようか。学校に連絡を入れた方が良いかもしれない。
・・・・・・、・・・・・・。・・・・・・。よし、やめよう。
眠たいし、眠たいし。眠たいし。
冷え冷えシートを貼って、それでも酷かったら連絡するというこ

とで。
胡散臭いから使えないとかちょっと前に宣言したくせに、もう使うことになるというのは少し嫌な気分だけど。
包装を破って、中からシートを一枚取り出す。どうやら１０枚入っているらしい。お徳用みたいな数だ。
フィルムを剥がして、おでこに狙いを定め、貼る。
「～～～～～っ！」
途端ものすごい頭痛がきた。あれあれ、アイスクリーム頭痛とか言う・・・。本当に冷たすぎる。体感０℃♪は伊達じゃない。
絶対不良品だ、これ。熱が冷めるとかいう問題じゃない。研究員が何かに自棄になって作ったんじゃないのだろうか？
『みろ！俺は限界に挑むぜ。次は体感絶対零度☆だ！』とか言っている誰かさんが一瞬脳裏を過ぎる。
頭を掛け布団にぐりぐりと押し付けて数分。やっとなんとか慣れてきた。それでも冷たすぎるけど。
うん、汗はかきそうにない。これだけ冷たいと眠気も覚めると思いきや、いまだ眠たくてたまらない。
ベッドにバタンと倒れて、そのまま意識は底に堕ちていった。

・、・・・。・・・・・・・、・・・・・・・・・。・・・、・・・・・・。・・・・・・。

水面は揺れに揺れていた。
飛沫が上がり、ひんやりとした霧が辺りに立ち込めては、再び飛沫と爆風にかき消されていく。
戦艦『煉瓦造』が数多ある軍船の中で一際大きく聳えていた。
海中から飛び出す幾つかの空海両用の戦闘飛行機。鋭角なボディを震わせて、数多の戦艦に銃弾やミサイルを撃ち込んでいく。
だが相手も黙ってはいなかった。隊形を維持しながら、多方に散らばっている船から光弾が無数発射される。その数は狼軍の比ではなく、何より多角的なその豪雨たる砲撃は避けることすらままなら

ない。
多くの飛行機が墜落してゆく。
「狼をなめんなぁっ！」
血の気の多い狼が叫ぶ。
照準もろくに合わせず、大戦艦に向かって銃弾を飛ばす。そのどれもが当たるが、しかし船の強度には勝てはしなかった。
『煉瓦造』。その名に恥ぬ、鉄壁である。
『全軍に告ぐ、撤退せよ！撤退せよっ！！』
ごついイヤホンから流れる命令を彼は無視した。彼だけではない、多くの兵士がそれを無視している。
凶弾の豪雨を休むまもなく避け続け、弾がなくなるまで打ち続ける。そう決めた。搭載していたミサイルは既に使ってしまっている。
『グルスラ！撤退しろ！我々はもう負けたんだ！これ以上犠牲を出したくない！！』
「うるせいですぜ、ファスカ将軍。俺は、俺達はあの野郎どもに一泡吹かせるまでは、負けを認めるわけにゃあいきやせん。
じゃねぇと、アル中のジギガナのヤツに合わせる顔がないんですわ」
『グルスラ！！』
両手でハンドルを握りしめ、撃ち込む。
ダダダッという短くも重量を持った轟音がその度に響き、時には爆音が轟く。
その時、１つの光弾が彼の戦闘機に向かって飛んできた。
「チィッ！」
ガコンッとハンドルを無理やり横にずらす。ガガッと機体が大きく揺れ、体に負荷がかかった。
キュィン。体勢を変えた機体のすぐ横を弾が通る。
同時に機体も激しく動いた。
「掠りやがったなっ！」
彼はすぐに戦闘機の体勢を整え、一瞬外を覗いた。

目立った外傷はないが、機体の下辺りから煙が少量出ていた。
どの道、もう時間は少ないらしい。
（全弾出し切るまではっ！）
彼はハンドルについている発射ボタンを押した。
ガン、ガガッ――
何かが引っかかったような音がした。
眼前のディスプレイを見る。そこに表示されているのは『発射装置故障（ラー）』の文字。
「畜生がぁっ！！」
叫んで、それから声が枯れるまでありとあらゆる悪態をついた。
大きく、息を吸う。
「ファスカ将軍」
実はさっきからずっと呼びかけていた彼に向かってグルスラは呼びかけた。
『何だっ、どうした！』
その問いには答えず、彼は言う。
「故郷の息子に、よろしく言っといてくだせぇ・・・・・・」
『っ！おい、待て！待つんだ！！』
その言葉に察した上官は彼を引きとめようと声をさらに荒げる。
彼は今までのようにその言葉を無視した。
狙うはあの憎たらしい大戦艦。『煉瓦造』と称された傲慢な怪物の鼻を折ってやる。
それを阻止するように立ちはだかる無数の光達をするすると避け、彼の戦闘機は戦艦に突撃した。
美しく滑らかに、差し込むように戦闘機『息吹』は大戦艦に特攻した。
難攻不落と称された豚軍の柱が砕かれた瞬間だった。
『グルスラァアアアァ！！！』
絶叫が響きわたる。
まだ残っていた他の戦闘気乗り達もそれを聞いていた。

彼らのほとんどが銃弾はとうに尽きていた。しかしこの弾の嵐の中引き下がることもできず、ただ舞っていた。
彼らは見ていた。自分らの上官が命を賭して行った最後の猛攻が、大戦艦に爪跡を遺したことを。
黒い煙を上げるその戦艦。彼らは意を決して最後の攻撃に出る。
機体を傾け、力を抜き、直進。
さながら、フリーフォール――――

ガタンッ、そんな音がした。少し鈍痛がきた。
その前にはビルから落ちるような体の心がぞくっとする感覚も。
どうやらベッドから転げ落ちたらしい。
何か眠気や痛み以外で涙が出ている気がするけど、気のせいだろうか。
どうやら熱は下がったのか、上昇はしなくなったのか、楽にはなっている。
この額のシート、慣れれば案外いけかもしれない。
目を擦って、ベッドの上に戻る。
今度はちゃんと掛け布団をかけて仰向けになって横になる。
ぐっすりと寝れますように。おやすみなさい。

序章－1　前日前夜。－Ｐｒｏｌｏｇｕｅ－（後書き）

初めまして、黒咲彼岸です。
私の稚拙な文を読んでください、ありがとうございます。
読んでくださった方はもうお分かりだと思いますが、この小説、超スローペースです。
私自身が苛々するぐらいに進展が遅いですね。
暇を持て余した方推奨です。

気づいた方もいらっしゃると思いますが、
この小説はとあるライトノベルと世界観が酷似？しています。
指摘される前に言っておきますね。とある小説です。
とまあ、それはともかく、『超能力×学園』というテーマにしたら普通にこんな感じになったというのもありますが、
かなり私個人が軽い気持ちで楽しんで書こうと思って書いているので、
そこらへんはご勘弁ください。

・・・・・なんか最後の当たり違うものに乗っ取られている感が否めませんが。

序章－2　無恥軽快。－Lightheartedness－

自己を確信する基準とは、何だろうか？
例えば容姿、鏡に映る自らの形。あるいは精神、内にあると信ずる魂。
形が変われば、人は自己を見失うか？心が変われば、人は自らを損傷するか？
答えは肯で、答えは否。
片方が崩れようと、片方が存立するなら人は自らを失いはしない。
けれど、同じくして、
片方が壊れてしまえば、やはりそれは元の自己とは変わってしまう。
致命的ではないだけに、気づかない内は意味もない崩壊。
そして、気づいてしまった以上には、もはや対処不可能な致命傷。
だから、人はその変化に困惑するし、混乱する。
自らが変わってしまった錯覚を覚え、自己が不定した実感を得る。

――――もしも、もしもまるで驚きもしない人間がいたとしたならば。

それは、確たる自己を持ち合わせたと信ずる傲慢か、あるいは――――

▼

基本的な日常作業、つまりは食事に洗顔、歯磨きやシャワーに時間をかけることをしないのが僕の主義だ。
それは起床と就寝にも言えることで、生理作業として事務的にそれをこなす以上は、当然寝坊なんてことはもってのほかだろう。
夜明けとともに起きるという小説でしかありそうにないことを体

現している僕としては、そんなことは体の不調以外にありえない。
ああ、もちろん冬になれば自然と起床時間が遅くなるのだけど、そんなこと今はどうでもいい。
現在時刻8時37分。寝坊どころか、完全に遅刻だった。
いっそのこと欠席しようかとも考えたものの、今日という日に限っては無理というものだ。
今、僕は目が覚めた状態のまま、体を乱して仰向けになっているのだけど、その状態から体を起こす気にもなれなかった。
ものすごい疲労感がある。汗が酷い。シーツも掛け布団も薄手の服も湿った上に張り付いて気持ちが悪い。髪も乱れに乱れて、視界を半分覆い、口の中に異物感を与えている。
しかし全体でみれば、悪くない心地だった。
昼寝をして嫌に汗をかいているのに、気持ちがいい時のような恍惚感。
珍しくこの僕が、このまま寝過ごしたいだなんて怠惰な気持ちになっている。
仰向けになっている状態なので、目には天井が映る。剥き出しの蛍光灯という無骨な照明が霞んでしまってちゃんと視認できていない。
胸に今まで感じたことのない圧迫感を感じるし、腰下にスペースがある。
口の中に入っていた髪束を出して、人差し指と中指の間に挟んですすっと伸ばしていく。
指は随分先にまでいった。腕を伸ばし切ると髪は途切れて音もなく落ちる。
目を下にやると、髪は緩急のある上半身に散らばっていた。
髪を除けて額に手を当てる。なにやらものすごく冷たい。
・・・そういえば昨日冷え冷えシートを貼ったんだっけ。これ、この冷却効果で持続時間どのくらいあるのだろうか？
だけど、たぶん熱はあるのだろう。頬が熱い。心臓の鼓動も少し

乱れている。
どうしようか？早いところ、学校へ連絡した方がいいかもしれない。そのうち向こうからかかってくるだろうし。
ただ、ただねぇ・・・・・・ものすごく面倒くさい。
今の自分の状況を説明するのは骨が折れるだろう。物事を矢継ぎ早に質問されるのは好きじゃない。
あー、だからと言って遅刻してまで学校に行くこともものすごく目立つだろうな。・・ただでさえ目立つのに。
「どっちにしろ、面倒事は避けられない、と」
声の方はまるで変わっていなかった。
まぁ、当たり前だろう。短いこれまでの人生の半分以上もまともな生活をしていなかった僕は、まだ二次成長期を迎えていない。
ホルモンバランスが崩れているだろうし、それ故に身長も低いまま。最悪迎えないこともある得るだろうと思っていた。
声変わりも然り、顔立ちにしろ身長にしろ、髪質や髭にしろ、まるで幼子の頃から目立った変化が見られないこの体は、元のままの中性的だ。
実のところ性欲もかなり乏しい。クシロやタカとの会話で得た情報にあるような男子の生理作用が起こったこともない。
だから今の状況は、ある意味吉兆なのかもしれない。
上半身にかかるほどの長髪、違和感を感じられるほどの胸、下半身の構造変化。
・・・・・・。
うん。たぶん、吉兆だ。
・・・・・・ちゃんと二次成長は迎えたんだから。
――――性別的に裏切られる方向で。
「はぁぁ・・・」
本当に、このまま寝過ごしたい。

#

自分の体に異変を感じた時点で、胸を触らなくても自分の体が女体化していることぐらい判るだろう。

髪が伸びていることは口に入った髪の束から理解できたし、視線を変えるだけで今までなかった乳房が視界に入る。重さがあるのだから、ある程度の圧迫感も感じる。内腿をすり合せれば、性器の形状変化も想像がつくのだ。

かくして、僕は目が覚めてから一度も起き上がることなく、自分の身に起きたことを理解してしまった。

そして、そのために起きる気すら起きない。

ただでさえ変に疲労感があるのに、これからしなければいけないことを考えると気が病んでしまう。

電話で学校への連絡、事情説明、登校、この姿でクラスに突入。面倒くさいことこの上ない。

ある程度の覚悟がいる気はする。

とりあえず、体を起こそう。

掛け布団を剥がして、上半身を立てる。

胸が揺れる感触や重みの違和感を得て、居心地が悪い感じがした。

試しにTシャツを首元から指で引っ張って、そのまま下を見てみる。

白に近い肌色の胸が、突起物を含めて見ることができた。

・・・結論、年の割りに発展しすぎている。

考えてみれば、仰向けになるだけで違和感がわかるほど胸に重みがあるというのは、この年では珍しいのかもしれない。

決していないことはないだろうけど、まだ発展途上の少女の方が圧倒的に多いはずだ。

女性ホルモンとか、色々、分泌系が妙に発展してしまっているのかもしれない。ああ、乳房の発展にホルモンはそれほど関係なかっ

たっけ？要するに脂肪のあるなしだし。
ん、いや、そうだとすると、性転換以外の考え方も可能かな。
ＳＰＳの影響かはさておき、何らかの原因で女性ホルモンが異常に分泌してしまい、なおかつその影響が一晩のうちに体を変化させたとしよう。
とすれば、胸の肥大はともかく、下半身は極小化しているだけだという可能性も考えられる。
なくはないし、その場合は方だが極端に女体化しているとはいえ、性別上は男性となるだろう。
さすがに、そこまではさっきの方法では確認できない。
「ふむ」
視認、した方がいいかな。
教師に対しても生徒に対しても、説明することは避けられない。積極的に説明をする気がないとはいえ、自分の置かれた状況をしっかり把握しておくことはどうせ必要だ。
汗を大分かいているし、洗い流す意味でもシャワーを浴びることにした。
本来、すぐさま学校に行くべきなのだろうけど、既に時間が時間だし、身なりを整えたい。
風呂場は洗面台の横に区切られて存在する。スモークガラス風の半透過プラスチックの折りたたみドア、肌色に近いベージュのタイルに随分ゆったりした風呂桶。
古いアパートだけど、内装は改築したらしく、小奇麗にされている。当然、温度設定などはデジタル式だ。
服と下着を脱いで、籠に入れた。裸体になって、タイルの床に足を下ろす。冷たい。湿気を気にして小窓を開けっ放しにしたせいだ。
風呂場の入り口から正面に備え付けられた大き目の鏡に、自分の体が写る。
たっぷり１０秒ほど見回してみた。
今まで大してくびれてもいなかった腰辺りはきゅるりとしまって

いる。肩も丸みを帯びたせいか肩幅が狭く見える。
それで、問題の下半身なんだけれども、女性ホルモン説は破綻したようだった。
見る限りちゃんと女性器が付いている。二次発達の傾向も見られる。
「ふうん・・・」
鏡に写った自分の姿はなかなかに魅力的だ。
別に変な意味ではない。今までの僕の体は二次発達がどうのという以前に、不健康で貧相な肉付きだった。
子供の発達途上の時期に与えられた悪影響はかなり跡を引く。
自分の体を見るたびに、病的だの、細すぎるだの、長生きできそうにないだのという印象を受けていた僕にしてみれば、今の体は少なくても健康的だ。肉つきもよい。
それを考えると、少し嬉しい思いもする。
それに僕の場合、別段、自分の性に対する思い入れはない。
男だろうが女だろうが僕は僕で、それぐらいで崩壊するような薄いアイデンティティは持ち合わせてはいない。
記憶がそっくり消えない限り、自分の身に何があっても大丈夫だという自信もある。
基本、見た目が麗しければ、自分の体になんら文句はない。こだわることはそれぐらい。
その点でいえば、今の姿は今まで異常に合格点をあげられる。
見えない体の部位も生き生きとしているのだから。
確かに色々と周りへの対応が面倒ではあるけれど、決して不利益ばかりではない。
いつまでも自分の姿を見ていても仕方ないので、蛇口をひねってお湯を出す。適温になるまでそれを手で確かめる。
汗を流すだけだから、そんなに時間はかからない。
顔、髪、胸、お腹、背中。体中にお湯をかけるようにしてから、僕はすぐに風呂場を出た。

タオルで体を入念に拭いて、そこで気づく。
そういえば、下着はどうしよう。
普段着や外着は男子用でもなんら問題ないだろうとは思うけど、下着はそうもいかない。特に今は、買いにもいけない。買い方もいまいちわからないし・・・。
裸のまま、部屋に戻ってタンスを探る。
マシな下着はないだろうか。僕は基本トランクスを履いているのだけど・・・ああ、これなんていいかもしれない。
僕が手にしたのは黒いスパッツだった。
男子用だけれど、履けないことはない。トランクスよりはいいだろうし。
いっそのことこれからはスパッツでいいかな。幾つか買っておこう。
それを履いて、思考の対象を上に上げる。さすがにブラジャーに代わる下着はない。
まぁ、中学生なら普通にシャツでも大丈夫だろう。ブレザーがあるので、変に目立つこともない。
適当に白いシャツを取り出して首と腕を通す。
よっ、と胴の部分を下に引いて下ろした。
――ザッ
途端、
「ひゃっ・・う・・・っ！」
なんて僕らしくもない声を上げて、いきなりの感覚に床をのた打ち回る羽目になった。
・・・・・。擦れた。思いっきり、擦れた。
痛いのやら何やら、とにかく深く考えもせずにやった行為に、ものすごいダメージを受ける羽目になった。
粗めのシャツを選んだのがまずかったのかもしれない。
前言撤回、やっぱりブラジャーがいる。それも早急に。というより、今すぐほしい。

目尻に溜まった涙を拭いて、ベッドに座った。それからシャツを上にずらす。・・・今度は慎重に。

動き回らなければ大丈夫だとは思うものの、もしものことを考えると、代用物になるものが欲しい。今のまま学校に行ける自信はなかった。

「さらし、かな」

クローゼットの奥から例の支給ボックスを持ってくる。巻いてしまってある包帯を取り出した。

代用には形状も酷似しているし、これでいけるだろう。包帯なので、伸縮性を重視して目も粗くは作ってあるものの、素材自体は柔らかい。

この包帯は僕が後で購入して入れた物で、元から入っていたわけではない。こういった治療具の一切はこのセットにはなかった。

だからこそ『役に立たないセット』なんだけど。

とにかく包帯を巻いてみよう。こんな事、さっさっと終わらせたい。

巻き始めの端を右脇辺りに当てて、反時計回りにしっかりと巻いていく。さっき擦れた所を重点的に、きゅっと締めていく。

自分でもうまくいったと思えるほど、綺麗に巻けた。

のに、次の瞬間、包帯が胸の弾力に、無様に負けた。

つるんと包帯は肌を滑って、輪を作ったまま下に落ちてしまった。

「・・・・・・」

なんだろう、この虚しさは。初めて経験するタイプのものだ。

きっときつく巻きすぎたせいなんだろうけど、考えてみれば学校に着くまでに、あるいは着いた後でもずれてしまったら終わりじゃないか。

そう頻繁に巻き直せる機会があるとは思えない。他のものを探す必要があるようだ。

仕方なしにこの家の医療箱、つまりは『支給セット・カスタマイズ』を漁ってみる。

目薬、頭痛薬、胃腸薬、総合風邪薬、便秘薬などの薬。ビタミンC、Bやカルシウム、鉄分に葉酸、ブルーベリーなどのサプリメント。どれも後から足したものだ。前から体の調子が狂ってたからなぁ。

それから応急の治療具。当然として包帯、市販消毒薬、アルコールウェットティッシュ、くすねてきた医療用の針と糸に麻酔薬のいわゆる『裁縫セット』、そして・・・・・・。

・・・うん。これならいけるかもしれない。

僕が目につけたのは、1つの医療具。何でだったか忘れたけれど、これを使う場面を読んだことがある。たぶん漫画か何かなんだけど。さらしより時間を取らないし、外れる心配も少ない。それを利用して、僕はさっさとシャツを下ろした。

一件落着。正直、女体化したことより焦ってしまった。冷や汗が出てる。

ただでさえ、体が疲労感に負けているのに、これ以上厄介事が増えたら本当に不貞寝しまいそうだ。

再びベッドに仰向けに倒れこむ形で横になり、天井を見上げた。

今度ははっきり照明が見える。目は完全に覚めた。

やっぱり無骨すぎるかな。今度カバーを買ってくるとしよう。

「に、しても」

一息ついて、考えるべきことを考えてみる。

女体化、いや性別変換の能力など、あっただろうか？

頭の中の知識情報（データバンク）に検索をかける。

・・・。・。・・・、・・。・・・・・・・、・・・・・・・

眼などの第六感を利用するような能力も持ち合わせていることの方が多い。

だから、能力者の能力名などは実のところ本人の一番得意とするものを冠するのだけど、とすれば性別変換などはいったいどういった派生にはいるのか。

基本系も発展系も思いつかない。単体で1つの能力として成り立ってしまっている気がする。そういう能力がないこともないんだけども。

・・・考え方が違うのだろうか。

検索法を変えて、『今この状況を創りだせる能力』を探した方がいいかもしれない。

と、なると――――

そこで、携帯が鳴った。

着歌ではなく着メロで、『包帯少女の鎮魂歌（レクイエム）』。ネット上で見つけた痛々しい物語のＢＧＭだ。

そういえば、結局学校へ連絡を入れていなかった。

昨日ベッドの脇の方に置いたままだった、携帯を取って通話ボタンを押す。

案の定、相手は学校関係者だった。喫煙隈目な保険医。ちなみに、名前は宮沢荷稲（みやざわかいな）という。この数週間で何度も保健室に入り浸りに行っているので、結構親しい。

学校に来ていないが体に異常があるのか、学校に来れるのか、そんなことを訊いてくる。

それに今から行きますと回答して、僕は携帯を畳んだ。

／

この日、学校は異常な賑わいを見せていた。規模で言えば、昨日の3倍ほどはある。

昨日とは違って2、3年生も加わっているからだ。昨日登校して

いたのは1年だけだった。
この日から数日間、彼らはある程度自分と同系統だと思われる1年生に目星をつけて、グループに誘うために躍起になるのだ。
ＳＰＳ服用認定の学校の多くはクラブとグループの2つの特殊活動がある。
クラブはどこの学校にもある単なる部活動だが、グループは能力の系統別に分かれたある種の集まりだ。
能力向上や応用、知識の共有などを建前にしているのだが、このグループというのは、同系統でも複数の会が存在する。
最低人数5人が唯一の発足規定なのだから仕方ないのだが、そもそも能力というものはきっちり区切りのつけられるものではないのだから、元より重複する。
グループ単位のイベントなども多く、より勢力のあるグループに居る方が何かと得をするものだ。
自分の所属するグループを大きくするために、あるいは維持するために必死である。
本来は、1年生達の能力が明確に判別されるまでにまだそれなりに期間がある。
特殊な機器を使って1人ずつ測っていくものなので、時間がかかるものなのだ。
それでも、見てみればある程度の推測は成り立つもので、グループの系統に合うと思うやいなや声をかけてくるものらしい。

音を鳴らす要領で親指と中指を擦ると、火花が散った。
俺の場合は発火系か発破系、あるいは発光系だろう。
「隆、ほら。これでいいか？」
そう言って、釧がこっちに向かって紙パックのジュースを放り投げてきた。書かれた文字は『朝からフルーツミックス』。
飲み物を買いに行くというから、ついでに俺のも買ってきてくれと頼んでおいたのだ。

「おお、ありがとさん。お前は何にしたんだ？」
「飲むヨーグルトの苺ミルク味」
ふうん、と相槌をうつ。
付属ストローを袋から突き出させた。伸ばして、銀丸に指す。
「にしても、葉月、遅いなぁ・・・」
クシロはあからさまに葉月のことを気にしている。よく知らないが、こいつらは本当に仲がいい。時々心配になるぐらい仲がいい。
「んぁ、そうそう。お前が出てってる時に保健の女医が来て、もうすぐ来るってよ」
「えっ、本当か？他には？どうして遅れているのかとか」
それについても眠そうな顔で彼女が言っていた。
「寝過ごした、だと」
ストローから甘酸っぱい液体を吸い上げながら答えてやる。
「寝過ご・・・珍しいな、それは」
「そうなのか？」
このクラスの半数ほどがそんなことを日常茶飯事でやってると思うんだが。
しっかりしているようで、委員長ですら結構なのんびり屋だ。
「ああ、あいつの朝は夜明けから始まる」
「・・・・・・」
いったいどんな神経をしているのだろうか。
現代人の生活に絶対あっていない習慣だ。生まれる時代を間違えたに違いない。
朝、そんなに早く起きて何をする気だ。
「寝るのは日暮れか？」
かなり真剣に訊いてみる。
「いや、さすがにそこまではないけど。大体次起きる7、8時間前には寝てる。余裕がある日は昼寝付き」
「・・・ある意味羨ましい生活だな」
「だな。ちなみに俺の基本睡眠時間は3時間だ」

「俺は5時間だ」
なるほど、いつもならあいつが寝坊することはないのか。
確かに気にはなるな。まぁ、何があっても大丈夫なやつだけども。
思うにあれは、両手両足、胴に首、さらに目隠しをされて拘束されても平気で相手を罵倒できるタイプの人間だ。
葉月が弱気な顔をして泣き崩れる姿など想像すらできない。
それを釧に言うと、
「俺もだ。いつか葉月の困り切った顔を見てみたいな」
見てみたいな。もっとも、あいつが困るような状況下に俺たちも巻き添えを喰らったりしたら、困るどころじゃないんだろうが。
「あー、皆。遅くなってすまなかったな。準備ができた」
振り向くと、教台にこのB組の担任が立っていた。いつの間にか入ってきていたらしい。
名前は確か、藤本恵太（ふじもとけいた）だったか。歳は若い。そんなに詳しくは覚えていないが、そろそろ結婚かどうかといった感じの年齢だったと思う。
彼が言った準備とは、能力測定の準備のことだ。
普段は保健室の倉庫にしまわれている大型機器を付属体育館に運んで、そこで1次測定を行う。
これは簡易測定で、脳に一定の刺激を与えることで能力を強制発現させる。
自分の能力の方向性も知らない人間に、いきなり能力が使えるかといえばそうではなく、扱い方もまるでわからない生徒の方が多い。
そういう意味では俺は特殊な方に入るのだが、釧に訊いてみても『わからない』と答えるように、初めは実感すらないものなのだ。
だからこそ、1次測定で強制的に、自動的に発動させて確認する。
目で見て判る能力も多いし、なにより生徒自身に自覚させるという目的がある。
その次が2次測定で、どの生徒もこの測定までは必ず受けるのだが、1日開ける形で生徒が自分の能力に慣れた後に、脳波などのパ

ターンを分析して解析するものらしい。
５０年間ほどで集まった能力者の研究情報にある脳波パタンなどと照合したりするとか。
こういった施設は国際規模で繋がりを持っているから、その情報量も半端ないと担任は言っていた、気がする。覚えてない。
それでも判らないようなものは3次、４次と段階を分けて測定を受けていくシステムだ。
とにかく、その測定の用意に時間がかかるらしい。
器具の電気確保やらなんやら、機械の設定もなのだろうが、大掛かりな作業が必要になる。
教師達は昨日からその作業をやっていくのだが、毎年同じように早朝に持ち越すそうだ。
「うちの組は2番目なんで、少し時間がかかるが早いぞー」
投げやり気味に言って、藤本は教台に設置された椅子に座った。
そして、スーツのうちポケットから文庫本を取り出して読み始める。
カバーをかけてあるから題名は判らない。
ちなみにその椅子には細川作の妙なクッションが取り付けてある。
ああ、取り憑く、が正しいか。どこかで見たことのあるマークがついているのだが、思い出せない。
席に着けとも言われなかったので、俺たちは談話を再開することにした。

／

アパートを出る前に気づいたのだけど、男子用の制服を着て登校する女子生徒というのはどうなのだろうか？
私服についてはズボンだろうがなんだろうが、女性が着てもさほど目立ちはしないと深く考えもしなかった。
だけれど、制服のズボンはそうはいかない。それは間違いなく男子用だ。

といっても他に着れるものがあるわけでもない。私服だと、警備員に止められることも考えられる。

当然ながら、僕はその制服を着て登校することになった。

朝食を抜いてしまっているので、昨日も利用したコンビニでカツサンドと葡萄ミルクを購入する。

今すぐ食べたいのを我慢して駅へ。スムーズに学園都市方面の電車に乗り込めた。

さすがにラッシュのピークは過ぎていたようで、余裕をもって乗れたのはうれしい。座れなかったものの、スペースの空いた車内は格別だ。

「・・・・・・」

ただ、いくらすいてはいるとは言えども、人目はある。

さっきからちらちらとこちらを見る乗客が数人いる。まぁ、あからさまにおかしいのだから当たり前か。

面倒くさい。観察するのは好きな僕だけど、人から観察されても嬉しくない。

何より、不純な視線は気持ち悪い。

あー、そこのおっさん。胸を見るな、胸を。

・・・そっちの兄さんは、お尻か。

男の時より肉がついているから、ズボンだと張るんだよ。もう成長しないと思ってギリギリのサイズにしたのがいけなかった。

さて、好奇の目を無視しながら、僕はこれからのことを考えてみる。

今日一日のことは先に考えたとして、当面この姿で生活するにあたっての予定だ。

まずブラジャーの確保、これは絶対。スパッツもそうだけど、別に女性用の下着を用意してもいい。

他にも女の子らしい外服があった方が色々と便利そうだ。

それぐらい、かな。

あと何かすぐに必要なものがあるだろうか・・・・・。なけれ

ばいいんだけど。
学園都市に着いたので電車を降りる。改札を出て、駅から開けた広場に。
んん、背伸びすると気持ちいい。
少し休んでいこうかな。どうせ遅れているんだし。
ついでに学校での対応の仕方についても考えてみよう。
「ふむ・・・」
パターンその一。心を入れ替えて女の子に。
『はぁーい、皆様こんにちわ。私、織神葉月、１２歳でーす。只今彼氏募集中♪』
何かノリが女子高生だ。１２歳には無理がある。あれ？というか１２歳だっけ。１３歳？どっちだろ？
年齢数えてないからわからない。去年、クシロがくれたケーキ、蝋燭何本立ってたかな。
・・・・・。あぁ、ショートケーキだったから１本か。思い出した意味ないや。
駄目だ、今度クシロに訊こう。『僕って何歳だっけ？』。またタカに変な目で見られるな。
『あ、あの・・っ、わたし、はづきって言いますっ！よ、よろしかったら、メルアド交換してくださいっ、お姉さまっ！』
引っ込みがちな少女風。容姿的に合わないか。どっちかって言うと、この姿はシャープな雰囲気を纏っているし。冷淡というかなんというか。
とういうか、お姉さま？百合？
このパターンは却下。
パターンその二。今までどおり男の子で。
「・・・・・」
今度は台詞が思いつかない。男らしいって何だろう？結構ジェンダーフリーな人生を送ってきたからわからないのかな。
そんなの考えたこともなかった。別に今までだって男の子って感

じではなかったし。中性、中性ね。個性がないように見えて、これほど特徴的なもののないけど。

男、男、男・・・。言葉遣い。俺、僕、私・・これは女性だって使えるし、服装も同じく。相撲？あれだって女性力士はいるしね。大体そういうことでもないし。

あんまり特出した性格鋳型（キャラクター）が思い浮かばない。

いやいや、そもそもこの体で男を極める必要性がないね。というより、無理がある。

これも却下か。

パターンその三・・・、はないなぁ。

あるといえばあるけど、わざわざパタンで分けるものでもないし。この流れでいうと、最後にあるとすれば、これぐらいだし。

つまり――――

まぁいいや、とにかく学校へ急ごう。ゆっくり、まったり、のんびりと。

／

「い、碇」

「り、り、り。りー、ねぇ。あっ、竜」

「う、兎」

今俺たちはしりとりをしている。暇を持て余しているからだ。話のネタはもう尽きた。葉月がいれば突拍子もない話題をふってくれるのだが。

ちなみに、ひらがなで3文字、漢字で1文字という縛りで、パスは3回までというルール。これが結構面白い。

「隆、なんでそんな早いのさ・・・」

俺はこういう言語ゲームは得意だ。そして釧は弱すぎる。ほとんど勝敗は付いているようなものだった。

「ほら、『ぎ』だぞ。パスはもう無しだ」

手をひらひら振って、急かしてみる。別段、急ぐこともないが。
「『き』でもいいんだよな。樵（きこり）」
「『り』か。結構出たからなぁ」
と言いつつまだ十分ある。『寮』『漁』『猟』『量』・・・。
ただ、どれか1つでも言ってしまうと、釧に気づかれてしまう。
どうするかな。
意味が違えば同じ発音でもいいのが俺らの間でのルールだ。縛ってしまっているから、そうしないとかなりきつい。
うーん、仕方ないか。
「漁。魚狩りのな」
ちょびちょびとジュースを吸う。紙パックのものはすぐになくなるのだ。できるだけもたせいたいものだろう？
「うー、うー、うー・・・」
ほれ、とっとと降参してしまえ。
ジェスチャーでそう伝えつつ、ちらりと扉を見てみる。まだ葉月はやってきそうにない。
「うか、うき・・・うみ・・うり・、ウールは？訳して鉄。ちゃんと一文字」
「駄目に決まってるだろうが」
「うだぁ、・・うぎー」
諦めろ。なんだ、『うぎー』って。
と、そこで、扉の開く音がした。
「先生、A組もうすぐ終わりまーす」
反射的に音源の方へと振り向く。
視界に前の扉が映った時には、もう既に扉が閉まるところだったが、A組の誰かが伝言していったようだ。
ゲームはここで打ち切りらしい。移動しなければならない。
「お、そうか。じゃあ、ほれ皆、出るぞー」
担任がそう言って、立ち上がった。読んでいた本を閉じて内ポケットにしまっている。

「あー、終わりだな。引き分けってことで」
あからさまにラッキーと顔に書いて、釧が立ち上がった。
そんなわけないだろ。次は続きからだ。
「逃がさねぇぞ。このジュースは奢ってもらう」
そうなのだ。このしりとり、今飲んでいるジュース代を賭けている。
残念ながら、そう簡単にナシにはできない。校則では当然禁止されているが、あれは基本破るためにあるのだ。
ただ携帯はかけられない様に妨害措置までされているため、破ることもできない。どこもかしこも圏外表示だ。
そうでなければ、さっさと葉月に連絡を取っている。
「えー、諦めろよ。１００円だぞ？」
「そうだな、１００円だな。お前が諦めろ」
ほとんど遊びの賭け勝負なのだが、だからこそきっちりやっとかないといけない。
しりとりは釧の苦手分野だが、ゲーム内容はサイクルで順々に変わっていく仕組みになっているし、そこには俺の嫌いな暗記系ゲームが幾つか入っている。ちゃんとフェアな遊びだ。
さて、と。名残惜しいが、残ったジュースを一気に飲んでしまおう。
持って行くわけには行かないし、ぬるくなるのも嫌だ。
ずずっと残った分吸って、口に含む。

――――ガラッ

また、扉が開いた。
今度は後ろの方だったため、後ろを向いていた俺は振り返る必要もなかった。釧は振り向いたし、他のクラスメートも振り向いた。
順番を知らせにくる伝言役はついさっき来た。他に何かの伝達があるとも考えにくい。そして、クラスメートは1人を除いて全員揃

っている。つまり、そこにいるのはあいつ以外にありえないはずなのだ。
誰もが心配を持って、そちらに目をやった。
そこにいたのは、スレンダーに男子制服を着こなした、ロングヘアーの少女。
もちろんこのクラスの生徒であるはずがないのだが、顔の面立ちもさることながら、上着の右ポケットに付けられた名刺バッチに見覚えがある。
「ブッ、――カハッ・・・ゴホ、ゴホッ・・・・」
吹いた。酸味の強い液体が気管支に入って、酷いことになる。せきは出るし、涙はにじむし、息が苦しい。
「やほーい、遅れましたぁ。おはよー、おぉっ、全体行動には間に合った？」
そいつはいつもの声で、いつもの口調でそんなことを言った。
織神葉月は今日も今日とて無恥軽快（マイペース）だ。

／

パタン三として、いつも通り（ちゅうせい）を選んだ僕は、それこそいつも通り教室に入った。
どう見ても遅刻なので、完全に”いつも”ではないことには不服があるけど、まぁ、いいだろう。
「うわぁ、タカ。人の顔見て噴出すって、何事だよ」
いまだ霧のように散布された細かいジュースの粒が舞っている。虹とかできないかな。
周りを見渡すと、先生とクラスメート数人は固まっている。椎さんは何か腕を組んで天井を見上げている。それから、クシロ、思い

っきり笑っている。
「げほっ、こほ・・・おま・・ぁおえ・・・・・・」
吐き気を催したらしい、タカ。無理に喋ろうとするからだ。
「あは、ははは っ！ちょ、く、くくっ・・そうきたか！」
そうきたかって何さ。というか、笑い過ぎたせいか腹筋を押さえてうずくまっている。
「クシロ、何、腹筋が痛いの？何なら物理的に止めてアゲルヨ？」
足で蹴っ飛ばしたら、たぶん止まるだろうし。
脅しが効いたらしい、彼は慌てて机に手をかけて立ち上がった。体がまだ震えているけど。
この手の脅迫を僕が冗談無しに実行することをクシロはよく知っている。
具体的な例を挙げれば、いつぞやダガーナイフを使った時に、『切れるモンならやってみろやぁ！！』と威勢よく言った誰かさんに本当に切りかかったこととか。
ちなみに、その時は彼が必死で止めましたとさ。羽交い絞めで。
『お願い、お願いだから挑発しないでくれぇ！葉月はマジでやるんだよ、それを！！』
「あー、なんだろう？面倒だから、最初に言っちゃうけど、朝起きたらこうなっていたんで、何の能力かだとかなんて判ってないんだよ。
・・・何か質問とか、ある？」
面倒事を一気に終わらせたくて、僕はそう切り出した。
だけど、皆固まってしまって動かない。あぁ、例外がいた。クシロの腹痛は再開したらしい。
予告した通り、うずくまった体を蹴り上げてやる。一応は手加減はしているけどね。
ひゅっ、と空気が抜ける変な音が聞こえた。
「ないんならいいんだけど・・・」
今度は鈍痛からうずくまっているクシロを無視して、周りを見渡

す。
　すると、一人の男子が手を挙げた。矢崎聡一（やざきそういち）、漫画やアニメを愛する社交的な変人だ。
　あぁ、別にオタクっていうわけじゃない。彼はどちらかというとストーリーに興味があるらしくて、放っておくと延々と日本と海外との物語構成（ストーリング）の違いについて、その理由を文化的背景を含めて語ってくれる。
　もちろん、萌えだとかそういうのも好きなんだけどね。変に社交的だから周りの受けはいいので手におえないところもある。
「何？」
　あまりいい予感がしないのだけど、聞くだけ聞こう。
　彼は重たげに口を開いた。
「どうして、織神はいつも通りなんだ？」
　それに肯くクラスメートが数人。椎さんまでその中に入っている。
　どうやら僕の反応というのが間違ってるらしい。
「いや・・・どうしてって言われても・・・・・・」
「普通は動揺とか困惑とかもっとあると思うぞ？」
　他の皆も同意見らしく、
「教室に入って来るのにも全然躊躇がなかったしね・・」
「こっちが置いてきぼりにされてる感じさえしたな・・」
「戸惑った顔を見てみたかったのに・・・」
「あー、何かそれ、すごく難しい気がしてきたな・・」
　なんて口々に漏らす。ちなみに最後の2つはクシロとタカだ。
　変な空気が流れている。劇の演技中にありえない間違いをしたような・・・。
　何かすごくぐだぐだな感じがしてならない。
「・・・物語だとして考えてみろ、最悪だぞ？」
　変に熱い思いを抑えきれずにいるようで、体が震えてる。
　僕も物事をお話に置き換えることは好きなんだけどね。そんなにまずい状態だろうか？

と、何かが弾けたらしい。
「このシチュエーションは酷すぎる！
『朝起きたら女の子に。別にいいかと適当にスルーして、学校へ。おはー』って可笑しいだろうがぁぁぁあぁ！！」
とりあえず、叫ばないでほしい。おーい、椎さん、納得顔しないでほしいんだけどなぁ・・・。
「いいか？性転換ネタの始まりはこうでなくてはならないんだ！
まず、朝起きたら、胸がでかくなっていることに気づく！」
「それはやったけどなぁ・・・」
「はん、どうせ、『中学生にしては嵩が立っている』とか何とか考えただけなんだろ」
人の思考をトレースするなと言いたい。
「自分が女の体になった事を信じられずに、部屋の鏡で何度も確認。可愛らしく悲鳴を上げたり、困惑したりしているうちに、母親がやってくる！」
「いや、一人暮らしだし」
「自分が女の子になってしまったことに困惑してしているのにも関わらず、家族は『娘が欲しかったのよ～』と言ってはしゃいで受け入れる！」
「だーかーらー、一人暮らしなんだってばっ」
「おずおずとしながら、学校に行くとクラスメートが『可愛い～』とか叫んで、やっぱり受け入れるんだ！」
「いやいやいや、固まったの自分達じゃないのさ・・・」
「可愛い感じじゃなかったもん！おずおずがなかったもん！上目遣いがほしいんだよ！
ああ、お前は綺麗さ、美人だよ！でもよー、かっこいいじゃねぇか！ちくしょー！！」
駄目だ、うるさ過ぎる。というか、可愛い系じゃないと駄目なのか。
聡一はさらに続ける。

「そして、学校から帰ってくると自分の部屋のクローゼットには可愛らしい女物がいつの間にか揃っている！」
「服は勝手に涌かないよ。それに男物でも大丈夫だし。一応買いには行くけどさ」
「お前は性転換ネタに必要な要素を尽く無視してるんだよ！シチュエーションに潤いがねぇ！！」
肩ではぁはぁと呼吸をする彼。息が切れたらしい。
僕は息をふぅっと吐いて、吸いなおす。
仕方ないので現実を突きつけよう。
「それを僕に望むのが間違ってるね」
「・・・・・・」
沈黙が降りた。皆して、あぁそうだろうなって顔をしている。
「ちっくしょぉぉおおぉおおおおっ！！！」
この人、本当に駄目だ。何か叫んでる。本気で悔しがってる。
「年頃の男子として自分の体が女体化したことに葛藤する！性的興味があるものの、見ていいのだろうか？自分の体に欲情するなんてまずいのではないか？
周りでは自分を置いて勝手にはしゃいでしまっているという状況で、このままでいいのかと不安になったり、慣れない女としての生活に戸惑ったりするんだよ！
性転換ネタの醍醐味はなぁ！そんな主人公の心情描写と女の生活へとの変化の過程なんだよ！そこをよりリアルに書いていくかによって全体の完成度が変わるんだ！！」
まだ語っている彼に、僕はたぶん優しい瞳を向けていることだろう。保護者が子供を見守るような感じで。・・・心は冷え切っているけどね。
ここまで熱弁すれば心残りもないだろうと思う。
僕は担任の方へと向き直った。口を半開きにしてみっともない顔でいまだ固まっている彼に言う。
「センセー、ちょっと矢崎君をお借りしますね？」

笑顔が怖いといわれる今日この頃である。
「・あ・・ああ、どうぞ思う存分・・・」
言葉の意味を理解したらしい彼は、躊躇なく自分の生徒を差し出した。物分りがいいことは良いことだと思う。
僕は口を閉ざすことなく喋り続けている聡一の襟首を掴んで、教室の外へと引っ張っていった。

／

矢崎が連行されて、僅かな間の後、壁を挟んだ向こうから鈍い打撃音が聞こえてくる。
時折、口から空気が吐かれるような音が混じるのは、葉月が肺や腹を強打しているからだろう。
ああいう時の葉月はまるで遠慮がない。笑顔で容赦なく攻撃を加える。
あんな風に俺を苛めていた生徒も慈悲なくやってしまったものだから、あの後彼らがどうなったのか全く見当が付かない。
ちなみに、あれでも手加減はしている、ただ容赦はしていないのだ。力加減は調節しつつ、自分の気が晴れるまでやり続けるのが、葉月流である。
教室内では、妙な沈黙が続いている。
変な方向へ走ってしまったとはいえ、矢崎はこのクラスの皆の心を代弁してくれたわけで・・・・・。
残念ながら、困った顔は期待したかったのが本音だ。
あの状況で、通常通り振舞える辺り、さすが葉月だといったところなのだが、こっちの対応の仕方が皆目付かない。
あぁ、後あの葉月の振る舞いが演技である可能性は、付き合いはそれなりにあるこの俺が見てみても、まるでない。
と、そこでいきなり出て行った葉月が扉を開けて入ってきた。
俺ら以下クラスメートと担任は、びくっと肩を震わせる。

「どうした・・・？」
代表して聞いてみる。すごく勇気のいる作業だった。
「・・・何か」
そこで、葉月は顔を崩した。今までが今までだったために、驚きが大きい。
いつもの笑顔ではなく、本当に薄っすらなのだが困惑の色が見て取れる。眉尻が微妙に下がっているのがポイントだ。
男子の頃よりか細げではあったものの、女子となった今では加えてか弱げな雰囲気が出ている。
正直に言うと、可愛らしい。自然に出たといった感じがいい。
心の中でガッツポーズを取る。これは隣にいる隆も同じ気持ちだろう。
葉月のあの表情は珍しすぎる。
葉月は続けた。
「何か、僕が蹴ると喜ぶんだけど・・・・」
「・・・・・・」
視線を葉月の後ろの扉の向こう側に向ける。そこには駄目な人間がいるはずだ。
「隆・・・」
「ああ」
アイコンタクトで隆と意思疎通し、向こうの処理を頼む。
その後、隆は無言で廊下へと消えていった。
さっきよりも惨い感じにレベルアップして打撃音が再開される。
汚いものは見せない方がいい。葉月はあれで変なところに純粋だ。
・・・・・・しばらく粛清は続いた。

その後、静かに外の効果音を見ていた俺達だったのだが、再びさっきの伝言少女がやってきて、膨れっ面で早くしてくださいと叫んだため、すぐさま教室を出ることになった。

どうやら、一向に来る気配のないB組のせいで彼女があらぬ疑いをかけられたらしい。
無能状態になってしまった担任を強制復帰させて、なんとか体育館に向かうことになった。
のだが、途中でだるだるな保険医と遭遇した。
葉月は一応教室に行く前に保健室に行ったらしい。この学校、遅刻等をした場合はまず保健室に行くという決まりがあるのだ。
で、葉月の様子を見て、俺達と同じような振る舞いをしたらしい。固まっているうちに、いつの間にか葉月が消えてたそうだ。
教員連中と相談した結果、葉月は別行動で、1次測定を飛ばして2次測定に入るとのことだった。
測定器にかけて、体が変に変化されても困るため、既にこういう風に見えた兆候があるものは、飛ばして2次測定に回されることがらしい。
何もしていないのに能力が幾らか発動してしまっている人間は、間違えれば制御できずに暴走してしまう可能性があるからだとか。
まぁ、葉月の場合は能力が今までに見たことのないタイプだ、と言うのも慎重な対応の一因だろうが。
葉月は非常に面倒くさそうな顔をして、保険医に連れられていった。

／

保健室、昨日来たけど。簡易長机はもうなくなっている
「だはー、しっかしまぁ・・・よくできてるなぁ」
カイナがそんなことを言う。両手で頬を挟んで、顔を固定される。
モノ扱いされた気もする。
「やめてほしいんですけどね。人に弄られるのは苦手です」
「他人は弄り回すくせに。いいじゃない、弄らせろ」
もにゅ、と頬を引っ張る彼女。見る限り本当に楽しそうだ。

「2次しょくてぇい、しにゃくていいんでしか」
色んな方向にぐにぐにとされるせいで、変な声になってしまった。
「ぅうん?本来測定は明日から、お前のために特別に用意してるところだかんな。それまで私のお楽しみタイムだ」
彼女は頬から手を離して、ボスンと自分の丸椅子に座った。
「あ、そういえば結局朝ごはん食べてないんです。ここで食べて大丈夫ですかね?」
と言いつつ、返事を聞かず鞄を漁る。呼び止められた時、一応のことを考えて一度教室に戻ったのだ。皆と別行動するわけだし、教室がしまってしまう可能性もある。
3つ入りのカツサンドの封を切って、早速1つに口をつけた。
「やー、だけどさぁ・・・」
まじまじと僕の顔を見つめてくる。そんなに珍しいものだろうか・・・・まぁ、珍しいか。
けれど、
「私好みなんだよなぁ、いいなぁ〜」
なんてカイナは実にステキナ発言をしてくださいました。
「・・・・・・」
そうきたか。
さっきクシロが言ったのと同じ台詞が自然に浮かんだ。なるほど、こういうなんとも言えない気持ちになるのか。
「いきなりレズ宣言ですか。いくら親しかろうと、言葉は選んでください・・・さすがの僕でも引きますよ?」
「嘘付け、それぐらいでお前はまともに驚きもしないだろうが。基本受け流すタイプだかんな。真正面から後ろに。
つか、レズじゃねぇぞ?私の守備範囲は女の子と未発達な男子だ」
真顔での意見。というか、まじめにそんな応答をしないでほしい。
サンドを食べ終えてもう1つ目に。少しペースアップ。
「あー、何かここにいるの危険な気がするんですが・・・」
「何言ってんの?そんなこと言ったら、お前は初めてここに来た時

から危ないね」
嫌な告白だ。未発達な男子、ね。そういう言い方もあるか。
当然のように結構すごいことを言っている気がする。僕も大概だけど、彼女も羞恥心をあまり持ち合わせていないのかもしれない。
早口で2つ目をお腹に収めて、3つ目。これはほとんど噛まずに飲み込む。食道に詰まりそうだ。
ビニル袋から葡萄ミルクの紙パックを取り出す。牛乳パックのミニバージョン見たいな外見の方で、ストローは付いているのだけど、これって結構飲みにくい。
「おいおい、飲み下すなよ。体に悪いぞ?」
「さっさと食べて体勢を整えたいんです。・・・非常事態に備えて体力を」
一応ナイフは内ポケットに入っている。
「冷静に焦るなっての。大丈夫だって、いきなり押し倒したりしないから」
隈目でだるーいというオーラを纏った人間はあまり信用に足りない気がする。
煙草を吸えないからって、苛々してないといいんだけど。あれって性欲に何か影響するとか聞いたことがなくもない。
「ついさっきクシロに『変な男に付いていくな』って言われたんで。タイミング的にまずいかな、と」
冗談混じりに、時間稼ぎ的なことをやってみる。
あぁ、クシロの発言については真実だ。聡一の一件の後、かなり真剣にクシロに言われた。
「へぇ・・・やっぱりあいつはお前の保護者的なとこ、あんな。お前って変に悟ってるくせに、全体的に幼すぎるし」
なるほど、僕は彼女にそういう風に見られていたわけか。幼い?
「幼い、ですか?悟ってる、というか聡いっていうのは言われますけど・・・」
「幼すぎんの。中学1年っていう年齢を考えても、だ。もちろん精

神年齢の方だぞ？
　大人に成れない子供って言うけどさ、そういうのじゃないんだよな・・・。
　子供っていうか、自己が生まれてこの方そのままで、成長しないまま今を迎えたって感じ？」
「酷いなぁ・・・まあいいけど」
　色々と図星な感じだし。確かに成長した感触を覚えたことはない。
「だから、あれだ、くっしぃの言うことは聞いとけよ？大切な身内なんだし」
「忠告どうも。まぁ、僕の態度なんてこれからだって変わりはしないでしょうし」
　葡萄ミルクを飲み干して、ベンチの横に置いてあるゴミ箱に捨てる。ついでにビニル袋とカツサンドのラップも。
　カイナは自分の机にあったペットボトルのお茶を飲んで、腕時計を見た。あの様子だとまだ時間はあるようだ。
「そういえばさ。お前、下着どうしてんの？」
「スパッツを履いてます、男性用ですけど」
「あぁん？何でそんなもん持ってんのさ」
　怪訝そうな顔をする彼女。
「ちょっと前に、色々と外服内服と合わせて買い漁ったんです。ほら、僕施設にいたでしょ？服とか買ったことなかったんで、一人暮らしを機に」
「ふうん。まぁ、さすがに履いてこないってのはないか。で、上は？」
　ああ、それは。
「怪我をしているわけでもないのに使うのは抵抗があったんですけど――――」
「・・・・・おい、まさか・・・」
「――――絆創膏を貼ってます」
　間があった。こういう時、大体僕の近くにいる人間は形容しがた

い顔をする。
「・・・なぁ、お前さぁ、わざと話を面白い方向にもっていってねぇ？」
呆れ声でそんなことを言われた。心外だなぁ、真剣なのに。
体に変なネタを仕組むなんてことは、それこそ雨が降るか降らないかぐらいにしかやってない。
・・・・・まぁ、日々暇を持て余してるから。真剣に色々暇つぶしを考えてるのデス。
「仕方ないじゃないですか、さらしは無理だったし」
「無理？」
「出るところが出すぎて、うまくいかなかったんです」
「さらりと豊胸宣言しやがって・・・あ、そうだ。時間余ってるし、サイズ測ってやるよ。どうせいるだろ」
何気なく言った言葉に、僕は身を引いた。胸に手を当ててみせる。
やや沈黙があって、彼女は口を開いた。
「なぁ・・・」
何ですかね。
「そういうのは、もっとびくっ、て感じでやってくんない？」
いや、そんな要求されてもね。そんなにリアクションが薄かったのだろうか？
「・・・・・。
そ、そんなこと言って・・・どうせ私の胸見るのが目的なんでしょっ、この変態っ！」
大げさに身を引いて、体をきゅうっと抱きしめる。目を潤ませて、頭をふるふると振る。
カイナは背にしている窓側にわざわざ振り返って、遠(そと)くを眺め始めた。
「・・・・・・・・・・・・。なんだかなぁ・・・・・」
自分で言ったくせに、その反応はないと思う。
なんて失礼な人なんだろうか。

序章－2　無恥軽快。－Ｌｉｇｈｔｈｅａｒｔｅｄｎｅｓｓ－（後書き）

思った以上に書くのに時間がかかりました。
書いては消し、書いては消しと悪循環を繰り返した結果です。
スピード感が致命的に欠落している私の文章ではノリの良い性転換
ネタは難しかったのかも知れませんね・・・。
途中に出てくる変人の言葉は私の言葉であったりもします。
『物語に潤いはねぇ・・・・・・』
だからアレを付け足しました。矢崎はその犠牲です。

ともかく、こんなただ長いくせになかなか進みやがらない小説を読
んでくださいまして、ありがとうございます。
どうぞ温かく見守ってください。

序章－3　暇潰し。－Ｍｉｓｃｈｉｅｆ－

鉄色（くろがね）の長髪を白く滑る肌に重く落とす少女。
着衣を脱いだ曲線の肢体をゆるりと伸ばした。
その身をするりとくぐらせてメジャーが締め付ける。
静寂の室内に息遣いと物の擦れる音だけが響いていった。
まだ昇りきらない太陽の陽を受けて、体の形が陰影として浮き上がる。
ツヤがあるというよりはきめ細かいといった肌に手が触れた。

「うぉっ！すっげぇ触り心地がいいぞ！？」

途端、快音が静寂に響いた。
「何を考えてるんですか、先生？」
たまたま触れたという言い訳が効かないほどがっちりと胸にホールドされている。
というか、両手で堂々とまさぐっている。
よってメジャーは床に落ちている。測るに測れない。
なんというか何でこうも馬鹿なことをするのだろうか。
思いっきり手で頭を叩いたのに、まるで効いた感じがしない。
肝心な所は絆創膏でガードされているので大丈夫なのだけど、これ以上揉まれると不味い気がする。
「これ以上手を付けるようなら、眼福にも与（あずか）れなくなりますよ？」
そう言われて、カイナはしぶしぶ手を放した。ものすごく不満そうな顔をしている。
眼福も何も、不純な目で見られる筋合いも、される筋合いもないのだけど。
というかこの女性、保健医なんてものを任されていいのだろうか

？いや、あれか。高等部ではまずいから中等部に送られてきたのか。小等部に流してしまえ。

まさか堂々と触られるとは思っていなかった。顔には出ていないとは思うけど、結構動揺してしまっている。

「あー、でもいいよなぁ・・・見ただけでプロモーションいいもんなぁ」

サイズを知っていた方がいいだろうと持ちかけた人間が口にする言葉ではないと思う。

さっさと測れ。測りやがれ。・・・・・とはもちろん言わない。

「とっととやってください」

心でフィルターにかけた幾分まともな言葉を口から出す。

ただし、もちろんそれは口調だけであって、目はかなり据わっているだろう。

「はいはい、わかりましたよー」

それが効いたとは思わないけど、カイナは緩慢な動作でメジャーを拾った。トップは触る前に測ったので、というか測るついでに触ってきたので、次はアンダー・・・かな。詳しくはよく知らない。

今度は手際よく、彼女はとんとんと測っていく。部位が変わる毎に数字をメモに記入し、ついでに顔が引きつっていった。

こっちとしては他人に体を触られるという居心地の悪い状態から早く開放されたいのだけど、あろうことか彼女は再び暴挙に出た。

今度は腰を、がっしりと掴む。

「また・・・！？」

「いやいや、細すぎねーか？ん、身長と横幅考えたらこんなもん・・・？でもなぁ・・・・・・」

何やら真剣にぶつぶつ言っている。

あちらもあちらで目が据わっている。あるいは隈目でそう見えるだけかもしれない。

見た目も相まって、相当危ない人に見える。カイナ、こんな行動を街中でも取ってるんじゃないだろうな。

「何ですか？」
理由がなければ、蹴る。蹴って顎を突き上げてやる。
「大丈夫かってぐらい華奢なんだよ。細すぎだ。体重も量っとくか？後は女の嫉妬と私の下心だな」
うん、全部本音を吐き出してくれた。最後のは間違いなく余計だろう。
同年齢の健康体というのがよく分からないけど、細いらしい。幾分マシにはなったんだけど、もう少し肉を付けた方がいいのかもしれない。
「いいですから、サイズだけ測っちゃってください」
いちいちこの人の行動に反応していたら無駄に疲れるだけだ。もう無視しようと思う。
それに、健康を案じてくれてる分、叩きにくいし。
「ん？とうに測り終えてるぞ？」
・・・・・はい？
僕はとっさにメモを見てみる。アルファベットとともに数字が刻まれているそれは、７つほど書かれていた。
しかし、
「そんなに測るとこねーもん」
カイナは飄々と白状してくれた。うん、なるほどね。７つもないか。考えてみれば。
何言ってるの、冗談のつもりでやったんだけど、マジで気が付かなかった？と顔で語っている。
・・・・・前言撤回。無視できそうにない。
あと、少しでもまともに保健医らしいところもあるのかと思ってしまった自分に腹が立つ。
「・・・つまり、わざと長引かせてたと？」
一応確認。あくまで、一応。
ある意味最終通告。発言を撤回するなら今だぞ、と。
「やーい、世間知らずぅ」

うん、オーケイ。腹が立った。
そんな使いもしない知識なんて知っているわけがないのだけど、ともかく。

――――バチ――ン

思いっきりビンタを喰らわしてやった。
大きな音が響く。すごく心地よい響き方だ。
一方叩かれたカイナの方は呆然としている。まぁ、当然か。
ああ、手が痛い。まぁ、僕よりカイナの方が痛いだろうけど。
「お、おまっ、本気で・・・！酷くないか！？」
そんな涙目をされても、庇護欲は掻き立てられませんよ？鬱陶しいだけです。
「いや、売られた喧嘩は全力で買う、借りは2倍の2乗して返す、が家訓なもので」
「嘘付け・・・というかなんで2倍に2乗？」
「1だと2乗しても1でしょ。2倍だけじゃ生ぬるいし」
とは言いつつも、僕はやられたら、こちらが満足するまで仕返すタイプなんだけど。
ああ、でも、敵いそうにない相手からはとっとと退散するなぁ。
退散して、寝首をかく。セオリーだよね。
「どっちにしたって酷いぜ、これは。女の子に暴力するなよなー」
ついさっき叩かれたばかりだというのに、彼女はもういつもの調子に戻っている。
・・・・・叩き足りなかったか。今度はもう少し強めにしよう。
顎に下から掌底を叩き込んだら、脳震盪を起こすとか聞いたことがあるけど、今度試してみようかな。
ともあれ、僕は意地悪く、彼女の体を見回してから、
「女の子？」
と言ってやった。

せめてその歳を感じさせる隈を何とかしないと無理があるだろう。あと身長も高い方だし、張るべきところが張っているから”子”は諦めた方がいいね。

あと、今や僕も性別上女性なんだし、暴力がどうのなんて言われても仕方ない気もする。

「・・・お前、良い性格してるよな・・・・・・」

ほとほと呆れたように彼女は呟いた。いや、あれは半分ほど突っ込み待ちだったんじゃないですかね。

ともあれ、

「それはどうも」

褒め言葉は遠慮なく貰っておきますよ?

／

1次測定は、正直素っ気無いものだ。

頭に何やら三原色のコードを無茶苦茶に付けたようなヘルメットを被った状態で、椅子に座って右手を台に置いておくだけである。

手を置く台を背もたれから伸ばしているのだが、それ以外椅子に変わったところがない。

変わりにヘルメットのコード辿っていくと大きな白い機械に行き着くのだが、鉄を剥き出しにした部位もあり、小型のパネルに数字が、中央の大型パネルに脳波の様子などが映し出されるだろう縦横の緑の線が走っていた。

これから脳に指令を送り、右手に力を発現されるのである。

B組の測定はほとんど終わっている。

僕、矢崎聡一が14番目。その後は1人だ。

こうやって待つときほど、ドキドキと胸を鳴らすこともないだろと思う。

自分の能力は何だろう?という期待、発現しないのでは?という

不安。そんなベタな心情描写を演じるのは実に楽しかったりする。
小説や漫画、アニメの物語は、結局その中でのみの出来事だ。いくら現実にそれを望んでも望みは薄いのだろう。
しかしながら、現実に空想（フェイク）を混ぜ込むぐらいの戯事があっても良いのではないだろうかと僕は考えているし、実際それを実行に移したりもしている。
・・・今回の件は実に僕好みの出来事だった。
織神にはああ言ったものの、あれはあれで面白いリアクションではあった。
自分が女性化したことよりも、クラスの反応の方に若干おろおろしていたのが可愛らしい。
自分になんであんな要求がなされるのか、まるで理解できないといった表情が面白かった。
男の頃からそうだったのだが、あの子・・・いや、あの娘は他人事の方に強く興味を抱いていた感じがする。自分自身に対する反応に理解が乏しい。
まぁ、女になったからって、そんな性格上の問題が直るわけもないが。
だけれど、きっかけにはなるだろうか？
人に褒められれば、照れる。人にけなされれば、怒る。
そういうきっかけに。
僕としては、面白い、の一言に尽きる話なのだが、向こうの2人にはそうではあるまい。
視線を向ける先には朽網に四十万、織神と仲の良い2人がいる。
小学校時代からの親友だという朽網は、かなり彼女に入れ込んでいる。別に変な意味ではなく、心を折っているというべきなのか。変なことに巻き込まれたりしないように、注意を払っている感じをよく受ける。
で、四十万の方は服従・・・？だろうか。忠誠心とまではいかないが、何らかの信頼感があるのかもしれない。そのきっかけはもち

ろんあのありえない例の一件だろう。
リアルにやったらヤバイに決まっている、それこそ小説の中だけのハプニングをさらりと織神はやってのけてしまった。
あれには本当に惚れ惚れしたし、同時に心が震え上がった。
ああ、小説の登場人物みたいな奴がいるぞ、と。
それに加えての今日の出来事。もう嬉しくてたまらない。元よりこの都市に非現実的な物事を求めてやってきた僕にとっては、本当に神様に感謝したいほどだった。
あの娘は僕のお気に入りでもある。
だからリアクションが薄いのはおいおい何とかするつもりだ。あの2人とも利害は一致するはず。
もう少し、人間味を帯びさせる、という点で僕らは共通の目標を持っているのだから。・・・目指せ赤面困惑顔。
・・・・・とはいえ、いきなり四十万に蹴られた時はどうしようかと思ったが。手加減されているのは分かっていたのだが、あれは本気の目だった。
まぁ、それはともかく1つ非現実的に馬鹿馬鹿しい計画でも練って、実行してみようかなんて思っている。彼らも賛同してくれるはずだ。

「次、どうぞ」
先の深柄科（みがらしな）が終わって、次は僕の番らしい。
椅子に座ると、数学教師の会田和敏（あいだかずとし）氏がヘルメットを被せてくれた。
「ものを考えずに、ぼうっとしていてくださいね・・・」
機械の方で操作をやっているのは春日璃衣（かすがりい）、理科教師。
ＳＰＳ服用や測定はどの認定学校も同じ時期にやるために、いちいち他から専門家を呼ぶような真似はできない。故に教師が機械使用の免許などを持っているのが普通で、彼らが動かしてデータを取り、特殊機関に問い合わせたりするようになっているらしい。

と、いきなりピリッという刺激が頭に来た感じがした。
「――――ッ」
無意識中に右腕が少し跳ねる。脳を通して伝わった命令を実行すべく、腕の筋肉が一瞬引きつった。
「・・・・・・」
――――結果、は。

「あっはは！何そんなに落ち込んでるのさ」
朽網がバチバチと背中を叩いてくる。僕の様子が面白いのか、自分よりも落ち込んでいる人間がいて嬉しいのか。
「1次じゃ分かりませんでしたってだけの話だろ」
四十万はそう言うが、やはりショックなものはショックだろう。自分の能力がうまく発現しなければ。
能力波が観測されたから、能力自体はあるとはいってもさ。
「出力系の能力じゃなきゃ測定できないんだしさ、あの方法は。2次の方でハッキリするって」
「俺なんて『発破系だね』で終わりだぜ？」
確かに能力名がないのはちょっと嫌だけどな。彼の場合、発破系の『火種』の能力なのだ。これからの訓練と能力の方向性で能力種が変わってくる。
「出力系じゃないってことは、念波系とかか？地味だよなぁ・・・」
念波は便利のようでまるで使えない能力だ。携帯あったら意味ないし。未来視もあんまりほしくない。千里眼辺りなら妥協できるのだが。
そう口にする。
「それ、葉月も言ってたな」
朽網は何か妙な顔をしながら言った。
ああ、織神もか。あの娘は確かに出力系の方が好きそうだ。相手を直接的に攻撃するのが基本スタイルだしな。
ただ、今朝の様子を見た限り、そういった風に使えそうな能力で

はないだろう。
・・・・・本当に良かった。にっこり笑顔で片腕に光弾を溜めている姿が鮮明に思い浮かぶからなぁ・・・織神の場合。
たぶん朽網も同じことを考えたのだろう。
「使い勝手のいい能力なら良いんだけど」
「そりゃ自分次第だろうが。釧の騒乱念力（ポルターガイスト）なんて無差別にもの動かすだけだぞ？」
四十万が朽網の方に視線を向けて笑った。嗤うのとは違う、親愛の証たるからかいだ。
朽網はむぅっと口を尖らして、反論する。
こういうところを見る限り、こいつも女っぽいなぁと思ったりもするのだが、口には出さないでおこう。
長髪をちゃんとすいて、眉を切り揃えれば・・・とか考える僕は、たぶん駄目な人間に違いない。
ああ、それ以前に葉月の蹴りで悦んだ時点でアウトか・・・。
「訓練してちゃんと照準が合うようにさえなれば立派に強影念力（サイコキネンシス）で通るんだからいいじゃないか。念力の力自体は強かったんだから」
力があって無差別っていうのは余計手に負えない気がする。というか、その能力のせいで測定が一時中断したのだ。機械は固定具から外れるし、コードは取れるしで、まさにその名の通りの有様を再現してくれた。
だから、朽網はさっきまで暗いオーラを纏っていたのだが、俺の番で復活しやがった。それが思いっきり顔に出てるんだ、こいつは。
どの道、しばらく封印されるべき能力だろう。他人に迷惑がかかりすぎる。無差別攻撃なんて面倒この上ないし。
・・・さて、それはともかく、１つ持ちかけてみようか。
もちろん織神についてだ。
「ところで、折り言って相談があるんだが――――」
／

必要ない事項を消したプライベートなメモは鞄のポケットにしまった。
すぐさまシャツとワイシャツは身に着けたものの、上着は面倒くさいのでそのままだ。
することもないので、簡易ベッドに大の字になって寝転ぶ。
朝からの疲労感がずっと抜けないままなのだ。
「暇だぁ」
右頬を赤く晴らしたカイナは、机の引き出しの中を何やら漁っている。
何を探しているのだろう？小まめに掃除すればいいのに、変な物体を何も考えずに放り込むから分からなくなるんだ。
「仕方ないだろう。急な話なんだから」
「んー、別にわざわざ今日にしなくても良かったんじゃないですか？どうせ数日後には皆やるんだし」
視線を彼女のいる側から反対側にやると、窓を通して緑の木々が映る。
ざらざらと鳴って耳心地が良い。
ゆったりしているのは好きなのだけど、1人で自分のアパートにいるような安心感がないので、妙にそわそわしたりする。
僕って自分をさらけ出すのを苦手にする人間だったっけ。あまり覚えがないんだけど。
「ふつーは、そんな状態じゃ落ち着かないんだよ。
不安だろう生徒の心境を察してこの処置なの」
「余計なことを・・・」
そのために遠方の青い科学者は機材の設置に励んで、僕は暇を持て余しているのかと思うと、頭が痛い。両者のためにも後日でよかったのではないだろうか。少なくとも僕はその方が助かったのに。
「いいじゃん、特権特権。今までにない兆候だから教師もはしゃいでんだから」

「あー、うん。確かに教師の皆々様方、子供っぽいのが多いけどね、この学校」
生活力のない保険医とか、授業の半分以上を生命の神秘に馳せる理科教師とか、朝礼をすっぽかす校長とか。
「それは褒めてるのか？けなしてるのか？」
「人によって変わる素敵な言葉です。心の純粋な人には褒め言葉になるんじゃないですかね」
半分投げやりだ。そもそも暇つぶしの会話なのだし。
カイナは探し物を見つけ終えたのか、引き出しを閉めてこっちに振り返った。
それを横目でちらっと見つつ、やっぱり僕は窓の方に顔を向けたまま。
「へぇ、ちなみにその中には私が含まれてたり？」
「入ってないと思ってるんですか？」
これも投げやり。生活力のない・・・はまぁ、大人でも結構いそうな人種ではあるけれど、彼女の場合、保健室がその被害にあっているので結構重症と診断してる。
絶対必要のないような怪しげな小道具が散らばっていたりするのだ、この部屋は。ペットボトルのおまけフィギュアが机に並んでいるのはどうかと思うし。公私混合だろう。
校長もひどいけどね。朝礼をすっぽかした理由が、『やー、昨晩は新作ゲームに夢中になってしまって寝るのが遅かったんですよぉ』という始末だ。あれはどうやってあの地位まで上り詰めたのか。たぶんコネがあるんだろうな。
「ふぅん、なるほどねぇ・・・」
彼女はさっきからふぅんだとかはぁんだとか繰り返している。意味ありげな微笑交じりが、何か怖い。
あー、こういう時の悪い予感というのはよく当たったりするからなぁ。
僕は悪寒を感じて体勢を立て直そうと振り向こうとして――――

後ろから抱きつかれた。
首筋に息を吹きかけられた。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
思いっきり、ありえないほどか弱い悲鳴を上げてしまった。
今まで感じたことのないくすぐったさを感じて、思わず・・・。
うわぁ・・・・・・。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
気まずい空気が僕らの間に流れる。
汗がだらだら垂れている。冷や汗ってこんな感じなんだなとか、
現実逃避。
後ろから抱きしめる、抱きしめられる形で2人とも固まっている。
僕はらしくもなく声を上げたために。彼女は単なる悪戯に思わぬ
反応が返ってきたために。
・・・・・・、・・・・・・・・、・・・・・・・・。
時が止まった感じがした。
どうしよう。人生で初めて焦ってるのかもしれない。
首をぎぎぎぃぃという音が鳴りそうな感じで振り向く。
「！」
目に入ったのは、これでもかというほどにんまりと笑っているカ
イナの顔だった。
面白いものを見つけたという典型的な顔をしている。ものすごく
機嫌が良さそうだ。
「ふ、ふうん。なるほどねぇー、ここが弱いのか、葉月はぁ」
意地悪く顔を歪めて、がっちり僕の体をホールドしている。逃げ
るに逃げれない状態。
「ほれ、もう一息」
「ひゃぁぁあああ！」

止めて、止めて、止めて。
絶対悪酔いしている。というか、さっきの仕返しですか。
体に力が入らない。そうこうしているうちに、体を倒されて、腕が腰から胸に移動していく。
「んんー、いいね、いいねぇー、その声」
ぺろりと首筋をひと嘗め。
ひくっ。思わず口をきつく結ぶ。声を出すのはこの痴女を扇情するようなものだ。
何とかやめさせないと。
「さっさとやーめーろー、この変態っ！」
この人物に弱みを握られたのはかなりまずい気がする。
後日談的に言えば、この時悲鳴を上げたことを今後後悔し続けることになる、といった感じだ。
今もかなり追い詰められた状態だけども。
「んあぁぁっ」
「背中も感度いいんだぁ・・・」
やばい、この人声に熱気が入ってきてる。隈目の奥がらんらんと輝いているのが本気で怖い。
何とか逃れようと体をくねらせるのだけど、彼女はするすると腕や足を絡ませてくる。
太股の内側や二の腕といった皮膚が薄く神経の過敏な部位にわざと自分の肌が擦れるようにしてくる。
そのせいで力が入らない。
やりなれてやがるな、チクショウ。
どうしようか・・・、な・・・・・・。
「・・・・・・」
現状、仰向けにされて、彼女にのしかかられている体勢の僕は、首を横に向けた先に1つの視線を見つけた。
保健室の扉を少し開けた隙間から覗く、大きな瞳。顔を赤らめているのが分かるのだが、その目の高さはかなり低い。

と、こっちの視線に気づいたその人物は数秒僕と目を合わせて、逃げた。
猛ダッシュである。ズダダッというすさまじい足音まで聞こえる。
「待てやぁあああ、助けろぉぉぉぉおお、こうちょぉぉぉおおうぅっ！！！」

#

自分の他人の印象（キャラクター）を崩壊させかねない出来事から、何とか落ち着きを取り戻してベッドに腰をかけた。
疲労感がさっきの2倍に膨れ上がったに違いない。
あの後、やっとのことで呼び戻した校長こと、久遠未来（くおんみく）に組み付いてくるカイナを外してもらった。
これでもかというぐらい割りと本気で頭を上から殴り続けたため、彼女はベッドにダウンしている。そして主人の代わりに空いた丸椅子を校長が占拠している状態だ。
ちなみに掌底を使わなかったのは、気絶されたら痛みを味あわせられないから。それ以外にあるわけもない。
「だって・・・ああなったカイちゃんは制御不能なんですよぉ」
逃げたことに対する言及に彼女はこう答えてくれた。
目尻に大粒の涙を溜めて、頭を押さえている。生徒を見捨てようとした罰だ。
確かに色々と抵抗できなかったけども。教師としてちゃんとと生徒の貞操は守ってもらいたい。
「・・・あれ？カイナは今年この学校に配属になったんですよね？」
この危ない保険医は今年になってこの学校に来たと、朝礼で紹介を受けてた記憶があるのだけど。
まぁ、カイちゃんなんて言ってる時点で予想はできるか。
・・・何かどんどん、脳内での彼女の扱いが酷くなりそうな気がするなぁ・・・いや、自業自得か。

「私とカイちゃんは中学校時代からの友人です。・・・・・・あくまでも友人ですからね？」

２回言った。なるほど、カイナの手馴れた感は彼女が犠牲になっていた時に培われたのか。

というか。

僕はそこで、キャスター付きの椅子をまわして遊んでいる彼女を見た。

身長は僕より小さい、童顔な少女がそこにいる。今やっと中学生活を謳歌しようとしているようにしか見えない風貌だ。それすらちょっと無理があるかもしれないのに。

・・・・・。彼女の中学校時代って想像できないんだけどなぁ。

この人は時を止める能力でも持ってるに違いない。

まぁ、いいか。

「そうですか。まぁ、この色狂いの保健医は放っておいて・・・何のようですか？僕に何か連絡があったんでしょ？」

「そうですね。この腐れ変態は放っておきましょう。

で、ですね。２次測定の準備が出来ましたよー、という伝言にやってきたんです」

ひっでぇー、という呻き声が聞こえてくるけど気にしない。もう１発追加して黙らす。ついでに息ができないようにシーツに顔を押し付ける。何度かもがいたけど、パタンと力が抜けた。

「？それだけですか？」

そんなことのために校長自らやってくる必要はないと思って、その答案は除外しておいたのに。

「はぁーい。『人手がたりねぇ』って教頭が・・・」

なるほど、人望が致命的に欠落してる校長である。人手不足の増員に当てられたらしい。

僕は呆れを隠さずに、場所を聞いて保健室を後にした。

／

引き戸の扉は静かに閉められ、静寂が再び白の空間に戻ってくる。
擦りガラスの向こうに見える影はついりと消える。
丸椅子は余力での回転を無理やり止められ、揺れていた髪は一瞬だけ空中で静止した後、落ちた。
頭を抱えるようにうつ伏せになっていた女性は、その体勢のまま固まって動かない。
少女は椅子を扉からベッドの方へと回して、その大きな双眸で女性を見つめた。

「いいんですか？・・・ついていかなくって」
未来がそんなことを言う。分かっているだろうに。
「べっつにぃー、ついてく理由も見当たらないしね」
だるいというジェスチャーを振りまいてみるが、長い付き合いだバレバレだろう。
「織神なんて久しぶりに聞きましたよ？私」
そりゃあ、そうそう遇える名前じゃない。どちらかというと”遭える”名前だ。
「人のこと言えるかよぉ？まぁいいじゃん？
あいつはあいつで面倒くさい奴だけど、自分のことはできる子だってば」
顔をシーツに埋めたまま、手を振る。
面倒くさい話は、正直したくない。
要らないしがらみなんて後回しにしたい。
それは誰だって同じだろう。
折り言った話を今する気など、なれなかった。
「そうですか。ならいいんですけど・・・」
信頼感からの無追求。優しい声と包むような温かさ。
シーツに顔を埋めている自分には分かるはずもないことだけど、

何となく未来が微笑んでいる、そんな気がした。

少女は椅子から体を上げて、ベッドの方へと歩いていく。
女性はベッドからゆたり体を起こして、少女の方を見据える。
正面で視線を交わしながら、2人は無言。
体を触れさせるわけでもなく、唇を交わすわけでもなく、身を寄せ合うわけでもなく。
――――ただそれだけで心地よいから。

／

廊下を歩く音が、異常に大きく聞こえる。
そんなの、耳を澄ましたからに他ならないのだけど、思考の切り替えには適度な日常からの割断だろう。
クシロは楽しい。タカは楽しい。カイナも椎さんも楽しい。楽しい楽しい日常。
さてさて、さて。悪戯な出来事はここまで、これからは単なるお遊びだ。
策略や願望にまみれた人間ほどからかうのが面白いものだ。
暇つぶしは暇つぶし。僕にとっては、人生全てが暇つぶし。
だから、今からの出来事もやっぱりただの遊戯でしかない。

測定室は普段使われていない空き教室だった。
白い、脳や内臓の様子を輪切りの映像にして調べるCTのような外見をした機械が中央に設置されている。
教室のにあるものでは足りない電力源は、特殊電池を利用しているらしい。アタッシュケースほどの黒い箱にコードが幾つも付いている。

部屋の中には3人の男。白衣を纏った当たり障りのない人達。
「あれ?学校では見かけない顔ですけど・・・」
なんて少しおどおどとした風に尋ねてみる。
可笑しな話。僕が学内の教師達全員を覚えているはずもないのにね。
「ああ、人手が足りないのと、急なのとで近くの研究所から助っ人としてきたんだよ」
四角い眼鏡の人当たりのいい笑顔を見せる青年がそんな受け答えをした。
ある程度の真実を含めるのが上手に嘘をつくコツ。どこかで聞いた話だけど。
それに返す僕の反応は冷めたものだ。口を歪めるのも隠すことすらしないで、ただただ意地悪に言う。
「近くねぇ・・・近く。例えば私鉄で9駅ほど、とかぁ?」
その言及崩れの戯言に、うろたえを見せる若き研究者達。
ここから私鉄で9駅いくと、クシロの住んでいる、そしてかつて僕が住んでいた施設のある駅に行き着いたりするのだ。
施設にはこの手の若者も多くいることもよく知っているし、向こうの重役が僕が無駄に反抗しないと知っていることもよく知っている。
だから、わざわざ自分達が来るまでもないと考えて、下っ端をよこしてきた。
10年前から分かりきったような推測。
甘っちょろい。要らない信頼に他ならないではないか。
可笑しくて、可笑しくて、僕は笑ってしまいそうだ。
さておき、
頭がぼさぼさ細眼鏡の老博士や婉曲した卑屈顔の中年科学者、そしてあの無愛想な岩顔男。
面倒事の糸に絡め取られている大人達に比べて、なんて彼らは純粋なんだろうか!

こんなことで動揺を隠せないようでは、この先が思いやられる限りだ。

この僕、『折り紙の8月』にすら、劣る。

馬鹿らし過ぎて、拍子抜け。虚し過ぎて、楽しめそうにもない。

だから、こんな堅苦しい作業はさっさと終えてしまおう。

何よりも僕のために。

「ほら、どうしたんですか？早くやってしまいましょうよ」

男達が慌てて、機械の操作を始める。タッチパネル式の最新型測定機ＢＷＡ－ｑ２０００はＰＣの起動音のような快音を響かせた。

力を抜く前に、入れる理由すらない少女は半目で天井を眺めながら、視界が白色の円洞に覆われるのを見ていた。

無機質な視界に、無機質な触感。無機質な意思に、無機質な感動。

心地よい無機で無気な空間に少女は体を委ねた。

善意も悪意も混ぜこぜの純粋原石。

無味で無臭で、無為なヒトガタ。

何もなく、何もなく、何もない、織神葉月。

彼女は今まであったほとんどと、これから起こるほとんどに興味がなく、わが身のことなど案じはしない。

――――自らを粗末に扱うその行為が、どれほど最悪で最低で最厄であるということに彼女は気づいていないから。

序章－3　暇潰し。－Ｍｉｓｃｈｉｅｆ－（後書き）

大学が始まったせいで、時間がどう取れるかいまいち分かりませんが、
隔週日曜日を定更新日にしたいなぁと思ってます。
だいたい2週に1回ほどです。
それよりも早いかもしれませんし、遅いかもしれません。

個人的な苦手な描写が多かったせいで、
どうも、うまくいったのか分からない部分があるのですが、ご容赦ください。

本当に進みが遅い小説で、私的にまだプロローグすら終わってないような感じです。
今後が心配ですね・・・・・・
ともかくひっそり更新していきたいと思います。

感想等、心からお待ちしています。
お暇があれば、どうぞメッセージをお寄せください。

序章－4　彼方に。－Ｏｖｅｒ　ｔｈｅｒｅ－

剥き出しの蛍光灯は現在消えている。白い遮光カーテンは閉まっているが、外からの光は端々から漏れてきていた。

部屋の中はそれなりに暗いものの、周りが見えないほどではない。それに部屋の空気は陽の光に焦がされて熱くなっている。

腿や背中に汗をかいているし、視界はぼうっとどこかに行ってしまった。

基本的に僕は寝る前にカーテンを閉めない。閉めたら夜明けが分からないのだから、当然だ。

だけど今は閉まってる。理由は簡単。夜明けに1度起きた僕が、閉めた後に2度寝したから。

1日ぐっすり眠ったのにも関わらず疲労感が抜けなかったために、仕方がないから大人しく疲れを癒している。

昨日の朝からの疲労感はおそらく能力使用の結果なのだけど、それを使った覚えがない僕としては損をしている気分だ。

さて、今日から3日間ほど、僕だけ特別に休日に入ることになっている。

これも簡単な理由で、僕の測定はあの1回で終わってしまったからである。

空き教室に設置されたあの測定機、超高性能の最新型だ。その上、採血に口内の粘液細胞も綿棒で摂られた。

徹底的に調べつくす所存だったことは間違えないし、あからさま過ぎると思うのだけど、正直助かった。

あんな鬱陶しいことあと2回も3回もやってられない。正体不明の僕の能力では通常なら2次測定で終わらないことは火を見るより明らかだった。

施設の方も何度も何度も、関係者を送ることを危険と見なしたのか面倒くさかったのか。まぁ、どうでもいいけど。

とにかく、そのために本来あるべき、次の測定を尽く消化してしまった僕は、忙しい教師の手に余るため、自宅待機と相成ったわけである。

測定結果が出るまでには少しかかるらしい。何せ数回の測定を１度にやってしまおうというのだから当然だろう。というか、ＤＮＡ鑑定までやるつもりなのか、彼らは。

とにかく、そういうわけで今僕は暇を持て余している。

随分前に購入した携帯ゲームは視界がぐるぐる回るために酔ってしまうし、テレビはこの時間何をやっているのかまるでわからない、ラジオも同じく、能力を使い慣らすにも能力自体よく分かってないので発現方法がいまいち分からない。

体の疲労感はまだ大分残っているので、あまり体は動かしたくない。と言っても、さすがに眠り疲れてしまった。睡魔はそれほどない。

「・・・・・・」

仕方なく起き上がり、キッチンに向かった。緩慢に歩いて、冷蔵庫までたどり着く。

開けると、そこに居るのは瓶入りクリオネ。その１つを手にとって閉め直した。それから冷蔵庫を背にしてもたれかかる。

冷たいガラス瓶を片手で上から持ち上げて、中身を乏しい陽に透かしてみる。

透明な体を浮かす流氷の天使がゆるゆると舞っていた。

妖精とも称されようこのれっきとした海洋生物ハダカカメガイは、捕食時恐ろしいまでに変形する。

触手を伸ばし獲物を絡め取るその姿は悪魔の如く。

・・・お前はクリオネに似てると、クシロが言っていた。

それが透過性を言うのか外面性を言うのか内面性を言うのか、その性質全てを言うのか。

定かではないものの、怒る気にもなれなかったので、結局叩いても殴っても刺してもいない。

こいつらは育てる場所も、えさもこだわるわがままさんである。
もっともそんな面倒な世話も、鳴れて日常生活に組み込めばただの作業だけど。
熱帯魚のように常時部屋に設置しておけないし、小鳥のようにさえずってはくれないし、猫のように擦り寄ってはくれないし、犬のようにかまってもくれない観賞価値のみの存在。
ただ、ぼうっと眺めるにはもってこいの標的。混線する思考を遮断するにはちょうどいい気紛れ。
まだ2日以上ある暇の幾らかは、こうやって過ぎていくのだろう。

／

私は朝焼けや夕焼けが大好きで、日没の時間には高いところや見晴らしのいい空間に顔を出す癖がある。
朝にしても同じで、時々そのためだけに早起きして、終われば2度寝するという可笑しな行動を起こしたりもする。
その日も同じで、面倒くさい教師達の説明ややたらとある集団移動を終えての下校時、ふと屋上に出たくなったのだ。
ただでさえ遅い時間帯、誰もいないだろう屋上で日暮れを楽しむのも乙だな、と鼻歌交じりに階段を駆け上り、錆びて音の鳴る扉を開ける私。
その奥には先客が居た。
落下防止用の柵に座って体の縦半分ほどを5階分の高さを誇る空間に放り投げるという常識外れの行動をしでかし、ソプラノで歌を歌っている人物。
男子用の制服に身を包みながらも、男女の区別のつけ辛い風貌をした少年。
そう、私こと布衣菜誉（ふいな ほまれ）はここで織神葉月君に出会った。
クラスメートということはその人と知り合っているという条件にはならない。

顔を合わせたところで、所詮他人は他人。
言葉を交わさない限り、人を知ることなどできないと思う。
私はその先客に声をかけた。

それが始まり。
それ以後、私と彼は時々夕暮れ時の屋上で顔を合わすようになった。
それは約束だとかそういうものではなくて単なる鉢合わせ。
私が気が向い時、屋上に時々彼が居たというだけの話。
もちろん、向こうも同じ事を思っているに違いないのだけど、まあ、そんな感じだった。
そんな中で、お互い上を向いたままでまともに視線を合わせずに会話もした。
こんな幻想的な空間で、くだらない世話話なんてもちろんしない。
話題はもっぱら非現実的な戯言。
「”自然”の反対？”人工”でしょ」
「んー、そう？
例えば、小鳥のカップルがいたとしようよ。
彼らは小枝を拾うか折ってきたりして木の上に自分達の巣を作る。
そしてタマゴを産んで子育てもする。
もちろん虫なんかを捕食するし、子供のためにそれらを狩るだろうね。
彼らは当然、自然に生きているわけだけど――――」
「あー、わかった。『それを人間に置き換えてみれば』ってことね」
「結局やってることは人間も変わらない。
自然を破壊する？摂取する？そんなことどんな動植物でも同じことだ。”自然”とはそれをも含んだ大きな様態だよ」
「マクロだなぁ・・・。
自然をうまく扱おうなんてただの人間の傲慢って？」
「人の活動の規模は確かに大きいけど、”自然”と並ぶほどじゃな

いねっていうのが僕の意見。
　というか、対象に自分達が含まれちゃってるから並びようもないんだけど」
「まあ、私も西洋的な考え方いまいちわかんないけどね。何でどうにかして自然と対抗しようとするんだろ？」
「さぁー？わかんないね、僕東洋人だし」
「だねー」

　あるいは

「命に価値はあるか・・・ね。ん、あるんじゃない？」
「あれー？意外と普通の意見・・・。
　何か悪いものでも食べたの？」
「・・・・・・」
「で、その心は？」
「マーケットが成り立ってるから」
「・・・・・・。どうぞ、続きを」
「需要がなければ商売は成り立ちません。対価がなければ供給は行われません」
「ざっくりといったなー。もうちょっと、何かないの？」
「んー、僕は全く博愛主義じゃないから、『人間皆平等』とか『人は尊い』とかそんなのは思ってない」
「私もそうだけど？」
「そんな僕でも、あぁ、命は大切なんだなぁって思う瞬間はあるんだよ」
「うん」
「例えばさ、クシロが誘拐されて、僕に『１００人殺せ』って脅迫電話がかかってきたとしよう。
　さて、どうするか？
　僕はためらいなく殺すね。千でも万でも」

「わぁあ・・・・・愛されてるなぁ、朽網君・・・」
「いやいやいや、愛じゃないし」
「自覚がないだけじゃない？」
「えー、実感としてないんだけどなぁ・・・。あったとしても保護愛だね」
「たぶん、彼も同じこと考えてると思うよ、それ・・・」
「・・・・・」
「それはともかく・・・・・まるで意味がわかんないんだけど？」
「需要はそもそも何故生まれるのか？簡単。それが欲しいから。欲しがる人にとって価値があるから。
この場合は命だけど、つまり多くの人間は自分の命は大切だと思ってる。
もちろんそう思ってない人はいるけど、とにかく。
僕が思うに価値っていうのは思い入れなんだと思う。
自分と親しい人の死は悲しくとも、興味のない著名人の死なんてどうでもいいでしょ」
「命に価値があるのは、その人自体に何かしら感情を抱いているから？
ふーん。何か子供頃から持ってるぬいぐるみをどうしても捨てられないのと同じ感じよね」
「おー、そう言えばよかったんだ」
「・・・・・。それって人とモノを混同視してない？」
「生物と無生物って実のところ境界線があやふやなんだよ？」
「あー、専門っぽいのはパスパス。
・・・ところでさあ」
「何？」
「さっきの例えなんだけど、朽網君じゃなくて私だったらどうするの？」
「うん？殺すよ、たぶん」
「・・・うーん。やっぱり違うかぁ。嘘じゃなさそうだしなぁ・・・

・・・」
「？」
「両想いだと思ったんだけ・・・痛い痛い！叩かないで！」
そんな中にも、どうしても心に残ってしまうこともあって・・・・・
「織神君は将来の夢とか、ある？」
「ないよ」
「目標と願望とかそういうのも？」
「うん、全くないね」
「断言ですか・・・ふーん、でも実際そういうのがないと生きてけないんじゃない？人間って」
「未来に何の希望もなく、不定過ぎて不安過ぎるから自殺？」
「現在にも未来にも何もなかったらそうなるのかもね」
「んー、原動力とかそんなものがないってこと？小さくても楽しみがあれば人は生きていける気がするけどなぁ・・・・・。
よし、明日は焼きプリンを食べよう。だから死ぬなら明日以降ってことで、みたいな」
「死の延期が焼きプリンで決まるのもすごく嫌な気がするけど・・・・・。
でも、そんなものが毎日続けば死なないで生きていけるのかなぁ」
「少なくても僕はそう生きてるつもりなんだけどね。
何もないということは死ぬ理由にはならないと思うよ。それに自殺には理由が要るでしょ」
「でも自殺って、それこそ自分の人生に満足した上で、これ以上必要ないと悟った上で、自ら終えるためにやる人がいるとか言うよ？」
「そういうのは例外じゃないかなぁ。僕は区別して”自死”って言ってるけど。
本人が納得した逃避以外の死の選択って、彼らの中で完結しちゃ

てて文句付けられないんだよね」
「確かに別に命を粗末にしてるって言い切れないところがあるけど・・・」
「逆に生きていることが命を尊重しているってことにもならないしね。
でも別にわざわざ自分で死ぬ必要もないと思うんだけどね、僕は。せっかくだからもう少しこの世界を見ていけばいいのにって。”自死”って別にお先真っ暗で死ぬわけじゃないんだから」
「だから織神君は生きてるんだ？」
「うん、勝手に死ぬのを待ってるよ。日々楽しいことが溢れているわけだし、作れるわけだし」
「例えば？」
「明日はクシロを弄ろうとか、明後日はタカをからかおうとか――」
「・・・・・」
「それから今日は君で遊んでるね」
「・・・・・ちょっと待ちやがってください？」
「何？僕、何か変なこといった？」
「変なことしか言ってないけど？」
「それは変な話だねー」
「・・・もういいや。
でも、そういうのって願望にならないの？これがずっと続けばいいのにって」
「んー、どうかなぁ？
もし僕がここで間違えて重心を前に傾けすぎて、転落死したとしよう。たぶん僕は何の未練もないと思うよ。
その瞬間まで幸せだったんだからそれでいいんだって」
「・・・・・。・・・、・・・・・」
「あの・・・なんで肩を掴んでるんですかね？」
「とりあえずそこから降りなさい」

「ちょっ！いたっ、いやそのまま後ろに引いたら頭からコンクリートに・・・、やめっ」

「・・・やりきったっていうか、走りきったていうか。
テストなんかで早く終わっちゃった時の気持ちに似てるのかな。
もう全てやってしまってやることがないのにまたされてる感じ。
あるいは、マラソン。とうにゴールしちゃったのに、まだ競技が終わらないまま・・・・・・それが僕なんだよ」

「・・・・・・うん」

そんな会話の断片。
私は彼を哀しい人だと思うようになった。
命を絶つほどの理由がなく、もう人生は終わりきっているのに、生き続けているから、ただ待ち続けている。
列車の終点で1人ぽつんと待っている連想。
まるで死んだ生人。
何も強く求められない、何に執着も持てない、あっさりと自分の全てを終えてしまえる人。
もうあなたは止まってしまっているんだ。
どうしようもなく、救いようのないような印象を私は受けた。
だから、私はあなたを見ていれません。
どうしようもなく他人事なのに、どうしようもなく傲慢な気持ちだけど、あなたが活きてる姿を私は見たいんです。

／

何もしないというのは、何よりの睡眠効果をもたらすもので、それ故僕はあれほど寝たのにも関わらず、うとうととしていた。
掛け布団の上に、仰向けになってうつらと現と夢の間を行ったり来たり。そんなだれた暗闇に、チャイムの音が響いたのは3時17

分。電波時計で確認したのでたぶん間違いない。
例えばここで、寝起きのだらしない姿を見せたくないと思うのが、年頃の少女など思考ではないかと考えても見るのだけど、残念ながらそんな常識を僕は持ち合わせていない。
はぁい・・・、と声を返して、身だしなみを整えることもなく玄関に立った。
扉を開けた先に居たのは、委員長な椎さんと異次元な美樹さん、それから普通の誉さんだった。
別にこれにおいて”普通の”と肩書きをつけることは侮辱しているわけでもなく、単に彼女が今のところそう見える、という指標である。
大体”普通”であるという事は異常であることより難しい世の中だ。僕みたいの異常者がもっともやりやすいに違いないのだし。
「今日きたのはー、はづちゃんの下着を買うてつだーいなんですぜーぃ」
せめて語尾ぐらい統一してほしい美樹さんの台詞。
というか、
「あー、そういえば・・・」
すっかりそのことを忘れていた。衣類、早く用意しないといけないんだった。
「忘れてたんだ・・・まぁ、うん。とにかく早く買いに行こう?」
確かに、いくら僕でもいきなりそんな物を1人で買いに行くのは抵抗がある。勝手の分からないということが実は苦手なのだ。
こうして気をかけてもらっているのだし、お言葉に甘えさせてもらおう。
ちょっと待ってて、そう言って、僕は外に出て当たり障りのない服装に着替えるのと買い物の準備をするために部屋に戻った。
腰をきつく縛れてお尻辺りに余裕がありそうな緩めの黒い長ズボンと無地の長袖の白シャツ、その上にスプリングコートを羽織る。
机の引き出しに入った分厚い茶封筒から10万ほど引き抜くと、

本革製の無骨な黒い財布の中にそれを差し込んで、コートのポケットに放り込む。
「お待たせ」
そう言って僕達は、アパートを出た。

「朽網君とか四十万君とか、あと矢崎君とかがね、頼むって」
彼女達がいきなり尋ねてきた理由を訊いてみたら、なんてことはない、友人の気遣いだった。
ただ、矢崎君、という言葉が気になるのだけど。
「他にも来たがってた子いたんだけど、向こうは向こうで違うこと頼んでるし・・・」
何だか知らないけれど、織神葉月を全面サポート・・・もといおもちゃにしよう的な活動を行っているらしい。
いや、いいけどね。害がない内は。・・・・・・あくまで害のない内は。
クシロの能力が騒乱念力（ポルターガイスト）であって、測定会場をめちゃくちゃにしかけたとか、校長が保健室のベッドで昼寝をしていて教頭に怒られたとか、そんな話をしている内に、僕がまるで知らない店に着いた。
当然なんだけどね。知ってたら・・・・・いや、別にどうでもいいか。変な気まぐれを起こして用途はともかく必要に駆られることもあるかもしれないし。
目の前にあるのは当然ランジェリーショップ。店頭に首だけ上半身のマネキンが下着を着けて並んでいるのだから間違えない。
商店街を通れば、数件見つけることもできなくないタイプの店だ。看板より分かりやすいのはいいことなのか。
躊躇なく入っていく彼女達に手を引かれて、僕も周りを見回しながら店内に侵入した。
店内には様々な下着類が陳列されている。そりゃあ当然なんだけれども、うん、ある意味圧巻だ。

さすがにここからモノを限定する行為を1人でできた気はしない。彼女達について来てもらって正解だった。

正直、シンプルに白い何の変哲もなさそうなものか本当にスパッツでもいいかと考えていたのだけど、こんな所には逆にないのではないかと思える。

「やーっぱり、そんな事考えていたのね。そうだろうからって、頼まれたのよ」

椎さんが溜息混じりに言ってくれた。

まぁ、気持ちは分からなくもないけれど、僕に色恋ものを望んでどうするっていうんだか。

誰かを誘惑するために下着を選ぶなんてことは、天と地が合一してもありえないね。

女の子らしくなんて言われても、1度固まった性格や性質はそうそう変わるものではないのに。

僕はそんな事を思いながら、保健室でやたら疲れた結果得たメモを財布から取り出した。

うん。全くもって意味不明だ。

これでよく最悪1人でも大丈夫なんて少しでも考えたな、僕。

事態は思ったより深刻だったようだ。

仕方なく、それを美樹さんに渡して、具体的な選択サイズを仰ぐ。

少々引きつった感じで美樹さんは教えてくれた。いまいち実感が掴めないものの、体形がいいのは先日のカイナからも聞いている。だけど、やっぱり分からないものは分からないというのが感想だ。

教わった記号的なアルファベットや数字を追いつつ、同サイズが並んでいると思われる区間を見つけた僕は、ちょうど取りやすい位置にあった1つを手に取ってみた。

黒いシンプルなデザインの1品。フリルが付いていないのがいいといえばいい。ただ、紐を両側で括るタイプなので履きにくそうだ。

そうか。履き方にも色々種類があるのか。男子のものに比べてバリエーションが多いんだ。

どれが1番履きやすいかとか、試した方がいいのかもしれない。前もやったように何種類か適当に買って置いた方がいいだろう。

試着だとかそういったことも出来るのだろうけど、僕はそういったことがどうも苦手なのでやろうとは思わない。

自分のモノでもない物を身に着けるなんて事は考えただけでぞっとする。

手に取った1つを脇に抱えて、他のタイプを探してみる。

白い普通の”履く”もの、ブラジャーのフックの前後で2種類・・・今後の品定めに役立ちそうなものをサクサクと選んでいく。

ハズレだったとしても、いつか使う時が来るかもしれない。今履いているスパッツがいい例だ。

「はづちゃーん、これなんてどう?」

声が聞こえた方へ振り向くと、美樹さんが両手でそれを広げている。

大体こういうシチュエーションで渡されるようなモノは、異常な露出度を誇っていたりするのだけど、彼女が見せてくれたものはその間逆だった。

・・・どの道、嫌だ。

それは、かぼちゃパンツとか言われるものですかね、美樹さん?

「違うよー、ドロワーズだよん。かぼちゃパンツはズボンなのさー」

知らないよ、そんなこと。

とにかく、それを試してみる気は起こらないんですが。

「大丈夫ー、クシろんから軍資金は得てるんだよん。嫌がっても購入けってーぇい」

あのヤロウはなんて余計なことを・・・・・・。

・・・よし、今度の機会の自分で履いてもらおう。似合うだろうし。

店内を探してみると、椎さんや誉さんまで何やら熱心に選んでいる。

頭が痛い。ものすごく、痛い。あんまり変なのは選ばないでほし

いんだけどなぁ・・・。
そこで、誉さんが僕の視線に気づいたらしく、にぃっと笑って手に持っている1品を掲げて見せた。
何、その布切れ。情欲扇情以外の目的が感じられないんだけど。
椎さんの方は日常的に履ける可愛らしい下着をひたすら選んでいる。
毎日欠かすことなく、そんなものを履かせる気ですか？
お願いだからやめてください。本当に。
あぁ、止めても無駄なんだろうなぁ・・・・・・。
上機嫌に次に獲物を探しに彷徨い行く美樹さん。
ちゃっかり、さっきのドロワーズとやらを僕の腕の中に収めている。その方が探しやすいという、明白な理由からなんだろう。
これをいちいち戻したところで、どうせ最後には全部買うことになるに決まっている。
「あー、うん・・・」
諦めてしまおう。それが1番いいに違いない。
僕の方は、もう選び終わったようなものだし、後は彼女達が自然に止まるのを待つしかない。
当初の目的どおりの専門店じゃなくても売っていそうな白地の安っぽいシロモノでも探して時間を潰そう。
少なくても日常的にあんなものを履くのはごめんだ。

幾らなんでも2時間も見回るのに大きくもないこの店内を、散々歩きまわされる羽目になった。
まさかそこまで時間がかかるとは思ってみなかった僕にとっては異常に疲労の溜まる行為である。
明日も、寝て過ごすことになりそうだ。
時間が余っているのが救いと言えば救いである。
異常な数を候補に挙げた割には、金銭的なことと現実性を考えて

か大分数の抑えられたそれらの品々をレジに持っていき清算し、やっとのことで帰宅と相成った。

女性下着の着衣に関して完全に素人な僕を置いてそのまま解散というわけにも行かず、家が遠い椎さんと美樹さんには帰ってもらい、誉さんに教えてもらうことになる。

数を減らしたとはいえ、やはり量のあるそれらの包装を丸めてゴミ箱に放り込み、1種類ずつジェスチャー交じりに装着方法を教えてもらい、実際自分でやってみるという繰り返し。

時々、似合ってるねぇなどといった冷やかしを受けつつ、彼女の帰りが遅くなってもまずいので、できるだけ手短に済ましてもらった。

というわけで、着慣れない下着をしっかりと着た上で、彼女を送り出したのは6時を少し回った辺りだった。

ふう。本当に疲れる話だ。何で下着だけでこんな苦労をしなくてはならないんだか。

／

まだ明るさの残る夕焼けな空の下、私は家に向かっている。

私の家は織神君・・・もといはづちゃんのアパートから先に行った住宅街にあるのだ。

『はづちゃん』というのは今日学校での会議で決定した織神君の愛称だ。

彼女からのアプローチは難しいという考えから、こちらから仕掛けるという方針を打ち出したのである。

親しみを込めて、蟻地獄のように周囲を包囲しつつ、引きずり落とすつもりらしい。

その方がいいと私も思うけど。

んんー。背伸びが気持ちいい。

それにしても、さっきのはづちゃんは可愛かったなぁ。

ショップ内では妙にそわそわした様子だったし、ブラジャーの付け方を教える時は、当然上半身裸だったわけだけど、手が肌に触れる度に声をあげていたしで、うん、ものすごく面白かった。

さりげなく、故意に触れていたというのは秘密。

どうやら、あんまり人に触れなれてないようだ。これは美味しい情報だと思う。

何でもいいから”意識”させるというのはいいことだと思う。

というわけで、朽網君にメール報告。

織神葉月愛護会（仮）。情報網を確立させるとかで、クラスメートのメルアドを教え合ったのだ。

まぁ、皆ほとんど知ってたんだけど、全員で連絡を取れるようにとのこと。

入手した情報はまず、朽網君に送られて、問題がなければそこから皆に総送信されるルールになっている。

まぁ、一応個人情報なので、保護者を通そうという一応の心遣い。

で、その役には、出会ってここ数週間で織神葉月の保護者という認識がクラス全体で成されている朽網君に決定したわけだ。

矢崎君曰く『あいつの葉月を見る目は優し過ぎる』だそうで、自分から愛護会を提案した割りに、そういったところはきっちり適任に任していた。

あっさりしているというか、さっぱりしているというか・・・性根は悪くないのに、自分から誤解されるような行為をする根っからの変人なのだろう。

ともかく、予感は悪くない方向に向かっているようで、私は嬉しくなった。

／

問題は山積みである。

例えば、今後この豊富すぎる下着の数々から毎日自ら選んで履か

なければならない事とか、どうも自分が悪意のない接触に免疫がなさ過ぎる事とか、クシロにどう報復するかとか・・・。

・・・人に触れられる事にこれほど弱いとはまるで気づかなかった。

施設にいた頃は、頻繁にあった定期検査などでむやみに体を触られていたはずなのに、それとはまた違った感覚がある。

女体化したのがそのきっかけであったとは思わない。

考えてみれば、そもそも親しい人物に触れられるような機会があったわけもないのだ。

女性になってからそういう機会があっただけだろう。

あんまり他人に知られるとよろしくない話だ。

既にカイナに知られてしまっているだけでも、胃が痛い。聡一に知られたらアウトだ。知られた場合はどうやって口を塞ぐべきか・・・。

お風呂に入るために、服と履いたばかりの下着を脱いでいく。

考えてみれば、今日一日羽毛布団に包まっていたせいでかなり汗をかいているはずなのだ。

下着は横に除けておいてシャツだけ洗濯籠へ投げ入れる。大分使用した服が溜まっていた。そろそろ洗濯しておかないといけない。

風呂場に入ると、冷たい空気が充満していた。窓はずっと開きっぱなし。閉めよう閉めようと思ってはいるものの、シャワーでお湯が出てくる辺りでいつも忘れてしまっている。

今まで数１０回の反省を生かして、先に閉めておく。意外と僕には学習能力がないのかもしれない。ゴカイでも１０回も痛い目を見れば学習するのになぁ。

湯気でガラスが曇る前にもう一度自分の姿を確認してみる。

腐っても元男として女子の裸体を直視して何か感じるものがないのかと思わないでもないのだけど、あんまりない。

素直に綺麗だと思うのだが、だからと言ってどうこうするものでもない気がする。

今後どうなっていくかは分からないけど、性欲がない今正直に何も感じていない。
まぁ、いろんな意味で武器にはなるだろうけど、それを常用するような人生を送る気はない。
蛇口をひねって、ぬるま湯を出す。それで体を1度流してから、僕は湯船に浸かった。
僕には毎日湯船にお湯を張る習慣はない。大体2、3日に1回のペースで風呂に入る。いちいち掃除するのが面倒なんだよね。
でもやっぱり日本人として、この時間は至福です。

#

携帯電話が鳴った。『包帯少女の鎮魂歌(レクイエム)』。
至福の時からいやいや離脱して体を拭いていた僕は、そのまま部屋に出る。
無造作にベッドの上に置いてあった携帯をまだ濡れた手で取り、通話ボタンを押した。
「おーぅ、葉月ぃ」
相手はカイナだった。今の時間学校に居るとは考えにくいので、自宅か帰宅途中かといったところだと思う。
「何ですか？」
とは言っても、何となく分からなくもない。
予想より早かったというのはあるのだけど、
「お前の能力が判明したって連絡あったから、伝えようと思ってよ」
そのこと以外あるわけもない。
少しの沈黙。電波で繋がれた空間同士に空気だけが行き交う一時。
それは前触れとしてのお膳立て。
息を吸うかすかな音の後、
「お前の能力は、形骸変容(メタモルフォーゼ)だ」
彼女はそう断言した。

――――この時、僕は何を思っていたのだろう？
多くの知識と多くの予感と多くの思考の後に、導き出される確たる答えにたどり着いた、僕は。
喜び？悲しみ？あるいは面倒？
近しくは最後の１つ。けれどそれは近いだけで、正しくはなく。
実のところその正否なんてまるっきり意味がなかったに違いない。

・・・そう、だって答えなんて分かりきっている。
『何も感じていなかった』
それ以外、あるわけもないじゃないか。

▲

だから、人はその変化に困惑するし、混乱する。
自らが変わってしまった錯覚を覚え、自己が不定した実感を得る。

――――もしも、もしもまるで驚きもしない人間がいたとしたならば。
それは、確たる自己を持ち合わせたと信ずる傲慢か、あるいは
――――元より何もなく、変化すら意味を持たない虚無か。

序章－４　彼方に。－Ｏｖｅｒ　ｔｈｅｒｅ－（後書き）

やっとプロローグ編が終わった感じがしました。

超能力がメインの話なのにほとんど今までの話に出てこなかったし、今度からそこら辺を書きたいです。

バトルものとかほんとにやりたいんですが、能力を得たばかりの彼らがいきなり・・・っていうのもねぇ。

この３話、ちょっと文が少ない感じがしますが、これはこれでいいのかなぁと試行錯誤中です。

とある部分を１度書いたものを大幅改訂した挙句、数日目に丸々書き直すという暴挙に出たため、色々と誤字脱字至らないところがある気がしてなりません。

ありましたら、どうぞご報告ください。

欠片－1　夢魔。－Ｍｙ　Ｄｒｅａｍ－（前書き）

今回はプロローグと第1話との間、断章ということでかなり短い上に、文を崩しています。
あんまり気にしないでくださいね。

欠片－1　夢魔。－Ｍｙ　Ｄｒｅａｍ－

蒼い。空が蒼い。碧い。天が碧い。
あるいは灰。雲か煙か知らないけれど、色あせた色残りが戸惑いを隠せない。
ズタズタ、ズタズタと何かが切り刻まれるような感覚が心臓に突き刺さる。
ギチギチ、ギチギチに身を焦がすような焦燥が肌を擦り減らす。
二の腕辺りが枯れてしまう様な脅迫に腕を抱いて、目を見開く。
ガチガチと顎が恐怖を訴える。ギュルリと眼球が逃れようと動き回る。
そんな感覚を残したまま、そんな感覚に慣れた上で、僕らは居た。
どうしようもなく、どうしようもなく、どうしようもなく当然で、それ以外を知らない故に。
そこは屋上だった。酷く殺風景な白の群塊。
いつものように床に腰を下ろし、視界は蒼に向ける。
何気なく髪を少量すくって指に巻きつけてみる。それは、すぐに元に戻った。
緑色の上半身から下半身半分までただ伸びているような服。そのポケットから煙草を取り出した。『ＦＯＬＵＴＡ』と銘柄が書かれている。
それをたどたどしく口にくわえて、やはり目は碧に。ライターは、ない。
「あ――――！はづきちゃん何すってるの！」
後方からの声。溌剌とした、明るい発声。幼さの発現。
こげ茶色の髪をさらんと流した少女の姿。同じく緑の服を翻してこちらに向かってくる。
たんたたんとステップを踏むように、駆けながら。
「吸ってないよ？火はついてないんだから」

いいわけー、なんて言いつつ彼女は横についた。
「おばちゃんに怒られちゃうよ？」
それは嫌だな。嫌なのは嫌だ。嫌だから嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。全く。
「それに、そんなものすったら死んじゃうんだー」
信じてもいない話を、口笛を吹くように言う。
「たばこでちょくせつ死ぬわけじゃないでしょ、それ。けんこうをがいするのはたしかだけど・・・。
あぁ、たばこそのものを食べたら死ぬのかもしれないね。そんな自さつ方ほうがあった気がする」
そこで、彼女は笑顔で、ほんとに見惚れる幼い笑顔でこちらを振り向き――――
くわえていた煙草と手に持っていた箱の方も奪い取ると、勢いよくそれらを屋上から投げ飛ばした。
「あ――――――――――――――――!!なんてことをっ」
今度、ライターをあの岩顔男から無言で借りようと思っていたのに。
「なんてことを・・・」
2回言ってみる。
「はづきちゃんにはきけんなものをもたせないようにしたほうがいいと思うの」
平然と言ってのけた。確実に僕の方が年上なのに。数ヶ月の差だけれど。
自分の方がお姉さんだと思っているらしい。そして、まあ、その通りかもしれないけれど。
「だれかにひろわれたらどうするのさっ。だえきからばれちゃうよ、あれ」
「おばさんにしかられるといいんだわ。いの中をはき出してもらいなさい」
胃じゃなくて肺の方だと思うのだけど、違っただろうか？いや、

「それは赤ちゃんがすいがらを食べちゃったときのしょちかなにかだと思う・・・」
「・・・・・・！」
同じことなの！、と間違ったことへの恥ずかしさを誤魔化しつつ、上を向く彼女。
幼い容姿。幼い声。幼い顔。
幼いは最強。幼いに勝てるものなどなく、幼いに敵うものなどない。
故に彼女は幼くはなないのだろう。
――――彼女は、弱かったのだから。
「ねぇ・・・」
彼女が口を開いた。
振り向くと、彼女もこちらに顔を向けている。
6歳に満たない華奢な体を揺り篭のように揺らしながら、笑顔で、言った。
幼い、大人びた、稚拙な、精巧な、綺麗な、無様な、強い、弱い、優しい、怖い、温かい、哀しい、切ない笑顔で。
「はづきちゃん、××××××××××××××××××××××××××××××××？××××××××××××××××？××できき××××××××ば××××××××××苦××××××××××愚××××××××××笑××××××××助××××××××××××××××愚××××××××××××××××××××××××××××××××

・・・

欠片－1　夢魔。－Ｍｙ　Ｄｒｅａｍ－（後書き）

大分、小説らしく話が続いてきたように思います。
途中で断念することのないようにがんばりたいですね。
文のことですが、次から普通のお話に戻りますので、心配しないでください。ホント。

第1話ー　先代変容。ーＧｅｎｄｅｒー

「お前は何考えてんだ？ん？」
カイナがほとほと呆れた、少し怒った含みで僕に訊いてきた。
顔が近い。おでこが付いてしまいそうな距離だ。
「はぁ・・・、無意識なんですけどね・・・。いつの間にかこんな風に」
はぁ、と息を吐いて、彼女は僕の右手に包帯を巻いてくれる。
消毒後、ガーゼを当ててあるその純白はすぐに紅く染まっていく。
自分でも処置はしたけど、一応専門家に見てもらった方がいいだろうと今日僕は学校に来た。
本来ならまだ特別休暇中だ。
「自分で自分の手を切るか？普通。それも意識的ならまだしも無意識に？」
「厳密には切ったんじゃなくて、突き刺したんです。
僕的には夢見が悪かったんで、左手を右手に叩きつけただけなんですってば」
そうしたら、いつの間にか左手の人差し指がイッカクの角のような鋭い鋼になっていて、ずぶりと右手首を突き刺した次第。
本当最悪な朝だった。
「ある意味難儀な能力だよな。寝ぼけて変なことしないように気をつけろよ」
そうしますと答えて、僕は誰も使っていない簡易ベッドの１つに寝転がった。
「貫いた神経もその内治るだろ。私でも治せるけどよ、今すぐ治癒させたいんだったら、形骸変容（メタモルフォーゼ）はそういうことには至極なんだからさ。自分で試してみろよ」
「いまいち使えてないんですけどね、この能力・・・」
自己の形を変えることのできる、破格の人外能力。

とはいえ、自分の意図で神経つなぎなおせ、いっそ傷も癒せなんていきなり難易度が高い要求だ。
そもそもまだ左指も戻せてないのに。
「練習練習。いいトレーニングだろ」
保健医としてどうかと思うんだけどな。医療系能力者のくせに。
それもかなりの高レベルらしいのだけど、それを自分の喫煙による呼吸器官のダメージを常時治すのにしか使っていないという駄目ッぷりだ。
どうせなら目の隈も治せばいいのにな。
自分の右腕を上げてみる。神経が繋がっていないために、その先は力なくだらりと頭を垂れていた。
能力を使う。それも今までと違って意識的に、制御する。
能力者なら誰もが最初にぶつかるであろう壁だ。
自分の好きな時に、好きな場所で、好きなように。そうできなければ意味がない。
「ふぅ・・・んっ」
動かない指に無理やり力を入れてみる。
指の第1関節だけを曲げるようとする神経をすり減らすような感覚。通常使わない所に力を入れているようだ。
力を入れ続けたせいで手が赤くなっていく。
・・・・・。
だけど、それだけだった。
まるで変化の兆しが見えない。
溜息と共に力を抜いた。
手は相変わらず力なく垂れたまま、力を入れた分、腕がむやみに疲れて痺れている。
絶えれなくなって、仕方なく腕をシーツに落とした。
「アプローチが悪いんですかね・・・・」
んあ?と何やら書き物をしていたらしいカイナは振り返る。
「まぁ、頭を使えばいいんじゃない?私だってそうだけど、イメー

ジイメージ。
どう治すかってのをできるだけ具体的に組み上げていくんだよ」
一応ちゃんと助け舟は出してくれるようで、その言葉に感謝しつつ、作業を再開する。
想像・・・神経が繋がる、イメージ・・・。
違うなぁ、もっと具体的に、糸。切れた糸を繋げなおす。結びなおす。
場所が・・・右腕の、奥。手首の辺り。・・・・・・駄目。いまいち、分かりずらい。
神経、神経なんだから・・・脳からたどればいいのか・・脳から、伸びる糸。ゆっくりなぞるように・・・。
脳からの幾多ある糸の１つを手繰るイメージ。
確実に、それが右腕に繋がっているというイメージ。
たどる先に行き止まりがあるというイメージ。
それに断絶した先があるというイメージ。
それを繋ぎ合わすイメージ。
・・・・、・・・・・・・・・。変化なし、失敗。
糸を、弛んでいる糸を伸ばすイメージ。
互いに引き合い、寄り合うイメージ。
接触は強固な接着のイメージ――――
「ッ―・・あ」
摩擦するような神経にくる痛覚が走った。
とっさに腕に目をやる。腕に血の気が戻っていた。
実際は血はもとより通っていて、感覚がなかっただけなのだろうけど、今まで感じられなかったものが戻ってくるというのは妙な新鮮さを帯びるらしい。
試しに、掌を握り締めたり開いたり、指を順に伸ばしたり曲げたりしてみる。
何の支障もなかった。
本来ありえないような、神経の自己結合。

「おおっ、何？もう直ったの？あー、くそぅ。不自由な手の代わりに着替えを手伝う、つーフラグが台無しじゃねーか」

・・・。さっきの助言は結構投げやりだったのかもしれない。そんなフラグが立ったとしても、それをカイナに頼むと思っているのだろうか？

クシロに頼んで反応を楽しむに決まってるじゃないか。

ともあれ、少なくても意識的に変容の能力が使えた。

この要領で、神経以外の傷と左手の凶器を元に戻そう。

さて、どうイメージするべきか。

貫き欠けた傷の再生。肉片が飛んだわけではないとはいえ、ある程度の空洞が開いてしまいいているはずだ。

自分で考えて、ものすごく気持ち悪くなったけど、とにかくそれを埋めてしまえばいい。

筋肉を構成している細胞の形を変えるイメージか。いや、粘土をくっつける感覚の方が分かりやすいかもしれない。

・・・こっちの方が汎用性がありそうだ。

複雑な内蔵を持つ物質を形成するならともかく、今の左指のような形状だけの変容なら、可変性物質（ねんど）をこねるようにというイメージで全て行えるはず。

こういったイメージのストックは幾らか取って置いた方がいいかなぁ。特に医療用のものは便利そうだ。

傷を塞ぐ変容ぐらいすぐに使えるようにしたい。

左手を顔の位置にまで持ち上げる。仰向けのままだから、見上げるような感覚だ。

握り締めようにも曲げる関節のない人差し指。奇妙なねじれを描いてまるでオブジェのよう。

粘土、粘土・・・ぐにゃぐにゃ。柔らかく・・・

#

「・・・・・なんて使えない能力なんだろぅ・・・」

３０分後、僕は完全にへたり込んで今度はうつ伏せになってベッドに沈没した。

何の変哲もないスプーンに向かって『曲がれ』と念じるのと同じ心持ちだ。精神が絶賛衰弱中である。

「おいおいおい、何言ってやがるこのヤロウ。２等級の能力だぞ、形骸変容（メタモルフォーゼ）は。

指と手首は治ったんだろう？」

「たかだか１５ｃｍのアイスピック大の大きさを元に戻すのに２０分以上かかるような能力、使いようがないです」

右手首の傷にも５分以上もかけなければならなかった。突き刺したとはいえ、重要機関（しんけい）は先に治した後の単純作業のはずだったのに。

「でも神経を繋ぐのは早かったじゃんか」

「部位によって著しく効率の変化する治癒能力なんてゴミですね。指一本の武器化に２０分もかけるなんて、戦場では死を意味しますよ」

「どんな戦場が頭にあるかは置いといて・・・まだ得たばかりの能力をそこまで使いこなせれば上出来だよ、葉月。

そんなもんこれからの努力じゃねーか」

だとしても、この体全体の変化から鑑みれば、これ程度のことすぐに飲め込めると思っていた。

無意識下の方が働きやすいというのは厄介な話だ。

「超能力の研究史の中で、今だ６例しかない極少能力（レア・スキル）なんだぜ。

かの有名、かつ最強を謳う強影念力（サイコキネンシス）ですら３等級止まりだっていうのに。

かなり高度な制御がいるってことぐらい分かるが、そもそも研究対象が少なすぎるんだ。資料なんてほとんどないしな」

確かに、去年分までの全能力種を知っている僕だってそれほど多くの情報を持っているわけでもないし。

「最初の1例は日本、2例はヨーロッパの方で他の全件も日本。分子構造どころか、遺伝子情報まで書き換えることのできる究極変容。超越進化体、無定向進化態と称されることもある能力・・・」

「あぁ、そう言う学者もいるな。不老細胞がどうのとか言って、血まなこになって研究してた奴がいたよ。死んだけど。

私だってお前を含めて2人しか見たことないけどな。それも30年前だぞ?」

全6例中2例も見れれば十分だと思・・・っ!、え?・・・この人今30年前とか言いました?

見た目、隈を除けば30歳には満たないだろうカイナ。実は少なく見積もっても40歳を超えている計算になる。

いやいやいや、一番気になるのは、彼女と近似年齢だという校長があの外見でまさかの40越えて・・・・・もはやホラーだ。

カイナの場合、自分の体の代謝やら何やらの老化を限りなく低減させているからだと想像がつくけど、校長は何か特別な能力でも所持しているのだろうか?

「前の形骸変容(メタモルフォーゼ)は酷かったんだ。あれは豪快でな」

途切れかけた思考を何とか繋ぎとめて、カイナの話に相槌をうつ。

「1度キレたら手がつけられなかったんだよ。もっとも私は直接現場にいたわけじゃないんだが。

ほら、SFであるじゃん、脚足戦車。クモって言うかダニって言うかそんなシルエットの。素手と携帯武器じゃ相手にならないんでそれを持ち出したことがあったんだ。

数にして50台前後。その当時まだ試作機だったとはいえ、ガトリングぐらいは積んでてね。ともかく、その能力者は鉄工所に追い詰められた。

・・・さて、どうしたと思う?」

そんなことを言われても分かるわけもない。きっととんでもない

ことをしでかしたんだろうけど。
「・・・分かりません」
「うん。そいつはね、鉄工所の鉄を体内に取り込んで、鉄鋼竜（ドラゴン）を模したんだ。鉄を使ったのは体積と硬度の問題な。
鋼鉄の鱗（よろい）を纏って、炎弾を吐き出す様はまさに怪獣映画だったぜ？私は遠くからしか見えなかったんだけど。
都市特性の甲兵群隊（レギオン）なんて軽く一掃しちまってな。銃撃が効かないんじゃしょうがないけどさ。さっき言った血まなこ研究員が、そいつを怒らした元凶だったんだけど、研究所ごと吹き飛ばされた。
それだけじゃ飽き足らず、主要研究所をあちこち潰し回ったわけだ。そのせいでかなりの研究データが消えたらしい。
で、最後にそのドラゴンは忽然と姿消して、それ以後そいつをみた奴はいない。ちゃんちゃん、めでたしめでたし」
「・・・・・ものすごくためになって、参考になる話をどうもありがとうございました」
「参考にすんな。だいたいあれのせいで、対能力者用の戦闘部隊が正式結成されんだ。逃亡防止用の機器だって町中に投入されてる。あの当時のようにはいかないだろうよ」
心配しなくてもそんなものを再現できるほど僕の能力は卓越してない。さっきの台詞は単なる皮肉だし。そんなもの変容を通り過ぎた範疇だ。
「起こったのは３０年前の東京だったんだ。まだ超能力が一般化してないのと、今のような都市型のシステムじゃなくて閉鎖された研究所の集まりみたいな場所だったんであまり大事にはならかったんだけどね。
あ、いや、研究所の内は大事だったんだけど。何せ、あそこまで完成度の高い形骸変容（メタモルフォーゼ）を失ったんだから」
つまり、それは代用品たる僕の存在価値を示しているわけだけど。
もっとも、これから能力の効率化を図って能力発現度を高めなければならない。でなければ、見限られるだけだ。

「まぁ、そんな昔話ばかりしたところで何にもなりませんよ。何か他にありません？能力関係で利用価値のある情報」
カイナは髪をかきながら、さぁなと言った。
あるけど教えるつもりがないのか、本当にないのか。おそらく前者だろうけど、追及したってどうせ誤魔化されるだろうな。
僕がさて、話題でも変えようと思い立った時点で彼女の方から質問を振ってきた。
「私はさ、お前の能力発現に疑問があるんだけど」

／

「私はさ、お前の能力発現に疑問があるんだけど」
実のところ、早いうちに聞いておこうと思いつつも、葉月１人が特別休学という形になってしまったために、質問は先送りになるだろうと思っていたことだ。
別段、重要ではないものの、しかし気になると言えば間違いなくそうである事柄。
「はぁ・・・」
葉月は生返事をした。自分の対しての疑問というものが分かっていないのだろう。正直どういう神経をしているのだろうかとも思う。
こいつがＳＰＳを服用した日以来、常時さらされ続けている問題だというのに。
それはすなわち、こいつの体のことだ――――
「お前、その女体化に心当たりあるか？」
そこで、あぁ、と疲れた表情をする葉月。今になってやっとその問題の存在を思い出したらしい。やっぱりどうかしてる。
「知りませんよ。朝起きたらこうなってたんです。心当たりなんて・・・」
ない、か。
能力発現自体が無意識下で行われていたとしても、何の理由もな

しに能力が施行されるとも思えない。
無意識は意識の影響を少なくとも受ける。純粋なランダムというわけじゃない。
意識的な要因があると考えた方が妥当だ。
例えば、もとより女性化への願望があったとか。
「お前、性同一性障害だったりする？」
「はい？」
ぽかん、という擬音がつきそうな感じで首を傾げる葉月。その動作はかなり可愛らしい。いつもの黒さが嘘のようだ。純粋に虚を突かれたらしい。
「・・いまいちその言葉の意味が理解しかねますが・・・・・」
「精神の性認識と体の性とが一致していないとする障害症状。男なら女、女なら男。身体の性とは逆の性が本来の自分の性だと認識してしまい、よって生活に支障が出てくることが多い。
でもって――――」
「そんなこと調べたんですか・・・」
途中で葉月が呆れた声を挟んできた。
机に置いてあった数１０枚に及ぶ紙束を持ち上げてやる。
「調べたんだ。でもって、その自覚パタンなんだが、所論あるものの、先天的で割と幼児の頃から傾向はあるんだと。
おままごとの好きな男子、男子を走り回ってる女子。まぁ、これぐらいはありそうなものなんだけど、自然体でいるだけで、実際の身体の性とは違う方に多い傾向を好んでしまう人間。まぁ、資料読んだ私の解釈だけど。
なんで自分は他の同性とは違うことをしているのだろう？というところから自覚するらしい。
ある程度の思考ができるようになると、他人と違うってことが迫害の対象になることぐらい分かるからな。たいてい無理やり同性に合わせる。だが、同時に年頃を向かえるわけだから、その反発も大きい――――」

「ちょっと待ってください」
『幼児の頃・・・』辺りから額にしわを寄せ、『なんで自分は・・・』辺りで頭を抱えだした葉月が、低い声で私の話を切った。
さっきからそうだが、人の話はちゃんと聞くべきだ。
もっとも、こいつが奇妙な反応をしていることに気付いていながら、話し続けた私のせいもあるけど。
「何か今、恐ろしいことを聞いた気がするんですが・・・」
「うん？」
「性自認って幼児からあるものなんですか？」
動揺しているような声を出し、瞳に困惑の色を浮かばせている。
こいつには珍しい表情だ。
そしてこいつの言っている意味がいまいち分からない。そんなの、当然に分かるものだろう。性的興味を差し引いても、小学生の頃から男女の区別は始まっていくんだから。
「僕はそういうの思春期に出てくるものだと思ってました」
何か今、恐ろしいことを聞いた気がするんだが。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
無言での対面。先に目をそらしたのは葉月の方だった。焦っているというか、心底居心地が悪そうな様子をしている。
本来、自分の性がどうであるだかなんて、教わらなくても意識する。周りをみて、どちらにつくべきかなど分かりきっている。
本当の意味で”男女区別のない”環境下で育った子供は、男女の性差を『今日は晴れか雨か』ほどにしか捉えないという話もあるが、それとは根本的に違う。
『性自認は思春期に始まり、それまでは少なくとも精神に性差がない』などという間違った認識をできる人間と言うのは、今まで性自認がなかった人間にほかならない。

そうであったこいつは、つまり男ですらなかったということだ。
もちろん精神性別を重視するなら、だが。
「お前は性同一性障害ではないな」
前提自体が崩れているし。
「何か存外に予想外にヤバい奴だって言ってません？」
「被害妄想だろ」
たぶん。
まぁ確かに。蛇のいる藪を突いたつもりではあったが、藪自体が蛇だったとは思わなかったね。
予想以上にこいつが壊れているのもよく分かったが、別に悪い意味で思ってるわけでもない。色々教えてやるべき課題が増えたという感じだ。
個人的のは色惚けてるこいつの姿が見たいな。
「だが、となるとやっぱり理由がわからん。別段女子の形を取らんでもそれこそ竜であっても良かったはずじゃん？」
「ああ、ですね、そうですね。お願いですからこれ以上僕の世間知らずぶりを露出させないでください・・・」
未だにショックを受け続けているらしい。基準が分からないが、どうも突かれると弱いジャンル強いジャンルにムラがあるようだ。
そう思って、『世間どころか自分の内まで分かってねーじゃねぇか』とは言わないでおく。
「んー、でも思いのほか馴染んでるだろ？さっきも忘れてたっぽいし。自分の性にお前がこだわりがないってのはそれでいいんだけど、理由は別として、そっちの方が落ち着いてるように見えるぞ」
葉月はうーんと思考してから、
「そうですね」
と答えた。
「こっちの方が見ての通り健康体ですから」
「それだけが理由だっていうのはないと思うけどな・・・」
うぅん、やりにくい。話したい事柄に持って行きづらい奴だ。男

女差ネタ辺りに無知すぎる。だから無恥。故にからかいようもない。
「お前、釧のこと好きか？」
「好きですよ」
即答。喜ばしくもあるが、それが恋愛感情の意であるとは限らない。
というかこいつが恋愛感情を理解してるとは思えない。
「ｌｏｖｅ？ｌｉｋｅ？」
「？ｌｏｖｅですけど？」
「・・・ほぅ、ちなみにｌｏｖｅは愛。恋愛感情で好き。ｌｉｋｅは親しみ。友情で好き。という意味なんだが・・・・・・」
「・・・・・揚げ足っぽくないですかね？知りませんよそんなこと。・・・あったとしても親”愛”ですよ？」
・・・まぁ、期待はしてなかったけどね。
「それはｄｅａｒだろ。そうはっきりと好きだと言えるのはいいことだけどな」
そうですか、と葉月は首を傾げた。
ポケットから携帯を取り出し、何やら操作している。暇になってきたのか、気分をまぎわらすためか。この校舎内では電波妨害がなされているため通信はできない。おそらく来ていたメールでも見ているのだろう。
「ところで、カイナと校長はｌｏｖｅなんですか？ｌｉｋｅなんですか？」
「ｌｏｖｅ」
即答。あいつとは数十年来の仲だ。
２人とも進む道を違えても、定期的にあっていたし、一時同棲もしていた。
「・・・・・意味は？」
「恋”愛”に決まってるだろ？ネコとタチだぜ？」
葉月が恐る恐るという感じで訊いてきたせいで、つい強気になって口を滑らせた。

「・・・・・・」
呆れたような、感心したような顔。
「何だよ？」
「ネコとタチの意味が分かりませんが・・・」
そこで、葉月は持っていた携帯を私に見せ付けた。ボタンを押す。
『ところで、カイナと――――・・・』
再生されるさっきのやり取り。携帯のボイスレコーダー機能。
それを2回繰り返して再生すると葉月はそれを大切そうにポケットにしまった。
「じゃ、僕はこれから教室に行ってみます」
待て待て待て。
「・・・何が望みだ？」
にやりと悪戯な笑みを見せる。まったく、気弱そうにしていれば可愛いのに。
というか復活早い。
「形骸変容（メタモルフォーゼ）について知っている情報をもう1つ教えてもらいます」
断定で言われた。疑問形ですらない。
仕方ないか。別段トップシークレットというわけでもないし。
「・・・・・・同一同在者（ドッペルゲンガー）」
「何です？それ。形骸変容（メタモルフォーゼ）の別称ですか？」
「いや、違うらしい。形骸変容（メタモルフォーゼ）の上位能力だとよ。私もそれしかしらないけどな」
「？いまいち分からない単語ですね。上位能力があるんですか形骸（メタモル）変容（フォーゼ）に？変容能力だけでも、ドッペルゲンガーには違いない気がするんですが」
「あぁ、『相手を模す能力者っつー意味では形骸変容（メタモルフォーゼ）で十分だと思うんだが、何か足りないんだろ」
「・・・そうですか。まぁ、いいです。それは初耳ですし。
それじゃあ、僕は教室に・・・」
「いやいやいや、データ消してけ！」

当然のようにそのまま立ち去ろうとする葉月。
私の停止の言葉に振り向いたあいつは晴れやかな笑顔で、
「消すなんて言ってませんよ」
なんて返しやがった。

／

実に軽やかな気分で保健室を出た僕は、廊下を少しほど行った所で携帯を取り出した。
片手でボタンを操作して、先ほどの音声データを削除する。
そもそも、彼女が断固交渉を拒絶したところで、このデータを暴露するつもりはなかった。
そんなことをしても僕に何の得もありはしないし、そこまで鬼畜じゃない。
それに、カイナに対する切り札（カード）はさっきの会話から得ることができた。
今度のは間違いなしの一級品。待ったなし拒否権なし、お得な札が手に入った。
そうそう使えるものではないものの、使えるときには絶大だろう。
さて、ゆっくりした動作で周りを見回す。
今はそれほど騒がしくないけど、もう少しすれば生徒達の自由行動が始まったり、測定が始まったりしてにわかに忙しくなっていくのだろう。
あと1日ほど本来は休みであるこの僕は、完全にこの中で浮いている。
携帯をズボンのポケットにしまって、ブレザーの内ポケットからダガーナイフを取り出した。
刃を覆っているホルスターには腰に吊れるようにベルト用の輪が付けられている。
男の時は何の問題もなかったのだが、今では胸が当たってしまう

ために心地が悪い。
少し考えてから、それを今度は前のポケットにしまった。
ちなみに持ってこないという選択肢はない。
絶え間なく動かし続けた足を自分のクラスの前で止める。
この時間、皆が何をしているかは定かではないけど、時間的に見て登校はしているはずだ。ホームルームかな。
一息吸ってから引き戸に手をかける。よし、教室への視界と道のりを確保しよう。
がらりと使い古された擬音そのままの音を鳴らして、扉は開いた。
「・・・・・・・」
まず最初に見えたのは黒板。毎日丁寧に雑巾までかけられているご機嫌な緑に白い線が踊っている。『葉月の服　披露会』。たぶん聡一君が書いたんだろう。
「・・・・・・・」
次に視界を過ぎったのは、さまざまな衣服を手にしたり、机に広げて談話しているクラスメート。
「・・・・・・・」
最後にドアの開ける音を聞いた振り向いた皆と目が合った。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
今度は音のならないように僕は引き戸をずらした。
ハンノウノシヨウガオモイツキマセン。
・・・いや、例えばそれこそここでメイド服なんてものを持ち出されたら、さすがに殴る蹴るなどの暴行が選択肢に入ってくるわけだけど、かなり真面目に自分の服を選んでいる人間に暴力を振るうのは酷だと思う。
彼らが広げていた服はどれも、女性らしさを強調している点を覗けば、普通の衣服だった。
むぅ、クシロが居るからか、僕が微妙に手を出せないギリギリのラインを狙っている感じがする。

気まずいなぁ・・・。

「・・・まてよ？」

あの服。黒板の文字から見ても僕用に用意したものには違いない。資金はクシロが出したとして、問題はサイズだ。

未だ午前１０時にはなってない今日は購入日でないことは確か。昨日僕が椎さん達に自分のサイズを教えたのは大体３時半ぐらい。それから別れるまでの数時間、彼女達が携帯を使った様子はなかったし、分かれた時刻も遅い。

だから、彼女達から情報を回したというのは考えにくい。昨日学校が何時に終わったかなんて知らないけれど、彼女が来たのは３時頃。その時間から各自服を用意していたと考えた方が妥当・・・。

つまり、僕が話す前から情報が出ていたことになる。

そんなことができるのはただ１人。

僕はそこまで考えて、廊下の床を蹴って駆け出した。行く先は決まっている。

あの保健医（ヤロウ）、生徒のプライバシー情報を売りやがった！

／

ふぅ、と溜息を吐いて、あたしは机に広げたプリーツスカートの値札をハサミでちょん切った。

それからその札をゴミ袋の中に放り込む。既にかなりの数が溜まっていて、購入された衣類の多さを物語っている。

昨日の今頃、矢崎の立案及び、朽網による懇願によって織神の全面プロデュースプロジェクトが始まったわけだけど、これはその一端だ。

あたし然りクラスメートを含む、織神を覆う環境（対応）を女子に対するものへと変化させる。

周りからの対応を変えられたら、それに準じるようになるのが人間だから、あながち悪い案ではないと思うけど、あの織神はそう簡

単にいかないだろうなぁ。
　元より男らしくもなかった上に、中性的である彼女は別に今まで通りだったとしても女として差し障りなくやっていけるはずだ。
　例えばここで、実際できそうな例として、朽網を女の子にしようと皆で画策しようとするならば、この手の方法は効果があるだろう。
　男である彼の形を女という鋳型に無理嵌めて形成し直すという行為なのだから。だけど、織神はどちらかというと元々不定で形がないし実態がない感じがする。
「香魚(あゆ)ちゃーん、そっちは終わりましたかい？」
　はっとして顔を向けると、九鈴(くすず)がハサミを輪の部分でくるくる回しながら立っていた。
　危ねぇ・・・。スポッと抜けて誰かに当たったらどうする気か。
「私の方はまだあるけど、そういうことの前に・・・とりあえずその腕を下ろしなさい」
「うん？分かった」
　九鈴は素直に従った。素直はいいこと、美徳なり。うん、すばらしい。
　・・・すみません、言葉が足りませんでした。
　九鈴は素直に、腕をそのまま下ろした。
　腕が傾いたために、指に引っかかっていた輪は勢いを保ったままスパッと彼女の手から離れて、真横に飛んだ。
　その先には我がクラスメート杉木海(すずきかい)が。
　無常にもその凶器は彼のこめかみ辺りに直撃した。
「ほぎゃら！」
　コミカルな悲鳴を上げた彼は真横にぶっ倒れてしまった。頭の辺りから血が出てる。そりゃそうか。
　・・・うん、まあいいか。彼だし。
　彼にはこういった役回りが回る仕組みが世界にインプットされているに違いない。
　インパクトのある実例として、ちょっと前、ある件で織神の投げ

た机に当たるというとばっちりを受けたりしたことが挙げられる。
その時彼はあまり打ち所がよろしくなかったのか失神してしまっていたのだけど、投げた本人含め誰にも気付いてもらえなかったというオチ付きだ。
「杉木、保健室に行って来なさい」
あたしは思考のせいで止まっていた作業を再開しながら、そう言ってやった。
「こういうのは保健委員がついてきてくれるものなんだが・・・」
倒れたままそんなことを言う彼。
慣れているためか冷静だけど、血が結構出てるから重傷だろう。
彼の言うことはもっともで、揺り動かさずに保健医を呼ぶことが本当は正しい気もする。
ただし、それを保健委員は・・・つまりあたしは拒絶する。
「あたしには値札を切るという重大な仕事が残ってるから。・・・メンドイし」
「ひどっ！」
それから残念なことに君がヤバイ状態にも見えないのだよ。
「まぁ、冗談さておき、これ切ったら連れててあげるから待ってなさい」
残りある3つほどの値札ちょんぱしてから、あたしは彼のところに歩いていき、彼の腕を取った。
ああ、忘れてたけど、これをやった張本人の九鈴は私に声をかけたことも忘れて、自分の作業に戻っている。彼のことなど気にも留めてない。
私と波風九鈴（なみかぜくすず）は腐れ縁なんだけど、小学生の頃彼女は『歩く凶器』と呼ばれていた。さらに、今回彼女が得た能力は斬刀水圧（ウォーターカッター）。人死にが起きないことを祈るばかりだ。
彼女は思いつきで行動し、気まぐれに発言するため、先が読みにくいところがある。・・・ロシアンルーレット?そんな感じ。
杉木は頭を押さえているけど、指の隙間からダラダラとさ洒落の

ならない量の血液が零れていく。
さっきまで彼が倒れていた場所は、殺人現場よろしくな血溜りができている。血痕がぽたぽた垂れてるので雰囲気も抜群じゃないだろうか。
誰も見向きもしてないんだけどね。
「君も懲りないわねぇ・・・ちゃんと避けなさいよ」
「なぁ、幼馴染への叱責はなしなのに、俺にだけ？というかなんで責められる？」
そりゃあ、九鈴に言ったって直りはしないんだから。あれは生まれつきだし、個性だ。
・・・ああ、彼の被害体質も個性か。
「そっちの方が効果がある気がすんの。それに痛い目に合うのは君だからね」
彼は微妙な顔をして、溜息を吐いた。何だろうか？何か気に食わないんだけど。
「・・いや、こうやって事の度に君を保健室につれていかないあたしのためにも避けろ」
「だから何で俺は責められてる？」
「避けろよな？」
「・・・避けます、がんばります」
よろしい。素直はいいこと、美徳なり、だ。
保健室が教室と同じ1階であることは正直助かる。同じ階なのは能力制御に慣れていない1年生が1番怪我をしやすいからだろうか？
ドアに磁石式のフックが付けられていて、在室中の札がかかっている。宮沢先生はいらっしゃるようだ。
「せんせーい、また馬鹿が怪我しましたー」
馬鹿じゃねーという抗議の声が聞こえてくるけど無視。どうでもいい。
自由の利く方の手でドアを引く。

そこには、包帯で先生の首を絞める織神の姿があった。

「お取り込み中失礼しました」

／

「いや、絞めたところでこのヤロウは死にやしないんだから」

「そういう問題じゃないの、織神。同じ調子で全く耐性のない人に同じことをうっかりしちゃうかもしれないでしょ？」

「大丈夫だと思うけどなー、包帯は弾力性があるから・・・」

「まぁ。でもね、間違いは誰にでもあるの。気をつけないとぽっくりと逝っちゃうかもしれないわけよ」

殺人未遂な現場に遭遇した発見者とその加害者の会話である。

絶対ずれてると思うんだけどな、俺は。

ちなみに瀬川の言っている『ついうっかりぽっくり』には間違いなく俺が標的になる可能性を含んでいる。

こっちにアイコンタクトを取る保健委員（せがわ）。分かってます、とばっちりを受けないように努力しますよ。

うっ血した顔が元の色白に戻ってたらしい宮沢先生は首の辺りをさすっている。まだ残っている赤い線が生々しい。

「まったく、容赦ないんだからな」

「当たり前です。懲罰ですよ、何、人の個人情報ばらしてるんですか」

確かにそうかもしれないが、首を絞めるとはね・・・。俺も気をつけなければ。

「ところで、早いところ俺の怪我治してくれませんかね？」

このままだと忘れられかねないので、口を挟んでみる。

「いいじゃんかよぅ、可愛い教え子の頼みだったんだから」

「あなたは教えてないでしょう。大体、僕だって可愛い教え子です」

「残念！可愛くはないんだよなぁ・・・私のことをお姉さまって呼

んでくれたら考えなくもないんだけどなぁ」
「遺言はそれだけかなカイナ？それじゃあさっきの続きを・・・」
「だーかーらー、せめて殴るだけにしときなさいって」
「生ぬるいよ」
「何気に酷いこというよな、香魚子は。殴るのもなしだろ」
駄目だ、俺相手にされてない。
何だろうこの切ない感じは。涙が出そうだ・・・・・。

第1話－　先代変容。－Ｇｅｎｄｅｒ－（後書き）

相変わらず携帯で読んでいただくのに、無頓着な小説です。すみません、本当。
第1話というわりに、プロローグ編とあんまり変わらない感じですが、一応少しずつ変えていくつもりです。
本当はもう少し書いてしまおうかと思っていたのですが、文字量が自分の決めた所定量に達してしまったため、いっそキリのいい所で止めようとこの形になりました。
だからあまり話に起伏がないんですが。
とりあえず、葉月とかがちゃんと能力を使えるようになってくれないと話が進まない・・・・・・

第2話ー　能力日和。ーＣｌｏｔｈｅｓー

紙袋に入った多量の服。持ち運ぶのに不便で持ち紐の痕が手に赤く残ってしまう。
上下それぞれ１０着ほどあるのではないだろうか。
おそらくクラスメートの女子達が各々買ってきたのだろう。バリエーションが豊富だった。
その１つを手で広げてみる。
上品な白いブラウスだ。
「思ったんですが、僕の形骸変容（メタモルフォーゼ）は可逆的なんですから、男の体にだって戻れるわけですよね？」
ブラウスを仕舞って次の布を引っ張り出す。
赤系統のしっとりとしたスカート。短い。この季節には絶対寒い。
「・・・今更戻るなんて言うなよなー」
気になるのか未だ首をかき続けるカイナ。
今は海くんも香魚子さんもいない。ホームルームに本来与えられている時間が過ぎ、今は自由時間という名の基本訓練などが行われている。
僕は誰もいなくなった隙に教室に入り、案の定僕の机の上に置かれていた膨れた紙袋を保健室まで持ってきたのだった。
・・・次は布面積の小さすぎるデニムパンツ。だから絶対寒いって。
「ここまでされたらね・・・戻るに戻れ・・・・・・ぁあ、そういうことか。外側から固めて戻さないつもりだったわけだ？」
ピクリとご丁寧に反応してくれる彼女。とっさに首を手で覆ってガードしている。
決定的だった。
「何のことかなー？」
ものすごくワザとらしい。いや、ばれてると分かっているからの

行動か。
　叩かれることが分かっているんだからやめればいいと思うんだけどな。
「僕が能力について教えられたのは椎さん達と下着を買いに行った後。その前に彼らに僕の個人情報（サイズ）を教えていた。
　つまり、できるだけ早く服を用意しておきたかったと・・・」
「あははー、子供は無知の方が可愛く見えるんだぜー」
　開き直っているようで、これからなされる暴力に脅えてテンパっているだけかもしれない。
　うん。どっちでもいいや。
　とりあえず殴った。
・・・・・パンツと入れ替えで今度はタートルネックのシャツ。なんとかこの季節でもいけそうだ。もうすぐ使えなくなるんだろうけど。
「何なら今着てみるか？事情が事情だし、別に制服じゃなくたって怒られはしないだろ」
　その言葉が善意であるのか、企みがあって言っているのかが分からなくなってきたことが悲しいですよ、僕は。
　まぁ、確かに今のうちに着てみるのもいいのかもしれない。
　何せ今の僕は女子のくせに男子用の制服を着ている可笑しな人間だ。少なくとも周りからはそう見られている。
・・・私服で校内を歩き回るのも相当目立つだろうけれど、目立ち方が全然違う。
「そうですね・・・」
　クシロ達があの調子ではどうせ何時は着せられる。今のうちに自主的に着てしまった方がいいか。
　僕は先ほど出してみたブラウスとスカートを紙袋から引き抜いた。
　それから、ベッドの仕切りカーテンを勢いよく閉める。
「ちょい待ち、何で閉める？」
　当然の対応だと思いますが？サイズを測る時は仕方なかったけれ

ど、今は別に見せてやる理由がないもの。
「自分の胸に訊いてみてください」
お約束な言葉を吐いて、僕は制服のボタンに手をかけた。
3つある校章を象ったそれらを外して、ブレザーを脱ぐ。ナイフが入っている分、少し重みがあった。シャツも同じく脱いで、ズボンもベルトを外して床に落とす。
さて、たたむのは後にするとしてまずはこの服を着ないといけない。それから全く懲りずにカーテンの隙間から顔を覗かせているカイナを殴らないと。
昨日までと違って、今の僕はちゃんと女性用の下着を身に着けている。もちろん何の変哲もない白いモノ。
それで、ブラジャーもなのだけど、特にショーツの履き心地が悪い。
たぶん今までトランクスやボクサーパンツを履いてきたせいなんだろうけど、この形は脚の付け根辺りがすごく気持ち悪く感じてしまう。
慣れなんだろうけどなぁ・・・。そのお陰で昨日は寝付けず、今かなり眠かったりする。
余計なデザインのない清楚極まりない白い布地に手を通して上半身を覆う。冷たい感触がこそばゆいのだけど、我慢我慢。
次にスカート。そもそもそんなもの履いたことのない僕にとっては未知の世界だ。
後ろで不快極まりない視線を送ってきているカイナに助言を得ることはできるものの、何か嫌。
ズボンの代わりにスカートを両足に通し、太股の辺りまで持ち上げる。腰に当てる部分だろう場所にあるフック状の金属から、何となく着付け方は分からなくもない。
適当に引っ掛けたら、うん、初めてにしてはうまくいったんじゃないんだろうか。
何度か手で直して具合を確かめる。大丈夫そうだ。

さてさて、では、ふむ・・・パーにしようか？グーにしようか？
とりあえず振り向きざまの勢いを利用することは決定事項だ。

#

制服を紙袋に無理やり詰め込んで、僕は保健室を出た。
何か最近あの部屋にいりびたっいる気がする。
これでは通常授業に戻った時に色々と支障が出そうな感じだ。
元より1度習ったことを繰り返されるだけという苦痛の時間なのに、自分の忍耐値が下がってしまった状態で耐えられるわけがない。
『退屈は神をも殺す』らしいので、神様でもない僕などは即死だろう。
この数週間だけでも結構餓死寸前みたいに机に伏しているのに、今から続く3年間の中学生活をどう過ごせばよいのかめどが立っていない。
卒業以前に引き篭もりで中退するかもしれない・・・・・。
ありえなくもない想像に身震いする。能力だけを評価するような中高学校がないわけではないけれど、そんなところに行ってどうするというのか。
あれ？何で僕は学校に通っているんだっけ？クシロに押されて・・・は中学校の話だ。そもそもクシロと出会うことになった小学校には何で通うことになったのだったか・・・。
義務教育だから、なんて常識は意味を持たない。・・・・・・そもそも施設内で教育自体はされていたわけだし、わざわざ・・・・。
『勉強だけが学校の役目ではありません』なんて言葉に影響されたとも思えない・・・・・なのに、あの表情の固まったような大の男が新聞を広げて、『かあさん、やはり人間教育は大切だな』とか口走っている姿を想像してしまった。
思わず笑いが漏れた。そしてむせた。・・・ツボに嵌ってしまった。

ある意味怖い想像だ。
子煩悩とかそういう類の顔を全くしてないしね、あの男は。いや、そもそも既婚者なのかな。ありえないか・・・。
「ん・・・む」
思考に残る衝撃イメージの残像を振り払うために、意味もなく声を出した。
それからスカートのポケットから3つ折りされた長方形の紙を取り出す。学校内のパンフレットだ。
この時期になると、多くの生徒が自らの能力を磨くために、系統別に与えられている場所で訓練を行う。どういった生徒がどこにいるかを把握するために教師に渡される地図があるらしい。
カイナが要らないからとくれた。あの駄目人間。積極的に仕事(かいご)をしようという気持ちがまるでない。
一丁前にカラーコピーなので図面は見やすい。
校舎内にはＥＳＰ系の物理的にモノを壊すようなものではない能力を集めて、念力系や発火系などの危険性の高い能力者は特別な訓練場が割り振られているようだ。
大きいグループなんかでは、元よりそういった活動場所が与えられているところも少なくなく、そういった利点もあるからこそ生徒はグループに加入するというわけなのだろう。
防火加工がなされていないところで発火能力者(パイロキネシス)がトレーニングできるわけがないしなぁ。
さて、どうしようか。
明日まで学校では、2次測定と自由訓練が行われている。
そもそも確認個数のきわめて少ない希少能力(レア・スキル)の僕のような能力者は、当然そこからあぶれているのだ。
この能力にあったグループなどありもしないし、訓練方法すら体系化されていない。
だからこそ、自宅待機だったわけで、今日たまたま来ることになったものの手持ち無沙汰だったりする。

もちろん帰ってもいいんだけど、それはつまらないし。見学でもしておこうかと思っているのだった。

椎さんは風化水空（ブロウ・ブロウ）、美樹さんは原始素能（ホワイトノート）、誉さんは浅夢予知（くもりゆめ）らしい。

あと、さっき聞いたところによると香魚子さんは煙火手榴（ミニ・パイロ）で海くんの方は粗己治癒（そきちゆ）とか。

どれもバラバラだけど、１人ずつ様子を見に行ってみるのも面白そうだ。

そうするならまずは校舎内でやっているもの・・・誉さんと介くんからかな。

後は大体打撃系な過激な能力だ。カマイタチの原型たる風化水空（ブロウ・ブロウ）、読んだとおり発火能力（パイロキネシス）の弱力バージョンの煙火手榴（ミニ・パイロ）・・・・・。

原始素能（ホワイトノート）に至っては系統分岐すらしていない。ある意味僕の能力と似通ったところがあるのかも。

『何も書いていない真っ白な画用紙』、『能力の原始、その素養』と呼ばれる能力複写の能力。たいていの場合１度覚えてしまった能力にその後能力系統を縛られるとはいえ、特殊かつ貴重な能力。

それを持っているだけで４等級、さらに、多くの異系統の能力を覚えられる才能があれば３等２等に匹敵すると言われている。さすが美樹さん。只者ではないと思ってました。

ともかく、原始素能（ホワイトノート）に関しても特定のグループがあるとは考えにくい。僕と同じで所属グループがないということになるんだろう。

おー、いい仲間ができた。これからあるグループ毎の行事でどうやって暇を潰すのか意見交換をしよう。

よし、とりあえず誉さんのところから。

僕はＥＳＰ関係の特に予知能力者の集まっているブロックを地図で探し始めた。

まず、誉さんのところ。

２階にある２－Ｃの教室。辺りにいた先輩に詳しく聞いたところ、特に予知夢などの能力者はこの教室を利用しているらしい。

暗幕を張ってある妙な雰囲気を室外にまで漏らしたその部屋を扉を開けた。

そこには学習机を幾つか寄り集めて布団を乗せてベッドにみたてて、ヒーリングミュージックまでかけて本格的に睡眠に入っている皆様方が。

熟睡している。１人ベッドから転げ落ちて床に直に寝てる。寝言が聞こえる。

無言で扉を閉めた。

次に海くんのところ。

は、運動場の１画でサッカーをしていた。男女混合で真剣に楽しんでいる。

理由は簡単。怪我をしないと能力の使いようがないから。自分で傷をつけるわけにもいかず、健康に運動を楽しんで怪我をしようという魂胆らしい。

ただ遊んでいるようにしか見えない。無邪気にはしゃいでいるようにしか見えない。

あ、ちなみに海くんは結構うまかった。

ここでちょうど昼食の時間だったので、購買部で杏パンと暴飲上等ベリーミルクを購入。

当然のように保健室に行った。

校長が先客として居て、火星人ウィンナーをくわえていた。あれはタコじゃない。

そして、くわえながら携帯ゲーム機でカイナと対戦している。

仕事しろ、仕事。

とりあえず、談話を交えながら食事をしました後、校長を教頭に引き渡した。

そして香魚子さん。
中学校から出て少し出たところにある大き目の茶色い施設に居た。
耐火性の壁に囲まれた小部屋でそれぞれ思い思いに火を放っている。
声を張り上げて思い切り力をぶつけることでより強い火力を得られるとか。グループのリーダーっぽい人が親切にも教えてくれた。
『ストレス解消！1発かませ、ぶっ飛ばせ！！』と書かれた紙が各所に貼られている。
時々やり過ぎて施設が耐え切れずに燃えたりするらしい。だめじゃん。
この施設にはタカも居て、掌に作った爆風を利用してバレーボールを浮かしては受け止めるという繰り返しをやっていた。
火と爆風が強すぎるとボールが破損してしまうため、高度のコントロールが必要になる。タカの周りには焦げたボールの残骸が幾つか転がっていた。

お次に椎さん。
これは屋外でトレーニングをしていた。
『心で感じるんだ！』とか叫ぶ監督らしい教師を無視して、各々空気を意識的に動かそうと試行錯誤していた。
元ある風は強めたり弱めたりすることの方が比較的簡単だそうで、だから屋外でやっているのだと誰にも相手にされていない熱血教師が語っていた。

さて、それからクシロ。
かなり大型の本格的な施設。強影念力（サイコキネンシス）を筆頭にする超能力（ＰＫ）の大御所なんだから当然なのかもしれない。
彼は中部屋と呼ばれている、小部屋より大き目の広域念力用訓練場に居た。

その部屋は外から見れるように壁の1面が防弾ガラスになっていて、特に手のかかりそうな新米生徒には先輩達がつく。
クシロも当然その1人で、目つきの鋭い黒髪美人の女生徒がその様子を見守っていた。
今は『特定対象物に念力を集中させる訓練』をしているらしく、部屋の中央に置かれたフェルトでツギハギに作られた熊の人形が置かれている。
これを浮かせろということだろう。焦点を合わせやすいように人形に向かって両手をかざしているクシロ。
しばらくして、人形は浮き出した。少しずつ、少しずつ上昇し、不安定ながら空を舞い、そして、
――――木っ端微塵に吹き飛んだ。
中の綿は四散、フェルトは細切れになって床に墜落。跡形もない。
「これで8つ目・・・」
・・・8回目の殺人形らしい。
クシロはひざまずいてうな垂れていた。

この後は知っているクラスメートの分を全て回ってしまったため、することがなくなって再び校舎に帰ってきた。
購買部の近くにある自販機で缶ジュースのロイヤルゼリーミルクティを購入、目的もなく彷徨う。
別にこのまま帰ってもよいのだし、バイトにはまだ時間があるし、
・・・・・バイト?
シュミレーション。
午後5時、いつものように駅前の蕎麦屋『楽気苑(らくきえん)』に到着。
木格子を引いて和風美で落ち着いた店内に入る。
「織神入りまーす」
そういいつつ、スタッフ・オンリーな空間に進む僕。
さて、そこに居た店長の渋い親父さんはこう言うに違いない。

「お譲ちゃん誰？」
・・・シュミレーション終了。
「・・・・・あ〝ー」
思わず頭を抱えてしゃがみこんでしまった。
学校のクラスメートと違って、幾ら特別都市内といっても店までが特殊なわけではない。
火を出すお客が居ても慌てない程度の心積もりはあるだろうけれど、いきなりバイトが女子になっている時の対応ができてるとは思えない。
超能力とはまた別の類の非現実だし。
・・・カイナにでも事前に説明してもらおうかな。大人の方が説得力があるし。
「はづちゃーん、女の子がそんなしゃがみ方しちゃだめなんだぜー、パンツ丸見えー」
うーんと真剣に悩んでいた僕に正面から誰かが声をかけてきた。
いや、口調から美樹さん以外の人が思い当たらないんだけれどね。
立ち上がって、ずれたスカートを元の位置に直す。
うん、今度から注意しないと。
「美樹さん？珍しいねー、動いてるなんて」
「ちょい待ち。それじゃー私がナマケモノみたいじゃないのさー」
心配しなくてもそう言ってるんだよ。学校で彼女が自発的に動いているところって見たことがない気がする。
「ナマケモノって結構泳ぐの上手いんだよー、あれで結構ナイスアニマルなのさ」
じゃあいいんじゃないかな、ナマケモノで。というかナイスアニマルって何だろう。
「・・・そうだ、美樹さん。美樹さんは何やってたの？能力訓練じゃないよね・・・？」
あむ、と彼女は特異な肯き方をした。
「クラブの方の部室も今は使えないからさー、校長室で校長の子守

をねー、してた」
　校長の子守、つまりゲームの相手か・・・教頭に引き渡した後、何とか逃げおおせたらしい。
　そして何で美樹さんは学校に来てまでゲームをしてるんだか。２次測定が終わっているなら帰ればいいのに。
・・・あぁ、僕もか。
「ビオサイドって言うゲームなんだけどさー、はづちゃん知ってる？」
・・・よりによってなんでそのゲームなんだろ？流行ってるのかな・・・クシロも好きなんだよなぁ、あれ。僕もポータブル版は持ってるけど。
「知ってるし、持ってるよ」
「へぇー、はづちゃんあんまりゲームとかしないイメージあるんだけどなー。
・・・それはそうと、あれは何で主人公女の子が追われてるの？途中（コンティニュ）からだったから分からなかったんだけどさー」
　知らないであれをやったのか・・・それは面白くないんじゃないだろうか？あれは設定から入る感じのゲームだし。
「美樹さん、ビオサイドの意味って分かる？」
「んー、聞いたことないねぇ・・・」
「まぁ造語だしね。Ｂｉｏ（バイオ）－と－ｃｉｄｅ（サイド）を併せた言葉なんだよ、あれは。
　バイオは分かるでしょ、でサイドはＧｅｎｏｃｉｄｅとかＨｏｍｉｃｉｄｅとか・・・Ｓｕｉｃｉｄｅもかな。虐殺とか殺人といった意味があるんだけどさ」
「・・・生命虐殺？」
「うん。『とある研究所から逃げ出した最強のウィルス兵器を体内に寄生させた少女になって、地球上の生物を絶滅させろ』っていうのがコンセプトでね・・・・・。
　プレイヤーは世界各国の捜査機関から逃げながら、ウィルスをば

ら撒いていくっていうゲーム」
「はぁー、だから歩く度に人が倒れたり、重装備の軍団が襲ってきたりしたわけなんだねー」
ちなみに、ウィルスも生殖活動でうつる段階からゲームの条件で変異を繰り返して、接触感染、空気感染とレベルアップしていくという凝りようだ。
いや、それをいったら、防犯カメラやら感染の拡大範囲からゲームの方が判断して、プレイヤーを追い込む様も異常なリアリティーがある。
ワクチンを開発されたり、新ウィルスを作り出したりというイタチゴッコまで再現してるし、バイオハザードによる住民の避難活動まであるし、移動手段も自転車から飛行機まで何でもありだ。
航空機関はチェックが厳しいので利用が難しいとか、武器も普通では買えないのであらゆる手段を用いて奪取しなければならないとか、少女の腕力、体力がかなりシビアだとか・・・とにかく凝り過ぎだと思う。
いかに捜査網をくぐりぬけてウィルスをばら撒くかが勝負の決め手となるのだ。
「３Ｄでリアルなんだけどさー、あんまりバイオハザードっぽくはなかったよ?ゾンビとかああいう気持ち悪いのは出なかったしー」
「あくまでウィルス散布が目的のゲームだから。だけど暴力的な描写があるし、生殖ネタがあるから思いっきり年齢制限されてるはず・・・」
校長、年齢の満たない生徒になんて物やらせてるんですか。
「オンライン版はランダムで１人ないし５人ぐらいが少女役・・・少年もあるんだけど、それをやって、他のプレイヤーは捜索側になるんだよね。クシロも１回主人公側になったことがあったけど。
防犯カメラ、衛生映像を精査したり、直接捕まえたりと自由に行動できたり・・・」
「あー、じゃあ私のやったのそれだ。衛星映像ってあれ、特権ない

と使えないじゃーん」
「そりゃあ、現実に僕達が見れないのと同じだからね・・・シビアなんだよ。ハッキングするとか、所有者と繋がったりしないといけないから」
ゲーム開始の捜索側の身分はやはりランダムで決まる。それも世界中のどこかの街だというのだから、ゲーム世界の膨大さを思い知らされることになる。
「日本に居たら銃も買えなし、未成年だと親に色々妨害させるんでしょー？」
「そのままただの被害者になることも少なくないしね・・・いつの間にかウィルスが感染してて」
ゲームの難易度がプレイヤーによってまるで違うところが、面白いと言えば面白いのだけど。
「みくちゃんは何でああいうゲームが好きなのかなー？」
「さぁ・・・？僕はゲーム酔いするからあんまりできなんだけどねぇ・・・・・」
「うっ・・・！あぁー、そうだったー」
いきなり口を押さえる美樹さん。
「・・・どうしたの？」
「いやー、思い出したんだけどさー、ゲームで気分が悪くなったんで何か飲もうと購買行くところだったんだよねー」
よく忘れらたなぁ、それを。物事を1つずつしか考えられないタイプなのだろうか？
そして思い出した瞬間に吐き気も戻ってきたと。
「早く行ってきなさい」
「そうだね・・・それじゃあ、早いところ炭酸を補給しに・・・」
トイレにだよ。しかも何で炭酸・・・？症状悪化しか見込めないと思うんだけど。
「でもその前にー」
「？」

彼女は僕のおでこに口元に持っていった掌を置いた。
目を瞑りむぅっと口を尖らせる。
そして、
「みょみょみょ～ん」
奇声を吐いた。
「・・・・・・」
あー、どうやって対処すればいいのかな？さすがにこの調子（ペース）にはついていけない。
「何がしたいの？」
「やー、私の能力って原始素能（ホワイトノート）なんだから、はづちゃんの形骸変容（メタモルフォーゼ）もコピーできるのかなってねー」
そう易々と複写できるような能力が希少能力（レア・スキル）であるわけがないし、そもそも原始素能（ホワイトノート）は厳密には複写能力じゃないのだよ。
というか、コピーの仕方がみょみょみょん・・・？
「そうか・・・接触の仕方がディ――プじゃないんだ」
関係ないよ。
そう即答しようと口を開こうとした僕は肩をがしっと掴まれた。
そしていきなり引き寄せられる。
目の前には美樹さんの、顔が。
「――――ッ！」
ぶちゅりという擬音がつきそうな接触。
彼女の唇と僕の唇がくっつきそうなところで手に阻まれていた。
あっぶな！とっさに手を出して正解だった！
ものすごく寒々しい服装をしているのに汗が噴出している。冷や汗で肌がべたべただ。
緊張が切れて、体中の力が抜けた。
――――ベロリ
「～～～～っ！」
今度は美樹さんが、密着していた掌を嘗めた。
肩の腕を振りほどいて、何とか離脱する。

「何てことをしてくれるのさっ！」
「ふふーん?なるほどー、本当にこういうのにはまるで免疫がないんだねー」
うわぁ・・・何かすごく悪戯っ子の顔だ・・・。いつも寝ぼけたような表情をしてる分、余計に怖い。
「うぅーん、ディープな接触が鍵・・・・・・うぅっぷ・・・うえ、気持ち悪い・・・・」
「とっととトイレに逝け！」
というか、その吐きそうな口でディープキスをするつもりだったのか。
なんて恐ろしい人なんだろう。

#

それでもまだしつこく購買部に炭酸飲料を買いに行こうとする美樹さんをトイレに放り込んで、彼女の『本当に』という言葉を思い出してカイナがそれまで情報漏洩させたことに気づいて報復に行き、ついでにバイト先に連絡させた。
その帰り道に、やっと、『あぁー、美樹さんに今後どうするつもりなのか訊くの忘れた！』と気づいたり。
・・・・・本当に色々なことがあった一日だった。

第2話－　能力日和。－Ｃｌｏｔｈｅｓ－（後書き）

相変わらず、時間推移の遅い小説ですみません。
この前の話と合わせてやっと1日分・・・。
この話は葉月のクラスメート達の能力にスポットライトを当ててみようかなと思って書きました。
どうなんだろ・・・結局あんまり詳しくは説明してませんね。
『能力発現編』はこれで終わった感じなので、次からちょっと場面やら時間やらが飛ぶ予定です。
美樹が微妙に暴走してきた気がします。大筋はちゃんと考えてるものの、細かいところで私を裏切ってくれるので楽しいです。

・・・Ｂｉｏｃｉｄｅ、あったらやってみたいなぁこういうゲーム。

第3話－　定期考査。－the Circumference－

2次測定及び訓練期間が終了してから、2週間が経った。
疾風怒濤、神速といった言葉がこれほどまでに似合わない日々はなかったと思う。
貰った衣服と一緒にたたんでおいた制服をハンガーに掛けようと取り出したら、いつの間にかズボンがスカートにすり替わっていたので、紙袋をいじくれる時間があったカイナを殴った。
家に帰るとクローゼットに入っていた男物の衣服が全てなくなっていて、代わりに女物の服が増えていたので、アパートの合鍵を持っている唯一の人物であるクシロを殴った。
メリケンサックが欲しい今日この頃だ。いや、拳を硬化すればいいんだけど。
校長室の本棚の後ろから不健全極まりないゲームが見つかったり、家庭科の時間に九鈴さんが包丁を柄を握ったまま走って前のりにこけるという惨事を起こしたり、バイト先にクシロやカイナがからかいにやってきたり・・・・・とにかくせわしなく日々が過ぎていった。
充実しているからこそ、時は早く過ぎるという人もいるけれど、どっちかとうと僕はやることがある時の方がゆっくりと感じる。
することもないと日々はまるで味気なく終わってしまうから。
ああ、嫌なことは長く感じるっていうのもあるかもしれない。
「がー、終わらん！」
タカが金髪を掻きむしってそんなことを言っている。
もうすぐ、定期考査なのだ。
僕及びクシロとタカは、クシロの居住にて勉強会を開いていたりする。
提案は当然タカ。僕もクシロもテストの度に集中的に勉強をしなければならないほど、日頃怠けてはいない。

今この空間で勉強らしい勉強をしているのはタカだけだ。
初めの数日は教科書やノートを見直していたクシロも、今やゲームに没頭しているし、僕は能力訓練に勤しんでいる。
僕の周りには南京錠が散乱している。どれもこれもロックが掛けられた状態で、どこにも鍵はない。
付属していた2つずつの鍵は全部捨ててしまった。
開けれなくなった錠を、指を変化と硬化して解除するというのが今の僕のトレーニングメニューとなっているのだ。
最初は時間がかかっていたこの作業も今では5秒もあれば十分こなせるようになった。
かちりと開けてはかちんと閉めるという繰り返し。この単純作業にも飽きてきたから、そろそろ次の方法を考えないといけない。
形だけの変容には慣れてしまったので、次は少し複雑な組織系を作ってみたいな。
葉緑体を擬似構成して指で光合成なんてどうだろう?ほぼ無意味なところがポイント。
「あー、がーーーっ」
再び唸り声を上げるタカ。
今彼がやっているのは歴史の暗記だ。
考査の範囲を見直すだけでもかなりの時間がかかる。それも、1度も見直していなかった人間には特に。
範囲内からしか出ないのだから、もっとも点の取りやすい科目なのだけど、やってないからこんな目に合うんだ。
「見直しただけじゃあ意味ないんだよー」
「あと理科と国語も暗記だしさ、ほとんど」
合理主義万歳な僕ら2人は助けない。
他人事だし、自業自得だし、人の不幸は見てる分には面白いものだしね。
「「まぁ、がんばれ」」
ということで、各々自由にくつろいでいる。

時折タカの質問に答えつつ、時価２０億以上という贅沢極まりない空間でのんびりまったりするというのは本当に快適だ。

僕らの居るのは比較的片付いた小部屋。デスクトップパソコンが2台が並んで構えられ、その背面には本棚がある。中央になぜかちゃぶ台、その上に電気ポットという生活観バリバリで見た目は格好のつかない。

と言っても他の部屋には、以上に整頓されたデザイン重視な部屋もあるし、パソコン部屋と言われる部屋にはワークステーションやらなんやら、いらないに違いないハイスペックな機器が雑多として置かれていたりする。

それを使ってビオサイドなどのオンラインゲームをプレイしているらしい。

ここにあるパソコンではどうも快適に扱えないようで、なら1番スペックのいい1つにしろと言いたいのだけど、僕自身よく借りるのでないと困る。

快適なネット環境の恩恵は大きいものなのだ。

『お金が回れば人が踊る』、『明日に向かって二歩後退』、『The Quest for B－ni－K』、『死した屍喰らう者あり』etc，etc.・・・・・・

ピッキング訓練にも飽きて本棚を探ってみると、こんな題名の書物が倒れたり横にもたれかかったりしながら並んでいた。

うん。読むのは諦めよう。

B－ni－Kが何なのかは気になるところなんだけど。

・・・・・暇だ。

今日はバイトが入っているのだけど、それも午後の遅い時間帯からだ。定期考査で授業が午前で終わるこの期間には空白が多すぎる。

いっそのことこの期間だけ午後すぐから毎日入れてもらおうか・・・？でも、親父さんは頑固なんだよなぁ・・・。中学生らしく勉学に励めと言うに決まってる。というか、定期考査で時間が余ってるからシフト入れてくださいなんて絶対言えない。

結局この日は、何をすべきか？ということを考えることだけで終わってしまった。

■

――――白布に包(くる)まり、天井を見つめる空ろ。

変化とは、全くもって理不尽を振り回して全てを変えてくれる。
周りも、内も、意識できる範囲も、意識できない範囲も混ぜこぜに。
それを望んでみた僕の結果はどうだろうか？

女として扱うヒトビト。
女として動くヒトガタ。
女として経つニチジョウ。
女として廻るセカイ。

日常(イママデ)との差異。変化を知る瞬間。
それは恍惚。悦びの快楽。
飽くなき日々を送るための因子。
それは刹那的に生きる僕の趣味。
日々に散りばめられた宝石をただ鑑賞するという生き方。

布衣菜誉(ふいなほまれ)曰くの『終着越境』。
朝空風々（あさぞらふふう）曰くの『死後過動(プロトタイプ)』。
自嘲試作品曰くの『馬鹿野郎の愚か者』。
万可統一機構(ばんかとういつきこう)曰くの『折り紙の８月』。

とかく、僕の様を感想する彼らは僕をそう称するけれど。
まぁ、どうでもイイコト。

問題は、僕が楽しいかどうか、それに尽きるのだから。
願わくは、幸せがそのまま終わりまで続きますように。
・・・・・いつ、終わってもいいですから。

――――だらりとベッドからはみ出していた腕にかろうじて入っていた力は抜け、指からすり抜ける。

書類の束が床に散らばった。
どれもこれもさほど関心の寄せられない物達。
『性別変化による戸籍変更の告知』。
性別欄の男女両方に丸が付けられるという可笑しな戸籍の複写物が同封されていた。
『証明書類の改竄報告』。
学生証明証他、性別欄に男性とチェックされた書類全ての変更を告知。
遠隔写真での写真像の変更も終了済みとのこと。
無骨で、オブラートに包みもしない非現実的な書類だ。
ここ数週間でこんなことを完了させられたということは、前の形骸（メタモル）変容（フォーゼ）の時に同じような作業をしているからだろう。
最後に、何の変哲もない手紙1つ。
白で、セロハンで封をしてあるというゲテモノ。
あて先も差出人の名前もない。
『この度、お前が形骸変容（メタモルフォーゼ）の能力者として登録されたことを歓喜する。また、不審な行動を取った場合のお前周辺にかかる被害を考えた行動取ることを祈る。』
逃げるな、抗うな。服従しろ。
誰が書いたのかなんて分かりきっている。僕に『織神』の苗字を与えた岩男。
わざわざこんなものを直筆で書いてくるあたり、思っていたよりお人よしな一面があるのかもしれない。

そんなことは分かりきっている。
そもそも、この僕にそんな発想があるわけがないのにね。
――――笑い声が漏れた。

／

「ぎゃ――――、ぁあぁぁぁあああっ！」
タカが叫ぶ。
「「うるさい」」
間髪いれずに切り捨てる僕ら。
遂に明日から中学生活初めての記念的な定期考査が始まる。
初日の割り当ては、理科、歴史、家庭科。
全て暗記のオンパレードである。
追い込みに賭けている生徒への悪意としか思えない選択だ。嫌がらせか。
まぁ、僕には関係ないんだけど、タカがねぇ・・・。
「配膳の配置が覚えれねぇ・・・」
「家庭科は諦めて理科でもやった方がいいと思うが？」
「あるいは理科と歴史を諦めて、副教科オールコンプリート」
もうこんなやり取りにも慣れてしまった。
というかタカ、もう諦めろ。現在時刻１０時半。僕的にはそろそろ眠い。
今日は追い込みということで、僕らはクシロの号室に泊まる算段になっているのだが、タカは今日眠るつもりはないらしい。
僕としてはそろそろお風呂にでも入ってそのまま寝てしまおうかと考えている。
「良い子はそろそろ寝る時間なんだけどな・・・」
「そうか、葉月。じゃあお前に睡眠時間は存在しねぇ」
「へぇ・・そう。・・・そんなに眠気対策に協力して欲しい？」

主に激痛と鈍痛とで。
眠気に打ち勝つために、カッターナイフで手の甲を切りつけた人物の武勇伝を準えるのはどうかな。
「ふふん、何だ？コーヒーでも入れてくれるのか？」
おおぅ。今日のタカは絡むなぁ。
反撃されたら返さなければいけない。
「別にいいよ？無糖ブラック、ただしニッキでブレンド」
「・・・ニッキ・・・・・・」
「カップの半分も入れれば昏倒するはず」
地味だなぁ・・・と苦笑いするタカ。
む。何か馬鹿にされた気がする。
ニッキって結構苦いんだぞ。たぶん勉強する気も失せると思う。
というか気分を害すね。
僕は大嫌いだ。和菓子に大量に入っているものを知らずに食べて酷い目にあったことがあるから。
あ、でもニッキなんてここのキッチンにないか。
クシロも自炊はしてるけど、そもそもニッキを必要とする家庭料理ってなんだろ？
・・・・・どうでもいいか。
さて、くだらない話をするのも切り上げて、入浴にしよう。
僕は学生鞄から大き目の巾着袋を取り出して立ち上がった。
この居住空間にはユニットバスが複数存在する。
どれも同じ造りなのだけど、それも当然。今更ながら観察してみると、クシロの根城は同フロアの複数の号室を壁を破って無理やり繋げたものだからだ。
そりゃあ２０億超えるわけだ。号室１室で５０００万以上・・・だと思うけど、それに改築費が追加されるんだから。
壁を壊して、繋げて、その上色々と改装もしてるみたいだし。
だから、この巨大住居空間にはお風呂もトイレもキッチンも複数個存在する。

その内、いつも使われている洗面所に進みドアを閉めた。
袋を開けて先に中身を出しておく。
代えの着替えとしてのジャージと普通のブラジャー、それからドロワーズのショーツ。
・・・・・この点に関して言えば、美樹さんに感謝している。
まるで着慣れない下着群の中で唯一何とか馴染めそうなのがドロワーズだった。
足の付け根の違和感がなくって本当に助かった。
これが1番感触的にまともだと知った日の内に、僕はこのタイプの下着を買い漁る羽目になっている。
どうしても夜だけはストレスを感じずに安らぎたいものである。
服を脱いで、僕は風呂場に足をつけた。

／

僕の周りで変わったことの1つ、バイト。
今で厨房でネギを切ったり、麺を茹でたり、天ぷらの衣を付けたりという仕事をしていたのが一転。接客に変わってしまった。
笑顔で接客。できないこともないけれど、やり慣れないところがある。
というか親父さん、それで集客率アップとか思ってませんよね？・・・よね？
・・・・・とにかくバイト代が上がった。
いやいやいや、そもそも僕を含めて4人しかバイトがいないのに、3人接客に回してどうするんですか。
他の2人だって料理が真面目にできない人たちなので、交代というわけにもなかなかいかないというのに。
1人厨房に残されたフリーターな兄貴の忙しさが倍増した気がする。
つまり、機嫌が悪い。

「生3つ入りまーす」
居酒屋でもないのに、夜に差し掛かると酒をあおる客が結構来るこの店。
酔っ払って、店員にからむこともある会社帰りのサラリーマン達。
色々とよろしくないと、僕は、特に女子になってからバイトの時間帯が短縮させられた。
その分バイト代を上げてくれたんだろうけど。
親父さん、子供に甘いのだ。
で、当然そのしわ寄せはフリーな青年に降りかかる。
やはり、機嫌が悪い。
もはややりなれている蕎麦打ちを恐ろしい音を響かせながら、ストレスを麺生地で発散させている。
そもそも麺打ちや麺切り作業なんてものは、修練に時間がかかって然るべきもので、そこから彼のここでのバイト暦が長いことを物語っているわけで・・・・・・・。
いっそここで正式に働いたらどうかと。
「機嫌悪そうですね・・・」
長めの金髪に隠された鋭い目で睨まれた。
元々目つきが悪いんだけど、不機嫌になると本当に怖い人だ。
まぁ、悪い人じゃないんだけど。
「ああ？いいと思うかよ、おい」
分かっているんだけどね・・・？
黙ってる方が気まずいから。
「あの親父・・・何考えてるんだ？ただでさえ少ない厨房を減らしやがって・・・。
お前がこなしてた作業分、回せるわけがないのにな」
真面目にやってただけ、うってぇ・・・と彼は言う。
それは褒め言葉ですかね。いや、嬉しいんですけどね？
「しかもお前が接客に行ってから客が増えやがったし・・・」
「いや、そんな変わるものじゃないでしょ」

自惚れ以前に、そもそも話題になること自体ないし。
別にマスコットや看板娘であるわけでない上に、容姿の良し悪しなんて人それぞれじゃないだろうか？
確かに僕好みではあるのだけど。
というか、他人に言われるのは照れるんでやめてください。
「そんなわけないでしょう」
そう答えると、彼はじとっと僕の顔を見て、
「・・・あの角にいる大学生」
失礼にも客に指を刺した。
「はい・・・？」
「俺の後輩でな、この間俺の様子見だとか言って来てお前を見つけてな。
『幼さを残した風貌、振る舞いに、熟れ始めた体つきがストラ――――イクッ！！！』とか言って・・・」
「・・・・・」
「少女偏愛者（どうるい）に携帯で撮ったお前の写真を送りまくってたんだが」
待て。
「・・・そこまで見ててなんで止めてくれなかったんですか？」
「とにかく、その情報が色んな所に飛び交って、興味を持った情欲旺盛な奴らがこの店に集まっていたりするわけだ」
それは知りたくなかった・・・・・・。
「・・・あの、本気で外1人で歩くのやめた方がいいですかね？」
「絶対止めとけ。俺も釘は刺しといたけどな。
・・・・・・で話を戻すが、即効の集客力だろ、お前」
嫌な具体例を挙げられてしまった。
心の底から否定したいんだけど、その言葉がない。
「僕って『幼さ残る二次成長真っ只中の少女』に見えるんですかね」
「ある程度体が育ってる分だけ、普通の男の情欲対象にも入るだろうけどな」
「その情欲っていうの止めてください。生々しいです」

「生々しい方がいいだろ。危機感が抱ける」
まぁ、この通り優しい人なのだ。口は悪いけど他人のことを心配してくれるし。
ただ、
「先輩、女の子にもてないでしょ」
ぴたりと止まる彼の肩。
「ほほー、女になって数週間のヤツが女心を語るか、こら」
あ、何か地雷踏んだっぽい。あれか、図星なのか。
「いえ、すごく真面目に作意なくそうやって気遣ってくれるのは嬉しいんですけど、自分も含めて男は危ねぇ・・・とか言っちゃうタイプでしょ先輩。
女の子にすごく頼りになる、最高の友人って言われてそれ以上になれないような気がして・・・・・」
無言。その後、蕎麦を切っていたその手を止めて、僕の頭を万力締めした。
「イタッ、ちょっ痛い！痛いってばっ！！先輩！」

／

初日の考査が終り、その夜。
テスト勉強が期末考査準備期間だけだろうと思っていたらしく、今日の朝までに力を出し尽くしたらしいタカは、1日分終えても明日の分の勉強をその日にしなくてはならないという事実に今更ながら気づき沈没していた。
ちゃぶ台にノートを広げ、それに突っ伏しているタカ。
「暗記科目は今日で終わっちゃったんだから、後は実力だよ。やる量自体は少ないでしょ？」
「葉月、隆の場合はな、覚えれば確実に点の取れる暗記に集中しすぎて、数学や英語なんかの練習が出来てないんだよ」
日ごろからの学習をやっていないのは例のとおりだろうし。

もう諦めたらどうだろうか？
「別に点を取る必要もないんじゃないかな？」
「５０点以下が１つでもあったら小遣い止められるんだよな」
バイトで稼げ。ああ、ちょうどうちの蕎麦屋は人手不足だし。もしそうなったら誘おう。
そしたら、厨房２人が金髪強面の殺伐とした蕎麦屋になるなぁ・・・。
「昨日徹夜しちゃってるから、今日は寝た方いいと思うけどね」
「効率落ちるし、何より本番もたないだろうな」
しかし、タカは顔を紙面から上げて、再びシャーペンを握った。
「やるなら最後まで・・・」
やるっていうのは徹夜のことだろうか？
人は２日寝ずに過ごすと幻覚幻聴に遭うらしいんだけどなぁ。
実際そんな実験をしようとした人にも驚きを隠せない情報だ。あれって本当なのだろうか。
「あれ、あれだ・・・何か効きそうな栄養ドリンクがあったろ？」
「『こんばんは不死身君』か？あれは止めといた方がいいと思うよ。倒れるのが１日延期になるだけだから」
そんな物を置いて何をやってるんだ、クシロ。
その捨て身アイテムの使いどころがいまいち分からないんだけど。
まぁ、いいか。僕には関係ないし。
「じゃ、僕寝るから」
基本夜型の２人を置いて僕は寝室に向かう。
この寝室というのは、ここにおいての僕の寝室だ。
余り過ぎている部屋の１つにベッドを入れただけのものだけれど、そもそも他人の家に普通そんなものはない。
頻繁に僕がここに出入りして、その上泊まっていくために用意されたもの。
うん、依存してるなぁ、僕。
「チクショウめ・・・」

タカが恨めしそうに、羨ましそうに呟くのを無視して僕は部屋を出た。

／

黒いジャージをぶかぶかと着崩した葉月が、本当に眠そうにしながら部屋を出て行くのを見送って、俺は改めてちゃぶ台に突っ伏している隆の方に向いた。

「で、どうするの、隆は？」

「まだやるぞー、せめてマジで意識が飛びそうになるまでは粘る・・・」

そんなことを言って、結局午前3時頃になると逆に眠気がこなくなって結局徹夜になりそうだ。

眠気って不思議だよなぁ。何である程度時間が過ぎると、一気になくなるんだろう。

さて、それは置いといて、何で隆はこうなるまで勉強しないのだろうか？

能力開発の授業や作業がある分、学校本来の勉強まで満ち足りてはできないことは前々からわかっていたことだ。

ただでさえ、授業内容が進んでない分の範囲を自主学習で終えなければならないのに。

「まぁ、同情できないんだよねぇ・・・」

「冷たいな、おい。・・・ドリンクくれ、ドリンク」

だからあれはお勧めできないんだよな。

寝るの忘れるぐらい脳は活性するんだけど、後になって疲れを思い出す感じで、どっと疲労が来るから。

長期戦には逆効果だということは、自身の身で実証済みだ。

まぁ、持って来てやるか。

これで倒れても知らん。

俺は座っていた腰掛椅子から立ち上がる。

「あっ、そうそう」
と、タカがそれを引き止めた。
「ん？」
「葉月のヤツ、まるで変わった様子がねぇよなぁ」
「あー、でも少しは変わってるんじゃないか？・・・微妙に」
自信はないが。
いや、取っ掛かりができた気はする。
一応羞恥心らしきものを覗かせてるところがあるし。まぁ、カイナに訊いた話だが。
「そんないきなり、劇的に変わるものでもないし。きっかけぐらいになれば申し分ないだろ？」
「矢崎も言ってたな・・・。『織神の愛護会を作ろうぜ！』ともほざいてたが」
「ほざいてたな。あれは1度駆逐しないとだめだろう」
とりあえず葉月に変な知識を植えつけないように。
あいつは変なところで純心だから。
でも、葉月の色々のリアクションを楽しむ日常も悪くはない。
今までではありえないことだし、新鮮みがある。
もっとも、向こうも同じようなことを考えているのだろうが。
それに矢崎の提案は悪くはない話だった。
俺がそれを受け入れるのを確信してて話を持ってきた節はあるが。
・・・・・願わくは、葉月には普通の女の子のように過ごしてほしい。
別に男子でも構わないし、そこら辺は無関係だ。とにかく、普通であってほしい。
そのためにも、
「・・・矢崎が葉月に変なことをしたりさせたりしたら、即排除しないとなぁ・・・」
「まぁ、あいつもそこまで悪意はないだろ。蹴られて悶えてたのはどうかと思うけどな」

だなー、と雑音の少ない部屋の中で声を合わせた。
この部屋、というより住まい、広いのはいいのだが静か過ぎる。
1人で住む所じゃないと最近になって悟った。
馬鹿をやったなと今更後悔。反省はしていない。
夏祭りの花火大会を1人占めできるのもいいし。
「あと」
隆は言葉を続ける。
その後の言葉は俺の精神を直撃した。
「何の懸念もなく親しいとはいえ、男子と一夜過ごすようなところも直さないとな」
・・・・・・。
心の中で頭を抱えて、しゃがみ込みながら同意する。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・だよな」
本当に、それはどうしよう。

／

定期考査最終日の午後。
バイトが終わった帰り道、5月と言えども日暮れは早く、寂れた夜道を歩いていた。
店内での熱した視線は今はなく、アパートはもうすぐ先。
今日も何もなく終わったと、妙な安心感。
しかし少し足を速めてアパートの階段に急ぐその先に、人影を認めた。
襟も袖もフードも、淵々にモフモフと獣毛がついたフェザーのダウンコート。
ビンテージらしい分厚そうなジーンズ。
外されたフードから覗くのは、染めたらしい三つ編みの茶髪と左目の白い眼帯。
この季節にありえない、そんな格好。

右目は挑戦的な強さがあり、その口は愉快そうに歪んでいる。
どうしようもない不審物。何が目的なのか掴みかねる。
僕はその横を何もないように通り抜けようとして、
「おいおいおい、それは酷いんじゃないの？」
やはりというべきか――――声をかけられた。
思った以上に高い声。とぼけるような音調。
仕方なく立ち止まり、どちら様か分からないその不審者に振り向く。
「こんにちは、『馬鹿野郎の愚か者』」
その少女はそんな言葉を吐いた。

第3話－　定期考査。－ｔｈｅ　Ｃｉｒｃｕｍｆｅｒｅｎｃｅ－（後書き）

次回、少し波風が立つような感じがしますが、どうなんでしょう？

ほんの・・・ほんの少しだけ超能力バトルっぽくなる気もします。

戦闘シーンを書きたくて仕方ない今日この頃。

でも、そういうのはまだ先の話なので、私が我慢できなくなりそうです・・・。

あ、次回は少し早く更新できるかなぁ・・・。

感想、心からお待ちしています！

第４話－　心理戦。－ＥＳＰ－

「こんにちは、『馬鹿野郎の愚か者』」
もしそれが侮辱の言葉であるのなら、初対面で随分な人だろう。
あるいはそれが僕の名称としてなら、初対面で何故それを知っているのか？
それは自嘲試作品（プロトタイプ）の呼び方だ。
僕は人の名前と顔を合致できない人間だけど、役割と顔ぐらいは覚えていられる。
彼女は『僕を馬鹿野郎の愚か者と呼ぶ』役割にいなし、顔にも覚えがない。
初対面、のはずだ。
それに自嘲試作品（プロトタイプ）は男だし。
「こんばんは、だと思うけどね」
僕はとりあえず、投げやりに答えてみた。
気分的には、早くシャワーを浴びて寝てしまいたい。
先日までクシロの家に入り浸っていたから、生活リズムがずれているし、洗濯物とかも溜まっている。
それに知り合いでもない不審者に、呼び止められていい気はしない。
「いいのよ。周りが見えるほど明るければ、昼でしょ？
人は明るく活動できる時刻を昼と、暗く活動できない時刻を夜と呼んだのよ」
わざと間違えているらしい。確かに、こんにち活動できないほどの暗闇（よる）はないけれど。
この人は、あまり相手にしないほ方がいい気がする。
人をからかうことが大好きそうな顔をしている。・・・僕と同じで。
僕が無言でそれ以上喋る気がないのを察したのだろう、彼女は再

び口を開いた。
「私の名前は御籤唯詠（みくじひとよみ）って言うんだけどさ。ああ、ひとよみっていうの唯一の”唯”に月詠の”詠”ね。
もっとも、これも当て字で本当は１４３で一四三（ひとよみ）なんだけど。
あー、こっちで行った方が早いか。・・・ＥＳＰ追究研究所出身の、君曰くの自嘲試作品（プロトタイプ）御籤一三八（みくじかずみや）の後継機（こうはい）よ」
・・・・・。自分のことを嘲って試作品（プロトタイプ）と読んだあの青年の名前が御籤和美（みくじかずみや）也だったかどうかいまいち確信を持てない。
ただ、ＥＳＰ追究研究所というのは聞いたことがある。
超能力研究の初期に設立された、Ｅｘｔｒａ Ｓｅｎｓｏｒｙ Ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ、つまり超感覚的知覚の研究に特化した特殊研究所。
テレパシー、予知、未来視、千里眼の類を追究しきったその先を求めるという異色過ぎるタイプの施設だったはずだ。
「あれ？一三八（かずみや）がそこ出身って言うのは知らなかったのね。
まーぁ、いいか。あれよ、あれ。私は現界把握に最も近いと言われてるんだけど・・・・・・」
・・・”げんかいはあく”と言うのは、限界把握という字で合っているのだろうか？
そんな言葉は聞いた事がない。
彼女の言いようからＥＳＰ最高等級の能力なんだろうな、たぶん。
そう思って、たぶんそれが顔に出たのだろう。
「うっわぁ・・・本当酷いな、君は。少しは構ってほしいものなんだけど？」
彼女はまるで傷ついた風もなくそう言った。
ふざけてるようにしか見えないのだから仕方ない。大体、彼女との出会いが僕にとってプラスになる気がしないし。
彼女と自嘲試作品（プロトタイプ）との話で盛り上がるとも思えないんだよね。
というか、僕は薄情にも彼のことをあんまり覚えてなかったりする。

そんな僕の心境を無視して、しかし彼女はそこでこほんと咳払いをした。
話の流れを区切るという、合図。
途端、先ほどまでの、彼女の悪戯染みた雰囲気は消え失せた。
しん、と夜が鳴る。
「・・・・・『動き揺らめく心情を盗み聞き、過去に遺(のこ)る思念を掠め取れ。ありとあらゆる情報(モノゴト)を掻き集め、今ある全てにて過去の因果と未来の起因を知れ』。
私の飼い主の言葉だよ、織神葉月。
現(うつつ)の世界の全てを把握する者。それが現界把握」
ソレはにやりと嗤って、僕の目を見た。
「人を”ソレ”扱いは酷いよ」
何事もなかったように、何気なく言葉を放つソレ。
「『考えてみれば、ＥＳＰ系最強を名乗るのだから読心術ができないわけもない』」
ソレは人の心を代弁した。
ソレは一体何でここにいるのだろう？
「君がどれだけ馬鹿野郎の愚か者なのか見に来たんだよ」
ソレは答えるがその回答が
「『どこまで本心なのかは分からない』」
人の本心は傍受するくせに
「『自分は不気味に笑ってるだけ。
で、あのファッションは何なのだろう？』」
自分が答えろ。
「別に？こうやってる方が色々と便利なだけよ」
どこまで本心なのだか。でも、
「『どうでもいいか。とりあえず早く寝たい』」
・・・・・。
本当にどうでもいいけど、
「「なんて不愉快な人なんだろう」」

微塵のずれもなく、声が重なる。
言葉を投げかける側と受ける側の声が揃うという矛盾。
時間の無駄だから、早く本題に入ってもらいたい。
「だからさ、私は君がどれほど馬鹿野郎の愚か者なのか知りたいだけよ」
「その蔑称らしき名前の由来なんてそれこそ、自嘲試作品（プロトタイプ）に訊けばいいと思うけど？」
僕だって知らないんだから。
彼はいきなり僕をそう呼んで愉快そうに去っていった。
「んん、彼どっかに行っちゃったし」
ふうん。彼はそっちからも逃げたのか。そんなことを遇った時に予告していた気もする。
というか、今思えば彼は僕の居た施設に不法侵入してきたんじゃなかったけ？
ん、いやそういえば、
「『現界把握』が全知の能力者なら、わざわざ直接僕に会いに来る必要はないんじゃない？」
「・・・・・言ったでしょ。現界把握に最も近い、能力者なの。私は」
「・・・で？」
「そもそも、『現界把握』の核になる能力は未来視になるわけだけど、実はこの未来視って言うのは超能力の中では最も無意味って言われてるの。
台風の予報をするのに高性能なスーパーコンピュータなんか使ったところで、その的中率は高くない。
そりゃあ当然、天体という巨大な対象の情報をまず限りなく集める必要があるし、際限なく散らかったその情報を整頓して演算しなければならないんだからね。
予知能力者と呼ばれる人間もやってること自体はスパコンと変わりがない。

つまり、予知能力者の的中率は周囲の状況をより正確に大量に情報にできるかに、予測速度は得られた情報をより正確に多様的に処理できるかに因る。

例えば、他人の心境を読む読心術（テレパシー）。例えば、モノに残る思念を読む残留思念読取（サイコメトリー）。

ＥＳＰを駆使すれば、より多くの情報を得ることができる。通常知れない多くの無感知要素を取り入れるからこそ、予知能力者は高度な予知が可能になるんだから。

全ての人の思考に、全ての物の軌道を知れば先にある必然も掴めるはずってね・・・でも、実際はそううまくはいかない。

読心術（テレパシー）にしても残留思念読取（サイコメトリー）にしても、他の、いわゆる観察眼なんていうのも、結局は才能から来るものだけど、それでも限界はある。

まぁ、物や人間外の動植物の思考は読めなかったりするんだ。物に意思はないから心は読めないし、動物は思考が違うから解読方法を掴むのが面倒くさいのよね。

読心術（テレパシー）って結局脳からでる電波を受信する能力だから。人間以外だとわざわざ翻訳しないといけない。

ま、最も面倒くさくてどうにもならないことは未来視の方にある。

・・・・・それら情報を演算する脳には限界があるってことよ。

ＥＳＰ追究研究所の出した結論は、『人の脳では完全なる未来視は不可』。

いくら私が、ＥＳＰ全般に限りない才能に恵まれているとしても、予知能力者としての才能を持っているにしてもそれをこなすだけの高性能な演算機がない。

あ、勘違いしないでね？私が馬鹿ってわけじゃないから。

その気になれば、演算自体はできるのよ。ただ、計算する時点から予測しようとする未来までの以上の時間が演算にかかっちゃうわけ。

５分後の予測に１０分かけてるんじゃ実用性がないでしょ？

処理する情報を減らせばある程度計算はできるし、それでも結構な精度は出るんだけど、『現界把握』に要求されるのは１００％の的中率だから。

ただ、最高精度で能力を駆使するほど頭がパンクしちゃうのよね」

彼女は自慢するように、あるいは弁明するように長く言葉をつむいだ。

でも、彼女の言葉を聞いた僕の感想は１つだ。

「使えない能力・・・」

ぼそりと一言。

意地悪に言ってやる。

「！」

その一言に彼女は異常に反応した。

ものすごく嫌なところを突かれたらしい。

さっきまでの人を小馬鹿にしようとする態度は消え、肩が震えている。

「違うから！精度を落とせば使えるから！」

やっぱり負け惜しみのようにしか見えない。

彼女の様子に僕の中の嗜虐心（あそびごころ）が刺激される。

面白いので追い討ちをかけてみようかな。

「思い出したんだけど、予知能力者って大抵が特定の未来を視ることができないんじゃなかったけ？

予測しやすい未来としにくい未来があるから、どうしても見える先にもムラができるとか。

その上故意に特定の未来を導き出そうとすると精度と速度ががた落ち・・・か。

まぁ、ご愁傷様？」

「～～～～っ！」

悔しそうに地団駄を踏む彼女。

しかし、その彼女の動作がいきなりぴたんと止まる。

顔を上げて、『あ、そっか』と手を打つジェスチャー。

「実践して私の能力が使えることを証明してあげよう」
いいことを思いついたと体で表しているらしいのだけど、正直こういう時の思いつきにまともなものはない。
あー、からかわなければ良かったのかもしれない。
「・・・明日の担任のネクタイの色でも教えてくれるの？」
一応、一縷（いちる）の希望を持って訊いてみた。
けれど彼女は首を振って、
「んにゃ、コレで」
ダウンコートのポケットに手を突っ込んだ。
程なくして取り出されたのは黒い棒状の何か。
――――カチンッ
軽い音と共に、棒のグリップより上部が紫電を散らした。
待て待て待て。
スティックタイプのスタンガン。
何でそんなもの持っていらっしゃるのでしょうか、この人は。
冷や汗が出る。
「どれだけ未来視、読心術者との戦闘が厄介か、教えてあげるよ」
にやりと、本当に楽しそうに彼女は嗤った。
本気、のようだった。
・・・・・よし。
付き合ってられない。警察に通報しよう。
僕は躊躇なく携帯電話を取り出した。
都合よくスタンガンなんて持ってるし、同性愛者の不審者として処理されることを祈ることにしよ――――、
ッ――――、――――――――――――！
そう思った僕の眼前に、その青白い光を放つ凶器が迫っていた。
そう、か。
未来予知とかの以前に、彼女が読心術者であるということは、
「「この行動も読まれてるということか――――」」
声が重なった。

織神葉月は取り出した携帯を握り締めたまま、勢いよく地面を蹴った。
後方への退避。御籤唯詠との距離を取る。
溜息を吐き、携帯を再びスカートのポケットに滑り込ました。
「ん、む」
口元に手の甲を持ってくるという思案動作の後、手をぶらんと下ろす。
「あら？案外優しいのね？ナイフは使わないなんて」
葉月は無言で、どうせこちらの思考はばれているのだから当然だが、体を低く構えた。
「えぇ、そうでしょうね。こちらを傷つける気がないのにナイフなんて取り出したら、手加減を加えないといけなくなる。
向こうはスタンガンを押し付ければいいだけなんだから、避けることを第一に考えないといけない・・・」
たん、という軽い快音。
御籤唯詠の言葉が終わる前に、葉月は右足に力を入れて前方に大きく踏み出した。
それは少女の身体能力で可能とは思えないほどの距離を縮める。
1歩で、2人の間合いはなくなった。
狙うのは凶器を手にする右手首。その後に首を掴んで地面に叩きつける。
しかしその行為が成功するわけがない。
微塵の容赦もない手刀は右手を捕らえて振り下ろされた瞬間にひょいっと、素人でも判る素人の動きでかわされてしまった。
「はっ」
唯詠の鼻で笑う声。
が、葉月は第1撃がかわされた瞬間に、攻撃法を変更、左足を軸

に右足を蹴り上げた。
しかし唯詠はそれも大げさにしゃがみ込むことで交わし、片足で体勢が不安定な葉月にスタンガンを振り下ろす。
地面に左足しかついていない状態で、葉月はそれでも無理やり退避行動に移った。
左足だけで後方に体を思い切り飛ばし、空中で体勢を整えて両足で着地した。
「ふふ、運動神経はいいわね・・・、あ、もしかして、体の強化をやってるとか？
そかそか、無意識に使われた能力は認知しにくいなぁ」
攻撃し、かわされたらすぐに退避する。
基本的に相手の攻撃に触れた時点で負けが決するような戦闘でできることはそれぐらいだ。
そもそもそんな敵は相手にせずに逃亡するのが最善策だろう。
「でも残念だったわね。『攻撃を仕掛け、避けられた時点でその方法を変えてみる』っていうのは悪くないんだけどさぁ・・・。
その考え自体を看破されてちゃあ意味がないわよ？」
別に、と葉月は言う。
「どこまで意識を傍受されているのか知りたかっただけだよ。
できるだけ表層意識に出さないようにと思ったけど、結局そうすることで出ちゃうものだしね。
いやぁ駄策だった」
軽い口調。
そして第2撃を仕掛ける。
今度はありったけの速度を出すという直線攻撃。
攻撃としては単調で、あまりよい方法ではないが、それでも異常な速度を持った突進は本来なら唯詠にあたってもおかしくない。
狙うのは左肺。呼吸の強制排出とその衝撃で、機能低下を狙う。
ぐっと脇腹に溜め込んだ右腕を前方にひねり出す。掌底による打撃。

それは当然避けられる。どんな攻撃をしようと予定調和でしかない。
横にずれるという単純明白な回避行動の後、唯詠はスタンガンを振り下ろした。
その状況で取れる唯一の行動は退避でしかない。
なのに、葉月はそれをしなかった。
代わりに両手を顔前にクロスさせての防御行動に出る。
自爆以外の何ものでもないその行為に、しかし接触したスタンガンは威力を発揮しなかった。
「ッ！皮膚を絶縁体に・・・っ！」
驚愕の表情を取る唯詠。
だが、葉月の攻撃はそれで終わったわけじゃなかった。
スタンガンごと右腕を上へと弾き飛ばし、その行為によって上がった右腕を唯詠の首筋に向かって振り下ろす。
「チッ」
舌打ち。唯詠はその不意打ちに右に自ら転がることで回避し、１回転後にすばやく体を立てて、後ろに下がった。
フッと息を吐く音が聞こえる。
「あれぇ？おかしいなぁ・・・、皮膚の性質を変化させるなんて思考はしてなかったのに」
ありえない驚きの後に、彼女は消化されない疑問を口にした。
「別にそれほどのことはしてないよ。適当に当たって、攻撃されたら何とか防御してみようと思っただけ。
咄嗟に皮膚を絶縁体化させたみたいだねぇ・・・・・」
他人事にそう言うと葉月はひらひらと手を振って見せる。
軽い言動と素振りと、思考。
しかしその中身にはグログロと大小多数の思惑が拡散し収縮し、回り廻って、結んだり解けたりしている。
そのイメージを掴み取って、唯詠は再びハッと息を吐いた。
「女体化した時といい、指が凶器になった時といい、無意識下で変

容が起こった例を鑑みれば、スタンガンを無理に受けようとすれば勝手に何らかの防御が働く・・・か。

いや、そこまで考えていればこの私に読めないわけがない。自分の体なら大丈夫、なんてあいまいな考えでよく飛び込んできたわよね」

「無謀に策を講じる必要があるからね、君みたいなのが相手だと」

「何、その矛盾した言葉。まぁ、意味は分かるけどさ。なるほど、君みたいなのだと、あんまりモノを考えなくても力でねじ伏せられるのね。

でもそれ、突拍子もない行動を取ってこっちの隙を突くのが狙いなんだから、もう使えないわよ。警戒されたら効果が得られない。さっきの決めないといけなかったんじゃない？」

だよねぇ、と葉月も同意した。

「やっぱりというべきか・・・戦い慣れてるのに、素人の振りなんてしないで欲しいなぁ。

保険でしょ？本当にやばくなった時に回避行動を成功しやすくするための」

「あはは、まぁ、ね。実は結構色んな所にちょっかい出してるのさ。で、その後こっぴどく叱られる」

「そりゃあ、おめでとう。『馬鹿野郎の愚か者』の称号を譲ってあげる」

「いらないよそんなの」

くすくすと葉月は笑った。

笑って、トタンとステップを踏み、踏み込んだ。

今度は唯詠もぼうっと立っているだけという愚行はおかさない。

腰を低く構え、スタンガンを持った右腕を前方に突き出す。その状態で前のりに駆け出した。

それから彼女特有の戦法を取る。それは相手の手の内を先に晒してしまうというものだ。

そうすることで相手の行動を鈍らせ、錯乱させるという効果を得

られる。
「・・・右手でアッパー、かわされたら左手で手刀。これまたかわされたら足で・・・・・待て待て待て！股間を蹴り上げるってどういうつもりよ！！」
自分で人の思考を読んでおいて、それに文句を言う唯詠。
相手を錯乱させるつもりが、自分の方が心情を乱される結果になってしまう。
だが、葉月は舌打ちをして足を止めた。
止めるしかなかった。
「意識せずに戦略を練るのって難しいな・・・」
どんなに奇策を用意しても先に知られては意味がない。
股座（またぐら）に蹴りを入れらそうになれば隙ができると思ったのだが、それが良くなかったと葉月は攻撃を諦めてしまった。
「だから言ったでしょう？嫌な相手なのよ、読心術者は」
先ほどから両者とも1撃すら入れられず、第3撃目に関しては不発に終わっている。
傍（はた）から見ても、何ともパッとしない戦闘だろうか。
取っ組み合いにすらならず、両者極力触れることにすら気を使っている。
片や一触即倒電撃凶器（スタンガン）、片や一撃昏倒打撃狂気（ようしゃなし）である。
葉月の方は相手の得物が危ないというのは見て明白だし、唯詠の方は相手の身体強化の具合から相手の一撃に相当の力が加わっていることが分かっている。
何せ葉月が腕を振るう毎に、空気を擦る音がするのだ。慎重に越したことはない。
よって両者、触れることを恐れてまともに攻撃ができない。
「君からどうぞ？」
「いやぁ、君から」
という具合で、両者腹黒く譲り合う。
この勝負、先に隙を作った方が負ける。そしてアクションを起こ

さない限り隙はできない。
　という計算式を仲良く作り上げた2人は、積極的に攻撃する気が失せていた。
「仕掛けて来たのは君の方じゃないかな」
　最初の方は一応喧嘩を売られた分買おうと意欲があった葉月も、もう投げやりである。
「うー・・・ん、そうだけど・・・そもそも、あぁ、君がどれほど『馬鹿野郎の愚か者』なのか見に来たんだっけ」
　忘れてたの、と葉月は嫌そうな顔をした。
「仕方ない・・・じゃあ少し話をしようかな。あれだ、君が興味を持ってくれそうなタイプの」
　ふふんと鼻を鳴らす唯詠。嫌な思惑しか感じられない表情。
　スタンガンのスイッチをそのままに、話し始める。
「さっき言ったとおり、私は色んな所にちょっかいを出してる。今、君を通じて万可統一機構にそうしてるようにね。
　古き良き風景（クラシック・ビュー）、浅代研究所、日常的な赤（コード・レッド）、三重録音九法研究所、箍の外れた発条（フォールアウト）、神々の輪笑、他方傾向念力追究所・・・・・・」
　ゲテモノぞろいだ、と葉月は吐き捨てた。
「深度5以上の至極（いきすぎ）追探組織をコンプリートしたいの、君は？」
「ん？気まぐれって言っておこうかな。暇なんだよ。
　ＥＳＰ関係は結構昔から体系化してしまってるから。そもそもそこまで躍起になって能力開発する必要がないのよ。
　三重録音九法研究所とかと大きく違うでしょ？同じＥＳＰ関連なのに向こうは目標1つのために特定の能力者を創ろうとしてるし。
　とにかく、私は色々とちょっかいを出してる。だから私は結構なお尋ね者でね・・・今では逐一動向を見張られる身だよ」
　嬉しそうに話す唯詠とは反対に、葉月は表情を固めた。
　視線だけを動かして辺りを見回す。
　――――茂みの潅木の上に3台、コンクリートブロックの上に1台、アスファルトの上に2台。

徊視子蜘蛛。
学園都市の指定箇所を順次徘徊し動画データをターミナルに送り続ける、太陽光充電式(ソーラーシステム)の超小型監視機だ。
おそらく常に御籤唯詠を監視し続けている物に違いないと葉月は当たりをつける。
「ふふ、考えてるね？
そう、その通り。この場において私達は監視されてる。
私にとってはいつもの行動で、この後はいつも通り施設に戻るものだから、取り押さえられないだけ。様子見様子見。
私は大丈夫なんだよ。未来視の私がそんなヘマはしないよ。
ねぇ、織神葉月、でも君の方はどうかな・・・・・？」
ちょっかいを出された側としては被害者でしかない、織神葉月。
彼女と事情が違うとはいえ、動向を見張られている立場にある、織神葉月。
しかし、それだけでは不安要素にはならない。
いくらＥＳＰ追究研求所の人間と接触したとはいえ、能動的でないうえにあしらっているだけの織神葉月に疑念が降りかかることはないはずだ。
そこまで考えて、葉月は唯詠の真意に気づく。
御籤唯詠の言わんとしていることは――――
瞬間、葉月はアスファルトを蹴り砕いて、突貫した。
それは何も考えないという体現にて、無謀の失態。それ故に、唯詠には効果のある策。
だった。
だが唯詠はそれを、受身を取るように前方に転がることで回避した。
一撃を避けたところで、２撃目を避けれなければ意味がない。葉月との距離を取る必要があった。
短距離(ショートレンジ)で敵う相手ではないということは承知している。
「はっ、そんなに他人のことが気になるか、ぇえ？」

挑発に挑発を重ねる唯詠は、スタンガンを構え直す。
「さすがに今の君に読心術（テレパシー）だけじゃ太刀打ちできそうにないから、未来視を使わしてもらうよ」
さっきの攻撃といい、考えなしに突っ込んでくる葉月に対して行動を読むということが無価値になってしまっている。
読んだところで避けれないからだ。
それほど葉月の速度は異を喫してる。
よってその回避行動に未来視を利用しなければならなくなった。
葉月は速度を持った体を道路との摩擦で無理やり止めて、急旋回して再び走り出す。
エネルギーを押し付けられた黒い道は抉られてしまったが、そんなことはどうでもいい。
葉月の目標は御籤唯詠の口を塞ぐことだ。
「自分のことなど微塵も考えないくせに！親愛なる友人のことになるとこうも激昂するか！
ふん。すばらしい哲学だよな。
『自分はどうなろうと構わない。死ぬその時まで、友人（しあわせ）が幸せであるのなら。それを見ていられる自分は幸せなのだから』！？
お前はすごいよ。本当に、本心でそれを思っているんだからさ」
葉月の拳が顔面に、正確には口にと繰り出される。
それを右にずれて避け、唯詠はスタンガンを放り投げた。
「ッ！」
もしもそれが唯詠の腕によって放たれた攻撃であるなら、人の腕の描ける軌跡から逆算してという選択肢を選べる。
だが葉月に目掛けて、それこそパスをするように放り投げられた凶器は、ぐるんぐるんと不規則に回転しながら迫り、その棒の片端には異常に長いストラップが付けられていた。
それは唯詠の右手まで繋がっている。
不規則で、それでいてある程度の操作が利くという事実。
未来視でもない葉月にその軌道を読むことは難しい。

例え並外れた動体視力と機敏性を持っているとしても、間違えれば後がない。

その心理から葉月は大きく後退するしかなかった。

まだ唯詠の攻撃は終わらない。

今まで使っていなかった左手を突き出す。その手には右手のスタンガンを放り投げる時に腰から引き抜いていたガンタイプのスタンガンが握られている。

バジィンという聞き慣れない音と共に放たれた電撃は、しかし葉月に当たることはなく道の脇にあった蛍光灯に当たり、剥げた柱を伝導して蛍光のガラスを破壊した。

唯詠はストラップを引いて右手にスティック・スタンガンを握りなおす。

「自分の生にも死にも興味を持てないくせに、他人(ゆうじん)の欠落に脅える『馬鹿野郎』。

他者にとっての自分の欠陥の意味も知れず、欠落の意義も思考できない『愚か者』。

聞いた通りの『馬鹿野郎の愚か者』だよ君は。

今の君は読みやすいわよ?」

言外にお前の懸案事項もわかっていると葉月の神経を逆撫でする。

織神葉月にとってこの場において最も重要なことは、御籤唯詠が葉月にとって不利な事柄を言われることである。

反逆、脱走。とにかく今までの長年で培われてきた『無抵抗』であるというレッテルが剥がされると不味い事態になる。

別段、それが織神葉月自身のマイナスになるからではない。

超希少能力の形骸変容(メタモルフォーゼ)を万可統一機構やそのプロデューサーが易々と殺すとは思っていないし、そもそもそうだとしても織神葉月は気にしない。

懸案事項は反抗意思があると認識された時に、誰が利用されるかだ。

朽網釧、四十万隆、他にもいる織神葉月を囲むクラスメートに知

人達。
人質に使われるか、見せしめに使われるか、生贄に使われるか。
織神葉月という個体にの身の安全は保障されている。
だからこそ、代償を払うのは織神葉月ではないのは明白。
織神葉月には反抗の意思はない。本心にして本音。
だが、そんなものは関係ない。
問題は心を読めると称される御籤唯詠の言葉は全て真実として扱われる、ということ。
ありもしないことを『織神葉月の本音』として語られるというのが非常に不味い。
人の心を代弁する御籤唯詠の心を、本音を、真偽を知れるものはいないのだから。
だから、だから葉月は余裕(あそび)もなく唯詠を仕留めにかかっている。
全力で唯詠の口を塞ぎにかからなければならないのだ。
そういった心境を読むことが出来るのだから、唯詠にはゆとりがある。
自分達の優勢劣勢を明確にするためにも、軽い口調でさらに挑発する。
「さぁ、どうしたの、来なよ?まぁ、幾らやったところで、未来視を打破するこ、と・・・は・・・・?」
ところが、その言葉は、途中で力をなくしていく。
唯詠の顔が怪訝に歪む。
「何で・・・?心が読め・・ない!」
それは2度目の驚愕。
ＥＳＰ系の超能力者でもない人間に妨害念波を出せるわけもない。
だいたい、ＥＳＰ最強を自負する唯詠に妨害念波が効くわけがない。
そんなことは唯詠にも重々分かっている。だからこその動揺。
しかし、現状、いきなりプツンと葉月の思考が届かなくなったのだ。

「――ッ！く」

未来視による未来予知により、葉月の次の攻撃を読んだ唯詠はその疑念を横に置きすぐさま回避行動を取る。

唯詠が上半身をずらすと同時に、ちょうど顔のあった位置にダガーナイフが飛んできた。

（殺す気か！）

行動の本心すら読めない唯詠はその事実に苛立ちながらも、冷静を努めて次の葉月の行動を読もうとする。

（・・・！読心術がないと、やっぱり未来予測の精度が落ちる！）

読心術（テレパシー）だけで、人の行動は読める。しかし、読んだ時には避けられない位置にまで突撃できる葉月にそれは通用しない。

だからこそ、未来視で先読みする必要があったのだ。

しかし、そうだとはいえ、その間読心術（テレパシー）を利用していなかったというわけでもない。

むしろ、葉月の心を読むことで、予測精度を上げていた。

未来視が世界に転がる情報をシュミレーションして答えを出す能力であるのなら、動きを見せる人間（あいて）の心動がどれほど重要なデータであることか。

確かに心を読めずとも未来を見つめる能力者は天然者も含めて多数存在する。

だが、そういった人間は大抵特定の未来を見ることはできない。

演算式が複雑になりすぎて、人の許容量（キャパシティー）を超えているのだから。

唯詠が今まで戦闘で随時、それも瞬時に未来視が使えていたのは、有効ギリギリまでに精度を落とした上で、読心術で得られる重要なデータを利用して演算自体をタイトなものにしていたからだ。

故に、読心術の使えない彼女の未来視は一気に速度と精度を失う。

走り出した葉月は唯詠の直前で左足を軸に右方、唯詠にとっては左方へと一歩進み、そこから右手でこめかみを殴る。

唯詠はその行動を読んで、目の前に葉月が来た瞬間、自ら前に進み出た。

が、葉月を避けるための行動で、唯詠は葉月の体に当たりにいってしまうという失態を犯した。
葉月が故意に突拍子もない行動を起こしたではない。
唯詠がミスをしたのだ。避けようと前に出るタイミングが早すぎた。
「――――っ」
精度の落ちた未来予知の隙が戦況を一変させる。
遂に相手に体の届いた葉月が、何もなしに唯詠を取り逃がすわけがない。
前のりに体に当たってきた唯詠の首を左手で鷲掴みにして、横のコンクリートの塀に叩きつけた。
恐ろしいほどの打撃音が響き、ブロックが破壊される。
それが御籤唯詠という人間の体を使って起こされたのだ。
その人間が無事なわけがない。
彼女の体左側は打撲、内出血、外出血、骨折という複数の損傷に見舞われた。
「ぁ・・ぐ・・ぅ」
未来予測をやり直し先読みし、頭を咄嗟に右に倒さなければ、頭蓋骨も半壊していたに違いない。
『この後日に、また別の能力者にちょっかいを出す』という未来を知っている唯詠でさえ、その事実に心臓が潰れそうなほど恐怖した。
対して葉月は、そんなことはまるで気にしていない。
唯詠は死ななかった、それだけだと言わんばかりに、首を絞めた。
既に下半身が激痛にさいなまれている状態で、トドメを刺された唯詠は右手の方のスタンガンも力が入らずに落としてしまう。
「こう・・・しゃ・・ん・・・・・・」
空気の入らない喉を何とか震わせて、唯詠は白旗を揚げた。
葉月は素直に手を離す。
別段それは相手の言葉を信じたといった甘っちょろいものではな

く、この一連の作業がそもそも『織神葉月がどれほど馬鹿野郎の愚か者であるか』という目的でなされたものであることと、『読心術、未来視が通用しなかった』ことも証明されたため、わざわざこんな面倒事を続ける必要がなくなったからだ。

葉月は投げたダガーナイフをホルスターにしまった。

唯詠は体を崩すように地面に倒れこんで、まだ無事な塀にもたれかかった。

左半分の肩や腕、太股辺りから血が服に染み出ている。

「種明かししてよ。何で読心術が効かなくなったのさ」

「君が言ったんだ。物に意思はないから心は読めない。動物は思考が違うから解読方法を掴むのが面倒くさいってね」

ああ、と唯詠が息を吐き出した。

「なるほど、ね。脳の構造を変えれば、人間とは違う・・・特に現存しないような思考法を取れば、私には解読できない。

翻訳するのにも時間はかかるし、そもそも脳を変えてるなんて思わないから、解読し直そうとも思わないしね・・・」

「じゃ、。僕は帰らしてもらうから」

つまらな気に言って、葉月は足をアパートの方へと向けた。

「あ、は。ぁあはははっははぁはははははっはあっはははははははははあっはははは！」

しかしその背中に唯詠は笑いを浴びせた。

哄笑。止め処なく、我慢のしようがないといった感じ。

馬鹿にした風ではなく、単に本当に楽しそうに。

「そうも簡単に人をやめれるなんて、君壊れてるよ」

恐ろしく無礼なことを嬉しそうに呟く。

だが、唯詠には悪気がないということがその態度でわかっているので葉月も追及せず、無視してアパートへ歩を進める。

最後に、未来予知者は言った。

「予告しとくよ、”白”だ」

／

自分のことを自嘲して試作品（プロトタイプ）と言った男の言葉。
「つまり僕は未来視を使えないという恐ろしい欠陥を持ってるわけだな、これが」
それが『現界把握』としての能力者としてなら確かに欠陥。どうしようもないぐらい重要な部位が欠落している。
「ただ、僕も僕なりに得意分野というのを持っていてね。人格奪取（ハッカー）。それが僕の能力だ」
傍観するという立場から離れた、攻撃的なＥＳＰ。応用の利く高レベルな超能力。
「僕はね、その内今居る施設を出るつもりだ。それと僕の後輩がたぶん君の前に現れるだろうな。
ん？いやいやいや、これは未来視ではないよ。単なる推測。情報さえあればある程度の未来など分かるだろう？
そう。未来視など、凡人にはできない高次的な推測に過ぎないさ」
しかし結局、１００％の予知など普通は不能で、故に未来視は卓越した能力だ。
「さて、そろそろ行こうかな。はは、僕の能力は逃亡には結構向いているのだよ」
そんなことを言って、彼は屋上から姿を消した。

目が覚めた。
だから何も考えずに条件反射で行動する。
ベッドから身を起こし、とたとたと洗面所に。
顔を洗い、髪を梳いて、着替える。
上はともかく下の方はいつも通りの普通のショーツに換え、着慣れたのか着慣れてないのかいまいち実感の涌かない制服で身を包む。
やかんでお湯を沸かしながらやっと一心地。
椅子に座りながら、先ほどの夢を思い返してみた。

けれど、あまり興味が涌かずに挫折。夢と言うのは何で一度起きると思い起こすのが難しくなるのだろう？

根性で思い出すにも気力がない。

ただ、1つだけ、思い出せて思い出せないものがあった。

自嘲試作品（プロトタイプ）の顔。それが全く出てこなかったのだ。

夢の中でもそうだけど、今も同じく思い出せない。

・・・・・昨日、人の顔ぐらい覚えてられると思ったけれど、実のところ顔すら覚えてないんじゃないだろうか。

男だったというぐらいしか特徴を記憶すらしてないのかもしれない・・・。

長い間僕の周りに居る人間はほとんど役割名で済ませられる程度に単純で少なかった。

そのせいか、どうも人の記憶というのが疎かになっているのか。

そういえば担任の顔もうろ覚えだ。

あー、興味がないことはすぐ忘れるなぁ・・・・・。

担任だって、そもそも役割名だし、本名なんて覚えてるわけがない。

・・・・・。失礼は承知だけど。

「そういえば、白って・・・」

担任のネクタイの色なんだろうか？

白いネクタイがあるのかどうかさえ怪しい気がするけど、白いシャツに白いネクタイなんてしないと思う。

それに色のついたシャツを着てきたこともなかったと思うし。

・・・ネクタイとは考えにくいんだよね。

だとすれば何なのか、ものすごく気になるところだけど。

お湯が沸いたので、それを先にインスタントコーヒーを入れたカップに注ぎ、牛乳を入れる。

あの性格の悪い女が言ったことだ。何かしらの意味があるに違いない。

冷蔵庫から冷凍ピザを取り出して、オーブンに放り込む。

マルガリータ。朝から食べるものかは微妙だけど、正直何も作る気がしないし、パンチの効いたものが食べたい。

チン。軽音と共に焼き上がりが知らされて、僕はそれを敷いておいたアルミホイルごとテーブルに置いた。

切るのも面倒なので手で千切り口に持っていく。

今日は妙にお腹がすいている。

いつもならこんなものを朝から食べる気はしないし、気だるさもない。

食パン半分でも1日持つぐらいだ。

なのに今日に限って・・・・・・、・・・あぁ、形骸変容（メタモルフォーゼ）を使ったからか。

いつものトレーニングのように指1本というわけではなく、肢体や脳までいじればそれなりのエネルギーを消費するのだろう。

そういえば、女体化した時も疲労感が付きまとっていた。

これからはあんまり、エネルギーを使わないように変容しなければいけないな。

今回みたいなことがまたないと楽観はできない。

それももっと攻撃系の超能力者だった場合、持久力の欠落は命に関わる。

・・・脳の方は既に元に戻してあるけれど、体の方はどうなのだろう？

無意識のうちに強化ししていたらしいから、脳が戦闘体勢になったと同時に変化しているのか、あるいは常時そのままなのか。

とすれば、脳をいじっただけで相当のカロリーを消費することになるのだけど・・・・。

考えてみれば、脳の方にしたって、それほど確固なイメージをした覚えはない。

無意識ではないにしろ、結構あやふやに構造をいじったはずだ。

なのに、変容はできた。

手首の時はそうはいかなかったのに。

『ムラがある』という昨日の自分の言葉が思い出される。
無意識による変容。部位によってことなる変容速度と効率。
・・・・・。色々と面倒なことがありそうだ。
僕は最後の一切れになったピザを口に放り込んだ。

#

まだ感触に違和感があるスカートをはためかせての登校。
ホームルームが終り、にわかに教室が騒がしくなってくる。
あぁ、担任のネクタイは白ではなかった。
今日初めの授業は能力別のカリキュラム。皆それぞれ自分達の教室に向かう準備をしている。
行き場所がない僕や美樹さんはこの教室にさえ居場所がなくなるため、ぶらぶらと徘徊するはめになるのだ。
まぁ、一応そういう生徒のために場所は取られているんけど、必須というわけでもない。
だけど、あそこに行ったってやることがないのは同じ。
座れるだけ楽といえば楽だけど。
まぁ、どちらにしろここからは出なければならない。
仕方なく立ち上がろうとする。
と、
「皆、聞いてくれ！遂に俺にも能力らしい能力が使えるようになったんだ！！」
聡一君が叫んだ。
そういえば、彼はなかなか能力がわからないでしょげてったっけ。
皆が集まりかつ、時間の空くこの時間を待っていたらしい。本当に勢いよく立ち上がって、なんかガッツポーズまでしてる。
担任は1回振り向いて、ほどほどにして早く解散しろよと目で行って出て行った。
ＥＳＰ系の能力らしいとか言われて、そっち系のグループを回っ

て色々試していたらしいけど、遂に判ったんだ。
興味があるので彼の方に歩いていく。
他のクラスメートも他人の能力は気になるらしく寄って来る。
「やっぱりＥＳＰの方だったんだけどな。ちょっと特殊なんで苦労した・・・・・思体複製の類らしいんだ、俺のは」
なるほどね。それは確かに判りにくい能力だろう。
そういうものは条件が揃っていないと発現しにくい。
「葉月・・・」
そう言ってタカがこっちを見てくる。思体複製の説明を要求しているらしい。
こういう能力の説明は僕の得意分野だ。
「思体複製。視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚といったものを自分体から引き離せる能力だよ。イメージは幽体離脱だね。
違うところで起きた事に対して見たり聞いたり嗅いだり・・・まぁ感覚の受容体を違う場所に移せる。五感全てを引き離せるのが一番高度」
「まぁ、あれだ思体複製は体全体を剥がせるものらしいから、俺のはちょっと違うんだけどな。
俺のは・・・・・」
そう言って彼は筆箱から消しゴムを取り出し、それを右手で握りこんだ。目をつぶっている。
少しの間そうして、それから開く。
「こうやって他の物で座標位置を固定しないとまだ使えないんだけど、これで視覚がこの消しゴムに移ったわけだ」
「へぇ。でもそれどう使うの？」
副委員長・・・いや、亜子さんといった方がいいのかな、彼女が聞く。
役割の方で呼ぶとそのまま名前も忘れそうだし、さすがにクラスメートにそれはまずい。
すると、聡一君はにぃっと笑った。

「まぁ、基本は監視カメラとかと変わらないさ。でも、ばれる事はまずないだろ？
まさか消しゴムに目があるとは思うまい。
それに・・・・・こういう使い方も出来る」
そこで、彼はその消しゴムを床に転がした。
それは僕の足元まで転がってくる。
「えっ？」
反応が遅れて、体が固まっている僕。
彼は言った。
「白・・・・・・！」
！、スカートの中を見られた！
そう思って条件反射的に彼の顎を蹴り上げる。
けれどそこで、彼の視界が真下にあるという事実を忘れていたことに気づく。
思わず足を上げて、余計に見やすくしてしまったという失態。
恥ずかしさより悔しさがきて、僕は転がった消しゴムを蹴り飛ばした。
教室の床を高速スピンする消しゴム。
「目がぁ――――ッ！」
という悲鳴が聴こえるけど聞こえない。
視界が高速で回転したために目を回して、酔いで気持ち悪くなっているんだろうな。
周りに居た女子達が彼の体に制裁を加えているけれど、視界がまるで違うところに行ってしまっている彼には避けることもままならない。
でも僕はそれだけで終わらせる気はない。
さて、トドメだ。
僕は転がった消しゴムを握って、教室の外に出た。そのまま廊下の窓までい行き、鍵を開けて横にずらす。
中庭、生徒の憩いの場にて、野外学習の場所。

兎や亀の入れてある檻や池が設置されていたりと、生物と触れ合う機会が設けられている。
つまり、そこにはビオトープもあるわけで。
5月、温かくなった今日この頃。すばらしい生態系が形成されているに違いない。
僕は躊躇なくその中に消しゴムを放り込んだ。
「ぎゃぁあああああ――、ヤゴぉおおおお――――！」
知ったこっちゃない。
視界を汚染されて、体も暴力の嵐に遭っている彼が後でボロボロになって教室の隅で発見されることになるだろう。
けれど僕のダメージも結構なものだ。
さすがに羞恥で体が熱い。しかもそれを、アイツに見られるとは。
ん、あれ？
そういえば・・・・・・、
「・・・ぁ――――！」
そこで僕は、やっとそれに気づいた。
「・・・白」
完全防寒茶髪三つ編み眼帯予知能力者のしたり顔が浮かぶ。
・・・・・・ＥＳＰ系能力者にろくなヤツはいない。

第４話－　心理戦。－ＥＳＰ－（後書き）

初めての戦闘描写なため、いまいち上手くできた実感が涌かない上、なんでこんな面倒くさい相手を用意してしまったんだと今更後悔。
読心術者と戦わせるんじゃなかった！
いや、葉月の本音を喋らせようとしたのもあるけれど。
さて、結構この小説の裏が出てきた話ですね。
今までも垂れ流し感というか、伏線を張りまくっていた感じはありますが、今回は意味不明な言葉のオンパレードだと思います。
うぅん・・・・・、『現界把握』の能力者のあり方がいまいちわかんないかもしれない。
すみません、力不足です。

万可統一機構の箱入り娘の織神葉月。
ＥＳＰ追究研求所のやんちゃ娘の御籤唯詠。
共通点があったりなかったりと、私自身が登場人物の対比が好きなのでこれからもやると思いますが、
まぁ、今後御籤唯詠が出てくる予定はねぇ！・・・です。（やりにくいから）

これを読んで下った方、ぜひとも感想をよろしくお願いします。
誤字脱字の報告をしてくださると嬉しいです。
分かりにくいという知らせもありがたいです。
・・・・・ほんとこの話は自信がなくて・・・・・。

第5話－　性論談輪。－Ｓｅｘｕａｌ　Ｃｏｍｍｕ－（前書き）

微妙に性的ネタです。
まぁ、エロネタではないので、期待しないでくださいね。

第5話－　性論談輪。－Ｓｅｘｕａｌ　Ｃｏｍｍｕ－

まず初めに君は問うた。質問に対して質問で返したんだ。
「好きなモノ？何それ、それって必要なの？」
初めて聞いた君の声はどこまで透き通っていて、どこまでも意味がなくて。
さらりとした黒髪を揺らして首を傾げる、その動作さえ素っ気なくて。
そう、どこまでも純粋で。色すらなくて、何もその身に映さなかったんだ。
万可統一機構、曰く非人道的なシステムを強制する巨大養護施設。
そこに身を置くと言う君は、しかしそんなことは意に介さずに、ただ在った。
俺は・・・いや、ぼくはその日初めて織神葉月に出会った。

■

「もうすぐ高校や大学との合同能力訓練がある」
ＳＰＳ服用からそれなりの日にちが経ち、定期考査も終えたある日。
誉さんが予知夢で、僕が人の三大欲求のうちで食欲と睡眠欲じゃないものを持て余し自慰に走るという夢を見たと大騒ぎしたりと、能力者らしい出来事が増えてきた今日この頃。
担任がそんな話を始めた。
「２次測定も終わって、皆能力をある程度使えるようになってきただろ？ここら辺で、いっちょ先行く先輩方の能力や研究成果を見て、インスピレーションを得よう、という訳だ」
相変わらずの適当口調で、噛み砕いた文。

親しみやすいのでありがたいと言えばそうなのだけど、残念ながら僕は名前すらを覚えていない。
親しみやすさは効果なしのようだ。
覚えていないと気づいて少し経つけど、覚えようともしてない。
一応謝っておこう。ごめんなさい。・・・本心だよ?
まぁ、その真偽は読心術者ぐらいにしか判らないんだろうけど。
さて、あまり好めない切れ目タイプの姉様を頭の中から追放して、既に眠たい授業開始前作業(ホームルーム)に集中する。
「開催日は来週の火曜から木曜。その間は授業なし。祠堂学園内を自由に歩いて、好きに見てこいってことだ。
中学生は見るだけだが、高校生、大学生は色々イベントを催してくれてる。ま、祭りみたいなもんだな。本当の学園祭はまだ後なんだが・・・。
自分に合っていると思うタイプの能力者を見つけて人脈(パイプ)作ったり・・・、中学生に自主性求め過ぎだろうってなもんだが、向こうも積極的に未来の人員(グループ)を探してるから勝手に声をかけてくれる」
例の如く類似能力者がいない僕は当てもなく彷徨う羽目になるのだろう。
さすがに学園規模になれば美樹さんの原始素能(ホワイトノート)でも小規模の集まりぐらいあるだろうし、今回は本当にあぶれることになりそうだ。
本当にただの見物になるなぁ。
まぁ、厄介な気負いがない分純粋に楽しめそうではあるのだけど。
回っているうちに何かのヒントぐらい得られるかもしれないし。
変身能力者(トランスフォーマー)は実物で見てみたい。向こうと僕の能力との差異を実感するのは良い経験になる。
あと、ＥＳＰ関係での妨害・・・特に思体複製の対応策について知りたい。
聡一君の能力は本当に厄介だ。椅子の座部にでも視界を移されたらと思うと身の毛がよだつ。更衣室にも応用可能だというのが恐ろしい。

超能力を扱う学校なのに、そういったところのセキュリティーはまるでされていないのだ。

能力は積極的に使うべし、という方針もあるのか、全体的に能力関係の不正行為には寛容だ。

現状、覗きが許されるわけではないけど、それを何とかできる設備があるわけでもない。

聡一君はそういったことは断じてしない、と割と紳士な態度で言い切った。

けど、前科があるのでいまいち信用できないしね。

次やったら今度はプールの中に沈めてやる所存。より豊かでドロドロした生態系を堪能あれ。・・・そんな決心。

ただ、それでは後手に回るので、こちらとしても防ぐ策があるなら知りたい。

聡一君と同じグループの先輩に確認してみたのだけど、判らなかった。ぜひとも経験豊かな高校生、大学生に教えてもらいたい。

「でー、先にこれを言っておけってことなんで言うが、ここでちゃんと色々学ばないと後で酷い目に遭うぞー」

これもやっぱり投げやり口調で、せめて重要メッセージぐらいきちんと言ってもらいたいと思わないでもない。

「合同訓練の後に体育祭があるのは知っていると思うんだが、そこでは当然能力を使う。

が、学年で分けてクラス対抗・・・・・というわけじゃなく、完全な個人戦なんだ。

自分の身を守れる程度能力が使えないと痛い目に会うし、実施能力の強化の成績がここでつくから、成績的にも痛い」

「あの・・・先生、体育祭ってどんな競技をやるのですか？」

代表して椎さんが訊く。

中学校からの編入組みである僕みたいな者は当然知らないし、小学校からこの学園に生徒だって、能力発現前だということで能力を観戦できる機会が限られているんじゃないだろうか。

子供は何をしでかすか分からないので怖い。小さいから察知しにくい。責任が加害者側に押し付けられやすい。
前にこんなことを話したら、タカに頭に手を当てられ、それを自分の目線の高さまで持ってきて、へぇ・・・と言われた。
話がずれたけど、そんな彼女の質問に担任はこう答えた。
「言ったら面白くないから言わない」
教師としてどうかと思う。

コンピューター部、縮めてコン部の部室。
と言ってもノートパソコンが十数台並べてるだけで、他に特別な機器があるわけでもない。
さらに言えば、目立った活動もない。
単にパソコンで遊ぶだけの部だ。故に、この部活に部外者が混じっていたところで、談話していたところで何の問題もない。
「先輩は知ってますよねー、共同訓練ってどんな感じなんですかー？」
オフィスチェアに腰掛け、それをぐるぐると回しながら問う。
「あー、高校生とか大学生の方が出店じゃないけど、大体グループ単位でスペース取って自分達の能力を見せてるんだ。
で、興味を持ったトコを観賞したり、技術を教わったりっていうの・・・？まあ、本当祭りみたいなもんだよ」
「学園内でショーをやってる感じだ。訓練なんて言ってるけど、実際そこまで堅苦しいものじゃないぞ。
ただ、学園祭ほどぶっちゃけれるもんじゃない。飲食系の出店もないしな」
部員でもない僕の言葉にわざわざ答えてくれる2、3年の先輩達。
今僕は、能力を得たばかりの時はグループの活動に行かざる終えなかったクシロの久しぶりのクラブ活動に勝手に同行している身だ。
結構顔を合わせているので親しいのだけど、実のところ顔しか知

らない。
名前は間違いなく聞いたはずなんだけど、当然のように頭から抜けている。
先輩、後輩の呼び名だけで通るコミュニケーションて素敵だなぁ・・・。あと、担任、先生で通るのも。
「学園祭は面白いよー。何せ学校が１０校以上あるからね、この学園。
見回るだけでも時間がかかるから飽きないし、イベントも多い。君らは中学からだから知らないだろうけど、電磁系能力者（エレクトロキネシス）の電気マッサージとかまであるんだよ」
「実際そういう技術で就職先を決める奴がいるから、模擬店というか実験台なんだけどな。
『命綱なし！恐怖のバンジージャンプ！！』とか念力系能力者（サイコキネンシス）の連中がやってて、途中で教師に危ないからって結局命綱を付けさせられたというのもあったよな。
絶叫系のアトラクションが多いのは嬉しいんだが、逆に飲み食いのバリエーションが少ない」
と、どちらかといえば学園祭が楽しみになるような話を耳に入れつつ、僕は自分の持っている無料メールの様子をチェックすべくパスワードを打ち込んでいく。
「学園祭は僕達も出店出すんですか？」
「ん？２年生からだな。１年は観覧だけだ」
はぁ、と相槌。
自分で振っておいてどうかと思うけど、先輩達も気にしてない。
彼らも彼らで何かしらキーボードをタイプしたり、無料ゲームをしたりしている。
うん。なんでこの部活は潰れないのだろうか。
周りの様子を見回してから、僕はパソコンの画面に目を落とした。
別にさほど見せて困る情報があるわけでもないけれど、まぁ気分的に。

受信ボックスに1件のメール有り。
珍しい。1週間ぶりに見てみたんだけど、まさか本当に着信があるとは。
大体僕だって携帯ぐらい持ってるわけで。なんでわざわざパソコンの方に送るのか。
でも、その理由は件名を見て、分かった。
『手紙』。もはや滑稽さを通り越して悪意すら感じられる。
これを無難だと思い込んでいる送り手は、送信者名のところに院長と記入している。
鉄面皮の岩男。
クリックして、内容を確認する。
・・・・・・、・・・・・・。
「久しぶりに帰って来い・・・か」
もっとも実際書かれていた文章は『帰省を要求する』だったけど。
堅苦しい実家に帰る気分だ。
気が重いというより、面倒くささが先にくる辺りがポイント。

#

万可統一機構は学園都市駅から9駅いった所にある、閑散とした山を切り崩した場所にある。
本来他の研究施設があってもおかしくない立地を贅沢に独占した、薄気味悪いほどにセキュリティーがしっかりした施設群だ。
無粋にもせっかくの緑を一切合財根こそぎ取っ払ったコンクリート舗装の領域に、白の奇抜な形をしたオブジェを並べてある。
それには人目を楽しませようという、一応の心遣いが見て取れるのだが、その理由は重要施設は地下にあるため地上部分はどうでもよかったという心無いものだ。
まともに人の住める施設が地上にあり、葉月の使っていた部屋もその建物の1つだ。他にも従業員用の住居スペースが設けてあるが、

子供を収容している施設とは趣が違う。
万可統一機構が表向き行っている孤児の養育は『特別都市における次世代教育の体系化』を建前に、孤児を無償で引き取る代わりに特殊な教育法を利用するというものだ。
事実それさえも建前だというのはさておき、この巨大施設が僕、織神葉月の故郷（じっか）となる。
厳重極まりないセキュリティーを顔パスと登録した覚えのない指紋、静脈、声紋、網膜照合で抜けて、院長のいるであろうメインの施設に歩を進める。
この恐ろしく無骨に横たわる立ち入り禁止区間にも、表があるのだから当然来客用の施設がある。
エントランスと名付けられたガラス張りの建物の半分が弧を描くそれの中には、院長室やら教育法研究の成果などを展示したスペースやらが一応作られている。
なくても良さそうなこの建物は本当になくてもないのに作られたのだろう。ダミーに使う金額すら半端がない。
地下施設の全てが耐核構造になっているという噂もあるぐらいだ。
入り口に入ると、光が注ぐ広い空間が取られていて洒落た雰囲気を出している。
丸いテーブルに椅子がそれぞれ3つずつ添えてあり、そのどれも白。
広告性のないデザイン重視の自販機が奥の方に1つ。紙コップ式の物で、飲料の種類はコーヒーとお茶が主。あとは甘そうなものとスポーツ飲料もあった。
貨幣を入れる所はなく、代わりに指紋照合用らしい濃褐色の四角い機器が取り付けられている。
少しの間考えて、指を当ててみた。
ピッという電子音の後に、自販機の選択ボタンが彩りを得る。
おおっ、前ここに居た時は反応しなかったのに。
待遇が良くなってるなぁなどと思いつつ、スポーツドリンクを購

入。購入、と言っていのか分からないけどね。
さほど乾いてもいない喉を潤しつつ、誰もいない廊下を進んでいく。
人のこないこの空間は空気がかき回されることもなく透き通り、際限ないほどに光を通す。
何もない。何も、何もない。使っていないから人気の欠片もなく、清掃は行き届きすぎて塵のひとつもない。
モデルハウスのように造られた、完璧を装った無使用の世界。あることにこそ意義があるのだと主張しているようで、長居する気をなくさせる。
・・・・・もともと長居する気もないか。
コップの液体を飲み干す頃、僕はその部屋の前まで来た。
『院長室』。本来、こういうものは建物の最上階にあるものではないだろうか。
ここに居る時には思いもしなかったんだけど、やっぱりおかしい。
まぁ、この部屋がこのエントランスのメインだからなんだろうけど。
他にも何十もの部屋があるのに全く使っていない。金・・・それもたぶん税金の無駄遣いだ。
それを悪びれずにやるところがすごいのだけど。
ノックをして応答を待たずにドアを開ける。
廊下と変わらない白い色調の壁。対応するように赤いカーペット。降り注ぐのは狐色の蛍光灯。
ずしりとした木製の本棚が側面についてあり、英、仏、独の言葉で書かれた分厚い本などか入れられている。
備え付けの給水機が隅に置かれ、その横にあるスタイリッシュな丸テーブルにワインの瓶が乗せてある。
前に来た入った時と変わらない。
前方に書斎机がずしりと横たわり、そこに岩男はいた。
がたいのいい体をスーツに押し込んだ、筋肉が硬直しているので

はないかと思うほどの鉄面皮の男。
年齢４０ほどに見える万可統一機構の責任者。
僕の書類上の保護者であり、苗字を与えた人物。
内海岱斉（うつみだいざい）という名の人間。
「座れ。わざわざお前を立たせる必要はない」
そう言って彼は、自分の机と向かうように置かれた革張りのソファを指差した。
さっきの言葉を『立っていると疲れるだろう、座りなさい』と脳内変換して、異常なまでに座り心地がいいソファに体を沈める。
「お前の素行について、私及びこの機構から言うことは何もない」
苦笑。言うこともないのに呼ばれたのか、僕は。
「ならこちらから質問しよう？岱斉、アレは何？」
「御籤一四三はただのイレギュラーだ。こちらもＥＳＰ追究研求所も関わっていない」
「本当にアレの気まぐれを放っておいていると？らしくないよね」
「あの系統は代々他にちょっかいを出す。今に始まったことでないにつき、その度に過剰反応を示す必要はない」
「なるほどね。けど、それだけじゃないでしょう？他にも理由があり、その方が都合がよかったんだ」
「その通り。その方が都合がよく、そしてそれはお前が知るべきではない。少なくとも今は無知でいろ」
無知でいろ、か。
「そ？まぁ、僕もそこはあまり興味がない。僕の興味は別のところにある」
「御籤一四三との接触でお前が不利益を被（こうむ）ることはない」
「ならいい。で、もう１つ。岱斉、この機構が造りたかったのは形骸変容（メタモルフォーゼ）でよかったのかな？」
「肯定しよう」
「・・・・・・質問を変更しよう。この機構のこの機関が造りたかったのは形骸変容（メタモルフォーゼ）でよかったのかな？」

「肯定」
「・・・・・他の機関では何を造ってるんだろうね？」
「それは知るな。探って得をすることはない」
「ん。じゃあもう訊くこともないかな」
短い問答もが終わった。そしてこれ以上のまともな談話はないのだろう。
この男は自分から話題を作ることに長けていないし、僕も不必要に会話を続ける気はない。
そこで彼は席を立ち上がり、本棚へ行くと1冊の本を取り出した。小さな、文庫本サイズの、ただし分厚い本。表紙は何も書いていない白。
それを僕に差し出した。
めくると、地図のような物が見て取れる。
特別都市の全体像から、場合によっては一建築物の構内図まで。書き込まれているのは色々なアイテム。
まるでゲームの攻略本だという感想を抱きながら、それを閉じる。
「自由に使え」
最後に鉄面皮の岩男はそう言った。

／

女子というものは、とにかく輪になって喋るものらしい。
それはある種の偏見だと思うのだが、僕の幼馴染であり、自称彼女らしい西谷絵梨（にしたにえり）が織神葉月を巻き込んで、その上に弄（いじ）ろうとして発言した言葉であるのでその真偽についてはどうでもいいのだろう。
全くもって兆候もなく、当然告白もなく僕の彼女だと明言する絵梨は、所謂変人である。
このクラスに変人奇人の類が多いとしても、彼女ほど厄介な人物はいない。
変人代表、織神葉月。リアルな性転換者にして、ナイフ所持及び

嗜虐嗜好有り。
美しい花には棘がある、というよりは可愛らしいテディベアの口がいきなり裂ける方がニュアンス的にしっくりくる。
奇人象徴、細川美樹。口調不定の怠惰人格であり、布あれば縫う裁縫好き。
割と普通に聞こえるものの、怒らすと針で刺そうとする。『こう血がね、ぷつぅって膨れる様子が面白いんだよん』と発言して、織神以外を退かせた。
本気で危ない波風九鈴。歩く凶器というあだ名が付けられた本当に危ない人物。
天然ではすまない殺傷力の持ち主。彼女に見合った能力が与えられたねと瀬川香魚子の冗談めかした発言があったり。いや、神は僕らを見放したに違いない。ゴッド・イズ・デッド？
その他にも若内楚々絽（わかうちそぞろ）など本当に個性の強いキャラクターに恵まれたこのB組。
気になって聞いてみると、『あー、だってそうした方が面白そうじゃないですか。1回やってみたかったんですよねー、そういうコミカルなクラスを作るの。だからわざわざ、小学校の頃の評価とかまで調べたりしたんですよ？』と校長が笑言してくれた。
余計なことを・・・という気持ちと笑って言うことじゃねぇという気持ちが合わさって、つい一発頭を叩いてしまったのだが、別に僕が暴力的なわけじゃない。
あの人物が自分より当然年上という事実をつい忘れてしまうのだ。おふざけの過ぎる同級生を叩くのと同じである。
さて、話がずれたが、とにかくこのクラスには変人奇人が多い。本当に多い。
しかしそのだいたいが流血モノで、波風（いちぶ）九鈴を除いてちゃんと対応すれば普通に接することも可能なのだが、絵梨はそういう面でにおいてこそ厄介だ。
話すことで変態が露呈する人間は本当に扱い・・・あしらいづら

い。
それは・・・・・まぁ、この言葉を聞いてみれば分かる。
「思春期を向かえ、二次成長が始まった男女が発情するのは当然のことだよ」
これだ。一体、西谷絵梨という人間がどういう変人なのかはその台詞で理解できるだろう。
先日の布衣菜の予知夢の内容に端を発した話題で彼女らは談話している。
現在は昼食時間。大型食堂を利用する生徒もいるものの中学生の多くは弁当や購買でのパンなどを教室で食べるものなのだが、今日に限ってこのクラスの男子のほとんどは別室非難中だ。
織神がこんな話題で話をしていると知ってあの保護者が許すわけがないのだが、朽網や四十万は購買の方に行ったまま帰ってこない。
親の知らないところで子供は色々知っていくんだとか、それっぽい言葉を頭に浮かべつつ、僕は傍観。
僕ごときが絵梨に敵うわけがないんだから。やぶ蛇で恥をかくだけだ。
すまん、朽網。お前の手の届かないところで、織神が大人の階段を三段飛ばしぐらいで上がっていってる。
とにかく、会話は続く。
「それは偏見だねー。ない人も居るらしいよ」
「へぇ、そうなんだ？らしいよ、絵梨？」
「よーし。おーけぃ、おーけぃ。そんな逃げ口上は聞きませーん。じゃあ直接訊きますぜ、はづきんは性欲はありますかー？」
「ないねぇ・・・・・、誉さんはあるの？」
「！、ちょっ何で私に振るのっ！？」
「反応が物語ってるね、ほまりん。はづきん、あるってさ」
「ちょ、ちょっぃまっ！」
「楚々絽（そそろ）さんは？」
「ほほー、私に訊くかい？・・・人並みにあるよ」

「その人並みっていう表現が分からないんだけどなぁ」
「というか無難な回答を選んだなー。せこいぞー、わかっち」
「あこちんの言うとおりだよ。だいたいそんなの隠しても仕方ないんじゃないかねー？」
「動物の共通行動だしね、生殖は。だいたい発情しない動物なんていたっけ？猫だって春には盛って鳴くし」
「じゃあ、春だけ異常に発情する人は猫並みなのかな？」
「言葉のあやだね、それは。このまま話を続けると路線がずれるよ、絵梨」
「あー、うん。はづきん、男も女もえっちぃことを考えるものなのです」
「ふぅん？」
「明言するのもどうかと思うのだけれど・・・」
「しぃゆん何言ってるのさー、今更そんなこと」
「絵梨ちゃんは羞恥心を持とうよ」
「えー、わざわざ隠そうとか知らない振りする方が恥ずかしい気がするんだけどな。
　認めない方がおかしいのにねぇ・・・」
「はづちゃん、女性ホルモンとかはちゃんと出てるんだよね？」
「カイナによれば血液中に平均量は回ってるらしいんだけどね。一体どうやって調べたのかの方が気になるよ」
「それならえっちぃことの1つや2つあったっていいんじゃないかな」
「性欲を持て余して――――」
「誉さん、それもういいから」
「いまひとつ女っ気がないのよね、はづちゃんは」
「いや別に積極的に求めてないし」
「いやー、いるよ？意識すればもっと可愛くなるのに」
「そうよ駄目よ。せっかくなのに」
「椎さんまでそんなこといいますか・・・・・」

「色気と性欲は密接な関係があってですねー」
「えりちゃん、それ適当に言ってるでしょ」
「性欲もなければ色気なんてもの身につかないと思うけど？」
「何で僕が色気を身に着けることは前提になってるのかなー？」
「私は健全な女子生活をはづきんに送ってもらうためにだね・・・」
「まぁ、そういうことも大事なんだろうけどね？何かものすごいこと話してますよ？私達」
「ほまりーん、私達は真剣にはづきんの心身について話してるんであって、決してやらしーことは考えてないのだよ。建前としては。
というか話題を振ったのはほまりんでしょ」
「思春期の女の子として性欲を持つことぐらいしないと、と言ってるだけだしね」
「そうよー。後ろにいる真幸だって、年中盛ってるのよ？」
おい、待て。何でそこで話題を僕に向ける？
そこで、僕、飛騨真幸（ひだまさき）の方へと顔を向ける一同。
絵梨はちょうど僕に背を向けるように座っているのだが、それもあって他の位置にいる女子達はこちらを見やすい。
僕は必死に手を振った。
そんなことないです。ありません。ありませんから、そんな目で見ないでください。
織神。どうしてそんな、そうなのかなぁ・・・みたいな瞳を向けてくるのデスカ。ものすごく痛いんだけど！
「この前なんて学校で・・・・・」
そう言って、頬に手をあて顔を振る絵梨。なんだその白々しい演技は。
再び視線を向ける彼女達。首を激しく振る僕。
そんなことは存じません。存じ上げません。というか、何時お前と肉体関係を持った？でっちあげだぞ。彼女だっていうのすらな。
触らぬ神に祟りなしと思って傍観していたらこれか。結局同じってことですか。

くそぅ。他の男子と同じように逃げとくべきだったか。
慣れてるからとか、面倒くさいからだとか考えたのが失敗だった。
「まーぁ、とにかく何らかのアクションがほしいよね」
しかもダメージを与えるだけ与えてすぐに話題を戻しやがった！
「はづちゃんはもっと女を意識すべきよ」
「うーん、遊びがないのかなぁ？」
「そうかもね。アクセサリとか・・・あ、髪を括ってみるだけでも違うかも」
「長めだからそれなりに色々試せそうだしな。あぁ、形から入るのなら、服装だけでなく髪型も変えてみるべきだったかもね」
「女っぽいかっていうより、そういう楽しみ方を覚えてたら他の面で進展があるかもねー」
「おぉ、絵梨がまともな事を・・・」
「それは酷いなぁ」
「んー、ところでさ、朽網君はどんな髪型が好きなのかな？」
「あー、どうだろう？そういうの知らないなぁ」
「知ってたとして、なんでクシロの好きな髪型にするの？」
「いやいやいや、そりゃあはづちゃん、彼に喜んでもらうためだね」
「？喜んでくれるのはいいんだけど、なんか科さんの顔は他に思惑があるように思えるんだよ？」
「何でもありませんよー、本当ですよー」
「でもねぇ・・・・・くしろんのシュミだと今のままが一番いいんじゃないかなー。
下ろしてる方が可愛くはあるし」
「え？朽網君の好み知ってるの？絵梨ちゃん」
「ちょっと幼め（ロリィ）な少女に攻められるのが好きっぽい」
「「・・・・・」」
「こう・・・押し倒されて、馬乗り？下半身を擦り付けられる感じがね・・・？」
ああ、可哀想な朽網。見知らぬところで適当な性癖をでっち上げ

られたぞ、お前。
そしてやっぱり織神はいまいち分からないような顔をして首をかしげている。
どこまでも純粋であってくれ。お願いだから。
話はまだ続き、さくらんぼを結べるとテクニックがあるというのは本当か？とか、口内に性感があるのかとか本当にろくでもない話をしていた。
一瞬ここが男子禁制のどこかなんじゃないかと思ってしまうほど、男子を置いてきぼりにした談話だ。
それを特に恥じらいもなくやってしまうあたりがすごいと言えばすごい。
ああ、このクラスにおいて言えばほとんど女子中と変わらないのかもしれない。
男子の権力が弱すぎるし。この間から1人男子が減って女子が増えたから。
昼食どころか昼休みが終わりかけた頃、我がクラスの男子が帰ってきた。
「・・・終わったか？」
「終わった」
絵梨が仕切って始まった会話であることから、その内容が生々しいものになるということは経験上分かっている彼らは、自分達の理想像を守るために耳を塞ぐことを覚えた。
うん。なんと悲しい話だろうか。
少なくてもあいつが幼馴染でなければ僕もそうしただろうな。耳を塞ぐ前に多くのことを知り過ぎた。
と、朽網と四十万も帰ってきた。
「どうしたんだよ？購買行くにしても遅すぎるだろ」
「うん？何か知らないけれど、荷稲さんに呼ばれたんだよ」
・・・そういうことか。絵梨め、先に手を回していたな。
それに賛同する保健医もどうかと思うけど。保健が貴女の専門だ

ろうが。
「それよりどうかしたの？何か疲れてるように見えるんだけどさ」
「ああ、それは、だな・・・」
いつものように絵梨が破廉恥なネタで盛り上がってた。しかも織神も混ぜて。
そう言おうとして、しかし言えずに終わった。
織神が2人に気づいて駆け寄ってきたからだ。
「お、やっほー。何か遅かったねぇ？」
「ん。保健室に呼ばれてたから」
「あー、何かまたカイナが変なこと言ったの？」
「いんや。割と普通の話だったぜ？」
「ふぅん？まぁいいけどね。ねぇ、クシロ訊きたいことがあるんだけど・・・」
「うん？」
「クシロがロリ少女に押し倒されたりするのが好きって本当？」
何の躊躇もなく、ただ純粋な質問。
穢れなく、その言葉の意味も分かっていないようなしぐさ。
大きな瞳と傾げた首が可愛らしい少女。
そんな少女から出た言葉に、朽網はしばらく固まった。
「・・・・・？ねぇ、クシロ？」
ちょいちょいと制服の裾を掴んで引っ張る織神。
その動作すら無垢過ぎる。
朽網はまだショックから立ち直れず動けない。
動けないまま、めまいで後ろに倒れた。
「大丈夫か釧！？」
慌ててそれを後ろから支える四十万。
そこで朽網は何とか言葉を搾り出した。
「一体どこからそんな知識を・・・というか話を」
僕は何も言わず、幼馴染を指差す。
げっ、という声が聞こえるが気にしない。というか恨みがあるし

な。

何とか立ち上がるまでに回復した朽網は低い声で言った。

「ちょっと廊下に来い西谷」

／

共同訓練を前にした休日。バイトもない自由な時間を、僕はショッピングで潰している。

何だかんだ言って、結局のところ髪留めぐらいは買ってみてもいいのではないかというクラスメートの助言もあり、常時垂らし続けるのも厄介な髪を括るアイテムを購入しようということになったのだ。

準・現界把握との組み手でも、やはり髪の動きは気になっていた。前に動く分には問題ないのだけど、後ろに下がる時には視界を覆いかねず、横に動くと口や目に入る。

切ってしまってもいいのだけど、いまさらボーイッシュな髪型にするのもどうかと思ってやめた。

割と気に入ってるしね。

洗うのは大変だけど、くせ毛などはそれこそ変容で何とかできるという裏技もあるので、実生活にさほどの支障もないし。

ということで僕は、女性が行き交うようなアクセサリの多いショップに適当に当たりをつけて、入ってみる。

クシロはなんだか微妙な顔をしたけど、まぁ、我慢してもらおう。

今日の買い物は全てクシロ持ちだ。

そういった物を買いに行く言ったら、楚々絽さんが『どうせ、当たり障りのないシンプルなのを選ぶんだろう？朽網、ついていって似合うものを根こそぎ買って来い』と半笑いの独特な表情をして提案したのだ。

僕としても、客観的に見てくれる人がいた方がいいと思ったので同意して、その運びになった。

それにクシロも無造作とはいえ一応髪を括っているのだし。
「クシロ、とにかくまずは無難な物からいこうと思うけど、どういう選び方がいいの？」
「いや・・・別にそこら辺の普通のゴムでいいと思う」
そう言ってクシロはカラーゴム輪が１０本ほど入ったものを手に取った。
ゴムの太さは思っていたより細めで、本当に輪ゴムほどにしかない。
「細いねー」
「ん。まぁ、シンプルなのはこれぐらいでいいと思うよ？他にも色々とあるんだし、せっかくなら可愛いのを・・・・」
「可愛いの？」
「・・・なんでもない。ま、太いのって言うならこういうのもある」
今度取り出したのは、ゴムにひらひらがついたようなクリーム色のもの。これはパッケージに１つしか入っていない。
さっきのゴムと違ってこれはどちらかというファッションに分類されるらしい。
「後ろを緩く縛ってみたりっていう使い方をしたりね」
その後も色々な種類の髪留めを教えてくれた。
ゴムにアクセントとしてボンボンがついたようなもの。ゴム自体にラメの織り込んだもの。白いシンプルなカチューシャ。
ゴム然り、挟むタイプの留め具も幾つか。
そのほとんどを籠に放り込み、会計を済ませる。
値段は・・・下着よりは当然安かった・・・けどね？
用途や括り方について言葉を交わしながら、商店街を歩く。
今日来たのはクシロのマンションの近くの方の商店街だ。駅の近くにあるのは僕のアパートの方と同じだけれど、こっちの方が断然賑わってる。
繁華街、というのに相応しく、何より格好の良いというかスタイリッシュというか、そういう店がほとんどだ。

ランジェリーショップやコートばかりを扱った店、巨大電化製品店、大型書店など。

来る度にどこかが潰れて何かが出来てと目新しさが損なわれない、悪く言えば競争の激戦区。

ランジェリーショップに入るのはさすがに悪いので、安価で男女両方の衣服を売っている衣料品チェーンに入店する。

「ズボンとかね・・・女物でいいからもう少し欲しいんだよ」

クシロが男モノのの服を取り除いてしまったから、品薄状態なのだ。

ということで、ジーンズなどの置いてあるコーナーへ。

男の頃もそうだったけれど、一層華奢になったこの体にジーンズが似合うとは到底思えないものの、動きやすくて丈夫な衣類は欲しい。

あぁ、ちなみに華奢というのは外見がということであって、実際はコンクリートブロックぐらいは粉砕できると確認済みなんだけどね。

目に見えた筋肉増加はない。腕も細いし、足も細い。

筋肉のやたらついた女の子もどうかと思うのだけど、ここまで変化の見られない変容も珍しい。

というか、実際自分でも気づかないでやっているのだから性質が悪い。

力加減を間違えたら即人殺しになる可能性があるし、自分の力具合が変動するような状態ではいつ目測を誤るかもわからない。

黒に染まったスキニージーンズをサイズや色合いタイプ別に並べられた棚から取り出す。

「あんまり肌にフィットしていると動きにくいかな・・・？」

「それは人それぞれだろうよ。着比べればいい。試着室は向こう」

クシロはそう言って、カーテンの並んだスペースを指した。

「そうだね」

それもそうだったので、僕は同じサイズのタイプ違いを４種類ほ

ど取ってフィッティングルームに向かう。
「クシロは何か買わなくてもいいの？」
「俺はいい。あんまり服装に気を遣わないし」
「うーん、その割には僕の服装なんかには積極的に色々行動を起こしてる気がするんだけど？」
「・・・・・・」
無言。まぁ、顔から何となく正解の方だと分かるけど。
色々と思慮してもらう立場としては嬉しいものなので、深く追求しないでおこう。
カーテンの閉まっていないボックスの前に着き、僕はその中に入った。

／

結局、スキニーよりは少し余裕のある黒いジーンズを選び、他にも上に羽織れる薄着などを購入した。
葉月は嗜好品の類を買い漁るタイプではないので、楚々紹が言ったとおりに俺が出来るだけ多くの物を勧める方向で買い物を進めている。
ちなみに楚々紹のことを若内と苗字で呼ばないのは、彼女といると親しいというより男友達と接しているような気分になるからだ。
喋り方も仕草も女のモノとは違う。まぁ、男のモノとも違うのだが。
ショッピング自体は嫌いじゃないので、葉月も普通に楽しんでいた。
文具店で8色蛍光ペンやブックカバーなどを購入したり、リサイクルショップを見て回ったり、本屋で医学書を読んだりとゆったりとした時間を過ごした。
医学書・・・それも人体解剖の図解を真剣に眺めている時はどうしようと思ったが。本当、買うとか言い出さなくて良かった。金銭

面じゃなくて精神面で嫌だ。
その代わりに、動物の身体構造を扱ったこれまたニッチな本を欲しがった。
他には年相応のコミックやライトノベルを見ていって、店を出た。
そして最終的に今居る喫茶店に入るという運び。
商店街のメイン通りの裏側にあったこの店はどうやら和菓子を主に出しているらしい。
洋食にアレンジした和菓子を出す洒落た店があるとは聞いていたが、こんなところに出さなくてもいいと思う。
表通りに出せばいいのに。出す予算がなかったのか、それともその時期にスペースが空いてなかったのか。
しかしせっかくそんな店なのに、葉月が頼んだのは普通のお萩と抹茶という何とも渋いものだった。
アレンジだとかいうものとは全く関係ない。
と、言いつつ俺もみたらし団子というチョイスなのだが。
葉月は甘いものが好きだ。お菓子ならキャラメル辺りがお気に入りで、カンロ飴などもよく口にする。
逆に苦いものは駄目なのだが、ニッキは駄目なくせに生八橋は好物なので実際そこら辺はあやふやなのだろう。
「甘いものと渋いものは合うよねぇ」
並んだ三色のお萩を一口一口小さくかじりつつ、時折抹茶を口に含み、そしてさっき購入した専門書を開いている。
「・・・なぁ、それ面白いか？」
今葉月の開いているページには鷹の眼球の構造について図解を交えた解説を載せてある。
中学生の知識でも構造自体は理解できるのだが、専門的な用語が出てきたりするともう意味が分からない。
「ためにはなるよ。さすがに動物の身体構造までは習わなかったしね」
その言い方だと、人体については一通りやってきたみたいに聞こ

える。・・・その通りなのだろうな。
だから『実写図解！人体解剖図鑑』は買わなかったのか・・・・・。
「クシロはどう？能力の方進展はあった？」
「あー、いや・・・コントロールが全然効かないんだよ。強さの方ばかり上がってるんだが」
「それはまた厄介な。制御は一番重要だよ？今度能力テストあるよね、がんばって調整しないと」
「うーん。今は先輩達の念力で俺のを一箇所に押し込めてもらって、何とか感覚を掴もうとしてる」
「ふうん？逆にタカは火力不足だとか言ってたよね」
「いまいち自分の能力のイメージが分かってないんじゃないかな、あれは。ほら、発火能力（パイロキネシス）と似てるから」
「発破系は火球を飛ばすような能力じゃないからねぇ。火花は出てもどちらかと言うと衝撃波メインだから」
「手からしか出せないのにも文句を言っていたな。
・・・・出力系ってだいたい手からモノを出すけどあれなんでだろう？」
「んー、手っていうのは足なんかの他の部位より自分のっていう認識があるからじゃないかな。生活する中で一番意識して使うからね。
自分の思い通りに動き、その様子を逐一観察できる部位。脳に直接繋がって、絶えず命令を受けている眼球は自分を映し出せないしねぇ」
「目からビームとか口から放射能とかああいう能力者もいるけどなぁ」
「そりゃあ、イメージしやすいからね。サブカルチャーの賜物なんじゃない？」
「まぁ、確かに・・・・・・」
そんな会話。他愛もなく揺らめくような、くるると回り込むような。

感触の感想はほとんど意味を成さない理解不能の言葉だけれど、とにかくこの雰囲気は好きだ。
醜い人間に、酷い世界。シガラミとでも言うべきなのか、自分を縛る不可視で不快な鎖の鱗片すらを忘れて、ただ喜びと楽しみとを浮かばせる時間。
この時間が永遠だったらどれほどよいのだろう。
これ以上の展開は、いらない。
ただ、この今ある場所も空気も状況もを閉じ込めて、永劫の繰り返しを再現し続けれるのなら。
それはどんなに幸せなのだろう。

ねぇ、葉月。
君はたぶん幸せで、何も望みはしないのだろう。
捨てられて、使われて、被検体と扱われることを何とも思わないんだろう。
ねぇ、俺は望んでいいのだろうか？
君がどうしようもなく壊れたシステムから解き放たれて、そして自分のために笑える日のことを。

／

学園全体で行われる、年に2度の最大の超能力開発訓練、共同訓練が開始した。
巨大大学（メガキャンパス）を柱に、高校5校、中学校4校、小学校2校の祠堂機関系教育機構を含んだ学園都市の一端。
所属する生徒の数だけでも相当数であり、学園祭を別でやる必要性が感じられないほど賑わいもある。
この期間中、中学生徒は自主性に重視した自由行動を主体に設けられた高・大学生主催のブースを巡り自己学習する。
外からの刺激を受けて、より良い能力応用を促進すると言う考え

から生まれた行事なのだ。
　行動が統制されていないため、諸所で問題が発生する可能性があるが、これは各校教員らや募集された生徒が対処することになっている。
　各地に簡易駐屯所を設けたり、ローテーションを組んで見回りを実施したりと他の生徒と違う行動をすることでまた違った経験が得られるという仕組みだ。
　そんな公に監視の目を光らせている教員や生徒とは違い、明らかに身を隠して動いている者達がいた。
「あー、えぇと。こちら、スワロウ・・・じゃないコウノトリ？いや、舌切り雀だったか？」
　とある屋上で、横になりつつカレーパンを頬張った男性が軽い口調で言う。
「なーんで私に聞くかな？馬鹿。アルバトロス・・・。アルバトロスでしょう、お前のネームは」
　通信相手はそう切り捨てた。
「だってよ・・・・・・。アルバトロ・・・何だって？意味分からんし。分からんものは覚えられん」
「お前にぴったりでしょうが、アホウドリめ」
「てぇーめー、後でしばく！」
「いいから、とっとと話せ。何あったんでしょう？」
　んぁ、という抜けた応答。その後、
「対象を見つけたぞ。大学の門から入って・・・・・・今は入り口付近のスペースを校舎に向かって歩いてる」
「へぇ、大学の方に行ったのね。じゃあ私や皆もそっち行くから、その子の服装とか教えて」
「えーと、白のシャツにパープルのスカート、上にグレーの上着を羽織ってるな。で、髪はポニテ。白いゴムで括ってる」
「分かった。じゃぁ、引き続き監視お願い」
「りょうかーい」

そう言って男は、双眼鏡を改めて織神葉月に固定した。

第5話－　性論談輪。－Ｓｅｘｕａｌ　Ｃｏｍｍｕ－（後書き）

はい。まず初めにすみません。更新遅れました！
理由は何故か進まなかったからというどうしようもないもの。
うわぁ・・・もうすぐテストがあるんですが、ちゃんと更新できるか既に不安ですね・・・・・・。

ちょっと苦手なネタだったのでどうしても指が進まなかったんですよね・・・。
オチを考えていたのでどうしてもやりたかったのですが。

性的ネタ。やっていいものかと悩みましたが、考えてみればそもそも性転換ネタやってるんだから何を今更ってことに気づき書きました。
あんまり色っぽいことがない物語ですが、さらに酷い内容でしたね。
『露出狂、ただしガイコツ』みたいな感じです。
あれでは性的興奮を呼び起こすようなことはないでしょう。
一応そうなるように気をつけてみたのですが、どうでしたか？
女子高があんな感じだ、みたいなことは言いませんけど、結構現実を取ったつもりなんですよね・・・。

この物語、登場人物の思考が老成し過ぎているという自分でも思う難点があるのですが、中学校の雰囲気などは結構自分の経験を元に書いてます。
現実？どこが？と思う方がいるかもしれませんが、

ダガーナイフじゃないにしろ、カッターナイフを常時持っている人物や、人の首筋にカッターナイフを当てる人物（前記と異なる人）や、本当に切りかかった人物（やっぱり前記と異なる）や、血を水

で薄めると本当に綺麗な色になる割合があると言った人物など・・・
本当にいましたしね。

いや、殺伐とした中学生活でしたが。
ただ、彼らは基本的にいい人ですよ。

色恋沙汰は全くと言っていいほどなかったクラスでしたが、
今回書いたような話を男女交えてやったりした記憶もあった気がします（ここら辺あいまいですが）。

だから、現実としてこういう会話がないとは言い切れないと思い切りました。

慣れないことをしたので、ものすごく反応が気になったりしてます。
感想お待ちしておりますので、どうか気軽に書いていってくださいね。

第6話－　能力様々。－Ｃｒｉｍｅｒｓ－（前書き）

先に注意を。
前話の話を引きずってしまったのか、微妙に性的ネタかもしれません。
あぁ、ただ、エロじゃないです。むしろマイナスです。
男に痛い話ですので、一応心構えをよろしくお願いします。

第6話－　能力様々。－Ｃｒｉｍｅｒｓ－

形骸変容（メタモルフォーゼ）は超能力の種類としてはＰＫに分類される。だけれど、これを単なるＰＫに当てはめていいのかは全くの謎だ。

Ｅｘｔｒａｓｅｎｓｏｒｙ　Ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎの略ＥＳＰ。Ｐｓｙｃｈｏｋｉｎｅｓｉｓの略ＰＫ。かなり大まかに分ければ感覚系と出力系。

読心術から始まり未来視、過去視、感覚複製、念言、言霊。あるいは、念力に派生する、発火、発破、発電、撥水、冷却。どれも特徴のあり過ぎる能力ではあるものの、これらにその２つの分類が本当に可能なのか。

念波を出す（・・）テレパシーが出力系と分類されてもおかしくはないだろうし、ならば出力系の尽くが感覚系と同じカテゴリに入ってもおかしくはない。

出すだの出さないだの、視るだの視ないだのと能力を分ける指標はあるようで、実は曖昧なことが多い。

形骸変容（メタモルフォーゼ）関連、あるいは似ているとされる能力について考えてみよう。

ＰＫに分類される形態変身（トランスフォーマー）は、体のあくまでも外見を変化させる能力。肌の色、顔の形、服装も変更できるという変装に特化した能力だと言っていい。

ＥＳＰに分類される認識変換（シー・シー）。これはＣｏｇｎｉｔｉｏｎ　Ｃｏｎｖｅｒｔｅｒの略だ。外見を変化させるわけではないが、相手の自分への認識を変更させることで同じような効力を得ることができる。いわゆる幻覚能力。

そして形骸変容（メタモルフォーゼ）は、体についての全てを総じて変容させる能力。

同じ体を変化させる、あるいはそう見える能力者でもＥＳＰとＰＫに分かれるし、それこそ見た目で判断するなら形態変身（トランスフォーマー）と形骸変容（メタモルフォーゼ）は同じ能力者か類似能力者として扱われるはずだ。

なのに、この2つに関してははっきりと分けられている。
変身と変容は全く別物だと、断言されている。
それは、一体何を根拠に、指標にした結果なのだろうか？
「形態変身（トランスフォーマー）はどう足掻いても変身能力でしかない、ということなんだよね」
黒縁眼鏡をかけた柔らかい雰囲気の青年は朗々とした声で説明してくれる。
「変身というのは、そもそも身包みを着るようなものだ。幾ら形を模せても、性質まではコピーできない」
ここは大学校舎の1つの中。こじんまりした部屋で当番が長机と椅子を組み立てただけの場所で座っているのみというやる気のないブースだ。
「君が能力で体の一部を鉄に変えたとして、それはちゃんと鉄として機能するだろう？
堅いだろうし、酸化するだろうし、電気は通す。
けれど変身能力者は、幾ら鉄の質感を表せたとしても、それはやっぱり元の皮膚なんだ」
「そうだとして、それを発展させていった結果、形骸変容（メタモルフォーゼ）になるって可能性はないんですか？」
「うん、ないね」
即答。自分の能力だと言うのに躊躇なく断定するとは。なかなかすごい人だと思う。
「変容というのは構造を変化させる能力だから、変化した後も元に戻るってことはない。
だけれど、変身はどんなに形を変えたところで元の姿というものは変えられないんだ」
「時間が経ったら戻ってしまうんでしたね、そういえば・・・・・・」
「うん。訓練次第で延ばせはするんだけどね。君の能力は変容する時にだけ能力を使えばいいけど、形態変身（トランスフォーマー）は変身中は絶えず能力を

使っている。
だから集中力に限界が来ると解けてしまうわけ。
まぁ、最近日常的な赤の研究資料(コード・レッド)が公開されるようになって、無意識的、持続的な能力の発現法が大分確立されてきてはいるけどね」
「でも、持続的に使わなくてもいい代わりに、形骸変容(メタモルフォーゼ)は身体全体の変容なんてしたら恐ろしく疲労しますけどね」
「そうなの？へぇ、なるほどね。確かに変身に関して言えば形態変身(トランスフォーマー)は特化しているのかもしれない・・・」
そう言って、彼は机に置いてあった紙コップを取った。中にはコーヒーがが入っていて、僕の前にも同じものがある。
「能力発現の時ってどうしてます？全身のイメージをちゃんと定めないと発動しないんでしょう？」
「そうだね。最初の方は特にそうだったけど、今じゃ慣れてしまったからか、結構咄嗟に変身できるかな。
そこまできっちりイメージを決めてるわけじゃないよ」
「能力の使用回数を重ねていると、よく利用する設定(イメージ)を無意識にストックしていくのかも」
「確かに・・・・僕なんかの場合、変身する人間自体をストックしちゃってるけど、肌の色のタイプとか顔の形のタイプとか・・・何種類かを元に合ってそれを組み合わせるような人もいるね。
無意識にそういったものを取って置いて能力発現の時間を短縮しているっていうのは合ってると思うよ」
「・・・・・日常生活において、咄嗟に変装しないといけなかったり、人物のストックがいるものですかね？」
「いやー、ないよね。ないからがんばって作っているというか・・・。訓練としてそういう実践がいるからね。
形態変身(トランスフォーマー)は少なくても1人分別の顔を持ってる」
「二重生活してるんですか・・・もしかして明日になったら女性になってるなんて事はないですよね？」
「あはは、何で分かるの？」

「・・・・・、どっちが本当なんですか？」
「こっちだよ。
　はは、形態変身（トランスフォーマー）のグループってね、普段部屋を出入りする人が全然違うから人数も多いように見えるんだけど、実は少なかったりするんだよね」
「そりゃあ、いる人間でもいない人間でも作り出せるでしょうね。貴方達なら、曖昧に人物（ひと）を作り出せる」
「そう。使わないようで結構重宝するよ？何をするにも仮初の姿で行えるって言うのは、まぁ、お徳ではある」
「リスク回避ですか？何でもかんでも・・・他人のせいにできる。その人物がいようがいまいが、少なくても”自分”に損が回らないようにする。
　人を騙そうと、人を殺そうと、自分はその事件の登場人物から外れれる」
「その通り。だから結構形態変身（トランスフォーマー）を嫌う人は多いね。まず最初に人格者が少ないとか言われるよ。
　責任回避が当たり前だから、誰もが自分勝手に物言うし、好き勝手やるから」
「まさかと思いますが、美女にでも化けて結婚詐欺とかやってませんよね？」
「あははは っ、何事も試し（トライ）って言うからねぇ・・・」
「もしかしてって前置きしますが、今ここに他のメンバーがいないのってこういうイベント中は狙いやすいとかいう理由なんじゃ・・・？」
「あははははははははははははっ、皆どこ行っちゃったんだろうねぇ？」
「この歴史あるグループの唯一の人格者さんに訊きますが、もしかしてもしかして代々そんな稼業受け継いでるんじゃないですよね？」
「あはははははははははははははははははははははっ、そんな記録は一切残ってないけどね？」

そりゃあ、誰が自分の犯罪歴を記録していくものか。
嫌われているどうのって話の前に犯罪集団じゃないか。
うわっ、何かいきなりよろしくな所に来てしまった感がある。
「何だったら君もどう？対人用のノウハウだったら下手なカウンセラーより情報があるよ、うち」
勧誘されてもね・・・。
「そんな犯罪仲間にされるのは真っ平ですね。というか詐欺師を目指したいわけでもないんですよ？」
という以前に、まずなんで貴方達はそんなことやってるんだと訊きたい。
訓練にしてももっと普通の方法があったはずだ。
「それは残念。
でもさ、君だったらどういうことにその能力を使いたいの？」
・・・、・・。
それは確かにその通りだろう。
形骸変容（メタモルフォーゼ）。
終の終まで突き詰めた、文字通りの意味で究極形態。
これ以上内ほどの能力（かのうせい）を持ち、どこまでも、どこにだって往ける。
それで（・・・）。
それで僕は何をする？
何を望むのか？
・・・・・答えは決まりきっている。
「別に何も、ですね。何にもないですよ。
必要な時に必要な様に必要限使えればいいじゃないですか」
その答えに、彼は笑った。

／

「あーん。なんだそれは。全く変わった例じゃんか」
俺の状況説明に、その高校生か大学生かいまいち分からない先輩

の女性はそう答えた。
接待なのに口調がすごく悪い気がするが、まぁ、年下として黙って対応しよう。
「確かに騒乱念力（ポルターガイスト）っていう能力は聞くけどよ。でもそこまで威力が強くってコントロールが利かない例は知らんなぁ」
と俺の悩み事に対してコメントする。
大らかと言いがたい態度で椅子に座り、対面するように机を挟む俺達。
灯秋（とうしゅう）高校のＰＫ専門のエリアにあった、出力端子について説明しているらしきブースを訪ねてみたら彼女が話を聞いてくれた。
「そもそも騒乱念力（ポルターガイスト）って、サイコ系の初心者を指すことが多いんだ。能力が不安定だから制御が上手くいかない。慣れていないから出力場所を設定できない。
前提として、それほど能力の扱えてない奴らの名称なんだよ。
だから、そんだけ威力があって、なおかつコントロールできないっておかしな話だぜ。
強度がどうだかは知らないけど、縫い包みを破砕できるほど力があんだろ？
そりゃもう、決定的な才能の欠落なんじゃねーの？」
聞いてくれるのはいいのだが、かなり酷いことを言ってくれる。
正直落ち込む。
才能不足。確かに俺の能力には決定的に標準というものがない。
それは致命的と言っていいのではないだろうか・・・？
相手を選べないそんな力、自分の身を、自分のみを守ることしかできないじゃないか。
もし本当にこれ以上の発展がないようだと本当に使い道のない能力だ。
「まーぁ、そういう例を知らないから何とも言えないけどさ、私の知り合いに能力使うとボンバァーって体中が燃え上がる阿呆がいたんだ。もちろん今は克服してんだが。

そいつ紹介してやろう。同じＰＫ同士何か得るものがあるかもしれないしな」

おおぅ、結構優しい人だ。

「ま、気休めだけどさ」

・・・やっぱり酷い人だ。

そうこう意見を裏表ひっくり返している内に、その人はメモ用紙に色々書き込み終えたようで、それを俺に渡してくれた。

書いてあるのはどうやら、どこかのブースの名前とグループ名、それからさっき言った知り合いの苗字のようだった。

「どこのブースに居るか書いといたから、暇な時によ寄るといいさ。で、他に何かないかな、話」

「うーん、それじゃあ、強影念力（サイコキネンシス）って3等級の能力ですけど、一体どれぐらい高度なものなんですか？

いまいち分からないんですよね」

「いやいや、普通にすごい能力だろ？3等級以上の能力者なんてそうそういねーじゃんか」

・・・・・居るんだよなぁ、すぐ近くに。

「俺の友達は2等級です」

「・・・ちょい待ち、中学生・・・だよな？」

「中1です」

「で、2等級？」

「はい」

「何の能力者だよ、それ」

「形骸変容（メタモルフォーゼ）です」

「・・・・・・」

腕を組んで天を仰ぐ先輩。沈黙を保った間が続き、それから一言。

「それはもはや突き抜けて化け物じみてるな」

確かに、思わないでもないんだけども。というか人の友人を化け物って言わないでほしい。

「強影念力（サイコキネンシス）はさー、極めれば結構な財産だぜ？

手足使わなくてもある程度のことはできるし、何より弱点の少ない超能力だしな。

相手を圧縮して潰すという必殺技があるしな。あいつら反則だぜ」

俺が人形を破砕させてしまったのはたぶんその逆のことをやってしまっているのだろう。

一箇所に集めるべき力の方向を、内側から外側へと、全方向に開放するようにして。

「3等級・・・3っていう数字が悪いのかねー？

いいか？まず1等級の能力・・・っていうのはないんだ。これは今ある以上の能力が出てきた時の余裕（スペース）。化学で電子殻の名称がKで始まるのと同じな。

で、2等級・・・つまり事実上の最高等級。この時点で突き抜け過ぎている能力者。論外。基本的にエキストラな連中。

それから3等級。ここが事実上の限界ってやつだろ。大抵の能力者のゴールかな。

2等級っていうのは普通の能力とはちょっと毛色の違うところあっからなー」

「確かに1等級の能力って聞きませんよね・・・」

「2等級だってそんなに種類ないはずだぜ」

彼女は形骸変容（メタモルフォーゼ）、時限拡張（ゆめごこち）、時行割断（メトロノーム）、空想絵空、神の託宣・・・・・と指を折りながら数えていく。

あまりないと言いつつ結構スムーズにそれらを口に出せる辺り、葉月と同じで超能力オタクなのかもしれない。

「結構あるじゃないですか。・・・神の託宣って何ですか？」

すると彼女は難しそうな顔をした。どうやら表現のしにくい能力らしい。

名前に”神”が出てくることからなんだかすごい能力というのはわかるのだが。

「言霊の上級者のことを指すらしいけど、よくわかんないんだよな。

そりゃ、地球の裏側までを範囲にして能力でも使えれば、最強を

名乗るに相応しいかもしれないけどさ。そんなの無理だろ？
それにどう足掻いたって言霊は動物には効き目が悪いからなー。
そんな仰々しい名前で呼ばれるような能力になるとは思えないじゃん？」
「だいたい科学者が神がどうだとか言ってるのもどうだと思いますが」
「まーね。私の炎海紅泥ってさ、最高でだいたい半径３５ｋｍぐらいの地面を高熱で溶かして火の海にしちゃう能力なんだよ」
・・・絶対、実際にやってほしくない能力だ。少なくても日本がなくななるじゃないか。
簡単に言ったが、それは間違いなく3等級の能力だろう。
「これでも結構強いとは思うぜ。でもさ、これでも最強は程遠い、らしい。
学者が言うにはまず不意打ちに弱い。でもって、咄嗟に手加減できないっていう、まぁ、私の癖もあるから、不完全なんだと。
せめて無意識に能力をセーブする技術を身に着けろだってさ」
「そんな能力持って、しかも手違いで大陸溶かしてしまうような状態で、何で貴方はここにいるんですか・・・・・」
「おいおい、私より危ない奴っていっぱいいるぜ？
空気中にある微量の水だけで高層ビルさえ切り裂く出鱈目馬鹿とか千里眼に座標転移を掛け持ちしてる完全転移者とか」
水だけで何でも切り裂く・・・・・斬刀水圧か。ものすごく波風の将来が不安になってきた。
空気中の、と言うけれど、人体には水分なんて腐るほどあるんだし。
彼女のその知り合いを超えなければいいが。
「でも、そん中でもやっぱり強影念力は別格なんだぜ？
見えない力とは言ったもんじゃん。圧力を加える能力でもないのに物体を掴み、圧縮できる。それだけならまだしも能力波すら防げるシールドにだってなるだよな、確か。

それに特化したのが・・・何だっけ？えーと・・・・・・・反響汜（バウンディング・エコー）だっけか」

「応用が利く能力は総じて等級が高いですよね」

「まあな。自由度の高い念力系とか千里眼系とかは高いよな。私はこの力に結構愛着あるけど、やっぱどうしても燃やす、溶かすに特化し過ぎてる気がするよ。

ま、火力ならそうそう負けないね」

「その域までいったら勝ち負け関係ないと思います。

でも、それこまで等級の上げれる能力者って少ないですよね？」

「ああ。でも等級は低くても結構自分なりに応用して生活を謳歌してる奴はいんな。ほら、あいつ」

そう言って彼女は、別のところで生徒に対応している青年を指差した。

気弱そうな顔をした体の細い、だが長い人物。

「あいつは掌を覆う程度にしか火が出せないんだけどよ。夜な夜な街を徘徊しては建物の壁に火を浴びせてる。燃えるか焦げるかの瀬戸際の緊張感が快感らしい」

「・・・それは放火魔です」

それから、と言って次は裏方の方でペットボトルで水分補給しているポニーテールの女子を指す。

たぶん高校生ぐらいだと思うがよく分からない。

「あいつは・・・高校の方のグループ繋がりだからいまいち能力は知らないけど、人気の少ないベッドタウンをうろついて人の皮膚をギリギリ血が滲む程度切り裂くのが好きなんだとか言ってた」

「警察に連れて行ってください！」

「ほら、いるじゃんそんな妖怪・・・カマイタチだっけ？」

けらけらと笑う彼女。

「笑い事じゃないですよ！」

カマイタチの方が絶対マシだ。その女子高生はどう考えても危ない犯罪者の類に分類される。その内エスカレートする気がひしひし

とする。
「ま、PKってそんなもんじゃん？等級がどうのとか能力がどうとかあんま悩むなよ、少年」
最後に、いいことを言ってまとめようとする彼女。
残念ながら話によろしくないことが混ざりすぎて全然綺麗にまとまってない。

／

あまり当てという当てもなく彷徨っていたら、声をかけられた。
「よぉ彼女、どうちょっと俺達の話聞いておいて、まぁ正直言い感じのしない男達が3人。
この言葉が常套句かどうかは置いておいて、まぁ正直言い感じの肉質。その2人に付いているだけのような特徴の薄い男。
分かりやすい金髪の長髪。笑うという威嚇法を取る黒い短髪の筋
あんまり関わったことのない人種だ。
タカとはまた違った不良。いや、タカはあれで根の優しい人間だから、これこそが不良なんだろう。
良くあら不(ず)で、不良。では彼らはどこが駄目なのだろう？性根なのか、魂なのか、精神なのか。まぁ、何でもいいや。とにかく何かが腐っているのだろう。
少なくてもか弱い少女に暴力的な欲情を向けるのはどうかと思う。
織神葉月という女子はそれほどにも美味しそうに見えるのか。
こういう類は返事でも返したものなら面倒なことになるらしいのだけど、無視しても結局は突っ掛かれるのだろう。
そうと分かって無視してみる。
前を向き直して、そのまま何もなかったように歩き出す。
「おいこら、無視すんなよ」
数歩と歩かないうちに肩を掴まれてしまった。
振り払ってみようとする前に、腕を引っ張られ、人通りの激しい

廊下から少し入り組んだ場所へと連れて行かれる。
躊躇なく、力を入れての行動。やることはもう決まっていると言わんばかりに。
ほんの数十歩ほどの距離なのに、そこは誰も来ない死角になっていた。
横に目をやると掃除器具入れの大型ロッカーが見て取れる。なるほど、一応廊下だけれども、そういう倉庫として機能しているらしい。
角を曲がった小スペースにある掃除器具置き場。ブースもないから人も来ない。角を曲がっているのだから人に見られない。
「ったく、こいつ、すかしやがって」
「何？怖くて声も出ないってか？」
ゲラゲラと笑う顔は不愉快だ。むやみに顔を近づけてくるのが鬱陶しい。
とりあえず、口臭は気にした方がいい。
壁に押さえつけられる形でいる僕に、彼らはさらに畳み掛ける。
「素直についてこればよかったのにさぁ。あんな態度取られちゃったら、お兄さん達優しくできないなぁ」
薄い男がそんなことを言う。この男、実際付いてきてるだけで何もやってない気もするのだけど、どうなんだろうか。
「そうそう。らんぼーになっちゃうぜぇ？」
「ついでに激しくなっちゃうかも～」
ひゃはは と笑う彼ら。一体何が面白いのだろうか？
考えてみよう。
か弱そうな少女を1人うまく引きずり込みました。抵抗できない女の子を今から好きなように扱えます。さぁ楽しみましょう。
何が面白いのだろうか？
性交渉が？あるいは加虐的なこの状況が？
・・・・・理解不能だ。
それに彼らの考えにはかなり齟齬がある。

実際には、か弱そうに見えるだけの少女にひっかかりました。どうしてやろうか考えている少女に今から好きなようにやられます。さぁ苦しみましょう。

そんな感じだと思うのだけど。

「あはー、悲鳴上げたって無駄だぜ？俺は声を消せる能力者なんだからよ。

思う存分いい声で鳴いてもらおーかなぁ！」

あぁ、なるほど。だからこの真昼間に、こんな行動が取れるわけか。

いや、むしろ大勢の人がいる昼間は安心感があるからこそ隙を突きやすい。

能力者次第では絶好の狩場なのかもしれない。

誰も見えない、誰も聞こえない。複数だからやりやすい。皆でやれば怖くない？

そもそもこういったことをされた被害者が訴えることは少ないらしいし、だからこそ増長するんだろうな。

なるほど。

なるほど、ね。

「悲鳴が聞こえない、か」

僕は笑った。

「じゃあ、声が漏れるほどに叫びなよ？」

そう言って、思いっきり――――

／

「う〝おぇ・・・・・・」

「何気持ち悪い声上げてんのよ？アホウドリ」

「・・・智香、救護班呼べ。大至急」

「っちょっ、まさかはづきちゃんになんかあったんじゃないでしょうね！」

「いや、対象が不良に絡まれたんだが――――」
「ちょっと待てや。お前、それ見てて何もしなかったと？」
「いやいやいや！本当に危なかったら助けに行ったって！」
「まぁ、いいや。お前は後でひねる。で？」
「・・・・・様子見てたら、対象、不良たちの・・・」
「の？」
「股間を思いっきり蹴りやがったんだよ！」
「・・・・・」
「入念に踏み躙(にじ)りやがったんだよ！」
「・・・、・・・・・・」
「あれ、たぶん潰れてると思うんだけどさ？」
「・・・・・、・・・・・・」
「救護班必要だろ？」
「・・・いいじゃない、自業自得よ。今月の標語は『女の敵は許すな、潰せ、去勢しろ』に今決まったわ」
「おい、俺らって一応裏方で生徒の非行を監視するっていう任務があるわけだよな？」
「悪は死にました。それでいいじゃない」
「新たな暴力(あく)が生まれた気がするんだが・・・」
「あー、もううるさいなぁ。いいのよ美少女は何をやっても。ごちゃごちゃ言わずに、とっとと証拠隠滅しなさい。あ、不良達のあれは治さないように言っといてよ？」
「・・・・・」
男は何も答えられない。

／

煉瓦の敷き詰められた道。整えられた何の変哲もない地面。
その一部を区切った領域に張られたテープの×印。周りには『Ｋｅｅｐ　ｏｕｔ』の文字。

数刻を待って、その目印の場所で爆音が鳴った。
「――――と、まぁ、こんなもんかな」
体つきのいい高校生がそう言って、その爆破実演用に区切った空間から後ろの方に向き直った。
「所謂、簡易地雷。特定場所に能力波を留まらせ時間差で発動させるという技術（スキル）だ」
ブース側が用意したパイプ椅子に座りつつ俺は、前での説明に耳を傾けている。
発破系能力者のグループのやっているブースをとりあえず手当たり次第に当たってみようと近い所から訪れてみたのだが、これで3つ目。
既にかなりいっぱいいっぱいといった感じだ。
数をこなすには1つ1つの濃度が濃すぎて精神的に疲れる。
「威力を高めて、建物の解体なんかに利用できるもので、火薬を使わないのと、精密な制御が利くってことから就職にも有利。習得しておいて損のないテクニックだよ。
中学生はもうすぐ能力考査と体育祭があると思うが、その時にもかなり役立つ。
知っての通り体育祭は学園内の特定区間でのバトルロワイヤルがメインイベントだ。
発火能力（パイロキネシス）者と違って火球を投げればいいというわけにはいかない能力だからこそ、上手く対象に衝撃波を与える必要があるんだ。
先に仕込んでおいて時間差で爆破、というのが基本的な攻撃方法になる。
掌から衝撃波を出すっていう手もあるっちゃあるんだが、攻撃が単直で何より狙いを定めにくいんでお勧めできない・・・」
話が時間差爆破技術から自分の体育祭の時の苦労話へとずれてきた。
いい機会だから、この内に外に出よう。
どこの話を聞いてもそうなのだが、いまいちそれを自分の能力に

生かせる気がしない。
確かにあの高校生が言うように時間差で、自分と距離の離れた場所を攻撃できるというスキルは便利なものだ。
だが、そもそも火力・・・というより爆力の足りない今の状態ではあまり効果のあるものでもないだろう。
ああいった応用があるのを知ったということは確かにいい経験ではあるが、それを自分でできるかどうかは怪しい。
俺の能力は今のところ、指の摩擦でちょっとした火花と爆風を起こす程度なのだ。
ブルーシートで仕切られたブースから出て、少し歩く。
しかし大した目的地があるわけでもないのだ。すぐに歩みは止まった。
何か息抜きになりそうな催し物はないだろうか。
ショーのような見るだけで楽しめそうなもの・・・・・・。
辺りを見回してみる。
さっきのブースのように実演を説明を交えたもの、印刷した資料を配っている所、実際練習を行っている所・・・・・色んな方法を取っているブースが一定の距離を保ちつつ存在している。
しかし、魅せるタイプの見せ物はここら辺ではやっていないようだった。
と、何かが乗せられた担架らしきものが少し先に見えた。
何だあれは。
気になり見えた方へと足を進めると、担架が3つ運ばれているところのようで、俺と同じような野次馬が何人もいる。
乗せられているのは感じの悪い男達でその誰もがぴくりとも動かない。
死んでいるか、気絶しているか。そのどっちかだろう。たぶん後者だろうが。
隣にいる年上らしき学生に聞いてみる。
「どうしたんですかね？」

「あぁ。校舎で倒れてたらしいんだけどね・・・。あんまりよろしくない連中で、どうせまた何かやらかしたんだろうって誰かが言ってたよ」
「見たところ、あんまり外傷ないみたいですが。あれ気絶してるんですよね？」
「・・・あー、局所集中攻撃・・・というか、ね。潰されてるらしいよ？局部が」
俺は思わずその担架の方へと振り返った。
改めて見ると下半身に白い布を被せられている。もしかしたらその下には血の滲んだ衣服があるのかもしれない。
「・・・酷いですね」
「まぁね。でも彼ら、人気のない廊下で見つかったとか言ってたから、女の子にでも悪戯しようとしたんじゃないかな。
能力に頼って昼間からそういうことする連中、いるらしいし」
「で、女子に返り討ちにあったと？」
「じゃないかな？ホント、怖い女性もいるもんだよね」
「怖いですね、そんな人物が近くにいると考えると」

／

豪快というか、犯罪意識の甘いというか、とにかくそんな炎海紅泥の発火能力（パイロキネシス）者の居るブースから離れて一息。
もう昼時を少し過ぎてしまっている。
食堂や購買部、この期間に限って出ている非営利的な出店などそのどれもがたくさんの人に占拠されていた。
もしゆっくりと食事が取りたければ、もう少し待たなければならないだろう。
さて、どうしたものか。
そう思いつつ、空を仰ぐ。
雲ひとつない、晴天。時間的にももうすぐ南中が訪れそうな頃合

だ。
この陽に当たり続けるのは勘弁願いたい。
せめてどこか日陰のある所に行きたいな。
――――そこで、体にどんという衝撃があった。
「うわっち！」
そして声。
視線を下に向けると誰かとぶつかってしまったというのが分かった。
考えながら、上を向いて無意識に歩いていたらしい。
不注意にもほどがあった。
「ごめん、前見てなかったよ」
謝りつつ、その誰かを見てみる。
短めに切られた髪をした自分と同じぐらいの年齢の人物だ。
髪色は黒。漆黒という感じのツヤのある髪。伸ばせばさぞ綺麗だろうにと、勝手なことを思う。
と言うより、この人物は男なのだろうか、女なのだろうか？髪を伸ばしていないのと、顔が中性的だから判りづらい。
服装は黒い長ズボンに白いシャツという実に簡素なもので、細身の体に合っていた。スタイリッシュとでも言えばいいのか。
ただ、体の起伏がぶかぶかのシャツのせいか、あるいは発育のせいか男女の見分けが付かない。
うん、どうなんだろう。
ちょっと前の葉月もこんな感じだったなぁ。
「うんにゃ、オレの方もうっかりしてた・・・」
と、そう言って彼（暫定だが）は、それからん？と疑問符を浮かべた。
顔をずぃっと近づけて、それからぱっと離す。
「あれ？オマエもしかしてクサミクシロか？あーれ、あれ？」
何で俺の名前を知っているのかという考えが浮かんだが、それを口にする前に彼はさらに聞き捨てならないことを言った。

「つーか、何だぁ。じゃあ、オリガミハヅキはここには居ないかよ」
「ちょっと待て。なんで葉月のことを知っている？」
「・・・んぁ？何言ってんのさ、形骸変容（メタモロフォーゼ）の能力者が有名人じゃないわけがないだろ？」
うん、確かにそうかもしれない。２等級のしかも極上の希少能力者。その噂がそこらに広まっていてもおかしくはない。
だが、
「俺の名前を知ってるってのはどうなんだ？俺はただの騒乱念力（ポルターガイスト）だぞ？」
すると彼はきょろんと瞳を瞬かせて、ふんと溜息を吐くような、あるいは一心地つくような素振りをした。
「ぁあー、ま、そうだわな。うん、それは確かに失言だったか。でもよー、オマエも有名人ちゃー、そうだぜ？」
「え？」
「んにゃーもうちょいっと自覚しなさいな。ちぇっ、オマエを探せば、オリガミにも会えると思ってＰＫ関連のブース手当たり次第に当たってみたのにさー」
「どういうことだ。君は一体何を言って――――」
「いや、気にすんな。ただ見てみたかっただけさ。うん、もういいや。オマエに会えたしな。目的は半分果たしたようなもんだ」
彼はたぶん、などと付け加えて、かかかっという擬音が合うような笑い方をした。
「君は何だ――――？」
「おぉう。変化球だな。オマエの気になるのはオレがアイツに何かしないかってことじゃないのかよ？
・・・あっちゃ、いや、オレが『気にすんな』って言ったのか・・・・」
彼、かなり頭が逝っちゃってるらしい。
いや、初対面でこういうことを言うのは何だと思うが。
けどやっぱり、そう思わずには居られない。可笑しな喋り方をす

る奴だ。
「ま、オレのことはあんまり知る必要もないだろ。どうせもう会わんと思うぜ。
そだな。名前だけ教えとくか。記念だ記念。オマエみたいな奴に覚えてもらうのも悪くはないかもな。
――――オレはムツキ。ははっ、覚えていてくれ。その内生きるか死ぬかする人間だよ」
彼はそんな自分に不吉な言葉を残して、こっちの反応を待たずにさっさと踵を返して行ってしまった。
・・・・・・。
というか、本当に名前だけ言っていきやがった。

／

招待というのは、例えば手紙で招待状を送ってくるとか、あるいは実際尋ねてきてするものではないのだろうか？
などと思わずにはいられない。
そりゃあそうだろう。
『迷子のお知らせです。祠堂第一中学校、一年織神葉月さん。保護者の方が第3校舎の2階カフェテリアでお待ちしていますので、聞こえてましたらそちらにおこしください』
なんてアナウンスでの招待なんてされてみれば、普段蔑ろ（ないがし）にする一般常識というやつに頼ってみたくもなるというものだ。
いや、そもそも、保護者って何ですか。実際そんなのいないし、実質的には岱斉がそうなるのだろうけど、彼が外に出てくるなんてありえない。
だいたいなんでカフェテリアで待っているのか。そんな保護者はいないだろう。
よくもまぁ、こんな出鱈目な放送を大学中でやろうと思ったものだ。

そんなことに半分関心しながら、カフェテリアに向かう。
本来カフェテリアだって、営業していないはずだ。学園中の生徒が動くこの期間は混乱が予想されるため、こういった商業施設は閉店していると書かれていた。
本当に非営利的な店だなと思うものの、確かにカフェでゆったりしているような雰囲気でもないのだ。
どちらかというと、歩きながら食べられるものが好まれるようなお祭り騒ぎ。
まぁ、大学や店側の考えがどうなのかはいまいち分からないけれど。
階段を上がって右に曲がれば、そこには随分立派なカフェテリアが存在していた。
焦げ茶基調とした落ち着いた空気を流す店内。
営業してないためか、ＢＧＭは流れていないけど、かかっていればさぞ心地よい空間になることだろう。
その店の、ガラス張りの端のテーブルの１つに招待主は居た。
「こんにちは。どうぞ、座って」
ドライヤーの熱にやられて髪が茶色に変色した、といった感じの女性。
髪を肩辺りで一纏めにしていて、少々つり目がちの瞳をよこしてくる。
その横には男。あろうことか髪を濃い赤色に染めて、耳にピアスまでしている。大学生とは考えにくい雰囲気をかもし出しているのだけれど、実際の年齢はよく判らない。
そのテーブルに近づいたところでもう１人の男が椅子を引いてくれた。
そんな紳士的な行動をした方の彼は、どこにでもいる様な感じの風貌だ。
中背で細身。目が隠れるほどに黒髪を伸ばしている。
他にも、僕の向かいに数人が見て取れた。

まぁ、とにかく、僕がこの椅子に座らない限り話は進まないのだろう。
僕はゆったりというよりは緩慢な動作で木製の曲線を描く椅子に腰掛けた。
一息入れてから、口を開く。
「僕に何の用？ああやって呼んだってことは、まともなお話なわけだよね？」
あのアナウンスはいわゆる保険だ。彼らのではなく、僕の保険。
大っぴらに呼ぶことで、僕が呼ばれたという事実を大衆に残すという保障なのだ。
そして呼ばれた先で何があっても、その証拠を隠滅しきれないというアピール。
あえて相手に都合の良い条件を提示することによって、より確実に相手を誘導するという1つの方法だ。
まぁ、もっとも、都合が良いというのは外見だけの話で、その中身がどうなっているかなんてそれこそ行ってみなければ分からないだろう。
相手がただ単に僕を殺すつもりなのなら、そんな保険は全く意味をなさない。
事後的に働く保険なんて、死んだ後には役に立たないのだから。
「ええ」
僕のちょうど正面に座る茶髪の彼女がそう応答し、
「ほら、瑞流（みずる）。ぼうっとしてないで早くコーヒーでも淹れてきなさい。営業してないんだから、誰かがやんなきゃ何も出てこないのよ？」
赤色少年の方に目をやって命令した。
・・・・・パシリ？
「・・・ま、いいけどよ。その前に1つ質問」
今まで何かを我慢していたような口調の彼。
「ん？」

「俺は今日、朝早く起こされたわけだが・・・」
「そうだっけ？」
「栞が織神葉月を監視するとか言って、わざわざ建物の屋上に待機させられた上、能力まで使って彼女を追尾させられたわけだが・・・」
「そうね」
「そういう作戦にはコードネームがいるからって、アルバト・・・」
「アルバトロス。だからあんたはアホウドリなのよ」
「・・・・・ほんでもって、今の今までアホウドリアホウドリと呼ばれているわけだ」
「で？」
「そこまでやって何で今になって、その彼女に堂々と接触してるんだ？」
「あー、だってさぁ、・・・飽きたし」
「・・・・・あ？」
「というか、考えてみなさいよ。いい？そもそも私達ははづきちゃんの勧誘が目的だったでしょうが。
何でわざわざそんなこそこそしたことしなきゃなんないのよ？」
「おい待て、つまりあれか？別に必要のないことをやらされてたわけか、俺は？
つーか、じゃあ何であんなことやったんだよ！」
「だーかーら、言ったじゃんさっき『飽きた』って。何となくよ何となく。
・・・・・気まぐれ？」
ぐおう、と赤色の彼は頭を掻き毟った。
見た目ヤンキーだけれど、この人本当にただのいじめられ役っぽい。
「分かったら早く淹れてきなさい」
シッシと手で払われて、彼は首を垂らしてゾンビのように店の裏に消えていった。

・・・・・さっきの一連のコメディーは無視しよう。
「勧誘ってどういうこと？」
能力的に超少数派な僕みたいなものを引き入れるグループというのは存在しないはずだ。
グループは同系統の能力者同士の集まりのことを指す。だから希少能力（レア・スキル）を寄せ集めたグループなんてありえない。
勧誘、される理由はあまり思いつかない。
だいたい、そういった面倒くさい話、岱斉が全部まとめて処理してくれてる気がする。
学校でのクラブやグループならともかく、あまり特殊な係わり合いはまずいのだから。
「私達はえーと、まぁ本当は名前がないんで公式名じゃないけれど、ウラカタの人間よ」
「裏方？」
「そ、ウラカタ。ひらがなでもカタカナでもローマ字で筆記してもいいけど、とにかくウラカタ。仮称だけどね。
あ、組織っていう呼称はなしね。『名称がなくただ組織と呼ばれている』っていう設定が多いこんにち、差別化が肝要なの」
・・・それは一体何に対してだろうと思わないでもないけれど。
あと、裏方という名称もどうかと思う。うらかた、ウラカタ、URAKATA・・・。いいか裏方で。
「ウラカタは学園都市の治安維持の一面なのよ。警察はもちろん、生徒の立候補で集まる自治組織が表側、そして私達が裏側。
住み分けができてるの。彼らが街の監視や法的な取締りを行い、私達が違法な掃除を行うって具合に」
「違法な掃除・・・何、危険因子を叩くってこと？」
「まぁ、そういう感じかな？色々な活動があるから。
証拠不十分で法的に裁けないような悪人を潰したり、色々と人間としてどうかっていう人物を不能にしたり」
「それって仕事人・・・」

「怨まれ過ぎた人を依頼で地獄送りにしたり！」
「人を呪わば穴2つ・・・？」
「イメージはそんな感じよ」
「何かすごく金を取ったり、死後の逝き先を強制決定しそうな活動内容なんだけど・・・」
「大丈夫よ、一応非営利団体だから。お金とかお上から結構もらえるし」
そう言って彼女は手で、パーまると形を作って見せた。
５０万。おそらく月給。
おおぅ。おそらくサラリーマンが泣いて逃げ出す高待遇だろう。
「ボーナス、諸々の手当て有り。
それに活動だって基本的に事務所でへばっていればいいだけだしね。１ヶ月に1度なんかあれば言い方よ。
ウラカタって言っても結構人数いるのよ。だから話が回って来ることも少ないのよねー。
どう？やってみない？貴女ほどの能力者なら大歓迎、というかだから勧誘に来たわけだけど・・・」
確かにアルバイトとしてはありえないほどの高収入だろう。気軽に入れるようなモノではないけれど、別にそれほど気にするようなことでもない。
ただ人を飼うだけに高額を払い続けるだけの価値がある組織。非公開、非合法に不明名称。
彼女は軽く言っているが、その仕事内容がどうであれ、やっていることのベクトルよれば、ただの暴力団の構成員にとすら取れる。
まぁ、それが暴力団であろうと何であろうと、今更どうでもいいことか。
ちょっと前に、形態変身（トランスフォーマー）の彼に犯罪集団はご免なんて言ったけど、実のところあれは気乗りしなかっただけだし。
クシロはそんなものに僕が関われば、難色を示すのかもしれないけれど、それもやはり今更だ。

あそこに比べれば極道などまだ甘い。仁義があるのなら、その方がいい。

あそこにあるのは完璧なる現実主義と合理主義と研究者の欲と業だけだ。

給料は良い。活動がほとんどないのならば、今ある親父さんとこのバイトとだって両立できるだろう。

それだけあれば、クシロにお金を貰わないでもやっていけるかもしれない。

だけど、

「断るよ。そういうモノに関わるのは面倒くさそうだから」

組織のことを考えると、こんな面倒そうな所に関わるのは得策じゃない。

けれど、彼女はその言葉を全く聞くつもりはないようで、笑みを崩さなかった。

何か僕を引き込む切札（カード）を持っているって顔だ。

むぅ。そういうの、隠されるのは面白くないなぁ。持ってる分には問題ないんだけど。

彼女は切り出す。

「はづきちゃんはグループに入ってないでしょ？」

「まぁ・・・」

「だから能力に関してあまり多くの情報や知識を得ることもできない。能力訓練だって、『様々な対応が求められる状況』がない以上、状況対応能力（メタモルフォーゼ）の向上は望めない。

独自で色々やってるらしいけれど、限界があるでしょ？」

確かにその通り。無言でそれを肯定する。

学校生活でやる能力訓練のほとんどができないのが、僕の現状だ。

でも、それは仕方ないことだろう。

けれど、彼女は言った。

「能力者相手の実践なら経験は詰める。私達の組織には形骸変容（メタモルフォーゼ）の資料がある」

「え・・・？」
思わず出たその声に、
「前の形骸変容（メタモルフォーゼ）はウラカタに所属してたのよ」
彼女は畳み掛けた。
・・・・。・・・・・・・・、・・・・・・・・。
それなら、資料があるのはおかしくはない。
前代の彼女の話だけでも十分勉強になるし、もしかしたら彼女のやっていたトレーニング法や記した研究文書があるかもしれない。
それは確かに僕には美味しい話だ。
充分に切札だった。
彼女は連絡先の書かれたメモを寄こした。
それから当然のようにメンバー達の紹介。というより、能力紹介をする。
「私は発電、あの子は冷却。で、こっちが変身で、あのアホウドリが思体複製。あと1人、ここにはいないけど人見知りの子がいるわ。ま、よろしくね、お姫様」
何も返さないのも嫌だったので、お姫様と呼ばれてもと言ったら、じゃあお嬢にする？と微笑みで返されてしまい、沈黙。
そうこうしている内に彼女は他のメンバーを引き連れて行ってしまった。
何ともまぁ、締まらない終わり方。

あぁ、オチとして――――
3分後に店裏から本格的なコーヒーを持ってきた赤色少年が出てきて、呆けた顔で、
「あれ？あいつらは？」
と一言。
律儀にコーヒーを僕の前に運んでから、

「あんにゃろー！！！」
と叫んで走り去った。
うーん。やっぱり何か取り残された感があって嫌だった。

／

そのブースはガラガラだった。
長机にパイプ椅子を並べただけのやる気のないスペースに男1人が座っているだけという、形態変身（トランスフォーマー）のグループの主催するブース。
俺、佐々見雪成（ささみゆきなり）はその椅子の1つに座り、彼と対面している。
「瑞流（みずる）が言ってたんですけど、先輩、ここに織神葉月が来たらしいじゃないですか」
そう言って、お茶の入ったコップに口をつけた。
先輩ものんびりとコップを回したりと弄っている。
「形骸変容（メタモルフォーゼ）の子かい？来たよ」
「・・・どうですか？先輩の見立ては？」
うん？と首を傾げる先輩。うん、この人は少し天然なところがあるからな。
あんまり人の意図を汲み取ろうとしないというか・・・。たぶん取れないわけではないと思うのだが。
「ほら、先輩の性格診断ですよ。結構当たるじゃないですか。これから、一緒に活動することになりそうなんで、一応聞いて見たいんですよ」
あの幼げな風貌で、様子でハイランクの能力者である元少年の人物像がどうであるか、気になるところだ。
やることが元男の行動とは思えないっていうのもあるのだが。
「えぇ？あれかなり当てずっぽうなんだけどなぁ・・・」
「それでいいですから」
うーんと少し渋る様子を見せつつも、目を閉じて彼女に会った時の印象を思い出そうとする先輩。

それも終わったらしく、お茶を一口含んでから彼は言葉を紡ぐ。
「愛玩動物だけど、観賞用。毒どころか、無闇に手を出したら引きずり込まれて食い尽くされる感じかな」
ワニか、ワニなのかそれは。
「イメージは猫。飼われていようが野生を忘れない。面倒をみてくれる程度に愛想は振りまくけど、基本独りで何でもできるタイプ。いや、そもそもあんまり人に関心がないんじゃないかな。たぶん僕のことなんか夜には忘れてるよ」
頭の中でワニと猫が混ざって何か恐ろしい生き物が生まれた。
ざらざらとした尖った牙が並んだ猫。顔が鋭角、尻尾は二又。・・・猫又か。
「そんなもんかな」
そう絞めて、お茶をもう一口。すましているけど、言っていることはかなりエグイ。
今まで色んな人物の印象を聞いてみたが、間違いなくワースト1だ。
「・・・・彼女、校内で襲ってきた不良を返り討ちにしたらしいんですが――――」
「御身内(おみうち)、芥(あくた)、薗枝(そのえだ)の3人だろう?」
「何で名前まで知ってるんですか?・・・彼ら、その、潰されたらしいですよ、アレ」
「はは、まぁ、自業自得でしょ。あんまり人を舐めてると痛い目見るってことだね」
この人はうちのリーダーと同じようなことを言うな。もしかしてフェミニストなのか。
「で、何で名前知ってるんですか?校内放送はしてましたけど、一応未成年ってことで名前なんて公表されてないでしょ?」
俺だって、瑞流(みずる)の思体複製の恩恵で知っているようなものなのに。
そこで、うぅーんと唸る先輩。手を組んで深刻そうな顔をするけど、正直様になっていない。別に悪い意味ではなく、彼が童顔なだ

けで。
「だって、彼らは僕の獲物だったんだから」
「は？」
「そういう輩がいるって聞いてね。女の方で仕掛けてたんだ。わざわざ襲われて、証拠テープまで作ったのに、使う前に捕まっちゃたわけ」
『襲われて』。つまり、寸前まで押し倒されて、ギリギリで何とか逃げれた”振り”をしたということ。
そんな度胸、俺にはないな。やはり先輩は尊敬に値するお人だ。
全く、この人には勝てそうにない。
「まぁ、彼らはその報いを受けたわけですし。直るでしょうけど、今後そんなマネできなくなるんじゃないですか？」
うちのリーダーはそのまま去勢しろなんて言ってましたが、と苦笑い。
が、
「いや、彼らのは元には戻らないよ」
先輩はあっさり断言した。
「は？いくら女性を手篭めにしようとしたからって、そのお咎めで去勢なんてことは・・・・・・」
「確かにね。だいたい、襲われた側から何も言ってこない上に、誰も見ていないことになってるんだから。ナンパしようとしてこうなったとでも言えば、言い逃れはできるさ。
でも、彼らのやってたことはセクハラどころの話じゃないからねぇ」
「・・・・・あの・・・」
「そりゃあ、さ。僕だって苦労して手に入れたテープ、そのまま捨てるのは勿体無いし」
「・・・もしかして・・・」
「テープ、ばら撒いちゃった」
にっこり、どちらかといえば可愛らしいと属されるような微笑み。

何故だろう、悪魔の笑みに見える。

「・・・・・・」

「医療関連、もちろん学校側にも学園側にも。それから医療系能力者のグループね。ああいう所、情報交換が発達してるし、今頃彼らの顔と名前はレッドリスト入り。

　頼みの綱の医療系能力者も傷の治療はしても、元に再生はしてくれないだろうね」

「あんた鬼だ！！」

第6話－　能力様々。－Ｃｒｉｍｅｒｓ－（後書き）

前回に引き続き、本当に申し訳ありません。
自分で決めた〆切完全に過ぎちゃいました。
しかも今回は一週間ほど・・・。すみません、怠惰なせいです。
今回の話は幾つかの伏線を仕込ませるためだったりしたため、結構シチュエーションが変わってしまって、ちょっと読みにくい気がしてます。
でも必要。と割り切りましたが、なかなか話が進まずに結局アップが遅れたのですが。

またやたらとキャラクターが増えた気がしますが、覚えなくても大丈夫です。私もいまいち覚えてません。
気軽に読んでくださると嬉しいです。

第7話－　裏方食会。－Ｓｏｐｈｉｅ－（前書き）

はい。もうここら3話ほどの挨拶代わりになっている気がしてなりませんが、更新遅れました。
一応ブログで試験のため遅れると書いたのですが、見てる人いないでしょうし。
すみません、遅れました。それも一ヶ月ほど。でもこれからは・・・
大丈・・・・・夫。

第7話ー　裏方食会。ーSophieー

例えば、鏡を覗き込むだけで形骸変容（メタモルフォーゼ）の恩恵が見て取れる。
恩恵という言葉を通り越した女体化という事実は置いておいて、色々と挙げられることがある。
病的ではなく、健康そのものの白みの強い肌。
時折見られていた頭痛と動悸の解消。
そして体は何の支障もなく動いてくれる。
どれも能力を無意識下に利用した結果だろう。最初にあった性転換と同時になされたに違いない。
ガタのきていた体を根本的なところから造り治し、神経系もより扱いやすく繋ぎ直したようだ。
こういった、日常活動や生存行為といった最も体の要求の高い事柄は脳にフィードバックして、逐一調整されていると考えるのが妥当なのだろう。
しかし、意識的に能力を使うということは話が違う。
本来必要のない、ありえない物質、構造を造り出すのは、思った以上に難しいことだ。
想像力然り、必要性に迫られていないというのが一番ネックなところ。
もしも、いきなり海に放り込まれて息ができなくなったりでもすれば、鰓の1つや2つ造れそうな気がするのだけど、風呂桶に顔を突っ込んでそれをやるのは非効率的だ。
鰓を作るより、腕に力を入れた方が危機回避がしやすいなんてことは分かりきっている。
自分で作った環境という安心感が付いて回るし、本来の体験とでは経験値に差が出過ぎるだろう。
今まで僕がやった訓練といえば、手の形状を変え、血液中の鉄分を皮膚に持ってくることによるピッキングや足の甲の皮膚の形質を

少し堅くする程度のことだ。
ちなみに後者は不良撃退に役立てた。あれは利用頻度も多そうで結構重宝しそうだ。
だけれど、それぐらいのもの。
訓練と言っても、明確な目標がいまいち立てにくく、挙句訓練の効果に満足できかねている。
何でもできる故の贅沢過ぎる悩みだけど、僕にとっては切実だ。
形骸変容（メタモルフォーゼ）としての能力を磨くのに必要なのは経験。
他の能力に比べ、その重要度が非常に高い気がする。
様々な状況に必要な変容のパタンに、非常時においても行える安定した変容の仕方、能力を使った時の実感。
どうしてもこれが必要になってくる。
だから、裏方と呼ばれる、やっぱりネーミングセンスに問題がある気がしてならない組織からの誘いは好都合だった。
非常に貴重な形骸変容（メタモルフォーゼ）の資料まであるという。
その上お金も入ってくるというのだから、断る理由の方がなかった。
なので、近日中に承諾の連絡をするつもりだった、のだけど。だけれども。
「なんで、ここに来るんですか？貴方たちは」
共同訓練という名のお祭り騒ぎの終わった後の休日、人が来る予定などありもしない午前の呼び鈴に、誰かと思って開けてみると、ついこの間顔を合わせた裏方のメンバーがそこにいる。
この前貰った連絡先の意味がない。
そう呟くと、自分のことを発電能力者（エレクトロキネシス）といった茶髪の彼女は、
「あれは私のプライベート用よ」
と飄々と答えくれた。
何でそんなものを教えてくるんだこの人。
というか、
「何なの、その彼が持っている大荷物は・・・」

赤色のアホウドリと呼ばれている彼が背負っている、何やらでこぼこと布を引っ張られえているサックの中身がすごく気になる。
「これ？なんと今晩は鍋なのです！」
力説。いや、だから何が？というかまだ昼すら来ていない。
「カニ、フグ、タラ、ネギにイトコン、シイタケは1人4つ絶対よ？」
いやいや、だから。だから、ね？話がおかしい気がするのですけどね？
「イワシの肉団子も材料あり！」
・・・・・それをうちでやるつもりですか？決定ですか？
「広くないから無理な気がするんだけど・・・」
当たり障りのない回避行動を試みてみる。
「大丈夫よ。最悪瑞流は外で待機するから」
さらっと返されるある意味酷い一言。そして他人事。
・・・・・。逃げられないっぽい。
とにかく今夜は鍋料理に決定らしい。

#

主に瑞流君が持っていた食材を無理やりミニ冷蔵庫に詰め込んだ後、僕達はアパートを出ることとなった。
鍋は夜になってから、それまでの時間潰しを違う所ですごそうということらしい。
茶髪を纏めた高校生2年生のつり目少女、礎囲智香（そいちか）。電撃。
赤にピアスの大学3年生（2度留年）の青年、朝露瑞流（あさつゆみずる）。幽体離脱。
目を隠す黒い前髪の高校1年生の少年、佐々見雪成（ささみゆきなり）。変身。
手入れの行き届いた長髪に活発そうな肌色の中学2年生の少女、音羽佐奈（おとはねさな）。冷却。
人見知りする染めた茶髪の大学1年生の青年、岸亮輔（きしりょうすけ）。媒介。

移動中の電車の中、礎囲さんが改めてメンバーを紹介してくれた。

彼女自身は電撃波を得意とする、攻撃系の能力者。数多ある電磁波系能力（エレクトロキネシス）者の中で電撃凶器（スタンガン）と呼ばれる部類に入る。

これは能力名というより単なる名称だ。能力の使用傾向を表しているといった方が考えやすい。

発電能力を電撃として対象を攻撃するから電撃凶器（スタンガン）。他にも、電磁力を使って鉄を引きつける電磁力（マグネット）など同じ能力者の中でも色々と分けられている。それによってグループも分かれているので、自分のやりたいことをしっかり目標として持っておかないと大変な目に合う。

歳の幼く見える赤とピアスの見た目が分かり易過ぎる、僕よりかなり年上な朝露君。アホウドリって言う方が何か言いやすい気がするのだけど、やっぱりまずいだろうか。

彼は思体複製。別名は幽体離脱の能力者。矢崎君の能力、視界だけを別のところにやる視界放置が発展していけば、この能力にたどり着くのだろう。

ただし、思体複製は、元よりある自分の五感を保った上でもう1つ別の五感を造り出す能力だから、視界を移すだけの彼ではまだ程遠い。

アホ・・・朝露君は結構高度の能力者だ。何で2度も留年してるんだろう。

先日紳士的だった佐々見君は形態変身（トランスフォーマー）。ということは、あのやる気のないブースをやっていたグループの一員である可能性が高いわけだけど、本当にブースをほったらかしだったのだろうか？

しかも何故か顔を合わせてくれない。前はそうでもなかったのに。どうしたのかな？

そして彼も二重生活で女性の顔を持っているのかが気になるところ。

それから音羽さん。カフェでは後ろの方でほとんど目立っていなかったのだけど、改めてみると結構個性的な人だと思う。

焼けた肌で冷却の能力者。雪女なイメージはない。ジーパンにTシャツというボーイッシュな服装で、親しげに話しかけてくれる。

冷却という能力は発電に比べると珍しい。出力系の中では見た目が地味な方だしね。

この能力は水を凍らせると思われがちだけれど、どっちかといえば熱エネルギーを吸い取るといった方が近い。

ちなみに、その理論で逆に物質にエネルギーを与えて蒸発させる能力者もいるとか。これは発熱の能力者と言われて、発火とは違う分類だそうだ。

ここら辺の分類の曖昧さが超能力関連の研究が体系化し切れていない一因じゃないのだろうか？

で、最後に人見知りの岸君。カフェに来なかったので、今日初めて顔を合わせた。

体つきは中肉中背。目をきょろきょろとさせて忙しない。神経質、といった感じ。だから人見知り、ということなのだろうか。

彼の能力は能力触媒（メディエーター）。

他の能力者と接触することで、その能力者の力を底上げし、元来以上の効果を発揮させるという名称通りの能力だ。

原始素能（ホワイトノート）と同じく、他の能力者と関わることで効果を発揮するタイプの能力で、かなり珍しい。

他力本願などという言葉で片付けられるようなものではなく、感覚系とも出力系とも違った特殊なタイプに属するとされる。

他の能力者がいなければ能力複写を行えない原始素能（ホワイトノート）。他の能力者がいないと意味を持てない能力触媒（メディエーター）。

前者はともかく後者は正直目立たない能力者だ。何せ自分だけでは何もできないと認識されてしまっているし、冷却能力者以上に目立たない。

けれど、これもやっぱり侮れない能力だ。

対象者の能力の威力を上げるということは、応用次第で能力を暴発させれるということ。

無理やり相手の力に介入して自爆させるという護身術が使えるわけである。

大した脅威のない相手に見られているけれど、これはこれで厄介な能力者と言える。

ただし能力触媒（メディエーター）の発動条件は大抵、対称に触れること。

なのに、岸君、人見知りで人に触れられることを酷く嫌うらしい。

本当に必要な時にしか利用できないこのメンバー内での切札扱いで、しかも1回が限界（能力的にではなく精神的に）という制限つき。

駄目じゃん。

裏方というのは数十人いる全構成員を数人ずつに分けて活動させているらしく、僕が配属されるだろうこの班は『トリッキー』という。蔑称じゃないのかな、それ。

そしてその名前の名付け親は礎囲さんに決まっている。

命令のない間は、個人の自由意志でそれぞれの班に与えられている本拠地に詰めることになっているとか。

自由意志ということはつまり、通常その本拠地とやらには誰も居らず、そもそも連絡は携帯の方にかかってくるので、全く必要としない場所ということだ。

だから基本的に何らかの資料などを置くだけのスペースとなるらしい。溜り場とも言う。

また、裏方と言っても、表舞台の警邏といった活動がないわけではなく、人手がない時には駆り出されることもあるらしい。

と、まだ入るとも言っていない組織の内情などについて礎囲さんと音羽さんが話してくれる内に目的にに着いたらしい。

万可統一機構及びクシロ在住のマンション最寄の駅。相変わらずの人の多さで気が滅入る。せめてこれから行く先が静かな場所であって欲しいな。

皆行く先は知っているらしく、先導しつつあれこれ明るく話題を振ってくる礎囲さんに続き、僕の号室に食材を置いてきたにも関わ

らず未だ何かしらを背負っている朝露君、佐々見君に音羽さんが僕の横を歩き、最後に岸君が決して僕らより前に出ない位置を保ちながらついてきている。

駅の改札を抜け、迷路状の地下街を迷いなく突き進み、階段で地上に。地下からいきなり開けた視界は全く見たこともない場所だった。

移動中の風景が見えないだけに、到着点が一体地図のどの位置にあるのか想像できない。

そこは高層ビルの谷と谷の間だった。駅や商店街から見る遠景にのっぽのビル群が見えていたことは覚えているけれど、自分がその真ん中にいるのだとは実感が涌かなかった。

地下道恐るべき。間違いなく徒歩十数分の距離だというのに、兎穴に飛び込んだアリスの気分だ。

そんなひたすら高く伸びた構造物の1つ、シンプルに長方形をしたミラーガラスのビルに僕らは入っていく。

本来こういったビルには、会社の事務所やら何やらが詰め込まれていて、少なくても子供が入る雰囲気はどこにもありはしないのだけど、彼らは全く気に留めず進んでいく。

入り口から正面に位置する数個のエレベーターの内1つに乗り込んで、高層を目指す。押された階は67階。静かな動作音と、逆に目立つ振動、移動時間短縮のための高速上昇、そしてガラス張りと乗員を苛めたいのかと思うような一時の後、エレベーターは目的の階層についた。

その間、ずっと岸君がぶるぶる震えているのが印象的だったり。まぁ、高所恐怖症でなくても結構きついけどね。気圧が変わって耳も痛いし。

エレベーターのドアの開いた先は、すぐ行き止まりだった。フロア内に壁をもう1つ作って出入りを制限しているらしい。カード式の施錠装置が置かれてある。

当然ながら礎囲さんは自分の財布から1枚のカードを取り出して

それを開錠した。スライド式のドアが自動でずれていく。
壁に接着されたプレートには『株式会社ウスキ製薬資料倉庫』と書かれていたけれど、まさかそんなはずもなく、ドアの開いた先は超能力に関する資料倉庫だった。
ウスキ製薬は本当に実在する会社であり、何より資料倉庫という意味では真実であるカモフラージュだ。だけど、製薬会社の資料が単体で高層ビルのワンフロアにあるわけないと思う。それに・・・
入り口から一歩踏み出した位置に見える、規則正しく並べられた天井近くまである本棚、それに付けられているカテゴリのプレート。
『ＥＳＰ系・能力波探知能力系統？』。
『ＥＳＰ系・対ＰＫ系能力技術』。
『ＥＳＰ系・能力測定、基準と分類』。
幾つかの棚を左から右に見ていくだけでこんな文字が見て取れた。製薬会社関係ないね。カモフラージュに名前を使われるぐらいだから、ウスキ製薬って公営の機関の傘下にでも入っていたのかもしれない。
ああ、そういえばＳＰＳを造っている国の製薬機関があったはずだ。そこと繋がっているのかな。
とにかく、そこには超能力に関する資料が有らん限り並べられていた。
書物を読むためのテーブルといったスペースは一切なく、薄い灰色をしたスチールラックに一般的に販売されている本から自費出版したらしい薄いもの、本として纏められてすらいないファイル綴じの資料がテーマ別に区分され、向こうの突き当たりであるガラスの壁まで続いている。
その様子は壮観。誰も知らない空間に閉じ込められ静かに眠っているそれらは、まるで日陰で冷え、苔が生えた石畳を思わせる。
万可統一機構にも図書室たるものはある。それなりの書籍数を誇っていたし、内容の濃い、一部機密レベルのシロモノも置いてあった。

だけれど、それでもこの資料倉庫はそれを軽く凌駕しそうな広さと量だ。

それに万可統一機構のには普通の書物がほとんどなかった。これほどに多くの種類が集まっている所は見たことがない。

今の僕は、目をキラキラと輝かせているに違いない。

読書はそれなりに好きだし、能力関係の知識はいくらでも欲しい。

「どう、はづきちゃん。結構すごいでしょ、ここ。さすがに形骸変容（メタモルフォーゼ）に関する資料のある別室倉庫までは私達のカードじゃ入れないけどね。

それでも色々ためになる本がいっぱいあると思うわよ？」

#

如何にしてソフィ・フィリス・シューレル女史はＳＰＳなる薬を創るに至ったのか？

彼女が超能力という極めて再現性に欠ける、観察困難な対象をそもそも研究対象にし得たのか？

その謎を紐解くにはまず、Ａｐ－Ｓｏｎａと識別番号を、ソナと呼び名を与えられた彼の存在を紹介しなければならない。

ソフィ氏は自叙伝で彼のことを『親指と人差し指の腹から火を出すことのできる』能力を持ち、『こと物の位置記憶に驚くべき結果を残した』ともしている。

彼女は彼が寿命尽きる数年の間観察をし続け、論文をまとめ、薬の発想を得たという。

では、一体どこで彼女と彼は出会ったのか？

・・・熱帯雨林、である。

明言されていないが、彼女が全く違う研究で雨林を訪れていたらしい。

さて、違う目的とは？

熱帯雨林に残されているウイルスの研究、及び現在流行している

ＡＩＤＳなどの特効薬になりうる素材の探索だ。
それは彼女にとっては当然のこと。何せ彼女は、医者でもなくましてや超能力を研究する酔狂な学者でもなく、生物学者だったのだから。
彼女自身『超能力？そんなの脳の腐った人間の戯言よ。相手にするだけ馬鹿らしい。彼に出会うまではそう思っていた』と語っている。
偶然の出会いだったのだ。人の手の及ばない樹海の奥の奥、保存されている未知のウイルスを求めて進んだ先、彼女は彼と出会うことになる。
ではでは、彼女はその時様子をどう記しているのか？
またまた自叙伝を参考にさせてもらうと、『ありえない、と叫びそうになった。彼が火を灯した木の棒を持っているところを見た時、世紀の大発見だと思った』、『どうしても彼が火を灯すところを、あるいはどこから火を手に入れたのかを見てみたいと3日間粘った。3日目の午後3時１３分、ついに私達はその現場を目撃する』そして『遠い昔人類がしたように摩擦熱で火を起こすのだろうか？そこまで高度な道具を使う技術を持っているなら・・・』と、その時の自分の気持ちを緊迫感を持って書き出した後、『信じられない！あの野郎、手で握っただけで火を起しやがった！』と憤慨。
・・・・・もう分かっていると思うけれど、つまり”彼”と言うのは先住民の誰かさんでも、諸事情により迷い込んで住み着いたはぐれ人でもなく、・・・猿、だったのだ。
つまり、ソフィーさん、樹海で発見した猿が火を扱っている所を見てびっくり。山火事の火を木に移して持ち歩いているとしても、自分で起こしているとしてもこれは大発見だと意気込んだわけである。何せ、現代においても道具を使う猿は、使いやすい特定の岩石を利用し食べ物を割るというのが限界で、もし火を起こすような猿がいたとすれば本当に驚愕の事実ということになる。ので、猿がまさかの裏技を使った時、思わず持っていた機材を投げつけてしまっ

たらしい。
・・・お茶目な人だ。彼の方はそれどころじゃなかっただろうけれど。
チンパンジーに似た類人猿、当時推定５０代半ば。チンパンジーの寿命が４、５０歳ほど。ほら、ちゃんとつじつまは合っている。
ＡｐｅＳｏｎａのＡｐはａｐｅ、つまり猿という意味。
まさかのまさか、超能力者だと初めて正式に認定されることになる生物が猿だというのが、このエピソードのオチ。
その後、彼を保護（あるいは捕獲、もしくは捕縛）したソフィ史は研究所で彼の研究を始めた。
初めはあくまで生物として観察していたが、そのチンパンジーとよく似た、つまりは人間とゲノムがほとんど変わらない霊長類の能力が、その種固有のモノではないのではないかと考え、脳波などを詳しく解析。その結果、成果が得られたというわけだ。
その後ほんの数年足らずで、それを人間に再現する方法を投薬によって成し遂げる。
それは天才と言っていい開発だ。薬の創造に研究者が何十年もかけるご時勢に、まさか全く他人の庭である分野にひょっこり顔を出しかと思えば、思いもよらない成果を上げて論文を発表したわけで、当然色んな所から妬みの視線を受けたらしい。
もっともそういった天才肌というのは他人の評価など気にするわけもなく、そ知らぬ顔で研究を続けた。が、
能力発現を促進する、子供からの脳波学習法を提唱したもの彼女、超能力研究を取り締まる国際機構ＩＳＰＯ（Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ｓｕｐｅｒｎａｔｕｒａｌ　Ｐｏｗｅｒ'ｓ　Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎの略）の設立を提案したのも彼女なら、薬の情報を規制するという方策を採ろうと最初の最初に論文で提案したの彼女。
それはそれは恨まれ、『毎日非難の手紙が山ほど研究所に届けられた。こんなことをするなら何か少しでも研究しろと思うけれど、これはこれで助かった。連中、手紙の裏は何も書いてない。紙には

全く困らなかった』という状態。ちなみにこのコメントを彼女がジョーク好きであるか捉えるか、他人の感情を全く理解できない根っからの天才と取るかは各々の自由だと思う。

しかしそんな彼女にもついに静止の時が訪れる。論文発表からおよそ2年後、若過ぎる天才生物学者はこの世を去ったのだ。

その死に疑問を持つ者も多かったが、それもやはり当然だろう。早すぎる死、詳しく明らかにならないその状況、彼女を殺す理由などそれこそ世界中の学者が持っていた。

謎が謎を呼ぶ、好きな人にはたまらない1つのミステリー。今でも時々番組がドキュメントや謎解き、仮説を流している。

曰く、彼女は彼女の研究成果を欲する何ものかに殺された。それはＩＳＰＯではないか?あるいは同じ施設で研究を共にした科学者か?いや、某国の工作機構の可能性もある・・・。

曰く、実は彼女は宇宙人だったのではないか?そもそも彼女の言動には不可解なことが多く、何よりあまりにも頭が切れ過ぎたということ。ＵＦＯが未知のテクノロジーを持ってきたと考えた方が納得いく、との熱狂的なＵＦＯ研究家の言葉。もちろん相手にされてない。

曰く、彼女はそもそも超能力を開花させる薬の方を先に開発していたのではないか?つまりは、熱帯雨林の探索も猿の話も全部作り話で、何か重要な事実を隠蔽しているのではないのか?彼女が薬を創るのにかけた時間が短過ぎると考える人々は多い。

などと、不可解な事件にありがちな、面白可笑しい仮説が乱立している。

何せ真実は闇の中、だ。

仮に、彼女が何者か・・・研究成果を狙う者に殺されたとしても、その人物の思惑は成し得ずに終わった。

彼女は最期まで上手(うわて)だったのだ。

彼女の死の危険。それがスイッチになったのか、彼女の研究資料の全てが――――消失した。

燃えたでもなく、失くしたとも言えない”消失”。確かに有ったモノが全て一瞬にして消え去った。

『何もかもがない。紙媒体の資料だけならともかく、薬を製造していた機械まで丸ごとなくなっている。ソナの死骸を保存している冷凍庫はどうやっても運べませんよ。何の痕跡も無くコンクリートから剥がすなんて・・・いや、そもそも彼女の死体はどこに行ったんですか？』

後に研究所に入った研究員の証言だ。

大げさな製造機械だけなら分解して持っていけそうなものだが、研究員はそれをも否定した。『解体したら構造が分からなくなる。あの機械はブラックボックスなんです、ソフィさんしか仕組みが分かってませんでした』ということらしい。

そして冷凍庫。これはもはや施設に備え付けられたも当然なもので、コンクリートで壁と一体化していた。それがまるで元からなかったようにするりと消えてなくなったのだ。

不可能、という3文字が重くのしかかる。

最後にソフィ氏の死体。なかったのだ、どこにも。あったのは致死量を超える廊下を蛇行している彼女の血痕だけ。死体はどこにもなかった。

つまり、彼女は殺される前に全てを消し去った。と多くの人々が考えている。

彼女の研究資料を欲した誰かさんは何も手にすることはできなかった。彼女自身が超能力を使ってそれらを消したのだと。

しかしこれもやはり仮説。殺した方が全て持ち去ったのかもしれないし、研究対象の猿にやられた、いわゆる事故なのかもしれない。その可能性は拭えないが、ソフィさんを好いている多くの人は隠滅説を取る。僕も取る。その方が夢があるし。

さて、とりあえず、超能力史開始にまつわる1つの話は終りだ。

・・・あぁ、ちなみに、

実はソフィさん、ソナ発見当時、８歳だったのですよー。

というのがこの話全体のオチ。

そりゃあ恨まれるわけだ。天才少女、享年１５歳。博士号をまさかの６歳で取得。極めて稀な女性のサヴァン。生物学どころか、機械の自家作成に製薬までこなし、挙句超能力研究の立役者。栄光に栄光を重ねた偉人。妬まれて当然。

そして猿相手に本気で起こる茶目っ気ぶり。多くのファンがいる理由もここにある。

もっとも、生活力のなさも異常なものだったらしく、いつも彼女をサポートしてくれる人物が必要だったらしい。

何とそのサポート役が日本人だった、ということも挙げておきたい。

と、まぁこんな感じの面白い話が盛りだくさん。

ソフィ氏関連は特に面白いのだけれど、今日はここら辺で割愛。

次に、引き抜いた書籍の巻末に書かれた年号を参照してみよう。

―…４年　ソフィ・フィリス・シューレル女史が論文と能力発現特効薬の原型を発表。

―…５年　国際機構ＩＳＰＯが設立。

―…６年　ソフィ女史死亡。ソフィ氏筆頭のアメリカ・ペンシルベニア州の施設がソフィＰ・Ｓ　記念研究所と改められる。

―…７年　薬が実用化。ＳＰＳと名称。超能力研究が本格的に開始。

―…７年　アメリカとソ連、中国、日本のアジア諸国、ヨーロッパのＩＳＰＯ加入国が、自国で研究施設の建設を開始。

薄っぺらいがこれが超能力史有史以来の大きな流れである。

それ以後はもはや書くだけ無駄なので書かれていない。何せ研究が細かく分かれすぎて、挙げていたらきりがないのだ。

世界全体の出来事としてはこれぐらいしか記せないのが現状と言える。

研究対象が各研究所で全く違うのが超能力研究のネックなところで、例えばＥＳＰとＰＫだけでも研究方法から違うことが多々ある。なので色んな研究所が挙げた成果は多くあるのだけど、別のところで役に立たなかったりすることも多い。

なので研究施設のまだ少なかった超能力史前期前半、研究者同士の情報交換すらなかった。秘匿しようという企みもあったのだが、それ以前に情報の活用がこんなんだったのだ。

それが、ソフィ史の脳波学習法の論文によって日本が特別研究都市システムを採った超能力史前期後半、やっと多くの研究所が建ち揃い、同分野の研究施設が現れ始め、情報交換が開始されていく。

そこら辺を日本に視野を絞ってみると、学園都市システム以前、初めの研究所が世界各国で設立された時期に浅代研究所が神戸にできる。この研究所は私営のもので、浅代源次郎氏が創立者。その辺はおいおい説明するとして、この研究施設があったことが、神戸が特別研究都市に設定される一因になったらしい。

万可統一機構や三重録音九法研究所、他方傾向念力追究所といった研究所ができるのはそれ以後だ。

万可統一機構は元々、基となる研究施設が別にあったらしい。他方傾向念力追究所はその当時から異色な研究施設として有名だったが、三重録音九法研究所は前者２つに比べると、最近できた施設の様だった。日常的な赤設立（コード・レッド）はさらにその後だ。

他にも研究施設は多く存在するが、そのほとんどが割りと新しいものとなる。学園都市システム導入に合わせて造られた所が多いからだ。ちなみに都市システム導入は約３０年前ほど。

日本の研究所事情はそんなところだろう。

外国の事情は実はよくわかっていない。日本のように研究施設が集まって、ある程度同方向の研究を行っていたりするのなら情報を纏めやすいのだけれど、残念ながら都市システムを取っている国は

少ない。

よって資料は書籍をかいつまんでいくしかない。

『研究者が、能力の希少さよりも実用性が重要なのだと気付いたのは少し後になってからだった。未来視で自身の危険を予知し、回避するという例は有史以前にも報告されていたのだが、有史以来に生まれた多くの超能力は利用価値があるかも判らないものが多かったのである』。

元々何かしらと細かい芸が得意な日本人は、当初から超能力の利用を課題にしていた印象を受けるのだが、海外では新しい超能力の発見が目的になっていた頃があったらしい。能力の名称は発見者が名付ける権利を得られる。ＩＳＰＯに申請、新しい能力と認められると、研究者に通知、能力名を報告して正式決定という手順なのだが、この名称の登録に外国名のラッシュがあった時代がある。たぶんそこに相当するのだろう。

『発火能力者などは特にそれが顕著であろう。屋敷を燃やすほどの火力ならともかく、多くが掌に収まる程度の火しか扱えなかった。それならライターで事足りるのである』。

つまり、研究対象にしている以上は実利が伴わなければならない。医学も化学も物理学も生物学も、人間の利益になるという前提（あるいは建前）で発展していったものであり、超能力も然りということになる。

今まで否定され続けた非現実な空想が現実に露出してきたという興奮が一気に冷め、学者達は慌てふためく。

目的をなくし、資金のやり繰りも困難になりかねなかったのだ。

『ただ、発火能力者は火力次第で利用価値のある能力である。利益、特に国としては戦闘能力を期待でき、他のＰＫ系能力者、治療能力者に予知能力者共々存在価値を認められることになる。問題だったのは、それに零れた超能力だった』。

ここにきて、超能力にＥＳＰ、ＰＫとは違った区分けができることになる。価値があるか価値がないか。能力格差の出来上がりだ。

手当たり次第超能力なら何でも手を出していた学者の中には当然研究対象がその零れモノに入ってしまうという悲劇を味わう者達もいた。

『だが、彼らにとって幸運だったのは、それを掬う方法が示されたことだ』

捨てる神あれば拾う神あり。実用価値のないものに、価値を与える手段。

――――真理への到達。

哲学にしろ、医学にしろ、それこそ他の学問にしても、この課題が全く無いとは言いきれない。

哲学はあからさまだが、医療行為だってそもそも、その初め、解剖という行為を後押ししたのは、人体の内側がどうなっているのかという好奇心だ。

少なくともほんの一昔まで科学的にも信じられていた”命（ライフ）”の仕組みを、真理を知ろうとした方法の一種に他ならない。

それに病気の治療や、人に有益な物質の生成などの実利が付きまとって今の学問が成立している。

そう考えれば、何もおかしな話でもないが、しかし彼らにとって重要なのは、無価値の烙印を押された、少なくてもそうだと思われている自身の研究対称を祀り上げることだ。

不可解、説明不可、摩訶不思議な超能力という現象を、神様という宗教（しんり）の根源に結びつけるのにそう時間はかからなかった。

『彼らを愚かしいと切り捨てることは浅はかだ。超能力とされて具現される現象は確かに、誰にとっても総じて神秘に満ち、聖人の奇跡と同じく神の存在をイメージさせたのだ。真理を追うアプローチとして超能力が挙げられること自体に異常性はなかった』、『しかしこの頃から超能力研究に毛色の違う研究が混じるようになった』。

神を証明する手段に起用されるようになり、超能力研究は2つの方向を分かつ。1つは実用性を探り、1つは神秘性を求め、二分し

た。

『”Ｔｒｉｐｌｅｔ　ｒｅｃｏｒｄ，　ｎｏｎｕｐｌｅｔ　ｍｅｔｈｏｄ”と呼ばれる機関がその代表格だろう。この研究所は堂々とその目標を明言し、嘲笑を浴びた』

Ｔｒｉｐｌｅｔ　ｒｅｃｏｒｄ・・？３つの記録、という意味だろうか？・・・・・！、三重録音九法研究所のことか。

ｎｏｎｕｐｌｅｔは九つ子という意味だった気がする。とすれば間違いない。キワモノ、と呼ばれる研究所の１つ、三重録音九法研究所を指すのだろう。

あの機関、日本のモノじゃなかったんだ。翻訳された元イギリスの書籍に乗っていることもさることながら、名前がわざわざ訳されずに英名になっている辺り、こっちが公式名称と考える方が正しい。元々外国の機関なのか。

しかし、では何で日本に来たのだろうか？日本は外国よりも先に実用性重視の研究傾向に走っていたはずだ。そういう研究所は浮くことになる。というか、浮いているからこそキワモノ扱いなんだけれど。

外国では周囲の非難が酷く状況が悪かった？確かに日本なら宗教心も薄いし、とやかく他人の研究に物言うようなこともなかったのかもしれない。ただ、外国の風土がどうなのかいまいちわからないので確信が持てないなぁ。

三重録音九法研究所関連の情報を載せていそうな海外書物を参照しよう。

『Ｔｒｉｐｌｅｔ　ｒｅｃｏｒｄ，　ｎｏｎｕｐｌｅｔ　ｍｅｔｈｏｄの目標は高々とこう挙げられている――――三重の録音式に基づいて九法を用いて永遠に至れ』、『３種の録音。つまり自己の記憶（にんしき）、他人の記憶（にんち）、そして世界の記録（アカシック・レコード）の三重を指すが、その仕組みはさておき、不死者を創ることを目的としている』。

ほら、これはもう科学の、一般的には現実と呼ばれる世界のモノじゃない。超能力が現実としての価値を得たことをいいことに、全

く別の分野の学問が取り憑いている。
これについて僕の知っている知識を合わせるとするならば、この機関が創ろうとしていたのは厳密には不死者ではなく”不滅者”。存在の消えない情報体としての有り方を実践できる能力者。
つまりこれはもう、言ってしまえば魔術の分野なのだ。
哲学や宗教を下地に展開される世界の解明、物理（かがく）的ではない法則による現象具現、神秘を求め往く学者の先駆者。
魔術は立派な学問だけれど、僕にとっては専門外。あちらさん、哲学的過ぎて即物、俗物的な僕の性に合わないので。
まぁ、これで三重録音九法研究所の異常性は分かっただろう。毛色が違う、というのはこういうこと。
もちろん、だからと言って他の組織まで何か魔術的な要素があるというわけではなくて、これはあくまで一例。
話が逸れたのだけど、外国においてはそういった経緯で、現在も目的が離れた2タイプの超能力研究パタンがあり、どちら側であるかということが重要視されるらしい。
日本では全く気にされていないことだ。日本は日本で独自の発展をしてきているからだろうか？
・・・・・焦点を日本に当ててみよう。
特別研究都市システムはソフィ氏の脳波学習法に関する論文を元に考えられた機構なのだけど、これが実際起用されるようになるまで少し時間がかかった。
設備投資のリスクに加えて学校という非常にデリケートな領域に足を踏み込むために、なかなか踏み切りが着かなかったのだろう。
薬の安全性を見極めていた、という話。
日本には9箇所、特別都市がある。北海道、青森、群馬、千葉、神奈川、兵庫、愛媛、宮崎、沖縄と、本島他、地続きでない地域にも一箇所はあるように配分されている。
さて、基本的にはＳＰＳの扱いが許可されている教育機関付属の研究施設群だけれど、学校ばかりが並んでいるわけでもない。場所

によって特色があるので言いきれないのものの、神戸で言えば、ベースは下からある港町の雰囲気を残して、そういった学園を誘致している形。

祠堂学園や他の『学園都市』駅にある学園は位置的に山を削った場所に存在するのでそういった空気は感じられないだけで、クシロの住んでいる辺りになるとハーバーやポートといった言葉が目に付くようになる。

なので特別都市といったところで普通の市とそこまで違わない。違うのは教育機関の一部だと考えていい。

それに祠堂学園ももちろんのこと他の認定学園というのはそれなりに土地を持った上で、その中だけで物事を終わらせることができるのだ。

学校である行事の数々、ＳＰＳの服用行事然り。内で全てやってしまうので、特別都市だからと言って超能力で染まっているわけではない。

もちろん秘匿しているわけでもないので、電車に乗っていれば超能力者が痴漢に一撃・・・といったことは起きたりするものの、超能力者との接触頻度は高くないのではないだろうか？

あと、祠堂学園は他の都市・・・青森なんかにもあるらしい。入学時のパンフに載っていた。つまり、各地に特別学園都市があるといっても、その核たる学園は大体決まっているということ。

祠堂学園は財閥の造った高貴な学校というイメージがある。教員に問題がないとも言いきれないものの、施設は綺麗だし、訓練施設は充実している。卒業後のサポートも結構厚いらしい。自分のところで働いて欲しいからだろうけれど。

少なくても僕が通える所ではない。言わなくても明白な事項だけれども、まぁ、当然クシロのお金です。

学園都市の雰囲気はそんなものだ。

次に、学園都市の都市伝説辺りを引き出してみる。

先ほども出た三重録音九法研究所を含めた、至極追探組織（いきすぎ）の存在

をまず第一に。

これは僕の様にそれなりに裏事情を知っている人間には明確に、そうでない一般的な超能力者にもお近づきになりたくない程度に、知れ渡っている話だ。

曰く、浅代研究所では完全な健康体である人間から臓器を取り出し、新しい臓器を再生させるという実験を行っていた。

曰く、三重録音九法研究所の研究者は思い通りの超能力者が得られたかどうかを、殺して確かめる。

曰く、神々の輪笑は実験失敗によって廃人を造り出す、生体解剖用実験体の製造工場である。

曰く、万可統一機構は有史以来最悪の実験用孤児の育成施設で、日夜人体実験に明け暮れている。

とまぁ、こんな感じだ。少なくても最後のはあながち嘘ではないので、他の噂にしても信憑性は高い。

ちなみに神々の輪笑で図らずともできてしまった廃人の流通先に箍の外れた（フォールアウト）発条の名前が挙がることも。

箍の外れた（フォールアウト）発条は能力を制御できなくなった暴走能力者の研究をしているらしいので、これも筋は通っている。

こういった機関には近づくな。というのが1つ目の話であり、教訓というやつだろう。

一応詳しくこれらの機関について纏めると、まず最初に有史初期に出現した浅代研究所。医療系能力を扱った浅代源次郎氏の設立した私立研究所だ。

先の噂以外にも、生命反応のある脳髄を取り出した上で、骨格から再生させようという試みがあったらしいというのまであり、近づきたいと思う方がおかしいといった所。

何十人、何百人の犠牲により、医療系能力者の質がかなり上がったとか。

次に、三重録音九法研究所や神々の輪笑といった魔術的な要素のあるものは飛ばして、噂の方には出てなかったけれど、他方傾向念

力追究所。
　これは念力系能力研究の最高峰。それも力ではなく、応用の研究をしているとか。
　ただしこの施設何も危ない噂は聞かない。超能力の種類が系統樹のように細かく枝分かれしていくものだとその世界に認識させたのはこの研究所。
　能力波を乱反射させる反響氾濫を生み出したのもここ。
　箍の外れた発条は能力を暴走させた、制御できなくなった能力者の研究を行っている。ここで重要なのは”保護”でも”収容”でもなく”研究”であるということ。彼らにとって能力のコントロールができなくなった、思考に身体的、あるいは精神的欠陥を抱えた能力者はモルモットに過ぎないといことだ。
　例外があるもののどの機関にしたって、噂を聞くだけで気分を害すタイプのもの。
　倫理性に欠けている至極追探組織というわけだ。
　こういった組織は超能力史の初期に多かったりして、そこら辺も不気味な噂を立てる原因になっているのだろう。
　三重録音九法研究所のことを考えれば一目瞭然、あの研究内容でよく今まで施設が成り立っているな、ということなのである。
　他の噂・・・例えば双芥中学校にもそういうものはある。
　ここは本来僕みたいな人間が行くところなのだけど、地下に複写体製造工場があるとか、人の瓶詰め保存庫があるとかそんな噂がやっぱりある。
　それらが本当かは置いておいて、少なくても生徒がいきなり行方不明になっても問題なく事が運ぶようなシステムが構築されているんだろうなというのが僕の意見。
　そういう学校がチラホラあるのだけど、同じようなものなのでスルーして、今度は僕の知らないようなものを探してみる。
　『ＳＰＩ都市伝説解説読本？』。ほら、こういうありがちな安っぽい書物がちょうどある。

万可統一機構にはこんな本なかったからなぁ・・・。まぁ、当然か。

外国の書籍と同じように、カバーもかかっていない厚紙程度の柔らかい表紙。後ろを見ると初版と確認できる。重版されているのだろうか？色んな所が圧力かけたりしてそうなんだけどな。いや、むしろそんなことをすれば目立つのか。ゲリラ的に出版しているのかもしれない。

内容としては、流れている噂話の信憑性について論理的に分析するというもの。好きな人は好きなのだろう。

『最も殺傷力のある能力は何か？～パート2～』・・・『原始素能（ホワイトノート）は万能能力者か？』・・・『光反迷彩（トランスパラン）に意味はあるのか？』・・・『思体複製は死体複製？』・・・・・・ｅｔｃ，ｅｔｃ。

・・・・・。よし、止めとこう。内容が思った以上に俗だった。何最後の。死体複製？それはとある思体複製が能力使用中、自分の本体の方に気が回らな過ぎて、車に轢かれたことを指しているのだろうか？それとも複製した思体の方を破壊されると廃人になることがあるということを言っているのだろうか？

殺傷能力の高い能力？斬刀水圧（ウォーターカッター）なんかのことだろうけれど、同じ能力者でも威力が全く違う場合もあるし、威力が違うだけで能力の名称が違うことも多々あるのだから、暫定すら不可能だと思う。

光反迷彩（トランスパラン）はいわゆる光学迷彩というやつ。だけれどそもそも人にしたって視覚だけでモノをい認知しているわけではないので、完全に姿を消すことは難しいということなのだろう。少なくても僕なら素で熱感知できるし。

唯一まともそうなのが原始素能（ホワイトノート）の話。いつも気だるそうにしている電波少女な美樹（みき）の能力だ。

他人の能力をコピーできると勘違いされている能力だけれど、実際は他人の能力の火種を得られるだとか。

方向性と言ってもいい。発火能力者が透視能力に目覚めることはほぼありえないとされている、その理由。

ＰＫ系能力者で発火、発破、発電能力を操る能力者が実在するのは、方向性が似通っているため、可能性としては派生できなくもないからだ。

けれど、ＥＳＰ系能力はその方向性を大きく違(たが)っている。不可能とは言えないものの、隔たりが大きいのだと学者達は考えている。

原始素能(ホワイトノート)はその方向性を他人から得ることのできる能力だ。

発火能力者からは発火の火種、発水能力者からは発水の火種、撥水能力者からは当然撥水の火種。

つまり、相手の能力自体ではなく、相手の能力者が持っている能力としての可能性を得られるというもの。

なので、コピーできるというのは難しい。同じ規模の威力を持った超能力を使えるわけではないのだ。

いつもと勝手の違う能力をいきなり使いこなせるわけもない。

それに、もっともネックなのが、大体の原始素能(ホワイトノート)は火種を貰える数が１つか２つ、ということ。

無限にそれがこなせるのなら、確かに万能能力の名に相応しいだろうけど、限界があるというわけだ。

なので何時使うかは、慎重に決めなくてはいけない。

美樹さんは何を貰うつもりなのだろう？前に僕の形骸変容(メタモルフォーゼ)を得ようとしていたアレは冗談・・・だと思う。

みょみょみょ～んとか意味の分からない呪文を唱えておでこに手を当てていただけだけど。

そういえば原始素能(ホワイトノート)ってどうやって火種を貰うのだろうか？

そういうこと書いてある本、あるのかな？いや、直接彼女に訊けばいいか。

ＳＰＩ都市伝説解説読本シリーズが幾つも並んでいるのだけれど、どれもやはりそういったものばかり、ダークユーモアな感じがするのは１つもなかった。

これは編集があえて出さないのか、それとも圧力の成果なのか・・・。

まぁいいや、都市伝説系の話はこのぐらいにしよう。
・・・・・もし時間があればもう少し色々と情報を拾ってみたいのだけど、そろそろガラスから透(とお)ってくる陽が山吹色じみてきた。
鍋を用意されている身として早めに切り上げを宣告した方がいい。
形骸変容関連の資料がなくても、形態変身系の資料はあるし、それだって勉強になるだろう。
他にも件の日常的な赤の学習資料(コード・レッド)も探してみたい。
などと渦巻いている色々な願望を抑えつつ、椅子を畳んで入り口の方へと歩を進める。
とりあえずそこから、他のメンバーを読んでみようと思ったのだけど、その必要はなかった。
何故か。理由は明白。
彼女ら、この大量の有益資料を目の前にして携帯ゲームをやってたから。
ビオサイド。多数プレイでやっているらしい。
入り口から一歩も動かず、パイプ椅子に腰掛け5人で黙々と高画質の液晶を覗き込んでる。その脇に魔法瓶に入れたコーヒーまで置いてあって、紙コップが散乱という状況。
あぁ、そうかアホウドリ君の荷物はこれか。というか、飲食厳禁だろうよ普通。
何と言うか・・・・・罰当たり過ぎる。
こんなすばらしい所まで来てよくゲームできるなと。
いや、つまり僕のためにここまで連れてきてくれたって事なんだろうけどね。
・・・どうやら、神経質な岸君が逃げる少女役らしい。つまり他の彼らが追いかける側なのだけど、
「チッ、またこそこそと・・・」
「うげっ、りょーすけ、てめぇ第四病棟に菌撒きやがったな！感染した！」
「あぁーご愁傷様、みずる。駄目だよ、ちゃんとチェックしてから

行動しなきゃ」
「ワクチン持ってないなら分けるぞ。第三の入り口まで来い」
「ひぃー！出口ないです！ないですってば！なんで智香さん出入り口から動かないんですか！？」
「出すわけないでしょうが。アホウドリ、とっとと現場復帰しなさいよ。
りょうすけは第四にいるわ。ローラー作戦で一部屋ずつ潰していくわよ。
ゆきなりは対人毒ガス兵器持ってたでしょ。使うから持ってきて。とっとと終わらしてやるから覚悟しなさい」
本当に楽しそうに熱中している5人。・・・・・うん、今度参加させてもらおう。
いや、違うか。・・・どうしようかなこの状況。もう少し本読んでて良さそうな感じなんだけど。
でもなぁ。読んだら読んだで今度はこっちが熱中しそうな気がするし。
うーん、本当にどうしよう。現在時刻午後5時過ぎ。鍋を囲むつもりならそろそろ帰った方が良さそうなんだけど。
仕方ない、声をかけるのはこれが終わるまで待とう。幸い礎囲さんが一気に決めるつもりらしいので、もうすぐ終わりそうだ。

#

「思うに、エプロンをつけた女の子が、髪を上げてうなじを見せている後姿っていいと思うのよ」
ついさっきまで、キッチンで具材を切って準備をしていた僕に対してそんなことを言う礎囲さん。確かにエプロンだったけど、上の方で括ってたけれども！
「これだけの手間で料理が美味しく食べれるなんていいわよね」
手間をかけたのは僕だし、もしもその”手間”とやらがここまで

荷物を運んだことを指すならば、それはアホウドリ君の労働だったはず。

あれ？アホウドリって定着しちゃったけど、名前なんだったけ？忘れてしまったっぽい。

いや、いいか。思い出すのも面倒くさい。

あと、味がいいのは単に素材がいいからだろう。当然のようにぽんと持ってきたけれど、このカニとかどこから仕入れてきたんだというぐらい高そうだ。

あれだ、あれ・・・月５０万が金銭感覚をおかしくさせているに違いない。空いた時間にアルバイトでも入れておけば結構な額が懐に入るのだろう。

カニの種類なんて見て判別がつくわけもないのでこれがどんな種類なのかイマイチ判からない。いや、そもそもしゃぶしゃぶ用に足だけを加工してあるものなので判りっこないんだった。

「このカニ、なんて種類なの？」

気になって訊いてみる。

「ん？ハナサキガニだけど？」

シット。調理法を調べるんだった！

何でそんな幻と冠される高級食材をパーティーのぶち込み鍋に使うんだこの人達！

花咲ガニ。少なくても日本では漁獲量が激減してるヤドカリだ。美味しいに決まってる。というか適当にぶち込んでしまったのがすごい心残りなんですが。

せめてちゃんとしゃぶしゃぶとしてすべきだった。鍋って言うから煮込むつもりで・・・あーあ。

後悔の念を宿した目で改めて鍋に放り込んだ赤い甲殻類を見つめる。

・・・・今度、クシロに頼んでちゃんと料理してみようかな。

「？そういえば、これ何のパーティーなの？まさかただの食事会というわけじゃないよね？」

「『はづきちゃん歓迎パーティー』だね。『はづきちゃんを絶対加入させるための圧力パーティー』とも言うけどさっ」
答えてくれたのは音羽さん。料理に舌鼓してご機嫌なのか声が弾んでる。
「あ、書類持ってきたんだった。瑞流、あの封筒あんたの鞄の中よね？」
「んぁ、緑っぽいやつか？入れた覚えはあるな」
既に書類まで用意されているらしい。本当に圧力だ。そういう勧誘テクニックがあった気がする。人を断れないように仕向けるやつ・・・なんだっけ？
「それは記入したらどこに提出すればいいの？」
「あー、書けたら私に渡してくれたらいいんだけど・・・・・・証明写真とか持ってる？」
「持ってないかな・・・いや、撮ったことないと思うけど・・・」
そもそも受験云々の話ってあんまり覚えてない。何か色々ごちゃごちゃしたことがあったらしいけれど、僕のあずかり知らないところだし。
万可統一機構の方が何やら騒がしかったからなぁ。僕を祠堂学園に入れていいのかまずいのかって話で揉めてたらしい。結局鉄面皮な院長が許可してくれたとか。
「あれ？祠堂学園って私立よね、ちかっち？」
「そうだったと思うけど・・・はづきちゃん、受験票とかどうしたの？」
「んー、そういうのは全部クシロがやってくれたし。あれ？受験票って写真添付するものなの？」
いや、正直試験面倒臭いなぁと思って適当に受けてたし、受験票自体、当日クシロが渡してくれたんだし。
「なぁーる。そのクシロって子が過保護なおかげではづきちゃんは妙に世間知らずなのね。さすがねその子、今度会ってみたいわ。
むぅ、やっぱりはづきちゃんはお姫様属性よね。そういう所がま

た堪んないなぁ・・・」
　何か、箸を口につけて物欲しそうな顔をする礎囲さん。・・・カイナみたいに実力行使に出てきたら、とりあえずみぞおちに1発いこう。
「じゃあ、今日中には無理かな。それじゃあ、もし書けたら連絡頂戴」
「でも、わざわざそのために足を運ばれるのも気を遣うんだけど・・・」
「いいのよ。今度は焼肉にしましょ」
　次も全員で押しかけてパーティーを開くつもりらしい。
　それはそれで気が滅入るんだけど。
「・・・肉は普通のにしてほしいです」
「えぇ～、せっかくだから食べ比べしようよ。地元神戸牛ＶＳ佐賀牛！どちらが美味いかっ！」
　食べるのが好きなのかな、音羽さん。というかグルメ？あるいは高級食材が好きなのか？
　神戸牛に佐賀牛、どちらにしろ5等級の肉塊を持ってきそうで怖い。個人で得られるものなのかは知らないけれど、組織的に変なルートがある気がしてならない。
　僕としてはスーパーで市販しているようなタレ付きカルビやタン塩で十分楽しめるんだけどな。
「あ、はづきちゃん、そろそろメイン追加しよ。カニの次はフグよね」
　最初の準備に引き続き、僕は具材の投入係として作る側に。
　もっとも作業は既に切り身にされているフグとその他を投入するだけという単純ぶりだけど。
　他のメンバーが完全に食べる方に専念しているのにと何となく違和感を感じつつ、美味しいのでいいかと納得。
　ああでもやっぱりカニが心残り。包装紙に書いてあれば・・・。
「そうだ。裏方の活動内容、もう少し詳しく教えて欲しいんだよね」

気を、紛れさせよう。
「活動ねぇ。あまりないんだけど、あっ、そうだ。この前君が・・
――した不良達のことなんだけど・・・」
”・・――した”のところは体を震わす佐々見君。そして何をしたかを誤魔化した。
あぁ、それか。何か今日一日中距離を置いてると思ったら、それが効いてるのか。
「どうしたんですか?どうせすぐ治療されたでしょ?」
「・・・いや、そうなるはずだったんだけど、先輩が・・・ほら、君も会ってるだろう?眼鏡をかけた人、ブースに座ってた」
「・・・・・・。・・・・・会ってるかも?」
「会ってるんだよ」
強く断言された。あー、うっすら、覚えている・・・かも?
「その人がちょっと手を加えたせいで、彼ら元には戻らなくなったんだ」
「へぇ・・・ご愁傷様」
澄まして一言。自分がやったことだけど。
それに同情することができるわけもないし。いい気味だとしか言いようがない。
「で、正規の機関では無理だからって、患者を選ばないタイプの所へ行こうとしたわけだけど、それも達成できなかった」
「はい?」
そこで彼は礎囲さんを指す。指された方は僕と同じで全く悪びれず澄まして、僕が片手間に投入したタラを口に入れている。
「智香さんがウラカタの上に連絡して、他のグループがそれを阻止したらしいんだ」
あぁ、なるほど、そこから活動内容に繋がるわけか。そういうことをするのも裏方の活動、と。
「つまりそういう制裁を暗にやるってこと・・?」
「うん。基本実力行使でね。でも、なんだかんだ言って月1回は何

か仕事が入ってくるよ。最悪イベント会場の警備とか。無理やりにでも話を持ってくるって感じかな」

そりゃあ、１回も活動なしで５０万というのもどうかと思うしね。それでも大損だろう。不良の相手にしたって損になるはずだ。

裏方と仮称される組織の意義は暴走した超能力者の処理だろう。それが破壊によるものか、殺害によるものなのかは知らない。この組織がそこまで危ないかどうかは入らなければ分からない話だ。けれど、超能力者を集める以上は、彼らを特化した状況に対応させる必要性がある。

仲良しごっこのわけがない。月５０万をまさかどぶに捨てるようなことはしないだろう。

あるいは、その５０万は僕に対してだけのものなのかも。能力の等級で給料が決まっている可能性もある。

何にしても、色々と厄介ではありそうだけれど。今更入らないとも言えないし、言う気もないか。

「大分なくなってきたな具。織神、何か入れてくれよ」

容姿的にそう言われるのに違和感があるアホウドリ君。年上なので構わないのだけど、やっぱり不思議な気分になる。

いや、考えてみれば心の中であっても年上をアホウドリと呼ぶ僕は無礼者だけどね。

ともかく、まだまだ具材はある。花咲ではないカニがもう一杯に、イワシの肉団子その他野菜にもちろんシイタケも。

そろそろ食べることに集中しよう。

#

パーティーもどきのほぼ単なる食事会が終わったのは9時を過ぎた辺りだった。

あれ？パーティと食事会の違いって何なんだろうと今更思いつつ、さすがに片付けは皆手伝ってくれたので、嵐が去った後のように静

けさが身に染みる部屋の中ぼうっとしてみる。
基本的に大勢で騒いだことのない僕にとっては、ああいう何かを囲むという体験は新鮮なものだった。面白いけど疲れると言うのが感想。
アホウドリ君が冷蔵庫のクリオネを見つけてはしゃぎ、瓶を振り回すという蛮行を行った時には、さすがに殺気が涌いたけど。
テーブルに残った薄緑色をしたＡ４サイズの封筒の中身を取り出してみると、中には用紙が一枚。
氏名や住所、連絡先を書くスペース、写真を貼るらしい空白、そしてハンコを押す印。・・・ハンコ？ハンコ、ね。
それも持ってないや。押したこともない。
・・・駄目だ。クシロに頼り過ぎてる。礎囲さんがお姫様だとか呼ぶ意味がよく分かる。世間知らずだなぁ、僕。
ボールペンで書ける所を埋めていく。１分もかからず必記欄を書き終えてしまった。欠けているのは写真とハンコだけ。なのにこれが以外に大きな欠落がある気がしてならない。
なるほど。こういう気分になるのか、書類筆記って。
「・・・・・、やることがない」
声に出してみる。賑わっているところからいきなり静かになると居心地が悪いなぁ。
明日も休みだ。それが終わればまた学校が始まる。今度の目立った行事は６月の初頭、期末の能力測定だろう。７月には運動会があるし、もちろん期末考査もある。その後には夏休み。
道のりが長い、長すぎる。けれど、たぶんその日々はとても楽しいものになるのだろう。
世間知らずな僕、変わり者の友人にクラスメートと教師、それから色々ありそうな裏方のメンバー。
そこで起こる出来事は、僕を楽しませてくれる。
即物的で俗物的。
その日楽しければそれでいい。明日楽しいのならそれもいい。

明日がなくてもそれでいい。
さて、では明日は何をしてみよう。
クシロのところに行ってみようか。彼なら僕の苗字が彫られたハンコも証明になる写真も残っているかもしれない。
ではでは、今日も一日お疲れ様。

第7話－　裏方食会。－Ｓｏｐｈｉｅ－（後書き）

本当は2週間ほど前に更新できたのですが、気に入らないため一部書き直したため結局その2週間後になってしまいました。
世界観を出したいと、少しばかり説明文を入れようと思ったのですが、ああいう説明は苦手のようです。
・・・5回ぐらい書き直しました。
しかもそういう説明のために全体的に動きのない話になってしまいました。
まぁ、いいんですが。時たまそういう話があっても。
エキストラセンソリーな”日々”。ですから。元々日常を書くつもりだったと考えると・・・。
本当は次は能力測定や運動会といったイベントがきてもおかしくはないのですが、いきなりそこまで飛ぶのもなぁ、という作者のわがままで、ほのぼのな1日になってしまいました。
でも次はもう少し更新が早くなりそうです。
2月から夏休みなので。それも3月末まで。2ヶ月間まるまる何もなし。これで更新できないとまずいですね。

今回は超能力史が少し・・・というか全体的に?出た感じです。
頭の中にあったぼやけた設定を形にしていく作業はとても楽しいものでした。
ただ、全く気にしていなかったことが決定したりと本人は驚きな設定がチラホラ。
ソフィさんは猿に向かって機材を投げつけた瞬間、８歳になりました。
それまでは顔に皺の入った、眼鏡の凛々しい理性的な４０代ほどの女性というイメージだったんですけどね。
こうして実際書いてみて分かったことは、私は何か書くと思わせぶ

りな感じになってしまうっぽいです。
ソフィさんの死の謎なんて間違いなく伏線っぽい・・・・・・。
もちろんそれで話は書けなくはないと思うのですが、世界に奥行きを出すために余分な情報を付け加えたりしているため、伏線のようでそうでないモノが結構ありそうですね。
今まで気付きませんでした。

などなど、色々思うことのある話でした。
次からはいつもの感じに戻るのかな・・・？

第8話－　日常閑話。－Ａｄｏｌｅｓｃｅｎｃｅ－

休日に早起きする奴の気が知れない。
前日を通り越して午前3時ほどまで遊び倒した後の睡眠なのだ。
早く起きろと言う方が無茶だと思う。
葉月は『早く起きればそれだけ朝をゆっくり過ごせる』と言っていたが、眠気を無視して起きている時点で忙しないと思うのは俺だけだろうか？
ちなみに葉月は登校までの間、新聞を複数端々まで読み、早い時間にやっているニュースを聞き流し、クリオネに餌をやり、時にはシャワーを浴びたり・・・とまったりとした時間を過ごしているらしい。
と、まぁ、全く関係のないことを考えながら、俺は結局ベッドから出れずにいるわけだ。
髪が長いと仰向けで寝た時に挟み込んでしまって髪の付け根が痛かったりするという男性にはあまり縁のない事実を身に受けながらも、まだ起きる気にはなれない。
髪が長いと寝返りをうった際に数本口に入って気持ち悪い思いをするという・・・・・以下省略。
とにかく、まだ寝ていたい。いや、寝ていないともったいないといった感覚が残っている。
何でだろう？夢を見た足りていないから？メキシカンなおじさんにいきなり腹を刺される（そして抉られる）夢を3回繰り返したのに？・・・夢とはいえ、多少腹に気持ち悪い違和感を感じるものなんだ、アレ。
うーん。踏ん切りがつかないんだよなぁ。こうしているうちにお昼を回ってしまいそうな予感。
いいか。このまま1日寝過ごすというのも面白そうだし。
などと、駄目人間思考を働かせているとケータイが鳴った。

通話、らしい。相手は葉月だった。
「・・・もしもーし？」
『あー、今まで寝てたね？クシロ』
呆れた声がスピーカーから劣化情報として流れ込んでくる。
「ん、休みだし。やることないしな・・・」
いつものことだ。プライベートで自ら外に出ることはあまりないし。ネットショッピングって便利だよな。
『ふぅん？まぁ、ならちょうどいいんだけど、これからそっち行くね？色々と必要なものがあるんだよ』
「要る物？まぁ、大丈夫だけど・・・ん？あ、そうだ。来る時ぎんつば買ってきてくれ」
漢字で書くと銀鍔。金鍔とも言う。昔ながらの刀の鍔に見立てたお菓子だ。米粉を使った四角い焼き菓子。
『銀鍔？芋金鍔じゃなくて？』
芋金鍔はサツマイモが原料になっている種類のことだ。これもこれでかなり美味しい。ので、
「あ、それもよろしく。あと適当に他のも」
『了解。じゃーね』
そう言って通信は切れた。
すぐに食べたい、でも外に行く気にはなれない。それでも食べたいなーという微妙な欲求を起こさせる好物が今日は食べられる。
それに葉月も来る。
・・・・・よし、起きる気になってきた。
さすがにボサボサの頭を梳かす必要もあるし、それに葉月の来る前に終わらしておきたいことがある。
実はそのためにもぎんつばを買って来るように頼んだのだ。
電車で３０分、ここまで徒歩で5分ほど。買い物をすればさらに１０分ほどかかる。計４５分、余裕はあるだろう。
よっ、と身をよじってベッドから転げ落ち、あちこち軋む体を立ち上がらせる。

昼夜の区別のつかない様な生活を送っているので、寝巻きに着替える機会もなく当然普通の服装だ。ジャージにTシャツ、誰でもノーマルはこんな感じだろうと思う。

一直線で部屋に常備しているパソコンに向かい、電源を・・・入れるまでもなく待機状態だった。駄目だな、ホント。せめてパソコンを消しておくぐらいの生活リズムは持っておかないと。

マウスをクリックさせて待機状態を解くと、所定の動作でプログラムを立ち上げる。

機密性重視の通信プログラム『ＤｅＣｏｍｕ．ｖｅｒ７．０２』。

個人が作ったオリジナルソフトなので非売品だ。そもそも販売できるようなスタイル性はなく使い勝手も初心者には向いていない。いや、家電屋で売っているようなものではスペックが足りないかもしれない。フリーズするんじゃないだろうか。

ウインドウに表示される多種多様なボタンや通信状況を視覚化するパラメータが表示され、彩りを帯びる。

ウインドウの半分以上を占める白いスペースにはチャットと同じようにリアルタイムに通信相手との書き込みが表示されていくようになっている。

基本構造は本当に通常のチャットそのものだ。違うのはプログラムの大半が通信の秘匿に割かれているという点だろう。そしてそのために重い。

さて、準備は整った。

ＩＤとＰＡＳＳを入力して、通信を開始する。

『おうぅ。何だ今週はやたら早いじゃないか。いつもは夜中なのに。』

『今日は早い段階に友人が来るんで。』

『おい、面倒事は先に済ませようって魂胆かよ。俺だって傷つくんだぜ？』

『クルナさんに限ってそれはありません。』
『今の言葉に傷ついたんだが・・・』
『それもありません。』
『うわっ、ひでぇ奴。
まぁいいさ。で、どうよ？お変わりありませんか、この野郎。』
『ないですよ。ほら、こないだ言った共同訓練があったぐらいです。
今度の面白そうなイベントは体育祭ですよ。まだ先の話です。』
『体育祭ね。それはまぁ、こっちでも映像ぐらい入るんだよなぁ。』
『映像？確かに部外者だって入れると思いますけど、それって価値あるんですか？』
『そりゃあ、素人が撮ったような映像なんてさほど価値はないだろうな。
超能力者にだってプライバシーはあるんだぞ？
ホームビデオなんてインターネットに流すべきじゃねー。
そういう話じゃないんだ。まぁ、そのうち分かるんじゃないか？俺みたいに外に居る人間には周知の事実なんだけどな。
というか詳しい雰囲気やらはお前から聞いた方が良いに決まってる。』
『ありがとうございます。でもクルナさんが何が知りたいのか俺、イマイチ分かってませんよ？』
『んー？特別な情報が欲しいわけじゃないんだぜ？本当に超能力学園の内情を探りたいだけ。
趣味だな趣味。俺みたいな特別都市の外側に居る人間にはちょうど良い刺激なのさ。』
『趣味のわりにはセキュリティーがしっかりし過ぎてる気がしてならないんですが・・・』
『あー、そりゃこっちの事情だ。ちょちょいとまずいんだよ、私が特別研究都市について調べてるってのは。

そこで何かやらかすんじゃないかっていう、いらん勘繰りをさせることになるからな』

『今まで薄々気付いてはいたんですが、現在進行形でヤバイ事はやってませんよね？』

『いや、やってるっちゃやってるけどな。そういうのは生活習慣だろ。日常が非現実ってか？

まぁ別に俺が掲示板に書き込みしたところで何も問題はないんだけどさ。そういうのは形に残る。

学園都市の構成機構（システム）もそこら辺は馬鹿じゃないからな。秘匿はしないが要らない噂は消したがる。もちろん噂の元からだ。

そこから辺に調べられたくないんだよ、俺は。』

『それって、ＤｅＣｏｍｕが破られたら意味がない・・・というよりさらに状況が悪くなりません？』

『なるよ。なるが、それを任せられるくらいそのプログラムは私の自信作だ。』

『あ、クルナさん、今”私”って言いましたよね・・・？』

『言ってねーよ。』

『まだログ残ってますけど？』

『俺、掲示板とかチャットって大嫌いだ。』

その後、機嫌を損ねたクルナさんに一応共同訓練の様子なんかを伝えて通信は終わりとなった。

深香（みが）クルナさんに連絡を送るという毎週日曜日の習慣だ。

あの人は俺などという一人称を使ってはいるが、時々ああやって地が出るところから見て女性だと思う。

画面越しに文字で会話しているというのに、子供のように拗ねていることがありありと伝わってくる分かりやすい人だ。

苛められている頃に興味を持ったインターネットの掲示板で出会ったのだが、それ以来色々と相談に乗ってもらっている。

個人情報を隠した上で葉月のことも相談に乗ってもらっている経験豊富な人生の”師匠”というわけだ。

時々、どこで取ったか知らない無修正のポルノを大量に送りつけてくることがあるけど・・・まぁ、お茶目な人ということで。

さて、やることも終わったし、身だしなみを整えよう。

朝食は・・・どうせ葉月がお菓子と一緒に買ってくるだろうからいいとして、せめてお茶の準備ぐらいはしておこう。

#

インターホンが鳴った。

親機の受話器を取り、応答すると葉月の声。来たよー、だそうだ。

開錠キーを押して、中に招き入れる。

程なくして、葉月がパタパタと足音をさせてリビングにやってきた。

「とりあえず銀鍔に芋金、それから大福とか買ってきたんだけどね。あと、一応サラダとホットドッグ」

「ありがとう。ホットドッグはすぐ貰う。お腹すいてるから」

「サラダもね。ちゃんと野菜食べないと。サーモンサラダだから大丈夫でしょ？」

自堕落な生活を送っているとこういう世話焼きが身に沁みてありがたい。

葉月から熱々のホットドッグとサラダのパックを受け取り、テーブルに座る。

行儀良く頂きますと手を合わせてから、まずは苦手なサラダから処理し始めることにした。

葉月といえば、買って来たお菓子をテーブルに並べていっている。きんつば、いもきん、大福と先に言っていた物に続き、カンロ飴に甘納豆、何故かさーたーあんだぎー。

基本的に昔懐かしなジャンルで括って来た感じだ。

「で、要る物って何？急ぎの用事か？」
首を大げさに振る葉月。その度に後ろで結んだ髪の房が左右に揺れる。
ゴムを買ってからの葉月はポニテにすることが多くなった。さすがに纏めておかないと邪魔になるらしい。括り方がワンパターンなのはそれしか知らないからだろう。
興味を持って調べてくれると嬉しい限りなのだが、自主的でなくても誰かが教えてやる方がいいのかもしれない。
服装は薄水色のワンピース。男性服がないから当然と言えば当然とはいえ、ちゃんと女の子らしい格好で一安心だ。
「別にそういうわけでもないんだけど、ちょっと書類に必要なものがね・・・。
ハンコと証明写真。ほら、僕の受験云々てクシロがやったでしょ？だから持ってるんじゃないかって」
あー、そういえばそうだったかもしれない。
葉月を祠堂学園に入れようとした時に、何だかんだで万可統一機構の許可が下りたんだよな。
葉月の保護者だっていう男性が書類等の作業はこちらでやると言っていたのを、信用できないと思って全部俺がやったから・・・・・。
「あると思うよ。金庫に仕舞ってあるはずだ」
「良かった。織神なんて苗字、市販では売ってない気がしてたから」
「作ってくれるだろう？判子屋なら」
「んー、ハンコ屋ってここら辺にあるっけ？」
「あるさ。地下街じゃなくてショッピングモールの方に。西口の入った所すぐ」
と言っても、葉月は全く場所が掴めないらしく、うーんと唸っている。
あまり店の位置やらを記憶することに慣れていないのかもしれない。普段行き慣れている所でも、全体像を把握するのは難しいもの

だし。いや、葉月が方向音痴なのか？
・・・でも判子に証明写真か。確かに今後も要る機会が・・・・・ん？証明写真？
「葉月、判子は大丈夫だが、証明写真は駄目だ。
月日は経ってないとはいえ、受験前に使ったのは男の時のものだから今は使えない」
「あっ、あー。そうか、取り直し・・・・・・あ、そういえばそれも気になるんだけど、僕証明写真なんて撮ったことないよね？」
「証明写真っていうのは別に自販機のボックスで撮るものだけじゃないんだ。
いつか撮った写真でちょうどいいのがあったからそれを切り抜いた。要は規定サイズで背景と風貌がまともだったら大丈夫」
「ふーん。でもさ、正直証明写真なんて、僕には意味ないのにね」
「ま、形式的にだけ・・・ってちょい待ち。そもそもなんでそんなの要るのさ？今までそういうこと施設に丸投げだったろう？」
「酷いなぁ。ちょっとこっちでも色々動かないとって思ってるの。ほら、グループ関連で僕手持ち無沙汰だからね。それの代替物だよ。
あるでしょ、能力者の自治集団。あれの類」
・・・なるほど、確かにそういうのは経験値を得られやすいと聞いたことがある。
能力を得てからの常日頃、葉月はやることがないとぼやいていた。その解決策を見つけたらしい。
面倒臭い組織に参加しようなんていうのは、真剣に悩んだ結果だろう。
「でも大丈夫なのか、そんなものに参加して」
「うん？大丈夫だと思うよ？」
万可統一機構が許可してくれるのか、という意味で訊いたのだが、どうにも取れる答えを返されてしまった。
まぁ、俺もどうにでも取れる質問をしてしまったわけだが・・・。いいか。葉月がそういうのなら問題はないのだろう。

「で、写真はどうする？帰りにでも撮っていけばいいだろうけど――」

「え？別にそうやって撮らなくてもいいんでしょ？勿体無いよ５、６００円も。

クシロが撮ってくれればすぐ済むし。

駄目？」

・・・・・・あ〝――――――――――。

普通の写真でオッケーなんて、何で言ってしまった俺！

というか、それは恥ずかしい。意識してしまうと、些細なことでも気にしてしまうものなんだ人間はっ。

＃

俺は織神葉月のことをどう思っているのだろう？

今現在、写真を撮るということだけでこうも気恥ずかしさを感じる俺は、しかしながらそれがどういったところから派生しているのか判別できない。

無警戒過ぎる異性が近くに居るということが思春期の自分には毒なのか、それとも俺自身が葉月を好いているのか。

・・・葉月のことは好きだ。軽やかに身をこなす様も、いきなり止まって何やら思案する癖も、時折理解のできない行動に出る不思議さも、凛としてそこに在り続ける堅くなさも。

だが、それは恋愛とは別の”好き”という感情ではないのだろうか？

葉月は格好いい。格好いいのだ。

・・・・・そうか、そもそも俺は葉月に羨望を抱いていたのかもしれない。

葉月が女の子になってそれほど日にちは経っていないはずなのに、もう男の頃の葉月をどう感じていたのかがあやふやになっている。

悲しいことに、人は過去の出来事は思い出せてもその時の感情や

思いは脆く零れ落ちていくものらしい。
ならば、少しだけ小学校の頃を思い出してみよう。
そう、葉月と再び同じクラスになった3日後の惨事を。
まだ自分のことを僕と言っていたその当時、俺は苛められていた。
その理由は本当にくだらないもので、生徒が原因じゃないという点において救いがない。
大雑把に言ってしまえば慈善活動マニアのモンスターペアレントに、吊るし上げられたのだ。
よくもまあ、そんなそんなことをする大人が居たものだと今でも思うものの、今はどうでもいいことだろう。
問題はその陰険な行為を終わらしてしまった葉月の話だ。
学年が上がり、クラス替えが行われた新学期、運の悪いことに俺は苛めの主犯格と同じクラスになってしまったのだ。
苛めというものが核さえ残っていれば環境が変われど再発するものだと分かっていた俺はそのことに酷く落ち込んでいた。
織神葉月という、学校にやってきた当初、人形のようにカタチだけの何かと興味の惹かれた少年の変化に気付かないぐらいに。
会った時よりはちゃんと周りに興味を持てるほどには、クラスを再び同じくした時には他人を気遣える程度には人間らしく中身を詰めるに至ったらしい葉月が、俺の状態を理解するのは難しくなかったはずだ。
何も知らずに俺と言葉を交わす葉月に、主犯格たる図体のでかい男子生徒が、
「何でオマエ、そいつと絡んでんの？空気読めよ、オマエも制裁加えっぞ」
と苛立ち混じりに言ってしまったのが彼らの命運が地獄逝きと決定した瞬間に違いない。
俺にとってそいつらと同じクラスになってしまったことは不幸に違いなかったが、そいつらにとって葉月と一緒になってしまったことはさらに不幸だった。

その次の日、俺がいつも苛めてくるグループに囲まれていた放課後、その惨事が起きる。

教室の内から死角になる廊下で、おそらく主犯格らが集まる機を狙っていたであろう葉月が、まず図体のでかいのを■■した。

それに驚いて教室から逃げ去ろうとした1人に■■して、動かなくなったところを足を持って引きずり込む。

腰を抜かして動けなくなったり、失禁して戦意喪失しているメンバーにも容赦なしに■■。それでも動く奴にはさらに■■を加える。

紙芝居で例えるなら、そこの部分だけを黒く塗り潰して略さないといけない感じの圧倒的な暴力でその場を地獄に変えて見せた葉月は、へたり込んでいる俺を起こして保健室に行くように促したのである。

葉月にとっては、その場で怪我をしているのは俺1人だけだったのかもしれない。

その教室の中で最も軽傷だったのは俺だ。あって擦り傷に打撲程度のものだったし、保健室など行かなくても良いぐらいだった。

鼻の骨と永久歯に変わったばかりの歯を砕かれた奴に、舌を切った（あるいは千切れた）らしく口から血が溢れる奴、それから頭から血を流し転がり回る奴ら。

いくら頭部が浅い傷でも大量に出血する場所だったとしても、死ぬのではないかと不安になるほどに教室の床は血溜まりが、締まりきった空間には鉄の咽るような異臭が漂っていた。

葉月のか細い腕で、軽い体重で行われた狂行だったからこそ、幸運にも人死が出なかっただけで、本来なら誰か死んでいてもおかしくなかったのだ。

なのに葉月は俺の顔を心配そうに覗き込むだけで、他の奴らにはまったく関心をもっていなかった。

俺が大丈夫だと伝えると、葉月はそこでやっと彼らの方に向き直り、顔を抑える主犯格に彼らの血で染まった凶器たる椅子を握らしてこう言った。

「この惨事は君の仕業だ」
言葉が理解できず呆然とする彼に葉月は大袈裟に首を振って脅えているように、
「冬樹君、何てことしてるのっ！友達をそんなもので殴るなんてっ！」
そう言ってのけた。
ふざけんな！ここにいる全員がオマエがやったこと知ってんだ！オマエなんか退学だ！死刑だ！などと叫ぶ彼に、葉月は天使のような笑顔で、
「今まで決定的な証拠はないものの、苛めを行っているのではないかと噂が流れている素行の悪い君と、大人しく真面目に日々を過ごしているように見られている僕。教師がどっちを信じるかなんて君にだって分かるでしょ？」
トドメを指した。
その後、何もなかったように、というより何もしなかったように、惨事を見つけた発見者として教師を呼びにいった葉月によりこの話は幕を閉じた。
いくら流血沙汰とはいえ、まさか凶器の指紋を調べるわけもない。そもそも証言は取れているのだ。教師は葉月と俺の話を全面的に信用したし、図体のでかい彼と一緒に苛めを行っていた奴らも何も言わなかった。言ったら葉月に何をされるか分かったものではないし、何も言わなければ被害者でいられると気付いたからだろう。
その結果によって彼は何重ものダメージを受けることになったはずだ。
物理的に■■されたこと、犯人に仕立て上げられたこと、教師に信用されなかったこと、友人に裏切られたこと。
その後彼が学校に来ることはなかった。他のメンバーも結局いなくなった。
俺はそんな傍から見て酷いと言える葉月の仕打ちを、格好いいと思ったんだ。

別に暴力がいいとかそういう意味ではなく、俺や教師が解決策が浮かばずに長い間悩んでいた事柄を、一瞬にしてバッサリと切り捨てたことが格好良かった。
俺が悩んでいたことなど、本当にくだらないものだったのだと思い報せてくれた。
俺のことを大切な友人だと行為で真っ赤なほどに示してくれたことが嬉しかった。
そう。どこか大人びていた彼に俺は羨望の眼差しを向けていたのだ。
笑いが漏れる。
そんな俺が今や葉月がもっと少女らしく・・・など考えているんだからな。
羨望は今では別のモノに変わっている。
遠いと思っていた彼を俺はたぶん抜かしてしまったんだろう。
小学校の頃、彼は俺達より先にいて、中学生になった今、彼女は俺達より後にいる。
それはたぶん、彼が元の位置から動いていないから。
ずっと同じ場所にいる彼女がずっとそのままだということが俺は嫌なんだ。
だから世話を焼いたりする。女として、初めから、今から日々を送って欲しい。
本当に図々しい話だがそれが俺の気持ち。
・・・ふむ。なるほど、整理してみると何か納得できた感じがしてきた。
つまり俺は葉月を異性として見ているというよりは、女性としていて欲しいと考えているから逆に意識してしまうんだ。
などと・・・考えることに集中し過ぎたらしい。
気がつくと手が止まっていた。
よくないな。デジカメを探すといって葉月を待たせているのに。
倉庫としている部屋のクローゼットを探しているのだが、どうに

も仕舞った場所がはっきり思い出せない。
仕舞ったはずなんだけどな、ここら辺に。
興味もあまりないのに買った一眼レフ一式を、一応きっちりと整理して専用ケースに仕舞って・・・。
あ、これか。
それっぽい黒いバッグを確認のために開けてみる。ビンゴ。
良かった良かっ・・・あーくそ、デジカメってことを忘れてた。
バッテリー切れてるよな、さすがに。
まぁ、急いでいるわけでもないし充電しなおせばいいか。
とりあえずそれを抱えて、部屋を出る。葉月はいつも使っている部屋にいるだろう。
試験期間の時も使った、何かと集まりやすい、暇を潰せるものが揃っている場所だ。
背景は普通の壁で大丈夫だよなー、と撮影に必要な物が他にないかチェックしつつ、ドアを開ける。
案の定葉月は居た。仰向けになって漫画を読んでいた。
・・・・・。
漫画を読んでいた。漫画を読んでいた。漫画を読んで――――
ハヅキサン、ソレハナイデスヨ。
どうやって見つけた、それ！
1人暮らしとはいえ、そういうのはちゃんと隠してあるのに！
あ〝――――ぁ〝――――――――――！

即行で葉月から件の漫画を奪い、所定の位置に戻した後、お菓子の並べられた丸テーブルに向かい合って正座という現状。
ものすごく、気まずい。まさかこんな思いをするとは思っても見なかった。
葉月といえば、全くいつもと変わらない。四つ切にしたいもきんを口に運んでいる。

「もうっ、読んでる途中だったのにー」
「・・・」
「あの後どうなるか気になって仕方ないんだけど・・・」
「・・・・・・」
葉月が読んでいた漫画は年齢制限が辛うじてなく、一応書店に普通に置いてあるようなものだった。
「ヒロインが消火器で恋敵を殴る辺りで取り上げられたんだよ？」
「・・・、・・・・・・」
ストーリー重視で、そういうところが気に入っていたので取って置いたのだが・・・。
「でも女の子同士でどうやって性行為を行うかっていうの気にはなってたから興味深かった」
「・・・・・・、・・・・・・」
過激な性表現が描写されてなかったとはいえ、行為自体はちゃんと描かれた百合モノを所有しているのを知られた。
この場合、それを幸と取るか不幸と取るか。
・・・・・・。駄目だ、運のいいところが見当たらない。
「・・・すみません」
自然に謝罪の言葉が出てしまった。
「？何で？思春期ってそういうものでしょ？」
思春期に全くそういう類に無縁な人間に言われても説得力がない。
あれ？ならいいのか？
葉月は全く気にしていない。それが当然だと思っている。
持っていると思われているのと持っていると知られるとで対応が同じなら問題ない？
でもなぁ。それはそれで葉月が一般女子中学生とはずれているという証明でもあるわけで・・・。
複雑と言えば複雑だ。
「どうやって見つけたの、あれ」
「うん？そりゃあ何か隠しているっていうのは気付くよ。

自分の部屋に要らない物を置くのが嫌いで、物置のために部屋を幾つも割いているクシロが、部屋にダンボール置いてるんだもん」

・・・ベッドの下とか本棚とかよりだと思ったんだけどな。

ダンボールの表紙に再利用紙箱入れって書いてあったのに。上にちゃんと使ったコピー用紙が乗ってたのに。違和感・・・あるか？

「まぁ、気にしない気にしない。さ、写真撮っちゃおう？」

「・・・充電しなきゃ駄目なんですぐには無理だ。お菓子でも食べて時間を潰さないと」

「そうなの？後にしろ先にしろどうせそのつもりだったけど・・・」

そう言って立ち上がる葉月。

お菓子は目の前にあるというのに部屋を出るつもりらしい。飲み物でも取ってくるつもりなのだろうか？お茶は冷めたといえまだあるし、ここでも淹れられるのだが・・・。

「何か足りない物あるっけ？」

「ん？さっきの続きが気になるから――――きゅっ」

後ろから、首をきっちり絞めてやった。

＃

カメラだけが高性能では意味がないとプリンタもそれなりにいいものを使っているのだが、写真なんてそもそも印刷する機会がない。

文章をコピーするなら別に性能の劣る複合機で十分だし、写真用のインクジェット紙って高いし枚数が少な過ぎると思う。

結局、プリンタ購入時についてきたお試し用の光沢紙を使って撮った写真を印刷することになった。

できたものを渡し、カッターマットやら鉄製の定規やらを取り出してやる。

サイズを訊くと全く知らないという返答、幸い貼り付ける書類自体を持って来ていたので問題はなかった。

書類に判子と写真を貼って元の封筒に戻した葉月は、それでやる

ことは終えたとばかりにベランダ際の日向に寝転がってしまった。
その傍らにカンロ飴を置くことも忘れない。本気でだらけモードらしい。
「葉月、デイトレードとかはやらないのか？」
「・・・この数ヶ月でそういう類が苦手だと悟ったから。コツコツ堅実にがんばるよ」
「ま、別に無理して稼ぐ必要はないしな。施設だって必要分は払ってくれるんだろう？」
「と言いつつ、クシロが払ってるから出してないんだよね、あそこ。変なところで消極的だし。そして払ってもらってる限り努力しないと僕の流儀に反する・・・」
「別にいいのに」
ごろろんと寝返りをうつ葉月。口に入れた飴が歯に当たっているのか、カロカロという音が鳴っている。
俺は俺で電子レンジで暖めたさーたーあんだぎーを1つ手にとって口に運んだ。
この揚げ菓子、やはり熱々が美味しい。一度だけ沖縄に行ったことはがあるが、作りたてのものは食べたことないな。
空港に売っていた琉球ガラスのストラップが綺麗で、葉月にお土産として買って帰ったっけ。
その頃、感情の起伏の薄かった葉月にしては珍しくそれに見入っていたのを覚えている。
光を透いて蒼と翠に輝くガラスを面白そうにずっと眺めていた。
・・・・・・、・・・・・・。
現在昼食時を1時間ほど越えた一日で一番気温の上がる頃。
日向ぼっこに最適で、もちろん昼寝にも最適。
うつらうつらしているとポケットのケータイがバイブレーション。
メール。隆も来るらしい。
返答として、手頃な昼食を頼んでおいた。
さて、不良君がやってくるまでの少しの間、意識を手放しますか。

第8話－　日常閑話。－Ａｄｏｌｅｓｃｅｎｃｅ－（後書き）

何時もより短く、少しスピードを上げて書いたので文章の繋がりが多少心配なところですが・・・・・・
なんと！まさかの１週間更新です！
そのうち内容を足す可能性があるのでご了承ください。
次は一週間後にＵＰするぞと決めていたので、目標は達せられて嬉しいです。
今回のタイトルは『日常の無駄話』という意味で、英語の方は訳すと『思春期』になります。
この話は、別になくてもいいと思うのですが、やってみたかったので入れました。
超能力がもはや関係ない感じですが、それもそれでいいかなぁと。
というか超能力が必要な状況が日常にないっていうのは辛いね。
・・・次からはイベントの話が出てくるので少し物語が進むと思います。
では、できれば１週間後会いましょう！

第9話ー　作戦策選。ー Dissident ー

6月。梅雨の季節。湿度の高い今日この頃。今日も今日とて天気は雨だ。

ジメジメしている蒸し暑い教室では、汗で下着が気持ち悪く、汗疹になったのか痒くて不快感が増す。

下はともかく上の布切れを外してしまいたい気持ちを押さえ、能力で痒くなった場所の皮膚の異常を改善する。

そうしたところで下着は元のままなので、時間が戻れば元通り痒くなるという嫌なサイクルを繰り返しているのだけど、皮膚の性質を変えてしまうのはどうかと思うし。

せっかくエアコンのある教室なのだからそれを使えばいいのにとも思う。が、使用許可が下りるのは夏と冬の間だけらしく、電源すら入らない。

ボタンを開けた胸元を広げて空気を送り込んでいるとクシロに窘められたので、服の中の換気もできない。

「でー、美樹さん。どうだった？共同訓練・・・」

今ばかりは、美樹さんの基本体勢を真似て机に顎を乗せつつ、だるさを全面的に出している僕。

「んんんー、原始素能のグループ自体は1つだけあったーんだけどねー。

基本的に他人の能力を分けてもらうような能力だから、集まってもすることねーのですとよ？」

手に持ったミックスティーのパックから水分補給。緑茶、烏龍茶、抹茶、蕎麦茶にルイボスティー・・・絶対に無理のある味のチョイスだ。

「でも、どれだけの能力を得られるかとか、そういうのは訓練次第じゃなかったの？」

「や、それがそういうのは別のところでやってるらしいけどー、や

ばそうなんで教えてやんないって言われちゃったー」
失礼だよねー、と同意を求めてくる彼女。でも、
「正論だと思うよ？美樹さん、危ないって言われてても平気で崩壊寸前の廃ビルに登りそうな感じするし」
「そうかなぁ・・・でもさー、崩れないってこともあるでしょー？そういうの」
だから危ないんだけどなぁ。
「というかはづちゃん、クラスメートにさん付けはしないー。この前いいんちょーに言われたぜよ？」
ぜよ？ぜよ、ねぇ・・・。
確かに言われたけども。
『これからもっと親密な仲になるためにも、さんをつけて呼ぶのはやめよ？』
と、うふふふふ・・・と何とも断りづらい笑みを浮かべて提案された。
僕はあんまりクラスメートという微妙な立ち位置にいる女子生徒を呼び捨てにすることはしたくない。
一応男・・・という認識がなくもなかったのか、親近感が涌きにくい女性、つまり同年齢の少女を呼び捨てにするのは苦手なのかもしれない。
男子ならともかく、女性でそういう呼び方をしているのはカイナぐらいのものだ。
とすると、必然的に『さん』以外の何かをつけて呼ばなくてはいけないわけで・・・うーん、これも結構違和感はある。あるのだけど・・・・・・。
「美樹・・・ちゃんは結局体育祭は出れるの？能力を使うのが前提っていってたけど」
現在、本来なら授業のあるはずの時刻でありながら、教室に居るのは僕と彼女だけだ。
何故なら、本日は期末能力測定の日だから。

普通の学校にはない、超能力に係わっている人間として、非現実的な素敵イベントの1つであるはずなのだけど、残念ながらその例外に分類されている僕達はこうして教室待ちというわけである。

美樹ちゃんは完全に測定なし。僕は能力測定というより、人間ドッグを受けた感じ。前の時と同じように体を検査されて、皮膚細胞まで採られた。

超能力関係なくないかな?何か悲しくなってきた。

いいなー、クシロは。少なくても僕より超能力者なライフを送っているだろう。

「一応出れるってさー。能力なしじゃかなりきついけど、努力点はくれるらしぃー」

能力検査は7月にある体育祭の危険排除のためにある。

能力をコントロールできないような生徒が参加しないように事前にチェックするというわけだ。

つまりクシロみたいな能力者を振るいにかけるのが本来の目的。

・・・・・まぁ、クシロは駄目じゃないのかなぁ。

普段見る機会がないのが残念だけれど、時々訓練所に顔を出す度被害に遭う人形がグレードアップしてるから。

能力を使えない生徒よりも制御できない生徒の方が問題なのだろう。

「体育祭の方で能力の成績決めるんだよねー?測定じゃだめなの?はづちゃん分かるぅ?」

「測定よりも実践での技術が重要なんでしょ。だからわざわざ模擬戦を設けるの。僕の能力はどちらかっていうと実戦向きだし」

「んんー、いいなー。はづちゃん、なぁーに気に体強化してるよねー?スチール缶を片手でバコッとやっちゃった時はどうかと思ったけどー」

「便利なんだけどなぁ。ゴミ出しが楽なんだよ、缶とかペットボトルとか潰しちゃえるからかさばらなくて」

「うら若き乙女としてどうかと思うよ?」

何故かそこだけ何時もの間延びした口調じゃない。そんなところで本気になられてもね。

「それは美樹ちゃんもだよ？もう少しシャキッとしていればいいのに」

「今のはづちゃんに言われたくねぇーす」

まあね。今限定・・・いや梅雨限定で机に突っ伏している状態は僕も同じ。でも彼女のは年がら年中そうっぽいし。

「そもそも形骸変容（メタモルフォーゼ）の僕に女を強要し過ぎじゃないかな？」

「いいじゃーん。そっちの方がお似合いお似合い。無意識でそうなったんならー、そっちの方が自然てことよぅ？」

お似合いね。それほど僕はこの姿でしっくりくるような仕草をしていただろうか？

男女では行動の節々で違いが出てくるものと思っていたのだけど。性自認が女だと思ったことはないのに、元から女らしかった・・・というのは少しショックな感じだ。

「いや、いいか。考えるのも面倒臭い・・・・・・」

「お、隆くーん。終わったのかーい？」

僕のぼやきを遮る形で美樹さんが体を起こして、声を上げた。

首を廊下側に向きかえるとタカがだるそうな顔をして教室のドアを閉めるところだった。

「タカ、どうだった。合格？不合格？」

「合格っちゃあ合格だな。体育祭には出ていいとよ。

というか、能力測定に合格とかあんのか？」

「目的はそんなものでしょ。出れるか出れないか。あ、クシロはどうなった？やっぱり無理だって？」

「知らねぇーよ。測定場所違うからな。ま、無理だろうが」

だよね、と同意しておく。

人間が爆発するところなんて好んでみたくないし。

「ひっどいねー、２人共。友達でしょー？」

美樹ちゃんがそんなことを言う。

「うん、僕は信じてるよ。・・・・・・クシロの能力は破壊力だけは高いって」

それだけは太鼓判を押せる。この前聞いたところによるとマネキンを破砕させてしまったらしいから。生身の人間でやるとすごいことになりそうだしね。

「照準が合わせられないのと、威力を制御できないのはまずいよな」

タカも訓練所の惨劇を一度は見たことがあるのか、遠い目をしてそう言った。

まぁ、まだ能力を得て間もない生徒の出せる威力じゃないし、当然体育祭に出れるような状態じゃないしね。

じゅるるるるぅぅぅ・・・・・・

会話が途切れて、何か気まずい空気の中、僕はまだ少し残っていたミックスティーを飲み干した。

時間が経つと他のクラスメートも測定を終えて帰ってきた。

原始素能（ホワイトノート）の美樹ちゃん。

いいんちょーの椎（しい）ちゃん、風化水空（ブロウ・ブロウ）。

ふくいいんちょー亜子（あこ）ちゃんは残留思念（サイコメトリー）読取。

何かと流血沙汰に巻き込まれる海（かい）君は粗己治癒（そきちゆ）。

割と普通の菜誉（ほまれ）ちゃんが浅夢予知（くもりゆめ）。

矢崎君・・・名前で呼ぶなら聡一君は視覚放置（暫定）。

飛騨（ひだ）君の彼女こと絵梨ちゃんの能力は発光能力。

その番（つがい）の飛騨君は撥水能力。

科（しな）ちゃんは天空泳法（スカイ・ウォーター）。

改めてみても、どれもこれもまぁ、殺傷能力は低い能力だ。

発光能力は応用によっては物を燃やすぐらいはできるけど、斬刀（ウォータ）ーカッター水圧よりはマシ。

香魚子（あゆこ）ちゃんの煙火手榴弾（ミニ・パイロ）や九鈴（くすず）ちゃんの斬刀水圧（ウォーターカッター）は純粋に殺傷系の能力だけど、そもそも能力を得てから1年も経っていない学生が

人を殺せる程度の能力を持っている方が稀だろう。
斬刀水圧（ウォーターカッター）だって、文具のカッターで指を切ったぐらいの傷を負わせるのがやっとで、当たり所が悪くない限りしにはしないような威力であることが多い。
九鈴（くすず）ちゃんの能力も威力としてはそれぐらいのもので、逸脱して危険だとは断定しにくいものの、本人の性質が問題のため体育祭は基本的に出場を辞退してもらう形になったらしい。
で、クシロはというと。
当然ながら机で落ち込んでいる。
「そこまで落ち込まなくても・・・」
声をかけるけど返事がない。組んだ腕に顔を埋めているので表情すら見えない。『返事がない、まるで屍のようだ』というやつだろう。
「駄目だよ、葉月。本気で落ち込んでるからな」
楚々絽（そそろ）さんがくつくつと笑いながら言った。・・・駄目だ、彼女はどうしてもちゃん付けで呼べない。
でも、・・・・・仕方ないか。
「楚々絽ちゃんは何の能力だったっけ？」
すると楚々絽さ・・・ちゃんはきょとんと一瞬目を見開いて、
「いいね！いい！！楚々絽ちゃん・・・か。そう呼ばれたのは初めてかもな！」
口を歪めて愉快そうに笑った。
僕が言うのもなんだけど、女の子としてどうかと思うなその笑い。
「私のは視界傍受だ。聡一の能力と微妙に被っている気がして嫌なのだけどね」
「おーい、コラコラ、聞こえてるんだが？」
「ま、聞こえるだろうさ。ただ私のは人の視界を奪取するだけだからね。彼みたいに盗撮まがいのことはできやしない」
残念だ、と楚々絽ちゃん。駄目だ。台詞を聞いていると余計『ちゃん』が合わない。

この口調で、漆黒の長髪をなびかせる美人というありがちな残念な人物で、これまた残念なことに恋愛に興味がない。
もっともこれは矢崎君が言っていたことだ。恋愛なんて僕だって理解できない。
ただ、長髪を一纏めにして何箇所かで紐を結ぶというヘアスタイルの彼女がああいう口調で物言う度に、溜息を吐く男子生徒がいるというのは確認できた。
「あ、そうだ。矢崎君、ちょっとこっちに」
彼の名前が出てきたので、常々思っていた疑問を思い出した。
そう、彼の能力視覚放置の利用法について、隠しカメラ的な盗撮以外に使えそうな用途が思いついていて・・・。
「何だ？」
「うん、ちょっと試したいことがあってね。これ・・・」
そう言って僕はミックスティーと一緒に購入した苺檸檬のパックを取り出した。
「これの中身に視覚を移せる？対称が液体の場合、視界がどうなるのか気になってさ」
「あーできなくはないと思うが、パックじゃ一面真っ暗だろうな」
そうか。それを忘れていた。
透明なコップでも持ってこないと無理か。
「これにジュースを移せばいい。これなら・・・まぁ透明度は低いが何とかなる程度だろう」
そう言って楚々紹ちゃんが水筒のコップを取り出した。プラスチック製のコップ部分だけが半透明な容器。
確かにそれなら周りの状況ぐらい分かるだろう。さすが楚々紹ちゃん、気が効く。
遠慮なくパックを開けて中身を入る分だけ注がせてもらう。
「よし。これでオッケー」
手で示した矢崎君に催促する。
彼は対象に直接触るのではなく、掌をかざすようにして目を閉じ

た。
　前と同じように数刻の間。
「・・・・・・よし、移った」
　彼の報告で能力がちゃんと発現したことを知る。
　漫画のように目に見える変化がないというのは地味というより恐ろしい。盗撮されていても絶対気付かないのだから。
　・・・そうだ。この能力への対策、結局探すことができなかったんだ。裏方に思体複製君（アホウドリ）が居るのだから、今度聞いてみよう。
「どう？どういう風に見えるの？３６０。見渡せる？」
「いや・・・視点は微妙に動いてる・・・が自分じゃ動かせないな。液体が動いてるんだと思う」
「そう」
　じゃあ、こうやれば目が回るのか。
「っ！・・・コップを回すなぁ！ぐるぐるする！」
　消しゴムのような固体なら、それ１個を対象としているということは簡単にイメージが沸くのだけど、液体の場合どこに視界を移したのか考えづらい。
　液体全体に視覚の感覚が張り付いていると考えるなら、混ぜれば画面（しかい）が歪むような気がしていたのだけど、どうやら視点がずれるだけらしいし。
　ということは、液体の一点に視界が移っているのだろうか？
　まぁ、いいか。本当に気になっているのはこれじゃない。
「タカー、タカちょっとこっちに」
　さっき矢崎君を呼び出した時のように、手毬を発破能力で弾く訓練をしていたタカを呼ぶ。
　訓練を中断して、すぐに来てくれるタカ。そんな彼に僕は件のコップを取り出して、言う。
「これ飲んでみて」
「！っ――――ぁ」
　その台詞に矢崎君が何やら言おうとしたけど間に合わず、タカは

躊躇なくそのジュースを飲み干した。
普通、そういう風に頼まれた飲み物には何か変なものが入っていると疑うものなんだけれど。
うん、素直は美徳だよね。
「ぎゃぁあああああぁぁぁぁ・・・・・・！」
まぁ、当然ながら矢崎君の悲鳴が上がった。
「葉月、これ別に普通のジュースなんだが」
うん。何も仕組んでないないしね。何かあると思った上でよく飲めるよね、タカ。
「ついでにこれもあげるよ」
そう言って僕は残りのジュースの入ったパックをタカに渡す。
「で、矢崎君どうだった？」
「どうもこうもねぇ！男の腹ん中なんて見えなくても入りたくねぇよ！」
・・・・・、あれ？
「・・・見えなくても？」
「いきなり真っ暗になったよ！当然だろ、胃の中に光なんてほとんど入ってこないんだぞ！？」
あっ、それを忘れてた。
パックに入ったままだと暗くて何も見えないと彼が最初に言っていたのに。
「それは失念だったなぁ・・・。残念、君に人間胃カメラの称号（あだな）を定着させれるかと思ったのに・・・」
「ひでぇ！！」
「でも改善の余地はあるよね。何とか光源を見つければ・・・」
「別に普通の胃カメラでいいだろ！？あえて僕を代用する理由が見当たらない！」
そうかな？医療系への応用は悪くないと思うけど。
「いつか使えるかもよ？・・・ほら、マンションの給水タンクを利用したら、浴場に簡単に入り込める」

「・・・・・それは発想になかったな・・・」
・・・本気で考えてる。
光云々を忘れていた僕が言うのもなんだけど、考えれば分かるのに。
水を使うのはシャワーや風呂だけじゃないことも、使用者が女とは限らないことにも。
からかいがいがあると言えばあるのだけど。
と、いきなりクシロが上半身を起き上がらせた。
「・・・そんな感じで俺の能力にも使い道ない？」
死んだ目でそんなことを言う。
うっ、表情が真剣だ。
「えぇーと・・・・・人間粉砕機（クラッシャー）・・・？」
がごんっという痛々しい音と共に再びクシロは机に伏した。
しばらく復活できそうではない。

#

教室の開けた窓からは涼んだ空気が流れ込んでくる。湿り気のない、肌に心地よい風だ。
「よぉーし、全員に渡ったか？それがもうすぐある体育祭の詳細だ。俺が先に説明するより各自読んだ方がいいな。・・・よし、読め。質問は手を上げろ」
などと教師としての責務を半分放棄した担任の声。６月下旬の梅雨明けに相応しい今度こそ心躍るイベントの片鱗が見えてきた気がする。
配られたのはＡ４サイズの冊子。『体育祭バトルロワイヤル指南書』と書かれている。・・・校長だろうな。
黄色い表紙のそれをめくってみると、何故か美樹ちゃんオリジナルキャラクター『いなっちー』が。
ふきだしで、何やら、言っている。

ぱたんと冊子を閉じた。無言で天井を見る。横目で確認すると、他にも同じようなことをやってるクラスメートが数人。

仕方なくもう一度オープン。速読していく。

体育祭は約一週間後の7月3日に行われる。開催期間は2日間で、1日目はメインの種目に参加できない生徒達と立候補の生徒による玉投げ、2日目は学園領地内を使ったメインのバトルロワイヤルとなっている。

玉投げは能力を使っても大丈夫と言われている選出生徒の攻撃陣と使うなと釘を刺された生徒の守備陣の役割分担でやる雪合戦、あるいは枕投げのようなものらしい。

攻撃役は1回、守備役は3回相手に玉（というか弾）を当てられると退場となり、相手陣地のフラッグを先に取った方が勝ちという単純明快なルールで、これを各学校で1チームとし学園全体でトーナメントで行い優勝したチームは2日目が有利とか。何かしらのアドバンテージが与えられるのだろう。

玉投げというより名称は弾投げの方が合っているサブ競技についてもう少し詳しく説明すると、攻撃側は自身の能力以外は使ってはいけないことになっている。つまり最初から競技場に本来の玉投げのように玉が転がっているわけではなく、能力のぶつけ合いということだ。

対して守備側は強化プラスチックの盾を持って攻撃側を守る。守備手段を持たない攻撃役が容易く弾に当てられて攻撃手段を失うと、敵の侵攻を防ぐことが困難になり、逆に守備役が攻撃役の保護に回り過ぎるとフラッグが取られやすくなる。

攻撃役が1回のヒットでアウトになるのは、メインに出れない生徒達に対する配慮だろう。3回まで当たっても大丈夫な守備陣の活躍により勝負が分かれるように考えられている。

シンプルなゲームだけに戦略が求められるタイプだ。1日目だけでも結構楽しめそうな気がするけどな。

で、次は2日目のバトルロワイヤル。共同訓練の時にその内容は

耳にしていたけれど、本当にバトルロワイヤルってどうなんだろう？
　完全な個人戦。学園内での自由交戦。もちろん手加減を加えた上での、首から提げたペンダントを破壊することで勝敗を決める全うなゲームではある。
　最後に残った1人が勝者ではあるものの、破壊したペンダントの数も重要視される。それがいわゆる成績と言われるもので、ちゃんとしっかり学業として認められるらしい。
　勝者には景品が、活躍者には成績が与えられるというわけだ。
　ベストは積極的に戦闘を行い勝ち残って優勝することだけど、当然それは難しい。この競技、大学生はともかく高校3年生までの生徒が参加している。能力を得て間もない中学1年生に勝機はそうそう巡って来ない。
　しかしそれは一対一で戦った場合だ。このルールブックを見てみても共闘が違反行為だとは書かれていないし、逆に成績の付け方は個数だけではなく戦い方も見ると明記されている。
　この冊子を一週間前に渡してくることを考えると、当日までに策を練れと言っているようなものなのだ。
　ルールを完璧に頭に入れ、規則の間をすり抜け、裏をかけ、とそういうことだ。
　・・・これを渡された時点で勝負が始まっているらしい。
　なので、とりあえずこれだけ確認。
「せんせー」
「何だ織神」
「ルールはこれだけなんですね？」
　名前を思い出せない担任はにやりと笑った。

「つまりバトルロワイヤルに関して言えば、能力で攻撃する必要はないわけだよね」
　質問を受け終え、『残り時間は作戦タイムなー』という本当に本

来の学業というものをどこかへ捨てたような言葉を吐いた担任従い、今クラス全体で意見を出し合っている。
　共同訓練の時も思ったのだけど、この学校、いや学園の学力は大丈夫なのだろうか？すごく心配ではある。
「持ち込み禁止物は書かれているっていうことは、逆に言えばここに書いてあるもの以外は持ち込んでいいとみていいな」
　矢崎君がそのリストに赤ペンでチェックを付ける。
「持ち込んでいい物を書いてないってことはそうだろう」
「さすがにケータイは駄目か・・・」
「ＥＳＰ系能力者がいるからね。能力で補えっていうのは当然だよ」
　持ち込み禁止リストには通信器具の一切を禁じると書いてある。
ポケベルも駄目っぽい。
「お金も駄目で、非常食とか水分は隠しポイントにあるってなると、持久戦を考えれば先にそれ探した方がいいのか？」
「動き回れば相手に見つかりやすくなるよ。結局さ、数人で組んで役割分担っていうのが妥当だね」
「だな。個人戦つってもチーム戦と変わらないんじゃねーのか？」
「いや、最後残れるのは１人だ。それに裏切りもあり得る。そう考えると集団で行動しても結局は他人に頼り切らないのが無難だ。というかそれが醍醐味なんだな、このゲーム」
「だから１人では生き残りが困難なようになってるのよ。協力させといてその後には裏切らせる」
「たぶんどこも最初はクラス単位で動くはずだよ。お互い能力を知っているだけに連携組みやすいし」
「知られている分、離れていると何かされるのではないかという心理も働くしね」
　・・・皆して僕の方を見る。あれ？何かおかしいことを言っただろうか？
「伝達係のＥＳＰけーい、実行係のＰＫけーい、それにチーム内の副構成員、ぷらーすエキストラって感じでチーム編成、かな？」

伝達係ＥＳＰ系、実行係ＰＫ系、副構成、エキストラと美樹ちゃんが言った言葉を冊子に書き込んでいく椎ちゃん。

「エキストラ・・・特別特化した能力者が切札ってことよね。はづきちゃんみたいなの？」

「いや、織神のは身体強化って言った方がいいから副構成・・・深柄（みがら）の天空泳法（スカイ・ウォーター）方がそれっぽい」

「えぇー、私の能力って空飛ぶだけよ？」

「火力以外のＰＫって考えるとそれぐらいじゃない？ＥＳＰ系で・・・あ、聡一君の視覚放置があるわね。使いようによっては切札かしら？」

「監視にも探索にも使えるからね・・・チームとしての特色と言えばそうなるか・・・」

「役割分担をしっかり行った上でちゃんと策を練っておかないといけないのね」

「なぁ、思ったんだが、俺の粗己治癒（そきちゆ）はあんまり使いどころなくないか？」

「ない。副構成員だな、君は。あるとすれば少々打たれ強いということか・・・。体はいくらか回復できるんだし。ま、ペンダントを破壊されればそれまでだが」

「海君はバリケード、と」

何気に酷いことを呟きながらメモする椎ちゃん。海君は自分の扱いに改めて疑問を抱いている様子だ。

「最初はまとまってチーム単位で相手を減らし、終末では分かれて戦闘っていう風になるのかな」

「取れるだけＥＳＰ系が連携をサポートして、ＰＫ系を主力に副構成で細かく潰していく・・・っていうのが基本だろう、どこもそんな感じで来るとは思う」

冊子に書くスペースがないと判断したのか、家庭科のノートに書き込みを始めた矢崎君。意外に綺麗な字で、図解の図も書き慣れた感じがした。

「うーん。でもさぁ、それってつまらなくない？誰もが堅実に勝てそうな戦しかしないってことだよね、これ。
イレギュラーがなさそう・・・あ、そっか。起きないのなら起こせばいいんだ」
またしても皆僕の方を見る。
「いいんちょー、ここに不穏分子がいますぜ・・・？」
「・・・葉月ちゃん？あなたはここで何をしているの？」
何って・・・何だろう？
何かしら面白いように個人的に行動を起こしてみようかなぁなどと考えている僕。つまり単独行動に出るだろう僕と、まとまって動くつもりらしい他のクラスメート。
敵の作戦会議の中にいると言えなくもない今の状況。
「敵情視察？」
言ったら教室から締め出された。

#

個人戦で策を練るのは当然のことだが、それに影響するサブの玉投げのことも忘れてはいけない。
玉投げは学校対抗戦。攻撃陣３０人、守備陣２０人が人数制限で、１つの学校に危険指定を受ける生徒は２０人もいないと考慮されてあるらしい。
少ない分は立候補で埋めて人数を合わせ、攻撃陣はちゃんと力を制御できる生徒達が請け負う。
攻撃陣は制限された最大出力以下なら威力を調節してよく、守備陣は盾になら相手の守備陣を攻撃できる。もちろん盾をぶつけ合う程度のものになるのだが、攻撃陣の守備を弱めるという効果を得られるだろう。
戦略を考えるのはもとより、トーナメントを制したものに何かしらのアドバンテージがあるとすると後々にも影響してくる。自分達

が勝ったらいいけど、負けた場合は敵の強化に繋がる。
よって、サブといえども手抜きなどするわけにもいかないのだ。
・・・・・という理由で、何故か僕も参加することになった。
何だかんだで結構な肉弾戦になるらしく、体力と運動神経のある生徒が好ましい。けれどメインの前日に怪我を負いたくない、体力を使いたくないという生徒が多く、守備陣の立候補は少ないとか。
結果例年より少なかったメイン参加不可の生徒の空きを埋めるべく、校長が・・・校長が！僕を推薦したらしい。
クシロと同じようにチーム編成が決まったので集まって欲しいとの連絡を受けて、普段使わない視聴覚室に足を運ぶことになった。
「諸君！今年もついにこの季節がやってきた！今年初めての一年生もいるので説明するが、この競技はかなりの激戦となる！
去年は開始直後から守備陣が全員で突撃してきた学校があったし、出力系による集中砲火など当たり前だ！
なので怪我のないように心構えも含めて、プレゼンを行う！」
開き直っているのか、やたらと熱の入っている3年生の人。周りが話しているのを聞く限り、この人3年連続これに参加しているらしい。
「皆に配ったプリントがあるな。その二枚目を見てくれ。それが基本的なチームの役割分担と戦略だ。何もなければその通りに行動してくれればいい。
問題は四枚目からの奇策妙策への対応だ。ここはちゃんと頭に入れておいて貰いたい。少なくても慌てることだけはないように。
第三中学の連中は毎年何かしらの奇策を用いてくるんだ。相手の陣形を崩すのを狙ってな。新しいのを考えてこようと必死で失敗するとそのまま一気に負けてしまうタイプなんだが、侮れん」
４ページ目を見てみると図解で例が書かれている。・・・よかった。いなっちーはいない。
先ほど言った守備群突撃の作戦も書かれていて、その場合、自分の守備に掛かりっきりになった相手の隙を突いて、上から放射状に

弾を撃つらしい。
守備能力のない攻撃陣はそれで殲滅させれるというわけだ。
しかし逆に言えば、自分達も守備を失うことになるこの作戦。先に相手に攻撃を受けたらひとたまりもない。相手が奇をてらっている内に先手を打つ必要があるはずだ。
つまり、この作戦は使えて一度だけ。前に使ってしまっている以上、これをもう一度使う学校はないだろう。
「少しでも生き残れれば反撃もできる！この競技には制限時間はないから持久戦も考えられる。
競技場は両者「形（カッコ）のバリケードがあるだけだ。通常はバリケード内にフラッグを立てておくが、これは味方が持ち出しても構わない。
一度それをやって、すぐさま取られて終了、という間抜けな勝負があって以来やる所はなくなったがな。
まぁ、毎年やってることなんでプリントに大抵の必要な事は書いてある。質問がある奴はいるか？」
クシロが手を上げた。おおっ、こういう積極的な行動は珍しい気がする。
「よし。そこの」
「・・・思ったんですが、これがそんなに激しい競技なら、危険だと判断された能力者もバトロワで能力を使わないという制限で参加できません？」
と思ったけど、やっぱりそれを引きずっていたらしい。まぁ、能力の制御、がんばってたからね。
「ま、確かにそう思うわな。俺も不満があったんだがそれは違う。
玉投げは元から戦う相手が分かっているが、バトルロワイヤルはそうもいかん。相手が何時、何処で襲ってくるか分からんからな。
もとより戦場に臨むのといきなり起こる戦闘に応じるのとでは心構えが違う。能力を使ってはいけないと分かっていても咄嗟に使っちまうもんなんだ。
玉投げがこれほどハードな競技なのは、それでも生徒の欲求不満

を防ごうという校長の優しさだな」
あの人は本当にゲームが好きなんだなと僕は思ったけどね。そのために前もって内容を伝えておくなんて本当に凝っている。
小学生の頃の運動会なんて騎馬戦すらすぐに終わって面白くはなかったけれど、今回の体育祭は本当に楽しめそうだ。
「他に質問は？・・・・・ないか？ないならペアを決めたいと思う。攻撃役と守備役のペアだ。必然的に攻撃役が１０人あまりが出るんだが、これはできれば一人でも対処できるベテランがいい。まずは一年生から前に出てくれ」
毎年こういう感じでプレゼンが進行するのか、２、３年生に促されて前に出る。
「よし、とりあえず攻撃側、守備側で分かれてくれ。一年は守備の方が多いはずだ。
ＯＫ・・・じゃあ、体格差ができるだけないように。そことそこ。で、そっちはこっちで・・・」
完全に仕切っているというか、全く持って自主性を無視した感じでどんどん進行させる熱血３年生。自分達が１、２年の時にそうだったのかもしれない。
まぁ、いきなり初対面の場で勝手にペア組めと言われても困るだけなので、その判断は正しい。
僕は同じ１年の女子生徒と組むことになった。よろしくねー、と差し出してくる彼女の手を握り返し名前を教え合う。鹿島美菜子（かじまみなこ）というらしい。次競技で会う時には忘れている可能性があるので、後でちゃんとメモしておこう・・・。
クシロの方を見ると、ごつい２年生と組まされていた。体格差は何処へやら、まぁ、最後にはどうしようもなく余ってしまうものなのだけど。
一応男同士、女同士を配慮した結果なのだろうなと思いつつ、配られたプリントに目を移す。
何でここの連中は何事も資料に纏めたがるのだろう？

#

いなっちー、いなっちー、いなっちー・・・数えると17匹だった。噂では隠れいなっちーが存在するらしい。

駄目だ、何か色々と駄目だ。

個性が強すぎるいなっちーのせいで冊子の本来の内容に集中できない。

もう明日は体育祭1日目。まだ時間がある内に色々と策を練っておきたいのに。

この一週間、何だかんだで玉投げの方の守備練習などに駆り出されたので、ゆっくりと考える時間があまりなかった。

クラスメートと離れて単独行動を取ることになっているので、考えることは多い。

僕の能力上、1人1人撃破していくしかない。

チーム全体を相手にする気は更々ないので、とりあえず伝達機能を麻痺させて連携を崩し、単体を奇襲する方針でいかないといけない。

問題は相手の位置をどうやって知るのかとESP系能力者は誰かをどうやって見極めるかだ。

位置は・・・心音でも聞き分ければ何とかなりそうだけれど、能力はねぇ・・・。それが分かれば無茶な戦闘をすることも少なくなるだけど。

やはり、既に能力を知っているということは重要だ。

1-Bで言えば・・・・・・あれ?1-Bで伝達に使える能力者はいない?

どうするんだろう?読心術(テレパシー)というか伝心術(テレパシー)が使える人間がいないというのはかなり不利になるはずだ。

矢崎君の視覚放置と楚々紹(そそろ)さ・・・ちゃんの視界傍受に亜子ちゃんの残留思念読取(サイコメトリー)を周囲に巡らして一箇所に固まる?

あまり離れて行動するのはチームとしては危険のはず・・・。
注意すべきは誉ちゃんの浅夢予知（くもりゆめ）。未来予知は脅威だ。
香魚子ちゃんの煙火手榴弾（ミニ・パイロ）は煙幕になるだろうし。
・・・・・・どうするべきか。
――♪～♪♪♪～～♪
着信メロディーが鳴った。電話らしい。確認するとクシロだった。
「はーい。何、クシロ？」
「あー、うん。１つ確認したいことがあるんだ・・・」
「何？」
「葉月、バトロワ真っ先にうちのクラス狙う気だよな？」
・・・・・・。
「あれ？ばれてる？」

第９話－　作戦策選。－Ｄｉｓｓｉｄｅｎｔ－（後書き）

何故かいなっちーが大活躍です。
サブタイトルを－Ｉｎａｃｃｈｉ－にしようかと思うぐらいに。・・・やめましたが。
タイトルは『策の選択』、サブタイトルは『不穏分子』。
そして隠れタイトルは『いなっちー』、でしょうね。
まさか体育祭までくるのにここまでかかるとは・・・。
ちゃんと予告通り一週間後の更新です。よかった・・・結構ギリギリだったので。
さて、次は体育祭編に突入です。
すでに、１－Ｂは崩壊寸前ですが。

第１０話－　弾幕痴話。－Ｂａｒｒａｇｅ－（前書き）

・・・・・・これはエロネタと言えるのだろうか？

第１０話－　弾幕痴話。－Ｂａｒｒａｇｅ－

体育祭1日目、当日。天気は快晴、この上なく体育祭日和である。
一週間も前に色々と準備をさせておいて、雨です中止ですというオチはそもそも存在しない。
何故か？・・・・・・雨でもやるからだ。
祠堂学園第一中学校校長こと、久遠未来（くおんみく）の文字に雨天延期という文字はないらしい。
晴れだろうと雨だろうと、体育祭（ゲーム）日和には違いなく、風邪をひくなどというのは生徒の自己管理が足りないからだと捨て置く所存。
祠堂学園学園長よ、何故学校行事（イベント）の一切合財をあのゲームマニアに丸投げしてるのですか？
そう問いたくなる。
照りつける太陽の下において水分補給が必要のように、降り注ぐ雨水にはレインコートでも用意すればいいと胸を張って主張する校長。
確かに、持込み禁止リストには傘やレインコートの名前はなかったけども。
学園長による開催宣言たるものは、学園内の生徒が全員集まるのは面倒臭いという理由で、まさかの教室でのテレビ放送。
２０代前後にしか見えない学園長の無駄話の一切ない、『怪我をするな、したら、させたら自分で責任を持ちやがれ』という言葉によって体育祭がついに始まることになった。
学園長が若く見えるのは、おそらく超能力を応用した学園の技術のお陰だろう。少なくても彼は２０年前から今の地位にいる。
学園長といい校長といい、それにカイナといいなんでこうも年齢を無視する人間がこの学園には多いのか。その下で学業を修める身として、どうしても違和感を感じざるを得ない。
・・・ああ、あと１０年も生きていれば僕もその仲間入りか。

さて、現実逃避はそれぐらいにして、背伸びをしてみる。指を開いたり閉じたりして、手の調子も確かめる。

快調。大丈夫。これなら盾を誤って落としてしまうようなこともないだろうし、盾で殴ってもぶれることはないだろう。

腕に付けた着弾を確認するチェッカーを見てみる。腕時計のようなそれのパネルは青く光っている。一度目は黄色、二度目は赤色、三度目には光が消えるという表示で生徒の機の残量が分かるらしい。消えた生徒即退場と相成る。

見上げる空はスカイブルーとでも表現すればいいのだろうけど、正直日差しが鬱陶しい。そういえば、もう7月に入ったのか。

運動系がそもそも苦手な美樹さんは出場を辞退して、生徒の観覧席で涼んでいる。いいなぁ。まぁ、ここまで来てしまったのだから仕方ないか。

水分補給をしてから、これから戦う競技場を見回す。

祠堂学園第三中学校の運動場。その全面を使うため競技場はかなり広い。当然相手は第三中学。奇策妙策大好き学校。

何で初戦で当たるかな。嫌だなぁ、意表を突く策って決まると一気に勝負ついちゃうし。

などと心中で愚痴を吐きつつ、横を見る。そこには――・・・ちゃんが。・・・・・すみません名前忘れちゃいました！メモるのも忘れちゃいました！

え、と。確か・・・ミナコちゃん、だったと思う。あってる・・・かな？

背は僕より高いので僕は見上げる形で彼女の表情を伺う。

やっぱり緊張しているようだ。

「まー気軽に行こうよ。激しいっていったって、所詮は競技、ルールがあるんだし」

「・・・私の見間違えかな・・・あの人たちなんか目がギラギラしてる」

言われてヒトより数倍良い視力で確認してみる。・・・あぁ、何

か目が尋常じゃないかもしれない。
「大丈夫大丈夫。こっちだって士気は高いでしょ。それに競技にこうやって意気込むことはいいことだよ」
「・・・私の見間違いかな・・・あの人たちお互い盾をぶつけ合ってるみたいなんだけど」
言われたのでもう一度確認。・・・あぁ、アメフトやラグビーのタックルみたいなことをやっているのが見える。
「気にしない気にしない。それから守るために僕がいるんだよ?君は攻撃に集中してね」
彼女は僕の方を見た。何て言うか・・・胡散臭そうな目で。
それはあれですか?僕が頼りないと?
まぁ、仕方ないけどね。
さて、もうすぐ競技が始まる。そろそろ事前に決めたポジションに移動しなければいけない。
この競技のお約束として、開始直後に何人かの攻撃役を担った守備役が突っ込んで来るため、慣れていない1年生はできるだけ後方に配置されている。
ただ、そこに居れば安全かと言えばそうではなく、肉体的な激突の代わりに放射状に能力で作られた弾雨が降り注ぐという過激な攻撃が待っている。
なので、最初はとにかく攻撃役は相手陣地に弾を放ち、守備役は特に上を注意して守りを固めなければいけないらしい。
その最初の一撃で両者の選手が結構減ってしまうために、まずはそれを耐え切るというのが第一関門だとか。
まぁ、そんな聞いただけの話を言っても仕方ないか。
どうせすぐに経験することになるんだし。
指定された位置に移動し終えた僕は、すぐ後ろにミナコちゃんが居ることを確かめて、盾の柄を握りなおした。
「位置について――ぇ・・・・・・・・始(パンッ)めっ!!」

担当の教師の声と打ち上げ花火の破裂音が乾いた空に響き、競技が開始する。

瞬間、ぐぅおんという音と共に出力系能力者の光弾が打ち上げられる。

横目で確認すると、ミナコちゃんも制限ギリギリなのだろう、巨大な炎弾を作り出していた。皆に遅れてそれも空へと打ち上がる。

多くの能力によってできた光の弾の一時的に上がった空へと目をやると、赤や青、黄色の球体が花火のように弧を描いて飛んでくるのが見えた。

着弾するまでの間の、息を呑むような一時。長く感じてしまう滞空時間、ゆるりと落下してくるような錯覚。

それは本当に綺麗な光の数々だ。

何て言うか・・・

「何これ、弾幕ゲーム？」

思わず呟いてしまった。

「ちゃんと避けれるように計算されてるといいんだけど・・・」

それに続く隣のクシロ。

「ＢＧＭがそのまんま・・・」

ミナコちゃんがさらに続いた。

というか、アレ、知ってるんだ。

校長め、間違いなくアレを意識している。ＢＧＭが運動会の定番から思いっきり外れてるし。

あの人本当に好きだなぁ、ゲーム。

などと、呆れている間に、弾はいきなり速度を上げたかの如く落下してきた。

「げっ」

過激過激と何度も聞かされていたし言葉にしていたけれど、これは。・・・・・洒落にならない。

――――どごんっ、というすさまじい轟音と共に砂埃が上がった。

それは受け切らなければ体が飛ばされるほどの威力を持った弾雨だった。
砂埃に目をやられないために目をつぶれば飛び交う弾の位置を把握できず、弾を受けきろうと目を開け続けると後で視界を潰されるという理不尽な状況に立たされた生徒達はどれほど構えていても錯乱されることになる。
その中において目をつぶることなく、目を潰されることなく立っていられる人物は織神葉月以外にいなかった。
迫り来る光弾を見定めて盾にぶつけ、砂にやられた目を先に覆わせておいた涙ごと一度の瞬きで流し落とすという裏技を使った結果である。
体を思い通りに扱えるのは有利だなと思いつつ、葉月は鹿島美菜子の手を引き前に進み出た。
「ちょっ、まずいよ前はっ！」
「前の方が弾が少ない。タックルしてくる敵は僕が何とかするから、とにかく相手の攻撃役を狙って！」
最初のように放射状ではなく、敵目がけての直射攻撃をできるだけ盾を使わずに避けて前進していく葉月達。
そして砂埃やもみ合う選手に影になってよく見えていなかった前方、敵陣地に視界が開けたところで、
「・・・・・何あれ」
信じられないものを見た。
押し競饅頭でもしているかのように密集している敵の選手、その中央にハチマキで頭にフラッグを固定した人物。
その状態で、敵は弾を放っていた。狙いは定めずにとにかく円形

に敵が近づくのを防ぐためだけの放射である。
本来は攻撃役の１０人がそれに回り、逆に守備役の２０人が攻撃に回っている。
（・・・馬鹿じゃないのかな、この人達）
葉月は盾を使ってタックルをかます相手に応戦しつつ、敵の戦略にそんな評価を下した。
それは当然の感想だ。確かに盾のタックルというのは結構な威力を持つ攻撃手段だが、バトルロワイヤルとは違い能力を使った攻撃ではないので相手選手を退場させることはできない。
その状態で、敵を倒すのではなく寄せ付けないためだけに使われる的外れな弾を撃つしかなく、盾を持たず中央のフラッグを持った１人を壁になって守っているために自分達は弾を避けることもできない攻撃役がまとまってそこに居るのだ。
奇策どころか愚策もいいところである。
（誰も気付かなかったのかな、この作戦の穴・・・）
「ミナコちゃん、とにかくあの肉塊狙っといて。あんまり離れないでね。僕はそこら辺のタックル馬鹿を黙らせるから」
そう言うと葉月は少し据わった目つきで、盾を持った方の手をぐるぐると回した。
目が語っている、面倒事をさっさと終わらせてしまおうと。

／

あの後、僕達の学校は当然ながら勝利した。
ほとんど動けない肉塊の人でできた壁を弾で着実に剥がし、そのまま一気にフラッグ男を取り押さえるという勝負事としてどうだろうかと疑念を持ってしまうほど一方的に相手を負かせたのだ。
・・・普通に戦っていたら、かなり苦戦したと思う。守備役の男子が異常に強かったし。最後の方は相手の攻撃役がほとんどやられて、守備陣どうしのタックル合戦になってたし。本当にラグビーに

近かった。フラッグを取ろうって時の最後まで諦めず逃げようとする向こうの主将（？）さんに皆が群がっていった様子は特に。

そんなこんなで勝ったというのに何故か釈然としない初戦だった。

そして腹が立つのが、負けた第三中学校の面々が笑顔で競技場を後にしていったこと。

一仕事終えたようなサッパリした笑顔で笑い合い、肩を叩き合っていた。

・・・あれは元から勝つ気なんてなかったな。

目一杯（めぇいっぱい）自分達が考えた奇策を実行し、相手を翻弄（あるいは呆然）とさせることだけを目的にしているに違いない。

元から優勝など狙ってなく、１回戦だけをとにかく楽しむというもう呆れを通り越して関心してしまう心持ちだ。

でもなぁ、やっぱりその相手をさせられた方としては何か悔しい気持ちが・・・などと考えていたらクシロに肩を叩かれた。

「葉月、次は灯秋（とうしゅう）高校と当たるってさ。場所はここでいいらしいけど、今のうちに水分補給した方がいい」

そう言って買ってきたらしい、ピーチサワーを渡してくれた。

「ありがと。クシロはどう？何とかなりそう？」

「・・・もう結構いっぱいいっぱいなんだけどな。もうやりたくない」

まぁ、そういうと思ったけど。

「正直守備の方が激しいしね。でもやり甲斐はあるんじゃない？」

「思うんだけな、これこっちの方が激しいんじゃないか？」

「そうかもね。僕も一対一で戦う方が楽だと思うよ。周りに気を回し続けるのは辛いよね。何だかんだで僕も１回弾に当たっちゃったし」

ちなみにミナコちゃんは途中で当たって退場した。

いくら狙ってないからといって、下手な鉄砲数撃ちゃ当たるということらしい。

確かにあの弾を避け続けるのは困難だ。攻守を両立させることも

然り。結局僕はミナコちゃんと離れてしまっていた。
次はもう少し、考えて動こう。
基本ミナコちゃんをガードしつつ、やってくる突撃隊を拳で殴る感じで。
「・・・でも意外。織神さん、体力あるんだね・・・」
簡易ベンチに座り込み、ドリンクをとにかく飲んで体の熱を覚ますようとしているミナコちゃん。
「まぁね。ヒト並み以上はあるよ」
ちなみにこの場合の”ヒト”は生物学上の分類としての”ヒト”なのであしからず。
それでも能力弾を受けるのは結構きつかったのだから大した威力だと思う。
今度もう少し体を強化してみようかな？こう・・・筋肉が浮き上がらない程度の限界を極めて。腕の一撃で壁やら何やら抉れる感じのが希望してみる。便利そうだし、格好いいし。
さて、次はどんな試合になるのだろう？

#

祠堂学園灯秋高等学校は、ＰＫ系の特に出力系を扱う高校だ。
自分の学校内には多くの出力系能力者がいるから攻撃役はより取り見取り。この競技がメインよりも得意だと言っていい。
なので警戒はしていた。
出力系のレベルは威力、射程距離、数、速度、発射動作の速さ・・・など多くの要素で測ることができるのだけど、灯秋高校は速さや同時に出せる弾数などが他とは比べ物にならないのだろうと思っていた。
けれど、そんな予想は完全に裏切られた。
試合開始直後、初戦と同じく空中に浮かぶ光弾が見れると思って上を向いた僕らのチームは唖然とすることになる。

何もない。

相手から放たれたはずの弾が１つとして見えない。

「――――っ」

念力系能力（サイコキネシス）だ。不可視の能力弾であり、他の出力系よりずば抜けて応用が利くという利点を持つ厄介な能力。

もちろんこの競技での規定により、球形の弾として放たれていることには間違いない、が。

念力系能力（サイコキネシス）の特徴として最も厄介なのは、能力波を乱してしまう、能力を対象としたレンズであるという点だ。

こういう出力系の撃ち合いでは、本来弾を打ち消し合うことによって相手の攻撃を防ぐという手段が取られるのだけど、念力系能力（サイコキネシス）に対してだけはそうもいかない。

何故なら――――反射してしまうから。

相手陣地に放たれた水弾の１つが、突然がんっと音を立てて空中で方向を変えた。

いきなり自分の陣地に向かって跳ね返ってきた弾に動くこともできずに攻撃役の１人が早くも失格。体中びしょ濡れだ。

一体どこから来るのか分からない弾。能力を反射してしまう弾。

・・・・・勝てないんじゃないかな、これ。

まぁ、反射するといっても完全な反射はできないし結構な高等技術。全く攻撃ができないというわけではないんだけど・・・。

そもそも、念力系能力（サイコキネシス）は珍しい能力だ。色に例えて他の出力系が赤とか黄とかだとすると透明。何となくこれでイメージが分かると思うのだけど、物を燃やしたりできない代わりに純粋な分強力なのだ。

よくも１０人も、それもちゃんと制御の利いた念力系能力（サイコキネシス）を集めたものだと感心してしまう。

大抵の場合、力が弱すぎて実戦に使えなかったりして、念力系能力（サイコキネシス）は競技に参加できないらしいのに。

さすがは灯秋高校（とうしゅう）。間違いなく勝ちに来てる。

そうこうしている内に、どんどん自分のチームが放った弾が撥ね返ってきた。跳ね返っている地点がどんどんこっちの陣地に入ってきてることから見て、向こうの放った弾もすぐそこまで迫っているはずだ。

チームメイトが全滅してフラッグを取られる前に、相手のフラッグを取る以外なさそうだ。

「ミナコちゃん攻めるよ。守備陣を適当に蹴散らして、フラッグを奪取。

ミナコちゃんはとにかく小さい弾をそこら中に撃って！」

見えない弾の位置だけでも確認できればとそう指示して、僕は盾を前に駆け出した。後ろからできるだけ近くにとミナコちゃんがついてくる。

前に突き出した盾に2回ほど衝撃が来た。

どうやら最大出力ではないようで、吹っ飛ばされるようなことはないけれど、その規模すら分からないのは怖い。

本当に闇雲にやってる感じ・・・。

後方の位置から競技場の中央に来たところで、あの熱血3年生の姿を見つけた。

「皆！守りにはいるな！当たってもいいから前進だ！誰かがフラッグを取れば価値なんだ！

当たれ！当たれ！当たれ！ゴォ――ァヘェ――――ドッ！！」

と指示している。

それに従いフラッグが置かれているバリケードに近づこうと突撃するチームメイト達。

何人かそれが成功して前に進むものの、多くが能力弾に飛ばされて戻ってくる。できるだけ盾を持った守備役の影に入って攻撃役は進んでいるため、脱落する選手は少ないものの、戦力はじわじわと削られることになるだろう。

さて、僕らも参加しなくては。

競技開始直後、その異様な光景に開いた口が塞がらなかった。
誰だ、こんな悪趣味な作戦・・・というかチーム構成考えたの。
ただでさえ少ないだろう念力系能力者を集めるなんて。
見えない上に、打ち消せない弾なんて反則気味だ。
・・・同じ念力系能力としては本当に羨ましい限り。
俺の騒乱念力は少なくても威力と反射率で言えばそれなりの数値をたたき出しているのだが、如何せん制御が全く聞かないんだよな。
初戦でガタがきている腕に力を入れる。
空へと放物線を描き相手陣地へと着弾するはずの弾が跳ね返り始め、束の間の静寂の終りを告げていた。
ちょうど向かってきた弾を避ける。
正直運動不足の俺には盾で受けるのは結構しんどい。盾はタックル用に違いない。
他のメンバーを見ても反動でひっくり返ったりしてるので、どう考えても受けるのは得策ではないな。
弾を3、4つも受けて立っていられるのは葉月ぐらいだ。
結構きついと言っていたわりにはジュース一本ですぐに回復したように見えたし。それに葉月の盾は酷使に耐えかねて傷だらけになっていた。
「おいっ！これやばくないか！」
ペアを組んでいる2年生の天王寺大輿先輩が声を上げる。
「ええ、ヤバイですね。俺の耐久値が特に。いくら弾の軌跡が見えるといっても受け止めるのはきついです」
「・・・あぃ？お前弾見えてるのか？」
「・・・ああいえ、見えるというか感覚的に分かるというか。一応これでも念力系能力者なんで」
「そうか、じゃあ、とにかく何処から来るかだけでもそこら辺の奴らに教えてやってくれ！」

「はい？」
「俺は前に出てフラッグを取る方に回る！お前はここに残ってる連中とフラッグを守れ！どうせそんなに長くは持たん！」
そう言うと先輩は盾が守っている領域から飛び出して行った。・・・攻撃役は盾使っちゃいけないことになってるんだよな。生身で前進って自殺行為だと思うんだが。
前を見ると葉月が相手とぶつかっていた。盾と盾が・・・あ、葉月の盾にヒビが入った。それを捨て、何事もなかったように相手の盾を奪ってる。
「・・・・・ルール上はいいんだよな、たぶん」
無理やり納得して、首を振った。
よし、こっちもがんばらなければ。
「！、前から大きいのが2つ来てます！」
「マジか！」
「そこの人、その場所当たるんで横にずれてください！」
「分かった！っと、どうする！？ほとんど攻撃に回っちまったぞ！守備がこんな所であたふたしてんのはまずいっ！！」
「バリケードの方に隠れよう！崩れるまでは時間が稼げる。篭城してできる限り時間を延長しないと！」
残ったメンバーは［形（カッコ）のバリケードの影に急いで逃げ込んだ。
「俺、ある程度軌道は分かるんで、このバリケードがなくなったらそれでかわしましょう」
「ああ助かる。ただ、問題は陣地に侵入してくる奴らだな・・・。今はこっちの攻撃陣の相手をしてるからそれほど来てないが、その内押し寄せるぞ」
「それまでに相手のフラッグを取ってなかったら結局負けだろ。とにかく追い詰められてるよな」
守備役はフラッグの回りを囲むように、攻撃役はその内でとにかく放射状に弾を打ち出している。
バリケードの裏側にいるのだから相手の位置など分かるわけもな

いのだが、やらないよりはマシだろう。
さて、面白くなってきた。

／

素手と素手を使った攻撃は一応認められていないことになっているこの競技において守備役は盾で攻撃するか、盾に攻撃するかしか攻撃手段はない。
しかも、そうしたところで相手を退場させることはできない。
しかしそれでもやらないよりはマシというとにかく疲れる役柄だ。
けれど、相手を退場させられなくとも、機動力を削ぐことぐらいはできるのだ。
具体的には、盾で殴る。とにかく殴る。しつこく殴る。相手の手が盾を掴めなくなるように麻痺させる。
ただ、盾が壊れるという欠点があるんだよなぁ、この方法。
保護フィルムが張ってあるのか割れて破片が飛び散ることはないのだけど、すぐに駄目になってしまう。
まぁ、使えなくなったら相手から奪えばいいのだけど。
守備能力もなくなって一石二鳥。
あー、でも本当に鬱陶しい。どうやら向こうに危険人物と見なされたみたいで、さっきから妙に狙われている。
スポーツをやっているらしい体躯の男子が見た目か細い少女に足蹴にされる様子は傍目にどう映るのだろうか。
でも、まずい。
こうやって時間を費やしている内にも敵はバリケードを壊して、フラッグに到達せんとしているわけで、足止めを食らっている場合ではない。
何より、既に一度弾を食らってしまった。
上からの攻撃で、全く気がつかなかったのだ。
何度も盾に当たったり、横を通り過ぎたりしている内に何となく、

肌を撫でるような感覚を感知することはできるようになったのだけど、正直気付いた時には遅すぎる。

あ、今そこを通ったな、では意味がない。

結局、見えない敵と戦っているという感覚は抜けていない。

前を見ると、熱血3年生がまた飛ばされていた。何度も突撃しては押し返されている。

既に2回当たったらしく、腕に付けたチェッカーは赤色に点滅していた。

・・・本当に時間の問題だ。

――――それに。

僕も正直そろそろ限界だ。

ずっと前に進むことができていない。タックル馬鹿もさることながら、どうも攻撃役から集中的に狙われてるっぽい。

盾に絶えず圧力がかかっているために、足に力を入れても停滞するのがやっとだ。

腕が痺れてきたし、弾のせいで体勢を変えれないのをいいことに後ろからタックルをかまそうとする連中の相手もこれ以上は難しい。

足で対応しているのだけど、片足ではい何時体勢を崩して倒れるか分かったものじゃない。

「ぬおぅっ！」

熱血先輩が飛ばされてきた。

「・・・先輩、どうします？ぶつかっていくにもそろそろ限界がきてますよ？」

「ああ、最初の方に攻撃役がほとんどやられたのが痛かったな。向こうの攻撃役はほとんど無傷だし、全く勝てる気がしん！」

向こうは端（はな）から守備陣だけでこちらのフラッグを取りに来て攻撃陣は後方援護に回っている。

ただでさえ面倒な相手なのに、そうしている内にもこっちの攻撃陣は守備に回ったチームメイト以外全滅してしまい、既に単なる消耗戦になってしまっているのだ。

「賭けに出ましょう。僕が囮になりますから、後について前に出てください！」
「無理だ！バリケードが残ってる！直進するならともかく回り道だぞ！」
「・・・バリケードは何とかして壊します。とにかく前進してください！」
「・・・分かった！」
彼が起き上がったのを合図に僕は近くに捨てた割れた盾を拾い、前方に投げつけた。
途中でそれが弾け飛び幾らか力が弱まったのを確認してすぐに斜め前へ前進。これでさっきまで僕に向けられて放たれいた凶弾はかわせたはずだ。
次の攻撃を受ける前にできるだけ前へ。そのつもりで力を溜めていたので一気にかなりの距離を縮めれた。
「おい！やべぇ！来るぞ！！」
さすがに相手も危機感を持ったらしく、僕に集中攻撃を浴びせようとしている。
けれど、もう遅い。
ついさっきまでと違い退場(すてみ)覚悟で挑んでいるのだ。守りに入るつもりはない。
もう大分バリケードに近づいてはいるものの、まだ僕の跳躍距離でも2歩ほど足りない。
前を見えると次の弾が既に自分に向かって放たれている、ような気がする。
――ベキ
2歩分の距離を稼ぐために、今まで戦を共にした・・・ああいや、途中で代えたんだっけ?盾を両手で二分割。右手の分を思い切り前に投げた。
予想通り前で不可視の弾に当たる盾（の上半分）。踏み込んで1歩分の距離を詰める。

が、分割してしまったために面積が足りなかったらしい、前にかざした盾（の下半分）に衝撃があった。
・・・躊躇している余裕はない。
もう1歩、踏み出す。
何となく、また新しく放たれた弾が迫っているのが分かるのだけど、避けるわけにも盾を投げるわけにもいかない。
腕をクロスして真っ向から突撃した。少し失速したものの体勢を崩さすに耐え切る。
ピッという電子音が鳴り、赤色に変わるチェッカー。
でもこれで2歩分稼ぐことができた。
これでもう、十分に射程距離内だ。
目の前には、バリケード。そしてそれを守るように何人かの攻撃役が並んでいる。
さぁ、食らえ。
僕は右手に持ち替えていた盾を思い切りバリケードに向かって思いっきり投げつけた。
砂を圧縮して積み上げられた高さ1．５ｃｍの壁。威力が足りるか心配だったけど、ここまで近づければいけるだろう。
フリスビーのように横に回転しつつ恐ろしい勢いで飛ばされた盾がバリケードの中心に当たった。
そこから溶けるように崩れていく砂の壁。穴が開き向こう側が露出していく――――
投げた時点で足の力が抜けた僕は転倒、そこに弾を当てられてアウトに。
だけど、それで十分。
倒れた僕の影から飛び出す先輩。近距離からの飛込みだ。
その先には、フラッグがある。
バリケードが守れない後ろ側を守っていた守備陣とバリケードの間に挟まれて守られていたフラッグが、バリケードが崩れたことによって露出している。

バリケードに隠れていた彼らはいきなりの現象にまだ体がついてきていないし、バリケードを守っていた方もまさか飛び込むとは思ってなかったらしい。
崩れた砂がある程度のクッションになるだろうとはいえ、地面に飛び込むのは躊躇がいる行為だ。
時が止まったかのような一瞬。
喉が渇き、賭けの結末に息を呑む。
両手を前に、フラッグに一直線に飛び込む先輩。
その手が、ついにフラッグに届く――――

「ピィ――――――――ッ、勝者灯秋高等学校ぉ――！」

・・・・・・、・・・・・・。
その前に、勝負がついてしまった。
ドシャァアアッ！！と顔面からフラッグに突っ込む先輩。・・・哀れ。
どうやら先にフラッグを取られてしまったらしい。
後ろを見ると、バリケードはとうに崩れ去り、揉み合いになったようで敵味方入り混じって揉みくちゃになっていた。
クシロはその際どこかをぶつけたらしく、悶絶してる。

・・・こうして僕達は二回戦敗退が決定した。

／

それが俺ら篭城組の踏ん張りが弱かったのか、あるいは特攻組の侵攻が遅かったのかというのは難しい判断だ。
いや。まぁ、そんなことなど今となってはどうでもいいことなのだが、あと一歩だっただけに悔やまれるといえば悔やまれる。
あの後、俺達を降した灯秋高校はそのまま勝ち進み優勝してしま

った。
それを見るに、やはり灯秋高校はかなり力を入れてきたらしい。
去年はそうでもなかったらしいのだが、何でまた今回に限ってあんな面倒臭いチーム編成を行ったのだろうか？
あるいはただ、今年に限って参加できる程度に精度がいい念力系能力が揃っただけなのだろうか？
どうでもいいと言えばどうでもいいのだが、まぁ気になると言えば気になる。
というかどうやってあそこまでちゃんと制御しているのだろうか？
そっちの方が気になる。コツあるのかな、コツ。考えてみれば共同訓練の時、出力系の専門である灯秋高校をちゃんと回らなかった気がする。もうちょっと詳しく見てみればよかったかもしれない。
あそこで見たのは酷い炎海紅泥の先輩ぐらいだ。あ、そういえば彼女に紹介してもらった阿呆とかいう彼はそれなりにヒントはくれた。
ヒントというか助言というか・・・『そーいうのはさぁ、あれだよ逆上がりとか一輪車とかと一緒でさぁ。こう・・・おっいけるってか、一度やったら何となくできるようになるってかそんな感じだからなぁ。とにかくトライしまくれ。できなくてもグジグジすんなよー』とのこと。
具体性はゼロだが、まぁ気休めには？
なってないか・・・。
というかそろそろ壊す人形がなくなる感じなんだけどな。威力ばかり上がって訓練所の耐久値がやべぇとか先輩が漏らしていたし、そこら辺がすごく心配なんだけどな。
・・・とまぁ、俺の能力事情は置いておいて、灯秋高校は明日のバトロワでのアドバンテージを得ることができたわけだ。
アドバンテージ・・・聞いたところによると、配給される勝敗判定用のペンダントに付く付加機能だとか。
敵の感知機能、といってもその1種類だけでピンからキリで、感

知範囲が１ｍのものや５０ｍのものとバリエーションが結構ある。
他にも敵の能力をＰＫ、ＥＳＰぐらいは判別できる機能やら何やらと色々あるのだが、それを学校内で無作為に配るらしい。
何が当たるかは運で、まぁそういうのも醍醐味なのだろうが、俺には関係ない。
あ、観戦するのはするので楽しいと先輩が言っていた。
学園内に配置された徊視子蜘蛛を利用した多角アングルの実況を涼しい部屋でジュースを飲みつつ鑑賞できるとか。
せいぜい葉月が笑顔でクラスメートを狩る様子を優雅に観戦するとしよう。
さて、そろそろ教室に入った葉月と合流して帰ろう。
早々に負けた俺達の学校には今ほとんど人がいない。
俺が今居るのは購買部の辺りだが、やはり人数は少ない印象。どうやら明日の作戦を立てていたクラスがあるみたいで大量に缶ジュースを買っていく生徒がいたりはするのだが、静かなものだ。
かくいう俺も水分補給に来た口で、葉月の分も含めて２本買った。
せっかく冷えているのでできるだけ早く持っていこう。
こういう時に１年生は楽だと実感するのだが、教室は１階にあるし購買部も行ったすぐ先にあるのはお得な感じだ。
こうして喉が渇けばすぐに買いにいける。
と、ほらもう教室だ。
――ガラッ
「葉月ー、ジュース買って・・・」
「あっ、ありがとー」
――ガララ・・・・・
即行閉めた。閉めるしかなかった。
あれだ、あれ。お約束とかいうやつだ。
葉月、着替え中、下着姿。

というかなんで普通に応対？羞恥心なくても分かるよな？今の状況がおかしいぐらいさ！

きゃーとか悲鳴を上げるまでは期待してないけどよ。せめて手で隠すぐらいはしてくれ。

「クシロ、入ってきて大丈夫だよ」

・・・よかった。

――ガラッ

「・・・・・・」

そこにはさっきとまるで変わらない姿で立っている葉月。

大丈夫と言ったのはその口ですかね？

――ガララ・・・・・・

「服・・・着てくれ」

「？別に下着ぐらい見ても平気でしょ？」

せめて”見られても”と言ってください。お願いします。

「水着とあまり変わらないっていうのもあるけど、そもそも重要なところが隠れてるのにねぇ」

その考えはどうかと思う。いや、さすがに下着の下がまずいということは分かっていてくれて何よりなのだが、そういう問題じゃなくて！

男でも下着姿は見られたら恥ずかしいものだと思うし、というかならば葉月にもそれなりに羞恥心というものがあってもいいはず・・・。

あれ？でも荷稲さんによれば、結構性ネタには反応するということだったんだけど・・・。

「葉月、自分の体は大切にしてくれ・・・」

「んん？そりゃまぁ、穢されるつもりはないけど？」

うん、まぁ、何より。

ドアにもたれかかって、とりあえず跳ね上がった心臓の鼓動を鎮め、呼吸を整えようと努める。

正直、かなり心臓に悪い。

今でも目にさっきの葉月の姿が焼き付いてしまっている。
挟まるからか上で纏められた髪、それによって露出したうなじ、何時も制服や余裕のある服を着ているために分からなかった細い腰までのライン、締まった太股・・・・・・。
駄目だ。思い出すな、考えるな。
いくらなんでも親友に情欲を抱くはまずい。
考えるな、考えるな、考えるな、考えるな考えるな考えるな考えるな――――。
意識すると余計に・・・。他のことに意識を向けろ。
・・・ふぅ。そういえば、葉月はちゃんと服を着たのだろうか？
聞き耳を立てるのもどうかと思うが、さっきのことがあるので確認しておく。
微かな布擦れの音。
良かった、今度はちゃんと服を着ようとしているようだ。
今更になって思い出したが、手に缶ジュースを握っていたのだった。
まだ温(ぬる)くはなっていないので大丈夫だろう。
どっちかというと俺の方が熱く・・・駄目だ駄目だ思い出すな！
「よし。クシロー、もうオッケー」
はぁ、よかった。
――ガラッ
「ぬぅあっ！！！」
ドアを開けるとすぐそこに葉月の姿が目に入った。
とっさに閉めようとしたら手で引き戸を止められた。
そのために近づいて・・・！じゃない！待ってください！何ですか？何なんですか？今の状況！？
先ほどの下着姿、ではない。スカートは穿いている。たぶん布擦れはその時の音だ。
で、上は？上はどうした？先ほどまで着けておられたブラジャーは何処にやったんですか？

というかなんで上は『一糸纏わぬ』な状態なんですか？

「いやぁー、面白い反応だね、クシロ。期待通りで何より・・・」

「葉月。これはどういうことですかね？」

断固ドアを閉めようとする俺の試みを片手で軽く拒否している葉月。もう一方の手は腰に当てられている。

つまり、もう、完全に・・・。

「んー、だってさぁ、クシロが過剰に反応するからね。試してみようかと。

そもそも考えてみなよ、胸なんて脂肪の塊なんだよ？男性にだってあるものがホルモンの関係で女性の胸に脂肪が付くようになってるだけ。

大胸筋の上に脂肪がのって、乳腺やら乳管やらが発達してるとはいえ、男性だって乳汁は出るんだしね。

それに生殖器だって分化期のホルモンによって変わるだけで元は同じものだ。比べてみればちゃんと対応して・・・」

いやいやいや。確かにそうだけど、そうらしいけどさ。さすがに俺でも男と女が元は同じもの、というかどちらにでもなれるものが分化したというのは知ってる。男と女が実のところそれほど隔たりのある別の生き物ではないという理屈も分かる。違うように見えてその違いが極論ホルモンの有無で引き起こされると葉月が前に言っていたのも覚えている。

ただ、そういう問題じゃないだろう？

「それもつい3、4ヶ月前まで男だった人間の体だよ？いくら発達したとはいえ、結局はただの・・・」

ま、まぁそうかもしれない。その考え自体は理解できる。ただ、それだと、本当の意味で性転換して女になった人物の胸に情欲を感じるのはおかしいということになるのだが、実際はそうではないのだから。

大体葉月の場合、そもそもが男だというには華奢で中性で、微妙に女っぽいところがなかったわけではないし、いや男に女らしいと

ころがないというわけではないけれど・・・・あれ?俺男の頃から葉月をそういう目で見てたの?

まてまてまて。考えてみれば葉月の場合、完全変異の形骸変容(メタモルフォーゼ)じゃないか。男だったからとかいうか、今は完璧に女性であって、やはりその裸を見るのは抵抗があるというか恥ずかしい。

だいたいそういうのは風紀というか隠しているからこそというか、普段見えないからこそ価値というか欲求が生じるものであって、そういう生物的保健的理論は意味がないんじゃないだろうか?

そりゃ、俺だって性欲はあるし、女の子の体について興味がないわけではないけれど・・・・・あれ?じゃあ葉月に情欲を抱いてもおかしくない?

いやまて俺、何か頭がこんがらがって恐ろしいことを考えたぞ今。駄目だ、何も考えるな、考えるな、考えるな!

というかこうやっている内にも葉月の胸が視界にずっと入っていて。近い近い近い、そういえばドアを挟んですぐそこにいるんだった。

早く閉めないと早く閉めないと早く占めないと・・・・・・。

顔が熱い。知恵熱がヤバイ。体に力が入らない。

気持ち悪い。倒れそう。

「あれ?クシロ?ちょっと!クシロ!?しまったやり過ぎた!!」

やり過ぎたって、やってることの意味が分かってるならやらないでほしいというか。・・・・・うおぇ。

倒れそうになった俺を抱きかかえる葉月。

ちょっまず・・・・・・・・・その体勢だと顔が胸の位置に・・・・。

「!はづ・・・」

胸が・・・・・・・・・・・・近・・・・・・・・・・・・

「お前ら馬鹿だろう。それにさ、くっしぃ、考えてみろ。すぐに手を離して逃げればよかったんだ」

などと、荷稲さんに言われたのは、気を失って保健室に運ばれた後だった。

第１０話－　弾幕痴話。－Ｂａｒｒａｇｅ－（後書き）

一応、ちゃんと予告どおり一週間後の更新です。
この一週間、花粉症との闘いでした。もーう、くしゃみが酷くて酷くて。
それに頭がぼうっとして全然進まないし。

今回のタイトルは『弾幕と痴話』、サブタイトルは『弾幕』です。
エキ日々。を書く際にＢＧＭをよくＹｏｕＴｕｂｅを使ってお世話になっているのもあって、やってみたかったネタです。

そして最後の微妙にえろい感じのネタ。
完全な出来心です。性転換ネタを扱った話なのに最近そういうのやってないなと思って入れました。
嫌いじゃないけど書くのは苦手ですね。・・・難しい。
もはや体育祭関係ないしね。体育祭どこ行った！て感じです。
メインは次なのでいいといえばいいのですが。

ではまた一週間後に更新したいと思います。

第１１話－　単独犯。－Ｓｔａｒｔ－（前書き）

ついにそれらしく、能力バトルになりそうな『予感』です。
せっかくの機会なので主人公達を暴れさせたい！

第１１話－　単独犯。－Ｓｔａｒｔ－

髪は後ろで１つの団子にする感じに纏めて、服装は規定の体操服。腕には予備のゴムを１つ。シューズは白い運動靴で小物入れとしてポーチを右の腰に。

支給された物は学園内の地図に通信用の特殊モバイル。これは生徒同士のやり取りはできないので通信器具ではなく、生徒の位置確認と生徒全体への連絡に使用するもの。大きめの液晶パネルで結構高価そうだ。

一応モバイルには時計機能や地図機能も付いてはいるものの、後者は普通に考えて紙媒体の方が見やすい。

持っていける飲み物は５００ｍｌペットボトル２本分、食べ物に関しては朝にちゃんと食べて来いという過酷なもの。当然自販機での購入は反則で、隠しアイテムとして学園内に支給されている食べ物を探さなければならなくなっている。

日差し避けに折りたためる帽子を持ってきているのだけど、使うかどうか。

あと何かと使えそうな武器として折りたたみ式の警棒も携帯。

ダガーナイフに比べて殺傷性が幾らか劣るものの、これはこれで結構危ない武器なのでお気に入りの１つだ。

あのしゃこんっ！っていう音が格好いいよね。

僕は能力的に実のところこのバトルロワイヤルは不利な立場だ。

自分は安全圏に引っ込んだ上での飛び武器攻撃が可能な出力系能力者の皆様方とは違い、そういった攻撃能力を持たない故にチームとしての繋ぎになる感覚系能力者の皆様方とももちろん違い、単独行動接近戦主流の僕は考慮しなければ課題が多少ある。

まぁ、それもそれで楽しいと言えば楽しいのだけど。

そして何より重要なのがペンダント。

ペンダントと言っても紐に通された首にかける物という意味であ

って装飾性は全くない。
ただサブの弾投げとは違いデジタル使用で点滅するような物ではなく、柔らかいゲル状の本体で水風船に似ている。中に水溶性の着色液が入っているのだ。
勝敗判定もアナログな仕組みで、割れたら敗退というもの。
本体が柔らかいので物理的な攻撃には強そうだ。壊すには直接握りつぶすか、相当な圧力をかけなければいけないだろう。
逆に能力波による攻撃には比較的弱い素材でできているらしいので、やはり出力系が有利と言える。
肌身離さずというわけではないのだけど、どこかに隠したり投げて自分から切り離すといった行為は禁止。
服の下に隠すこと自体は違反ではないので、帽子の下や鞄の中に入れるというのは1つの選択だ。
ただそういう場合は鞄の中身が尽く破壊されても文句が言えないので注意しろとのこと。
肝心なズル行為は禁止されているもののゲームの自由度は高いため、個人個人の選択が鍵を握っている。
出れないクシロには悪いけれど、本当に楽しそう。
・・・さて、今僕が居るのは第一中学の運動場である。
体育祭2日目、メインのバトルロワイヤルがもうすぐ開始されるという状況。
運動場にはそれぞれの学校の生徒が並んでいて、教師のGOサインから1分の間に各々好きな場所に散らばり、渡されたモバイルと放送による違うサインによって競技開始が告げられることになっている。
生徒は既に組む者は組んでいるし、何処に拠点を定めるべきかという候補も幾つか挙げている。場所取りは早い者勝ちなので、合図の後すぐに行動に出なければならない。
そして、どっちの合図にしてもそれを出すのは、発案者であり、全監督権を持つ我らが校長以外にいるわけもなく、現在全ての学校

の運動場に出力された映像として校長の姿が映し出されている。
「さぁーて、観客皆様、生徒諸君！楽しいゲームの時間がやってまいりましたよー？取り組み方によってエキサイティング賞やインパクト賞と色んな評価を与えられるチャンスがあるのでー、積極的にぶつかってくださいねー？というか私を楽しませてくれなきゃ落第もあるから覚悟して置いてくださいよ？
いいですかー？いいですねー？では、そろそろ始めます！
ワァ――ン、ツゥ――ウ、スリィ――イ・・・・・・ゴ――――――！！」

／

「隆ぁー！いけそうか！？」
「ああ、１‐Ｂの周りに他の生徒はいねぇ！つーか、１階は不人気みたいだな。上階の方が敵の進行ルートが絞りやすいからか！？」
クラス内で足の速い俺と海（かい）は場所取り役を担い、開始直後一気に何時も使っている教室に飛び込んだ。
安易な場所設定なため、葉月に襲撃される可能性が高いがそれはもう仕方ないと諦めている。
あいつの場合俺達がどこにいようと追ってくるに違いないので、返り討ちを狙った賭けに出ようと事前会議で決定していた。
それに自分達の教室を使うというのには利点もある。
教室自体を競技前に弄くれるということと、ロッカーに荷物を隠して置けるということだ。
ルールにより食べ物を持ってくるのは禁止になっているが、フィールドに置いておくということには触れられていない。
そこに目をつけた俺達は菓子やジュース、他にも役に立ちそうな物をロッカーに入れておいたのだ。
ここでくつろぎながら篭城するという作戦でまずは敵が減るのを待ち、後半になってできるだけ１人になっている生徒を数にものを

言わせて倒していく予定である。
先遣隊である俺達に遅れて、他のメンバーも入って来た。
皆してしたり顔。ひとまず懸案事項だった作戦の1つが成功したのだ、それも当然だろう。
あとはドアを物理的に塞ぐだけだ。
さて、実質の開始合図がならない内に武器ぐらいも取っておこう。
俺も一応は攻撃タイプの能力者だが、あまり頼れたものではない。
掃除用のロッカーに入れた竹刀を取り出――――・・・な、んじゃこりゃ・・・
ない。入れておいたはずの竹刀や木刀がなくなっている！
見間違いかと思い、乱暴に中を探ってみるもやはりない。
そこにヒラリと舞い落ちる一枚のメモ用紙。
拾って読んでみるとこう描かれていた。
『楽をしようとするのは頂けないので、荷物は屋上に移動させていただきました。お待ちしてます。　葉月』。
「ちくしょぉおおおおお――！やられたぁ――――！」
「何？どうしたの？・・・・・これって葉月ちゃんの・・・？うそ！何時の間に！」
「だって朝に確認したんだよ！？その時はちゃんとあったのに！」
「嘘でしょ・・・私達すでにはづきんに欺かれて・・・」
「がぁぁぁぁあああああぁぁぁあ――――！」

「生徒諸君！ちゃぁーんと位置に付きましたかぁ？
では改めて・・・4・・・3・・・2・・・1・・・スタァ――――ト！！」

既にクラス1‐Bは崩壊気味である。

／

おそらく怒涛のスタートを切った哀れなクラスメートのことを考えると笑いが漏れてしまうのだけど、僕もこれからどうするのかを考えなくちゃいけない。

今僕が居るのはあのメモの通りの第一中学校舎の屋上だ。

視界は開けて良好、給水タンクなどの隠れられる物陰もあるし、最悪飛び降りれば追っ手も大抵振り切れる。場所としては悪くないとは思う。

ただ、ずっとここで敵がやってくるの待つわけにもいかないし、クラスの皆は何時来るかわからない。いや、来るのかもわからない。

さて、どうしたものだろうか？

教室のロッカーにあった皆の荷物は物陰に隠しておいたし、ハリセンとお菓子は頂戴した。

フェンスによりかかって見てみると、まだチラホラ生徒が走っているのが見える。

場所取りが上手くいかなかったのだろう。慌てふためいている生徒もいる。校舎内を見ると廊下を走る男子がいたり、カーテンを閉められた教室があったりと各々何かしらの行動をしているのが分かった。

目を上に移すと雲の広がった空が広がっている。快晴でなくて何よりなのだけど、遮光物はないので日差しは強い。

考えてみればここは体力消耗が激しいフィールドだ。

やっぱり校舎に入ろうか？でもなぁ、校舎は校舎で逃げ場がない分追われたりすると面倒なことになるに違いないし。

まぁ、窓があるといえばあるか。その内考えよう。

実は今考えなければいけないことがあったりする。

「・・・ふむ。まずい、かな」

実のところ只今絶賛囲まれ中だったり。

屋上の出入り扉の向こうに2人、フェンスの向こうからは浮遊能力者とその能力を使って入ってきたらしい光反迷彩の能力者がじりじりと距離を縮めてきている。

どうするかなぁ。バレバレなんだけどなぁ。

さっきからぎぃぎぃと扉が微かに鳴っているし、光反迷彩に関しては熱源感知に思いっきり引っかかっている。というか、フェンスから外を見ているので気付かないと思っているのだろうけど、影がくっきりと映ってるんだろうな。扉を通った人間はいないので、必然的に誰かの能力を借りて昇ってきたと判断でき、浮遊能力者の存在も予測できるし。

あぁ、自分が来る前に既に居たという考えはありえない。

現段階での僕の最高速度で最短距離（つまり壁歩き、いや壁走り？）を一気に駆け上って来たのだ。

座標転移（テレポーター）でもない限りそう先を越されるとは思えないし、現在屋上に足をつけているのは透明人間君だけだ。よってそれもありえない。

相手の数は４人。もしかしたらもう何人か居るかもしれないけれど、僕が感知できたのはその４人だけ。感知できないということは距離は遠いと考えていい。

どうやって始末しよう？

開始早々か弱そうな少女（にみえるらしい）をターゲットにする性根の腐った彼らに鉄槌を。

と、透明君がすぐそこまでやってきていた。

ここまで近いと息遣いまで伝わってきて気持ち悪い。聴覚の感度下げよっかな。

とにかくこのまま突っ立っているわけにもいかず、振り向きざまに透明君にハリセンを横一線。

「ふごぉっ！」

どうやら目と鼻と口の辺り一体に思いっきりヒットしたらしく、姿を現しながら後ろに吹っ飛んだ。

「なっ！」

扉の方からその声を聞きた2人が屋上に駆け込もうと扉を開けようとする。

のが分かっていたので、―彼（姿を現したら男だった）を殴ったと同時に駆けて、ステップを2歩、ちょうど上がった右足で開きかかっている扉を蹴り無理やり閉める。

がぉんという音がして鉄製の扉が凹み、同時にロックも完了。

地震の時は扉を開けてないと変形して出られなくなる場合がございますのでお気をつけください。

さらに扉を蹴った勢いを殺さずにターンしてフェンスの先、空中浮遊者を何とかしようとする。けど、

「・・・・・逃げられたか・・・」

さすがに逃げる時間はあったようで、即断力のあるらしいその人物は既に居なかった。

仕方ないので伸びている透明君のペンダントを潰しておく。手に付いた液体はちゃんと彼の服で拭った。

彼を診るとどうも気絶してるらしい。脳震盪かもしれない。ちょっと力が強すぎたかな。まぁ、医療班がいるので大丈夫だろう。

あーあ、何てこった。４人に囲まれておいて結局１人しか倒せなかった。

数で攻められるのは面白くないなぁ。割に合わない。労働力の無駄だ。

やっぱり1人ずつ奇襲していく方がいいか。

攻める方が楽しいし、性に合ってる。

よし、じゃあ校舎内に入ろう。

――ガチョ

「・・・・・あれ？」

――ガチョガチョ

扉が全く動かない。見てみると本当にやばいくらいに変形してしまっている。

「なんてこった・・・」

いや、自分でやったんだけどね。

・・・・・まさかここまでとは。

「うそぉ、どうなってんのよ！？」
「何でいきなり貴重なスパイを失ってんのよ！」
「知るかっての、俺だって聞きてーよ！
屋上でハリセン持った変な女が居たからそいつからいこーぜって安藤が言って・・・。
で、実際仕掛けようとしたら先にやられたんだよ。扉を開けようとしたら思いっきり押し返されて・・・ぼこぉ！って扉が・・・・・あれ鉄製だぞ？」
何よそれと花一（はないち）が呻く。
俺達の居るのは基地として利用している音楽室だ。この学校の音楽室は後に作られた新校舎の最上階にあるため、構造上正規ルートでは1箇所からしか入ってこれなくなっている。窓も他の教室より少なく防音されているので隠れ家としてはぴったりなのだ。
ここに居るメンバーは３－Ｃのクラスメートであり、３年の中でもかなり有利に事を進められるクラスのはずだった。
スパイ、監視役の光反迷彩、防御不可の座標転移（テレポート）、距離短縮、荷物運びの空中歩法（エア・ストロール）、大火力の発火、発電能力者多数というすばらしいメンバー構成だ。
なのに既に危険を避けつつ、攻撃ができるというチームの利点である光反迷彩がダウンしてしまった。
「っ！安藤！」
１つだけ鍵を開けておいた窓から空中歩法（あんどう）が帰ってくる。
「無事だったか！やっぱり菊池は駄目か？」
「駄目だろうな・・・。すぐ逃げたから見てはないけどぶっ倒れてたし」
ということはやっぱり光反迷彩（きくち）はリタイアか。もしかしたらと思ってたんだけどな。

「悪いな。目測を誤った。ありゃとんだ番狂わせ（ダークホース）だ・・・・・・」
誰だってカモだと思うってと慰めつつ、作戦を立て直すために話し合う。
「これからはもう少し警戒して動こう。数人で1人でいる奴を狙うのはそのままでいいと思う」
「どうする？警戒ったって菊池がいないってことは誰かが危険を冒して見張ったりしなきゃってことだろ？」
「仕方ない、伝心できる一方念言（テレパシー）が校舎内を見回る。俺らも出入り口を見張りつつ、敵の位置を聞いて対処・・・ってのでいこう」
「えぇっ、私が見回り！？無理だよっ、私すぐやられちゃうって！それに私こういうの苦手って知ってるでしょ？
襲われるかもしれないって状態で校内歩くなんて精神持たないよ！」
「他のメンバーには違う役割がある。火力だし、安藤は脱出手段だ。生き残るためには分担しなきゃならねぇ。
大丈夫だって、敵だって同じ気持ちだ。まだ教室に籠もってる奴らも多いだろうから、どこに敵が居るか報せてくれればいい」
そう言って彼女の背中を押す。
不安そうな顔をして彼女はドアを閉めた。
心配といえば心配だが、チームの連携こそが勝利の鍵だ。
俺にも火力という役割があり、攻撃を仕掛けなければならないのだから、危険度は高い。
彼女の健闘を祈りつつ、俺達もドアの向こうに人が来ていないか、カーテンの向こうから誰か上ってきていないかをチェックする。
よし。とりあえず大丈夫そうだ。
「なぁ。この校舎のどっかにもアイテムボックスあるんだよな？」
「ああ、どの校舎にも1つはあるって言って――――」
――――いきなり、電気が消えた。
「な、なんだ！？」
「っ慌てんな！誰かがブレーカー落としただけだ」

「誰だよこんな馬鹿なことする奴」
「よねぇ。こんなことしても昼じゃあ、普通、教室のカーテンって透けて太陽の光が入ってくるのに・・・」
その通りだ。誰が何処を狙ってやったのか、ただの嫌がらせかは検討つかないがあまり意味のあるものとは思えない。
あ？でもそんなこと生徒なら誰だって分かることだ。この季節は特に誰だって実感する。なのにわざわざ危険を冒してまでブレーカーを落としに？
いや待て待て、それはおかしい。そこまで愚かなことをするものか？
「ぁ・・・・・あ・・・」
そして気付いた。
昼だろうが何だろうが日差しを遮る必要のある場所が幾つか、あるのだ。
体育館、視聴覚室、そして、
「くっそ何も見えねぇ～。ここのカーテンは分厚いからなぁ～」
音楽室。防音のために生地の厚いカーテンを使っている――――、
「皆まずい！ここが狙われてる可能性がある！」
「は！？」
「昼間っから電気落として効果があるのは、体育館、視聴覚室と音楽室！で、今生徒が使ってカーテンが閉まってるのは、どこだ！？」
体育館は広すぎて使われていないだろう。
視聴覚室はどうなっているか知らないが、ここは確実に使われている。
カーテンなどを閉めればそれで隠れ場所が見つかってしまうのだが、閉めていないと自分達の情報が漏れる。よって苦肉の策として、周りの使っていない教室のカーテンを閉めてまわるという行為がなされるのが通例なのだが、
「視聴覚室に他のチームが居ると考えてもここを狙ってる可能性は高い！」

「カーテン開ける！？」
「懐中電灯の方がいいんじゃない！？」
「とにかく扉とまっどぉぅ――っ！」
どさっという音。
「どうした！？おい、松井！」
返事はない。
既に誰かが侵入しているらしい。
さらにぷしゅりという水音が響いた。
くそっ、懐中電灯はどこだったか。
これか？
「ひゃぁぁあああ！」
また１人犠牲になった。
教室中パニック状態になる。
ばたばたと走り回る音。悲鳴が響き、闇の中では何が起きているのかまるで分からなくなった。
そんな中時々ぴしゃりぱしゃりという水音がするのだ。
見えない敵に襲われているというのは恐ろしい。
ホラーである。
よし、たぶん・・・これが懐中電灯だ。
と、誰かに当たった。
「きゃっ！」
「大丈夫、俺だ！」
「あっ、そう？じゃあ１１人目、と」
「えっ？」
腹に恐ろしい衝撃が走る。
そうして俺のリタイアは決定した。

／

１３人を倒した時点で声も止み、動いている人の気配もなくなっ

たので、悠々とカーテンを開ける。
息が詰まりそうだ。よってついでに窓も全て開放。風があるからすぐに換気される。
うん、気持ちいい。
改めて室内を見回すと、ペンダントに入っている赤い液体を飛び散らせて倒れている上級生達。
死体の振りをしているのは、ゲームのルールだからだ。
演技点が入るとかで、退場が決まったら死んでいなきゃいけないのだ。生きている生徒がいなくなるまでそのままで、いなくなったらはけるという打ち合わせ。言葉は一単語を死んでから１０秒以内でならオッケーとのこと。
校長、懲り過ぎです。
それが分かっているので、ここで倒れている彼らを気にする必要はない。
さて、これでとりあえず僕を襲ってきたクラスは壊滅した。
浮遊能力者がいることから、この校舎に潜伏しているとすれば窓の鍵を開けてあるだろうと踏んでいたのだけど、見事にビンゴ。
生地の厚い濃緑のカーテンを閉め切っているので、ブレーカーを落としてやり窓から侵入した。
闇の中で視界を確保する方法は夜行性動物に倣い、熱感知と嗅覚でそれを補強。日頃音波に慣れ親しんでいるわけではないので、コウモリのようにとはいかなかった。
無理やりこじ開けた屋上の扉付近でした臭いと同じ臭いがするので、間違いなく先ほどの仲間のチームであると判定できる。
うん、実に快調。さて、校内をうろつきますか。

／

いきなり消えた電気に驚きながら、身を潜める皆。
今、１‐Ｂは織神葉月という恐怖に脅えていた。

「やばい・・・もう来るんじゃ・・・ないか？」
「どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようっ！」
「落ち着け！大丈夫、作戦は考えてあるだろ！最善を尽くすんだ！いくら織神の身体能力が高かろうが遠距離攻撃に分がある！」
そう言い聞かせるが、誉（ほまれ）はかなり震えている。
あいつの能力は浅夢予知（くもりゆめ）なのだが、昨日も努力したものの予知夢は見られなかったらしい。
あの震えようを見ていたら、それで良かったと思わないでもないが。
嫌な未来なんて見たいと思う奴なんていまい。
ああ、分かってる。分かってるんだ。
織神葉月という人物を敵に回した時点で、自分達がどれほど困難な状況に置かれているかなんて。
やるならとことんやる容赦なしの葉月は、こういうゲームでもやはり手を抜かない。
もちろん、ルールに則った遊びとしての全力だが、知り合いだろうが友達だろうが、勝負の相手には勝ちに行くタイプだ。
以前カードゲームで戦ったことがあるのだが、その時葉月はえげつなく完璧な手段を用いて、対抗する暇も与えず一気に潰しにきた。
そういう経験から導き出される推測からして、葉月がこのゲームを楽しんでかつえげつなくプレイしているに違いない。
だから、実のところ俺だって結構怖い。
何時葉月が襲ってくるのかびくびくしながら待っている。
「・・・・・来ないね」
「さっきのははずちゃんの仕業じゃないのかな？」
「ん？」
支給されたモバイルがバイブレーションしだした。
何らかの情報や伝言を送ると言っていたっけか？
支給品のくせにやたらと高価そうなディスプレイを覗く。

『織神葉月さんが１０人撃退を達成』。
「うひぃっ！！」
思わずモバイルを投げ出してしまう科。
「科、大丈夫！？」
見る限り大丈夫そうではない。
校長、何て危ない情報を寄こしてくるんだ。
俺達限定のクリティカルヒットだぞ、それは。
「で、でも！これで狙われたのは私達じゃねーってことになるじゃん！」
「そうよ！大丈夫なの大丈夫、だいじょーぶぅぅ・・・」
確かにそういうことなのだろう。さっき狙われたのは俺達ではなく、他の誰かであり、あれ？
「おい待て。釧のタレコミでは葉月は真っ先にここを狙うっつってたんだよな？」
「あ、そうだよね。でも、開始前に荷物やられたよ？」
「葉月がそれで満足すると思うか？」
「うっ。でもでも！他の生徒が犠牲になったんだよ？もしかしたら標的を変えたのかも？」
誉のそれはもはや希望、懇願の類だ。
「・・・じゃあ、とりあえず葉月警戒態勢は解く、か？」
「いや、そう見せかけるという罠かもね」
くくっと笑う楚々絽。
「わかっち・・・洒落になってないぜー」
絵梨もかなり参っているらしい。何時ものエロ親父よろしくな口調は消え失せている。
「楚々絽、どうするべきだと思う？私は何人か外に出て、周りを索敵した方がいいと思うんだけど・・・」
「正直分からないな。分散すると各個撃破っていうのもあり得る。そうなったら万が一にも勝ち目はないと見ていい。といって動かないってのは競技的にもまずいな。

篭城は作戦だったが、そのための荷物が盗られた時点で頓挫してると言っていいし。

今使えそうなのは私の視界傍受と聡一の視覚放置ぐらいだが、私の方は奪取できる範囲に人がいなければ意味がない。聡一は今やってるように教室前の廊下を監視する程度しかできない」

その通りだった。少なくても葉月は一中学生に倒せるような相手ではない。身体能力的に勝てないし、半端な能力は当たらないだろう。あいつの場合能力もそうだが、あいつ自体が本当にヤバイのだ。やたらと勝負事に強い。

打ち勝つには生半可な体勢では無理だ。そしてだからこそ、対葉月用に対策を用意してきてはいるのだが・・・。それはチーム全員がいることが前提だ。最初に襲ってくるというからそれで大丈夫だと踏んでいた。

それが今の状況ではどう来るかまるで分からないのだ。

このまま来ないのであれば分散して行動するべきであり、来るのなら散らばっているのは非常にまずい。

篭城用にと用意した荷物は今頃屋上である。あの中には、ガムテープやら何やら、ドアを閉めるための物も用意してあったのに。

つまり、篭城も万全な態勢ではないし、若内が言った通り、頓挫した時点で俺達は無策で脅え縮こまっている駄目な生徒である。このままでは成績は期待できない。

「おい・・・・・どうするよ？」

「何これ？放置プレイ？放置プレイかよぅ。あぁ、駄目。私もう駄目」

西谷が机に突っ伏して動かなくなった。

「出た方がいいの？出ない方がいいの？何時来るのよぉ！」

底知れない恐怖に精神を消耗するクラスメート。

もしかしたら、葉月の狙いはこれだったのかもしれない。

考えれば考えるほど、深みに嵌って不安が増大する。

嫌なまでの効果てきめんな精神攻撃。

とすると、実は俺達は既に、現在進行形で葉月の攻撃を受けているのか。

ははっ、ははははははははははっ。

「おい四十万！大丈夫か！？」

大丈夫なわけがない。

本当にクラス１‐Ｂは崩壊気味である。

第１１話－　単独犯。－Ｓｔａｒｔ－（後書き）

花粉症にやられ判断力が鈍ってます。
ホント嫌ですよね。外出なんてしてないのに中に運んでくる輩がいるんですよ。
あとハウスダストのせいでそれが余計酷く・・・。

バトル物はあまり経験がない描写なのでどうなるか分かりませんが、限界にチャレンジしてみます。

というか、本当にやっと能力が活躍する機会になったなぁと感慨深いものが。
できるだけ延ばしたいな、体育会編。

第１２話－　複数班。－Ｆｉｇｈｔ－

降り注ぐ夏の日差しを無視する校内の涼しさと静かさ。鳴き始めた蝉の求愛は遠く向こうの薄暗い教室。

窓から見える風景が霞むような閉鎖間。気配を消そうと躍起になっている生徒の息遣いは近く傍の廊下。

勉学に勤しむなり、部活動に励むなりして毎日通うっていた学校は今、全く異質なものへと変貌していた。

生徒達の気配や不安、それらが合わさって見えないモノを見せるものだ。

この校内には化け物が潜んでいる。

廊下では誰にも遭わないことを祈り、教室ではひっそりと息を潜め戦略を練る生徒達。

彼らにとって肝要なのは自分が生き残ることであり、保身が故に動きが取れないのである。

例え壁一枚を挟んだだけの隣同士に居を構えていても、そう簡単には攻撃を仕掛けられない。

攻撃を仕掛けても返り討ちになるかもしれないという不安。攻撃を仕掛けている内に別のチームから攻撃を受けてしまうかもしれないという心配。

そして、誰も動こうとしないが故の緊迫感。

チーム同士は同じ階に居ながら、牽制し合い沈黙を守っている。

それを破るは予想外（ジョーカー）に他ならない。

単独で行動していた生徒による強引な戦闘、それによる乱戦。あるいはチームの奇策より誘発される大乱闘。

しかしそうなってしまってはチームとなって戦っている意味がなくなってしまう。

だからこそ、チームの命題はいかにして波風を立たせずに相手の人員を削っていくかということになる。

「攻撃は速攻。迅速かつ確実にチームを消す！フォーメーションは前の通りでいく。椋（しきみ）？」
「ええ。思考断絶（ブラウザ・クラッシュ）で相手の動きを奪ったら、合図。それに合わせて一気に畳み掛けるよ！」
３‐Ｄにて、珍しく積極的なチームが行動を開始しようとしていた。
人数は１４人。まだ1人も欠けていない万全体制。
その作戦は要となる赤司椋（あかしきみ）の思考断絶（ブラウザ・クラッシュ）で相手の行動を強制停止、そのままチームを丸ごと潰してしまうという大胆なものだ。
本当なら動かずに教室で使えればいいのだが、椋の能力は有効範囲が直径１０ｍほどのため廊下に出なければいけないという手間がある。
彼らが根城にしているのは３‐Ｄではあるものの、彼ら自身は２‐Ａだ。
能力構成は思考断絶（ブラウザ・クラッシュ）の他に、聴覚放置と心繋念話（テレパシー）のＥＳＰに、炎弾手榴（イロキネシス）、紫電雑閃（エレクトロキネシス）などのＰＫ。
一度触れた相手と相手を繋げることのできる心繋念話（テレパシー）で連携を取る手筈で、椋の合図もそれによる。
「よぉし、腕が鳴るなぁ。こういうの久しぶりだ」
「じゃ、行くよ。吉報を待てっ！」
そう言って椋は右手を上げ、軽く敬礼、続けて投げキッス。
引き戸を開けて、廊下へ一歩。
「ひゅっ！？」
その瞬間、彼女は上に吊り上げられた。
バタバタと浮いた足を動かすことしかできない。
頭と上半身の半分が隠れてしまって教室からは何が起こっているのかまるで分からないが、
「んー！む、ぅうっぁ！」
とにかく上に何かがいて、彼女を襲っていることだけは理解できる。

呆然として思考を止めてしまった教室の皆は、はっとして駆け寄ろうとするが、後宙に浮いた彼女は既に動くのをぴたりと止め、床に下ろされた。
力なく膝から崩れて前に倒れる。
「・・・バケモノ・・・・・・」
最後にそう言って、もう何も言わなくなった。
残されたチームメイトも何も言わなくなった。

繰り返す、この校内には化け物が潜んでいる。注意されたし。

／

「・・・・・・」
「・・・・・・」
涼しい部屋で美味しい飲み物を飲みつつ、くつろぎながら競技の経過を楽しんでいる俺と波風。しかしそこに言葉はない。
体育祭ということで通常よりも多く配置された徊視子蜘蛛の映像の１つを拾った映像に目を奪われていた。
教室から出た生徒がその瞬間首を吊られるような絵面（えづら）で襲われている実況（ライブ）。
その犯人は写っていなかったが、心当たりがあり過ぎて嫌だ。
「・・・葉月ちゃーん」
波風がさすがに引きつった笑みでそう呟いた。
ここは俺のマンションの一室。モニタールームと言えば分かりやすいだろう。液晶画面がやたらと並んでいる部屋だ。
普段使いようもない部屋なのだが、今回は大活躍。
祠堂学園が統括する徊視子蜘蛛や衛生画像をネットから引き出してモニターにそれぞれ映している。
改めて観戦方法について校長に聞いてみたところ、学園外の市民会館などで大型画面でも見られるが、環境さえ整っていれば家での

観戦もできるということだったので、波風を誘い極上の安らぎ空間でエンジョイ中だ。
いや、ついさっきまでエンジョイしていたというべきか。
先ほど見てしまった映像のせいで背筋が寒い。
「波風何か温かい物飲むか？」
「うぅ、よろしくする・・・。
とと、そうだ、名前で呼んでよ。上だと何かむず痒いの」
こちらとしてはそっちの方がむず痒いのだが、まぁいいか。
ココアでも作ろう。夏とはいえ、冷房は効いているし、心身共に寒くなってきた。
「えぁっ！」
「！どうした！」
波風、・・・いや九鈴（くすず）が口元を抑えて右手でモニターの１つを指差している。その指は震えていた。
そこに映し出される映像はもはや怪奇だった。

廊下の曲がり角、女子生徒が四つんばいの状態で必死に何かから逃げようとしている。
下半身は角の陰に隠れて見えないが、何者かが足を掴んでいるらしく全く進まない。両手は虚しくただ前に出されるだけだ。
そして、
――――奥へと引きずりこまれた。
「いやぁぁぁぁぁあああああ！！」
悲鳴だけが残る廊下。

「・・・・・・」
「・・・・・・」
言葉がない。

／

3階、この学校の中で立地条件の良い場所であり、何よりもの激戦区。
競技後半において生き残りが少なくなってきた時に、篭城するためには3階を取るというのがセオリーになっている。
しかし、他のチームが同じ階に居たのでは意味がない。
だからこそ、淘汰(とうた)が激しい場所なのだ。

「おらぁあ！」
1人の生徒が投球動作で水弾を打ち込んでいる。
一見地味な攻撃に見えるが、大量の水の塊が勢い良くぶつかってくる衝撃はかなりきつい。
教室の壁は3発目にして破壊された。ベキリと音を立てて木製の板が無残に散る。
「通路確保ぉ！」
「させるかよ、くそボケ！」
しかし、教室にいるチームも負けていない。女子生徒が入ってこようとしていた男子生徒の足に蹴りを入れた。
「ぐこぉ・・・・・・」
怯んだ隙に溜めていた右拳で腹辺りを殴りつける。ぱしゃんと彼が服の下に身につけていたペンダントが破裂した。
「おっしゃあ！いくぞ野郎共！命知らずな馬鹿共に目に物見せてやれ！」
「「おう！！」」
男気溢れる彼女の声に促され教室から飛び出すチームメイト。
自分のライフと掛け替えに相手の本拠地に穴を開けた生徒の功労を無駄にするわけにいかないもう一方のチームがそれに応じる。
出てくる生徒に炎弾を投げつけた。
が、それを教室の机を盾に彼らは飛び出す。
「喰らえやっ！」

その1人が握り締めていた拳に圧縮しておいた光熱の塊を開放した。
それは閃光弾のように白い光を放ち、不意を突かれた敵の数人に隙を生んだ。
他のチームメイトがその隙に相手を潰していく。
相手チームは分が悪いと考えたのか一時撤退する。入ったのは3-Aの教室。
それを追う男気女子は教室の引き戸には目もくれず、教室に幾つも付いている擦りガラスの窓を叩き割った。手際よくロックを外し開ける。
本来人間がやると手を怪我しかねない行為だが、彼女の能力は身体強化だ。皮膚の硬化と腕の筋肉の増大により、軽々とそれを行ったのである。
彼女はすぐはけ、代わりに腕を突っ込んだ腕から更なる発光が浴びせられる。
何らかの強化をされているだろう引き戸は後回しに、窓から侵入近場から片付けていく彼ら。
遅れてドアもこじ開けられ、チームのほぼ全てが入ってきた。
目が眩んだままそれでも応戦しようと1人が当てずっぽうであちこちに飛ばした風弾が廊下側の窓に、黒板に辺り、ガラスは割れて黒板は床に倒れる。
がちゃん、ごととん、ばたんと教室の用具が壊され、崩され踏みつけられた上で無視されるという学校を冒涜し尽した行為が繰り広げられ、やがて戦闘は終了した。
犠牲者2名で男気彼女のチームが勝利し、教室には負けたチームの生徒達が倒れている。
ちなみに犠牲物は黒板、窓ガラス、引き戸、教壇、テレビに机の過半数だが、それを気にする人間は1人もいない。
むしろ普段行えない破壊活動にサッパリしたのか、すがすがしい顔で汗を拭く生徒達。

戦利品としてその教室に蓄えられていたジュースを頂き、一間の休息を得る。
が、それも長くは続かなかった。
――ガシャァ――ンッ!!
カーブを描いた多色の光弾が運動場のある側の窓を一斉に割った。
続けて第2弾がチームを襲う。
「はっ、漁夫の利を得ようってのにはちょいと遅すぎだっての!」
迎え撃つは彼女。
そこに割れた窓から大胆にも飛び込む人影、青いジャージの生徒。
両手をクロスさせ、さらにその上に風で盾を作っての強行だ。
「っ!朝風・・・!3‐Kかよ!」
彼女が叫び、
「ははっ、ここら辺でさっさと決着をつけようじゃないか、若内」
彼が応える。
3‐Fの大将こと若内鈴絽(わかうちすずろ)と3‐Kの暴君こと朝風柏(あさかぜかしわ)が対峙した。
早くも強豪2人がぶつかる。

／

「――・・・・・っ!3階の音はどうやらチームの乱戦によるものっぽいぞ!どうする!?」
「今年は3階ね!よしよし。私らも参戦しよっ!階段で待ち構えてお零れ頂戴っ!」
私らはそこまで攻撃力の高いチームではない。どちらかと言えばESP系の能力者が多い戦略型だ。
敵に遭遇しないように細心の注意を払って、倒せそうな相手を見つけるという地味な活動しかできないけれど、これも作戦の1つだと思う。
2階に居を構えていた私らは走って階段に。
よし、誰もいない。

3階に入るかどうかぐらいの段差に身を低くして隠れる。と言ってもよく見られればばれるだろう。
「ここで張ってれば、逃げてくる連中を一網打尽――――」
シャッゴン！という意味の分からない音がその台詞を遮った。
頭上を何か凄まじいモノが通り過ぎて、身が凍るような風圧を受けた気がする。
恐る恐る後ろを振り向いてみると、何故か青い空と白い雲が。
あれぇ？ここの階段、何時の間に外付けになったんだろ？ボックス式の壁に囲まれた普通の階段だったはずなんだけどなぁ・・・・・・。
首を正面に戻してみると、廊下の見えない辺りから直線に何かが飛んできた。
ゴシャン、ガガンと廊下の端に激突する何か。
「・・・・・・」
それはコンクリートの塊だった。今月の標語ポスターが貼ってある。
確か、標語のポスターは廊下の少し開けた溜まり場にある柱に、貼って、あったと・・・・・・。
・・・もう何も考えまい。
「撤退――――――！！」

／

3‐Aに窓から侵入した朝風柏と若内鈴絽の正面衝突からほどなく、彼ら率いるチームが巻き込まれない程度に離れた廊下や他の教室で乱闘を始めた。
威力をコントロールできる生徒による騒乱念力（ポルターガイスト）が荒れ狂い、能力者が出力した様々な光弾が時折おかしな軌道を見せる。
流れ弾が窓を割り、壁にヒビを入れるが、誰も遠慮しようとはしない。

ＥＳＰ系とＰＫ系の連携は魔術師のそれに似ている。
詠唱の時間を稼ぐようにＰＫ系能力者が先方に立ち、ＥＳＰ系能力者がそれをバックアップする。
読心術（テレパシー）による攻撃予告、五感妨害（ディスターブ）系での機動力殺ぎ。
しかし混戦している今の状況ではそういった形態を成すのは難しく、ＥＳＰ系生徒の中には肉弾戦で戦闘に参加している者も多い。
こうなってしまってはもはやチーム戦とは言えず、とりあえず敵なら何でもよいから攻撃するという原始的な戦場の再現となった。
本来は2チームによる激突だったが、漁夫の利を得ようとしたチームや憩いの場を守ろうと立ち上がったチームが参戦、3階フロア全体を巻き込んだ大乱闘が始まる。
地獄と化したその階から逃げる生徒も多く、2階でも多少波風が立ったが、3階に比べれば可愛いものである。
紫電雑閃（エレクトロキネシス）が放った緑色の細い無数の線が廊下を走る。その電気の線は途中でまとまりを失い四散、光線（ビーム）としてはほとんど役に立っていないが、拡散したせいで巻き込まれた生徒が多数。
能力が役に立ちそうにない生徒が掃除器具用ロッカーから取り出したモップで袈裟切りを試みるものの、誰かの炎弾があたり繊維部分が炎上。それを数秒見ていた彼だが、にやりと笑ってそのまま突撃する。
炎弾そのものは小さいが、燃え移りやすい火種を放てる火種手榴弾（オリジン・パイロ）が木屑火を点（つ）け、発水能力者がそれに水をかけることによって水蒸気を発生させて煙幕にしたため、廊下は一気に視界が悪くなった。
それを発風能力者が吹き飛ばし、ついでに水蒸気に隠れて見えなかった味方まで吹っ飛ばす。
雑音（ノイズ）の能力者によって耳鳴りが酷くなり、聴覚遮断の能力者が味方の聴覚を保護する。
能力者同士の攻防に次ぐ攻防によりフロアはどんどん崩れていった。

「・・・俺らは今、どうしようもなく理不尽な戦いに巻き込まれようとしている・・・」

今年、第一中学の大乱闘は3階で始まることがほぼ確定した。

我らがチーム3‐Eは逃げる機会も逸して、辛うじて篭城している。

外では轟音が響き、廊下と教室を隔てている基本木製の頼りない壁は悲鳴を上げている状態だ。

それどころかフロア全体がさっきから揺れっぱなしで、教室同士を隔てている方の壁までにひびが入っていた。

チーム同士の交戦、挙句の果ての癖のある優勝者候補がカップリング。彼らの率いているチームが激突し、それが他のクラスにまで飛び火したのだ。

ガンガンと窓ガラスを叩く音が聞こえる。

チームメイトの結晶結合（クリスタライゼーション）がなければ既に突破されているはずだ。

残念ながら僕達にはこの乱戦を戦えるだけの総合的な力は持っていない。

「がんばって取ったこの3階という好立地も、もう役には立たない・・・」

僕達3‐Eは、せめて場所取りはしっかりやろうとスタートダッシュに死力を尽くした。

その結果がこれだとは皮肉なものである。

「乱戦になってしまえばチームで連携したとしてもほとんど役に立たないだろう・・・」

そう。僕達は既に死刑宣告をされたようなものなのだ。

敵に囲まれた最後の砦、避難壕で身を寄せ合っている気分である。

「よって、ここにチーム解散宣言する。皆ここまでよくがんばってくれた！」

もはやチームとして生き残れない僕達は、解散、教室を一斉に飛

び出し別行動というルーレット作戦で運を試すしか選択肢が残っていない。
「教室を出れば俺らは他人だ。敵に立ち向かうなり、全力で逃げるなり皆最後まで諦めないでくれ！」
加賀！、とチームメイトの1人が呼ばれる。
彼は頷き、決心した面持ちで了解した。
「今からカウントダウンする。『GO』で結晶結合解除（クリスタライゼーション）だ。皆ドアに集まれ」
教室に2つある引き戸に集まるチームの皆。
「引き戸は既にボロボロだ力任せに押せばすぐ倒れる・・・・・・いくぞ！
スリー・・・ツー・・・ワン・・・GOッ！！」
能力が解除、男子生徒による足蹴りによって引き戸は縦に倒れた。
視界に光が指す。閉じ込められていたといった閉鎖感からの開放、そして半安全地帯からの追放。
僕達は死地に赴く。
瞬間、足に力を入れ、目指すは階段だ。
伊達に3階に拠点を置けたクラスじゃない。一気に加速して距離を稼ぐ。
しかし、激戦区というのは障害物が多いからこそ難所なのだ。
流れ弾に当たり演説していた星砂（ほしずな）が横に吹っ飛んだ。
くそっ。生徒も多く、真っ直ぐ走れるわけでもなく、倒れている生徒がいるので足を引っ掛けるチームメイトもいる。
弾が当たってもペンダントが大丈夫であればリタイヤにはならないが、一度止まってしまえば逃げれる戦場でもない。
階段はなかなか縮まらず、いつの間にか走っているのは俺と前を行く隅（すみ）だけになっていた。
それでも何とか階段に近づいた所で、やってしまった。
足が何かに引っかかり、こけた。
床に勢いよくぶつかり、さらに悪いことに腹を打ち付けてしま

った。
息が口から吐き出され、染み渡るような痛みに体が麻痺してしまう。動かない。
後ろを振り向くと、トドメとばかりにこっちに向かって走ってくる敵が。
ああ、俺はここでリタイヤか・・・・・。
そう思った瞬間、その生徒が勢いよく前のりにぶっ倒れた。
彼の体で隠れていたその後ろに、倒れながらもこちらに向けて手をかざす星砂（ほしずな）。
教室を出れば他人だと言ったのは誰だったか。
麻痺した体に力を入れ直し、四つん這いから立ち上がろうとする。
そこで、見てしまった。
前を行くはずの隅が敵に腕を掴まれている。抵抗しているものの、それが何時まで持つか分からない。
決心。
現時点で最も階段に近い、生存率の高いのは彼女だ。
どうせこの体はもう限界。
やってやる。
四つん這いの体勢から、ほんの一瞬だけの踏ん張り。
腕を掴んでいる彼の腰に抱きついた。
体重をかけるように上に覆い被さって拘束する。
腕が開放された彼女は、しかし戸惑っているようにこちらを見ていた。
「隅――――、行け――――――――――――!!!」

／

――ガガガガガッ
朝風柏の周囲１ｍほどの空間から見えない風の刃が無尽蔵に製造されては打ち出されていく。

最初はそれを教室の机を盾に防ぎ接近を試みていた若内鈴絽だったが、一撃で粉砕される盾は役に立たず、それさえもなくなってしまった。

柱を投げつけてみたものの、風で軌道を変えられてはどうしようもない。

中、遠距離タイプの能力者と戦うことの分の悪さを実感しつつ、鈴絽もそのまま素直に負けてやるつもりはさらさらない。

現在2人がいるのはかつて2-AとBであった教室だ。

柏はAの教壇があった位置に、鈴絽はBの後部のロッカーがあった位置に身を置いている。

その2人の間に本来あるべき隔たりは全くなく、教室2つ分の空間を作り出していた。

教室の壁は柏の風刃にズタズタにされた後、鈴絽によって飛び道具にされ無残に破砕。床は既に木屑と鉄骨だらけだ。

ちなみに天井も所々破れていて、陽が差し込んできている。

他の生徒は既にリタイアしていない。

絶え間ない柏の攻撃を避けつつ、板の部分が切断されて分断した机の鉄部分を掴んだ。

カーブ部分を無理やり直線になるように曲げ、溶接部分は折る。

それを隙を見て槍投げのように投擲する。

「っお！」

棒状のそれは空気抵抗がないため、風壁では防ぎにくい。防ぐのなら風刃の類で撃ち落すしかない。

だが、棒は当てるのは難しい対象物だ。

防ぐよりむしろ避ける方が早い。

回避のためにできた隙を利用して鈴絽は一気に距離を縮めようとする。

「させるか！」

柏はすぐさま風刃による攻撃を開始する。

しかし鈴絽の手元にはまだ鉄棒が3つ残っていた。

その内短い2つを同時に投擲、風の攻撃を防ぐ。
その間に距離は近距離にまで縮まった。
この距離では攻撃は意味がないと悟った柏は無作為の暴風を起こす。最終防御の暴風壁だ。
「甘いっての！さっき見せてやったろうが、風を受けない方法をよ！」
鈴絽は足を床に突き刺して風を受け止め。最後の長めの鉄棒をやはり槍のように突き出した。
それは一直線に胸元のペンダントに向かっている。
「なめんなぁ！」
柏は棒が柔らかいペンダント本体に触れる前に風でそれを浮かしてずらした。
「なっ！馬鹿っ！」
その行為に驚いた鈴絽の一言。
「えっ？」
柏がその声に反応した時には既に遅かった。
ゲル状の衝撃吸収素材製のペンダントによって吸収されるはずの衝撃が残ったまま、棒が柏のみぞおちに突き刺さった。
「っっぽっ！！」
肺から空気が奇妙な音を出して抜け、柏はうずくまる。
とりあえずペンダントを破壊して鈴絽は呆れたように言った。
「お前、結構抜けてるなぁ・・・」
それに対する反論は返ってこない。
というか、それどころではない。

／

3階での戦闘が一段落したことによって第一中学の校内勢力図は書き換えられた。
強敵であった朝風柏の敗退、チームの崩壊で3階には誰もいない。

今まで居を構えていたチームがいなくなったのだから、教室は改めて使えるようになった。
自分達の取っていた場所が気に入っていなかったチームがその空白を埋めるように3階に移動し、何とか傷の少なかった部屋に移動したりと位置関係も変化していく。
廊下は静けさを取り戻し、チーム同士はまた牽制し始めた。

「最初からこうすればよかったんだ・・・」
疲労した声。矢崎聡一がじっとりとした風に掌に乗せた徊視子蜘蛛に目をやる。
その目には覗き込むようにしている自分の顔が映っている。
「移動してくれる対称に移せば視点を動かして周りを見回れる。・・・・もっと早く気付けよ」
四十万隆が息を吐いて机に置いてあったスポーツドリンクを一口飲んだ。水分は浪費できない大切な資源だ。
「徊視子蜘蛛は生徒の様子を映すために徘徊してるからな。なんでこんな便利な方法を考え付かなかったんだ聡一」
若内楚々絽がそれに続き、ちくちくと聡一を責める。
「織神が人間胃カメラだなんて言わなかったら気付きもしなかったよ。
さて、俺が視覚を移していられるのは1回1時間が限度だ。それまでにとっとと周りの状況を把握してしまおう」
そう言うと、聡一は徊視子蜘蛛を教室の窓から廊下へと放り投げた。

ついに、やっと、1-Bの活動が始まる。

第１２話－　複数班。－Ｆｉｇｈｔ－（後書き）

テーマは複数班なのに、最初はどう考えても葉月の独壇場でした。
バトロワ編は全てタイトルに『はん』と読む漢字を、『ｔ』で終わる英語をと考えていますができなかったら恥ずかしいですね。
そういうのを合わせるのが好きなんです。

この話では名前が出ている者、出ていない物合わせて結構な数の生徒が出ている気がします。前の話でもいましたけどね。
名前があろうが基本的に１回きりのキャラクター達です。
名前は結構適当で、その場の思いつきなので名前があろうが再登場は未定。
気に入ったキャラクターがあれば評価やメッセージで教えてください。
出るかも。

何となくやってみたかった兄姉対決。クラスメートの兄や姉が実は・・・というアレ。

朝風柏。朝風椎。　名前の由来はブナ科の植物。
若内鈴絽。若内楚々絽。　名前の由来は女らしさをあらわす言葉＋絽。
なのに、男らしいという隠れ矛盾な設定でした。
言わないと絶対分からないですが。

次は第一中学以外の学校に目を向けたいと思います。
では、

第１３話－　愉快犯。－Ｃｏｎｆｒｏｎｔ－

ＳＰＳを服用した生徒は中学生活の中で能力に親しみ、高校においてより能力を強化、専攻するという構造が取られる特別学園都市の特徴上、高等学部は学校によって際立ったカラーがあることが主である。

例えば灯秋高校はＰＫの出力系を専攻している高校であるし、その反対に吹冬高校はＥＳＰの感覚系を専攻している所だ。

伸夏高校などは等級向上の発展重視であり、香春高校は日常での能力の可能性を探っている。

異色さで言えば殊樹高校は分類が難しい、あるいは珍しい能力者の吹き溜まり。

そのために能力戦の激しさは中学校より高校の方が多様で過激であるというのは、わざわざ言う必要もないだろう。

高校生にもなると自分の能力を応用して自分なりの戦い方というものを確立しているし、芸なく能力の弾をぶつけるだけといった単調な攻撃以外にもバリエーションを持っている生徒も多い。

出力系専攻の灯秋高校であっても、追尾機能や時限設定、事前設置の技術を会得しているものも少なくないのだ。

つまり、何が言いたいのかというと、開始３時間も立たないうちに灯秋高校の校舎がすでに半壊してようが、もの不思議ではない、ということである。

３階廊下を青白い電気の一閃が突き抜けた。

それはあまりにも太い一撃で、廊下にある諸々の物をなぎ倒す。

ロッカー、傘立て、窓ガラス、燃え盛る炎。

その先、炎海紅泥の兎傘鮮香目指して放たれたその電撃は、しかし彼女に当たることはない。

――ゴガシャンッ

彼女まで１ｍといったところで、いきなり横から爆発が起こり教室の壁だった物がそれを防いだ。

地表半径３５ｋｍを熱溶解し尽くす炎海紅泥は、能力名というよりは技名と言った方が合っている。しかし、彼女自身が蒸発、沸騰、脱水死しかねない技を彼女が使うわけもなく、応用しないという選択肢の結果、彼女が使うのは発火と発破を使った弾丸だ。

「ほうらよ。今度は下階に逃げさせねーぜ？」

彼女の攻撃は前にかざした手から炎弾を放つ形で行う。発破能力も持っている彼女の場合、投擲動作を必要としない。

先の攻撃を階段から下へと飛び降りる形で避けられている鮮香はそれができないように、ありったけの速度と威力を持って相手を撃つ。

階段ごと吹き飛ばすつもりだ。

その惨事を体で体験する羽目になりそうなのは、さっきの一閃を放った紫電雷閃こと筒芽旭（つつがあきら）。電撃ビームな能力の頂点に立つ灯秋高校の主力メンバーであるのだが、

「殺す気か――――！」

鮮香のそれに対抗できる守備法を持っていないため、咄嗟の判断で廊下の割れた窓からダイブ。

その一瞬後に恐怖の炎弾が着弾、手榴弾が爆発したような大規模の破壊が起こり、校舎はさらに崩壊した。

身を投げた旭は爆風に押されて落下速度を増すという最悪の状況下でそれでも鮮香に向けてもう一閃。

廊下の窓による隙間からの雑な一閃を横に飛ぶことで避けた鮮香は窓の方に駆け寄る。

彼女が中庭の空中にて彼を補足した瞬間、いきなり、

筒芽旭の姿が消えた。

「なっ！」

――たんっ

そして次の瞬間に自分の背後での音。
（座標転移（テレポート）かよっ！）
後ろを振り向く余裕もないと考えた鮮香は自分の背後で発破を行い、その勢いで窓から飛び出した。
空中で猫のように身を捩って自分の飛び出した廊下を見てみると、旭ともう1人の姿が。
発破によって怯んだらしく腕で顔を庇っている。
「座標転移（テレポート）の彼女とは恐れ入ったぜ！あははっ、嫌なペアじゃんか！」
小規模の発破を靴の裏で発現させて、擬似的に空を浮く鮮香だが、相手は座標転移者（テレポーター）だ。
怯んだ隙にとっとと逃げたかったのだがそうもいかない。
一瞬で後ろに回り込まれた。
両者共全く滞空能力者ではないのだが、応用すればそれぐらい普通にこなせるレベルの実力者だ。
座標転移者（テレポーター）は旭を後ろから抱きかかえるようにして移動してきていた。
移動手段としての座標転移（テレポート）と攻撃手段としての紫電雷閃（エレクトロキネシス）。相手にしたくない最悪のコンビだ。
何より、
「これでこっちの方が有利だ！覚悟しろ兎傘！」
ということである。
教室では物理的な壁を利用した防御法があったが、開けた空中では防御する障害物がない。
何より相手は死角奪取の特許取得者（スペシャリスト）だ。
攻撃は当たらないし、後ろは取られる。
鮮香は方向と威力を調整しつつ体に発破をかけて、彼らとの位置関係を整えようとする。
旭達はせっかく取った死角を取り戻すべく、さらにテレポートする。

後ろを取ろうと追いかける側、それを阻止しようと逃げる側。
その限りない攻防（ばしょとり）が随分続いた後、やっと両者不毛であると悟った。
（（素直に撃ち合った方が早い！！））
空中での弾幕戦が始まる。

#

――バガンッ
一際大きな発破の後、空中を回転するように無理やり体を吹っ飛ばせて兎傘鮮香は筒芽旭達と距離を取った。もはや旭達はそれを追わない。
体勢が整ったん瞬間、鮮香の周りに蝋燭に点る程度の火の玉が無数に生まれる。
敵が今いる方向へと撃ったところで、相手が座標転移者（テレポーター）では避けられるに決まっているのだ。
ならば、移動する場所がないほど広範囲で攻撃すればいい。
鮮香は周りに作り出した千以上のそれらを花火のように拡散させた。
「愛梨、とりあえず今の位置をキープしてくれ！」
座標転移者（テレポーター）で彼女な銀山愛梨（かなやまあいり）にそう言って、旭は右腕を帯電させて前に突き出す。
その腕から線香花火のようにパチパチと枝を象ったような紫電が起きて、火を払っていった。
そして使っていなかった左腕を伸ばす。能力名どおりの強力な一閃が放たれた。
それを当然発破を利用して避けようとする鮮香だったが、旭は腕を動かすことによって軌道修正、それを許さない。
出続ける電撃の一閃は厄介な攻撃だ。

「ちっ！ほんっとに厄介だ！」
鮮香は発破を繰り返して相手の攻撃から逃れつつ、両手に火球を溜める。それはテニスボール程度の小さなものだ。
まずは右手の方を打ち出し、時間差で左手のも打ち出した。
細かい火の粉を払うために使っている右手、攻撃に使っている左手ともう空いている手はない旭は攻撃している方の手をずらして、その弾を迎撃しようとする。
――ガガンッ
しかし、電撃は1つ目の弾に当たった瞬間、そこで理不尽な力でねじ折られてしまった。
圧縮された発破の種を火で包みこんだ特殊弾。発火と発破の能力を掛け持っている彼女ならではの手製手榴弾だ。もっとも、打ち出しているのを考えるとロケットランチャーというイメージの方が合っている気はしないでもないが・・・。
「っ！」
今まで直線だったものがいきなりそこで直角に曲がった一閃は、形状維持ができなくなったのか霧散した。
さらに、そこへもう1つの炎弾が迫ってくる。
鮮香の方を見ると既にもう2球同じものを手にしていた。
にやり、という嫌な笑み。
「まずい！愛梨！何処でもいいからとにかくテレポートしてくれ！」
「ふえっ、でも火が・・・」
「ちっさいのはいい！本気でヤバイのが来る！避けるしかない！」
一瞬。彼ら2人は消え、鮮香の死角に潜り込む。
移動した瞬間、周りを漂っていた火の粉がジャージに穴を開けたが、それを気にする余裕などはそもそも存在しない。
旭の両手には一閃を放つために溜められた電気。
――ギキキイィィィ――！
避けること許さない、理不尽ほどに速い2つ電気の光線にしかし鮮香は笑って応える。

先ほど用意しておいた火球を持つ両手を攻撃の方へとかざした。
その2つが重なるほど接近した瞬間を見逃さず、1つの火球で一気にそれらを迎撃する。
二閃は彼女の前で開くように軌道を折られ無残に散った。
弾数が幾らあろうと、自分を狙っている限り弾はお互いに接近してしまうという制約がある。ならば、素直に相手の弾数に合わせてやる必要はない。
一撃でも当たれば即昏倒しかねない攻撃を前に、モノを節約できるだけの余裕が強者にはある。
その反対に、とにかく鮮香の手にある凶弾を消費させようと考えていた旭は思惑が外れたことに焦る。
攻撃が無効化された隙に、鮮香はもう一方に残った火球を打ち出した。
「愛梨！」
「うんっ！」
すぐさまテレポートで座標を転移する彼ら。
だが、それを何時までも許す鮮香ではない。
この程度の火で足止めにならないのなら、もっとも大きなものを用意すればいい。
転移した瞬間に旭と愛梨が見たのは、前にばら撒かれた火より大きく、丸い火球が彼女の周りに出現している様だった。
さすがにこれは無視できない。
火の粉ほどのモノであればジャージが溶ける程度と割り切っていられたが、次の弾幕は本格的に避けなくては痛い目に遭う。
しかも彼女は恐ろしい爆弾を仕掛けていた。
「なぁ、どれが本物だろうな？」
そう言って手をひらひらと振る鮮香。笑顔が怖い。
彼女が言外に言っていることに気付いた旭が改めてまだ彼女の周りに集約している火球を見る。
それはテニスボールほどの大きさをしているのだ。

（この中にさっきの凶弾が混じっている――――――！？）

強者はいつでもどこでも遊び心を忘れない。

恐怖の弾幕が放たれた。

＃

灯秋高校には3人の強豪がいる。

炎海紅泥、兎傘鮮香（とがさあざか）。

紫電雷閃、筒芽旭（つつがあきら）。

圧搾念力、綿吊醐楓（わたつりごふう）。

そのどれもが3等級の能力者であり、正真正銘の実力者だ。

威力で言えば圧倒的に鮮香が秀でているが、繊細さにおいては旭に才能があり、その2人も敵わない有利性を醐楓は持っている。

鮮香と旭がぶつかり合って、しかし鮮香が優勢なのは単なる相性の問題だ。

元々攻撃向けな攻撃である発火、発破の能力は場所が開けていようがいまいが威力を発揮する。

しかし、日常生活においては電気と電磁を操れる能力の方が受容があるのは言うまでもない。

そしてその2人も念力の特異性（はんしゃ）の前では苦戦を強いられるのだ。

そんな3人がいきなりぶつかり合えば周囲に被害は必至であり、他の生徒にとっては迷惑極まりない自体であるが、さらに迷惑なことに旭は分が悪いと分かっていながら鮮香に攻撃を仕掛けるという要らない挑戦者（チャレンジャー）精神の持ち主である。

不幸中の幸い、一番面倒臭い醐楓が最初の方でリタイアしたのだが、それでも被害は尋常ではない。

屋上にある2つの給水タンクが炎弾を受けて溜めてあった水を撒

き散らした。
もはやただ避けるのは無理だと諦めた旭が周りを容赦なく囲む火球を迎撃しようと両手からそれぞれ最大出力の一閃を放出する。
鮮香本体に当てるのではなく、周りの火だけを狙うそれは、容赦なく中庭という空間を越えて、先にある校舎を破壊していった。
その厄介な動く線状の電撃は1つの火球に当たると同時にランダムに折り曲げられ、中庭に置かれていた校長の銅像を吹っ飛ばしてかき消える。
鮮香は旭のそんな弾幕の清掃作業中の彼らに向かって幾つもの大型炎弾を撃ち出す。
旭はそれら容赦ない攻撃を辛うじて迎撃してできたスペースにテレポートすることで回避するという危ない綱渡りでやり過ごす。
「ほら、もうもたねーぜ。どうするのかなー?」
どんなに迎撃したところで、空中に一定の速さを持って拡散するように漂う火球はすぐにその空きを埋めてしまう。
それに鮮香が両手の攻撃と同時進行の形で撒き散らすための火球を絶えず作り出しているので数自体が減らない。
しかしだからと言って、攻撃に転じてみてもその間火球を食らう羽目になるし、勝敗はあくまでペンダントによるもの。ペンダントは能力で作られた物質に弱く作られている・・・。
無防備に体を晒すのは難しい。
旭は前にランダムに広がる恨めしい弾幕に目をやった。
(兎傘のことだ。無作為に漂ってるように見えて、保険で自分の前にはあの弾を1つ置いてるに違いない・・・・・・)
それが分かっていたところでそれを突破する方法は――――
「・・・あるな・・・・・・というか、何で今まで気付かなかった?うわー、俺って馬鹿だ・・・」
「ちょっと、旭ちゃん!策があるなら自己嫌悪してないでさっさと!私のジャージ穴だらけなんだからぁ!!」
それはそれで見てみたいなどと、後ろから抱きしめられているた

め全く見ることができない彼は心底思いつつ、両手の攻撃を止めることなく別の所に意識を集中する。

意識の対象は自分の周りにある空間。自分の体から離れている場所というのは出力系能力者にとって出力しにくいものなのだが、彼は高位の能力者だ。

紫電を散らす電気玉を作り出した。

考えてみれば、向こうがやったように自分も弾幕を張ればよかったのだ。

火は元々燃え続けるものなのだが、電気はそうはいかず、纏まった状態で留めておくのは難しい。紫電雷閃の下の能力に当たる紫電雑閃は一閃を遠くへ打ち出すほど纏まりを失って霧散してしまうが故に下位能力であり、さきほど旭の一閃が折られてかき消されたのも制御が利かなくなったことによる。

だから攻撃手段が発火能力者とはかなり異なり、ビーム状に打ち出すのが一般的だ。彼の能力名も紫電雷閃、電撃の一閃を主な攻撃手段としている。

だがそれは、もっとも効率のいい、やりやすい方法だからであって、無数の電撃を一束に集約（せいぎょ）できる彼にとってはさほどの意味を持たない。

自分の能力名と発電能力者（エレクトロキネシス）という概念に縛られて全く盲目していたとしか言いようがない。

先ほどから自分達が苦戦を強いられている相手の攻撃をその目で、体で味わいながら同じことが思いつかないのだから。

（こちらの方が制御が難しいとはいえ、できなくはない！）

電撃の弾幕がばら撒かれた。

こうなれば戦況は大きく変わる。

火と違い電撃を食らえば意識を持っていかれかねない。当たればまずいのは鮮香の方になった。

その上で旭は最初の小さな火球を打ち落とすために使っていたタイプの枝上の紫電を放つ。

それは少しずつ規模を増していった。
バチバチと枝の形を変える電撃は、火球を打ち落としていく。
しかし、本当の狙いは鮮香自身だ。大きくなった枝はその末端が彼女に届くほど長い。
一閃と違って、複数同時攻撃の形にあるこの攻撃方法にはあの手榴弾は効果が薄いだろう。
瞬時に座標（ばしょ）を変えれない彼女には逃げ場がない。
彼はこれで詰（チェックメイト）みだと確信した。
「これで形勢逆転だぜ兎傘！どうするのかな？」
挑発の仕返しをする旭。
だが、だからこそ、鮮香は笑った。
その唇が動く。
もはや遠慮なしだ、と。

その瞬間、火球も電撃も覆い尽くす理不尽な火炎が中庭の空間に広がった。

球状もなさず、逃げる隙間すら与えない燃やし尽くすという攻撃。
保険の保険として隠していた奥の手だ。
「愛梨――――――！！！」
旭と愛梨の取れる手段は退避しかなかった。
当たる瞬間テレポートする。今度は少し位置をずらすようなものではなく、逃げるための移動だ。
中庭から2人の姿は消えた。
それでも、鮮香は逃がすつもりはない。
彼女は知っている。一昨年、去年の経験から知っている。旭が相性の悪いことを知りつつも彼女に挑戦する変わり者であり、このまま逃げおおせるなどとするわけがないことを。
……まだ近くにいる。
だから彼女は自分の学校の校舎を溶かした。

右端から、能力名の炎海紅泥に相応しい技をもって、高熱化してコンクリートを溶解させる。
彼女の攻撃によって崩壊どころか跡形も残りえないだろう校舎。その哀れな建物が3分の2ほど赤黒く溶けた辺りで、彼女の後ろで黒い影が動いた。
旭だ。愛梨はいない。
彼女の座標転移（テレポート）で飛ばしてもらったのだろう。
彼女がいない状態ではこの後もう落ちるしかない。背水の陣である。
もう体力的にきつい旭はこの攻撃に全てを賭ける。
そのため、今まで以上に危険な一撃に愛梨を巻き込まないように1人で飛び込んできたのだ。
鮮香もその一撃に応えるために、既に右手に業火球を用意していた。
そもそも即急に彼を炙り出したのは彼女ももう限界だったからだ。
今までずっと滞空するために発破し続けていたために、運動靴は既に靴底がなくなっている。回避のために体を移動させるにあたって腰やら腕やらにも発破を使ったのだが、そこも青あざになっている。
これ以上の滞空は無理だったのだ。
地上戦に持ち越せばよいことなのだが、彼とは真正面からぶつかりたい。
だからこれは最後のチャンス。
旭は本来一束に纏める電気の一閃をわざと纏めないことでの複数攻撃。近距離だからこそできる荒業で。
鮮香は右手に溜めた火炎と圧縮された発破能力を打ち出すのではなく、直接相手の体に叩きつけるというやはり近距離だからできる荒業で。
激突した。

香春高校は実用性・応用力を伸ばすことに重点を置いた校風を持つ、日常生活に役立つ能力の使用法を日々研究し、さり気なく、何気なく能力を活用しようという学校だ。

威力や派手さこそないが、能力者達にとって最もネックである『能力を使う機会がない』という点を改善しようとしている所であるため、需要は結構あるのだが・・・。

バトルロワイヤルなどという非日常は彼らにとって縁遠いものであって、苦手な分野だ。

競技が開始した後、結局なかなか動き出せない彼らは仲良く、自分達の教室で相手の出方を伺い続けるというどうしようもない状態に陥っていた。

そこに来たのが灯秋高校の連中である。

よりにもよってアドバンテージがある彼らが何故いきなり香春高校にやってきたかというと、競技開始早々危ない2人が衝突したせいで皆して校舎から締め出されたからだ。

彼らは元々校舎に長居はできないと考えていたのと、お互いアドバンテージがあるということを考慮して少なくても数が減るまで敵対しないと決めていた。

せっかく手に入れた有利性を自分達の間で消費するほど馬鹿なことはない。後半までは協力して一気に他の生徒の数を減らそうと考えた。

そうしてできたのが学級学年を超えた巨大チームである。

その数と攻撃性を生かし、彼らは学校ごと一気に攻め込むという強行手段に出ることにし、それの犠牲になったのが香春高校。

容赦なしの窓から、校内からの攻撃に彼らは成すすべなく殲滅させられていった。

しかし、それでも最後まで抵抗した生徒達もいたわけで。

／

「もうすぐ！この学校は乗っ取られる！」
予知能力者である平良筑紫（たいらつくし）が教壇の上に立ってそう宣言した。
「もうなんていうか！すっげぇー人数が攻めてくんの！」
『恐怖の大魔王が振ってくるＺＥ☆』的なテンションで熱弁を振るう彼だが、他のメンバーの反応は冷たい。
「土筆（つくし）。それでどうしろと？俺達の場合は外に出たらすぐにお陀仏だろうし、だからこそこうやって誰か来るまで教室でまったりとしてるわけだが。
他の生徒がもうすぐ来る？そりゃあそうだろ。点数稼ぎにこの学校はもってこいだからな」
このクラスの学級委員長はそんな調子だ。
ホットプレートでクレープを焼いて皆に配っている。
ありがとう、とそれを受け取る副委員長。中身はバナナとチョコ、クリームにイチゴ。
その隣にたこ焼きを作る保健委員、またその隣にたい焼きを作る体育委員がいる。
教室の中はもはや単なるお楽しみ会だ。
「皆悔しくないの！せっかくのお祭りには違いないのに！もっと積極的に参加しようよ！」
「出店としてか？もうすぐ昼だからな。ウケるだろうが――――」
そこで教壇に立っても天井に手が届かないほど小さく、幼顔な彼の瞳に涙が滲んでいることに気付いた委員長はうっ、と唸り、息を吐いた。
「何か案があるのなら付き合ってもいいけどな。難しいだろ・・・・・」
そう言って周りを見回す。
そこにあるのは、商業用食材ばかりだ。
「・・・ふむ」

#

一斉に窓が割れ、光が教室に飛び込んできた。
火がカーテンに移り、紫電が散って蛍光灯が割れ、水が叩きつけられる。
生徒の悲鳴と騒音が響く中、彼らは動き出した。
侵攻が始まると考えられる1階ではなく3階の職員室に居を移していた彼らは、それぞれ役割分担してそれぞれ悪あがきという名の作戦を開始する。
「蕗の薹、制御は任せるぞ！土筆は左、俺は右の階段だ！」
副委員長の藤原蕗にこの計画の肝を任せ、走る第一部隊。
彼らの目的地はすぐそこの下階に続く階段だ。
しかし、そこに着いた時には既に敵が上がってこようとしているところだった。
「ちっ！食らえや！」
仕方なく作戦の重要なキーであるそれを投げつける委員長。
それは自分に向けて炎弾を放とうとしている1人に当たった。
当たったものの方は白い中身をぶちまける。大量に用意しておいた小麦粉だ。
彼らがそれに怯んだ隙にもう3、4袋同じように投げつけてやる。
これで量としては十分だと判断した氷野明次は、舌を出して彼らを挑発する。
「っ、てめぇ！」
粉を顔面に食らった1人が易々と挑発に乗った。
手を前に突き出す。
「！馬鹿っ、やめろ！」
気付いた見方の声は間に合わず、
粉塵爆発が起きた。
相手にまずは自爆してもらうために、能力を使わせるために標的

として彼らから見える位置に立たなければならなかった彼は、爆発する直前ギリギリで廊下を横に跳び階段から距離を取った。
「よっしゃぁあ――！」
おかしなテンションのせいで受身もできない下手な回避行動で思いっきり肘を打ったが、そんなことを気にしていられる場面でもないのですぐさま立ち上がって、廊下の中央辺りに位置する職員室の扉の中へと飛び込む。
少しして筑紫も慌てて入ってくる。ジャージがボロボロだ。
「これで第一段階終了・・・だ。さぁて、悪あがきといきますか」
捨て身の彼らは相手が動くのを待つことにした。積極的に引き篭もっている身分なので相手が来てくれないと何もできない。
さて、3階で大きな爆音が2回響いたことと目撃者の話によって、粉塵爆発を誘発させられたことはすぐさま校舎中の灯秋高校生徒の知るところになる。
威力自体は大したことなかったらしいが、巻き込まれた仲間はリタイアになったという事実から彼らは3階の制圧に重点を置く必要があると認識した。
すぐさま編成が組まれ、本格的に3階は攻め入られることになる。
しかし今度はすんなりと3階に足を踏み入れられた彼らが職員室で見た光景は異様なモノだった。

白い。そこら中白くて何も見えない。

粉だ。小麦粉が空気中に高密度で漂っている。
先の爆発のことが頭を過ぎった。
これでは能力は使えない。
視界も悪くて相手がどこにいるのかも分からない。
呆然としている彼らの顔に何かベトベトしたものがかけられた。
「クリームはいかが♪」

左手にクリームの袋を持ち、右手は握り拳を作った体勢で俺らは、能力無視の完全な肉弾戦を仕掛ける。

俺こと氷野明次はこれでも空手経験者だし、あの一見か弱そうに見える土筆だって少林寺をやっている。

身体能力では劣っているつもりはない。

料理用にと粉モノはたくさん用意していたし、女子にはフライパンやらタマゴやら、それからバナナの皮やらがある。

だからこそ、どうしても能力を封じたかったのだが、いきなり職員室に粉を蔓延させても、その意味に気付かない馬鹿が引火させる恐れがあった。

階段で先に爆発を起こさせたのはそのためでもある。

そして作戦は成功した。

彼らは能力は使えず、俺らと違って水中眼鏡（ゴーグル）もつけていない。

こうなれば、後はすったもんだの戦いをするだけ。

香春高校最後の反撃だ。どうせなら楽しもう。

クリームを顔に吹っかけて、無防備にかけてあるペンダントを握りつぶす。

そのままそいつを突き飛ばしてドアから入ろうとしていた奴らを将棋倒しに。

動けないのをいいことに片っ端からリタイアにさせていく。

職員室は普通の教室よりも大きく、業務机などの障害物もあって戦いやすいのだが、出入り口が3箇所あるのが難点でもある。

その出入り口はチームメイトで分けて対処。

どうせそう長くは持たないが、そのために事前に業務机などをわざと迷路状に配置してあり、数にものを言わせた戦いがしにくくするという保険も用意してある。

どこまでやれるか分からないが最後までやってやろうと思う。

と、

／

「押し込めぇ――！」
1人ずつ入るのでは意味がないと悟ったらしい。力任せに中に進入するつもりだ。
「ちぃっ！」
1人2人では力で勝てるわけもない。
仕方なく退いて、代わりに残っていたクリームを床に吹きつけた。
これだけでは足りない。
ストックとしておいて置いた替えのクリームの袋をチューブ部分を破り、袋ごと床に叩きつける。足で踏みつけ中身を押し出した。
よし。後は逃走。それももうダッシュだ。
机でできた迷路の角を曲がった辺りで、
「ぐぇぇぇえええっ！！」
悲鳴が聞こえた。
それから酷く痛そうな音。
ベトベトヌルヌルの生クリーム。床に塗ったらさぞ滑ることだろう。
可哀想に。アーメン。
しかしこれで俺の手元にあるクリームはなくなってしまった。
次は・・・・・タマゴの白身でもぶちまけるかな。
実はまだ結構なバリエーションがあったりするのだが。

／

悪夢だ。悪夢としか思えない。
こういった戦闘向けの訓練をあまりやっていない、しかもやる気のあまりない高校だからと、手始めにやったのがこの様だ。
1、2階と犠牲を出しつつもそれなりに戦果を上げていた僕達灯秋高校の面々は3階で思っていた以上の抵抗を受けることになってしまった。
小麦粉万歳な職員室、クリーム天国な床、挙句に投げつけられる

数々の食品。
これ、生き残ってもジャージがすごいことになってる気がするんだけど。
替えの服、どうしよう。
まぁ、正直その前に、生き残れるかどうか。
さて、とにかくこの状況は打開しなければならない。
能力が使えれば彼らは強い相手ではないはずだ。能力が使えないのはこの空気中に漂う粉のせい。ならば、とっとと除去すればいい。
できるだけ戦闘から離れてこそこそと窓側まで移動してきていた僕は、ふぅっと息を吐いた。
これで戦況はがらりと変わる。
まず1つ目の窓を開けた。割った方がいいのだけど、気付かれると多くの窓を開けられなくなる。
さて、2つ目完了、・・・・・・3つ目、完了。
そこで、
「おい！窓を開けてる奴がいるぞ！」
ついに見つかってしまったらしく、こちらに向かって走ってくる人影が見えた。
ちっ、さすがに全部とはいかないか！
「皆、換気すれば能力も使える！窓を割るんだ！」
それだけ言って僕は戦闘の方に集中することにする。

／

氷野明次が窓を開けていた敵を処分した頃には、他の生徒が全ての窓を割ってしまっていた。
これさえ何とかすれば状況を変えられると自分を犠牲にしたり、守っている連中の中に飛び込んだりと壮絶なやり取りの成果だ。
これによって完全に外と内の空気が接することとなった。
「よし！後は小麦粉が外に流れれば！」

苦戦を強いられていた彼らに一筋の光。
だが、粉は一向に外に出ていこうとしない。
「な、んで・・・っ！」
「・・・くそっ！やられた！相手の誰かが空調制御の能力者だ！」
彼らがあたかも窓を割られまいと振舞ったのは、より敵を撃破しやすくしようという1つの作戦だったのだ。
それも見事に成功した。
この部屋の空調はずっと前から副委員長こと藤原蕗が制御していたため、開けられたドアからさえ外に漏れることはなかったのである。
「さてさて、策は出尽くした。これでもうボコってボコられるだけだな」
元々逃げ道はない。これで奇策も尽きた。これ以上彼らを翻弄する手立てはなく、生き残る望みなどありはしない。
明次が腕をポキポキ鳴らした。

と、そこで、いきなり爆音が響いた。

その突然すぎる轟音に、戦うことを忘れて咄嗟に振り向く彼ら。
音の響いた窓の外を見つめる。
相変わらず粉のせいで視界が悪いが、とにかく外を見つめる。
そこに何もないと認識した彼らの視界に、しかし上から何かが降ってきた。
それはちょうど3階の高さで停滞し続けている。
影が揺れるたびに、パンッだのパコンッだのと鉄を殴りつけるような音がする。
それは浮遊技術に応用した発破によるものだ。生身に使うとダメージが来るので、鉄板を下に敷いてその上に足を組んで座っている。
すでにジャージはボロボロで、所々溶けて穴が開いていた。その赤いジャージには灯秋高校の校章が取り付けられている。

髪を揺らし、皮肉った笑みを浮かべるその姿は、
自分を打ち上げ花火のように打ち上げて学校間の長距離を空中移動するその出鱈目ぶりは、
兎傘鮮香以外の何者でもない。
「ははぁーん。やっぱりここに居たか。駄目じゃん、弱い者苛めはよ。その曲がった根性を叩き直してやるぜ」
などと彼女はこれから同校生苛(よわいもの)めをすると宣言(のたまっ)した。
つまり、どういうことかといえば、

恐怖の大魔王が振ってきたＺＥ☆

ということだ。

第１３話－　愉快犯。－Ｃｏｎｆｒｏｎｔ－（後書き）

タイトルは『愉快犯＝兎傘鮮香』でサブタイトルは『Ｃｏｎｆｒｏｎｔ＝立ち向かう』です。
葉月たちの第一中学校以外の学校の様子を描こうと思ったら、大魔王の独壇場に。
初登場当時は再登場の予定は全くなかった炎海紅泥。
名前までついちゃって、何でか大活躍。

結局この話も3日で書き上げました。
戦闘描写難しい・・・。
特に真正面からぶつかっていく連中は扱いづらいですね。
奇襲とかは結構スラスラ書けるのに。

あ、最近書いてませんでしたが、感想等お待ちしております。

第１４話ー　拡散班。ーＳｉｇｎｐｏｓｔー

蝉の声は鳴り止まず、太陽はより高みを目指す。
日差しは燦々と降り注ぎ、熱を帯びた空気がゆっくりと流れていく。
静けさを取り戻した建物の中、その密度は少しずつ薄れ、激しかった淘汰は一時的な休止を迎えていた。
３階部分は形こそ保ってはいるものの、その中は嵐があったかのようにぐちゃぐちゃにかき混ぜられている。
幸運にも激しい戦闘のなかった1、2階はまだ何チームかが睨み合っている状態だ。
しかし、生徒は校内にばかりいるものでもない。
戦闘の起こりやすい場所は確かに校内だが、それを分かっていてわざわざその中に入ろうとするものは実は少なく、学園内の大食堂や広場など屋外で行動しているチームや個人の方がはるかに多いのである。
なので生徒達は競技開始直後、校内に入ってくる生徒の人数を目算した上で屋内か屋外かを選ぶことが最初の駆け引きとなってくるのだが、そんなことは入ってきたばかりの1年坊はご存じない。
だけれども、実際どちらの方が正しい選択だったのだろうか？
屋内は狭いが故に人の密度が高く戦闘が起こりやすい。その上連鎖して大規模な乱闘になる可能性が高い。
対して、屋外は戦闘勃発の可能性がある程度落ちるものの、低いとは言えない。何よりずっと動き続けないといけないというリスクもある。
この夏、それもこの天気では野外活動は著しい体力の低下を招くし、水の持ち込みには制限がある上、日傘は視界を遮るため敵に気付きにくくなる。
それら利点と不利点を天秤をかけた上で自分達の能力（とくせい）を生かしや

すい戦闘スタイルを選ばなければならない。
選択を間違えれば即退場、さらに運が悪くても即退場、さらにさらに場慣れしていなくても即退場。
微妙な要因が勝敗を分けるかなりシビアな競技バトルロワイアル。
開始から3時間を過ぎ、ついにお昼時。昼食時間（ランチタイム）に突入した。

／

「あーははっ、いいねぇ！よくもまぁこんだけ食いもん見つけたな！」
豪快に笑う長髪の上級生。3年生で、しかも楚々絽・・・ちゃんのお姉さんらしい。
「おっ、しりかげるグミじゃん。貰っていいか？」
「どうぞ」
透明な袋に入った、これまた透明なグミと所々混ざった青や赤のグミのお菓子を上機嫌で口に入れる鈴絽さん。
当然その袋には『食べられません』の文字が入っている。
しかしまぁ、本来お菓子の缶などに入っている乾燥剤（あれ）を模したお菓子を作るとは、ややこしいことこの上ないと思う。
彼女とは食事でもしようと戻ってきた屋上でばったり会ったのだけど、何故か気が合い昼食時間（ランチタイム）限定の停戦協定を結んでいる。
僕だってお昼ぐらいのほほんとしながら食べたいしね。
「けど、3階のあれは貴女の仕業でしたか・・・・・」
「そっちこそ、廊下を歩いてる連中を始末してたんだろ？どうりで今年は他の探索役がいないと思ったよ」
まぁ、1人できる生徒の方が狙いやすいから。
さすがにチームを真正面から潰すのは難しいと思う。
一対一ならそれなりに経験があるのだけど、多数を一気に相手にするのは失敗したら後のないこの競技で試す気にはなれない。
温くならないようにわざわざクーラーボックスの中に入れられて

いたペットボトルを拝借する。
「っぱ・・・いやー、運動した後にこうしてのんびりと食事を取るって言うのもいいですねぇ・・・」
空を仰げば、何処までも澄んだ蒼。給水タンクの上は風も心地よい。
耳を傾ければアブラゼミ、遠くからはクマゼミの鳴き声、高所から見下ろす中庭は青々と茂った緑が目に優しい。
「いいなぁ。全く、最近の奴は風情とか趣きってのが分かってねぇ」
「ですよねぇ・・・」
などと肯きあいつつ、優雅に、といってもお菓子とジュースという組み合わせなのだけど、食事を楽しむ僕達2人。
八目鰻屋さんという名称の原料名筆頭がイカな１０円菓子を齧り、味噌カツ味の串物をつまみ、中に梅ペーストの入った梅味の大玉飴を頬張る。
食べ物はまだまだたくさんある。何せ１５人のお腹を満たすために用意されたものなのだ。
一応取っておこうかなと思ったのだけど、ちょうどお昼だし、これで取りに来なかったらもう来ないだろう思ってありがたく頂いている。

――ドゴァアン！！

次は何にしようかなと選んでいると、いきなりそんな轟音が響いた。
「なっ・・・！」
「うわっ！」
音源の方を見てみると、建物から黒い煙が上がっているのが見える。あの方向は・・・・・香春高校だろうか？
「・・・・・誰か宙に浮いてますね」
鈴絽さんもそっちの方向に目を凝らしている。

「あれは・・・・・・げっ、炎海紅泥か！」
「炎海紅泥・・・確か発火能力のスペシャリストですよね？」
「本名は兎傘鮮香（とがさあざか）な。さっきからモバイルがそいつの名前の入ったメッセージを受信してるだろ？優勝候補だ。
俺らみたいな身体強化系の能力者の天敵だよ。あそこまで火力が強いとまず近づけない」
「・・・あれ？僕、自分の能力言ってませんよね？」
「おいおい、ここからあの距離の人影が見えるって人間業じゃないぜ？」
・・・そうだった。今の視力がデフォルトになってるから、完全に頭から抜けていた。
うわー、失態だ。これから注意しないと。
「くそー、やっぱりあいつはリタイアしないか。ああやって他の学校に出向いてるって事は、もう灯秋（とうしゅう）高校は壊滅したな？」
「この分だと香春高校も駄目ですか？」
「だろうな。けどあそこまで激しくやってんだ、さすがにそろそろ体力が持たんだろうが・・・・・。
俺の経験からして、あいつは大火力でもそれなりに持続して能力が使えるんだが一度休息に入ると長い。そうなると夜になるまで静かになるな」
「となるとその間が勝負ですね」
「あぁ、あいつを潰すならそこだろうな」
「いえ、横槍が入らない内に生徒の数を減らそうかな、と」
「なるほどな。だが、あいつは後回しにできるほど侮れる相手じゃないぜ」
「うーん。でもそっちは鈴絽さんが何とかするでしょう？」
そう言うと、彼女はにぃっと笑った。
「そう来るか。まぁ、確かに俺はその機会を逃したくないしな。自分で行く必要はない、と」
「彼女とやり合って体力を減らし過ぎると残っている連中を相手に

するのが難しくなるでしょ?そっちの掃除を僕が請け負うってことで」

どちらかとともなく笑い合う。

「さて、ランチは終わりだ。お互いの健闘を祈るよ」

／

徘徊し監視する子蜘蛛こと徊視子蜘蛛は、この競技において幾つかの役割に分かれている。

常に生徒、もしくはチームを映し出すもの。

巡回して廊下の様子を映し出すもの。

ＧＴＳによる指令を受けて特定の場所を映し出すもの。

だから、巡回役の徊視子蜘蛛に付けた矢崎聡一（やざきそういち）の視覚からは多くの情報を得ることができた。

１‐Ｂの教室、その黒板には手書きの構内図が描かれている。

白で枠を、青で徊視子蜘蛛の移動ルートを、赤で敵を示してある図。細川美樹（ほそかわみき）作だ。彼女は指が器用で裁縫から作図など細々した作業が得意としている。

「戦闘準備の方は整ったわよね?耳栓は忘れてない?バケツは?１人１つずつちゃんとある?」

「オッケーだよ、しいっち。ちゃんと用意できてる。所で狙うのは１‐Ｄの連中でいいの?」

「近いし、特殊な能力者がいなそうだしな。この作戦はうまくいったら、そう破られないと思うぜ?」

四十万隆（しじまたか）がそう言って、手の紙袋をぽんぽんと飛ばした。

それは空気を入れられた上で口を閉じられた紙風船のような代物だ。

「聡一は引き続き情報収集を頼むよ」

「ああ、能力が切れるまでは何とかやっとく。

あっ、もし廊下で子蜘蛛を見つけたら持ち帰ってくれよ。次のに

使うから」

了解、と手を振り合って彼らは行動を開始した。

1‐Bの攻撃班は隆、西谷絵梨（にしたにえり）、飛騨真幸（ひだまさき）。探知班は教室待機の聡一と、長谷川亜子（はせがわあこ）、若内楚々絽（わかうちそぞろ）で、攻撃部隊と同行して周りに敵がいないかをチェックしたり、敵の不意を突くタイミングを計る役目を受け持っている。

亜子の残留思念読取（サイコメトリー）でその廊下に最近誰が通ったのかを調べ、楚々絽の視界傍受で近くの敵を探り、敵の視点からチャンスを伺うというものだ。

その他に補充要員として浅夢予知（くもりゆめ）の布衣菜誉（ふいなほまれ）に原始素能（ホワイトノート）の美樹、そして天空泳法（スカイ・ウォーター）の深柄科（みがらしな）がいる。天空泳法（スカイ・ウォーター）は戦闘離脱の役割だ。

彼らは聡一の力によって得られた情報から、1‐Dの教室にそのまま1‐Dの生徒達がいることを突き止めた。

そこで、一度廊下に出た楚々絽が能力を使えるギリギリの範囲まで近づき視界傍受で教室内の様子を把握、自分の教室に戻り状況を整理し、攻撃を仕掛けるかどうか話し合ったのだ。

そうした過程を経て遂に彼らが動き出す。

念には念を入れて、もう一度視界傍受で中を確認、人数や人物が変わっていないことをチェックして、楚々絽は肯いた。

ドアの周りに気取られないように慎重をきして自分達の持ち場に着く攻撃班。引き戸の左側に絵梨、右側に隆、その後ろに真幸という事前に確認しあった配置だ。その後ろにバケツを持った面々がスタンバイしている。

楚々絽が手を上げている。

目をつぶる彼女の視界には自分達とは違って置いておいた食料が持っていかれていない彼らがおいしそうに昼食に勤しんでいる様子が映っていた。

この攻撃が成功すればその食料も手に入れることができる。

フフフ・・・と不気味な笑みを零す楚々絽に周りのクラスメー

トが引き気味になった時、いきなり彼女の顔が引き締まった。
腕が下ろされる。

――ガタァン
大きな音を立てて引き戸が隆によって開けられた。
その音に反応して振り向く1‐Dの彼らはドアの方へと振り向く。
そこに待機していた絵梨が両手をかざした。
発光能力者の彼女の掌から、一瞬だが強力な閃光が放たれ、律儀に振り向いてしまった彼らの網膜を焼いた。
次に出たのは隆だ。
両手に持った自家製の紙風船を発破能力で高圧をかけて破裂させ、
――パァァァアアン
鼓膜を揺さぶる破裂音を響かせる。
視界を潰され、耳の異常で平衡感覚を狂わされた彼らにさらに追い討ちをかけるのが真幸。
彼とその後ろにいたメンバーがバケツの中の水を一斉に教室へ撒く。

入れたばかりの冷たい水が空中で広がった。
それら水は慌てふためいている生徒達に当たる前に、いきなりその運動を変えた。
なだらかな放物線を描いていた水の軌道が弾けるようにかき消され、威力を持って彼らにぶつかる。
広がりを見せた大量の水による叩きつけるような攻撃。真幸の撥水能力によって作られたものだ。
当然足元のおぼつかない彼らは床に伏す形になる。
そこを攻撃班他、補充要員で物理的に押さえ込むのが1‐Bの作戦だ。
「うんどりゃあああ！」
次々にペンダントを潰していく隆。
一応、監視の役割を持っていた楚々絽もいつの間にか参戦して、

倒れた生徒の首にかかっていたペンダントを引き千切っていた。
所要時間5分未満。1‐Bの完全勝利だった。
チームとして成果を得ることができ、昼食となる食料も得ることができたのだ。
「よっしゃぁあああ!!」
隆達は皆でガッツポーズを取った。

／

一方念言の私は念言を相手に伝えることができるものの、その返答を貰うことはできない。
びくびくと廊下を歩き、時には物陰に隠れつつ、ここには誰もいない、あそこは誰かいるっぽいと情報を送り続けていたのだけど、一度は帰った方がいいだろうと思い、チームのいるはずの音楽室に引き返してみた。
そしたら、誰もいないのだ。
何らかの理由で場所の移動を余儀なくされたのだと考えたい。だけど、床にある赤いペイントがここで戦闘があったことを証明している。
まさか全員リタイア・・・とか。
いやいや、そんなことがあるのだろうか?
私のクラスは、バランスのよいチーム編成だったし、3年生だ。1、2年生に遅れは取らないはずだし、3年生にだってそうそう負けない、と思う。
どんなに見直してみても誰もいない教室。
そんな教室でぽつねんと1人で居ると不安が胸に広がってくる。
どうしよう。もしかして今後1人で動かないといけないのだろうか?
下位の念言(テレパシー)である私にはまともな攻撃手段もないし、大体こういったいつ敵に出会うかも分からないような心臓に悪い競技は大の苦

手だし・・・・・と考えていると後ろでドアをずらす音がした。
「ひっ！」
咄嗟に振り向くと、そこには私より小さな女の子。口に棒状のスナック菓子を咥えている。
「ふぃ？」
きょとんとしている姿が可愛いなぁという印象を受ける子で、何故かブルーのジャージを着ていた。ブルーは男子用のはずなんだけど。
完全に固まってしまった私を数刻眺めていた彼女は腕に抱きこんでいたお菓子を1つ差し出す。
「お1ついかが？」

素直に貰ったスナック菓子を口に運びつつ、自分の置かれた状況を彼女に話してみた。
彼女はピアノの上に足を組んで座りその話を聞いてくれたのだけど、ちゃんと理解しようとしてくれているのかはかなり怪しい。
「つまり、仲間は行方不明で最悪自分の知らない内にリタイア。残った自分は一方念言（テレパシー）の能力者で戦闘は無理ってこと？」
そんな私の心内を知ってか知らずか確認を取る彼女。口にさっき食べていたソース天ぷらの滓が付いている。
というかちゃんと聞いてくれててじーんと来た。
「そうなのよ。私の能力じゃ・・・相手からのメッセージを聞くこともできないから、本拠地がこうなってることさえ分からなかったし・・・・・。使えない能力よね」
「うーん、そうかなぁ。馬鹿と鋏は使いようっていうじゃない」
・・・使い方を微妙に間違えてる気がする。そして暗に私の能力は使えないと認めてるよね・・・？
「それ僕に使ってみてよ」
もしかして、何か考えがあるのだろうか？釈然としない気持ちをとりあえず横にやって、彼女に一方念言を使ってみる。

『こういう能力なの』
「ふぅん・・・やっぱりこう・・・・・・響く感じなんだ」
『何か分かった？』
「うん。ねぇ、この念言、もっと強くやってみて」
？いまいち考えが分からないけど、言われた通りに少し力を入れて念言を送った。
「思ったとおり。これなら十分応用できるよ」
「ほんとに！？」
彼女はうん、と肯いた。
「最大出力で相手の脳に何でもいいから念言を送るんだよ。この響く感じなら、相手の動きを止められると思う」
「そっか・・・。その隙に相手のペンダントを壊せばいいんだ・・・・・」
「もちろん、ちゃんと運動神経がよくないと成功する確率は落ちるけど、思考断絶（ブラウザ・クラッシュ）と同じ効果を得られるはずだよ」
「すごいっ！それなら私でも何とかなるかも！」
「元が念言（テレパシー）なら有効範囲もそれなりに広いだろうし、無作為にその攻撃を行って敵のミスを誘発するっていうのもありだよね。上手くいけば敵が減らせるし」
私は思わず彼女の両手を取ってぶんぶん振っていた。
「ありがとうっ！どうお礼をすればいいか！」
「お礼・・・？いやいやいや、いいよ。お礼はそのペンダントで」
・・・・・・、・・・・・・え？
ぐにゅちゃり。そんな音が私の胸元で聞こえてきた。
「にゃ――――――――――！」
「いやぁ、まさかここのチーム、１人取りこぼしてるとは思わなかったよ。
あ、さっきの案は来年挑戦してみてね？」

／

戦果を得て、教室に戻った俺らは副賞のように得たお菓子をチームメイトで分けあっていた。
俺は無難なカツサンドを選び、できるだけ味わおうとゆっくり咀嚼している。
「四十万。次は何処がいいと思う？」
頭使ったなどと言って板チョコを欲した聡一がチョークで黒板をつつきながら問うてくる。
「もう1階にはいないんだっけか？近い所から潰して言った方がいいんじゃねぇ？」
「そう思ったんだけどな。もう昼も過ぎたしそろそろ、外に出た奴が校内に入ってきだすらしい。若内の話じゃあな」
なるほど。外に出て戦闘突入率を下げ、校内の生徒が減った頃合を見計らって定位置を探すのか。
外を歩き続けるのは体力を消耗するだけだし、辺りが暗くなれば動き回るのは難しい。
「と言ってもまだ昼をちょっと過ぎたばっかだぜ？」
「まあな。でも一応考慮すべきだと思ったんだ」
「俺はどのみちこの1階フロアは殲滅しとくべきだと思うぜ。今ならまだ相手も動き出してないしな」
だな、と聡一は言って黒板にマークを付ける。それはさっき倒したD組の次に近いチームだ。
これを食べ終わったら、また楚々紹に頼んで様子を見てきてもらうことになるのだろう。
「お、まだ飲み物残ってんだな」
チームで食することが前提に用意された食料だったので、当然のことながら2リットルのペットボトルで紙コップも用意されている。
それ注いで渡してやる。
「サンキュー」
しかし、開始直後はどうなるかと思ったが、今こうしてみると何

とかやっていける気がする。
懸念されていた葉月の襲来もなく、事前に立てた作戦は大成功を収めたのだ。
これを地道に繰り返していけば、最後の方まで残れるのではないだろうか？
「・・・お、そうだ。１つ試したいことがあるんだよ」
棒付きキャンディーを咥えた楚々絽が手を打ってこっちに近づいてきた。
「なぁ聡一。君が視覚放置を行っている時に私が視界傍受をしたら、その映像が入ってくるんだろうか？」
「・・・あーどうなんだろうな・・・？
視界傍受が視神経が脳に送る映像を傍受してるなら元の視界な気がするけど・・・。もし、俺が見ていると認識している映像を傍受するんなら移した先が見えるんだろうな」
「試してみ――――」
「おっじゃましまーす、っと」
そんな声が俺らの会話を遮った。
ガララとドアが開く音。血の気が引く思いがした。
「お、やっぱりいた。おーい妹よ」
振り向いた先にはいたのは、長髪を白いリボンで雁字搦(がんじがら)めにしたようなヘアスタイルの上級生。
「・・・何で姉様がやって来るんだか・・・・・・」
その上級生の台詞に応えたのは楚々絽だった。
妹・・・姉様・・・姉妹、らしい。
「いやぁ、この学校から出ようと思ったんだが、ちょうどお前の匂いしたからな」
そんなもので見つけられるとは恐ろしい話だ。
そういや葉月も同じようなことを言っていたが・・・。まさか、な？
「出て行くって、積極的に戦闘に勤しむ気なのか姉様は」

楚々絽は呆れ声だ。
「炎海紅泥がそろそろ休眠状態に入りそうだからな。今のうちに引きずり出して叩くつもりだ。今回こそ潰す」
ものすごく物騒な会話が聞こえる。
口調が楚々絽よりも乱雑っぽいのだが、なるほど、この姉あってこの妹ありというやつだ。
この姉妹はよく似ている。
「しかし、すぐにリタイアかと思えばがんばってるんじゃん」
「そりゃあ、まぁ、一時はどうなるかと――――ちょい、何その手のモノは」
ごそごそとジャージのポケットを探っていた姉さんの手には何やら三角錐の物が握られている。
「何ってクラッカーだけど？」
何でクラッカーなんてものを用意しているんだろうか？
いや、そういえば、攻撃作戦で俺が紙風船を破裂させるという案の前に音を鳴らす物としてクラッカーを試してみたような・・・。
結局音が小さすぎるので却下されたものの、幾つか残った分は適当にロッカーに放り込んだはずだ。
何か、すごく、嫌な予感がする。
そんなことを考えている内に、その姉さんはさっさと窓際に移動し、窓を開けた。
――パンッ
乾いた音と共に、火薬の臭いと紙が弾ける。
最近のモノは床を汚さないように紙が本体とくっついていたりするんだが・・・・・じゃない！待て、今の行動はおかしい！
「一体何をしたんですか・・・？」
恐る恐る尋ねてみる。
「ん？いやー、実は、だ。ここに来る前に屋上である人物にランチをご馳走になってな」
屋上、ね。

「1つ頼まれたんだ。もしも、俺の妹を見つけたらこのクラッカーを窓から鳴らしてくれってさ」

・・・・・・・・・・・・。

「好物のしりかげるグミを貰った身としてはまぁ、聞いてやりたいし」

「そのグミ私んだ!!」

絵梨が叫んだ。

その時振舞われたお菓子の出所が分かった気がする。気がするが・・・。

だが、正直それどころではない。

「に、にげっ、逃げないとっ!」

誉がまたパニックに陥り、聡一が飲んでたジュースを噴出した。

楚々絽は姉様の阿呆!と一言言って、1人で逃走を図る。

いやいや待て待て!こういう時こそ団結が大切なんであって・・・!

「こら待て科(しな)ぁ!」

開いた窓から空中へと飛び込む科。さすがは天空泳法(スカイ・ウォーター)だ。空に逃げるつもりらしい。

駄目だ。いきなりの葉月の襲来が目前に迫って皆冷静な判断ができなくなっている。

ドアから委員長でありチームのまとめ役である椎(しい)までもが走り去った。

俺も、もうここに留まるのはまずい。

最後教室をのぞくと、元凶の姉さんがグッドラックなどと言って親指を立てているのが見える。

鬼だ。皮肉にも葉月に似たものをこの人から感じる!

あっけなく、チーム1‐Bは解散と相成った。

第１４話－　拡散班。－Ｓｉｇｎｐｏｓｔ－（後書き）

実質２日で書きました。なのでちょっと何時もより短めです。
逆に言えば一週間で３話ぐらい更新できるという証明とも取れるのですが、無茶は良くないですね。
もー眠たくて眠たくて・・・。

戦闘シーンにまだ慣れません。
どう書き出していいか３日ほど悩んで書いては消し・・・というのを繰り返してました。
ちゃんと決着つけられるかな。

タイトルは『１‐Ｂ、解散。』、サブタイトルは『目印』です。
自分で決めたタイトルのルールが首を閉めてますね。
何なんだ拡散班って。

あ、最近ＨＰをまた作り始めました。
ブログとか更新するとスパムとかが鬱陶しい上、あんまり更新もしないのでＨＰに切り替えようかなという魂胆です。
懐かしさが溢れてきますね。かれこれ３年ほど放置してたので。

そういえば、今、この小説って評価順で『性転換』のジャンルで２６位、『超能力』のジャンルで４１位なんですね。
前見たときより大分高位に表示されるようになって嬉しい限りです。
頻繁に更新しないのであんまり人目につかないのではないかと心配だったので。
なら、２日で更新しろって話ですよね、スミマセン。

では今日はこの辺で。

第１５話－　凶悪犯。－Ｈｕｎｔ－

天空泳法（スカイ・ウォーター）は浮遊系能力の１つだ。
空中に潜るように浮遊する様から名付けられたその能力は、空気より人の比重が軽いかのように人体に浮力を与える。
だから、深柄科（みがらしな）は水面に顔を出そうとするように空に向かって足を動かした。
どれほど俊足の猛獣だろうと空を飛ぶ鳥は狩りえない。
そんな思考から一刻も早く安全圏への脱出を試みようというのだ。
使い慣れていない能力のため、思うようにスピードの上がらない。
コントロールが難しく、横方向にならいつも制御を失い加速して止まれなくなるのだが、縦方向となると暴走すら起こらない。
バタ足で空気をかく動作がもどかしいし、本当に水中にいるように息苦しい。
それでも何とか屋上ほどの高さにまで昇り、あと一息で安全圏だと安息する。
（皆には悪いけど、これで私は襲われない・・・・・）
とりあえず、大きく息を吸い、安静を心がけた。
こうやってずっと空中に浮かんでいるのも、他の能力者に見つかればまずいことぐらいはさすがに予想がつくし、その対策についても考える必要がある。
そのためにもまともな思考を取り戻さないといけない。
ゆっくり、閉じていた目を開いて、彼女は少し白けた視界が元の色を取り戻すのを待った。
その視界に、織神葉月（おりかみはづき）の姿が映っている――――
屋上の柵の上に立ち、科の方へと視線を向けている。
高所において、不安定極まりない足場にいながら、その体がぶれ

ることはない。
ぴたりと磁石のように靴が鉄柵にくっついているという錯覚すら起こしそうだ。
咄嗟。科は縦ではなく横に体を移動させる。
昇ろうとした時のものとは似つかない高速。まるで引力か磁力に引き寄せられるかのように、葉月に視線を向けたまま後ろ向きに退避しようとする。
そこはどこの学校にもあるような校舎と校舎の壁で囲われた中庭の空間だ。
ここなら葉月の追撃もかわせる、――――わけもない。
環境に対応するために生物は進化するのであり、彼女の能力は超越進化体、無定向進化態と呼ばれることもあるような進化能力だ。
『無いのなら創ってしまえ』の精神の下、何でもかんでも自分の体内で創り得る能力者なのだ。
しかし、この場合別に空を飛ぶ必要はない。
葉月は微笑んで事前に用意しておいた黒い物体を投げつけた。謎の物体は空中で網目状に広がっていく。
「ちょっ！投網――――――！！！」
それは髪で編みこまれた丈夫な網。
空中を泳ぐ魚は漁法で捕らえるべし。

クラッカーが恐怖の時間を伝えた早々、逃避行動一番乗りの罰を受けて深柄科はあっさり捕縛された。

／

僕はとにかく標的になるまいと走った。
目的地などないし、とにかく場所が割れているあの教室から逃げるので必死だ。
織神のことだ、クラッカーの音源と火薬の臭いで位置ぐらい確認

できる。
・・・・・あれ？そもそも１‐Ｂにいることぐらい織神だって分かっているはずではなかったっけ？
いや、荷物を取られたあの状態でまだ教室にいるとは思わなかった？屋上には来ないと踏んでやる気になったのだろうか？
だとしても彼女なら僕達を追跡する手立ては幾らでもあるはずだ。と、すると、あのクラッカーは・・・・・・
「合図か・・・・・・」
僕達を狙い始めるというスイッチ。
なるほど。今まで襲撃して来なかったのは機会を逸していたからしい。
向こうも色々とあったか、あるいは本気で屋上に来るのを待っていたために宣言通りに攻撃を仕掛けるには微妙な時間になってしまっていたのだろう。
と、廊下隅の清掃具ロッカーが目に入る。１つでワンフロア分の器具を収納するそれは少し大きめだ。
あまり外に姿を晒しておくのはまずい。
ロッカーの中に体を押し込める。
よし。誰にも気付かれてはいない。
ジャージのポケットを探って、徊視子蜘蛛を取り出した。唯一チームで成功した襲撃の帰りに真幸（まさき）が取ってきたものだ。
それに視覚を移し、扉を少し開けて隙間からそれを放り投げる。
しばらくこうやって様子を見させてもらおう。

／

自分が走っているという感覚は感じるものの、目くるめく替わる視界に自分が今どこを走っているのか分からない。
若内楚々紹（わかうちそぞろ）は視界傍受を繰り返し、近くにいる生徒の視界を片っ端から洗っていた。

その結果3階の一教室の教壇の下は安全そうだと考え、潜り込む。
息を整えよう。
胸に手を当て、あまり音のたてないように注意しながら息を吸い、吐く。
（おそらく、最初に、狙われるのは、科だ・・・・・）
1-Bの中で最も逃亡に適しているのは彼女であり、クラスメートを完全撃破（コンプリート）する気ならまず最初に逃げ足の速い者から狙うだろうという推測だ。
（じゃあ、次は、誰を狙う？）
目をつぶり、周りの人の有無を確かめる。
範囲内に傍受できる視界はない。ということはここ周辺にはまだ誰もいないということになる。
（私や聡一がこうやって身を潜めるというのは、当然予測済みだろう。
実質能力なしの海（かい）や誉（ほまれ）、美樹（みき）か？残留思念読取（サイコメトリー）の亜子（あこ）も私達と同じように、さっさと隠れているだろう・・・・・。
そういえば他のメンバーはどうするつもりだ？）
教壇に横を向いて体育座りしているような体勢の彼女は背をもたれさせて体力の回復を待つ。
あやふやになっていた鬼ごっこが遂に始まってしまったとしっかり認識して、楚々絽はポケットのモバイルを取り出した。
姉の出現にテンパってしまい、つい冷静を欠いたことを後悔する。
チームがバラバラになってしまった今となっては打つ手なし。対抗策は思い浮かばない。
彼女の能力は周りの監視に使える程度のものだ。
あえて言えば、応急処置としてここから脱出すれば寿命も延びるのかもしれないが、考えてみると彼女のいるのは3階なのだ。見つかる可能性の方が高い。
大体、延命したところで外にも敵は多い。
楚々絽は溜息を吐いた。

（捨て身覚悟で、もう一度チームを召集してみるか）
死んで当然、生きて奇跡・・・などと呟いて足に力を入れる。
勝機は薄い。
織神葉月（おりかみはづき）は能力を基本的に身体強化に使っている。
不意打ちには強いし、五感は良すぎる。追跡機能付きで彼女自身の嫌な素質も相まってもはや手をつけられない。
さらに、どうもリアルにどこかから電波を受信しているらしい。
携帯電話の着信告知ストラップのように電信の有無を事前に伝える彼女の姿を思い浮かべ、楚々絽はもう一度モバイルを見た。
（持ってるだけで自殺行為か・・・？）
いや、既に体臭でアウトかと思い直し、無理やり肯く。
2度目の溜息を口から出した。
（前途多難すぎるじゃないか、全く）

／

電波を追うことはできない。
支給品の同製品がこれほど溢れた構内で目的の人物を探し出すことなど不可能だ。
臭いによる追跡の方はできなくもないのだけど、今はパス。
僕はお楽しみはできるだけ引き伸ばす主義だ。
それと同時に彼らの恐怖も引き伸ばし。
こういうのは焦らせば焦らすほど楽しめるシステムになっている。
さて、科ちゃんはリタイアしたし、そろそろ本気で狩り始めよう。
屋上から横着をして飛び降りて中庭に無事着地する。
たまたま顔を向けた先に熱を感じた。
どうやら教室に潜んでいるチームがいるらしい。
ちょうどいいから利用させてもらおう。
握り拳を作って、ステップを踏む。
タンタントタンッ。リズムよく3歩目で右腕を後ろに引き、勢い

を乗せて突き出した。
教室を形作っていたコンクリートが破砕され、風通しの良い穴ができた。
中なら驚きの声と悲鳴、それから騒音と水弾が飛び出す。
少し構内を騒がしくしたい。

／

どうも様子がおかしい。
そう気付いた西谷絵梨（にしたにえり）は一旦足を止め、ドアの開いていた教室に滑り込んだ。
薄い壁に耳をつけて外の様子を伺う。
「・・・んだ。・・・・堂がやら・・・・・」
「だか・・・、ん・・よ！・・・でも・・・・・・」
騒がしい。怒声が聞こえてきた。
足音。振動。それに続く悲鳴。
どうしていきなり潜伏していた生徒達が動き出した？
絵梨は自分達がバタバタと走り回ったせいだろうかと思考して、それを否定する。
（それにしても規模が大きい・・・・・）
脳裏に今日はお団子頭にしていた単独行動中のクラスメートが掠めた。
ありえる。
けれど、その意図は分からない。
（騒がせば自分の行動も制限されるはずだけどな。なーにか、裏がありそーな感じ）
聞き耳によるとどうも騒いでいる彼らは教室にいるところを襲撃されたらしい。
けれど、戦闘を行う前に、攻撃した本人はどこかに消えてしまい、パニックになって廊下に出た。ところが廊下には同じように外に追

い出された生徒がいて・・・・・・。
という具合にどうも故意に騒動を勃発させている節がある。
となるとやはり葉月が犯人だろうｋ。
葉月の能力は複数を相手にするのには向いていない。戦闘は避けていると考えるべきだ。
彼女は壁から体を離し、教室を見回した。
まだ何にも使われていない、ごく普通の教室だ。
（何か使えるものはー・・・・・ないか）
机や椅子を振り回すのは小回りが利かない。他の生徒には有効かもしれないが、今彼女を狙っているのは葉月なのだ。
やっぱり皆とバラバラになったのはまずかったかと悪態を吐く。
（もう一度何とかして集まらないと駄目ね）
そう思い、そこで気付く。
（――――っ！これが狙い！）
廊下には他の生徒がいる。時々、戦闘が起こっていることは壁伝いにも分かる。
こんな状況では廊下に出てクラスメートを探すこのは無理がある。
（やられたぁ・・・・・てことはそぞろんの姉さんを利用したのもそれを見越して？
私達をとりあえず分断させたかったのか・・・）
どう考えても葉月の思惑通りに踊らされている現状にうんざりする絵梨。
しかし、葉月がわざわざ自分達を散らせた理由を考え、体に力を入れなおす。
――――織神葉月は多数戦を避けたがっている。
「こーなったら、絶っ対皆と合流してやるっ」

／

「離せ――――！」

「馬鹿か！俺らが分かれたら葉月に勝てる確立はゼロだろうが！」
全速力で学校から脱出しようとしていた真幸を玄関口で何とか取り押さえた。
「どの道ないって！逃げよう！とにかく遠くに！」
撥水能力のこいつはチームの要だ。俺らの連携プレイで直接敵を叩くのかこいつなのだ。
後少なくても視界を奪う発光能力の絵梨とも合流したい。
欲を言えば煙火手榴(ミニ・パイロ)の香魚子(あゆこ)がいれば助かるし、ソナー役の楚々絽もいた方がいい。
というか、正直俺らは1人ではどう足掻いても葉月に勝てそうにないのだ。
フェアな勝負事ならともかく、能力的に全く吊り合っていない。
葉月の能力技巧はどんどん進歩していた。
本人は全くご満足していない様子だったが、五感の鋭敏化だけでもなかなか難しい応用ではないのではないか？
俺の方は、いまだ発破系能力の未分化で、威力と方向の調節が最近やっとできたぐらいなのだ。
他の奴らも似たり寄ったり。足りない部分を補強してやっと1人前として戦えそうな感じである。
そもそも葉月の能力は戦闘向きなのだ。
「いいか？外に逃げても最悪他の奴にやられる！」
「葉月にやられるよりマシだ！」
・・・ごもっとも。精神的にも肉体的にもそっちの方が被害が少ないに決まってる。
だが、
「それだったら最初から教室に居座る必要はなかっただろ！元迎え撃つつもりだったじゃねぇか！」
「もう駄目です許してくださいきついんです精神的にきついんです・・・・・・」
相当きているらしく真幸の目は死んでる。

それでも引っ張り込んで、廊下の壁に座り込む。
そこに亜子(あこ)がかけてきた。
「よかったっ、1人だと不安で」
だったらバラけなければいいんだ。などと悪態をついても仕方ない。
「真幸が戦意喪失してるんだ。何とか説得してくれ」
俺がやるより効果があるだろうと思い、面倒を押し付けてみる。
すると亜子は肯き、床にへたり込んでいる真幸の腹をいきなり踏みつけた。
そして一言。
「やるよね？」
「全力でやらせていただきます！」
・・・・・・。
亜子がこっちを向いてにっこり笑った。
「さて、どうやって葉月とやり合うか・・・」
新しく生まれた恐怖をかき消すために、俺はとにかく口を動かす。

／

髪をなびかせ、前方に一撃。風の刃を放つ。
朝風椎(あさかぜしい)の能力はまだ斬物風刃(カマイタチ)の域に達していない。
風は追いかけてくる男子生徒の顔面を直撃した。
軽く吹っ飛ぶ彼には目もくれず、廊下を走る。
その後ろを織神葉月が追跡している。
背中を風で押すことでその速度を底上げしているのだが、追いつかれるのは時間の問題だ。
「はぁっ、あぁっ！もう何で私なのよ！」
と言いながら彼女だって理由は分かっている。
廊下を歩いていたらばったり遭ってしまったから。
それ以外の何にでもない。

理不尽よ！と心の中で叫びながら、後方に風を飛ばす。
それを受けたところで全く葉月の速度は変わらない。
あの細い足によくあれほどの力が出せるものだと感心したくなる。
体を低くした彼女の姿は椎には肉食獣にしか見えなかった。
頻繁に振り向いて距離を確認していた椎だが、その差がもはや１ｍと縮まったところで振り向いた。
そのまま足を蹴って後ろに倒れながら跳躍する。背を廊下に預けることになるような体勢で彼女は正面から一刃。
１つは廊下天井の蛍光灯を破壊、葉月の頭上にガラスの破片が降りかかった。
それで彼女の動きを封じたところにもう一刃を放つつもりだったのだが、葉月は構わず突っ込んでくる。
「あぁあぁぁ――――っ！」
最後の足掻きは頓挫してしまい、床に激突する前に自分の背中にエアクッションを作るものの、その時には既に葉月に腕を掴まれていた。
すぐさまポケットの中にしまってあったペンダントは潰され、椎はぐったり力を失う。
彼女の体を床に寝かして葉月は息を吐いた。
廊下に出ている生徒が多いと追う方も大変なのだ。
とりあえず出会い際に軽く平手で伸（の）していった葉月だが、数が思ったより多く面倒が増えた気がした。
少し騒がす人数が多すぎたらしい。
とっとと場所を替えるなりして潜りなおせばいいのにとパニックに陥らせた本人には言われたくないだろう言葉を呟く。
髪に降りかかったガラス片を埃を取るように払い、周りを見回した。
どうやら大分沈静化したようだ。
「あんまり静か過ぎても困るんだけどな・・・」
自分勝手すぎる台詞を吐いたその時、細川美樹（ほそかわみき）が手にモップを携

えて、廊下の角から現れた。
「まーぁ逃げても仕方ないしねー。ここはいっちょ華麗に負けてやるぜ」
美樹は案外器用にモップを回して見せる。
「そうこなくっちゃ」

／

浅夢予知（くもりゆめ）などと寝なければまず能力の発動しようがない能力を所持する私こと布衣菜誉（ふいなほまれ）は今更気づく。
どう考えたって1人じゃ何もできないじゃん！
くそぅ。その場の空気に身を任せた私が馬鹿だった！
美樹ちゃんや海君はどうしてるのだろう？
美樹ちゃんは何だかんだいってそつなく何でもこなす子なので問題ないんだろうな。
海君は・・・まぁ、怪我してなければ大丈夫だろう。いや怪我をしても自分のものだったら治せるのか。
しかしながらその2人と違って個性に欠ける私としては正直今の状況はよろしくない。
美術準備室というこじんまりしていて隠れるにはもってこいな場所で私は頭を抱える。
どうする？いっそのことここにずっと隠れていようか。
でも評価は下がるんだろうな・・・。いや保身が第一だろう。
『ぎょーむれんらーく！1‐B諸君に告ぐ、今すぐ放送室に集まれー！
来なかったヤローは意気地なしと見なーす！分かったかー？』
天井に備え付けられたスピーカーから聞き覚えのある声。
「？？？」
あの・・・絵梨さん、ですよね？
あれですか？それは私におっしゃってるんですか？

というか、放送室って集まる所もそうだけど彼女自身この放送で葉月ちゃんに現在地ばれちゃってる。
行くべきなのだろうか？
自殺行為・・・だよね？

／

放送を片耳で聞きつつ、その内容を吟味する。
囮か罠か、裏をかいた誘導か、あるいは裏の裏をかいた集合命令か。
どの道まずは目の前の敵を排除することが先決と織神葉月は足に力を込めた。
俊足で一気に距離を縮める葉月へと冷静に狙いを定め、事前行動の少ない突きで迎え撃つ細川美樹。
それは葉月の前頭部目がけて突き出されるが、葉月は僅かに横へずれてそれを難なく回避する。
避けられることなど分かりきっていた美樹はすぐさま突き出したモップを引き、柄のちょうど真ん中を持っている右手を軸にモップを半回転させた。
最初に突き出された柄の先ではなく今度はモップの長方形の黄色い清掃部分が上から振り下ろされる。
攻撃範囲の広いその攻撃を近距離まで近づいた状態では避けることはできず、葉月は右手の一撃でモップを長さ４分の１ほどのところで横から掻き切る。
瞬間、足の止まった葉月へと美樹は足を踏み込んだ。その右足は、葉月の前に出した右足の右横、つまりくるぶし側に置かれている。
ただの棒切れと化したモップを離した右手の掌底で葉月の体を、まだ振り下ろした状態で胸元を遮っている右手ごと突く。
左方向へと傾けられた葉月の体は、引っ掛けるために伸ばされた美樹の足によってバランスを崩され、重力に従い床に倒される。

だが、もちろんただで転ぶ葉月ではない。床に体が触れる前に前髪を伸ばして美樹の右腕を絡め取っていた。
結局2人して廊下に倒れた。
「ひきょーな！」
「能力使ってるから卑怯じゃないよ！」
馬乗りになっていた美樹を力任せに回転させて下にして床に押さえつける。
後はジャージのポケットに入っていると思われるペンダントを潰せばいいだけだが、両手は美樹を拘束するのに使ってしまっている。
この密着状態では片手でも相手の自由を許すのはまずい。
仕方なく美樹の両手を片手で押さえ込むために、右腕を左側に動かそうとする。
しかし、美樹もそれを簡単に許さない。腰をくねらせて葉月の押さえ込む力を分散させ、力の弱まった隙間を突いて逃げようと試みる。
「くっこのっ、鰻（うなぎ）みたいに！」
揉み合いはしばらく続いた。

／

息が荒い。
全速力の走りこみで胸が痛い。
放送室のドアを開けるとそこには科の姿があった。
「よっ、しじまん、あこちん、真幸」
「馬鹿か！居場所バレバレじゃねーか！」
しかし科は平然な顔をしていった。
「いやー、はづきんが来ても来なくてもよかったからね。
罠だと思って来なかったら放送室（ここ）は1つの安全地帯になる。あの騒ぎで今動き出そうっていう生徒もいないだろうしね。
来たとしても囮になるから、他のメンバーが動き易くなる」

「それは俺らが葉月が放送室に行くと考えた場合だろうが。あいつがどう行動するか分からないんだ。結局どっちにも動きが取れねーだろ」

「でもしじまん達は来たでしょ。結果オーライ、思惑通り」

よくそんな穴だらけの作戦を実行する勇気があったなと思う。

さっきのことを考えてみても、女の方が度胸が座っているのかもしれない。

いや、これも男女差別に入るのだろうか？

と、現実逃避をしている場合ではない。

葉月がここに来る可能性はまだあるのだ。

「早くここを出よう。葉月が来たらヤバイ」

真幸が落ち着きなく言う。

「来るならそのまま迎撃といこうじゃない」

「目潰し、耳潰しも揃ってる。このメンバーで相手になんないならあたし達に勝ち目はないわ」

腹を括った1‐B主権者の女性2人は易々と恐ろしいことを言ってくれる。

できれば他のメンバーもいた方がいいに決まっているのだが、そういうわけにもいかない状況だ。

既に葉月の餌食になってしまっている可能性もある。

「しかし、何処から来るか分かんねぇのがな・・・」

周りを見回す。

この閉鎖空間にある出入り口は廊下に繋がる扉だけだ。学校には珍しく開くタイプの普通のドア。

だが、葉月の場合、窓から入ってくるということが十分ありえるのだ。壁をよじ登る姿がありありと浮かぶ。

もう一度何気なく目をやってみる。ドアか・・・窓か。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

窓、窓、窓。窓にナニカイル。

――びたん！

窓の上方に、ひょこりと顔を出すように、逆さま。
団子だった髪はゴムの呪縛から解き放たれて顔より下方に垂れている。
窓ガラスを叩いた平手には先ほど潰したらしいペンダントの紅い溶液が付いていた。
キュキュキュとガラスを擦る音が骨に染みる。ガラスに付着した液体が血にしか見えない。
これこそ織神葉月の登場に相応しい。

その姿は真昼間から活動を開始する悪霊にしか見えなかった。

／

織神葉月が窓ガラス砕いた時点で、四十万隆達は駆け出した。
肝を据えたと自負していた彼女達も実際の葉月の登場ぶりを目にして思わず逃避してしまったのだ。
「だから言ったろ――――！」
飛騨真幸が叫ぶ。
「うるせー！真幸いいからとにかく水！」
深柄科が放送前に用意していた水入りバケツを真幸に渡す。
「重い重い重い！逃げれなくなるから！」
「逃げるな――！」
ガラスが本格的に割れる音がする。葉月が進入口を確保しているらしい。
「しじまん！紙袋膨らませて！」
科に言われてジャージのポケットから紙袋を取り出す。
息を吹き入れるが、走っていながらでは効率が悪すぎる。
少しずつ膨らむもののまだ7割程度だ。

放送室から葉月が出てきた。
「ぎゃぁぁあああああああああああああ！」
「だからうるせぇ――！真幸いい加減にしろぃ！」
出てきた瞬間、一歩目で加速する葉月。
悪霊の類は足が遅いのが個性なのだと声を大にして言いたい隆。
追いかけっこはすぐに終わりを迎えた。
手を伸ばせば届く距離にまで接近。
紙袋の用意はまだだ。
「真幸――！」
科の喝に真幸は振り向きざまに水を吹っかける。
それを引き裂こうとする葉月の右手。真幸の撥水が発動するのと同時だった。
威力（ベクトル）を与えられた水が横から繰り出された葉月の右手を弾く。
「っ！」
そしてギリギリ間に合ったパンパンに膨らんだ口を握りしめて塞いだだけの簡易紙風船が破裂した。
――バァアンッ！
「っっっぅあああぁぁあああああ！」
葉月の近くに突き出されて行われた発破。
五感を鋭敏化させている葉月にとってそれは通常よりも効果のある攻撃だった。
ふらつく葉月に仕掛けようと隆が踏み込む。
だが、葉月は咄嗟に床を蹴って横に跳んだ。
窓ガラスを突き破り、空中に身を放り出す。
「くそ！」
追撃を許さない葉月の回避に隆は悪態を吐く。
一方無茶な行動にでた葉月は平衡感覚をやられているため、着地体勢を取れない。
髪を伸ばして割れた窓から手すりに巻きつけた。
そのまま振り子の原理でアクロバティックに下階の部屋の窓を割

り、構内へと復帰する。
そこは美術準備室の窓だった。
盛大にガラスを割り、室内に転がった葉月は目の前に固まっている布衣菜誉を発見する。
悲鳴が上がり、また1人犠牲者が増えた。
転がった亡骸を横目に伸びの動作。
まだ響いている耳への影響を確かめながら、葉月は体中に付いたガラスの破片を払い落とす。
頭を振り、瞬(まばた)きし、平衡感覚の回復を待つ。
「よし。今度は負けない」
伸ばしていた髪を元の長さに縮めて、楽しそうに呟いた。

／

「今ので倒しとかなきゃいけなかたのに――！」
私の叫びに真幸は激しく肯いた。
「もう無理だって！こっちの手の内完全にばれたろ！事前作戦でだって一撃で決めないと勝ち目はゼロってので落ち着いたよな！」
「ここまで来たら後には引けねーんだよ！ああなったら葉月は意地でも俺達を潰しに来る！」
ランナーズハイとかクライマーズハイとかという言葉が似合いそうな調子の声。
しじまんがバケツに水を入れなおしてきた。
この際バケツのストックがある1‐Bの教室に戻った方がいいかもしれない。
「どこか落ち着ける場所にいた方がいいと思う。どうせあたし達の位置なんて簡単に分かるだろうし、こっちも準備をしておかないと」
あこちんが割と冷静に提案する。さすが副委員長。・・・・・・
委員長の方は今頃どうしているんだろうか？

「とにかくやれるだけやろうよ。もっと水は欲しいし他のメンバーもできれば集めたいし」

教室を目指すために階段に向かう。

そこで大きな音が聞こえた。構内全体が揺れるような轟音。

近くではなく遠くから。

反射的に窓から外を見てみると、校門の方に数人分の影があった。

あの制服は殊樹(しゅき)高校のものだ。

シット！ここにきてまさかゲテモノ能力者がご参戦あそばせるとは。

状況は最悪に次ぐ最悪。戦闘は混乱を極めることが約束された。

第１５話－　凶悪犯。－Ｈｕｎｔ－（後書き）

まだまだ続くよ体育会編。
今更長すぎる事に気付きました。
まだ結構残っている気がします。夜まで続けるつもりなのに、今はまだ昼時ですよ。

視点が変わりすぎている気がしますが、状況が状況なので勘弁してください。
一視点じゃたぶん無理だと。あるいは私の力不足です。

前々から誤字・表現間違いなどを直していきたいと思っているのですが、区切りがつかないので先送りにしてます。
体育会編が終わったらやりたいです。

そうしたら時間が空く可能性もあるので、
キャラの人気投票でも一度やってみたいのですが、この小説一体どれくらいの人が続けて読んでくださっているのか分からないので、投票の体を成すかも分かりません。
なので気が向いたら今からでも投票してくれると嬉しいです。

評価／感想のページかメッセージかで、
１人１回で３点を分割して複数にでもまとめて１人にでもというルールでやってみたいです。

クラスメートの個性が出にくいことが実は最近の心配事だったりするのですが、大丈夫かなぁ・・・。

第１６話－　侵入犯。－Ｈｅａｔ－

殊樹（しゅき）高校の生き残りが第一中学にやってきたことは、四十万隆ら１‐Ｂチームにとっても、その他まだ何とか持ちこたえていたチームにとっても不測の事態だった。

殊樹高校に通う生徒は他の学校と違って、ＥＳＰともＰＫとも取りにくい能力や珍しすぎる能力を持つ生徒である。

１人だけでかなり厄介な連中が高密度で密集する殊樹の戦闘は非常に複雑な戦況を招き、彼らだけで自滅していくのが通例だった。

生き残ってもそれこそ数名の団体で、本来なら出会ってしまうことはほとんどない相手として認知されていた。

だからこそ今年も見ることはないだろうと考えていた生徒は多く、その希望的推測が外れた第一中学の生徒は動揺を隠し切れない。

あおれは織神葉月にも同じことが言える。

まだ日が南中を過ぎた頃合いである今に、まさか他の学校からの渡来者がやってくるとは考えていなかった。

これからゆっくりとクラスメートを苛め尽くそうと考えていた矢先に邪魔が入ったのだ。

隆達にとってはある意味かなり助けられたことになるのだが、侵入した方も侵入された方もそんなことには気づかない。

しかし、この出来事において最も誤算だったのは、殊樹の彼らに違いない。

獣は縄張りを侵されるのを酷く嫌うものなのだ。同様にして葉月も獲物を取られることを危惧している。

何より、せっかくの楽しい食事を邪魔されて葉月はかなりかなりかなり不機嫌なのだ。

うにょうにょと髪を触手のように動かして、不愉快オーラを纏っている彼女が校舎の出入り口に向かって進行中だということを彼ら

は知らない。

／

「あはー、どう？あの花火は」
馬鹿が馬鹿を言っている。
いつもいつもこいつは何でこんなに馬鹿なんだろうと思っていたが、やっぱり馬鹿なんだと再確認させられた。
何でわざわざ自分達の存在を敵に知らしめるような行為をするのだろうこの馬鹿は。
ＰＫ系でも珍しい発音能力のこの女子校生様はおそらく先のことも後のことも考えられないに違いない。
少なくてもこいつの能力は人様に真正面から喧嘩を売れるような能力ではないのだ。
そして花火と言いつつ音しか出ていない。
「今更何言っても仕方ないか・・・・・。
なぁ、藤原。ここは１つ単独行動に切り替えないか？」
このチームと言えばチームと言えなくもない集まりの中で最もまともな奴に意見を求める。
「そうだな・・・小島（ばか）を囮として構内歩かせるってのは賛成だ」
馬鹿じゃないよと反論する馬鹿は放っておいて俺は肯く。
「というより小島（ばか）とこれ以上一緒にいると早死にしそうなんだよ」
「ちょっ、この冷徹漢、薄情者ーっ！今まで一緒にやってきた仲間になんてこと言うのさ！」
お前が今まで人を巻き込んで振り回してきたトラブルメーカーだからだ。
俺としてはとりあえずこいつを切り離したい。
第一中学校校舎の玄関口までやってきたところで俺達は一時停止して決を取ることにした。
「構内では分かれて行動に賛成の奴」

俺と藤原が手を上げたが、他のメンバーは単独行動は勇気がないらしい。生き残っても最後には1人で戦わなきゃならないんだがな。
仕方ない。先に決まりそうな事柄を決めてしまうか。
「小島を切り離すのに賛成の奴」
一斉に全員の手が上がった。ああ、小島は数に入れてない。
「えぇ～！ほんとに酷いよ！」
残念ながらな。俺らはお前から色々と迷惑をこうむってるんだ。
お前の方が酷い。
「よし。じゃあとりあえずこいつは囮として構内に放りこむ！」
そう言って握りこぶし突き出した瞬間だった。
――ガッシャン
「ぎゃぁぁあああああああああぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・」
ガラスの割れる音。遠ざかる悲鳴。
割れた玄関のガラス戸の奥から何か黒い物体が伸びてきて、メンバーの1人の足を絡め取って中に引きずり込んでいった。
触手？
いやいやいや！待て、おかしいだろ！
俺らのやってるのは能力者同士の模擬戦闘であって、UMA探索秘境アドベンチャーじゃない。
少なくても物陰から仲間が捕食されるとかそんなシチュエーションはないはずだ。
・・・・・・。
「構内では単独行動厳禁。固まって動くぞ」
異論はなかった。

／

玄関から4人の生徒が入ってきた。
恐る恐るといった感じで動く彼らの行動は織神葉月襲撃の影響だ。
フォーメーションのつもりなのか前後左右の十字型に並んでいる

が、天井に張り付いている葉月にとっては単なる恰好の標的でしかない。
慎重を通り越して緩慢な彼らが玄関口の広場であるモノを見つけた。
葉月の餌食になった彼らの仲間だ。思わず駆け寄る。
時既に遅く、彼はピクリとも動かない。
「くそっ。アレは一体何なんだ・・・・・・」
その答えを知っているかもしれない被害者は、時間が経過してしまったために一言も喋れない。
しかし彼らにはそこで留まっている猶予など一切なかった。
目に付くモノで獲物を引きつけるのは使い古された手段である。
冷静に考えれば分かることだが、実際現場で遭遇すると見向けないのが人間だ。
知識と経験の雲泥の差がそこには出る。
彼らはすぐ頭上の天井に葉月が張り付いていることに気づかない。
量と長さを増長させた髪が何本かの蔓状になってゆっくり近づいていることにも気づかない。
ふと小島継（こじまけい）は天井を仰いだ。
そして固まる。
真下から見ると、それは無数の触手が生えた口を開けている得体も知れない怪物のように見えた。
触手に利用しているのが髪なだけに、頭部がガマ口のように割けているその姿はある意味クリオネの捕食シーンに似ているかもしれない。
継は彼女としては珍しく顔を引きつらせて、
「全員退避――――――――――っ！！！」
叫んだ。
が、包囲網を完成させようとしていた髪の触手が作業を標的捕縛に切り替えるのはそれと同時だった。
ブワンと触手が唸り、一気に殊樹高校の彼らを絡めていく。

咄嗟に逃げようとしたが、量が多いのと既にほとんど包囲されていたので彼らはあっさり捕まった。
床から浮かされ踏ん張りも効かない状態にされ、冷静を失いパニック状態だ。
髪で雁字搦めにしつつペンダントの位置を素早く探す。
しかし、いきなり髪の一部がバッサリと切り落とされた。
「っ！」
それによって難を逃れた継と彼女を馬鹿馬鹿馬鹿と言い続けた舞吹恵輔（まいふきえすけ）は床に叩きつけられる。
継は恵輔の腕を掴んで駆け出した。
「他の皆は！」
「無理！さっきので結構消費したの！私の持久力のなさを舐めんなよ――――！」
おかしなテンションで廊下を疾走していく彼ら2人を葉月は追わなかった。
仲間に見捨てられたもう一方の2人組みをリタイヤさせる。
ペンダントを潰した後、彼らを床において髪を縮めた。天井から軽い身のこなしで降りる。
それからさきほど切られた断面を確認した。
髪というのは思ったより丈夫な物質だ。束ねられた髪を千切ることはまずできないし、刃物でも場合によっては苦労することがある。
その髪が感心するような一太刀で切断されていた。
見事な断面図をしばし眺めた葉月は、その髪を他の髪束と分からないように伸ばした。
「斬物風刃（カマイタチ）の類、かな？」
ゆっくりと逃げた2人の後を追う。

#

四十万隆達は使い慣れた棲家である1-Bに引き返していた。

使ったバケツにも残っていたバケツにも水を入れて、音響手榴弾代わりの紙袋も事前に膨らましてある。

一度使ったモノが二度目も有効であるほど織神葉月は甘くない。そのことは分かっているのだが、彼らにできることは少ないのだ。

「この際、相手が葉月である必要はないんだ」

追い詰められすぎて、逆に大胆になっている飛騨真幸が言った。

「どの道何時やられるか分かったもんじゃない。目の前にいる敵から潰していこう」

今更ながら悟ったように呟く彼の言葉には全く力が入っていない。

「とにかく、部外者が入ってきた今、俺らには障害が多すぎる。どっちかに集中してってわけにはいかねぇ・・・」

「生存率はどうせ低いわ。開始すぐにリタイアしなかっただけでも幸運よ。葉月ちゃんも一度退けたわけだし。満足はしてる」

やられることを前提に自分を納得させているようにしか思えない言葉を口にする長谷川亜子。

このままだと辛うじて残っている気力すらこの雰囲気に吸い取られてしまいそうだ。

隆が空元気で勢いよく立ち上がった。

「よし。真幸、やるぞ！」

泣き言も言う気がなくなっている真幸は素直に肯いてバケツを両手にぶら下げる。

西谷絵梨も自分の席から腰を上げた。

そこで、

――ガラガララ

いきなり引き戸が開いた。

外から息を切らした生徒が2人滑り込んでくる。ジャージの校章が殊樹高校の所属だということを示していた。

最悪な鉢合わせだ。

バタバタと足音をさせて廊下を走ってきた彼らに気付かなかった隆達にも、中に誰かいるかを確認しなかった彼らにも責任があるだ

ろう。
「「・・・・・・」」
両者情けない見つめ合いが数刻続き、
「絵梨！」
隆が叫んだ。
発光能力によって教室に光が溢れる。
「っくそ！」
舞吹恵輔はやられた目を庇いつつ、能力を発動させる。
それにより目の前にいたはずの彼を捉えていた彼の視界は一瞬にして床の白色に塗りたくられた。
腕を突き出していた絵梨はいつの間にか真幸と手を繋いでいる。
亜子は立っていたにも関わらず、いつの間にか空気椅子をする形で机についていた。
いきなりの激変に思考を停止させる面々。
そこを狙って恵輔は一気に決めてしまおうと一歩踏み出した。
――バシャン
「・・・・・・・・・・・・は？」
下を見てみると、右足が水の入ったバケツに突っ込まれている。
考えてみればそこは先ほど絵梨がいた場所だ。
（しまっ！ここも入れ替わって・・・・・っ！）
彼の能力はタネを明かせば簡単な理屈なのだ。
物質の位置をランダムに交換する。ただそれだけである。
隆は床に置いてあったバケツと、絵梨は真幸の持っていたバケツと交換させられた。真幸は場所が変わらなかったため、絵梨と手を繋ぐことになり、並んでいる椅子の１つと替わったので空気椅子をすることになったわけだ。
ちなみに真幸がバケツを持っていたもう一方の手には黒板消しが握られている。
そして絵梨のいた場所にはランダムの結果、水入りバケツが居座ることになった。

それに気付いた隆が叫ぶ。
「座標転移（テレポート）の応用だ！真幸、あいつの足は今水に浸かってるぞ！」
はっとした真幸は手を彼の足にかざす。
恵輔は足を引き抜こうとしたが、真幸の能力の方が一足早かった。
バシンと水が浸かっている恵輔の足を弾き、彼はバランスを崩し後方に倒れた。
体を起こした隆が厄介な敵を潰すために走る。
だが、
「はーい、そこまでぇー！」
今まで何もしていなかった小島継がいきなり大声を出した。
踏み込んだ隆の足がいきなり沈む。
床に亀裂が入り、彼周辺の足場が崩れ始めていた。
「うおぉ！」
ここが1階でなければ下階に落ちていただろう。
体勢を崩した隆に、体勢を立て直した恵輔がのしかかる。
真幸が隆を助けようとバケツを持ち直す。
そこで、いきなり開け放たれていたドアの隙間から黒い触手が伸びてきた。
それは俊敏に恵輔の姿を捕らえると隆から引き離し、廊下へと引きずり込んでいく。
「いやぁぁぁあああああああああ！恵輔ぇえええ――――！」
「ぎゃぁあああぁぁあぁぁあああ！何アレ！」
「ちょいっ！小島何とかしてくれぇ！」
継が廊下に飛び出して彼を絡める黒いそれに向かって能力を発動させる。
「ッ！これさっきのと違う！駄目！時間がかかるよ！」
そうこうしている内に恵輔を捕縛した触手は廊下の奥へと引っ込んでいく。
彼は自分に対して座標転移（テレポート）が使えない。
「たーすーけーてーぇー・・・・・」

どんどん遠ざかっていく声。自分の無力に打ちひしがれる継。
手と膝を床についていた彼女だが、その数秒後には復活した。
「ま、なっちゃっとことは仕方ないしね。じゃ、私この校舎出るわ～」
ひらひらと今は亡き仲間の方に向かい手を振る。その声は彼には届かない。
そうしてこんなバケモノのいる建物から出ようと踵を返した。
しかし、それを1-Bメンバーは許さない。
教室から出てきた彼らはそこで、振り向いた彼女とばっちり顔を合わせた。
隆のお手製音響弾が破裂する。
咄嗟に耳を塞いだ継だが、音速に敵うわけもない。一瞬ふらつく。
それでも普通より大音には慣れている彼女はもち直し、彼らの方に視線を戻した。
亜子、絵梨、真幸がバケツの水を自分に向けて放った後だった。
大量の水が迫る様子を見ながら、継はさっきの恵輔に起きた現象を思い出す。
（撥水能力か！）
答えを出した瞬間、継は叫んだ。
「ぁあああぁぁあぁぁぁあぁぁあああああああああっ！！！」
真幸の撥水能力を受けた水が爆ぜた。
だが、それは1cmもいかないところで不可視の何かに衝突し弾ける。
「何で！」
そんな疑問を持つ余裕などない。継はこの中で一番厄介だと思った真幸を先に潰しておこうと次の一手を繰り出そうとする。
能力を使うために一歩隆達より前にいた真幸までそれほど距離はない。
「うはぁっ！」
ところが、彼女はいきなり奇声をあげた。踏み出した足を器用に

回転させて、彼らに背を向ける形で走り出す。見事なまでの逃亡のポーズだった。
「は？」
攻めから逃げに転じられた方は意味が分からず呆然とする。
先ほどの戦闘で有利性を持っていたのは彼女の方だったはずだ。
そこで、彼らはしゅるしゅるという音を聞く。
それは布の擦れるような、髪が擦れるような音だ。
嫌な予感しかしない１‐Ｂ一行はゆっくりと後ろを振り返る。
当然そこには織神葉月がいた。
彼女の身長ある後ろ髪は何束かに分かれて、ゆらゆらと漂うように揺れている。それは何かを捕まえるのを待っているように見えた。
「あ〝――――もう！ややこしいぃ――――！」
「どうしてこういう時に来るんだ！」
「というかさっきの黒いの葉月かよ！」
継が逃げたのと同じ方向に走り出した。

#

とにかく遠くへ逃げたくて、階段を上り行き着いた先は３階だった。
若内鈴絽と朝風柏の周りへの配慮を考えない戦闘によって崩壊気味のフロアは頼りない。
それでも織神葉月がいないだけマシと言うものだ。
「はぁっ・・・はぁっ・・・はぁっ・・・ん〝んっ、一応逃げ切れた、よね？」
１‐Ｂ３人は各々無理なスピードを出したための後遺症に苦しみながら、自分達の無事を確認する。
四十万隆、長谷川亜子、西谷絵梨。
飛騨真幸は・・・・・・残念ながらお亡くなりになった。
逃げ切ることのできなかった彼は、途中葉月の触手に足を取られ

リタイア。
ここで痛くなった胸を摩(さす)り息を整えている彼らはそれを見殺しに逃げ切った。
薄情者という言葉が背中にかけられた気がする面々だったが、３人はお互い視線で肯き合い事実隠蔽(なかったことに)した。
誰だってアレは怖い。
ほんの僅かな間で織神葉月は進化してしまった。
耐性を持つ能力というのはかなり厄介な能力だ。一撃で屠らなければ、数倍に倍増して自分に返ってくる。
やはりあの時倒すべきだったとまた後悔し始めた彼ら。
さらに、早くやられた方がよかったと新たな後悔も生まれてきた。
一番いいのは葉月以外の誰かにやられることだが、わざと負けるとあの校長がいい点をくれないことは彼らもよく分かっている。
「生き地獄だよね・・・」
亜子が言う。
空気がまた沈む。さすがにそろそろ体力的にも限界が来た彼らはかなり疲弊していた。
このまま座り込むと立ち上がれそうな気がしない。
「お、発見！」
陰湿な雰囲気の中、いきなり軽快な声をかけられた。
見ると割れた廊下側の窓から若内楚々絽が顔を覗かせていた。
「楚々絽！」
「生きてた！」
「というか放送室に来なかったじゃん！」
三者三様の反応に楚々絽は平然と答えた。
「いやぁ、行くつもりだったんだけどなぁ。途中で葉月が通るのが視界傍受で見えたから」
「教えろよ！そこはむしろ仲間のためにがんばるとこじゃねぇか！」
「無駄死にはしたくないなぁ」
「・・・・・・」

「・・・他のメンバーは？」
「さぁな。あ、香魚子は駄目だったっぽい。校舎から出てくの見えたな。
結構やられたっぽいぞ。周ってみたけど他のメンバーに会わなかったしな。あ、でもたぶん聡一は生きてる」
そう言うと楚々絽は教室に入ってきた。
「どうしてあいつは生きてると？」
「どうせどっかに隠れて覗き見てるだろ。逃げる可能性が低いから葉月には放置されてるはずだ」
なるほど、と隆は溜息交じりに呟いた。
教室はあらかた物が壊されてしまっているため座るものも少ない。辛うじて残っていた椅子を３つ楚々絽は持ってきた。
お疲れの様子である彼らを座らせて彼女自身は壁にもたれかかった。
「で、どうだった、葉月は？」
当然のように葉月に遭遇した前提で問う彼女に恨みがましい視線を向ける隆。
「当社比５倍ぐらいはパワーアップしてるぞ。髪を使うのが今のお気に入りみたいだが、次遭う時はどうなってるか想像がつかねぇな」
「１回いいところまでいったんだけど逃げられたのよ。たぶん同じ手は通用しないだろうなぁ・・・」
楚々絽はそれを聞いて思案するように頭を傾けた。腕を組んでぶつぶつと独り言を始める。
「・・・遅かったか・・・・・・となると生き残りがいたとしても・・・ないな。髪・・髪ねぇ・・・応・・が・・・・・・・・・・・・ふむ」
肯き、何らかの結論を得たような様子に絵梨が尋ねる。
「どう？何か案が浮かんだ？」
「ああ」
彼女は体重を預けていた壁から背中を離した。座っている亜子の

後ろに回る。
そして亜子の耳に顔を近づけて、
意識が耳に向かっている内に亜子がポケットにも入れずかけていたペンダントを握りつぶした。
「え？」
意味が分からず呆然とする彼らに楚々絽は告げる。
「一度耐性をつけられたら私らに勝ち目はない。メンバーもほとんどやられている可能性がある。
ほら、もうチームで行動する必要性はないだろう？私にできることは自分の成績を上げることぐらいさ」
「外道――――――――！」

#

2階廊下。既にチームが3班あればいい方だろうというフロア。
目立った損壊はそこまでないのだが、所々ペンダントの内容物が赤いシミを作っている。
そこで織神葉月と小島継は向かい合っていた。
「やられたよ。全く、どうしてこう場所がバレるのかと思ったら、こんなもの付けられたなんて」
継が指で弾くとソレは光を反射して微量輝いて見えた。
極細の髪の毛だ。
それがファーストコンタクトからずっと継の靴に絡めてあったのだ。
だから葉月は急いで彼女達を追う必要はなかった。
「そろそろ逃げるのも終わりにして、楽しみますか」
そう言った瞬間、葉月の漂わせていた髪の幾分かが切断された。
力を失いパラパラと宙を舞うそれらを眺めながら、葉月は思案する。
「ふぅん。さっきは切れないって言ってたよね。『さっきのと違う』

、『時間がかかる』とか何とか・・・・・・」
（ということは斬物系（カッター）じゃない・・・？切りにくいように強化しておいたわけだから『時間がかかる』というのは分かるけど、『さっきのと違う』というのが解せない・・・。
髪の性質が変わったところで”切る”という作業は変わらないはず・・・『さっきと違う』から『時間がかかる』はおかしい・・・・・・）
「考えても判んないって」
そうしている内にまた髪が割かれていく。
そのまま突っ立てていても仕方ないので葉月は、残っている触手の1本で継を攻撃する。
それは彼女の前でやはり切断された。
だがもちろん、材料がある内はいくらでも伸ばせる髪の動きが止まるわけがない。
髪は彼女の絡みつくが、それもまた切断された。
（・・・試してみるかな）
葉月は切られた髪を再生させてゆく。それらが切られる前と同じほどに戻ったところで、髪の性質を変える。
先ほどより硬く、鉄分を含ませて針金のように強くした。
それらを一気に彼女に仕掛ける。
平然としていた彼女の顔が歪むのを確認した。
彼女の体に巻きついても髪は切られない。
「なるほど。仕組みはどうであれ、少しでも性質を変えられるともう一度切断するには時間がかかるようになるわけね」
しかし彼女を捕縛していた髪は切断された。まだペンダントは破壊できていない。位置もイマイチ確認できていなかった。
（有効時間は３０秒ほど・・・、！）
そこで足場が崩れ始めていることに気づく。
「ちっ！」
咄嗟に後ろに退いた。

しかし、そこも同じように崩れ始めていた。廊下を一歩一歩後ろに跳んでいくが、そのどこもが崩壊していく。
（髪の性質は変えられても、床まではどうにも・・・！さすがに簡単には勝たしてくれないか！）
一方継の方も好況とは言い難い。
前に自分で言ったように、彼女は持久力がないのだ。割と応用の利く能力を持っている彼女なのだが、そこだけはなかなか伸びず、戦闘においても後方援護の方が望ましいと自分でも思っている。
一撃で型のつく相手ならいいが相手は自分の能力に対して有効なカードを持っているときた。
正直逃げたいのだが、そうはさせてくれそうにない。
半分ぐらい投げやりに彼女は葉月との距離を稼ぐために床を壊していった。
後ろに跳び退く彼女を追うように床を崩していくことで2人の距離はどんどんと広がっていく。
崩壊しかけだった床は当然の流れとしてちゃんと崩れ去り、廊下に広い穴が開いてしまった。
これでこっちには渡れまい。継はそう打算した。
葉月は何とか安定した足場にたどり着くと改めて前を見た。
廊下の一部の範囲の床が完全に抜け落ち、２人を隔てる大きな溝ができていることを確認する。
後ろではなく前に進めばよかったと後悔したが今更遅い。
「仕方ない・・・」
葉月は助走をつけるために後ろに下がった。
「えっ？ちょっと待って無理無理無理この距離無理だから――」
継の忠告を無視して彼女は距離２０ｍはある溝の方へと床を蹴った。
「――ハッスルするなぁぁぁあああ！！」
悲鳴染みた継の声をＢＧＭに葉月は跳んだ。
目一杯跳躍し、廊下の壁に足を着ける。そのまま勢いに乗って壁

を横走りし始めた。
葉月の走っているのは教室側ではない方の壁だ。もっとも教室側との違いは窓が曇りガラスかどうかぐらいのものなのだが。
その様子を見た継は、葉月がこのままではこっちに来てしまうと知って、それを阻止すべく腕をかざした。
――ガッシャンッ
葉月がちょうど足を出した位置の窓ガラスが割れた。
ガラスを掴むはずだった足が空振りして、体を崩す。背中を下にする体勢で葉月の体が壁から離れた。
下は抜けた床の先、つまり1階の廊下だ。
しかし、重力に従い落ちるはずだった彼女の体は元々2階の床のがあった高さほどでいきなり跳ねた。
トランポリンに着地したような彼女の動きに継は葉月の跳ねた辺りに目を凝らす。
キラリと一線の何かが光った。
「何時の間に！」
髪の毛が、床だった空間に何本も張られていたのだ。
葉月は1回目の跳ねで体勢を整え、今度は髪の毛を使って一気に跳躍した。
丈夫に改良されたそれは当然さっきの物とは成分が変わっている。
継がこの髪を切るには30秒ほどのタイムロスがある。
だからこそ、保険として葉月はまず壁を走ったのだ。
崩れる床から退避する時に忍ばせておいた切札をギリギリになって使いたかった。
思惑通りに20mの溝を渡りきる。
その頃には葉月の髪の毛はお馴染みの触手スタイルに変形していた。
継は咄嗟に手をかざして断ち切ろうとするが、触手の一本一本が異なる性質をしていることを知らされる。
（これじゃ1つ1つにそれぞれ違う設定を――――っ！）

心の中で叫ぶ彼女。
そんな彼女を葉月は容赦なしに髪でぐるぐる巻きにする。雁字搦めというより蚕の繭に近い感じで完全に覆い、動けなくしてからペンダントの隠し場所を探る。
衣服の中に髪を滑らして確認していく。
(!なかなか見つからないと思ったら・・・なんでこんなところに・・・・・この人ひょっとして馬鹿なんだろうか)
継のペンダントはブラジャーの中に隠されていた。
一応ルール上禁止されてはいないが、下着の中を探すなというルールも同じくない。
こんなことをするのは、必ず体のどこかに携帯しているはずのペンダントを探すためというセクハラの口実を与えるようなものだ。
目的を果たしたので葉月は彼女の体を髪の繭から出した。
一応丁寧に扱って床に下ろす。
これで終わりだと思っていたら、継は一言告げた。
「息が・・・・・・」
それは自分の不満を伝えるものか。あるいはこれからの相手を窒息させないようにという忠告か。
「あー、ごめんなさい」
葉月は素直に謝った。

／

下着の中にペンダントを隠すという馬鹿にしか思えないことをやっていたツインテールの意味不明な能力者を倒した後、僕はそのまま廊下を直線に進んだ。
どうも体がだるい。
一度行えば終わりの体の強化と違って、髪を動かしたり伸ばしたりすることは能力を絶えず使わなければいけない。
それが思った以上に負担になったらしく、体がフラフラするほど

疲弊していた。
眠い。駄目だ、もうもたない。
「仕方ない一休みしよ・・・」
目を擦りどこか安全そうな場所を探す。
本当はすぐさま隆達を倒しにいきたいのだけど、その気力さえ出ない。
そこで、ふと知っている臭いが鼻に入ってきた。
その臭いの行き先を見ると、実に寝床に相応しい場所があった。
よし。ここにしよう。
僕はすたすたと早歩きして、廊下の行き止まりまで進んだ。
そこには掃除用のロッカーがある。
大きくて少し体を曲げたら座って寝れそうだ。
ロッカーの前に来て、ドアを開ける。
そこにいる聡一君に一言。
「邪魔」
リタイアさせた彼を床に転がし、代わりに自分がロッカーに納まる。
少し休憩。夜になったら活動を開始しよう。

第16話－　侵入犯。－Ｈｅａｔ－（後書き）

★キャラ人気投票実施中★
評価／感想のページかメッセージかで、
1人1回で3点を分割して複数にでもまとめて1人にでも自由に入れてください。

数が足りない場合は自然消滅するので、入れてくださるとすごく助かります。

今回のサブタイトルは『真最中、クライマックス、激烈、興奮、追及』というイメージです。

第17話－　待機班。－Ｒｅｓｔ－（前書き）

★キャラ人気投票実施中★
評価／感想のページかメッセージかで、
1人1回で3点を分割して複数にでもまとめて1人にでも自由に入れてください。

数が足りない場合は自然消滅するので、入れてくださるとすごく助かります。

第17話ー　待機班。ーRestー

地上からマンション37階分も昇ろうものなら、エレベーターの中で耳が痛くなるに決まってる。
ただでさえ人間という生物はそれほど高くもない樹上から地上に降りたような動物なのだ。今更上を目指してどうするのか。
などと考えながら足を動かし、メールに送られてきた住所と手製ナビ通りの目的地に僕はつい今しがた到着した。
というか何なんだろう、このやたら豪華なフロアは。
廊下ってこんな綺麗に飾り立てるものだったか？ワンフロアに4つしか号室のないような建物にエレベーターが5台もいるものなのか？
日頃使う使う人間が最多4世帯の共用通路の床がどうして大理石なんだとか、ワンフロア毎に広場がある意味はないだろうとか・・・・・考えても仕方ないのだろう。
朽網め、なんてところに住んでいるんだ。
とにかく、インターホンを鳴らす。
『はぁーい。どちら様ですかぁーい』
この声は細川だろう。先にリタイアしていたらしい。
くそぅ。僕は葉月に見つからなければもう少し生き延びれただろうに！
「僕だ。矢崎聡一、開けてくれ」
数秒後、ピピピッと電子音がインターホンのスピーカーから流れた。
『開いたよん』
・・・電子開錠かよ。
というか今気がついたがインターホンの上にカメラらしき物がついている。明らかに画面付きのインターホンだ。
『どちら様』じゃねぇ。見えてたろうが完全に。

文句ばかり言っても仕方ないので中に入る。
鍵穴が3つ付いている重いドアを開けると、予想に反して質素な玄関が現れた。
ひたすら白い壁、ワックスの塗られた木のフローリング。そのどこにも装飾が見られない。マンションの外装と随分違う。
視線を下に落とすと結構な数の靴が並べられていた。
1‐B待機組に加え、退場組の皆だ。
錯乱して解散した後、既にこれだけやられているとは。
「おーい、こっちだぜー」
細川が廊下の角から顔をひょっこり出して手招きしている。
ついていくとどうもにぎわっているらしく声が大きくなってきた。
体育祭の打ち上げを早めにやっているようなものなのかもしれない。競技が終わった後もどうせ騒ぐのにな。
着いたのは1つの形容しがたい部屋だった。モニタールーム・・・とでも言えばいいのだろうか？
とにかく画面が壁中に鉄枠に固定されて並べられているのだ。
正直、常人の理解を超えている場所だ。そもそもこんなにモニターを並べてどうするつもりなのだろう。
絶対使い道がない。まだホームシアターの方がマシだ。
この部屋は趣味でもありえないだろ。
あれか、どこぞの施設出身の天才少年みたいに危ないノートを持った人間でもあぶり出すのか。
ああ、そういえば残念ながら施設出身の設定は織神に取られてるな。
「よぉー、早かったなぁー！」
飛騨がジュースの入っているらしい紙コップをこっちに突き出して声をかけてきた。
挨拶のポーズとしての動作で僕に渡そうというものではない。
「ここにいる時点でお前の方が先にやられてるだろうよ」
言い返してやると、肩をすくめてみせた。

「残念ながら俺はお前のように隠れてなかったからな」
ほう、それは僕に喧嘩を売ってるのか？僕の能力はそもそも隠れて使うようなものなんだよ。
「いやいや、情けないこと言ってたのは真幸だろう？」
朽網（くさみ）がにやにやしながら言う。
待機組の朽網釧様は全てをちゃんと見てくれいるらしい。
「だろ？僕は僕なりに善処したさ。運が決定的になかっただけだ。・・・・・なんでわざわざロッカーで休もうなどと思うかな織神は」
どう考えてもツいていない。どうも疲れが見え始めたらしい織神に場所を譲るために僕はリタイアしたようなものだ。
「後残ってるのはどうも葉月ちゃんと隆君、絵梨に楚々絽だけね」
委員長が紙コップを渡してくれた。
今ふと思ったが、この高級マンションで紙コップというのはシュールだな。１人暮らしなので食器が少ないのかもしれない。
コップの中は透明な液体。むむ、これは白葡萄と見た。
「今はどんな状況？」
「んー、葉月は依然睡眠中っぽい。隆と絵梨は裏切った楚々絽から逃亡中」
・・・・・そうか若内が裏切ったか。彼女は状況に応じてばっさり切り捨てるタイプだとは思ってはいたが。
となると１‐Ｂは完全崩壊となったわけだ。
改めてモニターを見てみると、どれもこれもまったく違う映像を映し出している。
ネット上に上げられているライブ映像をそれぞれ割り当てているようだ。
何せ祇堂学園全体でやっている巨大対戦だ。放たれた徊視子蜘蛛も相当な数になる。映像も当然その数だけあるのだから、情報の多さは尋常ではない。映像だけでなく生徒の分布マップなども出ているのだから実際はさらに数があるはずだ。
それらから僕らが欲しい情報、つまり１‐Ｂメンバーの映ってい

るものを選り出しているのは朽網だ。
　何やらポチポチとキーボードを叩いている。
「で、皆はどういう風にリタイアしたんだよ？」
「朝風と深柄（みがら）と布衣菜に細川、あと飛騨は葉月に、長谷川は若内にやられて、その他は錯乱して飛び出したところを他の生徒にやられた感じだな」
「その他ってあたしと海（かい）だけじゃない・・・・・説明省くほど人数ないでしょ」
「香魚は葉月ちゃんが起こした騒ぎで廊下に出てきた生徒と鉢合わせて、海（うみ）は何もないのに前のりに転んで棚ぼた的に襲われたんだよ」
　もう１人の待機組である斬刀水圧波風（ウォーターカッター）が補足説明してくれた。
　うーん。どうも僕らが１‐Ｂはほとんどが織神にやられたようなものらしい。
　その他扱いに不満な瀬川に朽網が葉月に直接やられてないだけマシだと力説している。
「そんなにひどかったのか？」
　問いかけると、朽網は何とも表現しづらい表情をして、端の何も映っていなかったモニターを指差した。
　皆の視線が集まったところで、朽網がパソコンを操作する。モニターが起動して映像が流れる。
　――――天井に張り付いた織神の髪が触手のように開き、生徒達を捕食していた。
「とまぁ、これが今のところ一番ショッキングな映像のわけなんだが」
　朽網が遠い目をして言った。
／

「つーわけで、第何回？織神葉月を女の子っぽくしよう会議を始めたいと思います」
　モニタールーム急遽用意された折りたたみ式のミニテーブル３つ。その上には紙コップと２リットルのペットボトル数本、お菓子がいくつか乗っている。
　葉月が女になった頃は頻繁にやっていた会議なのだが、最近はやっていなかった。
　もう大丈夫かな、などと思っていたのに残念ながらまだ続ける必要がありそうだ。・・・まるで病気の再発みたいな言い草だな。
　あと、会議のタイトルは『女の子っぽく』というより『人間っぽく』というのが正しいと思う。
　あの挙動がどうみても人間のものじゃない。切実に普通に振舞ってほしい。
「最近はちゃんとスカートを着こなしてるし馴染んできたと思ったのにねー」
　と九鈴。チョコクッキーを頬張っている。
「状況に応じてスタイルを変えてるのよ。私達が女の子っぽくって言うものだからそうしてたのかもね」
「周りに合わせて、ね。擬態みたいに？」
「それ人間にする表現じゃないぞ・・・。葉月の場合、中身がどうなってるか分からない感じがするんだよな」
　朝風、布衣菜、海がそれぞれの意見を口にした。
　聡一がうぅぅむと唸る。
「人の中身なんて元々分からんもんだろ？」
「あーいやいや、そう意味じゃなくって・・・なんて言えばいいのかな？
　ほら、どんなに多様な人がいても人間としての枠ってあるじゃん？道徳とか倫理とか・・・人としての尊厳とか？そういうの葉月はあんまり気にしてない気がする」
　人の親友を非人間的と言うのはやめて欲しい。

「ああー！そうか、それだ！」
ぽんと手を叩く瀬川。
それだ、じゃない。納得するな。色々と本人に失礼だ。
「そういえばさ、性別変わったのに全く気にしてなかったもんね。普通はそうもいかないんだよね？」
「自分が男か女かっていうのは重要なパーソナリティーだからな。性自認がある人間は性別が変わったら間違いなく錯乱するぞ。
よくある性転換の創作物の話は本来ありえないからな。同性だと認識していた性別の人間と恋愛っつー前に、自分の認識している性と体の性が合ってない時点でそれどころじゃないんだ。『自分が自分でない』という認識に押しつぶされて最悪自殺したりもしかねない」
すらすらと聡一が補足的説明を加える。おそらく調べたことがあるんだろうな・・・。創作物好きらしい行動だ。
「逆にあそこまでケロリとしていられるのはおかしい・・・と」
「あるとしたらそもそも織神が性自認が女の場合だけど、それはないって荷稲さん言ってたしな」
「あんまり自分に思い入れがないのかなぁ・・・・・・」
「男であることにも人であることにも執着ないのかしら」
皆真剣に考えてくれているのだろうけど、何か釈然としない。
ああ、そうか。俺としては葉月が普通であってほしいからか。
傍目これだと先が思いやられるものな。
「これって難しい話だよな。女の子っぽく作戦は事実上失敗だし、それ以上にってなぁ・・・」
「どの道もっと自分を意識させたらいいんだろうけどね。厄介な話に発展したわ・・・本来の目的と変わっちゃってるし」
「せっかくの非日常的イベントを楽しもうって会だったのになー。そだ、釧君よ。君はどうなんだい？葉月ちゃんに惚れないの？」
・・・・・・、・・・・・・・・は？
何を言ってくれやがるんだ、細川美樹さんよ。

「だってさぁー、あれだけカワイー子が近くにいるんだぜー？手を出さない方がおかしいね！」
何でこの人は時々オヤジになるんだろう？
というか、だ。親友としてそういう目で見るのが嫌なんだよ。
「昔からの付き合いだからあんまり意識しないんだ。大切なのは変わりないけども」
「貴方達が恋仲になったら万事解決よ」
委員長である朝風までもがそんなことを言う。テーブルに頬杖をついて、どうもだるんとしている。
・・・もしかしてさじ投げた？
「俺達よりお前ががんばる方が効率的だ。がんばれ」
ぽんぽんと肩を叩いてくる聡一。
待て、思うんだがそれが一番難しい方法じゃないだろうか？というか、俺が大変だよな。俺だけが大変だよな。
そもそも異質に見える葉月を女になった機会に変えようというのが目的だったのに、話がすり返られている気がする。
葉月のことは好きだが、それは同性同士の”好き”に近い。
その認識を変えるのは難しいだろう。
「問題があたし達には難しすぎるんだよねー。あんまり対処法が思いつかないし」
「まぁ行く末がどうなるかすごく気になるけど、大丈夫なんじゃない？釧君がちゃんと手綱握ってれば」
やっぱりさじ投げてるよな委員長様は。
俺にそれができると思っているのだろうか？過大評価すぎだ。葉月の暴走ぶりを舐めるなよ。
「その話は置いとこう。もっと現実的に俺らのできることを挙げてこうぜ」
「服装とかもう大丈夫よね。買った下着もちゃんと着てるみたいだし。あ、そういえば葉月ちゃんのジャージってまだ青のままなのよね」

「あー別にいいんじゃない？男女で違うの色だけだし。ボロになった時に変えればさ」
「言葉遣いは？男っぽくもないけど、女っぽくもないんじゃないか？」
「一人称は『僕』で、語尾は・・・普通だよな」
「でも『ですわ』とかそういうの最近じゃ女子も使わないよ」
「だよな。問題はもうちょっと女子的イベントに参加させることじゃないか」
「ってい言ってもねぇ・・・一応女子グループに入れようって動きはやってるよ？」
「いや、というかさ、そもそも私達の学校ってクラス内でグループ分かれるほど人数いないからね」
「１５人ほどだしな・・・Ｂ組はそれでも女子が多い方だけど。こうやって皆で集まってる時点で男女ですら分かれてないもんな」
仲いいことはいいことだぜーと細川が言って、皆それぞれの反応をする。
確かに俺の悩みに対してこうして話し合ってくれているのだから、彼らは人がいい。
いいクラスメートを持ったとは思う。・・・同時に個性の強いクラスメートを持ってしまったとも思うけど。
「女同士でどっか行ったりってしないのか？」
「うーん、やりたいとは思うんだけど、クラブと特にグループの活動があるでしょ？放課後って結構忙しいからそういうの難しいのよね」
「土日はー葉月ちゃんバイト入ったりーだし。バイトっていきなり入るものなのー？」
「いや、一応週でスケジュール決まってるはずだけどね。葉月のバイトって人手が足りないんでよく呼び出されるらしい」
定期考査の結果に従い小遣いが止められて、葉月に同じバイト先を紹介された隆による情報だ。

そういえばバイトでの葉月はどんな感じなのだろうか？そっちで何とか打開策が見つかれば万々歳なのだが。
「蕎麦屋だっけ？今度行って見ようかなぁ。接待やってるんだよね」
「ウェイトレス姿の葉月ちゃんはー見てみたいけどねー」
「あ、そうだ！学園祭！ちょうどいいイベントじゃん！」
「メイド喫茶でもやろうってか？飛騨よ、残念ながらな1年は観覧だけだ」
「あーそっか。結構いいアイディアだと思ったのにね・・・・・・。あれ？というかもう夏休み始まるんじゃない？」
「あぁー、忘れてた。体育祭終わったらそのまま夏休みじゃない！皆でどこか行けないかしら？」
「長期休暇となれば空きぐらいできるよね。夜に花火とかやるのはどう？」
それは楽しそうな話なのだが、
「男女混同で行くと”女子的イベント”やらにならないんじゃないか？」
「確かに・・・・・・ならさ、夕方まで男女別行動して合流すればどうだ？」
「聡一君ナイス！それでいこうよ。一石二鳥♪」
布衣菜がメモ用紙を取り出して、『夏休み花火大会』と書いた。
それを切り取ってテーブルに乗せる。
「でもなー。学園祭はもったいないよな、割といいチャンスだと思ったんだが」
「いやいやいや、バイトと変わらないんじゃない？服装が派手になるだけでしょ？というか趣向が違う気がする」
「んー、要するに自分にもう少し意識を向けさせればいいんだろう？見られる快感（よろこび）に目覚めれば――ふぐぉ！」
聡一は両隣と向かい側から叩かれた。時間差で俺も一撃加える。
「痛いな・・・真剣に言ったのに・・・・・・」
「何か貴方が言うと危ないのよね」

朝風が言い捨てた。

／

西谷がリタイアした。

若内が身近なところからと彼らクラスメートを執拗に追いかけ、逃げられては追い詰めるという繰り返しの後、ついに1人を捕まえることに成功したのだ。

能力関係なく運動神経のよい若内はあっさり西谷のペンダントを毟り取り終え、既に次のターゲットを四十万に定めている。

「俺は若内に5口賭ける」

朽網が新しくどこかから持ってきたジェリービーンズを大皿に移しながら言った。

何かというと1口200円の賭け勝負だ。四十万か若内かどっちが勝つかというのをここにいる皆で賭けている。

織神を入れると賭けが成立しないので、残った2人だけでやっているわけだが、それでも若内が人気だ。

「僕も若内に2口な」

盛られたビーンズを早々に口に放り込む。

うん、懐かしい味。これって外国のと日本のとで味が全く違う気がするんだよな。日本人の味覚に合わせて変えてあるのだろうか？やはり日本の物の方がおいしい。

一通り賭ける相手と口数が決まったらしく、布衣菜がさきほどのとは違うメモ用紙をテーブルの上に加えた。

「圧倒的にわかっちが多いよねー」

「隆はここぞというところで、勝負弱そうだからなぁ」

「まぁ、でもその代わり勝ったら配分大きいしー。私にはうれしいねぇ」

何か確信があるのか、自信満々に四十万に10口賭けた細川がにいっと口を歪める。

と、そこでインターホンがなった。
おそらく西谷だろう。
僕の時と同じように細川が立って、とたとたと玄関の方へと消えていく。
ぼやけた声が何行分か聞こえてきた後、細川が西谷を連れて来た。
「ほーい、皆さんお久しぶりで」
「結局ほとんど全滅状態だよね、うちのクラス」
そぞろんやっぱえげつないわー、とぼやきながら西谷はテーブルの空きスペースに滑り込む。
「で、何の話してるの？」
「んー、葉月ちゃん以外の生き残り2人でどっちが勝つか賭けてるんだけどね。1口200円で」
「じゃあ私はしじまんに5口だね」
即答。何だろう？細川と西谷の間には共通の有力情報でもあるのだろうか？
「他には？ずっとお菓子とジュースお供にしてしゃべってたの？」
「あー、織神を人間界にどう戻そうかという話をしてた」
ちなみに現在あいつがいるのは魔界というのが僕の勝手なイメージだ。
「ほほぅ。そんなもの、くしろんに惚れさせれば万事解決じゃねぇですかね？」
ほらみろ。僕達の話を聞いてなかった西谷でさえ同じ結論に達したじゃないか。
朽網の方に目をやると、本日2度目の精神攻撃に頭を抱えていた。
「だいたいどこが気に入らないっていうんだ。朽網よ、外見は申し分ないし、何よりあれだけ懐かれておいて・・・・・・」
朽網がどうもはっきりした態度を示さないので問い詰めてみた。
「外見がいいって言うけどな葉月は形骸変容（メタモルフォーゼ）なわけで・・・。そこはあんまり関係ないだろう？」
「あれだけ懐かれておいて・・・」

畳み掛ける。重要なのはこの点に尽きる。
「懐かれてると逆に距離感が難しいものなんだけどな・・・・・・」
あ、懐かれてるのは認めたか。
そのたった一言を口から捻り出すために、随分顔を赤くしている。
それを隠すためにコップを口に持っていっていく辺りが生々しい。
そこに、
「ふぅーん？懐かれてる？またまたぁ～、同じ屋根の下で一晩過ごせるくらい仲いいのに？」
西谷が爆弾を投下する。いやらしい笑顔がチャーミング・・・・・・
・とでも言えば聞こえがいいのか悪いのか。
衝撃の情報を同空間で共有したクラスメート達は固まっている。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・何？」
思わず僕も聞き返してしまった。
――ゴパッハァ・・・ゲホゲホゲホッケ・・ホ・・・・・・ッエホ、ケホ・・・ォエ・・・ウぇ・・・・・・・
朽網は盛大に咽た。咽方がひどい。真面目にやばい量のジュースが気管支に入ったらしい。
「西谷それもっと詳しく」
「しじまんに聞いたんだけどね。はづきんとくしろんの家って遠いでしょ？だから夜遅くなった時そのまま泊まれるようにってはづきんの部屋があるとか」
「ちょっと待った！」
咳き込みの呪いから開放された朽網が弁解する。
「葉月の部屋はあいつがアパート暮らししだした頃からあるから！小６辺りからの習慣！」
「この前の定期考査の時、勉強会と称して泊まっていったってしじまんが」
「ということは女になった後も泊まってるわけだよな。・・・・・・さすがにまずいだろ」
「部屋には鍵付いてるって！最近わざわざつけたんだよ！」

「そもそもはづきんが鍵閉めるとも思えないけどね」
「・・・・・・」
ついに無言になってしまう朽網。
心配しなくても僕達はお前がヘタレだと知っているから安心しろ。
例え同室で一晩過ごすことになってもお前には手は出せないさ。
「というわけで朽網があんな感じなので、議論はストップしてるわけだ」
「ふむふむ。まぁ、じゃあ仕方ないんじゃない？応急措置で我慢するしか
「応急措置・・・？」
西谷はにやりと笑った。

第17話－　待機班。－Ｒｅｓｔ－（後書き）

学校が始まりました。
分かってはいたんですが、全く行く気になれないです。
恐るべし怠け心！恐るべし大学の講義選択制！
真面目に単位が足りなくなるかも。

体育会編はたぶん次と次辺りで決着着くのかな・・・？といった感じです。
それが終われば夏休み。やっとここまで来たか・・・。

第１８話－　捕食犯。－Ｇｈｏｓｔ－（前書き）

★キャラ人気投票実施中★
評価／感想のページかメッセージかで、
１人１回で３点を分割して複数にでもまとめて１人にでも自由に入れてください。

数が足りない場合は自然消滅するので、入れてくださるとすごく助かります。

第１８話－　捕食犯。－Ｇｈｏｓｔ－

長い夏の昼が終わりを告げている。
あれだけ五月蝿かった蝉の鳴き声も今は落ち着き、今鳴いているのはヒグラシぐらいだ。
斜陽してオレンジを帯びた光が校舎を射し、それによってできた影の色合いは濃い。
序盤である程度数が減り、昼から夕方にかけて篩(ふる)いにかけられた生徒達は、今現在疲労により一時休息を取っている。
そのためか非常に静かな構内に、
――ガカンッ
１つ大きな音が響いた。
固く閉じられていたロッカーがまるで何かが孵化するように開いたのだ。
「ふぁあ～あ・・・」
欠伸をして、頭を左右に振る。
その動作は小動物の仕草に似てなくもないのだが、例えるなら猫ジャラシに飛びつく百獣(ライオン)の王と言った方がしっくりくる。
眠たげな瞳を一度閉じて、開き直す。
大きな目が琥珀色から一瞬、光を反射して白く光った。
まだ人数の残っていた昼頃から夕方の今まで体力回復に専念していた実力者は、人数が減り疲労がたまったこの時間に、学校を超えて様々な生徒が入り乱れるこの時刻に活動を再開する。
夜になり多くの人間が視界を奪われるこの時間帯こそ、織神葉月の独壇場(フィールド)だ。
――とたとたとたんっ
軽やかに、しなやかに、葉月は夕闇に消えていった。

／

鬼ごっこというのは実に不平等な遊びだと思う。
鬼は相手を攻撃する手段を持っているのに、逃げる側は抵抗できずにただ逃げ回るだけだ。
いや、”鬼”ごっこというのはそもそもそういうものなのか。
その昔割と真剣に信じられていた”鬼”による誘拐から逃げる風習が遊びになったものだったっけ？
名前からするとそんな感じがするが、まぁ正直どうでもいい話だ。
問題は楚々絽である。
なんであいつはあんなに体力があるのだろう。俺もそれなりに鍛えているつもりだったのだが、まさかあそこまで持久力がある奴だったとは思わなかった。
葉月とは違い能力的に身体強化ができるわけでもないのに、軽く1時間は走り回された。
その後も、隠れては見つかり追いかけられ・・・という嫌なサイクルを繰り返し、今現在に至る。
はっきり言って心臓に悪い。肺にも悪い。
冷静に考えれば、本当に鬼ごっこをやっているわけでもないのだから反撃すればいいのだろうが、完全に向こうのペースになってしまっている。
というか俺の方が攻撃系の能力なのにな。
普段から女子が政権を握っている我がクラスにいるせいか、攻めに転じにくくてしかたない。
座り込んだ壁から立ち上がり、振り向いて窓の外を見る。
陽は既に西にある建築物群の奥へと消えかかっていた。
この時間帯まで生き残れるとは思っていなかったなぁ。
葉月にすぐにやられてしまうはずだったのが、こうして何とか逃げおおせている。
そういえば葉月はどこへ行ったのだろう？
途中から見なくなったのだが、標的を変えたのか学校から出て行

ったのか。あるいはリタイアしたのかもしれない。
まぁ、ありえないんだろうが。
さて、こうしても仕方ないので教室から廊下に出る。
夕方までの間に大分生徒も減ったようで人影はない。
「・・・・・」
と言ったそばから、人が現れた。
「楚々絽・・・・・お前しつけぇ・・・」
向こうもさすがに疲れているようで表情が固い。力が入らなくなってきたのか微妙に足が震えている。
「どうも1-Bは私達と葉月だけになったみたいだからね。どうせなら私が葉月の取り分を横取りさせてもらう」
もうそろそろ逃げるのも限界だ。今後のことを考えても体力は温存しておきたい。
だが楚々絽はそう簡単に勝たしてくれる相手でもないのだろう。
こいつはガタイのいい男子生徒と真正面からやり合えると打算できるほどに運動神経に自信があるようだしな。
腰に力を入れる。とにかくあいつの持っているペンダントを潰せばいいんだ。
それだけなのだが、どうしても難しいことに思えてしまう。
相手にとってもそれは同じことだからか、実践不足で勝負に出る勇気がないからか・・・。
拳は握り締めても意味がないので開き、足のコンディションを確認する。
走り続けただけあって疲れてはいるものの、ちゃんと筋肉は動かせるようだ。途中で不意に力が抜けてしまうことがないかが心配ではあるが・・・・・。
楚々絽の方にしっかりと目を向け対峙する。
楚々絽はいつもの余裕を持った薄い笑みを浮かべて言った。
「さぁーて、そろそろ私も体力が限界だ」
そうか。ならおとなしくどっかで休んでおいてくれ。

ひっきりなしに俺を追い回してその台詞はねぇぞ。
「やっと立ち向かってくれる気になったみたいだし、これでおわっ――」
おわ・・・・・・何？
言葉が途中で途切れた。
楚々絽の口は『わ』の状態で開いたままになっている。
そして、
「終わった――――！！」
いきなり踵を返して走り出した。
その意味が分かった瞬間俺も振り返らずにそのまま走り出す。
猛ダッシュの末、楚々絽と並んで走るポジションを確保した上で一縷の望みを託して後ろを振り返った。
「・・・」
望み叶わず。
ゆらりゆらりと体を揺らすように歩を進める黒髪の少女の姿がそこにある。
「織神様が御光臨なさりやがった――――っ！」

／

陽が、完全に沈んだ。辺り一面真っ暗で自分が鳥目になってしまったのかという錯覚すら覚える。
本来なら自動的に点灯する街路灯の類はこの競技期間中においては例外的に作動しない。
能力による格差を広げるためにわざと環境を厳しく作り上げているのだ。
もちろん学園外を見渡せば町の光が見えるため全くの暗闇というわけではないのだが、近くの様子を観察できるほどに鮮明な視界は確保できない。
「よし・・・っ！」

長時間の休息に固くなった体を解し、何も見えない周りを見回す。
自分が使い慣れているＰＫ系能力の能力波に限っては感知できる彼女は、それを使って生き残った敵を探った。
長く休んだとはいえ、途中で邪魔が入ったため回復は7割ほど。けれど、体力温存を図る気はさらさらない。
寝る時に敷いていた今回大活躍だった相棒を手で持ち、今回は歩いて敵地に向かう。
好みのど派手な登場はひとまず我慢して、敵の状況を探査するつもりだ。
大分ボロボロになったジャージの損傷を手探りで再度確認し、喉の具合も確認する。
途中見つけたアイテムボックスの中に入っていたペットボトルの水を流し込んだ。
懐中電灯があれば言うことなしなのだが、ないものを欲しても仕方あるまい。
彼女は力強い足取りで第一中学校に進み始めた。

／

逃走中。
超、必死で逃走中。
廊下を走り、角を何度も曲がり、階段を降りてまた廊下を走る。
今までの逃走とは違い、相手は楚々絽じゃないし途中で横槍を入れてくれる生徒もいない。
そもそもこの校舎内に俺ら以外の人間が生き残っているのかすら疑わしいのだ。
何より俺らの能力は発破系能力と探査系能力だ。楚々絽は言わずもがな、大して威力のでない俺の能力も攻撃性は期待できない。
楚々絽と並んで走っている今、唯一の望みは二手に分かれた時にこいつに葉月がついていく・・・憑いていくことぐらいだ。

「何とかしろよ！ＰＫだろう！？」
「残念ながらな、俺の能力じゃ目くらましにもならねぇよ。お前こそ自慢の体術で何とかしろ」
「体術って基本対人間作法なんだよ！アレは論外！髪を無数に手の代替物にできるようなのと組み手ができるか！」
醜く言い争い、何度目かの角を曲がる。
それこそ鬼ごっこであるのなら物陰にでも隠れればいいのだが、これの鬼は鼻が利く。ついでに近くなら熱も感知できると言っていた気もする。
走っても走っても行き止まりは来ない。その点において校舎が広いのは助かったが、いつまでも逃げ続けることなど不可能だ。
葉月は付かず離れず絶妙な距離を保ちながら追ってきている。
その気になれば一気に追いつくことができるだろうに、こっちの体力がなくなるのを待っているらしい。
獣が一度捕まえた獲物をわざと逃がして愉しむというのをどこかで聞いたことがあるが、まさしくそれだ。
捕まえようと思えばまとめて根こそぎ捕まえられたはずなのに１人ずつ引きずり込んで恐怖心を煽り、反応を愉しんでいる。
あまり目立って趣味のあるように思えない葉月だが、ひょっとしたらこういうのが好きなのか。
・・・・・嫌な趣味だ。
「ここはじゃんけんでどちらかが囮になるべきだ！」
楚々絽が提案してくる。
まぁ、確かにその通り。
その通りなのだが、何故か納得いかない。
あぁ・・・そうか、忘れてたがこいつ裏切り者だった。
・・・・・、そうか。
「いい手があった！」
ポンと手を叩く。
そうだ、これしかない。

「何！何か案があるのか！？」
期待の眼差しを向ける楚々絽。
ああ、あるとも。
俺は何も言わず、隣の楚々絽の体を後に押した。
走っている最中だった彼女は重心のずれを修正できずに尻餅をつく。
そんな楚々絽に俺は短く敬礼。
「じゃっ！後はがんばれ！！」
「隆ぁあ！！やりやがったなぁぁぁあああああ！！！」
先に裏切ったのはお前の方だろうが。
天罰だ。甘んじて葉月の餌食になってくれ。
足に力を入れ直し、今度こそ全速力。
せっかく手に入れたわずかな時間を最大限に活用せねば。

／

リタイアを覚悟した最後の最後に乱入した恐怖の大魔王によって救われるどころか、戦況は余計酷くなった。
逃げ惑う灯秋（とうしゅう）高校の生徒達、当然ながら混乱状態の僕ら香春（こうしゅん）高校、気持ちよく哄笑しながら破壊活動に勤しむ劫火（ごうか）の女子生徒。
阿鼻叫喚。
熱によって作られた気流を使い、窓ガラスを叩き割り、換気して粉塵を外に吹き飛ばした後、実に楽しそうにそこらじゅうを爆破していく彼女を止める者はなく・・・。
床に割れて落ちていた卵は目玉焼きになり、生地はクレープっぽく絶妙な加減で熱せられ、クリームは袋が破裂して飛び散った。
混乱に乗じて逃げ出した僕らだったけど、その数はどんどんと減っていって現在に至る。
というか、つい先ほどまで一緒にいた副委員長の蕗の薹ちゃんが道中やられてしまい、今や僕1人になってしまった。

予知能力者である僕、土筆は正直今後やっていく自信がありません。

と、ポッケに入れたモバイルが振動。

どうやらメッセージらしい。

見てみると、『生き残りが２０人切りました。これより活動範囲が狭くなります。３０分以内に指定範囲内に移動を完了していない場合は失格となります。』とある。

肝心のその範囲は『現在最も生徒数の多い第一中学校周辺に範囲を限定。』とのこと。添付された地図に詳しい範囲が示されている。

・・・・・・。これ以上動きたくないな・・・。

しかも一番人の多い、運以外でこの時間帯まで生き残った強者のいる所になんて。

でもこのまま失格になったら点数的にはマイナスなんだろう。

仕方ない。行くだけ行ってみるか。

／

尊い・・・・・・いや、尊くもない犠牲によってなんとか生き延びることができた。

楚々絽は・・・まぁ、駄目だったろうな。

全ッ然後ろめたくはない。むしろ清々しいぐらいだ。

いいことした後は気持ちがいいな。

と、と、と。

いつの間にか周りが真っ暗になっていた。

窓から外を見ると、太陽の頭部分が向こうにほんの少しだけ残っているのみだ。

「やばいな・・・」

月や星の光で十分目の見える葉月と違い、俺は暗闇で動けそうにない。

先ほどのメッセージのことも考慮すれば、これから各地に散らば

った生き残りがここにやってくるのだろうが、その前に電源を回復させておきたい。
暗闇の中に隠れたところで、どうせ葉月には見つかるからな。
昼間ブレーカーが落とされて、おそらくそのままだろう。
ブレーカーは確か職員室の近くにあったはずだ。
動けば葉月に見つかる可能性が高まるが、今更ちっぽけな保身に走っている場合じゃない。
今後の勝率を上げるためにも電気の確保は最優先。
夜は葉月にとって絶好の戦場に違いない。相手は視界を失って機動力が激減し、自分は相手に気づかれずに接近できるのだ。
立ち上がり、走り出す。
現在地は2階、職員室は当然1階だ。
「いや・・・葉月が待ち伏せしている可能性もあるのか」
慎重を期しなければならないらしい。
確か、教室に懐中電灯があったよな。バケツと一緒に置いてあって、葉月による盗難に遭わなかったはず・・・。
そう思い、1‐Bの教室に一度戻った。
もうほとんど周りが見えなくなった室内を頭の中の地図を頼りに探り、ようやくそれらしい物を見つける。
カコッと音がして教室に一筋の光が生まれた。
居場所がばれるとまずいので、手で覆って光を弱める。
他に・・・他に使えそうなものは・・・・・？
教壇の中、ロッカーの中とチェックしていくが昼間の時と同じで何もない。
望み薄だが、各々の机も調べてみる。全部で15ほどなので数自体は多くもない。
繰り返し作業のように淡々と見ていく俺の手は1つの机で止まった。
懐中電灯で照らす。
「・・・・・・・・・・・・」

この机は楚々紹のだ。
なるほど。これを見るに、あいつは始めから俺らを裏切るつもりだったらしい。
「あの野郎・・・・・・」
とにかく、俺は思わぬアイテムを得た。

／

例年の傾向として、終盤の戦地に選ばれるのはどこかの中学校となることがほとんどである。
まだ能力を使いきれていない生徒同士の戦いが主になるため、逃げ延びる生徒が高校に比べて多いからだ。
高校の場合、能力の使い方が上達している分、同じ人口密度であっても生存率は低くなる。
だから、彼は陽が沈み始めた時点で中学校が密集している地区に移動を開始していた。
「この時刻で既に２０人・・・。行動制限範囲は第一中学の敷地内。校舎には入らずに外で様子を見るか？いや、入ってどこかに潜んでおくべきか・・・」
程なくして第一中学の敷地に入った。
低いフェンスで囲まれた学校の裏側、駐車場。
当然ながら車は一台もないので、広い空間が保たれている。
もっとも、運動場の方が断然広いだろう。
彼は難なく校舎内に入り込むことに成功した。
完全に陽が沈み、構内は真っ暗だ。
暗所で視界を確保する彼の能力はこういう時にこそ役に立つ。
逆に言えば、夜になるまでの間全くの役立たずのため、昼間で隠れきる必要があった。
隠れた上で夜まで生き残れずリタイアした場合には成績は望めなかったが、そこは賭けだった。

まだ生き残った全員が揃っているわけでもないらしいと判断し、今のうちに構内の地図ぐらい見つようと彼は廊下を歩き出す。
リタイアしたこの学校の生徒が持参した地図を落として行ったりするものなので、案外簡単に入手できるのだ。
注意深く周りを見回し、教室も見て回る。
そして1つの教室の前で立ち止まった。
開いた引き戸の置くに、何かがある。
教室のプレートを見ると『1‐B』と書かれている。
注意深く教室に入っていくと、見覚えのある箱だった。
「アイテムボックス・・・」
彼は一昨年、一度だけ運良く見つけられたことを思い出した。
(けど、この時間帯、この場所にあったんじゃ、中身は取られれる・・・よな)
そうは思うものの、一応確認するのが、もしかしたらと考えてしまうのが、人間である。
周りに人気がないのをよく確認して、すばやく近づく。
アイテムボックスは幅1mほどある大きな箱だ。
本来なら中にお菓子や携帯食料、飲料水が入っている。ラッキーな場合は懐中電灯や使える武器が入っていることがあるというが、真偽は不明。
とにかく一日中走り回るはめになることもあるこの競技では、非常にありがたいシステムと言える。
「よっと・・・」
閉まっている蓋に手をかけてゆっくりと持ち上げた。
――瞬間、ぬぅっと箱の中の暗闇から伸びた手に蓋を持った腕を掴まれる。
「大・当・た・り♪」
そのまま引き込まれる上半身。

バタンッと支えを失った蓋が閉まり、彼の体が挟まれる。
しばらくしてバタバタという足の抵抗がピタリと止んだ。

蓋が開いてコンパクトに箱に収まっていた少女が顔を出した。
「さぁて、そろそろ本領発揮といきますか」

／

職員室は教室を2つ分繋げたような部屋だ。出入り口も計4つある。
あまり入る機会がない場所なだけに内部構造は知らないが、昼ブレーカーが落とされた時に、その位置だけは確認しておいたのでここにあることだけは分かっているのだ。
壁際にあるのは間違いないし、4面の内当然廊下側と運動場側の壁はありえない。となると残りは2面となるのだが、そのどっちだったかがいまいち思い出せない。
縦に長細いので、残りの対面する辺までの距離というのは結構ある。
葉月が潜んでいる可能性はあるし、潜まれると気づきようがないぐらい広い・・・。
さて、と。
ここからが正念場なのだろう。
正直、全く自信がないのだが、やるしかない。
共同訓練で、無理だろうなとは思いつつ一応真面目に仕組みを教わったスキルの中で何とか様になった幾つかの能力。
まだ、全然実用段階ではないが。
廊下から、教室に近い方の端の引き戸を少しだけ開ける。
片目を閉じて中を確認、できるだけ自分から遠い机に目をつけた。
机の上にペン立てが置いてある。
破壊されかねないので、事前に各自所有物は非難させてあるのだ

が、嵩張ったのかそのまま置きっぱなしにされたらしい。
さすがに中身は抜かれてあるが、缶製のペン立てとは都合がいい。
指先をドアの隙間から室内に差し入れ、集中する。
時間がかかるのが難なのだが・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・。
――カーンッ、カンッ・・・カラカラからカラからから・・・・・・
・
遠距離の能力発現で、ペン立てを弾き飛ばした。
床に落ちたそれは、静かな室内に驚くほど音を響かせる。
気を引き締めて、中の様子を伺う。
・・・・・・・１０秒・・・・・・２０秒・・・・・・・・・・・・・・
４０・・・・・・・・・・１分！
本来ならもう少し見守っていたいところなのだが、これ以上待つと他の場所から葉月が駆けつけかねない。
一気に扉を引いて、中に侵入する。
懐中電灯を突き出し、走りながら壁を確認する。
鍵を並べてぶら下げている箇所、連絡用のホワイトボード、幾つものポスター・・・・・・。
こっち側の壁にはない。あっちか！
できるだけ早くここを離脱しなければいけないっていうのに！
オフィスデスクの間を抜け、対壁へと向かう。
先に向こうの壁に届いた光が、小さな視野を作り出した。
それを移動させて、探索時間を短縮させる。
「っ！これか！」
ブレーカーのイメージに合った黒いスイッチがスポットの中に一瞬入ったのを見逃さず、光を改めて標的にロックオンする。
しかし、体が壁に大分近づいたところで、走りが止まった。
失速して、慣性が働いたようにゆるゆると足が進み、壁に手が届く。
懐中電灯が照らし出したパチパチと上下に動かす、あのスイッチ。

その下にあっただろう配線が壁のコンクリートごと抉られている。
それが昼の時にやられたものか、後になって改めて壊したものかは別として、ブレーカーは今現在機能を失っている――――。
「あ〝――くそっ！！」
踵を９０度回転させて、引き戸にダッシュ、職員室から離脱を図る。
作戦失敗。最悪だ。
この構内は完全に葉月の狩場と化していた。

／

――不気味なぐらい静かだ。
僕はそんな感想をこの第一中学校舎に抱いた。
制限時間の３０分ギリギリに敷地内に入った僕にしてみれば、先にどんちゃんやってくれていた方が気持ちが楽だったのだけど、生き残り全員が集まっているはずの場所としては音というものが完全に欠けている。
外では目立つと思って懐中電灯は消してあるため、周りはほとんど見えない。
ここにはあの大魔王がいるはずなのだ。なのに、その気配がない。昼でさえあれほど目立っていたのに、夜の今、光すら見えない。
リタイアした・・・のかな。あれほど強い人が？
疑問を感じながらも、玄関口から校舎内に入った。
懐中電灯ではなく、モバイル画面の光を利用してできるだけ見つからないように身を低くして歩く。
ガラスが割れていたりと、廃墟みたいで正直肝試しをしている気分だ。
「・・・わっぷ！？」
いきなり何かが口の中に入った。
気持ち悪い。どうも糸のようなものようだけど、まさか本当に廃

嘘らしく蜘蛛の巣じゃないよね・・・。
舌を動かすだけではどうも取れないので、抵抗はあるけれど、指を入れて取り出す。
暗くて見えないけど、やっぱり何かの糸だった。
校舎が崩壊気味で、何かが剥がれたりしているのかもしれない。
まぁ、いいか。
それを捨てて、僕は再び歩き――――

「きゅっ！？」

／

暗すぎる校舎の廊下は、歩くだけで身が冷える思いだ。
最終局面である今の状況に相応しくなく、この空間は人気（ひとけ）がなさ過ぎる。
１つの教室で試してみたのだが、電気は点かないようだ。
誰かがブレーカーを落とした。あるいは壊した。
この暗闇に乗じて生徒を襲う何かがいる。
それに加えてこの静けさだ。
活動範囲がここまで狭まって１０人以上がいるというのに、戦闘がまるで起こってもいない。
１人ずつ、各個撃破されているのか・・・？
となると、こうして１人でいるのはまずい。
敵でもいいからとにかくめぐり合って、構内を騒がしくさせるべきだな。
でなければ、闇に乗じて１人１人敵を潰してくるその何者かの思う壺だ。
手っ取り早く、火球でも作り出してここの居場所を他の生徒達に知らせようか？
と、そこで足に何かが引っかかった。

「ん？」
ビィーンという音。
何かを細い物を足で切ってしまったらしい。
しゃがんで確認すると、黒い糸だった。・・・いや、髪か。
やたらと長い髪が廊下に落ちていた。
どうやら、これを切ったみたいだ。
・・・・・・切った？髪を？廊下に張られてある、髪？
・・・何で髪が廊下に張り巡らされている？
「しまっ！！『蜘蛛の巣』か！！！」
まずいまずいまずい！
位置を知られた！
咄嗟に掌に火球を作る。周りが一気に明るくなり、半径２ｍほどの廊下が露になる。
振り向いた先の、まだ暗い闇の中から黒い触手のようなものが自分に向かって伸びてきていた。
「――――ッ！」
よく目を凝らすと、その触手は１本だけでなく無数に蠢いていた。
そのさらに奥にきらりと光る両眼を確認。
・・・なんだ、これは。

／

しゅるるるるるるるぅうるるる・・・・・・という連続した絹擦れのような音。
弱すぎる月明かりによって浮き上がる非現実的なシルエット。
そのわけの分からない何かが廊下を徘徊している。
昼間に乱戦に巻き込まれて、何とか１人だけ逃れてきた隅美月（すみみつき）は教室の端に縮こまり震えていた。
彼女がソレを初めて見たのは、廊下の窓越しだった。
中庭を挟むようにコの字型になっている校舎の廊下から、対面す

る向こう側の廊下にソレがいるのを見たのだ。
いきなり火が上がったために浮かび上がったその姿に危うく悲鳴を上げそうになった。
一体何が起こっているのか、全く分からない。
彼女は、昼間の件で命辛々走った後、2階に下りて通常使われていない道具入れに滑り込んだ。
学期始めの大掃除にしか使わない洗剤などを入れてあるその倉庫は、壁と一体になっているもので、いつもは鍵がかかっている。
運良く開錠されていることを知った彼女はそこでひとまず隠れることにした。
壁をくり抜いたような構造のそこは狭い上窓もなく、閉めると真っ暗だったため、息を整えている内に彼女は精神的な疲労のせいか寝入ってしまったのだ。
目を覚まして道具入れの扉を開けたら、いつの間にか構内は真っ暗で、夜まで寝過ごしてしまったことに気がついた。
その後、馬鹿をやったとあわてて廊下を飛び出しての移動中にソレを見て現在に至る。
（落ち着け私落ち着け私・・・！そうよ、大丈夫。私が今参加しているのは体育祭競技のバトルロワイヤルよ。化け物なんていない幽霊なんていない。寝てる間に異次元に来たとかそんなことあるわけないわ。大丈夫ダイジョウブ、そうよここは私の知ってる第一中学校の校舎じゃない。異次元アリエナイ。でも、もしかしたら学校のお化け・・・ないないないっ！お化けなんてないさお化けなんて嘘さ寝ぼけた人が見間違えたのさだけどちょっとだけどちょっと・・・・・落ち着け落ち着け私、それは歌の歌詞よっ！）
ガタガタ体が震えていうことをきかない。ガチガチ奥歯がなって余計に恐怖が増幅される。
もう、限界が来ていた。
（・・・そうよっ！こんなところとっとと出ちゃえばいいのよ！お化けは校舎にいるモノなんだから！外にはやって来ない！！）

そのためには一度教室から出て、その”お化け”がいるかもしれない廊下を通らなければならないことを彼女はちゃんと理解しているのだろうか？

現在地は2階の教室であるため、当然ながら階段も使わなければならない。

彼女はふらふらと立ち上がり、教室の引き戸に手をかけた。

「よし、大丈夫・・・。一気に走り抜ける。一気よ一気!!立ち止まらなきゃ問題ないわ。振り向かなきゃ怖くないわ」

自分の現在地から階段を通り、一番近い出入り口から外に出るまでのルートを頭の中に思い描く。

何度か力を入れることに失敗した後、ついに彼女は引き戸を開けた。

不幸にも遠い階段目がけて疾走する。

ところが、その猛ダッシュは途中で何者かに捕まって止められた。

「〜〜〜〜っ!!!」

悲鳴を上げる前に口を塞がれる。

「しっ!声を出すなよ、葉月に聞こえる」

その相手が人語をしゃべる、思考のある、体温のあるものだと分かって、彼女は強張らせた体の緊張を少し解く。

「ここはまずい。移動するぞ」

羽交い絞めされている体制で隅は彼、四十万隆に引きずられていった。

場所は美術準備室。窓ガラスが割れて、夜風が入り込んできていた。

「な、何で私を止めたの・・・」

「あのまま行ったらセンサーにかかって葉月にやられてんぞ。近くにいる俺までとばっちりだ」

「センサー・・・・・？」

「廊下のあちこちに髪の毛が張り巡らせてあるんだ。それに誰かが引っかかると振動で葉月に位置がバレる。・・・・・蜘蛛の巣の

原理だな」
その巣に一直線に突き進むところだった自分の行為の恐ろしさに震え上がる隅。
「葉月って？あの化け物のこと・・・？」
「・・・一応人型だぞ？うようよしてるのは髪の束だ」
それを聞いてほっとした彼女は、体中の力が抜けて床にへたり込んでしまった。
異次元じゃなかったお化けじゃなかった化け物じゃなかった・・・とブツブツ呟いている。
それから彼に訊いた。
「ねぇ、髪の毛で人の位置を探ってるってことは、その髪の毛さえ避ければここから出られるよね？」
それは一縷の希望だったが、
「ああ、そりゃ無理だな」
即答で切り捨てられる。
彼女は目を潤わせた。
「な、何で！」
「葉月は自分が歩いた道筋に髪を張っていってるみたいなんだがな。さっき降りようとしていた階段にも、もう2つある階段にも既に巡らされてる。この階だって、半分ほどやられてるし、1階も同じだろうな。
じゃなきゃ俺だってこんなとこ出てるさ。何も考えずにこの階に逃げてきていたらいつの間にか包囲されてチェックメイト、ってわけだ」
「だけど！四つん這いとか！うまく避ければ！」
「人の通れる隙間なんてねぇよ。
そもそもな、葉月は夜目があるし鼻も利く。本来俺らなんて既に見つかってておかしくないんだ。それなのにこうして無事なのは葉月が自分でルールを定めているだと俺は推測するね。『糸にかかった奴から襲う』っていうゲームなんだろうよ」

「そんな・・・」
隆は自嘲気味に続ける。
「覚悟しろよー？葉月は半端なく怖いぞ。昼でもホラーだったが夜こそ怪談の本番だしな。しかもこうやって固まっている時は一気に襲わずに1人ず削っていくんだ、あいつは。残った奴の恐怖心を煽るためにな・・・」
と、調子よく話していた隆だが、そこで異変に気づく。
「・・・どうした？」
ひっく、えぐっという音が聞こえ、どうも震えが再発したらしい彼女。
顔を覗き込むように、様子を確認しようとしたところを、いきなり抱きつかれた。
「いやぁぁぁあああ！もう嫌ぁあ！！出る！こんなとこから出るぅぅぅぅうう！！！」
彼のジャージに顔を深く埋めているためくぐもった声しか出ていないが、それでも他に音のない構内には響く大きさだ。
「ちょっ、待て待て待て！！マジやばいから！」
さすがに声を出すのがまずいとパニックに陥った頭でも分かっているのか何とか声を堪えようとするが、それでも嗚咽が止まらない。
仕方ないので隆は自分の体を半ば締めつけている彼女をそのままに、しばらく待つことにした。
十分後。何とか、ある程度泣くのが収まった彼女が、やっと顔を上げた。
懐中電灯の明かりだけでは分かりづらいが、多分目は赤く腫れているのだろう。
「落ち着いたか？」
「ご、ごめんなさい・・・・・・」
彼女は思わず抱きついてしまった体を離す。
――チャプ・・・
それに合わせて水音がした。

今までまるで気づかなかったあることに気づいた彼女が咄嗟に手を下半部位に当てる。その確認作業の結果は非情なものだった。

それを見た隆もその事実に気づく。

「まさか・・・・・・」

「～～～～～～～～～ッ！！！！！！」

口に出そうとしたところ、彼女は今まで以上に目尻に涙を浮かばした。

また泣くのではないかと危惧した彼は先に釘を刺そうとする。

「き、気にするなって！誰だって怖いものは怖いし、失禁ぐらい――――」

泣いた。

第１８話－　捕食犯。－Ｇｈｏｓｔ－（後書き）

隆さんかける言葉間違ってるよ。

ある意味この体育会編で一番書きたかったシーンかもしれないですね。

隆・・・今まで活躍してなかったからなぁ。

そういえば、つい最近ホームページ作りました。

ｈｔｔｐ：／／ｃａｎｄｙ．ｚａｐｔｏ．ｏｒｇ／ｈｉｇａｎｎｏｈａｎａ／

まだ全然できてませんが、

キャラ覚えづらい・・・というお声にお答えできたらな、と。

第１９話－　利得伴。－Ｋ．ｎｉｇｈｔ－（前書き）

★キャラ人気投票実施中★
評価／感想のページかメッセージかで、
１人１回で３点を分割して複数にでもまとめて１人にでも自由に入れてください。

数が足りない場合は自然消滅するので、入れてくださるとすごく助かります。

第１９話－　利得伴。－Ｋ．ｎｉｇｈｔ－

再び泣き始めた隅美月が泣き終わった後、とりあえずそのままにしておくわけにおいかないので、使い物にならない彼女の下の衣服の代わりとして四十万隆が自分のジャージを提供した。
隆の方はジャージの下に短パンを履いていたので全く問題ない。
脱いだ服を教室の端に押しやり、まともに会話できるようになったところで両者改めて自己紹介から始める。
「私は隅美月、３‐Ｅで能力は透視能力（クレヤボイアンス）・・・・・・・」
「四十万隆、能力は発破能力。ああ、１‐Ｂだ」
「・・・・・年下・・・」
新情報により、自分が年下の前で粗相をしたことを改めて知らされた美月が再びぐずり始めそうな兆候を見せたため隆が先に先手を打つ。
「な、なぁ、能力の透視範囲ってどれくらいなんだ？」
「ぅう・・・えと・・・１ｋｍぐらいかな」
「ってことは、この学校ぐらい見通せるよな？様子を探れないか？」
とにかく違うことに気を向かせようと、彼女に能力を使わせようとする隆。
美月はうーんと考える素振りを見せたが、首を振った。
「無理よ。確かに透視はできるけど、光がなければ何も見えない。せめて校舎の電気がついてればいいんだけど・・・」
「ブレーカーは葉月に切り裂かれてたからな・・・。となるとやっぱり強行突破か」
「うぅ・・・一応これでも、透視するものを選別したり透視阻害に影響されずに能力を使えたりできるからレベルは高いんだよ？」
色々と情けな過ぎたらしく顔を伏せて美月は弁明する。
「まぁそういうのは適材適所だ。強行突破は俺の役目ってことで」
「でも、無理やりにでも突破できるんなら、こんな仰々しいトラッ

プ仕掛けないんじゃない？」
「何も知らずに引っかかったら対処のしようがないが、俺らは知ってる分考える時間が与えられてんだ。
それに葉月はまだあの髪から高精度の情報は得ることができてなさそうだしな」
そういうと隆はジャージのポケットにしまいこんでいた巾着を取り出した。床に中身をばら撒く。
「なんでそんなことが分かるの？」
「葉月は器用に何でもこなす奴だがな、糸の振動でモノの場所を感知しようなんて行為が経験なしでぽっとできるとは思えねぇ。
夜風だって吹いてるし、そもそも髪は常に振動してるはずだ。揺れ方でそれが人によるものか見分けてるんだろうが、その分精度は落ちる。何より蜘蛛とじゃ経験の度合いが違う。感知する葉月（ほんたい）の性能がまだそこまで良くない、ことを期待しよう」
「じゃあ、少し髪に当たったぐらいなら大丈夫ってこと？」
「いや、連続で同じような場所だったり揺れた点を繋いだら線（ライン）を描くような場合は絶対やってくるだろうからあまり得策じゃない」
「じゃ、じゃあどうするの？」
「だから、コレだ」
そう言って床を指差す。
そこには隆が発掘した切り札が無造作に置かれている。
「これって・・・」
「今は亡きチームメイトの置き土産だ」
間接的とはいえ実質自分が屠ったというのにしれっと言い、彼はその戦利品をはさみでちょん切り始めた。分けて数を増やすつもりだ。
「ま、成功するかは五分五分ってところだが、何もしないよりはいい。
・・・好きなだけ感知してもらおうじゃないか、葉月には」

これより、何だか知らないうちに置いてきぼり食らい何故か生き残ってしまった2人組による逃走劇が始まる。

＃

教室を出れば、廊下が伸びたその一直線上に階段が下に消えていくのが薄っすらと確認できる。
隆はそこを歩いていき、葉月のセンサーギリギリで立ち止まった。しゃがみ込み、チョークで線を引く。
それを他の危険区域との境界でも繰り返して、教室の入り口で待っている美月のところまで引き返した。
「1階の出入り口ならこっちの階段からの方が近いよね？」
彼女が片方の階段を指差したが、隆はそれを否定する。
「いや。昼ぐらいに葉月が1階の教室の壁を壊して回ってたからな。こっちの教室に近い階段から降りて、壁の穴通った方が距離は短い。それに廊下より教室の方が髪を巡らされてる可能性は低いだろうな。あんまり廊下を長い距離移動するのは得策じゃない」
彼女に持たせていた切り札のいくつかを掴み取って、その導線を親指と人差し指の腹で擦る。
その作業を済ました後、チョークで引いた境界線に引き返した。
仕掛けを施したそれを上に繋がる階段へとできるだけ低く投げていく。それが終わったら次は下に、それから廊下の方にも滑らした。
他の階段でも同じようにして、再び彼女の方へと戻る。
「後残ったのは走りながら使う。ほれ、ライターだ」
彼女に向かって１００円ライターを投げ渡す隆。
彼女の方は、既に溢れそうになっている両手でそれを受け止める。
彼はその手から半分ほどを掴んで片手に握りこんだ。
「ＧＯサインで一気に階段を駆け下りて一番近い教室から外へ出る。手のやつは使いやすいように導線を一方向に揃えた方がいい。飛ばす時はいくつかに小分けしてできるだけ遠くにな」

彼女がその指示の1つ目を終わらしたのを確認して隆は自分の手の中にあるそれの3つほどの導火線に発破で火を点けた。
バチバチという音とフラッシュのように光を八方にちらつかせるそれを廊下の窓から放り出す。と同時に、
「行くぞ!!」
走り出した。
彼らが安全地帯と危険地帯の境界を越える前に、先に放り出されたそれの火は本体である火薬に到達した。
――パンパパッパパパンッ

爆竹。
それが静寂を守る構内に音を響かせる。
落ち葉を隠すなら森の中、センサーの当り(ヒット)を誤魔化すならありったけ誤作動させてやればいい。

／

髪をハンモックのように編み込んで優雅に獲物の掛かるのを待っていた僕の耳に、爆音が響き渡った。
「っやられた!」
体を跳ね上がらせ、ハンモックから飛び起きる。
音からして爆竹だ。いや、音だけならいい。指に絡めた髪の方が異常に揺れている。
爆竹が跳ねて髪を振動させている、ようだ。
多方向過ぎる。
どれが本物か。
あるいは全てが囮か。
・・・こんなことをするのは隆だろう。
けれども。
これが脱出を目的とした行動であるというのなら、1階を通るこ

とだけは確定されている。
逃がさない。
指の髪の毛を千切り、固くなった手を揉みながら、校長室から出た。

／

仕込みをしていた、先に階段や廊下に放っていた方の爆竹も爆発し、あちらこちらで火薬の音と臭いが溢れている。
走り、廊下を直線状に進みながら追加で爆竹に火を点けては投げていく。
ここまであからさまに振動やら音やらが氾濫しているような状況では、あのセンサーは役に立たない。
おそらく葉月は既に見限っているだろう。
だから、今こうして爆竹を投げているのは外れ（エラー）を起こさせるためではない。
窓の外や教室などに投げ込むことで音源をばらつかせることと火薬の臭いで葉月の鼻を誤魔化すためだ。
足音も消しくれるので助かる。
階段に到着して、勢いよく駆け下りるついでに上にもう４つほど爆竹を放り投げておいた。
爆ぜる爆竹の音を背中に受けて、階段を駆け下りきる。
廊下に出て、ちょうど斜めの方向に見える教室の引き戸へと体を向ける。
そこに。
その視界の端に、何かが映った。
懐中電灯を反射する一筋のジャージの蛍光素材・・・。
確認するまでもない。
葉月だ。
「はえぇっ！」

廊下の先、その２０ｍほど離れた場所にあいつはいた。
すぐさまその黒髪を伸ばしてくる。
ちっ、仕方ない。
ジャージのポケットに手を突っ込み、丸みを帯びた方を葉月のいる方に投げつける。
微妙に回転し、放物線を描きながら葉月の方へと飛んでいくそれを確認する余裕があるわけなく、俺は隅の腕引き教室の扉を開けた。
廊下でガラスの割れる音がし、そして閃光が瞬く。
閃光電球（フラッシュ・バルブ）と呼ばれる写真撮影用の使い捨て電球だ。
アルミニウム箔と酸素の封入された電球で、電気を流すと瞬間的に燃焼する。
俺の場合はそれを発破の火花で起動させた。
前に使った遠隔操作ではなく時限式の方法を使ったのだが、それはそっちの方が仕掛ける時間が大幅に短縮されるからだ。
しかし、声の１つも上げないところをみるとどうも発光の前に目でも閉じたらしい。
まぁ、元々効果があるとは思っていなかった。
一瞬でも動きが止まればいいと思っただけだ。
教室の中に入って中庭側の壁を見回すと、前の方に十分人の通れるほどの穴が開いていた。
だが、不運なことに、今俺達のいるのは後の扉だ。
最短距離である斜めでの横切りを数多くある机が遮っている。
考えている暇はない。
できるだけの最短距離を並べられた机を避ける形で進む。
「きゃぁあああぁぁぁぁあああ！！！」
しかし、その距離の半分も行かない内に後から悲鳴が上がった。
隅が葉月の髪に足を取られて引きずり込まれていた。
やっぱり俺を狙わない！最後に残す気だ。
そういう意味では、彼女は絶好の囮になっていたわけだが、さすがにこのまま放って行くのも気が引ける。

・・・使いたくなかったんだが・・・・・・。
もう一度ポケットに手を突っ込んで、最後の切り札を取り出した。
瓶とそれに蓋をしてあるコルク。普通極まりない瓶らしい瓶。
ただ、中に入っているのが普通じゃない。
見つけた時ラベルを確認して、どこで手に入れたのか呆れたぐらいだ。
それをドアから顔を出した葉月に向かって投げつける。
先と同じくそれはあいつ自身に当たる前に破裂した。
「っんがぁあああああああ！」
その臭いを直で嗅いでしまった葉月は隅に絡めていた髪も解いてしまい、挙句ほぼ後向きに廊下へと倒れていった。
バタバタと音がする。どうも悶絶しているらしい。
だろうな。
高濃度のＮＨ３（アンモニア）水溶液の刺激臭だ。
鼻のいい葉月には尚きついだろうよ。
この攻撃が一番効果のある人物は葉月だ。
なのに、こんなものを用意しておきながら昼間全く提示しなかった楚々絽は、疑う余地なく裏切る気満々だったわけである。
さて、ここにいるわけにもいかない。
座り込んでしまっている隅の腕を取って、すぐさまこの恐怖の館から退散した。

／

バタンバタンと体を弓形（ゆみなり）に反らしたり捻ったりしている内に、嗅覚を切ってしまえばいいことに気づいた。
それによって何とか酷い刺激臭から逃れることができて、壁に手をつきながら立ち上がる。
目尻に溜まった涙を拭く。
「や・ら・・・れた・・・・・・」

教室の中を見てみるけれど、当然ながら2人はいなかった。
追うことはできるけれど、今回は完敗だ。一度間を空けて態勢を整えたい。
・・・考えて見れば、隆にはこれで2度撃退されているのか・・・。
悔しい。悔しいな。悔しすぎるな。
よし、オッケー。次は絶対隆から潰そう。
などと決意を新たにしているとモバイルが振動した。
瞳孔を絞って、輝くディスプレイに目をやる。
『生存者残り5名』
どうも、僕が恐ろしい攻撃に悶絶している内に誰かがやられたらしい。
本当に・・・・・アンモニアなんてどこから用意してきたのだろう？
理科室の薬品は事前に取り除かれているはずなのに。
しかしあと5人か。
僕を含め隆ともう1人の娘で3人。残りは2人ということになる。
気分を変えてその2人に標的を移そう。

／

いきなりの爆音に慌てふためき、ちょうどいた食堂の長机の下に潜り込んでしまった私はそこから出られずにいた。
考えてみれば机の下に入るのは地震の時であって、あの爆音は誰かの能力によるものだろうからこんなところにいても意味がない。
けれど、この場合は単に怖がって咄嗟に行動してしまったという方が表現的には合っているわけで、じゃあこれで正しいと言えなくも・・・？
駄目だ。思考がおかしくなってる。
とにかくここから出なければならない。

しかし人間というものは恐怖を感じると狭い空間に縮こまってしまう性質があるのか、どうしても思い切りがつかない。

さすがは哺乳類。白亜紀時代からのヘタレ根性が抜けてないとみえる。

恐竜どもが謳歌していた地上から逃げ出して地中に住んでいた我らが祖先よ。君達のせいで私は今ひどく困ってる、何とかしてくれ。

さっきのメッセージからするにあの爆音騒ぎで誰かが犠牲になったらしい。

座標転移者（テレポーター）である私がこうして生き残っているのは、敵が現れた瞬間に戦闘離脱し続けた結果だ。

戦闘から逃げ続けているのだからそれでの成績は期待できないけれど、このまま最後まで生き残れば順位成績でお釣りがくる。

一種の賭けだ。でも私は逃げ足なら自信がある。

何せ座標転移（テレポート）の能力者だ。

自分を移動させることは朝飯前。自分自身の座標は設定が必要ないので最も簡単な転移動作だと言える。

けど、それは相手が視認できるという前提の上での話でしかない。

確認できない相手ほど怖いものはないのだ。

相手が自分を狙っていると分からないのでは能力なんて使いようがない。

だから能力者というのは基本的に不意打ちに弱い。

日常的な赤（コード・レッド）がその辺りの無意識下の能力持続発現について研究していたらしく、その資料が出されてはいるものの私は手をつけてなかった。

そこまで勉強熱心じゃないし。

研究者の作ったレポートって学生向けじゃないから読むのも辛いんだ。

ま、そんなのはどうでも――――

――コツンッ

足音が聞こえた。
誰かいる。
コツコツと靴が床を叩く音がして、それが近づいてきている。
どんどん大きくなる音に心臓が破裂しそうな思いだ。
机の下にいてよかった――！
動く必要なく、ここで様子を見ればいい。
大丈夫。この暗闇ではこんなところ見えはしない。
音も立ててないからこちらの存在は気づかれていないはず。
暗くてほとんど何も見えないけれど食堂の出入り口に目を凝らす。
何かが動いているかぐらいは分かる。誰かが来た時点で逃げ出せばいい。
――コツコツコツコツ・・・・・・ダッダッダッダッダダダ・・・
・
足音の感覚はどんどん短くなり、音自体も変わっていく。
床の性質が変わったせい、だろうか？
でも、でもそれなら・・・。廊下から、食堂に入って床が変わったというのなら。
もう、この食堂にいる、はず、なのに。
何かが、おかしい。
息が荒くなってきた。胸がくるしい。
それへの対処法など実に簡単だ。
さっさとここからテレポートすればいいだけ。
なのに、動けない。
怖いけれど、逃げたくない。
その怖いと思っている実体が一体なんなのかを確認するまでは、安心できない。
唐突に、足音が止まった。
周りを見回すけど、誰もいない。
焦らされるような空白。

何かが来ると分かっているのに、それがいつ来るか分からないという不安。
しかし、そんな不安はすぐに解消される。

机の脚越しに外を見ていた私の視界を遮るように、
女性の顔が上から覗き込んできた。
垂れる髪、光る目、歪む唇。

「ぎゃあああああああああぁあああぁあああああああああああ！！！」
いきなりの精神攻撃に、テレポートもせず机の下から這い出す私。
力がうまく入らない体を何とか、無理やり立ち上がらせて、さきほどまで女がいたはずの方へと振り向いた。
「え？」
……
誰もいない。
ちょっ、えっ？嘘！
さっきまで、いたはず、なんだけど。
・・・・・もしかして、幽霊？
なーんだ。敵じゃないんだ。よかったよかっ・・・・・・・よくねぇッ！
や、やばっ。ないよね？そんなわけないよね？
足音が聞こえたってことは足があるってことこだし！
いやでも姿見えなかった・・・。
――とんとん
そこでいきなり肩を叩かれた。
首だけを回すなんて器用な真似ができるわけもなく、体ごと一気に振り向く。
でもやっぱり誰もいない。
息苦しい。
どうしよう、とてつもなく心臓が痛い。

けど、やっぱり正体が掴めていないため、ここから離れられそうにない。
そんなこんなであちこち目を向けていると、次は微かに声が聞こえてきた。
耳を澄ますとそれがどうも笑い声だと言うことが分かった。
やべぇ。どうも幽霊の方っぽいっす。
その声がする方向を探ろうとするのだけど、木霊するようにあちこちに反響しているのか全く位置が定まっていない。
と、その笑い声も止まり、次は意味のある言葉が聞こえてくる。
「・・・ぁーごめ、かごめ・・・・・・」
咄嗟に振り向く。
「かーごのなーかのとーりはぁ、いーついーつ出ーやる」
再び、向いた先には暗闇しかない。
「つーるとかーめが滑ぇったー」
三度、けれどやっぱり何もない。あの目立つ瞳すらちらつかない。
けれど、今度こそ本当に、
「後ろのしょーうめん・・・だ・ぁ・れ？」
自分の真後ろからいきなり大きくはっきりとした声が、聞こえた。
・・・・・・

私の炎海紅泥は入り組んだ場所では使いづらい。
最終ステージに残っているような人間に対しては万全の状態で臨みたいからな。
と、指に巻いてあった勝敗判定用とは違うアドバンテージのペンダントが点灯し始めた。
誰かが近づいているらしい。
見回すと、校舎から人影が出てきた。
視界確保と威嚇の意味を込めて火球を頭上に作る。
が、そいつはどうもかなり気が動転しているらしく構わずこっちに向かって走りきり、それどころか抱きついてきた。
「ぐぇっ」
かなり力が強い。
恐怖で力加減が分からなくなっているらしい。
女子なので当たり前なのだが赤いジャージを着ている小さな少女だった。
目に涙を溜めている。
「こ、校舎にばっ、化け物が・・・！た、助けてぇ！！」
「化け物ぉ？」
「触手がうよっ、うようよってしててっ！」
触手・・・？
なんだそれ。そんな能力者いたか？認識変換（シー・シー）？それとも形態変身（トランスフォーム）？
・・・とにかく、どうやら恐怖心を煽ることで戦況を有利にしている奴がいるらしい。
誰かは知らないが、こそこそやるのはいただけない。カッコ悪いぞ。
酷く震えている彼女の頭を撫でてやる。
「大丈夫だ。その化け物を炙り出してやんよ」
校舎に向かって手をかざす。
建物の端が赤く発光し、形状をなくし始めた。
片側から建物を溶かすことで相手を巣穴から引きずり出すいつも

の手だ。
猶予を考えてゆっくりと建物を順序よく崩していく。
「すごい・・・・・・」
いまだ抱きついている少女がその様子を見て感嘆の言葉をこぼした。
そう言われると悪い気はしない。
校舎は程なくして全て溶解した。学校だった敷地は赤黒く燃えるただの空き地と化している。
けれど、その化け物とやらは出てこない。
運動場側ではなく反対側に逃げたか？
いや、駐車場も含めて溶解させたんだ、あっちはそれほどのスペースはないはずだ。
そもそも運動場以外では熱さに耐えられないだろう。
なのに誰も出てこない・・・？
いや、誰かが出てきていた。
２人いる。校舎ではなく、学校の敷地のギリギリ端を通るようにして走ってきている。
どうもどこかに隠れていたのに私の能力によってとばっちりを受けたらしい。
「おーい！そっちは大丈夫か――？そっちに変なの来てないよな――！？」
その内の１人、男子の方が遠方から大声で問いかけてきた。
変なの・・・彼女の言う化け物とかいう奴のことだろうか？
となるとやっぱり彼らはそいつではないらしい。
どうやらもう１人の生存者について知っているみたい――――、・・・・・・・・あ？もう、１人？
私たち２人に向こうの彼ら２人、で４人。それに校舎にいたはずのもう１人を入れて５人・・・？
生存者は４人――ッ！
ッ――――やられた！

下を向く。

彼女が髪にゴムと一緒にくくりつけていた私のペンダントへ手を伸ばすのと、

私が彼女と自分のわずかな隙間に発破をかけるのは、

同時だった。

／

――バァア〝ァ――――ン・・・

空気を破壊するような音がして、密着していた2人の女子生徒の距離が一気に開く。

片方の、髪を輪を作るように括っている少女は爆破の勢いに押されて後方へ吹っ飛ばされた。

もう片方の、黒髪のロングヘアーをなびかせた少女はよろめいたものの持ちこたえた。

一撃を放った方が飛ばされるという皮肉な結果になったが、そんなものを気にするものはいない。

不意打ちからの離脱。兎傘鮮香（とがさあざか）の狙いはそれだけだ。

背中を地面からすばやく離し、右手を鳴らす。

地面に置いてあった鉄板が弾け飛んで彼女のそばに突き刺さった。

黒髪を風に流すように伸ばしていく織神葉月は、心底残念そうにぼやく。

「あーあ、せっかくジャージまで追い剥いで、タカにバレなうように顔まで変えたのにな・・・。人数割れちゃってるとやっぱりねぇ」

「何なんだお前はよ」

「ただの怖がりな女の子♪」

「嘘吐け」

胡散臭そうに鮮香は言い捨てて鉄板を引き抜いた。

葉月の方は変えていた顔を元に戻し、態勢を低めに取る。
両者対峙して、出方を伺っている状況。
と、
「あっ、ちょっと待って」
葉月が思い出したように言って、伸ばしていた髪の一束を俊敏に動かし四十万隆を捕縛した。
「え？っおい！」
流れ的に全く自分が狙われると思っていなかった隆はあっさり捕まり吊るし上げられる。
「考えてみれば、これで3度邪魔されたことになるんだよね。いやーさすがに遊び過ぎたし」
そう言うと、彼を両足を掴む形でぐるぐると回し始めた。
「待て待てまてまてまてまて・・・ぁて・・ててててえええぇえええええ！！」
地上３ｍほどの空中で遠心力を味わいながら絶叫を上げる隆。
今までの恨みを存分に晴らさんとする葉月。
横に回し、縦に回し、斜めに回し、上下に振り、振り子のように振り・・・・・
その行為は1分ほど続いて、やっと隆は地面に降ろされた。
「ぅおえぇ・・・」
既にペンダントを破壊されているのだが、死んだ振りができるほどの余裕が彼にはない。
どころか、吐きそうになって口元を押さえている。
「よし、報復終了」
その様子を見ていた鮮香が再び問う。
「お前何よ？」
「ただのお茶目な女の子♪」
「・・・大嘘吐きめ」
言うと同時に、今まで彼女の頭上に回っていた1つの火球が弾けるようにして葉月に襲い掛かった。

それを葉月は髪の触手で打ち落とそうとする。
しかし、髪は炎弾に当たった瞬間溶けて消えた。たんぱく質が燃えた時にする特有の臭いが鼻につく。
「ちっ」
有機物は燃えやすい。
考えてみれば分かる失敗をやらかしてしまった葉月は、経験を生かしてすぐさま髪に血中の鉄分を巡らせていく。
その間に防げず迫りきていた火炎を悠々と受け流し、足を踏み込んで一気に跳躍した。
鮮香は葉月との接近戦を避けるべく、足を踏み鳴らす。
瞬間、葉月の前足を出した先の地面が発破し、葉月は体のバランスを崩した。
それに追い討ちをかけるべく、鮮香は事前に用意しておいた数珠状に並んだ幾つものバスケットボール大の火球を時間差に撃ち出していく。
容赦ない攻撃に、炎が光源になっているにもかかわらず、砂煙で着弾点がどうなったか見えない。
が、様子を見ていた鮮香に向かって黒い髪で形成された腕が一直線に伸びてきた。
先ほどと同じく炎弾で燃やそうとしたが、燃え尽きず炎を突き破る五指を見て、
「はっ」
鮮香は咄嗟に持っていた鉄板に発破をかけ横に自らを吹っ飛ばした。それによって髪の腕を回避する。
砂の収まった後を見てみると、繭のように髪で自分を包み込んでいる葉月の姿が目視できた。腕はその一部から伸びてきている。
髪の性質が明らかに変わったことで、彼女の判断材料が揃った。
顔を変形させたことから、彼女の能力の第一特徴を。
髪の焼ける臭いと彼女の髪にへの頼り方から、それが幻覚ではないことを。

それぞれ得て、その2つから推測される答えを口にする。
「認識変換（シー・シー）でも形態変身（トランスフォーム）でもない・・・ね。
お前、形骸変容（メタモルフォーゼ）だな」
そして、
「そういや、共同訓練でそんなこと言ってる奴がいたっけか。
はんっ、なるほど。近くにいるのがこれじゃあ自分の力量を過小評価もするわな」
今現在高級マンション最上階でくつろぎきっている件の少年のことを思い出した。
「よし、お姉さんがこの暴走狂（バーサーカー）を倒してあげよう」
掌に小型の火球を作り撃ち出す。銃と同じような要領で発破を利用し放たれるそれはかなりの勢いを持っている。
繭を解いて伸ばしていた腕を回収していた葉月はそれを先ほど腕だった触手で弾こうとするが、接触した途端火球は破裂した。
昼間鮮香が使っていた手製の手榴弾だ。
触手が弾かれたことで葉月の防御手段の1つが崩された隙に、鮮香はさらに量産した同じものを一気に畳み掛ける。
だが、いくら触手の数が多くても、その防御法ではかわしきれないことは葉月も分かっている。
止まっていた足を再び動かして前へ進む。接近する炎弾との距離を見計らって、足で運動場の砂を抉り飛ばした。
人間離れした筋肉から繰り出される運動エネルギーによってベクトルと力を与えられた無数の砂の凶弾が炎弾に当たり、迎撃していく。
それだけではなく、その爆風に威力こそ殺がれつつも飛び続けた砂の豪雨が鮮香に降り注いだ。
「蹴飛ばしただけでこの威力かよ！体強化しすぎだ、くそっ！」
口に入った砂をがりっと噛み砕きながら、前に手をかざした。
彼女と走ってくる葉月の間の地面が乱暴な発破によって無作為に弾ける。

２人の距離を縮めさせないための策だったが、一度似たような手に引っかかっている葉月は対処法を用意していた。

力いっぱい跳躍すると、髪の一部を運動場を囲む非常に高いフェンスに括りつけて引く。これによって葉月は危険地帯を飛び越えて鮮香の真上に一気に移動した。

上からの攻撃を封殺するため頭上に再び火球を形成する鮮香。

それをも容赦なく髪の束で貫こうとする葉月に彼女は照準を定める。

ここまで近寄ればわざわざ炎弾を放つまでもなく、対象と同位置に炎を発現させられるのだ。

無論危険なのでそんなことはしないが、すぐ目の前に発火させた。

それは一瞬だけで燃え尽きる。

「うわっ！」

さすがに面を食らった葉月は仰け反るようにして回避しようとするが、そもそも空中でそれができるわけもなく、代わりにまだ絡めていたフェンスの髪に力を入れてそのまま引っ張られ、フェンスに足を着けた。

「ＰＫって反則だよね。やっぱり近づきにくすぎるから真正面から相手したくない」

「うるせぇよ。超能力の例外が何ほざいてやがんだ」

葉月に休む暇を与えないように鮮香は炎弾を続けて飛ばす。

葉月はそれをフェンスからフェンスに移動してかわしていったが、フェンス自体の耐久性が限界を超えて倒壊し始めた。

鮮香の近くは危険と理解した葉月はフェンスから跳躍して、跳ぶ前にいた辺りに再び着地する。

同じ位置に戻ってきたなーなどと考える間もなく現在形で追撃されている葉月は、避けることを放棄して、鉄で強化した髪を振るう。

なぎ払うように炎弾を迎撃していく髪はやはりと言うべきか一定期間有効であったものの、例の手榴弾に切り替えられたことで効果を激減させられた。

しかしそれは当然のように葉月の足技によって繰り出された異常な量の砂にやられて空中で爆発。何の仕込みもしていない炎弾は爆発こそしないが威力は落ちてしまう。

が、だからと言って葉月が鮮香に近づけるかと言えばそれも無理な話である。

焦れた鮮香が勝負をかけようと特大の火球を作り始める。

直径１０ｍほどの火炎玉を頭上に輝かせた彼女はそれを容赦なく葉月に放った。

当然の流れとしてそれを髪の触手で払う葉月。だが、

――バァゴォォン！！！

今までにない威力の大爆発が起きた。

爆風と火の粉が飛び散る中、葉月は髪で身を包み、鮮香は持っていた鉄板を盾にしてそれを乗り切る。

火慣れしている鮮香は危険が去ったと判断した瞬間、鉄板から腕を突き出して火炎を放射した。

今までの弾として撃ち出す攻撃法ではなく、燃やし尽くす火炎放射。ゆうに２５ｍは離れているがその威力は衰えを見せず、葉月の繭を覆う。

これで迂闊に這い出れまい。

いくら強固な防御とはいえ、熱され続ければ加熱する。中も無事には済まされない。命の危険が判断された場合は審判に強制失格させられることになっているため、この方法でも決着がつけられる。

どうやら鉄が主成分らしいと鮮香も感づいていたその繭が赤くなり始め、鮮香に安堵の表情が生まれた。

が、いきなり地面が抉れ彼女の真下から見慣れた黒い腕が現れた。

「っうぉお！」

それに足を取られ彼女は後に転倒し、火炎放射は照準を外す。葉月はそれを見計らって繭を解いた。

「さすがに視覚なしじゃ、ペンダントをいきなりってわけにもいかないか・・・

２度目に地面を踏んだ時から気づかれないように潜らせていた葉月の後ろ髪が転んだ鮮香の足から這いずり上がっていく。
「くそっ、が！」
髪の耐久性から考えてこれから抜け出すことは無理だと悟った彼女は最後に、葉月に向かって一撃を食らわす。
距離があるため、正確さに欠けるのが難点だが、唯一葉月の不意をつけた攻撃。指定座標にいきなり能力を発現させる技。
分の悪い賭けであるが、やらないよりはマシだ。
鮮香はペンダントをしまいこんでいるだろう胸に向かって発破をかけた。
「ッ！」
パンッを軽く弾ける音がして、葉月のジャージが破ける。
しかしそれは、
「腿・・・！」
胸ではなく右足の内腿であり、狙いは完璧ずれていた。
悔しそうな顔をする鮮香。
「・・・え？」
ところが、それ以上に葉月が動揺していた。
破れたせいで露になった太腿に紐が括りつけられていて、漏れた赤い液体が腿から下に垂れていく。
葉月が意外性を考えてペンダントを隠しておいた場所。
それに、狙いを外した一撃が見事に直撃していた。
「・・・・・・ってことは！」
そう言って起き上がろうとした鮮香は、そこで気づいた。
自分が今まで頭をくっつけていた地面に赤い小さな水溜りができている。
恐る恐る後ろ髪を確認すると、濡れていることがよく分かった。
倒れた時に、壊れたらしい。
葉月と鮮香はお互いの結末をしばし呆然と確認し合い、死んだ振りをすることも忘れて、とある方へと目をやる。

そこには目眩と吐き気を催して倒れている隆を膝枕で看病している隅美月（ゆうしょうしゃ）。
「「あれぇ・・・？」」
「はぁ――い、織神葉月さんと兎傘鮮香さんのリタイアによって、隅美月さんの優勝が決定！ただいま体育祭競技バトルロワイヤルは終了しました――――！皆様お疲れ様――」
ファンファーレが鳴り響き、第一中学校長こと久遠未来の軽い一言によって、
体育祭は幕を閉じた。

／

葉月はめでたくホラー賞とパニック賞を頂いた上、バトルロワイヤルでは2位という超好成績を収めるに至った。
この場合ホラー賞にパニック賞という映画のジャンルみたいな賞が名誉かどうかは疑問だが、葉月はご満悦のご様子だ。
体育祭が終わった後、再び集まることもなく、配給されたモバイルやネット上で閉幕式と終業式が行われた。
その時点で分かっている受賞者等の読み上げや校長の偏見万歳な感想が流れ、そのまま終業式に移行という節操というか雰囲気とかそういうものをどこかに置いてきたような式だった。
既に夜になっているわけだから、再び生徒を集めるのは難しいのは分かっているが、別に今日やらなくてもいいんじゃないのか。
終業式なんて特にそうだと思ったものの、そういえば我らが学び舎は溶解して完全消滅していたり。
考えてみたら式どころじゃない。
体育祭後に夏休みに入る理由がよく分かったのだが、長期休暇とはいえ2、3ヶ月で校舎が建つのかと心配になる。

突貫工事の域を逸している気がしてならないのだけど、能力が一仕事かうらしい。

毎年そんなことをやっているからいつ見ても校舎はまるで新築のように綺麗なのだと、恐ろしい事実に気がつかされた。費用がどこから出ているかも謎だ。

・・・などと考えれば考えるほど現実離れしてくる推論を振り払い、俺の住み家であるマンション1室を見回す。

昼間から集まりだし、騒いでいた1-Bクラスメートに加え、能力の使いすぎたらしくカーペットに仰向けで寝転がっている葉月、まだ若干頭痛がしてテーブルに突っ伏している隆が追加されている。

「ほら、しじまんが残ったんだから配当ちょーだい」

「そういえばさ、何で隆が勝つと思ったの？」

「ん、そりゃはづきんは楽しみは後に取っとくタイプでしょ？しじまんの方が虐めがいあるもん」

「・・・・・絵梨お前後で覚えてろよ」

「あー、そっか。考えてみればそうだった」

悔しそうな予想を外した面々。

「お前らも覚えてろ・・・」

葉月がぬっと起きてきて注がれてあったコップを取った。

「でも結局僕の方がタカに振り回された感じがするけどね」

「というか、だ。楚々絽、よくも競技開始早々から騙してくれたよな」

「アンモニアまでよく用意してたよな」

「王道だろう？ガキの思いつく悪戯じゃないか」

「でも何で教室から持ってかなかったの？」

「切り札はバレたら意味がなくなる。裏切るんだし隆にだって知られるべきじゃなかった。

おかげで使う機会なくやられたけど」

「そっか結局最後まで四十万と一緒だったよな。あれ？でも裏切った後に一度戻ればよかったんじゃないのか？」

「戻る前に葉月と鉢合わせしたらどうするのさ。少なくても3人くらいは倒しておきたかったし」
そんな会話の中葉月だけが黙々とテーブルに出されたチョコチップクッキーを頬張っている。既に1箱食べ終えていて、2箱目だ。
「随分お腹空いてるんだねはづきちゃん」
「私たちの食料盗っといてまだ食べれるとは・・・」
「いやだって、結構動いたし」
「髪がな」
「いいでしょ。すごく便利だよ、コレ」
そう言ってうにょんと髪を動かして、床に積まれていたお菓子を自分の前に持っていった。
「怖いから。手があるでしょ手が。何のために手がついてると思ってるのよ」
「飾り。だったら椎ちゃんは何で髪で取らないの？何のために髪が生えてると思ってるの？」
「飾り。でもね、葉月ちゃん、その髪は本当に不気味よ？」
「そうかなー、気に入ってるんだけどなぁ。
あ、そうだタカ、あの子とメルアド交換したよね？」
「あぁ？」
いきなり話を振られて顔を上げる隆。
「えっ、そうなの？」
「ん。さっき聞いたけどタカが怖がらせたせいで彼女――――」
「待て。もともとの原因はお前だぞ？」
その反論を葉月は当然のように無視する。
「――下のジャージ駄目にしちゃったらしいけどさ。その代わりに自分の貸したんでしょ？彼女下だけ青色だったの僕も見たし」
「ああー、なるほど。となると返すために連絡を取らなきゃいけないわけですな？」
そして西谷が乗っかってきた。
「いやいや、そりゃそうだけどな・・・」

「・・・膝枕」
ぼそりと葉月が言う。
「競技が終わった後もしばらく・・・ね」
皆の目が一斉に隆に向いた。
「被告人、何か弁明は？」
「・・・・・弁護士は？」
そんな隆の言葉をやはり無視し、布衣菜が言う。
「葉月検事、証拠の提示を」
隆が助けてくれと言わんばかりにこっちを見てくるが、残念俺も昼に散々弄られた身だ。
今からは弄る方に参加したい気分なのだよ。
なので、
「私、朽網釧が証拠品を提示します――」
トドメを刺させてもらう。
膝枕の映像なら残ってるのだ。

／

早い内にリタイアしたならともかく最後の辺りまで残っていた人間には結構ハードなパーティーが終了し、帰宅した織神葉月は入浴後にクローゼットを開けて硬直した。
いつの間にか、その中身がすり替わっている。
今までの見慣れたくなくても見慣れてしまった女のモノの衣服がごっそりと消え、代わりにさらに女っぽさを強調するような服がぎっしり詰まっているのだ。
フリフリにフリフリでフリフリがフリフリ・・・・・飾り付けるだけに作られた余分な布がやたらと多いワンピースにブラウスにスカート等がその存在を誇張していた。
ついでに簡易ベッドだった寝床もベッド自体が年相応の女の子が使いそうなふかふかなものになっているし、当然シーツの類も味気

ない白布ではなくなっている。
「いつ・・・の間・・・・・・・に」
呆然とその様を見つめる葉月。
流され慣れろな彼女だが、基本的に最低限度の生活に必要ないものは持たない主義だ。
シンプル・ザ・ベストな日常を送っている彼女としてはそもそも自分を必要以上に着飾ろうなどという考えはありえないのであり、それ故にこういった衣類には耐性がない。
今まで用意されていたのは体を守る機能としての衣類に上品な飾りがついた程度のものだったが、今彼女の目に映っているモノは過剰な飾りが見られるようなものばかりだ。
学校に編入する前は普段着が人間ドックで着るような衣服だった葉月にとっては、機能性すら捨て去ったように見えてならないそれらは精神爆撃の類に見えた。
今日一日生徒達を散々震え上がらせていた彼女は思わぬ攻撃を受け、よろめいてベッドに突っ伏。
ところが、誰もいないはずのベッドに何やら先客の感触が。
掛け布団をめくってみると、棒状の縫いぐるみっぽい意味不明の何かがそこに存在した。
白い筒に目と口と角をつけたそれは、形状はともかく羊らしい。
「・・・・・・」
バタム。
葉月は下着姿のままふかふか度のアップしたベッドに再度倒れこみ、そのまま動かなくなった。

第１９話－　利得伴。－Ｋ．ｎｉｇｈｔ－（後書き）

体育会編が何とか終わりました。
次から夏休み編です。

でもその前に、やっとキリのいいところにきた今の内に誤字訂正なんかをやりたいので少し遅れるかもしれません。
やったところで全てが訂正される気は全くしませんが。

なので、この機会に人気投票でもして茶を濁すつもりだったのですが、今のところだと票が足りないですね。
なので、よろしければ投票よろしくお願いします。

あ、これでももうタイトルを『はん』と『ｔ』で終わらせるというルールに苦しまずに済む！

第２０話－　学園都市。－Ｒｅｖｅｒｓｅ－（前書き）

★キャラ人気投票実施中★
評価／感想のページかメッセージかで、
１人１回で３点を分割して複数にでもまとめて１人にでも自由に入れてください。

数が足りない場合は自然消滅するので、入れてくださるとすごく助かります。

第２０話－　学園都市。－Ｒｅｖｅｒｓｅ－

――♪～♪♪～～♪

着メロの音で目が覚めた。

まだ重たい目蓋を開けると、カーテンを閉めていない窓の外はとっくに陽が昇っている。

時計を見ると針は無情にも午後を指している・

つまり寝過ごしたらしい。

携帯を確認するとクシロからだった。

夜にどこか外食しようとのことらしい。

寝ぼけた頭で外かーそういえばもう夏休みだったなーなどとのんきなことを考えている内に血の巡りが良くなったのか思考がさえてくる。

なるほど、あれか、つまりクローゼットに詰め込まれた服・・・というか衣装を着て外に出ろと。

朝から溜め息が漏れた。

ベッドから抜け出すと少し体が寒さを感じる。

・・・昨日は結局下着のまま寝たからなぁ。

あの衣類を着る勇気はなかったし。

「というのに、外出時に着て来いとはね・・・・・・」

いっそのこと上皮を変容させてまともな服を作ろうか。

できなくはないんだけど・・・昨日散々能力を使った次の日だ。

正直これ以上体力を消耗したくない。

とりあえずカーテンを閉めて、キッチンに向かった。

冷蔵庫を開けるとお馴染みのクリオネが映る。いつもながら彼らは本当に涼しげだ。寒いのと涼しいのとではかなり意味が違うよね、と。

さてそれ以外には何時かコンビニで買った商品が幾つか入っていた。

その中から適当に選んでテーブルに座る。
下着姿で食事というのもどうかと思うけど、あれらにはまだ手もつけたくない。
机の上には紙パックの繊維性飲料（ファイバージュース）と栄養補給用保存食。保存食の方は要冷蔵の時点で意味をなくしている気がするけれど、パッケージの売り文句がそうなっているのだか仕方ない。
サプリメントの類が支給セットの中に入っているけれど、どうせなら飲もうか？
そういえば能力が発現してからお世話になってなかった気がする。前にカイナに使えないなどと言ったけれど、慣れたらかなり便利だ形骸変容（メタモルフォーゼ）。
もっとも、今はその弊害でかなりだるいわけだけど。うーん・・・。
体を無理に使ったというよりは脳を使いすぎたせいなのか、体に力が入らないし、思考がぼやけている感じがする。
そもそも体は強化しているのだからそう疲れるはずもないのだ。
となると今の症状は完全に能力の使いすぎということになるのだけど、それにしたって疲れすぎだろう。
髪を動かし続けるというのがそれほどに消耗させる動作なのだろうか？
あるいは形骸変容（メタモルフォーゼ）自体が1回1回の使用でかなり疲労するものなのか？
「どっちにしても判断材料が不足、と・・・」
味気ない固形物と飲料を胃に収め終わり、ゆっくりと天井を見上げる。
今日の予定を立てなければならない。
午後6時からはクシロの約束があるそれまでに残された時間は5時間ほど、やろうと思えば用事の2、3つ終わらせることのできる時間だ。
形骸変容（メタモルフォーゼ）に関する資料を手にできるように手配してもらうってい

うのが当面の目的かな。
それがないと始まらない。
なら、ついでにできることとしてどこかにあるらしい裏方メンバーの拠点でも紹介してもらうというのもいいかもしれない。
僕の予想ではその場所は活動に関係ない私物に溢れ娯楽に埋まっているだろうけれど、とりあえず位置ぐらい確認したいし。
となれば智香さんにでもメールを送ってみよう。
夏休みだし、あの人達その拠点とやらでくつろいでいる可能性もある。

＃

市営鉄道『学園都市』駅、駅ビル6階。
その一室が仮称裏方、グループ・トリッキーの基地だった。
考えてみれば裏方の活動内容は超能力者による揉め事への介入なので、この場所は当然と言える。
でもまさか、いつも通っている駅のビルにあるとは思わなかった。
灯台下暗し。
しかも何時ぞや岩男こと岱斉に貰った本にちゃんと記載されていた。
完全に忘れて本棚にしまったままだったけど、使いようによってはかなり便利なモノらしい。
とにかく、窓が少ないからか嫌な閉鎖感ある駅ビル6階の廊下に僕は今立っている。
けれどここまで来るのに壮絶な苦労があったわけで・・・。
まぁ、分かると思うけど服のことだ。
まさかこの僕がたかが衣服のことであそこまで葛藤する羽目になるとは思わなかった。
クローゼットの中身を根こそぎ引っ張り出して、一番まともなものを選ぶという表現するのは簡単な作業を一時間以上も行わなけれ

ばならなかったのだ。
今まではそれほど意識していなかったのだけど、余分な飾りのついている灰汁（あく）の強い衣類は上下で合わせるのも大変だった。
合っていない組み合わせを選ぶのは何か嫌だったし、ワンピース群は飾りのせいで全滅だったし。
それで結局、一番シンプル（に思える）な上に、飾りがついてるけど総合的に見れば大人しく見える薄桃色のスカートという組み合わせに落ち着いて今に至る。
ただでさえ疲れているのに、さらに精神的な打撃だった。
なので今後こうなることを避けるために、途中で衣服店に寄ってシンプルなモノにズボンも購入した。
これらをこの拠点にでも隠しておくつもり。さすがにここまでは手が及ぶまい。
というわけで、その作業をするためにも、何のプレートもつけられていない無地のドアを開けてみる。
まぁ、室内は必要のないもので埋め尽くされているんだろうけど。
「こん・・・」
・・・・・・。・・・・・・、・・・・・・。
中は予想以上に混沌（カオス）な状態だった。
中央に置かれたテーブルの上に積み上げられたゲームのソフトケースの山、各種携帯ゲーム機。本棚に詰まった攻略本他、ソフトに漫画。
無造作に置かれた家庭用ゲーム機の外箱。中身はテレビに接続されたまま床に置かれている。テレビ自体も販売されて間もない超薄層（ペーパー・ウィンドウ）テレビで、それが壁に４つほど貼ってある。
唯一片付いているのは水周りで、おそらくアホウドリこと・・・アホウドリ君の努力の成果だろう。まずい、既に名前を忘れてしまっている。
とにかくここは給料を貰っている人間の活動場所じゃない。給料泥棒どころか、これ全てを必要経費でまかなっているとすると恐ろ

しい話だ。
「こんにちは・・・」
途中で途切れてしまった挨拶をば。
テーブルに座っている各メンバーはビオサイドをやっている模様。
ホントに大人気だな、アレ。
「久しぶりー。ちょっと待ってね、今みずるを醸し殺して珈琲淹れさせるから」
テーブルの上にあるのとは色の違うゲーム画面から視線を外さずに智香さんが返してくれた。
・・・そうだ。瑞流って名前だった。パシられているのは彼だけだったからアホウドリ＝瑞流で間違いない。
テーブルに彼らが噛り付いているので、改めて辺りを見回して腰を下ろせるような場所を探してみる。
と、場所の代わりに娯楽物の外箱に埋もれたロッカーを発見。
あの様子では日頃使っていないに違いない。余りのスペースがあるなら買ってきた衣類を押し込んでおこう。
しかしそのためには、まず箱を何とかしないといけない。
近づいて箱を持ち上げて見ると中身は空のようだった。
携帯ゲーム機の箱が多いのだけどそのほとんどが同一商品で色だけが違う。気になって振り返ってテーブルの方を見てみるけれど、それでも箱の方が多い。
他のはどこにいったんだろう？壊れた？しまってある？改造が失敗した？
どれにしたって恐ろしい消費の仕方だ。ここは無駄遣いの溜まり場らしい。
箱を他所にずらし終え、これでやっとロッカーが開く。
開けると中にはやはりと言うべきか、ゲームの外箱が山になって詰まっていた。
「・・・・・・」
その山を雑な動作で外側に崩す。できたスペースに服の入った袋

を詰め込んで勢いよく閉めた。
中でゴトゴトと音がする。
・・・次開けた時絶対崩れてくるな、これ。
「がぁぁあ！やっられたぁ！！」
どうやら宣言通り智香さんが瑞流君を負かしたようだ。
「と言うことではづきちゃんの珈琲淹れなさい」
「よろしくお願いします」
僕からも一応頼んでおく。
僕としてはここを紹介してもらったし、衣類のスペアを隠せたしこれで用事は全て終わった感じだ。
珈琲ぐらい飲んでおかないと、あまりに早い退室になってしまう。
つまり時間稼ぎのために僕は珈琲を入れてもらうわけだ。
いや、まぁ、それだけじゃないけどね。
本格的に淹れた珈琲なんて普段飲めないし、美味しいし。
と、
「・・・・・あっ」
そうだ忘れてた。
もう1つ大切な用事があった。むしろこれがメインだったのに。
「形骸変容（メタモルフォーゼ）の資料ってどうすればいいの？」
「え？あー、あーそっか！」
冷却能力の・・・えっと佐奈さんが手をポンと打った。
「そういえば来てたよ、君宛の封筒！完全忘れてたけど。どこだっけ？」
「んー、と。確かテーブルの上に置いて・・・」
片手でゲーム機を操作しつつ、テーブルのケースの山を崩していく彼女達。
テーブルのカセットケースの山のせいで忘却されていたらしい。
なんてことだ。
形骸変容（メタモルフォーゼ）の資料に関するモノをまさかそんな風に扱っているとは。
この部屋・・・といかこの人達本気でどうにかした方がいいんじ

ゃないだろうか？
どのくらい埋まっていたかはともかく、ついに救出されたその既にボロボロになっていた封筒を佐奈さんから受け取った。
宛名は当然僕で、切手等が書いていないところを見ると直接渡されたものらしい。
なら別に彼女達を介さずに僕に渡してくれてもよかったのではないだろうか？
悪いけど彼女達が信用置ける人格者には見えないし。
封筒の中身を取り出すと、一枚の用紙しか入っていなかった。
その紙にはカードが貼り付けてあって、会員証何かの配送に似ている。もちろん僕は所属するという行為に疎いので、クシロがそういう封筒を開けているのを見たことがあるだけだ。
記載によればこれが例の資料庫のカードキーらしい。僕用に特別資料室へのパスにもなっているようだ。
それを財布の中にしまって、用済みになった封筒と紙をゴミ箱に入れる。
「あ、どうする？あそこ行くの？」
「さすがに疲れているんで今日のところは休養かな」
「ふーん、そう？じゃあ、珈琲だけでも堪能してってね。うち自慢の珈琲は疲れも癒してくれるわ」
「なぁ、褒めてくれんのは嬉しいんだが、たまにはお前がやってくれねぇかな？」
「嫌よ。こういうのは淹れてもらうから一層美味しく感じるものなんだから」
「俺は？俺は淹れてもらってないんだけど？」
「うるさいなー。いいじゃん別に、あんたぐらいの腕なら自分で淹れても美味しいでしょ」
「なぁ、さっきの淹れてもらう方がって話はどこいった？」
などと言いつつ強く追及しない辺り、彼も満更ではない様子。
彼が座っていた席に着いて待っていると、淹れたてのカップが運

ばれてきた。
カプチーノらしい。クリームの上に乗っているのはココアパウダーかな。
甘いのが好きな僕には嬉しいチョイスだ。
熱さを確かめながら慎重にカップに口をつける。
「美味しい・・・」
素直に感想を述べる。
アホ・・・駄目だ、少し気を緩めると名前を忘れそうになる・・・
瑞流君は顔を綻ばせて、使った物を洗いに行った。
本当にマメな人だなぁ。
その様子を追っていた目を正面に戻すと智香さんがこっちをじっと見ている。
「・・・何?」
「んんー、服が前よりさらにチャーミングになってるなーって」
チャーミング。日本語で魅力的の意味。
しかし残念ながらこの服装は魅力的とは思えない。どこかの突起に引っ掛けそうな装飾に夏を舐めたような厚手の生地。機能美が皆無の衣服のどこが魅力的か!?
魅力的の意味が違う?そんなの知らないね。
「クシロ・・・いやクラスメートの仕業だよ」
「いいじゃない。似合ってるわよ?」
「夏にこの格好はきついんだけどなぁ・・・」
「そんなの能力を使えば体温調節ぐらいできるでしょ?」
「この場合気分的な問題だから。それに暑くなくても涼しくもないの。風が入ってこないんだよねこの服」
「なるほど、つまりはづきちゃんは露出度の高い服をご所望と?」
「違うよ・・・」
そんな会話を交わしながら珈琲をすすり、僕はクーラーの利いた部屋での一時を楽しんだ。

空を見上げると陽は傾き始めているものの、太陽が地平線でもない凸凹したビルの向こう側に沈むまでまだまだ時間がある。
これは日本に限ってなのかは知らないけれど、どうしてこう夏の夕時は長いのだろう。
学園都市の駅、その近くにある飲食店のペナントが多く入った建物の窓からそんなまだまだ明るい空を眺める。
焼肉屋『とがさ亭』。
夕食に誘われて、僕が希望したのは焼肉だった。
焼肉は後で体につく臭いが気になるんだけど、今日に限っては体が肉を欲しているのだ。
「で、どうして私の店に来んだよ」
視線を声のした方に向けると、そこには注文を取りにきた店員が1人。
とがさ亭＝兎傘亭。炎海紅泥、兎傘鮮香。父親の店で働いているらしい。
まさかなーと思って入ってみたら、本当に彼女の家の店だった。
「えー、別に食べに来ただけですよ？」
「くっ、バトルロワイヤルに出られる最後の機会で自分を負かした相手に飯を出さないといけないとは・・・何たる屈辱！」
「似合ってますよその給仕服」
「焼肉屋の給仕エプロンに似合うも似合わないもねぇーよ！」
「まぁ、本当に食べに来たんだし、そんなカリカリしなくても・・・・・。
あ、僕はまず塩タンを2人前ね」
「じゃあとりあえず上カルビを3人前、隆はどうする？」
そのクシロの言葉で、彼女はやっと彼の存在に気づいたようだ。
「お、何だ何時ぞやの少年か。
お前の友人は間違いなく化け物だぞ」

「重々分かってますけどね・・・」
「2人して失礼な。僕は真面目に人間やってるよ」
「人間はやるもんじゃねぇよ」
まぁ、その通りなんだけど。
とにかく肉がほしいの肉が。

「今更だけどさ、おかしくねぇか?」
などとタカが完全に食べることに集中してしまっていた僕に声をかけてきた。
「何が?」
「いくら能力者の競技だとしても校舎破壊するのを容認してるってことが」
「何で?」
「いやいやいや、普通に考えてまだ使えるものを破壊するってのはまずいだろ。毎年無駄金使ってんだぞ?廃棄物だって相当出るし・・・」
あぁ、そういえばそうか。確かに余計なゴミを出したり無駄なお金をかけていると世間的にも非難されるはずだと。
けれどその答えは簡単だ。
「それでもやる価値があるからだよ」
「・・・そうか?生徒の娯楽だぞ?」
「それは表向きの話。タカって結構ピュアだよね。もう少し人の黒いところ見ようよ」
呆れた僕の声に、
「・・・・・まさかこの姿でそんな言葉をかけられるとはな・・・」
タカは妙な顔をした。
まぁ、確かに不良スタイルの彼に似合いそうにない言葉だけど、不釣合いキャラはアホウドリ君も同じことだしね。

それにこんなこと少し考えれば分かることなのだ。
「あのバトルロワイヤルはシュミレーションなの。あ、物理的シュミレーションね」
「シュミレーション？」
「そ、対能力者の戦闘をシュミレートするのに必要な情報を集めたりするんだよ。超能力別の攻撃方法や心理傾向、破壊能力に弱点とかね」
「実際に団体で動いている能力者の行動も貴重な資料になるだろうな」
カルビを焼きながらクシロも話に入ってくる。
「そのための監視カメラか・・・」
「いや、徊視子蜘蛛と監視衛星は使うだけで意味があるよ。動き回る能力者をどこまでマークできるかっていう実験なんだから」
「よくできた話だろう？学園都市としても能力者を制御したい。能力者自体のデータ集めに、技術開発の実践テスト。建物の１つや２つ安いものだ。いくらでもスポンサーはいるだろうしな」
「一番のスポンサーは学園都市、つまり国だよね。徊視子蜘蛛を開発している所と衛星を管理している所は物品支給ってことになるんだろうけど、それだって金額に換算すれば億単位の費用になるよね」
「嫌な話だな。でもあれがそこまで価値があるとはやっぱり思えねぇ」
むぅ。タカは自分の価値をイマイチちゃんと捕らえられていないらしい。
超能力者であるというだけで、結構な付加価値があるものだというのに。
「実感しにくい？うーん・・・ほら、アメリカなんかが超能力の軍事利用に力を入れてるでしょ？そういうところにしたら、実際超能力者が行った戦闘データに価値があるのは分かるよね？まぁ、逆にそういう軍事力に対抗しようって国にも価値はあるんだけど」
「日本は世界でも類を見ないほど超能力者の密度の高い国なんだ。

昨日のあの競技ですら、世界から見たら最大規模の実験だろう」
「あー、なるほどだからか、体育祭のＤＶＤが売られるのは」
「え？売られてるのか？」
「なんだ知らないのかよ？毎年バトルロワイヤルやってはその動画を編集して売り出してるんだぞ？ネットで調べれば一発で分かることなんだけどな・・・」
それを聞いて何かクシロが考え事をしている。さっきの話に何かおかしい点でもあっただろうか？
「映像は手に入るってそういうことか・・・」
小さくそんなことを呟いた。かなり小さな声だったけど、聴覚強化している僕にははっきり聞き取れる。
色々と顔に出やすいとは思っていたけど、思ったことが口にも出るんだなぁ。
「クシロ、どうかした？」
「いや、何でもない。
まぁ、それでだ。超能力の情報自体が価値がある上、日本は超能力開発を学園規模でやってるんだ。情報の活用の仕方だって無駄がない」
「さっき言った抑制と監視の他にも各超能力の訓練の効率化、埋もれている才能を掘り起こすっていう意味でもそうだし、アピールにもなるよね『日本の超能力研究はここまで進んでる』っていうさ」
「物騒なこった。そんなところで国の力を誇示しなくてもよ」
と、そこで、
「何言ってやがるんだ。それでもオブラートに包んでるんだぜ。あからさまに言えば今の日本は世界一の軍事力を誇ってるってことなんだからな」
いつの間にかやってきた鮮香さんまで参加。この人店の仕事サボっていいのだろうか？
「いやいや、それは大げさでしょう」
相手が年上なので口調が丁寧になるタカ。その話し方が逆に珍し

くて思わず笑ってしまう。
　クシロもそうだけどタカも観察していて飽きない人物だよね。
「大げさなもんか。例えば私は1度で半径35kmほどの大地を溶かしつくせるからな。少なく見積もって1日あれば1国ぐらい滅ぼせるぞ」
「・・・さらりと恐ろしいこと言いますね。だとしてもそんな大技使ったら体力的に限界がくるんじゃないですか？」
「んや、私の炎海紅泥って見た目ほど体力を使わないのさ。言ったろ『大地を溶かす』って。そもそも真正直に能力波を35km先にまで届かせるなんて不可能だかんな。
　土中の珪素を介して遠くにまで能力の有効範囲を伸ばしてんの。要はかなり効率化してるんだ。
　それに連続で能力を使用するより持続的に使う方が疲れやすいしな」
「はー、珪素を使うなんて聞いたことなかったな・・・。でも兎傘さん、そういった超能力の事情は他の国も同じじゃないんですか？」
「少年、前も言ったろう。3等級が実質最高レベルなんだよ。早々いるもんじゃない。お前の横にいるのは例外中の例外だ。
　大体この分け方をやってるのは日本だけ。外国では今でも等級よりも能力自体の希少度が重視されるからな。
　ま、どのみち外国に私程度卓越してる奴はいない。等級で言うなら4等級ぐらいがあちらさんの最高レベルってとこか。ここまで戦力になる超能力者を抱えてるのはこの国だけさ」
「でもさっき葉月がアメリカが軍事利用しようとしてるとか言ってましたけど？」
「能力者集めて最強の軍隊ってか？そもそもその発想が間違いだな。群れる必要がねぇ。私1人で事足りる」
「すごい自信ですね・・・」
「自信じゃねぇ事実だ。お前の正面にいるえげつない少女だってそれぐらいできるぞ。・・・いや殺害能力で言えばこいつの方がやば

いだろ。な？」
うわっ、そんな話を振られても・・・。
嘘を言ってもどうせ追及されるんだろうな。
・・・んんー。けど、事実その通り。
「まぁ、無差別でいいんなら、人類ぐらいさくっと皆殺しに・・・」
「それのどこが無差別だ、対象選ぶ必要すらねぇじゃねぇか！」
「そんなことさらっと言わないでくれ・・・」
ほら見なさい。我が友の反応はやはりこんな感じだったじゃないか。
昨日の服装のことを考えると今後どんなアプローチをかけられるか分かったもんじゃないのに。
「だよなー」
これは兎傘さん。だよなー、じゃない。
まぁ仕方ない。どうせだから開き直ろう。
「新種のウイルスでも撒けばそれでいいからねぇ。やろうと思えば難しくはないと思うよ。どちらかというと問題は選択的に殺すって事の方」
「なー。私のも無差別殺法だからなー、対象が1人の方がやりづらい」
「戦力としては微妙だよね。それにこういうの核弾頭と同じで持ってることに意味があるんだよ。使ったら取り返しのつかないことになるからね。核戦争と同じニュアンスで」
「超能力者は日本の核弾頭なわけだ。分かったかそこのピュアボーイ2人」
「そんな物騒な国際外交なんて知りたくなかったです」
「でもなんでそこまで日本の超能力研究だけが進んでるんです？別に研究成果を黙秘してるわけでもないのに」
「そんなもん簡単な話だ。教科書読んで知識として仕入れたものと実際体験して学んだもの、どっちが糧になる？
外国連中は超能力を研究所で扱ってるが日本は教育機関で扱って

る。その差は大きいぞ。先達に手取り足取り教えてもらえるってのは何より勝る資料っつうわけだ」

「学園都市自体が1つの大きな資料なんだよね。ま、僕はその資料の半分ほども利用できない立場なわけだけど」

「形骸変容（メタモルフォーゼ）は研究資料自体が少ねぇからな。実際誰かが使ってるのを参考にすることも、コツを教わることも難しい・・・・・・希少（レア）能力（スキル）の悩みだな」

「とにかく話を戻すと、日本の特別指定学園都市っていうのはあるだけで価値のある存在で、あの競技はその集大成みたいなもんなんだよ。あれほど超能力についての研究資料の集まるイベントはねぇんじゃん？

ついでに言えば、あれって大学生って出てないだろ？それがどういう意味か分かるか？」

「え？能力の技巧の差が激しすぎるからじゃないんですか？」

タカがきょとんとして聞く。

うん。タカ、君は今すぐ髪を黒く染めなおして、スポーツにでも打ち込むべきだ。

あるいはもう少し言葉の裏というものを考えてみよう。

僕がそんな気持ちを伝える間はなく鮮香さんが答える。

「それもあるけど、もう1つ大きな理由がある。大学の連中は審判側に回ってるんだ。

いくら競技とはいえ、間違えたら人死にが出るだろ？競技の様子を全て徊視子蜘蛛や衛星カメラで追って、それを情報として統一、大学生がもしもの時に助け出すっていうてはずになってるんだ。

一種の実践訓練なんだよな。監視の手がどこまで及ぶかというテスト、大学生の人命救助訓練、それらを合わせて学園都市の自治能力の把握と向上を目指す。この少女が言ったろ、シュミレーション。そういうこった」

「だからあのイベントは良くできてるんだ。生徒達は楽しく取り組める。学園都市は一気に技術力を上げられる。発案はうちの校長だ

ろうけど、だとすると結構あの人黒いよね。学園都市側の利益をちゃんと考慮して、うまく協力させてる」

「あの始めにモニターに出てた校長か？あの人見た目ほど若くねぇーだろ。２０年ぐらい前の写真に写ってんの私んとこの校長室で見たことあるし」

「「え？」」

クシロとタカの声がぴったり揃った。

確かに初めて聞いたら驚愕モノだと思う。あの人本当に中学生ぐらいにしか見えないから。

というかいつもゲームしては教頭に引っ張られていくものだから、何十年も学園にいるようなお偉いさんだとは信じられないのだ。

まぁ、僕は前にカイナの発言で知ってはいるのだけど、それでもやっぱりまだ疑っている。

「らしいですね。少なくても３０年前にはとっくに生まれてたみたいだし。２人とも驚いてるけどカイナも同い年ぐらいみたいだよ？」

「・・・マジか？あの人不健康そうだけどそこまで歳じゃねぇだろ・・・・・？」

「能力で老化抑えてるんじゃないかな」

「隈はファッションか？でもそれじゃあ校長は？あれも能力か？」

「いやそもそも学園長だってかなり若いけどあの席にずっと居座ってるんだろう？」

「見た目と実年齢が一致してない人多いよね、我が学園は。あっ、そうだ。３０年ほど前、東京の方で形骸変容（メタモルフォーゼ）が暴れたって話知ってる？」

「聞いたことあんな。でもアレって都市伝説の類だとばかり思ってた・・・ホントにあったのか？」

「うん。先代の形骸変容はドラゴンになってそこら中破壊しまくった挙句、逃げちゃったんだって」

すると彼女は手に持っていたメニューと左手をバンッと合わせて嬉々して言った。

「ほぅ、ドラゴン！いいねぇ！」
僕も同意する。
「いいよねぇ、今のところの目標なんだけど」
「お願いだからやめてくれ・・・」
クシロがそんなことを言っている。彼は今後クラスメートと協力して新たな方法で僕を苦しめるに違いない。
ああ、僕はこうして自分の首を絞めていくんだろうな。
でもまぁ、本音だし仕方ない。
「ドラゴンかぁ、浪漫だねぇ」
「浪漫だよねぇ・・・」
「浪漫か？」
「浪漫なのか？」
男子2人は首を傾げて疑問を口にする。
「浪漫だろうが」
「浪漫だよ」
一方女子2人は再度断言。
両者意見に相違有り。
うーんと首を捻る側と分からないかなぁと首を振る側のやり取りがしばし続いた。
結局分かり合えないということで決着し、鮮香さんが話を切り替える。
「ま、その話は置いておいてだ。少女よ、お前はどう思う？あの実践訓練で一番得をしたのはどこだ？」
僕に向けての質問らしい。
「そんなこと――――」
そんなことは分かりきったことだろう。
資料とは情報、情報の価値は希少の度合いが大きく関係している。
観測の難しい生物ほどその映像が重宝されるのと同じ理屈だ。
前年までと今年との違いは何か？今年に限って、新たに追加された要素（ファクター）は何だったか？

３０年来の再来、希少能力（レア・スキル）。いまだその数が１０を超えない、形骸変容（モルフォーゼ）。

そんな能力者が能力を使っている映像（データ）はどれほどの価値があるだろうか？

／

学園都市から数駅離れた場所にある、とある山中の研究所。

多大な国税を湯水の如く消費し、次世代教育施設を隠れ蓑にした巨大組織。

万可統一機構。

その院長室にて、織神葉月に岩男とぼさぼさ頭の初老と表現された２人の男が対面している。

部屋の主人である内海岱斉は机に腕を立てかけ、訪問者である科学者の加藤倉光（かとうくらみつ）は部屋にあった椅子を引っ張って座った状態だ。

「今回のデータを見てのお前の意見が聞きたい」

「おかしなことを聞くな、君は。誰が見ても申し分ない結果じゃないかね！」

岱斉の切り出しに、倉光は大げさに両手を挙げた。岱斉よりも歳を重ねているはずの彼の挙動は子供それだ。天才肌の博士である彼は、子供の頃からその頭角を現し研究に没頭するあまり理性的行動を習得するのをうっかり忘れてしまったらしい。

そんな彼の様子を珍しく眉を寄せて見守る岱斉。

「申し分ないのは分かっている。論点はそこではない」

「んん？織神の進展が気がかりではなかったのかね？確かに形骸変容（メタモルフォーゼ）を発現したとはいえ、その後支障が起きる可能性はあったじゃないか。ちゃんと安定しているということは喜ばしい話だ！」

「確かに能力発現後に死亡するケースがこれまでに何度かあった。だが今は別の話をしている」

「織神の制御かね？ふふん、確かに３０年前あれほどに完成した形（メタモルフォーゼ）

骸変容に逃げられた苦い記憶だな。
だが、そのための体育祭だろ？あの時とは違うんだ。徊視蜘蛛に監視衛星、そのテストはこれまで何度も繰り返してきた！だいたい織神にはチップが埋めこまれている」
「お前はそれが形骸変容（メタモルフォーゼ）に通用すると思うか？」
「さぁてね。しかし、そんなことを言っても始まらない。元々あの能力はそういうものだ。しかし、今回の織神は随分大人しいじゃないか」
倉光の楽観的な意見にしかめた眉をさらに寄せて岱斉は言う。
「確かに、我々の行えることにも限度があるがな。まぁ、いい。今話すべきは次のプランのことだ」
「次のプラン！」
「そうだ。次に移行するために生ずる問題についての意見を出せ」
上司であるとはいえ年下に命令形で命令されているのに倉光は全く気にした素振りを見せない。
むしろ『次のプラン』という言葉に歓喜して、目を輝かせている。好奇心にのみ動かされる彼のような人間にとって新たな研究というのはよほど魅力的に聞こえるようだ。
「なるほどなるほど。つまりお前さんはバランスが悪いと言いたいんだろ？片方が抜きん出ていても意味がないと。で、お前さんは一体どっちが抜きん出てると思ってるんだ？」
「言うまでもないが？」
その質問に即座に断言する岱斉に、今度は倉光が苦笑した。
「ははん、まぁそうか。なら・・・そうだな。もう少し時間を置け。あれにはもう少し”学習”させるべきだな」
「能力的な差がさらに広がるぞ？」
「総合的な技能を合わせて考えるべきだな、カップリングさせるのが目的なんだ。対峙させて瞬殺なんてされたらそれこそ水の泡じゃないか」
「ちなみに参考として聞くが、総合的に見てお前はどっちがどっち

を殺すと思っている？」
「言うまでもないね」
倉光は岱斉と同じように返答してやる。
だがそんな彼の茶目っ気を完璧にスルーした。
「と、なるとお前ならどの”教材”を使う？」
せっかくの友好的な行為を無視されたというのにやはり彼は気にしない。
細眼鏡の奥の瞳は細め、機関の研究部門責任者は平然と言ってのけた。
「御籤一四三を消費（つかう）するね」

第２０話－　学園都市。－Ｒｅｖｅｒｓｅ－（後書き）

夏休み編に入り、またのんびりした感じです。いや…それほどのんびりしてもないか。
夏休み編と言いつつ、体育祭の処理みたいになってますね。
でも夏休みは夏休み。

さて、今回投稿が遅れました。すみません。
一応誤字とかを直し始めているのですが、あまりのむず痒さに悶絶して全然進んでません。
わざわざ、一話全ての誤字・表現間違いを指摘くださったやーさん、本当にありがとうございました。
一応第１話の修正は終わりました。
稚拙な部分が多々あるのですが、できるだけそのまま残そうと、表現を変えた部分と変えなかった部分がありますが、大変参考にさせていただきました。

ホームページでキャラクター紹介とかやっているのでよければ見てやってください。
ｈｔｔｐ：／／ｃａｎｄｙ．ｚａｐｔｏ．ｏｒｇ／ｈｉｇａｎｎｏｈａｎａ／
こっちのＷｅｂ拍手からでも気軽に投票してくださると嬉しいです。

第２１話－　楽気苑。－Ｓａｖａｎｔ－（前書き）

★キャラ人気投票実施中★
評価／感想のページかメッセージかで、
１人１回で３点を分割して複数にでもまとめて１人にでも自由に入れてください。

数が足りない場合は自然消滅するので、入れてくださるとすごく助かります。

第２１話ー　楽気苑。ーＳａｖａｎｔー

「隆君！天ぷら蕎麦まだぁ！」
「天ぷらは揚がってますけど、麺がまだなんです！先輩、蕎麦はあとどのくらいですか！？」
「んな早く作れねぇよ！それより親父どこ行った親父！あの野郎この忙しい時に・・・っ！」
「蘇那（そな）さん、これ注文の親子丼です。タカ、カツ丼用の豚カツは？」
「そっちに置いたやつだ！そういや醤油が切れかけなんだよ、そっちの棚から出してくれ！」
「お父さーん、早く帰ってきてよぉ～」
「ながり！いいからとにかくできることやってくれ！」
「ご飯は！？もうそろそろ炊いたのなくなるよ！」
「キャベツとタマネギ切らないと・・・・・・」
「あ、またお客さん来た！いらっしゃいませ――っ！」
「麺切り終わったぞ！次の生地作るから誰か代わりに茹でてくれ！」
「ビールお替りだって！ジョッキ２本！」
「こっちは手が離せないんでそっちでやってください！」
「ねぇ！さっき来たお客さん麺を蕎麦からうどんに替えてくれって・・・」
「うちは蕎麦屋だ！！もういいから追い返せ！」
「それまずいって！」
「でもさすがにうどんは打てねぇよ！」
「最近は麺はどっちか選べるっていうのが普通だからねぇ・・・」
「だからうちは蕎麦屋だろうが！」
「そういえば冷蔵庫に市販のうどん残ってなかったっけ？」
「あ、この間皆で鍋やった時のやつか！」
「いいのそれって？」
「知るか！向こうが無茶言ってんだ、文句言われる筋合いはねぇ！」

「またまたお酒の注文、箔霜泉(はくそうせん)ってどこだっけ!?」
「向こうのお客さんが何かおつまみないのかって!」
「そういうの親父しか作んねぇんだっての!ホントに店ほったらかしてどこ行きやがった!?」
「それも鍋やった時に買ったおつまみが残ってるはずだよ!」
「冷蔵庫に入ってねぇーぞ!」
「それ多分上の冷蔵庫だわ!お父さんがどうせ食べると思って家の方にしまっちゃった!」
「取ってこい!隆、出汁(だし)はどうなってる!?」
「まだありますけど、足りるかは微妙なところです」
「ちょっ!?お客さん!困りますって!!やめっ!・・・いやいやいや良くない良くない!酔ってますよね!!」
「葉月あの酔っ払いに目を覚まさせてやれ!!」
「りょーかい!」
「いやいや、穏便にだよ!葉月ちゃん暴力は駄目だからね!」
「はーい、お客さん。お酒でいい気持ちなるのはいいけど、人様に迷惑はかけないでくださいね!いつの間にか路地のゴミ箱に上半身突っ込んでても知りませんよ?」
「はーづーきーちゃーん!!」
「結局おつまみどうしたんだよ!?ながり!」
「だからお客さんがぁ〜」
「お客さん!酔ってたら何やってもいいと思ってません?本当にゴミ箱に突っ込むよ!?」
「はーづーきー!」
「だって、ながりさんから離れないんですよ!」
「お前の腕力ならいけるだろ!力づくで引き剥がせ!放り込め!」
「みーいーしーくぅーん!!!」
「あーもう!バイト増やせよ!!」

夏休みに入って3日目。臨時に呼び出されたバイト先で、僕らは

そんなやり取りをしていた。
駅近くの蕎麦屋『楽気苑』は原因不明の人気店であり、そんな店の従業員である僕らは忙しいバイト生活を送っている。
特に今日は何故か店主である親父さんこと節明義が行方不明だ。
昼まではいたらしいのだけど、僕が三石籐矢先輩に緊急招集された時には既にいなかった。
そのまま一番客入りのよくなるサラリーマンの帰宅時間になっても親父は現れず、怒涛の数時間を過ごす羽目になったのだ。
「もうやだ・・・このバイト労働と給与のバランスが吊り合ってない・・・・・」
いつもの溌剌とした佐賀蘇那さんすら燃え尽きたように客のひいた椅子に座り込んでいる。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・」
親父さんの娘であるながりさんが謝っているけど、彼女のせいじゃないしね。問題は親父さんだ。
あの人・・・この切実な従業員不足をちゃんと理解してないよね。
「ったく!やっぱもう1人ぐらいちゃんと蕎麦打てるようにしとかないとな・・・。葉月どうだ?」
「えー、そんなスキルはいらないなぁ」
「隆」
「俺も要いりません」
「蘇那」
「やーよ、別にここでずっと働くわけじゃないし。藤矢君こそちゃんとここに職を定めなさいよ」
「や、やめるんですかぁっ!」
蘇那さんの言葉に慌てるながりさん。
そりゃこの店の娘として貴重な労働力を失うのは避けたいだろうし、知り合いが辞めていくのは悲しいものだろう。
「考え直さないといけないのは事実よね・・・」
「時給上げられても考え物だよな」

「タカまで・・・小遣い稼ぎなんだから時給上げられたらがんばりよ」

「時給じゃなくていいけど、特別手当は貰わないとな」

「あの人の経営意識はどうなってるんだ・・・」

それぞれに愚痴を吐きながら、閉店後の店内でだらける。

現在午後１０時２５分。

夏休みだからいいけれど、こんな時間まで朝から働きづめになるのはかなりきつい。

フリーターでできうるかぎりシフトを入れている先輩やここの娘であるながりさんは本当に疲れているようだ。

といっても、シフト表を見る限りは隔日で来ることになっている僕や隆がこうして毎日顔を出している時点でシフトなんてあってないようなものだけど。

先輩が奥からビールを1瓶持ってきて飲み始めた。

店の売り物なのだけど、正直そんなもの咎める気にもなれない。

一番咎められるべきは親父さんだからなぁ。

「僕も何かのも・・・」

というわけでもそもそと立ち上がる。

「葉月いくらなんでもまずくないか？」

「何をおっしゃいますか。当然の権利です」

ジュースと・・・あと何か食べれるものなかったかな。

厨房の冷蔵庫を探ろうと暖簾をくぐる。

と、そこで、

「おおー、お疲れ様――！」

閉めた引き戸をガラガラと開け、こっちの気持ちを全く知らないで親父さんが帰ってきた。

「ん？どうした？皆揃ってじっと見て・・・」

そのあんまりのな言葉にアルバイト暦が一番長い苦労人三石先輩がキレた。

「・・・とりあえずそこに正座しろ」

「ははっどうした、三石。そんな怖い――――」
「正座しろ！」

店主という立場にあり、従業員を束ねる権力を持っているはずの人間が、今店の床に正座している。
いつもなら優しい中にも厳しさありな彼が素直にアルバイター三石君の言葉通りに座っているかというと、先輩の顔がすごいことになってるから。
鬼の形相とはこういう時に使うのだろう。
店の出入り口辺りの床に正座する親父さんに店の奥のテーブルに各自ついている戦場から帰還した面々が対峙する形で、ただ今裁判を開廷中だ。
「で、どうしていきなりいなくなったんだ？」
仮にも給料を貰っている身にしてどうかという言葉遣い。まぁ、僕がここでバイトする前から結構ストレスが溜まっていそうな感じだったし色々思うことがあるのだろう。
「いやぁ、店の常連に言われたんだ。『おたくの店の従業員はいつも忙しそうにしているけど、店はちゃんと回せてるんですか？』と」
「ほう・・・」
「だからさ、そうなのか？と疑問に思って、俺がいなかったらどうなるのかと試してみたんだ」
「・・・結果は？」
「大丈夫そうだな、と・・・」
「んなわけあるかぁぁあああ！！！」
ああ、ついに三石君が爆発。
というか、日頃の店の混乱を目の当たりにして結論はそれですか。
「毎日見てたら分かるだろ！どう考えても人数不足だよ！つーか、言ったよな！俺従業員増やせって言ったよな！？」
「何だかんだ言って、乗り切れたじゃないかよぅ」

「・・・・・葉月、厨房から油の鍋取ってきてくれ」
「もう処理しちゃった。それにどの道冷めちゃってるよ」
「新しく温めてくれ。こう・・・人にぶっ掛けるにちょうどいいぐらいの量を！」
「待て！早まるな！」
先輩の話に乗って、僕は座りなおした席から立って厨房の方へ。
途中で思い出したように立ち止まって、振り返る。ここでこそ笑顔は使うべきだ。
「あ、そういえば知ってます？昔、高熱で溶解させた金属の風呂に吊るした人を下ろしていく処刑方法があったらしいですよ。あまりの熱で浸けた体の部分までの肉が全部溶けて骨だけになるんだとか」
とまぁ、うん。これで脅しは十分だと思う。
「・・・親父さん、バイト代上げてくれますよね？」
「・・・・・・・・・はい喜んで」

＃

「そんなことがあったわけだ」
タカがそんなことを言って昨日のことを楽気苑に突撃訪問したクラスメート数人に話している。
昨日とは打って変わって店内はかなり暇だ。
客入りは時間帯によってかなり変わるのだけど、今は昼食も終わり夕食にはまだ早いという絶妙なタイミングなため客は1人もいない。
いや、一応クシロとかが注文はしている。とはいえ、ジュースとかなので手間なんてかからないし、この後訪れるラッシュのために従業員である僕らは体力を温存すべくだらけている。
つまりこの時間は束の間の休息なのだ。
「その話で問題なのはなんで葉月ちゃんがそんな無駄知識を知っていたかよね」

椎ちゃんが重大だと言わんばかりの思い溜め息を吐いた。
「きょーいくじょーよくないよねー」
美樹ちゃんまでそれに同意する。
教育上って言われても、もう中学生だし物事の分別ぐらいつけられる歳なんだけどもね。
「大体どこでそんな知識手に入れたんだ？」
「いや、普通に本屋で見つけたんだよ。えーと・・・題名は『実際にあった異常拷問法全集』だったかな」
「何でそんな本が出版されてるとか、何でそんな本を仕入れてるとかそういうのは置いといて・・・何でその本を手に取るんだよお前は」
「面白そうだったから」
「・・・だよなー」
諦観しきった顔のタカ。そう分かってるなら訊かなきゃいいのに。
「それはそうと、夏休みに集まって何かするっていうのはどうなってるの？」
「あー、まだ詳細は決まってないんだけどね。とりあえず夜は花火がしたいっていうのが皆の意見よ。
あとは昼にはショッピングでもしようかなってぐらい」
と椎ちゃん。
まぁ、夏休みはまだ1ヶ月以上もあるわけで、そんなに急ぐ必要もないのだ。
宿題がない身としては一日一日充実した日々を送ることこそが課題なのだし。
ただ、僕だってずっと暇というわけでもない。
「僕も一応予定あるからね？バイトもタカが言った感じだし、所属グループから用事が入る可能性のあるし、それに夏の間篭(こも)るつもりだから」
所属グループ・・・つまり裏方のことだけど、非合法組織なので伏せてある。

「篭る？何かするのか？」
「ちょっとね。形骸変容（メタモルフォーゼ）の資料が手に入るから、とっとと頭に入れちゃおうと思って。それに人体解剖図とかの医学書関連もこの際だから詰め込もうかな、と」
「頭に入れちゃおう・・・って随分簡単に言うよな」
「あれ？言ってなかったっけ？僕、基本的に一度記録したもの忘れないからね」
その言葉にお店のお冷をセルフで持ってきて飲もうとしていたタカの手が止まった。
なーんか、ものすごく形容しがたい顔をしている。
呆然といった顔というか唖然とした顔というか理解不能と書いてあるような顔というか・・・。
あ、額に手をやって考え込み始めた。
「何だそれ？何でそんな便利スキルを身につけてるんだコラ、羨ましすぎるぞてめぇ・・・」
「あのねぇ。僕は仮にも万可統一機構出身だよ？あそこは次世代教育について研究してるの。その中に賢者（サヴァンズ・フラグ）の欠片も当然あるよ」
「・・・賢者（サヴァンズ・フラグ）の欠片って何？」
今度は椎ちゃん。
むぅ。言葉自体を知らないのか。
「サヴァン症候群に現れる特徴のこと。万可統一機構じゃそれを賢者の欠片って言ってたんだよ」
「センセー、サヴァン症候群って何でしょうか？」
美樹ちゃん。
「・・・・・」
そこからですか。
有名な言葉だと思うんだけど。
「特に自閉症患者に見られる特異的な才能を発揮する人々のことを昔『白痴のサヴァン』と呼びました。蔑称なのでこれは使わないように。サヴァンとは賢者のことですが、それに白痴という真逆の言

葉がついていることから分かるように、脳に障害があったりしてＩＱなどが極めて低いにも関わらず、ある分野に対して常人を遥かに凌ぐ才能を発揮する人のことを指します」

「はい、先生。自閉症って――――」

「話が進まないので端折ります。自分で調べてください。

それで、その特異的な才能というのは、人によって色んなものがありますが、特に多いのが数学に関する才能がある人有名です。カレンダーの曜日を西暦が使われる前の年代であっても当てられたり、１０桁同士の掛け算を暗算でこなしたりする人がいることは知ってますね？彼らには数字が色や形に見えるらしいのですが、これは省きます。

それから他にも芸術分野で活躍する人も多いです。１０年前に一度見ただけの風景を細部まで描く画家、目が見えないのにも関わらず、ピアノを演奏し、一度聞いた曲も再現する演奏家・・・。

語彙が１０００を超えないような彼らが人々を感動させる作品を創る様は奇跡としてメディアで紹介されています」

「あー聞いたことあるわね」

「さて、しかしここで疑問が出てくるわけですね。どうして彼らは天才的才能を発揮するのか？

多種多様の才能を開花させる彼らですが、共通する特徴もあります。

まず１つ目が記憶能力――直観像記憶ですね。見た映像をそのまま思い出せるということです。

これはカメラをイメージしてくれたら分かりやすいのですが、その時その時の記憶を映像として保存しているため、彼らはその細部までを思い出せるというわけです。何せ写真を見てるわけですから。

絵を描くサヴァンが一度で細部まで描ける理由はこれに起因すると思われます。また、彼らの絵描きの特徴として、端から順番に描いていくというのがありますね。普通絵を描く場合、全体像をラフで描いていくのが私たちの一般的な描き方ですが、彼らは頭の中で

鮮明な映像を思い出せるためそんな行為が必要ないわけです。
　また、目で見た映像の全体を一度に把握する能力にも注目したいですね」
「意味が分かりませーん・・・」
「では美樹さん、いいですか？テーブルにある割り箸立てに割り箸は一体幾つ入っているでしょうか？」
「えっと、１、２、３、４――――」
「はい結構です」
「え？」
「今あなたは指を指して、割り箸一本一本を数えましたね？つまりそれは割り箸一本一本に意識を集中していったというわけです。
　人は通常モノを数える時、１つ１つの対象物に意識を集中していく必要があるんです。１つ、２つ、３つ・・・と。
　ところが、サヴァンの有する把握能力はそんなことをしなくても、割り箸立てを見ただけで、全体で何本あるかわかるんですね。数える必要がないということです」
「・・・うっそだぁ・・・・・・」
「このテーブルの割り箸は３７本あります」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ホントだ」
「それから２つ目、彼らは類まれなる集中力を発揮するのですね。これがまたすごい。本当に昼夜作品作りに没頭するんです。
　脳に障害があり、他にできることがないからだと言う人もいますが、どうであれその集中力の強さは驚嘆に値します。
　彼らの多くは直像視という能力を持っているわけですが、それだけで芸術家として才能を発揮できると言うわけではありません。
　彼らも努力するです。それが好きだからという理由でずっとそれだけに集中力を注ぐからこそ、上手くなっていくんですね。つまり彼らは努力するという才能を持っているとも言えます」
「でもそれって、完全に生活能力ないってことじゃねぇのか？」
「先生には敬語を使いましょうね」

「・・・ないってことじゃないですか？」
「ええ、それが3つ目の特徴とも関係してくるのですが、彼らの能力は周りに世話をしてくれる人物がいてこそ成り立ちます。
でなければ生きていけないというのもあるのですが、何より彼らはその才能をその人のために使うことが多いんですね。
つまり、何かのきっかけで自分のしていることを褒められたことが嬉しくて、それに没頭するというパターンが多いんです。喜んでもらうために何度もそれを繰り返す。
では椎さん、もしその世話をしてくれていた最愛の人を亡くしてしまった後、彼らがどうなるのか分かりますか？」
「えぇっ！・・・・・・分かりません」
「場合によりますが能力がなくなります。というより使わなくなります。
当然ですね。自分がその才能を発揮しているのはその人のためであり、その人がいない以上、もう行う必要がないんですから。
・・・というのが、サヴァンの概要と触りですね。
以上で、織神葉月プレゼンツ『サヴァンの才能とその特徴』は終了です。興味のある方は図書館で関連図書を調べてみてくださいね」
「うん、絶対調べない」
「酷いなー、結構面白いよ？」
「今のでもうお腹一杯よ」
「ちなみに、サヴァンは圧倒的に男性に多いんだよ。ソフィ氏みたいな女性のサヴァンは珍しいんだよね。
まぁ、それで万可統一機構はそのサヴァンの特徴である直像視や計算能力を普通の子供に発現させようとしているわけ。
僕もそういう教育プログラムを受けてたからね。賢者の欠片（サヴァンズ・フラグ）はいくつか持ってるの」
「直観像記憶と把握能力？」
「うん」
と、そこでクシロがあれ？という顔をした。

「ちょっと待て。対人記憶弱かったろう、葉月は」
「まぁーね。そもそも賢者の欠片（サヴァンズ・フラグ）の植え付けなんてまだ確立されてないの。僕のは劣化能力なんだよ。
　一度脳に記録したことは忘れないけど、記憶しようと思わない限り直観像記憶はできないんだよ。集中力を使うから普段は使わないしね」
「・・・なぁ、教師の名前とか覚えていないのは何でだよ？」
「・・・・・えーと、興味がないから？」
「ひでぇな、おい・・・」
「まぁ、そんなどうでもいいことはおいといて」
「ホントにひでぇな・・・」
「本題は僕にも用事があるから早めに予定組んでねということだったはず」
「あー、そうだったっけ？」
「まぁ、了解したわ」
　話が一段落した所で店の時計を見てみる。
　うん、そろそろ時間だ。
　目を元に戻すとタカがいまだ疑っているらしく、割り箸立てをじっと見ている。
　残念ながら普通の人はできないんだけどね。目が痛くなるだけだと思う。
「タカ、もうすぐ時間だよ」
「あぁ、もうか」
「え？何が？」
「戦争の時間だ。さぁ、お前ら帰れ。これから死ぬほど忙しくなるからな」

／

　仕事帰りにまだ余裕のある時間を楽しもうと、駅近くの店を訪れ

る会社員が増えるこの時間帯。
俺が葉月に紹介してもらったこのバイト先は戦場に変わる。
どうせなら午後7時ぐらいまできっちり仕事をしてほしいものなのだが、退社時間の早いサラリーマンがまだ陽の当たっている内から店に入ってくるようになる。
その頃はまだ従業員側にも余裕がある。問題はその後の帰宅ラッシュだ。
従業員数が店長を入れて5人というこの蕎麦屋は、信じられないことに正式な従業員が1人もいない。2人は店を営業している親子で、残りはアルバイトだ。
なんでそんなことになっているかというと、あまりに労働状況が過酷なために辞めていったという笑えない理由である。
俺が来る前は4人でやっていたらしいのだが、まぁ、その時は葉月が男で厨房に回っていたので何とかなっていたらしい。
葉月は今でも厨房の仕事も掛け持ちでやっているから、そこまで差があるわけではないと思うんだがな。
で、とにかく忙しいこの時間帯は俺らにとって非常にストレスになる。
時給が上がったとはいえ、従業員数は前と同じでは結局体力的な改善がなされていないわけで、今日から店の前にバイト募集の広告が出されてあるが、『激務につき根性がある人』の文字が踊るその紙切れに集人能力があるとは思えない。
結局のところ今の人数で苦しみながら耐えるしかないのだろう。
バイトを換えるという手もあるが、給与が上がったというのは魅力的な話で、かなり懐は暖かくなるはずである。
しかしこれは俺の事情(はなし)だ。
三石先輩にしてみればストレスの原因は他にもあり、そちらの方が重要だろう。
先輩は親父さんの娘であるながりさんのことが好きらしい。バイト初日の帰り際、蘇那さんが笑いながら教えてくれた。

しかしながら、見て分かるように二人の仲が恋仲になることは今のところなさそうだ。

そしてその原因の一端を葉月が担っていたりする。

小さい子が好きななながりさんの関心は葉月に向けられ続けるため、彼女が周りの男性を意識するなどということはないのだ。

葉月自身は全くそのことに気づいてなく、三石先輩はいつもイライラしてるなーぐらいにしか思っていないのだろう。

もっとも、男で1つで育ててきた愛娘にそうそう男を近づけるわけもないので、親父さんが最大の壁になることは目に見えているのだが。

さらに、そんな情報を与えてくれた蘇那さんなのだが、どうも俺が見るに蘇那さんは三石先輩に好意があるらしい。

だが既に一杯一杯な先輩に周りを気にする余裕があるわけもなく・・・。

『蘇那さん→三石先輩→ながりさん』という一方通行な好意の連鎖が続いている。

・・・・・・ここは修羅場だ。

いつバランスを崩して崩壊していくか分からない。

こんなところで平気で働いているのは葉月ぐらいなのだ。

「むむぅ・・・やっぱり似合ってるなぁ、葉月ちゃん」

「改めて言わなくても、散々見てますよね？あれだけ呼び出されたんだし」

「ごめんなさい・・・」

「おい、無駄話してないでこれ運べ」

「あはは、先輩相変わらずイライラしてますねぇ」

「・・・・・・」

「あ、いらっしゃいませー」

「ざる蕎麦3つ入りまーす」

「・・・まだ作り置きあんな。隆、蕎麦茹でるのは任せる。俺は多めに蕎麦打っとくから」
「了解しました」
「はーい、天ぷら蕎麦ですね。天蕎麦入りまーす！」
「揚げ物は葉月の管轄だ」
「えぇ？いつの間にそんなことに！？」
「人の2倍は走り回れ。給仕と厨房兼任なんだからな」
「三石君、駄目よ葉月ちゃんいじめたら」
「いじめてははねぇーよ。いいから次の注文取ってこい、ながり」
「おわっ、団体さんだ！い、いらっしゃいませ！」
「うげっ、ちょっと待てよ。・・・何で？」
「スーツ姿だし、サラリーマンだよね？もしかして重大プロジェクトでもやり遂げた後の打ち上げ・・・とか？」
「いやいやおかしいだろ！何で蕎麦屋で打ち上げ？居酒屋行けよ！」
「うち・・・あんまり蕎麦屋らしくないからなぁ・・・」
「『蕎麦屋』って暖簾に書いてあるだけだもんな。食品サンプルも置いてないし一目見て気づきにくいのかもしれねぇ」
「とかいいつつこの店、お酒の取り揃えいいんだよな」
「そもそもここら辺って居酒屋あったっけ？」
「あるよ。あー、でも駅からは少し離れてるね」
「だからうちにそういう客も入ってきてたのか・・・」
「でも団体で飲みに来るにはここ小さいでしょ」
「はぁ・・・まぁ、仕方ないか」
「そういえば親父さんは？」
「奥で蕎麦打ってるよ。昨日のことを考慮にするともう少し玉がいりそうだったからな。今のうちに打たせてる」
「あ、タカ海老は？もうこっちにないんだけど、剥いて腸抜きしたやつもうない？」
「いや。もう1ケース分やったはずだぞ？」
「出汁はどうなってる？」

「量は十分ありますよ。少し多めに作ったんで」
「団体さんのちゅうもーん！とりあえず生１３本と親子丼３つ、カツ丼２つ、掛け蕎麦が６つにかやくうどんが２つだって」
「・・・なぁ、だからさ、ここは蕎麦屋なんだが？」
「だってお客さんの注文なんだもん・・・」
「ないだろメニューに！断れよ！」
「大丈夫だよ先輩。クラスメートにうどん玉買ってきてもらったから」
「それって大丈夫なのか？」
「いやおい、昨日は仕方なかったがわざわざ用意して市販のうどん使うってどうよ？」
「セーフでしょ。そもそもこの店は蕎麦屋なんだし。それに彼らは別に美味しいうどんを食べに来てるわけじゃないしね」
「身も蓋もねぇこったな。まぁいいとっとと出すか。丼は葉月な」
「ちょっと！？揚げ物も僕じゃなかったっけ？丼もやるの！？」
「接待もな。さー働け」
「相変わらず重労働だ・・・」
「おーうお前らどうだ様子は？」
「いつも通りだな」
「いつも通りですね。居酒屋代わりにしてる客が来るところとか」
「いつも通りです、親父さん。うどんを頼んでくるお客がいるぐらいですね」
「そうかそりゃよかった」
「「「・・・・・はぁ」」」
「よくねぇ！気づけよ！今のはどう考えても皮肉だろ！」
「先輩そんなこと言っても仕方ないですよ。どうせ分かってません」
「タカも結構酷いことを言うよね。仮にも雇い主なのに」
「そうだな。で、その雇い主が店からいなくならないように足枷をつけたのはどこのどいつだ？」
「しらなーい」

「どうでもいいがもうそろそろ酒のつまみ欲しがる客が来るだろ。あんたしか作れねぇーんだから、早いうちに作っといてくれよ」
「追加注文だよ！チューハイレモン２つに梅酒をソーダ割りで４本」
「分かっちゃいたけど酒ばっかだな・・・」
「ビールのジョッキ片付けないで大丈夫？」
「残ってる人多いし、まだ食べ物は運んでないからね」
「よっと、天ぷらできたよ。豚カツもよし。卵かき混ぜないと・・・」
「注文です。牛乳がほしいんだって」
「牛乳なんてあったか？というか何でまた牛乳なんだよ？」
「お酒呑む前に飲んで酔うのを和らげるんじゃない？」
「じゃあ呑なきゃいいのにな」
「付き合いってものがあるんでしょ。その内味噌汁ないか聞かれたりして」
「味噌汁？」
「血中アルコールの分解を助けるんだったか？」
「聞いた話なんだけどね」
「とと、ネギは？入ってないんだけど・・・」
「冷蔵庫じゃない？あ、ついでに大根取って、おろしにしないといけないから」
「また注文。軟骨から揚げを２皿！」
「うわぁ、接待回る余裕なんて絶対ない・・・・・・・・・・・ながりさん？何で抱きついてくるんですか・・・」
「忙しくて挫けそうな心を癒してるの」
「ながり、接待に戻れ。葉月はから揚げやれ」
「もう、三石君！私のリフレッシュタイムを取り上げないでよぅ」
「この店は５人でギリギリ回ってんだよ。一時も休む間はない」
「注文よん。フライドポテトだってさ」
「断れよ！あるわけねぇーだろ！蕎麦屋だぞ！？日本食だぞ！？」
「ジャガイモあったっけ？」

「葉月も応えようとするな！その客わざとやってるだろ！？」
「外のチェーン店から買ってきて皿を移せばいいんじゃないですか？」
「隆、それはもはや犯罪だろ」
「いいでしょ。メニューも読めない人ならバレやしないよ」
「はーづーきーちゃーん？」
「まぁ、ジャガイモあったんで作りますか。あ、でもケチャップは？」
「家の方の冷蔵庫にあるから取ってくるわ」
「ポテトって太いやつだよね？」
「もういっそのこと丸ごと上げちまえ」
「そういえばジャガイモの芽って毒素があるんじゃなかったけ？」
「どうでもいい。葉月、丼はどうなった？」
「あっ、持ってかないと！ってから揚げやってるから離れれない！考えたら給仕とか無理でしょ！？」
「ちっ」
「今舌打ちしたよね？」
「さぁーて、今日もがんばらないとなー」
「何その棒読み！？」

――――今日も今日とて、楽気苑は戦場だ。

第２１話－　楽気苑。－Ｓａｖａｎｔ－（後書き）

少し趣向を変えてみました。
葉月のバイト先での様子とサヴァン症候群の話です。
サヴァンの話は昔読んだ書籍を参考にしてます。
あ、インフルエンザが上陸しましたね。
今後広がっていくと大学もしばらく休みになりそうです。

第２２話－　小旅行。－Ａｑｕａｒｉｕｍ－（前書き）

今回は微妙にえっちぃかもしれません。
いや、そうでもないかな・・・？

あ、相変わらず、投票実施中です。

第２２話－　小旅行。－Ａｑｕａｒｉｕｍ－

夏休みというのは暇な時間の集合体だ。
規則正しくラジオ体操に参加したり、きっちり休暇日数を数えて割った1日の宿題ノルマを終わらせたり、特定の友人と町内を駆け回ったりとしていなければ、暇を持て余して生活サイクルが乱れまくることになる。
現代事情最先端の高層マンションにラジオ体操などというご近所付き合いはなく、超能力研究指定の学園都市は勉強の二文字を生徒に丸投げしているため夏の課題など皆無で、友人が時折訪ねてきても部屋でぼぅっ過ごすのが常な俺はつまりそんな状態に置かれている。
今日、ワタクシこと朽網釧は午前7時に起きました。
・・・これだけ聞けば至極規則正しく起床しているように思えるが、寝たのは昨日の午後2時なのだ。
睡眠時間を計算して見ると17時間寝ていたことになる。
寝すぎたせいで頭が痛いし、関節がぎぃぎぃと鳴っている。
さすがにやばいかな。そろそろ外出の1つや2つした方がいいかもしれない。
ネットを使えば外に出なくても生活できる世の中とはいえ、体の衰退は後々厄介だ。
そういえばグループの能力訓練再開って何時からだっけ？
早いところ騒乱念力（ポルターガイスト）から抜け出したいんだけどな。
「あれっ？何でクシロがこの時間に起きてるの？」
そんなことを考えていたら、聞き慣れた声がドアの辺りから聞こえてきた。
もちろん葉月だ。
服装はラフなもので、アパートのクローゼットに詰め込んだものとは違う。どこかで買ったのか、ここにおいてあったものだろう。

・・・いや、というかだ。
「何で居るんだ？」
寝る前に居た覚えはない。というか居たなら寝てない。
「んー、ちょっと近くで調べ物してたら何時の間にか終電行っちゃってね。こっちに泊まったんだよ」
終電までの調べ物のどこが”ちょっと”なんだろうか？
まぁ、それはいいとして、
「終電まで開いてる図書館なんてあるんだ？」
ネットカフェなら最初からここで事足りるので、おそらく葉月の調べ物とやらは紙媒体の資料なのだろうが、そんなものを扱っている２４時間営業の場所を俺は知らない。漫画喫茶・・・はないだろうし。
ならば図書館ぐらいしかない気がする。
「無人の資料庫なんだよ、そこ。没頭しすぎていつの間にか時間過ぎちゃってね」
「へぇ、そんなところがあったんだ」
「うん。一応隠蔽されてるみたいだけど、中身は単なる超能力の資料庫。非公式の連中が使うから隠してるってことらしいけど、それは見せかけて本当に重要な資料を混ぜて隠してある。というのもやっぱりカモフラージュでただの普通の資料庫かも」
・・・・・。で、結局どっちなんだろうか？
寝起きの頭で考えるには酷だ。
「どっちにしてもあんま変わらないから考える必要もないよ」
表情からそれを読み取ったらしく、葉月は付け加える。
「いや、よくはないだろう・・・」
と、言ったところでどうしようもないか。
まぁ、コインの表だろうが裏だろうがその資料庫（ソース）はあんまり宜しくないものらしい。
「どうする？朝食作ろうか？」
・・・うぅむ。

せっかくこの時間に目が覚めたのだし、このまま起きてしまおうか。
でもなぁ、そうするとそのままこの号室でだらだらするパターンになる気がする。
・・・・・どうせなら。
「なぁ、葉月は今日暇？」
「ん？まぁ、資料も主なものは詰め込み終わったし、バイトの非常召集なんて断れるし。暇はあるよ」
よし、じゃあ決まり。
「外でよう外。朝食もついでに外で食べよう」
「どこ行くの？」
外・・・夏休みなんだし普段絶対行かないところがいいんだけどな。
あー、じゃあ、
「水族館。ちょっと遠出」

＃

大阪府には日本でも有名な水族館がある。
アクリルガラスを素材にすることよって実現できた巨大水槽にジンベイザメを囲う日本有数にして世界最大級の水族館。
水族館らしからぬ鮮やかな赤色が映えた外見を持ち、側面をガラス張りされた入り口を通り、水槽ゲートを抜けるとまず最初にエレベーターで上へと昇るという珍しい構造をしている。
太平洋をリング状に繋げた地帯に生息する生物をコンセプトに水生生物だけでなく、ナマケモノといった陸上生物も扱っているこれまた珍しい所だ。
他にもカワウソといったオーソドックスな生物もいるのだが、オオサンショウウオもいるというのは珍しい。そして何故かサワガニまでいる。

外見と同じく、その展示生物も結構変わっているのだ。
初めに通る水槽のトンネルには珊瑚礁の鮮やかなサクラダイなどの熱帯性の海水魚。そこから一気にエレベーターで最上階まで昇り、降りるように館内の散策が始まる。
まず日本の生態を扱ったスペースがあって、ここにコツメカワウソやオオサンショウウオにサワガニが水槽ではなく敷地内に再現された滝や水辺に放されている。海の生物ではなく浅い川に棲むような生物ばかりだからだろう。
次は順にラッコ、アザラシ、ナマケモノと行って、熱帯雨林のコーナーに入る。リスザルやグリーンイグアナといった変わった生き物の中でも際立つピラルクという巨大魚がここの魅力だ。えら呼吸だけでなく肺呼吸もこなせる魚としても珍しいピラルクは淡水魚最大級の巨大魚で全長４ｍに及ぶものもある。何より生きた化石と呼ばれる古代魚にして観賞魚としても有名なアロアナの仲間だ。
その後にペンギンにイルカと人気所に続きグレートバリアリーフをモチーフにした水槽を通り、ついに巨大水槽にたどり着くことになる。
太平洋に生息する生物を集めたその水槽では、マンタやイタチザメにシュモクザメといった大型の魚類が泳ぎ、その象徴としてジンベイザメが２匹回遊しているわけだ。

と、まぁ、ここまで来て、葉月の足は大分ゆっくりになっていた。
水族館が初めてなのは当たり前だとして、そもそも神戸から出たことがなかった葉月。
・・・かなり満喫しているっぽい。
今ものんびりと泳ぐジンベイザメに釘付けだ。
喜んでくれて嬉しい限りなのだが、これってチョイスを誤ったパターンなのかもしれない。
真夏の炎天下を歩き回る動物園ほか遊園地などは選択に入っていなかったとはいえ、俺も水族館自体が好きな人間だ。

仄暗い館内で青く光を透く水槽、水の満ちた空箱に浮かぶ命を内包した銀色の鱗、その何と美しいことか・・・というわけで、水槽を観賞ではなく鑑賞するような俺達は2人して場所との相性が良すぎる。

俺達のようなタイプにとって水族館は1人で来るところだろう。2人で来る場所としては間違いだ。

「なぁ、前にサヴァンの話が出てきたことあったけど、何で万化統一機構はそんなものを造りたがるんだ?」

会話がないのもどうかと思うので、気になっていたことを聞いてみた。

「ん?」

「次世代教育とサヴァン能力の関係がイマイチ分からない。次世代教育ってつまり超能力教育のことだろ?サヴァン能力とは別じゃないのか?」

んんー、と葉月は相槌を打つ。視線は相変わらず水槽の中だ。今その目は何を追っているのか。

「サヴァンの中には予知能力に類似する現象を起こす人もいるんだよ。知らないはずのことを当ててみたりね。

だから、サヴァン的な脳の使用法を会得した人間は超能力発現に有利になるのではないか?超能力の制御能力を底上げできるのではないか?という考えの下で研究が行われてるらしいよ」

「ふーん。その結果が形骸変容(メタモルフォーゼ)か・・・。でも、それなら別にあんな徹底した管理システムいらないだろ。孤児を引き取って一定年齢まで外に出さないなんてさ」

前に出入りすることになった時、相当のセキュリティをくぐることになったのを覚えているが、それだけの機密防衛のシステムを構築することとサヴァンの研究の希少性が吊り合わない気がするのだ。

だいたい、あそこは本当にそんなものを研究しているのかすら怪しいのに。

そういった気持ちからの質問だったが、

「あ〝ー、まぁ理由はあるけどね・・・」
葉月は言葉を濁した。
サヴァンの研究なんて建前だ、とでも言うんじゃないかと思っていたのでこれは意外。
「へぇ、何で？」
その問いにあまり気が進まないという風に顔をしかめる。
「間違いなく不愉快になるからお勧めしないんだけど・・・」
「いや気になるし。というか、そこまで言って中途半端にやめるのはないって」
しばらく考えるようにして、葉月はポツリと言った。
「脳を直接弄るからだよ」
「え？」
「だからね、頭蓋骨に穴を開けて、直接脳を弄るの」
・・・・・・・・・・・・。
「ほら、やっぱりそういう顔する」
いやいや、そうなるのが普通というか・・・。
建前・・・じゃなかったのか？
俺の見立てが間違いで、リスク回避のコストと研究内容はちゃんと吊り合っているらしい。
「まぁ、非人道的なんで全員にやってるってわけじゃないけどね」
そうは言うが、葉月は間違いなくやられている側に入るのだろう。
聞いていて、確かに愉快な話ではない。
愉快なわけがない。
だから言いたくなかったんだよと葉月は溜め息吐いて、振り向きざまに俺の手を取ってそのまま歩き出した。
「さ、次行こう！」
せっかくの楽しい時間を大切にしよう。
力強く引っ張る手から、そんな台詞が聞こえてくるようだった。

太平洋の水槽から離れると、次は瀬戸内海だ。マタコ他セミエビといった馴染み深いのか馴染みないのか分からない生き物を眺め、次のマンボウでまた停滞。

一応フグの仲間らしいのだが、その体型からは全く関連が分からない。日本では割と食べられてる魚で泳ぎの下手らしい。水槽の中でもほとんど泳がず、ずっと同じところに留まっている。海では海面にその平たい体を横たえて体表についた寄生虫を陽の光で駆除するとか。

それが終わると、イワシの大群が見られる水槽を通り、後はウミガメやタカアシガニ。最後にはクラゲとクリオネが待っている。

・・・いるのだが。

・・・・・・・・、・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・、・・・・・・。

葉月がチンアナゴの水槽から離れない。

底砂から体を半分覗かせている斑模様のアナゴをじぃっと見つめている。

ここにきて、葉月の水生生物への関心が爆発したらしい。

いや、見ててすごく可愛らしい仕草なのだけども。

こうして見れば年相応の・・・外見相応の女の子に見える。

ついさっきの脳弄られ発言が嘘のように、葉月には珍しくはしゃいでいる。

もちろん、本当に飛び跳ねているわけではないけれど、目を輝かしているのだか間違いないだろう。

ここに来て良かった。

「このもう少し行けばクリオネがいるぞ」

「えっ、そうなの？」

「クラゲ館の中に展示してるんだ。ほら、パンフ」

「へぇ・・・でもクラゲとクリオネって全然違う生き物なのにね」

ごもっとも。

でもまぁ、他に展示するスペースがなかったのだろう。今まで見てきたどの水槽もモチーフとする海域を決めてあるため、棲息しない生き物を混ぜるわけにもいかないはずだ。
「透明でふわふわ浮いてるっていうイメージが一緒だからかもな」
「無茶苦茶な・・・クリオネは貝なのに・・・」
「和名はハダカカメガイだっけ？誰もそんな呼称使わないけど」
「クリオネは学名だよね。マンタもそうだけど学名で呼ぶのと和名で呼ぶのと種類によってマチマチだから面倒くさくない？」
「何も考えてないからバラバラなんだろ？別に面倒くさくはないけど気持ちは悪いよな。一応、世界共通として学名があるわけだし」
「学者ですら自国での名称使うことあるようじゃ学名も意味ないけどね。まぁ、それは超能力も同じようなものだけど」
「発見したもの勝ちで名前付けていくって結構無理を言ってるよな。星や生き物じゃないんだから、能力の様態が分かる名称じゃないと勝手が悪い」
「今使われてるのほとんど俗名だからね。正式名称なんて意味ないよねぇ・・・」
同じコーナーに置かれている様々な水槽を眺めながら話していたが、ついにそれも最後の水槽が見終わった。
次はこの水族館のラストを飾るクラゲ館だ。
「さぁて、それじゃあクリオネを見に行きますか」
当然のように俺の手を握る葉月。
妙に恥ずかしい。
それが子供に同伴する親の気持ちなのか、異性を意識する男性の気持ちなのかはともかくとして。

＃

水族館を出る頃には既に陽はほとんど沈んでいた。
急な遠出だったので、ここまで来るのにも結構時間を食ったとは

いえ、満喫しすぎた気がしないでもない。
今から帰ればまぁ、今日中には神戸には戻れるのだろうが、せっかくの葉月初めての遠出なのだから、どうせならもう1つ行きたいところがある。
そこは夜の方が都合がよい場所でもあるのだが・・・。
「ほら、あそこにあるの見えるだろ？」
そういって指差す先には赤い円形の光が見える。
「観覧車？」
「そう、世界一になったこともある巨大観覧車。あれ、今赤色になってるけど、天候で色が変わるんだ」
「へぇ・・・赤は晴れ？」
「そう、曇りは緑で雨が青。
今の時間ならちょうど夕焼けが消えるかどうかっていう具合の綺麗な夜景が見えると思う。
というわけで、今からアレに乗ります」

一昔前のゴンドラといったものではなく、側面も床もスケルトンのカプセルのようなデザインのキャビンがゆっくりと上昇を始める。
俺と葉月は対面するように向かい合って座り、昇り始めたキャビンからの景色が俯瞰と言えるようになるまでしばらく待つ。
葉月はそうでもないようだが、ただでさえ運動していなかった俺は一日中歩き回って疲れが出てきていた。
もたれかかるように座り込んで、重い体を休める。
「そういえばさ、今朝言ってた資料庫で何探してたんだ？」
「形骸変容（メタモルフォーゼ）の資料だよ。前代の形骸変容（メタモルフォーゼ）を手本にしようと思ってね。ほら、ドラゴンになったこと以外知らないし」
そういえばそんな話もしたな。とがさ亭、ドラゴン、ロマン・・・。
マジでドラゴンとかやめてほしいんだが。

「収穫あったのか？」
「うーん、なかったわけじゃないけど、さ。感覚的に日記を書く人みたいで具体性に欠ける内容なんで微妙だったよ。まぁ、面白い発想があったから今度試してみたいなーとは思ってる」
「ふーん」
「そういうクシロはどうなの？騒乱念力（ポルターガイスト）は直りそう？」
うっ。やぶ蛇だったか・・・。
「全然駄目だな。能力が能力だけに自宅で練習できるものじゃないし、まだ訓練所も開放されてないから訓練すらできてない」
「あー、やっぱり？」
「それに比べて葉月は上達早すぎじゃないか？体育祭で成長しすぎだろ」
「そうでもないよ。上達したというよりはバリエーションが増えただけだし、使うとかなり疲れるからあんまり使いたくないんだよね」
「羨ましいけどな」
そうかなぁ？と首を傾げているが、学園都市のどの学生もが羨ましがるような能力なのだ。
もっと自覚してほしい。
「そうだ。クシロは超能力波って感知できる？」
「できなくもないけど・・・それって出力系なら大抵できるらしいぞ？」
超能力波というのは能力使用時に出る不可視の粒子のようなものだ。揺らいで見えるから波ということらしいのだが、実体が分かっていないのだからその名称はかなり適当なものだ。
ＥＳＰでもこれを使ってテレパシーなどを行っていると言われているし、ＰＫでは例えば炎が具現する前に出力場所に能力波が集約するといった現象が見られるらしい。あるいは能力波が集まることで能力が具現すると言った方がいいのかもしれない。
自分で扱うものなので、慣れれば感じられるようになるのだが、当然慣れから来るものなのだから、自分の扱っている能力と同タイ

プの能力波しか分からないということがほとんどだ。
体育祭の弾投げで俺が念力系の弾の位置を把握できたのもこれのお陰と言える。
「それってどんな感じ？」
「うぅーん・・・どんなって言われても・・・・・・そうだなぁ、体育祭の時はルール上全部綺麗な球形になってたけど・・・・・・」
「・・・そうなんだ。僕の場合はもっとぼやけてるなぁ・・・形なんて分からないし」
「今さらっと言ったけど、何でそんなものが形骸変容（メタモルフォーゼ）で見えるんだよ」
つくづく卑怯な能力だよな、形骸変容（メタモルフォーゼ）。何でもありか。
「六感は一応強化してるからね。まぁ、でも改善の余地あり、と。でもそれならさ、能力波を感知する力を底上げしていけばいいんじゃない？能力の制御に繋がる気がするけど・・・。
それに、これなら能力を実際使うわけじゃないから自宅でもできると思うよ？」
「なるほどね・・・。けどそれって、出力系能力者の協力が要るよな。１人じゃできないぞ」
「タカ辺りに頼めばいい。バイトが忙しい上に、休み明けのテスト勉強をしておかないとまずいはずなのによく部屋に来るタカにさ」
それもそうか。
しかし本当に隆は学業成績のことを考えているのだろうか？ただでさえ学園都市は実力重視だ。夏の課題がないということは、他人のを写すなどというその場しのぎさえ使えないということなのだが。
「それで少しでも制御が利くようになればいいんだけどな・・・」
「それはクシロ次第です。・・・と、大分昇ってきたよ」
外を見れば、明るい地上から随分離れて、西から東への紅から紺のグラデーションが周りを満たしていた。
身を乗り出せば、都会の人工的な白から紫までの仄かな色が点々が見下ろせる。

輪郭がぼやけた建物と対照的に輝く有り余る量の光源が落とされた地上と刻々と変化し続ける明暗の両方を持った昼と夜が混在する一瞬の空。

マンションの一室からの景色とは違う、八方を見渡せる自由な視界は葉月に取って初めての体験だろう。

「わぁあ・・・」

感嘆の息を吐く葉月。

普段できない、今までしてこなかったことをするというのは新鮮だ。

――――単純に、こんなに楽しんでいる葉月をもっと見ていたい、そう思った。

＃

観覧車を降りたところで、陽は完全に暮れていた。

当然といえば当然なのだが、今から電車に乗って帰路に着くのは無理と言わずともキツイ。

神戸から大阪。そこまで遠くに行っているようには聞こえない距離だが、実際遊びに行って帰ってくるとなると、疲れすぎて1時間の乗車ですら堪える。

だから、まぁ、こうなるとは思っていたのだが・・・・・、

「シングルを2部屋よろしくお願いします」

俺はとあるホテルのロビーでそんなことを言う羽目になっていた。

「えぇー、ダブルでよくない？別々で取ると高くつくよね？」

値段など気にしてる場合じゃないんですよ、葉月さん。

2人一緒にどころか、1人ずつでも泊めてくれるかギリギリなんです。

というか葉月の言っているのはツインルームのことだろう。ダブルルームはベッドがダブルサイズ1つの部屋のことを指すというこ

とを葉月は知ってるのだろうか？
まぁ、とにかく。
保護者いないのが辛いよなぁ・・・。兄妹の芝居をしたところで俺は見た目も実年齢も未成年そのものだ。兄妹で旅行しているという設定すら無理がある。
なので、誤解されるようなことは言わないように。
「シングルで」
葉月の本気で金銭を心配してるだけの台詞を無視してもう一度言う。
が、フロント係のお姉さんは困ったような顔をして、
「今は季節が季節なので、空いているお部屋はスイートルームだけになっております」
などと宣った。
シングルどころかダブルもツインもなしとは。
いや・・・・・まぁ、予約していたわけでもないから仕方はないのだろうが。
スイート・・・高すぎて空いていた、んだろうな。
「そこ子供2人で大丈夫なんですかね・・・」
「いえ、まぁ・・・大丈夫だと思いますけど・・・・・・高いですよ？」
確かに見た目中学生に見えるか見えないかという2人組に高級リゾートホテルのスイートの宿泊代が出せるかの方が問題か。
「支払いはこれでいけます？」
そう言ってクレジットカードを財布から出す。
それを見た瞬間、彼女は固まった。
「？どうしました？」

「あのね、クシロ。あんなものいきなり出したら、そりゃあ彼女も硬直するよ？」

「いや、普通のクレジットだし」
「・・・信用を意味するｃｒｅｄｉｔ（クレジット）とは名ばかりの誰でもカードを持っている現代で、本当に信用されている人物にしか送られないブラックカードを普通のクレジットカード扱いですか」
「え？あれってただ黒いだけじゃないのか？」
「少なくても僕が知る限り、高額の支払い実績と資産を持った人間に送られるもののはずなんだけどね。欲しくて貰えるものでもないんだよ？」
「俺、ただのカラーバリエーションだと思ってた・・・」
「小金持ちを敵に回しそうな台詞だよね・・・」
という会話をしている内に、俺達を乗せたエレベーターは目標階に到達。
部屋を探す必要もなく、ドアが開いたところに従業員がいた。
別に案内はいらないって言ったのに。
葉月の口ぶりからしてＶＩＰ扱いになっているっぽいので、ホテルとしてもちゃんと対応したいのかもしれない。
案内に従い、部屋を紹介された後、カードキーを渡して案内人は出て行った。
これでやっと落ち着ける。
スイートというのはｓｗｅｅｔ（あまい）ではなくｓｕｉｔｅ（つづきべや）という意味だ。
なので、俺達のいるこの部屋はマンションの一室に近い。
ツインやダブルよりは広さもあるし、ベッドも複数あるので健全に思えなくもない。
・・・わけもないか。
そもそもスイートを男女で単なる宿泊に使うことがあるのだろうか？
まぁ、そんなの俺と葉月であるわけもない。
「はー、でもよかった。さすがにカプセルホテルとかは嫌だったし」
「行ったことないから経験してみたい気もしないでもないけど？」
「やめとけ」

ビジネスホテルすら狭くて息苦しくなるから。俺は一度体験しただけで2度と泊まりたくないと思わされたぞ。

「よっ、と」

何もしないのもなんだからテレビを点けてみる。

リモコンでこういうホテルに入っている有料映画の画面を表示させた。

レンタルビデオと比べて馬鹿のような値段をとられるのだが、こういうのもホテルの醍醐味だろう。

自室にあるソファといい勝負の座り心地抜群のソファに体を預けて一息。

寝るには早い時間なので、休憩しつつ睡眠時間までゆっくりと時間を潰そう。

「葉月どうする？夕飯なにか頼もうか？」

「うーんそうだねぇ。・・・もう少ししたらにしようよ。僕まずお風呂に入りたいし」

「りょーかい」

そんなやり取りをした後葉月はさっき紹介されたバスルームの方へと消えていった。

「・・・・・・」

しかし、本当に。

葉月はもう少し他人を意識してもらいたい。

年頃の女の子・・・とまでは言わないが、葉月だって一人間なのだから、他人にとって自分がどのように認識（うつつ）されているのかぐらいは考えてほしい。

男女がホテルに泊まるという行為に付属する意味ぐらい、葉月だって知っているとは思う。

知っていながらそれを自分に当てはめないところが葉月なのだが、俺や隆、それにクラスメートとしてはそれこそがどうにかしたい点でもある。

はぁっと疲労のせいではない溜め息が出る。

大型の液晶テレビの画面に目をやると、年端もいかない少女が小型の機関銃で銃撃戦の真っ最中。大の大人が無表情の女の子に虐殺されていく。

その様子はもはやファンタジーだ。プラスチック製の拳銃が出回っていることぐらいは知っているが、だとしても発射の反動を考えると銃は子供の扱える武器ではない。連射が本分の機関銃をぶれることなく人に当てていくなどという芸当は現実味を逸脱している。

そもそもこの感情に乏しい少女をヒロインにするのもどうかと思う。いや、それは主人公役の男性の方も同じか。ヒーローとヒロインの年齢差が見た目２０歳ある気がするのは気のせいであってほしい。というかヒロインは未成年・・・いや１５歳でもないんじゃないだろうか？

・・・まぁ、今の自分達の状況も似たようなものなのだろうが。

不釣合いな場所に、無理な配役。

いくらシチュエーションを固めたところで、今後の展開なんて分かりきっている。

他愛もない会話をしながら、娯楽に興じて、キリのいい時間で就寝。それだけだ。

「クシロー、こんなのあったー」

汗を洗い流し終わったらしい葉月が片手に何かを持って俺のいる大部屋に入ってきた。

・・・・・。

すみません、展開読めるなんて嘘吐きました。

いや、というか！読める分けない！

葉月が手に抱えてるのはワインボトルだ。

「いやいやいや、俺達未成年だから！飲酒は無理だって！」

案内人にミニワインセラーは一応案内されたけど・・・あれ？

「ワインセラーあるのは知ってたろ？」

『こんなのあった』も何も、ワインがあることぐらい葉月も知っていたはずだ。
「ん？だからその中にこんなのあったって・・・・・・あ～」
と納得するように葉月は頷いて、ワインボトルを渡してきた。
「これ何ていうワインか知ってる？」
そんな風に言われれば、考えつく答えなど１つだ。
まさかと思ってボトルの銘柄を確認。
・・・よかったロマネ・コンティではないようだ。ラベルには『ＬＡ　ＴＡＣＨＥ』と書かれていた。
まぁ、おそらく有名所には違いない。
「ラ・タチェ・・・？」
「ラ・ターシュね。フランス語だから発音が違うんだよ」
「聞いたことないな・・・」
「フランスのＡＯＣ格付けで特級に指定されてる畑のピノ・ノワールで作られたワインでね。ドメーヌ・ド・ラ・ロマネコンティが作った――――」
「畜生！結局ロマネ繋がりか！」
「だからこんなのあったって言ったんだよ。
・・・年間でロマネ・コンティの４倍ほどのケースが製造されるんだけど、安定した品質が評判で場合によってはロマネ・コンティの味を上回ると――――」
「うわぁ！洒落になってないぞそのワイン！」
テンパッた俺を無視して葉月はボトルの首の部分を親指と人差し指で弾き切った。
もはや後戻りはできない。
「さぁ、飲もう」
「・・・それってかなり高いよな？」
「スイートルームに入った時点で贅沢しなきゃ損でしょ？大丈夫、１０万から１００万ぐらいだから」
「何その幅！１０倍違うぞ！」

何時の間にか取り出していたグラスをテーブルに置き、無造作に赤ワインを注ぐ葉月。

グラスは当然のように2つ取り出されているが、俺にも飲めと？

「年代によるからねぇ。年月が経っているのが一般的に高いんだけど、凶作とかを考えると一概に言えないんだよ」

「葉月って何でそんな要らない知識ばかりを溜め込んでるんだ？」

「んー、ワインに関しては岱斉が好きなんで覚えてたというか・・・」

そこで何故か葉月は怪訝な顔をした。が、すぐに元の表情に戻って、

「とにかく飲もうよ。もう開けちゃったんだから」

などとしれっと言ってくれた。

軽く、ワイン1本が消えた。

どころか、テーブルに既に何本ものボトルの残骸がある。

そのほとんどは葉月の胃の中に収まっているわけだが、葉月に酔いの兆候はあまり見られない。

美味しそうになみなみとワイングラスに赤や白のワインを注ぎ、食事と共に持って来てもらったおつまみの各種チーズを摘んでいる。

飲酒がバレるとさすがにまずいので、食べ物が運ばれる間はワインを隠しておいたのだが、その場しのぎにしかなってないよな。

ただ、今一番気になっているのは・・・。

「なぁ、何でそんなに酒強いんだよ？」

俺はラ・ターシェが空っぽになった辺りで酔いが回ってきたのに。

「そりゃあ、血中のアセトアルデヒド脱水素酵素（デヒドロゲナーゼ）の量を増やしてるからね。アルコール脱水素酵素（デヒドロゲナーゼ）も増やして入るんだけど、こっちは気持ちよく酔うためには必要だし」

うわぁ・・・。駄目だ、この人裏技使ってますヨ。アセトアルデヒドが酔いとどう関係してるかは知らないけれど、形骸変容（メタモルフォーゼ）は本当

に便利だよな。
遺伝子発現を調節して自分の欲しい酵素を故意に作り出せるなんて。
残念ながらあまり酒に強くないらしい・・・そもそも未成年の俺は体をソファに深く沈めて一休み。
辛めのチーズを口に入れて酔いに打ち勝とうとするものの、気休めにしかならない。
「あははっ、クシロ大分酔ってるねぇ」
そういう葉月もいつもよりテンションが高い。少し酔って陽気になっている。
「辛いならもう寝た方がいいよ？」
「止める人間がいなきゃセラーのワイン全部飲むだろ葉月は・・・」
「・・・・・飲まないよ？」
間が空いたよな、今。
飲む気満々じゃないか。
「とにかくあまり我慢しないでね。無理すると体に悪いから」
「あぁ」
そう言ってガンガンする頭を左右に振って、立ち上がる。
シャワーを浴びて酔いを醒まそう。

＃

パチリ。
そんな擬音がぴったり似合うような目の覚め方だった。
体に伝わる感触から自分がベッドに寝転がっているのだと分かる。
シャワーを浴びた後、急に襲ってきた眠気に勝てず、ベッドにダイブしたのだろう。
もっとも今でも頭痛がすることを考えると、一夜越しても酔いは醒めきらなかったようだ。
と、

「・・・・・・」
そんな冷静な思考を打ち砕く、イレギュラーな存在が目に留まった。
仰向けで天井を見ていた視界を横へとずらしたところに葉月の寝顔があったのだ。
咄嗟にバッと身を起こす。
「・・・なんで葉月がここにいるんだ・・・・・・」
そこでやっと、ベッドの周りに転がっているボトルが目に入った。
俺が寝ている間にさらに随分の量を飲んだらしい。
「・・・ん、クシロー・・・どーぉ？酔い、醒めたぁ？」
寝ぼけ眼で葉月がふらふらと上半身を起き上がらせる。
「全然。まだ頭が痛い・・・」
ふみゅぅ、と相槌なのか寝言なのか判別がしにくい言葉を吐いて、葉月は俺の両肩に手を置いた。
そして、
「～～～～～～ッ！」
キス。
いや、キスというか接吻というか・・・・・・舌が、入ってるんですけど？
舌の裏側を嘗め回すようにたっぷりと数秒舌を絡ませて、ぷはぁっと交わされた唇が離れる。
離した唇から糸が引いていた。
「～！～！～～っ！」
何がなんだか意味が分からず、言葉が出ない俺に葉月が首（こうべ）を横に傾けながら言う。
「舌の血管からアセトアルデヒド脱水素酵素（デヒドロゲナーゼ）ちゅーにゅーしたから、酔いはもーすぐ醒めると思うよー」
キスじゃなくて舌下投与だったらしい。
少し残ね・・・いや残念じゃないっ！残念じゃないぞ！
というかいくら葉月でも今の行動は素面（しらふ）じゃない。

「なぁ、このワインのことどう説明するんだよ？未成年で飲酒はさすがにまずいんだぞ？」

恥ずかしさやら何やらを誤魔化すためにそんな質問をしてみる。

というか事実、『魔が差して』と言える消費量じゃないだろう。

「えー？大丈夫だよぅ？その時はさー、お酒を飲まなきゃ死んじゃうって設定でいこー？あははははっ！」

それはマジで洒落にならない。

葉月のその提案はある小説がネタ元だ。

身体のスペック的に全く違和感のないし、外見だって白髪と赤眼にすればそんな感じ。

実際に形骸変容（メタモルフォーゼ）で身体強化する時それを参考にしているんだろうけど、その主人公は目やら手やらが抉れ潰れて、内臓に脳までぶち撒けることになるので、正直あまり真似てほしくない。

というか何気にライトノベル好きだよな、葉月。

まぁ、それはいいとして・・・。

「・・・・・葉月、酔ってるだろ？」

「うぅ――――――――ぅ？」

うん、と肯定しようとして失敗したらしい間延びしたその声の途中で横に倒れた。

ベッドで気持ちよさそうに身じろぎして、すぅすぅと寝息を立て始める。

「・・・・・・」

一方俺は眠気どころか精神力を吹き飛ばされて、すっかり目が覚めてしまっている。

ベッドから起き上がって部屋のカーテンを開けた。

燦々と斜めに降り注ぐ太陽の陽。

いつもの葉月ならこの時間には完全に目を覚ましているだろうから、やっぱり酔ってるのだろう。

葉月が寝ている間に散歩という手もあるんだが、まだ外出にする気にもなれない。

朝食でも頼んで、テレビでも見ながらゆっくりするか。
そう思って主寝室から出て数歩、気になることがあって立ち止まる。
行き先を変更して、ミニワインセラーへ。
昨日の晩、案内人が自慢げに紹介していたボトルが綺麗に並んでいたセラー。
「・・・・・・なんてことだ」
その中には1本のワインすら残っていなかった。
酒を飲まないと死んじゃうっていう設定・・・・・・本当に使わないといけないかもしれない。

第２２話－　小旅行。－Ａｑｕａｒｉｕｍ－（後書き）

さぁ、葉月達の行った水族館はどこでしょう！？
まぁ、文章のほとんどがヒントなんですが。
ジンベイザメのいる水族館って日本に３つだけですしね。
ちなみに私はその内２ヵ所に行ったことがあります。
大阪と沖縄。
美ら海水族館の巨大水槽の近くにサメの特設があるのですが、ホルマリン漬けのサメの幼生や成体の輪切り標本があったりと結構グロテスク……やっぱり生きてる方が見ていて楽しいですよね。
ここの土産屋で買ったチンアナゴの栞がお気に入りだったりします。

さて、本文の話なのですが……
あの２人の微妙な位置関係をもう一度確認するためにと思って書きました。
まぁ、水族館とチンアナゴが出したかったというのも大きいのですが。
どんなシチュエーションに置こうが間違いなんて起きないと高を括っていたらこうなりました。
あれ？何か普通に……あれ？
相変わらず微妙な関係だなこの２人。
まぁ、それは置いておいて…
あれは誰がどう言おうがキスじゃなくて舌下投与です。
それ以上の何ものでもありませんよ。確認までに。

第２３話－　徊視蜘蛛。－Ｇｅｎｅｒａｌ　Ｃｌｅａｎｉｎｇ－（前書き）

★人気投票、相も変わらず実施中★
登場人物紹介は個人サイトの方に移植中です。
［ｈｔｔｐ：／／ｃａｎｄｙ．ｚａｐｔｏ．ｏｒｇ／ｈｉｇａｎｏｈａｎａ／］

第２３話ー　徊視蜘蛛。ー Ｇｅｎｅｒａｌ　Ｃｌｅａｎｉｎｇー

ＳＰＳ使用認可された教育施設群――――学園都市は、当然学校校舎の散在する地帯だ。

超能力訓練用の施設がその間に点在するとしても、夜に人気がなくなるという点で言えば同じようなものだろう。

学園都市駅近くならともかく、普段生徒や学校関係者ぐらいしか通らない学園都市の奥などは夜になると静まり眠りにつくことになる。

一転、この学園都市駅から北西方面の各駅はニュータウンとして機能しているため、逆に民家が敷き詰められてある。

夕暮れ時にはサラリーマン達の帰宅ラッシュがあるわけだが、そのほとんどが学園都市以降の駅で降りることになり、学園都市とは打って変わって人の密度が高くなるのだ。

一定間隔ごとに整備された電灯の浮かび上がらせるニュータウン独特の路地。

同じデザインをした一軒家が並び、碁盤状ではなく微妙な曲線を描く道筋は人を迷わせるに余りある。

元々が山であったせいか、その斜面を残したまま立てられた町の集合体は上から見ると等高線のように曲がっているのだ。

地元の人間ですら少し見慣れない場所に出ると迷うほどに、土地勘が働きにくい。

そんな入り組み、尚且つ人が必ず通るという魅惑の狩場に、ソレはいた。

顔を隠すためのフードもお面もつけず、返り血を防ぐためのレインコートも着ず、ただただ普段着を身に着けているその人物は、誰かが来るのを待っていた。

――――労働者を囲うために作られたベッドタウンという性質上、ほぼ１００％現れる無防備な獲物。

それが、ついに来た。
午前０時近く、残業か寄り道か、とにかく足取りの重いＯＬが片手のバッグを投げ出すように振り回して歩いてくる。
シャツの胸元を開けて、スーツのスカートからはしたなく足を肌蹴させる彼女は相当にストレスが溜まっているらしい。
その彼女が自分を通り過ぎたのを確認して、ソレは道路の中央に歩き出した。
ＯＬの背中を見送るような立ち位置を得、ゆっくりと右手をかざす。
照準を合わせるような動作。その後に、

微かな囁く声を混ぜ込んだ何かが空気を震わせ、

スーツをズタズタに、皮膚をビチビチに引き裂かれたＯＬが道路に倒れた。
「あ・・・あっ・・・ああっ・・・・・・・あぁあああぁあああッ！！」

／

いや、何というかもはや実害のあるレベルまで、裏方根城こと学園都市駅ビルの借り部屋は汚れていた。
売るつもりもなく・・・というよりその本体自体が行方不明な携帯ゲーム機の外箱などが積み上げられることによって掃除機という文明の利器の手が届かない領域が作られ、ノンタッチだったその箱山に積もりに積もった埃。それがその山の１つが崩れて部屋中に舞い上がったのだ。
くしゃみが出るとかそんなものではなく、目に見えて部屋を浮遊する細かい埃の粒子は見ているだけで気分がなりそうな量だった。
応急処置として部屋の窓を全開にして換気扇を回すも、根本的な解決になっていないことは言うまでもない。

これを機にということで僕の指示で大掃除が始まった。
とにかく舞い上がる埃は一時保留してその原因になっている空箱を潰して部屋の外に出した。
これで今まで隠されていた床の汚れ具合が明らかになるわけだけど、それもやっぱり酷い状態。
積もり絡まり塊となった埃が外からの微風に吹かれて床を移動する様は見ていて身震いしそうなほどだ。
なんと言うか・・・ハウスダストで肺がやられそうだよね。
頭を振って、掃除機でこの埃を吸い取ってしまおうと思ったら、
「掃除機？ないなぁ、買ってないから」
という恐ろしい発言が飛び出す始末。
大急ぎで瑞流君に買ってきてもらったのはいいのだけど、その掃除機が何気に外国製の高級製品だったり。
埃を除去したとはいえ本当はもっと本格的に隅々までかけなければいけないだろうし、雑巾で床を拭くべきだとは思うものの、まだ残っているダンボールや使われていない物を先に整理しなければならない。
おもちゃ箱のように娯楽物を詰め込んだダンボールの中身を取り出してみると、人生ゲームや野球板が本体そのままで入っていたり、テーブルに置いてあった携帯ゲーム機の旧世代が１３台突っ込んであったりと物の保存を考えていないとしか思えない有様だった。
案の定人生ゲームと野球板は隅々に埃が溜まり拭いても取れない状態で、ゲーム機の方も閉められていなかったカセット挿入口に埃が入り込んでしまって使えそうにもない。
もったいないと思いながらも箱にしまい直し、代わりにダンボールの表面に『不燃ゴミ』の称号を与えることに。
その後も続々出てくる一不使用又は不良然し保留品（いらないけどつかうかもしれないアイテム）に死刑宣告する。
駄目になったゲーム機の充電パック、同じく十数個もいらない充電器、蛸足配線をした結果引き起こされたと思われる小火（ぼや）によって

溶解した拡張コンセント。最後のは残っている意味が分からない。というか恐ろしい。

ほんの少し前まで全盛期だったはずの薄型液晶テレビやＤＶＤレコーダーは埃を拭いてリサイクルショップに引き取ってもらうことした。

食玩の詰まったダンボールをそのまま捨てようとしたら亮輔君に泣きつかれ、『押収物』と書かれた箱からはハートや星の形をしたタブレットが見つかり・・・と、とにかくどたばたとメンバー全員で動き回る。

別に義務で集まっているわけではないのだけど、必ず全員いるという不思議さ。まぁ、皆暇なだけだろうけど。

佐奈さんにゴミを外に出してもらう作業を、瑞流君に拭き掃除を、亮輔君には使えそうなものの埃を落としてもらい、智香さんは掃除用具などの必要物の購入を頼み、僕は散らかっている物の判別を担当している。

まぁ、僕のは当然の配役だろう。

今の状況を作り出した張本人らに分別させても結果は目に見えている。

物を捨てられない人間というのはどんなにがんばっても物を減らせない人間なのだ。

まだ手をつけていない段ボール箱を手元に引き寄せると、随分と小さい割りに重かった。

封すら切られていないそれの上部を見てみると電化製品らしい。

確認のために開けてみると、ビニール袋に何やら機械らしいものが数個詰まっている。

見ると・・・ビデオカードだった。

もしやと思い、まだまだあった同じような箱をいくつか開けると、出るわ出るわ・・・。

ＣＰＵに冷却ファン、マザーボード、キーボード、メモリ、スピーカー・・・・・。

自作パソコンを作ろうとしていたらしい。らしいのだけど、箱が開けられていないところをみると部品を購入した時点で満足してしまったようだ。

というか、何で箱買い？パソコンを作るにしても部品は１つないし２つで足りるはずなのだけど。数えると１５台以上のパソコンが組み上がる計算だ。

さらにもう１つ大き目の既に開けられてはいたダンボールを確認すると、超薄層テレビ（ペーパー・ウィンドウ）が６巻入っていた。

現在部屋で使われているテレビは４枚。１箱１０セット、これも箱買いだった。ちなみにこの次世代テレビは１枚７０万ほど。値引きされて６５０万だったとしてもどこから捻出されたのか。

考えるのも恐ろしいので頭の隅に追いやって、やっと大分片付けられた本棚周辺を改めて見回すと、視界に埃ではない何かが空中に舞い上がっているのが映った。

しばらくこれ何だろう？と観察していた僕だったけど、思い当たることがあって本棚の裏を壁の隙間から覗く。

「・・・・・・」

アオカビがコロニーを作ってました。

それも一面びっしりと。

「瑞流君・・・雑巾まだまだ要りそうだよ」

というわけで、本棚のゲームソフトや漫画を除けて本棚を動かし、裏面をごしごしと擦り始めた。

けどさすがは地球最盛の菌類。木製の板に根付いて擦っても擦っても青黒いカビは取れない。雑巾は一拭きで真っ黒になって使用不能だ。

結局この本棚には破棄という紙を貼ることとなった。

そんな、既にいっぱいいっぱいな状態な僕達に追い討ちをかけるように、ついに爆弾が投下された。

「うわぁ・・・・・・嘘・・・でしょ」

見つけた。いや、見つけてしまった。

本棚と箱買いされた各種ダンボールの奥の奥に埋まっていた1つのダンボール。
蓋の部分は中に折り込まれ、中に筒のようなものが6つ入っている。
僕の知る限りそれは菌糸瓶と呼ばれるものだ。
カブトやクワガタの幼虫を飼育する容器で、定期的に交換しなければならない、割と面倒くさいアレ。
それが忘れられて時を超え、今ここに存在している・・・。
瓶の蓋に貼られているラベルの年月日が数年前からノンタッチだということを主張。
瓶の中のバサバサに干乾びた土を見た時、さすがに僕も顔が引きつった。
・・・中がどうなっているかなんて考えたくもない。
しかしながら、この発掘されたと表現するに相応しい物体をそのままにしておくわけにもいかないわけで。
所有者たる瑞流君に処理を命ずる。
「このまま捨てよう・・・」
この惨劇を引き起こした罪をちゃんと償ってもらうためにも中がどうなっているかちゃんと確認しなさい。
生きてたらどうするつもりだよ。
「いや、無理！見ろよこのカサカサぶりを！絶対死んでるって！」
「そうかもしれないけど、９９．９９９％そうだろうけど、一応見ないと駄目だよ。生き物を飼育するんだったら最後までちゃんと面倒をみる！」
正論なので瑞流君も何も言えず、渋々新聞紙を持ってくる。それを床に敷いてその上に菌糸瓶の中身を出していくわけだけど、中身の土やら木屑やらは乾燥しきって固まっていた。
仕方ないのでスコップ代わりに割り箸で中をかき出す瑞流君。
・・・・・・・・・・。
すっかり干からびて茶色くなった幼虫のミイラが出てきた。

「・・・もうやめないか？」
半泣きな感じで彼が懇願してくるけど、こればっかりはそうもいかない。
だいたい、精神的にダメージを受けているのは僕も同じだ。
「次に取り掛かりなさい（ゴー・アヘッド）」
残念ながら、あと5瓶あるのです。

＃

死亡確認という精神ダメージ大な儀式を終え、体全体にかぶった埃を落とすためにも全員で健康ランドに体を清めにいった。
服の替えは行く途中で買って身も衣服も綺麗さっぱりした僕達は、再び部屋に戻り一息入れている最中だ。
言う必要もないのだけど、瑞流君が淹れたお茶がテーブルに配られている。
お茶請けはベタにクッキーで僕のティーカップに注がれているのはストレートティー。
チョイスの理由は疲れたので少し苦味があるものがほしかったからだ。
ちなみにブラック珈琲という選択肢はない。苦いのは苦手なのだ。
そんなわけで淹れられたばかりの紅茶を冷ましながらゆっくりと時の経過を楽しんでいたら、亮輔君が占領しているパソコンに何とまさか仕事のメールが入った。
まぁ、当然あるのだろうけど、まさかこのタイミングで来るとは思わなかったというか・・・。いや、正直この自堕落な部屋を見ていたら仕事すらないんじゃないかと半ば本気で思ってみたりはしたけども・・・。
などと失礼なことを考えている内に、このグループのリーダーである智香さんがそのメールに目を通していく。
他のメンバーは掃除で体力が奪われたせいか、それともいつもそ

うなのか、だらけてメールの内容に興味すら示さない。
そういう自分ももう今日一日のやるべきことを終えた心持ちなので、今さら何かしろと言われても困る。
仕事の内容すら見る気になれないのだから、このままでは話が進まない。
よって唯一メールを一読した智香さんによる説明が始まった。
「今回の事件は痴漢、というかわいせつ行為かな？その締め上げよ。私たちの間じゃもはや恒例のことになってるんだけどね・・・」
「恒例？痴漢行為が常習的に行われてたらさすがに懲役食らわない？」
「うーん、厳密には未遂だし、首謀者とか構成員が変わったりするから」
「・・・首謀者？組織ぐるみの犯行なの？」
「というかネットワークって感じかな？技術的な問題があるから情報をやり取りし合ってるわけ。その痴漢ってね徊視蜘蛛を使うのよ」
「徊視蜘蛛？・・・まさかスカートを下から覗くってこと？」
「まぁねー」
「痴漢・・・なのかな？」
「視淫よ」
「死因？」
ついさっき無責任放置で幼虫が死んでたわけだけど。
「ごめん、はづきちゃんには難しかったわね・・・」
漢字が違うっぽい。
「でもあれって人の下に入らないようになってるはずじゃぁ・・・？」
「うん。そのことも含めて説明するね。
・・・そもそも徊視蜘蛛っていうのは学園都市で試験的に使われる移動式監視カメラのことを指すけど、蜘蛛には種類が２つがあるの」
「そうなんだ？」

「親蜘蛛と子蜘蛛があってね、子蜘蛛は皆が知ってる通り映像を集めるんだけど親蜘蛛はそのデータを収集して監視本部に送るわけね。蜘蛛型にこだわるあまり、軽量化のために子蜘蛛自体には画像データを保存しきれないらしいわ。だから保存せずに電波を飛ばして本部で収集していくシステムにしたんだって。

で、親蜘蛛はいわゆるアンテナなの。子蜘蛛の電波は飛ばすのと撮影機能に特化してるから子蜘蛛同士で電波を仲介しあって本部まで繋げるのは無理なんで、携帯のアンテナみたいに電波をやり取りするのを作った・・・。

ちなみに親蜘蛛と子蜘蛛の違いは腹の大きさね。親蜘蛛の方がもちろん大きい、と」

「電話の親機と子機に比喩させてるのよ」

これは佐奈さん。

お茶請けは既に食べ終えて、どこからか持ち出した濡れ煎餅を食んでいる。あれはレンジで温めるとおいしいんだけどなぁ。

まぁ、それは置いておいて。

「へぇ、そんな違いあったんだ」

まぁ確かに、子蜘蛛子蜘蛛って言ってたけど、子蜘蛛いれば親蜘蛛もいると考えるべきだった。

正直全然興味ないしなぁ、アレ。

基本的にいつも監視されている分、身近すぎて・・・ねぇ？

「うん。それでね？徊視蜘蛛が導入されるに当たって起きた騒動って知ってる？」

「確か、そんなものが町中徘徊してたらスカートの中を見られるとかプライバシーの侵害だとかいう人がいたんだよね」

いや、まぁ僕には分からない感覚だけど。

「そ。でその対策として蜘蛛の徘徊経路の制限とか、人の半径１ｍ以内に近づかないとかそういうプログラムを書き加えて、本部の監視員は全員女性にしたのよ。

ところがその徊視蜘蛛を改造して覗き行為を行おうって輩がいる

ってわけ」
「・・・・・徊視蜘蛛って確か、地面を移動中に下が無防備な服を着用している者に１m以内にいたら潰されても文句言えないんじゃなかったっけ？」
「そうよ」
「改造してもすぐ潰されるよね？」
「そうね」
「だいたい学園都市製の超小型チップ内臓でしょ？普通のコンピューターで弄れる代物じゃないはずだけど？」
「専用の機械があるのよ。裏ルートでの流通価格１４０万だって」
「１４０万かける価値があるようには思えない・・・」
「そうでもないわよ。行動範囲の制限を解けば超高性能の覗きカメラの完成だからね。更衣室とか・・・まぁ使い方は色々あるから」
例えそうだとしても、正規の子蜘蛛はそんなところ回らないから一発で改造されてると分かるはずだろう。
結局・・・意味ないよね。
「恒例って、蜘蛛の製作側と痴漢側とのイタチゴッコのことなの？」
「プログラムを書き換えられる度に暗号の仕方を変えたりしてるんだけどね。すぐに解読しちゃうのよ」
「情熱のかけ方を間違ってるよね・・・」
「ある意味羨ましいわ」
と、雪成君が椅子から立ち上がった。
「まぁ、それの始末をさせられるこっちとしては迷惑極まりないんだけどな・・・。
ただ、恒例のことなんで対処法も決まっちゃってるんだよ。改造子蜘蛛の電波周波数が分かったら受信機で街中をサーチすればおおよその場所は分かるわけだし――――」
今回その馬鹿馬鹿しい仕事に初めて関わる僕のために彼は続けて、その方法を教えてくれる。
改造蜘蛛にも親蜘蛛と子蜘蛛があるため、その改造親蜘蛛が徘徊

している位置で向こうがどこで電波を受信してるかを調べるらしい。
徊視親蜘蛛はお互いに送受信してネットワークを作るから、範囲内なら受信場所は別にどこでもいいのだけど、それは十分に親蜘蛛が存在するという前提だ。
しかし徊視蜘蛛は近未来を思い描く子供心を持った科学者達の努力の結晶だ。部品はそう手に入る物ではない。
よってそこら辺を徘徊している蜘蛛を改造して利用するしかないのだけど、乱獲は無理だ。つまり、改造蜘蛛は学園都市中にばら撒けるほど数がない。
数が限られてるのなら、親蜘蛛同士は特定地域に密集して存在せざるおえないわけで、親蜘蛛の送受信可能範囲を繋げていけば自ずと敵の潜伏先が絞れるということになる――――
そこまで言って、立ち上がって何やら探そうとしていたらしい雪成君の足が止まった。
その正面には、つい朝方まで散らかりつくしたような惨状が広がる雑多な資材の墓場だった、今ではかなり整頓されて探し物をするにも心もとない量しか入っていない数個のダンボールが綺麗に並べられている。
中身も確認して分けた箱の側面には『ゲーム』『ゲーム2』『ボードゲーム』『雑誌』『漫画』『漫画2』と書かれていて、その中に何が入っているのか一目瞭然だ。
「・・・・・で、受信機はどこ？」
ピシッという擬音が聞こえそうなほどな感じで、全員が固まった。

＃

どうなったか先に言ってしまえば、受信機は見つかった。
整理された箱の中にはもちろんなかったその機械は、破棄予定だったダンボールの中にあったのだけど、それを掘り出す過程に僕達は再び埃まみれになってしまった。

どうせ捨てるものだと埃もろくに拭かなかった報いだ。いや、まだ使えなくもないのにゴミ扱いを受けた資材の呪いか。

せっかくお風呂に入ってきたというのに台無しだった。

さすがにこれは形骸変容（メタモルフォーゼ）でも対処しかねる。

この向けどころのない苛立ちは痴漢に引き取ってもらうことにして、とにかく探索を始めることになった。

電波を受信する受信機というのは何の変哲もないトランシーバーのような外形をしていた。

伸ばすとかなり長いアンテナがついていて、黒いボディーにはパネルといくつかのボタンがついている。

ラジオなんかであるボタンを捻って周波数を調整するタイプではなく、ボタンで入力するようになっているらしい。

小型の割りに多機能で、盗聴などの音声データだけではなく動画も受信できる優れもので、電波の発信源を突き止める機能が今回の要だ。

「それで、実際誰が探すかだけど・・・」

「去年は私だったからパスね」

智香さんが言い終わる前に佐奈さんが候補から外れようと先手を打つ。

「そうよね・・・まぁ、りょーすけは無理として、私かアホかゆきなりの誰かってことになるか」

「アホゆーな。てか、なんではづきは抜き？」

「はづきちゃんは暴力担当よ？」

「・・・あぁ、それもそうか」

智香さんと瑞流君の間でなされる失礼なやり取り。

事実なだけに反論の余地なしなわけだけど。

「うーん、じゃあ俺行く」

ここでなんと雪成君が立候補した。

「おぉ？自分から？どうしたの？」

「いや、ここで待機したって暇になるし、正直早く帰って寝たい」

まぁ、確かに。
ただ今午後5時7分前。午前9時ほどからここで掃除に勤しんでいた体は疲労を訴えている。今日はよく寝れそうだ。
自分から面倒な役に立候補する者もなく、あっさり探索は雪成君に決定した。
彼が受信機を持って出ていったことで、待機することになった僕達は再び暇を持て余すことになる。
それでも10分ほどはぼぅっとして過ごしていたのだけど、何もしないのに帰れないという状況は思いのほか堪える。
お代わりの紅茶を淹れてもらい、残っていたクッキーを口内で溶かしながら味わうものの、
「暇だね・・・」
やっぱりそう思わずにはいられない。
なまじ仕事中なのが辛いよね・・・。
そんなことを思っていると、
「ふふーん、じゃ、これやる?」
智香さんが整理したてのダンボールから取り出したものを見せて言った。
携帯ゲーム機、中はおそらくビオサイド。

／

ウラカタの我がメンバーが使用している一室から出て、駅ビルを後にする。
手には受信機を持っているが、まだ電源は入れていない。
まず、駅の方から探りを入れるつもりだ。
体育祭で壊れた訓練所などが修理されたらしく、ここ数日で学園都市にも生徒の姿が戻ってきている。
このタイミングで改造蜘蛛を放っているのなら、駅近くは絶好のポイントだろう。

だから、この辺から探索を開始すればすんなり見つかると思うのだけど・・・・・・。

などと駅を見回してみたら、非常に見慣れた女性を発見してしまった。

あの人、なんでこんなところにいるんだ。夏休みに大学生が学園都市に何の用なのか。

正直言って、全くいい予感がしない。

とはいえ、話しかけないと何も知らないままよろしくないことに巻き込まれかねないのが厄介ごとというものだ。

事情を知っているか知らないかでは心持ちが違う。どうせ巻き込まれるのなら状況を把握している方が数倍マシだ。

「先輩・・・何してるんですか？」

見慣れた女性の名前は八雲和（やくもなごみ）。

もっとも、それは偽身の偽名だ。形態変身者（トランスフォーマー）が1人分は持つ別身分に過ぎない。

本名は来島越嫁（くるしまえつか）。黒縁眼鏡の大学生。形態変身（トランスフォーム）グループの部長であり、そのグループ内で唯一の人格者だ。

「うん？色々と情報を集めてるんだけど？」

それは分かってる。駅を通る下校途中の生徒に何か聞きまわっている姿を見れば誰だってそう思う。

だから質問しているのは別の点だ。

「どうせロクでもない情報だってことは分かりますが、何かあったんですか？」

酷いなぁとぼやきつつ、先輩は一枚の写真をポーチの中から取り出した。

その内容を確かめて俺は絶句する。

そこにあるのは路地に血まみれで倒れる女性の姿。

一般人が手にするには常軌を逸している写真だ。

「し、死体・・・」

「いや、この人は生きてるよ？見た目ほど傷は深くなかったらしい

しね。
で、その犯人を探してる」
さらりと言ってくれるが、別に俺のようにウラカタといった組織し所属しているわけでもない先輩がそんなことをする必要は全くないはずなのだ。
いつもよく分からない事件やらに首を突っ込む癖のあることは重々知っていたつもりが、痴漢の類が上限だと思っていた。
今回の度の過ぎた事件に手を出した理由を訊いたら、
「いやぁ、暇でねぇ。せっかく手に入れた情報だし、暇つぶしにちょうどいいかなって」
という素敵な答えが返ってきた。
暇つぶしにそんなヤバ目の流血事件をパズル感覚に解こうとしないでほしい。
というかホントに暇してるんだなこの人。大学生ってそんなに楽な所なのか?待て待て、この人4年生だった気がする。
「先輩・・・就職決まってましたっけ?」
「ん?決まってないけど?」
いきなり何を訊くんだろうという本当に不思議そうな顔をしてくれる。
自分が心配される理由が分からないのかこの人は。
「そんなことしてて大丈夫なんですか?」
「まぁ、懇意にさせてもらってる所にお世話になるつもりだから、その辺は大丈夫」
なんだかんだ言ってちゃんとやってるようだ。
・・・あれ?そういうのを就職っていうんじゃないのだろうか?
「探偵事務所なんだけどね、名前が変わってて果物缶みたいな名称で・・・女の子2人でやってるんだ」
なるほど。確かに・・・・・・就職・・・じゃないかもしれない。
探偵事務所?名前が缶詰?経営者が子供?
うん。まともではない。

「実はこの写真とか情報は彼女達から貰ったんだ。要らないからって」

どこから突っ込めばいいのか・・・。いや、間違いなく突っ込み待ちではないんだろうな。

「探偵の仕事じゃないでしょう、それ・・・。というか要らないって何ですか」

そんな傷害事件の調査が探偵事務所に持ち込まれるとは思えないし、それを流すというモラルのなさは情報を扱う職業としてどうかと思うのだが。

「彼女達も他人に貰ったらしいよ。幽霊がどうのって言ってたけど・・・忘れたな」

探偵に幽霊・・・。この人なんでそんな意味の分からない人間関係を広げてるんだ。

・・・ああでも、それの中に俺も入っているんだろうな。

事実この人は俺を通じて形骸変容（メタモルフォーゼ）とも関係があることになるんだから。

「あー、話が外れたけど・・・と、その犯人を捜してるんだけど、何か知らないかな？」

「知りませんよ。だいたい、今俺は痴漢蜘蛛を探してるんで」

「へぇ、もうそんな季節だっけ？風物詩になりつつあるよね、それ」

嫌な風物詩もあったものだ。それに時々秋にも出没するから夏限定というわけでもないし。

「そうか・・・。まぁいいや、とにかく何か分かったら始末は君らに任せるから」

それを言うなら『何か分かったら教えて』、なのだけど。

ほらみろ、話しかけようと話しかけまいと、この人は後始末だけはこっちに回すつもりだったじゃないか。

そう思ったんだ。

先輩は物事を掘り返すだけ掘り返して、出てきたものは他人に処理させるお人なのだ。

彼が何かやっていると、厄介ごとが自分にも回ってくることは経験からよく分かっていたことだ。

それでも結局その後処理を受け持たせてしまうのがこの人の人徳なんだろうが・・・。

「それじゃあ、先輩、ほどほどにがんばってください」

うん、と首肯して先輩は歩いていった。どこか目的地があるのだろう。

しかしあの人、女性の方が様になってる気がしないでもないよな。

第２３話－　徊視蜘蛛。－Ｇｅｎｅｒａｌ　Ｃｌｅａｎｉｎｇ－（後書き）

終わり方が中途半端な気がしますが、まぁ、分けることにしました。
菌糸瓶の下りがやりたかった今回の話。
子供の頃にそういう失敗やりませんでしたか？
重要なのは徊視蜘蛛の設定なのですが…補足みたいなものです。

第２４話－　話の端。－Ｃｒｉｍｅｒ’ｓ　Ｈｅａｒｔ－（前書き）

今回は結構多めです。
そして微妙にグロテスクな表現がなくもないです。
ああ、でもそれほどでもないので大丈夫だと。

第２４話－　話の端。－Ｃｒｉｍｅｒ'ｓ　Ｈｅａｒｔ－

ビオサイドは生物災害（バイオハザード）を題材にした、次世代型シュミレーションゲームだ。

シングルモードでは研究施設から逃げた主人公（おに）として逃げ回り、オンラインモードでは追う側と追われる側に分かれてプレイする。

追う側は感染を避けつつ鬼を捕まえ、追われる側はウイルスを撒きつつ逃げ回る。

言ってしまえば逃走者を追うゲーム、もっと簡単には鬼ごっこそのもののこのゲームの魅力は、操作の自由度がかなり高いことだろう。

大抵のことができる操作は、戦略の幅を広げる。

例えば、通行人を路地奥に引きずり込んで金品を強奪したりとか。

例えば、銃器を乱射して警視庁をテロしたりとか。

例えば、敵プレーヤーの背後からスナイパーで狙い撃ちしたりとか。

というわけで、ただ今ビル屋上から佐奈さんの頭をばっちり狙っていたりするんだけど・・・。

ボタンを押して引き金を引くと、ゲーム機のスピーカーから銃声が聞こえ、望遠レンズの向こうに見える壁に穴が開いた。

佐奈さんのプレイヤーは無傷だ。

さすがに距離を置きすぎたらしい。長距離狙撃はやっぱり正確さに欠ける。

「いや・・・いやいやいやっ！ちょ、はづきちゃんどこいるの！？」

「背後から狙ってるよ？あ、逃げちゃ駄目」

回避行動をする佐奈さんに追撃でもう2発撃ち込んでみたけど、当然外れて物陰に隠れられてしまった。

仕方ない。近づいて直接殺害しよう。

他のメンバー・・・智香さんも瑞流君も亮輔君も既にリタイアし

ているから、彼女を倒せば鬼である僕の勝ちだ。
けれど、このゲーム・・・殺害方法が何でもいいというのは、自由すぎはしないだろうか？もはやバイオハザードは関係ないような気がするんだけどなぁ。
「ほーら、佐奈さんもうすぐそっちに行くんでじっとしてて」
まぁ、ともかく。
本来、ウイルスを保有している主人公は追われる側なのだけど、残念ながら僕は攻める方が楽しめる性質だ。
開始早々は資金集めに奔走して静かにしていたものの、準備完了を機に一気に攻めに転じた結果が今の状況。
さすがに重火器を振り回して建物ごと吹き飛ばされたり、ウイルスに感染した豚を市場に流通させたりというアグレッシブな行動は読めていなかった智香さん達は次々とやられ、今は佐奈さんだけとなっている。
そしてそれももう少しで終わる予定。
銃の１つも持っていない向こうに勝機はない・・・。
などと、思いのほかゲームを楽しんでいたら、
「あ、電話だ・・・」
雪成君から連絡が入った。
えーと。
・・・・・ああ、蜘蛛ね。
一体なんの用だろうと思ったのは僕だけじゃないはず。
改造蜘蛛の探索のことなんて、すっかり忘れてた。
いや、そもそもやる気がなかったわけだし、それも当然だろう。
うん。決して遊ぶのに夢中になったのが理由じゃない。重要なことでもなかったからだ。
連絡を受けた瑞流君が思い出したように・・・というより実際思い出したのだろうけど、テーブルに学園都市周辺の地図をテーブルに広げて、雪成君の情報を視覚化していく。
改造蜘蛛の発見位置を赤く丸いシールでマークして電波の送受信

可能な範囲を円で描いている。
この円は必ず他の蜘蛛の円と重なるはずなので、1匹見つかれば次からは割りと簡単に見つけることができるはずだ。
改造蜘蛛は本来の徊視蜘蛛と情報が混ざらないように違う周波数を使っているので、受信機で調べれば簡単に識別できる。
探す側にとってはこれほどやり応えのない探索もあったものじゃないけど、こんな穴だらけなのに手間のかかる方法で女性の下着を盗みみたがる彼らの情熱がよく理解できない。
しかし、そんなどうでもいい事はリタイア組に任せよう。
今、僕と佐奈さんは対戦途中なのだ。
改造蜘蛛？そんなの知らない。
ビルから出るまでの間に佐奈さんはどこかに行ってしまったらしく、さっきまで居た場所には見当たらなかった。
まぁ、普通逃げるだろうけど。
じゃあ、どこへ行ったのか？
鬼である僕のプレイヤーのウイルスは時間経過と共に進化して、いまや空気感染タイプにまで成長している。
動くだけでウイルスを撒き散らす僕のそばに、彼女は居続けることはできないはずだ。
ワクチンを所持しているといっても、どこかでじっと隠れるなどという選択をすれば、そこら中感染者だらけになる上、変異を起こすだろうから、動けなくなるのは目に見えている。
となるとやっぱり離脱。できるだけ遠くに逃げて態勢を立て直すしかない。
追い詰めている側としては、それは困る。
さて、近くの交通機関は・・・と。
見るとすぐ目の前に線路が走っていた。
電車というのは厄介で、車みたいにカーチェイスができるわけでもなければ、停車駅が多くある上乗り換えられても気づきにくい。
監視カメラを気にしないなら、車よりよっぽど便利な逃走ツール

だ。
目の前にあってあからさまに怪しいことからこそ、裏をかいている可能性は高い。
まぁ、しかし、こっちにはＴＮＴ爆薬があるわけで。
「よし、とりあえず電車は脱線させるかな」
「ちょ、ちょっと何で!?何で電車って分かるのよ!?」
鎌をかけたらあっさりヒット。
言わなきゃいいのに。
「勘かなぁ。上りだよね?次の駅までの間に仕掛けるから覚悟しなさい」
あ〝――、と奇声を発する佐奈さん本人を尻目に、本業をがんばっているリタイア組の様子を見ると、もう４つ目の蜘蛛が見つかったらしい。
１つだけ青いシールなのは、多分親蜘蛛ではなく子蜘蛛だからだと思う。
この探索に重要なのは親蜘蛛の方だから、そう考えると実質は３つ目なのか。
とにかく、そうやって雪成君による探索をもうしばらく続けるつもりのようだ。
ある程度範囲が分かったら、その範囲内の借部屋などをチェックしていくのだろう。
さて。
すぐさま乗ってきた車で線路の横を走り、ノロノロと走行する電車を抜いてしばらくしたところで、僕は車を止めた。
後部座席に放り出しておいたＴＮＴ爆薬を箱ごと線路の間に置き、雷管をつける。
グッドタイミングで電車のご登場。
悲しいもので、例え敵の罠があると分かっていても降りられないのが電車である。
走行中の車両から飛び降りるというのは、結構無茶な行為なのだ。

設置した爆薬の上を半分以上超えた辺りで、ボタンを押した。
量などまるで調節していなかった爆薬の威力によって、車体が真ん中から吹き飛び、両端の車両を含めて真横に倒れていく。
もちろんスピーカーからその爆音も騒音も響いている。
脱線した電車は、速度を殺しきれずに脱線後も引きずるように動いて、ごちゃごちゃと自分の身を潰した。
トドメを指すまでもない。こんな大事故に巻き込まれて生きられる可能性はかなり低い。
予想通り、ゲーム画面に『Ｙｏｕ' ｒｅ ｔｈｅ Ｗｉｎｎｅｒ！』の文字が表示された。

＃

地図に描かれたいくつもの円が微妙に重なって、連なって、数珠繋ぎのシルエットを作り出していた。
改造親蜘蛛（アンテナ）の分布図である。
実際に覗きをする子蜘蛛と違い、親蜘蛛は電波が途切れると困るために移動はないと考えていい。
だから、このシルエットの範囲は多少の誤差あれど、的外れということはないだろう。
範囲内の貸し部屋を借りている人物をサーチすると、あっけなく前歴ありが１つビンゴした。
場所は学園都市地帯の外の方、超能力欲しさに学園都市に来た一人暮らしの学生を住まわす賃貸が乱立する地区にある学生専用アパートの一室。
その地区の一部に円の一端が重なっていた。
しかも、学園都市駅から何の分岐もせずに一線（ライン）を描いて蜘蛛の点が繋がっていて、ご丁寧に標的（ゴール）を示してくれていた。イメージはヘンゼルとグレーテルのアレ。
賃貸集中地区と駅が結構遠いとはいえ、何のフェイクもなしとい

うのは馬鹿にされているのか、向こうが馬鹿なのか・・・。
毎年こんなものらしい。
学習能力って言葉知ってるのだろうか？
あぁ、どうせ捕まるから小細工を一切排除してるのかもしれない。
・・・・・・。
となると、向こうはこっちが捕まえるまでが勝負なのだろう。
でもそれなら改造蜘蛛の情報が回ってきた時点ですでにこっちは後手に回ってるよね。というか手遅れじゃないのかな。
「うーん・・・なんだかなぁ」
コピーされた地図をしまい、辺りを見回す。
前にも後にも横にも灰色をした同じような建物が並んでいる。
住むことだけを考えられて作られた、味気ない建築物しか見えない。
僕は今、件の学生アパートの裏にいる。
当然潜伏している連中を引きずり出すためだ。
しかし、本当に・・・暇だなぁ。
突入には攻撃系の智香さんと佐奈さんが選ばれ、僕や他のメンバーは外の見張り。
暴力担当というのなら、突入班にしてほしかった。
確かに電撃の智香さんや冷却の佐奈さんの方が物理攻撃の僕よりも対能力者では相性がよいのだろうけど、今回僕はただついていってるだけで何もしてないわけだし。
まぁ、正直やる気があるわけでもないんだけど。
そんなことを考えていたら、
「っはづき、そっちに行った――！」
と瑞流君から声がかかった。
声の方へと向いてみると、エンジン音を響かせて、ワゴン車が角をこっちに曲がってきている。
どうやら直前に感づかれたらしい。
アパートの他の住人が教えたのだろうか？

こういう場所って変な仲間意識があるとかいうし・・・。
まぁ、そんなことはいい。
とにかく車を止めなくてはならない。
そう思って、向かってくる車に対して大の字になり道路の真ん中に立つ。
「はーい、そこの車止まっ――――」
――ゴドン！
完全無視で轢かれた。というか撥ねられた？
いや、跳ねるなよ。跳ねちゃ駄目だろ・・・。
あまりのことに言葉使いが乱暴に。
あー、いやいや。それどころじゃない。
後ろ向きに空中を舞う体を猫のように捻る。
とりあえず、うまく着地しなければならない。
衝突事故で怖いのは、吹っ飛んで地面に激突したり、そのまま車に今度こそ物理的な意味で轢かれて潰されたりすることだ。
身体強化で得たバランス力を活用して、しっかりと下半身が地面に向くよう調節する。
あとは、落ちるのを待つだけ――――

――ゴッ

今度の一撃は、本気で痛かった。
見えていなかった後にどうやら電柱があったらしく、思いっきり後頭部をぶつけた。
普通の人間なら即死だろう。
ずり落ちるようにして、電柱の根元に尻餅をつく。
ぐわんぐわんと頭が響くのを堪えながら、手でぶつけた場所に触れると血がべっとり。
・・・・・・。
「ふふっ、ふふふふふふふふふふふ・・・・・」

やる気が出ました♪

／

必ず来るであろう追っ手の手から悪あがきといえども逃げるため、用意しておいたワゴンに乗って逃走しようとした矢先、目の前にいた少女がいきなり激昂した蟲達を止める谷娘の如く両手を広げて通せんぼしてきたのは先刻。

常軌を逸したその行動に呆気に取られた逃亡者の１人である運転手は、あまりの驚きでブレーキとアクセルを踏み間違え、まさかの事故を起こしてしまった次第だ。

轢かれた方も堪ったものではないが、轢いた方も同じ気持ちで、むしろ覗きの現行犯で捕まる事実を先延ばしにしようという行為の結果が取り返しのつかない事態に発展してしまい気が動転してしまっていた。

車に乗っていた3人はパニックになり、まさか死んだんじゃ・・・といった最悪の事態を想像して、どうすればいいのか分からない状態だ。

「ちくしょー！何だって道路のど真ん中に出てくんだあの女――ッ！」

「なぁ、出頭した方がよくね？いくらなんでもやばいって！」

「死んだかなぁ？あれ、死んだよなぁ・・・？」

しかし、そんな彼らの懸念は一気に払拭されることになる。

何故か？

その理由は簡単だ。

轢かれた挙句頭をぶつけてしまったはずのその少女が猛ダッシュで追ってきたからである。

背筋が伸びた非常に綺麗な態勢で、６０ｋｍ／ｈは出ているワゴンに迫ってくる様は異次元めいていた。

「「・・・・・・」」

3人は無言で顔を見合わせた後、
「ぎゃ――――!!待て待て待てっ、何だよアレ!!!」
「落ち着け!落ち着くんだ!むしろ生きてたんだからよかったんだって!!」
「その生きてる本人が今迫ってんだけどなッ!!!」
さらにパニックに。
そんな3人の都合は無視して、織神葉月が突進してくる。
「スピード出せ、スピード!」
「やってる!これが限界だ!」
サイドミラーに映る、足の細い少女の追跡に彼らは気が気でない。
「何だよアレ!身体強化の能力者か!?」
知らねぇ、と運転担当の男子生徒が答える。
ハンドルを握る手がぶるぶると震えているため、何時また操作を誤って事故を起こすか分からない。
後部座席にいる1人が、車窓を開けてちょうど手近にあった撥水ワックスの容器を葉月に向かって投げつけた。
しかしそんな幼稚な攻撃が当たるわけもなく、彼女は苦なく避けて言い放つ。
「あーあ、反撃したね?しちゃったね?せっかく指を詰める程度で許してあげようと思ったのにぃ」
「全然許してねぇぞソレ!」
そんな突っ込みを他所に葉月は自分の髪を変容させていく。
異様に長くなり縄上になった髪の束を根元の辺りで切り離し、投げ輪の要領で回し始めた。
切り離された髪は外見では判らないが、先の方だけ鉄分を含ませることで飛距離が稼げるように工夫もされている。
その姿だけを見れば、棒跳びをするために助走をつけているオリンピック選手に見えなくもないが、身体が成長していない少女がやるには違和感のあるポーズだった。
程なくしてその髪は前へと投げられた。

縄の先は輪になっているわけではないが熊手状に固まっていて、それがワゴンの後部ガラスを割ってフレームに引っかかる。
そのまま足を踏ん張って、無理やり止めようという強引過ぎる魂胆である。
葉月の足がガリガリとアスファルトを踵で削り、それに合わせて車のスピードは徐々に衰えていく。
しかし、このまま止めれるかと思いを裏切り、ワゴンはまだある移動エネルギーを使って、交差点を右折した。
信号の柱がワイヤーの方向を変える滑車のようにワゴンと彼女を繋ぐ縄を擦る。
それだけならまだよかったのだが、彼女が引き続き車を止めようと力を入れ続けたために、その柱がぼきりと折れてしまった。
障害物が消えたことにより、力のかかり方が直角からいきなり直線に変わり、虚を突かれた彼女は右斜めに引っ張られてしまう。
一度地面から離れてしまった両足は踏ん張りがつかず、半ば引きずられる形になった葉月は、
「げっ！」
交差点だからこそ当然ある、建物の角に突っ込んだ。
コンクリートを削るようにそれを通りすぎたら、今度は反対側の建物に打ち付けられる。
建物に体を埋めてガラス張りの壁を割りながらも手を離していないらしいことが、サイドミラー越しに逃走者3人にも分かる。
ど派手にガラスを割り散らかし姿を現して道路へと復帰した葉月は一切血を流していなかった。
ただし、服はボロボロに破け、体中傷だらけになっている。
「分かった・・・よぉーく、分かった。アレはあれだ・・・・・・・・未来から来た殺戮兵器だ」
「洒落になってねぇぞ・・・」
そんな会話をしている間に、葉月は今まで握っていた縄を手放した。

「おぉ？」
そして一気の跳躍。
今まで以上に強化した足腰を使っての3歩。
最後の1歩で大きく跳んで、ワゴンの上部に降り立った。
――ベキメキバリベリ・・・
嫌な音と共に金属のフレームが2つに引き裂いていく。
車内へと顔を出した彼女は笑顔で言った。
「どこを折られたい？両腕？両足？それとも指全部？」

／

上部が引き裂かれ、前方のガラスは僕を撥ねた際に蜘蛛の巣状にヒビがいって、後のガラスは完全に割れた、スクラップ決定のワゴン車はレッカー車に連れられて現場を去った。
それに乗り逃亡を図っていた連中は救急車に乗せられて、今頃治療室にいることだろう。
彼らが運ばれていく時に、
「何で彼らは揃いも揃って両腕が折れてるんでしょう・・・？」
「さぁ？よっぽど仲がよかったんじゃないですか？」
という救急隊員とのやり取りがあったわけだけど、まぁどうでもいいことだ。
彼らは担架に乗せられながら何か色々と叫んでいたけど、激痛によるパニックということにしておく。
さて、これで一件落着。
実際に改造蜘蛛のデータを受信していたあの3人はそういう役割を担っていただけだろうから、他にも改造蜘蛛での覗き作戦に加担した連中はいるのだろう。
受信した映像を即座に別の場所にいる仲間に送ることで、捕まっても映像だけは没収されないようにしているのかもしれない。
けれど、そうだとするなら、これは完全なる後手。残飯処理だ。

別にそれ自体は構わないのだけど、残飯なら残飯で食べ応えのあるものがよかった。
今回の件は少々捻りがなさすぎる感じがする。
「まぁ、いいか」
僕は1人で駅ビルの部屋にいた。
体の方は皮膚の強度を上げておいたし、傷も簡単に治せたけど、服はそうもいかない。
ビリビリに破けてしまったその服装でこれ以上で歩くわけにもいかず、予備の服がある部屋の方に先に帰ってきたのだ。
智香さん達は彼らの潜伏部屋から映像やらを回収してくるらしい。
あぁでも、そんなことを考えているうちに、
「ただいまー」
彼女達は帰ってきた。
「お帰りなさい。どうだった?」
その応えは、手に持ったノートパソコンを持ち上げるという動作で返ってくる。
その後にいる瑞流君は大きめのアンテナらしきものを抱えていた。
「さーてさて、じゃお楽しみタイムの始まりです」
智香さんがそんなことを言ってテーブルの中央にパソコンを置いて、電源を入れる。
いや、いやいや・・・お楽しみタイムって。
あれ?もしかしてこれって覗き魔が入れ替わっただけ?
さっきやっていた捕り物の意味が今度こそ完全に剥奪された気がするんだけど。
そうこう思っている間にパソコンは立ち上がり、デスクトップが表示される。割と整理されていてアイコンの数は少なかった。
四六時中動画を撮っていたらメモリが足りなくなるだろうから、保存価値のあるものを小分けしていると考えると、動画データはどこかのファイルにでもしまってあるようだ。
デスクトップには複数の動画データは見当たらない。

けれど1つだけ。単体でならあった。
これだけを別にしている、といった感じ。
「なにかしら？」
気になったメンバーの総意を代表して智香さんがそれをクリックした。
再生プレーヤーが起動して、動画が始まる。

少女がゆっくりと右手をかざす。
スーツと皮膚を引き裂かれ、ＯＬが道路に倒れた。

再生時間7秒。
ループ設定で繰り返し。
「ぬぁあ・・・」
瑞流君がそんな奇声を発し、佐奈さんがノートパソコンを閉じた。
亮輔君は逆に平気なようで、智香さんは冷静にパソコンを開いてプレーヤーを終了させる。
そんな中、雪成君が、
「うわぁ・・・、これ先輩が探してたやつだ」
と呟いた。
「先輩？」
「ほら、形態変身（トランスホーム）のグループの、先輩。
暇だからとかいって、この犯人捜してたんだよ。これ、教えた方がいいかなぁ・・・？」
「偶然見つけて、とりあえず取っておいたのね・・・。いや、どうせ没収されるって分かってたから、わざわざデスクトップに？
まぁ、この分だと、この事件を通報したのはあの3人なんじゃないかしら」
確かに。
匿名で通報があってもおかしくない。
いくらなんでもこんな傷害事件を放っておくことはないだろう。

というか、さっきから思っていたんだけど・・・・・・、
「この犯人に見覚えあるよ」
「「は？」」
おおぅ。
全員の声が揃った。
「体育祭の時に一度手合わせしたことがあるんだよ。結局何の能力者なのか分からずじまいだったかな・・・」
「嘘だ！人の顔を覚えられないんじゃ！？」
思わずと言った感じで叫ぶ雪成君。失礼な。
「誤解があるようだから言っておくけど僕が覚えれないのは興味のない人物だよ？」
「・・・先輩みたいに？」
・・・うん。実はさっきの説明でも思い出せてないです。
多分眼鏡をかけてたと思うんだけど・・・それぐらいしか。
「まぁ・・・とりあえず先輩に連絡してみよう」
そう言って雪成君は携帯を取り出して、プッシュ、耳に持っていった。
「あ、先輩？実はですね・・・・・・はぁ？・・・・・・・・・・何やってんですか、あんたは・・・・・・・」
「どうしたの？」
「・・・いや、犯人を突き止めたら返り討ちにあったらしい」

＃

「先輩って馬鹿でしょう？」
開口一番、雪成君はそう言った。
「うん、否定できないな」
けれど、言われた本人は全く気を害した風もない。
ついでに返り討ちにあった割には、外傷も見当たらなかった。
「ああ、傷はね、能力で塞いでるんだ」

「そんな使い方あるんですね・・・」
「まぁね。性質は無理とはいえ、形態を変える能力だから。で、珍しいお客さんが来てるじゃない」
そこで僕の方へと振り向いた。
前は黒ぶち眼鏡だった気がするのだけど、今は細いフレームでレンズは長方形になっている。
返り討ちにあった時に壊れたのだろうか。
「はい。その返り討ちにあったという犯人に会ってみたくて」
まぁ、分かるとおもうけど、・・・・・電話でのやり取りの後、呆れながらも心配しているらしい彼と単純に興味が湧いた僕は、裏方メンバーと離れて”先輩”のアパートにきていた。
理由は言ったとおりで、その犯人に会うために情報がほしいのだ。
「ふぅ・・・ん、そう」
「先輩、はづきを止めてください・・・。ろくなことになりませんから」
後半、実感の篭った声で言ってくれる雪成君。
「前々から思ってたけど結構失礼なこと言うよね・・・」
「ワゴン車ぶっ壊して、建物一部を損壊して・・・しかもその1つは車会社店舗のガラスだぞ?どれだけの値段になるか!」
「うわぁ、まさか君にそんなことを言われるなんて!」
「・・・あ、アスファルトもだったけ?」
・・・・・そういえばそれもかな。でも正直そんなのはどうでもいいのです。
「・・・そういうのは置いといて。話をね?事件の概要辺りからでも」
「うーん、そうだなぁ。
・・・・・そもそもね、この事件はかなり前から起こってたんだ。
去年の冬辺りからかな・・・?夜道を歩いていたら突然指に切り傷ができるという事件が多発してたのは知ってる?」

「知りません」
「そうかもね。切り傷って言っても1、2箇所程度のもので、犯人を見たものもないし、本当のカマイタチみたいな感じで・・・・・・通報なんてされてなかったから。
そういう噂程度の話だったんだけど、昨晩ついに黙止できないほどの被害者がでちゃったんだ。全身切り傷で、結構出血もしてる」
彼は僕に写真を手渡した。
写っているのは被害状況を示すものだ。
動画とアングルが同じだった。
「皮膚・・・正確には上皮かな?それが切り裂かれてるみたいで、傷自体は多くても大事にはいたらなかった。
今までも少しずつエスカレートしていってるとは分かる状況だったんだけど、はっきり言って能力者って能力者に甘いからね。
僕はその犯人を火兎の奴から聞き出したんだが・・・あいつも知ってて放置してたし」
火兎・・・多分兎傘鮮香のことなんだろう。
さすがは大地溶解の能力者。関係なさそうなところでも話の中に出てくるか・・・。
「まぁ、それは僕も同じで、さすがに昨日のはまずいからもうやめた方がいいと忠告しようと思ったんだけど・・・・・・・・・その結果がこの様なわけだ」
「先輩ってやっぱり馬鹿ですよね?その上お節介だし」
「いいじゃないかお節介で。
さてと、この事件のあらすじはそんな感じだ。
・・・・・まぁ、あとは彼女の自身のことぐらいかな。
うん・・・彼女は少し変わった人間だったよ」
「事件の内容聞いた時点で犯人がまともだとは思ってませんけどね、俺は」
雪成君がそんなことを言っているが、僕達2人は無視する。
「どう変わってるんですか?」

「趣味が変わってる。純粋に、本当に純粋に何の穢れもなくただ好きなことがちょっと世間とは相容れない感じでね・・・。
ああいうの、辛いとおもうんだけどなぁ。
今まで築き上げた人間関係の安寧を選ぶか、それとも自分の欲望を選ぶかって究極の2択だよねぇ。
全く、人と違いすぎる子にとっては、それだけで生きにくい世の中だ」
説明するというよりは自分の感想を語っている感じの彼の話。
残念ながら僕には理解できていない。
「・・・何を言ってるのか分かりませんけど？」
それにまず笑うことで応えてから、
「会えば分かるよ」
そう言って、彼は、お茶を啜って言葉を区切った。
「欲しければ、彼女の住所教えるけどさ。会ってどうするつもりなんだい？」
「ちょっと訓練に付き合ってもらおうと思って」
「ああ、なるほどね。・・・それじゃあこれが――――」
「ちょーと待ったぁ！！」
せっかく彼と2人でサクサクと話を進めていたのに、邪魔者が1人。
「なんだい？雪成」
「どうかした？雪成君」
「いやいやいやいや・・・、おかしいって！そんなの警察にでも任せればいいことだろ！」
「ウラカタという組織に所属しておきながら何を言ってるんだ、君は」
「というかね？僕は別に捕まえに行くつもりじゃないし」
「それも問題なんだろ！わざわざ危険なことに首を突っ込む必要はない！先輩も言ってやってください！」
「・・・・・。

ふむ。確かに彼女は強いよ？
攻撃に向いていない能力者とはいえ、これでも結構体自体は鍛えてる身だから、僕はレベルの低い能力者なら素手で十分相手をできると自負してるんだ。
その僕が一方的に伸されたわけだし。・・・能力なしで勝てるほど甘い相手ではないな。
というより、あの娘は能力の技巧だけでいえば火兎レベルのスキルを持ってると思う」
炎海紅泥。珪素を介して炎を広げる能力技術の持ち主。
それと同じ程度には自分の能力を扱える能力者。
確かに、この前見た彼女の能力は意味の分からない能力だった。
斬物風刃（カマイタチ）とは違う、切断。あれが能力の応用なのだろう。
うん・・・・・余計に会いたくなった。
今僕が欲しい対戦相手そのものだし。
「けどさ、そうだとしても彼女なら引けを取らないよ、雪成」
「先輩・・・・・止めてっていったんですけどね・・・？」
「まぁ、そうことで。教えてください」

／

真夜中、終電が出て行ってしまった後の移動というのは思いの他厄介だ。
狩るための獲物を得る場所は自分の住処と遠い場所がいいのにも関わらず、狩場からの帰宅を考えると駅2つ分でもかなり辛い。
暗闇の中徒歩で歩くという行為は思いのほか体力を削るものだし、そんな怪しい人間の目撃情報が拾われたらさすがに身元が発覚してしまう。
真夜中といえど午前1時ほどまでは割とサラリーマンが通るのがベッドタウンであり、そんな中に女学生が紛れているのはかなり目立つ。

形振(なりふ)り構っているつもりはないが、捕まるまでの時間が長ければ長いほど、人を傷つける機会が増すだろう。
だから彼女は、今回近場で獲物を探す予定だった。
だが、その必要は玄関から出た瞬間になくなる。
「こんばんは」
デニムのショートパンツにTシャツというラフな服装をした織神葉月が家の前に立っていた。
一瞬呆気に取られた彼女だったが、夕方に来た変な女性のことを思い出し、気を引き締める。
既に1人に正体がバレているのだから、他にやってきてもおかしくはない。
むしろ、あの女性を引き裂いた後に何のお咎めがなかった方が異常のはずだ。
いや、それよりも、
「会ったこと、あるよね？」
彼女は目の前にいる少女の姿に見覚えがあった。
体育祭、第一中学校で自分が負けた相手。
黒髪をうねらせていた青いジャージの女の子。
「うん。あの時はお世話様」
ひらひらと手を振る葉月。
「それはこっちの台詞。結局負かされちゃったしね。
で、何？君も私を止めに来たクチ？」
「まさか。もう1度戦いたいと思っただけだよ。だってこの機を逃せば次はないでしょ？」
次はない。治安維持機構がまだ動いていない今以外に彼女と会える機会はない。
大規模の事件を起こしてしまい、来島越嫁(くるしまえつか)の忠告を聞かず、今夜も狩りに出ようとしていた彼女の行く末は決まっていると、葉月は残酷に断言した。
「あははは、確かにそうかもね。

でも、残念。君は私の好みじゃないんだよねぇ・・・」
「へぇ？被害者は能力者でもない一般人ばかりだから、無差別でやってるかと思ってたけど？」
「『か弱い人間』を選んでるんだよ。能力者はそういうの、外見で判断つかないから学生は除外、ね」
「ふぅん」
「ああ、そこら辺に転がってる通り魔とか大量殺人犯とかそんなのといっしょにしないでよ？
別に捻くれたストレス解消をしてるわけでもないし、自分の無意味さに他人を巻き込んでるわけでもないんだから。
ああいうのとは根本的に違う。アレらの消極的行為とは別物。
・・・・・私はね？」
彼女は息を吸うことで一間おいて、しっかりと宣言した。
「私は、無抵抗な子を痛めつけるのが好き」
そこにあるのは、惚れ惚れするような笑み。
「ホントはさ？自分よりは体の小さい子を苛めたいんだけどね？でも、学生は危ないから今までも我慢してたんだ」
「そう」
彼女は目を閉じて、まどろむように、思い出すように語り出す。
「痛みに耐えられず漏らす嗚咽が好き」
「うん」
「血が滲む傷口を震えて押さえる様子が好き」
「うん」
「自分を傷つける相手に縋(すが)るあの表情が好き」
「あー・・・うん」
相槌を打っていた葉月だが、それ以上彼女の台詞が続かないと分かると、口を開いた。
夕方の会話の意味を理解して、

「それを聞いて、僕の前に来たあの人はなんて言ったの？」
あの彼が自分の思うところを代弁してくれると理解して。
だから、それ以上に相応しい言葉はない。
「・・・人の趣味だから何にも言えないけど、やめた方がいいよ・・・・だって」
やめた方がいい。
強制も説得もできはしないから、気休め程度に『方がいい』。
今まで彼女が積み上げてきた生活を、壊してしまうのは辛いことだから。
越嫁は本心でそう思い、お節介を焼いて、拒絶された。
彼女自身が決めたことに、今更言えることはない。
葉月は早々に言葉をかけるのを諦めた。
そもそも、そこまでやる気のあるわけでもない。
彼女は言葉を続けた。
「まぁ、確かにその通り。こんなことをしていたら先なんて見えてる。君も言ったとおりよね」
「でも、どうせもう我慢できないんでしょ？だから今通り魔紛いのことをやってるわけだし」
「そうよ。・・・今までずぅっと我慢してたけど・・・もう限界・・・・・」
ずっと抑制していたものが、能力の才能開花で揺さぶられて溢れ出し。
少しずつ、節約でもするように少しずつ、人を傷つけてきて。
けれどそんな人生ももう終わりだ。
ほんの少し許したせいで、次の少しも許してしまう。
その連鎖は止まらずに、待ち受けるのは破滅だけ。
一度欲望を開放してしまった扉な閉めることも叶わない。
だからね？、と彼女は言った。
「そこ、退いてくれない？
昨晩のこともあるし、君達が私にまで辿り着いたことを考えると、

私には時間がないのさ」
後戻りできないと理解しているからこそ、人を傷つける方を選ぶ彼女。
けれど、葉月にとってそんなものはもうどうでもいい。
「お断りだね。本来寝てる時間帯にわざわざここまでやって来たのに骨折り損は嫌」
「だって君私の趣味じゃないもん。能力者でしかも自分より強い相手じゃあ、興奮もしない。
相手にするのも癪だから逃げさせてもらうわ」
「はぁ・・・、仕方ないなぁ。
別にそんな気全くないんだけど、快く相手をしてくれるんだったら勝ち負け関係なく捕まえるつもりなんて露ほどにもなかったんだけど、まぁ立場上建前として――――
小島継、君を連続障害事件の犯人として拘束させてもらう」
逃げるな戦え、戦わなければ捕まえる。
そう言われて、小島継はうっすらと笑った。
元々渋ったのは向こうの事情に能動的に付き合うのは気が乗らなかったからだ。
そういう建前を作ってもらった以上は、義理として付き合わないといけない。
時間がないのは確かだが、好みではなくても本気で切り刻める対象というのは彼女にとっても得がたい標的であることは確かなのだ。
「ホント、しょうがないなぁ」
彼女がそんな言葉を発した瞬間、
パキンと葉月の横に位置していた電柱が切断され倒れてきた。
その切断面を葉月は眺めるようにしてから、一歩後に下がる。
「速い・・・」
体育祭の時には朧げにしか感じれなかった能力波を、今度こそはっきりと感知できるようになるために今この場所に立っている葉月。
だからこそ、透明な出力系能力を持っていると分かっている継を

相手に選らんだ彼女だったが、思いのほか継の攻撃は慣れていない葉月には速すぎた。
継はゆっくりと腕を突き出す。
「アスファルト」
パンッと弾けような音と共に、今度は足場が吹き飛ばされる。
足元が不安定になった葉月はステップを踏むように下がり、破壊されずに済んでいたところで立ち止まった。
「・・・・・・ふぅん」
葉月が攻撃してこないということが分かった継は、今度こそ標的をその少女に設定する。
――バシュン！
体中の皮膚が破裂して網目状に血が滲んだ。できる限り余計な被服部を排除した服も無残に切り刻まれている。
傷口自体は浅く狭いが、切り傷とは違い上皮が捲られるように開いているためか、ぽたぽたと血液が落ちていく。
そんな自身の様子を他人事のように見回して、葉月は左腕に指を滑らして血を掬い取り、口に持っていった。
「なるほどね・・・・・・何となく、仕組みが分かった気がする」
「へー、そう？私の売りは正体不明の能力者ってことなんだけどなぁ・・・」
「体育祭の時も結構君、連発してたし、ヒントは結構あったよ。
『さっきのと違う』に『時間がかかる』だっけ？その時点である程度予測はしていたんだけどね。
・・・・・・どっちかっていうと、信じられなかったというのが本心かな」
「ふーん・・・で、答えは？」
「音弦変調（ボイスチャンジャー）」
真面目な葉月の回答に、継はきょとんとしてみせ、腹を抱えて笑い出した。
「あははははっ、何言ってるんだか！発音能力派生の変音能力で？

固有振動による破壊ってこと？そんなの都市伝説じゃない！」

一方葉月は平常心で応える。

「別に固有振動とは言ってないよ。まぁ、それも使ってるんだろうけどね。

確かに固有振動による物の破壊能力なんて迷信だ。

コップならまだしも柔らかい皮膚なんてどう考えても、無理。

ガラスが割れるのは硬いからこそ振動による変形に弱いからだしね。変形に耐性がある軟質なものほど壊しにくい」

「そう。アレは机上の空論だよ。あり得ない能力。私のやってることは特に固有振動では再現できないものだし」

葉月はつまらなそうに頬をかいた。

その度、凝固した血栓がボロボロと落ち、無傷の肌が露出する。

「だから言ったでしょ？固有振動とは言ってないって。

確かに体育祭の時に髪を切断した時もさっき電柱を切断した時も固有振動は利用していたようだけどね。

あの時『さっきのと違う』と言ったのは固有振動の違いのことで、『時間がかかる』のは破壊したい対象の固有振動を探る時間だ。

―硬いものに限っていえば《・・・・・・・・・・》、固有振動を使っていた。

でも考えてみたら、そもそも音弦変調（ボイスチャンジャー）って別に固有振動だけが武器ってわけじゃない。

音声変換？そんなの限定した使い方だ。振動の波形を変更、つまり周波数を高くも低くもでき、なおかつ増幅できるのなら、超音波だろうと低周波だろうと作れる。

ああ、衝撃波だって作り出せるよね」

「・・・・・・」

「前の廊下の床や今回のアスファルトは衝撃波で壊した。硬くてどうしても破壊できない物は固有振動で補助。髪や電柱を切断したのは面でじゃなくて線として衝撃波を当てたからってところかな。

で、肝心の皮膚の方だけど、これはイマイチはっきりとしないよ

ね。

まぁ、僕に考えつくのは、先に衝撃波を当てて皮膚を伸ばしたところに固有振動を当てるとか、超音波カッターの原理で刃物状に超音波を放つとか・・・」

そこまで言われて、継は降参のポーズをした。

「だからヤなのよ・・・。体中刻まれて冷静に他人（ヒト）の能力解説してるし、その傷だって既に治っちゃってるし・・・。

普通はそこまで切られたらパニックになって能力の仕組みなんて考えもしないのに、さッ」

『さ』のところに力を入れた彼女の声がヴォンと唸って、葉月の首に鎌を振り下ろすような一撃と化す。

今度は回避行動にでる葉月はかなりぼやけて見えるその鎌を潜り抜けるように低く体勢を保って、前方へと走った。

間一髪・・・とはいかずに後になびいた黒髪がバッサリと切断されて夜風に散る。

もしもその一撃が固有振動での破壊を狙ったものであれば、皮膚は切れても髪は切れなかったはずだ。しかし強化されていない髪は見事に切られた。

その事実からその一撃が超音波カッターの方だと判断し、その威力からみるにそのまま突っ立っていれば頚動脈が切られていたことは間違いないという結論に至る。

前に駆け出した葉月に継は手をかざし直して、衝撃波を放った。

切断を目的としていない、線ではなく面の衝撃を葉月は避けることができない。

踏ん張るも足は地面を離れ、体が宙に舞う。

回避行動が取れない空中という空間に追い込まれた葉月へ今度こそ容赦ない斬撃が繰り出された。

だが、がくんと葉月の体は不自然な揺れを見せ、何の前触れもなく、上に吊り上がった。

何時の間にか、継の方にあった電柱に髪が巻きついていたのだ。

髪を引っ張ることで上へと逃げた葉月の移動手段を奪おうと、電柱へと繋がっているそれを切断しようとする継が、髪は極端に切れ味を増す超音波カッターですら歯が立たない硬度のようで数本が切れただけだった。

「ちっ」

グニャグニャと動きを見せる可変的なその外見と裏腹に、葉月の強化した髪はかなり硬い。

それを知らされた継だったが、その時間は完全なタイムロスだった。

葉月は継の真上を過ぎ、前いた場所の反対側に着地する。

継のすぐ傍に着地した葉月は右腕を振るった。

サイドスローのようなその一撃を継は小さな衝撃波を作ることでガード。

パッパンと葉月の右手は弾かれ、反撃として葉月の顔面にもう1つ作り出した衝撃波をぶち込んだ。

葉月は後へと頭から地面に激突して、それでも勢いを殺しきれずにバウンドするように地面を転がっていった。

ところどころアスファルトが抉れ、その先に飛ばされた葉月は、しかし何もなかったように立ち上がる。

衝撃波を超近距離で食らったせいで額が内出血しているが、目立った外傷はそれだけだ。

少し前に後頭部を強打するという経験をしていたため、頭蓋骨を強化してあった結果だった。

戦闘用に成分を弄った髪がクッションになり後頭部は出血すらしていない。

コキコキと首を鳴らして、葉月は可聴域を通常の人間程度に戻した。

目には見えないとはいえ、音波で察知できる彼女の能力の場合、優れすぎた聴覚が能力波感知の邪魔になる。

六感として能力波を感知する能力を獲得したい葉月にとって、こ

の戦闘は勝ち負けではないのだ。
だからこそ、大した反撃もせずに葉月は相手の攻撃を待っている。
継もそれが分かっているため、構わず攻撃を開始した。
左右交互に繰り出された斬撃をギリギリまで待って横に避ける。
しかし避けきれず、動く度ふくらはぎ辺りに切り傷を作っていく。
それに伴う痛みで自分の能力波把握のズレや大雑把さを理解しつつ、葉月は再度前に跳んだ。
当然のように衝撃波がそれを拒む。
それは見えない壁にぶつかるような、空気に拒絶されているような衝撃だ。
だが、葉月もそれが分かっているので、今度は自分の後ろにある家の柵に括りつけた髪で後ろへ一気に退避した。
その無駄に見える行為は、１つの確認のためだ。
「手、か・・・・・一体その衝撃波がどこから出てきてるのかと思っていたけど、やっと分かってきた」
葉月は双眼で継をしっかりと捉えている。
次はどこから攻撃を繰り出すのかを感知し、感覚の精度をさらに上げようという魂胆がその目から見て取れる。
顔面に衝撃波の一撃を食らって平気な顔をしている葉月に継はイラっとした。
「あっそ。それじゃあ、難易度上げてあげる」
そう言った瞬間、シュガンッという破砕音が響いて、道を形成していた周りの民家のブロック塀が砕け散った。
破裂するようにして宙に大小様々の破片を散らすコンクリートの塊に力を加減した衝撃波が加わり、葉月に向かって飛ぶ。
剛球の如く跳んでくる無数の飛礫（つぶて）を両腕を交差させて顔だけ守る葉月。
既にボロボロになっていた衣服やまだ落ちていない凝固血で汚れている肌に破片が容赦なくめり込んだ。
それだけでもかなり強力な攻撃であったが、継にとってそれは単

なる足止めと目隠しである。
顔を庇った葉月に追撃として超音波カッターの刃を5撃放つ。
腕を退けることで朧げながら凶器が飛んでくると理解した葉月は、体を捻ってそれを避けようと構える。
そこで、継は右足で一歩踏み込んだ。
振動が小域だが大規模の地震を起こす。
ただでさえ、回避行動のために足を浮かせていた葉月の足はその揺れに耐え切れずに傾く。
当然回避行動も取れずに、５つの刃が体を刻む。
「っ」
鋭い痛みに一瞬顔をしかめた葉月だったが、今はそれどころではない。
彼女のバランス感覚なら倒れている最中にうまく体勢を立て直せたろうに、痛覚に気を取られて結局地面に伏してしまった。
そこにこそ、継の決め手の一撃が加えられる。
顔面を狙った、振動の刃。
超音波の振動で刃と切断物の摩擦を軽減させることで威力を底上げした、透明の刃。
それが、葉月の顔を直撃した。
着撃の衝撃でゴロゴロと転がり、今度こそどろりとした赤黒い液体がアスファルトを存分に濡らす。
顔の出血は傷口以上に出血量が多いものだが、それにしてもかなりの血がどろどろと顔を伏せる形で横になっている葉月の頭部辺りから流れていた。
「ふふ、ふふ・・・」
そんな笑いが、継ではなく葉月の口から漏れる。
ゆっくりした動作でゆらりと起き上がった。
猫背気味に前屈みになっているためその顔は見えない。
「ふ、は。ははは、すっごいよねぇ・・・」
自分の怪我のことなど全く気にしていない、ほとほと感心したと

いわんばかりの声。
「衝撃波に超音波カッター・・・・・・簡単に言ったけど、信じられない使い方だ・・・。
そもそも音弦変調（ボイスチャンジャー）は振動の具合を変えて声を変える程度の能力だし・・・いくら音が振動だといっても、斬物風刃（カマイタチ）のように元々刃物状の風を作り出せる能力ってわけでもない・・・・・・。
空気振動による風の形成ってことなんだろうけど・・・かなり高度な応用だよ。
火兎レベルのスキル、ね・・・。
確かに・・・確かに君は至高（ハイエンド）だ。振動制御の最終地点。
・・・ふざけたぐらいの才能の持ち主だよね・・・・・・」
そう言って、葉月は曲げていた上半身を伸ばして、直立した。
影や髪に隠れていた顔が露になる。
顔の右側、右目を縦に切り潰すようにして、斬撃の跡が刻まれていた。
切られた直後は深かすぎて溢れた赤黒い血で傷の断面が確認できないほどだったろうその傷は、既に凝固した血に塞がれている。
常人を遥かに凌ぐ治癒能力だが、それですら遅いと葉月は能力で傷を塞ぎ始めた。
切られて当然機能しなくなった眼球の隠された目蓋。再び開いた時には、無傷の目がそこに存在している・・・。
両目を取り戻した葉月が唇を歪めて、言った。
「見えた。
あれだ・・・うん。さっきの一撃が効いたかな？
心眼に至るわけじゃないんだから、数をこなせば分かるようになるっていう軽い考えじゃあ駄目だよね。・・・失敗だった。
やっぱり直接肌で実感して、脳で理解しなきゃ」
ひらひらとお茶らけるように右手を振って、その後その手をこめかみの辺りに持ってくる。
とんとんと人差し指で叩いてみせた。

「1回目頭を衝撃波でやられた時に、うん・・・そういう方法もあるかって気づいたんだけどね・・・。
いや、むしろそっちの方が進化能力（メタモルフォーゼ）には相応しいかな？
不可視、不可触能であろうと力波も物質である以上、検出できないわけじゃない。
だったら、それを感知する器官を創ればいいって」
感覚的に感じるのではなく、器官による応答で感知する。
光が当たった視細胞が信号を送るように、能力波の刺激を受けて信号を送る細胞を、組織を、器官を創造する。
そんな出鱈目を、その能力はやってのける。
小島継の能力応用と、どちらがふざけているのか。
「そのために、やっぱり能力波っていうのを改めて肌で感じたかったんだけど、頭が一番良かったみたい。脳に近いものね。
・・・・・お陰で、見えた」
「そりゃあ、どう致しまして・・・」
頭蓋骨ごとその脳を切断される可能性もあったというのに、まるで気にせずケロリとしていられる葉月を前にして、うんざりしたらしい継。
もうお暇していい？と顔に書いてあるが、目的を果たしたからといって葉月が開放してくれるわけがない。
むしろ、
「これでやっとまともに反撃できる」
これからが葉月の本番と言えた。
やられたらやり返す。それが自分で売った喧嘩だろうと知ったことじゃない。それが葉月である。
ぐっ、と体を低くして、バネのように跳躍。今までとは比べ物にならないほどに速い。
それは、1つのギミックだ。
わざと今まで限界まで力を使わないことで相手に自分の能力を誤認させ、ここぞという一撃に隙を作る戦略。

だが、そんな作戦は一撃の下に殺されるかもしれない戦闘では愚策に等しい。どちらかといえば勝負事の小細工だろう。

当然前に出ると予測していた継だったが、予想外の速さに反応が遅れる。

その一瞬は致命的。

ほんの１ｍ、葉月の右手が大きく引かれる。

一撃を与えるには十分な距離。

猛獣の爪のように人の皮と肉をギタギタにできる腕がすぐそこまで迫っている。

――――そこで、葉月は気まぐれを起こした。

それは、本当に些細な気まぐれだ。

傷害願望を根源から持つ彼女の行く末に対する、少しの惜しみ。

変音能力をここまで昇華させた才能に溢れた少女への賞賛。

もしも、そんな才能がなければ、彼女の人生の寿命はもう少し長かっただろう。

ナイフで刺すよりも簡単に人を傷つける能力を得てしまったせいで彼女の寿命は縮まったのは間違いない。

そして、ストレスが限界に達して、人を傷つけはじめている以上、彼女自身やめることはでない。

当然だ。絵を描くのが好き、本を読むのが好き、そんな次元で純粋に人を傷つけたいと思い続けてきた彼女の行為がそもそも抑制しきれるものじゃないのだから。

例え今捕まっても、少年院送り。しばらくして監視官付きで出てきたら、今度こそ人を殺すかもしれない。

だから、彼女がまともに自由に生きられる人生はもうすぐそこで終わりを迎えることになる。

それは、惜しい。

それ故に、気まぐれ。

能力を使えなくすれば、あるいは気休め程度に、彼女の寿命は延びるかもしれないという思いつき。

この右手で木っ端微塵に彼女の左手を肉片に変えて、その抉れた断面を、切り裂かれた皮膚を、断絶した筋肉を、バラけた脂肪を目に焼き付けさせれば――――、

傷と血というものに太刀打ちできないほどのトラウマを植えつければ、二度と人を傷つけようとは思わなくなるかもしれない――――

そこまで考えて、

実行に移そうとした葉月は、

横からの一線、水圧の暴力によって吹き飛ばされた。

斬刀水圧（ウォーターカッター）による高圧放水。

消防車ですら出しえないほどの威力を持った水の線が、振りかざそうとした右手もろ共、葉月を真横に弾いたのだ。

ブロック塀のない民家の壁を突き破り、そのまま家の中にめり込む。

自分の体が作り出した穴の先、道路を挟んださらにその先にある民家にも同じように穴が空いている。

正確には、庭なのだろう敷地内を突き破るように、塀に穴が空けられた形だ。

葉月の目はそこから道路の方へとかけて行く男子の姿を捉えていた。

放心状態なのかただ突っ立ている継に駆け寄った男子は、

「このっ大馬鹿野郎ッ！！！」

彼女の手を引いていく。

それはいきなりの幕引きだ。

トタトタという控えめな足音は少しずつ小さくなる。

「・・・・・・」

それを聞き届けてガラガラと突き刺さっていた葉月は壁から体を抜いた。

「全く・・・止めるにしても、もう少し手加減できないものかなぁ？

アバラ・・・・・右は全部やられちゃったし・・・」

正確にはその折れた肋骨（あばらぼね）が数本肺に刺さっているし、右腕の骨は粉々に砕けて使い物にならない状態だ。

直前に向こうに気づいて、回避できた水撃をわざわざ食らった身としては痛すぎる結果と言える。

横槍を入れた以上は。彼女の果てにはあの男子が手を加えるのだろう。

諸々、想うこともあった葉月だったが、最後にポツリと結論を出した。

「・・・帰ろ」

第２４話－　話の端。－Ｃｒｉｍｅｒ'ｓ　Ｈｅａｒｔ－（後書き）

久しぶりにテキストデータが４０ＫＢ超えました。
２話に分割しようとも思いましたが、まぁ一気に書いたんだしと思いそのままです。

裏タイトルは『継はとんでもない主張をしていきました』あるいは『葉月はろくでもない荒療治を実行しようとしました』ですかね？
笑顔で殺傷願望をさらけ出す継も、
好意で腕を木っ端微塵にしようとする葉月も、
どっちもどっちな感じです。

そういえば覗き魔の事件もあったなぁ・・・インパクトなさすぎる・・・。
完全に継に話の主役とられてるし。
『未来から来た殺戮兵器』。
このネタ自体はかなり初期で考えていたんですが、まさかの時事ネタになってしまいました。
『４』をやるなんて思わなかったんだ・・・。

さて、タイトル『話の端』。
意味は、継の物語の一端に葉月がちょっと干渉したからです。
展開がいきなりで、説明不足な感じ。
まぁ葉月はほんの少し関わっただけなのでそれでいいかなと思わないでもないです。
気が向いたら継サイドの話をいつか書くかもしれませんし。

◆色々とコメント募集中です◆

▼「夏のホラー２００９」について

初めて知ったのですが、そんな企画があるとか。

やってみようかなーなんて思っているのですが、温めている話が結構あくの強い感じなので迷ってます。

どんな話かというと、

・ホラーといってもどちらかといえば『ひぐらしのなく頃に』タイプの怖い話

・性倒錯が微妙にあり（ただし年齢制限がつくほどではないです）

・救いなし

ヤンデレ・・・？そんな感じです。

あ、いや訂正。デレはないや。

それでいいので読んでみたいというチャレンジャーな方はコメントをくれる嬉しいです。

ふんぎりがついてないので。

▼相変わらず人気投票はやってます。

１人３票を、まとめたり分けたりして投票お願いします。

第２５話－　誕生日。－Ｄｅｐｔｈ：５－（前書き）

最近、個人サイトが見られないという話がありました。
そして本人も見れていません。
しばらく見れないかもしれませんが、何とかする気はあるので、気長によろしくお願いします。

第２５話－　誕生日。－Ｄｅｐｔｈ：５－

８月１７日。
夏休みが始まり、１ヶ月以上も経ったある日。
能力使用後の疲労感と就寝時間のズレから朝が遅かった僕の携帯に着信があった。
ぼーっとしている僕に、電話相手は呆れ声で、
『まだ寝てたのか・・・だらしない』
そんなことを言う。
うん、君にだけは言われたくないよ。それはクシロこそに似合う言葉だ。
けれど、現在の僕の頭はそんな反論をする思考力すら絞り出せそうにない。
「あーうん、はい。だらしないですよー。
昨日は珍しく夜更かしだったからねー、お休みー」
怠惰な睡眠を貪るのも一興かな、などとベッドの魔力に引き込まれがちになっている。
『いや、いやいや。用件が済んでないから』
「織神葉月はただ今留守にしております。ご用件のある方は骨の鳴る音の後にメッセージをどうぞ」
そう言って、首を回してコキコキと鳴らす。
欠伸をして、魔力に負けてぼふりと仰向けに寝転がった。
『なぁ、寝ぼけてるよな？』
とっても。
昨日は割りと無茶したし。
『・・・・・まぁ、いいか。
葉月今日、午後５時ぐらいにマンションな』
「・・・まぁ、暇だけどさ。
何？今日はわざわざ・・・何かの日だっけ？」

すると、クシロは数秒黙った。
『今日は何の日だ?』
「何の日・・・?」
『何月何日だ?』
「8月17日?」
『・・・気づかないかなぁ・・・普通』
「いやそう言われても・・・」
『誕生日だろ・・・』
「・・・?誰の?」
『・・・・・・。あなたの名前はなんでしょう?』
「8月(はづき)・・・・・・あぁーーーー」
葉月葉月と呼ばれていても、それが8月の旧称ではなく名前と認識していると、案外気づかないものだ。
そういえば、一応、仮という条件付きで僕の誕生日は8月17日という設定になっているのだった。
『気づこうな?』
「いやぁ・・・僕にも誕生日というものがあるんだった」
『毎年やってるんだけどな?』
確かに。ここ何年かはそうだった気がする。
けれどそもそも、誕生時の記憶があるわけでもなく、ましてや生まれたばかり脳が日付なんてものを理解できるわけでもない以上は、その数字は他人からの申告による。
そんな不確かな数値を実感して誕生日とできるのは、申告者の信頼性にかかっているのだろうけど、僕の誕生日は元々かなり適当だ。
まぁ、でもここ最近は祝ってくれる人もいるわけで、誕生日らしくはなっている。
「分かった。午後5時ね」
そう言って通話を切った。
・・・・・・、このまま寝てしまうのもいいかなぁとも思ってしまうのだけど、考えてみれば今日は少しバイトが入っていた。

まだ余裕はある。でも、寝れるほどでもない。
仕方なく体を解し始める。
首、肩、腰に足、最後に腕。
戦闘用に強化した皮膚や髪は元に戻しているため、長い髪が所々絡まっていた。
半目気味で部屋を横切り、洗面所へ。
顔を洗って、髪を梳かしてキッチンで朝食を探す。
「・・・そういえば昨日、買い物するの忘れてたんだっけ」
別に飲食しなくても1ヶ月ほどは持つのだけど、やっぱりこういうのは気持ちの問題だ。
楽気苑に行く前にどこかで外食しよう。
・・・あ、いや。楽気苑で食べればいいのか。
今日の朝食は蕎麦に決定。
夏だし、ざる蕎麦なんかがちょうどいい。
そうとなればさっさと着替えて出かけよう。

#

楽気苑に入り、始めに客席に座った僕を見て、バイトにも関わらずいつもいるような気がしてならない三石先輩は何とも形容しがたい表情をしてくれた。
そしてざる蕎麦のオーダー当然のように無視して運ばれてきた天ぷら蕎麦。
この暑い夏だからこそ冷たくあっさりしたざる蕎麦を注文したのに、真逆の熱い出汁に入ったこってりの天ぷら蕎麦を出すところが気がきいてる。
別に忙しい時間帯でもなかったのだけど、本来働く側の人間が客席について笑顔で手を振っていると殺意が湧くらしい。先輩談。
けれど、どう考えてもざる蕎麦の方が調理が楽だろうにと思う。
わざわざ天ぷらまで揚げてまで天ぷら蕎麦にするとは、変にこだわ

り過ぎじゃないだろうか?嫌がらせなら普通にかけ蕎麦でもよかった気もする。

いや、そもそも、ざる蕎麦と天ぷら蕎麦では価格が５００円近く違うわけで、ざる蕎麦を注文した僕はもちろんその分の、しかも従業員割引のお会計しか払っていないから、ものすごく得しているのだけど、その辺り店の人間としてどうなんだろう?

まぁ、そんなことがあったバイトの方も午後3時には終わり、現在に至る。

場所は学園都市駅、用事というほどではないのだけど、行ってみたいところが1つあるのだ。

と、その前に歩いて少しかかるので、自動販売機でスノーウォーターを購入した。

それからポーチに入れておいた、何時ぞやあの岩男から貰った地図張を取り出す。

放置ぎみだったそれのあるページを開くと、学園都市周辺のかなり詳しい地図が載っている。

その一箇所を指差してもう一度場所を確認。

ＥＳＰ追究研求所。

御籤唯詠の出身施設。

一般人が近づくには問題がありすぎるタイプの場所だけど、僕は元々一般人でもなんでもないので問題もない。

少なくても知り合い程度ではあるのだから、会うこと自体はおかしくはないし・・・。

さほどの用事はないのだけど、まぁ暇つぶしがてら行ってみようといった感じ。

彼女の過去視で、先代変容の情報でも収集できたらいいなぁ、と思ってはいるのだけど。

性格悪いみたいだし、あんまり期待はしていない。

位置の確認も終わり、駅からのんびりと歩き始める。

学園都市は教育施設を中央にして、その各々の教育施設に付属する訓練所、研究所が年輪の如く層を作っている。

もちろんはっきりとした境界線が引かれているわけでもないから、中央から外側へと進んだところで年輪のようだと感じることはないのだけど、地図で建物を用途別に色分けでもしていけば分かるはずだ。

研究所の外側には生徒寮の類が特に北西にあり、北東は多種多様な施設群が目立つ。

南の方は行けば行くほど繁華地帯で、突き進めば港だ。

しかし、そんな種類分けがなされている学園都市周辺の分布を無視している施設も存在する。

ＥＳＰ追究研求所なんてものがその１つで、北西の生徒生活地帯のさらに外に建っているのだ。

ああいった研究所は周りの空気を読みやしない。

万可統一機構も遠く離れたどちらかといえば繁華街の方だ。

昔からあるから場所が散らばっているのかと思いきや、超能力史初期にできた研究所だからといって、この神戸市にある施設が４０年前からあるかといえば、そういうわけでもない。

万可統一機構は本部が東京にある・・・・・というかあって、そこが例の先代変容によって壊滅されて神戸に本拠地を移した形だし、今から行くＥＳＰ追究研求所だっておそらく支部で本部は別にあると思われる。

超能力を扱っている学園都市は９箇所あるわけで、そのほとんどに古株の主な組織の研究所があるのだから当然といえば当然だ。この神戸に昔からあったのは浅代研究所ぐらいのものだ。

なのに学園都市の中心部から離れている辺りが、怪しく見えるとか。

俗に『深度』で表される研究所における等級が５という最大値をたたき出している施設は、その研究内容はともかくとして、―成果を上げているように思えない《・・・・・・・・・・・・・・》

という特徴があったりもする。
その理由は研究成果を公表していないからだとか、目標が高すぎて技術がついていっていないからだとか言われているけれど、どっちにしてもあまりいい意味に取られていない。
まぁ、だからこその至極研究所なんだろうけど。
「ふぅ・・・」
昨日と同じように、生徒が住んでいるアパートや寮などが並んでいる道。
周りには布団やらシャツやらが干されたベランダが見え、学生らしき青年少年がチラホラ歩いている。
どうやらここら辺は男子生徒が集まっているらしい。
別にきっちりと分ける必要もないことだとは思うけど、一応思春期ということで考慮しているのだろうか？
そんな中に女1人というのは結構目立つのか、ちらちらこちらを窺う人もいる。
・・・あぁ、いや。原因は服装の方か。
今僕が着ているのは、いまだクローゼットに居座り続ける、フリフリなワンピースだ。
正直言って、気合を入れた・・・というか、おめかししているというように見えるのかもしれない。
残念ながら、これが通常なんだけどなぁ・・・。
昨日使った非常用に用意していた服、つまり昨日ビリビリの血まみれになった服は当然使えず、他のまともな服も洗濯中だったりしたため、抵抗はあったもののこの服になった。
そうは言っても結構着ているので、まぁ、結局は普段着みたいなものになってるんだけど・・・。
と、
「・・・・・？」
黙々と道路を歩いていたら、何か気になるものが目に入った。
歩き過ぎた分を逆再生のように後歩きして、固定した視線をそれ

に合わせる。
現代的な円形を描いた白い建物の門にある表札に、
『久遠未来
　宮沢荷稲』
と、書かれていた。
あの2人、同棲してるんだ。
というか本当にここに住んでいるのかな？
ガイドブック代わりの本を改めて見てみると、ちゃんと載っていた。
『久遠未来、宮沢荷稲同居住宅』。
載ってる方がおかしい気もするけれど、まぁ、この地図の詳細さの分かる例としてはいいのかもしれない。
あるいはこの2人が有名人なのか・・・。
学生住居区を抜けた先に校長と保健医は住んでいる、と。
いらない情報が1つ手に入った。
さて、ついでにもう一度目的地の位置を確認してみると、ここからはそんなに遠くなかった。
まっすぐ行ってすぐといった感じ。ここまでこれば後は一息だ。
一気に足を進める。
すると見えてきたのは、どこにでもある要塞といった風貌の高い塀。
中の様子は分からないけど、おそらく万可統一機構と似たようなものだろう。
校舎と研究室なんかが建っているはずだ。
人を拒絶した壁に沿って歩いていくと、ようやく入り口らしき門が見えた。
門番所兼入所手続き場所といった場所もある。
おそらく強化ガラス張りになっている、チケット売り場のようなその詰め所に顔を覗かせると、２０代後半ほどの男が座っていた。
体格がよいところから見てもセキュリティーとしての役目も果た

しているのではないだろうか。
向こうも僕に気づいたようで、
「お嬢ちゃん、どうしたの？」
と声をかけてきた。
こんな場所でこんな施設にやってくる人間はそこに用事がある人物だけだと思うんだけどなぁ・・・。
ん？いや、もしかして迷子だと思われてる？そこまで低年齢に見られてるの？
「御籤唯詠に会いたいんだけど」
すると彼はきょとんとして、子供を見守るような目から一転、仕事に臨む表情になった。
「すいませんが、アポイントメントがない方は・・・それにこの施設は一般人の出入りは禁止されていまして・・・」
ああ、やっぱり迷子扱いだったっぽい。
残念ながら、いくら迷子でもここで道を聞いたりはしないと思う。
「織神が会いに来ている、そういえば通じます」
むっときたので、ちょっと意地悪の意味を込めてそう返す。
すると今度こそ、彼は表情を固めた。
「お・・・織神・・・・・・・」
呟くように繰り返し、何か葛藤している仕草をみせたけど、
「唯詠は外出しています」
そう言った。
「ふぅ・・・ん・・・・・・？」
探るように彼の目を覗き込んでみる。
向こうはそれだけで自分よりも遥かに年下の少女に気圧されているのだから愉快極まりない。
数秒が経ったところで、そろそろ苛めるのはやめようと視線を外した。
さっき来た道を戻り始める。
もうここに用事もない。

予想以上に収穫があった以上、骨折り損というわけでもないし・・・。

スノーウォーターをがぶ飲みして、一息吐く。

・・・あの門番・・・・・・。

分かっているのだろうか？

『御籤唯詠に会いたい』という言葉にどういった意味が宿っているのかを。

現界把握に最も近い、ＥＳＰ究極御籤唯詠と会おうとすることにどういった現象が付属するのかを。

僕が会いに来る。

そんなこと彼女にしてみれば、それこそ”分かりきった”ことのはずだ。

戦闘における緻密な未来視ですら、読心術が使えれば完璧にこなすであろう彼女が、『僕が自分に会いに来る』という事象を読めなかったわけがない。

だから、行き違いなどは考えられない。

つまり、こうして彼女と会えなかったという事実から、次の答えが導き出せる。

御籤唯詠は僕に会う気がない。

あるいは、会える状態ではない。

その２つ以外にはあり得ない。

それに加えて門番の『外出しています』という言葉。

あれは嘘だ。

”織神”と聞いたうえで嘘を吐くことがかなりプレッシャーになったらしく、呼吸がかなり乱れていた。

あの言葉が嘘である以上、嘘を吐かなければならない理由がある以上、研究所側が何かを隠したがっている以上は、後者の可能性が高いだろう。

「・・・・・・うん」

できれば死んでることを祈ろう。

そうであってほしい。
でもなぁ、本人の姿を思い出す限りそんなつもりはなさそうだったし・・・。
いや、まぁ・・・どうでもいいか。
行き３０分帰り３０分。約束の時間まであと１時間ほどあまりそうだ。
さて、どうするか。

#

万可統一機構は曲がりに曲がってはいても教育機関としての一面を一応とはいえ仮にとはいえ持っている。
だからこそ、教室めいた部屋があったりして、そしてもちろん図書室も存在する。
自動販売機の横にあるリサイクルボックスに空のペットボトルを放り込み、新しく紙コップにジュースを貰ってきたのだけど、ここは飲食禁止だ。
もっとも、今の時間は誰もいないから別に構わないといえば構わない。
ここの規則はかなり厳しく自由時間なんて貴重すぎて図書館に使う子供は少ないんだよなぁ。
刑務所並みのタイムテーブルで溜まったストレスは大抵運動で発散するものだ。
僕もここに来たことはほんの２、３度だったし。
ここ、量はそれなりにあるとは思うのだけど、やっぱりあの資料倉庫にはほど遠い。
それに能力関連に関しての本は一般のものがほとんどないのだ。
本来小学生までは施設の外に出ることすらできないこの監獄に、逆に言えば利用するのは子供達であるはずのこの図書館に、子供向けの本を置いていないのはおかしい。

そう思ってた。
けれど、それは間違いだったことを今知ることになった。
まさに子供向けの区画を発見してしまったのだ。
『えほん・かみしばい』コーナー。
あったんだ・・・。全然気づかなかった。
そこは図書室の奥の奥の奥の奥まった場所に位置する囲まれ隠された空間。
まるで秘境だ。
難しい専門書こそ奥に追いやっておくべきでは？
岱斉は絶対一般常識とズレている。
「いや、しかし・・・」
こういた本は逆に僕にとって今まで最も遠かったジャンルと言える。
興味が湧いて、試しに一冊絵本を手に取ってみた。
『ヘンゼルとグレーテル』・・・僕が辛うじて知っている童話だ。
けれど実際、読み物として読んだことはない。
ある意味これが絵本デビューということになるのではないだろうか・・・？
ハードカバーの表紙をめくっていくと、水彩画で描かれた男の子と女の子の絵が大きく印刷されている。
一見焦点の合っていないようなぼやけた風景に、子供達。
物語の一場面一場面を切り取った、小さな□（シカク）。
なるほど・・・これが絵本ね。
こんなに見た目が綺麗なものだとは知らなかった。
それを元の場所に戻して、次の一冊を引き抜く。
『赤ずきん』、次は『桃太郎』、その次に『眠りの森の美女』。
そこからはもうその作業の繰り返しだ。
『裸の王様』、『シンデレラ』、『死神の名付け親』、『浦島太郎』、『ラプンツェル』、『親指姫』――――
これら全てまるで知らない話だった。

ペラペラと軽く流すようにして、絵と文字を複写するという真面目に読んでいるようには見えないだろう動作で、けれど僕はかなり真剣に童話を頭に入れていた。

モノを画像として記録できるという能力はこういう時あってよかったと思う。

何度でも鮮明に思い出せるおかげで、本体を持っている必要もないし、時間を短縮できる。

かなり絵本に没頭していた僕は、そして、

「・・・・・・っ！？」

見つける。

何の変哲もなく、ありふれているはずの絵本。

ただただ童話の１つとして、それ以上であるはずのない絵本。

『三匹の子豚』。

――＼＼＼”３匹の豚の兄弟”はそれぞれ家を造り――＼＼＼”狼”が吹き飛ばしていく――下の弟が”煉瓦造り”の家を建てて――

何だ、これは。

……こんなものは知らない。

知らないはずだ。

なのに何で、ＳＰＳを服用したあの日、夢に出てきた？

あの夢の骨格は間違いなく『三匹の子豚』だ。

合致点が多すぎる。

狼繋がりで赤ずきんが出てきたところまではいい。

いくら僕でも赤ずきんぐらいは知っている。

内容はともかくとして、赤ずきんは知名度が高すぎるから、話として聞いたことぐらいあった。

けれど、三匹の子豚は僕のこれまでの短い人生の中で話の話題に上がったこともなかったのだ。

題名すら、知らない。

なのに、間違いなく、その内容を僕は識っている？
”識っているのに知らない”。
矛盾だ。矛盾しすぎる。
たまたまだと処理したいところだけど、・・・・・しかし・・・
既に一度その手は使っているのだ。
それは大阪のホテルでの会話。
僕は自分で言った。
『―ワインに関しては岱斉が好きなんで覚えてた≪・・・・・・・・・・・・・・・・・・≫』。
あの男が、何で僕にワインの話をする？
あり得ない。
そんな体験があるはずはない。
これも”識っているのに知らない”、だ。
現象として再現性がある以上、何らかの原因があるということは間違いない。
右手で頭を掴む。
その奥には脳が収まっているはずだ。
頭髪を剃り、肉皮を裂き、頭蓋骨に穴を開けてまで弄られた脳味噌。
それだけではない、知識を書き加えるために何度も被った電極メット。
その上さらに、
「岱斉・・・一体何を書き込んだ・・・・・・？」

／

「部屋を飾ったりはしないのか？」
「いや、片付けメンドイし、そういうのは毎年やってこなかったからいいだろう。
どっちかっていうと問題は食べ物だ。・・・・・こんなに集ま

るとは思わなかったし」
　振り向いた先のリビングには、1-Bのほとんどが来ていた。
　事前の連絡なしで、今日思いつきでメールを入れたら来るわ来るわ・・・。
　やはり学校も宿題もないとなると暇なのだろう。
　毎年2人でやってきただけあって、今回のは恐ろしくにぎやかに感じる。
　恒例の静かなものも悪くはないが、騒がしいのも楽しいものだ。
「とりあえずピザとかは頼んだけど・・・それだけじゃあなぁ」
「まぁ、朝風が布衣菜に色々買ってくるように言ったらしいから、もう少しバリエーションは増えるだろ」
　そんな会話をしながら俺と隆はしまってあった簡易机をあるだけ組み立てていっている。
　他のクラスメートは紙皿や紙コップを並べたり、やれそうなパーティーゲームを広げたりとそれぞれ動いていた。
「ケーキはいつも通りのピースのものしか用意してないけど、やっぱり大きいのにするか？」
「別にいいだろ。どうせ俺如きは知りもしない高級ケーキなんだろうからな。
　皆の分はそこら辺の洋菓子店から買えばいい」
「ん。それはもう誉に頼んでるわよ？」
「そうなんだ。じゃあ他は何だろ・・・？何か準備できてないものってある？」
「ないと思うけど・・・あっ、誉おかえり」
「あーい、結構重いんで手伝ってほしいんだけどなぁ」
　両手一杯にぶら下げたビニール袋を朝風に任せて、布衣菜は赤く跡のできた手を振る。
　それからふぃーと息を吐いた。
「さすがにリットルのジュースは荷が重いんで買ってこなかったよ。ケーキ潰れると困るしね。

だからもう一回ぐらい行かないとなんだけど、もう1人ぐらい戦力ほしいわ」
「じゃあ俺行くか」
「あ、隆ちょっと待て、軍資金渡すから」
「おい待て、多い多すぎる。お前絶対金銭感覚麻痺してるぞ！」
と、チャイムが鳴った。
細川がインターホンに出る。
何時の間にかインターホンは細川という役割ができているな。
「ピザだよー」
「お、はいはい。じゃあ隆とりあえず飲み物系と・・・ケーキもできればもっとあった方がいいと思う」
「分かった。んじゃ行くか」
「あ、それならさ――――

♪

――ピンポーン
「お、来たな。迎えに行くのは当然釧だよな。よーし、皆クラッカーは持てよ」
「リビングのドア開けたタイミングで鳴らすわよ」
少しずつ玄関から近づいてくる足音と話し声、それとは逆に息を潜めるクラスメート。
ドアの取っ手が向こう側から握られる音がして、回される。
視界を遮るその板が横に寄せられた瞬間、
――バパンッ
クラッカーの紐が引かれた。
その対象になった葉月は飛んできた紙テープを髪に垂らしながら、目を丸くしている。
「「誕生日おめでと――！！」」
そこにきてやっと自体を飲み込めた葉月だが、それでもしばらく

パチパチと目を瞬かせてから、
やんわり微笑んだ。
「ありがとう」

第２５話－　誕生日。－Ｄｅｐｔｈ：５－（後書き）

葉月葉月と何度も打鍵しているのにもかかわらず、葉月の誕生日を忘れていた彼岸です。
第２５話となっていますが、実質本編３０話目。
キリのいい数字での誕生日の話でした。
まぁ、そういいつつも誕生日というよりは別の部分が目立っていますが・・・・・・
あれですね、自分がつくづく伏線を時限爆弾とか地雷式で仕掛ける人間だと思いました。
その内誘爆しそうです。

次話なのですが、それを書く前に『夏のホラー２００９』の方を書きたいので遅れそうです。
未だエントリーするか載せるかは不明なのですが、そろそろ書き始めないと間に合いそうにないので。
かなり読む人を選ぶ感じがしているので、まだ迷っているのですが。

第２６話－　花火大会。－Ｓｕｍｍｅｒ　Ｌｉｆｅ－

その気になればクシロの住むマンションの一室ぐらい買えるのだけど、その資金が国民の血税から出ていようが全く気にしないのだけど、僕は年季の入ったアパートに住んでいる。

内装は小奇麗にされているとはいえ、部屋は狭いし贅沢を省いたような部屋を僕が購入せず借りている理由といえば、クシロが僕の身の回りを世話してくれるからだ。

万可統一機構を介して、本来日本国民が自分のために納税しているお金を湯水のように無駄遣いすることには別に何の躊躇（ためら）いもない。

生涯納税義務免除の僕に、というか労働義務免除の僕に、納税の苦というものを分かれというのも無理な話だし、少なくても僕はその対価を払ってる。だから、他人があくせく働いた税金だろうと遠慮なく使う心持ちではある。

けれど、クシロが渡してくれるお金は別だ。

あれは、ただ巡り回って手元に来る税金とは違ってクシロが僕のために出してくれたお金なのだ。

その想いには答えなければならない。

クシロに援助してもらう以上は、できる限りのことはまず自分でやらなければ僕が納得できない。

売られた喧嘩は全力で買う、借りは2倍の2乗して返す』。恩も2倍の2乗にして返す。誠実には誠実を、だ。

まぁそういうわけで、結果としてボロアパート暮らしな僕は、今日も今日とて惰眠の後起き上がった。

最近・・・こんな感じで生活が乱れまくっている。

夏休み、結局クラスの皆と色んなことをしたり行ったりしているからだろう。

この前は・・・映画を観てショッピングだったかな。

正直楽しい、けど。

・・・・・室内を見回せば最初の頃にはなかった物モノが目に付く。
ベッドの抱き枕風縫いぐるみ、美樹ちゃんが誕生日にくれた手作り（いなっちー）枕カバー、クローゼットごと新しくなっていて中には誕生日に貰った物を含めて大量の服・・・。
極力、物を所有することを避けているのに。
大切な物がどんどん増えていく。
完全にペースは崩れてる。引き、ずられている。
まずいんだけどなぁ。
そんなことを思いつつ、身なりを整えた僕はとりあえず時間を確認。
今日は前々から皆で言っていた花火大会があるのだ。
約束の時間までにはまだ余裕があるので、テレビでもつけてみる。
無難なニュースにチャンネルを切り替えて、冷蔵庫から取り出したカマンベールチーズをチビチビと齧りながら暇つぶし。ワインでも欲しい気分だ。
小さいとは言えども液晶のテレビがどこぞの議員の顔を映し出している。
世間では今、政治家の汚職問題が話題らしい。
どう考えてもその一端を担っている万可統一機構含め僕だけど、そんなニュースを見ても何とも思わないわけで。
幾らこんな末端を責めたところで、何ら意味をなしていない。
その後に、交通事故に殺人と、もはや日常になりつつある事件を消化して、１つ、目に留まるニュースが流された。
今日の夜中、とある被害者が発見されたという変わりダネのニュース。
『――――神戸市・特別指定学園都市内で倒れているところを発見された長井孝治さん３６歳は、発見当時体中におびただしい数の目ができており――――』
どう考えても能力者の仕業だ。それも医療系能力者。

体のあちこちから脳に送られる”視界”に狂って、元の視界を取り戻そうと体についた眼球を潰していたらしい。

となると、皮膚細胞を眼球にするために細胞の脱分化と形成体（オーガナイザー）を操ったのだろうけど、それがちゃんと目として機能しているということは、体の神経細胞も弄ったか。

いずれにしてもかなりの実力者ということになる。

既に皮膚としての役割を与えられた細胞をｉＰＳ細胞化させるなんて芸当は、こんにち医療現場にいる医療能力者だってそうそうできないはずだ。

そこら辺が形骸変容（メタモルフォーゼ）の価値にも関わってくるのだし・・・。

しかし、これはこれですごく参考になりそうな能力なのだけど、会いたいとは思わないタイプだ。

卓越した能力者というのは総じて厄介ごとを抱えてる。

・・・・・・。

そういえば、あの彼女はどうしているだろうか？

あれからしばらく経ったけれど、通り魔のニュースは流れていない。

元々それほど取り上げられてはいなかったけれど、実力で言えばこれの犯人と同じぐらいの技量の持ち主の能力者だった彼女。

「まぁ、生きてはいるでしょ」

それが例の男子の隣でなのか、少年院の中でなのかは別として。

ニュースは打って変わって、今度は夏休みらしいカブトムシの養殖場を特集していた。

素人個人が一攫千金を狙って風呂桶に腐葉土を敷き詰めて飼育するようなものではなく、しっかりと商売としてやっている農家の飼育場。

取材地は大阪の茨木市らしい。その理由はイマイチはっきりしないけれど、たぶん関西の身近な田舎というコンセプトを大事にしてるんだろう。

成虫になったカブトムシを搬送するまでの様子をリポートしてい

た女子アナウンサーが、あっと声を上げた。
用水路の中をしゃがみ込みながら見て、
『こんなところにイモリがいるんですね！』
とコメント。
狭く長い用水路に流れている水の中、アカハライモリが何匹も巣食っている様子をカメラが捕らえる。
カブトムシから話が離れてしまったものの、これはこれで興味をそそる風景ではある。
てっきり池にいるものとばかり思っていたけど、いるところにはそんな場所にもいるものなんだ。
一度こういうところにも行ってみたいな。
都会とは言わないものの、神戸にはそういう自然がない。
特集が終わって最後に天気予報が流れる。
神戸は一日中晴れ間が広がるとのことだった。
いや、そんな情報など聞くまでもなく、外どころか室内すら温くなった空気に満たされて息苦しいことこの上ないのだ・・・。
「・・・・・暑い・・・」
空気が歪んで見える。

つまり、打ってつけの花火日和、というわけだ。

#

「これから行くのはスポーツセンターでーす」
亜子ちゃんがそんな発表をした学園都市の駅前公園。
蝉の生殖行動が最盛期を迎えた夏の日差しは照りつけるというよりは焼きつけるような強烈さだ。
スポーツセンターなら室内プールがある。日差しを浴びずに涼めるスポットとしては最高の環境だろう。
水泳用具一式を用意してくるというのはそういうことか。

我が第一中学にはプール授業がないため、当然スクール水着なんてものは持っていない。
積極的にプールなんてものに入るつもりはなかった僕が女性用の水着など用意しているはずがなかったのだけど、この間の誕生日に一着プレゼントされたのだ。
あれは今日のことを見越して用意したのだろう。
体育祭のフリフリの件で身構えたものの、問題の水着自体は控えめなオレンジのセパレートだった。
そんな水着やらタオルやらを詰め込んだバッグを肩に提げて、亜子ちゃん始め、香魚子ちゃん、九鈴ちゃん、絵梨ちゃん、科ちゃんそして僕は学園都市近くのスポーツセンターに向かった。
この季節ではかなり混雑していそうなのだけど、そもそもここは学園都市でありプールの付属している学校はかなりの数ある。
開放されてるそれらのプールは無料であり、さらに燦々と降り注ぐ日差しを浴びながら水遊びがしたいという元気な生徒に民間人が多いため、有料の室内プールは不人気だ。
まぁ、だからこそ狙い目なのだろう。
スポーツセンターは特別指定を受けている学校の生徒なら割引で使える、言ってしまえば生徒用の運動施設で、用具を持っていなくても剣道や薙刀、弓道にアーチェリーが楽しめる面白い場所になっている。
夏休みとはいえ部活やグループの活動で運動場などの広いスペースはなかなか使えないため、こういった娯楽施設が必要になるようだ。
施設内に入るとぶわっと冷風が汗の滲んだ肌に辺り気持ちいい。
広いエントランスに備え付けられた自動販売機で天然水【かいすいろか】を買って一気に飲み干した。
「はづきん、いきなり水ですか」
プールの入場料をまとめて払いに行っていた絵梨ちゃんが帰ってきてそんなことを言うけれど、喉が渇いたのだから仕方ないのだ。

「さぁて、さっさと着替えて遊びますか！」

――ジャッバァーン！！

お約束といえばお約束であり、反則行為でもある飛び込みを看板や監察係の声を無視して行う科ちゃん。

水飛沫が跳ねてこっちまで濡れた。

「皆も早くきなよぉー」

「入る前に運動しないといけないんだよー？」

九鈴ちゃんがもっともらしいことを言ってくれるのだけど、新しい水着の値札を切るために使ったハサミをくるくる回している時点で彼女も危険人物の1人・・・いや筆頭だ。

何でプールまでそんな物を持ってきたんだというか、ここには海君がいないからすっぽ抜けたハサミの行方が予想もつかないんだけど。

・・・なんて考えてる暇があったら止めさせればいいのか。

それは香魚子ちゃんに任せるとして、準備運動を終えた僕としては心地よさそうな塩素水の中に入りたい。

「よっと」

先に科ちゃんがやった手前、控えめながら飛び込んだ。

熱の篭った体が急激に冷やされていく。

「あー、気持ちー！」

思わず叫んで、じゃぽんと水中に全身を沈めてみた。

空気を介して聞くのとはまた違った水音が聞こえる。

目を開けてみると当然というべきか染みるので、眼球を保護する仕組みを脳から引き出してみた。参考資料は魚類とか。

空気を孕んだ水中が白く濁り、その後に青く歪んだ光が底に届いているのが見えた。

あとはえらとか試してみたいんだけど、塩素の入った水でそれをやって大丈夫なのか少し不安だ。

塩素水から空気を取り込むより、酵母なんかと同じように嫌気呼吸で糖質を分解してエネルギーを得た方がいい気もする。
それならミトコンドリアや葉緑体と同様の方法で酵母でも細胞に取り込めば済む話だし。
でもなぁ、嫌気呼吸って好気呼吸に比べて効率が格段に悪いんだよねぇ。
グルコース一分子につき、高等生物御用達の好気呼吸は３８ＡＴＰ、アルコール発酵含め嫌気呼吸は２ＡＴＰ。ＡＴＰはアデノシン三リン酸の頭文字を取ったもので、いわば体内エネルギーの通貨のこと。
酸素を使わないでも呼吸自体はできるとはいえ、地球上の高等生物が尽く好気呼吸を選択しているのはそこら辺に理由があるのだろう。
・・・そうこうしている内に、僕の無呼吸にも限界がきてしまい、とりあえず水面に顔を出す。
「あー、最悪水を飲み込んで胃の中で空気だけ取り出すっていうのもありかな・・・？」
「何恐ろしいこと言ってるのよ」
「いや、水中に沈められた時の対処法を考えてたんだけどね」
それを聞いて亜子ちゃんは嫌そうな顔をした。
「遊びに来たんだからさぁ・・・」
うん。分かってるけど、せっかくの機会だし。
こうやって冷水に使ってる時点で涼むという目的は果たしたようなものな気もするし。
プールで遊ぶといっても泳ぐ以外思いつかない。
「くすっち、ボール膨らんだー？」
九鈴ちゃんの方に向くとスイカ柄のビーチボールを膨らませているところだった。
あれって砂浜でやるものじゃなかったっけ？プールサイドは狭すぎるし、やっていいとも思えない。

「水球でもやろうかなぁってね」
「・・・ルール知ってるの？」
「とりあえずチームに分かれて手でサッカー？ゴールはねぇ・・・えーともういいや両端がゴールでボールを壁につけたら１点ね」
水球って足をつけたらいけなかった気もするのだけど、その辺は多分無視なんだろうな。
３対３で２５ｍのフィールドは広すぎるし、少ないとはいえ他の利用客もいるのは考慮されているのか・・・。
そんな僕の心配を他所（よそ）に、亜子ちゃんは九鈴ちゃんからボールを受け取り、左手を突き上げた。
「よーし、行くよー？じゃぁーんけーん――――」

ボォンとスイカボールが水面を鈍く跳ねて、ぷかぷかと浮かぶ。
チーム戦だったはずの水球もどきは何時の間にかただのボール争奪戦に様変わりしていた。
元々ルールなんてものはあってないようなものだったし、当然というか自然というか、もっともな結果だけど・・・。
僕とはいえば、戦線から早々に離脱して、科ちゃんが持ってきていたイカダタイプの浮き袋の上に寝転がっている。
波にゆらゆら揺れる感覚と室内特有の響く人の笑い声。
心地よすぎる。
このまま寝てしまいそうだ。
横目で争奪戦の様子を確認すると、ボールを抱え込むようにして水中に沈んでいた科ちゃんが息の限界に達する前に水面に上がってきていた。
背中側からお腹のボールを奪おうとしていたらしい絵梨ちゃんも一緒に浮上する。
けど、
「ちょっ！絵梨！どこ触ってんの！」

「うん？手の甲は水着に触れているねぇ」
・・・あれ？
何か言っていることがおかしい。ボール云々の会話じゃない。
手の甲が水着の生地に触れている？
わざわざ手首を捻っているわけでもあるまいし、大体そんなことをしてボールを取れるだけの腕力が出るとは思えない。というかそうしてる風には見えない。
となると、手の甲が水着に触れる条件を満たすには水着の中に手を突っ込む必要があるわけだけど・・・・・ああ、あれお腹じゃなく胸に手を回してるのか。
セパレートの下の間から手を入れてるっぽい。
手の甲は水着だろうけど、手の平は直に胸を触ってるはずだ。
・・・・・お約束というか・・・やりすぎというか。
「参加しないの？」
と、近くにやってきた九鈴ちゃん。
このタイミングでそんなことを言われて参加する人物がいるとは思えないんだけど。
「セクハラ犯がいるしね」
それに人にああいう風に触れられるのは弱点なのだ。
最近は慣れてきてはいるものの、あのセクハラ行為には耐性を持ってない。
「ふふ、はづちゃんは揉みごたえがありそうだもんね」
「・・・・・・」
そういう発言はやめてほしい。
女同士だとはいえ、だからこそ・・・いや、いや僕は元男だし。
既に忘れられた感じではあるけれど、僕自身忘れかけてるけれど。
何の抵抗感もなく女子更衣室使ってたしなぁ、ついさっき。
まぁ、その辺は触れないでおこう。
「胸のサイズなんて幾らでも変えられるんだよ？」
「うわぁ、女の子を敵に回す台詞だぁ・・・」

「そもそも男に戻れるんだけど？」
「それは駄目！」
そこだけ真剣な顔の彼女。
というか、駄目らしい。
いや、僕に決定権があるはずなのだけど。
「釧君もはづちゃんが女の子の方がいいと思ってるよ」
「うーん、それはどうかなぁ。どっちでも変わらないと思うけど？」
「取りようによっては釧君の趣味を疑う必要がありそうな言葉よね・・・。
まっいっか・・・・・・そうそう、はづちゃんは最近能力技能上がった？」
「まぁ進展はしたよ。九鈴ちゃんは？」
「んー、テクニック的には全然だけど、威力上がったかなぁ？」
右手人差し指を咥えながらそう言って、左手をかざす彼女。
実践するつもりらしい。
・・・・・・・・あれ？
威力が上がった？九鈴ちゃんの能力って斬刀水圧（ウォーターカッター）じゃなかったっけ？
そうこうしている内に、能力波を視覚化することに成功した眼が水面近くに集まる力を捉えた。水中から水を汲み上げようと能力波が動いている様子も見える。
「ちょっ待った！九鈴さんストーップ！ここプール、プールだから！！斬刀水圧（ウォーターカッター）の好条件地！ホントに危ない！」
あまりの動転で”ちゃん”が”さん”に戻ってしまった。いやいやそれどころではない。
えー？と振り向く彼女。この場合は余所見をしたというべきか。
体ごと動いたせいで、腕先は今や見知らぬ利用客に照準を合わせてる。
危機回避のための行動が裏目に出るというお約束ながら、対処のしようがない法則がそこにはあるらしい。

恐るべき歩き凶器。
と、
「～～～～っ！！」
いきなり我が安息の地がひっくり返った。
何時の間にか潜って近づいていた絵梨さんが真下から襲ってきたのだ。
するりと腕がうねって下着の隙間からとんでもないところに進入してくる。
「きゃ――――！！ひゃうっあ！うっぷ、げほっ、げはごほっ・・・ひゃぁあああああ――――――！！！」

／

とあるマンションの最上階、クーラーの効いた室内にて。
花火大会の用意をする目的で数人のクラスメートが集まっていた。
「手持ち花火は結構量あるのね」
委員長の椎が箱買いした花火の中身を取り出しながら言う。
「まぁ、一応物足りなくはならないようには考えたんだ。けど、量は多くてもバリエーションが少ないだろう？」
台所で予備のライターを探しながら俺は気になっていることを指摘する。
箱買いすれば量的に問題ないだろうと思っていたのだが、考えてみれば全部同じ商品になるということをすっかり忘れていたのだ。
「打ち上げ花火なんかを聡一君に買いに行ってもらってるから、ついでに頼めばいいわよ。
それより私は飲食物の方が気になってるのよね」
「あ、やっぱり要るか・・・。夜とはいえ夏だし、飲み物ぐらいは確かに欲しいかもなぁ。
どっかにクーラーボックスあったっけ？・・・・・・いやぁ、そんなアウトドア用品はないか」

釣りが趣味なわけでもバーベキューが習慣なわけでもないし、物を冷却保存して持ち運ぶ容器なんてものなんて必要としない人生を送ってきたからな。

買いに行けばいいか。どうせまた何時か使うこともあるだろうし。

「懐中電灯の電池も切れてたんだよな・・・」

今日び電池を使う電化製品も少なくなって今やほとんどが充電式だ。いっそのことハンドル発電の懐中電灯を買った方が後々便利な気もするけど。

聡一の行っているのはたぶんホームセンターだと思うが、それなら両方ありそうなものだ。

とりあえずメールで指示しておいた。

「誉、あそこの公園て水汲めたかしら?」

「んーと、あると思うよ。公衆トイレは設置されてるはずだもん」

「バケツは今5つあるけど、これで十分なのかい?」

「楚々絽ー、私が思うにバケツよりやり終えた後の花火を捨てるゴミ袋の方が重要だと思うよーん」

最後の台詞2つは楚々絽と美樹の2人だ。彼女達には後処理について担当してもらっている。

花火というのはなんだかんだで後の残り滓の方が厄介なもので、ここを怠ると面倒なことになるのだ。

「これだけの量を一気にやったら煙がすごいだろうなぁ・・・」

「団扇でも用意するか?」

「そこまでしなくてもって気もするけどにゃー。あー、でもでもー箒はいるんじゃない?」

美樹にしては至極まともな思い付きだ。

確かに地面に落ちた燃え滓を処理するのに箒は要るだろう。

ただ、

「そんなものはここにはないなぁ・・・」

ということでさらにメールで聡一に注文する。

・・・さすがにもう店を出ている気もするけど間に合ってほしい。

「かわいそーなそーいち。パシリだパシリー」
うん。まぁ、ちょうど出てるんだし仕方ないじゃないか。
しかし・・・、今この状況。聡一が買い物に行ったことによって、部屋にいるのは俺を除いて全員女子。
親しいとはいえ、少し居心地が悪い。
他のグループとして隆達残りの男子が集まっているらしいのだが、どうしているのだろうか？

／

海、真幸そして俺。
男３人でファミリーレストランというのは悲しすぎる気もするのだが、これはこれで珍しい組み合わせだ。
「遠慮なく男子的な思春期話のできる面子ではあるよな」
海がそんなことを言う。
確かに、葉月は半分以上女だし、釧は純情で耐性がない。そういう意味では邪魔者はいないのだろうが、逆に聡一が欠けている状態とも言える。
うむ。まぁ、いい機会ではある。
「真幸、お前は結局絵梨と付き合ってんのか？」
「そういう事実はねぇ！」
即答。しかもそう返答する真幸の目には表情がない。その故意に付加された設定に振り回されてきたせいだろう。
しかしあれだ。絵梨は容姿で言えば上に入るだろうに。あー、性格は・・・言わずもがな。
「お前はどうなんだよぅ・・・美月さんとはうまくやってんの？」
「時々メールやり取りするぐらいだよ。大体、色恋関係じゃねぇぜ？」
「言っといてやるが、我が１‐Ｂで一番近いのはお前らだぞ？」
そうは言うが、俺らは本当に単なるメル友だ。

それが一番青春というならば、我がクラスは砂漠の青春を送っていることになる。
だいたい、
「葉月と釧がいるじゃないか」
1-Bにはこれでもかというほど親密な奴らがいるだろうに。
が、
「あれは・・・共依存とか共生とかそんな感じだろ。青春ではないぞ」
真幸の反論に思い直す。
・・・・・それもそうかもしれない。
割と親しいと自負している俺すら判断つかないからな、あいつらの仲は。いや、あの2人自身も距離を掴みかねているんじゃないだろうか？
「確かにな。べったべたしてんのか、さっぱりしてんのか俺もイマイチ分からんけど・・・。
そういえば知ってるか？あいつらこの夏休み旅行に行ったらしいぞ」
「んえ？え？マジか！？お泊り！！？」
「一泊したんじゃないのか？葉月の台詞のニュアンスから察するにな。釧は終始ノーコメントだったし」
その無言と気まずそうな表情が全てを語っていることを釧自身は気づいていないのな。ホントに分かりやすい奴だ。
「うわー、マジで分からんなあの2人・・・何、ワンルームで？」
「そこまでは知らねぇよ」
そもそもあまり意味のない質問だ。一部屋だったところで間違いを起こしてることはないだろうし。
「いいなー、エロいなー」
「お前にもいるだろうよ、エロい連れが」
あからさまに嫌な顔をする真幸。しかしまぁ、よくもここまで嫌がられるよな彼女も。

これで本当に絵梨がこいつのことを好きだったりしたら、それはそれで面白そうなんだが。
「じゃあ、お前はどんな奴がタイプなわけ？クラスで言うとよ」
「んーだなぁ・・・容姿なら楚々絽かな？」
まぁ、妥当。
「中身は？」
「ぅむぅ。んーんー・・・強いて言えば美樹？」
・・・・・天然系か？
「それなら九鈴も同タイプじゃねぇ？」
「待て隆！それは違う！あれは天然とかそういうレベルのものじゃねぇ！凶器だ！」
身をもって九鈴の”うっかり”を経験し続けている海が立ち上がって叫ぶ。
必死だ。ものすごく必死だ。
頼むから大声出さないでくれ。ここ、ファミレスだぞ。
「楚々絽はさぁ、あの性格がなぁ・・・」
真幸が容姿に関してはかなりストライクらしく、本当に残念そうにブツブツ言っている。。
「アレはどうも姉の影響みたいだよな。体育祭の印象を見る限り」
「慕ってそうだったしもんな。で、隆はどうなんだよ？」
「俺か？俺は椎かな。おしとやかな感じが好きだ」
「いいんちょか。あれは、おしとやか、か？んー、でも結構笑顔で怖いこと言うぞ？」
「そうか？あんまり気にならねぇーけど。・・・葉月である程度耐性があるのかもな」
葉月と椎、両者黒いとはいえ、その差は大魔王と魔女程度にはある。
大魔王葉月の近くにいれば、瘴気やら魔力やらには強くなってもおかしくはない。
「葉月ね・・・・・葉月はどうだ？」

「どうだもなにも、あいつは致死量の麻薬だぞ？服用できるのは釧ぐらいのもんだ」
「致死量か。言いえて妙だけどよ、結局俺らのクラスってまともなのいないよな？せっかくの中一の夏なのに、何もないなんてよぉ」
「少なくても高二ぐらいまでは青春の期間内だから気にすんな。つーか、中一でお前、何をお望みなんだよ」
「そりゃあ、思春期らしいことをね？」
「そうか。良かったな、真幸。お前には絵梨がぴったりだ」
「だからそれはもうやめてくれって！」
そうは言われてもな。マジでそう思ったんだからしかたないだろ。
乾いた喉を潤すというよりは、残りを処理するように注いできていた果汁メロンソーダを飲み干す。
ドリンクバーだけでここに居座るのもそろそろ限界なのだ。
さぁーて、ボーリング場にでも場所を変えるかね。

／

夕暮れの終わりが近づいてきた、濃紺と橙の空。
それなりに充実していた夏休みの終盤、最盛イベント花火大会。
学園都市から少し離れたとある公園に僕達は集まっていた。
室内プールで涼やかな一時を過ごし、生まれて初めてカラオケに行き、ボーリングをしていると聞いて隆のグループと途中合流・・・と今日一日でもかなりの量のイベントをこなしたのだけど、これからの花火が今日のメインなのだ。
ここに来る前にデパートの玩具売り場で僕達も花火を一式買ってきたので、3グループ分集めると相当な量になるんじゃないだろうか？
でも、
「やっぱりと言うか・・・クシロ達のが一番多そうだよね」
キャリーバッグに詰められた大量の花火。打ち上げ花火らしい筒

状のものも結構ある。
「まぁ、元々調達はこっちの役割だったわけだしな。
・・・・・それより絵梨がすごいへばってるけど、あれどうしたんだ？」
「・・・・・・・・・・・・天罰が下ったんだよ？」
こういう台詞は笑顔でいうのが正解だろう。
「ちょっとね、セクハラっぽいことをしたら・・・はづきんに沈められたというか・・・」
青い顔をしている絵梨ちゃん。あれから随分経つはずだけど、まだ足りないのだろうか。血中の酸素が、物理的に。
「セクハラどころじゃないよ！水着の中まで弄（まさぐ）るなんて！」
と同じ被害者の科ちゃん。
「だから、反省させるためにプールの底に沈めたんだよ。こう・・・腰に乗っかるようにして」
「反省どころか死ぬところだったよ！息止まりかけてじゃん、私！」
「人間って別に呼吸が止まってもそうすぐ死ぬわけじゃないよ。それに、短い生、半分の生で半生。反省＝半生の掛詞ってことで。読みは同じだし」
「そんな理由（しゃれ）で死にたくないわよ！」
いや、それぐらいの目に遭ってもらわないとこっちの気が納まらないし。
「だいたいなんであんなことするかなぁ・・・」
「んー、はづきんがちゃんと女の子してるかなぁと」
馬鹿やってるようで結構考えてるんだぜ、なんて嘯く彼女だけど、
「嘘だ・・・絶対嘘だ・・・それじゃあ私がされた理由がないじゃん！」
科ちゃんの言うとおりだ。
「科のは完全に趣味でだけど、はづきんのは半分半分だって」
「・・・・・・」
「いや、えーと・・・6対4、かな？」

「・・・・・・・・・」
「・・・8対2ですハイ」
「というか、私のはホント単なるセクハラよね、度の過ぎた」
「いいじゃないのよー」
「「よくない」」
もちろん声が揃ったのは僕と科ちゃんだ。
「でもはづきん、何で触られるとあそこまで過剰反応するのかねぇ？」
そんなの知らない。
だけど、彼女の手に関しては単に性的動作だったからじゃないかとも思う。
しかし・・・前々から気になってはいたのだけど、
「絵梨ちゃんは僕のことをはづきんって呼ぶけどさ、随分前に僕の名称ははづちゃんに決まったんじゃなかったっけ？」
まだ性転換して間もない頃、下着を買いに行く際に誉ちゃんからそう聞いた記憶があった。
「あー、そうだったかも。けどそれってはづきんを女っぽく・・・っていうのが目的だったんだから、『はづちゃん』に執着しなくてもよかったしさ」
・・・はづきんはどう考えても女性的名称ではないけどなぁ。
「それと、僕が皆のことをちゃん付けで呼ぶのも無理ない？結構大変なんだけど」
特に楚々紹ちゃん。かなーり無理してるんだけど。
「・・・それは別に女云々関係ないよ？単にいいんちょの趣味」
「・・・・・・椎さんの趣味・・・」
「椎”ちゃん”の趣味、よ？」
そんなタイミングで話に入ってくる椎ちゃん。
にっこり笑顔で僕を見る。有無を言わせないつもりだ。拒否権がない。
「さぁ、そろそろ花火を始めましょ」

疑問質問すらなかったことにする気らしい。

・・・ということで、今僕の手には煙玉が乗せられている。

「いや、何でいきなり煙玉?」

「だって面白そうじゃない。どうみても花火じゃないのに花火と一緒に売られてる火薬玉なんて」

デパートで見つけた時、物珍しさで購入したものなんだけど、市販されている煙玉なるものがどんなモノなのか試してみたかったのだ。

さっそく導火線に火を点けて地面に放り投げる。

火が本体に到達した始めの方はあまり変化がなく、遅れて少しずつ煙のようなものが白く出てき始めた。

シューという正しく煙を吐き出す音を出して・・・出して、それだけ。

「・・・・・。すっごい虚しい」

なるほど、これこそ煙玉。目晦ましになりそうにもない煙の少なさだ。

「普通に棒のをやろ・・・」

「それがいいな」

クシロも同意見らしい。

まぁ、誰が見てもがっかりしそうなものだったけど。

椎ちゃんの配っていた花火を1束貰い、クシロと半分こにする。

それにいっぺんに火をつけて豪快に火花を散らせてみた。

赤色の光がロケット噴射のように噴出しているけれど、一種類のせいか彩りに欠ける。

よし次は何種類かを集めてやろう。

と、聡一君の方を見ると両手に持った花火を振り回しながら走っていた。

その前を逃げる海君。追いかけられているようだ。

それに隆が参戦、ねずみ花火を聡一君の足元目掛けて放り投げる。
回転するように地面を滑る円状の花火に聡一君は立ちすくみ、代わりに何時の間にか花火に火をつけてきたらしい海君が反撃に出た。
攻守逆転。海君と隆に追われて聡一君は林の方へと逃げ込んでいく。
驚かす相手がいなくなった後も地面を回り続けるねずみ花火・・・。
いいねぇ、アレ。
初めて見たけど、煙玉と違って外れではないタイプの珍しいものみたいだ。
よし、僕もやろう。
そう思って花火置き場に足を運んでみると、思った以上の量の花火が広げてあった。
あのキャリーバッグ、随分キツキツに詰め込んでいたらしい。
その中にねずみ花火もあったのだけど、これまた山のように盛られていた。この異常な多さ、売り場のものを買い占めたのかもしれない。
その山から一掴みしてクシロの元に戻る。
「ねずみ花火だけでもまだまだあったね」
「美樹が好きらしくて、大量に買ったからな。・・・というか、そういう葉月も持って来すぎだろ！」
僕の手に握られている花火は、サヴァン的に言わせてもらうと１４個ほど。
うんまぁ、僕も気に入ったし。
さて、ではでは実際自分で火を点けてみよう。
間を空けることなく、全部一気に。
「・・・葉月？・・・・・葉月！？」
１つ１つ導火線に点火しては次々に投げていく僕を見て、クシロが何か叫んでいるけどとりあえず無視。
全部点け終わった頃合に最初つけた花火がいよいよ這い回り始め

た。
後はもう、連続して火薬に火が点いていく。
――シュボッバパッジュジュジュッ・・・シュシュシュシュシュシュシュッ
「えっ？ちょ何この大量のねずみ花火！？」
「うわっ！っと、とととと！！」
足元を過ぎる花火に浮き足立つ誉ちゃんや海君。
ほのぼのとした花火大会が一瞬にして騒がしくなり、小さい悲鳴も聞こえる。
その様子は・・・、
「ねずみというか、ここまで数が多いと大量発生したゴキブリに驚いてるみたいだよね」
「酷い表現だ・・・」
自分でやっといて・・・と呟くクシロ。
だってそう見えるんだもん。
「・・・いやそれよりもだ。間違えて置いてある花火に引火したら大惨事だから注意しような？」
「あー、そういうのは全く考えてなかった」
ん？あれ？大惨事？そういう危険なことに関して何か忘れている気がする。
・・・・・、ああ。例のアレ、だ。
「でもさ、それなら九鈴ちゃんに花火を持たせる方が危険じゃない？」
「・・・・・・」
２人して件の彼女の方へ振り向いた。
九鈴ちゃんは手に花火を持って、それを下ではなくて横に向けている。
まだ火薬に到達していないのか火を点けていないのか、火花の散っていないその花火だけど、例え引火しても大した射程距離はないはずだ。

もしも、普通の花火なら。

「ロケット花火・・・」

クシロの何でよりもよってといった呻き声。

さすがに僕でも聞いたことぐらいある有名な花火だった。その名の通り、棒状であるにも関わらず、その花火は火薬部分を発射するタイプであり、その射程距離は――――

「下！九鈴、花火を下に向けるんだ！」

そんなクシロの声に反応して半身振り返る。腕を下に下ろすことなく振り返る。

照準はばっちり。

シュバンッと綺麗な音がして、彼女の手の先から花火が放たれ、お約束のように海君の背中にヒットした。

海君は何ともないように立ち上がって、九鈴ちゃんのところへダッシュ。

2発目に点火しようとしている彼女の腕からロケット花火を取り上げた。

「九鈴っ！お前はロケット花火だけはやめろ！マジ危ねぇ！」

が、それが失策だった。

海君のいきなりの行動に驚いた彼女はもう一方の手に持っていたオイルライターを落としてしまい、その落下点には彼女が前もって持ってきていたロケット花火の束が・・・・・ある。

火が、導火線どころか本体部分に直接点いた。

地面近くとはいえ、束になったロケット花火が暴発しオレンジの線を描いて集まっていた皆の間を通り過ぎていく。

「・・・・・さすが」

もう、そんな言葉しか出てこない。

「よーし、皆離れたかぁー？」
タカが円を描くように遠巻きに囲んでいるクラスメートの中心で一応の確認を取った。
その手には花火の筒が握られている。
一通り手持ち花火を楽しんだ僕達は、ひとまずメインディッシュである打ち上げ花火の観賞に移行したのだ。
タカは筒を中心に置いてきて、
「行くぞ？」
能力で導火線に発破をかけた。
いくらかの火花が散って、ちゃんと点火される。
「・・・、・・・、・・・・・」
じれったいほどの空白時間をかけ、パンッと光が打ちあがった。
黄色い閃光が花開いて、それに続いて赤の花びらも広がる。
祭で打ち上げられる本当ものとは違って、ほんの数メートル昇っただけだけど、小さいながらもこれこそ花火だった。
うん、こういう体験は大切な思い出になる。
タカが筒1つに一発の花火を、次々に準備しては点火していく。
赤、紫、緑、白に青・・・。どんどんと色を変えていく様々な花火が打ちあがり、低い空中で散る。
「・・・と、次のは8連だぞ！」
どうやら次は連発花火らしい。
単発の花火に飽き始めていたから、ちょうどいいタイミングだ。
タカの声から数秒して、まず第一発が発射される。
淡い緑色をした花火が開いた。
・・・さらに、その反動で、打ち上げ花火の筒が倒れた。
「「・・・・・・」」
皆しての沈黙。
思ったこともおそらく同じだ。
――――『あと、7発残っている』。
何時2発目が飛び出す分からない以上、立て直すのは危険すぎる。

「逃げっ！逃げろ！！」
はっとして、タカが叫ぶ。
しかしその声に合わせて、一発目は序章とばかりに間を置いていた筒から連続して花火が真横に飛び出した。
先ほどの九鈴ちゃんの一件同様に、人に当たりかねない高さを火花が飛んで、しかも花開いていく。
「キャー！」
「あっつ！アチッ！」
「うおっ！筒がこっち向いたぁ！！」
それはまるで、無差別式の大砲だった。

その後も、残っていたねずみ花火を一気に点火させたり、ロケット花火でどこぞのお祭の如く撃ち合ったりと大騒ぎした。
というより、その２つを合わせてもはや戦争状態だった。
本来ロケット花火は人に向けてはいけないのだけど、考えてみれば体育祭であれだけ火や電気を放ち合っていたのだからなんてことはない。
ねずみ花火も火花が散ろうと火傷の危険もそれほど高くはない。
花火を武器に見立てて、追ったり追われたり、避けたり避けなかったり・・・。
まぁ、とにかく楽しんだ。
けれど、そのお祭騒ぎも花火の品切れにより終盤に入り、今は最後の線香花火に火を点けたところだ。
手持ち花火の中でも異色の、静かな切れない火花。
噴射するのではない、雷のような枝分かれした閃光が少しずつ現れ、加速するように激しくなって・・・・・・、
最期、赤い球を垂らしてしばらく、あっけなくぽとりと地面に落ちた。

「むぅ、最期の最後になんて切ない・・・」
これで、花火大会も終わりだ。

8月の下旬、夏休みの終盤。
水族館に行ってホテルに泊まった。ワインも飲んだ。
阿呆を追いかけ馬鹿と対峙した。
プールで涼んだしカラオケで歌ったしボーリングも体験して花火もやった。
たくさん、たくさん楽しんだ。
9月まで数日、もうすぐ2学期が始まるけれど、
まだ8月(はづき)は終わっていない。

第２６話－　花火大会。－Ｓｕｍｍｅｒ　Ｌｉｆｅ－（後書き）

遅くなりました。
夏ホラー小説、サイト復帰作業、その他チャレンジ精神により増えた作業を平行していたらどれもこれもうまく進まず・・・改めて自分が一点集中型だと思い知りました。

夏ホラーなんてまだ『転・結』が書けてません！
締め切りって８月初旬でしたよね、確か。
参加するかどうかは別として、とりあえず書き終えてから判断したいんですが、どうなることやら。

さて・・・、
次の話で『夏休み編』が終了し、全体的な物語としても一区切りつきます。
といっても３話分ぐらいに分けるつもりですが。
書きたい書きたいと思っていた話の１つがやっと書けますよ。

あと、サイトなのですが、復帰自体は目処が立ちました。
他の理由で必要だったついでに、独自ドメインを購入し、有料サーバーにしましたので、こんどこそ安心、だと思います。
が、ただ今改装中。
せっかくですからね。

次話は夏ホラーの後になるだろうので、また遅れそうです。

第２７話ー　泥底部隊。ーＷａｒｎｉｎｇー

学園都市の２学期は通常の学校よりも早い。

始まりが早いのだから終わりも早いというのは当然で、宿題なしでの２ヶ月ほどというのはむしろ長いくらいだ。

自主学習という習慣の身についていない生徒にとっては娯楽三昧、堕落の日々となるのは目に見えていて、夏休み最終日である今日、宿題の代わりに学校成績の命運を背負う夏期確認考査を直前にして必死に勉強を始める人物は愚か者としか言いようがない。

無論その愚か者とはタカのことで、あれほどテストがあると忠告したにも関わらず、やっていたのは英単語ぐらいという有様なのだった。

今になって数式を睨んでも意味がないだろうなぁと横目で眺めつつリラックスする僕とクシロは問題なくテストに臨めるコンディションだ。

８月３１日。

学園都市駅近くのあるカフェテリア、窓側からは程遠い店の奥、陽が当たらず空調の風は程よく当たるという特等席を陣取って、僕達お馴染みの３人組はそれぞれの休み最後の一日を過ごしていた。

『勉強場所に使わないでください』という店の貼り紙を無視しつつ数学の参考書とノートを広げているタカはやっつけ仕事のように公式をブツブツと呟いてはページをめくっていく。

そんな方法で実際問題が解けるとは到底思わないのだけど、今更できることはそれ程度が限界なのだろう。

僕といえばだらんと背もたれに体を預けて、可視光線の幅を拡げたり狭めたりしながらいつもと違った視界を楽しんでいる。

能力波の時と同じように、本来感知できないモノを拾い集める器官やそれを情報として統制するシステムに視覚化させる変換機能と幾つもの変容を駆使しなければ成功しないこの技術はかなり難易度

が高い。
形を真似るだけなら幾らでもできる形骸変容（メタモルフォーゼ）でも、やはり新しいモノを創るというのは難しいのだ。
そういうわけでその訓練中というわけである。
「タカ、数学は諦めて暗記に切り替えた方がいいよ」
前にも言った気のする言葉をかけて、パフェの奥に詰め込まれたクリームとフレークを一気に口にかき込んだ。
チョコソースが足りなくなってしまったせいで、好きではない生クリームの風味が強い・・・。
「暗記ってほとんど副教科じゃねぇーか。今回は副教科なしだったろ」
「化学と生物、国語もそうだし歴史も暗記だって」
「そんな一気に全部覚えられる脳を俺は持ってないぞ」
「一気にしなきゃいけないのは自分のせいじゃないのさ。夏休み分の成績取れないと学園祭中補習謹慎らしいよ？」
マジで？とタカが本気で引きつった顔をする。
そりゃあ学校生活の醍醐味であるお祭に参加できないなんて恐ろしすぎるし。
しかし、うん、もう遅い。
今のタカにできることは夏休み慣例の悪足掻きぐらいなものなのだ。
「諦めるというのも1つの手だよね。いっそ最後の日をエンジョイするっていうのは？」
無言で睨みを利かせてくるタカ。残念全然怖くねぇですよ。君の不良っていうキャラクターはもう霞んでしまってる。
それに、実のところ僕はタカの成績はそれほど気にしていない。
本人は忘れてしまっているようだけど、体育祭でタカはどさくさに紛れて4位にランクインしているのだ。その分の有り余るポイントが成績をカバーしてくれることは間違いなく、別に考査自体でなくてもいいんじゃなかとも思える。

言わないのはもちろんそんなことを教えてしまうと本当に勉強しないから。

学園長が『学習とは自らが欲するモノを自らの意思で手に入れることである』と言って、義務教育の教育課程を無視・・・どころか『勉強という他人に押し付けられるような知識に価値などない』と捨て置いているような学園にいる以上は、自分で学習するという心構えを身に着けてもらわないとタカはこの先やっていけないだろう。

小遣いを止められたのに今現在こうして同じことを繰り返しているタカはここでとことん苦心して懲りるべきなのだ。

「でもねぇ・・・、喉元過ぎれば熱さ忘れるっていうしなぁ」

「ん？」

「何でもないよ」

さて一方、クシロは透明の球体を右手に乗せてむぅうと唸ってる。別に占いに目覚めたとか、忘れモノをしていると球が赤くなるとかそういうことではなくて、その球は能力波耐性を持つ特殊素材でできた代物で、クシロのやっているのはれっきとした訓練だ。

体育祭のペンダントとは逆に能力波を弾く性質を持った球で、一箇所だけ空いた穴を手の平に接しさせて球の中で能力を発動させることによって、能力波を一箇所にまとめる感覚を実感させて覚えさせるものらしい。

そういう素材はまだ開発中で市販されていないのだけど、クシロはペンダントを支給してくれていたスポンサーと直接交渉してモニター契約して手に入れたとか。

能力技巧の上達が芳しくないことが相当悔しいみたいだ。

こういう積極性を学習と言う。タカには見習ってもらいたい。

「ん・・・と」

空になったパフェをテーブルの端に押しやって店員を呼ぶ。カプチーノをココアパウダーのトッピングで頼んだ。

甘いモノの後なので、ビターなモノを頼んでみようとしたものの、結局のところ甘くなってしまった気はしないでもない。

苦いのは本当に駄目なのだ。味覚が子供と言われようとも、こればっかりは好みの問題で形骸変容（メタモルフォーゼ）でも解決できまい。

そこで携帯が着信。

ポーチから取り出してみると表示されている名前は『若内鈴絽』さんだった。

体育祭以来のメル友なのだけど、今回は珍しく通話になっている。

「はぁい」

「よぉ、終着越境」

『終着越境』。

誉ちゃんが何回目かの屋上での会話で使ったその名称を彼女は何かがツボに嵌ったらしく使っている。

おおよそ人を指す言葉じゃないし、だいたい言いにくいだろうに。

「電話っていうのは珍しいですね」

思ったことをそのまま言うと、鈴絽さんはまぁ緊急だからなと少し声を低くしていった。

はぁ、と相槌を打つ。

緊張感を出すためか一息吸ってから、

「俺は今学園都市で妹とショッピング中なんだが・・・」

彼女はその内容を・・・・・あれ？

「・・・・・」

それのどこが緊急だ。ただのデートじゃないか。

ツッコミ待ち？ツッコミ待ちなの？

「ちょっと店から外見たらよ。学園都市の治安部隊（アクティブオーダー）がうろついてやがったんだ」

ごめんなさい。それ聞いてもやっぱり意味分からない。

もったいぶった言い方をしているのはよく分かるのだけど、もう少し分かりやすく言ってほしい。

「別におかしいことじゃないでしょ？常時巡回してるじゃないですか、治安部隊なんですから」

非武装の治安維持警備員とは別に、事が起きた時に迅速に対応で

きるように武装している隊員がいることぐらい誰でも知ってる事実だ。

だから彼女が言いたいことはそれとは別のところにあるだろうことは理解できるけれども・・・、

「それが、だ。治安部隊じゃねぇんだよ」

「は？」

「治安部隊、にひじょーによく似た別の何かなんだ。

本物とは何回かもめたことがあるからな。あいつらのシンボルは忘れもしねぇ・・・。

制服もマークもホントよく似てる。でも本物じゃない・・・遠くから見たら分からないだろうよ」

そこで一度台詞を区切って、彼女は改めて言う。

「一般人には治安部隊に見え、治安部隊には同系統の別組織と偽れる、不明慮なエンブレム。

都市伝説的な噂として語られる擬態部隊。

つまり――――」

・・・・・・。

なるほど、そういうことか。

「アレ、ですか」

「アレだろうな」

アレ・・・アレかぁ。

「だから、一応知らせとこうと思ったわけだ。お前の立場的にはあまり関わりたくない連中だろ」

「巻き込まれたらロクなことになりませんしね・・・」

「そういうこった。もし学園都市内にいるならとっとと出てった方がいいぜ」

「分かりました。わざわざありがとうございます」

感謝の意を述べて通話を切り、何もなかったように携帯をしまう。

小声で会話していたからおそらく2人にはその会話は聞こえていなかったはずだ。

・・・・・先日のあれに今回のアレは繋がっている可能性が高い。とするとやっぱりかなり大事になっていると見るべきだろう。
手間取っているのか諦めが悪いのかのどちらかか、あるいはその両方だとして、僕はともかくクシロやタカが巻き込まれるなんてことだけは絶対に避けたい。
きていたカプチーノをおかしくない程度に、けれど早めに飲み干してから僕は切り出す。
「ねぇ、そろそろカフェも居辛くなってきたしクシロの部屋に場所替えしない？」
「ぇえ～？まだ大丈夫だって。今の俺は移動時間すら惜しいんだよ」
ああもうっ、そういうのは今はどうでもいいんだって。
事情を話すわけにいかないのがもどかしい。
仕方ない・・・黙っておくつもりだったんだけど・・・。
「タカさぁ・・・体育祭の成績のこと忘れてるでしょ」
「はん？」
「例のあの彼女が優勝して僕が2位で鮮香さんが3位、タカはその次で4位だったじゃない。学園4位っていう成績がさ、夏休み分をカバーするに不足とでも？」
数秒視線を交し合って、無言のままさっさと参考書をしまうタカ。
なんていう切り替えの早さ・・・というかそんなに嫌いか勉強が。
やっぱり惜しいことをした・・・。タカが必死に勉強してるなんてなかなかないことなのに。
まぁしかし、そうも言ってられない。
「というわけで、せっかくの最終日を楽しもう」
「・・・それならもっと早く言ってくれよ」
「いやいや、これで少しは懲りたんじゃない？」
じとりとしたタカの視線を涼しげな顔で受けながら、さっさと喫茶店を出た。

／

今日は厄日だ。
そんなことを思いながら、伊藤清次郎（いとうせいじろう）は人中を歩いていた。
夏の日差しを浴びて巡回するには今の装備は暑すぎる。待機チームの本格的な武装に比べれば大分マシとはいえ、それでも本来警邏に使う制服に比べればかなり分厚い。
いくら臨時といっても防弾装備まで本当にいるのか、彼には疑問だった。
今回の任務の目標は特化した攻撃手段を持っていない。というより、むしろ逆の能力を持っているような非戦闘能力者であって、先刻の悪足掻きにしたところで直に触れなければ問題ないはずなのだ。
そんな相手1人に対して自分達は重装備で駆けずり回り、しかも翻弄されているらしい。
「何をやってるんだ・・・」
誰に言うでもなく呟いて、担当区域を見渡した。
夏休み終わりというだけあって生徒達で溢れたアスファルトから、蜃気楼のなりそこないがゆらゆらと上がっている。
蝉の声は束の間の休憩時間に入ったらしく聞こえてこないず、笑い声や話し声が耳に入る。
自分の格好を見て、大変だろうなと顔で言って通り過ぎる人々。
全くもって平和だ。
薄皮一枚を剥がした裏にある地獄といって相違ない酷い現実をまるで感じさせない。
その酷いお話に自分が関わっているとしても、誰も気づきはしないのだ。
見下したように周りを見る。
（コイツら、ホンット何も考えてなさそうだよな・・・）
自分の所属するこの学園都市の内部がどうなっているかなんて、まるで知らないその顔を見ているだけで苛立ちが募る。
何で自分はその中に入っていないのだろうと何度も繰り返した疑

問を自問して、それは自分が愚かでロクでもない人間だったからだという即時の自答に腹が立つ。

しかしそんなことを思ったところで自分の境遇は変わりはしないし、この平和も壊れはしない。

「全く鬱陶し――――」

再び宛て先不明の愚痴を零そうとした彼はその口を”し”の形のまま固まった。

何時の間に背後に何者かが忍び寄り、背中に何か硬いものを当ててきたのだ。

「なぁお前。このくそ暑い中、通常装備に加えて防弾具も着けさせられてるお前。

お前はさぁ、何でそんな、そんなそんなふざけた武装をさせられてると思うんだ？」

その質問は彼が答えるまでもなく、現在形で実感している通り、

「こうやって誰かさんに銃殺されないためだろ？そこんとこ分かってんのか？ぼーっとしてよ」

そう言ってうりうりとその銃口を防具越しに押し付けてくる。

ふざけたような、馬鹿にしたような、軽すぎる仕草だった。

「お、お前は誰だ・・・！？」

傍目からは正式な治安部隊（アクティブオーダー）に見えるはずの自分に向かって拳銃を突きつけるような人物に心当たりがあるわけもなく、彼は小さく叫んだ。

しかしそんな彼の心境などお構いなしに、その誰かは自分の話を続ける。

「能力者にとって能力ってのは大切な自己証明（アイデンティティー）だし、何より最も身近な武器であるが故に執着しがちだがよ、別に能力を使わなければいけないというわけじゃあない。

むしろ銃器の類は能力関係なしに戦力を増やせるという利点がある。能力開発のＳＰＳ薬より拳銃の方が手に入りやすい現代、能力者にこだわらずに仲間を増やすなら銃の方が勝手がいい。

よって、俺の組織なんかは銃の使用頻度が高い。だからお前らはその対策に対銃撃装備を着込んでるわけだよな」

得意げに解説する誰かに今度は少し声を荒げて彼は再び問う。

「お前は誰だ！」

後ろではぁ、と息を吐くのが聞こえた。

「全く。人がせっかくお前が思ってそうな疑問に答えてやってるんだ、少しは聞けよ。

・・・まぁ、そんなに俺の名前が知りたいなら教えてやるさ。

俺は、俺は俺は朝空風々（あさぞら　ふふう）だ」

「あ、さぞら・・・だと？ＲＯＳの朝空、風々っ・・・！」

「おいおいおい、疾風怒刀、風儘（ふうじん）、切り裂き将軍ってのを忘れてるぜ」

「な、なっ、お前みたいなのが今、何で！？」

「おかしなことを言う奴だな、お前。こんな機会だからこそだろ？俺はお前らの敵なんだからよ。さっき言ったじゃねぇか、故にお前らは俺らに備えてそんな防具着けてんだってな。

はっ、まぁ、まぁまぁ代わりに何でお前らが動いてるってのが分かったかって方の種明かしをしてやるとよ、俺の大ッ嫌いな親友が教えてくれたからっつうありきたりな話なわけだ、これが」

そこで彼、風々は顔をしかめた。

「俺とあいつは志しだけは似通ってるってのに、そこに至るまでの過程が正反対なんだよな。けっ、あの慈善者め、こういう時だけ俺に丸投げだぜ？酷くねぇ？

腐れ縁だが、俺はあいつほど意見の合わねぇのはいないね。んでもって俺もあいつも最終的に拳で決着をつけようっていう性質だからよ、会う度に殴り合いだ。しかも、しかもしかもあいつ馬鹿みたいに力が強いんだよな。その度に痛い目見るのは俺の方ときた！

はっ、俺はあいつほど男勝りの奴は知らないね。あぁいや、そういや別にあいつが女だって確認したわけじゃないな・・・。胸の膨らみからして女だとは思うが、偽乳の可能性もあるか。うん、そう

だ。そうに違いねぇ。あいつは男だったんだ！くそぅ騙された！」
説明が途中から完全に愚痴に移行、最後のは被害妄想だがそれにツッコんでくれる人物はいない。
「ふん。まぁいいさ。情報自体は有り難いんだ。仲間が増えることに越したことはない」
「仲間、だと・・・？」
「あぁ。お前らの追ってる標的って奴だ。そいつがどんな能力者かは知らんが、お前らが追うほどの奴を引き込めればより有利にことが運ぶだろう？」
「無理だ！・・・そ、そんなことをして何になる！？」
「は？馬鹿か、お前。そんな言葉は本気で何もできてないお前みたいなくそガキに言われる筋合いはねぇんだよ」
清次郎の顔から血の気が消えた。身体を小刻みに震わせて、風々を睨みつける。
「てめぇ・・・」
「事実だろ。お前らのその怠惰と堕落のせいでお前らよりよっぽど価値のある人間が犠牲になった？自業自得なくせして我が身恋しさに他人を落とそうなんて屑には他人にケチつける資格ねぇ」
「っぅううぉおお！！」
喧騒の中でかき消される程度の、しかし怒りに我を忘れた彼の唸り声。
振り向き様に既に手にしていた拳銃で相手を撃ち抜こうという強引な行為。
自分が防弾布を身に纏っていることを考慮しての大胆な行動。
しかし、
「まぁ、色々喋っちゃったし、胸くそ悪いし」
風々は拳銃を持った手を動かして、
「お前はここで死んどけ」
拳銃を引っ込めた。
そのまま踵を返して、歩き出す。

振り向きかけた彼の身体は腰を捻った体勢で硬直し、歯噛みしていた口をパクパクと開けて、数秒震えるようにして転倒。
「ぅ・・・うぅぐ・・・・・・ぉおお！」
弾痕などもちろんなく、血も傷も見られないにも関わらず、こうして彼は絶命した。
その理由は考えれば簡単なことだ。
風々は拳銃を持っていたが、だからといって能力がないとは言っていないし、使わないとも言っていない。
銃だろうが能力だろうが武器には違いなく、それが人を傷つけるモノである以上、相手によって使い分けるのは当然だ。
拳銃が使えないならば能力を使えばいいだけのこと。
能力を手から発する出力系能力者は多々いるが、能力波を凝縮させれるならばその出力先を問わないなどということは常識だ。そして能力波は物質をすり抜ける。
ならば、皮膚を傷つけず心臓だけを切り刻むということも不可能ではない。
物も人も切り裂く疾風、風を思うが儘に操る風神、斬物風刃（カマイタチ）の朝空風々。

「あー、こういうことすっからあいつにボコられるんだよな」
嫌そうな顔をして頭をかく。頭を振ってその思考を払った後、彼はふと気がついた。
「あ・・・、何も訊かずに殺しちまった」
それを訊くためにも背後に立って銃まで突きつけたはずなのに、結局名乗って罵ってそのまま殺してしまったのだ。
今までの行動は何だったんだと今度こそげんなりとして数秒頭を抱えた。
「・・・・・・・・・よし」
仕方がないので他の連中を探すことにする。

１人死んだことで何らかの動きを見せてくれるとありがたいのだが、それまでにはもう少し時間がかかるだろう。
敵が標的を見つけるより先にその目標を囲い込めれば最良。向こうが見つけたのを掠め取れれば上等だ。
そのためにもさっさと標的自体を知らなければならなかったのに、とんでもないミスをしてしまった。
標的さえ見つかれば彼にもそれなりの情報網がある。学園都市周辺にいるのならまず見落とすことはないが・・・。
問題は防弾武装した連中とやり合うために必要な人材の確保だろう。
能力者であることが前提で、しかも出力系の攻撃特化型。自分を含めて１０人は欲しい。
あと、奪取後の標的が潜伏する場所も確保しなければならないのだ。
これが一番面倒くさく、敵の目を欺きながら移動させるのだって能力者頼みになる。これには光反迷彩（トランスパラン）がいた方がいい。
「めんでぇなぁ・・・」
と、ぴたりとその歩みが止まった。
視線がその先にあるものに釘付けになる。
駅へと続く大通りを歩いていく３人組。中心にいる小柄の少女。
鉄色の髪をした、細い体躯の、純白のワンピースを着た形骸変容（メタモルフォーゼ）。
数年前、まだ男子だった頃に１度見（まみ）えた時、そのあまりにも生に無関心な有様に彼がつけた名称は、
「死後過動・・・ッ！」
一瞬その表情が強張ったが、再び何もなかったように再び足を進め始める。
「まさかとは思うが・・・・・・もしあいつが関わってるとすると迂闊に手は出せねぇな・・・」
携帯を取り出しメーリングリストでその旨を一気に仲間に伝えると、彼は視線を空に移した。

中途半端に手を出して、結局中途半端に引き下がることになりそうな現状で、思うことはただ1つ。

「あの男マジで無駄死にだったじゃん」

＃

普段何も感じない空気が質感を持っているように重くて熱い。

快晴が一概に良しとは言えない夏の昼時、交差する生徒と生徒、熱源と熱源による空気の撹拌に鬱陶しさ以外の何を感じればいいのか。

特に、ただでさえ焦りと苛立ちに思考を熱されている人物にとってそれは毒のような印象を与える。

つまり、織神葉月にとって、熱とは人とはそういうことだ。

無駄口を交えながら、カフェから駅まで歩いていく彼らの中で、彼女は不自然ではない程度の最速を促し、周りを絶えず確認して警戒を怠らない。

無論、よほどのことがなければ巻き込まれるなんてことはないとは分かっているが、用心に越したことはないのだ。

自分はともかくとして朽網釧や四十万隆を彼女の言う”アレ”には触れさせたくない。

いくら隆が不良を主張しようと彼が歳相応の一般人であることには違いなく、釧に関しては葉月自身が知られたくもない話だ。

だからこそ、彼女は焦っていた。

可能性としてコンマ以下のパーセンテージですら残してはおけない。そんなことは彼女が許さない。

大通りを行き来する生徒達の間をすり抜けて駅を目指す。

そう、とにかく駅に急がないといけない。

少なくても電車に乗りさえすれば、危険領域から脱出したのも同然なのだ。

釧が体育祭の市販ＤＶＤが届いたことを話題に上げ、隆がプライ

バシーはどうなっているのか問う。モザイクがかかっているという返答後、葉月が学園全体のまるで場所の違う映像をどうやって纏めたのか疑問を上げる。

そんなどうでもいいような話を氏ながら、歩き続けて最低ラインである駅までもう少し、ほんの少しの所まで来た。

数十メートルほど行って、あとは定期で改札を通り抜ければ、それで終わり。

なのに、だけど、けれども、

そういう時を狙って厄災というモノは逃亡者に魔の手を伸ばす。

人ごみの中、分岐する細い横道に動く影を葉月が捉えた時には既に遅かった。

それは灰色の制服、不明慮のエンブレム。手に拳銃を握った泥底(ヌタ)部隊(タ)。

彼女がまず彼らをその目に映したのは当然だ。

彼女が気にしていた問題の中核は彼らのことであったのだし、その彼らに何かの偶然で巻き込まれるということを警戒していたのだから。

それ故に彼らの追っている標的には注意が足りていなかった。

しかし、それも当然で、そもそもその標的の顔すら知らない彼女にとって、問題ごとの回避のためには判別のつきやすい部隊の連中を指標にする方が効率的だった。

けれど、もしその標的自体が故意に誰かを巻き込もうとしたら？

泥底(ヌタ)部隊を視界に捉えて、その次の瞬間に横を更なる影が通り過ぎたのを感知した時には、そう遅かった。

自分よりも年下だろう、少女とも呼べない幼女が確かな意思をもって隆に飛びついた。

がばりとその腰を腕で閉めるようにして、その腹に顔を埋める。

苛立ちを倍増させる暑さと肌を舐める熱気を纏う空間で、生徒達の喧騒が遠く聞こえる一瞬の錯覚の中、

「お兄ちゃん助けて！！」

幼声が酷く脳を揺さぶった。

そんな場違いなほどでき過ぎた運命的な邂逅を目の当たりにしながら、葉月は苦虫を噛み潰して飲み込んで腹を下したような顔をしている。

――――最悪だ。

第２７話－　泥底部隊。－Ｗａｒｎｉｎｇ－（後書き）

お久しぶりです。
そして物語の中では朝空風々が久しぶりに登場して来ました。
え？出てない？そんな馬鹿な。３話目に出てきますって。

しかし…ホントやっと『エキ日々。』もここまで来たか…。
本来この話は１０話ぐらいでやるはずだったんだけどなぁ。

この話を含めた今回の事件は結構ダークサイドな話になると思います。
元々葉月はあんな感じですが、いつもにも増してブラックで。
そういうところを楽しんでいただけたら幸いです。

さて、実はこの物語とは全く関係ないのですが、夏ホラーの方…
『罪扉　－Ｉｒｒｅｐｌａｃｅａｂｌｅ　ｒｅｐｌａｃｅｍｅｎｔ』
－のあとがきをこっちに書かせて頂きます。
理由は…まぁ空気を読んだということで。
本編を読んでいない人は読まない方がいいので、スルーしてくださいね。

◆◆◆

猟奇的と性倒錯の要素が混ざってはいるものの、しかしこれがホラーなのかと私自身疑問に思っています。
人を怖がらせる話＝ホラーということで外れてはいないと思うのですが、最終的に切ない話になってしまいました。
これは間違いなく要のせいで、あの子が私の思った以上にお人好しだったということが書いてみてよく分かりました。
プロット製作時、まだ名前もなかった彼女に『物語の”要”だから』と仮につけた識別記号がそのまま名前になったわけなのですが、これが偶然にもうまくいっていて、『”愛してる＝あなたが要る”の言葉だけで、生きていけると思えた少女のお話。』という小説の主題にも合った名前でした。
こういう物語でなければ主役に、物語の要になれなかったというのも皮肉なのでしょうが、けれど私はこの物語をそれほど悲観してません。
作者ですしね。
それに実のところ、この物語には幾つかの謎が残されています。
矛盾点やら触れられていない点やらに気づいたらたぶんそこ。
もし、そんな謎を見つけたら想像を膨らませていただけたら幸いです。
もしかしたら、書かれているモノとは違う別の何かを見つけられるかもしれません。
とか無責任なことを言ってますが、あまり鵜呑みにはしないでくださいね。

では・・・、
『この小説で主張したかったことはただ1つ！　要は　お人好しで
　可愛い』
などとあとがきで書こうと思ったものの空気を読んでやっぱりやめた作者の出張あとがきでした。

第２８話ー　鏡割り。ーＢａｄ　Ｋｉｎｄｓー

ズタズタ、ズタズタと何かが切り刻まれるような感覚が心臓に突き刺さる。

ギチギチ、ギチギチに身を焦がすような焦燥が肌を擦り減らす。

二の腕辺りが枯れてしまう様な脅迫に腕を抱いて、目を見開く。

ガチガチと顎が恐怖を訴える。ギュルリと眼球が逃れようと動き回る。

そんな感覚を残したまま、そんな感覚に慣れた上で、僕らは居た。

どうしようもなく、どうしようもなく、どうしようもなく当然で、

それ以外を知らない故に。

その結末は、言うまでもなく。

／

最悪。

そんな感情を心に残留させる間もない。

向かってくる泥底（ヌタ）部隊の１人がホルスターから拳銃を抜こうとしているのが見えた。

一般人が巻き込まれた時の対処法、平和的解決。そのための公式（アクティ）部隊（ブオーダー）に酷似した制服。

しかし『その子は能力違法使用によって保護命令が出ています。速やかに――――』なんて予測しきった台詞は発せられることはなく、追われる側と追う側を一目確認してタカとクシロは連中と反対方向の道へと走り出した。

そう。だから最悪。

もし巻き込まれたとしても、つい先ほどの時点で、連中の台詞を待ってそのまま幼女を引き渡せば解決だったこの問題ごとは、分か

っていたこととはいえ積極的に介入しようなんてマネをしてくれる2人のお陰で悪化したわけだ。
女の子が悪人に追われるなんていう、実際ハズレでもないそんなシチュエーションに出くわしてあの2人が引き下がるわけもない。
良くも悪くも一般人ほどには正義感と倫理観と道徳を持ったクシロとタカに見放すなんてことはできないだろう。
知恵を働かすことなく、反射的に逃げるという選択肢をとってしまうところがもう何とも言えないほどに無垢な子供そのものだ。
本当に、最悪だった。
しかし、こうして最悪最悪と罵り続けてもしょうがなく、僕も数歩遅れて2人に続く。
全体的に灰色をしたヘルメットありの本当に自衛隊が着ているような制服姿が3人ほどに増えて追ってきていた。
大通りを横切って人ごみを掻き分ける際、小さな悲鳴を纏いながら進んでくる連中を横目に、今はとにかく前方に視線を戻す。
「タカッ、できるだけジグザグに逃げて！」
3人に向かって声をかけて自分もすぐに追いついた。
クシロ達も全力疾走しているのだけど、そう易々と撒けるわけもなく角をランダムに曲がって死角を作ろうとするものの、なかなかうまくいっていない。
まるでそのまま鬼ごっこをやっているような感じだ。
まぁ、もちろんタッチは発砲で終わりはデッドエンドなのだけど。
何度目かの曲がり角を折れた辺りで、
「くそっ！何だよこの状況！やばくねぇか！？」
などとタカが言ってくれるが、それはあれか、あれなのか？ツッコミ待ちかなんかなのだろうか？
誰だ、走り出したのは。
「と、とにかく、落ち着いて事情を聞けるような所に・・・！」
「こっち行った先にあるのは学生寮地帯だけど？」
僕達は駅から北西に向かってる。連中が来た方向と逆がそうだか

らなのだけど、これはよろしくない。
「人気（ひとけ）のない方に向かってるのはまずいよ」
夏休み最終日。宿題がなかろうが、テストに備えて部屋に篭っている生徒はいるだろう。しかし、外に出ていなければその存在にあまり意味がない。
連中にとって目撃者というのは厄介な存在に違いないけれど、部屋にいる人間は外で悲鳴が聞こえたところで無関心を突き通す場合が多いし、そもそも目撃者にしても大多数であることが大前提で、少数ではお話にならないのだ。
大多数が連中に疑いをかけ、状況に異常を感じてくれなければ目撃者というのは効果を発揮しないというのに、連中はその対策に”不明慮なエンブレム”を着けている。つまり、最初から分が悪い。
それでも、今もタカに手を引かれるこの幼女が叫んだあの場所で、その騒ぎを大きくしていたなら可能性はあったのだけど・・・・・・今更遅すぎるか。
「最悪、寮の部屋にでも隠れるか？」
「やめた方がいいね。一時的にならともかく隠れきれはしないから。連中、徊視蜘蛛と監視衛星使ってくるだろうし」
「衛星！？そんなことできるのかよ！」
「曲がりなりにも治安部隊・・・ってことになってるんだよ。衛星が治安維持のために打ち上げられた以上は連中にも使う道理はある」
後を確認するすると、３人から何時の間にか５人になっていた。
しかしこれが上限だとは思えない。最悪の場合、広範囲を捜索していたとなると、時間の経過と比例して数十人単位が続々と集まってくる可能性がある。
何度も角を曲がり、向こうの照準を合わせさせないようにするけれど、こんな応急手段がいつまでも続くわけもない。
寮地帯に入ったおかげで分岐路が頻繁に見られるようになったのは助かるけれど・・・、
「こうなったからには・・・向こうも必死だろうな」

待機組とは別に応援を呼んだのは間違いないとして、その規模と到着時間が気になるところだ。
「全く厄介な連中に・・・捉まったよ」
「なぁ葉月、お前さっきからあいつらのこと知ってるみたいだが・・・」
「そりゃあ、まぁ、知識としては。連中は泥底部隊と書いてヌタって呼ばれる部隊だよ」
「ヌタ・・・？」
「ヌタっていうのはヌタウナギからきてるのですよ」
と、今まで黙っていた幼女が話に入ってきた。
タカと手を繋いで走る彼女は頭の上の方で細い髪束を左右2つ縛った髪型をしていて、後ろ髪はロングだ。
血の気のいい褐色の肌をして、中学一年生の全力に合わせているというのに呼吸の乱れは見られない。
さすがは、医療系能力者。とするとやはり、彼女は予測通りに昨日のニュースの犯人なのだろう。
幼女は続ける。
「海底に棲むウナギの一種で、鯨の死骸に群がったりしてるのを見たことないです？触ったりすると透明でヌタヌタデロデロしたゼラチンみたいな物質を出すゲテモノなのですけどね。
つまりそういう生理的に受けつけられない気持ちの悪い連中ってことです」
・・・・・というか、何だこの毒舌野郎。
ついさっきの猫かぶりな『お兄ちゃん』が既に剥がれ落ちて跡形もない気がする。
そこら辺、逃げるのに必死な2人は気づいてないみたいだけど・・・いいのかねぇ？
釈然としない気持ちを振り払い、取られてしまった説明の代わりに僕も付け加える。
「連中は公式治安部隊（アクティブオーダー）の擬似部隊で、ほら、よく似たエンブレムを

してる・・・」
「・・・へぇ・・・？」
クシロとタカは後方を確認。数秒後、納得いったと頷いた。
「遠目にはまるで判別つかねぇな」
その治安部隊にしか見えない連中から即座に逃げ出すってどういうことだ。
「・・・追いかけてる連中が何であるかぐらい確認しようよ・・・」
うわぁああ、駄目だ。2人にまで苛々してきた。
「とにかく、この毒舌幼女の言った通りのあんまり気持ちのいい連中じゃないってことは確かだね」
「あんまり？あれは最っ低な連中ですよ。ヌタヌタデロデロのネチョネチョドロドロです」
「そもそも僕あんまりあの名称好きじゃないんだけど。ヌタウナギは革製品なんかで使われてる有用生物で連中とは違うじゃない」
「じゃあ何て呼べばいいのです？」
おおぅ、まさかの質問だ。えーと、
「素直に屑でよくない？」
「それじゃあ生温いです！」
力いっぱいに否定されてしまった。
「・・・・・葉月達が連中のことが大っ嫌いなのはよく分かった」
呆れたように言ってくれるタカだけど、あんな連中を好き好む人物はいまい。
「しかし連中、まさかとは思うが拳銃撃ってこないよな？」
「何言ってるの、撃ってくるに決まってるでしょ。あまり連発とさすがに騒ぎが大きくなるからね。外すと面倒だから、確実に当てられる状況を待ってるんだよ。どこかで追い詰める気じゃない？」
「え？じゃあ今俺達やばい？」
「ごめんクシロ、叩いていい？」
危険への自覚がなさすぎだ。
もうさっきから、色々と我慢の限界がきそうなんだけど。

けど、引っ叩くのは落ち着いてからだ。
「早い内にこっちも手を打た、ない・・・・・・と」
そこでいきなり、後方の横道から駆動音をさせながら見たくもないものが躍り出てきた。
もちろん車などではない近未来型フォルムをした、ＳＦな代物。
「・・・あんなのが出てくる」
もう、なんか本当に嫌になってきた。
対応が早すぎることを考えると、最初から用意してたんだろうな、アレ。
「サワガニじゃねぇか！」
「脚足戦車まで引っ張り出してくるなんて・・・横着者ですね」
他人事な毒舌幼女だけど、そもそもは、
「君が抵抗して逃げ回るからだ」
・・・・・・。
サワガニ。もちろん脚足戦車の名前だ。
有人操縦用のポッドを背中につけているから外見はどっちかといえばヤドカリなのだけど、ヤドカリの種類なんて一般的に知られていないし、特徴付けて識別できないのでカニで統一されている。
脚足戦車はアームに取り付けられている武器が種類によって違うため、それを鋏に見立てて名前をつけているのだ。
サワガニの場合は最も小さい種類で小銃などの小型銃器しか搭載できない分、小回りが利いて機動力が抜群にある。
最小と聞いてじゃあマシな方だとか思われそうだけど、冗談じゃない。
アレの上にあるのといえば対戦車とか対脚足戦車とか対要塞とか極まって対空母とかだ。
サワガニすら対能力者、装甲車仕様のとんでもないスペックを誇ってる。
装甲を焼き切るレーザーメスに厄介な照準補助システム。特に照準システムの方は今が必要としているものだ。

見るに右鋏は捕縛網状弾用の銃に取り替えられているようだけど、左はそのまま殺傷能力のある小銃らしい。

その装備なら捕らえて殺すつもりだろうと思いつつ、そうならないように手を考える。

とりあえず角を曲がって――――、

「止まれ！止まらな・・・っかごぅ！」

と言ってくれる待ち伏せ隊員の顎下を躊躇なく殴り上げ、気絶したその彼を立ち止まるわけもいかないので、襟元を掴んでそのまま走り続ける。走りながら持っている装備を剥ぎ取ってから手を離して道路に転がした。

顎骨は砕けているだろうけど、まぁそんなのどうでもいいことだ。

「よし、武器は手に入った」

「酷いなぁ・・・」

いやいや。

「これぐらいしないと」

手に入ったのは拳銃一丁と弾倉2個に閃光弾（フラッシュバン）。

銃は見る限りダブルアクションのオートマみたいだ。装弾数は9発かな。

「それ、9ｍｍ拳銃だな。自衛隊の制式拳銃」

「公式治安部隊（アクティブオーダー）も使ってるから偽造のためにもこれ以外は携帯できないんだろうね」

などと説明してくれるクシロ達（ミリタリーマニア）。

しかし、こんな拳銃が手に入っても、正直今の状況では使いようがない。

撃ったら銃声を立てないために銃を使わないでいる連中を触発させるようなものなのだ。

それらをクシロに渡してもう1度後を振り返ると、サワガニが右鋏を突き出していた。

「お？」

捕縛網を放つつもりらしい。やっぱり照準を合わされたか。

まさしく機械的に移動する僕達に合わせてアームを微調整し続ける鋏の揺れが収まってきた。
バゴムッと空気抵抗をあからさまに受けたような発射音が響く。
「ちょっと厄介だなっ・・・と」
とは言いつつもここが狙っていた最大のチャンスだ。
網というのは非常に便利な道具で大抵のものを絡めてしまえる。
そしてそれは敵にしても同じこと。
両手で髪を一房ずつ握って千切り、スナップを利かせて投げた。
ブーメランのように回転しながら飛んでいくその柔らかくて重い髪だったモノは、空中で拡がった網を絡め取りながら網ごと逆方向へと押し返す。
それがサワガニの足に絡まったのを見届けて、クシロの腕からひったくった閃光弾を隊員1人の顔面にお見舞いする。
後に倒れる様子を見る限り、こっちは鼻骨は折れただろう。
数秒遅れで閃光が拡がった。
「早く!こっち!」
連中にとって不可欠だろう脚足戦車に障害が発生した以上、連中は一応とはいえ足止めできるはずだ。
頭の隅に追いやられていたここら周辺の地図を引っ張り出して、最適と思える場所を割り出すと率先するように3人の前に出て誘導する。
角を何度も無駄に曲がり、それでもある一点を目指す。
そこまで行けばとりあえずの休息は取れるだろう。モノを落ち着いて考える時間ぐらいは取れるだろう。
しかし、これからどうするか。どうするべきか。

#

学生寮の中に、それでもいくつか存在する場違いな建物の1つに

僕達は身を滑り込ませていた。
それこそ、まんま倉庫ですと言っているような外見と内装をしたその建物は岱斉から貰った例の本に載っていた場所だ。
まぁ、地図帳のようなものなので、掲載されている範囲内なら大抵のことは載っているのだけど、ここは特に重要地点（ベストポイント）でもある。
表のシャッターは閉まっていたものの、裏口の方は開いていた。
ドアは鍵以外で施錠できないタイプなので、この倉庫の出入り口は裏口の２つだけだ。
その２つの扉然り、サワガニがやってきたら正面シャッターにしても裏口にしても焼き切られるだろうし、篭城するには門が脆弱すぎる。
広いはずの空間を狭（せば）める大量のダンボールが整理されているのかされていないのか微妙な状態でそこら中にあるので、隠れやすそうではあるのだけどあまり意味があるとは思えない。
「私は筒蓑美恵（つつみのみえ）というです」
そんな脆すぎる隠れ家の休憩時間を利用して毒舌幼女が自己紹介を始めた。
今までそれをしなかったのはそれどころじゃない状況だったからだけど、正直僕はあんまり興味がない。
出会う前に予想していた事柄を再確認したところで、それが最悪の事態だということには変わりないんだし。
前日のニュース、医療系能力で、泥底部隊（ヌタ）に追われるぐらいなのだから至極研究所出身者とくれば、もはや答えは出たようなものだ。
「浅代研究所から華麗に隙をみて脱走・・・までよかったのですが、ちょっとヘマをやってバレちゃったのですよ」
医療系能力、浅代研究所。
健康体すら傷つけて、能力向上を目指すという。
しかし・・・ヘマをやる以前に、徊視蜘蛛が見張っているこの学園都市から気づかれずに逃げれるわけがないだろうに。
普通は気づかれても逃げ切れる策を練るものだ。この幼女、かな

り無計画だったかよっぽど切羽詰ってたのか。
「じゃあ、ヌタって連中は君を連れ戻しそうとしてるのか。あ、俺は朽網釧」
「俺は四十万隆だ。で、筒蓑ちゃんは何で逃げたんだ？」
「はい、それはですね――――」
聞くまでもなくそんな分かりきったことはこっちで言わせてもらう。
「どうせ、実験で満足いく結果が出せないで見限られたクチでしょ」
それを聞いて、彼女はむっとした顔をしたけど、無視してとっとと自己紹介も済ましてしまおう。
「僕は織神葉月だ」
「・・・！織神？あの織神です？」
「そう。万可統一機構の織神」
「・・・・・そうですか。そういう・・・いや、そんなことより、ですね。
どうするんです？こんな所で留まっていたら囲まれるだけ・・・何か策があるんですよね？」
「策・・・あるにはあるけど、どれもこれも実現困難だからあまり使いたくないんだよねぇ」
「実現困難・・・？そんな策ないに等しいじゃないですか！もうっ、無謀な人ですね」
「・・・・・・」
この毒舌幼女め。
君にだけは言われたくない。
そもそもこっちは君の無謀に付き合ってる身だ。
「私はとにかくあいつらから逃げ切らないといけないんですっ！」
その台詞に僕はほとほと呆れた。
溜め息が勝手に口を抜ける。
「逃げ切る？何を馬鹿なことを言ってるのさ。
逃亡し切れると、逃避し切れると思ってるの？逃げたところで終

わりはこない。切りがなく逃げ続けることになるだけだ。逃避は逃避でもそれは現実逃避だね」

「なっ、なんてことを言ってくれるんですか！この未熟児！」

「こらまて、そのまま幼女になんでそんな暴言吐かれなきゃならない？ん？君、鏡見たことないの？」

「いいんですー。私はいいんですー。歳相応の成長具合なんですー。他のお2人さんに比べると、どう考えても成長が遅い誰かさんとは違いますー」

「こんなもの形骸変容（メタモルフォーゼ）なら何とでもなることなんだよ」

「あら？珍しい能力ですこと。マニア受けのロリボディにはお似合いですね」

「・・・・・クシロ、タカ。僕が思うに今最も簡単で可能な策は、この毒舌幼女の手足を折るでもして連中に引き渡すことだと思うんだけど」

ぶんぶんと2人は首を振った。

その必死さから間接的に、今自分がどんな笑顔をしているのかは想像に足りる。

うふふ。あははは。僕にも我慢の限界ってものがあるんだよ？

「・・・こんな幼女を助けるのは癪だけど・・・巻き込まれた以上は僕達自身、抜け出さないといけないからね・・・」

気乗りはしないけど、本当に、しないけれど、やるしかないか。

「それで？どうするんだ？」

完全に僕任せなタカの言葉を聞いて、さらに出そうになった溜め息を飲み込む。

本当に、今の状況が分かっているのだろうか？

間違えれば殺されかねない程度には危険で、非現実の入り口の瀬戸際、そのギリギリ内側だっていうのに。

しかしまぁ、そういうのから守るのが僕の役目であるわけか。

「それじゃあ、まず・・・」

「おう」

「で？」
「クシロとタカでここから出て真っ直ぐ行って左のコンビニで買い物をしてもらう」
「「は？」」
綺麗に声を揃えた2人を無視して、買い物リストの提示に移る。
「必要なのはね・・・いい？一度しか言わないからね？
ガムテープ、カッター、ハサミ、ストッキング、ホッチキス、スポーツドリンク、おにぎり・・・はツナマヨね」
「いやいや、それはマズイだろう。何時連中が来るか分からないのに」
「そうだとしても、これから長丁場になる可能性も捨て切れないからね。時間が経つに連れて物資補給できるような余裕はなくなるよ。今しかないし、今でもギリギリ」
「それで、その後はどうするんだよ？」
「それは後で話すよ。とにかく今は時間が惜しいし物が欲しい」
手を振って2人を急かす。
2人とも納得し切ってはいないものの、僕の言うことなので従ってくれる。
倉庫の裏出口から出て行くのを見送って、改めて幼女の方へと向き直った。
さてこれで、
僕と毒舌幼女と、2人きりになった。

2人きりになった。

＃

ぐらりぐらりと上方に取り付けられた換気用の巨大プロペラが回っては、万華鏡のように影の形を変えていく。
詰まれた雑多の巨大ダンボールや鉄製ラックを背景に、模様替え

の激しい床を踏みしめる。
足を一歩、幼女へと進めた。
お互いに、お飾りは削ぐべきと言わんばかりに、人間らしさを殺ぎ落とした表情で向かい合う。
先に口を開いたのは幼女だった。
「あの2人を行かせたのは連中に捕まえさせるためですね？」
くだらない語尾も口調も捨てた台詞。
それに僕は沈黙で答えた。
「2人が捕まえられて人質にされれば、私を引き渡せる・・・？」
重ねて沈黙。
重ねて肯定。
それを受けて、彼女の今まで心内に閉じ込めてあった怒りが身を食い破っていくのが分かった。
憤怒が一気に破裂する。
「このっ卑怯者！人でなし！悪魔！悪女！
自分の体裁を守るためにわざとそうせざる負えない状況を作り出そうだなんてっ！・・・っんの極悪人っ！」
毒舌幼女にそれらしく罵声を浴びせられた。
何度吐いても吐ききれない溜め息が、肺の空気を出し切るが如く長く深く出た。
・・・まるで、分かっちゃいない。
「舐めるなよ、毒舌幼女」
切りつけるように、未だ罵詈雑言を吐いていた彼女に言葉を刻みつける。
「体裁？ふざけるな。そんなもの最初から気にしてないんだ、僕は。クシロやタカのためなら2人に嫌われたって構わない。だからそんなもの最初から計算に入れてすらいない。
問題は2人の精神面だろう？僕には、今後時間の経過と比例して行き詰まっていく状況で、最後の最後毒舌幼女を売り渡すなんて葛藤を2人にさせるつもりはないね」

そんなものは、そんな穢れて知るべきでない世界の話は全て僕の担当だ。

「だから2人が決して加害者ではなく被害者としての立場で毒舌幼女を連中に渡すというのがベストなんだよ」

今度は幼女が黙った。

「この策なら2人が捕まったとしても、それは僕のヨミ間違えが原因だと言い張れる。毒舌幼女のことは忘れろと慰めが効く。これが最もクシロにとって、タカにとってダメージの少ない方法だ」

重ねて沈黙。

「先ほどの逃走中、反撃を行ったのが僕である以上、連中に厄介だと認識されたのは僕だろう。

その僕を封じた上で、毒舌幼女を引き渡させる切り札を連中は殺すわけがないし、そもそも僕みたいな研究所の貴重なモルモットを誤って殺してしまったら連中の命が危ない。つまり連中は殺す前に僕達の素性を確認なければならないし、そうなれば僕が織神であることが判明する。

だから2人の安全はこれ以上ないほど確保されているわけだ。いいか、毒舌少女」

一旦台詞を区切って、息を吸い直す。

「これが”策”だ。君の穴だらけな無謀とは違う」

先ほどから押し黙って口から反論は出ない。

ここまで計算されてなおかつ実行に移されているということがどういう意味合いを持つのかは分かっているだろう。

だから、滞った怒りは代わりに違う形で放たれた。

「・・・さっきから人のことを毒舌幼女毒舌幼女と・・・っ！」

「へぇ、何？じゃあ、屑とでも呼べばいいの？」

「っ！お前・・・！」

「これ以上ないほどの呼び名だろう？自分の借金（ペナルティー）を支払うために他人を犠牲にする泥沼（れんちゅう）と自分のために他人を巻き添えにした毒舌幼女

とに何の違いがある？」
「わ、私には生きる権利ってものが・・・ある」
「そのために他人を巻き込む権利があるとでも？だから言ったんだ、舐めるなよ、と。
あの連中が汚い仕事をして自分の命を延ばしているその様をヌタウナギに例えて、泥と底辺を混ぜて表現するように、君のその姿だって同じようなものだ」
「そんなわけないでしょう！！連中の身滅ぼし（ペナルティー）は自業自得で！私はただの被害者です！
・・・同じじゃないっ！」
「それがどうした。結局、クシロ達を危険な目に遭わせたのには違いない。僕にしてみれば同じことだ」
全く同じことなのだ。彼女ごときに2人を危険な目に遭わされれば僕の堪忍袋なんてものは切れるどころか爆発する。
「何ですか！何なんですか！？私はまだ死にたくないんです！生きたいだけなんですよ！！」
「生きたいだけ？じゃあ逃げれば？ただただ逃げればいいだろう？
全く関係もないどこぞの長井孝治さん３６歳に医療系能力者、朝代研究所の関係者だと分かるような手口で傷害を行うなんていう下準備までして、今日タカに大声で抱きついて大通りで騒ぎを起こすことで、マスコミに騒いでもらって安全を確保しようだなんて打算的なことを考える必要はないね。
自分の目的のために他人を犠牲にしてるくせに”だけ”などと純粋な言葉使いをするな」
「悪いですか！？それぐらい生きたいんですよ！生きたいんです！死ぬなんてまっぴらです！あんな・・・あんな目に合わされるなんて絶対に嫌！」
「君はさっき生きる権利などとふざけたことを言ったけど、そもそもそんな上等なもの実験体（モルモット）にはない」
「私は実験体（モルモット）なんかじゃない！！物心ついたらあそこにいただけ！

孤児だっただけ！」

「そんなの、僕も似たようなものだ。そしてそれでも僕は実験体（モルモット）でしかないね」

ない。そんなものが、クシロ達を傷つけるのなら、そんな理由で彼女がクシロ達を巻き込むというのなら、その無価値さを知らしめるために自分だって突き落とす。

似たもの同士の僕達が鏡であるのなら、向こう側を割るためには自分をまず割ってしまえばいい。

「は・・・ははっ、だからでしょう？『見限られた』なんて曖昧な表現を使ったのは！私の台詞を遮ったのは！！」

ああ、その通り。遮って、釘を刺した。

「当たり前だ。成果が望めなくなったら解剖（バラ）して情報化（ころ）して次の実験に有効利用（フィードバック）されるなんてこと、クシロ達に知られるわけにはいかない」

幼女と僕が似たようなものである以上、その結末も同じであろうことは絶対に感づかれてはいけないのだから。

あの時、『殺される』なんて言葉を毒舌幼女に吐かれてはいけなかった。

そんな当然なことでも、特にクシロには知られてはいけなかった。

あの無垢な少年に知られてしまえば、危険に晒すことになる。それは彼自身の人生を壊してしまうから。

それだけは僕は自身にも許さない。

皆の前では、クシロの前では、僕は実験体にされている”だけ”の織神葉月でいなければならないのだ。

仮初めだろうと虚飾だろうと何でもいい。このどうしようもなくだらけた日々は守り切る。

だから、そのためには僕は降りかかる火の粉を火元ごと消し潰す覚悟がある。１００人だろうが、１０００人だろうが殺すぐらいの覚悟は。

「本当のことを言えば、僕だって別に他人を犠牲にしようがどうし

ようが構わないと思ってるさ。それがどうでもいい誰かならね。
けれど毒舌幼女はクシロ達を巻き込んだ。
それは僕が絶対に、絶対に許さない」
「・・・何で・・・何でよ！あの施設育ちっていうなら貴女だって分かってるでしょ！？
実験体（モルモット）というのがどういうことか！命がどんなに取り返しのつかないモノか！人生が！どれほど尊くあるべきか！」
「命とか人生とか、そんなものは人間らしい人間が考えることだ。
人にも命にも元より価値はないよ。誰かに求められて、望まれて、愛着を持たれてそれが価値になる。
僕にしても毒舌幼女にしても、その価値は実験体（モルモット）としてモノのでしか、ない。
・・・命や人生なんて考察は数年前にやり終えてるんだ。
僕の人生のその終着点なんて決定的に決定付けられているんだから、足掻く必要性も感じられない。
今、こうして僕が生きて動いているなんてことは単なるまぐれだ。
既に死んでいるようなものなのに、本当の終わりがまだ来ていないからただ生きてるだけ」
今という日々は、何かをやり遂げるなんてことも何かを遺すなんてことも放棄した意味なき人生の過剰部分。
故に、終着を過ぎたにも関わらず続いている『終着越境』。
故に、死んでいるにも関わらず生きている『死後過動』。
日々に散りばめられた宝石をただ鑑賞するという生き方。
元より未来なんてものはないのだから、刹那的にその時が楽しければそれでいい。
願わくは、幸せがそのまま終わりまで続きますように。
そんな姿を見て、自嘲試作品（プロトタイプ）は『馬鹿野郎の愚か者』と僕を呼称した。
しかしその自嘲試作品（プロトタイプ）でさえ、未来視のできない欠陥作品でさえ、自嘲して己が名を次世代の糧になる試作品などと呼び、その未来を

見据えていたに違いないのだ。
それと同じく、僕達のようなものの末路はとうに決定してる。
「与えられた幸せだけで十分だよ。それ以上を望むなんてことは図々しい。
終わりが来たのなら大人しく諦めればいいんだ」
普通に生まれて普通に育って普通に生活している人間に迷惑なんてものをかけるほど、僕にも毒舌幼女にも価値はないのだから。
彼らと僕達とは決定的に致命的に、違うモノなんだから。
「・・・・・・・・・・・・」
毒舌幼女は再び沈黙した。
言い返す言葉がないとか、諦めがついたとかそんなわけもなく、唇を噛み締めた顔にはありとあらゆる感情が込められていてぐるぐるとしている。
思うことがありすぎるのに、言いたいことがありすぎるのに、何も喋れない。
譲れない気持ちを抱きしめて、心を守るのに必死になっている。
幼女がくっと食いしばった顔を上げて、叫ぶ。
「私はそれでも生きたいんだ！」
これまで以上の慟哭に、倉庫が揺れる幻覚を覚える。
「笑いたい怒りたい泣きたい！好かれたい嫌われたい愛されたい憎まれたい遊びたい憧れたい疎みたい疲れたい怖がりたい恥じたい悩みたい怪我したい！」
枯れそうな喉を酷使して、まだ続ける。
「普通に普通に普通に！夢もみたい恋もしたい・・・・・誰かに抱きしめてもらいたい！」
普通でありたかった幼女の願い。
まどろみから覚めるような自我の目覚めのその先に、平凡で平和な日々を望んだ現実逃避。
だけど、人は生まれる場所を、環境を選べないから。
選びようがないその不幸だけは避けられない。

逃げよう。逃げれば。逃げ切れたなら。
そんな発想がなかった僕やあの子はズタズタでギチギチな感覚を残したまま、そんな感覚に慣れた上で、
どうしようもなく、その当然を受け入れて、それ以外の何もかもを知らない故に、
あそこに居るしかなかったけれど。
逃げていいなんて知らなかったけれど。
でも、彼女は逃げた。
夢物語を信じて、小数点以下連なるゼロの果てに微かな数字を探して、逃げてきた。
譲れない気持ちがあるから。
煮えたぎった心を以ってしてずっと走り続けてきたのだろう。
それは僕がとうに捨てたモノだ。
数年前のあの8月に捨てたモノだ。
だから僕の言葉には魂なんてものは入っていない。
そんな僕が彼女を言い伏せれると、本当は最初から思ってもいなかった。
僕個人の価値観なんて、そもそも彼女には関係ないことだなんて分かっていた。
でも、だとしても、僕にだって譲れないモノはある。
クシロ達は何があっても守りきる。
大切で大切でかけがえのないものだから、欲張りをして確率低い策に賭けるなんてことはしない。
どうしようもなく被害者な幼女を切り捨ててでも、最も高確率な手を選ぶ。
故にもしもここで彼女言い負かせて、手柔らかに連中に引き渡すことができなければ、僕は彼女の手足を引き千切ってでもそれを強行しないといけない。
四肢を切断しても医療系能力者なら断面に皮膜ぐらい張れるあろうというのもあるのだけど、そもそも面倒なことに至極(いきすぎ)研究所の能

力者は日常的な赤(コード・レッド)の無自覚的能力発現法をニュートラルに教育させられている。医療系能力者の場合それは気絶からすら早々に復帰してしまうことを意味するため、意識を奪うことが困難なのだ。

つまりここが、瀬戸際。

これ以上の境界(ライン)を超えてしまうと、クシロ達に傷をつけるどころか、まず物理的に幼女も地獄を見る。

絶対に守りきりたい、踏ん張りどころ。

譲る気持ちの微塵もない固い決意を持って彼女を睨む。

なのに、

「・・・ぁ」

思わず、そんな小さな声が口を出た。

対峙して、向き合って、目を合わせて、視線で射抜いて、視界が捉えるその姿が、

あまりにも、似ていると、思ってしまった。

幼い容姿、幼い声、幼い顔の、

そのくせ幼くなかった弱々しいあの子。

脳裏に掠める姿が重なって、重なりすぎて。

華奢な体を揺り篭のように揺らしながら、泣きそうな笑顔。

駄目だ。駄目だそれは駄目なんだ。

その先は、駄目、なんだよ。

駄目、駄目駄目駄目駄・・・目駄目駄目駄目駄目・・・・・・思い出してはいけない！

けれど、雪崩のように留まることを知らない僕の焦燥なんてお構いなしに、

彼女は口を開いた。

幼い、大人びた、稚拙な、精巧な、綺麗な、無様な、強い、弱い、優しい、怖い、温かい、哀しい、切ない笑顔で。

「ねぇ・・・、私達が生きてることに、私達の人生にに意味なんてないのかなぁ？

何で・・・・・・生まれてきちゃったんだろ？」

それはあの日、聞いたあの子の台詞。
全く幼くなかった幼女の問い。
その問いに、僕は。
息を呑んで、呑み込んで、心臓の爆音を抑えつける。
足がふらついて、立っているのすら辛い。
息も荒いが、頭の熱が思考を乱す。
「は・・・ははっ、ははは・・・・・・」
そのあまりの動揺ぶりに、自分で笑ってしまう。
なんて様なんだろう。
どんなに格好つけたところで、あの一点だけはまるで折り合いをつけられていない。
僕は無様で、無様で・・・無様で無様な人間だ。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
しばらくの沈黙の後、思い出したように言葉を紡ぎ出す。
「・・・もし、もしもクシロ達が帰って来れたなら――――その時は、君を救ってあげるよ」
完膚なきまでに、救いようのないほどに、塵屑すら残さず。

――――クシロとタカは帰ってきた。

第２８話－　鏡割り。－Ｂａｄ　Ｋｉｎｄｓ－（後書き）

計算高い女の子は好きですか？
いや、まぁ・・・冗談ですが。
中学生にしては精神年齢が高いと言われ続けていたこの小説。ついに幼女まで・・・。
サブタイトルは『悪い奴ら』。
超能力ものは大抵正義が絡んでくるのですが、『エキ日々。』はそういうお約束を無視してますよね。
今回は『毒舌ＶＳ．純黒』でした。
次回は『泥底ＶＳ．最恐』の予定。
グロッキーな戦闘シーンを書くつもりなので、脳内でモザイクをかける訓練をお勧めします。
グロテスク度は『罪扉』と同等かそれ以上なので基準にしてください（宣伝）。

そういえば、キャラ投票まだやってます。
あと、サイト復活しました。
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｈｉｇａｎ－ｎｏ－ｈａｎａ．ｎｅｔ／
事情があってイラストは下ろしましたが、一応キャラ整理のために。

第２９話－　絶命領域。－Ｇｅｎｏｃｉｄｅ－（前書き）

地獄の箱入り娘★悪魔っ子はづきんからのお願い
「この話はディスプレイから３０ｃｍ以上目を離して、心のフィルターとモザイクをかけて読んでね♪」

真面目な話、結構残酷な描写がありますので苦手な方はお気をつけください。
無理な方用に後書きにて筋書きに触れますので、一気にスクロールよろしくです。

第２９話ー　絶命領域。ーＧｅｎｏｃｉｄｅー

クシロから受け取ったビニール袋の中から飲料水を取り出して一気にあおる。
気分的にはアルコールといきたいところだけど、当然ながらそうもいかない。
あぁ、そういえばワインは美味しかったなぁ。・・・いやいや。
とにかく喉を潤して、喉の調子を整えてから僕は切り出した。
「クシロ、タカ、この後なんだけど」
「おう。で、どうするんだ？」
それに肯きで応えてポーチから取り出した例の本を開いて見せる。
まさにこういうところで使えと岱斉が言っているであろう一品だ。
「ここまで逃げて保護してもらって」
指の先にあるのは一軒の家。
確認させてからそのまま本をクシロに渡した。
「久遠、宮沢宅・・・・・？え？荷稲さん・・・達の家？」
「宮沢荷稲！？まさかあの白澤の・・・？」
白澤・・・ね。
「そんな通り名聞いたことないけど、医療系能力者の宮沢荷稲。
カイナのところなら大抵の連中は手を出せない。さっさと匿ってもらいなよ」
「い、いや確かにそんな大物なら・・・でもどうしてそんな人知ってるんですか？」
「俺らの学校の保険医だからな」
「まぁ、そういうわけでとにかくここを出たら3人でそこに一直線ね。
あとは・・・事情話せば理解するでしょ。こっちから連絡するまで2人は待機。幼女はそのまま居候（いすわ）ってればいい」
「は？いやでも・・・連中や朝代研――――」

「そっちは僕がやっとく」
賭けに負けた以上は、その面倒くさい処理は請け負うさ。
きっちり型に嵌めてやる。
それにそれは僕にしかできないことだ。
「家に入れたらゴール。だからとにかく走ってくれればいい。クシロ達がいればすぐ開けてくれるだろうしね」
「・・・なんか、大使館みたいだよな」
そりゃあ、やってることはそのまま亡命だもの。
あそこは泥沼（ヌタ）にしても、機関にしても手の出しにくい領域だから。
「ん？あれ？待て、じゃあ俺達がコンビニ行かされたのは何で？」
・・・・・・・・・・・・・・。
クシロがいらないところに気づいてくださった。
気づかなくていいのに・・・。
「んー、ちょっと幼女と話すことがあってね」
「何を？」
いや、ちょっと罵り合いを。
・・・とはもちろん言えない。
「大人の話・・・かな？」
少女（ぼく）と幼女を交互に見比べるクシロとタカ。
「へぇ・・・？」
「ま、まぁ、それは置いといて、逃げる時の算段なんだけどね」
「ちょい待ち。葉月、お前1人で残って大丈夫なのか？」
タカも聞かないでいいことを聞いてくれる。クシロが残るなんて言い出したらどうするつもりだ。
「心外だね。少なくてもタカより強いよ？それに・・・」
ちょうど横にある鉄製ロッカーに力任せの一撃を食らわす。穴を広げるように抜いて、手に掴んだ物を見せた。
「万可統一機構の箱入り愛娘を舐めちゃいけない」
Ｖｚ．６１（スコーピオン）。後継機であるＶｚ．８３などと共に未だ生産されているロングセラーな小型短機関銃。

ストックがサソリの尻尾に似た有名すぎる銃器だ。
1分間に800発ほどの銃弾を敵に打ち込め、その発射速度も変更できる優れも物で、制御性も優れコンパクトと大人気な商品である。
「銃といえばやっぱりこれだよね」
「・・・なんでこんなもんが倉庫にあんだよ。いや、てか何で知ってんだ?」
「さっき渡した本でここを見てみなよ。アイコンついてるでしょ、銃のマーク。それ、裏地図みたいなモノなんだよ。
泥底(ヌタ)みたいな連中が緊急で武器を入手しなければいけない時に備えて、学園のあちこちに隠してある1つ」
例えば今回の例で言えば、公式部隊(アクティブオーダー)に化けているために使えなかった、非制式武器を補充するといった感じになるのだろう。
「・・・どこでこんな本手に入れたんだ?」
胡散臭そうに本をつまむクシロ。
酷い反応だ。
「盗んだわけじゃないからね?クシロも知ってるあの岩男からもらったんだ」
「え、と。内海・・・だったけ?それにしたって何でこんなもの・・・」
「そりゃあ、僕が模範的で良識を持った人物だからに決まってるでしょ?」
「「・・・・・・」」
嫌な沈黙をじと目で返してくる2人。
嘘だ。絶対嘘だ、とぼそっと呟く幼女。
本当、失礼極まるよね。
「・・・・・あー、もう。そろそろ連中も来るし、段取りさっさと言うよ?」
全然やる気の出ないまま、投げやりな口調で切り出した。

快晴。
雲1つない空というのはどうしてこれほどまでも底なしに蒼いのか。
蝉の求愛が必死さを増し、この一週間後には絶えるだろう夏の終わり。
暑さがそら寒さに変わる間際には沈黙が世界を覆い尽くす。
8月31日。
それが誰にとっての不幸を呼んだかは語るまでもない。
しかし、それは魔の8月と呼ばれるに相応しい日であったことには間違いなく、魔は逸話を蘇らせるに適役過ぎる。

正式名称なんて存在しない、本来ならその必要性もない『組織』とでも『部隊』とでも呼べばよかっただけの非公式部隊に名称がついたのは、その存在がうわさ程度とはいえ明るみに出てしまったからだ。
昔彼らが作戦を遂行中に運悪く一般人に感知されたことが事の始まり。
それは両者にとって不幸の出遭いであり、部隊設立以来現在までで最多の死者を出した事件を引き起こす最悪の1日。
まだただの学生だった少年の人生を変えた、運命と呼ぶには皮肉すぎるターニングポイント。
怒り任せで物も人も切り裂いて、思うが儘に風を操れ風神よ。
疾風怒刀、風儘(ふうじん)の切り裂き将軍――――朝空風々。
そこにいた全隊員を切り殺し、微塵に切り刻んだ彼が、その後に蔑み尽くして泥底(ヌタ)部隊と名付けたのだ。
沈み来る死骸を求めて海底の泥を這い、閉じれないただ丸いだけの顎を腐肉に捻じ込み生を得るその姿に見立てて、外敵から身を守

るために分泌するヌチャヌチャとした気持ち悪い粘膜を、生にすがり付くその姿に見立てて。

断って、刻んで、断言する。まるでヌタウナギのように生理的に受け付けられないのだ、と。

蔑称、泥底部隊。

そんな彼らはついに筒蓑美恵（つつみのみえ）を含む４名の居場所を突き止めた。

監視衛星を使ったのだから当然といえば当然なのだが、その方法は思われている以上に厄介な選択である。

偽造しているとはいえ、使用記録に残るという非公式部隊としては避けたい行為を飲み込まなければいけないし、今回の件で言えば既に１度使っているだけに頻繁な使用は不自然に思われる可能性があったのだ。

しかしながら、駅を挟んで学生寮地帯の反対側に群立する施設群での丸一日のハイド・アンド・シーク終盤、痺れを切らして渋々使った時とは違い、２回目は考える余裕もなくすぐさま申請を行われた。

一般人を巻き込んだ。

しかもまんまと逃げられている。

見られたのなら始末してしまえばいいというのが彼らの主義ではあるが、その前に逃げられるというのは非常にまずい。

一般人つてに守るべき秘密が洩れるいうのは彼らにとって致命的なミスとなる。

故に彼らは迅速に場所を特定した上で、散らばっていた捜索班の面々に加えて応援を呼んだ。

支障が出た脚足（サワガニ）戦車の方も絡まった網を除去し終え、目標の潜伏先である倉庫へと向かっている。

「有限会社臼田物産第４倉庫・・・ね」

先に倉庫前にまでやってきていた１人が呟いた。

それを拾った隣の隊員が応える。

「はっ、まぁガキらしい隠れ場所だろ？しっかし、運がないっちゃ

あないがな」
　まさかここが俺達のよく使う場所だなんて思っちゃいないんだろうな、と1人目が返して苦笑。
　予想外の出来事に焦りを感じていた彼らだったが、自分達にアドバンテージがあるとみるや幾分かの余裕を取り戻したらしい。
　後から追ってきたサワガニを含む5人が到着し、改めて情報を統制する。
「あの倉庫には隠し扉の類はないし窓もない。4人がまだ倉庫の中にいるのは間違いない。既に出入り口には数名の見張りを配置してる」
「分かった。確かここの扉は正面のシャッターと後部の裏口2つだけだったな」
　この倉庫の出入り口は、丁字型の一画目を倉庫後の壁とするなら、その端と端を裏口、ハネの所がシャッターといった位置関係になっている。
　鍵でしか施錠できないその裏口同士は真っ直ぐ通り抜けられる廊下のようになっていて、丁字型そのままに廊下の中央部が倉庫への入り口になっている造りだ。
　廊下自体もそれなりに広く、ロッカーなどが置かれていて、彼らの補充武器はこのロッカーの中に隠されている。
　無論施錠されその鍵はシャッターの鍵と同じものであり、
「ああ。今シャッターの方は鍵がかかってるが俺達には鍵もある」
「よし。まず最初にシャッターを開いて連中を裏口に誘導、待ち伏せて捕獲、でいこう。
　班に分けるぞ。サワガニと6人でシャッター、裏口にそれぞれ3人ずつだ」
「1名ずつ既に見張りについてるからあと2人ずつだな。おい、野村。俺と右側の裏口行くぞ」
「じゃあ、俺と鷲羽は左に行く。発案者らしく馬場は正面からタイミングを伝えろよ」

顔を合わせて笑い合い、それぞれ自分で選んだ持ち場に移動し始める。

今彼らが持っているのは、公式部隊（アクティブオーダー）の制式武器ではない。

追跡中は一般人に見られる可能性を考慮して使えなかった装備も、標的が人目につかない屋内に隠れてくれた今では気兼ねなく使えるというものだ。

一応とはいえ、拳銃を所持していた彼らだったが、あんな拳銃は能力者相手に有効とは言いがたい。

どれほど正確に打ち込まれたとしても防がれる可能性がある銃弾がたかが9発しか装填できない代物では話にならない。

能力者を相手にするなら間髪いれず攻撃し続けれる連射性に優れた銃が欲しいところだ。

そういうわけで、彼らは医療能力者だけなら十分だとも思われていた装備を変更して大幅に火力を上げている。

隠密用にと試作された静音機関銃、殺傷片をばら撒く半円形の手榴手甲（リケンサック）、電極弾を打ち込む拳銃型の過電圧スタンガン・・・。

それらを防弾装備に装着しての臨戦である。

それぞれが持ち場に着き、馬場が3班の用意完了を改めて確認した。

「では、これより5秒後にシャッター班が突入する。裏口班は合図を待て」

続けてカウント。5、4、3、2、1・・・・・馬場が差し込んでいた鍵を回し、隙間を塞ぐようにサワガニを中心に一列で並ぶ隊員がシャッターを一気に持ち上げる。

薄暗い倉庫の中に夏の容赦ない日差しが差し込んだ。

容赦なく中の様子を曝け出す羽目になった倉庫を見回す。

「何だ・・・これは？」

しかし、そこには標的の姿はなく、それどころか見慣れた倉庫でもなかった。

鉄製ラックで整理されていたはずの工業用のダンボールがあちら

こちらに散らかされてあるのだ。
新たに積み上げられているのもあれば崩されたのもある。あるいは障害物のように遮蔽物のように組み上げられたようでもあり、それはまるで迷路だった。
「くそ。くだらない抵抗を」
気づかれないように動いてはいたとはいえ隠れている程度のことは想定していた彼らだったが、ここまで本格的な行動は予想外だ。
しかもそれが意味がないような抵抗であることが彼らを余計に苛立たせる。
「倉庫内を弄られてる。隠れ場所が分かり辛い。裏口班も入って捜索に加わってくれ。出口は閉めて見張りを」
待機していた2班に指示を出して今度は、横の隊員に言う。
「シャッターを下そう。サワガニはライトをつけてくれ」
頷き合う隊員と共にシャッターを閉めて施錠を施した。
これで標的の出入り口は裏口の2箇所だけだ。
その2つも殺傷能力の高すぎる武器を持った隊員が張っている。
逃げ場はない。
「っ！こっちもどうも様子が違うな・・・廊下にもダンボールがある」
裏口から進入を開始した隊員の状況報告。
「了解した。そっち廊下から調べていってくれ」
「おい、どうもおかしいぞ！」
「何だ？」
「ロッカ・・・」
――ゴッガン！
台詞を遮るようにいきなりの轟音が倉庫内に響いた。
「おい！どうした！！」
――ガゴンッ！
続いて2回目の音が振動が響き渡る。

それはまるで鐘の音のように、
裏口の扉を閉じて、
時間を刻み、空間を区切る。
平穏はこれにて終了。
ここからは絶対絶命――――異常領域。

＃

人が伝心不通の相手に恐怖を抱くのは、最大の武器である言葉が通じずソレの考えが分からないからだ。
人が襲撃不測の相手に恐怖を抱くのは、ソレが何時何所から来る分からずその対象が自分なのかどうかも分からないからだ。
人が正体不明の相手に恐怖を抱くのは、ソレがどのように自分に危害を加えるか分からないからだ。
人が凶暴頑丈の相手に恐怖を抱くのは、ソレが防ぎきれるか分からず殺しきれるか分からないからだ。
分からない。分からない。分からない。分からない。
圧倒的に分からな過ぎて、故に怖い。
理解不能な現象というのは人に多大な恐怖を与える。
そして、そしてそして、
人が脱出困難の場所に恐怖を抱くのは、そのあらゆる恐怖が何時まで続くのか分からないからだ。
伝心不通が、襲撃不測が、正体不明が、凶暴頑丈が、何時まで続くか分からない。
だからこそ、恐怖を題材にした物語というものには怪物とその狩場がセットとして出てくる。
それが研究所なのか水中なのか地中なのかは置いておいて、つまり恐怖にはその2つが不可欠であり、片方が欠けていては威力が半減してしまうのだ。
時間を知らせる鐘は時を区切り、出口のない箱は場所を区切る。

外界と内側を切り離し、その中に異質を内包して異界を創る。
それは結界と呼ばれる、魔術的な意味を持つ下ごしらえと同意。
呪文の1つも要らない、ただ人の精神を蝕む原始的な呪いだ。
それは実に簡単にできる結界である。
例えば今のように薄暗い倉庫を密室にしてもいいし、幾ら開けていても終わりの見えない樹海は手を加えずとも元から天然の結界になっている。
もっと言えば、親しみある家の中でも猟奇死体(アイテム)を部屋のあちこちに配置すれば手軽に異質と恐怖を発現できる。
そう。
そんな結界を張られた倉庫は異界なのだ。
ここは日常なき非日常、平穏なく悲劇を演ずる晴れ舞台。
身に馴染んだ安堵の瞬間は永遠に訪れず、ただ不安を抱きしめ恐怖を味わえ――――
・・・それにもう、哀れな子羊(ヌタ)達に任務(ゴール)達成はない。
この時点で、美恵ら3人は倉庫には居らず、安全(ゴール)地帯を目指しているのだ。
それを知らずに檻の中に入ってきた彼らはまさにただの生贄で、その運命は悲しいほどに定められている。
泥底(ヌタ)部隊と織神葉月は同じくこの倉庫の出口を塞ごうとしているが、その意味合いはまるで違う。
ただ逃がさないためにこの倉庫を密室にしようとした彼ら。
恐怖の場を整えるためにこの倉庫を異界にしようとした葉月。
しかし、そもそも葉月はどうやって鍵のない扉を塞いだか？
そんなことは実に簡単、
葉月は出口を塞ぐ見張り役ごと蹴っ飛ばし、鉄製の扉を歪めたのだ。
腹を蹴られた方は、腹越しにドアを歪めるほどの威力で以ってし

て蹴りこまれた2人は、皮膚を破き内臓を破裂させ、背骨を鉄板にめり込ませるようにして絶命した。
既に、2名が死んでいる。
密室は誰がためにある？
誰の所有物で誰を閉じ込めるものなのか。

恐ろしい2つの轟音を聞いて、咄嗟に廊下へと急ぐ隊員達。
音も立てずに正面シャッターの前に天井から降りてきた葉月は、シャッターにもたれかかりその様子を眺めながら、見もせずにシャッターの鍵穴に髪の毛を詰めて硬化させた。
これで完全に密室。彼らの出口は塞がれた。
もう逃げれない。誰も逃がさない。

＃

音のした、会話の途切れた廊下へと駆け寄った馬場の視界に映った光景は異質そのものだった。
それぞれ扉の前に立っていただろう隊員2人が対応するようにその扉に張り付いている。
何かものすごい衝撃が腹部を直撃したのは見て分かった。
何せ陥没するように腹に穴が開いていて、そこから形状の維持できなくなった内容物がボロリと露出しているのだ。
しかし、死因が判明したところで、一体そんな無茶苦茶な暴力をあの一瞬で誰が行えるというのか？
その時、ガンガンガンとノックの音が聞こえてきた。
音の質からしてそれはシャッターを叩くモノだ。
咄嗟のことで判断を誤り皆して廊下側に意識を向けすぎていたことに気づかされた彼らは一斉に今度はシャッターの方へ駆ける。
シャッター側に最も近い位置にいたサワガニのライトによってシャッターにもたれかかる人物の姿が浮かび上がった。

小柄で細身な身体を白いワンピースに包んだ少女。織神葉月。
無論それを、織神ということを、ここを突き止めることで頭が一杯だった彼らが知る由もない。
もしも朝空風々に殺された1人の存在に気づいて、何かしらの異変を感じ取っていればなどという仮定話は意味をなさない。
「やぁ」
無数の銃口を向けられながら葉月はなんでもないように口を開く。
「泥底を這いずり回る敗者の皆々様」
「・・・手を上げて頭の後ろで組め」
悠々とかまされた挑発に怒気を必死に押さえ込み馬場が常套句を喉の奥から搾り出した。
「ねぇ、ねぇ、あのさぁ。僕今すっごく不機嫌なんだよ」
「手を組んで後を向くんだ」
「クシロ達を危険な目に遭わせるところだったし、色々気づかれそうだったし、やりたくもない罵り合いもする羽目になったし・・・さ」
「・・・・・手を後頭部で組め」
「ほんっと、最悪」
「手を組めと言ってるだろぉおおがぁぁあああ!!」
噛み合わない会話に、ついに馬場がキレた。
照準を合わせていた機関銃の引き金に力が入る。
「手、ねぇ・・・」
何時銃弾が飛んでくるかもしれない状況で、葉月はやっと馬場の言葉に意識を移したようだった。
「こうすればいいのかな?」
素直に後で組んでいた両手を一度離して、頭の上にまでもってくる彼女。
しかし、その要求通りの行動に馬場達隊員は言葉を失う。
離された手の右と左にそれぞれピンと手榴弾が握られている――――。

固まる彼らを他所に手は開かれ、その危険物体は重力に引かれて下へと落下を開始する。
それは彼女の足の甲に受け止められ、そのまま前へと押し出された。
自分達に向かって空中を彷徨う爆発物は彼らにどう映るのか。
「ぁあああアッ！」
交わしても噛み合わない会話は意味を成さず、言葉による説得は拒絶された。
言葉が通じない、心が伝わらない。
それは最も有効な手段が封じられたことを意味する。
人間相手であればどんな強者にも有効な最大の武器が役に立たないという事実は自分達の行く末が分からなくなるということに繋がる。
伝心不通、最初の恐怖。
武装した自分達に対してこうも余裕で狂ったとしか思えないような挙動する彼女の考えなんて分かるはずもない。
まるで出来心の悪戯のように放たれた手榴弾が爆発する寸前、隊員たちは廊下の奥や遮蔽物になるダンボールの裏に飛び込んだ。
サワガニは元いた位置をキープして標準を合わせ続ける。
そして、爆発。
（次標的を確認したら、打ち抜く！）
サワガニの操縦者はそう決心して操縦桿を握り締めた。
が、爆発とは違う恐ろしい衝撃がコックピットを揺らしたかと思うと、凝視していたモニターにいきなりブラックアウト。
「なっ！」
手榴弾は爆発ではなく、飛沫物で敵を殺傷する武器だ。遮蔽物があれば凌げる武器であり、しっかりと対応すれば怖い武器ではない。
だからこそ、サワガニは装甲で強行的にそれを防ぎ反撃に備えていたわけだが、それは葉月にとっても同じことである。
身体の強度を上げている彼女は爆発の瞬間、体中に破片を突き刺

さるのを無視し前に出て、同様に爆発の中に身を置いていたサワガニの一眼（カメラ）を蹴り潰したのだった。
そうして無力化した後に、続けて足を踏み潰す。
ぐぎっと鉄の曲がる音がして右足の１つが歪み、それだけで自重に耐えられなくなった脚足戦車は地に伏せた。
しかしその一連の行為を爆発から身を守るために必死だった他の隊員たちは見ることもできず、その後すぐに葉月は姿を消してしまった。
「な、んて野郎だ！」
ダンボールの影から這い出た彼らが見たものはもはや使い物にならないサワガニであり、それを実行した少女はどこにもいない。
「各人、周囲を捜索しろ！見つけ次第撃ち殺せ！」
息巻いた馬場の声に、隊員たちが散らばっていく。
体育館ほどに広さがある倉庫はしかし、迷路状に遮蔽物を並べられていてそう簡単に相手を見つけられる空間ではない。
もはやトランシーバーなど意味のない彼の怒声を聞きながら、葉月は体中に突き刺さった鉄片を取り除いていた。
いくら皮膚の硬度を上げ、真皮の弾力性を増したとしても、やはり負傷は避けられない。
さて・・・、その場所からは彼らの様子がよく見える。
皆して固まっていればいいものを、都合よくもバラバラに散っていく彼らからその心情を探り出す。
まだ、自分達に有利性があると思っている、ようだ。
それに葉月は苦笑した。
確かに彼らの装備は追跡時とはまるで違う、より確実に殺傷することを目的としてのものに変えられている。
強影念力（サイコキネンシス）の見えない防壁を打破するのに、集中力が切れるまで威力の高い銃撃をただただ連射し続けるという強引な手段を採るため作られたサイレンサー一体型の機関銃は弾倉（マガジン）を使い切る頃には耐熱しすぎて使い物にならなくなる無茶苦茶な”使い捨て”の銃器だし、

釘状の飛沫物を飛ばす半円状の手榴手甲（メリケンサック）は円の切り口を握りこみ、曲線部分から１８０。に殺傷片をぶち込むという乱暴すぎる代物だ。
しかしそれでも、それらは当たるからこそ意味があり、彼女はそれを許さない。
破片は抜き終わった。
ゆるりと身体を捻って、次の獲物を選ぶ。

ごちゃごちゃとダンボールが積み上げられたり、並べられたりと障害物の多い倉庫内を江吊登実（えつりとみ）は歩いていく。
隠れる場所が幾らでもあるような迷路の中での探索は難しい。
暗視眼鏡（スターライトゴーグル）も持ってこればよかったなどと今更思うが後悔後に立たずだ。
油断なく銃の引き金に手をかけて頻繁に首を回して周りを警戒する。
裏口で殺された2人の様子から相手は身体強化の能力者だろうと当たりとつけている彼にとって、ここで最も怖いのは奇襲である。
ただでさえ敏捷性が高い相手に奇襲されれば一溜まりもないだろう。
まぁ、しかし奇襲にさえ気をつけていれば、厄介な念力能力などとは違い弾は防がれない分やりやすい相手だ。
だからこそ、まずはとにかく捕捉しなければならない。
捕捉しなければ始まらない。
と、角を曲がった先に同僚が見えた。
向こうもこちらに気づいたようで、『こちらにはいない』と首で示してきた。
同じく首を振ろうとして、
その時、いきなり彼が転んだ。
バタンと腹部を床に叩きつけるような分かりやすいこけ方をして、そのまま、

「ぁっはぁあぁ・・・？」
そのまま角の陰に引きずり込まれた。
それが足を引っ張られたことによっての出来事だと理解した江吊ははっとして走り出した。
同僚が引きずられた角の先に急ぐ。
が、しかし、曲がった先には何もない。
その向こうには長い一本道がある。角を曲がれるような時間はなかったはずだ。
「どうなっ」
ぼやこうとした瞬間、何かが上から下に視界を横切った。
ボトンという重みのある音がして床に落ちたモノ。
「・・・・・あ？」
それは、同僚の右腕。
切断面がやたら綺麗な切り離された身体の一部。
けれどそれだけでは留まらず、別の何かもボドボドと連続して彼に向かって降り注ぐ。
１つは左腕。１つは足首。１つは太腿。１つは胴体の４分の１。
１つは、１つは、１つは――――１つは生首。
そして、ドバドバと身体を濡らす大量の血液。
「ひっ、ひぃやぁぁあぁぁあああああああ！！！」
もはや正常な判断などできはしない。
血で滑りながらも元来た道を駆け戻り始める。
無様に転がりながらも這いつくばるように前へ前へ。
その後姿を追いもせず、上にいる葉月はバラバラにした隊員から奪い取った機関銃を構えた。
背中を向けて愚かに逃亡を図る登実に照準をきっちりと合わせて引き金を引く。
彼女の身体は反動にもびくりともせず、連射された銃弾全ては彼の背中へと吸い込まれて・・・、
否、弾がなくなるまで撃ち続ける気でいる彼女の凶弾は彼という

肉を細かい破片に変えていく。
マガジンが空になった銃を用なしとばかりに床へ投げ捨てて、自らも地面に降り立つ。
それとタイミングを合わしたように、銃声が止んだことによって様子を確認しにきた隊員1人が江吊が必死に向かっていた次の角から現れた。
「ッ！発見ッ！」
機関銃を葉月に向ける。
それを見て葉月は反射的に床に転がっていた機関銃を蹴り飛ばした。
「がぁあぁぁ！」
高熱を帯びた鉄が顔面に向かって飛んできて、反射的に腕で庇った彼だったが、顔だろうが腕だろうがその熱さには耐えられない。
思惑通り腕を動かした彼に葉月は太腿にホルスターで隠していたダガーナイフを投げつける。
狙っていた顔面とはズレたものの、それは勢いよく彼の首を横切り、後のダンボール壁に突き刺さった。
一瞬過ぎった首筋の熱い痛みに、最悪を想像してしまった彼は何も発せずに手を首へと持っていく。
あまりの速さに皮と肉が再び接合していた傷。それが手でまさぐったせいで開くという皮肉。
指の間から大量の血が溢れ出した。
ぱくぱくぱくと口を動かすも、言葉を成さない。
バタリと倒れて、首から血を噴出しながらバタンバタンともがく。
その行為が余計血を散らしているとしても、そうせずにはいられない命の瀬戸際なのだ。
けれどそんなことには興味のない葉月は足掻きが終わる前に背を向けて歩き出した。

自分の乗っていた脚足戦車（サワガニ）がいきなりの使用不能になるというアクシデントに見舞われて中州大智（なかすだいち）はコックピットである三角錐型のポッドから這い出た。

「くっそ、どうなって・・・」

その言葉は全て出る前に、抜け出たサワガニを目の当たりにして口が弛緩する。

特徴的な球形のカメラが内側に陥没して、右足の１つが９０。ほどに曲げ折られているサワガニ。

それをモニターが映らなくなる直前までいた少女が行ったということは理解できるが、その方法がまるで理解できない。

身体強化を使って力任せに破壊した？

確かに、できないことはない話ではあるが、そうだとすればそれは暴引大将（わかうちすずろ）レベルの能力者だということになる。

それはかなり厄介だ。

その若内鈴絽にも何度も苦汁を舐めさせられてきたことのある彼にとって、身体能力は出力系能力者より避けたい相手だ。

弾が当たればいいというが、その弾が当たらないのだから問題なのだ。

彼は窮屈なポッドに搭乗するために犠牲にした機関銃（そうび）の代わりに、９ｍｍ拳銃を手に取った。

遮蔽物の多いこのフィールドは身体強化にとってはかなり有利な場所である。

物陰から襲う。

俊敏性のある連中の常套手段だ。

と、微かな物音が耳に入ってくる。

それに反応して振り向くと、同僚である鷲羽吾郎（わしばごろう）がそこにいる。

「脅かすなっての」

「わざとじゃねぇ・・・ホラよ」

そう言って彼は背に担いでいた機関銃を中州に投げ渡した。

しかし、鷲羽は同じ銃をしっかりと腕に抱え込んでいる。

「？どうしたんだコレ」
「・・・裏口で死んだ高石のだ。廊下に落ちてた」
それを聞いて、渡された銃を改めて見る。
銃身に血痕が僅かに付着していた。
それは身体強化の能力をよく知っている彼にも異常な感覚を与える。
いつも相手にしている鈴路はどれほどの暴力を、強引を行ったとしても殺しはしなかった。
だが、今の相手は、それをやる。
殺さないように手加減された奇襲を防げずに食らってきた彼には、もしもの最悪（ばあい）が誰よりもはっきりと脳裏に浮かぶ。
「これをやったのが身体強化だとするとこの倉庫はまずいぞ。早い内出た方がいい・・・」
サワガニを壊された今は特にまずい。
「そうもいかんのが辛いところだな。標的含めあと3人はどこかに隠れてる。アレがそれを守るナイトっていうんならまず殺さないと」
騎士（ナイト）というよりアレは狂人（バーサーカー）だ。
そう言おうと思って、口を開きかけたまま彼の口は固まった。
鷲羽の様子がおかしい。
自分の方を見て、突っ立っている。
のに、何故かソレが異常だ。
何かがおかしい。
まるで、精巧な人形を前にしているような感覚。
「ぁあ」
そうだ。
瞬きも呼吸も、している気配がないのだ――――
そう思い至った瞬間、彼の身体がゴロゴロと崩れ去った。
腕だとか足だとかそういう生易しいものではなく、頭部がスライ

ドして胴が縦に横に斜めに裂け・・・・・とにかく全てが細切れだ。
バラバラではなくゴロゴロというやりすぎた切断。
それはどう考えても、身体強化の仕業ではない。
そもそも今の間に、お互いに向かっての会話中の何時にそんなことができる隙があった？
どんな予兆があったというのだ？
何時、何所から来る分からない。
そして、自分の近くの人物が殺されたということは、次の対象は自分なのかもしれないという絶望。
襲撃不測、それは第2の恐怖。
「ぅ・・・あ、うぅあぁぅううううう！」
あの暴力に加え、今の理解できない切断業。
その2つが別々の能力者によるものだという考えはこの時の彼には浮かばなかった。
シャッター前での手榴弾の一件と今回とはあまりにもやり口が似すぎている。
手段ではなくその奇襲の仕方が酷似している。
人の恐怖を弄ぶ、悪魔の所業。
分の悪い相手だという認識が、それでも甘かった。
「うぉおぉおおぉおおおおおっ！！」
つい先ほどまで会話をしていた鷲羽の肉片を踏みつけるのも構わずに中州は走る。
入り組んだ倉庫内で唯一ストレートに道が突き抜けている、シャッターから廊下までの道をただひたすら。
ここから出なければ。
この異常地帯では生存できない。
廊下に入り、そのまま角を曲がる。
そこに見えるのはドアにへばり付いた高石京二（たかいしきょうじろう）郎だ。
腹の中を晒した彼に構う余裕もなく、彼にはその先にあるドアし

か見えていない。
そこで、いきなりがくんと身体が落下する感覚。
無様に顎を打ちつけ舌を切って口内に血が滲む。
足に感じる熱さが痛さに変わる。むき出しになった血肉が酸化するように染みる。
両足が、膝から切断されていた。
どこからだとか、どうやってだとか、そういう話はどうでもいい。
とにかく今は外に出なければならない。
爪でがりがりと床を掴んで匍匐前進。
腕だけで進み、希望の扉へ。
めり込んだ死体を邪魔だとばかりに引き摺り下ろして、ドアノブを掴む。
ガチャンと捻って、力いっぱいに引く。
なのに、開かない。
鉄板が歪んでしまったドアは鍵がなくても訪問者を拒む。
あの悪魔がまず裏口の連中を始末したのかその理由がやっと分かった。
ドアの近くにいたからだ。扉を封印するついでに、そこにいたからいっぺんに潰した。
コツンと後で足音が聞こえる。
それはどう考えてもわざと鳴らした音だった。
振り向けば少女の姿をした、その能力がまるで判断つかない悪魔がそこにいる。
それはまさしく第3の恐怖。正体不明。
ガチガチガチガチ・・・・・ノブを幾ら回しても、押しても引いても開きはしない。
恐怖を増幅する密室という境界。
命の価値を侮辱し蹂躙する結界。
密室は誰がためにある？

誰の所有物で誰を閉じ込めるものなのか。

外に出ることも叶わずに、ただ先に死んだ京二郎の死体の上で足掻き続ける中州に少女の形をした何かが追いついた。

ぶちりとまず片足から踏み潰す。

次にもう一方の足を、交互に少しずつ潰しながら、上に上がっていく。

絶叫は腰を潰した辺りで途絶えた。

それでも構わずに潰して潰して、下にあった死体ごと2体分を床にこびり付かす。

「ちょっとペースが速すぎるかな・・・？」

血に濡れたスニーカーを床に擦りつけながら、呟く。

赤く染まった白いワンピースを纏った少女の反省の言葉。

楽しい時間を引き延ばす、子供じみた心理の表れ。

落し物を拾うように床に転がったモノを掴み取り、踵を返して倉庫の方へと戻っていく。

その足取りは軽く、鼻歌すら聞こえてきそうだ。

「使い潰していい玩具なんてなかなか手に入らないんだよねぇ・・・」

ここはもはや狩場（フィールド）ではない。

葉月のために用意された遊び場（プレイルーム）。

残る玩具は6人。

／

夏休み最後の休日という実に貴重な一日を、間違いなく仕事があるはずの未来共々家でのんびりだらけていたら、いきなりのインターホン。

まさかの釧と隆、さらに胡散臭いのが1名という訪問者だった。

釧から大体の事情は聞いたが、それから分かったのは彼らが嘘で守られているということだ。
美恵という幼女が2人のいないところで、葉月とのやり取りを教えてくれたことを考えるに、まぁ自分にどうしろと言ってるのかは分かる。
それを知っての感想は、うん、面倒事を押し付けられた感じ。
数日間休みなしで走り続けたらしい美恵は、疲れはピークに達したらしくソファで寝てしまったので、とりあえず私のベッドに運んだ。
空き部屋はあるが、使ってないから寝具なんて置いていない。
早い内に揃えないといけないだろうな。
部屋を出てリビングに戻ると、未来と残りの訪問者2人はビオサイドを始めていた。
「こら、何先に始めてるんだ」
1人取り残されて、ソファに沈み込む。
テーブルに置いてあったVz.61（スコーピオン）に目が留まった。
護身用にと渡されたと言っていたが、こんなものどこから持ってきたのか。
いや、そもそも、
「聞きそびれたけどよ。結局どうやってその倉庫から脱出したんだよ」
今頃、まだ3人が中にいるはずと思い込んでいる彼らがおそらく疑問にも思えないで終わるだろう事柄だ。
「え・・・と、ものすごく単純な話ですよ？」
「それでも連中の目を誤魔化したんだろ？」
「まぁ、というか、ホントに馬鹿にしたようなトリックなんですが・・・・・。
あの倉庫って出入り口が3つあって、1つは正面のシャッターあと2つが裏口で建物の後ろの方に配置されてるんです。
詳しく言えば、えー、正面シャッターから開けた長方形になって

いてそれが倉庫。そのさらに奥に廊下がついてるのかな？廊下の中央が倉庫に繋がってる感じです。

廊下の端と端が裏口なんで、裏って言っても本当に正面の反対側じゃなくて側面に扉がある構造で・・・・・・」

そこまで聞いて頭がこんがらがった。

釧も釧で頭で整理できていないまま話しているのか、どう言えばいいか分かってないようだ。

仕方ないのでソファーの引き出しからメモを取り出して、その倉庫とやらを図にしてみる。

長方形を描いて短辺の一方にシャッター・・・を斜線で表す。それと対になる辺が後の壁だから、それが廊下になるようにもう1つの壁を直線で長方形の内側に描き足して、それの真ん中が倉庫と繋がっている・・・・・・となると、倉庫自体が開けていることを除けば、出入りの経路はT字になっているのか。

「倉庫の構造は分かった。それで？」

「廊下側から建物の裏に穴を開けたんです。それを空にしたダンボールで隠して・・・その中に隠れてました。

倉庫中のダンボールを移動させてカモフラージュもして。

あとは連中が裏口から中に入ったのを見計らって外に出て正面から逃げたんです」

・・・・・なるほど。メモの図を見れば一目瞭然だ。

倉庫にある裏口2つは正面シャッターから見て、両側面の後の方にあるわけで、本当の裏である反対側の壁にあるわけではない。

となると正面から裏口に回る際に、真後ろは通らないだろう。

だからそこに穴が開いているなんて気づかない。

大体、壁に穴が空けられているなんて発想がまず思い浮かぶまい。

出口と直接繋がっている空洞のダンボールの中で釧達3人は縮こまっていればよかったわけだ。

「正面のシャッターは進入後向こうが塞ぐだろうし、裏口も閉じ込めるのなら中に入って見張るだろうな。

そうして外に誰もいなくなった頃合で堂々と逃げる・・・か」
しっかし確かに、これは人を馬鹿にしたようなトリックだ。
密室とは名ばかりで、実際は４つ目の出入り口が存在したなんて、推理小説だったらクレームものだろう。
隠し扉を怪力で作りましたなんて誰が納得するのか。
「大胆な作戦だ。リスクがないわけじゃないのにな」
「荷稲さん」
「ん？」
「葉月は今頃、何をやってるんでしょう？」
メモから興味を移したＶｚ．６１（スコーピオン）を弄る手を止めて、釧に視線を向ける。
ゲーム画面の方を向いたままでその表情は分からないが、口調から不安の念が感じ取れる。
葉月の安否の問題もあるがそれ以上に、１人残った葉月が何をしようとしているのかが気になっているようだ。
いや、というよりは、機関育ちの葉月が自分の思った以上に暗部に関わっているかもしれないことが怖いんだ。
受験の合否を前にした学生に心境は似ているのだろうが、かかっているのは葉月の身についての切実な話だ。もっと深刻か。
しかし、この子は本当に・・・疑わないのだろうか？
彼の言うその状況下で葉月のしそうなことぐらい、想像がつきそうなものだ。
葉月は殺すだろう。惨殺するだろう。殺すぐらいではやり足りないかもしれない。
彼らを危険に晒した幼女への憤りや、その美恵へ非情な仕打ちをしなければならなかった苛立ち。
そのそもそもの根源に今度こそ矛先が向けられる。
ストレスが溜まりに溜まっているはずだ。
葉月が釧にマズイことには気づかせないよう神経を酷使していることは、今の彼の台詞で分かる。

彼には不運にも観察対象にされているだけの人物だと思わせたいのだろう。それ以上はないと信じさせたいのだろう。

でなければ、彼女と彼の世界は壊れてしまう。

彼女にとっての宝物を壊すことは万死に値する行為に違いない。

まさに逆鱗だ。

それに、あの場所に連中を足止めしておくという役割も、彼女は負っている。

最も確実な足止めは、連中を皆殺しにすることだ。

ならば、生かしておく理由の方が皆無。

倉庫に閉じ込めて、1人1人嬲り殺す。

先代変容と同じく、葉月も1度キレたら手のつけられないタイプだろうし。

・・・まぁ、それはいいか。

けれど、どうしよう?

葉月は私にそこのところのフォローも要求しているようだ。

確かにこういうのは本人よりも他人が言った方が効果がある。

まさに面倒事を押し付けられた形だが、もしもここで本当のことを言ったら?

『葉月はお前が思っているほど――――』。

そういえば、彼女の守ってきたモノは壊れるが、しかし・・・・・・

・その方がむしろ状況は好転しないだろうか?

などと・・・思っていたら、釧の代わりに未来が振り向いて、こっちを見ていた。

・・・・・・。

分かってるよ。

「そうだなぁ・・・・・・暴力的な話し合いだろうと思うけどよ」

「暴力的・・・?」

「まぁ、腕を折るなり何なりして抵抗できなくして、あとは万可統一機構にでも手を回してもらうつもりだろ」

はぁ・・・と生返事をする釧。

それでも、どこか安心したようだった。
被検体とそんな協力をするような友好性があれば、大丈夫。
・・・なんていう希望的観測をしているのだろう。
全く、何て狂言だ。

万可統一機構はそんな甘い機関じゃない。

人に嘘を吐くなんて好きじゃないのに。

／

ガン、ゴン、グキ、ゴリ、ブチュ、グジュ、ガリ、ベキ、ゴガン――――。

銃弾すらが轟音を控えた倉庫の中、そんな音が響いていた。
その圧倒的破壊音は廊下の方から聞こえるのだが、そこへ駆けつける者は誰もいない。
廊下の床ごと破壊の限りを尽しているだろうその暴力の本来の対象が時折上げていた絶叫は既に途絶え、もはや生きていないことは十分なほど分かっていた。
しかし、なのにも関わらず続く破壊は、死体すらの尊厳も奪うという意思表示だ。
一体廊下で何が行われているのか。
想像はできても、実際見に行くことがどうしてもできない。
音に導かれ、廊下と通じる出入り口の前まで来た隊員達の足は動かない。
その惨状を目の当たりにした時、自分が冷静でいられる自信がないのである。
不意に、その暴力がぴたりと止んだ。
ズリズリと足で踏みにじった後、何かブツブツと呟いているのが分かる。

閉鎖された空間を乱反射するその振動は声としてはぼやけすぎて聞き取れない。
ただ、微かな足音が自分達へと向かってくるのは判断できた。
それはチャンスなのだろうか？
それともピンチなのだろうか？
分からない。どうしよう、どうしよう。
冷や汗で体中が濡れて衣服が肌に張り付く。
握り締めた機関銃の感触がグローブ越しに酷く敏感に伝わってくる。
「・・・ぅ・・・・・・うぅ」
張り詰めすぎた緊張が精神を蝕んでいく焦らすような時間の遅延。
規則正しい足音。
それが止まった。
なのに、廊下からの入り口には誰もいない。
その異常を扉なき出入り口の手前で件の少女が立ち止まったのだと考える者はおらず、むしろ既にソコにいるにも関わらず姿が見えていないと言われた方が納得できるといった雰囲気だった。
それでも彼らは唯一の出入り口から1度見たあの小柄の少女が出てくるのを凝視して待つ。
その他の行動など、取れはしないのだ。
ホラー映画を見ていて、催してもトイレにいけずに画面の中を必死に覗き込むように。
今自分達が感じている恐怖が予想よりも大したことがないのだと信じたい一身で。
だが、それを、
織神葉月は赦さない。
「ねぇ、コレいらないから返すね？」
声が、自分達の真後ろからした。

つい先ほど、前方で足音が聞こえたはずなのに、後にいるなんてことはありえないはずなのに。

けれどそれは奇しくも最初の最初の接触（コンタクト）のように。

廊下へ意識を向けている間に、何時の間にか葉月はシャッターの近く。

振り向いて、その瞬間には、一番シャッター側に近かった隊員に葉月は襲い掛かっていた。

一歩目で間合いに入り、足の着地と同時に振りかざしていたモノで頭を殴りつける。

金属のぶつかり合う嫌な音が響いて、ヘルメットを凹ました男が崩れ落ちた。

それを見た1人が戦意を喪失したのか背を向けて廊下へと走り出す。

葉月はその彼に向かってたった今頭部強打に使用した凶器を投げつけた。

首根っこに当たったのが悪かったのか、彼は前のりに倒れてびくんびくんと身体を震わすだけだ。

それを伸びる黒髪を足に絡ませ引きずって、勢いをそのままに薄暗い倉庫で唯一光を隙間から差し込ませる巨大換気扇の方へと投げる。

しかし投げられた彼は換気扇に激突する前に、その身体をスライスされた。

バスリと何の前触れもなくいきなり、積み木が崩れるように四角い肉片に変わる。

「うあああ〝あ〝ぁぁがあああああぁぁ！！」

襲撃不測、正体不明を味わって、惨状を目の当たりにした次にシャッターに近かった隊員の1人が叫び、喉を酷使しすぎたためか嗚咽を漏らしながら膝を着いた。

そこにきて、やっと気づく。

視線が下がったことによって視界にソレが入ってきたのだ。

『コレいらないから返すね？』。
そう言って白かったワンピースを赤く染めた少女が手に持っていたのは、1人の頭を殴打し1人の首元に投げつけたのは、中州大智の首。
身体を下から順に踏み潰されて、唯一立体で残った死体の残り。
ヘルメット越しに殴打した時にそうなったのか、歯と鼻が陥没している。
ソレを直視して、
「ぅうげぇえぇぐぁがぅおえ・・・！！」
彼は胃の中の物を全て吐き出す羽目になった。
そしてそんなことをしている間に、すぐ前に来ていた葉月がその頭を踏み潰す。
その光景は、数年前の学校での惨事に似ている。
苛められていた釧を完膚なきまでに助け出したあの時の再現。

まず1人を椅子の角で殴り倒して。
それに驚いて教室から逃げ去ろうとしたもう1人にその椅子を投げつけて、動かなくなったところを足を持って引きずり込む。
腰を抜かして動けなくなったり、失禁して戦意喪失しているメンバーにも容赦なしに殴打。それでも動く奴にはさらに暴力を加える。

あれと変わらぬ行為なのに、今回は死者を積み上げる。
容赦なく加減なく殴ったことは変わらないのに、あの当時と違って腕力が強くなっただけのことで。
あるいは、似ているというのなら葉月のやり口は体育祭の時に酷似しているだろう。
人の恐怖を煽るところは体育祭の遊びそのままだ。
けれど、”遊び”は”遊び”でも、その意味合いはまるで違う。
それに全体像を見れば、この惨状は小学校の時や体育祭の時よりも、むしろ、

葉月が『折り紙の８月』と呼ばれるきっかけとなった事件にこそ、似ている――――

６人の中３人が殺されてやっと、残った３人は照準をろくに合わせずに引き金を引いた。

数発は床を抉ったが、その弾痕が照準を合わせる補助となる。今度こそ凶弾が標的に向かった。

３つ分の集中砲火を彼女はたった今頭部を潰した隊員の身体を蹴り上げて防ぐ。

首のない死体の襟元を掴み、盾にして直進。十分近づいて不必要になった時点でそれを投げつけた。

辛うじてそのインモラルな攻撃を避けた隊員が再び彼女に意識を戻した時には、彼女の手に手榴手甲（メリケンサック）を握り締めているところだった。

別に相手を直接殴らなくても破片を広範囲に飛ばせるサック。

対１人での有効範囲は２ｍほどだ。それ以上離れるとその分飛翔物同士の間隔が開いてしまうため、的に当たる数が激減してしまう。

安全装置であるピンはとうに抜かれている。半円の切り口、ハンドルを強く握り込んだ。

バズスッ。

間抜けな発射音と被片音が響き、彼の身体に縦の赤い点線が引かれた。

眉、鼻、顎、喉仏、胸、鳩尾・・・・・・。

釘のような殺傷片がめり込ませて、目を見開いたまま仰向けにバタンと倒れる。

その音がやけに倉庫内に響いた。

「ふむ・・・」

どの辺りからは分からないが、おそらく４人目が犠牲者になる辺りで残った２人は逃げたらしい。

広い広い倉庫に作り出された迷宮で唯一開けていると言えなくもないシャッターから廊下への通り道には、死体４つと葉月が取り残されていた。

あのままだと、一気に全滅させられるとようやく理解したのだろう。
勢いを止めるためにも、あそこは撤退する場面だった。
横槍を入れる者がいなくなったので、点線入りのまだ綺麗な方だった死体をガンッと容赦なしに踏み潰して、潰して潰して床の染みにする。
「いいね・・・そうでなくっちゃ」
つまらない。
そう言外に言って、くすくすと笑う。
そして、悪魔の言霊。
「かくれんぼする者、この指とーまれ♪」
誰も見ていないにも関わらず、血に濡れた右手人差し指を掲げる葉月。
けれど、この倉庫から出れない2人の生き残りは強制参加が決定している。
呼びかけに答えない2人の逃亡者の心境などお構いなしに、秒読みを始めた。
「いーち、にーぃ、さーん・・・」
必要もないカウントダウンは追い詰められた者達にさらなる焦燥を与える呪い。
猶予時間がなくなっていくという実況と鬼という存在を強く印象付ける呪術だ。
「・・・はーち、くぅ、じゅーう」
自分で課した鎖の有効期限が切れたことで、彼女は行動を開始する。
踵を返して今まで殺し進んできた道を戻っていく。
1人は盾に使い、1人は投げ飛ばして細切れにしたため、その先にあるのは頭を殴った隊員だけである。
そのヘルメットごと頭蓋骨の陥没した頭を足先で蹴った。
「ねぇ、お兄ーさん」

死んでいるはずの彼に話しかける。
「死んだ振りはもういいからさぁ、もっと楽しいことしない？」
それを聞いて息を呑む彼。
そう、彼は生きている。
人間は頭蓋骨が陥没したところで死ぬわけではない。
脳にしても所によっては損傷しても生存可能であることは前例が証明している。
葉月に生首で殴られてヘルメットごと頭を凹まされた彼だったが、それでも生きてはいたのだ。
攻撃を食らって死んでいないという幸運に恵まれた彼はそのまま死んだ振りをして少女が去るのを待つつもりだったが、葉月がそれに気づかないわけがない。
「いいこと教えてあげる。僕は心音を聞き取れるんだよ」
心臓の鼓動を聞き取って、熱源をも感じ取って、暗闇ですら視界を確保できる少女。
それに対抗するには彼らはあまりにも貧弱だ。
そんな鬼が相手のかくれんぼなど最初から成立しない。
それが分かっていながら、遊びの形式を採るのは嗜虐心から。
生きてはいてもそう身動きができるほど軽傷でもない彼のヘルメットを片手で掴み取る。
ベキベキと音がして、ヘルメットが小さな手で掴みやすい形に変形していった。
「さぁて、フィナーレだ」

どこをどう走って曲がって来たのか分からない逃走の果て、迷宮の果て。
馬場晋太（ばば しんた）と二門純太郎（にかど じゅんたろう）はダンボール壁にもたれかかり敵を警戒する。
「は・・・は、誰だガキらしい隠れ場所だなんて言った馬鹿はよぉ・

・・」
「お前・・・だろうが」
無理に笑うその顔に余裕があるわけがない。
未だ一切負傷していない彼らだったが、たった1つの傷が致命的なものになることはよく分かっているため、それを喜ぶことはできなかった。
何より、精神面のダメージが酷い。
「なぁ・・・裏口は塞がってるとして・・・・・・・シャッターの方はどうだと思う?」
「俺なら、閉めてるな」
「だよな・・・。他に出口ってあるか?」
「ない、だろ・・・」
とそう言った馬場の眉が寄る。
「いや・・・待てよ。そういや俺らは筒蓑美恵を追ってきたんだよな・・・」
何を当たり前のことを、と言いかけて、自分もそのことを忘れてただ1人の少女の影に怯えていたことに気づく。
「今、この地獄のどこかに・・・そいつらが今も隠れていると思うか?」
「・・・・・・隠し通出口が・・・ある?」
確かに、銃声よりも絶叫が響くこんな中に友人を閉じ込めておくとは思えない。
むしろこのあまりに酷い惨状は、彼らがいないからこそできるものではないのか。
そしてさらに、馬場は思い至る。
「ッくそ!やられた・・・!」
潜めた声で叫ぶ。
「どうした!?」
「通信・・・!通信手段は途絶えてないんだよ!なのに俺らはまるでそれを忘れてた。応援を呼ぶこともせずにな!」

閉鎖的な密室は人に必要以上の孤立感を与える。
つまるところこの檻の創造主の思惑がそこにもあったことは言うまでもない。
「さっさと連絡するぞ。シオマネキでも連れてこればさすがのアレでも吹き飛ばせる！」
マイクに端子で繋がっているトランシーバー本体のチャンネルを切り替えて本部へと繋げる。状況を伝えようと口を開けて、
そこで物音が聞こえた。
チャッと音のした方に銃口を向ける。
けれど予想に反して角から出てきたのは、死んだはずの野村翼（のむらつばさ）だった。
死人を餌にする例の罠だという疑念で咄嗟に駆け寄ろうとした身体を押さえつけて、身構えたまま彼を凝視する。
ヒューヒューという空気が漏れるような呼吸が微かに聞こえた。
もたれかかりつつもダンボールに触れる手には力が加わっているのが分かる。
生きている。確かに生きている。
「野村っ！」
二門は思わず駆けて衰弱している野村を身体を支えた。
もたれかかってくる彼の身体から心臓の鼓動がはっきりと分かり、今度こそ安心する。
どう考えても重傷な彼の症状を確認するために、まず顔色を診ようとして、
「ぁ〝・・・」
彼の口を黒い糸のようなものが縫い塞いでいることを知る。
閉じて言葉を奪われた唇の隙間から、空気が抜けてヒュウと音を鳴らす。
ズグッと鈍い何かを貫く音と粘り気のある水音が混ざった雑音（ノイズ）が響いた。
「ぁあ・・・あ〝」

野村の胸から白く華奢な腕が生えて、斜め上に伸びたその凶爪は二門の首筋に深々と刺さっていた。

皮を貫き、心臓諸々を抉り、皮を貫き、それだけでは飽き足らず――――さらに皮を破り、肉と血管に突き刺さる指先がぐりん横に引き抜かれる。

頚動脈を巻き添いに血肉を抉られた首から手持ち花火のように血飛沫が飛散。

「にぃぃいかどぉぉおおおおお！」

それを目の当たりにした馬場は、今度こそ激昂した。

何人もの隊員を嬲り殺され、その非道な狂楽を目の当たりして、これ以上ないだろうと思っていた憤怒は、ここに来てやっと上限を超えた。

目と鼻の先で、正真正銘自分に向けられた挑発を受けて、今までとは違うはっきりとした殺意が身体を動かす。

もはや残ったのは1人だという事実が、護身という選択肢を捨てさせた。

生存は不可能。

だから、生き残るためではなく復讐心を持って形振り構わず、死ぬ気で殺せ。

二門に当たるのも無視し機関銃を連射して、葉月に向かって突進する。

「うおおおおおおぉぉぉぉぉ！」

葉月は腕に刺さった野村の身体ごと足蹴に2人の死体を馬場に向かって倒れかけさせる。

それをさらに蹴り返して、彼はさっきから二門にばかり当たっていた銃弾の軌道を変えるため、死体の隙間に銃口を捻じ込んだ。

半分ほど突き出された銃身を一歩前に出て掴みかかり、銃口をずらす葉月。

既に酷使された鉄の塊は高熱を持っていたため、その身を握り締めた左手が嫌な音を立てて火傷を起こす。

皮と肉の焼けた臭いが鼻を衝くが、それを無視して手と腕に力を込め、銃を退けにかかった。
そうはさせまいと馬場も必死に銃の向きを葉月に戻そうとする。
「ぐぅお・・・おお」
拮抗しているようにも見えたのは一瞬だけで、力比べは葉月の方に軍配が上がった。
そのギリギリの攻防の中ですら彼女は澄ました顔だ。
少しずつとも言えない速度で照準を外される銃。
それがいきなり弾け跳ぶ。
熱と怪力に何時の間にか歪んでいた銃身に、銃弾がついにその中で暴発したのだ。
空中を舞うほぼ唯一の有効武器に支えられていた形になる両者の間に挟まっていた死体がついに地面に伏す。
それも束の間。
手の平の皮が焼けた時にはすでにその下に新たな皮膚を再生させていた葉月がその左腕を後に引く。
しかしそれは攻撃の予備動作ではなく、右腕の一撃に勢いをのせるためのもの。
瞬時に次の攻撃に切り替えた葉月のスピード勝ち。
馬場の後頭部目掛けて鍵爪が振りかざされる。

けれど、そこで、
まるで予測していなかった場所からの銃撃が葉月の横っ腹に突き刺さった。

「っ・・・・!!」
その攻撃はさきほど伏せた死体から。
胸に大きな穴を開けて死亡したはずの野村から。
固定する力もない機関銃を銃弾でぐちゃぐちゃになった二門の背中に刺して、残り少ない生命で引き金をただ握っている。

それはまさに幸運の連続だった。
心臓を貫かれながらも即死しなかった幸運、馬場による銃撃は二門が盾になったという幸運、その死体が今まさに都合よくも支えになってるという幸運。
心音が聞こえるとまで言った少女の意表を、今度こそ衝いたのだ。
潰れた心臓はもはや心音を奏でることなく、死に逝く身体の代謝は止まりかけで感知不能。
死が確定した故にできた、初めて当たった最後の攻撃。
一矢、報いた。
「がぁぁあああぁぁあああああっ！！！」
後から後から止め処なく放たれる銃弾が腹にめり込み続け、その威力に押されて葉月は後方によろめいていく。
二門が現れた角のところまで下がった頃には左腕にも何発も被弾、そこまできてやっと葉月は身体を無理に捻ってその影に飛び込んだ。
その瞬間、馬場はその左腕が肘の辺りで千切れたのを確かに見た。
それから身体が床に叩かれる音。
打ちつける音を合図にして、
「野村ッ！」
馬場が野村に駆け寄った時には、彼は既に絶命していた。
それでも握りこんだままの引き金は未だに銃弾を放たせ続けている。
その執念の篭った指を解いて意味なき銃撃を止めさせて、馬場は二門のまだ使用されていない銃を拾う。
「待ってろ。今決着を着けてやる！」
しっかりと銃を構えて、葉月の消えた角を曲がる。
そこに葉月の姿はなく、代わりに血でできた太い蛇行線が床に残され、道の先にある更なる角に続いていた。
間違いなく、身体を引きずってできた血の跡。
確実に弱っている。
「グチグチにしてブチ殺す！」

ヅカヅカと血の線を辿り、角の手前で1度立ち止まった。
幾らあの少女が尋常ない身体能力の持ち主でも短時間でこれ以上の距離を逃げれてはいまい。
気を落ち着かせて、素早く次なる道に飛び出る。
そして、

指を蟲のように蠢かして前へ前へと進む、千切れた腕の端を床に引きずって血を垂らし続ける左腕を見つけた。

カタカタと伸びた爪が耳障りな音を鳴らし、綺麗とは言えない千切れ口を床に接しさせながら、
本体と切り離され、もはや物と化したはずの、死したはずの身体の一部が、それ単体で蠢いている。
それはありえない、わけの分からない化け物染みた有様で――――。

硬直した彼の頭上から、何かが降ってきた。
床に落ちて乾いた金属音が響く。
ジャラジャラと次々に降り注ぐその様は時雨のようだ。
上を見てその正体を知る。
その固い雨は先ほど葉月に打ち込まれた銃弾。
それが、彼女の腹から肉に押し出されてポロポロと降り注いでいるのだ。
天井に張り巡らされた黒い糸の網を見て、今更彼女の移動法が分かったところで手遅れでしかなく。
顔は引きつったまま、元の形を忘れてしまった。
千切れた左腕の傷口は既に塞がり、手も使わずに排除される弾の数々が腹の傷の無意味さを語っている。
野村の一矢すら無駄なのだと、それすらも嘲笑う檻の神（じごく ぬし）。
あまりに酷い光景が広がる倉庫の迷宮、逃走の果て。
彼らの足掻きが唯一与えた紛（まぎ）うことなき必殺は無駄であると思い

知らされた。
凶悪な振る舞いは悪魔の如く容赦なく、卑怯なまでの不死身さは打破の希望すら剥奪する。
それは最後の恐怖。凶暴頑丈。

「ねぇ・・・。ここ、笑うとこだよ？」

歪む葉月の唇が三日月を描き、引きつったままの馬場は血走る眼をひん剥く。
「くぅぅぅぅぅぅぅそぉぉぉぉぉぅぅぅうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああ！！！」
死力を尽しての叫び声が倉庫に木霊する中、葉月は彼の顔を細切れに吹き飛ばした。

第２９話－　絶命領域。－Ｇｅｎｏｃｉｄｅ－（後書き）

ついに葉月の本領発揮です。
エグイエグイと言い続けてやっとそれが出せました。
あ、まず読まずに来た方用に筋書きを。
『悪魔っ子はづきんはマジカル（呪い的）な魔法で泥底達を倉庫に閉じ込めた上で虐殺したゾ☆』
尚、悪魔っ子はづきんは架空の人物、フィクションです。実際の織神葉月とは一切関係ありません。念のため。
あまりにも殺伐とした話だったのでつい悪乗りしてます、はい。
今回のタイトルは『絶命結界＝絶対絶命、異常領域』、サブタイは『ジェノサイド＝虐殺』。
全体の流れとしては少女がハイになってストレス発散のために羽目を外すという話・・・かな？
苛々して物を投げたり、溜まったストレスを全力で身体を動かすことで解消するのとやってることは同じなんですけどね。
葉月がやるとああなります。
普段はいい子なんですよ？ちょっとストレスの許容量が限界に達しただけですってば。
葉月は笑いながら酷いことをするタイプなんですよね。
さて、『泥底ＶＳ．最恐』、弱者ＶＳ．魔物の戦い。
阿鼻叫喚。ワンサイド・ゲーム。地獄の檻。
シチュエーションがそのままモンスター映画です。
モンスター＝魔物＝葉月。
泥底達はあれですね。真っ先に突っ込んで犠牲になる部隊の人。
悪役と悪役が泥沼な殺し合いをしているのでその結末は残酷なモノしか用意されていません。
何せ、この小説のヒーロー役であるはずの若内鈴路は妹とデートを満喫中で、ダークヒーローの朝空風々は諦めて撤退・・・。

正義役がこぞって出演を拒絶したこの小説の明日はどっちだっ！？というわけで、シリアスがあと1話続きます。それで第一章は終わり。

『戦いの果てにまみえる悪の親玉は闇魔様！最終回のはずなのに続々出てくる新シリーズ用の伏線！

次回、悪魔っ子はづきん『脅迫しちゃうゾ☆』お楽しみに♪』

悪魔っ子はづきんは架空の（以下略）

しっかし・・・あれですね。

この話を『夏ホラー』に出すべきだったか。

ちゃんと8月の話しだし、魔物だし。

ちなみに、この話と夏ホラーに出した『罪扉』は共通点・・・というかリンクさせているところがあります。

そういうのを比べてみるのも楽しみ方かも。

あと、この話に出てきた倉庫やら武器やら、文章だけでは分かりづらいのでいつかＨＰでイラスト出します。

第３０話ー　命柄取引。ー Ｂａｄ　Ｅｎｄ　＆ａｍｐ；　Ａｎｅｃｄｏｔｅー

この話を読む前に、『欠片ー１　夢魔。』を読むことをお勧めします。
あと、後書きにてお知らせがありますので、ご覧いただければ幸いです。

第３０話ー　命柄取引。ー Ｂａｄ　Ｅｎｄ　＆ａｍｐ；　Ａｎｅｃｄｏｔｅー

まだ溢れてくる血液に濡れてシューズはびちょびちょと気持ち悪い感触を与えてくる。

血飛沫を浴び、殺傷片に裂かれ、横っ腹には赤黒い穴が開いた、元は純白のワンピースはもはや使い物にならない。

最後の反撃はなかなか良かった。

そんなことを思いながら、ワンピースを脱ぐ。靴も靴下も同じく脱いで、下着姿に。

最後に殺した死体のジャケットを剥ぎ取り、注意はして殺したのにどうしても付着してしまった血を隠すために裏返して着た。

一時的に人の目を誤魔化すだけだから、これで十分だろう。あそこには代わりの服が置いてあるし。

それから財布を探ってお目当てのカードを引き抜く。

これで彼に用はない。

一応確認すると腹は傷は塞いだものの、まだ内臓にダメージが残っていて激しい運動はしばらく控えたい感じ。

左腕の方は既に膜が張って再生芽が伸び始めているから、そのうち治るだろう。

能力で直してもいいのだけど、この身体の自己再生能力を知るためにももう少し様子を見るつもり。

記憶を辿って迷路を進み投げたダガーナイフを回収して、それから吹っ飛ばされた左腕も拾う。

まだ熱が残っていて本体から切り離された今でも生きている。

それを無理やりポーチに捻じ込んで、最後に倉庫のあちこちに仕掛けた髪の毛を髪で絡めて取っていく。

と、回収に使っていた髪が切断されてバラバラと中を舞った。

「うわ・・・」

細くしすぎたらしい。

滑車として使う鉄ラックに接する部分はそのまま、切断に使う箇所だけとにかく細くしてみたのだけど、自分でも危ないくらいの殺傷力が出てしまってる。
人体をほぼ摩擦なしで刻める糸・・・試して分かったけど、僕には向いてない。
あっけなさ過ぎるし、間違えたら自分が細切れだ。
今度はもっと違う方法を考えよう。
何とかその凶器を取り除いて、倉庫でやるべき全てを終えた。
ふと床に視線を落とすと、本物の蜘蛛のように静かに徘徊する監視蜘蛛が血溜まりを歩いていたので踏み潰す。
・・・クシロ達はカイナの所にいるだろうし、それを追跡する連中も片付けた。
ここに残っているのは死体だけ。
あれだけ響いていた絶叫も途絶え、今や淀んだ空気が沈殿していく。
休憩を終え求愛を再開した蝉の声が外から聞こえる。
心臓の刻む鼓動すらが忙しなかったこの場所は、もはや停滞したように時の流れが緩やかだ。
決着はついた。
けれど、

まだやることが残っている。

／

1度整頓された室内は、この夏休みの間に元の散らかった状態に戻りかけていた。
テーブルに乗っけられた携帯ゲーム機の数々、壁に貼られた超薄層(ペーパー・ウィンドウ)テレビに無線で繋がっているだろう各社ＴＶゲーム機、そのカセットのパッケージがそこら中。

駅ビルの一室に造られた小さき城。裏方と呼ばれる、泥底と同じく名称のない組織のグループの根城だ。

そこに、いきなり織神葉月が現れた。

今回に関して言えば、ちゃんと意味をもってそこに集っていた裏方のメンバーは、それを狼狽で迎える。

礎囲智香は持っていたゲーム機をテーブルの上に落とし、朝露瑞流は淹れていたアップルティーがカップから溢れるのにも気づかずに、佐々見雪成は視線が葉月に固定してしまい身動きがとれず、音羽佐奈は持っていたクッキーを思わず凍らして砕き、岸亮輔に関してはパソコンの前でパニックとなってしまいにはデスクの下に縮まりこんだ。

それでも取り繕って、いつも通りの日常を演出しようと智香が口を開く。

「今日はどうしたの？はづ――――」

「いいよ、茶番（ソレ）は。そういうのは、今度幾らでもやれるんだし」

それを両断して葉月はテーブルの上のゲーム機の山から1台を取り出す。

他の全てを乱雑に薙ぎ払ってテーブルから落とした。

ガンガラと軽量化しても重さのある金属とプラスチックの塊が床を跳ねる。

「君達が向こう側の人間だなんてことは会ったその日に分かってたんだよ。

嘘を吐く時は真実を含めるのがコツ・・・だっけ？あるいは木の葉を隠すなら森の中かな？

非合法の組織という嘘でそれよりさらに暗部であることを隠す。

でもさぁ、先代変容（メタモルフォーゼ）の資料があるっていうアレはいただけないよ。

せっかく隠してるのにバレバレだ。

確認数自体が少ない、研究資料は門外不出で出回っていない、実際当事者である僕も今まで知らされていないようなモノが君達の近くにある理由なんて考えるまでもない。

君達が万可統一機構と繋がってるって暴露してるようなものじゃない」

手に持った携帯ゲーム機を改めてテーブルの中央に立てて、

「裏方・・・そう呼ばれる組織（しくみ）が実際あるとしても、君達は違う。少なくても今は裏方とは違う事情で動いてる」

コトンと中指弾き倒す。

それはチェックメイトのジェスチャーだ。

彼らの正体はとうにバレている。だから、余計な足掻（はなし）きはなしでいこうじゃない。

そう裏方メンバーを黙らして、彼女は続ける。

「さて、となるとこの部屋には盗聴・盗撮機器が仕掛けてあるだろうとも予測できるわけだ。せっかく研究対象の行動範囲に簡単に仕掛けられるんだから。

それも部屋の持ち主達の了承があるんだから本来なら難しい私物とかにも仕掛けられるよねぇ・・・。

機械を隠すなら機械の中・・・・・・例えばそこら中に散らかされたゲーム機の中、とかさ」

トントンと血のついた指に叩かれるのは選（え）られた1つの携帯ゲーム機。

「あははっ、電源がついていないのに電磁波を出し続けるゲーム機の正体は何でしょう？・・・なぁんてね」

葉月は自分専用に用意された椅子を引き、背中を預けて足を組んだ。

「さて・・・聞いているんだろう？誰かさん――――取引しよう」

彼女の視線の先にあるゲーム機は、だらしなく散らかされた玩具ではなく、今や得体も知れない誰かに繋がっている気味の悪いモノに変わっている。

ブラインドを締め切り、クーラーで冷え切った室内でさらに背筋が凍るような沈黙がしばらく、

葉月のポーチから『包帯少女の鎮魂歌（レクイエム）』の着信メロディーが鳴っ

た。
取り出した携帯の通話ボタンを押し、スピーカー設定にしてゲーム機の上に重ねて置く。
『・・・要求を訊こう』
変声器を使っていない、年齢を感じさせる男の声が発せられた。
「第一に筒蓑美恵(つつみのみえ)から手を引くこと」
『朝代研究所と我々は関わりがない。その要求は呑めんな』
他の意見を聞き入れないという意思すら感じるはっきりした口調での間髪を容れない返し。
しかし、その応えに葉月ははぁ、と溜め息を漏らす。
「あの、さぁ・・・じゃあ圧力かけて手を引かせなよ」
それぐらいのことは察しろといった態度は無能な相手を蔑むものだ。
引きずり出した相手の大きさを理解していようとまるで容赦がない。
姿も見えない、感情も酌めない、正体不明の相手。
自分の身を所有する、抗いようのないほど巨大な力を持つ誰か。
しかし、彼女は恐怖などという上等な感情は持ち合わせてはいない。
その話はこれで終わったと言わんばかりに、次の要求を続ける。
「第二にクシロ達・・・僕の周りにいる親しき友の安全確保」
『その必要はあるまい。連中を巻き込む気は更々ない』
先ほどと同じ、ブレのない答えが返ってくる。
が、やはりそんなものは織神葉月という少女には関係なく、
「だったら何なんだよ今回のは。随分お瑣末な結果になってるじゃない。
弛み過ぎだ。気を引き締めろよ。付け入る隙が多すぎる」
むしろ怒りを買ったらしかった。
「そんなんじゃあお話にならないからわざわざ言ってるの。消極的にではなく積極的に守れってさ。

僕に関係なく、対象に危険があれば対処すること。それが第二の要求。

この2つを守ってくれればいいんだ、簡単でしょ？」

苛立ちを隠しもしない彼女の言動は相手をも怒らすに十分なものだったが、電話の向こうにいるだろう相手はそれを気にした様子はない。

『その要求を呑むと思うかね？

既にこちらには死傷者が出ているこの状況で、対等な取引が可能とでも？』

けれど、しっかりと当然の反論は押さえてきた。

一方に犠牲を出した状態での和平交渉が等価交換の取引で行われるわけがない。

その正論にしてもっともな言い分に、ふむ・・・と葉月はそこで考える素振りを見せる。

そして、

「ああ、そうだよね。ごめんごめん忘れてた。もう1つ要求を追加するよ。

倉庫の死体、ちゃんと片付けといて」

笑顔で未知の彼の台詞を一蹴した。

「そんな思ってもいないこと言うのはよそうよ。お互い時間の無駄だ。

使い捨ての駒としか認識してないくせに、こういう時だけ利用しようとされてもね。

それに対するリアクションは『鼻で哂う』ぐらいしかレパートリーないしさ」

何処までも笑顔の葉月の言葉に、泥底（ヌタ）と同じく使い捨ての裏方メンバー達がびくびくと震えたが、それに構ってくれる人間はいない。

「大体さぁ、いいデータが取れたんじゃないの？織神葉月の戦闘傾向及び現段階における能力の使用率・・・とか何とか。

徊視蜘蛛で盗撮なんて趣味悪いよ。

・・・でもまぁ、一応お礼は言っとこう。どうせ、蜘蛛の電波傍受のついでに泥底(れんちゅう)の通信も電波妨害(ジャミング)してたんでしょ？」

使わなかったみたいだけど、と葉月は言って組んでいた足の上下を入れ替えた。

「それに対等なわけがないだろう？僕の方が優位に立ってるに決まってるでしょ？

２番目の要求はそもそも君達が厳守すべき事項、１番目のにしたって筒蓑美恵(つつみのみえ)がその保護対象のカテゴリに入ったってだけの話だ。

僕の機嫌を損ねることがどういうことかなんて前回と今回とので身に染みて分かったはずだよね？

ご機嫌取りとして最低限の条件はこなせよ。

さっきも言ったけどさ、それができてないからこうして対談してるんだ。言わなくても分かることをわざわざ、わざわざ口に出して言ってる。

むしろ言われなくてもやらないといけないことで見返りが貰えるこの取引っていう状況を喜ぶべきだね」

やって当然の家事の手伝いもしない不出来な息子に言い聞かせるうような物言いに、さすがの彼も押し黙る。

『・・・・・・・・・・・・・・なるほど。確かに、聞いたとおりの”織神”だな』

「岱斉が何か言ってた？」

『怒らせるな』

あははっと笑う葉月。

「ならそうしてよね」

けれど目がまるっきり笑っていない。

『それで、織神よ。我々の見返りとは何だ？』

モニター越しにもその辺りの話をこれ以上続けると余計機嫌を損ねると身に染みて感じたのか、彼は話を進める。

彼女は相槌を打って、ポーチから半分ほどその身を覗かせていたソレを引き出した。

「これをあげる」
無理やり握手を交わすように、握り合う右手と左手。
伸ばされた右腕の先に繋がるその腕には肘から先がない。
それは銃弾に抉り飛ばされた彼女自身の左腕。
「欲しいんでしょう？喉から手が出るくらいには。
形骸変容（メタモルフォーゼ）・・・変容能力と言うけれど、その実体は進化能力だ。
生物の進化という何千何億年もかかるものを一瞬で、しかも一世代で行える生物。
本来不可能な進化の経過を観察できる唯一の研究対象。
その腕一本丸々のサンプルが手に入るんだよ。値段にできない価値ってやつだよね。
まぁ、それでも強いて言えば、この列島ぐらいは買える。
・・・叩き売りだよ叩き売り。
そっちの損失は使い捨ての駒十数人と筒蓑美恵。
既にその代償として僕に関する貴重な研究資料を手に入れているのに、さらにオマケで腕一本。
これ一本とたかだか何人かの命との交換だ。
ね、破格の取引でしょ？」
『・・・・・・』
「お互い腹の内分かってるんだからさ。コソコソするのはやめようよ。
バレてないならともかく、バレてるのに裏方や何やらで周りを固めても意味ないじゃない。
逃げる気なんて更々ないんだからさ、そっちも余計な行動は慎んでよね。
不文律・・・というか暗黙の了解だったはずだ。
抵抗しない代わりに自由を、ってさ。
僕の身体をどうしようが君らの自由。解剖するなり何なりすればいい」
けれど、

けれど、もしそれが破られたなら、
「もしもクシロ達に何かがあったら、僕の自由（わがまま）が通らなくなったら・・・・・その時は、
君達全員纏めて虐め殺す」
これが、
これこそが――――織神葉月。
万可統一機構が誇る、パンドラの箱に入りし娘（わざわい）。
自分すらを躊躇なく投げ打てる、自身も他人事の傍観者の姿。
自らを想えないモノに他者を想えるわけもなく、命を知らない彼女の眺める世界は全てが無価値だ。
世界の全てが純粋に”モノ”としてしか見えない、無知無垢な子供そのもの。
万の可能性を持つ純粋原石に人間の型を嵌めることを成長と呼ぶのなら、彼女はその型を嵌められることなく育った人間崩れ。
子供の想像力（かのうせい）を底無（バケモノ）しに例えるように、つまり彼女もまたそのようなモノだ。
蟻を潰す残忍さはその小さな身体に命を視ることができないという無知の証明。
故に、人を殺す残酷さは自らと変わらない姿に命を識ることができないという無智の証明。
見咎められると知ってはいても、その咎の本質を理解できない子供はその行為に罪の意識を得ることはない。
人間らしい感情を喪失した彼女は人の痛みを感じることはできないまま。
そんな彼女に愛情なんてものがあるわけもなく、
彼女が朽網釧や他の”大切”なモノに感じているのは親愛なんて綺麗なものではない。
・・・ただの過剰な愛着だ。

縫い包みを友達と幻視する子供のように、ボロボロになった枕カバーの切れ端をひたすら抱きしめる子供のように、
無様で無様で無様で無様な酷く惨い有様。
モノに過剰なまでの愛着を抱くその行為は、未熟な感情に他ならず、
未熟のまま成熟できずに、そのまま在り続けた不恰好なヒトガタには相応しすぎる。
幼少に世界の価値を奪われた子供は人間らしさを獲得できずに腐り崩れて死に至る。
精神死はいずれ肉体の死を招き、生存を不可能にさせる。
事実、彼女は一度再起不能なまでに廃人と化した。
なのに、それでも生かされた。
万可統一機構によってその肉体を延命された。
人間として致命的な欠陥を抱えながらも、それでもまだ存在できているという異常さは、周りにどう映っただろうか？
同級生にすら感じ取れる腐臭は彼らに積極的な行動を起こさせた。
少々強引なまでの彼らの行為は、何より彼らの不安を取り除くためのものだ。
前から電車が走ってくるのを見ていながら、それに向かって線路を歩き続けるような彼女の未来を見ていられなかったからこその積極性だった。
それほどに歪な姿。
終着点はとうに越え、死んだ後も動き続ける。
『終着越境』、『死後過動』。
既に死んだつもりでいる彼女は目に見えた惨劇にも平気で突き進んでいく。
その愚かしさを『馬鹿野郎の愚か者』と呼ばずしてなんと呼ぶ？
生きる行為を放棄しながら、生き長らえる彼女には目標というものがない。
歩く方向を見失ったものは進むことができずに停滞するだけだ。

噛み合わない歯車が空回りするようにただただ在り続けるだけの彼女は無害に等しい。
螺子の巻けない絡繰人形が幾ら凶器を握っていても人を殺せはしないのだ。
しかし、何かのきっかけで歯車が噛み合ってしまったら?方向性を得てしまったら?
・・・・・常に停止している彼女の心臓が鼓動してしまった時は、
本来元来の織神葉月が降臨する。
倫理観も道徳心もない彼女は完膚なきまでに容赦がない。
目的を果たすためにあらゆるモノを犠牲にして、確実に完璧に完全に目標を達成する。
それを万可統一機構が思い知ったのは、彼女と釧が出会う少し前の話。
『織神』の称号を与えられ、『折り紙の8月』と呼ばれるキッカケとなった魔の8月。
まだ能力もないか弱い彼女が言葉だけで6人もの若い研究者を虐め殺した。
狂気の充満する研究所という結界の中で、若い彼らの心の隙を抉り腐らして、狂い死にさせた。
当時、身動きすら取ろうとしない廃人に成り下がっていた彼女の世話させられていた若い研究員。
薄暗く閉鎖的な空間の中、まるで生気の感じられない人形と2人きり。
いきなりギュルリと自分の方を見る濁った眼球、淡々と息継ぎもせず呪詛を吐き散らす口。
狂気を感染させる呪い人形。
悪夢のような異界の空気に毒されて、6人は自殺した。
あの時の目的はある少女への弔い。
そのための生贄として6人は捧げられた。

目的を果たすために周りにいた多くの人間が犠牲になったのだ。
今回は筒蓑美恵の言葉が彼女のキーポイントに触れてしまった。
その結果、泥底部隊１３人は葉月の八つ当たりに使い潰された。
普段は何の支障もきたさないくせに、条件さえ揃えば甚大な被害を及ぼす。
日常忘れられながらも存在するはずの亡霊が、仄暗い廃墟で人々を冥府に引きずり込むように。
死んだのに在り続ける、透明無害の彷徨う魂。
空回る駆動式が条件を満たす狂気の宴、発現するは阿鼻叫喚の地獄絵図。
過去形で話されるしかない悪霊の所業。
再臨する悪夢、蘇る逸話。
折り紙の８月。

――――それは夏の夜に語られる怪談に似ている。

・・・・・長い長い沈黙、観客すらの呼吸を禁じる圧迫された静寂の中。
代償として左腕を差し出す葉月の見開かれた双眼は、光を反射する呪い人形の硝子玉は見えるはずもない対談相手の姿を射抜き殺す。
姿が見えもしない初老の男の威圧感は、年を経て野望そのものと化した男の執念は携帯電話から漏れて部屋を監獄のように幻覚させる。
「ふっふふ・・・」
『くっくっくっ・・・』
どちらともなく、笑い声が漏れ始めた。
「あはっ、ふふ・・・ふふっ、ぅふふふふふふふっ、ふふふふふふふふふふっ！！」
『くくくくく・・・くはっ、ははははははははっ、かははははっくはっははははははっ！！』

それは膨れ上がるように大きくなって、沈黙を、静寂を破って爆発。

うふふ、くははと音質の異なった笑いが狂ったように混ざり合う。

見えなくても男がモニター越しに大口を開けて笑っている様子が目に浮かぶ。

左腕を持ったままの右手で口を隠した上品な笑い方をする葉月だが、堪えても喉の奥から笑い声の溢れ出すその唇が歪み吊り上っているだろうことは火を見るより明らかだ。

命辛々逃げた幼女は安息を得、命を弄ばれた愚か者は死に・・・

救いと貶めの狭間にある偽りの地で、命を知らない少女と命を尊ばぬ初老は笑い狂う。

その哄笑はしばらく収まらないままに響き続けた。

／

陽はとうに沈み、1日の終わりを告げている。

ヒグラシが凛と響く強く澄んだ声で鳴く夕焼けと夕闇のせめぎ合い、駅前の大通りは賑やかさを増す。

喧騒から離れた路地裏の一画、建物の壁にくたびれた身体を預けた。

左腕は目下自己再生中で横っ腹の方は内臓がずれたのかまだ違和感がある状態だ。

血肉が少々足りない体は体力が明らかに落ちて頼りない。

お腹の治療に使った分、他のところが不足になったのだろう。

「遊びが多すぎたからなぁ・・・」

その分隙ができたせいでこの様だ。

せっかくクラスの皆が選んだワンピースは廃棄処分で、左腕を捻じ込んでいたポーチの中身は血だらけ。

予備の服に着替えたのだけど、身体についた血でまた汚れる始末・

・・・。

で、その原因の左腕はあのまま置いてきた。

あとは智香さん達が渡してくれるだろう。

相手が信用できる腕の預け場所だからこそ、あの拠点を取引場所に選んだのだし。

さて、随分と遅くなってしまったけれど、一段落着いたところでカイナに電話する。

「もしもし・・・」

『お電話ありがとうございます。こちら宮沢託児所です』

うわ・・・・・・怒ってるっぽい。

「カイナ・・・？」

『中学生から中学生までのお子様の面倒を見させていただいておりまして、料金価格の方は１時間１００万円ほどからと非常にお安く・・・』

「カーイーナー！」

『何だよ。冗談ぐらい付き合えっての』

「・・・ものすごく疲れてるんですよ」

『私だって疲れてるよ。あの後未来にベッドやら何やらを買わされに行って大変だったんだからな』

「いいじゃないですか、後輩の世話を焼くのも」

『・・・・・・』

「まさか、たまたま近くにいた大人だから頼った、なんて甘っちょろい認識だったんじゃないでしょうね？朝代研究所出身の宮沢荷稲さん？」

これ、一応切り札だったのだけど、今回ので使ってしまった・・・というより『全部知ってます』なんて宣言したせいで完全に価値のなくなってしまった。

せっかくカイナを弄れるカードだったのに・・・・・・少し残念だ。

「〝白澤〟って呼ばれてるらしいじゃないですか」

『いやいやいや・・・ちょい待ち』
「医療系能力者の完成形なんでしょ？
研究対象としては既に外れてしまったものの能力自体の価値が高いから、連中も研究所もむやみに手を出せない・・・」
『話聞けよ。てか、まるで成り行きを見てきたような言い方だよな・・・』
「現状から判断すればそう考えるのが妥当なだけです」
研究施設出身でその呪縛から逃れている人物の辿ってきただろう道は、攻略か逃亡かのどちらしかない。
研究所との関わりは途絶えていないみたいだし、その割には自由を獲得しているように見えるところから考えれば前者だろうと想像はつく。
『そもそも朝代出身ってことすら言ってないだろうがよ』
「今年赴任してきた、医療系能力者、形骸変容（メタモルフォーゼ）について僕も知らないことを知っていた、これだけで十分だと思いますけど？」
『自分が知らないこと知ってたら施設絡みかよ。滅茶苦茶な推理だな、おい』
「万可統一機構は僕を形骸変容（メタモルフォーゼ）にしたかった・・・ということは当事者である僕にその能力の知識は可能な限り詰め込んでおくのが普通。それでも知らないことというのはわざと教えられてないと判断できる。
だからその隠し事を知ってる人物が何者かなんて分かりきったことなんですよ」
『同一同在者（ドッペルゲンガー）か？』
「裏方の方も先代が在籍していたなんて・・・あぁ、裏方のことは知ってるんですっけ？」
『知ってるよ。さっき礎囲から電話があったしな。
岸が錯乱して呼吸困難だとよ。お前やりすぎだ。せっかく最近あいつの対人恐怖症治ってきてたのにさ』
「患者だったんですか？」

『知り合いで患者な。対人恐怖症からのストレスでパニック障害。結構ヤバイんだぞ』
「あとで詫び入れますよ」
『やめろ、絶対やめろ。・・・・・もういいから話戻せ』
「えーと、で裏方の方にしても先代が在籍してしかもその資料があるだなんて・・・隠す気があるのかすら疑いました」
『そう言ってやるなよ。あいつらはその資料をお前に見せるのが仕事だったんだから。あー、監視もか』
「それは分かってますよ。
けど、万可統一機構にしたってあんな回りくどいことを・・・やるんならやるでしっかり騙してほしいんですけどね」
『嫌なダメ出しだな・・・。だいたい、お前が変に鋭すぎる・・・というかやっぱり無茶な推測をしすぎてんだよ。
私がお前と同じタイミングで学園に赴任になったのは偶然かもしれないし、能力の知識だって単に偶然知ったのかもしれないのにさ。
裏方のことにしたって、疑いにはなっても確信をもてるほどの鍵（キー）でもないだろ。だからこそ同一同在者（ドッペルゲンガー）のことを漏らしたんだからな。
お前の推理は都合がよすぎる』
「いいんですよご都合主義で。
そのあてずっぽうが例外なく当たるぐらいには僕の世界は狂ってますから」
『・・・・・・・・・・・あっそ』
「そうそう、あの幼女どうしてます？」
『1度寝たきり起きてねぇよ。よっぽど疲れたんだろ』
「そうですか。まぁ、適当に『滞りなく解決した』とでも言っといてください。
あと、クシロ達にももう帰っていいって」
『何？合流するするんじゃねぇの？』
「僕はこれからとがさ亭で肉を補給しないといけないんで」
まだ再生していない左腕を見せるわけにもいかないし。

血だらけの身体も同じく見せられないし。
それに多分、自分が感じている以上に身体は疲労している。
「・・・とにかく疲れました」
『何やったかは訊かないけどよ。ほどほどにしとけ』
「はぁ。あ、もう1つ忘れてた」
そうだ。
クシロとタカへの伝達だけでなく、これも一応言っておかなければならない事柄だった。
「幼女の保身、いくら取引したといっても有効期限は僕が死ぬまでですから、その後はお願いします」
住処を提供するだけではなく、僕の死後はカイナ自身が幼女を匿わなければならないはずだ。
十分な猶予を与えたのだから、その間に自分で何とかしてくれればそれはそれでいいのだけど、完膚なきまでに、救いようのないほどに、塵屑すら残さず救ってやると決めたのは僕なのだからアフターケアもしておかないといけまい。
カイナにしても同郷の子供をほったらかしにできるような正確はしていないだろう・・・。
だけど、
『・・・・・お断りだね』
「は？」
『勝手に死ぬとかいってんじゃねーよ、バーカ！』
ぶつん。
子供みたいな切り方をされてしまった。
というか怒られたのかな？
「むぅ・・・」
まぁ、いいか。
とりあえずこれでやらなきゃいけないことは全部終わった。
本当の一段落といった感じ。
携帯をしまって、もたれていた身体を起こす。

身体のあちこちがギシギシと鳴っている。
左腕は、明日中に治らなければ能力で直さないといけないだろうな。
さて、では一服といきますか。
暗い路地をぼぉっと照らし出す光源に近づいて、ポーチから血だらけのカードを取り出した。
自販機というのは人を相手にしなくてもいい、年齢確認をされなくて済むという利点があったというのに、今やカードがなくては買えなくなってしまった。
名前やら顔写真やらの記載されたチャージ式のカード。それがあの泥底（ヌタ）の誰かであることは間違いないとは言え、一体何時どうやって殺した人物なのかは記憶が曖昧だ。
・・・どうでもいいことか。
点灯したボタンを押して煙草を購入。ＦＯＬＵＴＡ。
手にしたことのある唯一の銘柄。もっとも、結局吸うことはなかったけれども。
カードとビニールは道端に落とす。
１本取り出して花火大会の時に入れたままになっていたライターで火をつけた。
何となく――――何となく煙草でも吸いたい気分だったのだ。
フィルターの向きが合っているか今一度確認して唇に挟む。

「あ――――！はづきちゃん何すってるの！」
「おばちゃんに怒られちゃうよ？」
「それに、そんなものすったら死んじゃうんだー」

ふと脳裏に浮かぶ言葉の数々。
健康を害するのは確かだけど。
そんな受け応えをした蒼と碧と灰色な逸話（むかしのはなし）。
「ぅ・・・げほっごほ・・・・・・うげ」

思い切り吸い込んだら、酷く咽た。
苦味が口内に拡がって――――なるほど、死なないにしても僕にはまるで合わないものらしい――――咄嗟に箱共々投げ捨てる。
放物線を描く、箱と一本だけ取り出された煙草。
あぁ、何てことを。
そう思った時には既に遅い。
僕の唾液のついた煙草は嫌に軽い音を鳴らして地面に転がった。
それは、いつか清掃員のおばさんにでも拾われるはずだ。
だけど、唾液を調べられるようなことはないだろう。
なんて、
そんな想像が可笑しくて、少し笑った。

■

「ねぇ・・・、
はづきちゃん、わたしたちが生きてることに、わたしたちの人生にいみなんてないのかなぁ？
何で・・・・・生まれてきちゃったんだろう？
できればくるしまないで死にたいなんてかんがえなくちゃならないなんて・・・いや・・・・・だよぉ」
全く幼くなかった彼女の問い。
その問いに何と答えればよかったというのか。
愚かな僕は回答を知らず、言葉をかけることもなかった。
その結末は言うまでもなく。
何故か目の覚めたある夜、廊下を徘徊した果てに見つけた地下へ

の入り口。
無用心にも施錠されていなかったその扉の奥、設置された棚の上に見つけてしまった。
その日の日付と時間と、
そして彼女の名前の入ったラベルが貼られた瓶に浮き沈みする――
――脳髄を。

第３０話－　命柄取引。－Ｂａｄ　Ｅｎｄ　&ａｍｐ；　Ａｎｅｃｄｏｔｅ－

命を蹂躙し尽した果て、悪魔達はさらに命を弄ぶ。
文字通り万可統一機構折り紙つきの８月を冠する少女は、
放たれた災いの如く恐れ知らずの暴走をもって周りの尽くを巻き込んで、
散らかった玩具を片付けることなく遊びつかれた子供のように再び深い眠りに就く。
・・・『エキストラセンソリーな日々。』、第一章しめやかに完結です。
ただその裏では「この度はうちの娘が大変な粗相をいたしまして・・・」とか言って、岱斉が土下座ですよ。
まぁ、それはともかく。
最終編は『折り紙の８月．２ｎｄ』のお話。
１ｓｔから数年後に再発現した怪奇現象みたいな感じ。
第一章自体が過去編・・・逸話編で、『折り紙の８月．１ｓｔ／．２ｎｄ』を通して葉月の成り立ちや現状を示すものだったのですが・・・・・うまくいってるでしょうか？
最後の最後に結構伏線を回収しました。
たぶんかなり細かいのがたくさんあると思うんですよ。本人すら忘れてるのを含めて。
『クリオネ＝葉月』が実は最終編の前振りだったとかね。『食事の時はグロイ＝今回の殺戮』。
その一方回収していない伏線も割とあって、それは第二章に持ち越しです。
葉月が女性化した理由もね。理由はあるんですが、まだ先になりそうです。
忘れてるわけじゃないんですよ？
確かに最近性転換という設定が希薄になってますけど、そこら辺第

二章でがんばりたいです。

さて、これで一段落しましたので、
やるとか言って全然やっていなかった誤字修正を再開して、
ついでに『エキ日々。』の資料を纏めたいと考えてます。
学園の内部とか、能力史とか・・・・・・。
さすがに整理しないと本人がこんがらがりそう・・・こんがらがってます。
それで、どんな資料があればいいのかというご意見を窺いたいと思ってます。
登場人物紹介で「あの子出てない」というのでもいいです。

それに加えて、何か自然消滅してる『人気投票』も復活させます。
第一章が終わって非常に切りのいいこの時期に1回ぐらいやりたいのですよ。
ただ、ご指摘もあり、なおかつ票を稼ぐために、投票ルールを変更します。

★人気投票ルール★
・持ち票は1人10pt
・分割しても一括してもOK（最大10人にptを分けれます）

あと、投票対象なんですが拡げて、人以外にモノ、現象、建物など特定できるものならなんでもいいことにしたいと思います。
思った以上に登場人物が多くなりましたし、そのこともあってポイントを10と3倍以上も上げたので。

一度、投票していただいた方も、もちろん再度投票してくださって結構です。前のポイントにプラスして結果に反映します。

投票方法は感想欄にでも、サイトのｗｅｂ拍手からでも大丈夫なのでご気軽に投票してやってください。

Ｄｏｌｌ'ｓ　Ｈｏｕｓｅ．彼岸の花　：　ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｈｉｇａｎ－ｎｏ－ｈａｎａ．ｎｅｔ／

ご意見とご投票お待ちしております。

では、また第二章にて。

欠片－2　虚夢。－Ｈｅｒ　Ｄｒｅａｍ－

何が、何がある？
白に塗れた無機質な無機物群塊の中に、何がある？
自由を許されない箱の内で天を仰ぐ行為には虚しさしかない。
ズリズリと身を削られる焦燥感を感じながらも逃れられない監獄。
濃厚な負の空気の掻き混ざるヌルヌルとした感触が血管を守るにしては薄すぎる首筋の皮膜を舐める。
閉じ開きしすぎた瞳孔が定位置を忘れて、目に映る周りの景色はいつでもぼやけたまま。
真綿で首を絞められる残酷な感覚の日々は、精神を蝕んでまともに息すらできはしないほど。
建物の外。
グランドではしゃぎ回る同類の姿を目で追うも、その焦点は決して合わせない。
友達と呼称した1人が何時の間にか消えていることに気づいたその日から、彼らを識別することを止めた。
ここには何もない。
ここでは何もいらない。
大切なモノができてしまったら、耐えられなくなってしまう。
だから、友はいらない。
だから、心はいらない。
命が惜しければ心を捨てろ。
生きて生きて生きて、命を抱きしめて走り続けて、生き延びろ。
命があれば、いつかきっと、取り戻せるから。
友も心も、取り戻せるから。
だから、代わりに・・・夢を、見よう。
憂いのない、悲しみのない、影の落ちることのない理想郷の夢を。
目の前に焦点は合わさずに、遠い遠い向こうをただ見つめて。

ふと、視線を空に向ける。
儚い蒼色が西から迫る紅色に追いやられ、世界は赤に染められていた。
昼の間、一日の半分を支配する青の王は、昼と夜の狭間、たった一瞬の間に赤の女王に追放される。
――■■■■！！
・・・いきなり音が聞こえた。
何かを、地面に叩きつけた、ような音。
衝撃を受けて何かが壊れた音。
した方へと目を移動させるも、視線を壁が拒んでいる。
隔離した箱をさらに区分ける壁。
同類がいるだろうとは分かっている向こう側。わざわざ分けるのは、此岸と彼岸でやっていることが違うからか。
しかし、
しかし、何が落ちたのだろう？
そんな疑問を持ったまま、その解消は不可能と諦めて視線を再び空に移す。
「――――、――――」
そして見つけた。
壁から唯一覗く彼岸の建物の屋上に、1人の人物。
ここの同類が着る簡易すぎる緑の着衣、自由にならない髪はしばらく切られていないのか随分伸びて、男か女かは不明。
その顔には表情というものがない。
意思というものがない。
精神がない。
心がない。
命がない。
ない。何もない。
そこに在り続けるだけで、何にもない。
そもそもそこにいるという行為を成していることすらが信じられ

ないほどに、何も汲み取れない。
夕焼けを背にして、ただただ突っ立っているだけ。
なのに、
イメージは紅。
濃黄から山吹、夕赤に濃紅。
赤き空を従属して佇む黒き塊。
紅の逆光がソレを黒く見せて、その輪郭を強調する。
その口が、何かを紡いでいる。
ひたすら呟き続けている。
身体も頭も視線も固定したまま虚空に意識をやっているソレは、
口だけを動かしている。
聞こえもしないその声がまるで呪詛のようだと印象付けられて、
見るだけでも精神を冒されそうな光景なのに目が離せない。
紅を通り越して混沌として密度を増す黒い絡繰人形。
「・・・××××××・・・」
何を、
「・・・・・・××××××」
何を言っているのか？
「××××××・・・・」
分からない。分からないけど、
「・・・××××××」
その言葉を知っておかなければ、いけない気がして――――
「――――・・・××××××」
その唇が今まで繰り返していたのとは違う台詞を口にしたのだと
理解した時、
ギュルリと、今まで何も見ていなかった目がこっちを向いた。
近くもなく見晴らしもよくないけれど、確かにソレは眼球を動かし
して、笑った。
言葉の代わりに歪み吊り上る唇、此岸を見下ろす見開かれた瞳。
紅と黒を従属させるヒトガタ。

ソレが何なのか、まるで分からない。
何もないソレを動かすのが何なのか、まるで分からない。
誰でどうしてどのようにしてそこにあるのか、まるっきり分からない。
目が合った瞬間に、骨の髄まで抉り取られるような感覚を得、体中から力が抜けて倒れこむ。
何もかもを理解できないまま、
クラクラする視界の中にもう一度ソレを捉えようと顔を上げたけれど、柵には既に誰の姿もなく、

後にソレを理解できた時には、もう手遅れだった。

欠片－2　虚夢。－Ｈｅｒ　Ｄｒｅａｍ－（後書き）

第二章、始める気はあるというアピールも兼ねて取り置いてた欠片を更新です。
一応色々考えているのですが、さすがにそろそろシリアスが多くなりそうなので第一章みたいな行き当たりばったりはまずいなとプロットを再構築中。
そのためにも資料を整理中なわけですが、誤字の方はちょっとまだ放置になりそうな予感がヒシヒシと。
過去の自分の文章を読み返す恥ずかしさに精神力のゲージが赤く染まってます。

第３１話－　翌日翌朝。－Ｂｏｕｒｇｅｏｉｓ－

９月１日。
たった２４時間ほどの違いなのに、月は替わり日付が巻き戻って１からやり直しと随分と仰々しいと思わないでもないのだけど、まぁとにかく今日は始業式だ。
夏休みを終えたという夢覚ましの行事であり、新学期を始めるという現実を突きつける儀式。
その後に待っているのはテストで、そのあとは・・・授業やら学園祭があるのかな？
そんな行事が待っているはずの２学期は８月３１日とたった１日しか時間差がない。
そう、２４時間。
最悪な１日から、そんなに時間が経っていない。
何だかんだで心労もあったし、能力だって使ったしと疲労が溜まっていたし、
うん、まぁつまり何が言いたいかというと――――
「寝過ごした・・・」
携帯を確認すると午前１１時。式しかない日にこの遅れは致命的だ。
例の如く、というやつである。
戦闘で使った能力は髪の変容ぐらいのもので、それほど体力を消費しなかったのだけど、腕とお腹の治療に随分と使ってしまったのだ。
腕は結局１日で元通りというわけにはいかなそうだったので能力で直してしまったけれども、今日こうして寝坊で休む羽目になるならわざわざ直さなくてもよかった気がしてならない。
開いた携帯のディスプレイがメール２通の着信を知らせているので、そのままチェック。

1通はクシロだった。
内容は当然学校のこと。今頃返信してもと思うけども一応休む旨を伝える。
で、もう1通は・・・岩男こと岱斉から。
普段ならパソコンの無料メールに送ってくる彼としては珍しい。
珍しすぎて凄く不気味だ。題名は無題。無題だけども・・・。
着信時刻は深夜4時過ぎ、加えて昨日のことを考えると・・・、
「・・・・・・・・・・・・よし」
削除。
あの口数の少ない岩男が携帯に直接小言（メッセージ）を送ってくるという異常事態だ。
開けるのが嫌すぎる。
メールの確認も終えて携帯を放り出す。
ボフリとゆるるキャラの抱き枕に突っ伏。
さて・・・この暇な時間はどうしよう？

＃

カードキーをスライドして、権利を持つ者以外を拒絶する扉を開く。
その向こうに広がっているのはラックと莫大な資料だ。
何度目かになる、資料庫の中。
夏休みの間はここに入り浸ることも多かったのだけど、やはりそれでも飽きがこない。
とりあえず前から狙っていた『変身能力者（トランスフォーマー）による中性認識の解釈』やら『医療能力の限界と可能性』やら『Ｍｙ　ｆａｖｏｒｉｔｅ　ａｂｉｌｉｔｙ！』やらをどんどん引き抜いていく。
余分な分野にも手を出しているものの、今回の目的は医療系能力を形骸変容（メタモルフォーゼ）で真似ること。
あまり意識していなかったことだけれど、随分前に手首を損傷し

た時も今回の時も時間や体力をやたらと費やしてしまうという弱点が露呈している。
より効率化した能力運用を目指せるだけの余白はあると思う。
人間何らかの目標がないと、日々を過ごすのが暇で仕方ないものだし。
医療系能力関連の資料をあと幾つか漁ったついでに『白澤』の記述がありそうな書物も探してみる。
白澤が伝説上の生き物を指す固有名詞であることぐらいは知っている。
ただ、それがどんな生物でどんな象徴だったのかは知らないわけで。
カイナがそう呼ばれていたんだから医療に関係する謂(いわ)れがあるんだろう。
興味本位でそれほど意味はない。
「さて・・・」
粗方物色し終わったので、最後に一番大事なのを。
資料室からさらに隔離されている一室へ向かう。
ここは裏方メンバーも入れないより深度・・・機密度の高い空間だ。
その特権階級しかは入れない場所に当然の権利として入り、形骸(メタモル)変容(フォーゼ)のエリアにある資料全てをガッと掴んで左腕に積み上げられた本の上に加えた。
秘蔵資料、門外不出などと言っているけど、どうせ複製(コピー)だ。
そこら辺気づいていないことになっていたから触れなかったわけで、バレちゃったんだから堂々と持ち出させてもらう。
何か居直り強盗みたいな？
まぁとりあえずこれでよし。
それじゃあ、せっかくだからリラックスしながら読める場所に移動しようかな。

白澤。

中国に伝わる人語を解し万物に精通するとされる聖獣。

牛のような体に人面、顎髭を蓄え、顔に3つ、胴体に6つの目、額に2本、胴体に4本の角を持つ。

医学の祖・黄帝が東方巡行した折に白澤に遭遇したとされる。

白澤は黄帝に11520種の妖異鬼神について語り、彼はこれを部下に書き取らせ『白澤図』を作る。

妖異鬼神とは人に災いをもたらす病魔や天災の象徴であり、白澤図にはそれらへの対処法も記述されていた。

「なる・・・」

・・・まぁつまり、医学の象徴であり、病気の治療に貢献した勲章だ。

身体に無理やり抗原(ウイルス)を入れられて、抗体(ワクチン)の生成でもさせられたのだろう。

医療系能力者は病気に対する抵抗力が高いし、抗体生成速度(ワクチン)も常人とは比べ物にならない。通常ならできる間もなく死に至るような強毒性の抗原(ウイルス)でも抗体(ワクチン)を作れる。

研究所で強いて進化培養された抗原(ウイルス)の抗体(ワクチン)を作らせることで、将来起こるだろう細菌災害(パンデミック)を回避した・・・白澤、白澤図から想像するにそういったところかな。

喫茶の特製珈琲を一口。

「苦っ！」

慌ててシロップを3つほど足して混ぜる。よく見てみるとミルクも入っていなかった。代わりにカップの傍にミルクの入った容器が置いてある。

そういえば普通自己調節か。

できれば蜂蜜があれば尚いいのだけど、ないんだろうなぁ。

さて、白澤についてある程度のことが分かればこの本は用なしだ。

次に移ろう。

『医療能力の限界と可能性』。
そもそも医療系能力とは、自己あるいは他人の　身体に変化を及ぼす能力を指す。
免疫力の強化が基本で、皮膜を使った応急処置、新陳代謝の増強などがその技術として挙げられる。
結局のところ身体の機能を操る能力で、逆に言えば身体に元からある能力以上のことはできない。
筒蓑美恵は皮膚へと運命付けられた細胞を脱分化して万能細胞の状態に戻した上で眼を形成させたみたいだけど、それは細胞１つ１つに身体全ての設計図があるからこそ可能なのだ。
しかしそれでもかなりの高技術と言っていい。間違いなく医療系最高峰の技術だろう。
それを伸び白がないからといって切り捨てる研究所も研究所だ。
いや、この場合そう思わせるほどにカイナの能力が高みにあると取るべきか。
で、その最高峰の中の最高峰である白澤は、健康な細胞さえあれば手足や臓器を再生させることぐらいはやってのけるらしい。
時間がかかるので即座に治療できるわけではないという制限はあるものの、世の中の医師や研究者が可哀想になるほどの能力だ。
もっとも、その臓器再生すら短時間でやってしまう形骸変容（メタモルフォーゼ）はさらに反則技に違いない。
能力の方向性が広すぎて定まらないぐらいの可能性を秘めている。
先代変容の資料なんかを読んでみるのだけど、そこに書かれているものは能力応用の一部にすぎず、他の能力のようにただ単純に先達の真似をすれば上達するというわけにはいかないようだ。
「ま、そこら辺おいおい・・・と」
「おいおいって・・・何が？」
極秘と印の押されたファイルをカバンにしまいながらの独り言に上から声がかかった。
顔を上げるとクシロとタカ、あとカイナまでいる。

2人には場所を伝えたけれどカイナには連絡していない。
「何でカイナが？」
「新学期初日から無断欠席する不良少女に制裁しにきた」
「へぇ・・・ちなみにそれって誰のこと？僕はちゃんと連絡したしねぇ」
「くしろんに、事後連絡をな。通用するわけねーだろうが」
そう言って、カイナは向かいにクシロは隣にタカは当然カイナの横に座った。
タカがウェイターを呼ぶために手を上げたので、机の上に残っていたカップ一気に飲む干す。
どうせだから新しいのを貰おう。
「それで？わざわざ会いにきた本当の理由は？」
皆が注文を出し終わった後、改めてカイナに訊く。
残念ながら僕にはカイナが熱血変態教師には見えない。
「ん。いや、ちょっと小遣いを貰いに」
見えないんだけど、今それ以上に耳を疑う台詞を聞いた気がする。
「・・・・・一応確認するけど、誰が誰に？」
「私が葉月に」
よし、よく分かった。
「貴女馬鹿ですね？」
「うわっ、丁寧に貶された！」
いやいやいや子供にお金を貰おうなんていう人間は馬鹿以外の何者でもないでしょうよ。
「何処かで頭を強打して自分の年齢が分からなくなったの？」
「失礼だな、おい。アレだよアレ・・・昨日のことでウチに居候が増えた分の生活代。その理由作った人物が責任持って金出せ」
「彼女自身ある程度蓄えあるでしょ？」
「それがどうもカードやら判子やら全部置いてきたらしい」
それもそれで耳を疑う言葉だ。
あの毒舌幼女、どこまで無計画なんだ。

そして何でその分僕が出さないといけないんだ。
「・・・カイナ達は色んなところから毟り取ってるでしょ？
僕は過酷なバイトしか収入のない苦学生だよ？」
「とんでもない嘘を吐くよな・・・。機構から毎月相当の額が振り込まれてるくせにさー。
使ってない分随分溜まってるはずだぜ？」
確かに、特に能力発現からは毎月お金が口座に入っているはず、だけど。
「・・・まぁ、それなりには」
だけど、基本的に使っていないので苦学生というのも嘘ではないんだよ？
「ほらほら、お姉さんに言ってみ？」
濁す僕にカイナはいやらしい笑顔で追及してくる。
人の努力をなんだと思ってるんだこの人。
「うぅーん、あんまり数えてないからなぁ。あー、前に調べた時には１兆と３０億・・・あと数千万ぐらい？」
タカがピシッと固まった。
「やっぱ結構貰ってんじゃん」
「や、でも、その数字にしたって資産分割しすぎて全部数え切れてはないよ」
「おいコラ葉月、お前は何でバイトしてんだ」
「・・・使う気が起こらないから」
「そんなこと言ってるから貯まるんだよ。使わねぇーと景気に関わるぞ」
だったら無駄に税金をこっちに回さなければいいんだ。
「まぁ、血税ですもんね」
「だから国民に返さないとな。具体的には無駄使いして」
「なぁ釧、俺にはコイツらの感覚が分からねぇんだが・・・」
「駄目だよタカ、クシロに訊いたって。１人暮らしのくせに高級マンションの最上階２部屋を突き破って使用するような浪費家なんだ

から」
　改めてそれもそうだと気づいたタカはガラス張り越しに外の景色に目をやる。
「・・・一般人は俺1人か」
　悟ったような表情。
「失礼な。持ってるけど僕はちゃんと節約してるよ。自分で直接稼いだわけじゃないから使って楽しいものじゃないし。自立してるのとは程遠いし」
　口座や部屋の引き出しにある札束は自分と機構の縁みたいなものなので、それからの脱出を願っているらしいクシロの手前極限使いたくない。
「持ってるのに使わないのが一番問題だろ・・・。
　んぁ、おい。そういえば葉月って学校入るのに一悶着あったんじゃなかったか？入学金がどうのとか」
「あー、だからその頃はなかったんだよ。億とか貰うようになったのは能力を得てからだし、施設から出た頃から少しは貰ってたけど・・・あ、でも学園に入ってからは増えてたかな」
「双芥中学に入れたかったから色々制限してけど、俺が祇堂学園での学費一切を出すってことになって結局意味がなかったから止めたとか？」
「その割には結構あっさりクシロの提案呑んだけどね、あの岩男は」
「岩って言うほどがっしりしてるか？アイツ・・・。
　まー、双芥に入れたかったかも怪しいだろ。そもそも葉月は12まで外出禁の規則（ルール）免除の特例が認められてたからな」
「葉月って小学校で釧と出会ってるもんな」
　タカのその台詞は注文していたシナモンワッフルを口に入れての発言なのでくぐもって聞こえた。
　モノを口に含んだまま喋るのは行儀が悪いと思う。
　もちろんわざわざ言わないけれど。
「そういえば何で？どういうキッカケ？」

今更ながらそんなことを訊いてくるけど、クシロは編入当時の僕の有様を知ってるはずなので、ある程度予想のつきそうなものだ。
ただ、それももちろん言わない。墓穴を掘りかねないし。
「えー、そりゃあ当然僕が品行方正で優待生だったからだよ」
「それだけはねぇ」
即答するタカ。
「いつもの事ながら失礼な」
「で、ホントのところは？」
抗議は無視された。
「・・・人間、他人を疑ったら駄目になるよ？
別に大それたことはないって。色々あってちょっと追い出されただけ」
「あの監獄と名高い施設から逆に追い出されるって異常の何処が大それてないんだ？
前に機構が随分揺れた時期があったよな。研究員数十名が精神科病棟送りになったのは記憶に新しいけど？」
わぁ、カイナさん余計なことを！クシロもなんとなく察してる部分だから大丈夫とは思うけれど・・・あとで覚えてなよ。
「葉月、何やったか正直に言いなさい」
そしてクシロ・・・悪さをした子供を諭すような物言いはやめて欲しい。
「強いて言えば青田刈り・・・？」
若い研究員にこれ程度で気狂いしていたらやってけないぞ的なメッセージを込めたことに後付けすればそう取れなくも・・・ないんじゃないかな？
まぁ実際は心に隙のある新参者にしか効果がなかったからだけど。
「それはともかく、ほら金くれ金」
散々人のグレーゾーンを突付いたくせに。
アレか、昨日のことまだ怒ってるのか。
「自分だって十分持ってるくせに・・・」

「お前の方がどう考えても多いっての」
「はぁ・・・まぁ仕方ないなぁ。本当に世話が焼けるよねあの毒舌幼女」
「お前も大概だけどな・・・。
あ、とりあえず２００万ほどで」
溜め息。
これ以上渋っても面倒なことを言われるのも避けたいので、ここは折れた方がいい。
カバンから強引き出してきたばかりの札束を入った封筒を取り出して塊２つテーブルに置く。
「・・・準備がいいな」
「別にこのために用意したわけじゃないんですけどね」
「じゃあ何のために？この後どこか行くの？」
クシロ・・・一応君にとっても他人事じゃないんだけどさ。
「何処かの誰かさんが置いてったクリオネの餌を仕入れにね。あと流石に冷蔵庫で瓶詰めは可哀想だから水槽も買っちゃおうかと」
「わぁ。熱帯魚が２００万もするとか思ってるんですか葉月サン。金銭感覚がぶっ飛んでますね。
どうです？私めに数百万預けてみません？」
「渡したら帰ってこないだろうというのは置いといて・・・タカその口調気持ち悪すぎる。
そして認識が甘いよ。観賞魚１匹で１０万２０万は当たり前・・・１００万というのは別におかしな単位じゃないからね。
大体クリオネは熱帯じゃなくて氷海の生物。熱帯魚用のヒーターは安いけど、水槽を冷やすような大掛かりな設備はまだ高価なの」
「結論として金持ちの道楽だよな・・・と？」
そこでカイナの懐から着メロが流れた。
気だるそうにディスプレイを確認して、げっ！と声を出す。
どうも相手が嫌な相手だったらしい。それも通話とみた。
居留守を使うわけにもいかず、顔を顰めながらも耳に当てるカイ

ナ。
「・・・・・・・・・は？」
「いや、『は？』以外の相槌があるか？何やってんだあんた」
「うん。あんたが馬鹿なのは分かった。そしてその自業自得に何で私が出向かなきゃならないのか理解できない」
一方しか聞こえない会話だけれど、どうも相当向こうが馬鹿なことをやったみたいだ。
続けてしばらくそんな会話を繰り返した後、カイナは通話を切った。
「どうも馬鹿が馬鹿やったみたいでちょっと治療してくるわ」

／

喫茶店のある、地下鉄の交通手段の密集した繁華街方面の終点駅。
そこからしばらく行ってコンクリート製の巨木の数々とおさらばすると見えてくる一群の施設。
人体実験を行う地下施設も健在、そこに保存されているサンプルも相変わらず。
出入りする人物も全くもって健在で相変わらずなその地獄の中で、
「あのな？一応丁寧に訊いてやるんだが・・・・・・何をやってるんですかこの馬鹿野郎」
高価な調度品に囲まれた一室の床に散らばるワインボトルの数々を呆れ顔で一瞥して宮沢荷稲はそんな一言を吐いた。
「・・・そういう掛け合いはいい」
訪問者である彼女の冗談に返すだけの余裕がない、そもそもそんな技能も持ち合わせていない部屋の主は机に肘をついて両手で頭を抱えている。
内海岱斉。神戸における万化統一機構を任される院長はしかし今、
「とにかくこの二日酔いを治せ」
「何偉そうほざきやがるか酔っ払い」

アルコールの過剰摂取で苦しんでいた。
「身体が強くもないくせにこんなに呑むなよな・・・」
そう言いつつ、右手を彼の頭に置いて、血中のアセトアルデヒドを分解させる。
酔いと頭痛が抜けたようで彼はいきなり顔をバッと上げていつも通りの鉄面皮を取り戻した。
「・・・礼を言う」
「ったく、あんな姿葉月が見たら吹いてるぞ」
彼女は机から離れて部屋にある椅子を引っ張り、それに座った。
外出するには問題ありな、わざわざプライベート用に改造された白衣の胸元辺りが携帯と札束で膨らんでいる。
そのあまりにも不恰好な姿を気にすることなく、彼女は訊く。
「で？昨日のことで上から何か言われた？」
「別段」
彼は淡白に応じる。
「ふぅん・・・。えらく葉月を気に入ったみたいじゃん」
「アレは尽く我々の期待に応えている」
「そうか？先代の方がマシだったと思うんだけどな。不安定すぎるだろ葉月は」
「前の織神が安定・・・だと？」
若干苦々しさを滲ませた彼。
それを見て彼女は笑った。
「いや、うん。あの時は大変だったみたいだけどさ。
私からみて機構は３０年前と同じ過ちを犯そうとしてるように思えるぜ？」
「やれることは全てやっている。それでも駄目なら、また次に移るまでだ。
・・・何百年だろうと繰り返せばいい」
それはおよそ目標達成を悲願するあまり失敗を恐れる組織の指揮者（リーダー）には相応しくない。

「はっ、老い知らずだからこその言葉だよな。
賢者の石だっけか？特権階級は言うことが違うなー」
「不老に効果があるのは石を入れて放置した水だ。石そのものに利用価値はない。
そも、アレは他に呼称しようがないからそう呼ばれているに過ぎず。正確には賢者の石と呼称すべきでない代物だ」
「不老の水を生成する石の名前なんて他につけようがない・・・か。
あれ、ホルマリンと違って化学変化を起こすこともないから保存溶液に重宝されてるらしいな」
「完全にそのままサンプルを保存できる故、当然の応用だ」
「応用？それは基礎の理解できてる奴のすることだろ？
あの石が何であるかなんてまるで分からずに未知物質（けんじゃのいし）なんて呼んでる連中の台詞じゃないね。
石にしたってSPSにしたって、ソフィ・シューレルの忘れ形見（ロストテクノロジー）。どうやって創ったのかも分からない代物だ。
数十年経った今でも扱いきれずにいるんだから笑えるよな」
「そのロストテクノロジーに頼っているのはお前も同じだ。だいたいそんな謎など思考するにも値しない。
機構にしろ、・・・お前にしろ案ずべきは目的を果たすことだ。
そのためにも余計なことに感情を動かすな。それはお前の考えるべきことではない」
「・・・・・・まぁ、な。
だからこそちょっと心配なんだ。３０年前と変わり映えしないっていうかさ」
「そうならないために最善は尽している」
「３０年前の約束は守れよ。そのためにお互い取引してるんだから。
一研究員だったあんたがその地位まで上り詰めたのは正直私や・・・特に未来との交渉ができる唯一の人物――っていうダシがあったからだぜ？
未来はいくら万可統一機構だろうと手の出せない所にいるからな」

「代わりに学園内に居ながら研究所にちょっかいを出されず、どころか数億の小遣いをせびっているだろう」
「それはオマケだからなー。
ま、本命の方を守ってもらえれば、私らから文句はないさ」
じゃあな、と立ち上がって背を向ける。
葉月の祇堂学園入学騒動ぶり、久しぶりに顔を付き合わせた分の会話は済んだと言わんばかりにスタスタと歩き出した。
彼の方は机に両肘をつくお決まりのポーズを崩さずに、机に置かれた写真立てに目をやった。
それには30年ほど前の1つの写真が収まっている――――。
「私はお前がその目の下の化粧を落とす日が来ることを願っている」
彼女はぴたりと止まる。それから振り返って、
「ところで、訊こーと思ってたんだけどよ。あんたの暴飲、自棄酒か?それとも嬉酒か?」
意地悪なその問いに彼は答えなかった。

第３１話－　翌日翌朝。－Ｂｏｕｒｇｅｏｉｓ－（後書き）

文字数が少ない上に、平坦な話になった気がしないでもないです。
前の話とのテンションの差にやられてますね、不甲斐ない。

タイトルは第一章序章－１と対応、サブタイルはブルジョワジー＝特権階級です。
主役はカイナ。でも岩男が目立った気もしないでもないなぁ。
岱斉は旧知の知り合いには割と饒舌なのです。
そしてやたらとお金の話が出てきますね。
彼らの財源は国税から秘密裏に漏れてきてますが、多分幾ら予算やらを切り詰めてもなくならないんだろうなとニュースを見ながら思ったり。
とんでもない悪党がいたもんだ。

第３２話ー　先輩後輩。ーＹｏｕｔｈー（前書き）

更新遅くなってすみません。
ただ今ヌルヌル学園日常編です。

第３２話－　先輩後輩。－Ｙｏｕｔｈ－

２学期が始まった翌日、多くの生徒にとって鬱なテストがやってくる。

それも定期考査と違って１日に主要５教科を一気に終わらせるというやっつけ仕事なので、体育祭の成績が芳しくない生徒はなくなく夏休みを勉強三昧で過ごすことになったに違いない。

もっとも、それはメインであるバトルロワイアルに参加できなかった俺も同じことだ。

成績は大丈夫だとは思うけど、分子式が書けなかったから理科の満点は既にない。

数学は計算間違いがなければいける・・・国語や英語に関しては学校での試験なんて範囲内しかでないのだから、１００点自体は難しくないし・・・。

しかしまぁ、５教科全て２０分以上時間を残して、机に突っ伏していた葉月は全教科満点（オールコンプリート）だろうから、今回も負けか。

賢者の欠片（サヴァンズ・フラグ）とやらで絶対暗記な相手に勝負を挑む方が間違いな気もするけどなぁ。

例え全教科満点（オールコンプリート）できたとしても引き分けの可能性が高いこの勝負自体が過ちか。

「死ぬ・・・」

そんなことを言って、精根尽き果てている隆。

どうせ体育祭の成績でカバーできるだろうに、何だかんだでしっかりと徹夜したらしい彼は根が真面目なのだとつくづく思う。

ホームルームも終わって自由解散を始めるクラスメートを見回すと、珍しく朝風と聡一が話し合っていた。

熱心に言葉を交わしているけども、あの２人に共通する話題があっただろうか？

そんな疑問を抱きつつ視界に葉月を入れる。

葉月は細川と1つのノートを覗き込んでいた。
日々無気力に過ごす葉月も能力向上だけは熱心にやっているので、あれもその一環かもしれない。
珍しい能力同士、通ずるものがあるのだろう。
ノートの端に見えるいなっちーの理由が気になるところだけど、その謎は解明されない可能性が高い。
細川は自分で描いた絵の意図など既に忘却してるだろう。
さて、能力向上に関して言えばクラスの中で最も伸び悩んでいる俺もこうぼうっとしてはいられない。
そろそろグループの訓練所に行くか。

＃

「自分が思うに、君はこの施設を壊す気なんだ」
目つきが鋭すぎて美人が台無しだと評判なグループの先輩にそんなことを言われた。
「熱心に練習するのは大歓迎だがな。その情熱に比例して増していく威力は何とかならんか」
威力のことだけを言えば、間違いなく報われている努力。
その努力の度に訓練所の方が悲鳴をあげ始めたここ最近、さすがに先輩も対策を考えなくてはならなくなったらしい。
「いっそ醐楓（ごふう）に任せてみるか・・・？」
「？誰です、それ？」
「圧搾念力。灯秋高の3本柱の1本だ。別名、人間圧搾機」
「・・・その”人間”の意味は、圧搾機みたいな人間ですか？それとも・・・」
「人間を圧搾できるって意味だな。まぁ無論やった事はないと思うが。・・・いや、1度、2度やってるかもしれん」
兎傘さんの時も思ったけど何で先輩方はそんな知人関係ばかりお持ちなのだろう。

交友の窓口が鍵も格子も当然鍵すらない状態で空きっぱなしになってるに違いない。
「ただ、あの男には欠点があってな」
あぁ、さっきの人間圧搾機は欠点じゃないんですか。・・・ないんですかね?
「可愛い男の子にしか興味がないというのが珠の瑕なんだ」
「・・・・・・」
珠自体が真っ二つに割れそうなほどの瑕だった。
数秒沈黙する2人。
俺をしばし見定めて先輩は、
「まぁ、世の中等価交換(ギブ・アンドテイク)というし――――」
「絶対その人紹介しないでください」
何を考えてるんだこの人。
「うむ、そうだな。さすがに何かあったら自分も責任取れん。が・・・本当にどうするかな?」
「俺、もう1つぐらいアテがありますけど・・・」
というか何かって何?それほどその彼は重度の・・・?
「・・・・・そのアテの結果、さらに破壊力だけが増した場合・・・自分は君を醐楓に引き渡すぞ」
「冗談やめてください」
「冗談なものか」
冗談にしてください・・・。
そこで、先輩はふむと、小首を傾げた。
「しかし、君。前々から思っていたがその”俺”という一人称は似合ってないな」
「似合うかどうかでやってはないんですが」
「例の彼女の手前格好つけているんだろう?」
「彼女じゃない・・・というのはもう言い疲れましたが・・・格好つけてもないですよ。
単に”僕”より”俺”の方が確(しっか)りしてるように見える気がするん

で」
「『形から入る』というヤツだな。ニュアンス的には『病は気から』と同じカテゴリだが。
君はあの娘をサポートできるだけの甲斐性が欲しいのか。ま、その”しっかり”にしてもあの娘を意識したものには違うまい。
ならやはり君はあの娘を彼女と呼ぶことになるだろうに」
「親しい関係が男女の仲とは決まってないでしょう？」
「異性であることは関係ないよ。男女に友情がないとも言わん。
逆に同性でも恋愛は成立するしな」
「・・・」
「が、自分が見るに君とあの娘はどうも恋愛的だ。
お互いが相手のためなら惜しみない愛情を注いでいる」
「俺の方はともかく、葉月がそうだってなんで思うんですか？それほど面識はなかった気がするんですが」
「そうでもないさ。君は知らんだろうが、あの娘時々ここに来るからな。
君が中部屋の中で訓練してるのをこっそり見てしばらくして帰る」
「そういうことは教えてくださいよ・・・」
「嫌だ。で、そんなのを観察していると君達は彼氏彼女というのが一番しっくりくるわけだな。
君は自らとあの娘が恋仲だと勘違いされることを疑問に思っているようだが、そう思われて仕方ないのさ。
親愛だのなんだの言う割りに、過保護すぎるほどの愛情を注いでいるのが傍目から見て一目瞭然なんだから。
親子のように上下関係があるわけでもなく、兄弟姉妹の身内としての信頼もない。
大切にしすぎて、何をするにも心配で心配で仕方ないといった風だ。
だから君はあの娘を守れるだけの力が欲しいんだろう」
そう断言して言及されて、改めてそのことを考えてみる。

俺と葉月の関係は何なのか。
友情とは違う、もっと親密な仲。
つるむといった感じではなく、自然に近くにいる存在。
出会ってそれほど経ってはいないけど、憧れて。
危なっかしいその姿に、不安になって。
気づけば目で追って何をしているのかを観察している・・・。
「そうかもしれませんね・・・」
「うむ。そして何かを欲するというのは現状に満足してない証拠でもある。
守りたいというが、結局それは2人の関係性の発展も意味することになる。
となると、やはりそれは恋仲だよ」
「分かりませんよ?実際どんな位置に落ち着くかなんて」
「まぁ、予想は予想だからな。だからどうなるかはお楽しみだ。
人間観察が自分の趣味でね。期待してるぞ、色々と」
「嫌な趣味ですね・・・」
「変人収集と女装が趣味な優男にも同じこと言われた」
「そっちもそっちで遠慮したい感じです・・・」
「交友関係なんて知り合ってしまったら勝手にできるものだから不可避だぞ。
・・・と、そろそろ逸れすぎた話を元に戻した方がいいか。
目標があることはいいことだが、やはり君、”僕”の方が似合ってる」
「・・・そういえばそんな話でしたね、最初は」
「今はともかく、醐楓に紹介する時は”僕”の方が受けがいいからな」
「そこまで話を戻しますか!というかその話は断固拒否します!」
「人間、なりふり構わなくなると何でもするようになるんだがな・・・」
「不気味なことを言わないでください・・・。

あと、思ったんですが、葉月と恋仲と勘違いされるって、そもそも先輩は葉月が元男って知ってますよね？」

「滅多にない形骸変容（メタモルフォーゼ）の話だ。性転換のことも含めて噂にはなってるさ。それを考慮しても、ということだ。

言っただろう？恋愛に性別は関係ないと」

くくくといやらしい笑いを漏らしながら、美人なのに色んな意味で本当に残念な先輩は去っていった。

＃

日の落ちた学園都市の駅周辺。

辺りが暗くなって一層際立った店内の明かりが羽虫を誘うように生徒を集めている。

仲間同士で何やら熱心に話し合っている男子生徒。ドリンクバーだけで数時間も居座り続けているのだろう女子高生。共同レポートでも書いているのか分厚い書籍を幾つも広げている大学生。

そんな夏休みの間よりも賑わっている飲食店の様子を、同じく飲食店のガラス壁越しに眺める。

結局ろくに訓練もできないままに一日を終えた俺は今、とあるファミリーレストランに居た。

例のアテ――兎傘さんに紹介してもらった発火能力者（パイロキネシス）と会うためだ。

7時にこのファミレスという約束である。

席も決められていて、どうもこの席は向こう側の特等席と化しているらしい。

毎日来るほどのお得意さんなのか、この時間帯ここに来る生徒達の中での暗黙の了解なのか・・・まぁ、席は空いていた。

時計を確認すると6時半。

頼みごとにきた身として早めの到着だ。

ロイヤルミルクティーを頼んで一応客としての礼儀も果たし、カ

バンの中から暇つぶしにと資料を取り出す。
『ＰＫの系統と色別の理論－色彩混合の可能性について－』。
葉月から貰ったものだ。
表紙に酷く真面目な『持出禁』の判子が押されているのが怖い限りなものの、逆に言えばそれほど貴重な資料ということでそうそう目にできるものではないんだろう。
しっかり製本されている資料で、約５００ページ。
表紙は素っ気無くタイトルだけで、裏表紙に価格表示やバーコードがないところから見ても、市販されているものではなく、研究者間で知識を共有するために作られた配布資料の１つだったと推測できる。
ソフトカバーの表紙を捲るといきなり目次。本当に飾り気がない。
そして本文は、
『本書においてまず念頭に置いて欲しい事柄は、本書はＰＫと呼ばれる出力系能力者の他方傾向既存系統樹を利用し、その図の限りでない中間系統能力をさらに重ねた上で、色別理論を用いて簡略化し人為的、意識的な変色・混色の可能性を仮定するものである。故に突発的、自然発生した特殊事例は扱わず、ＰＫ次世代型の在り方を推定して通常ＰＫを次世代型へと移行させる方法を論じる。尚、サイコキネンシスの系統について特別詳し――――』
「・・・・・うん」
何だこの難解な前書き。読み解くのに補助書籍のいる現代書物になんて初めて出会った。
確認のために後ろの方を捲ってみるけれど用語集は載っていない。
葉月はこのレベルのものをサクサク読み進めるのだろうな・・・。
とりあえずわからない単語なんかを書き出して片っ端から調べないと読破は難しい。
ネット環境がないここでは読めない。よって、まるで暇つぶしにならないわけだ。
甘いミルクティーを口に含んで、口内で遊ばせる。

仕方ない、ケータイで小説でも読むか――――

「おーぅ、お早いお着きだな」

どうも自分にかけられた声に振り向くと、筋肉質なスキンヘッドなアンチャンが手を挙げていた。

下川邦明（しもがわくにあき）さん。

兎傘さんの口調からして、年下・・・高校2年以下のはずなのだけど。

随分と立派な方がいらっしゃった・・・。

「外国じゃあマナー違反らしぜ？ま、ここはジパングなわけだが、と・・・すまねぇが先に夕飯注文していいか？」

「あ、はい」

彼は向かい側に座って、メニューは見ずに呼び出しボタンを押した。

「いつものエスカルゴと今日はリブステーキ、あとドリンクバー」

それから煙草を取り出し咥え人差し指の腹を押し付けて火をつける。

「このナリだからな。まず未成年と疑われることはねぇんだ」

「・・・それでも年齢認証は店でも自販機でも行ってるはずですが？」

だからそもそも煙草自体が手に入るというのも問題なのだけど。

「煙草もカードもネットで買えるさ。需要があるなら何でも売りモンになるご時世だからな」

嫌なご時世だ。

確かに人目に多く触れるネットオークションでさえ、違法品が有り触れている時代ではあるけれど。

いや、というかそれよりも、

「失礼ながらお尋ねしますが、もしかしてアウトローなお人ですか？」

「まさか。俺は単なる不良っ子だぜ？カワイー悪戯にしか手を出せねぇ臆病モンだ」

スキンヘッドの厳つ顔で言われても説得力は皆無だったり。
「煙草に酒、禁止されてるとどうもやりたくなるってのが人情ってもんだろ？」
「ワインは一度呑んだことがありますけど、煙草は身体に悪いですよ？」
「承知した上でだからいいんだよ。
ったく最近、箱にグロイ煙草被害の写真貼り付けるようになったろ？黒い肺とか抜けた歯とか。こちとら分かって吸ってんだからせめて気持ちよく吸わしてくれよと言いたいね」
未成年が言ってもね。
と、彼の頼んだ料理が運ばれてき、彼はさっそくエスカルゴの方から手をつけ始めた。
ガーリックとオリーブオイルで焼かれた陸貝。好みが分かれる・・・いや日本人には馴染みのない一品だ。
まだカエルの方が浸透しているんじゃないだろうか？そうでもないかな。
「で？確か能力のコントロールがうまくできないらしいな」
「はい。色々努力したんですが、その結果威力ばかり上がって訓練所で手が負えないと言われまして」
「訓練所ってサイコ系のだから・・・祇堂学園の近くのあれか。あそこの強度は相当だったはずだがな。
ま、電話で聞いた限り、俺のやった練習法は有効そうだったが」
「本当ですか！？」
「騒乱念力（ポルターガイスト）・・・周りを無差別に破壊するんだろ？俺も最初似たような感じだったからな。
えーと、朽網だっけ？俺の能力がどうだったか聞いてるか？」
「火達磨になると聞きました」
「火達磨・・・いいねぇその表現。兎先輩は『火男』とかとんでもねぇセンスを見せてくれたが、それの方がしっくりくるな、スキンヘッドなだけに」

・・・一応弁解しておくけれど、別にそんなうまいこと言ったつもりない。断じてない。

仮にも先輩の身体的特徴を弄れるほどの蛮勇など持ち合わせておりません。

「そう、俺の能力は火が移って燃えてる人間と変わらなかったんだ。だが、そうなるとちょっと疑問が湧かねぇか？比喩表現が火達磨な状態になっておきながら、どうして死んでないのかってよ」

「・・・え？でもそれは能力だから・・・」

「この場合、能力だからっていうのはかんけーねぇ。確かに特定のモノを燃やさないっていう火炎操者はいるが・・・かなり特殊な例だ。

能力の制御ができなくなって自分の能力で怪我をするヤツは多いさ。兎先輩ですら間違えたら自分が死にかねない故に能力が制限されてる。

当時の俺が本当に何にも制御できてなかったら鼻や口が塞がれた時点で窒息死してる。炎で焼け死ななくてもな。

朽網、お前の騒乱念力（ポルターガイスト）も自分の周りにしか展開されてないんだろ？

ＰＫ系の未発達能力の名称である騒乱念力（ポルターガイスト）は、展開点を定められない能力者を指す。

敵見方関係なく、自分すらも関係なく攻撃してしまう危険能力なんだよ、本来は。

つまりだ。結論を言っちまえば、コントロールができないできないと言いながらお前だってしっかり自分の身だけは守ってるってことになる」

「確かに、自分のいる座標位置に能力が及べば身体が捻じ切れるでしょうね・・・」

「そもそも捻じ切れるほどの力は出ねぇんだけどな、騒乱念力（ポルターガイスト）は。

無意識にそこだけはしっかりコントロールしてんだよ。だからそれをうまく利用すればいい。

火達磨式上達法その１、無意識を意識しろ。その２、無能力の空

間を広げるように訓練しろ。
　対象物を浮かすとかそういういきなりできないことをやろうとするよりは元々できているのを発展させる方がやりやすい。
　俺のやってたのはな、ほら能力が届く限界ってあるだろ？自分の身体に沿うようになってる能力の及ばない範囲を少しずつ能力展開の限界まで広げていくって方法だ。
　広げるっていう制御に加えて能力の有効範囲を伸ばす訓練にもなる。
　とりあえず試してみるといい」
「ありがとうございます」
　１つ突破口を見つけることはできた。
　色々と考慮しなければならない問題もあるけれど、モニターをしている能力波反発球（ボール）と並行して何とか成果を上げたい。
「おう。と・・・デザート頼むか。お前はどうする？」
　ステーキも食べ終わった彼は皿を端に追いやり、再びボタンを押した。
「いえ、飲み物だけで十分ですから」
　店の特性ドリンクも頼めばおかわりは自由だし。
　今度はメニューを取って注文を吟味している彼。
　結局、やってきた店員に、
「そうか。じゃ、俺はレモンジェラートとチョコケーキ」
　そう言った。
　それからドリンクバーを取りに行き、メロンソーダを持って戻ってくる。
「ここにはよく来るんですか？」
「最近はな。知ってるか、学園都市の放火魔」
「兎傘さんから聞いたことはあります」
　記憶を遡れば、通り魔と並べて紹介されていた気が。
　インパクトのある通り魔の方が印象に残っているけど。
「地味に壁を焦がす人とか」

「ああ、それがこないだ一軒燃やしたんだ」
「え？」
「そういうヤツにありがちなことでな。エスカレートしてきたんで俺らみたいな同じ発火能力（パイロキネシス）者が網を張ってる」
「ソレって警察の仕事ですよね？」
「あるいはウラカタだな。でもまぁ、こういうのは身内の方が早い。情報交換が盛んだし、ほったらかしてると自分らにもトバッチリがくるからな。
　学校でもグループって銘打って上級生含めて色々と知人関係が広げてるんで自然にネットワークができるだろ。
　そういうのもあって同能力者の繋がりは結構強いわけだ」
「じゃあ、こうしてファミレスにいるのも・・・」
「連絡が入ったらすぐ出られるようにな。駐在ポイントによく使うんだ。ま、ぶっちゃければただの溜まり場だが。何かしらトラブルなんかがあった場合にコンタクトが取りやすいしな」
「面倒くさくないですか？別に義務があるわけでもないんでしょう？」
　放火魔の活動時間が何時かは知らないけれど、深夜には違いない。そんな時間までここで待機するというのは有意義とは思えないし。
「そんな面倒なことに首を突っ込むのも青春さ。この学園の連中は非日常的なこと好きだろ？能力名やら通り名やら演出めいてるのもそのためだな。
　それに夜中まで仲間とダベる生活も悪くないぞ？」
「能力仲間ですか・・・あ、でもそれならここじゃなくて兎傘さんの焼肉屋でもいいんじゃいんですか？」
「んー、その方が便利かもしれねぇーが、あの人自分の店に来られるの嫌うんだ。いや、給仕服姿を見られるのが嫌なのか？」
「あー・・・そういえば一度行った時、嫌がってましたね」
「だろ？あれは照れてんのか、それとも前に写真に取られてプロマイドにされたからか・・・」

「後者でしょう・・・」
「兎先輩は人気あるからなー、高く売れるんだぜ？」
「あなたがやったんですか・・・」
「火炎操作系最高峰の１人、面倒見のいい姉御肌、あれちょっとマジでヤバイ何あのバケモノ・・・の兎傘鮮香。非常に人気物件だな」
「何か１つ変なものが混じってましたが・・・やっぱりあの人相当すごい人なんですね」
「当たり前だ。炎海紅泥の火兎、絢爛浄火の鳳凰、炎色反応の火の玉と言えば火神三柱と呼ばれるほどの有名人だぜ。
鳳凰は沖縄、火の玉は青森にいるな」
「みごとに北と南に分かれてますね。やたらと逸脱した人を見てきたせいで神戸の学園都市は変に進んでるのかと思ってました」
「ああ。神戸の学園都市しか知らないと分かりにくいが、他の学園都市も色々特色があって面白いぞ。
北海道はほら、土地が広いんで大掛かりの増設して一時期学園入居希望者を集めてたろ、能力者になろう格安プランとか言って。あれの世代が多いからかのんびりしてるな。
あそこ設備が他の学園よりいいんで、熱心な能力者がそれ目当てに通ったりしてるらしい。
千葉とかは東京のプライドでやってるようなもんだ。３０年前東京にあった研究所のほとんどが他県に移るって動きが出てきた頃辺りに、日本の首都に学園都市がないのはおかしいとか当時の都知事が言って、周辺県に作らせたんだと。
だからかしらねぇが、あそこら辺の学園都市はあんまり賑わってないな。群馬は大きいが・・・能力開発は西日本が中心だ。
で、沖縄はあれだ。米軍の基地跡を利用して作られた要塞型の学園都市。あそこはあっちで土地柄かのんびりしてるけどな。
まぁ、修学旅行でどっかの学園都市には行くことになるからその時にでも肌で感じてみるといいさ」
「修学旅行ですか。しばらくお預けの楽しみになりますけど。

・・・今は目下学園祭が楽しみですね」
「体育祭と違ってホント祭って感じだしな。開催は１０月の初旬だから・・・もう2週間もすれば準備しやり始めるだろ。
模擬店作りが一番楽しいんだ、あれは」
「でしょうね。まぁ、中一はそっちでの参加はできないですが」
「ん？いやできるぞ」
「え？だってそういう規則になってるって・・・」
「いやいやいや。ところが、だ。その規則、抜け道があってだな。規則を読んでみれば分かることなんだが――――」
・・・・・・・・・・・・・・。
なるほど。
その後に続く説明を聞いて納得する。
学園都市全体としての学園祭規則、おそらくそれを作ったのは我が祇堂一中の遊び人（こうちょう）だな。
そういう裏技的な方法をわざと用意するところがなんとも・・・。
けれど、そうれはいいことを聞いた。
聡一辺りに教えたら喜びそうだ。

第３２話－　先輩後輩。－Ｙｏｕｔｈ－（後書き）

寒くなったからか脳の活動まで停止しかかっている黒咲です。
耳の後ろが痛くなってきて頭痛まで発展してます。

小説の方はしばらくこんな感じ・・・かどうかは分かりません。
バトルやらねーのかよという方、催促も兼ねてコメントをくれると嬉しいです。
投票もやってくれるとさらに黒咲は喜びます。

・・・寒いと手も動かなくなりますね。ホント。
リアルタイムでキーボードが押しにくいです。
誰か即座に手を暖める手段知りませんか？

第３３話－　人生遊戯。－Ｅｖｅｎｔ－

久しぶりにバイト仲間で鍋を囲んだその帰り。
「・・・だっ、だからね？・・・なんか・・・・・・その・・・」
私鉄を降りた駅前で立ち止まり、自販機でミックスオレを買う。
「・・・おお、お上さんがね？用事があるとか・ぁ・・ないとか・・・で」
プルタップを片手で開けて片手で飲み干し、空き缶はゴミ箱に放り込んだ。
「明後日、ば・か万可統一機構に・・・来てほしいいいいって・・・」
その報告を何故彼女達を挟んでするのか疑問に思い。すぐさま、先日メールを見ずに消した事を思い出す。
あれがその連絡だったのかは定かではないけれど、伝達の確実性を欠くと認識はしたらしい。
まぁ、それはいいや。
左手で耳に当てている携帯を右手に持ち直す。
さっきから、ずっと気になっているのは、
「智香さん、何でそんな怯えてるの？」
うろたえ方が尋常ではない電話相手だ。
「ごんめんなさいごめんなさいごめんなさい！すみません、身の程知らずなことしました！上の命令だったんです！私どもは弱みを握られて操られてる使い捨ての駒ですのでごめんなさいめごんなさい！」
「あのね？なんで僕は謝られないといけないのかな？」
「お、怒ってない？」
「これ以上謝ったら怒るけど？」
「・・・・・・」
「で、伝言があるんだよね？明後日、機構に行け。・・・何時に何

でかは知ってる？」
「時間は午前１０時だけど・・・何でかは知らないわ。そこまで知らされる身分じゃないもの。遠出するんで数日間は戻れないから、都合をつけてくるようにって」
数日の遠出ね。
何を考えているのか、数通りほど浮かぶけれど、多すぎて絞れない。
絞ったところであんまり意味はないか。
「まぁ、了解しました。こっちが忘れてたら迎えに来てって言っといて」
「勘弁して・・・」
そんな彼女の悲痛な呻き声を聞き流して通話を切る。
始業式も行けず、始まってまだ数回しか行けていない学校をさらに休むことになるのかな。
どうせ予定なんてないのでいいといえばいいんだけど、もったいない気はする。
さて、明日はクシロ達にそれを伝えて・・・・・そのまま裏方の秘密部屋にでも寄ってみようか。
何か色々と問題がありそうだし。

＃

箱詰めで丁寧に並べられた弾薬を取り出してはマガジンに詰め込んでいく。
５０発分入っているその箱は普通に売られているものだ。ああ、言葉が足りないか。正確には”外国では”普通に。
・３２ＡＣＰ弾。Ｖｚ．６１（スコーピオン）用にくすねてきた弾薬だった。
弾入りのマガジン自体もいくらか見つかったのだけど、今はそれに加えて空のマガジンも予備にと弾を入れている最中だ。
使うことはそうないだろうけど、一応苦手としている長・中距離

の対策として用意しておくに越したことはない。
裏方という組織はどうやら実際に存在するようなので、機会が皆無ということはないだろう。
しかし懸案事項としては、近距離戦のために身体強化を施した際に、銃のトリガー辺りを壊さないかという心配もある。耐久性はやっぱり気になるところだ。
連続使用に耐えられなければ短機関銃（サブマシンガン）の意味がない。
「マシンガンよりグレネードの方が勝手がいいかな・・・」
あるいは手榴弾。あれなら壊れるという心配はないし。
音響手榴弾（スタングレネード）は非常に有効な武器だと思う。
「物騒なこと言わないでよ・・・」
テーブルに広げた弾薬や分解された他の拳銃などを顔をしかめて眺める智香さん。
「そう？能力者を相手にするなら火力は大切だと思うけどなぁ。皆だって持ってはいるんでしょ？」
「まぁ、持ってはいるけどね？おいそれと使えるものじゃあないんだよ？」
同じくテーブルで銃を解体している佐奈さんが眉を寄せマガジンから弾薬を取り出して捨てた。
湿気ていたようだ。掃除されず湿気の篭った室内にほったらかしたりするからだ。
今日、僕がこうして銃の弄っていなければそのまま整備されずに、有事まで発覚しなかったんだろうな。
冷却の出力系能力者である彼女にとっては拳銃などサブでしかないんだろうけど。
とりあえず、静かな室内で、思い思いの行動を取っているこの空間は良好と言えなくも――――、
「というか、何普通に来てるのですか葉月サン」
「他人行儀な態度はいただけないよ、雪成君（スコービオン）」
先ほど入れたマガジンを装着したＶｚ．６１を向ける。

雪成君はホールドアップ。
不思議だよね。それほど興味があったわけでもないんだけど持つと撃ちたくなる。
「・・・ストラップでもつけるかな」
黒いボディー不釣合いなファンシーでファンキーなのを。
「とりあえず下ろして・・・」
まぁ、これ以上銃を向けているとトリガーを引きそうだし。
マガジンはそのままに安全装置をロックして、ストック分を先にポーチにしまう。Ｖｚ.（スコーピオン）６１はその上にして、一応取り出しやすくはしておく。
明日持って行くつもりなのだ。
機構の遠出というのはまぁ学園都市の外だろうけど、他に何か必要な物はあるだろうか？
必要ないとは思いつつ財布には１０万ほど入れてあるし、携帯は電池式の充電器を含めて用意してる。
暇を潰せるゲーム機も１台、資料なども数冊ある。
何分旅行の準備なんて初めての経験なので勝手が分からないのだ。
着替えは用意されているか、あるいは適当に買って向こうで処分してしまえばいいので下着以外は要らない。
当日着ていく動きやすい服装はここに置いてある予備が適当だろう・・・。
盗撮・・・もとい監察されていることは知っているとはいえ、アパートに詰め込まれた少女趣味ギリギリな服装を機構の関係者に見られるのは嫌だ。
「さっさと行ってさっさと帰ってこれればいいんだけど」
瑞流君が淹れてくれたアイリッシュ・コーヒーをチビチビ生クリームのフロートと共に口にする。
コーヒーと名がついているもののコレはカクテルなので基本未成年の飲めるものじゃあない。
何かお酒が入ったもの、と頼んでみたらコレが出てきた。

アイリッシュ・ウイスキーをベースにしてるらしいけど、これでやっぱりこの部屋普通にアルコールも置いていることが判明した。
掃除の時も水周りは綺麗だったから弄らなかったし、その辺りは瑞流君の担当なので使うこと自体がないから確認してなかったんだよね。
今度くすねようか？
日本酒や焼酎なんかも試してみたい。
あるかな？
たぶん棚の奥にアルコール類はしまってあると・・・、と目を向けると所在無さ気な瑞流君と目が合った。
咄嗟に顔を背けられる。
・・・上等な態度デスネ。
覚えてなよ。
しかし、まぁ、もっと酷いのがいるので今は保留だ。
怖がられの程度で言えば、智香さんと瑞流君は中、雪成君と佐奈さんは小と言った感じなのだけれども、それ以上なのが1人。
その1人はここにいない。
「亮輔君が来てないよね」
「アレ以来・・・・・ひっ、引き篭もりに逆戻り・・・」
仮にもグレーゾーンの人間がアレ程度で参るのはいかがなものかと思うのだけど。
そしてそれは間違いなく僕が原因だろう。
部屋を出なければ僕にあることはない・・・と。
本当、上等だ。
「よし・・・見舞いに行こう」
立ち上がる前にがしっと智香さんが両肩を掴む。
「絶っっ対駄目！ショック死しちゃう！」
「・・・ショック死とショック療法って似てるよね」
「似てない！1回目であんなに苦しんでたのよ！2回目はどうなるか！？」

アナフラキシーショックだよね、それは。
というか人を抗原みたいに言わないでほしい。
「前回は呼吸困難。・・・次は心臓が停止しかねないぞ」
雪成君も随分なこと言ってくれる。
「ねぇ知ってる?腹上死って、心拍異常から心停止するのが一因らしいよ?」
「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」
沈黙する皆を見回してうんうんと頷く。
「・・・というわけで、行こうか」
「ちょっ!『というわけで』って何!?今の間に何か意思疎通できることあった!!?」
「・・・ショック死＝心停止(イコール)＝腹上死(イコール)で、なんとなく幸せ感が増しそうじゃない?」
「しねぇよ!真逆だその2つは!恐怖と快楽だぞ!等号(イコール)で繋ぐな!」
瑞流君まで大声で否定。先ほどの落ち着きのなさは何処へやら。
まぁそれはいい傾向としておこう。
「痛感も快感も同じ皮膚から得るモノだし」
「痛感!?痛感って言ったよな今!痛みつける気まんまんじゃねぇーか!」
そんな瑞流君の叫びを聞き流し、踵を返して部屋を出る。
亮輔君の住所は知らないけれど、後から慌ててついてくる彼らが知っているだろう。

＃

「何気にしっかり土産持ってくのな」
デパートで買ったチョコレートの缶詰めを持たされた瑞流君が紙袋からその缶を持ち上げてしげしげと眺めながら呟いた。
「菓子に5千とか。金遣い荒いし」
以前の調子を取り戻してくれたのはいいのだけど、

「ゲーム機をホイホイと買う人に言われたくないよ」
「携帯ゲームは世代の移り変わりが速いんだよ。スペック的にはあんまり変わらねぇのに」
「だったら買い替える必要もないでしょ・・・」
今僕のポーチに入っているゲーム機はもちろん旧世代だ。
それにしたって機能は劣らないし、モノはどっしりしている方が安心感があると思う。
壊れてもいないのに乗り換えるほどのことでもないし、さすがに壊れるまで・・・というのは難しいけど、バッテリーが使える限り使い続けるのが使い切るというものだろう。
「それにそのお菓子は5千円出す価値はあるの」
「ただのチョコに？」
「あのね、そこら辺で市販されてるような安価なものと一緒にしないように。臭味のない風味高い上質なチョコレートは別格だから」
「そもそも俺甘いの駄目だし。板チョコ1つでもキツイ」
「板チョコって何で碁盤状になってるか知ってる？折って少しずつ食べるものなんだよ？1度で多量に食べるから気持ち悪くなるの。
その缶に入っているのもそうだけど、チョコレートって大抵1口サイズでしょ？1つ1つ大切に食べるものなんだよ。
袋入りのアメまるまるを1回で食べちゃう人いるけどアレは駄目。ああいうことしてるから1口分じゃ満足できなくなるんじゃない？」
納得できないで首を傾げている彼を尻目に、到着したのは学園都市から離れたニュータウン、その中に立っている1つのマンションだ。
高さは十数階が平均のようでクシロの所に比べると低いけれど、それでも高級マンションの1つでエントランスが豪奢。
学園都市誘致に際して、予想された富裕層のニーズに応えるために建てられたものだろう。
土地自体は狭いため地下に駐車場を持ってきていて、子供用の遊具があるようなマンションのコミュニティースペースは皆無だ。

出入り口は当然暗証番号式で、＃（シャープ）と４桁の数字を押さないと入れない。
カメラもついていて、相手を実際に確認して開錠できるタイプだ。
「暗証番号は？」
「部屋番号で呼び出して開けてもらえばいいのよ」
まぁ、それはそうなんだけど、
「僕がいると分かって開けると思う？」
「・・・・・・・・・・・・でも、ね。番号知らないし」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
結局、僕は隠れて佐奈さんが呼び出すことで中に進入を果たした。
エレベーターで８階まで昇り、亮輔君の号室はそこから一旦廊下を端まで行って非常用を兼ねている外付け階段を上った９階だ。
北側に沿ってついている廊下だけれど、北のベランダを確保すべく数階に１本といった形でしか通っていない。
階によって端の部屋は該当階のエレベーターからでは行くことができず、廊下のある階で一旦降りて端まで渡らなければならないのだ。
そしてその端にある９０８号室が彼の部屋。
ドアの前にてインターホンを押して応答を待つ。
けれど、スピーカーを通した応えはなく、いきなりドアが開いた。
「どぞ・・・ぞ・・・ぞぞ」
――バタン。
『どうぞ』という台詞と裏腹に、ドアは力強く閉められた。
というか、ぞぞ？
咄嗟にノブを掴み開けようとすると、途中でガッと抵抗がかかる。
チェーンロック。
実に素早い対処だった。
ただ、普通にキーロックすればよかったんじゃないかとも思えるけれど。

これでは中に入れない。
――バッキン。
入れないので、力任せにドアをこじ開けさせてもらった。
チェーンよりドアの金具の方が耐えられなかったようで捻じ曲がっている。
まぁ、とりあえずこれで状況は障害皆無（オールクリア）だ。
「お邪魔しまーす」
「ひっ、ひぎぃいいいいいいいいいいいい！」

#

「思うんだけど、僕は歳相応・・・以下の女の子なわけで、それを考えるとさほど怖がるようなものじゃないよね」
半そでに通した細い腕を見せびらかすように前に突き出してみる。
デフォルトでも力がでるようにしている腕だけれど、過度な肉つきはない。
「人は見た目じゃない、心だよ」
うん。よし、雪成君あとで覚えてろ。
伸ばした手をそのまま下ろしてテーブルの中央に置いた缶からチョコレートを摘む。
見るからにミルクチョコと分かる色合いにレース模様の描かれた四角だ。
十分にその外見を楽しんでから口に入れて舌でゆっくりと溶かし始める。
「だいたい・・・アレ程度のことでうろたえられる方が心外だよ」
「あの豹変ぶりをアレ程度・・・」
「豹変て大げさな。単に少しイラッとしただけで、突飛な行動を取ったつもりもないし」
「・・・そもそも、私達は詳しい情報を得られるような人間じゃな

いんだって。
葉月ちゃんのことも、普通の実験体としか認識してなかったの」
”普通の”というのは、ありがちな泣く泣く犠牲にされる被験者のことだろうか。
いるのかな、そんな『私被害者です』みたいな・・・ぁあ、あの毒舌幼女もいちおうそのカテゴリだった。
「なのに、虐殺してるし腕持ってくるし駄目出ししてるし狂乱してるし腕置いてくし・・・」
1つ、とてつもなく失礼極まりない単語が混じっているのは気のせい？
じゃないよね。間違いなく。
狂乱ってほどハイになった覚えは・・・・・・・・・・・・・うんいや、まぁ、
「・・・ギャップって大切だよね」
「ギャップが魅力以外に斥力として働くことを初めて知ったよ」
「アンチ・ギャップ萌えよね」
しれっと酷いことを言って、次々とチョコレートを取っていく雪成君と佐奈さん。
残念ながらティーバッグの紅茶をすすり一息。横目でテーブルから離れた位置で小さくなっている亮輔君を見る。
当然といえば当然だけど、ここは自分の部屋（フィールド）なのだからもう少し落ち着けないものか。
そもそもソレをどうにかするために来たのにこれでは意味がない。
何か、方法ないだろうか？
「・・・・・・」
考えが浮かばない。
いや、というか来るだけ来たけど飽きてきた。
面倒くさくもなってきた。
「瑞流君、暇だよ」
「何しに来たんだよ！やることねぇーんならもう帰ろうぜ精神衛生

を守るためにも！」
「・・・・・そうだね。精神衛生上悪いと思って控えていた君の数々の暴言に対する制裁を実行するためにも」
「ここにいますむしろここにいさせてくださいなんなら泊まっていきますごめんなさい」
そう。それでいいんだよ瑞流君（アホウドリ）は。
「で、何か遊べそうなものないの？」
「そういうのは部屋の主に聞けよ・・・・・あー、そうだな。ボードゲームがあったんじゃないか？なぁ、佐奈？」
「前に凝って作った奴でしょ？『人生ゲームはこんなんじゃねぇ！』とかゲーム中に叫んであんたが作り出した。
持って帰ったの亮輔だから・・・・・ねぇ亮輔アレまだある？」
未だに怯えている彼からその自作ゲームの在り処を聞き出した佐奈さんがダンボールを持ってくる。
缶を端に追いやってダンボールを中央に置いて開けると、まず出てきたのがボードと思われる手書きのマス盤。
随分大きなものでＡ４用紙を何枚も張り合わされてある。
それを床に敷いて、次に駒が出された。
最近はほとんど見ない野菜の形をした消しゴムにホッチキスの芯で手足や目に口が付け加えられているというシュールな駒だ。
トウモロコシ、トマト、ナス、ピーマン、ダイコン、ニンジン、ジャガイモ・・・・・。
その後にも色々とおかしな道具やカード、記入用の用紙らしき束まで出現し、それをプレイヤーに分けていく。
ルールが書かれている用紙を見ると、次のようなことが書かれていた。
『プレイヤーの初期年齢は２０歳から。２週＝１年換算で歳が上がり、８０歳で天寿を全うする』
・・・つまりリアル人生ゲームらしい。
『プレイヤーはサイコロを振って出た数分のマス目を移動して止

まったマス目のイベントをこなすが、以下のことは自分の番なら自由に行える。口座開設、出入金、借金、自殺、株・外貨取引』
マス目をチェックしてみるとスタート位置が見当たらず、ゴールも見当たらない。
これでどうやって勝敗をつけるのかというと、
『天寿を全うするか何らかの理由で死亡した場合はゲームから抜ける。その時の所有物、幸福指数に応じて点をつけて勝敗を決する』
とのこと。
幸福指数は１００から始まり、結婚やら借金やらで上下するようだ。
ちなみに自殺するとマス目に従わずないで済む代わりに、ゲームオーバーと幸福指数－５００。
本当の本当に人生ゲームだった。
「所持金は２５万円からで生活費や税金に年金もあるから早く職につかないと転落人生まっしぐらよ」
駒を動かすマス盤とは別に『景気変動』『外貨トレンド』といった経済情勢の変化を決めるマス盤が用意されていて、他にも『監獄ルート』『犯罪者ルート』などの特殊シチュエーションに使うものや世界地図に日本地図まで用意されていた。
現在地まで要素に組み込まれているらしい。
マス目から推測するに、地震などの天災といった局地的なイベントに影響するのだろうけど・・・凝りすぎてて終わる頃には疲れ果てていそうなゲームだ。
「これ１回でもやったことある？」
「あるわよ、１回だけ。その時は４時間かかったわね」
・・・暇つぶしの域を超えてる気がする。
「さーぁ、始めるわよ。亮輔もちゃんときなさい。
じゃーんけーん・・・」
結局、順番は佐奈さん、亮輔君、瑞流君、智香さん、僕、雪成君でマス盤を囲むことになった。

順番的に亮輔君と対面する形なんだけど、やっぱりというか何というか顔を合わせてくれない。
大学生が中学生にここまで怯えるというのはどうなんだろ。
過剰反応なのか適正反応なのか・・・。
彼にもある程度の免疫があってもいいものなんだけどなぁ。
そんなことを考えながら自分の分身たる駒を選ぶ。
僕はトウモロコシにした。佐奈さんはトマト、亮輔君はサツマイモで瑞流君がナス、智香さんダイコン、雪成君はジャガイモ。
それぞれ好きな所に駒を置き、現在地は日本の兵庫県に設定する。
これから所持金２５万円の野菜人形達はイベントをこなしつつ場所を変え家を買え職を替えて茨だらけのマス盤を進んでいくのだろう。
そもそもホッチキスの芯を何箇所も突き刺された野菜消しゴムに人生もあったものじゃないけれど、こうしてリアル人生ゲームは始まったのだった。

１週目。
一度経験しているだけあって戦略ができあがっている5人が最初から外貨為替証拠金取引・・・つまりＦＸで勝負に出た。
少ない金額で大金を動かすレバレッジという梃子の原理を利用した手っ取り早い稼ぎ方だ。
けれど、身の程知らずの大金を動かせるＦＸは当然リスクもあるわけで・・・１万円の証拠金（もとで）で１０万単位の損をするのもありうる話。元々余剰のお金がある人間が手を出すモノなのだ。
案の定サイコロで決まった外貨為替の動きは本来ありえない下落の仕方を見せて、佐奈さんと瑞流君はいきなり２５万円をふっ飛ばした。
さらに借金する羽目になり、幸福指数もマイナスで早々に転落し始めている。
それとは逆にかけていた亮輔君他２名はここでいっきに所持金を

増やして、雪成君に限ってはすでに２００万円を超え。
イベントだけをこなした僕は警察の職を得ただけで所持金に変化なし、次回以降給料が貰える分上がり調子と言える。

６週目。
２週目以降ＦＸに参加した僕は給料分だけをかけるという堅実な取引で所持金を２１０万円まで増やしたのだけど、雪成君と亮輔君はそのさらに上で１０００万台に。
真逆に瑞流君はＦＸをするために借金を重ねて、挙句負けて借金を増やす結果。幸福指数もマイナスが見えてきた。
佐奈さんは借金は返したもののまだ落ち目で、智香さんはタレント業で荒稼ぎに入っている。
序盤からすでにギャンブル染みた人生を送りだす野菜達。

８週目。
ここで亮輔君が地雷を踏んで犯罪ルートに突入。
詐欺を行って＋５０００万円。その代わり、次回から『犯罪者シート』を併用し駒を動かしてそっちのイベントもこなさなくてはならなくなった。
最悪捕まるというマス目があるのだけれど、その場合は警察であるこっちが幾分プラスになるので是非踏んで欲しい。

１７週目。
佐奈さんが結婚。皆からお金を貰えるどころか結婚式の資金が痛手となった。
「別に結婚式なんて挙げなくてもいいのに！」
雪成君は家を買い、僕は相変わらず公務員のままだ。

まさかの２９週目。
「あぁ――――――！！」

智香さんが酔ってホームレスに暴行、捕まってタレント生命を絶たれる。罰金やら何やらと稼いだお金も減ってしまった。
僕は警察をクビになって無職。
瑞流君はもはや借金が膨らむ一方で自己破産を検討中。
佐奈さんは子供が産まれて教育費がどんどん飛んでいく始末。
「子供なんていらないわよ！しっかりした家族計画立ててよ、このトマト！」
ただ、亮輔君は未だ警察から逃れ続け詐欺をし続けお金をさらに貯めていく。

転落を極める３６週目。
ついに亮輔君の所持金が億を超えて、瑞流君との格差がとんでもないことに。
瑞流君は自己破産して、フリーターとして働いている。
「堕ちろ亮輔、堕ちやがれ・・・」

４２週目。
僕はここで会社を設立。
ＦＸなどで稼いだお金で４０００万円ほどあったお金を削ることになったものの、『社長シート』のマス目次第では資産が増えるかもしれない。
智香さんが犯罪者入り。
「あ〝あああ・・・」
殺人を犯して、亮輔君と同じく『犯罪者シート』のお世話に。

５５週目。
「うわっ、やっちゃった」
会社が倒産。借金が数億に。
僕まで転落人生に入る羽目になった。
のらりくらりと逃げている亮輔君とは違い智香さんはすでに捕ま

り監獄ルートに突入中。
ちなみに終身刑で出てこれない。
頼みの綱は『監獄シート』に1つだけある脱獄のマス目か。
「絶対抜けてやるわ、この負のスパイラル・・・」
地震のマス目を踏んだ雪成君の家はちょうど震源地だったため崩壊。大怪我を負って入院ルートへ。
「唯一買い家だったのにな・・・というかあれ?保険料って・・・」
佐奈さんは離婚して幸福指数にマイナス、だけれどこの中で最もまともな人生を送っている。

待ち望んだ67週目。
ついに・・・ついに亮輔君が捕まった。
「よぉおおおし!没落ルートにウエルカム!」
「うわぁああ、せっかくここまで稼いだのに!」
「いいじゃない!あんたは数年経てばシャバに出られるでしょ!私なんか自力脱出しか未来がないのよ!」
檻の中での醜い言い争いを他所に佐奈さんが油田を当てるという普通ありえないイベントを引き当て億万長者に。
僕は強盗に遭って打撃。

転機の89週目。
瑞流君が結婚。
「よし!ここからは・・・ここからはまともな人生送るんだ!」
などと言っているけれど、このマス盤の上でそれが可能とは思えない。
億単位の借金が膨らみ続ける僕は彼を見習って自己破産。
これで借金という資金調達が封じられたわけだ。
佐奈さんがお金を貯めるだけ貯めている間に雪成君は輸入関連の職に就いた。

・・・と、まぁそんな風にゲームは進み。
ややこしいのでフローチャートにしてみると、次のような変遷を辿っている。

成功人生その１。
トマトこと佐奈さんは２５万を飛ばした後なんとか自力で這い上がり結婚。けれど、離婚して幸せとは言えない日々。
そこでいきなりの油田発掘で莫大な富と幸福を手に。
しかしまぁ、そのままキープできるようなマス盤じゃあない。
脱税のマス目を踏んで、犯罪者ルートに入る。・・・も、発覚することなく推定７５歳で不治の病で死亡。
最後の不幸をものともしない幸福指数で全体的に高得点。

転落人生その１。
ジャガイモこと雪成君。
出だしは好調で資金も増え、家を買うも地震であっけなく倒壊。
怪我をして入院費を払う時点で保険に入っていないことに気づくも手遅れ。
輸入業者は下請け会社で産地偽造に加担。挙句密輸に手を出して刑務所へ。
刑期を経て外に出たものの所持金も幸福指数も低い状態でひき逃げに遭いリタイア。
最後の最後に不幸な事故で指数はマイナスとなった。

転落人生その２。
僕、トウモロコシ。
慎重な出だしで少しずつ増やした資金も警察をクビになったあとの会社設立でおじゃんに。
自己破産後、運の悪いことにヤクザルートへ突入してしまった。
『コンクリート漬けで東京湾』というマス目に怯えながら駒を進

める内に、幸福指数がどんどん減っていくのに反比例して所持金は増加。
出世するにつれてとても足が洗えそうにないまま、最後は組み同士の抗争で死亡というまともとは程遠い人生を描いた。
所持金はかなりの額になったのに、幸福指数はとんでもない状態だ。

転落人生その3。
ナスの瑞流君。
最初の最初からFXでどん底を味わった果てに自己破産。フリーターとなってひもじい思いをしながら生きながらえた先に結婚が待っていた。
子供3人という幸福な家庭を築き上げ、自営業という職も手にできた。
のに、後半で不倫ルート。
妻と愛人の間に板ばさみになった挙句、離婚や慰謝料云々の話に至る前に、痴情にて刃傷沙汰。
妻に刺されて死亡。
・・・・・幸せは何処へ？

転落人生その4。
智香さんのダイコンはFXからタレント業と荒稼ぎをした前半はよかったものの、酔いに任せて暴力沙汰で地位を失い、挙句殺人で捕まり無期懲役。
その後、脱獄して警察に追われながら逃亡犯ルート進み、さらに強盗殺人を行うことで所持金を増やすという暴挙に出る。
当然捕まり今度は死刑。
が、執行される前にまた脱獄。
着々と犯罪で稼ぎに稼ぎ、幸福指数はもはやどうにもならないぐらいのマイナスを記録しつつ終盤、まさかの殺人に遭ってリタイア。

ツケを払う形となった。

そして、亮輔君は――――ただ今1人でプレイ中。

何せ生き残っているのは彼だけなのだ。

転落した僕達はもちろんのこと勝ち組と言える佐奈さんを含め彼を除いた全員が寿命以外の理由で死亡。

僕と雪成君、智香さんにいたっては殺されているわけで・・・。

薄々気づいてはいたけどこの人生ゲーム、天寿を全うできる確率が低すぎる。

前回やった時も結局全員８０歳を迎えることはできなかったらしい。

というわけで固唾を呑んでサツマイモ人形を行く末を見守っている皆。

目指すは老衰、大往生だ。

・・・・・改めて何なんだろうこのゲーム。

前半儲けに儲け詐欺にまで手を出した彼は捕まりはしたものの持ち直し、やっぱり再犯しながらも逃げ延びている。

その辿った道のりを示すように元々自分の近くからスタートさせた駒も随分と遠くにあった。

「ふぅ・・・」

ずっと自分の番である亮輔君が何度目かのサイコロを振るう。

「5か・・・」

・・・・・・それは駒を進めようと彼が乗り出した時だった。

ただでさえ印刷紙を張り合わせた大きすぎるマス盤の上にあった両膝が、ずるりと滑る。

「うわぁぁあああああぁぁあぁああ！！」

ビリビリと紙の破ける音と共に前のりに倒れ掛かった彼の身体は、けれど不自然な感触で床との激突を免れた。

「――――、――――っ！！！」

対面に座っていた僕が図らずとも・・・手を出さずとも助ける形

で。
「・・・・・あ」
「うぉわっっち！」
「え゛？あえ？」
「・・・おぉ」
しかしながら、サツマイモ人形の代わりに彼自身が地雷を踏むというイベントが起き、
「・・・え、と。そ・・・その、見事な膨らみですね？」
そして彼は対応を完っ全に誤った。
――――その後、彼がどうなったかはあえて語らない。

第３３話－　人生遊戯。－Ｅｖｅｎｔ－（後書き）

というわけで、今話の『エキ日々。』の標語は『ＦＸは慎重に』でした。

リアル人生ゲームは実際自分が『人生ゲーム』に思い立って作ろうとして早々に諦めたものだったり。
ボードゲームで作るのはちょっと難しいですよね。ＰＣ上ならプログラミング次第でできそうですが。
誰か作りませんか？
是非一度やってみたい・・・。

次話は少しシリアス・・・かもしれません。
あくまで予定ですが。

感想・コメント・投票などお待ちしてます。

第３４話－　琉球学園。－Ｃｏｌｄ　Ｗａｒ－（前書き）

※この小説はフィクションです。実在のアメリカ・米国・在日米軍とはいっさい関係ありません。

第３４話ー　琉球学園。ーＣｏｌｄ　Ｗａｒー

翌朝、普段どおり日差しを浴びておき、朝食や身だしなみを整えてからはテレビで時間を潰したものの、やはり起きるのが早すぎてか機構に着いたのは指定されていた１時間前だった。
機構としか場所を聞かされていない僕は、とりあえず小じゃれたエントランスにて待つことにする。
飲み放題の自販機から抹茶ココアを手に入れて備えられたテーブルを陣取りながら、ポーチから取り出したのは携帯ゲーム機だ。
ビオサイドのシングルプレイ。
応用が利きすぎるこのゲームは、プレイ次第では昨日の人生ゲームと変わらない体験ができる。
しかしまぁ、そんな面倒くさい遊び方はせずに、シンプルなバイオハザードで人類虐殺を目指そう。
暇つぶしなので難易度は低め、フィールドは比較的狭い研究施設にする。
これなら人間の数が研究員だけなので早く終わる。
電車などの面倒くさい移動手段もないし、ゴリ押しでクリア可能だ。
「とりあえず待合室から潰そうかな」
「何をしてるのかね、君は」
「・・・・・・・・・・・・中途半端なタイミングに来られるのはそれはそれで腹が立つんだけれど」
かけられた声に顔を向けると、ぼさぼさ頭の初老が立っていた。
加藤倉光。僕が苦手としている人間だ。
この研究狂いには彼らが『折り紙の８月』と呼ぶアレが通用しない。というか言葉が通じない。
いつもの白衣ではなくマットブラックのスーツを着ているけれど、頭のぼさぼさを先に直せと言いたい。

「１０時などというのは目安だ。君が来れば即行動に移せる準備はこちらにはあるのだよ。
・・・で、何をしているのかね？」
「見ての通り、携帯ゲームで遊んで・・・遊ぼうとしてたら邪魔が入ったんだけど」
「見ての通り！はん、ゲーム機を弄っているだけそう判断するのは早すぎるだろう。
ネットワークに接続可能な、データの書き換えまで可能なＯＳを積んだその小型電子機器はいくらでも応用が利く。
巷ではゲーム同様カセットに挿入、読み込んで使用するハッキングソフトまで出回っているらしいじゃないか。
携帯ゲーム機などという名称はそもそも間違いだと思わんかね？」
例えそうだとしても、万可統一機構内それが可能とは思えないし、そんなソフト一般ルートでは手に入らないだろう。
ただ、ここでそんな反論をすればややこしい談論が始まってしまうことは必至なので、素直に相手の疑問に応じることにする。
「・・・ビオサイドですよ」
「ふむ・・・知らんな」
「そりゃあ、研究にしか興味のない君には馴染みのない分野だからね」
「ふふん、まぁ今度調べておこう。私にとって新天地になることを期待するがね。
しかし、しかしながら君も随分と棘々しい言葉遣いのできるようになった。私が多分に接触していたあの頃に比べれば見違えて人間らしい」
「・・・・・・」
ジロジロと犯罪臭い動作で観察されるのは気持ち悪いことこの上ない。
だから、嫌いなんだこの変態。
目一杯好意的に見て、『大人になりきれない研究実験大好き老人』

としか表現しようのないこの人物。
　少なくても神戸市の万可統一機構が形骸変容（メタモルフォーゼ）研究の責任者で、一体何時から研究に関わっているかは不明だけれど相当の古株なのだろう。
　最高で見積もれば齢１００歳以上もありうる話なのに、何で精神年齢は成長してないのか。
「それで？あの岩男は？」
「彼は来ない。仮にもここの代表者だぞ？そうそう動けるものではあるまい。今から少々遠出することは知っているだろう？」
「・・・ということは・・・あんまり考えたくないんだけど・・・、同伴者は」
「私だ」
「・・・チェンジは？」
「ない。不服かね？」
　大いに。
　何でよりにもよってこの人使うかな岱斉は。
　嫌がらせ？嫌がらせなの？
　深い、溜め息が出た。
「何処に行くんですか？」
　諦めて尋ねると、研究狂は決まっていないと首を振った。
「は？」
「正確には定まっていないと言うべきか。候補があって、そこから君に選んでもらおうというわけだな。
　というわけで訊くが、北海道と沖縄、どっちがいい？」
　北海道と沖縄、その２つの共通点は日本の極地であることと特別指定学園都市のある場所ということ。
　間違いなく後者の意味で言っているのだろう。しかしそうだとすると他にも候補地はあるはずなのだけど・・・、
「ちなみに私は北海道がお勧めだ！あそこの訓練設備は大掛かりで見所がある！研究施設が少ない分、能力教育のシステムが他の学園

とは違い独自に構築されていると聞く！すでに研究活動は終えているが日常的な赤の施設もあるのだ！数日ではとても回り切れんなぁ！」

目が、目がすごくキラキラと輝いている・・・。

「・・・・・じゃあ沖縄で」

その一言で、大人になれないこの老人は身悶えてスーツが皺だらけになるのも構わず床を転がった。

何だろう、すごく気持ちいい。

「・・・まぁいい。沖縄にも見所はある・・・」

それはまぁ、数ある学園都市の中でその2つに絞ったのは他でもない彼なのだから当然の話だ。

私利私欲な私情を挟みすぎじゃないだろうか。

「さて、そうと決まれば出発するかね」

不安しか見えてこない旅路なので非常に足が重いのだけど、

「移動手段は？」

「神戸空港にプライベートジェットを用意してある」

小型ではあるものの、席というより部屋と表現するのが正しいような高級ジェット。

エコノミーやビジネスという言葉すら吹っ飛ばす空の旅だ。

人々はこれを『税金の無駄遣い』という。

何はともあれプライベートな空間には違いなく、遠慮なしに離陸早々アルコールを頼んでみる。

学園都市では若すぎる大人が少なからずいるからか、雇われ搭乗員は疑問も浮かべずに僕達にグラスを渡してくれた。

が、しばらくグラスに注がれた薄き色のワインを眺めていた倉光はそれを僕へと寄越す。

「何？」

「私は酒は呑めんのだ。口に合わん」

じゃあ、渡される時に断ればいいのに。
それはプライドが許さなかったのだろうか？どこまで子供なんだこの人。
「岱斉といい君といい、よくもまぁそんなモノを流し込める」
「流し込むんじゃなくて味わうの。好みは人それぞれでしょ？」
「そうかねぇ・・・・・・そういうものかねぇ。
ふは、しかし『味わう”の”』に『でしょ』か。
自分の言葉遣いが柔くなっていることに君は気づいているのかね？」
「・・・・・・よぉく観察してるよね」
「無論だ。君の一挙手一投足全てに興味があるからな。噛み終えたガムから出されるゴミ袋まで回収して分析に回している」
そしてそのあとは数百年単位で保存されていることだろう。
「ストーカーより性質が悪い」
「ふふん。何をいうか、私達の行為には意義がある上、実益もあるぞ。
機構調べではまだ生理はキッごぱっ！！」
台詞を言い切る前に、そのふざけた口にワイングラスを突っ込んでやった。
グラスの中身が口内へと送られたのを確認した後、気道の辺りを平手で殴りつける。
よし、ワインはしっかりと流し込まれたはずだ。
「まずい・・・気持ち悪い・・・」
「自業自得でしょ」
「何を言うか！この記録を利用すれば来る日からは生理日予測も可能！超高精度の事前告知が・・・」
「そんなメールが届いた日には君に明日はこないからね。
というかもう喋るな。いっそ飛行機から落ちてカエルになれ」
「・・・ふむ」
しかしその言葉を受けて彼は顎に手をやり何か考え込み始めた。

どうやら僕の台詞が彼の要らない脳内スイッチを入れてしまったらしい。

おそらくは『高所から落下した遺体を潰れたヒキガエルと表現するが、しかしそれは本当なのだろうか？墜落時の人間の体勢を考えるとカエルのようなシルエットになるとは考えにくいが・・・』とでも考えているのだろう。

しばし頭(こうべ)を垂れていた変人はいきなり顔を挙げて、サービスコールの受話器を手に取った。

まさかと思った時には遅く、

「ああ君、ちょっと飛行機から落ちてみてくれないかね？」

――――バン！

受話器を強制的に元の位置へと戻させる。

「何をする！」

「それはこっちの台詞だよ！この馬鹿老人！」

＃

要塞型。

沖縄の学園都市がそう呼ばれる理由は、高く厚く塗り重ねられたほぼ学園を覆う防壁だ。

他者を寄せ付けない確固たる意思をも感じるその壁は、無論開放的能力開発地区を謳う学園都市が造ったものではない。

むしろそれはかつて学園都市システム構築を妨げようとアメリカが作り上げた負の遺産である。

日米安全保障条約により在日米軍という言葉がまだ存在していた当時、各地の学園都市が成果をポツポツと上げ始めた頃でもあったのだけど、沖縄に関しては地方一市を目指していた学園都市都市構想に反して未だ手が着けられていなかった。

それは米軍基地が存在し、アメリカが学園都市を軍事力として認識していたという理由から。

その主張は簡単で、『法律上アメリカ領土である基地周辺に軍事勢力を誘致する行為は不徳で戦意にも取れる』というものだった。

学園都市の効果が見え始めたその時代、日本の能力者開発が先進することに対して危機感を持っていたこともあって、そもそも軍事力を有すること自体が問題だと学園都市の解体までも迫るアメリカに、日本政府はついにキレる。

アメリカ政府の言い分を無視、沖縄の学園都市開発に着工。それも米軍基地のすぐ近くで、である。

手始めとばかりに各地の研究所が支部を立ち上げ、基地を囲むように施設を造り、他県の都市を構築していた学園も挙(こぞ)ってＳＰＳ使用許可基準を満たした教育施設を建設。呼応して沖縄県知事が希望者募集を大々的に行い、政府も援助を始めた。

数年に渡って牽制し合ううちに、学園都市建設に対抗するように米軍基地は防壁を造り増築し続け壁はどんどん高く厚くなっていき・・・・・・、

最終的に、『学園都市間交換留学』と銘打った他学園都市の能力者の沖縄投入によって完全な冷戦状態に移行となる。

しかしそんな状態は長く続かない。

１人の能力者が米軍があれほど塗り重ねた防壁の一部を切り崩し、別の能力者が基地中の空気を”燃やす”という攻撃を行うことによって米軍は反撃どころか篭城すらできないままに撤退。他の場所にあった軍施設にも同様の攻撃を仕掛けるという声明の発表まで成された。

すでに超能力対策中枢として機能していた施設が壊滅していたこともあり別施設の軍も抗争ないままに撤退し、局地的な冷たい戦争は終焉を迎える。

「その後、基地をそのまま学園都市に転用したのが沖縄の学園都市というわけだ。

そしてここが――――」

老人は長い説明(ガイド)の末、辿り着いた場所を指し示す。

「冷戦終結のきっかけとなった防壁の切断面であり、学園都市への入り口というわけだ」

ありえないほど綺麗な断面を以ってそっけない灰色の壁を切り裂く爪跡。

当時の超能力の技術を窺わせる惚れ惚れするほどの出入り口だ。

「めんそーれ！沖縄学園都市へ」

防壁外に存在する研究・教育施設もが威嚇という役割を終えて移転し内包される要塞の中は、神戸市の学園都市とは趣が違う。

明確な境界線がなく溶け込むように存在する神戸に比べ、沖縄の学園都市は無駄に立派な壁があるからだろう。外と内でがらりと様子が変わる。

入ったすぐは商店の並ぶエリア、その右奥に寮などがあってさらに行けば教育施設。その更なる右側・・・あるいは入り口から左奥には研究施設となっていて、簡略して言えば円グラフのような造りかな。

パンフレットを見るとそうなっているのだけど、防壁が円状になっているわけではないから土地が綺麗に分割できているわけではないものの、まぁ分かりやすい。

防壁の中央辺りは円形の公園になっていて、入り口からそこまでは直線道路なのでここからでも開いた空間が見えている。

搭のようなものが立っていてどこからでも目印になるようにしてあるようだ。とりあえずあの公園を目指せば迷うことはない、というものなのだろう。

が、そこに到着する前に僕達は立ち止まっていた。

ついに酔いが回ってきた倉光が水分を買い求めるためコンビニに寄っているからだ。

「私はもう駄目だ・・・」

スポーツドリンクを1リットル飲み干し、ペットボトル2本をゴ

ミ箱に投入した彼は地面にへたり込む。
好み以前にアルコールに対する耐性がなかったらしい。
「機構で休むことにする・・・」
付き添いできたはずの案内人がとんでもないことを言ってくれる。
さっきの元気の良さは何処へやった。
彼のテンションは『めんそーれ！』で折り返し(ピーク)を迎えたらしい。
「で、僕は？理由あってここに来たわけでしょ」
「・・・こっちの機構に顔を見せればそれでいい。数日好きに観光して帰る時に寄ってくれ・・・」
うん。完全に役割を放棄。
というか、あの量で二日酔いはしない。数日って、いつまでへばり続けるつもりだ。
しかし、まぁ、自由時間は素直に嬉しい。
好きに観光・・・・・それは学園都市から出てもいいと？
そういうことなら、日本有数のジンベイザメのいる水族館が沖縄にはあるんだよね。
機会があれば行きたいとは思っていたけど、今こそ絶好のチャンスじゃないだろうか。
船底を透過素材で可視化した海底散策船もよいかもしれない。
あと沖縄といえば泡盛だよね。
学園を無視して沖縄観光というのも・・・。
「・・・・・」
と、倉光がまじまじと僕の顔を見ていた。
「言っておくが、学園外に出るのはなしだぞ」
「ちっ」
けちんぼめ。

＃

コンビニで買ったシークヮサーのジュースを半分ほど喉に通して

口を潤す。
初めて飲んだけど、すっきりとした味わいで美味しかった。
先ほどまであった日差しは既に雲に隠れて天気は下り坂といったところだけれど、それでもまだ暑い。
一般用にゲートで配布されていたパンフレットを確認してみると、観光できそうなものは能力者の訓練施設ぐらいのものだった。
当然ながら超能力に馴染みのない一般客向けのスポットで、僕にとってはあんまり魅力的なものではない。
万可統一機構のパスを貰ったのだけど、これで通れる研究施設は観光として面白そうではない。
好んで来たわけでもこの場所に積極的に行きたい場所などあるわけもなく、よって今僕が目的もなく目指しているのは中央に立っている搭だ。
ポーチからペットボトルと入れ替えで携帯を取り出す。
一応、これからのこの地区の天気を確認しようと、ブックマークしている天気情報サイトを開く。
ＴＯＰページを読み込む前に、液晶画面にぽつりと水滴が落ちてきた。
「・・・あ」
雫を指の腹で拭ってから携帯を閉じ、代わりに天を仰いだ。
肌が雨粒を弾く感触が伝わってくる。
調べるまでもなく雨らしい。
雲ってきたとは思っていたけど、やっぱりか。
仕方なく、コンビニまで戻ってビニール傘を購入してからの再出発となった。
のろのろとした行動だけれど、まぁどうせ暇なんだからそれもいい。
ガイドを片手に、授業中で生徒も出歩いていない学園都市を進んでいく。
日米因縁の沖縄の特別指定都市。

日本中尽くの在日米軍及び関連施設を追い出すことになった顛末。
以後日米関係が酷く悪化したことは言うまでもなく、その関係が修復され出したのは割りと最近という。
超能力者の交換留学、その条約取り付けが理由か。
自国で始めようとしている学園システムの触媒・促進剤として利用したいのだろう。
現金な話だけれど、しかし、例えアメリカが学園都市のレプリカをこしらえたところで、日本に追いつくのは数十年後。日本の超能力が頭打ちにならなければ、追いつくことすら困難かもしれない。
そもそも今度こそ国際機構ＩＳＰＯが規制するだろう。今までだってアメリカへのＳＰＳ薬の輸出に対して批判が相次いでいたというのに、超能力の軍事利用を掲げている国による大規模な能力開発はさすがに見逃せない。
かつて日本に迫った『超能力という軍事力の放棄』を今度は彼らが迫られる番になる。
ＳＰＳがＩＳＰＯの保有する機械でしか製造ができない以上、脱退したところで好き勝手にできるものでもないし、選択肢は多くない。
暴力的な手段も視野に入るだろうし、最悪そうなれば国際社会は大戦時に逆戻りする可能性すらある。
まぁ、少なくても僕には関わりのなさそうな話ではあるけれど。
現在考えないといけないのはどうやって時間を潰すかだ。
重要度は高くなさそうな今回のこの遠出。おそらく先日のアレの残飯処理みたいなもの。
他市の万可統一機構同士、同じく形骸変容（メタモルフォーゼ）を創り出そうとしていたのなら、僕という個体を手元に寄せたいと考えてもおかしくはない。
アレの責任（せい）でその要望を断れなくなったのだろう。
「逆に言えば・・・本当に顔見せだけ終わらせばさっさと帰れるわけだ」

数日と言わず、このまま機構に行って老人を回収して帰路に着くこともできる。

無論せっかくの機会だからそんなことはしないけども。

倉光から奪い取った市販されているそれなりのガイドブックをチェックしてみると、彼が幾つか付箋をつけている箇所がある。

旅行好きの女性みたいな行為と思いきや、開けばそこは研究所施設紹介のページで付箋には英数字が書き殴られていた。

おそらくその施設に導入されている研究機材の名前なのだろう。

興味が研究にしかない老博士はあの歳で――――もちろん少なくても歳相応の年月を生きてきたはずという意味で――――驚くほど熱心だ。

何かこう・・・気持ち悪いぐらいに。

自分が彼のことを嫌いなのだと再確認。

そんな意味のない確認をしている最中にも手に握った柄から力強い振動が伝わってくる。

雨足は強くなってまさしく粒の形をした雫が透明な傘を叩いているのだ。

その様子をビニール越しに眺めていたら、

「ぁれ・・・？」

奥の景色が妙に明るんでいることに気づく。

オレンジに着色されているのは目指していた搭の辺り。

足早に駆け寄ってみて、その正体が分かった。

高くそびえた搭の上辺りから降り注ぐ雨が、火へと変わって落ちている。

いや、雨粒が燃えている――――？

紅く赤く揺らめく光の粒。無秩序に撒かれる炎の子。

おおよそ球状の空間を形成して曇り濁った灰色の世界に燈（とも）された暖かい雨の景色。

そんな不可思議な現象を引き起こしている根源は三角錐の屋根にいた。
足をぶらりと遊ばせて、燃える雨を一身に受けている。
艶のある黒髪を僕よりも長くなびかせた妙齢の女性。
不意に、その彼女が搭からその身を滑らした。
落下。あるいは身投げ。
けれど彼女の無抵抗な身体は重力を拒絶してゆるりと降りてくる。
時折、紅燈の炎に身を包みながら、抱かれながら優しい墜落を遂げた。
パンパンと埃を払うように火の粉を散らし、幾分散らばった髪を纏めてこちらへと歩いてくる。
接近されて判ったことは、彼女がスタイルのよい女性であり、今まで僕が会ったことがある女性の中で最も良識ある大人らしい外見を持った人物であること。
紅いコートを身に纏い、靴はロンドンブーツという沖縄らしくない、ただただ紅の印象のみを与える超能力者は、
「こんにちは、織神葉月ちゃん」
元より僕を待っていたらしく、そう挨拶をした。
「私は・・・・・・誰？」
「・・・・・・」
訊きたいのはこっちです、と突っ込めばいいのだろうか？
「あ・・・うそ、ごめん、今の間違え。これは『狙った相手の家に転がり込む方法』だった・・・」
前言撤回。今のやり取りで”良識のある”というレッテルは残念ながら剥がれました。
それとその台詞で転がり込めるのは良くて精神科病棟だと思うのだけど。
「えーと、私は葉月ちゃんと違って規格外ではあるのだけれど、まぁ一応万可統一機構の関係者よ。
名前は瑞桐小鳥（みずきりことり）、通り名は絢爛浄火。身に余る名称としては鳳凰

と呼ばれているわ。
よろしくね」

第３４話－　琉球学園。－Ｃｏｌｄ　Ｗａｒ－（後書き）

タイミング的に時事ネタ・・・というか社会風刺みたくなりましたが、最初から『エキ日々。』の日米関係はあんな感じなのでよろしくです。
別に私めは米が嫌いというわけではありません。まぁ、好きでもないんですが。
好きが零で嫌いが零。
興味があんましないんですよね・・・好きな人はどこに魅力があるのか純粋に教えて欲しいです。
あれかな、洋楽やら洋画をあんまり見ないからそうなのかも。

で、世の中のややこしい話は置いておいて、『エキ日々。』、４０話目です。第３４話となってますが、４０話目。
前に話に出てきた鳳凰が現れましたよ。
既存キャラですでにこんがらがっているのに、懲りずに新キャラです。
瑞桐小鳥。
瑞鳥＝めでたい鳥＝鳳凰。
『桐』＝鳳凰のとまる梧桐の木。
でこの名前なのですが、瑞は瑞でも同じ鳥関係である裏方の瑞流君はアホウドリなんですよね・・・。
『瑞』『鳥』の字を入れたいがために名前は『小鳥』にしたわけですが、この名前はある漫画のキャラからまんま取らせていただきました。
アルバイト辺りの描写でこれもほとんど（脇役もいいところだったのであまり考えずに）取らせていただいたこともあり、どうせならとさらにお世話に。
その漫画とは『某ファミリーレス四コマ』です。

アニメ化も決定しました。
おめでとうございます。
勝手ながら祝福。
何のことだか分からない人は『うろんなページ』で検索を。
個人的には村主さゆりが恐ろしくツボ。

それでは、また次話にて。
ご感想等お待ちしております。

第３５話－　嬉々危機。－ＸＸＸ　ｃｏｍｐｌｅｘ－（前書き）

明けましておめでとうございます。
前回更新から随分時間が経ってしまい、すみませんでした。

第３５話－　嬉々危機。－ＸＸＸ　ｃｏｍｐｌｅｘ－

「よろしくね」
そう言って、瑞桐さんは僕との間にあった数歩分の距離をさらに縮めてきた。
「私の炎は浄化の火。燃やす対象を選択することによって、不浄だけを洗い燃やすことができる」
ね、例えば、と彼女の腕がするりと伸びて、左手は肩に回して後頭部に右手は左胸辺りに押し当てられる。
「心臓（ここ）に貼り付けられた発信機（チップ）、燃やしてあげよっか？」
・・・・・・。
なるほど、確かに機構に少なからず関係しているらしい。
けれど、
「あんなもの取り出そうと思えばいくらでも取り出せますよ」
それは機構だって分かっていることだ。
「そ、残念」
パッと両手を離し、彼女は踵を返した。
その先には高くそびえる円柱がある。
「搭で雨宿り、ロマンチックじゃない？」

沖縄にまるで似つかわしくない洋風の搭。赤と茶色の煉瓦造り。
中には螺旋階段が詰まっていて、展望台である最上階しか部屋はない。
円筒の部屋には壁に沿うようにカーブしたベンチ備え付けられ、後あるのは自販機ぐらいだ。
ほぼ３６０。を見渡せるようになっているガラス窓の１つが開いていて、おそらくそこから屋根まで上ったのだろう。
彼女は薄暗い室内を照らすように小さな紅い火を幾つも浮遊させ

る。
近くにあったそれに指を突き刺してみるけど熱くはないし、火傷もしない。
手の平に握りこむと生命線の辺りにくっ付いた。
ある程度粘性もあるらしい。
人体を対象にされていないこの炎は裏を返せば思いのままに弄れるようだ。
「面白いでしょ。私には炎海紅泥みたいな火力はないけれど、好きなモノを好きなように燃やせるという特性があるのよ」
浄化の火。有名すぎるので名前自体は知っている。
そして能力の内容は、名前の通り神々しい。
その謳い文句が本当ならば人体を蝕む病魔だけを焼き殺すことも可能とか。
出力系でありながら、医療系としての応用が利く。
いや、発火能力者というより絢爛浄火は原始素能（ホワイトノート）と同じカテゴリに入れた方が正しいのか。
通常の能力とは異なる、希少能力（レア・スキル）。
そこに万可統一機構は目をつけた？
しかし、機構は貴重だからといって能力をコレクションするような体質だっただろうか？
形骸変容（メタモルフォーゼ）に固執しているという印象だったのだけど・・・機構内別機関の、他の規格？
神戸でも形骸変容（メタモルフォーゼ）の育成棟ともう1つ別の棟はあったし、岱斉もそういうニュアンスのことは言っていたし。
でも規格外っていってたしなぁ・・・。
と、
「ね、葉月ちゃんの規格（ルート）『織神』、形骸変容（メタモルフォーゼ）見せてよ」
子供みたいにキラキラと目を輝かせる小鳥さん。
何かデジャヴ。
そういや倉光はどうしてるかな。

「・・・そう言われて、瑞桐さんのように披露できるほど分かりやすい能力じゃあないんですけどね・・・」
煌びやかな見た目でもないし、応用の幅が広いから『これが私の能力です』といった代表的な技もないし。
そういう意味では絢爛浄火の方がよっぽど分かりやすいし、格好よくて羨ましい。
「ふーん、それじゃあさ、お題を出すっていうのはどう？」
と彼女の提案。
「まぁ、それがベストでしょうね」
「ぅんじゃあねぇ・・・」
ずずぃっと寄ってきて、僕の耳元に口を近づける。
息がかかるこそばゆい感覚とやたら触れ合う身体の感触の中、彼女は嬉々して言った。

ごにょごにょと、とんでもないことを。

思わずバッと身を退く。
「何言ってるんですか！そんなところ変容させても服着てるから分かりませんよ！」
「脱げばいいのよ」
「〜〜〜〜っ、あなた変態ですか！？」
「えー、分かりやすいじゃない」
「それ以前にやりたくないんです！」
性知識が乏しいと周りから、特にカイナから散々言われている僕であってもそれは抵抗がある！
というか、そのお題は男に戻るのとは違うのだろうか。
そもそも、よくそれを口に出せたなというか・・・！
駄目だ、この話はさっさと終わらさないと！
「ほらほらー、これが形骸変容（メタモルフォーゼ）ですよー」
いつぞやの訓練を思い出し、指を鍵状に変容させて振ってみせる。

「そんな子供騙しに騙されないわよ！」
「子供騙しもなにも、能力には違いないでしょ！」
ぷぅと膨れっ面をする彼女。
「いいじゃないのー、減るもんじゃないしー」
そんなセクハラな台詞を実際セクハラで言われて、誰がいいと応えるものか。
それに僕の精神力と体力がきっちり減る。
「その話はもうなしです。そんなのは形骸変容（メタモルフォーゼ）の応用プランにありませんし、今後も予定にありません」
膨れっ面が一段階グレードアップ。
外見だけが大人な子供がここにもいた。
・・・よし、無視しよう。
「それよりも、沖縄冷戦について訊きたいんですが。絢爛浄火・・・その時活躍したんですよね？」
「あれ？そういうところ、規制されてるはずなんだけど？」
「そういう情報規制が効かない上口の軽い老人が『基地中の空気を”燃やす”』とか変な表現してましたから。
基地をまんま火の海にしたんならそういう言い方はしないでしょう？
その表現を鑑みるに、基地全体を火で覆い尽しておいて尚且つ焼死させず・・・・・おそらく窒息の可能性をほのめかして撤退させた・・・ってところかなと。
だとするとそんな芸当ができるのは絢爛浄火ぐらいでしょ？対象を限定できる能力なんて珍しすぎる」
さらに言えば、あの老人は酸素を燃やすとも言ってなかったことから、空気、というのはまんま窒素７８％酸素２０％アルゴン０．９３％二酸化炭素０．０３％などで構成される大気のことだろう。
それら多数の分子を含む空気を纏めて燃やせるというのは、つまり物質の固有振動を利用するような原子レベルでの物質の種類によって燃やす対象を区別しているわけではない。

僕の心臓の発信機を燃やせると彼女は言ったけれど、チップにしたって多数の元素で成り立っている。
にも関わらず、その異物を燃やしきり、なおかつそれ以外には燃え移らないなんてことができるとするならば、それは彼女が能力を影響させる対象を抽象的で概念的に選っているからだと推測できる。
たぶん彼女は、ほぼ同じ元素群でできていても、指、手、腕ときっちり区別して燃やせる。
「まぁ確かに、そうかもねぇ。
うんでも、あれをやったのは私の父親だけどね。初代絢爛浄火。
実際には”燃やす”というより、空気全てを炎で”包み込ん”で、肺に取り込めなくしたっていうのが正しいとか言ってたかな。
私はできないんだけどそういう応用もあるらしいわ。
ちなみに学園都市の入り口作ったのが母親。斬刀水圧（ウォーターカッター）」
・・・両親揃って血の気の多い人物だっらしい。
戦場のラブストーリーが垣間見れた気がするけど、今回はスルーしよう。
「父親の遺伝なんですね、絢爛浄火」
「超能力ってそういう傾向にあるからね・・・『母親の能力は息子に、父親の能力は娘に』。一概には言えないらしいけど」
『交雑によって生まれた雑種（こどもら）一代はその雌雄と逆の性を持つ親の能力を得る可能性が高い』。
超能力の遺伝学において一般的に言われてることだ。
性染色体に伴って形質が遺伝する伴性遺伝に似ているけれど、メンデルの法則から発展したこんにちの”生物”の遺伝学とは違い、”超能力”の遺伝学は未発展。
あくまでそういう傾向があるというだけで根拠はないし、確率的にも８１％と低い。
楚々絽・・・ちゃんと鈴絽さんがいい例だ。視覚奪取と身体強化、方向性すら違う。
だいたい、超能力が子に遺伝していくというのなら、万可統一機

構が形骸変容（メタモルフォーゼ）の発現に血眼になることもないわけで・・・。
あとこれらの話は『能力を持つ親が生（な）した子供がＳＰＳを服用した場合』という前提の上に成り立っているので、ＳＰＳなしに超能力者の人口が増えることはほぼない。
結局超能力開発には国際機構の許可が不可欠という現状には変わりない。
「浄火の性質と水が合わされればそれはそれで面白いなぁとは思ったんだけど、実際そううまくはいかないのよね」
「だからＳＰＳ服用時ドキドキできるんですよ？」
「いやー、私の場合は最悪絢爛浄火じゃなかったらどうしようってヒヤヒヤしながら飲んだのよ。親が無駄に立派だと苦労するわ」
「その感覚は僕には分からないですね」
「そう？葉月ちゃんだって万可統一機構の期待があったでしょ？」
「あったでしょうけど、そんなモノ気にもしてませんよ」
「うわー、それもそれで怖い話よね・・・」
「そうですか？」
「そうよ。と・・・そろそろ、外に出よっか」
「え？」
ちらりと外を見てみると、まだ雨は降っている。
本降りではないものの、それでも外を動き回るのには十分障害になるだろう。
雨宿りの必要性は変わらないと思うのだけど。
「だって、葉月ちゃんが恥ずかしいかなって思ったから遮蔽物の中に入ったのよ？やってくれないんじゃ意味ないじゃない」
しれっと、しれっと言ってくれる。
何が、何で恥ずかしいのかは、予想がつくから訊かないことにして・・・、
「そんなくだらない理由で搭を上ったんですか・・・」

＃

学園都市内にある、ショッピングエリア。
地下を含めて7階の巨大モールという形に集約された唯一の商店誘致施設がそれに当たる。
防壁で囲まれている以上客層がほぼ学生と固定されているモールには駐車場がないという特徴があり、その分上にも下にもテナントスペースが拡げられているらしい。
それ以外はほとんど普通のショッピングモールと変わり映えしないのだけれど、あともう1つ、アルコール類は最下層の奥のスペースに追いやられているというのは学園都市ならではかもしれない。
心理的に未成年の飲酒を止めさせるための策なのだろうけど、現在僕は成人女性と同伴なので痒くもないし、代理してもらうことで購入も可能なのだった。
「なぁーんで、好きな所って言って酒屋に来るかなー」
「普段来れませんし、買えませんから」
できればアパートに持って帰りたい。大量に蓄えたい。
泡盛は当然として、口当たりのいい洋酒も仕入れておきたいし、日本酒やらビールやらも試したい。
僕の周りにいる大人は機構関連やら行動不定な教師やら中学生にしか見えない校長やらなので、こういう機会は滅多にないのだ。
本当の本当にハブが入った物にスズメバチが入った物という人を選びそうなものまで揃えているのは1つしかない酒屋というのもあるだろう。
どれもこれも興味の尽きない品々なのだけれど、あのアパートの容量（キャパシティー）を考えるとタイトに纏めなければいけない。
「体積を限界まで使うなら缶の箱買いなんだけどなぁ・・・」
きっちりと積み重ねれば結構な量が入るはず。
でも同じ種類ばかり買い込んで飽きが来ると辛い・・・。
でもでもオンボロなあのアパートに瓶を並べるスペースはないし・・・。

いっそ床に並べる？いやいや、さすがにそれはまずいか。
生活に支障が出る気がする。
あー、でもせっかくお酒が・・・。迷うなぁ。
泡盛は是非とも持って帰りたい。あと赤ワイン。白も欲しい。チューハイでも構わないんだけど・・・でもなぁ・・・・・・。
「葉月ちゃーん、少女が真剣にお酒を選んでる絵は色々と問題ありだから早急にね・・・」
周りを忘れて考え込む僕にそんな小鳥さんの忠告。
・・・言われて想像してみる。
わざわざ地下に置かれた酒場にて、棚に並べられたお酒の数々を真剣に選っている、身長１・・・ｃｍの少女。
身長？興味ないから知らない。体重も知らない。スリーサイズだけは必要性に駆られて覚えているけれど、これにしたって幾らでも変えられるし。
まぁ、さて・・・確かに小鳥さんの言う風景はシュールではある。
酒好きな両親の遺伝子を受け継いで幼い頃からお酒に親しんできた未成年、に見えなくはない。
疑いの目を向けられる前にさっさと選んでしまった方がよさそうだ。
「んー、それじゃあ・・・」
もう数分の思慮の後、幾つかの銘柄と送り先の住所を走り書きしたメモを渡して成人特権を発動してもらう。
種類を減らした分、箱買いで数量を増やしたお酒はダンボール数個分に及び、これでしばらく入浴後にお摘みを食みながら酒を飲む生活が楽しめる。
乗り気ではなかった沖縄。
うん。けどこういう機会に恵まれたということを考えると悪くはなかった。
事後処理で後片付けな旅行にしては合格点だ。
・・・などと思った気ままな買い物（ショッピング）タイム。

だけれど、そのご機嫌はモールからの帰り道までだった。

＃

水族館へと行けないのは残念ではあるものの、利益はあったしそろそろ帰ろうと老人を迎えに機構へと向かう途中。
前から現れた人物に声をかけられる。
「君が規格（ルート）『織神』の８月か」
灰色のヘルメットに機能性を損なわない程度のプロテクト、ホルスターに何時ぞやの制式拳銃を両腕に特異な銃を抱え込んだ男。
「加藤倉光は君を連れて万可統一機構沖縄支部へ亡命した。よって君の身柄（しょゆうけん）は沖縄支部へと移ることになる」
ごちゃごちゃがちゃがちゃ。
きちきちちゃかちゃか。
「――――沖縄支部まで、ついてきてもらうぞ」
隣にいる小鳥さんは、我関せずと沈黙を守っている。
ふむ。
「・・・・・・・・・・・・・」
ざりじゃり。
ぎ、り。
「・・・分かりました」
抵抗されることを怖れてか、緊張で早かった彼の心臓の鼓動は僕の返答で幾分緩慢になった。
背を向け、案内役として進もうとする。
一歩歩いて、もう一歩といったところで、左足が地面を踏めずに空を掻いて――――身体を前のりに倒した。
「ぅえ・・・？」
使い慣れた足が平たい地面を踏み外すわけもなく、この場合足の長さが急に変わったと言った方が正しいのか。

振り返った視線の先には、自分が忘れていった膝下（ひだりあし）がさっきまで立っていた位置に取り残されている。

「あ、ぁあああああ゛！！」

そんな叫びと共に、僕のいる道を塞ぐように、前後から同じ格好をした連中が飛び出した。

４人と３人。ごちゃごちゃと五月蝿かった連中だ。

神戸と沖縄、学園都市にも違いがあれど、至極研究所の事情は変わらないのだろう。

こっちでは何て蔑称されているかは知らないけれど、僕達の言い方では彼らのことを泥底（ヌタ）部隊と呼ぶ。

研究所共同所持の雑用部隊。

角を曲がって立ち止まっている僕に向けて駆け出したその身体は、けれど宙を舞う。

まず接触（ファーストコンタクト）を試みて片足を奪われのた打ち回る彼とは違い、両足を切断されて支えを失った身体は無様に地面に転がった。

本当は一撃で首を飛ばした方が無駄がなくてよかったのだけど、頭部は身長差で高さがバラける。だから揃えて切り落とせる足を狙った結果がこれだ。

前後２本だけ伸ばしていた髪を細さや強度を標準値に戻して回収する。

こういう時に役には立つ極細の黒い糸。

だけど正直、頼り切るのは怠慢の気がする。

弱点も多いしできれば使いたくなかった。

しかし、やっぱり多数を相手にするのに僕自身の身体能力は不利だからなぁ。

遮蔽物があるならまだしも道のど真ん中で挟まれては無傷で済まない。

そして今回の場合、それが致命打になった恐れがある。

腕や胴をバタつかせて絶命を待つ彼らの頭を踏み潰しながら、その装備の1つを拾い上げてみた。
制式拳銃ではない方の彼らの武器。小型の機関銃、ただし歪な形をしている。
銃口がやたらと大きくマガジンが円盤型（パンマガジン）という全体的に丸みを帯びたシルエット。
マガジンを外して弾丸を確認すると、弾頭が針状になっていた。
分類するなら麻酔銃だけど、無論普通の猟銃の1種ではない。
即効性のある神経麻痺毒か何かを即効に体内に打ち込む弾丸を連射するというえげつない武器だ。
一撃でも食らえば卒倒するのは間違いない。
着弾と同時に圧縮ガスで薬品を押し込む強引な構造で、思いのほか傷口が広がるために通常の相手には危険すぎて実用化されなかったタイプ。
けれど、傷を自分で修復できる僕に対しては非常に有効な攻撃法だろう。
前の時とは違い、始めから僕をターゲットにしている分装備が違う。
先手を打ったのは正しかった。
右手人差し指の血流を止めて、銃弾の針を突き刺す。
「っ・・・」
一気に痺れが指に回った。
指一本とはいえ、完全に神経をやられている。その上、かなりの激痛。
本当にえげつない。
こんなものをまともに食らえば変容で毒を抜く暇もなくノックアウトだ。
免疫を作って弾はさっさと捨てる。
「あー怖い怖い」
「・・・そういうことは人の頭を潰しながらいうことじゃないわよ

？」

やっと口を開いた小鳥さんは冗談っぽくそんなことを言って、彼らの装備から通信機を抜き取った。

耳に当ててしばらく、

「ん、状況がよく分かんないな・・・」

顔をしかめる。

ここにきて初めて、顔をしかめる。

昼の道端、８人の頭の潰れた死体と血の中で、初めて。

客観的に見て、それなりに異常な光景だと思うけれど、小鳥さんもそれなりに見慣れているのか、元々覚悟はできているのか。

まぁ、しかしこっち側では日常の一部と言えなくもないけど。

「小鳥さんはこの件に関わってないんですか？」

一応訊いてみる。

「いや、知らなかったよ。葉月ちゃんが来るよってことは堀塚さんに聞いてたけど、個人的に出迎えただけだから」

「堀塚さん？」

「こっちの機構の一番偉い人」

岱斉と同じか。

院長・・・というのはまぁ仮の名称みたいなものだから、本当は支部長と呼ぶのが正しいのかな。

今回の黒幕はその堀塚だろう。

老人の方も何とかしなければならない。

さて、どうするか。

うめき声も沈黙した中で考える。

静寂。

そこで、いきなりの着信メロディー。

僕の知らないその曲は当然小鳥さんの携帯から。

通信機を放り投げて、代わりに耳を当てる。

「あー、はい？今？葉月ちゃんと一緒ですよ。

先遣隊が返り討ちにあったのにも遭遇しちゃったないじゃないで

すか。教えてくれないから、もう。
あんまり血生臭いことは見せないって約束でしょ？
え？助けろよ？いやいや、だから聞かされてませんしそんなこと。
えー、そんな無茶を私に頼みます？
そりゃあ、確かに葉月ちゃん、相手の本気度合いで対応変える人だろうから、おふざけ半分でかかれば殺されはしないでしょうけど半殺しぐらいにはされる気がするもの。
んー、それは魅力的な提案だけど・・・、もう一押し！
え？あはは、やだなーもうっ！
変容と鳳凰が混ざるわけないじゃないですか。子供への能力遺伝は交差しても混合はしませんって！」
話し相手が誰か、内容が何か。聞き耳を立てる必要もなく内容が想像できる。
最後の辺り、何か貞操の危機すら感じる。
小鳥さんとの会話を思い返してみれば、あぁ色々とそれらしいキーはあったけど。
あれですか。
小鳥さんあなたは――――
「ねぇ、葉月ちゃん」
酷く乾いた思考を遮って、携帯を折りたたんだ小鳥さんが声をかけてくる。
「私のハッピーライフのために今から葉月ちゃんを捕まえるけど――――」
その未来想像図がどんな風になっているのかはできれば一生知りたくないし、
「無邪気なじゃれ合いってことで・・・殺さないでね？」
そんな都合のいい話があるものか。

第３５話－　嬉々危機。－ＸＸＸ　ｃｏｍｐｌｅｘ－（後書き）

年明け初めての更新でなんだかなネタですね、すみません。
小鳥さんの台詞と嗜好はご想像でお楽しみください。
えっちぃ表現はなるべく避けるようにしているこの小説ですが、相変わらずグロイ話は無修正です。

今回の話、沖縄編を纏めるにあたって思いのほかだらだら続きそうだと終盤になって気がついたため前後に分けた前編にあたります。
なので、次話の更新は早くできる予定。何せ８割がた書けてます。
これで遅ければ、１月にして今年の目標不達成。
ありそうなのが怖い・・・。
がんばります。

せっかくなので、ほぼ書き終わっているからこそできる次回予告を、

次回『人権侵害』

以上です。
では、近いうちに。

第３６話－　絢爛浄火。－Ｓａｃｒｅｄ　Ｆｉｒｅ－（前書き）

『エキ日々。』史上初の連日更新です！

第３６話－　絢爛浄火。－Ｓａｃｒｅｄ　Ｆｉｒｅ－

結局、走って逃走中。
１対１の戦況でわざわざ交戦するなんて愚行だ。
身体能力では勝っている上、相手は追跡能力を持った能力者じゃないのだから逃げ切れる・・・はず。
それにたぶん彼女をけしかけた堀塚という人物の狙いは時間稼ぎと足止めだろう。
十分すぎる装備を纏った先遣隊がやられた現状から考えて、次に来るのはさらにヤバイもの。
脚足戦車・・・シオマネキとか。
いや、あれは捕縛には向かない。
『殲滅にしか用途がない、使用する機会がない、そもそも何で作った？』で有名な兵器だし。
ただ、さすがにあんな逸脱技術（オーバーテクノロジー）の申し子は出てこないにしても、サワガニなら在りうる。
前にアレを潰せたのは１体だったからであって、アレは群隊戦法を前提に作られたものなのだ。
不得手な戦況だったからこそ真価を発揮できなかったけれど、今回は違う。
正直、出てくる前にケリをつけなければ勝率は０に近い。
小鳥さんに第２部隊、どっちにしても厄介な相手だ。
「神戸に逃げ込む・・・のは難しいんだよね・・・」
地続きならともかく本島と離れた琉球では移動手段が限られている。フェリーは時間が掛かりすぎて論外だし、空路だって追われれば逃げ道がない。
そう。だから、神戸に帰るためには、この一件を終わらせる必要がある。
「クリア条件が厳しすぎる」

とりあえず小鳥さんと出会った学園都市中央搭の最上階にまで駆け上り、展望窓から外を覗く。
様子を窺うわけではなく、目的は万可統一機構だ。
上から、どんな構造になっているかを把握しておきたい。
こんな分かりやすいところにいるのは危険ではあるけれど、最悪突入もありえることも考えると外せない行為なのだ。
ガイドの地図で学園の地形自体は頭に入っているし、立体として建物の形もこれでインプットできた。
さてさっさとここから離脱しよう。
が、
「っ、早い・・・」
足先を螺旋階段に向けるのと同時に、感覚が敵の接近を告げる。
赤外線熱感知（サーモグラフィー）と能力波感知（シックスセンス）。
1人であることと、通常の能力者に感じるのとは違う捉えどころのない能力波からおそらくは小鳥さん。
搭の出入り口を使うか能力で直接上ってくるか。
あるいは父親がやったように搭の空気を燃やしにかかるか。
判断する暇はない。
咄嗟に彼女のいる方とは逆方向の壁を蹴り貫き、自らを宙へと放り出した。
途端、
――ジリン
小銭袋を鳴らしたような音と共に展望室内が炎に包まれる。
その様子を開けた風穴から上下逆に確認しつつ、猫のように体勢を整え着地に備えるけれど、着地を待たず追撃がきた。
火の尻尾（ファイアテール）という表現がしっくりくるような紅き火の軌跡。
ブースターとして能力を応用した、飛行術。
簡単に見えて、噴射する火が人体に与える衝撃を考えると生身では不可能とされている技。
緩衝材として鉄板などを利用しなければ、体の方が内出血で酷い

ことになるという大問題が立ちはだかっている。
それをまさしく生身で行えるのは、彼女が絢爛浄火だからか。
それに加えて、おそらくは・・・。
ばたつくポーチからＶｚ.（スコーピオン）６１を取り出して右肩辺りを適当に狙い撃つ。
連続して発射された弾丸は彼女の身体に触れることなく火に包まれ燃え尽きた。
やっぱり、防壁も張っている。
能力波を可視化できるからこそわかる小鳥さんを覆う能力波。
あからさまな火の壁があるわけではないけど、目に見えない壁が彼女を包んでいる。
鉛玉を対象にした炎を展開しているのだろう。
何も燃えず何もないように見えるのは展開範囲内に銃弾がないからであり、一度侵入した異物には容赦なく着火する仕掛け。
空焚き、みたいなものかな。
しかし、なんとまぁ、
「えげつない・・・」
音速を超える銃弾を一瞬で溶かし得るあの炎、どう考えても物理法則・・・というか世界律を無視してる。
熔解温度関係なく燃やし熔かせるようだ。
前に邂逅した小島継という殺傷嗜好者ですら、風刀と物質の固有振動という物理法則を駆使して硬軟構わない破壊力を実現していたと言うのに。
形骸変容（メタモルフォーゼ）も相当な出鱈目能力とは思っていたけど、絢爛浄火も破格すぎる。
僕の能力が身体（うち）に干渉する能力なら、彼女の能力は炎を介して世界（そと）に干渉する能力だ。
うん、勝てる気がしない。
直接攻撃に転用できる能力に対してこっちの攻撃は応用と小細工主流だし、あの不可視の防御壁（バリアー）は攻略困難だ。

鉛玉の限りではなく、石だろうが髪だろうが人体だろうが防御の対象に変更できるだろうから――――、

殴るとかすると腕が熔け落ちる気がするんだよね。

あそこまで能力を常時使用していると消耗が激しいはずだけど、そもそもあのペースでも持久できるからの判断だろう。

自滅まで少なく見積もって１５分、３０分。その間に泥底（ヌタ）部隊がくれば挟み撃ちでジ・エンド。

出動に１０分もかかる部隊なんてゴミみたいなものだから、実質制限時間は１０分以内。

逃げ切りという選択肢がないこの状況、つまりこっちから攻撃を仕掛けなければならないわけで。

「八方塞もいいとこだ」

だいたい今の空中というフィールドも分が悪いし。

鳥と蜘蛛の戦いみたいなものだからなぁ・・・。

「さて・・・」

そろそろ、頃合。

再びポーチをまさぐって予備のマガジンを取り出す。簡易爆弾程度にはなるだろう。

無論、このままだと彼女の火に触れたとしても発火はしないだろうから、ガイドブックの１ページを乱雑に破りライターで火をつけてマガジンに挟み込む。

それを緩やかに落下中の僕へと突っ込もうとする彼女に投擲した。

――バコンッ！

正規品の手榴弾ではない即席爆弾は中に詰まった弾丸やその破片を四方八方に吐き散らす。

それと同時に、先ほど飛び降りた搭に巻きつけておいた数本の髪の毛に力を入れる。

下手なワイヤーアクションのように、いきなりの真逆への方向転換。

頭が痛い。今度から別の方法を考えないと。

本当なら危なすぎる手製爆弾は彼女相手だと目晦まし程度の役にしか立たない。
搭の屋根に着地して、助走をつけて反対側から飛び降りる。
放り投げるのとは違う、斜線を描く飛び降り方。
滞空時間を少しでも減らすのは、空中戦を避けたいから。
寮の屋上に着地して、そのまま駆け出す。
逃走、ではなく戦略的逃亡。
遮蔽物の多い入り組んだ室内にでも誘導しなければ話にならない。
が、相手も甘くはないようで、もう追いついた。
振り向かなくても赤外線熱感知（サーモグラフィー）でわかる。
紫外線を利用して得た情報を脳で映像化しているこの視覚は眼球視覚とは実のところ関係がないのだ。
にしても早い。わざわざ反対方向へ急転回して逃げたのに。
反射神経が早いのか、あるいは命綱（かみ）が見えていたとか・・・？
それは怖い想像だ。
一応、見えないように最低限の細さを保ったせたはずなんだけど。
見えてるとなると、僕の唯一の得物らしい得物である黒糸が通用しないということになる。
元々使いたくない技ではあるんだけど、こうなると本当に突破口が見えない。
不意打ち以外に防壁を掻い潜る手立てがあるとは思えないし。
投降して隙を衝く・・・というのはあんまりにも手抜きな作――――！
「がっ！ぁあ」
何時の間にか、右足首が熔けていた。
だらだら思考してる暇もないらしい。
大きくバランスを崩しながら、左足に力を込めて勢いをつけ、身体を丸めてゴロゴロと転がって柵のない屋上の端から転げ落ちる。
「ごっひゅっっ！」
・・・5階からの落下衝撃はとんでもなかった。

脳が揺れて意識レベルが2段階ほど落ちたし、出てもいないのに血生臭さを嗅覚が感じ、肺の空気は抜けて口が開かない。
足首の負傷よりダメージが大きい。
背中に突き刺さった潅木を抜く余裕もなく、ちょうど目の前にあった窓ガラスを叩き割って寮内へと侵入する。
長さの合わなくなった右足は骨だけを伸ばして帳尻を合わせた。
まるで松葉杖だ。
ともかく血肉の再生に回している時間はない。
血で汚れていたとはいえ、また靴が1つ駄目になってしまった。
「葉月ちゃーん！室内は卑怯よ！」
背後でそんな声が聞こえるけど知ったこっちゃない。
機構的には情報の隠蔽やらと後始末が大変なのだろうけれど、こっちにとしてはむしろざまぁみろというやつだ。
嫌がらせ万歳！
侵入したのは誰かしらが使っている生活感たっぷりの角部屋。住人はいないようだ。
窓ガラスを割ってすみません。あと、
――バゴッ
壁も破ってすみません。自分で修理してください。
よし、謝罪は完璧。
窓と壁と一直線に穴で道を開けて二つ目の部屋に。
入って数歩で、胸を打つ苦痛が身を襲った。
次は左肺、らしい。
いきなり、肺だけを、ごっそり持っていかれたような感覚だ。
・・・皮膚やら肉やらを無視していきなり肺だけを燃やすなんて芸当は普通できないんだけどな。
確かに今日び、手や口からしか能力を出力できないような能力者はほとんどいない。
能力の発現範囲内であれば、人がいる座標軸に出力先を合わせることで、体内を炙り焼くこと自体はできるだろうけど、彼女のやっ

ていることはそれとは根本的に違うものだ。
燃やす対象を選ぶなんて簡単に言うけれど、それには対象をしっかりと認識できなければならないという前提があるはずだ。
そのモノがどんな形で何処にあってどんな性質を持ってといったことをしっかりと認識できていないとできるわけがない。
皮膚と肉とに守られて見えないはずの肺臓を、確実にピンポイントに照準にしている。
酸素不足で力が抜けてよろけざまに身体を捻り自分以外の侵入者へと振り向く。
ガラスをペキペキ割りながら、壁の穴に向かって彼女は歩いてきていた。
けれどくぐってこっちの部屋に入ることはなく、穴の手前で立ち止まる。
・・・・・やっぱりか。
「葉月ちゃん、いくらなんでもコレは危ないわよ」
そう言うと同時に、僕と彼女の間を遮っていた網目状の紅い糸が一瞬ちらついて消えた。
穴を抜ける際に張り巡らせた髪の網。
知らずに通り抜ければ何でもブロック状に切り崩してくれる便利トラップだったのに、呆気なく無効化されてしまった。
やっぱり、視えている。
チップの位置や肺といった不可視の部位を含めて、通常視界では識別困難な糸まではっきりと。
透視能力（クレアボイアンス）、だけでは説明がつかない。
僕の能力波感知（シックスセンス）のような独自の視力があると見たほうがいい。
視えているからこそ、確実に燃やせる。
その目が、彼女の絢爛浄火はその価値を跳ね上がらせている。
さて、困った。
相手は体勢を立て直す時間さえ与えてはくれないようだ。
彼女の炎、たぶん選択可能数にも限りはあるんだろうけど、その

限界が1つ2つというのは考えられない。
石、ビー球、スーパーボール、地球儀、りんご・・・とまるで違うものをある限り同時に投げれば1つぐらい当たるかもしれないとはいえ、当たったら何？といった感じ。
りんご1個で気絶してくれるとありがたいんだけどなぁ。
そんなことを考えていたら、
「な、なな何してんだっ！！？」
怒鳴り声が浴びせられた。
横目で確認すると、大学生ぐらいの青年がこちらに向かって歩いてくる。
この部屋の主だろう。
いきなりの闖入者にその対応は正しい。正しいのだけどこっちにしても横槍を入れられた形だ。
ただでさえ面倒な状況がさらに困難になった。
この時間に自室にいるなよ大学生。
いっそのこと『あのお姉さんに襲われたんですっ』とでも言って話をこじらせてやろうか。
彼は尻餅をついた体勢の僕に駆け寄って、キッと小鳥さんを睨む。ん。言うまでもなく、そう見てくれているようだ。
それもそうか、普通こんな場面に遭遇したら、倒れている方を庇うだろうな。
壁の穴をくぐってきた小鳥さんも困った顔をしている。
・・・・・・・・・・・ふむ。
その手があったか。
当たる前に熔かされてしまうのなら、熔かせない物を投げればいい・・・と。
「ふ・・・ふふ・・・」
こちとらただ今絶賛貞操の危機なのだ。
手段を選んでいる場合ではないわけで、そもそも考えてみればこんなに一方的に追い詰められておいて人死にNGだなんてルールを

守ろうとはなんて僕もお人よしだなぁ。
「・・・ふふふふふ・・・・・・」
積極的（アグレッシブ）な小鳥さんと顔も知らない堀塚院長の軽い発想（ノリ）は危険すぎる。
あんなモノを創って見せろなどという彼女に拘束されれば明日の朝を2人ベッドで迎えることになりかねない。
そう、手段を選り好みしている余裕はないわけで・・・。
人間追い詰められれば何をしでかすか分からない！
よってこれも已む終えなし！
「・・・あはっ、あはははははっ！」
「ちょっ、何その不気味な笑い声！」
一歩退いた彼女がこれ以上射程距離から離れないうちに、がっしりと身を案じてくれた心優しい学生の袖を掴む。
さぁ逝け、そら逝け、逝ってしまえ！
「喰らえ！人間肉弾――――！！」

／

徘視蜘蛛などが送ってくる情報を統括するモニタールーム。
通信機器などを備えた有事の際の作戦本部としても利用されることになっている、情報管理の中枢にて。
「警察？警察よね！？助けてぇ！女の子が皆を投げたり振り回・・・うぉわ！っいい嫌だ！お願い足持たないでぇ投げっ投げな・・・！！」
そんな悲鳴にも似た回線を傍受して塚堀亜那（ほりつかあな）は情報隠蔽を諦めた。

コミュニケーションスペースと呼ばれる寮生憩いの場は今、散々たる有様だった。
割れたガラスや破れたソファに散らばったトランプ。そして、

宙を舞う大学生。

織神葉月に枕投げの如く投げられた女子大生は、狙われた瑞桐小鳥に受け止められることなく、指を組んだ両腕の振り下ろしで頭を殴打、床に叩き落される。

気絶した彼女の身体を踏みつけて小鳥は前進、状況が変わってしまった戦いに早々に決着を着けるべく葉月に照準を合わせるようとする。

狙いは両足。移動手段さえ断ってしまえば、いくら葉月でも攻撃を続けることはできなくなるという考えだ。

黒糸を使えない以上葉月の攻撃手段は近距離の肉弾戦がメインであって、幾分か隙ができ威力も落ちる投擲は決め手に欠ける。

人間を武器に使った直接的な打撃こそが現状における葉月の切り札。

ならば、それを封じてしまえばいい。

その判断は間違っていない。が、奇策が通じるというのならそれは葉月が得意とする戦法だ。

小鳥と同時に前方に跳んだ葉月は、髪を伸ばして適当に捕まえていた寮生の１人をあらん限りの力で投げつける。

回転まで加えられた人間手裏剣。

それを横にズレることで避けようとする小鳥だが、それは致命的なミスだった。

確かに飛び道具に対する対応として、最小限の動作で避けるというのは最良な行為ではある。

あるのだが、今回投げられたのは生身の人間だ。

人間手裏剣と化した彼にしてみれば、その身体の行き先は後にある寮生自慢の９０ｃｍ水槽。

傷つきにくいガラス製、約１６０リットルの不衛生な水、泳ぐ大量のテトラとコリドラスに水草と土。

大惨事の三文字しか見えない。
そんな状況で小鳥に避けられればどんな行動に出るか？
自分と小さくも尊い命のために、彼は腕を必死に伸ばして小鳥のコートの端を掴んだ。
「！」
小鳥の足では勢いを殺しきれず、そのまま彼と共に後方に吹っ飛ばされる。
「・・・くっ！」
すぐさま起き上がるが、その空白の間に葉月は手にした得物を低く構えて向かってきていた。
その姿はガリガリと大剣を地面に擦らせて走る戦士に見えなくもないが、ただ葉月の持っている武器は人間で――――擦っているのがはその頭部。
改めてそのあまりにもな絵面に一瞬唖然とするも、小鳥は照準足から得物を握る両腕に辛うじて合わせる事に成功する。
激しく揺れ動く葉月の腕だが、小鳥の能力における”照準”とは位置座標ではなくモノ自体に合わせられる。
それは、どう動こうと避ける事のできないという、出力系能力者として反則な技。
つまりどれほど葉月は早くとも、回避することは不可能であり、葉月の両腕は肘から先が一気に蒸発した。
手を失ったことで武器を落とした葉月は、しかしそれぐらいの抵抗は予測していたと言わんばかりに、すっぽ抜けた勢いを利用して足首が骨の右足を軸に一回転、回し蹴りを大学生の尻に喰らわす。
へぶっ、ぶぶっ、ごふっ、と武器が悲鳴を上げたがそんなモノを気にする人物はここにはいない。
飛んでくる肉弾を今度は蹴り落とそうとする小鳥。
しかし、大人と変わらない体格と体重の物体がそれなりの速度でぶつかってくるという衝撃はかなりのものだ。
葉月と違って身体能力は常人と変わらない小鳥には打ち落とすに

しても辛い。
両腕でならともかく片足で何とかなるものではなく、またしても体勢を崩す。
判断を誤ったことに顔を歪めるその一瞬に、葉月は接近戦が可能な範囲にまで侵入を果たしていた。
が、ここにきて、ネックになるのが小鳥の炎の防壁（ファイアウォール）だ。
例え手足の届く距離にまで近づいたところで、攻撃が入らなければ意味がない。
逃げ惑う寮生を髪の毛で縛り付けておいた残り弾（ストック）はさっきの人間手裏剣で最後だったし、両腕は既にない。
残っている両足にしても片足は足首から下が骨一本に支えられている状態で、左足を失えば今度こそ戦闘不能が確定する。
一般人ならともかく葉月に対して傷害を辞さない小鳥に、そもそも左足の蹴りが届くわけもなく、この好機（チャンス）に葉月は有効手段（すで）なしの状態なのだ。
だが、
物質の性質を無視して何もかもを燃やし尽くす浄火、見にくいという概念を持たない奇襲殺しの視力。
一見完璧に見える小鳥の絶対防御だが、遊び半分の鬼ごっこである今回に限っては付け入る隙がはある。
何であろうと絶対に燃やして防御する盾だからこそ、捕縛目的であるが故の矛。
そう。殺してはいけない相手が自ら致死的弱点を晒した場合は、どうしても防御を解かなくてはいけない――――。
いくら自己再生能力を持ち手足や臓腑を失っても生命維持が可能な魔物であっても、決定的な弱点がある。
それは自律神経の中枢を含み生命活動に不可欠な部位であり、心が宿るとされ身体で最も重要視される場所であり、能力波を発っし超能力を統制すると言われる制御機関であり、

つまるところ、
「とりゃぁあああ！！」
「きゃゃぁあああああああああ！！！」
――――葉月の頭突きが小鳥の顎に炸裂した。

落ちた小鳥は仰向けに倒れ、葉月は頭をフラフラと揺らしながらも肘から先のない腕を掲げる。
「アイッアム・・・、チャンッッピオォォォォ――――ンッ！！！」
サイレンが近づく音と所々ですすり泣く声が聞こえる中、そんな勝利宣言が虚しく響いた。

第３６話－　絢爛浄火。－Ｓａｃｒｅｄ　Ｆｉｒｅ－（後書き）

さて、まず言い訳から。

葉月ちゃんは人を粗末に扱ってはいけないとは習わなかったのだ。

すみません。

自分で創ったキャラなのに思いのほか絢爛浄火が強すぎて、葉月以上に作者がてんぱった結果、大学生が犠牲になりました。

それともう１つ、誤らないといけないのですが、沖縄編は次で終わると言ったのに終わりませんでした。

代わりに、書けていた分を連日更新と言う形でアップした次第です。

よって沖縄編、次話に繋がりますが、次こそ終わる…予定っ。

次回のテーマは『老人虐待』。

ではでは。

第３７話－　幼老虐々。－Ｄｉｓｔｕｒｂａｎｃｅ－（前書き）

彼岸さん気づきました。
葉月は他のキャラクターに『萌え』を丸投げしてるんだ・・・と。

第37話ー　幼老虐々。ーDisturbanceー

堀塚亜那ら沖縄万可統一機構は織神葉月と瑞桐小鳥の消息をロストした。

大学寮での戦闘を最後に、派遣した泥底部隊（ヌタ）は接触すらできず、徊視蜘蛛の情報をあたるもまだ発見できていない。

葉月に内蔵されている発信機（チップ）のコードは神戸支部しか知らず、この件が沖縄支部の独断によるものである以上、それを聞き出せすことはできない。

本人さえ建物に囲ってしまえば神戸からの抗議には抵抗できる。

実力行使に対しても絢爛浄火の鳳凰がいる沖縄支部の方に分がある。

同組織であるにも関わらず連携が取れていない他の学園都市支部はむしろ自分の機構にも横取りの権利が発生すると嬉々するだろう。

しかし、そんな目算は狂い出している。

「ちっ、よりにもよって小鳥がやられるとは思ってなかった・・・！」

神戸のあの炎海紅泥が最強から程遠いと言わしめるほどに反則なポテンシャルを持つ伝説の鳳凰が、発現したとはいえ初期段階の形骸変容（メタモルフォーゼ）に後れを取るとは夢にも思わなかったのだ。

過ちは、一般人を巻き込むという発想が機構のような組織の人間にはできなかった、その一点だ。

そしてこの状況。

劣勢の上に、相手の動きがまるで読めない。

つまり動きようがない。

何時の間にか形勢逆転、守りに入っている自分達がいる。

「衛星の方は？顔認識（プログラム）は組み込んでるでしょうね！？」

「やってますが形骸変容（メタモルフォーゼ）相手に通用するとは思えませんよ！顔を変えられたらシステムに引っかからないんですから！」

オペレーターの1人から返ってくる答えにさらに頭を抱える。

「あ〝ー、そうだった面倒くさい・・・。駄目だ、やる気が失せてきた・・・」

しばらくそうした後、ふと顔を上げた。

思わず立ち上がって指揮を執っていた間に、自分の椅子を勝手に陣取っていた少年へと振り返る。

「ねぇ、出雲」

「あん？」

「全指揮権お前にあげるからさ、私帰っていい？」

「冗談じゃねぇ！！あんたここに来て逃げる気か！？」

「いいじゃん！そもそもあんまり乗り気じゃなかったのよ！！」

「あんたが乗り気じゃねぇ俺や部下を巻き込んだんだろうがっ！

つーか俺を帰らせろよ！小鳥っちと同じで俺も機構とそこまで深い関わりねぇしな！」

「うわ冷たっ！現代っ子の悪い傾向だに？言うじゃんか、冥土の旅は道連れ、彼の世で情け、って」

「色々と違う！つーかあんたマジでふざ――――」

「あ、あの・・・」

と、そんな不毛な言い争いをしている年齢差は大きいはずの、けれど精神年齢はちょうどいい具合な男女に、オペレーションの責任者が声をかける。

「「あ？」」

「その・・・モニターに・・・」

彼の指したのは巨大液晶を枠分けした数あるモニターの内、端の枠に押しやられていたこの施設の監視映像の１つだ。

それもちょうど玄関口となる、インターホン映像の代わりにも使われるカメラのモニター。

それに、織神葉月と、彼女にお姫様抱っこをされた瑞桐小鳥が映っている。

「・・・・・・」

成人女性よりも少々高めの小鳥が中一平均よりも少々低めの葉月に抱っこされている様はかなりシュールだ。

「・・・・・・・・・・・・・」

『はろはろー、ごめん堀塚ちゃん、捕まっちゃった♪』

と、小鳥が茶目っ気たっぷりに言って、

『既に機構の周りは”囲ってる”から、人の出入りはできないよ。発覚次第燃やされると思ってね。

さて、楽しい楽しい話し合いだ。堀塚だっけ?そっちにいる老人返してもらおうか』

これも彼女の口から発せられた。

「――――ッ」

仮にも万可統一機構の1つを任されている人物だ。言動が子供染みていても頭は切れる。

その二言で亜那は状況を理解した。

「・・・野郎」

イメージは腹話術の人形。

あるいはESPに存在する人格奪取(ハッカー)と同様の行為を物理的に行っていると言うべきか。

おそらく、小鳥の後頸(うしろくび)には葉月の腕が癒着(くっつい)している。

身体に命令を送る神経系に自分の神経を無理やり繋いで脳の方を支配するという形骸変容(メタモルフォーゼ)の応用。

それで彼女らの奇妙な体勢も納得がいく。

小鳥と葉月の身長差を考えると、小鳥が立った状態では葉月が地面に足がつかずにぶら下がってしまうのだろう。

それを打開する移動法は葉月が小鳥に負(お)んぶされる形か、葉月が小鳥を抱っこする形のどちらかだった・・・。

「やってくれる・・・っ!」

しかしそんなことより問題なのは、絢爛浄火を無効化するだけならばこんな手段は用いないということ。

一度気絶までさせたのだ。
手足の動脈でも切ってしまえば、あの現場なら駆けつけた救急車が強制的に病院送りにしたはずだ。
にも関わらず、こうして連れてきて、なおかつ、小鳥に意識があるという状態が意味するところは、小鳥に意識があったとしても脅威にならないという判断の示すところは、つまり――――
葉月に絢爛浄火の制御権があるということに他ならない。
自分達の所有する最も有効な武器が奪われた。
その上で行われる話し合いが対等な立場で行われることはもちろんない。
ごくシンプルに、たった二言で脅されている。
命令するまでもなく運ばれてきた、玄関口に繋がるマイクのスイッチを押して、亜那はけれど冷静に対応する。
「・・・・・・おかしなことを言うわね。加藤倉光はこちら側の協力者よ」
デスクに置いてあったメモ用紙に『出雲、機構の周りはどうなってる?』と走り書いて見せた。
『ああ、倉光が亡命ってあれ?どうせ嘘でしょ』
と、今度は葉月自身が言葉を紡ぐ。
「へぇ・・・何でそう思うわけ?」
『でなきゃ先遣隊をああもあっさり倒せないはずだからね。
同じ機構同士の情報交換はあるから、まぁ確かに装備自体は僕向けに揃えていたけどさ。
けど、もしも倉光がそっち側に加担してるのなら、あの装備はない。
あの老人は情報としてではなく経験として僕を知ってるんだから』
あと幾らか判断材料はあったのだが、それを葉月はあえて口にはしない。が、
『彼ならもっとえげつなく、かつ確実な方法を用意する』
歪すぎる信頼がそこにはあるらしかった。

それを感じ取ってか、亜那は嘲笑う。
「はっ」
相手を怒らそうが、時間稼ぎが目的のこの会話、続けることに意味がある。
「らしくないんじゃない？話で聞いた君の印象だと、あの老人なんて置いといてさっさと帰っちゃいそうなものなのに。
何？そんなにあれは大事？」
『まぁ呪い殺してやろうとした仲だから？
正直助けるだけの価値はないけれど、持って帰れるなら持って帰るさ。
僕も老人と同じ考えでね。
あれが神戸に居座るのは、神戸の研究環境があれの要望を満たしているからだろう？
それと同じ。
正直、神戸の機構ですら次第点なんだ。倉光（ちょうどひん）がなくなると宿のランクが下がる』
「・・・・・・」
『それと何か勘違いしてない？
確かに僕は機構の所有物なんだけど、――――けど僕は人形は人形でも呪い人形でね。
気に入らない所有者は1人残らず呪い殺すぞ。
所有権はそちらにあっても主導権はその限りじゃないことは重々胸に刻んでおけよ』
いきなり転調した声に一瞬、一瞬だけ身が強張った亜那。
だが、結局のところこちらに有効な人質がいると判断して、切り出した。
運び次第では時間稼ぎではなく突破口になり得ると踏む。
「・・・オーケーどっちにしろ君があの老人を引き取りたいって意思があるのには変わりないわけよね。
結局の話、小鳥と加藤を交換しろと言いたいんでしょ？」

しかし、その思惑は外れて、ズームアップされた葉月はきょとんと目蓋を瞬かせた。
『は？まさか。
小鳥さんは返さない、けれど老人は回収させてもらう、これがこっちの要求だよ』
「・・・それが通るとでも？」
『通すよ。
これまた勘違いされてるみたいなんだけどさ、老人と交換するのは小鳥さんじゃなくて君達の全てだ。
今まで何十年と研究してきた多大な犠牲の上に成り立っているその全て。
君達にとってかけがえのない、どうしようもなく代えの利かない、君達がすがり付いている全て。
それとオマケで君達の命・・・てところか』
冗談ではなく、本気であることが窺える口調。
『いいかな？これは交渉じゃあない。
楽しい話し合いって言うのはつまり、僕にとって愉快な会話であって、一方的な搾取を指すわけだね。
別に脅迫と訳してくれてもかまわないけど？』
というより、脅迫としか表現しようがない。
そんな呻きを苦虫と共に噛み潰して、けれどまだこの時には亜那には余裕があった。
彼女の言い分には幾つかの穴がある。
「通らないわ。そもそもそれ実現不可能じゃない」
『ん？なんで？』
「いくら、小鳥の絢爛浄火を制御しているとはいっても使いこなせているわけではないでしょ？
お構いなしの火炎放射（バースト）はできても、繊細な制御はできないんじゃない？
そんな簡単に掌握できるような生易しい能力じゃない。特に能力

の強みである”選別”はね。
燃焼対象を選べない以上、老人ごと巻き込むような行為に及べない。
確かに交渉術としては、自分の札を大きく見せようっていうのは悪くないけど、でも札を熟知した人物に対してやる・・・・・には・・・」
が、そこで、台詞が途切れる。
葉月が震えてることに気づいたからだ。
笑い声が、堪えきれずに漏れている。
『ふふ・・・はは・・・あはははは!くぅっ、もう笑わせないでよ。
何というか・・・あれだよ・・・あれ。堀塚さん貴女って随分可愛い性格してるよね』
「・・・・・・・・・・・」
『うん。まぁ、分かりにくい言い方した僕も悪いか。
だからさ、さっき脅迫って言ったじゃない。
交渉じゃなく脅迫。要求が通らなければハイそこまで。
君達が老人を出さないっていうんならそれでもいいんだよ。それならそれで機構ごと燃やすだけ。
確かに老人は惜しい調度品だけどさ、執着はないからね。燃やせるなら燃やしておくのも悪くない。
それに機構を燃やすって言いうのは別に、脅しって言う意味だけじゃあなくてね。
帰る時までちょっかい出されたくないから、交渉に応じることで投降の意思表示をしない場合は焼っちまえという結構雑な策戦なんだけど、どう?』
その時、今まで出ていた出雲が部屋に帰ってきた。
お手上げのポースで首を振る彼に、能無しめと睨みつけて、再び意識をモニターに戻す。
どうやら、交渉無視の強行突破は無理らしい。

そして頼みの綱である交渉の方もうまく言っているとは言えない。
「・・・・・・・・だとしても」
早くも交渉材料は尽きかけだ。
「老人を犠牲にできるとしても、機構には孤児を含めてたくさんの罪のない子供達だって、いる。
それに君にだって無関係じゃない――――」
『関係ないね。
罪がない？罪がない代わりに運もないってことだ。それも致命的に。
生まれる場所を誤った。ここだけは、ない。
致命的な運のなさはそのまま、生きてないのと同じこと。生きる屍。
ならいっそ、火葬してやった方が救いだよ。
次こそは幸せをってね。

うまい具合にこの炎は鳳凰の聖火だ。葬（おく）るにはちょうどいいじゃない』

その言葉を聞いて、
「てめぇ・・・」
今度こそ、亜那は激昂した。
「てっめぇ！人の命をなんだと思ってやがるっ！！」
『命？命・・・ねぇ』
対して葉月は何処まで冷めていて、まるで1桁の足し算でもするように口にを開く。
『コインの裏と表。
・・・凹と凸、甲と乙、Oと1、あるいは現と夢。
あるもないも同質で同等で同価値で、ただそれだけのこと』
「っ、～～っ、～～っ！」
『それで納得できないんなら、貴女は機構には向いてないよ。

さて、と。そろそろ話し合いの時間は終わりにしよう。
とりあえず倉光を会話を繋げてくれる？』
卓上マイクの入スイッチに押し潰しかねないほどの力を込める彼女に代わって、帰ってきた出雲が先ほどの機械系等代表者に顎で指示する。
顔を伏せて沈黙する亜那に指揮能力がないのを悟った彼は馴染みのある出雲に従って、玄関口のモニターと入れ替わりに端に追いやられていた加藤倉光の隔離された仮眠室の監視映像を中央へ引っ張ってきた。
玄関カメラの音声情報と仮眠室カメラの音声情報を直接やり取りできるように回線を繋ぐ。
しばらく間を開けて、葉月は言葉を投げた。
『倉光、聞こえてる？』
『んんん？何だ君か』
『何だ、とは失礼な・・・。
まぁ、で、老人、様子はどうなの？』
『別に、どうってことはない。
借りた仮眠室にロックをかけられただけで、監禁らしい監禁ではないからな。
それで？わざわざこうやって通信してるんだ。そっちは何とかなったんだろう？で、私の身柄を引き取りにきたのか？』
『ん。話が早くて助かるよ。そのことで、伝言があるんだ』
そう言って、何故か彼女は極上の笑顔を浮かべた。
『いいかな、よく聞いてよ？
今から３０分後、君が外に出てこなかったら機構は爆破させることにしたから、せいぜいがんばってね』
『・・・・・は？』
『だからさ、自力で脱出してこいって言ってるの。
自分だけぐうたら寝て済むと思うなよ？――――せこせこ働け死に損ない』

『貴ッ様！！』
『あ』
『”あ”？』
『お土産があると嬉しいなっ』
『地獄に堕ちろ！』
葉月はそれに見えもしない笑顔で答えて、玄関のカメラから離れていった。
出雲らはその様子を唖然として見届け、はっとしてモニターから視線を外す。
とりあえずはお役ご免になったマイクを端に除けてから、彼はデスクの影にうずくまっている人物に気づいた。
葉月との対話ですっかり心が折れたらしい沖縄支部の最高責任者、堀塚亜那は、
「おい、どうすんだ？あんたの責任だぞ、これ」
「もうやぁ！おうちかえるぅ！」
幼児退行していた。
立たせようとする出雲に抵抗して、手足をバタバタさせる彼女。
彼は溜め息を吐いて、
「これより指揮権はこの幼児から俺に移るが文句あるヤツはいるか？」
室内にいる連中に声をかける。
無論、意義を唱える者がいるはずもなく、どころか何処から用意したのかピンク色の毛布を彼女にかける人物までいた。
毛布に包まって戦線離脱が確定した上司を暖かい目で見守る、そんな、どうかしてる、割といつもの風景。
さて、と出雲は机に腰掛け、思考を切り替える。
脳内会議の議題は『どうやって生き延びるか』だが、実のところ既に身の振り方は決まっている。
だから、今やってる作業は見落としがないかの最終チェックだ。
確認は数秒で終わった。

「あー、やっぱ無理だな」
「何が、ですか？」
「逆転。強行突破。隙がないか考えてみたけどねぇな。外、目には見えねぇが、小鳥っちの能力波とあいつの糸が巡らされてて脱出は絶望的だぜ？」
「と言っても、隙間ぐらいあるでしょう？」
「サイコロステーキになっても生きられるんならな。映画の赤外線センサーを潜り抜けるのとはわけが違う。うまく人の通れる箇所を見つけたとしても、１度でも糸に触れたらあいつの知れるところになって全員お陀仏だ。大体、従業員全員が３０分で抜けられるかっての」
「外から応援を呼ぶというのは？うまく不意を突けば、機構からアレを剥がすこともできるのでは？」
「不意を突ければな。小鳥っちほどじゃないにしてもあいつだってずいぶん人間離れした五感の持ち主だぞ。足音、エンジン音どころか心音や体温で気づかれるってことは前ので分かったろ。何よりあいつは機構の申し子だ。俺や小鳥っちよりもよほど修羅場をくぐってきてる」
「じゃ、じゃあ――――」

『げほっ！ごほ・・・うげ、げぼげぼ！おぅげっ！』

出雲とオペレーターの会話をそんな嗚咽音が遮った。
背を向けていたモニターに目を移すと、そこには先ほどの仮眠室の映像が。
・・・拡大された監視映像の枠の中で老人が泡を吹いて床をのた打ち回っている。
「「・・・・・・」」
このタイミングで、しかも恐ろしくわざとらしい老人の行動。馬

鹿にされているとしか思えない。
加えて、老人の醜悪な嗚咽音など耳障り以外の何物でもない。
「モニター切れ！」
「ラジャー！」
仮眠室の監視映像は室員の総意で、端に追いやられることもなく消された。
「・・・で、だ。資料燃やされて機構壊滅ってのは避けなくちゃあならねぇと考えると・・・・・・」
「投降ですか」
「元々、俺らはやる気がなかったし、堀塚っちにしたって軽い気持ちでちょっかい出した挙句今や戦意喪失だ。執着はねぇだろ。手の開いてる奴に老人連れていかせて、幼児寝かしつけて終わり、だな」
除けたマイクを引き寄せる。
「とりあえず警備員を寄越せ。モニター、老人とマイク繋げろ」
一瞬、まだ猿芝居を続けていたらという嫌な考えが脳裏を掠めたが、どうせこれでおさらばだ。
さっさと狂った老人を引き取ってもらおうと画面に向かって、
「・・・・・・」
開いた口が塞がらない。
仮眠室にて馬鹿をやっていたはずの老人がいなくなっていた。
「あ〝――――――――――！！」

今更になって気づく。
そもそも自分達と交渉していた葉月が、最後わざわざ倉光にあんな伝言をした本当の理由。
それは老人をいたぶる些細な意地悪などではなく、自分達を含めた機構の人間をもいたぶる趣味の悪い虐めのためだということに。

#

時間は少し遡る。

『今から３０分後、君が外に出てこなかったら機構は爆破させることになったからがんばってね』。

葉月と機構との話し合いを知る由もない老人が、そんな言葉をかけられたとしたらどうするか。

ましてや倉光は葉月をよく知っているのだ。

織神葉月はそんな冗談のようなことを本気でやる。

有言実行とはこの場合まるで褒め言葉にならない。

・・・脱出以外の選択肢など存在しなかった。

「よし・・・こんなものか」

一通りの芝居を打って、立ち上がる。

「あーあー、聞こえてるかね？」

返事がないのを確認して、ふむ、と頷いた。

作戦は成功だ。

無理やり拘束されたわけでもないので、所持品はそのまま。

内ポケットから携帯電話を取り出して、折りたたみ式のそれを開く。

タッチパネルを素早く操作して１つのアプリケーションを起動させると、画面部分とタッチパネルとを引っ張って取り外した。

マグネットで繋がっていたタッチパネルの蝶番部分を仮眠室のバーコードロックに近づける。

パネルに幾つかの数字と黒い線が表示されて、自動ドアはあっけなくスライドした。

その間１５秒足らず。

「ふはははははっ！老人舐めるなぁ！！」

そんな台詞と共にスキップをしながら老人は仮眠室を後にしたのである。

＃

さて、老人が逃走したことが判明してから、司令室は騒然となった。

まだ遠くへ行っていないはずの彼を見つけ出すべく、機構直属の警備兵数名に仮眠室周辺を探索させ、モニターではカメラを監視する。

しかし、そもそもが記録に残ってはまずい事柄を扱う機構はその体質からカメラの配置が限定されているのだ。

隠れようと思えばいくらでも隠れられる。

一応建物の出入り口は固めたが、変な意地を張られて３０分隠れ通し、道連れにされる可能性はある。

普通、そんなことは考慮にも値しないのだが、いかんせん相手は色んな意味で有名なあの老人・・・。

やらないと言えないのが恐ろしいところである。

モニターにぼんやりと照らされる暗い室内で、携帯を操作している出雲にオペレーターが声をかけた。

「何をやっているんですか？」

「いや、遺言メール誰に出そうかな・・・と」

「機構内は電波完全にシャットアウトですよ？」

「あー、そういやそうだっけ？」

電話帳を延々とスクロールさせていた指を止めて、彼は天井を仰ぐ。

「現実逃避しないでください・・・」

「老人見つからねぇーと、どうしようもねぇもん」

携帯をしまってモニターを一瞥。当然状況は進展いしてない。

「ん？」

ジーンズの裾を引っ張る感触に下を向くと、毛布お化けから手が伸びていた。

「何だよ？」

「・・・こーないほーそー・・・・・・よびかければ・・・？」

か細い声での提案に彼ら2人は固まった。

確かにその通り。

いきなりの脱走で気が動転したせいでうっかり見落としていたが、考えてみればあの老人と自分達の利害は一致している。

一刻も早く彼が機構から出て行ってくれることを願うこちら側と制限時間つきの逃走劇を演じてる向こう側とが手を取り合えば問題は難なく解決する。

手でも振って老人が出て行くのを見送ればそれでいい。

機構を燃やされるということはこっちの命もないわけで、それ故に信用は得られるだろう。交渉は成立するはずだ。

何処にいるのかは知らないが、構内いっぱいに放送で呼びかければ探す手間もいらない。

「それだ！さっさと放送するぞ！ここのマイクを構内全域の――――」

――ブッ

出雲の台詞を遮って、そんな不吉な音が室内に響いた。

数少ない光源だった巨大液晶の光が途絶え、仄暗さを増す室内。

さらに、今まで仮眠室に繋がっていたはずの手元のマイクのスイッチを入れるが反応がない。

機構内で電波通信は行えない。

一応、外部との連絡を行うためのアンテナとその回線自体は、これまた隔離されてとはいえ存在するのだが、それはあくまで外と通信するのが目的だ。

基本機密事項を扱うが故に敷地内全体がスタンドアローン状態になっている。

よってこういった構内限定の通信は有線を利用しているわけで、そんな通信手段を断絶させるには壁に埋め込まれた配線を千切ってしまえばいい。

・・・無論、理論的には。

しかし、それには機構内通信機能のその弱点が即座に思いつけるほど、建物の何処に通信中枢に関わる線が走っているか予測できるほど、機構に精通していなければできないことであって、

つまり、この場合は、

「ろぉおおおうぅうじいぃぃぃんん！ぶっころぉぉおおす！！」

痛快愉快気狂い老人の仕業以外あり得ない。

＃

司令室からほど近い、白亜の壁。

貼られた壁紙が乱暴に剥がされて、元々配線のために弄りやすい材質である辺りに丸い穴が開いていた。

殴って貫通させたのではない、僅かにこげた切り口から用いられた手段は、

「レーザーカッター・・・ですね」

容易に想像がついたが、問題は、

「何でそんなもん持ってんだよ・・・」

日常生活でどう考えても不必要なその物品をレーザーカッターを超小型化してまで持ち運ぼうとする老人の頭だ。

何を考えているのかまるで分からない。

機能を奪われたモニターを睨んでいても仕方ないと外に出てきた出雲とオペレーターは手持ち無沙汰とばかりに穴を何ともなしに見つめている。

３０分で直りそうもないのでそのまま放置させ、今は全力で倉光を捜索させている最中だ。

「さすがは分野破り（トレスパス）と呼ばれてる老人ですね。レーザーカッターまで扱いますか・・・」

「そーいや、脚足戦車（レギオン）の骨殻造ったのもあいつらしいな」

「そうだったんですか？じゃあ、鋏のレーザーカッターも？」

「多分な。シオマネキもあいつの製作だろ。初期のサワガニと同じ

委員会が造ったはずだからよ」
「あれ・・・ですか。『ハイスペック過ぎて必要とされる戦況の方がついてこない』っていう・・・」
「探究心だけで突き進んで何でも作り上げちまう奴なんだ。レーザーカッターもそんな感じで、大方腕時計にでも仕組んであったんだろ」
「スパイ映画にありましたね、そんなのが」
「元ネタはそれで合ってるんじゃねぇの？それを面白がって実現させるのが精神年齢６歳の我がまま老人だ」
吐き捨てつつ携帯で時刻を確認すると１０分が経っていた。
あと２０分、時間は刻々と過ぎ去っていく。
と、廊下の向こうから警備員らしき服装の男が駆け寄ってきた。
「報告します！」
「捕まえたか！」
「いえ、仲間が１人老人に殴り倒されました！」
「はぁああ！？」
「背後から鉄パイプのようなもので一撃・・・と！」
「何で年寄りにやられてんだよ！役立たずが！」
「その上、ＩＤカードを盗られたようです！」
「が――！くそっ、警備員用のカードって俺の持ってる奴と違って網膜照合なしでロック解除できるタイプだよな！？」
「はい。機構自体の玄関口は私達のカードでも静脈ロック等の免除はありませんから大丈夫でしょうが、建物内なら地下を除くほとんどがカードだけで・・・・」
「地図あるか？」
「ええ、はい」
オペレーターが取り出した地図を壁に広げる。
「仮眠室のバーコードを突破できたのに、わざわざＩＤカードを奪ったってことは・・・」
赤ペンのキャップを口に咥えながら、バーコード以外にもロック

がある扉に丸をつけていく。
基本部屋のロックに使われるバーコード式と違って多重ロックはセキュリティーレベルが違うエリア同士の出入り通路、セキュリティーゲートに備え付けられている。
表向きの顔としての建物であるエントランスではなく、機構の心臓部である建物の中とはいっても仮眠室は仮眠室、最も低いレベルだ。
外との出入り口と一番近いエリアであり、多重ロックは出口の1箇所だけ。
そのことを考慮すると、
「やっぱ出る気の奴がする行動じゃあねぇな」
地下は別として、地上部分は通常の建物と変わらない強度である。
数箇所ロックがあるならともかく1箇所なら壁を破った方が早い。
向こうにはレーザーもあるのだ。
にもかかわらず、わざわざ危険を冒してまでカードを奪ったのは他の場所に用があるからとしか考えられない。
「有線ブッ千切ったのも合わせると・・・時間稼いで何かやる気だぞ」
「素直に逃げてくれないようですね・・・」
「どう思う?」
「思い出したんですが、織神の彼女が『お土産が欲しい』と言ってませんでしたか?」
ふと、出雲は記憶を呼び起こし、あれが笑いながらそんなことを言っていたのを確認する。
「いや、まさか。いくらなんでも冗談だろあれ・・・・・」
そういう彼の声は後半自信なさ気なものに変化し、口も半開きのまま考えに入ってしまう。
彼の頭は1つの疑念に取り付かれていた。
何の問題もなくスムーズに行えたはずの敗戦処理が、まさかの敵の気まぐれでここまで複雑化した現状。

そもそも今の状況が冗談のような状態なのだ。
そんな出鱈目な人形劇を演じさせられてあの少女の恐ろしさの片鱗を思い知らされた自分達にも増して、あの老人は彼女のことを知っている。
老人が冗談っぽく言われたあの言葉の裏に『何か持ち出してこないと殺す』などという台詞を読み取っていたとしたら?
それはありえない想像だろうか?
答えは分かりきっている。
「・・・奪ったカードじゃ地下の研究資料は無理・・・なら、何を狙う・・・?」
地図に再度目を向けて赤い丸をチェックする。
セキュリティーレベルの最も高い地下はカードでも突破不可能。
行動範囲は地上から上の数階に限られるが、目ぼしい物品はそんな場所には置かない。厳重に地下に保管されている。
「使用頻度の高い・・・なおかつ貴重なモノですか?」
「プラス持ち運べるもの、だな。そんあ都合のいいものあるか?」
「私達に訊かれてもそれほど情報を与えられていない下っ端ですから・・・」
「俺だってそんなに万可統一機構とは関係ねぇよ・・・・・・・・・・・・ん!」
「何か思い当たりましたか?」
「ここ・・・」
彼は構図の2階にある1つのエリアを指す。
「簡易の研究施設ですね・・・」
「確か・・・深度の低い研究を行うために造られた・・・」
「機構で深度の低いってなると・・・石の研究になるよな?元々立ち上げ時は他方傾向念力追究所と共同開発だったはずだ」
「能力波反応物質の研究かぁ・・・」
「最近脚足戦車(レギオン)にシリーズ入りしたモクズガニの鋏はそれの成果だったらしいしな。

とにかく、そうなるとここには石自体が置いてあるんじゃねのか？」

「確かに・・・研究材料ですから・・・・・・。

でも、石自体は神戸にだってあるでしょう？今更物珍しいものではないと思いますが」

「老人はそうだろうが織神にとっては違う。

・・・よし。お前、モニタールームで手の空いてる奴5人ぐらい引き連れて2階の研究室に行け。

来てなかったら潜伏、制限１０分前になったら戻れ。

いいか、老人だからといって手加減するなよ。四肢ぐらい折っていいからな」

報告に来た警備員にそう指示して、自分も司令室へ。

頻繁な情報伝達の必要な状況を前提としていない警備兵を含め、無線機を使えないこの建物では口伝えが基本だ。

さっきまでの議論を室内のメンバーにも伝え、最小限の人材を残して、階段部分と2階に重点を置いた探索作戦を構築する。

それから伝達員として数人を一定距離ごとに配備し、伝言リレーで情報をやり取りするようにさせた。

「とりあえずこれで打てるだけの手は打ったか？」

そう言って彼は何時淹れたのか冷め切っていた珈琲で喉を潤す。

視線の先では毛布に包まった最高責任者がすやすやと寝息を立てていた。

＃

機構の心臓部となる中央棟は、エントランス棟のように『特別都市における次世代教育の体系化』という建前の成果を展示スペースや葉月が元いたように児童収容棟のような実験解剖室を地下室に備えてはいない。

１階には司令室、モニター設備などの中枢的機能を集中させ、地

下には資料を保存する保管室、２階以上のフロアは多目的用途のために用意されている。
その中には亜那が個人で使っている部屋も含まれるが、あくまでも研究施設である機構としては溢れかえった研究のスペースに当てるのが定例だ。
しかし、そもそも多目的室である場所ではセキュリティーレベルに問題がある。
そのため、こういった場所に当てられる研究は外部に漏れてもお咎めのないレベルの研究となる。
出雲達が話していたのはその中の代表例である石の研究だ。
発足時繋がりの薄い他研究所との共同研究だった石の研究から派生した研究部が故に、その研究所に多目的スペースが使用されている。
元々は石の複製が目的だった研究だがそれが不可能と分かった現在は、石に影響を与えられた溶液を応用する研究が行われており、不老水や能力波に反応する物質といった成果を挙げてもいる分野である。
そんな研究区域に加藤倉光はいた。
こそこそと足音を潜めてツルツルとした床を通り、資料に埋もれたデスクの間を抜ける。
時間を確認すると制限時間の１７分前。
あとは脱出だけであることを考えると上出来と言えるだろう。
携帯を再び取り出して、アプリケーションを起動させる。
カメラで取り込んでいた構内図をイメージではなく図として取り込んで整理・表示するプログラムだ。
パネルを弄って自分の位置に合わせ、思案の後すぐにしまった。
結論としてきた道を戻るという単純明快な手段を採ることにする。
が、そこでバタバタと騒がしい音が近づいてくることに気がついた。
咄嗟にデスクの下に隠れるも、連中はピンポイントにこの室内に

入ってくる。
こちらの思惑がバレてしまっていると判断して彼は立ち上がって走り出した。
どうせ調べられたらすぐに見つかる。
混乱が収まって統制の取れ始めた連中の目をこれ以上掻い潜って建物内を移動するのも困難だ。
「いたぞ！老人だ！」
彼らの反応が遅れた僅かな間に老人は研究室から飛び出してすぐ近くにある階段へ。
駆け寄った時点になって折り返し階段の1．5階に相当する踊り場に伝言係が1人いることに気づいたが、足を止めるわけにはいかない。
「ふはははは！喰らえぇい！」
勢いそのままに、その彼に向かって飛び降りる。
老人とは思えない脚力が生み出す見事な放物線。
一瞬という時間を拡張する滞空の美。
老人の膝蹴りを受けて若い男は床に沈んだ。
一気に駆け下りて、しかしそこにも男がいる。
今度は内ポケットから取り出した元々は携帯につけていたストラップ――――型の警棒を振りかざす。
「せいやぁぁああ！！」
ヘルメットなどしていない彼もまた老人の一撃に伏し、出口への道を明け渡すことになった。
この後にあるのは、老人にカードを渡ってか文字通り開き直って開かれたセキュリティーゲートを越えて一直線の廊下だけだ。
走りきれれば外に出られる。
「老人！1階廊下を逃走中！応援求む！」
後から追いかけてきていた1人の張り上げた大声に、廊下に出入り口がある司令室から数人が飛び出してくる。
位置的に老人の後ろから追随する形だ。

その中には出雲もいる。
「前の！老人にタックルかませ！転げたところを蹴りで仕留める！」
「「ラジャァァ！！」」
迫り来る老人を1人の警備兵が正面からのタックルで向かい打つ。
回避行動を取られクリーンヒットとはならなかったが、老人は減速、そこへさらに前にいた伝達役の警備兵が第2撃を繰り出した。
「ごへふっ！」
今度こそ身体の芯を捉え、老人は後ろ向きに倒される。
「よぉぉおおおし！蹴れ！とにかく蹴れ！弱るまで蹴り続けろ！」
出雲の号令で駆けつけた者達が一斉に彼を蹴り始めた。
「のん！ぼふっ！まっ！待てぃっ！」
「頭と腹を重点的にいけ！」
「待・・・て貴様ら！老人を！っ何だとぉおお！」
「黙れ似非老人！よし、ナイス！そうしてからこう関節を捻ればぽっきり・・・」
「いだだだ！腕がぁあ！ごぴっ！は、腹がぁ！」
「こいつの頭を押さえとけ！お前、油性ペン持ってたよな！？」
「はい！」
「こら！何をする！げひっ、待て待て！」

機構との交渉を終えてから十数分後。
お姫様抱っこで抱えられながら携帯ゲームに勤しんでいた小鳥と耳を澄まして中の様子を探っていた葉月の眼前で、玄関口が開いて老人が放り出された。
バタンガチンと拒絶音を響かせる扉を一瞥して、地面に転がったボロ雑巾を改めて観察する。
足跡模様の埃だらけのスーツに関節の限界に挑戦したらしい左腕、さらには足をロープで縛られていて、
「何それ？」

おでこに『孤独死希望』と書かれていた。

／

快適な空の旅。

ソファを丸々１つ占拠して寝転がり、ワインとお摘みをチビチビやる。

対面にはいまだ油性インクの消えていない老人と僕と同じくアルコールを呑みながら時間を潰している小鳥さん。

彼女は一応人質として連れてきたものの、『お姫様抱っこの次はお持ち帰りっ！？』と戯言をほざいたので、一刻も早く離れるために繋がっていた腕は切り離してしまった。

空路での追撃に対する保険なのだから、彼女の能力の制御権をこっちが握っていなければ意味がないのだけれど、まぁ、もう戦意はなさそうだったので大丈夫だろう。

「暇・・・」

海の上に出ても天に高度を上げても蒼か白かしか見えない窓の外など早々に見飽きてしまい、ゲームは倉光に取られた今、時間を持て余している。

おもむろにポーチに入れた倉光曰くのお土産を取り出すも、これ、正直ただのガラクタにしか見えない。

賢者の石、などと言われているらしいその物体は１辺１．５ｃｍほどの立方体をした真っ白な石ころだった。

プリントミスしたサイコロの間違えじゃないのかな？

小鳥さんに訊くと本来の賢者の石は赤色らしいので、この場合の”賢者”というのはソフィ氏を指すのだろう。

「しっかし・・・まさか本当にお土産持ってくるとはねぇ・・・」

「持ってこなかったら自力脱出してこようと貴様は間違いなく機構内に放り戻しただろうが！」

単なる独り言だったのに、ゲーム画面に噛りついた老人の抗議が

飛んできた。
うん。まぁ、そうしただろうけどね。
以心伝心、信頼って大切だよね。
そういえば今回の旅の間に僕の名称が『君』から『貴様』に格下げした。
実にすばらしい。この調子で心身ともにどんどん距離を離したい。
「んー、これって食べれるの？」
触り心地からしてあまり固そうじゃないなぁとぼんやりと考えていたら、口から勝手にそんな台詞が出てしまった。
ボタンを忙しなくプッシュしていた倉光の指がぴたりと止まる。
「ふむ・・・」
あ・・・何か考え始めた。
ざりざりと無精髭を掻いて――――たぶん『未知で貴重な物故に”食べる”という発想はなかったが、考えてみれば原始的な試みではある。しかし、ＳＰＳ服用者が飲み込んだ場合と常人の場合とではケースを分けるべきで、通常の人体に与える影響を調べるためには・・・』などと考えて――――受話器を手に取ろうとする。
「させるかぁ！」
などと・・・揉み合って受話器を取り上げたり、口にワインを注ぎ込んだりして老人の奇行を回避している内に飛行機は神戸空港に到着した。
結局１日となった小旅行はけれど思いのほか疲労と要らない戦利品を持ち帰る羽目になって散々と言える。
小鳥さんはホテルでもとってしばらく観光してから帰るらしい。
僕の方は倉光と一緒に１度機構へ寄らなければならなかった。
沖縄の処分やら持ち出した石やらの処理があるらしくとりあえず顔を出すように言われたのだ。
明日は学校もあるし、消耗した分の血肉を回復させたいし、この

ままさっさとアパートまで帰りたかったのに・・・。
「今日は肉料理、今日は肉料理・・・」
そのためにもスーパーが開いてるまでには終点駅に着きたい。
けど、その許可がまだ降りない現状。
これまた暇だ。
フライトの間でゲームは完全に老人のモノになってしまったので、やっぱり暇つぶしのアイテムはない。
仕方ないので院長室で倉光が岱斉と何やら話している間、僕は何ともなしに図書室へと足を進めていた。
向かう先は絵本コーナー。
と、
「あれぇ?」
先客がいた。
直に床に座り込んで、その周りには読み終わったらしき絵本が散らかされている。
「あれぇ?」
同じ台詞を繰り返して、今度は立ち上がりたとたとと歩み寄ってくる。
「お姉ちゃん、何でここにいるの?」
それは僕の台詞だ。
現在時刻7時ちょっと過ぎ。
ここにいた頃の記憶を辿ってみるに、この時間は部屋から出れないはず。
この子、こっそり抜け出してきたな。
「・・・君こそなんでいるかな?」
「絵本読んでるのー」
いや、そういうことは訊いてないんだけども。
見咎められることはするべ・・・・げふんげふん、自分も人のこと言えなかったのを忘れてた。
「でも見つかっちゃったし帰るー」

さいですか。
「じゃあねー」
そう言って彼女は散らかっている本はそのままに僕の横を通って出て行こうとする。
ちょっと待て。
「こら、片付けていきなさい」
むー、と頬を膨らませる彼女。
いやいやそんな顔をされる筋合いはないはずなんだけど。
・・・さては僕にさせるつもりだったな。
とんでもない問題児だ。
「・・・手伝ってあげるから」
はぁ・・・。
「はーい」
元気よく戻ってきた彼女と一緒に読むではなく片付けるという時間潰し。
何だか釈然としないも、彼女より年上だからと無理に納得させる。
仕方ないのでパラパラ軽く読みながら本を並んでいただろう棚に戻して・・・戻していくのだけど・・・、
『赤い靴』、赤い靴に踊り狂わされた少女が両足を切断。
『灰かぶり姫』、義姉達は自分で爪や踵を切ってガラスの靴にサイズを合わせたり鳩に目を潰されたり。
『うりこひめとあまのじゃく』、瓜から生まれた瓜子姫が墜落死させられた挙句その皮を剥がれて天邪鬼が姫に成り代わる。
うん・・・何となく彼女の嗜好が分かってきた。
猟奇ネタが好みらしい。
というかここの図書館の絵本の品揃えが気になる。
それをニコニコしながらなおしていく彼女の横顔が怖い。
見た目は白兎って感じなのになぁ。
あぁ、返り血は映えそうだけど。
閑話休題。

さて、結構な量を丁寧に戻していくのはかなり時間がかかった。
「はぁ・・・全く」
「時間がかかっちゃったですねー」
「君がその度に戻してたらこうならなかったんだよ」
「そうですかー」
そうですよ。
と、携帯を確認するとそろそろいい頃合。
「じゃあね」
「あ、待って」
「ん？」
「名前、教えてくださいっ」
「何で？」
何で時間が経った今更？
「外の人の名前なんて訊く機会ないですから」
いや、内部の人間なんだけども。
・・・・・・・・・・・・・・、
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
「志保。汎藻志保（はんもしほ）」
「名前で生まれた月が分からないなんてやっぱり変な名前！」
人がせっかく適当に考えた名前に何てことを。
そしてそれを確認するためにわざわざ名前を言わせたのか。
この子性格悪いな。
将来ろくな人間にならないか、もしくはろくな目に合わないだろう。
「・・・ちなみに君の名前は？」
別に知る必要もないけれど、社交辞令というわけでもなく、同じように文句でもつけてやろうと訊いてやる。
すると、彼女は胸を張って元気よく答えた。
「葉月っ！」
「そりゃあいい名前だ」

何てことだ。
残念なことに文句のつけようがない。

第３７話－　幼老虐々。－Ｄｉｓｔｕｒｂａｎｃｅ－（後書き）

時間がかかりました。
何だろう最近思いの他だらだら話が長引いてしまって・・・。

そしてもう１つ、老人虐待の予定だったのに幼児虐待まで加わっちゃいました。
あれ・・・？何でだろ？そんなつもりでは。

次・・・はどうだろう早く更新できるか微妙。
次回からはやっと学園編になるはずです。

第３８話ー　喫茶談話。ー Ｓｏｆｔ　Ｔｏｕｃｈ ー（前書き）

風邪を引いたりして遅れました…すみません。

第３８話－　喫茶談話。－Ｓｏｆｔ　Ｔｏｕｃｈ－

「もうすぐ学園祭がやってくる！」
聡一君が教壇の上に立って叫び、
「まだ先よ」
椎ちゃんが一蹴して、文字通り教壇をも一蹴して、彼は後ろ向きに倒れると共に後頭部を黒板のチョーク受けで強打した。
そんな、９月中旬の入り。
暑さは過ぎ去りもうすぐ寒さが肌を刺す季節。
「というか、中１は関係ないよね？」
「ふっふっふっ！実はそうでもないのだ！」
復活した聡一君が不気味な笑い声をあげながら黒板に何やら書き始めた。
「・・・『祝！中学一年生特別出店枠１－Ｂ獲得』・・・特別？」
「ああ、今日申請が受理されたと校長から連絡があった。我がＢ組は学園祭に出店できることになったわけだ！」
説明できているようでまるで説明できていない彼の台詞。
・・・話が見えてこない。
「どういうこと？」
「祇堂学園学園祭において中学一年生はクラスでの出店はできない・・・というのは知っているだろう？」
頷く僕。
「が、それには抜け道がある」
抜け道・・・裏技か。
校長、本当にそういうの好きだよね・・・。
「・・・学園祭で出店するための条件を挙げると・・・１、中学２年生以上のクラス。２、クラブ・グループでの出店。と主にこの２種類になる。
１は言わずもがな、２にしても慣習から先輩達は僕らが遊び回れ

るように気遣って大抵自由にさせてくれてはいるが、僕らにクラブやグループのメンバーとして店に関わる権利がないわけではない。
これを利用して、クラスメートをメンバーにした同好会を学園祭の期間内限定で立ち上げて、クラブ・グループの出店枠に捻じ込むという裏技が存在するんだ」
なるほど。
つまりクラスじゃなくて同好会『1‐B』ですと言い張るわけか。
正直かなり無理はあるけど、ルール自体は守ってる。
クラブは設立に少々手間があるのだけど、同好会はクラブより規定が緩くて、5人以上の会員署名と担任の承認署名があれば立ち上げることができる。
クラブ・同好会にクラスメートでの設立を制限する項目はないのだから、同好会として認定されてしまえば、後でクラスでの出店と変わらないと文句をつけられても違反行為と断ずることはできない。
断ずれない以上は押し通せる、かも。
聡一君の台詞をうけて、今度は椎ちゃんが口を開く。
「これは表立って言われてはいない、暗黙の了解になってる方法なんだけど、私達がそうだったように先輩に聞いているクラスは多くいるのよ。
そこで最近はさらに条件を加えて、実際その方法で出店したことのある先輩の署名をもらえたクラス限定で特別に出店を認めているわけね。
先輩の署名は釧君がもらってきてくれたわ」
ぐっと親指を突き出して喜びを表現する椎ちゃん、それに応じるクシロ。
ということはクシロもこの件に一枚噛んでいたのか。
いや、元々クラスメートで同好会を開くにしても署名の条件を満たすために最低5人は協力者はいるはずだ。
僕は知らされていなかったけど、僕以外に質問が出ないことから考えて他の皆は知っていたのかもしれない。

まぁいいんだけど。
「・・・でもさぁ、そんな面倒なことまでして出店して・・・何かやりたいことあるの？」
「あるとも。委員長とも相談した上で、皆にも了解を得た。僕達は仮装喫茶（コスプレ）を出店する」
・・・彼がそういう人間ということは知っているから今更とやかくは言うまい。
問題は、そのことを他のクラスメートが同意している点とどうもわざと僕が知らされていなかった点だ。
その疑念の答えは椎ちゃんから。
「ちなみに、出店申請書に書いた申請理由は『さすがに普段は葉月ちゃんに着せられなかった衣装を着せるため』で、同好会の名称は『葉月ちゃんにコスプレさせ隊』よ」
・・・よし。
オーケーオーケー。このクラスの諸悪の根源が分かった。
一見、しっかりものの常識人に見える委員長と、彼女に全てを任せきった無気力な担任が全ての原因だ。
どこ行った担任。あんた、よくそんな申請書に承認署名したな。
同じ罪で校長も裁く必要がある！
「さぁてまずは聡一君から・・・舌を引っこ抜こうか」
「待て待て落ち着こうな葉月サン。そんなことをしたら死んでしまう」
「大丈夫大丈夫、それ迷信だから。抜いても血が出て痛いだけ。死ねない分痛みが続いてお得でしょ？」
「落ち着こう葉月。これはクラス全員の総意だ」
「離してクシロ。とにかくあの馬鹿を殺絞（こらし）めてやらないといけないんだよ」
「はづきん、諦めな」
「いやいやいや・・・いやいやいや！
大体そんな適当で不純な動機で出店したって成功するわけないで

しょ！？」
「その辺は大丈夫だ。喫茶店とは言っても凝った食べ物を出すわけじゃないから。
とりあえず今考えてるのはベビーカステラとワッフル。種の調合だけちゃんと調整すれば誰でも作れる」
「飲み物は市販のペットボトルと安い豆を粉砕からやるちょい本格的珈琲でお茶を濁すつもりよ。１杯２００円でも十分儲けが出るわ」
聡一君、君の隣にいるあくどい女の子を何とかした方がいいと思う。
「値段設定はさておき・・・ベビーカステラなんかは焼きたては大抵うまい。
あまりにシンプルすぎてパンチに欠けるからか先輩なんかはえびせんやら焼き蕎麦やら結構凝ったのが多いんだ。需要はあるだろう」
「くそぅ！何気にちゃんと考えてるのが腹立たしい！」
逃げ道がないじゃないか！
・・・駄目、コスプレは駄目。
体育祭後に入れ替えられていたフリフリな衣装でかなりキツかったのに、実用性皆無で嗜好性しか求められていないような恥辱的すぎるコスチュームなんてもはや致死毒だ。
「で、でも、給仕は僕１人じゃ無理なんだから、他の皆だってコスプレすることになるんだよ・・・？」
と、いきなり美樹ちゃんが立ち上がり、バッと手に持っていたものを広げて見せる。
それはメイド服とも給仕服とも取れるような黒い服。
スカートや袖口のところにレースがあしらわれた、何ともファンシーな一品。
そして・・・エプロンらしき白い生地の端にいなっちーの刺繍が。
まさか祭１ヶ月前で服の試作品ができあがってるだけでなくマスコットキャラクターまで決まってるとは。
「任せろい。皆に似合う服を作ってやるぜよ」

何その無駄に男らしい台詞。
その情熱は別の方向で有効利用して欲しい・・・。

＃

翌日、店で出す食べ物の試作品を作ってみようということでいつものようにクシロのマンションに集まることに。
料理関連、実はそれほど得意じゃない僕は女の子達の力の入った試行錯誤の輪の中に入る気にはなれず、男子群の店内内装計画の方に加わっている。
「机は１５個・・・２つ１組とすると７つが限界だな」
「いや、隆。調理台用を考えると６つだ。どの道、どっかから借りてこないと駄目だな」
「テーブルクロスはどうする？細かい装飾は美樹に任せるとして・・・生地は？」
「白か薄い黄色・・・サイズは後で測ろう、厚手の方がいいとは思うけど・・・問題はやっぱり何枚いるかになるかな。
それが決定しないことには買いにいけない」
「てか、テーブルクロスの色だって店のデザインが分からないと合わせようがねぇだろうな。
とりあえず大まかな店のイメージを考えねぇと・・・美樹！スケブ貸してくれ」
タカの求めに美樹ちゃんがいつも持ち歩いているスケッチブックを持ってきた。
「お店のデザイン案は後のほーだからー」
さっそくテーブルの上で広げてみると、フリーハンドとは思えない綺麗な図形がそこには書かれていた。
テーブルの位置からキッチンの配置まで事細かに設定されている。
店の看板や服のデザインも数ページに渡って描かれていて・・・、
「へぇ・・・黒を基調にする感じなんだ」

「衣装は思ったより大人しいな。コスプレ言うぐらいだからもっと派手なモノかと・・・」
その点は心の底から安心した。
「ああいや、それは僕が頼んだんだ。あんまり現実離れしているのは目障りになるからな」
そう思うんならそもそもコスプレ喫茶なんて提案しないでほしいんだけど、聡一君よ。
「何だ・・・もう大分決まってんじゃん。正直俺ら要らなくないか？」
「そう言うな・・・。裁縫以外の内装は力仕事、僕らの出番だろ？」
「真幸、お前はそれほど体力があるようには見えない」
「うるせー」
「と・・・じゃあ取り合えず、このデザインから必要そうな材料だけピックアップしよう。
これ見るとキッチンさ、教室の後を隔離するみたいだけど、どうやって仕分けんの？」
「板はどう考えても無理だから・・・カーテンかな？」
「んじゃ、教室の寸法も図っとかないと・・・」
「カーテン吊るすのに器具要よな？突っ張り棒じゃ・・・無理だろ？」
「天井に釘打つわけにもいかないから・・・両面テープか何かで止めることになると思うよ？
あと・・・、このキッチンの中だけど・・・バーナーとか入れた上でちゃんと人通れるスペースあるのかな？」
「あー、それもちゃんと調べないと駄目か・・・あ、そもそもよ、カステラとワッフルやるって言うけど、貸してもらえるのは1台じゃないのか？」
「ワッフルはワッフル焼き器があるからコンセントでいけるんじゃなかったか？
おーい、いいんちょー、ワッフルってバーナー使わないよなー？」

「使わないわ。バーナーはカステラだけよ」
「じゃあ1台で大丈夫・・・と。問題は他の飲食物の準備か？」
「机を横に3つ4つ並べてそこで作業・・・って形になるんじゃねぇの」
「それだと少なくない？机1つって結構狭いよ？
ジュースどれぐらいの種類揃えるのか知らないけど、2リットルだと立てて並べるだけでも嵩張るし・・・だいたい温くならないようにクーラーボックスに入れるよね？」
「いや、クーラーボックス自体は机の下に置けば何とかなるだろ」
「あっ、そっか」
「けどやっぱ盛り付けとかのスペースは足りない気がする。あんまり詰めると作業しづらいよな」
「待て待て、どういう風に出すか決まらないと盛り付けの手間なんて分からんぞ？」
「結局レシピ待ちかよ・・・。まぁいいや、ともかく看板とかカーテンの金具とかそこら辺を考えようぜ。
看板・・・これ見る限りじゃあ、廊下側に立てかけるようになってるけど・・・吊るすんじゃないんだね？」
「デザイン通りにいくと大きくなりすぎるからな。落ちると危ない。
しっかしこれ・・・教室側面にでっかく立てるって、どれぐらいの大きさになるんだ？」
「大まかに見積もって、縦1．５m横２mぐらいだろ」
「それは・・・本当にでかくない？」
「横幅はともかく縦はそれぐらいないと目線の高さに合わねぇからな」
「ああ、だから1．５ね・・・壁に立てかけるんなら木材はベニヤ板でも十分だろうが、塗料はどうする？木のベースに絵の具はちょっとしんどいぞ」
・・・等など、喧々諤々（けんけんがくがく）。
そもそも店の核たるメニューが決まっていない内のこんな会話は

不毛もいいところなのだけど、まぁいいや。
どうせまだまだ時間はある。こんな話し合い、早すぎるぐらいだ。
・・・そんな無駄な議論が続いてしばらく。
甘い香りの漂い始めた室内、そろそろだろうとそわそわしだした男子群に待ち望んでいたついに声がかけられた。
「ほーい、これ食べてみて」
亜子ちゃんがそう言って持ってきたワッフルの積まれた皿を、資料を退かしたテーブルに乗せる。
「待ってました！」
「はーい、ちょっと待った」
すでに用意していたフォークを突き刺そうとしていた僕達に制止の声をかける亜子ちゃん。
ぽんぽんと両手に抱えた容器をテーブルに置いていく。
「ストロベリーとかブルーベリーとかのソースやら、あとはアイス、生クリームにシナモン・・・トッピング考えながら食べてね？」
「了解。と・・・これ何のソースだ？」
「あー、確かマンゴーかな？」
「ふーん？あ、これ美味しい」
「葉月・・・そりゃチョコソースは合うだろうよ。そういう定番でいくならアイス乗せは大抵うまくいく気がするな」
「まぁ、それ基本でいいだろ？皿に盛り付けるのにソースかけるだけってのは寂しいし」
「アイス乗っけとけば華になる・・・か？てか、そもそもアイスを保存できるのか気になるとこだぞ？」
「そうか・・・ジュースみたいにはいかないか。いっそ小型冷蔵庫でも持ってくるか？」
「そうするしかないんじゃねぇか。おっ、アイスはシナモンかけてもいけるな」
そう言ってタカはさっきまで内装についてメモをしていた紙に『アイス＋シナモン』と書き込む。

チョコは？
ねぇ、チョコは駄目なの？
「アイスはともかくクリームって味合わせんの難しくないか？」
「んまぁ、その場合は除外しちまえばいいだろ。それ取ってくれ」
「これ？抹茶？合うのか？普通に抹茶アイス乗っけた方がいい気がするぜ？」
「メープルも定番っちゃあ定番だな・・・シンプルでいいだろ」
「というより思ったんだけどさ。テーブルに置いて好きなようにかけてもらったら楽じゃないの？」
「小分けすんのがまずメンドイし、だいたいそうしたらメニューが『ワッフル・ベビーカステラ・ジュース各種』だけの寂しーラインナップになるけどな」
「あ・・・それは嫌だな」
「そういえば、ベビーカステラの方は？」
「型ないから無理だろ？」
「いや、種はどうせ試さないといけねぇだろ？楚々絽ー、カステラの方はー？」
「タコ焼き器で作ってるよ。後でそっちに出すから待ってな」
「さすがにカステラには何もかけないよなぁ？」
「そっちは袋詰めにしてテイクアウトしてもらえればなって考えてるのよ」
「そうなの？だったら、レジ要るんじゃない？」
「そういや書いてなかったな・・・ああ、喫茶店としてなら注文取った時にテーブルで済ませるから必要なかったのか。
確かにカステラをそういう風に売りたいんなら要るなぁ、レジ」
「今のシステムだとテイクアウトするのにわざわざテーブルに座らなきゃならないもんな・・・。
じゃあ、教室後方の扉を開いてカステラだけ売るか？ここならキッチンに直結してるだろ？それに廊下から直に客を取れる」
「運ぶ手間もないわな。だがそうなるとさらにキッチンが狭くなる

ぞ？」
「扉んところに机置いて・・・そこをレジにして・・・机もう1つ要るってことだよなそれ」
「ん、それはともかく、ブルーベリーソースはいけるぞ」
「そうかぁ？僕は苦手だな」
「酸味があるのは1つぐらい入ってても悪くないだろ？」
「そうそう、思い出したんだけど、俺のところ焼きリンゴ乗っけて食べてた覚えがあるな」
「あったなぁ、その食べ方。メジャーな方だよな？」
「簡単にできるからな。俺のとこはそれにさらにシナモンだった」
「あ、分かる分かる。そんなだったなぁ・・・」
「りんごねぇ・・・嵩張る気がする」
「使うなら箱買いだろうしね・・・いや、どれぐらい使うかも見積もらないといけないのかな？
種の材料は残っても持って帰れるけどりんごはキツイかもしれない」
「なぁ、これ材料的にはクレープもできるんじゃないか？」
「それはさすがに面倒くさいぞ？包まなきゃいけないし、それやると本格的に果物切らないと無理だ。手間がかかりすぎる」
「ワッフルってさ1切れで出すのか？それか2切れ？」
「2切れだろ？1切れは少し少ない」
「でも、キッチンの方見たらワッフル焼き機って1回で2切れしかできないよ？ちゃんと回るのかな？」
「ワッフルは1切れで、ベビーカステラ添えるってのは？」
「機械幾つ用意できんだ？」
「というか機械多くてもコンセント足りなくなるぞ。拡張器（コーナータップ）要るな」
「あー頭こんがらがってきたぁ！」

／

夜。
カーテンを閉める前にしばし夜景を眺めて溜め息。
わいわいと取り留めのない話をしていたクラスメートは引き上げて、現在この楼上には俺と葉月しかいない。
「疲れた・・・」
さほど意味のあることをしたわけではないんだが。
「美味しかった・・・」
対して葉月は甘いものを好きなだけ食べれてご満悦の様子だ。
今日は薄茶のブラウスと赤色プリーツスカートという服装で、髪は三つ編み。
最近は気まぐれに髪型などを変えることが多くなってきたので、見ていて面白い。
そんな葉月は今、オンラインでビオサイドをプレイ中だ。
表示されているゲーム画面には少女が鬼のようにバッタバッタと民衆を中毒死させている映像が映っていて、えげつない葉月の戦法が同時プレイしている他のプレイヤーを混乱させているのがよく分かった。
殺害人数、パンデミック度合いがどんどんと更新され、展開の読めないバイオテロ攻撃に世界が震撼中。
「毒性を犠牲にしてまで感染力を高めたのか・・・。長期決着型だな」
「と、見せかけた短期決着型だよ。
もう少ししたら、一度潜伏(もぐ)ってウイルスの毒性を高めてから一気に型をつける。
ここまで広域に感染が広がっちゃえば、こっちの位置は特定できなくなるからね」
木の葉を隠すなら森の中、感染を隠すための感染・・・か。
移動するだけで感染を広めてしまうが故にどうしても位置が特定されるヒロインの弱点をカバーする作戦だ。
ほどなくして葉月が操る鬼役は、潜伏を開始、他のプレイヤーが

感染に右往左往し、鬼の行方を知れないでいる間にウイルスは進化を果たした。
感染しやすく毒性も強い。ワクチン製造が追いつかないほどの急速な感染爆発。そんなウイルスになす術のない人類が辿る末路は歴史が証明している。
かくして人類は滅亡、バッドエンド。
「鬼1人で勝つことってあんまりないんだけどなぁ・・・」
まぁ、それはいいか。
「葉月、夕飯はどうする？」
「んー・・・、結構お腹には入っちゃってるから、軽い物でいいけど・・・。
クシロはあんまり食べてなかったでしょ？」
「あんまりああいうお菓子は好きじゃないから。
うーん、どうしようか。出前でも取った方がいいかな・・・」
「出前？お寿司でも頼むの？」
「寿司なぁ」
一口サイズで好きなモノをそれぞれ食べれるし、妥当ではある。
定番すぎて食べ飽きてきてることが欠点と言えば欠点だが、ピザよりは食べ応えがあるし。
出前チラシを閉じたファイルを棚から取り出して捲る。
さてさて注文注文。
考えすぎずに食べれそうな量のセットを頼んで子機を置く。
振り向くと葉月は次のプレイにかかっていた。俺もその様子を眺めて待つことにする。
今度は捕まえる側に回ったようだ。
そっちの側は他のプレイヤーと協力でプレイできるという楽しみがあるんだよなぁ。
まぁ、葉月はどっちにしろ単独行動で場をかき回すタイプだが。
・・・出前は30分ほどしてやってきた。
料金を払って、リビングに戻ると、ちゃっかり2人分の皿と箸を

用意している葉月。
何だかんだで食べる気満々じゃないか。
テーブルに寿司を置いて蓋を開けると、葉月は、
「玉子ー玉子ー」
ご機嫌に海鮮を差し置いて玉子を取った。
高級料理店ほど出しそうにない胡散臭い四角い黄色に黒い海苔を巻いた回転寿司などでよくある玉子。
それに醤油をつけておいしそうに頬張る様は、それだけ見れば年相応の女の子に見える。
一方の俺が食べる寿司は中トロやトロサーモンなどの脂の多い魚身。
あまり食べ過ぎると胃もたれするからよくはないのだが、本格的に寿司を食すならマグロやエビだろう。
「そういえば喫茶店・・・結局、デザート重視で肝心の飲み物には手を着けられなかったな」
「ん、まぁ時間はまだまだなんだし、急ぐことはないでしょ？だいたい今やってるってことの方が異常なんだから」
「そうでもないさ。祇堂学園は学園都市の中でも主要の学園だ。学園祭の規模もかなり大きい。
盛り上がる分、クラブやグループの中には意気込んで出店の準備に取り掛かってるところは多いみたいだ」
「・・・何だかんだでこの分だと一年中遊んでる気がするなぁ。学業結構雑じゃない？」
「確かになー。他の学校がどうなってるかはともかく、うちのは校長がアレだし・・・」
先輩達の証言から毎年のように色々企んでるらしい校長。
そのお陰で学園生活は楽しいのだけども、学生の本分と超能力者としての目標が疎かにならないでもない。
超能力が欲しいからと言った軽い気持ちで学園に入ってくるものも多いが、能力者という肩書きは自身を売り込む強力な武器になる

ことから、就職戦略に利用しようという人物も少なからずいるのだ。
建前上、社会貢献が目的である超能力研究なのだから、打ち込んでいるフリぐらいはした方がいいはず・・・。
「何であんな人が権力を握ってるのか不思議で仕方ない」
「まぁねぇ・・・そのせいで被った被害が結構・・・・・・そういえば今回もそうだった・・・」
「そんなに嫌？メイド服着るの」
「・・・美樹ちゃんのデザイン帳を見る限りあれはメイド服じゃないし無論給仕服じゃないしかといって常識的な衣装でもないよ」
「いいじゃないか。お祭なんだし仮装なんだし」
「・・・いやいや、そういうクシロだってホール担当になったらコスプレしないといけないはずなんだけど？」
「・・・・・・・・・・・・」
それは、思い至ってなかった。
いや、でも、
「・・・大丈夫だろ。常識的に考えて、俺はキッチンだ」
女子でもなければ、種類が少ない男性のコスプレすら似合いそうにない俺は裏方に徹することになるはずだ。
「ふーん？」
じと～っと葉月の少々薄い琥珀色の瞳が視線を突き刺してくる。
何か言いたげで、けれどそれを心内に留めている、という顔。
なんだろう？
「何？」
「んーん、何でも」
明らかに何かを隠しているのだが話してくれなさそうだ。
微かに口角が上がった気がしたけど、気のせいだろうか？

出前という栄養バランスをまるで考えていない食事を終えてしばらく、無駄話もそろそろ尽きてきたので就寝準備をし出す。

まだ寝ないにしても、気が向いた内にやってしまった方が気が楽なので、フロぐらいは済ましてしまおうというわけだ。
というわけで現在葉月が入浴中。
大分経ったからもうすぐ出てくるとは思うが、しかしやっぱりこういうのはどうにも・・・慣れない。
元々男として接していた分、葉月にとっては今の距離感に違和感がないのだろう。
それがまた非常に深刻な問題だ。
何とかして欲しいんだけどもいかんせん葉月は疎い。
「クシロ、お風呂空いたよー」
声に応じて振り返ると、Tシャツと短パンという非常にラフな格好をした葉月がいる。
ほらみろ。
・・・何だかなぁ。
「葉月・・・一応、女の子なんだから、男がいる空間でそういう格好はやめよう」
「え？あー、この格好？普通の寝巻きなんだけどなぁ・・・」
確かに、男の頃から葉月はパジャマを着ない方だし、女になってからも何度か泊まっていってるのだから、おかしいわけではない。
だが、だけども、風呂上りで上気した頬とかまだ湿っている髪とか妙に肌に張りついた衣服とか・・・何か扇情的で困る。
葉月は性感心をすっ飛ばして性認識すらない人間なのだろうが、こっちは普通の中学1年生なのだ。
その辺分かってもらわないと、正直しんどい。
「ラフすぎるだろう。もうちょっとこう・・・ガードの堅いのにさ・・・」
「ふぅん？・・・・・・つまり分かりやすく言い換えると、『お年頃のクシロ君はまさかのまさか自分に気を許している女の子に欲情――――」
言い終わる前にその口を塞ぐ。

「・・・と、言えば俺を弄れるとあの絵ロ梨から教わったわけだな？」
「ふぁれた？」
当たり前だ。
葉月にそういう台詞は早すぎる。
「絵梨め・・・あれほど言ったのっ・・・にゅ！？」
馴染みのない感触に思わず手を離す。
見るとぺろりと小さな舌が唇を舐めていた。
掌を舐められたらしい。
「ちなみにこれは美樹ちゃん直伝」
「ほぅ・・・あいつがね・・・」
・・・そっちはノーマークだった。
「葉月も葉月だ。変な知識をみだりに取り込まない！」
「・・・何か、いつも思うんだけど、クシロはその辺僕を子供扱いしてるよね？」
「ナンノコトダカ」
「・・・・・・・・・・・・ふぅ」
無言のまま葉月は後に回って、いきなり抱きついてきた。
入浴で上がっている体温の熱が直に伝わってくる。
「・・・これは誰から？」
「絵梨ちゃん」
だろうな。
しかし！絵ロ梨の思惑通りにさせてたまるか！
「甘い！いくら密着しているとはいえ、この背中に当たる感触はブラジャーのものであるからにして、それに欲情するほど俺は落ちぶれちゃいない！」
「・・・その言葉からして、全くもって大丈夫じゃないと思うけど・・・1つ勘違いしてるよクシロ」
「ん？」
「寝る時は気持ち悪いからブラジャーしてない」

「！！」

第３８話－　喫茶談話。－Ｓｏｆｔ　Ｔｏｕｃｈ－（後書き）

沖縄編から一変、超平坦な雑談だけのお話。
ごめん、しばらくこんな感じだよ。
学園祭はシリアスは多分ないです。
でもいいよね、ああいうどうでもいい話で盛り上がれる日常って。
そういえば沖縄編のあとがきでうっかり書き忘れたのですが、
堀塚亜那の名前の由来は塚＝墓・亜那＝穴から『墓穴を掘る』でした（笑）

さて、今回の話は『喫茶についての談話』、『柔らかい感触』です。
こういう話になると、何故か葉月と釧の接触が多くなりますね。
しっかし、あれです。
葉月、何考えてるか分かんない。
あ、何を考えているのか分からないと言えば、
『もやしもん』ドラマ化のようで・・・。
実際どんな感じになるのか楽しみです。
あれの蛍。
彼（彼女？）も本心を出しませんよね。
ああいう感じの女装子が好きです。
ああいうのを書きたい！と、思うのですが、
何故か我がヒロイン達はどこかおかしい・・・。
葉月はこんな感じだし、
女装子に最も近いはずの要は・・・あんなだし・・・。
いつか、いつか・・・！

ああ、一応断っておきますが、別に女装・ＴＳにしか興味がないわけではないんですよ？

第３９話－　準備風景。－・・・ｔｏｏ？－（前書き）

今回は割りと早い更新ができました。
ただその代わり短めです。

第３９話－　準備風景。－・・・ｔｏｏ？－

祇堂学園学園祭は文字通り我が祇堂学園秋の行事であり、特別指定都市全体の学園行事の口火を切る第一波でもある。

というのも、特別指定都市に存在する学園がこの季節、微妙にずらした日程で学園祭を行うため、数ある学園祭が数珠繋ぎで１週間以上も続くためしばらく都市内が祭一色に染まるらしいのだ。

俗に『祭の乱れ咲き』と呼ばれるこの行事は、さらに言えば他県の学園祭咲きともずれているので、運賃などを気にしなければ１ヶ月近く祭を梯子できるとか。

この方法だと自分の学園祭の間、店にかかりっきりだった生徒も他学園の祭で回れるし、他県の都市同士でも生徒の行き交いで超能力技術の交流ができるという利点がある・・・・・と、まぁ、そんな客観的な思考など、当事者であり、今まさにその祭の準備に追われている側にはあまり意味は無く・・・喫茶店の内装準備という重労働を前に、他の祭の観覧を気にする余裕なんてあるわけがない。

１ヶ月、というのは割りと早く経つものなのだ。

誰だ、まだ１ヶ月もあるとか言ったのは。

学園祭準備期間に入って３日目、思ったより進まない作業に残り４日で完成するかが怪しくなってきた現在。

とにかく内装に手間取っている。

最も大事なキッチン部分の机までは何とか配置したものの、それをホールと切り離すカーテンが考えていた位置より大分ずれて、事前に用意していた内装用のあれこれのサイズが合わなくなったのだ・・・。

「コンセントの配線はこれでいいんだよね？」

机の下から這い出して確認を取ると、

「違う違う、珈琲メーカーが思ったより大きくて配置が変わったから、プラグは向こうにないと駄目なのよ」

苦労を水の泡にする台詞が返ってきた。
「最新版はこれ」
誉ちゃんが差し出したメモには、新しく書き換えられたコンセントの配線図が描かれている。
・・・変わりすぎだと思う。
仕方なく一通り終わらしてしまったコンセントを回収してやり直す。
「葉月ー、そっち終わったらこっちきてくれ」
「ん、分かった」
今度こそちゃんと配線して、沿うようにして机の脚にガムテープで固定。見えない場所だから見た目にはこだわらない。
既に机に乗っていた珈琲メーカーのコンセントを繋いでみると、問題なく電源は入った。
よし大丈夫だろう。
「さて・・・と」
呼んでいた真幸君のいる廊下側へ行くと、そっちで行われていたのは看板作り。
「やっぱり大きいねぇ・・・」
縦横共に１ｍ以上の目立ちに目立つ木の板。何枚かのベニヤ板を繋ぎ合わせて作られている。
まだ塗装は行っていないため、今は木目そのままのただ大きないた状態だ。
「やっぱりこれ、上に吊るそうってことになったんだ」
「危ないから駄目だったんじゃないの？」
「いや、それがさ、思いのほか板が小さすぎて立てかけようと自壊しかねなくてよ。
重くもないし繋ぎ目をしっかり補強して吊るした方がいいってことになったんだ」
「・・・ホント、１ヶ月前に練った構想が尽く崩れさっていくよね」
なんだったんだろう、あの話し合いは。

「で、とりあえず吊るしてみて大丈夫か検証してみようと」
「つまり力仕事をしろ、と」
中身はともかく外見は女子の僕に力仕事を回してくるのはどうかと思わないでもないけれど、適任は適任か。
「でもこれ1人じゃ無理でしょ？」
「・・・もう片方は俺が持ち上げる」
板を弄っていたタカが立ち上がる。
「よし、とりあえず仮の掛紐は取り付けた。葉月、壁の方にフックあるだろ。あれに掛けるぞ」
教室側の壁を見ると上の方に確かにフックが2つ。
公共物のしかも廊下に穴を開けるわけにもいかず、がっちりと粘着テープで固定されていた。
その下に脚立を用意してから、木板の端を掴む。タカが同じように掴んでいるのを確認してから慎重に呼吸と高さを合わせて一段一段脚立を上る。
「よっと！葉月そっちも引っかかったか？」
「うん、大丈夫。手離すよ？」
「よぅし・・・と、どうだ？大丈夫そう・・・だな？」
「割りと繋ぎ目もしっかり留めてあるし、もう少し紐をしっかりつければ落ちないと思う。
・・・降ろそうか」
「ああ」
強度と安全性の確認が取れたところで板を外してもう1度床に置く。
次の問題はこれにどうペイントするか。
一応看板のデザインはあるのだけど、塗り方は決めていない。
「一旦白く塗ってから、字やらは書いた方が仕上がりはいいよな」
「無駄に乾かす時間ができちゃうんだけどね。今の状況でそれは痛いと思う」
「ドライヤー借りてきて急ピッチでやれば何とか間に合うんじゃな

いのか？」
「それにかかりっきりってわけにもいかないでしょ。装飾布のサイズ直し、美樹ちゃんだけじゃあ無理」
と言ってもミシンなんて使ったことのない僕は端っから戦力外だ。辛うじて使い方は分かる人間をできうる限りそれに回さないと間に合いそうにない。
「委員長の能力（かぜ）は？」
「あー、まぁドライヤーよりはいいかもな。それでいくか」
「よーし、それじゃあ始めますか」
用意していたホワイトのスプレーをカコカコ振って、キャップを外す。
ちゃんと照準が合っているか慎重に確認してから噴きかけ始める。が、サイズがサイズだけに塗りつぶすのにも骨が折れそうなその板に塗料を噴きかけている最中、
「お兄ーちゃ――ん！」
という聞き覚えのある不愉快な声が聞こえてきた。
「ごっ！」
さらに悲鳴か何かを上げて、今まさにスプレーした板の上を転がるタカ。
よく見ると毒舌幼女が抱きついていた。
半身ほど青いジャージが白く染まったタカから離れて立ち上がり、
「――――と、マニアックロリータ！」
僕の方を見て身の程知らずな台詞を吐いてくれる。
――プシュ――――ッ
即座に、躊躇なく、持っていたスプレーを噴きつけてやった。
シンナー臭と白い塗料で塗れる毒虫。
「何するんですか！！」
「害虫には殺虫剤と相場が決まってるんだよ」
もー、と言いつつ彼女はスプレーのかかった白い髪を伸ばして廊下に転がしてあった鋏で切り除く。

治癒能力、実に便利だ。
「全く、何でよりにもよってこんな時にこんな場所に来るかなぁ・・・」
「荷稲さんに教えてもらいました」
・・・何でそんな意味のないことをするんだろう、あの人。
「？誰だこの子？」
頭を抱えていた僕の隣で、いきなりの登場に怯んで会話に入ってこれなかった真幸君が尋ねてくる。
そういえば、クシロとタカを除くクラスメートと初対面なのか。
「えーと・・・」
「お兄ちゃんの妹です！」
説明に困っていると、とんでもない自己紹介が捻じ込まれた。
大嘘の上、自己紹介になってない。
「違う違う、彼女はカイナの後輩。
名前は・・・えー・・・と、『み』、み、みみ蓑虫見栄？」
「人の名前をニュアンスで覚えないでください！
筒蓑美恵です！つつ・みの・みえ！！」
似たようなものじゃないか。
８割方正解だ。
「・・・で、何しにきたの？」
「遊びにきました」
「帰れ、今すぐ帰れ。今そんな余裕はない！」
「ええー、でもほら、もうお昼休みです？」
「昼・・・？」
言われて確認すると正午を３０分ほど過ぎていた。
没頭していて気づかなかったけど、５時間も作業を続けていたことになる。
確かに昼だし、一休みとしては区切りのいい時間だった。
一応、邪魔にならないように時間を考えて来たらしい。
「仕方ねぇ・・・とりあえずスプレーかけたら休むか」

「・・・そうだね。午後もどうせぶっ続けだろうし」

チョココロネ、イチゴミルク。

毒舌幼女ことみの・・・筒蓑美恵が差し入れてきたビニール袋から選んだ僕の昼食はその2つ。

一応登校時にコンビニで他にも菓子パンは買ってあるのだけど、それはあとで食べるつもり。

完全下校時間ギリギリまで作業すると考えると、まだ6時間以上も労働が残っているのだ。

「それでですねー。

結局私は小学校には行かずに、祇堂大の医学部に入ってから医師免許を取ろうということになりました」

「ふーん」

「つまり、あなたの先輩になるわけです」

へへんと腰に手を当てふんぞり返る幼女。

何たる憎たらしさ。

もしかして喧嘩売ってる?売ってるよね?

けどここでそんなものを買っても仕方ない。

ここは人生の先輩として無視しよう。

「ふーん」

2度目の適当な相槌の後、口内に残ったパンをイチゴミルクで流し込む。

早いところ食べ終えて看板を仕上げないといけないし、せっかくの学園祭だし成功はさせたい。

そんな僕の気のない返事に不満なのか美恵は口を尖らせた。

「『ふーん』じゃないです。他人事みたいに!」

・・・・・いや、他人事だし。

そう返そうとした口は、目の前に出された彼女の手の平に制される。

お釣りを貰おうとしているようなそのジェスチャーはこの場合、
「学費ください」
「・・・よく今の話の流れでその台詞が吐けたよね」
お金せびりのポーズだった。
「お金ちょーだいっ！」
「嫌だ」
「何でです！？パンあげたのに！」
「２００円ばかしで数百万せびろうという考えの方が疑問だよ」
「ご機嫌取りしたのに！」
「どこにそんな場面があったのかなぁ・・・」
あの差し入れがそうだとしても、足し引きでお釣りがきそうなほど今まで暴言を吐かれてる。
「酷いです！」
彼女はわざとらしくも両手で顔を覆う。
今時そんなので誰が騙されるというんだ。
というか、何で僕が悪者扱い？
「いやいやいや、既に２００万ほど払ってるし、足りないにしてもお金自体はまだ残ってるでしょ？」
「・・・２００万？」
「カイナに渡したはずだけど？」
「・・・２００・・・万？」
「「・・・・・・」」
演技をやめて顔を上げた彼女と数刻顔を付き合わせる。
「横領・・・か」
横でクシロが呟いた。
「あのパンダめ・・・年中発情してるだけでなく私のお金まで盗っていたなんて！」
「”私の”じゃなくて僕のだ。
元はクリオネの引越し資金なんだから、ちゃんとした使い道で使ってもらわないと困るよ」

「マニアックロリータの次はパンダか・・・。ま、特徴は捉えてるよな」
「タカ、怒るよ？」
「・・・で、あと年中発情？」
「ええ。あの人、未来さんと夜な夜なイチャついてるんですよ。子供がいるんですから控えてほしいものです」
その言葉に何とも言えない妙な顔をするクシロとタカ。
何だろう？そこまで妙なことを言ったのだろうか？
「あぁ、ロリータさんには分かりませんです？」
毒舌幼女までもが小馬鹿にした表情をこっちにくれる。
・・・彼女、自分がお金をせびりにきたことを早速忘れてないだろうか？
「ご機嫌取りはどうしたの？」
「・・・・・お金を恵んでください」
「誰がどう見ても手遅れだよ」
前も言ったけどよくその台詞が言えたよね。
「酷い・・・」
「酷くない」
というか、このやり取り自体さっきやった。無意味すぎる。
いわれのない膨れっ面をくれる彼女にそれを受け流す僕。
生暖かい沈黙の中、
「あっ、そうだった」
クシロが突然手を打った。
「何、どうしたの？」
「いや・・・忘れてたことがあったんだ。絵梨！」
そして、別のグループで昼食を取っていた絵梨ちゃんに呼びかける。
・・・あぁ、あれのことか。
「ん、何？」
「また葉月にろくでもないことを教えてくれたみたいじゃないか」

「ふっ、嬉しいくせに純情少年君」
「・・・隆、この野郎を押さえつけくれないか？スプレーがある今なら目ぐらい潰せる・・・」
「やだなぁ、まさかそんな・・・うぉわっ、ちょマジでスプレー向けないで！」
「・・・大丈夫大丈夫、美恵ちゃんのいる今なら目が潰れたぐらいすぐに治せる・・・」
「はいです！任せてください！」
「待った！色々と待った！何かノリがはづきんになってる！そして『任せてください』じゃねぇ！
助けて真幸！彼女のピンチだよ！」
「釧、遠慮なくやってくれ」
などなど・・・およそ3分間の小劇場。
楽しく傍観させてもらった間にチョココロネは胃の中に消えた。
昼休みも終了だ。
さて、そろそろ看板塗りに戻らないと。
椎ちゃんに声をかけて、さっさと乾かしてもらおう・・・。
「美樹もだ。変なこと教えたろう？」
が、クシロは今度は美樹ちゃんに照準を向けた。
「ほぇ？え？覚えないよーぅ？」
当然の反応をする彼女にクシロは前にあったことを掻い摘んで説明していく。
最初疑問符を浮かべていた美樹ちゃんは、話を聞いている内に思い出したらしい。
手を合わせてのたまった。
「あれだ、私がはづちゃんにディ――――プなキスをしようとした時のだ」
「「！」」
ちょっと待った！
あれは原始素能（ホワイトノート）で形骸変容（メタモルフォーゼ）がコピーできるかどうかの話であって、

重点はそこじゃないはず！
「ちょ、ちょっと！今のは重大発言ですぞよ！」
あまりの動転に言葉遣いがおかしくなっている絵梨ちゃん。
手でマイクを作り渦中の人に向ける。
「え？え？え？どうゆこと！？」
「みきっち、その話詳しく！」
「葉月も！」
「ちょ・・・」
「私も興味があるな」
「待っ、楚々絽ちゃんまで！」
「ディープだって！どうなの！どうなったの！？」
「まさかの伏兵だよ！くしろん」
「いや、だから・・・」
人に話を聞こうとしてるようで聞いていないクラスメートの質問攻め。
駄目だ埒が明かない。
どうしよう、これ。
何でこの人達こんなに食いついてくるの？
あの何を考えてるのかも、何をやらかすか分からない美樹ちゃんだよ？
普通に考えて、単なる思いつきだって分かるはずなのに。
誤解でヒートアップしたこの変なテンションをどうしようかと苦心していると、
「へぇ・・・美樹ちゃんもなの」
そんな声が響いた。
「「・・・・・・」」
騒然から一転、教室は沈黙に。
皆して振り向けば、そこには落ち着いて栗あんぱんを頬張っている我がクラスの委員長が。
「？どうしたの？」

「いや・・・」
1人、涼しげな顔の椎ちゃんに誰もなにも言えない。
本日何度目かの温い沈黙。
「・・・・・・あ、そうだ。作業早く始めないと」
「うん」
「そうだな・・・」
ようやくの海君の一言で各々散らばっていく。
まるつい先ほどの物事を忘れたかのように動き出したクラスメート達。
けれど、僕を含め彼らの頭の中には同じ疑念が渦巻いているはずだ。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・も？

第３９話－　準備風景。－・・・ｔｏｏ？－（後書き）

ほのぼの過ぎて字数が稼げない今日この頃。
これでやっと学園祭編に突入できますね。
この小説、作者の勝手なルールがありまして、話と話の経過時間を１ヶ月以上空けないようにがんばってるんですが、そのせいでこの様です。

筒蓑美恵。
『筒状蓑＝蓑虫　美恵＝見栄』
『筒蓑＝つつみの＝包みの』
名前の由来はこんな感じです。
毒舌は蓑虫の見栄。中身は普通の幼女・・・
という、どうでもいい裏設定だったのですが、せっかく出番があったので。
今回の『も』もクラスメートの裏設定。
学園祭編だし、そういう設定を掘り出していきたいです。

それから、『罪扉』。
連載小説として投降し直し中です。
Ｒ－１５にどう考えても引っかかるし、長くて見にくいし、夏ホラーにエントリーしたわりにホラーじゃなかったし。
読者数が伸びないのも悩みでして、目に触れる機会を増やそうという思惑も（笑）
まぁ、『エキ日々。』よりさらに読む人を選ぶ感じなので、仕方ないといえば仕方ないのですが。
ただ今、前半を公開中。
しばらくしたら、後半を更新する予定です。

ではまた、できれば近いうちに！

第４０話－　女装仮装。－Ｄｉｓｇｕｉｓｅ－

葉月組。
葉月、俺、隆、椎、聡一、香魚子。
楚々絽組。
楚々絽、海、亜子、真幸、絵梨、誉、美樹。
なお、キッチンでもホールでも危険と判断された歩く凶器こと九鈴は必然的に常時宣伝役に落ち着き、ともかくこの２組が交互に祭の３日間、開催時間の１０時から１６時を二分した３時間ずつ店を回していく予定（ローテーション）。
さぁ、やってきました。
１０月１８日、祭当日。
秋晴れ。
３時間前に登校してギリギリまで作業の末、何とか満足のいく形にまでもっていくことができた内装をしげしげと眺めながらの一息はなかなかに格別だ。
本番前の準備運動にと作った珈琲も美味しい。
委員長こだわりの詳しくは知らないけれど、１０万はいってそうなとにかく高価な珈琲メーカーのお陰だろう。
ワッフルの出来もよくて、思っていた以上に本格的な喫茶店になっている。
お客がうまく入ればそれなりの利益が見込めるかもしれない。
「あとは・・・女子の仮装だよな」
同じようなことを考えていたらしい隣の隆が呟いた。
「まぁ、それは帰ってきてからのお楽しみだろう」
店のメインテーマである仮装（コスプレ）の方も、現在女子が着替えに行っている。
彼女達が入ればこの店の完成度はさらに上がるはずだ。
途中から美樹デザインを見せてもらっていないので、どんな仕上

がりなったのか分からない。
そういうことも含めて非常に楽しみではある。
「どんな衣装かねぇ・・・」
「給仕とかメイドとか・・・あと何かあるか？」
「ニーソ・・・絶対領域とか？」
「何だそれ？」
「知らないならいいや。他は・・・」
などなど、くだらない無駄話に花を咲かせること数分。
「お待たせー」
何ともなしにくつろぎながら女子の着替えを待っていた男子群に声がかけられたのは祭開始３０分ほど前だった。
振り向けば、当然ながらそこには仮装した我がクラスメートがいる。
葉月は黒、椎すみれに香魚子オレンジ、楚々絽が藍で亜子が黄色、絵梨桃色ときて誉緑、美樹紅、最後に九鈴の水色。
それぞれカラーを分けつつ、衣装自体は似通わせたデザインだ。
細かく見れば皆微妙に違っているけども、全体的に給仕服といった感じは出ている。
「コスプレっていう割りには落ち着いてるし、全体的にまとまってるなぁ」
「メイド服とはやっぱ違うんで仮装（コスプレ）って言ってただけだからな。始めっからアニメ云々のコスプレをやる気じゃなかったし」
でもカラフルで賑やかだろと言って、聡一は満足げに何度か頷いた。
まぁ、日常で見る事のない服装というのは確かだ。普段着には絶対なり得ない。
「よーし、じゃあ俺らも着替えるか」
空の紙コップを屑入れに放り込んで隆が伸び（ストレッチ）と共に立ち上がる。
「・・・なぁ、前も言ったが、本当に着替えるのか？」
対して俺は気が進まず、立ち上がるのも躊躇した。

基本裏方の俺達には必要のないものだと思うし、何より恥ずかしいのだ。
「当たり前だ。形から入るのが大切だろう、祭は。気分気分」
「そうだ。女子だけに仮装させるのは虫が良すぎるぞ」
衣装で強調された腰のくびれに手を置いてにたり顔の楚々絽。
実にスタイルのいい人だ。その分にやにやとした表情が残念で、もったいないもったいないと呼ばれる理由がよく分かる。
さて、しかし。
男子が女子の服装で気を盛り上げられるのは分かるのだが、女子が男子の仮装で楽しめるのかが謎だ。
というか、彼女は姉にゾッコンだろうに。
「はーい、これが男子用の衣装ー」
美樹がさっそく男子に作った衣装を配り始めている。
完全に裏方である男子用のデザインも1人1人違うらしい。
この店全体のデザインといい、今回の功労賞は間違いなく彼女だろう。
というか彼女プレゼンツの喫茶店と言っても過言ではない。
「で、これが釧くんのだぜ」
「ああ、ありがと――――ぅ？」
あれ？何だろう？
男子の衣装はシンプルなウェイタータイプだったはずなのに。
何で手渡されたこれは、全体的に薄色をしているのだろう？
周りを見渡すと、やっぱり他の男子の衣服は白と黒色で、何より厚みがない。
にも関わらず、俺の手の平に乗っているこの衣装はかなりボリュームがあって、何故かフリル・・・のようなものが。
これはどう考えても・・・、
「美樹、これ間――――」
「違ってはねぇーです」
むう。間違ってないのか。

いや、でも、だとすると余計に・・・おかしいことに。
「ねぇ、クシロ」
「何だ葉月」
「僕思うんだ。人の不幸って、実際体験してみないと分からないって」
笑顔の葉月。だけども、声が低い。
なるほど、そういうことか。そういうことですか。
散々部屋の衣服を変えたりしてきたツケが今、ここに巡ってきてると。
折りたたまれた例のブツをバッと広げてみる。
丈の短い洋風アレンジな着物。他の女子のとすら違う。
「はづちゃんの要望でねー、ありったけラブリーにしましたよん」
これは・・・ちょっと、
「常識的に考えて、そんな無茶なことは・・・」
「『いいじゃないか。お祭なんだし仮装なんだし』」
・・・それは前に俺が言った台詞である。
自分の言葉に足元を掬われるとは。
駄目だ、逃げれそうにない！
「ほーら、観念しなさいな」
椎が後から肩を掴む。
あぁ、あなたも共犯ですか。
「言ったろう、虫が良すぎる、とな」
そういう意味でしたか楚々紹サン・・・。
「さーぁ、観念しなよ、クシロちゃん」
何処からかヘアアイロンを取り出して身動きが取れない俺に向ける葉月。
カチンカチンと凶器（アイロン）を鳴った。
「まずは、その癖っ毛から直そうか」
――カチカチカチカチカチカチカチ・・・ッ
・・・・・迫りくる音が恐ろしすぎる。

・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・。
「うわっ、予想以上に似合うわね・・・」
椎の、そんな心からの賛辞が、今置かれている自分の惨事を物語っている。
あれ、何か、体が勝手に震えて・・・。
「さすが。前々からイケるとは思ってたが、期待以上だ」
聡一、前々から何を思って何を期待してたんだ？
あとで、あとで・・・覚えてろ。
「よかったね。新しいジャンルが拓けたじゃん」
「よくない！」
「えぇー？似合ってるよ？」
というこれまた全然嬉しくない台詞とともに手鏡を突き出してくる絵梨。
そこに写っている自分の姿を直視して、思わず目を潰しそうになった。
肩口までの赤茶けた髪をした女の子がそこには写っている。
「・・・どう？」
「・・・何時から鏡は他人を写すようになったんだろう・・・？」
「諦めな。それが今のくしっちだよ」
「制服返して！後生だから！」
「駄目だよクシロ。祭中はその格好で行動してもらうから」
「祭中！？無理無理！こんなのどう考えても変な目で見られるって！」
「「いや、大丈夫」」
全員の声が揃った。
「怨むんなら、二次成長に入っても変わらなかった容姿と声に面倒で髪も切らずにいた自分を怨むんだね」

確かに、偏食して成長期が遅れているのは自分のせいなのだろうが。
だからといって、それと女装との因果関係が理解不能だ。
「やっぱり無茶だって！こんな短い丈なんて・・・すぅすぅするし・・・・見えたら絶対バレる！！」
「ふむ。まぁ、確かにね」
思案し出した葉月に一筋の光を見出す。
この状況からの脱出の糸口はここにしかない！
「だろう！？下着は男モノなんだから――――」
「じゃあ・・・」
そんな必死な俺の台詞を遮って、
「女モノの下着を穿こうか」
あろう事か葉月は自分のスカートの中に両手を入れた。
「のぉぅ！はづきん、それはあまりにも高等技術というか！
それやったらくしろんが不能になる！！」
あまりの事態に頭がくらくらして、傾斜していく視界が黒に侵食される最中、
絵ロ梨（エリ）のドクターストップを聞いた気がする・・・。

／

「おぉ、一般客入ってきたぞ」
隆のそんな声に意識を引き戻される。
見渡せば、現実離れした衣装に身を包む我が女子クラスメート。
我が身を見れば、・・・同じく女物の衣装を身にまとう自分。
あぁ、そうだった。
今、俺は女装してるんだ。
「クシロ、あんまりボケッとしてしないように。もうすぐでお客様が入るんだよ？」
葉月がこれでもかという清々しい笑顔で話しかけてくる。

なるほど、自分も葉月の衣服云々を交換したりした際、そういう笑顔だったわけか。
「悪夢だ・・・」
これから全くの、事情を知る由もない赤の他人がやってくると思うと嫌な汗が止まらない。
「なぁに言ってるの。ほら、自由行動組の皆もクシロのお披露目を見守ってくれるってさ」
それは単なる羞恥プレイだ。
「何て嫌な友情なんだろう・・・」
このクラスの団結力は異常だよな。強さじゃなくて形が。
本来今日の前半は俺達葉月組が店を回す予定なのに、まだ皆店にいる。
まぁ、人の不幸を楽しもうというのが半分ほど・・・いや、7、8割ほど混ざっているが、今までがんばって作り上げてきた喫茶店だ。来年と言わず、3日後には楽しめる祭巡りより店に関わっていたいというが本音だろう。
本来キッチン担当だったはずの俺が抜けて裏方が2人になる葉月組としてはありがたい話だ。
普段生活している場所とは思えない小奇麗な空間、カーテンで仕切られた向こうから漂ってくる甘い香り。
・・・自分の女装がなければ心躍るシチュエーションなのに。
「俺は今何をやってるんだろう?」
「駄目だよ自人称変えないと」
「それを葉月に言われるとはね。自分こそずっと『僕』で通してるじゃないか」
「それが自然体だからねぇ・・・。別に強いてまで女の子やろうという気持ちは今のところないし
でも今のクシロは違うでしょ。女っぽくしないとバレるよ?」
「・・・・・・」
あぁ・・・、バレて困るのは自分か。

女装をさせられてしまった今となっては、バレないように最善を尽すのが俺の任務（ミッション）らしい。
「女言葉使ってれば、その声色なら大丈夫だって」
「葉月、それ褒め言葉になってないって分かってるか？」
「うふふん？」
なんだその返しは。
何なんだそのご機嫌な鼻歌は。
「ん。この階にも人が上がってきたみたいだよ？覚悟を決めようか」
「う〝わぁあぁあああー・・・」
嫌だ。まるで覚悟できてない。というかできるわけがない。
固まる自分の腕を引いて葉月は鼻歌交じりに店の入り口の方へ。
廊下にまで出されて客寄せに参加させられる。
１３階段を上る死刑囚の気分だ・・・。
「ほぉら、クシロちゃん？」
客寄せの台詞を耳元で囁かれ、肩には手を置かれ・・・、力の入った指の圧力に追い詰められる。
もう、逃げられない。
「・・・・・１‐Ｂコスプレ喫茶『Ｅｌｙｓｉｏｎ』っ・・・いかがですかぁっ！」

／

発火能力者（パイロキネシス）の火炎演技（ファイヤーダンス）、未来視の未来予告（プレコグニション）、念力能力者（サイコキネシス）による絶叫アトラクション・・・・・さすが超能力開発を許可された学園によるお祭だ。
至るところで超能力を体験できるこの期間、学園都市は超能力を題材にしたテーマパークと言えるだろう。
どれから行こうか？
人気のブースは混雑しているだろうから、出来る限り人の少なそうなところから回っていきたいのだけど・・・。

遊園地よろしく3つ折りパンフレットを確認しながら、あれこれと興味の引かれるブースを目で追っていた最中、どうにも看過できないモノが視界を過ぎった。

何でだろう？

ここしばらく見る機会がなく、これから先見るはずもないと思っていた物体Xが今、見えた気が。

「んにゃ・・・そんな馬鹿な・・・だよな」

自分に言い聞かせつつ、目を擦り、頬をつねって、再度確認。

ソレは揺ぎなくそこに存在していた。

視界が固定された先にいるのは丁寧に作りこまれた本格的な給仕服ともメイド服とも判断のつかない衣装を着た女学生。

サイドテールの黒髪と華奢な体を揺らしていてなかなかに美人だ。

だが、問題はそこじゃない。

注目すべきはその彼女の持つ店の宣伝文句が書かれた画用紙の方で――――

・・・皆々様、小学校の頃転校した友人が昔描いた自分の得体も知れない似顔絵が時を越えて現在、

何処ぞの出し物のマスコットキャラクターになっていたらどう思うだろうか？

まさか・・・いや・・・まさか。

あいつか？

あいつのなのか？

そうこうしてる内に、水色をした宣伝役らしい少女は遠ざかっていく。

考えている暇はない。

「ちょい！そこの不思議系サイドテール！」

／

「お待たせしました。
ご注文の『Wベリーとアイスのワッフル』、『チョコとクリームのワッフル』それから『無駄に凝った珈琲』です。
それでは、ごゆっくりおくつろぎくださいませ」
席に座った男子2人に商品を出し、テキパキとナイフとフォークを並べていく葉月の様を見て、
「手際いいな・・・」
無意識の独り言。
「そりゃ、バイトで慣れてるからな。てか、お前もホールに出ろや」
キッチン内部、カーテンからホールを眺める俺の背中を隆が押す。
崖の上、逃げ場を失った人間の背中を押すような非道だ。
「これ以上こんな醜態を晒すなんて嫌だ！」
「無駄な抵抗はやめろ。どうせ交代の時間になったらその格好で出歩くことになるんだ」
「やめて・・・それ言わないで・・・」
「おー、ちゃんと女っぽい言葉使い」
何か感心したような隆の口調が癇に障る！
「そんなつもりじゃない！」
「あーはいはい、さっさといけ」
布際の攻防戦はあっけなく隆に軍配が上がる。
かくして、崖から突き落とされた俺はキッチンからホールへ。
カーテンから放り出された瞬間、お客の視線が一気に集まったのを感じた。
「うぅ・・・ぅうう・・・」
反射的に俯いてしまって、ホールに出てきたというのに仕事を探す機会を逸してしまった。
顔を上げたいけれど、1度俯いた手前それはなかなかしづらい行為だ。
けれど、やることがなければその場からも動けないわけで、それ

がまた恥ずかしい・・・。
「そこの店員さーん」
そんなジレンマから俺を救う天の声に顔を上げると、声のした方には手を挙げている女性客が座っていた。
居心地の悪さから抜け出すためにもすぐさまに駆け寄る。
「は、はい・・・お客様、ご注文でしょうか？」
バレないかというそれとは比較にもならない不安がのしかかっているために声が上ずってしまった。
駄目だ・・・どう考えても接客できる心的状況（コンディション）じゃない・・・。
うわぁ・・・、せめて変な人と思ってくれ。変態扱いは耐えられない・・・！
そんな願いが叶ってか、挙動不審な俺の様子に何ら疑いを持たなかったらしく、彼女は笑顔を向けてきて、
「ねぇ、君、この後ホテルでいいことしない？」
何かとんでもないことを口走った。
すみませんが、願いは無視されたと見ていいですか、神様？
それと、変態を呼べとは言ってませんよ？
「これ、ホテルの場所と部屋の番号」
固まってしまった俺を置いてきぼりに、懐からホテル名らしきロゴの入ったマッチを取り出す彼女。
どれだけアクティブな行動力なんだろうか。
が、
「お客様、セクハラは困ります」
何時の間にかやってきていた葉月が、マッチを渡そうとしていたお客様の腕を蹴り上げた。
空中を舞ったマッチをキャッチして自分のポケットに仕舞ってしまう。
「小鳥さん、何で1ヶ月以上経ってまだ神戸にいるんですか？」
溜め息交じりに、変態もといお客様に話しかける葉月。
どうやら知り合いらしい。

「いやぁ、私学生じゃないし暇はいくらでもあるわけでね？せっかくの神戸なんだから新しい出会いをと」
「あなたは田舎から出てきたおのぼりさんですか・・・」
「いいじゃない！私だって刺激が欲しいのよ！」
「だからって女の子にまで手を出そうとしないでください」
と平然と俺を女の子として扱い、
「あなたの好みは幼い男の子でしょ」
さらに平然と彼女の趣味を口にする。
仮にも店中で、他のお客に聞こえる音量での会話において、話す事柄じゃないと思う。
しかし、
「そうよ」
彼女は彼女でこれまた平然と肯定。どころか胸を張って堂々と宣言した。
・・・この前、珈琲についての知識を教わりに行った瑞流さんにしても、この人にしても、俺の知らないところで葉月が変人と交流の輪を広げていることについて頭が痛い。
と、彼女がちょいちょいと人差し指で接近を促してくる。
ジェスチャーどおりに顔を近づけると、
「だって、君、男の子でしょ？」
これまた平然と無視できない言葉が。
バレてた？何で？
やっぱりアレか！おどおどしすぎたせいか！
どうしよう！？
脳の何処を損傷したら記憶が消えるんだっけ！？
前頭葉！？後頭葉！？いや、大脳じゃなくて中脳だっけ！？あるいは小脳！？
あまりの動転に冷や汗がだらだらと、本当にだらだらと流れ落ちる。
助けを求めて葉月の方を見ると、応答代わりに肩を竦めた。

「透視能力（クレアボイアンス）の代わりにまでなるんですか、あなたの眼」
その台詞を聞いて、あぁだからかと安心し・・・・・いや待て、確か透視能力者（クレアボイアンス）は能力上、通常能力が制限されるはず！
何でこの人普通に覗いてるんだ！
「うーん、透視っていうより、概念を視てる感じなんだけどね。外見変えても中身は変わらないから区別がつくのよ」
何やら意味の分からないことを喋る彼女に、さすがにそろそろ彼女の紹介が聞きたくて、
「葉月、この人知り合いか？」
とお決まりの台詞を言うも、
「クシロ、気をつけてね彼女変態だから」
紹介以前に検閲に引っかかったようだ。
葉月をして変態を言わせしめる彼女の存在に戦慄を隠しえない。
「酷い言いようよね・・・。
ふぅん？ふふん？
何？何々？
葉月ちゃん、もしかしてぇ・・・この子こと好きなの？」
・・・・・うわぁ。
からかい口調でいやらしい意図が見え見えのカウンター攻撃。
ちょっとでも対処を間違えると、取り返しのつかなくなるタイプの質問だ。
その意地悪な質問に、葉月は笑顔で応えた。
無論、葉月とそれなりに時間を共有している俺にしてみればその笑顔が何を意味しているかは一目瞭然。
こっちもこっちで取り返しのつかなくなるタイプには違いあるまい。
お客様であるにも関わらず蹴り上げた彼女の腕を両手で掴む葉月。
ポキッと軽快な音と共に、彼女の右腕は小枝のように単純骨折（おれた）。
「あんまりおふざけが過ぎるともう1本折るよ？」
・・・1本折った時点で取り返しがつかないとは思わないのだろ

うか？
「うわー痛ぁっ！ちょっと！腕なんか折れたらこれから祭回れないじゃない！」
何で怪我自体を心配しないんだろうか、この手の変人は。
そんなに新しい出会いや刺激が大切なのだろうか。
「大丈夫大丈夫。骨折ぐらいすぐに治せる知り合いがいるから」
もちろん怪我の心配などするはずもない人種である葉月は携帯を取り出して何処かしらに電話をかける。
「あぁ、毒舌幼女。今ね、腕を骨折した患者がいるんだけども――」
・・・どうも美恵ちゃんらしい。
今日の午後には一緒に回る約束をしているのだし、近くにはいるだろう。
「この際関節を増やしたいらしいから手伝ってあげてよ」
「ちょっと待ちなさい！今のはどう考えても治療とは言わないわ！」
そんな抗議虚しく、『任せてください！』という無邪気で元気の良い返答が携帯から返ってくる。
いい子なんだけどなぁ・・・。やっぱりというか、ちょっとズレてるんだ、あの子も。
「くぅう・・・覚えてなさいよ！可愛くて年端のいかない少年をゲットして見返してやるんだからぁっ！」
その行為がどうして葉月を見返すことになるのだろう？
そんな疑問が脳内を支配している間に、全く必要もない趣味を大声で暴露するという捨て台詞と共に彼女は店を飛び出していった。
何て・・・とんでもない人なんだ。

第４０話－　女装仮装。－Ｄｉｓｇｕｉｓｅ－（後書き）

女装は当初からの予定でした（笑）
振り返ればそんな描写がチラホラあるはず。
そういう細かいところに変にこだわるのが黒咲クオリティー。
逆に言えば、そういう欠片を集めると先が見え・・・・・・るのかな？
学園祭編は体育祭編と同じように色んな人物の視点をまわす形でやりたいなーと思ってます。
体育祭編と同じように１週間毎更新できればと思うのですが、どうなるでしょう？
がんばります。

現在『罪扉』の要編を連載小説として上げ直していますが、
今度『エキ日々。』以外の小説投稿は『罪扉－雨の音－』になりそうです。
まぁ、かなり行き詰ってますが。
ああいう小説にどれぐらいのニーズがあるか不明なのにも関わらず、勝手にシリーズ化予定。
『エキ日々。』だとシリアスなシーンがどうにも深刻にならない傾向にあるからでしょうか？
鬱気味、シリアス一直線の話が無性に書きたくなるんですよね。

出来れば、８月ぐらいには『エキ日々。』のエグイ話も短編で書きたいです。
あと『語るモノ』はテンプレを教えてもらわないと次話投稿は無理かも（笑）
・・・行き当たりばったりな企画だもの。

いずれも、お披露目できるように努めていきます！

第４１話－　客観回覧。－Ｃｏｕｎｔｅｒｆｅｉｔ－

いくら特別指定学園都市の一学園としても、初等部から大学まで内包する祇堂学園は相当の広さだ。

学園祭も大規模とはいえ、一校舎の超能力とは無関係な喫茶店にそう人が入ることはないだろうという予想はしていたのだけど、その予想はよい意味で裏切られた。

凝りに凝った内装や仮装が目を惹くらしく、開店から3時間が経過しようとしている午後1時少し前、一息つく間もないほどには店内は賑わっていた。

忙しさが勝ってか羞恥心の薄らいだクシロもしっかりと業務をこなし、何事もテキパキと処理する委員長は頼りになるし、何だかんだで店に居座った副委員長こと亜子ちゃんも力強い味方だ。

そんなこんなで精神的には余裕ができたせいでか、気になり始める周りの視線。

店の準備の途中からクシロをホール側に巻き込めるということばかりに目がいって自分も仮装するんだということをすっかり忘れていた。

何せこの衣装、不必要に胸元が強調されていたり、不必要にスカートの丈が短かったり・・・。

体育祭の後でグレードアップした衣服のさらに上をいく意味不明の装飾なわけで・・・。

駄目だ、考えたら駄目だ。

考えれば考えるほどどつぼに嵌る気がする。

店内を見渡すと、『楽気苑』の常連さんもいてこっちに熱い視線を向けてくる。

なるほど。彼らが三石先輩の言っていた、『女性興味が一方向に狭い』知人の大学生達か。

まぁ、ただでさえ、人目を惹く姿なのだ。

当たり前とはいえ浴びせられる好奇の視線に、今更ながら動揺してしまう。
いつもの無駄の多い、機能性が削がれた服装での意味の分からない格好に対しての羞恥とは違う、嫌な気恥ずかしさ。
少々頭に発熱がみられる。
あー、熱い。
これ、どう考えても女子がそんな役回りだと思う。
男子基本裏方だもの。
見られないし、見ないし。
「はぁ・・・」
けれど、それももうすぐ終わりだ。
午後1時。それはちょうど開催時刻の中間で、店当番の交代時間である。
自由行動になれば、店内に居座り続けなければいけない現状よりは気が楽になるだろう。
続々と帰ってきたクラスメート達は既にスタンバイに入っているので、あとは頃合を見計らって店を抜けるだけ。
食べ終わったお客さんの紙皿を回収して裏で捨てようとしていると、
「ここに!細い川に美しい樹と書く!細川美樹はいるか!」
叫び声が聞こえてきた。
振り返ると、出入り口に見知らぬ男子と九鈴ちゃんがいる。
お客様を・・・連れてきたような感じではない。
「はぁーい?細いそうめん川流し、羊大樹(き)いと書く細川美樹ちゃんならここにいますよん?」
ご指名を受け、ホールに入っていた美樹ちゃんが手を振る。
その姿を捉えて、大声を出した男子君は数歩後ずさった。
自分で呼んでおいて失礼な人だ。
「う・・・嘘だ。何でお前が・・・」
対して彼を視界に捉えた件の彼女の方はなんともなしに、

「あ、いなっちーだ」
指を指してそう言った。
・・・・・ふむ？
今、何て？
「「いなっちぃいいい・・・・・・っ！？」」

／

「いなっちーはこれだよね」
「だよな、これだ」
「これよ」
「これ」
「これだよなぁ」
忘れもしない強烈な個性を持った元同級生、その現同級生であるらしいこの喫茶店の店員達が揃って指差すのは、この店のマスコットであるところの『いなっちー』だ。
「いやいやいや！俺が『いなっちー』！稲川智広！」
この落書きは美樹が俺の似顔絵を描いた成りぞこないだぞ！」
しかし、それに対しての彼らの反応は、
「えー、いきなりそんなこと言われても・・・」
「こっちがいなっちーだ」
「だいたい似てないわよ」
そりゃあそうだ。
何せ、成りぞこない。
製図や裁縫など繊細な作業を得意とする美樹なのだが、ラインが微妙な曲線を描く図形的ではないモノの模写などは苦手なのだ。
そんな残念な才能から、美術の人物模写の時に生まれたのがあの『いなっちー』である。
模写とは思えない、棒人間の方がマシだと思えるような落書き。
そんなモノが原型を留めているわけがないだろう。

が、反論しないわけにもいかない。
「ほら、これ眼鏡」
「え！これ目じゃないの！？」
「でも君の眼鏡四角じゃない」
「前は丸眼鏡だったんだよ！それにこれ、これが前髪！」
「トサカじゃなくて？」
「どう考えてもこれ二頭身だぞ？」
まぁ、だろうな。
上半身の模写のはずなのに体全体描いちゃってるし、顔が体の倍以上あるし。
「というか、こっちの方が原型だろ」
「俺がオリジン！オリジナル！元々は俺だったモノ！
で、何でその『いなっちー』がマスコットになってんだよ美樹！」
「何言ってるのん？『いなっちー』はー今やこの学校全体に認知されたキャラクターだぜー？」
「学年便りに毎回出てるよね」
「体育祭のパンフにもあったよな」
「学校のどこかに隠れいなっちーが存在するって噂もなかったか？」
何で・・・何であんな落書きが定着してるんだ・・・。
一応元は自分の模写なので肖像権があるような気がしないでもないのだけど、それを主張することはあれを自分だと認めるということで・・・、けれどやめさせるためにはあれと俺との関係を立証させなくてはならなくて・・・、
「チクショ――――！！」
思わず叫ぶ。
「美樹、彼、変な人？」
さっきから自分よりも背の低い黒姫の後に隠れていた焦げ茶髪の女の子がかなり引いている。
・・・酷い言われようだ。
「可愛い系引っ込み思案には言われたくねぇ！」

「なっ！」
何故か俺の反撃に過剰に反応して身を乗りだす彼女。
「お・・・！」
何やら口走ろうとした彼女の口を黒姫が片手で塞いだ。
「お？」
目配せしてこちらの分からない何かを交わし、口を開放する。
「私はおと・・・！」
また口を塞がれた。
「おと？」
何なんだろう、このやり取りは。
「私は乙女です・・・」
最終的に出てきたのはそんな台詞。
何を言ってるんだこの娘は。
「うん見りゃ分かる・・・」
「ぅぅぅぅ・・・・・・」
葛藤するように頭を押さえる彼女の様子に忍び笑いする彼らクラスメート達。
これまた意味の分からない行動だ。
「まぁ、彼、『いなっちーだったモノ』が変人なのは置いておいて――――」
何故か、俺の方が紛い物扱いになっている。
可愛い系引っ込み思案といい彼女といい、初対面の相手に失礼な台詞を吐いてくれる。
というかこのクラス、電波系語尾不定を内包しうるほど強烈な個性を持った変人ばかり集まってる気がする。
それにさっきから何か面白がられてるよな？
考えれば考えるほど腹が立ってきた！
「うるせぇ！悪魔系ロリボディ！」
「・・・・・ほぉう」
その言葉を聞いて、笑顔が濃くなる黒い黒い姫子。

あれ？地雷踏んだ？
「美樹ちゃん、確か男用の衣装残ってたよね？彼に着せてあげよう。それからお腹と背中にいなっちー描いて、学園中を練り歩かせる」
何だその恐ろしい処刑は。
されてたまるか！
咄嗟に振り向くと、何時の間にか、後ろに回っていたこっちも笑顔が黒いすみれの女の子に退路を立たれていた。
・・・連携、できてるなぁ。
仲いいんだろうなぁ。
方向性がおかしいけど。
「さぁーて、恥辱の時間だ」
「ＮＯ・・・・・・！！」

／

香春高校。
それは超能力の実用・応用を専門に扱う祇堂学園四季高校の中で最も生活に密接した学校だ。
体育祭のバトルロワイヤルでは苦汁を舐めた俺達だが、学園祭となれば話は別。むしろホームグラウンドと言っていい。
派手さはないが、細かな調節の利く器用な能力使用こそ我らが香春の強みである。
体育祭そっちのけで調理スキルも上げていた俺達のクラスはもちろん食べ物で出店。
ただし喫茶店のような形式は取らずに、教室の中にバーナーを３つ並べて、クレープとたい焼き・たこ焼き・焼き蕎麦をそれぞれ別々に販売している。
１０月と寒くなってきたこの頃合だからこそ、窓を１つ以外全部締め切り、副委員長（ふきのとう）の空調制御を使って煙をピンポイントに外に出すといった、さりげない超能力パフォーマンスを交えることで他の

学校の店と差別化を図るというのがこの学校の戦略だ。
加えてこのクラスでは特定の趣味の女性・・・と男性に人気な土筆にわざとブカブカの服を着せることで更なる集客が可能なのだ。
なの・・・だ。
なのだ・・・けど、
「ねぇ、君、この後ホテルでいいことしない？」
「こ、ここ困ります！」
先ほどクレープを買いに来た紅い客人が土筆に迫っている。
もーう、これでもかと言うぐらいの迫り具合だ。
よくもこれほど人の多い場所で求愛できるなと。
「大丈夫大丈夫、一から百まで丁寧にお姉ーさんが教えてあげるから」
それを言うなら『一から十まで』であって、九十ほど超過してるというか、超過した分は何なんだろうというか・・・。
非常に綺麗なお姉様にそんなお誘いを受けているあいつが羨ましい。
そして土筆は押しに弱いので、あのままだとまぁ・・・・・・まぁな？
それは他人事なので干渉はしないとして、そろそろあいつにも出店を手伝ってもらいたい。
だから早いところ諦めて手解きを受ける約束でも交わして戻ってきてほしいのだが、うん、こっちから声をかけるのは嫌だ。
どうしようかと考えながら、プレートの上でかき混ぜたキャベツ、豚肉、麺の上にソースを振りかける。
ジュワッという小気味好い音と共に勢いよく水蒸気が上がり、まるで見えない換気パイプがあるかのように線を描いては窓から出ていった。

／

何処かで発火能力者（パイロキネシス）がパフォーマンスをしているのか十数メートルの火柱が上がり、視線を上から降ろせば微電波マッサージや能力焼きりんごなどの文字が躍る。

既にりんご飴やら綿飴やらチョコバナナやらタコせんやらを散々毒舌幼女に奢らされた身としては出店菓子はもうたくさんだ。

昼食はお腹に入れたし、今からが本格的な超能力店巡りになる。

蓑虫とは途中で別れ、今はクシロと2人。

タカとも今回は別行動で、彼は今頃体育祭で知り合った隅美月さんと巡っていることだろう。

祭巡りと書いてデートと読む・・・みたいな？

まぁ、それはともかく、こっちも出店を楽しもう。

・・・衣装と、手に持った宣伝用の紙が恥ずかしいことこの上ないけど。

「どこ行く、クシロ？」

「ん。まぁ・・・まずは大学の方。

危険性の高いアトラクションは大学でしか許可されてないし」

「アトラクションね・・・えーと、空中散策、念力トランポリン、対撥水・発水能力者水鉄砲合戦・・・・・に変身能力者（トランスフォーマー）による『狼と羊』」

狼と羊、訳すと騙す側と騙される側。

相変わらず、相変わらずのようだ。

「狼と羊？」

「何となく内容が分からなくもないけど・・・行ってみたらはっきりするでしょ」

形態変身（トランスフォーム）のグループがやっているのなら、何時かの大学生と雪成君もいるはずだし顔見せぐらいはしておこう。

現地点、伸夏高校から祇堂大学まではそれほど離れていない。

移動の最中も色々と面白そうな看板やプレートなどが目に留まる。

凄い量だ。これ全てが、それでも祇堂学園だけの行事だというのだから・・・。

他の学園での祭り、他の学園都市での祭りも見てみたくなる。それぞれ特色が違うわけだし、比べると楽しそうだ。

さて、大学に着いた。

中学校や小学校と違って開放的でこれといった柵がない大学。

それをわざわざから校門入って、とりあえず第1館と書かれた建物の前にまで足を運んでから、改めてパンフレットの地図を確認する。

大学というのは入り組んでいて迷いやすいからの行動だったのだけど、『狼と羊』は共同訓練の時彼らがブースを出していたのと同じ場所でやっているようだった。

どうやらあそこが形態変身（トランスフォーム）の活動拠点らしい。

1度行ったことがあるので迷うことなくすいすいと歩を進めてブースまでやってきた。

「こんにちは」

「あぁ、君か」

大学生の彼が受付らしき机に腰掛けて応じてくれる。

雪成君は中か、あるいは裏方の仕事があるのかもしれない。

「君らも参加してみるかい？」

さほど力の入っていない勧誘文句。

やる気なしと言った感じ。共同訓練の時もそうだったなぁ。

「どういうアトラクションなんですか？」

「形態変身（トランスフォーム）を利用した成り代わり推理ゲームでね。

まず、10人ぐらいのグループと能力者1人が暗幕や仕切りで入り組んだ教室に入る。

能力者はプレーヤーに成り代わって模造ナイフで彼らを殺していくから、プレーヤーは誰に成り代わっているかを当てるという分かりやすい遊びだよ」

「・・・何となく分かってたけど、何で犯罪を通さないと行動できないんですか形態変身者（トランスフォーマー）は」

「あははははっ、伊達に詐欺師集団を名乗ってないからね」

今まで散々言われてか、開き直ってついに自称しだしたらしい。
さっさとお縄になるべきだ。
「遠慮しときます。いくら形態変身（トランスフォーム）でも僕は見分けつきますし」
「そうか、そうだろうね。君は？」
「やめときます」
「ははっ、まぁ仕方ないね」
これこそ集客に熱心でないというのがよく分かる笑い方。
そもそも考えてみればこのゲーム、能力者が1人いれば回せる内容だ。
彼を含めて2人ほどここにいると考えても、まだ多くいるはずの他のメンバーは、やっぱり共同訓練の時のようにカモを探していると考えられる。
やる気があるのかないのか・・・。
「あ、そうだ。学園祭でこれだけは行った方がいいっていうところありますか？」
せっかくきたのだ。無駄に人網が広そうな先輩に聞いておこう。
「ん・・・そうだなぁ。
やっぱりあれじゃないかな。殊樹高校名物の『不思議の国』」
「不思議の・・・アリスですか？」
「そう。幻想現実（1.5）と呼ばれる能力で創られた仮想空間を探検できるという、正しく夢のようなアトラクションでね。アリスの気分が味わえる」
「へぇ・・・面白そうですね」
クシロが食いついた。目が輝いている。
まぁ気持ちは分かるけど。
確かに他のアトラクションと比べても秀でているし、これぞ超能力！といった感じで純粋に面白そうだ。
「行くんなら予約することをお勧めするよ。明日分のならまだ空いてるんじゃないかな」

学園にいくつかある運動場やプールは事前に申し込みがあったグループのイベントが時間で割り当てられている。
その場所に見合った催し物が予定されるこれらのスポットはパンフを見るまでもなく楽しめるというのが学園っ子の常識だそうで。
それでも事前に確認すると香春高校のプールでは撥水能力者による水面歩行が行われているらしい。
とりあえずそれを目的に高校内の入ったところで、お昼過ぎ、先に腹ごしらえをしようということになって美月と校舎の中に入った。
もう開き直っているとしか思えない食べ物を扱う店だらけの構内を歩いていく。
「そういえばだけど、あの子どうしてるの？」
「ん？」
「髪お化けの子」
ぶるりと震えながら言葉を付け足す彼女に、だったら話題に上げなければいいと思わないでもない。
未だに、彼女にすれば葉月は髪お化けらしい。
「葉月か？あいつは・・・どうなんだろうな？
相変わらずといえば相変わらずって感じなんだが・・・進化したっていえば進化したって感じだ」
「進化・・・」
何か変な想像を働かせたらしく、途端にぞっと青ざめる。
いや、だったら話を振るなと。
大丈夫なのだろうか。
「最近また何やら能力の応用を編み出したみたいでよ。
どんどん人間離れしていくから正直ついていけねぇ・・・まぁ、そういうのは釧に任せておくに限るよな」
「釧さん・・・てさっきあった子だよね？」
「あぁ。今頃デート中だろ」

「でーと・・・デート？あれ？いや、あれ？あの子・・・女の子、だよね？」
「・・・・・・」
ふーむ、説明するの、メンドイな。
「まぁ、葉月は元々男だったし？おかしくはねぇんじゃないの？」
「そ、そっか。それもそうだよねっ！」
無理やり納得したらしい彼女。
すまない、友よ。
お前は美月の中で女で百合になっちまった。
不可抗力だったんだ。
まぁ、尊い犠牲のことはさっさと忘れてしまおう。
ん。
・・・・・そういえば、何時ぞや椎による『も』発言・・・あれは結局誰のことだったんだ？
あの言い方からして本人ではないだろうが、かと言って遠い人間という感じでもなかった。
気になるっちゃあ気になるんだがなぁ・・・。
「あ？」
雑念半分、チラチラと食指を動かす食べ物を探していた目に紅い残像が横切った。
首が固定されて、一点を凝視してしまう。
間違いない。
昼に喫茶店にきて、自分の嗜好をシャウトしながら逃げ去った女性だ。
何やら熱心に、高校生には思えない小さな店員に話しかけている。
結構な音量で、内容が耳に入ってくるのだが・・・、
「何やってんだ、あの人」
というか、真昼間、公の場で、この子供や青春真っ只中の学生も大勢いる中で、使っちゃあいけない言葉があるんだと言いたい。
・・・よし。

「ここじゃない別の場にしよう。ここ以外ならどこでもいい」

／

店中で、迷惑と知りつつも可愛い男の子を落とすべく粘り粘っている最中、その男の子の視線が何故か私のその後へ釘付けになっているのに気づいた。

気になって振り向くと、開けられた窓の向こう廊下に、腹の部分に昼に見たマスコットキャラクターの描かれた衣装を着て、頭に『旧・いなっちー』と書かれた鉢巻をしている男の子と、その両腕に縄を結んでそれを引っ張るサイドテールの女の子が。

その縄が何時の間にか彼の首に巻きついているのだけど、それに気づいていない彼女は遠慮なし引っ張っていて・・・、

変質者、ここに極まり。

・・・・・葉月ちゃん達の仕業だろうな。

ああはなりたくない。

変な目で見られる前に早くこの子を落とさないと。

第４１話－　客観回覧。－Ｃｏｕｎｔｅｒｆｅｉｔ－（後書き）

他人のことは分かるのに自分のことは見えていないというお話。
まったりと学園祭１日目終了です。
あと２日分、前後で分ければ少なくても４話は話数を稼げる計算なわけですが、まぁ予定は予定。どうなることやら。

次回はもう少し早く更新できるようがんばります。

第４２話－　有触れ。－Ｃａｆｅｔｅｒｉａ－（前書き）

何時もにも増して内容が薄いぜ！
本当は『不思議の国』編も入れるつもりだったんですが、
中途半端になりそうなので一度区切って投稿しました。

第４２話－　有触れ。－Ｃａｆｅｔｅｒｉａ－

１９日。
学園祭２日目。
１１時２１分、現在地は香春高校の体育館。
暗幕が張られ照明が落とされた館内は暗闇とがやがやというあの特有の人気（ひとけ）があいまって心躍らせる。
入り口に『祇堂学園祭３日間ぶっ続けライブリレー』と書かれているここでのイベントはそのまま、学生バンドによるライブだ。
どうしても超能力ブースに対して見劣りしてしまうこういった普通のイベントだけど、音弦変調（ボイスチェンジャー）による制御が行われている分音は通常より比べ物にならないぐらい良い・・・らしい。
しかしまぁ、そんな事情は興味のない僕にってはイマイチどうすごいのかなど分からないんだよね。
持ち歩く音楽プレイヤーにはネットで違法ダウンロードしたモノばかりで、元より音質はそれほどよろしくないし。
そんな僕がこのイベントを見にきているのにはもちろん別の理由がある。
音楽自体への興味の有無は関係なく、問題はこの時間、ここにいることであって・・・、
「おっ、次みたいだ」
隣のクシロが呟く。
アナウンスされるとあるバンドの名前を確かに確認した。
紹介されてステージに入ってきたのは見知らぬ男女数名と、それから聡一君。
そう、彼のバンドなのだ。
それを聞いて、じゃあ見に行こうという流れでこうなって、今に至る。
人はこの行為を冷やかしと呼ぶ。

『不思議の国』の予約時間までの暇つぶしとも言う。
ステージではそれぞれが自分の楽器を設置を終えていた。
シン・・・と一瞬の静寂と楽器を調節する幾つかの音。
それが一通り終わって、ついに演奏が始まる。
――――♪、♪♪、♪～♪♪
「――――ａ――ａ―Ｉｄｅｓｐａｉｒｅｄ　ｏｆ　ｔｈｉｓ　ｗｏｒｌｄ――――」
『包帯少女の鎮魂歌（レクイエム）』。
同名タイトルのネットゲームのＢＧＭでありＯＰテーマ曲。今秋からアニメ化決定。
うん。
まぁ分かっていたことだけど。
「やっぱりアニソン関係か・・・」
好きだけどね、この曲。
その後も最近のアニメソングばかりを演奏し続ける彼ら『Ｔｕｒｎ　Ｔｏ　Ｂａｙ』。訳して『開き直り』のメンバー達。

・・・・学園祭2日目が始まった。

／

蝉の声が絶えてしばらく、蒸し暑さが一気に抜けて肌寒さが吹き抜ける季節の到来が近づいてきた１０月。
己が名の如く真っ青な空を見上げて、朝空風々は溜まっていた息を吐いた。
青いパーカー、そのポケットに両手を突っ込んで、所在なさげにあちらこちら視線を彷徨わせる。
元より目的のない徘徊なのだ。
中学中退後、日陰者である彼は普段幾つかの隠れ家に転住しつつ篭りっきりのことが多い。

ネットに上がる情報や仲間とのやり取りにかかりきりで外に出ることはほとんどない生活を送っているのだ。

しかし今日は学園祭。

警備の目が強化されども拡散され、なおかつ人脈を広げるチャンスである。

こういう一般人を含め多くの人間が入り乱れる行事というのは彼にとっては気分転換のいい機会でもある。

凝り固まった身体と精神を解すように、できるだけ筋肉と心を弛緩させてリラックスさせる。

ぼうっと眠たげな眼をスライドさせては、リンゴ飴を買ったりたこせんを買ったりフラフラと本人なりに羽目を外していた。

だからだろうか。

何時もならすぐさま危険察知（レーダー）に引っかかるソレに気づかなかったのは。

「あ、ふーさんだ」

その、不意打ちにびくりと、身体を震わす。

聞き覚えのある、けれど慣れないその呼び方。

そんな呼び名を使うのはこの世で2人しかいないからだ。

1人は普段人畜無害な変人だが切れるとヤバイ、怖いではなくとにかくヤバイ、可愛い顔した鬼っ子。

もう1人は腐れ縁の暴力幼馴染、美人を台無しにする男勝りな女大将の妹。

「・・・だよな。あの鬼っ子はここらにはいないはずだし」

振り返れば、リボンで長髪を何度か括った女の子が自分を指差している。

「ふーさん、久しぶり」

よし、逃げよう。

暴君ならともかく、純粋無垢なその妹に合わせる顔を持ち合わせていない。

というより、姉ほどではないとはいえ、好き好んで関わりたくな

る人種じゃない。
反対側に走りだす。
しかし、
「あ、逃げるな！」
何故か、当然のように追ってくる。
どう考えても、再会を望まない拒絶の態度を取っているはずなのだが、そういった相手の事情を軽く無視するところが、姉に似ていると言えなくもない。
何にしても風々にとっては迷惑な話である。
「あーくそっ、何であれに出会うんだ！」

／

普通の中学生である飛騨真幸、つまり僕にとってＢ組は肩身の狭い場所である。
どう考えても場違いだ。
１人は希少な能力者で性転換者（セクシャルトランサー）で薄幸美少女（ヒロイン）。
１人は今日び主人公として必須科目となっている女装スキルを身につけたお金持ち。
１人はもったいない姉を持つ、もったいない姉ＬＯＶＥ美少女。
１人は腹のどす黒いモノを笑顔で隠す社長令嬢。そしてそのお付に副委員長。
１人は生地だろうが肌だろうが針を刺すことが密かな趣味の口調不定。
１人はこんにち割りと多い、アクティブ開き直り系オタク。
１人は日常に真っ赤な刺激（スパイス）を与えてくれる徘徊する凶器。その的と鞘。
１人は生活にピンクの爆弾（モザイク）を押し売りするエロ担当。
そして最後に、目立たなすぎるが、中学から金髪に染めてくるという考えてみれば不良の有名無実（エセやろう）。

その他、科、誉、僕。
決して、決して『1人は生活にピンクのモザイクを押し売りするエロ担当。その番』という表記は認めない。
クラスメートはやたらとその辺からかってくるのだが、それこその絵梨の思う壺だ。
気を緩めたら最後、更なる深みに嵌って、もっと状況が悪くなる。からかわれる材料をさらに増やすなんて愚の骨頂！
「あーあ〜」
・・・というのに、
「真幸・・・何よその呻き声は」
今日の自由行動、何故か絵梨と2人きり。
そりゃあ、別に予定があるわけでも約束があるわけでもないのだから、クラスの仲間や幼馴染と祭巡りをするのはおかしい話ではないけれど。
この状況、ただでさえそういう噂が流れている・・・流されている僕達では、デートをしているようではないか。
これも策略、か。
だとすれば僕はもう絵梨の罠にすっぽり嵌ってしまっていることになるわけで。
「あ〜あ〜ーーーーー！」
頭が痛い。
頭痛が！頭痛がっぁ！！
「変な葛藤してないでさっさといくよ、ほら」
手を引かれて連行される先には大抵うまい出店食の中でも群を抜いていると言われている香春高校のオープンカフェ。
雰囲気を壊さないようにちゃんとそれらしいテーブルを用意しているところが本格的だ。
しっかりと柵で区切られているので、オープンと言ってもテーブルの周りに混雑はなくゆったりとしている。
これで食べ物もうまいというのだがら、『昼食は香春のカフェが

定番』と言われるのも頷ける。
涼しいこの頃、美味しく飲めるようになってきたホットのカフェラテを2人分とホットドッグにフランクフルトを頼んで絵梨が取っていたテーブルに戻る。
彼氏の奢りという恐ろしい理由により全てこっち持ちである。
ホットドック３００円。フランクフルト１５０円。
むろんホットドックは絵梨のだ。少しは遠慮して欲しい・・・。
「あー俺何やってんだろう？」
「デートだよ」
「が――――！！」
「ちょっ、レディーに失礼な！？」
・・・今、幻聴が聞こえた気がする。
「レディー・・・？」
辺りを見渡すも淑女はいない。
「・・・それも失礼だよ」
「・・・あぁ、こんなだからモテないのか」
「貴様、目の前の可愛い女の子が見えないのかい？」
「可愛い女の子は見えない。エロ変態なら見える」
その台詞に、あろうことか絵梨は後を向いて人のいないことを確認しやがった。
何度かうんうんと頷く。
「それは思春期のエロ野郎にしか見えない類の妖精ね」
「だったらお前にも見えるよな！？はっきりと！くっきりと！」
「も？」
「・・・・・・」
うぉえあぁあ！
思いっきり失言だった。
駄目だ、話を逸らそう！
「だ、だいたい何つー会話だよ。エロエロエロ・・・て」
「真幸が悪いのよ」

「いや、お前にも罪あるよ？
そもそもお前が普通思春期男女がしない台詞を躊躇なく口走るから悪いんだ。
お陰で俺が変態扱いだぞ」
「そんなっ、私をこんな風にしたのは真幸なのにっ！」
大げさに身体を抱きしめる絵梨。そのあまりにもな白々しさに戦慄すら覚えてしまう。
「言ってる傍から・・・！
あー何時からだ？何時からこんな感じに・・・」
「幼馴染じゃない、それぐらい気づかないかなー？」
「気づいたらこうなってたよ。子供の頃はそうじゃなかったのは覚えてるけど・・・」
少なくても小学低学年の頃はまだまともだったはず。
「小5の夏からよ。キッカケは蒸し暑い夏のある夜・・・私は汗で張り付いた服を全部脱いでベッドに入ったわ・・・。そしたらたまた――――」
大急ぎで、テーブルに置いてあるホットドッグで絵梨の口を塞ぐ。
「ふがっ！ふあふぁあ、ああ！」
多分抗議の声だろう。
「うるせえ、そんな生々しい情報はいらねぇ。トラウマになる」
「えー、そういうトークが盛り上がる年頃じゃない？」
「最も遠のく年頃だと思うけどなぁ・・・というかそういうのは彼氏とやれ」
ぴくん、と何故か絵梨の眉が上がった。
口にまで持っていっていたホットドッグを紙皿に戻して、
「・・・はぁ・・・・・・」
深く溜め息を吐く。
今までの息つく間もないおふざけな雰囲気が一呼吸入れただけで、一変したような感覚だ。
「ふぅ・・・」

にやにやとした表情が無表情になった、気がした。
「ねぇ？」
とん、とほんの一瞬にずいっと顔が近づいてきて、驚きで身体が硬直する。
何がなんだか分からない。
「・・・真幸、どうして」
見据えてくる目が何かを訴えて、
台詞の続きを唇が紡いでいく。
「どうして分――――」

――ガシャン、ドシャッ、ズシャッ、カララ・・・

その言葉は遮られて、テーブルと共に珈琲と食べ物が床に転がった。
横を通り過ぎた誰かがぶつかったらしい。
「すまない！これ弁償代だ、悪いが急いでいるんで失礼！」
フードをかぶった怪しげな男が振り向きざまに、ポケットから取り出した２０枚綴りの金券を僕らに投げ渡してくる。
相当急いでいるようだった。
何をそんな・・・と疑問に思うよりも早く、その理由がやってくる。
「ふーさん！何で逃げる！？」
「楚々！何で追ってくるんだ！」
『１－Ｃ　みたらし団子　美味しいよ！』と書かれた旗を上段に構えて走ってくるもったいない妹。
旗に書かれた団子兄弟のイラストがミスマッチすぎる。
「久しぶりに話そう！ふーさん！」
「手に持った得物奴が何言ってやがる！」
「話を聞かない奴はとりあえず殴って黙らせろって姉様が！」
「あの暴君め！なんて教育を！！」

再び進行方向に向き直った追われている身らしき彼は、最後に、
「そこのカップル！キスの邪魔して悪かった！」
そう言って走り去っていく。
もちろん楚々絽もそれを追って行ってしまった。
こういうのを嵐が過ぎ去った様、と表現するのだろう。
僕が呆然としている間にテーブルを立て直していた絵梨は、何時の間にかいつもの表情に戻っていた。
「あはは、カップルだってさ。こうしてる内にどんどん誤解されちゃうねぇ・・・」

／

殊樹高校の体育館、体育館は体育館でも香春の体育館で見た玄関口とは、心持でか違って見える。
香春の方が異界の扉ならこっちは兎穴。
アリスは兎を追って穴に身を投じたけれど、僕達は受付のバニー嬢に案内されて中に入る。
顔立ちからするとたぶん女子高生。そんな際どい服を着て大丈夫なのだろうか？
イベント名をあやかった不思議の国の冒険を尊敬（リスペクト）しているのか侮蔑しているのか判断しかねる格好だ。
まぁ、僕とクシロだって随分ファンシーな衣装をしているけれども。
僕は黒なので全く違うけれども、薄色（むらさきっぽい）のクシロは不思議の国に迷い込む資格が十分あるだろう。
中に入ると体育館の中は入学式や卒業式のようにパイプ椅子が並べてあるのが見て取れた。
「こちらから順に座ってください」
言われたとおりに座って、入り口で貰ったパンフレットを開く。
パンフレットには簡単な注意事項や前年の経験談などが書かれて

いて、裏側には責任者の名前が表記されている。
パンフのマスコットらしい白兎が噴出して説明しているのを見て何故か安心してしまう自分。最近どこにでもいなっちーがいるからなぁ。
さて、殊樹高校名物『不思議の国』。
昔当校にいた特殊能力者、幻想現実（1.5）が始めて、卒業してからもこの行事のためだけに彼を召集してイベントを続けている。
同様の能力者はいても、彼ほど卓越した技能を持てた者はいないからというのがその理由だ。
このイベント自体は仮想現実（バーチャル・リアリティー）を超能力でやっていると表現できるけれど、大人数に同時に施行するという点で現実問題彼以外ではこなせない。
そもそも彼の幻想現実（1.5）は仮想現実（バーチャル・リアリティー）という無骨の名前が嫌だったという子供染みた理由でつけられたような名称ではない。
僕のデータバンクにもこの能力に関しては記述があるのだが、形骸変容（モルフォーゼ）と同じく情報封鎖されていてもおかしくはないぐらいヤバ目の能力なのだ。
曰く、幻想現実（1.5）の純粋な能力は異世界創生である。現実世界（1）とはズレた世界を創りだす超越能力。
いくら珍しい能力を扱っている殊樹高でもそう代わりがいるわけがない。
それが板川由（いたがわゆう）。
古の家系である板川の現当主。
所在地は当然不明で、ズレた世界でハーレムを作っているのだともっぱらの噂・・・と越嫁先輩の談。
つまり、倉光、カイナに続き数多いる変人シリーズに名を連ねることになるだろう類の人物だ。
「実力者になればなるほど変人度合いが高くなるんだよねぇ・・・」
「ん？何？」
「いや、独り言」

首を傾げるクシロに手をひらひら振る。
『えー、皆さん、お待たせしました。
予定人数の導引を確認できましたのでこれより不思議の国へとご案内します』
待ちに待ったアナウンスにざわめく入場者達。
かく言う僕達もその中の１・・・２人なわけで、心内はＳＰＳ薬を飲んだ時ぐらいの興奮がある。
形骸変容（メタモルフォーゼ）よりもこういう能力の方がよかったなぁと今でも思う。
『転寝（うたたね）した時と同じで力が抜けて手から滑り落ちる可能性がありますので、お持ちの鞄などは椅子の下に置いて、手には何も持ったない状態にしてください。
・・・・・さて、それでは皆さん、目を閉じて、リラックスして・・・・・・では、いーち、にーい、さーん・・・』
数えられる数字が増える毎に、アナウンスの声が遠のいていく。
まだ明るみのあった暗闇が寝起き、意識が薄れている時の海底に似た闇色を帯びる。
ふぅ・・・と息が唇を抜けていった途端、ぐらりと足元が崩れるのを感じた。
暗闇の中の自由落下（フリーフォール）だ。
限りない穴倉を延々落ちていく感覚。
不思議の国はその底にある。

／

本来の用途で使い切られることなく凶器にされた『１－Ｃ　みたらし団子　美味しいよ！』の旗は柄の部分も含めて粉々に切り刻まれ、楚々絽の能力応用（めくらまし）によって視界を失った風々が煉瓦をのた打ち回り、それに足を引っ掛けた楚々絽が同じく煉瓦に身体を叩き打ち付けられるという一連の流れ（コント）を終えたところで、ついに観念した風々と粘り勝ちした楚々絽は座れる喫茶店を探してテーブルについて

いた。
　ただでさえボロかったパーカーがさらに酷い状態になったのを気にしながら彼は運ばれてきた抹茶ケーキにフォークを入れる。
「あーくそ、乱暴なことしやがって。鈴からそんなところを学ぶなよ」
「姉様は間違ったことは言わないからな」
「あぁ、あぁあぁ、そうだとも、『暴力は言葉に勝る交渉術だ』・・・正しすぎて涙が出る。
　話し合いなんぞ価値観の違えた者同士では絶対不可能、分かり合えるわけがない。そこにあるのは拒絶。だからこそ宗教戦争は血戦になったんだからな。
　しかしまぁ、正しさで人は救えないということはアレだって分かってるだろうに」
　一口サイズに切った欠片を口に含んで舌で転がす。
　対する楚々絽はチーズケーキを指したフォークで豪快にパクついていた。
　とんでもない食べ方だと彼は呆れる。
「ははは、でも、そもそも”暴力”はあの人の代名詞だし。姉様は慕ってたからねぇ・・・ふーさんは違うのかい？」
「あの人、あの人あの人ねぇ・・・俺には色んな意味で強すぎたさ、あの輝きは。失明しかねないほどに」
「実際、顔面を殴られて失明しかけたことあったしね」
　けらけら笑う彼女。
　既にチーズケーキはなくなって、次のチョコレートケーキにフォークを突き刺している。
　味わって食えという台詞を飲み込んで、風々は失明しかけた件を含む彼女と共有する昔話を掘り起こす。
「あれはむしろ後頭部を打ち付けたのがヤバかったんだ」
「5階から投身させられたこともあったねぇ・・・」
「無傷だったのが奇跡だよな・・・。あとは沸騰したお湯かけられ

たり」
「調理中に怒らせるからだ」
「コップの底で撲殺されかけたり」
「あの人の相棒だから、あれ」
「セラミック製の特注コップなんて凶器にするなよな・・・。だいたいどう考えても嵩張るから携帯に向かない」
「マイカップにもなるって言ってたじゃないか」
「血のりのべったりついたコップで液体をすすれる図太い精神を持ってればの話だ、それは」
リアルにその時の記憶を思い出してしまい、なおかつ自分が今珈琲で満たされた紙コップを持っていることに気づいてしまった彼は無言でコップをテーブルの脇に追いやった。
そんな彼とは裏腹に彼女の方は懐かしむように、コップに口をつけてカプチーノをすすっている。
風々はげんなりとその様子を眺めて、こいつも図太かったなと記憶の中の彼女と現在の彼女とを照らし合わした。
「・・・あの人、どうしてるかな？」
「さぁ？」
「行方晦ましてから数年かぁ・・・感慨深いね」
「そうか？」
むしろ怪我が少なくなって健康的になったというのが彼の素直な意見である。
「冷たいな。散々お世話になったのに」
「そうだな、散々殺されかけたよな。あの人とお前の姉に」
「あぁ、そういえば、姉様が夜露死苦言っといてって。もちろん漢字の方の『夜露死苦』で」
「・・・・・ゴメン被る」
「はぁ・・・でもホントあの人どうしてるのか・・・」
「んー、まぁ、予想はできるだろ」
「あーまぁ・・・まぁねぇ。あの人のことだから・・・」

「頼みもしないのに勝手に首を突っ込んで・・・勝手にブチ切れて・・・」
「そうそう・・・で」
「「誰かをぶん殴ってる」」
声が揃って、片方は笑い、もう片方は溜め息を吐いた。

第４２話－　有触れ。－Ｃａｆｅｔｅｒｉａ－（後書き）

恋愛モノってよくわかんない～
恋って何？愛って何？
まぁ、とにかく『エキ日々。』初のソレらしい話でした。
恋愛と程遠いのが主人公だったからなぁ・・・。

楚々絽と風々の会話。
風々という名前は偽名ですが、幼馴染である楚々絽から『ふーさん』と呼ばれていることから分かるように下の名前は『ふ』から始まります。
怒るとヤバイ鬼っ子。
及び、あの人。
この小説によくある『実は前から出てました』キャラではありません。
そして今後も出てきません。
『次話遅れるかも』とか言った数日後に更新したりと有言実行とはほど遠かった作者ですが、コレだけは守ります。

あいつらは絶対出てこない！

せいぜい話の中に出てくる程度です、ええ。

さて、次回は『不思議の国』の話なんですが・・・
どうなるのかほとんど未定なので早い更新ができるかは分かりません。

では、次話にてまた会いましょう。

第４３話－　夢童話。－Ｉｎｃｏｈｅｒｅｎｔ－（前書き）

夢だから文章が支離滅裂でも大丈夫・・・
夢だから誤字があっても大丈夫・・・
大丈夫・・・だよね？

第４３話－　夢童話。－Ｉｎｃｏｈｅｒｅｎｔ－

いつしか忘れてしまう、幼き頃の他愛もない話。
思い出の神秘な絆の中に、
子供の日の夢がない交ぜになったあたりに、
その手でしまわれてしまった夢の欠片。
けれど、思いがけず、突然に、
ふと、浮かび上がる儚い気泡。
とうに萎れてしまった花冠を再びかぶる時がやってくる。

■

透いて見えるような翠がかった蒼の海なんていうのは実際見たことがなかったけれど、沖縄に足を運んだくせに水族館にすらいけなかったけれど、想像ぐらいはできるもので。
目の前に広がるのは、そんな海だった。
ざざぁ・・・と波が伸びたり縮んだりする様を、気づいたらぼぅっと眺めていた。
白い砂浜を少し掬ってみると、微生物の死骸である星砂が見て取れる。
手に伝わる感覚は本物だ。
思わず打ち寄せる波に足を入れて、その冷たくも心地よい感触を確かめる。
それと同時に、何時の間にか裸足になっていることにも気づいた。
どころか改めて自分の成りを見てみると、喫茶店の衣装ではなく赤いワンピに変わっている。
・・・と、そこでいきなりの爆発。
轟音が轟いた方に目をやると、沖にさっきは見えなかった船が黒煙を上げていた。

赤や茶色のその船はどうも煉瓦造りのようで、そんな船、現実にはありえない。
「本当に夢の中だ・・・」
沈没を始める船から二足歩行の豚が次から次へと海へと飛び込んでいく。
が、それを許さないのは船の周りを旋回している戦闘機だ。
海へと逃げる哀れな豚を蜂の巣に、空に逃げる羽豚にも銃弾を。
あっという間にせっかくの海が血で濁った。
よく見ると、水中からも泳ぐ豚を引きずり込む影までである。
ウミイグアナかと思いきや、それは海中を縦横無尽に泳ぎ回る狼だった。
次々に海の中へと引き込まれては泡と赤い液体を大海原に滲ませる豚、そして襲う狼。
・・・・・自分の頭が心配になってきた。
ただただ浜辺に突っ立てそんなことを考えていたら、命辛々生き延びたらしい一匹の豚が波に打ち上げられる。
「ひぶっ、うぶぅ！はぁはぁはぁあ！」
かなりお腹の豊かな豚は僕の存在を認めて、
「おいお前！見ていないでワシを助けんか！」
随分偉そうな口をきいてくれたので、
「ぶごぉおおおっ！」
笑顔と蹴りを返してやった。
綺麗に放物線を描いて、デブ豚は海へと逆戻り。
その内海の中に引きずられることだろう。
さぁーて、ここにいても仕方ないし移動しようか。
踵を返した先にあるのは蒼の海、白の浜辺と対照的な緑と碧という色合いの陸（おか）が広がっている。

＃

後を向けば水平線、前を歩けば地平線。
それが何時の間にかうっそうと茂るジャングルになっていた。
振り向けば海が見えてもおかしくないのに、そこに存在するのは雨林だけ。
「あれ？」
何度見ても四方八方草木の壁が立ちはだかる。
ついでに上を見るも空の青は欠片も見えず、蔦や葉がアーチのように絡まって光を遮っていた。
「迷った」
いや、迷うのが目的と言えば目的なんだけども。
しかし、これは面白くない迷い方だ。
何せ何も起こらないし、何もな・・・・・何もない。
何か、視界を得体も知れないモノが横切った・・・けど、何もないことにしておこう。
あれはアレだ。関わったらいけないタイプの人物だ。
が、踵を返して立ち去ろうとするも、
「おい」
と声をかけられた。
よし、無視しよう。
「おいこら」
大体何なんだろうこの夢は。
思い返してみてもまともなのが出ていない。
「無視するんじゃない！」
羽があったりなかったりする豚に海を泳ぐ狼、それに加えてこれかぁ・・・。
「無視するなぁあああ！」
はぁ、と溜め息と共に振り返る。
そこに立っているのは自分、織神葉月。
あぁいや、今の僕より少々幼いところから見るに、まだ織神でも『折り紙の８月』でもなかった頃の自分だろう。

けれど、だとするなら1つ矛盾点がある。
目の前の自分は女の子。あの頃、僕は男だったのだから、これはありえない。
あるはずもない過去の姿をさも当然のように存在させる。それも夢の性質か。
しかしまぁ、問題は他にあるのだ。
自分と対面するというのはそれはそれで嫌なのだけど、そう、もっと問題視すべきなのは――――
彼女が素っ裸の上に何故かニーソだけを穿いているということだ。
童話の豚に狼に続いてこれとは・・・・・聡一君に借りた漫画がいけなかったか。
というか、本の影響を受けすぎだよね、自分。
「ほら君、そこのキノコに座りな」
得体の知れない自分の言うことを聞くのも癪だけども、そうしなければ次に進めない流れのような気がする。
こんな閉鎖的な空間に閉じ込められたままというのは勘弁願いたいので、さっき見渡した時にはなかったキノコテーブルの一席に腰を下ろした。
「さて、さてさて、さてさてさてさて――――談話といこうよ、私」

「つまり、とどのつまり、つまるところ、自人称っていうのは、自分がどういうスタンスを取るかっていう決意表明だよな。
私私(わたわたくし)僕僕朕俺俺様、ウチに我。
英語じゃ『I』の1つで済まされる『自分を指す言葉』がしかし日本語だと幾らでも、出てくる。このバリエーションの多さにはやっぱり意味があるんだろうよ」
「それはつまり、女性的である『私』を使っている君が、女体を曝け出した露出狂であるようにかな？」
「くくく、どっちつかずの『僕』を使う君が、男としても女として

も中途半端なロリータであるようにだよ」
「自分を貶して楽しいの、僕？」
「自分を貶して楽しいか、私？」
お互い身の削り合いをしながら、何処からともなく現れたティーカップに口をつける。
お茶請けに置いてあるのはシンプルなバターとチョコのクッキーで大変美味しいのだけど、残念ながら飲み物とあまり合っていない。だって、カップの中は赤ワインなんだもの。
せめてグラスで出てこればいいものを、お茶会なのは形だけ。中身はアルコールをあおりながら相手の悪口を言い合っているという優雅さの欠片もない状況だ。
「ねぇねぇねぇ、私」
ふかしていた煙管から口を離し、紫煙を思い切りこっちに吹きかけて自分が言う。
「形骸変容（メタモルフォーゼ）という反則技を持つ、自分の意思で姿形を幾らでも変えられる私よ。
何で君は自分の身体を弄らない？」
「・・・別に必要もないでしょ。変身願望なんて持ってないんだから」
「そうか、そうかな、そうなのかな？必要だと思うね。老化すら忘れたその身体だと置いてきぼり食うぞ」
「・・・・・だろうね。８０年もすればそうなるさ。けど、そもそもそんな長生きはできない」
「投げやりだな、私。いや、現実を見てるのか夢を見ているのか・・・ふん、どっちにしろつまらん。
しかし、そうでなくたって君はロリータと呼ばれることは嫌いじゃなかったか？年頃の身体に調整ぐらいすればいいのに」
それを、まさか自分よりも幼い自分に言われるとはなんて屈辱的話だろうか。
「面倒くさいんだよ。それに今更変えるっていうのもおかしいでし

ょ？理由がない」
「ふぅん？ふぅーん？うぅん、いやどうかな、それは」
僕の返答にニヤニヤと嫌らしく口角を吊り上げる私。
「理由がないんじゃなくて、理由があるから、変わらないんじゃないのか？ねぇ、僕ちゃん」
「・・・・・・？」
「おや、意識してないのか？はっ、深層意識がそうさせてるのかね。まぁなんにしても、釧君にべったりな君のことだ、意識してにせよせずにせよ、理由としてはそれしかない。
絵梨が言っていただろう？彼は――――」
と、彼女が要らぬことを口にする前に、その首を刎ね落とす。
ゴロゴロと、首と共に切断されて短くなったショートヘアの生首はキノコのテーブルを転がる。
それがテーブルの淵から転げ落ちる前に彼女は自分の頭部を持ち上げた。
首を切ったのに切断面がなく、当然血も噴出さず、そして死なない。
「く、くっくっくっ」
そのままでは勝手に転がってしまう首を、あろう事かティーカップに乗せることで固定して彼女はくつくつと笑う。
シュールを通り越して自分の顔ながら酷く気持ち悪い。
「さて、ま。楽しいお茶会はこれぐらいにしておこうか」
「楽しい要素がどこにあったんだか。君、頭大丈夫？」
「君の頭が大丈夫ならな」
「「・・・・・・」」
お互い、自分の脳が正常とは思っていないため共に沈黙。
どっちが貶してもダメージを受けるのは自分。何て不毛な言い合いだろうか。
「まぁいいさ。さて私。そろそろ夢のまた夢に戻りな」
無茶を言う。

「戻り方が分からないんだけど？」
　すると彼女は首が離れたにも関わらず手にしていた煙管でテーブルの端を指した。
「キノコの右端を食べれば大きく、左端を食べれば小さくなる。でかくなれば密林からは抜け出せるだろうさ」
「ふむ・・・・・・」
　さて・・・で、その言葉はどこまで信じれるのだろうか？
　僕が彼女なら逆に教える。
　そして彼女は僕なのだ。
　けど、もしかしたらその裏をかいている可能性もあるわけで。
　うーん、どっちだ。どっちが当たりだろう。
　とにかく彼女は信用できない。
「今、失礼なこと考えてたろ」
「その発言も失礼だよ」
　・・・考えても仕方ない。
　裏の裏をかいているとみて、そのまま右端を千切る。
　シイタケのようなあまり好きではない香りをするその生キノコを口に放り込んだ。
　シット。
　やっぱり逆じゃないか。
　どんどん視線の高さが低くなっていくのを感じながら首の乗ったティーカップを持ち上げている自分を睨みつける。
　酷く小さくなったところで彼女は僕を摘み上げて今までワインの入っていたボトルに詰め込んだ。
「いやいやいや！待った！」
「では、お大事に」
　容赦なく投げ飛ばされる。

＃

気づけば、草原に仰向けになっていた。
何時瓶から出たのかとか大きさが戻ったのかとかそんな思考は無駄なのだろう。
次はどうしよう？
そんなことを考えていたら、草を踏みしめる音が耳に入る。
顔を向けると、軍服を着た豚が歩いてきていた。
真面目そうな顔をしているなぁ、と適当な感想を抱きつつ上半身を起こす。
「こんなところに居ましたか」
「はぁ・・・？」
どうやら僕が目的だったらしい軍豚が手を差し伸べてくる。
善意を受け取って立ち上がったところで、
「さぁ行きましょう、赤ずきんさん」
彼が何やら聞き逃せない台詞を口走った。
・・・・・はて？
誰だろうね、それは。
と思いつつも、念のため、本当に念のために自分の服装を確認すると、やっぱり赤いワンピース。
いや、赤ずきんのチャームポイントはずきんであってワンピースが赤だったわけじゃない。
と、頭を確認すれば、手触りで自分がずきんらしきものをかぶっていることが判明。
多分色は赤なんだろうなぁ。
「行きましょう」
豚足に腕を掴まれ成すすべなく連行と相成った。

連れてこられたのは丘の上にある軍事施設。入る時に目に入った施設名は『山羊の家』。たぶん突っ込んだら負けだ。
どうもこの豚は僕を仲間として認識しているみたいなんだけども、

こっちは全く状況が分かっていない。
というのに、何故か軍事会議とやらにまで参加させられてしまった。
というわけで・・・、今僕の視界にあるのは円卓と軍の指揮官達。
つまり、豚２匹に山羊１１匹。
ちなみに、豚は本来３匹だったらしく、空席の机の上に豚の遺影が。
普段ならありえない豚の顔を見分けるというスキルが今は身についているらしい僕の脳がアレは僕が海に蹴り戻した豚だと教えてくれる。
「あの馬鹿がいないのは寂しいな・・・」
「兄貴に僕の『煉瓦造』を貸し出さなければ良かったんです・・・」
ごめんなさい。あなた方の次男にトドメを刺したのは僕です。
「さて、皆様・・・」
重い空気の中口を開いたのは細眼鏡をかけた利口そうな山羊。
「『煉瓦造』を沈められた今、狼どもが勢いに任せて防御から転じて攻め入ってくる可能性も高い。
ここは先手を打ちたいというが私の意見です」
「賛成だ」
「だがどうする？あの戦艦はこっちの主戦力だったんだぞ。俺の藁舟や馬鹿の残して逝った木船は役に立たんだろ」
と長男豚。
「戦力不足は向こうも同じ。問題なのは連中の砦が海の底にあるということでしょう」
「要は潜水艦か。馬鹿の木船は水中に潜れはするが強度がなぁ」
「向こうに気づかれずに施設に侵入できればいいのですが・・・」
むぅ・・・と唸る動物達。真剣に策を考えているのだろう。
藁舟や木船で戦闘機相手にケンカを売ろうという時点でふざけているようにしか思えないけど。
「・・・何か方法はないでしょうか、赤ずきん殿？」

眼鏡山羊に話を振られてしまった。
そもそも僕は赤ずきんじゃないし。
せっかく空気になろうとじっとしていたのに・・・。
豚と山羊の視線が僕に集中する。
「大変です！！」
何て誤魔化そうかと考えを巡らしていると、勢いよく扉が開け放たれた。
見れば若い黒山羊が荒い息をしながらドアにもたれかかっている。
「どうした！？」
「て、敵襲！狼に侵入されました！」
「「なんだと！！？」」
「連絡を受けていない部隊の到着がありまして、扉の隙間から確認したのですが、白い足に安心してドアを開けたら！連中小麦粉を！」
・・・何で、何でそれに引っかかる。
「その手法は一度やられたことがあるだろう！手紙で知らせたはずだ！」
「すみませんあれは間違って食べてしまいまして！」
「馬鹿者ぉ！！」
駄目だこの連中。
ここにいたらいらぬ被害を被りかねない。
さっさと逃げよう。

「ぶひんっ！？」
廊下を塞ぐ皮下脂肪たっぷりの豚兵を掌底で沈めて道を開けてもらう。
「べふっ」
避けるのが面倒なのでその踏み心地のいい腹を踏み潰して先に進むも、この施設嫌に入り組んでいる。
名称が『山羊の家』のくせに生意気な。

「赤ずきん！大人しく投こ――――」
台詞を言い終わる前に勢い任せに狼を殴り飛ばす。話を聞くのが面倒くさい。
が、ごろんと嫌な音が耳に届いた。
お約束のようにピンの抜けた手榴弾が彼の手から転がってくる。
「っ」
咄嗟に廊下から横の部屋に転がり込む。
――ガッ
誇張表現が過ぎる映画のようにありえない爆発が起きた。
「けほっ、こほっ！」
遮蔽物があれば大丈夫とたかを括っていたけども、その壁ごと吹っ飛ばされるとは。
そして何時の間にか機関銃を持った狼に囲まれている。
どうやってその手で引き金を引くのか不思議で仕方ない。
「投降し――――」
「食らえ！」
すかさず足払いで数匹を転倒させ、うまく自分に方へと倒れてきた狼から機関銃を掠め取る。
ろくに狙いを定めずに３６０。回転しながら連射すると、胸に着けていた手榴弾に着弾したらしくまたもや爆発が起こった。
今回は超近距離の無障壁での被爆だ。
身体の節々痛いのだけども、何とか生きているらしい。四肢もちゃんとついている。
あの爆発でこの被害の少なさは異常だろう。
周りにいた狼達は死亡してるというのに・・・。
まぁ夢だしと無理やり納得して起き上がる。
「ふはははははははっ！」
そこで聞き覚えのある声が響いた。
した方へと身体ごと向けると、爆発でか壁が崩れた隣の室内に豚兄弟がいる。

哄笑しているのは長男の方だ。
その二匹を追い詰める狼部隊に、
「ここまでだ貴様ら！」
長男豚が言う。
「このスイッチを押せば武器庫中の火薬が爆発する！貴様らごと施設を吹っ飛ばしてやらぁ！」
「兄貴！馬鹿はやめるんだ！僕らまで一緒に吹っ飛ぶ！」
テンパっている兄とそれを止めようと必死な弟から視線を部屋事態に移すと、なるほど、ソレっぽい武器が色々と置いてある。
・・・・・・などと様子を窺っている場合じゃなく。何て安っぽい展開だとか批評してる場合でもなく。
それ、爆発したら間違いなく僕も巻き込まれるよね。
「逃げ――――っ」
れるわけもなく、３度目の爆発が起きた。

大爆発。
爆風に吹き飛ばされて崩れ落ちる施設から放り出される。
離れていく緑の丘、爆炎に包まれる『山羊の家』。
「痛っ！」
望まない空中散策はいきなりの終わりを迎えた。
「うわっ、うっぷ」
勢いを殺せずに何度もバウンドし、
「あぐっ」
水音と水しぶきを上げながらやっと止まる。
仰向けに転がって、仰いだ視界で空の青さを知った。
ともかく外には出れたらしい。
起き上がる気もせず、荒い息をそのまま整える。
多分ここはあの海辺だ。
身体の半分ほどに海水を浸しながら大きく深呼吸。

さっきまでの怒涛の展開に置いてきぼりを食った脳みそを冷やそう。

横目で見ると地と足が離れる前にいた陸が見えた。

建物はもうない。狼もいなければ豚も山羊もいない。

まぁ、こうやってあの場所から離された時点で、消滅してしまってるとは思っていたけど。

夢の中では意識を逸らしたモノは尽く消滅するもので、だから迷いもするのだ。

さて、どうしよう。

次は何があるのだろうか？あるいはそろそろ目覚めの時間だろうか？

打ち寄せる波の感触が肌を通じてよく分かる。

こう静かな場所で時間を気にせずにぼぅっとできる機会というのはあまり今までなかった気がする。

濡れることすら気にかける必要がないというのはそれこそ夢の美点。

・・・・・・・・・

体育館の裏、ステージに出入りする際の待機場所。
何時もは暗幕に遮られて仄暗いその狭い空間は今回ばかりは遮る布地を取り払って陽の光を誘い込んでいる。
教壇といった常時使うモノを一時的に除けておくことの多いその部屋に今は丸テーブルと椅子が持ち込まれており、そこに座するのはもちろん幻想現実(1.5)の能力者、板川由だ。
長髪を後で縛り、白衣に身を包む痩躯の男。
時折机上に用意したティーカップを味わいつつ、イベント1回1回の制限時間である1時間が経つのを待つ。
能力を使い続けることに集中力を削られるような柔な能力者ではない彼ではあるが、持ち場を離れては維持しにくいのだ。
そのためこのイベントの間は転寝をしつつ参加者の見ている夢を傍観している彼がいきなり起き上がった。
「どうしたの義父さん?」
それに驚いて、彼に連れ添ってきていた板川サラが尋ねる。
「きた!」
「・・・!」
その台詞に彼女も身体中の筋肉を強張らせた。
「ビンゴ。やはり興味を示したか――――夢の迷い子(アリス)」

・・・・・・・・・・・・

芯ま雑で、
い明
芯のない界
音のな世。
蒼透々
の砂そく光
水をを
は敷折
。の
さ
る
あ
る
い
白
詰
め
た延
地
と
れ
く
蒼
を
覆
う
屈
せ
砂

蒼い、芯の芯まで雑音のない透明な世界。
あるのは白い砂を敷き詰めた延々の砂地とそれを覆う蒼く光を屈折させる水。

ここは何処だろう。
ここは、僕の世界（ゆめ）では――――ない。
空は蒼いし海も蒼い。透けて見える白い砂も見覚えはなくもない。けれど、異質。
どこか、他質。
一見海にも見える水平線はけれど海ではなく、足元までしか深さのない延々と水に浸った世界（ゆめ）が続いている。
足元を見るとするりと黒い影が足の間を通り過ぎた。
真っ黒なお玉杓子。
常識的に考えればこの水は海水ではなく淡水だけれど、実際どうなのかはどうでもいいことだ。
ここにあるのは水と砂そして空だけ。
池らしく枯葉や泥もなければ海らしく海草や苔もない。
透き通りすぎたその水に食べる物があるわけがないのだから。
ちゃぷちゃぷと水音をさせながら歩を進めるも、四方八方ただ同じ景色が続くこの世界（ゆめ）に終わりがあるとは思えない。
なら、終わりはどうやってやってくるのか。
そう思った瞬間、ぞわりと体中が総毛立った。
「――――っ」
――――振り向けばそこにいるのは白色。ほとんど閉じた紅い瞳。
圧倒的に白で白の白。
ずるりと世界から零れたように現出した。

何だコレは。
この少女は何だ。

白い髪に白い服白い肌に、そして紅い眼。
その眼はとろんと目蓋を閉じて、まるで覚醒していないことが分かる。
「ぅ――――ぁ――ぅ―」
言葉がまるで意味を成していない。
「ｕａ―？ぁ・ａ・・ぁ」
何かを伝えようとしているようで、何も考えていないよう。
まるで理解できないその存在に、疑問が無意に口から出される。
「君は――――誰？」

「ぅ―っ――き――み―ｚぁ――――と」

彼女がそれに応えたのかどうか
も分からない言葉を
返した瞬間、
世界は
崩れ
去っ
た。

第４３話－　夢童話。－Ｉｎｃｏｈｅｒｅｎｔ－（後書き）

夢の話。
豚狼戦争の続編でした。
まさか続くとは・・・作者が一番驚いてます。

そして何かまた意味ありげなのが出ましたね。
まぁこの小説では何時ものこと何時ものこと・・・
ちゃんと回収するつもりはあるのでご安心ください。

それで、なのですが、
実は読者の皆様にご協力いただきたいことがありまして・・・
懲りずにアンケートを作成しました。
今後の展開がご期待に沿えるように参考にさせていただきたいので
是非ともご参加のほどよろしくお願いします。

第４４話ー　先輩談話。ー・・・ｔｏｏ！ー（前書き）

祝・５０話！
本来なら終わっててもおかしくない話数ですよ！くそぅ！！
一話一話水増ししてやってるからなわけですが、水増ししてるが故に更新が遅いんですよね『エキ日々。』は・・・。

第４４話ー　先輩談話。ー・・・ｔｏｏ！ー

夢心地、といっても半分ほど何やら不明なモノが混ざっていたけれど、いや・・・ほとんどが支離滅裂のオンパレードだったけれど、目が覚めた時、何故か赤面していたクシロにそのわけを問い詰めるも断固黙秘されて、何を見たのか教えてはくれなかった。

んー、何をみたのだろう？

自分の夢がアレな感じだったし、あそこまで口を閉ざされると逆に気になる。

まぁ、ともかく。

今、僕達は１‐Ｂの喫茶店に向かって歩いている。

今日の自由時間は終了し、午後からは喫茶シフトの仕事なのだ。

委員長に副委員長はほとんど見せの方に入り浸っていたりと一日目の段階でシフトなんてものはかなりぐちゃぐちゃになってしまっているので、そこまで律儀に守る必要はないんだけど。

まぁ役割は役割だ。あれはあれで楽しい作業だし。

仕事といえば今更ながらこういう時に裏方の仕事はないのだろうかとないのだろうかと思ってみたりもするものの、まぁ、元々監視が目的だったんだから今更それらしく雑用を押し付ける必要もないのだろう。

いや、一応あるのに智香さん辺りが遠慮して情報を止めてるのかもしれないけど、それならそれでありがたく日常を堪能させてもらうことにする。

ふむ。

・・・となるとやっぱり気になるのは・・・、

「結局何見たの？」

「黙秘権を発動する！」

むぅ・・・クシロはなかなか強情だ。

昼時を少し過ぎた午後2時頃。
来島越嫁は持ち場を後輩に預けて喧騒の中へと繰り出した。
大学から真っ直ぐ殊樹高へと足を向けて、彼は何の躊躇いもなく体育館へと裏口から侵入する。
開けた扉の先、舞台裏の空間にはけれど誰もいない。
何処からか持ち出されたテーブルやティーセットがあるだけで、形跡を残したまま人だけが消えている。
これを人は神隠しというんだろうかとそんなことを考えながら越嫁は携帯をプッシュした。
着信メロディーがすぐ近くで鳴り響き、耳が、それはテーブルの上から発せられていると訴えてくるが、机上には携帯らしきものはない。
彼はそれを確認すると再び部屋の外に出て扉を閉めた。
木製の何処にでもある、ノブと鍵とがついただけのシンプルなドア。
一呼吸置いてからもう一度開けると、今度こそそこには長髪を後で縛った男性と金髪の女の子がいた。
その彼はティーカップを持ち上げてみせる。携帯はもちろんテーブルの上だった。
2人の人物はもちろん板川由と板川サラであり、
「ようこそ1．5へ」
在って無いという矛盾を孕む曖昧な世界こそが彼の棲家だ。
「久しぶりだな、由」
促されて越嫁は空席につき、そこで、
「お前どうしたんだ、その腕・・・」
由の左腕が方の近くからごっそりとなくなっていることに気づく。
前回顔を合わせたのは1年ほど前だったが、その時には両腕はついていたし、話にもそんはことを聞いた覚えはない。

由はその当然とも言える問いに対してサラが注いだ紅茶を勧めて、彼が一息吐いたところで口を開いた。
「さっきやられた」
「――――ッ、アレか」
「期待通りだった。さすがいい餌だな”織神”は。さすがに次もとはいかないだろうが、手がかりは掴めた。
まぁ、感極まって手を出そうとした結果がこれ――――」
と、半分以上失われた左腕をぶらぶら振る。
「――――だけどな。自分の世界に拒まれた上、腕まで捻じ切られるとは恐ろしいね」
「大丈夫か？」
軽口で済まされないことが目に見えて分かる負傷に越嫁は呆れを多少含んだ声色で尋ねる。
「出血もなく骨も肉も血も一元からこうであったように≪・・・・・・・・・・・・≫癒合されてるからな。痛みすらない。それにこれぐらい直せるさ」
「はぁ・・・だとしても身体は大切に扱うようにね」
「了解した。・・・と、そうだ今回の件ありがとうな」
「ん？・・・あぁ、彼女をこっちに呼んだこと？まぁ、彼女に興味持ってたみたいだし」
「ああ、こっちも一応手は回してたんだけど、お陰で最終日には私も楽しめそうだ」
「うん？」
「あれ？知らない？
毎年恒例の後夜祭イベント、今年は私がやるんだよ」
あぁ、と納得したように越嫁は頷いた。
自分が彼女に『不思議の国』を勧めなくても後夜祭のイベントで”織神”を取り込めるようにはしていたらしい。
「手を回した、ね」
「ん。それと恩師の頼みだったし」

『恩師』という言葉を口にする際に苦笑いが含まれているのを越嫁は見逃さなかった。
「あー、あの人か」
苦笑いの意味は彼にもよく分かる。
「あの人だよ」
「あの人ね」
2人は当時から殊に与えられていた仕事部屋をゲーム機器で埋め尽くしていた容姿の変わらないある人物を思い浮かべて、しばらく思い思いに沈黙する。
数多ある思い出を引っ張り返せば返すほどいらない記憶が玩具のように散らかっていく。
その結果顔に表れるのはやっぱり苦笑いだ。
茶葉の香りを楽しんで、お茶請けのチーズクッキーを幾つか口に放り込んだところで会話を再開した。
「・・・由。で、どうだったんだ？アレは」
「うーん、これといって得たものはないんだよねぇ。ほとんど隔離されちゃってたからよく観察できなかったから。
課題は食いつくかどうかだったからそれでいいんだけどさ。
転寝してるようだったな。初めて私らで見た時より意識レベルは低い感じ」
「むぅ・・・。相変わらず雲を掴むような話には変わりないか」
「夢を、掴むような話だよ。
ともかくだ。後夜祭は期待してろよ、越嫁のお陰で私も気兼ねなく参加できるしな」

／

我が幼馴染、通称『歩き凶器』は今頃どうしているだろうか？
いや、まぁ一応は宣伝役という任を負っているわけで、そもそもそれはつまり単なる厄介払いなわけで、学園内を観て回っているの

は確かなのだけど、心配だ。
ぼけっとしているせいなのか無意識の内に危険行為をしてしまう彼女は、同じくして自分の身も危険に晒す傾向にあることを私は知っている。
海君には悪いけれど、他人を傷つけるのはともかくとして自分まで危険な目に会うようなことだけはないように願いたい。
ただでさえ彼女の身体は傷だらけで、これ以上に傷を増やすのは見るに耐えないのだ。
女の子なんだし、身体はできるだけ傷つけないようにさせてあげたい。
そう思っていつもは可能な限り目を離さないのだけど、昨日も今日もシフトの関係でどうしても空白の時間ができてしまう。
・・・大丈夫かなぁ、あの子。
「ねぇちゃん、注文頼む」
「あ、はい！」
ぼうっとしていた頭を現実に引き戻す声に慌てて返答、手を挙げているのはスキンヘッドのごっついあんちゃんだった。
おおぅ。交通ルールを厳守する暴走族みたいな人だ。
人の良さそうな顔が逆に怖い。
「珈琲のお代わりとカステラ2袋な」
「珈琲とベビーカステラを2つですね、承りました」
「・・・あと1つ確認したいんだが」
「はぁ・・・」
彼は注文をキッチンに伝えようとした私を留めて、別のテーブルで注文を取っている釧君を指した。
まさか紹介しろとか！？などと愉快すぎる予想が一瞬過ぎる。
そうであっても他人事。傍観する立場としてはその方が面白そうだと無責任なことを思いつつ、
「彼女がどうしましたか？」
できるだけそういった表情が出ないように努めて尋ねる。

けれど彼は何やら難しい顔をして額を指で何度か叩いた後にようやく、
「俺の知り合いに非常にそっくりでな。いや、人違いならいいんだ。でだ、少なくても俺が知る限りそいつは男だったんだが・・・・・・」
期待外れでかつ実に面倒なことをおっしゃった。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・少々お待ちを」
あちらもオーダーを取り終わったところで釧君に声をかける。
「ねぇ、あちらのスキンヘッドなお客さんが君のこと知ってるみたいなんだけど・・・」
「スキン・・・ヘッド・・・？」
その特徴に心当たりがあるのかびくりと身体を震わして、私を陰にして問題のお客様を確認する釧君いや釧ちゃん。
悔しいことにその仕草は可愛らしすぎる。
「・・・・・・！」
あんちゃんと目が合って咄嗟に顔を逸らした。
これまた実に小動物な感じがして、どうやればそんな自然にできるのかと問い詰めたくなるのだけど、それはともかく今のは知り合いだと言っているようなものだ。
「・・・・・知らない人だよ？」
「もう遅いわよ」
もちろんあんちゃんもそれに気づいているわけで、呆れ顔で彼を凝視していた。
逃げられないことを悟ったらしい釧君は、ごほん、と咳払いを１つ。
「・・・・・・・・・・・えー・・・久しぶりです達磨先輩今日はお日和もよく晴れていますし賑やかな祭（ハレ）の日でもありますし実に目出度いですよねええほんとそれはともかくとして言っておきます

がこの格好は好き好んでやっているというわけでなく無理やり面白がって着せられたものであって俺にそういう趣味があるというわけではないんですよ誤解しないでください・・・」

／

薄色の洋風着物っぽい何かしらに、薄っすらと口紅、さらに私に気づいての人影に隠れる動作。

何時ぞや、体育祭の後少年らに自分の店にやってこられた屈辱を晴らすべく、1-Bがやっているというコスプレ喫茶を火男こと邦明（くにあき）との待ち合わせ場所に指定したのだけども・・・、

「・・・くっくくっくぅ！」

駄目だ、笑いを堪えられない。

「くはっ、ぁーははははっ、ひぃひひひひひひ！」

思わず腹を抱えて笑ってしまう。力が抜けて膝が折れた。

「ひぃ・・・ひぃ・・・ふっ、くっ、あははははっはははっはは・・・！」

笑いすぎて腹が痛い、そして息ができない。

昔間違って自分の周りを火で囲んでしまった時以来の息苦しさだ。

「笑いすぎですよ、兎傘さん・・・」

「だってよ・・・！嵌りすぎだろその格好！」

一通り笑い終わって、息切れからも回復して改めて邦明と対面した。

市販のアイスティーを含んで乾いた喉を潤す。

「久しぶりだなぁ火男」

「今は火達磨だぜ、火兎さん」

自慢げに言われるが、誇っていいネーミングかどうか私としては図りかねる。

「・・・・・・頭からか？」
「ああ、あの可愛子ちゃんの命名だ」
邦明が指した先にはあの少年が。
「くくっ、わ、私を・・・ひひっ、殺す気か・・・！」
「こんな方法で死んでくれるなら何て救いのある話だろうな」
・・・何て失礼な話だろうよ。
半ば本気で言ってるのが腹立たしい。
「で、それはともかく。話って何だよ邦明」
こうやって実際顔を合わせることは少な・・・くもないか。
考えてみれば頻繁に人の店にやってくれやがるなこいつは。
「例の放火魔の件・・・状況がよろしくない」
「あいつのことか」
「共同訓練以降どうもエスカレートしてるのもあって監視はしてたんだが、先日完全に見失った」
「あん？何だそれ？お前らしくもない」
「らしくもない、じゃねぇよ。俺の情報網外で行動してるってそれだけのことだ」
「白と灰色（グレー）　ゾーンを網羅した発火能力（パイロキネシス）仲間のネットワーク外・・・ね」
「だけじゃねぇ、横繋がりの発電能力（エレクトロキネシス）ネットなんかともやり取りしてるが掴めない。
そこが問題だな」
なるほど、つまりそれは、
「黒色（ブラック）か。何処ぞの裏組織にでもスカウトされた、か」
「だとしても真っ当な放火魔をそういった連中が相手にするかってのが引っかかる・・・」
その通りだった。
違法行為だとしても趣味であって主張あっての行為ではないアレをわざわざ身内に引き込む理由が分からない。
発火能力者（パイロキネシス）にしてももっとレベルの高い、なおかつ扱いやすい能

力者はいるはずだ。
「確かにな。何にしろキナ臭い」
人材派遣でですら足がつくのを怖れるほど慎重な計画でもあるのか、あいつでなければならないわけでもあるのか。
「そういうのは俺より鮮香さんの領分だろ？」
「と言っても私だって真っ当な人間だよ。知らなくもないけど詳しいわけじゃない。
ま、探ってはみるが期待はするな。あと無茶もな」
「・・・了ー解」

／

砂糖の甘い香りが充満するカーテンの裏側、キッチンスペース。
フロアとは打って変わって忙しく、絶えず手を動かしている男達としぃっちに私。
待っていた女の子にベビーカステラの袋を手渡して再び内部に目を向けると、たかっちはずっとカステラの世話をし続けているし、そいっちはワッフル機をフル稼働させている。
くしっちがフロアに行っている分の皺寄せだ。
もっともそれで得られた私達の精神的利潤に比べれば大した負担ではない。いや、全く負担ではない。むしろプラスだありがとう。
そもそもこういう作業だって祭の醍醐味だろう。
私もワッフルのトッピング係に戻ってしぃっちの横で作業を再開する。
既にほとんどなくなってしまっているチョコソースや生クリームの補充も隙を見てやっておかなければ。
しぃっちの作っているカステラの種にしてもそろそろ材料自体がなくなりそうだし。・・・今日中もてばいいんだけど。
「フロアが騒がしいわね」
「そうねー、またはづちゃんの知り合いかな」

あるいはまた偽いなっちーか。
「いや、釧君の知り合いみたいよ?」
「へぇ?」
言われてカーテンの隙間から覗いてみると、くしっちを片手で指差しながら腹を抱えている女先輩。げらげら笑ってる。
「くしっちもよりにもよってこんな時に出会っちゃうなんて運ないわねー」
まぁ、もっとも運がないのは、出会った知人が人目を憚らずに大笑いする人物だったことだけど。
「そういう人に縁があるのよ」
「はづちゃんもそうっちゃあそうだもんね。変人引力」
「魅力と言いなさいよ・・・」
「今の彼は魅力的ー」
冗談が1割残り9割は本気だ。
それにはしぃっちも同意らしく、くすくすと笑う。
「よねぇ、男の子にモテモテじゃないかしら?
あれなら連絡先でも回せばラブレターを集められるわよ。それを本人に見せてあげるのも一興よね」
「うわぁ・・・」
えげつない。それを笑顔で言いますか。
いやまぁ、見てみたいけど。どんな顔するのか興味がかなりある。
そういうことを考えてみると本当に、
「あー、フロアは楽しそうねー」
「行ってくる?それともいっそのこと店から出たら?ずっと篭りっきりだったからシフト分はもう働いてるでしょう?」
「いい。出るのもめんどーだから」
接客も苦手だし、カーテンの隙間から時々覗くぐらいがちょうどいい。
「そう?それなら・・・」
しぃっちは作った焼きリンゴを容器に移す手を止めた。

私もだけれど彼女もずっと喫茶店の作業をしているから、気分転換にでも行くのかと思いきや、カーテン越しにフロアのあゆっちを呼ぶ。

「香魚子、九鈴のところに行ってらっしゃい」

「え？でも・・・」

「いいのいいの、私達は好きでここにいるんだし、九鈴を1人にする方が心配よ。ね？」

「う、うん・・・ごめんね」

シフト外の時はもちろんくすっちについて回っているあゆっちは決められた分をサボるのに罪悪感を感じているらしい。

そんなこと気にしないでもいいのに。

そぞっちを見てみればいい。堂々と今日の午前シフトをサボタージュだ。

「あゆっち行ってきな」

私も彼女の背中を押してやる。

くすっちを1人にしておくのに不安はあるし、仕方ないとはいえ彼女を除け者にして、罪悪感があるのはこっちの方だ。

「ありがと」

言うやいなやあゆっちは駆け足で外へ出て行った。

そこまで心配なのかとその保護使命感に半ば感心しながらその背中を見送る。

いい幼馴染だなぁとそんな感想を持って作業を再開しようとすると、

「・・・うまく、やればいいんだけどね」

彼女の背中が消えた頃にしぃっちがポツリと呟いた。

ぴたりと、私だけでなくキッチン3人の動作が止まる。

「・・・・・うん？」

うまく、やる・・・？

・・・・・・・・・・？

・・・・・・・・・・！

「・・・なるほど」
「あっ」
「”も”ってそういうことかぁ」

第４４話ー　先輩談話。ー・・・ｔｏｏ！ー（後書き）

学園祭２日目終了しました。
３日目、何話になるかわかりませんが、長くなりそうです。
それで学園祭編終了、その後今回張った伏線やらを回収し出す予定。
『エキ日々。』だけでみると１週間以上開けての更新ですが、作者全体で見ると最近執筆活動はペースアップしてます。
これからもがんばるぞー。
これからもよろしくお願いしますー。

第４５話－　思春。－Ａｄｏｌｅｓｃｅｎｃｅ－（前書き）

お久しぶりです。投稿が遅れてすみません。

今回は…ちょいとエロいよ！

→と心構えをして読めばエロくないはず。

そんなクオリティー。

第４５話－　思春。－Ａｄｏｌｅｓｃｅｎｃｅ－

体育祭で１度全壊・・・いや熔解したことによって建て替えられて築１年未満という驚異の校舎であるのだから元々綺麗な教室だったけれど、１ヶ月近く色々とアイディアを出し合ったかいがあってか店内はかなり整っている。

白を基調に黒いアクセントがデザイン性を考えつつ配置されていて、普段勉学に使用されているとは思えない本格的な”店”という雰囲気が流れている。

出店はもとより学生の学園祭だ。内装にここまで気を使う方が珍しく、そのお陰で３日目も『Ｅｌｙｓｉｏｎ』は大繁盛だ。

「いや、自画自賛してどうするのさ」

などと、我がクラスの店にお客として足を運んで自賛していると、黒いウェイトレスにそんな呆れの台詞をかけられた。

「いいじゃん。私の名前は誉なのよ。誉めるのが仕事なの。

あ、注文は３種ベリーソースワッフルで」

「自分の店を冷やかすほど暇なら仕事手伝ってよ」

「残念なことにそれは私の仕事には入ってないのよ」

「衣装がそのままだから店員がサボって貴重なテーブル１つを占拠してるようにしか見えないんだよね。

誉められたことじゃないと思うけど？」

むぅ・・・。揚げ足取られた。

「それよりも」

「話題変えようとしてる？」

「そーれーよーりーもー」

「・・・はいはい」

「はづちゃん、まだなの？」

「何が？」

「自慰。あるいは生理」

「・・・・・・・・・・・」
返ってきたのは沈黙と形容しがたい表情。無表情っぽいけど・・・予期せぬ攻撃にフリーズしたようにも見えなくは？
「・・・まだだよ。というか自慰の方は聞いた記憶があるけど生理は初耳」
「この前視たのよ、曇り夢で」
「本当に厄介な能力だよね、予知能力。
ホンットに、ロクな予知能力者にあった記憶がないんだけど」
「喜んではづちゃん。自慰はともかく生理はもうすぐよ！」
「何をどう喜べば分からないし、何でそんなテンションが高いのかはもっと分からない・・・」
「赤飯炊かなくっちゃっ！」
「ノリが絵梨ちゃんになってるよね？乗り移られでもした？」
「恐ろしく失礼な！初潮は女の子にとって一大事なの！」
「そう言われてもねぇ・・・」
「いい？生理っていうのはね――――」
「生理。医学用語は月経。で、月経周期に伴っての排卵時において受精がなかった場合に子宮内膜が血液と共に剥がれ落ちる現象。何で血液が出るかというと子宮内膜っていうのが毛細血管や分泌腺で作られているんだけど、剥がれ落ちる時に出る酵素の働きで血液の凝固因子が壊れちゃうから。ちなみに凝固因子っていえばフィブリノーゲンとかフィブリンとかプロトロンビン、トロンビン・・・カルシウムイオンもそうだよね。そうそう血液の成分に含まれるご存知血を赤色に見せているヘモグロビンだけどこれは鉄を含んだタンパク質だからで・・・虫なんかはオレンジっぽいでしょ？エイリアンとか魔物とか色の違う血で描写することがあるけど、普通に地球に棲む生き物ですら血の色は違うんだよ。銅を含むヘモシアニンを持つカニやエビは血が青みがかってるし中には緑色の血液を持つ生物だって存在する。面白いよね、赤黄青緑ってフルーツみたいじゃない？で、お客様、ご注文は3種ベリーソースのワッフルでよろし

かったでしょうか？」
　３種ベリー・・・ストロベリー、ラズベリー、ブルーベリー。赤紅青色。
「ギャオス！待ってはづちゃん！今の話聞いて食べれる図太い精神は持ち合わせてないから！
　カムバァークッ！キャンセル！今の注文キャンセルゥウ！」

／

　香春高校のオープンカフェにて、旧知というほど旧知ではなく、所在地がそもそも離れていたために親しいというほどでもなく、それでも同系統の能力者であることから知り合いではある２人組が対面して席を取っている。
　ブラック珈琲にチョコとバナナのクレープ、鳳凰――――瑞桐小鳥。
　抹茶オレとホットケーキ五重塔トッピングに特性滝壺メイプルシロップ、火兎――――兎傘鮮香。
　それぞれ届いた注文に手をつけつつ、というより夢中で食してほとんど目を合わせていない。
「・・・全く。神戸（こっち）に来てたんなら連絡ぐらい寄越せよ鳳凰。
　織神から聞かなきゃ知らないままだったぞ」
「キャラがかぶりそうだから嫌なのよ。
　こちとらわざわざ目立つ紅色の服に身を包んでまでキャラを立たせようと努力してるんだから」
「知らねぇよ。てかどこがキャラ被ってんだ。私は趣味趣向も普通で尚且つ人格者だぞ」
「本当の人格者に土下座して誤りなさい。
　だいたい趣味について非難を浴びる筋合いはないわ。人は自らの願望を曝け出してこそ次の段階（ステップ）に進めるのよ」
「その階段は変態の階段だ」

2人はしばらく微笑みという名の睨みを利かし合う。
が、決着などつくはずもなかった。
「・・・接点なんて発火能力者（パイロキネシス）であることぐらいじゃないかよ」
「はぁ・・・。それにしたって私達じゃ方向性大分違うのにねぇ」
「だよなぁ。火神三柱だっけ？火柱だっけ？それにしたって鳳凰、火兎までは分かるけど火の玉はどう考えてもカテゴリーが違うだろ」
「あの男の能力はもはや発火じゃないわよ。どっちかって言うと『神々の輪笑』好みよねぇ」
「あー、その辺は私知らん。鳳凰みたいに危ないのには突っ込んでないからな」
「心外ね。私は精神年齢の低い大人やその彼氏とベタベタドロドロな美しき馴れ合いをしてるだけよ」
最低だな、と鮮香はその反論になっていない反論を一蹴。
「万可だっけ？織神と同じ」
「支部が違うし、そもそも私あそこまで深く関わりないけどね。
・・・あの子には随分痛い目に遭わされたのよ。怖い怖い」
などと大げさに肩を竦めてみせる小鳥。
だが、思い返してみればむしろ肺や足を焼かれたりと痛い目にあったのは織神葉月の方であって、彼女の負傷は頭突きでの脳震盪とパペットよろしくの辱めぐらいのものなのだが、その辺を知らない鮮香はふぅんと頷いた。
「珍しいな。基本無敵能力者のくせに」
「場合と状況によるわよ、そんなの」
「それにしたって・・・そんなに強いのか？」
「今はまだ殺せるって感じ。これ以上成長されると手に負えない。まぁ、私や兎ちゃんみたいな大火力型のＰＫは無駄に相性がいいから分かりづらいかもしれないけど」
「うわ物騒ーだな」
「そういう能力なのよね、アレ。進化能力・・・適応能力っていう

のは弱点を克服していく能力なんだから。経験値を上げられれば上げられるほど隙がなくなっていく」
「ふーん。能力の伸び白はダントツってことか。
私なんかかなり苦労してここまでなのに」
「ＰＫにだって色別理論があるじゃない」
「無理。あれ意味分かんねぇ。考えた学者は馬鹿だ」
何よ情けないわね。
そう呟きながら小鳥は立ち上がって身を乗り出し、
「いい？人は自らの願望を曝け出してこ――――」
「全く関係ない台詞だったはずだぞ、それは」
台詞をバッサリ切り捨てられた。
が、彼女も負けじとその一撃をスルー。
「同じよ、恥ずかしがらずに目標を堂々と掲げてベストを尽せ！」
親指を突き出し、格好良くウィンクした。キラリンッと要らない効果音が脳内再生される。
「いや、そんな綺麗な内容じゃなかったと思うんだ」
「何のことだか」
しれっと言って残っていた珈琲を飲み干した。
「はぁ・・・」
瑞桐小鳥という人物は相手にすると疲れる。それが鮮香の正直な感想だ。
葉月からも同じような気苦労を感じることから2人は同属なんだろうと、本人達に言えば即答で抗議が返ってきそうなことを考えつつ、そもそもそんな相手にこうして顔を付き合わせるに至った経緯を思い出した。
「そうだ、鳳凰・・・」
火男改め火達磨から聞いた話について、一応黒い領域に足を突っ込んでいる人物の意見を訊くというのが目的だったのだ。その件についてあらましを投げやり半分に説明する。
小鳥といえば飲み終えてしまった珈琲のおかわりと今度はキャロ

ットケーキを頬み、それを口に運びながら、少なくても真剣に耳に入れていないのだろう様子で話を聞いていた。
「どう思う？」
「さぁ？情報が少なすぎるわよ、深読みもできない・・・。
普通の発火能力者（パイロキネシス）なんでしょ？『万可』は興味ないはずだし、『ＥＳＰ追究所』はお門違い・・・『神々の輪笑』なんて論外、『古き良き風景（ラシック・ビュー）』は見向きもしない・・・『日常的な赤（コード・レッド）』に関しては知ってのとおり研究終了、『他方傾向念力追究所』は強影念力（サイコキネシス）が専門だし、『三重録音九法研究所』はそもそも神戸には支部がないわよね・・・『箍の外れた発条（フォールアウト）』だって暴走能力者専門だしねぇ・・・」
「やっぱそういう研究組織関連じゃないか・・・別の何かか？」
「と思うけど？単に火力として欲しかったんじゃない？犯罪者なら扱いやすいし」
「かなぁ？ま、いいけどな、そいつのことは。
問題はそれに探り入れてヤバイ話に後輩が突っ込むことの方だし」
「あら、後輩想いなのね」
「言ったろうが、私は人格者だ」
「へぇ・・・そういう意味じゃあ私達案外似たもの同士かもね」
「はぁ？」
「ほら」
小鳥は取り出した携帯を開いて見せてくる。
突き出された液晶画面には、裸の彼女と男の子が写っていた。
誰だとか、何歳だとか、何で撮ったとか、何処で撮ったとか、何で待ち受けにしてるんだとか、そんな一気に湧き出た疑問に圧迫された鮮香は思考停止、身体硬直。
「ね。似たもの同士の後輩想い」
「いやいやいやいや！」
はっとなって、ぶんぶんと首と手を振る鮮香だったが、その時には小鳥は立ち上がって背を向けて歩き出しているところだった。
「待て！お前の趣味と私の主義を一緒にすんな！待って、待ってく

ださい、待てやぁあああ！」
応答はない。
「・・・ッ、一緒にすんじゃねぇえっ！！」

／

際どく揺れるスカートから垣間見える健康的な足、衣装が衣装なだけに強調される腰のくびれと胸。
一男子として心ときめかないとは言わないけども、それを見るたびに自分が同じような服装を着せさせられていることを自覚することになる現状を無理にも無視しても、そんな葉月の姿を眺めてみて純粋に浮かぶ感想は『よかった』の一言に尽きる。
能力を得る前の葉月の身体は病的だった。細身だとか二次成長がどうだとか、そういう観点ではなくてもっと全体的に見て、病的。
病的と言っても病気ではなく、細身といっても栄養が足りていないわけでもなく、身体が成長についてきていない。あるいは成長という概念が身体の中からごっそり抜け落ちている・・・そんな感じ。
初めて出会った時、『あぁ、お人形さんみたい』なんて思ったのはよく覚えている。
もちろんそれは今よりかなり精神年齢の低い時の話しだし、病的だの何だのを揶揄して言ったわけでもない純粋な賛辞としての感想だったのだけど、実際今思えばそんな褒め言葉が皮肉にしかならないような身体だったのだ。
だから何度も、何回も思うのだろう。よかった、健康な身体になって、と。
「どうかした？」
覗き込まれて顔の距離がいきなり縮まる。かなり近い。
「何でもないよ」
むしろ今となっては単に目の毒だけども。
・・・・・いや、複雑に目の毒だけども。

警戒心がまるでないというのは、この場合良しととるべきなのか悪しととるべきなのか・・・。

反応が面白いからというだけの理由で胸を見せてきたり当ててきたりという過剰な接触（からかい）を躊躇なくやってのけるあたり、たぶん葉月は未だ自分が女子だという自覚があまりない。

普通、無為に性転換なんてしたら友人への対応や関係を否応なく変えなければならなくなると思うのだが、男子であろうと女子であろうと変わらない葉月の接し方は、反対に周りの変化を強いようとしている気がする。

でも、だとして、変わった周りに対して葉月の方はどう応答するのだろう？

例えばの話、自分を女性として見る人物に迫られてたら。

拒絶の理由がない故に受け入れるのか。理解が及ばない故に受け入れるのか。

葉月の精神年齢は思われている以上に低い。知識や知能という点において故意に底上げされているから勘違いしてしまうのだが、育った環境の特殊性やらのせいなのか葉月の思考年齢はまだ二次成長期相当のモノには達していない。

性をまるで理解していないのはだから当たり前で、そして葉月の世界は酷く狭いはずだ。

幼子の世界が家族と周辺のごくわずかな人々で成り立つように、葉月の世界も同じように限定的で隔離的。

葉月が、少なくても俺に対してあんなことまでしてからかいたいと思えるほどには好意を抱いてくれているのは葉月のあまりにも狭窄した世界に、視界に居たのが俺だったからにすぎないからだろう。

広さを知ればその限りではない。

分かってる。

分かってるけど――――それは、嫌、何だよな。

葉月が元は男なんだとか、大切な友人なんだとか、そういった気持ちに織り交ざってそんな感情が、ある。

どうなんだろう？これをどう扱っていいものなのか判断に迷う。
葉月を女子として見て、それに友愛や保護欲やらが混ざってこんな気持ちになっているのか。
あるいは、そういう、ことなのか。
しかしまぁ、少なくても女性として見ていることは間違いなく――

――

具体的にその結果として、とりあえず下着を取り替えたい。

学園祭3日目にして、2日連続『不思議の国』に足を運び、2回連続同じ夢現を味わった結果、そんな状態である。
葉月がどうにも釈然としないからともう1度体験することを提案したわけなのだが、こちらとしては1回目で驚愕した自分の深層心理を再確認する羽目になるという頭の痛い実りとなった。
思春期らしい煩悩は無視して、断固無視して、それの相手が葉月であるというのが・・・・・・そもそもの原因だ。
悩まされたというよりは気づかされたという方が、やっぱり感覚としては近いのだけど。
本当に・・・俺は実際のところ葉月をどう思っているのだろうか？
「ねぇ、ところでさ・・・」
「ん？」
「昨日もだけど、何見たの？」
「・・・・・・」
その夢の内容と目の前の現実に板ばさみにされている最中にされたくない質問だった。
というか、言えない。
それはあまりにも高度な精神露出技法だ。残念でもなく俺はそんなタクティクスなど身につけていない。
「何を見たの？」
「秘密」

「何を体験したの？」
「内緒」
取り付く島もない俺の態度にむぅ、と頬を僅かに膨らませて抗議してくる葉月。
そういう表情は、男の頃は見なかったものだ。
身体の方に、少しずつ精神がついてきているのかもしれない。だと、いいのだけど。
何だかんだで女物の衣服にも慣れているようだし、最近はヘアスタイルのバリエーションも増えてきているし・・・。
「何でそんなに言いたくないの？」
「極秘」
「・・・でも、昨日と同じだったんでしょ？」
「・・・・・・うん？」
仕草を観察するのに意識を向けていた思考に、何か不審なワードが飛び込んできた気がする。
「何で昨日と同じだなんて分かるんだ？」
「んー・・・あっ、あったあったここだ」
俺の結構重要な質問に対して答える前に、葉月は見つけたコンビニへと入っていってしまった。
いつもは使わない学校近くのコンビニエンスストア。
そういえば最終日ももう終わりという時間帯、後夜祭の催し物が始まる前にちょっとした打ち上げをと、その飲み物を買いに来たのがそもそもの目的だったのを今更ながら思い出す。
クラスの皆は何だかんだで喫茶店に入り浸っていたらしく、いい具合に『不思議の国』に行っていた俺達がその使いっ走りの役を請け負うことになったのだった。
本当にすっかり忘れてたな・・・。
まぁ、自動ドアの前で立ち尽くすわけにも行かない。
この季節にしては寒い店内に入って、さっさと先に入店した葉月を探す。それほど広くもない店内だ、葉月はすぐに見つかった。

のだが、どうしてかあいつはペットボトルや菓子のコーナーではなく雑貨コーナーだった。
その辺りに陳列されているのは包帯やマスク、髭剃りにシャンプー、タオルハンカチティッシュときて目薬筆記具携帯充電器タイツ――――そして下着。
「はい」
その1つを手にとって、必要でしょ？と言わんばかりに渡してきた。
・・・・・・・・・・よし。
考えてみよう。
まず・・・昨日と同じ経験をしたことを葉月は知っていた。
それは何故か？
葉月が気づいていたという事実を知った今となっては簡単な話だ。
葉月は常人に比べて五感が酷く優れていて、今の自分はミニスカよろしく実に下半身が涼しい服装なのである。
まぁ、考えてみればバレない方が難しい。
それが2度同じ夢を経験したという推論の根拠になったというのは別にいい。よくないが、この際無視しよう。
で、次にどうしてその異変によって下着が必要になると葉月が考えたのか・・・それが重大問題だ。
葉月はこの手の話にかなり疎い。
保健体育としての知識ならともかく、男子としては二次成長もまだだった葉月がその辺の生々しい話を知っていたとは思えない。
・・・・・誰だ？誰に訊いた!?
そう、それが問題なのだ。
昨日の時点では葉月は知らなかったはずだ。知っていたならこの身も凍るようなイベントは昨日起きている。
つまり、昨日から今日にかけて、誰かに尋ねたということになるのだが・・・。
しかし、誰にだ？

隆か？委員長か？副委員長か？荷稲さんか？絵ロ梨（エリ）か？
純粋無垢な好奇心でとんでもないことを誰かに訊いている葉月・・・・度を越えて恐ろしい想像だ。
「ねぇ・・・それで、夢はどんな感じだったの？」
良識のある人物なら心の奥底にしまってくれるとは思うけど・・・。
駄目だ気になる・・・誰なんだ。
「相手は？相手は誰だったの？」
しかもご丁寧に事の原因まで細かく教唆してくれやがったようで――――・・・あぁ。
そうか、そういうことか。
考えてみれば、葉月の質問に対してここまで答える必要性はない。
一応とはいえ常識人な委員長や荷稲さんがそこまでの知識を植え込むはずがないのだ。やんわりとオブラートに包み込んでくれるはずなのだ。
葉月の質問に対して必要以上の物事を教えて俺をからかうために唆（そそのか）した文字通りの教唆犯など絵ロ梨（エリ）しか考えられない。
あの野郎・・・。
葉月にこうして質問責めにあっている俺の姿を想像してほくそ笑んでいるに違いない・・・。
いつか絶対！この借りは返す！
「ねぇねぇ、絵梨ちゃんが言うには僕じゃないかってことなんだけど、実際はどうだったの？」
・・・・・・・・・・・・。
「・・・・・・・・・アノアマコロス」

／

「では、コスプレ喫茶大成功を祝って・・・・・・乾杯！」
委員長である朝風椎の音頭で紙コップに注がれた各々好きなジュ

ースを口に含む1‐Bのクラスメート達。
衣装もそのままに、どうせこの後には後夜祭が控えているのだからと、心持は軽い前祝である。
命名矢崎聡一の喫茶『Ｅｌｙｓｉｏｎ』は大成功、よって売り物はほとんどが完売。
つまりそういう理由で織神葉月と朽網釧の2人がわざわざ買いに行った新しい飲食物がテーブルに並べられ、ジュースと同じく皆が皆好きなものを口にしながら談笑談話してささやかな休息を楽しんでいた。
おいコラ絵ロ梨（エリ）、何々聞こえない、そういえば毒舌幼女がタカと美月さんが一緒に歩いてるを尾行したって、ねぇあゆっちくすっちとはどうだったの、楽気苑のお得意様なんだけど三石先輩の言うとおりだったな、記念に撮影した写真さ後日配るぞ、やめろやめてください・・・。
しかし、そう、ささやかな休息だ。
学園祭という非日常空間の雰囲気に当てられながら突っ走った3日間、その終幕はすぐそこ。すでにこの巨大学業イベントをゴールした気になっている生徒がほとんどで、精神疲労の方がそろそろ限界にきている生徒だって多いだろうこの現時点において、そんな生徒達の心情などお構いなしに、これからのイベントこそがメインだと息巻いている小さな権力者が動きだす。
生徒を労うのが目的の後夜祭なのだからキャンプファイヤーでも灯してフォークダンスでも躍らせればいいものを、そのとあるゲーム中毒者はほとんど自分の我が侭で、かつての教え子を口説き落とし無茶をいい飴と鞭で釣り、もはや学園祭のオマケに収まりきらない特大イベントを企画したのだ――――。
現実としてあり得ない、夢に見るにはもどかしい。仮想するしかない、けれど現実のような体感を持って遊びたいと誰もが思うような体験ゲーム。ただし、疲労のない状態が望ましい――――でなければ大規模故にレクリエーションとして消化できず胃もたれを起こ

しかねない、そんなイベント。

もうすぐ、開幕。

第４５話－　思春。－Ａｄｏｌｅｓｃｅｎｃｅ－（後書き）

アレですよアレ。
そろそろ物語の複線を張り切らないといけない時期がきてまして、葉月と釧の関係性にも変化を持たせないといけないかなぁと思った結果がコレ。
恋愛って何？抱けるの？（↑『語るモノ／かんしょう　何それ？食えるの？』参照）

というかね、心のない人形とヘタレ女装子で恋愛話やろうってのがそもそもの間違（ｒｙ
大体、作者だって恋愛ごと以前に心なしの人でなしなんだから前提から間（ｒｙ

……どこぞの殺人鬼のように殺して解して並べて揃えて――晒しに行く必要があるのかもしれません。
いや、京都にはつい最近行ったんですけどね。
観光じゃなかったんで疲れただけですが。

ともかく、今後はもう少ししっかり更新できるようにがんばります。
パソコンやら何やらも揃えて環境は整ったので気合入れたいと思います。
皆様のご意見・ご感想をいただければさらに作業速度が上がります（笑）ので、お暇がありましたらお寄せくださいませ。

それでは。
できるだけ早い内に、また。

第４６話ー　仮想現実。ーＶｉｒｔｕａｌ　Ｒｅａｌｉｔｙー

指定時間に学園内にいるようにとのみ伝えられていた祠堂学園の生徒達にとってその後夜祭なる遊戯は突如始まった。
視界暗転。
平衡感覚消滅。
状況を把握する前に理解不能のまま、何も見えない暗闇の中始まる愉快な某校長のルール説明。
何もかもがいきなりすぎた。

さぁて皆様、私お待ちかね後夜祭レクリエーション――――幻想現実[1]による一仮想現実多人数同時参加型電信《ＶＣＭＭＯ》風ガンアクションのお時間です！
ルールは簡単、体育祭と同じくバトルロワイヤル。
エリア内でプレーヤーを倒しながら、アイテム集めやレベルアップを楽しんでね？
ただし掻い潜らなければ即失格の素敵なイベントが不規則に発生するから注意！
イベント攻略に必須のアイテムもゴロゴロ転がってるので隠れてやり過ごそうなんてお馬鹿さんは長生きできないゾ☆
初期武器はランダムに配布されるけど武器となる銃や刃物が色んなところに隠されてるから探してみてね？
それからあくまでもガンアクションなので能力は使えないけどガンバッ★
あっ、あとエリア内にはＣＰとしてグロテスクな化け物がウヨウヨいるけど気にしないで♪

・・・気にしないで♪
・・・・・気にしないで♪

さて、
「ゴヴゥロバァアア！！」
「いや、無理っしょ」
実に公平かつ平等なランダムによって決定したスタート地点に飛ばされた西谷絵梨の目の前にいるのはそんなグロい怪物である。
・・・何もかもが、いきなりすぎた。

＃

「おいおいおい・・・嘘だろ」
ゲーム開始時、何かしらの建物と思われる屋内にいた四十万隆は、今現在、その屋上にいた。
ジャベリンタワー。それがその建物の名称らしい。
そのことを散策中に見つけたエレベーター近くの案内板で知った彼は、この建築物がここら一帯で最も高い塔であることも同時に知り、現状把握のためにエリア全体を見渡そうと最上階のその上にまで上り詰めたのだ。
地図すらない、見知らぬ場所となれば、そうしたくなるのも無理はない。
現に彼と同じく高層ビルの構内でスタートを切った者の多くは同じ行動を取っている。
そして、その多くがやはり同じような反応をしたのだった。
「嘘だろ」
開けた視界に広がるのはビルの森だった。この塔より高い建物はないとはいえ、３０階は越えるだろうビルがところどころ、１０階レベルのビルがその間に敷き詰められるように生えている。それらの角ばった人工物を隠すかのように所々霧か靄が漂い、見えたところ緑らしい緑が一箇所だけ楕円形の唯広い公園をなしているようだ。それ以外は全て灰色に近い、奇妙な景色。反射ガラスすら灰色とい

うのは、空が延々と曇り模様を呈しているからか・・・。
そう。延々と、唯広く。
広すぎる。
それがこの今からプレイするゲームのフィールドを目の当たりにしたプレーヤー達の総意だろう。
いくら学園の生徒ほとんど全てが参加しているにしても、体育祭とは違い大学生も教師までも参加しているにしても、広すぎる。
ここまで広大なエリアを確保できる辺りが幻想現実(1.5)のすばらしさであり恐ろしさであるわけだが、それにしたってこの無駄に広い中ではプレーヤー同士の遭遇率は低いのではないか？
そんな嫌な不安さえが過ぎるほどだった。
が、無論そんなのは要らぬ心配だ。なぜなら、そのためにこのエリア内にはプレーヤー数を上回る化け物(CP)が徘徊しているのだから。
――パンッパンパンッ
呆けている彼の耳に入ってきたそんな発破音はタワーの下、地上からである。
はっ、となって反射的に視線を下に向けると、遠くの路上にて誰ともつかぬ生徒が拳銃を緑色で二足歩行のモンスターに向けて発砲していた。
しかし、初期武器には予備弾倉はサービスされていないらしくすぐに弾切れとなり、そもそも拳銃ごとき経口の弾丸などにびくともしていなかった化け物は抵抗力をなくしたプレーヤーに襲い掛かかる。
遠くながらも、ビルの壁を反射して悲鳴はよく響く。
「・・・・・・」
彼は灰色の天を仰ぎ、それから自分の手に目を落とした。
握られている彼の武器はベレッタＭ９２。９ｍｍの３８口径、１５発。
勝ち目があるとは思えない。
（遭遇しないことを祈ろう・・・）

そう切に願いながら、階段を降り屋内へと戻る。
ともかく、何かしらの動きがある前に、イベントという名の炙り出しが始まる前に用意を整えないといけない。
幸いこのタワーはフロアが何層もある。どこかに校長が言ったとおり武器が隠されている可能性は高い。虱潰し散策して置けばここを本拠地に行動できる。
そう考えた彼はまず手始めに最上階の展望台から調べることにした。

そして、見つける。
おそらくこのゲーム中で最も価値の高いアイテム――――全エリアを網羅した監視システムを。

ラッキーと言えばこれほどラッキーなことはないが、しかし1人である現状、使いこなせないガラクタでもある。

＃

布衣菜誉は悩んでいた。
スタートからしばらく経った今でも開始地点から一歩も動かずに、目の前にある魅惑の物品を睨み続けている。
シルク地のシーツに包まれた軽そうな布団、ダブルサイズのこれまた心地よさそうなベッド、天蓋つき。
「むぁぁぁあ・・・」
頭を抱える。
いくら実際肉体を動かしているわけでもないとはいえ、精神疲労はそのまま残っている自身の調子を鑑みて、
「うぐぅあぁ・・・」
目の前にある、生涯この気を逃せば味わえることはないだろう癒しの逸品を見つめて、

「いぎゃぁぁああ・・・」
葛藤中。
ルール説明にあった以上は、一箇所に留まり続けれるようなゲームではない。しかしながら、今の自分の疲労具合からしてやる気も出なければ、プレイしたところでまともな結果が得られるとも思えない。
なら、いっそのこと・・・という悪魔の囁きに彼女の中の天使は少しずつ篭絡され始めている。
「うーぁーぃー」
結果、彼女はそのリラックスベッドへとダイブすることになった。

＃

イベント１
任意ミッション：美野公園の食人植物の茂る森にてマンドレイクを採取せよ。
クリア条件：各所回収ＢＯＸに納品すること。
報酬：１株１０万、加えて治療薬あるいは増力剤。

そんなメッセージウインドウが視界をほとんど遮って表示されたことによって、朝風椎は立ち止まらざるを得なくなった。
何せ、前が見えない。
（１０万円に治療薬・・・増力剤、ねぇ）
そう言われたところでこのゲームにおいてのそれらアイテムの重要性が分からない以上、判断しかねる報酬ではある。
いや、それを言うならこのゲームの全体像が見えない現状で、説明書はおろかパッケージすら見ないままにプレイをさせられている状況で、どう動けというのか。
ともかく、視界というディスプレイに表示されたその邪魔なメッセージを消して、誰かに見つからないよう木陰に座る。

ひとまず立ち止まって思考してみよう。
このゲームは、どんなモノか？
新手のヴァーチャル・リアリティ。ジャンルはガンアクション、といいつつ自由度の高いバトルアクションと見た方が分かりやすい。おそらく殴る蹴るといった攻撃法も有効だ。それは彼女の初期武器である銃が示している。視界の端に移っているゲージを見る限り、ダメージが蓄積していって０で脱落なのだろう。だから治療薬がある、と。
（じゃあ増力剤は？）
関係しそうなステータス画面をメニューを弄って表示させると、彼女は自分の攻撃力や体力が異常に低いことに気がついた。考えてみれば彼女は日常的に鍛えている部類には入らず、他人より筋肉をつけてはいない。
（プレーヤー自身のステータスがそのまま反映されている・・・？けれど・・・だとするなら・・・）
このステータスの低さは不利だ。
いや、普通に考えてアクションというゲーム性からみても女性全体が不利じゃないだろうか？
とすると、ゲーム序盤のこのミッションはそういったアンフェアを取り除くためにあるのかもしれない。
それなら、
（・・・難易度は低いはず）
ふぅ、と一息吐いた後、彼女は立ち上がる。
とりあえず目先の指針は決まった。
別に移動する必要もない。
彼女のスタート地点は件の公園である。
入り口辺りで見つけた全体図ではこの公園の半分ほどが草木の生い茂った森林地帯になっていた。
「食人植物かぁ・・・」
わざわざそう書いてあるところからして、注意は必要なのだろう

が、そもそもそれはどんな形をしているのか・・・。
「しぃっち！」
脳内でうにょうにょと緑色の触手をくねらせる巨大ウツボカヅラやハエトリグサをイメージしていた彼女の耳に入ったのはそんな声。
振り返れば後ろから長谷川亜子が駆けてきていた。
一瞬、駆け寄ってきたところを鉈で先攻・・・などという考えが脳裏を過ぎる。
「・・・・・・」
それこそ先行しそうになった右手を何とか押さえるに何とか成功し、
「亜子・・・」
考えていたことはおくびにも出さずに笑顔で友人を迎えた。

「いやぁ助かったよ。1人じゃさすがに心許ないもん」
美野公園、森ではない方の半分である草原をとりあえず過ぎて凶悪生物の潜むらしい森の前まで来て、ひとまず足を止めた。
何事にも心の準備というものは必要である。
「鉈、効果あるかしら・・・」
いくらでも再生してしまう触手を想像して、イマイチ自分の武器が通用する気がしない椎は手の鉈を振ってみる。
軽い。
おそらく、武器の重さまでリアリティーを追求して操作性を損なわないようにとの配慮からだろうが、威力があるのか不安な振り心地だ。
「大丈夫よ、いざとなったら私の武器があるし」
「・・・そういえば、亜子の武器って訊いてなかったわね。何なの？」
待ってましたとばかりに亜子は登場からずっと背負っていたバックパックを地面に下ろした。

「じゃじゃーん！コレデス！」
黄色をしたその物々しい鞄から取り出されたのは銀色のガスボンベ。
ご丁寧にも『枯葉剤－Ａｇｅｎｔ　Ｏｒａｎｇｅ－』と書かれている。
「名前からして草には効果抜群！」
そんなダイオキシンのミックスジュースを散布すれば自分達もただでは済まないだろうというのはとりあえず置いておいて、何よりも決定的な欠点を指摘する。
「・・・・・・マンドレイクも草なのよ」
「・・・・・・」
自信満々に持ち上げた戦略化学兵器をいそいそと仕舞い始める亜子。
「・・・・・鉈で勝てるかな？」
さっき自分が口にした台詞に溜め息が口から漏れる。
ともかく、これ以上立ち止まっていても仕方ない。
嫌な空気をそのままに森林へと踏み入れた。

＃

イベントその1が通知され、いくらかのプレーヤーが美野公園と名づけられた目的地へと足を運び始めた頃、そことはかなり遠方に杉木海はいた。
公園とはタワーを挟んで向かいに位置する高層ビル群の一角、無機質にコンクリートやアスファルトが敷かれ詰められしている大通り。都合よくプレーヤー以外の人影のない世界故に自動車の行き来はないのだが、代わりとばかりについ先ほど爆走していた装甲車がロケットランチャーの一撃で8車線の中央辺りに転倒し、それをきっかけに『とりあえず人がいる場所へ』という心理からか音に釣られて終結、ゲームらしいといえばゲームらしい戦闘が始まったのが

現在の状況で、遠いの云々を抜きにしてどの道彼にイベント参加は無理なのである。
装甲車で突っ込んできた数名のグループもさることながら、それを撃ちし止めたロケットランチャーのプレーヤーが迷惑極まりなかった。車など隠れてやり過ごせば済む話だったというのに、転倒させてしまったせいで戦場がこの場所で固定され・・・オマケに襲撃犯の一味だと思われたのか、車を盾に反撃に転じた彼らに狙われる羽目になり、足止めを食らっている間に好戦的なプレーヤー達が到着、逃げるに逃げられなくなったのだ。
「うざい・・・」
既に何発か食らってライフを削ってしまっている彼は正直、一刻も早く戦闘から離脱したかった。
何せ、弾が切れそうなのだ。
軽機関銃、それが彼の武器だ。
威力も連射性も申し分のない、ありがたい武器ではあるものの、分に５００発ほどという発射速度に比べて、持ち合わせている弾数は最初からついていた２５０発分が連なったベルト状のそれ１つだけときている。はっきり言って、使える状況ではない。
（たぶん、どっかに弾は隠されてるんだろうけど・・・）
それを探しに行く余裕のないままに戦闘に巻き込まれてしまったのだから運がない。
８発。
拳銃で、急所以外を撃たれたとしてライフが持つのはそれが限界だと彼は自分が食らったダメージから目測して割り出した。
頭に食らえば即アウト、心臓は２発。
血は出ない、痛くはなく痺れがくる。
まぁ、それはいいとして３８口径で８発だ。思った以上にシビアな判定だが、だからこそアイテムがありがたいわけである。
治療薬にしても弾薬にしても、それがないと動きようがない。
イベントの１番目があんな内容であることからしても、序盤は力

をつけるために使うべきなのだ。
それだというに、これである。
「やる気なくな・・・ッうお！」
さっきからあちこちで行き交う流れ弾をやり過ごしながらこぼしていた愚痴の途中、どこぞの誰かが要らぬ奮発をしたらしい単発仕様のバズーカーの弾が流れ弾に当たって空中で破裂した。
不幸にもそれが近かった彼は潜んでいた車線中央の境界線に生える潅木（かんぼく）から放り出されてしまう。
悪態をつきながら伏した身体を持ち上げる頃には、さらに2発ほど被弾し、爆風のダメージも加算されてライフは半分を大幅に切ってしまっていた。
「あーもう！」
そして何より問題なのは身を隠せる物陰がないということだ。
遮蔽物に隠れながらの銃撃戦の中にいきなり出てきた無防備な的を彼らが逃すはずもなく、右左と通り過ぎていた弾雨は確実に彼の方へと方向を修正し始めている。
「くそっ、いつもこうだ！」
ゴロゴロと横に転がりながら移動しつつ、あんまりにもあんまりな状況にまたもや悪態。
「椅子が飛んできたり鋏が飛んできたり花火が飛んできたり！何で俺ばっかこんな目に遭わなきゃいけないんだ畜生！」
そうこうしている内に、次は体勢低すぎて銃弾だと当たりにくいと痺れを切らした1人が放ったらしい手榴弾がごとんっと顔のすぐそばに落ちてきた。
「〜〜〜〜！」
機関銃を抱きかかえて転がってる場合ですらない。
弾が当たるの承知で慌てて立ち上がって我武者羅に走る。
「だいたい俺の扱い酷すぎるだろ！香魚子の奴はやたらと九鈴に甘いし！荷稲さんは治療雑だし！」
そんな中でも無駄口を叩けることこそ数少ないその待遇から得た

モノだと彼が気づくわけもなく、コンクリートへ飛び込むように前へと跳躍することで現実ではありえないフィクションならではな手榴弾の大爆発を避けようと試みた。
それは半ば成功し、大したダメージを受けることなく、なおかつちょうど目の行ったところに身を隠せそうな突破口を見つける。
マンホール。
色々と不安要素があるが、ここでアウトになるよりよっぽどマシだ。
開きづらい蓋を何度も持ち上げて何とか足を滑り込ませこじ開ける。
「よっしゃああ！あばよアホ共！！今度あったら覚えとけ！」
最後に、下っ端御用達の捨て台詞を吐いて自分の地位の低さを露呈させつつ、海は暗い下水道へと消えていた。

＃

「ぎゃぁあああぁあああああ！！」
「ちょっ、待！ひぎゃあ・・・！！」
「反則！反則だって！」
「いやぁ食べられたくないのー、ひぃっ！」
などなど、そんな悲鳴が響くのは当然のことながら美野公園である。
イベントの賞品という甘い蜜に釣られて魔の森に入ったプレーヤーは今猛烈に後悔していた。
・・・食人植物。
それを触手を伸ばして人を捕獲する植物の化け物だと捉えていた朝風椎含め彼らの推測は確かに正しい。
・・・・・動けないという植物の常識を無視して二足歩行した挙句、幹に凶悪な目と口を開けギラギラギチギチ言わせ、やってき

たプレーヤーを囲むように大軍勢で森をげらげら笑いながらローラー作戦するような生物を植物と称するのなら・・・だが。

難易度が低いなどと考えたのはどこの誰だと自分を非難した人物が1人いたことは言うまでもなく、しかし、今はそんな校長による心理的トラップに関してケチをつけている場合ではない。

食人植物とは名ばかりのエイリアンに捕まった生徒達はその口の中に放り込まれて脱落していき、必死に逃亡を図る残り少ない生徒達も捕まるのは時間の問題と言えた。

無論、彼女2人もその内で、這い回り走り回って隙を見つけようとはするものの、隠れるのが精一杯という現状がある。

「ひゃぁあああぁあああ!」

また1人犠牲になっていくのを眺め、食人主義はカニバリズムっていうけど、あれは人が人を食べるからで・・・この場合はなんていうのかななどと現実逃避をする椎だったが、彼女以上に長谷川亜子の方がまいっていた。

こうも何度も悲鳴や絶叫を聞いていればそれも仕方がない話だが、この場合問題なのはこれ以上追い詰められた際に彼女がとる行動である。

「〜〜〜〜!!!」

先ほどから自らの武器であるボンベを開けようとして、椎にその手を止められていた。

「亜子、亜子ちゃん?それは、まだ、駄目!」

「ふ、ふふふふふ!し、死なばもろともって言うじゃん!?大丈夫大丈夫・・・イケる!」

大丈夫じゃないし、逝けるだけだと突っ込む余裕なく、力ずくで亜子を引っ張りながら彼女はできる限り森林の出口を向かって歩いていく。

エイリアンはもうすぐそこまで来ているし、おそらく進行方向にもいるだろう。

そのことは亜子には言わず、周りを注意深く見回しながら彼女は

目的の物を探していた。
マンドレイク。
夢のようなモノとはいえ、擬似死体験には十分なリアリティーのあるゲームの中で追い詰められながらもそれを諦めない辺りが彼女の強さである。
状況は限りなく不利。けれど、これほど必要なものが揃っている機会はない・・・。
「！」
そして彼女は見つけた。
今まで見てきた中にはなかった種類の、葉をごそごそと動かす木陰の植物を。
「見て！マンドレイクよ！」
「まだ探してたの！？」
「喜びなさい亜子、これで賭けが成立するわ」
「賭け・・・？」
怪訝そうな彼女に対して、椎は大きく頷く。
「アレを採ったら枯葉剤ばら撒いて一気に森を走り抜けるの」
「え・・・？はい？あれ？あなた様は今の今まで私がそうするのを邪魔してませんでしたか？」
「森の外まで遠かったし、何より成功するか分からない作戦だもの。ただ逃げるだけにやるにはリスクが大きかったから。
でもこうして目的の物も見つかったし、賭ける価値が出てき・・・ッ！」
言い切る前に彼女は勢いよく後ろへ振り返った。
「何！？」
「亜子！早く！アレを採って！ほらっ、っ早く・・・！」
「う、うん！」
いつもの彼女らしかぬ剣幕に押されて、彼女は見つけた魔草の許へと走り寄る。
そして、恐怖やら何やらでロクに頭が働かないままに――――、

『ピギャァアアア――ァ――――――ァ！！！』

響いたその凶音をほとんどゼロ距離で聴いてしまった亜子はパタンと倒れてそれっきり動かなくなってしまった。

対して、当然のように手で耳を塞いでいた椎は悲鳴が終わったのを確認すると、ゆっくり亜子の方へと歩いていく。

その背の方に何かしら不審な気配はない。

「マンドレイクってやっぱり採取方法が1番ネックよね。1人じゃ面倒だったわ、ありがとう亜子。

普通は犬に採ってこさせるんだっけ・・・？うん、私、従順な犬って好きよ」

そう言って死せる彼女の頭を撫でてその手からお目当ての物を引き抜く。

椎は何の躊躇いもなく持ち主のいなくなったガスボンベのバルブを回してその中身を噴射させた。

さて、難なく死に逝く森から脱出を成功させた彼女は、街中の回収ＢＯＸの前にいた。

美野公園を出てから、場所の分からないＢＯＸを探してしばらく歩く羽目になった苦労がこれで報われる・・・。

友人を犠牲にして手に入れたその戦利品をポスト状の箱の口へと押し込んだ。

が、次の瞬間、ペッとポストが吐き出したソレが彼女のおでこを強打した。

「なっ！？」

意味が分からずよろめく彼女。おでこを押さえながら地面に落ちたソレを確認すると、今まで写っていなかった文字が浮かび上がっている。

『アルラウネ』。
「え？え？」
アルラウネ？何それという彼女の心を読んだように、その名称の下に説明文が表れた。
『マンドレイクの亜種』。
そのあんまりにも簡潔すぎる説明に呆然と立ち尽くす彼女へ追い討ちをかける声がかかる。
「おいあんた！よくもまー、わいを引き抜いてくれやがったなぁ！」
見ると、声の主はマンドレイク改めアルラウネである。
一瞬踏み潰そうと考えるも思いとどまり彼女はその人語を喋る草根っこを拾うと、
「あっ、ちょ待ちぃ、や、やめ何をする！？」
「・・・・・・」
無言で雑巾の如く絞り殺した。
踏み潰した程度ではこの苛立ちは解消できない。

＃

織神葉月が飛ばされた場所は多くのプレーヤーがそうであるように建物の中だった。
ただし、高層ビルではなく、と言ってもマンションや家屋というわけでもない。
感染症研究所を備えた大病院の感染病棟である。
研究で扱う細菌やウイルスの凶悪性からその感染病棟は厳重なセキュリティーが構築されているその場所は、入るのにも暗証番号を必要とする防弾ガラスの出入り口で、中からは決して開かないようになっている。
そんな牢獄の中が彼女のスタート地点だったわけである。
初期武器はバスケットいっぱいの手榴弾と質も量も申し分のない当たりなのだが、スタート地点という点では間違いなく外れだ。

しかし、それを補えるのが彼女の能力であり、常から強化してある身体とも言えるわけで、出入り口のセキュリティーが解除不可能と分かった時点で彼女は防弾ガラスをぶち破るという選択肢を当然のように採った。

が、

「痛ッ～～～～！！！」

躊躇いなく殴りつけた拳の方が砕けそうな激痛に襲われて、彼女は手を庇いながら痛みに堪らず身体をくねらせる。

ガラスにはヒビひとつない。

「？？？」

意味が分からずにいる彼女の視界で、ライフゲージもが量を減らしていた。

何故か？その理由は実に簡単な話だ。

このゲームでのステータスは実際の個人の身体データを利用している。

能力を使わずとも既に強化されているのが彼女の身体ではあるものの、それははっきり言って人間が持っている通常の筋肉繊維などとは違ったモノであり、外見上彼女の身体は年齢よりも少々幼げな少女のままである。

人間の身体という前提で、その身体をスキャンすれば身体相応の数値が割り当てられるのは当然で――――、

つまり、今現在彼女のスペックは年端もない幼女そのもののモノでしかない。

身体の耐久性は転んだだけでもダメージになるほどに低く、攻撃力は地を這ってそもそも手の方がもたない。すぐに息は上がるだろうし、走っても誰にでも追いつかれるだろう。いくら補正されているとはいえ、拳銃が扱えるとも思えず、重火器は言わずもがな、武器である手榴弾すらあやしいものだ。

それに思い至った彼女は自分の両手を見た。
心内に混沌とする感情のせいかその手は小刻みに震えている。
――ぺち・・・
ガラスを叩く音すら実に軽く牢獄に響く。
――ぺちぺちぺち

第４６話－　仮想現実。－Ｖｉｒｔｕａｌ　Ｒｅａｌｉｔｙ－（後書き）

まだまだ続くよ学園祭編。もうしばらくお付き合いくださいませ。
こうやって全くストーリーと関係ないことをやれるって今後そう機会がないだろうということで存分に楽しむ所存です。シリアスめなのが好きな人ごめんなさい。

あとお気づきの方もいらっしゃると思いますが、今回全文が三人称です。
ちょっとね、練習しないとなぁと思いまして、今編はこんな感じでがんばりたいと。

あと、サイトの方、改装しました。
今までのモノクロから幾分爽やかになったはず。
今後イラストなども練習がてら上げていく予定ですので、お暇があれば覗いてやってください。
今現在イラスト１点展示中。
『エキ日々。』のアイツです。

それでは。

第４６話－　果実盛籠。－Ａｐｐｌｅ－（前書き）

前回から2週間近く経ってからの更新・・・遅くなってすみません。いや違うんです。サボってたわけじゃなくてですね、思った以上に長くなっちゃっただけなんです。

今回の話は５０ＫＢ、まさかの『エキ日々。』史上初の５０台！今まで1位だった４９ＫＢを抜きました！

最近の話が１０～２０だったのを考えると、３、４話分ぐらいの量です。

２週間で3、４話と考えれば亀更新じゃない！

……ホントごめんなさい。

第４６話－　果実盛籠。－Ａｐｐｌｅ－

イベント２
これより３０分間５分毎に化け物(CP)が指定地区に移動。
指定を受けた地区のプレーヤーは注意されたし。

それが第１のミッションが誰かさんの枯葉剤によってぶち壊しになった直後に各プレーヤーに通知された新たなイベントである。
１番目のイベントと違い任意でもミッションでもない今回のソレは、いわゆる状況変化型の生存者撹乱(プレーヤーキラー)で、最初に首謀者のルール説明にもあったように身を隠してやり過ごそうという消極的でつまらないプレーヤーを炙り出すためのものだ。
急所である頭部を狙って５発という強靭な耐久値を設定されている化け物の、プレーヤーをふるいにかけるために大量に用意されたその全てが狭い領域を徘徊するだから、現在位置がそんな地区にあるプレーヤーは運がない。
そしてさらに運のないことに、これはゲーム好きの校長が作成したシナリオであるからにして、『これからどこそこに化け物が集まるので注意してください』などというご丁寧な忠告では決してないわけで。

指定地区：エリア５－Ｂ－Ｂ７

警告文が出された瞬間、各地に散らばっていた化け物がいきなり瞬間移動して、彼らの前に現れた。
地図を持たされていない彼らは自分の居場所をそんな化け物の存在で知る。
回避させる暇など与えられていない問答無用で理不尽なイベント２はこうして幕を開け、そしてそんな第１回目の移動に選ばれたエ

リア５－Ｂ－Ｂ７に飛騨真幸はいたのである。
とあるコンビニのレジカウンターの裏に身をかがめ、頼りないガラス張りの外に少なくても３匹見える化け物と自分が手に持つ装弾数（レミントン・デリンジャー）２発で手の平サイズの可愛い銃とに交互に目をやって、
「１発は自殺用・・・１発は自殺用・・・」
さっきから自分にそう言い聞かせている。
さて・・・よって残り１発分が彼の武器ということになるのだが、その時点で彼に強行突破という選択肢は存在しない。彼にとって残された選択肢はこそこそと隠れながら何とかして指定地区からの脱出を図るか自殺（リタイア）するかしかないのだ。言うまでもなく前者が成功する可能性は限りなく０に近い。
（粘ってみるか・・・？いや、どうせ無理な気がするんだよな）
しかし、選択の余裕など彼に与えられていなかった。
轟音。
おそらく手榴弾のものだろうと音から判断するも、彼にはそれが誰によるものか判断がつかない。
貧弱なコンビニのガラスが豪快に砕け散ってガラス際のコーナーが崩壊して雑誌が軽い雪崩を起こす。ギチギチと割れたガラスを踏みにじりながら前進してくるらしい足音が次に耳に入り、そして最後に、大型動物が鼻を引くつかせながら、唸りをあげているのがよく分かった。
恐る恐る伏せていた顔をあげると、レジカウンターを挟んで向こう側に化け物が数匹入り込んできていた。
そいつらは完全に標的がここにいるのだと確信している。というより、化け物の１匹はその手に手榴弾を握りこんでいた。
「・・・・・・」
そういえば、他のヤツに比べてそいつだけ少々青みがかった体表をしていて――――つまり同じ化け物でも種類が違う、らしい。
だとして、ただでさえ脅威である人外の架空生物に何で武器まで持たせるのだと彼は叫びたかった。

「ギャブァ・・・」
もちろん叫ぶことはなかったが、だからと言ってどの道彼の運命は決まっていたようなもので、うかつにもその化け物と目が合ってしまった。
「・・・・・オーマイガッ！」
彼は咄嗟に拳銃を自分のこめかみに向ける。
実に惚れ惚れとするような正しく素早い判断なのだが、つまるところ単なる腰抜けである。
酷く格好悪い、もう少し意地と見栄を張れなかったものか、このヘタレ、せめて抵抗しろ、だから彼女の尻に敷かれるんだ、などなど・・・そんな感想を抱かざるを得ない。
無論それは情けない彼の様子を見ていた者がいればの話なのだが、それが――――実はいたのだ。
恰好の獲物を見つけた化け物がお菓子コーナーをその巨体で吹き飛ばし、次の跳躍（いっぽ）で蒸し器を踏み潰してカウンターの上に着地するのとほぼ同時、
『奥の控え室だ！左に跳べ！』
天井のスピーカーから不意の指示が飛んだ。

＃

このゲームの難易度を上げている要素（ファクター）は、初期武器の弾数や威力に比べてＣＰのステータスが異様に高いこと、それに加えて自分の位置を掴めず敵の行動も読めないという点である。
ＴＶゲームなどとは比べ物にならない自由度の高さは逆に言えば、敵がどういった行動に出るか推測を絞り込めないということであり、自身の位置と敵の情報が分からないままでのプレイはただでさえ恐怖を抱かせる。しかも徘徊しているのは自分達と同じプレーヤーだけではなくグロテスクモンスターもいるのだ。ゾンビやらモンスターやらを蹴散らすガンシューティングゲームが人気なのはそれが全

てＴＶという箱の中の出来事だからであって、仮想現実という夢の技術は今回ばかりは余計以外の何モノでもない。

身を守る武器は当然必要、エリアを確認できる地図も必要、そして何より恐怖心に打ち勝ち自らの心を守る防壁が必要なのだ。

つまり、体育祭の時以上に環境への適応能力を求められるこのサバイバルにおいて、勝負よりまず整えなければならないモノは、敵の情報を掴める手立てとそして仲間である。

バトルロワイヤルという性質上最後には裏切られることは間違いないという状況で、それでもまず初めに仲間を集めて不安感の解消と戦闘力の補強をしなければこのゲームには生き残れない。

それを前提に考えば、四十万隆の目の前にある監視システムがどれほどの価値があるかは言うまでもないだろう。

これは間違いなく戦況を左右する武器になる。そう彼自身も確信し、そして悩んでいた。

エリア全体を網羅する、監視カメラのような死角もないゲームならではのあり得ないスペックを誇るそのシステムは当然タワーに備え付けられたモノであって持ち運びができるわけもなく、せっかくアイテムの場所を知ることができてもそれを取りに行くことはできない。

システムから目を離せば状況はわからなくなるのだから、それでは他のプレーヤーと変わらないことになる。しかしだからと言って画面に張り付いていてはアイテムどころか敵を撃退にすらいけないわけだ。

そのジレンマから得られる結論は１つ――――１人では使いこなせない。

どころか、ここで画面を眺めている間にタワー全体を敵や化け物に囲まれれば元も子もない話である。

つまり現在単独行動の隆にはこれよりは重火器の方がよっぽど価値があるのだ。

しかし、それでもやはり無視するには監視システムは魅力的すぎ

る・・・。

よって、彼はまず急いで味方をシステムで見つけることにした。

「くそっ！人使い荒いぞ！」

『黙れ！お前誰のお陰で下水道を迷わずに出れたと思ってんだ！』

エリア５－Ｂ－Ｂ７、そこへと至る道中をイヤホンマイクでジャベリンタワーの隆と怒鳴り合いながら走るのは杉木海。

下水道で見つけた持ち運べるだけの装備を身につけて、彼は隆の指示で飛騨真幸救出に向かっている。

真幸が化け物に襲われることになるイベント２発令の少し前、マンホールから脱出したのはいいものの、暗くて何も見えず迷いに迷っていた海を救ったのはそれを偶然見つけた隆だった。

近くに落ちていた電子デバイスで連絡が取れたのが幸いして、ともかくタッグを組むことになった彼らは、暗視できる監視システムを駆使して、ボーナスのつもりなのか大量に落ちていたアイテムを拾いながら最終的に下水道から這い出したのがつい先ほど。

そこにきて一息吐く間もなく真幸の件である。

「ッ！駄目だ！」

『あっ？何だと、その重装備で何言ってやがる！化け物ぐらい・・・』

「違う！道が塞がれてる！ちゃんとモニタリングしとけよ！」

『――――ッ！どこの誰だ建物を崩した馬鹿は！』

モニターに映り出された瓦礫の山を見て悪態を吐く。

いくら監視システムがある言っても１人で全状況を把握するのは難しい。結果こうしてエラー出てしまった。

「化け物が出てこないように防壁でも張ったつもりなのか？物理障壁なんて意味ないだろ！転移しちまうんだから！」

『つーかどうやったらあんなマネできんだ！ミサイルでも撃ったのか！？』

「知るか！で、回避ルートは！？」
『戻って最初の分岐路で右だ！』
「・・・っうおっ！」
『どうした！？』
「敵だ！どっかかか弾飛んできたぞ！」
海は開けた道路から走って崩れたコンクリートの影に身を隠す。
それを追うようにバシバシと小さく地面が爆ぜるのを確認して、間違いなく自分を攻撃している敵がいると確信した。
「どこだ！？隆！」
『瓦礫山の物陰だ！上からきてる！』
「あぁくそ、不利な位置関係じゃねぇかよ」
『・・・・・！ちっ、そういうことか！』
「あ？」
『逆だ！中の化け物から外を守るんじゃない！外の敵から中を守る防壁なんだ！
ゲームの設定がどうなってるか知らねぇが、１度指定された場所を選択項目から除外してる可能性もあるからな・・・他の場所より以後選ばれる確率は低い！
何よりあの校長のことだ。化け物がああして集合するようなエリアにこそ強力なアイテムを隠すだろうとは想像できる！５分持てば安全な城と武器が手に入る！！』
「そういうことか！なんてずる賢・・・まさか葉月か！？」
『可能性はあるな・・・』
その嫌な可能性に対し、２人は黙る。
そこに再び爆発音が鳴り轟いた。それが何かと見上げるまもなく、離れた建物が爆破されガラガラと崩れ始める。
「・・・救出、失敗！」
『おいコラ海！』
「安全圏でほざくんじゃねぇ！大体なんで真幸を助けようなんてしてんだよ！」

『うるせぇ！俺だって見つけてから1分ぐらい悩んださ！思わず声かけちまったんだから仕方ねぇだろうが！』

コンビニからギリギリの脱出に成功した飛騨真幸は近くの携帯電話ショップからくすねた1台を片手に狭くて化け物共が進入できない路地裏を進んでいた。

装備がないに等しい彼ではどれだけ全力で走ってもエリア外へ出る前に化け物にやられてしまうと考えた四十万隆の指示だ。

とにかくこのままいけるところまで進んで、道幅が開けるようならばそこで待機、杉木海に迎えに来てもらう手筈になのだ。

が、

『道が塞がれてる！』

そんな不安極まりない海の台詞が携帯を介して漏れ、

『まさか葉月か！？』

そんな生存が絶望的なワードが飛び出し、

『救出、失敗！』

死刑宣告され、

『うるせぇ！俺だって見つけてから1分ぐらい悩んださ！思わず声かけちまったんだから仕方ねぇだろうが！』

最後に止めを刺された。

「ずいぶん都合のいい登場だと思ったら貴様！」

思わず口を挟む。

『ちっ！聞いてやがった・・・！

まぁいい、じゃあそういうことで後は頑張れ』

「最低だな！」

『正直これ以上突っ込んでも怪我しかしなさそうだからな。海も臨戦中だし、もうこっちでできることはねぇ。

・・・あぁ、下水道から逃げれば？』

開き直った投げやりな答えの後、

「・・・おい？・・・おい！」
通信は途絶えた。
「ちくしょー！！」
中途半端に助け、中途半端に見切られる。そんな彼らの友情もまた中途半端なのである。

＃

飛騨真幸を切り捨てた後、またいつロケットが飛んでくるか分からないような戦場から離脱した杉木海は程なくしてジャベリンタワーへと辿り着いた。
四十万隆の指示を受けるまでもなく、天に向かって突き出された槍状の建物は道しるべには申し分ない。化け物も指定エリア外にはいないのだから敵にだけ注意しておけば街中は比較的安全な場所と言えた。
もちろん”比較的”であって”絶対”ではないのだから、さらに安全だと確認済みの下水道を使った方が保身にもアイテムの補充にもなるのだが、隆の別の依頼もあってあえて人の通るだろう地上を経由せざるを得なかったのだ。
『仲間を集めろ』。
シンプルなその指示をこなすのに人を避けていては意味がない。
少なくてもある程度は信頼の置けるクラスメートが最優先、その他にも知り合いや同調してくれるプレーヤーがいれば片っ端からタワーにつれていく。詳しく聞かなくてもそのミッションの重要性は海にも理解できた。
体育祭時、葉月に対してクラスメート一丸となって対抗しようとしたものの、バラバラにされて1人1人潰されたという苦い経験がある彼らにとって、人数と手数というのは強者に抵抗するにあたって必要不可欠とも思える因子だ。
このゲームには少なくとも織神葉月という化け物より厄介な存在

がいることを彼らは知っている。だから知恵を絞らなければ勝ち目はないことも十分理解している。
まずは人数を集める。個人と多数ではどうしてもできてしまう手数の差こそが付け入る隙だ。対処しきれないほどの攻撃を浴びせて撃退、あるいは最悪味方ごと吹き飛ばしてでも倒すことができたなら、それは俺達の勝利である。
そんな存外鬼畜な思考を共有する１－Ｂの男子生徒２人は各々の方法で人を集め、ジャベリンタワーに集結したのだった。
朝風椎、そして朝風柏。
他知らないものの同調者らしい者が十数名。
最後に・・・・・飛騨真幸。
彼は呼ばれもしていないのに、ここまでやってきていた。
「「・・・・・・」」
そんな彼を隆と海はまじまじと眺める。
「何で生きてんの？」
「貴様ぁああ！！出ろ！表に出ろ！この人でなしぃぃいい！！」
隆の純粋すぎる疑問にぶち切れた彼を柏が羽交い絞めにして止める。
「まぁ、生きてて良かったじゃないか。・・・駒が１つ増えて」
「海ぃぃいい！」
「２人ともからかって遊ばない！」
椎に咎められて２人は肩をすくめた。
「しっかし、何だ隆もうちょいクラスの奴ら集めれたんじゃねぇのか？」
「仕方ねぇだろ、エリアが広すぎるんだから」
「葉月は除外だから・・・あと１０人か？」
「９人よ」
両手で１－Ｂの人数を数えながら出した数字に、訂正を入れたのは椎だった。
「ん？」

「亜子は犬死したわ」
本来犬にやらせることをやらされて死んだから犬死。そしてもう1つ、結局目的は果たせなかったから犬死。
うまいこと言ったと彼女は満足げだが、その意味を彼らが知っているわけもないし、大体させた本人が言っていい台詞ではない。
「そうか・・・システムはいいんちょー組に任せようと思ってたんだがな・・・。
まぁ、とりあえずここはいいんちょーに任せる。あと2人ぐらいでオペレーター回してくれ。俺は外に出たい」

＃

時間軸を大分戻したゲームスタート直後、とある高層ビルのフロアにて。
目の前に化け物という不意打ちにもほどがある突然の逆境に立たされた西谷絵梨は、彼女なりに鍛えられた迅速な判断力でモンスターの一撃が及ぶ前に横っ跳びしそのまま町並みを透すガラス壁を突き破り脱出を図ろうとするも、ガンアクションという性質上防弾ガラスになっていた見た目ほど脆くない防壁へと激突、悶えているところに化け物の一撃を食らい、建物の廊下を漫画の誇張表現のようにバウンドを繰り返してライフゲージをいきなり大幅に減らすという悲惨なスタートを切った。
その後も、武器など最初の一撃で手放してしまって対抗手段がなくなった彼女は我武者羅に逃走を図るも、運の悪いことに行く先々に化け物に出会うという普段の行いに対する報いの如く仕打ちを受け――――、
それでも結論から言えば彼女はまだ生きていた。
満身創痍もいいところだったが、持ち前の不屈の心（ねんちゃくしつな）で乗り切り、化け物を殺すに効果的な手段も編み出し、現在はスタートした場所から遥か離れたエリアにまで足を運び治療薬を求めて歩き回ってい

る。

「どこかにあるはずなんだけどなぁ・・・」

ＣＰの強さやそれと比較しての武器の弱さから考えてもライフゲージを回復させるアイテムや回復施設がそれなりの数用意されているはずだと考えた彼女だったが、それがなかなか見つからない。校長の性格だ。そこそこ難易度が高くなければつまらない、と言っても難しすぎては意味がない。だからこそ、積極的に行動を起こそうとするプレーヤーに対しては見合ったアイテムが手に入るように設定されているはずなのだが・・・。

この地区に関して言えば下水道は気味の悪い食人植物に占拠されていたし、周りにある建物はどれもオフィスビルやテナントビルで治療・回復といったワードを連想できる病院やホテルは見当たらない。完全にオフィス街にきてしまったらしい。それもこれも地図がないからだと愚痴をいいながらも、ならば仕方ないと分布的にはどこにでも落ちていると思われる治療薬を探しているのだ。

それも猶予は全くと言っていいほどない。イベント1からイベント2までのシフトの早さから考えて、今のイベントが終了すると同時に次がくるという可能性はかなり高い。イベント2の文章には『３０分間』とあった。３０分、その間が彼女にとっての勝負であり、既に時間は残り２０分を切っているのだ。

任意という形のイベント1はともかくイベント2はプレーヤーを追い詰めるタイプのモノだった。ある程度予測できていたタイプのイベントではあったが、こういった類の発生イベントは終盤に向けて過酷さを増すため、プレイ側からすれば迷惑きわまりない第3の敵となる。その敵が序盤であんなえげつない手を打ってきたのだ。今後の内容など考えたくもないが、今の彼女では耐え切れないことは確実だ。

次にこのタイプのイベントがくる前にライフを回復しなければアウト。つまりタイムチャレンジである。

「イベント2でＣＰ（バケモノ）がいないこの時間がチャンスだっていうのに！」

苛立ちながら新たな武器であるポリタンク入りのガソリンをぐるぐると回す。打撃に加え発火、下手な拳銃より扱いやすい。何よりガソリンスタンドを使えば弾薬よりも補充が楽なのだ。

プレーヤーの皆が皆して敵との遭遇を恐れてか街中は不幸にも敵と遭遇してしまったらしい連中の銃撃音以外の気配らしい気配はない。それはありがたくもあるのだが、逆に言えば味方にめぐり会える機会もないということで、有益な情報やアイテムのお恵みといったラッキーも期待できないということでもある。

探しはするものの、見つけやすい場所にわざと置かれていたアイテムはほとんど残っていない。

（こりゃあ、リタイヤも近いか・・・）

恵まれなさすぎたと客観的に自分の状況を判断する。

元々即死しかねないところからのスタートだったのだ。ここまでやってこれただけで充分だろうと満足もできる。

さて、そうなってくると問題はどうリタイヤするかだ。

化け物にやられるのは勘弁したい。自殺するにも方法がガソリンでの焼死あるいは爆死というのはかなり勇気のいる選択だろう。

（となると銃？あーもう、結局アイテムじゃない！）

「拳銃カムヒア――――！」

なすこと全てがうまく運ばない苛立ちがついに怒りが爆発、ガーッと両手を挙げて叫んだ。

傍から見てその姿は間抜けそのものだった。

「ほーぅ、そんなに銃弾が欲しいか」

「・・・・・・」

・・・恥ずかしい姿のまま、彼女は後方からの声に固まる。

錆付いた螺子を回すような動作で振り向くと朽網釧がＰＤＷを構えて立っていた。

「やっと見つけたぞ絵ロ梨（エリ）」

「見つかっちゃったよ釧ちゃん」
釧は陰影深い笑みを絵梨は引きつった笑みを浮かべながら対峙する。彼女の両腕はあがったままだが、意味合いはやり場のない苛立ち発散のポーズから勘弁(ホールドアップ)してくださいに変わっている。
ＰＤＷはＰｅｒｓｏｎａｌ　Ｄｅｆｅｎｓｅ　Ｗｅａｐｏｎ、自己防衛用の武器と銘打ってはいるが、『携帯性に優れ、片手での取り扱いが可能、加えてボディアーマーに対して効果のある』ことを求めて作られた銃器である。
防御は防御でも、『攻撃は最大の防御なり』という理念に基づいて開発されたＰＤＷは充分に殺傷能力のある武器だ。
「あれー?私達クラスメートだよね?」
「あぁ、クラスメートだな」
「友達だよね?」
「友達だな」
「仲間だよね?」
「いや、敵だ」
「・・・・・・」
どうやらお互いの友情には齟齬があるらしい。
「私にはくしろんの意図が分からないなぁ・・・」
「・・・報復されるような行動に身に覚えがないと?」
その言葉に彼女はゆるりと首を振る。
「ふっ」
あげ続けていた腕をおろして肩をすくめた。
「――――知れたことを」
踵を返して全速力。
報復の理由など彼女が一番知っている。

＃

イベント3

任意ミッション：現時刻より15分後、エリア13－D－A1－Street322－point19を武器を積んだ輸送トラックが通過する。襲撃せよ。

どこかの誰かさんがゲーム開始直後から今までの行いに対しての罰を受け、復讐者に追われるという自業自得な状況に身を置いている頃、彼女の考えたとおりイベント2の終了と入れ替わりにイベント3が発令された。

それと同時に一箇所に集まっていたCPも通常シフトに戻りエリア全体に散らばり、またもや突如転移してきた化け物共に対応させられるプレーヤが続出、30分の間とはいえ僅かながら秩序の守られていたゲームの世界は再び最初の喧騒と混乱を取り戻す。

心構えをしない内に化け物と遭遇し無駄弾を連発する者、使うこともできずに武器を破壊される者、そして武器を拾い使用する青い変種（バケモノ）。

撃てばなくなり、壊されれば丸腰、拾われれば見つからない。

ものの3分ほどで多くのプレーヤーが武器を損失し、そして思う。

確か、今度のミッションは――――。

それこそが校長の思惑である。

「D－A1・・・D－A1・・・ここら辺だよな」

配布されていない地図の代わりに自分で書いた簡易図を頼って問題の322番道路を探すのは、監視システムを朝風椎に任せた四十万隆と杉木海含め10名ほどのジャベリンタワー・グループである。

隆の誘導の下海が拾い集めた武器がそれなりにタワーに備蓄されている彼らだが、敵に武器が渡るのを恐れて今回の任意ミッションに参加することに決めた。

武器はいくらあっても邪魔にはならない。しかし敵は邪魔だ。

そんな実に単純明快な理由でもって、序盤何もできないままリタイヤするという最悪のパターンから逃れて体勢を整えられた彼らは、勝ちにいく構えでゲームに取り組む姿勢を防御から攻撃に転じたのだ。

イベント3は任意といいつつも、誰でも参加できるミッションではない。いまだ自分の座標位置が分かっていないプレーヤーもいるだろう中で、イベント1から変わらずの不親切な場所指定だ。予告のあった通過位置が分かっている者でなければ参加できないようにわざと仕組まれている。さらに言えばトラック1台分という武器は個人では扱いきれないことからも集団に向けて発信されたものだと分かるし、つまりはそれは全くの無防備の個人が争えるものでもない。

地図を持った武装集団。それが今回のイベントの参加条件というわけであり、この時点にのろのろと個人でアイテム漁りに精を出しているような愚か者を振るい落とす。それが今回のミッションの趣旨である。

これより以後、ゲームはグループ戦になる。

そんな予感が隆達にはあった。

監視システムを備えたジャベリンタワーは確かに篭城にはうってつけの場所ではあったが、それにしても抵抗するだけの武器は必要だ。

先述したとおり化け物や敵プレーヤーに囲まれれば完全に防御の回ることになれば負けは時間の問題となる。制限時間があるゲームならまだしもバトルロワイヤルである今回の場合ではそれでは勝てない。

学園祭で疲労の溜まっている精神状態であるとはいえ、勝ちたいは勝ちたい。せっかくの滅多にない機会だし、そもそも超能力などという非現実的なファクターを生活に取り入れたくて特別指定学園に通うような連中なのだ、こういう類の遊戯は望むところである。

団体戦、それもそれなりに武器を装備した連中相手と面倒なこと

請け合いだが、それでも勝敗を左右する以上看過できない。
さて、道路を線で模しただけの地図を何度も確認してやっと件のトラックが通るというエリア内に進入することができた彼らは、一旦足を止めて当たりを見渡す。
問題はここからだ。
敵は既にいる。
確認こそまだできていないが、自分達が一番乗りなどというのはいくらなんでも都合のよさ過ぎる考えだ。
地図を持っていてかつ自分達よりポイントに近かったグループがすでに張っていると彼らは最初から予測していた。
だから、問題はここからどうするか。
敵を蹴散らして好位置を確保するのか、あるいは時間ギリギリまで身を潜めてヒット&アウェーといくのか。
トラックの通過まであと7分ほどある。
そこがつまりこのミッションのミソなのだろう。
アイテムとして落ちているわけではないから早い者勝ちとはいかない。先着者は時間まで自分のポジションを守り続けなければいけないし、後着者は時間内にそれを奪うか、あるいはトラックの通るその瞬間を狙うかしなければならない。
タイミングが全てだ。
（とにかく敵情が知りたい・・・が、３３２番道路までどう回り込む？）
敵とばったり遭ってしまえば戦闘は避けられない。できれば武器の消耗やリスクの少ないヒット&アウェー戦法を取りたいと考えている隆としては、見つからずかつ敵を見通せる配置を取りたい。
さらには実際敵地に踏み込まなければならないのだから、できる限り距離が短い死角が好ましい・・・。
「先遣隊がまず高所（たてもの）から様子を見る。敵の位置を確認してから実行部隊と援護部隊に分けて時間を待つ・・・ってのでいくか？」
監視システムの方は彼らがわざわざお手製の地図を使っているこ

とからも分かるように、別のことに集中しているため今回は非常時以外に頼る気はないのだ。
「まぁ無難だな。あとで来る連中の動きへの対応はどうする？」
「できれば交戦は避けたいけどなぁ・・・一番乗り（むこうさん）とドンパチ始めようなんて考えられたらさすがに止められねぇのが気がかりだな」
「不意を突けないからな・・・。まぁ、その場合もできるだけ様子見ってことで。状況に合わせて柔軟にいこうぜ」
「・・・つまりはただの考えなしじゃねぇかよ」
そうとも言う。笑いながら言って、海は後ろを振り向いた。
「先遣隊3名、各々別所で上から戦場を監視。残り１４人を突撃部隊2チーム、予備でもう1チームに分けていきたいと思います」

狙撃用ライフル銃（スプリングフィールドM21）のスコープを使って程よく離れた高所から見下ろした３３２番道路１９番地点に人影を3つほどみとめて、海はすっかり馴染んだイヤホンマイクでそれを伝える。
「取り合えずポイントに3人確認だ。ありゃ囮（デコイ）だな。・・・・・・お、ドラッグストアの店頭ワゴンに1・・・いや2人」
『他には？』
「見えない。が、囮の位置的に候補は3つだ」
開けた道路のど真ん中では隠れられる場所は多くはない。それは彼が一番良く知っている。
彼自身が隠れていた道路中央の潅木、ガラスの割られたコンビニの中、そしてこれまた彼も使った歩行者道路のマンホール。最後の1つは飛び出してから攻撃に転じるまでにタイムロスができるために可能性は低いと思われる。
そこまで伝えて、彼はもう1度トラックの通る位置に置かれた囮に視線を移す。
「ん・・・？何だ？何か・・・地面に・・・・・・地雷か？」
『地雷ぃい？』

「ぽいぞ。地面に固定されてる。まさかトラック転倒させる気か？」
目的の物がトラックで運搬されるからこそ可能なヒット&アウェー戦法を採ろうとしている彼らにとって、それは避けたい事態だ。
『いや・・・地雷は地雷でも爆発じゃなくて殺傷片を飛ばすタイプだろ。パンクで停止させるつもりだな』
「なるほど・・・それは都合がいいな。トラック停車は連中にやらせよう」
彼が見る限り他に目ぼしい情報はない。囮らしき3人にも当分動きがなさそうだと踏んで、1度、目を休めようとスコープから目を離した。
それから改めて現在時刻を確認――――
――ガキャンッ（パヂッ）！・・・ポンッ
しようと顔をあげた瞬間そんな3種類の音が響いた。
衝撃波とライフルの破砕音が同時に、その後で遠方からの発砲音。
それが意味する事実は明快だ。狙撃された。
「やべぇ！スナイパーがいるぞ！」
『ちっ、なくはないと思ってたが・・・先遣隊は屋内に退避！』
転がってエレベーターのところまで下がった海は　扉が閉まらないように挟ませておいた警棒を蹴り飛ばす。一間置いて開きだした箱型リフトに背中から倒れこむと深く考えず4階のボタンを押した。
「連中に感ずかれたのはまずいな・・・」
狙撃手が連中の仲間かどうかは確認できないが、銃声を聞かれた以上不意打ちは難しい。早くも彼らの最善策は破綻してしまった。
『まぁどうせこうなってたろうさ。問題はこれから・・・くそ、こっちもか』
「あ？」
『バレたらしい！通信切るぞ！』
プラグを抜いた時のような音を最後に何も発しなくなったイヤホ

ンマイクを外して首にかける。ただでさえ汗のせいで耳が痒くなるのだ。使わない間も装着し続けたいとは思えない。

（さて）

自分にそう言い聞かせ、海はエレベーターから降りた。

（どうやら状況はよろしくないらしいが・・・どうする？）

いきなり1階まで降りてそこで構えていた敵にバッタリなんて様は間抜けすぎる。そう考えてとりあえず4階という高くも低くもないフロアを選んだのだが、場所が割れているこの建物にいる限り危険であることには変わりない。

とりあえずは現状把握と廊下に張り付いて窓ガラスから外の様子をうかがう。

「・・・・・・」

絶句。そこには想像以上の光景があった。

「・・・うそだろ」

マンホールからゾロゾロと武装プレーヤーが何人も這い出している。少なくても２０は超えているだろう。

しかも、その内５名が自分のいるビルディングに向かってきていた。

隆達実行部隊が襲われたことからほとんど分かっていたことだが、これで１００％スナイパーとポイントにいた連中は仲間と確定だ。

それだけでも厄介なのに、マンホール１つからあの人数だ。定石、リスク分散から主戦地が定まっていないこの状況では戦力は分散させるだろう。それでもなおあの数だとすれば、連中はかなりの大所帯だ。対して自分達は１７名、太刀打ちできる戦力差ではない。それこそヒット&アウェーならともかく、すでに交戦中なのだ。

「ヤバイな・・・」

そのことを仲間に連絡したくても、それよりまず自分の身が危ない。

はっと気がついて振り向くと、エレベーターのランプはさっきからずっと４階を指している。連中はもうすぐ下だ。

いよいよヤバい。
彼はフロアに入っていた何かのオフィスに侵入し、スライド式のドアを半分開けたままに置くのデスクの影へと隠れた。
（使える・・・武器は！？）
フル装備できたつもりだったが、複数相手にうまく立ち回れる自信はない。
現在彼が持ち合わせているのは、９ｍｍ弾、装弾数８発の自動拳銃（S&W M39）２丁にそのマガジンを５本、Ｍ２６（レモン）手榴弾が３個、ダガーナイフ１本、そして最後に例のライフルだったのだが、それは既に潰されている。
防弾ベストで防御力をあげているとはいえ、どれもこれも短距離から中距離用の武器だ。
マンホールから現れた彼らの多くが連射（マシンガン）のできる軽機関銃を持っているのを彼は確認している。
「あーくそ！こっちも機関銃ぐらい持っとくべきだったか」
ぼやいても仕方ないのは分かっているがぼやかずにいられない。
余裕なく腕を震わせながら拳銃と手榴弾１個を手元に床に転がる。
チャンスは１度きり、連中が入ってくるその一瞬が勝負だ。
近づいてくる足音に心臓を跳ね上がらせながら、ギリギリ視界の端にドアが映る程度で顔も隠す。
ガジッとスパイクシューズがリノリウムを捉える音がやけに大きく響いた。ドアの前で止まったらしい。
わざと開けたドアに気づき、室内の様子を見ている。そう判断し、まずはレモン状の手榴弾を軽く握り締める。
問題はタイミング。
（何時だ？何時くる・・・！）
ゆっくりと滲むように時間は過ぎていく。
そして、次の瞬間沈殿した静寂は爆音にかき乱された。
敵に狙いを定めるという行為を惚れ惚れするほど潔く捨てた掃射。
侵入時に狙われる危険性を下げるために放たれた文字通りの捨て弾

だ。
いるならいるで防壁で身を隠しながらの先制攻撃になり、いないならいないで安全確認になる。
ただし、弾を無駄に消費することになるという難点から良い手とは言い難い。
まぁそれでも、より慎重に行動しているという意味では評価できる戦法だ。撃ち渋る必要のないほど弾数があるならなおのこと。
無論、そうされる可能性自体は分かっていた海は身体を低く保って覚悟を決め、心構えしたかいあって弾雨の中声をあげたり飛び出すことなく何とか堪えることができた。
（さぁてさて・・・）
今度こそ、くる。
耳を引き裂くような発破音が止むと同時に、手榴弾のピンを引き抜く。狙いのタイミングで抜いては間に合わない。
掃射を経て安全確保の作業を終えた彼らがついに侵入段階に入る。
まずは1人が前に出て、その後ろにもう1人。
（――――ここだ！）
1人目が室内一歩踏み出す前にレモンを投げる。できるだけ目立つように高くゆっくりと、顔にめがけて。
「・・・・・ッ！」
どうやら既にここにはいないだろうと高を括っていたらしい彼は思考を遮るいきなりの異物の登場に、一瞬呆け――――、
その隙に彼めがけて海は手榴弾の爆発を待たず、始めから大まかに照準を合わせていた拳銃の引き金を引いた。
1、2ときて3発目で頭部に命中。これでリタイヤ。
不意打ちは成功だ。そう、ここまでが不意打ち。モノで注意をそらすなどという子供だましでは1人はいけても2人目を撃ち取るほどの時間稼ぎはできないし、1人目が盾になってダメージすら負わせられないことすらある。
だからこその手榴弾だ。

頭を打たれた彼が倒れこみ後ろのもう1人を怯ませることによって生まれた2つ目の隙、そのタイムロス中に今度こそ酸っぱい俗称で呼ばれる手榴弾は爆発した。

「よぉおし！！」

3人目がいないことを確認して休む間もなく、海は次の作業に取り掛かる。消火器と放水ホース、これを使ってあとは逃げるだけだ。

建物に入ったのは5人。内2人がこうして踏み込んできたことからして、あとの3人は玄関とエレベーター、裏口、階段の3点に張っていると予想がつく。

つまり、実際やってくる2人を退けてしまえば、他の連中は駆けつけるにしても時間が掛かるだろう。

見張られるよりも追われる方が対処が面倒であるのは言うまでもなく、とにかく厄介だった2人を倒した以上あとはうまく監視を潜り抜ければ逃げることはできる。

時間稼ぎのために消火器の中身を部屋中にぶちまけてからホースの端を手ごろな場所に結び、外壁に垂らしたそれを使ってほとんど一気に滑り降りた。

隆達実行部隊とその援護隊は海が狙撃された後にマンホールから這い出した不気味な部隊に襲われ、防戦とも言えないひたすらの逃走に体力ゲージは既にレッドゾーンだった。

走って走っても引き剥がせない、隠れてもピンポイントで探し当てる、待ち伏せすれば背中に回られる。

上からの監視は確実で、それをどうにかしない限りまともに動けない。

そう確信に至った一応リーダーを務めている隆は、思考を切り替えこちらの目である監視システムに連絡、スナイパーの位置から死角を割り出した。

あとは死角で実際追ってくる連中を撒けばいい。

連中も使っているマンホールが使えればもう少し楽だったのだが、そうもいかず分岐路を使った最も原始的な方法で今まさにそれを行っている最中である。

あまりにも地道なその作業は半ば成功していると言え、追ってくる連中の数は最初ほど多くはない。

が、だからこのまま粘って逃げ続ければいいというわけでもないのだ。隆達が死角の範囲内で移動しているということは、言い換えれば必ずその範囲にはいるということであり、例え全員撒けて隠れられたとしても時間稼ぎにしかならない。

そもそもが追う側のタッチが銃弾というこの鬼ごっこは完全に逃げる側に不利なゲーム条件になっている。

（そろそろ頃合か・・・）

確実に隙を突けるタイミングを狙わなければ成功は難しい不意打ちを、逃げ惑いながら実行するのに踏ん切りがつかなかった隆だったが、成功率が低かろうと判断を下さなければならないところまできてた。

人数を減らしたことで賭けれる程度には勝率は上がっている。

と、そこで、

『隆、そっちはどうなってる？』

海からの連絡が入ってきた。

「絶賛逃走中だ馬鹿野郎！」

『はっ、ご愁傷様。何とかこっちは逃げ切れたぞ』

「だったら上のスナイパー何とかしてくれ。動くに動けねぇ」

スナイパーの位置を伝えてから、今度は同行している４人の仲間に対して敵に聞こえないようマイク越しにトラップを仕掛ける旨を伝える。

「次の曲がり角で仕掛けますんで射撃準備よろしくお願いします」

リーダーとはいえ先輩に敬語で指示、前を行く彼らが分岐路を左に曲がっていくのを確認して、自分も左折する際にバックパックのサイドポケットに挟んでおいた接着式の簡易地雷を壁に貼り付けた。

圧センサーやリモコン作動ではなく時限式の実にシンプルな代物だが威力は高い地雷だ。
連中との距離を計算してタイマーはすでにセットし終えてある。適度に離れたところで立ち止まって銃を構えてスタンバイも完了し、さてここからだと意気込むメンバー。途中から確認できていないがミッションまでもう時間はないだろう。
大きさを増す足音に敵の接近を感じながら、セットしたタイマーと一致していることを何度も確かめ銃撃を開始するタイミングを見計らう。
（6・・・5・・・4・・・！）
あと3秒。そこまできて、ピタリとバラバラだった足音が止んだ。
「あ・・・？」
不意打ちを仕掛けてむしろ不意（いきなり）のできごとに間抜けな声を出した次の瞬間、3秒後がきて壁もろとも歩道を吹き飛ばした。
そして再び始まる接近の気配。
（ヤロウ電波を盗聴してやがるッ！）
あからさまな待ち伏せへの対応にそう確信し、思わずついて出そうになったせりふを何とか飲み込む。
（・・・よし）
待ち伏せから再びの逃亡に転じつつ、さらに悪化した状況下に隆は口を歪めた。
盗聴されているというのなら、むしろ手っ取り早く隙を突ける。
（誤報を流して今度こそ嵌めてやる！）

空気を切り裂く4枚羽の爆音は、よく使われるバタバタというヘリコプターの擬音とはかけ離れている。
自分を狙った狙撃手の巣に向かって走っていた海はその轟く圧倒的な存在感に足を止めた。
攻撃ヘリ。そう呼ばれる、確かに広義的には武器なのだろう代物

をいったい誰が持ち出したのか。そんな疑問などこの際どうだっていい。

問題はこの戦場が生身の人間から戦闘車両によるものになりはじめているということだ。

ついにトラック通過の時刻が迫り、他の勢力が動き出したらしい。

今まですっかり忘れていた時間を確認すれば、もはや猶予は3分ほど。スナイパー抹殺という援護任務である彼はともかく実行部隊である隆達にはもう時間の余裕はない。

（泣きっ面に蜂だな、くそ！）

しかし、そう思ったのも束の間、今度は空を引き裂く轟音が白い軌道を残しながら頭上を横切った。

ソレは海が前に見たのと同じタイプのミサイルで、本物の爆音とともに鉄のトンボを撃墜する。ついでに落ちてきたヘリの下敷きになって敵プレーヤーが脱落していった。

「・・・・・」

もはや拳銃や手榴弾数個で相手になる敵ではない。それこそ前回と同様に逃亡を図ろうかと真剣に考えたが、1度やってるだけに逃げてばかりでは情けない気もする。

時間がない中での貴重な数秒を無駄にしてから、止まったまま歩き出せない足を何とか動かして彼は目的地である高層ビルへと向かった。

４３階建て、通常エレベーター5台、内1つがシースルーエレベーター、最上階は展望レストランというありがちな配置で屋上には業務用通路より侵入できる。

各フロアに多くの企業が入居する形で『町』を形成し、映画館・カラオケなどの娯楽施設の豊富さからレジャースポットとしてプレーヤー以外の人間がいないこの世界で人気を博している、らしい。

それがエリア１３－Ｄ－Ａ１－Ｓｔｒｅｅｔ３２２－ｐｏｉｎｔ１９付近において最も高い摩天楼の簡単な内部構造だ。

その情報をエントランスのパンフレットや設置地図で確認して最

上階まで唯一直通のシースルーに乗り込む。
通常の短いエレベーターに比べて断然速い加速と昇降に少しよろめいて、この分だと1分もしない内に目的階まで上がるだろうと視線をランプから外へと移す。
ところどころ黒煙が上がり、道路を戦車らしき影や人が動く様子がいくらか見える。
ガラス張りの箱型からは戦場がよく見えるが、しかしそれは向こうからもこちらが見通せるということに他ならないのだから、彼は今この状況で見つからないかと内心気が気でなかった。
安全上いくら丈夫な素材を使っていようとも、ミサイルが飛んでこれば一巻の終わりだ。この中では逃げることもできない。そしてミサイルの存在は既に確認している。
（1人相手にあんなモノぶっ放すとは思えないが・・・やっぱ他のにすればよかったか）
ハラハライライラしながらドアの開くのを待って、開いた瞬間飛び込むようにレストランフロアへ。あとは階段から屋上に上がるだけだ。
テーブルやバイキング用の台のある表からバックヤードに回ってさらに食材運搬に使われているだろう通路に入る。
レストランの作業通路にもなっている作業用エレベーターに通ずる廊下の奥、『非常時以外立ち入り禁止』のプレートのかかった扉の向こうに階段はすぐに見つかった。
もうその上は敵のいる戦場だ。
途中冷蔵庫からくすねたゼリー飲料を口に咥えつつ、1度立ち止まって装備を用意する。
S&ampｐ;Ｗ　Ｍ３９のマガジンを確認して、予備のモノは取りやすいようにポケットの中で何度も位置を変えてみた。もう1丁も弄って自分を納得させてからしまう。
もう引き返せない。
ここでしくじれば隆達の行動は制限されたまま、武器も手に入れ

ることもできずに骨折り損となるだろう。最悪、武器を得た敵にそのまま襲われ全滅もありうる。

大きく深呼吸をしてから階段を上る。

足音を響かせないように、呼吸音にも気を使って息を殺し、ゆっくりと前方を確認しながら着実に。

最後の難関である屋上に出るための鉄扉のノブを慎重に回して、鉄同士が擦れて音を出さないように力を込めて開けていく。

最初は線だった白い光が面をなしてやがて屋上の風景を広げる。

実に分かりやすく、その一直線上に1人の女性が寝そべっていた。

ライフルは三脚ではなく麻布製のクッションを使用しているらしいことが背中越しに見て取れる。おそらくあれの方が銃の向きを変えやすいのだろう。身体の横にペットボトルを数本並べてあり、さらにその脇に置かれたラジオが恐ろしいことにあるはずもない野球中継を流していた。

耳を覆って守るタイプヘッドホンとラジオの音が自分の気配を消してくれそうなことに感謝して彼は屋上に足を踏み入れる。

――――さて、ここで1つ思い出してほしい。

今この状況に違和感(おかしなところ)はないだろうか？

スナイパーは最も早くやってきた先着組の一員であり、地上にて隆達を襲っていた連中は彼女の目を利用していた。

そして、盗聴器も使っていた。

そのことを知る前に、隆は海と狙撃手を狙うように連絡している。

だとするなら、必然的に連中の仲間である彼女はそのことを事前に知れたはずなのだ。

自分の危険を知っていて何故彼女は屋上唯一の侵入経路に平然と背を向けていられるのか？

その不自然さに、盗聴器のことを知らされていない海が気づけないのは仕方ないことだが、ではどうして彼女はそこにいるのだろうか？

他に護衛の仲間がいた？
だとすれば既に彼は襲撃されているだろう。その隙はいくらでもあった。
とすると、その理由は１つ。
襲撃についての情報を知ることができなかったから。
ならそれは何故？
既に彼女が事切れていたからである。

――ガチッ

後頭部に押し付けられた硬い感触。
狙う者が狙われる者になり、けれど先に殺され囮と化して、狙う者が狙われる。
振り向く間もなく、手をあげることすら許されず、容赦ない一撃が彼をこの世から消し去った。

海がどうやらやられたらしいことを追っ手を何とか返り討ちにした隆達はスナイパー抹殺の完了を確認する連絡で知った。
何度呼びかけても応答のない彼の安否は確かめる必要もなく、自分達を狙う鷹の目の健在も確かめるまでもない。
第三者の介入を知らない彼らがまさか狙撃主もが既に消し去られているなどと発想できるわけがないのだ。厄介な遠距離からの攻撃にどう対処するか、事実を知っている立場から言って無駄でしかない問題の解答を彼らは求めていた。
残り時間僅か１分５０秒。
この時間にまでなって逃げてはいられないし、絶好の隙（タイミング）を計る余裕もない。捨て身でアタックする以外もはや採れる戦法はなく、そこにきてスナイパーその存在は邪魔のもほどがある。どうしても無防備になってしまうヒット&アウェーをやるには厳しい状況だ。
しかし、それでもやるしかないという状況を歯がゆく思いながら、

いくらか数を減らしつつも生き残った実行部隊の面々は最短ルートで問題のポイントに向かう。

最初こそ隆達ともう1つの巨大勢力との争いだった抗争はいつの間にか敵味方入り乱れての大乱闘に発展していて、狭く入り組んだ地形での歩兵戦に誰が投下したのか戦車の残骸がまだ火をくすぶらせていたり、素手では持ち運べない銃機関銃を軽トラックの荷台に乗せた2人組みが道路を激走していたりとポイントに近づくにつれて騒がしさは増していく。

戦闘などに割く余裕のない彼らは向けられた銃弾に応じることもできずにただひたすら走った。

間に合うか、どうか。

それが最重要課題だ。それ以外は捨て置くほかない。

が、そんな事情を敵が構ってくれるはずがなく、グレネードランチャーの砲撃が彼らの行く手を阻む。

ただでさえ狙撃というリスクを抱えての行動を邪魔されて苛立ちが最高潮に、

「邪魔だボケェェエ！」

物陰で銃撃をやり過ごすこともできない隆は持っていた棒状柄付手榴弾（ポテトマッシャー）を連続して3本ぶん投げた。

なりふり構わないその反撃に連中が怯んだ隙にそのまま突っ走る。

自身が爆発に巻き込まれかねない愚行だが、それぐらいしかできることがないのだ。

けれども、そこまでしても敵は進む先に次から次へと現れる。埒が明かない。

（くそがっ、どうする！？）

形勢の不利加減を改めて実感して心中で悪態を吐く隆。

このままではまずい。苛立ちの次は焦りがいよいよ上限にまで達して額を流れる汗に別の意味が含まれる。

突撃隊・隆チームは既に3人。もう1班は2人らしいし、援護部隊は渦中に侵入するに至らず他の敵と交戦中で間に合わない。

つまり、そしてしかし、絶体絶命という、使ったあとに大抵救世主が現れるが故にありがたみを失った言葉はこういう時に使うのだろう。

「隆！乗れッ！」

後ろからそんな声とブレーキ音が響いた。

振り向けば運転席に矢崎聡一を乗せた黒いワゴンがそこにある。

「でかした聡一！」

「どうだ？仲間の危機に駆けつける俺、カッコよくない？」

軽口を叩く聡一に隆は無言で第４発目のポテトマッシャーを振り上げた。

「ゴメンなさいふざけました冗談ですハイ」

ワゴンを再び発進させて、目指すは今度こそトラックの現れる場所だ。

これでひとまず銃撃の脅威から免れた。その安心感から隆を含めた３人は安堵の溜め息を吐く。それが終わるのを待って聡一が話しかけてきた。

「ところで隆、お前の方にクラスの奴らは何人集まってるんだ？」

「俺入れて２人だ。海がいたんだがどうもやられたっぽい。椎の話じゃ亜子もやられたらしいからあと８人だな」

「はー案外揃ってないのな。俺も結構色んな所走ってみたんだが、思った以上に結構な人数やられてるぞ」

「あの化け物のせいか？」

「それもあるし普通に銃撃戦に巻き込まれたりな。設定厳しいすぎんだよこのゲーム。もう個人の奴はほとんどいないはずだ」

「・・・にもかかわらず俺らのグループにはクラスメートが３人ね。やられてるのか別のグループなのか、どっちにしても嬉しくない情報だ」

全くだと肩を竦めて聡一は分岐路を右折、ワゴンは開けた８車線である３３２番道路に入った。あとはひたすら１９ポイントを目指す。

走行中も弾雨を浴びる車体だが、装甲車に改造された車種らしく走っている分には銃弾は貫通してこないのが救いだ。
「全くだな。そうだ、隆は見たか巡航ミサイル（トマホーク）」
「ミサイルは見た。エリア５－Ｂ－Ｂ７辺りの高層ビルぶっ潰して大通りを塞いでる連中の武器っぽかったな」
「ああ、発火能力者（パイロキネシス）のグループだ。ネットワークで集まったんだと。他のＰＫより団結力強いらしいな。お前の方には連絡行かなかったのか？」
「連絡がつかなかったか、そもそもそのグループのリーダーって兎傘さんだろ。俺がクラスの方でつるむって分かってただろうよ」
「ふーん・・・・・お！お出ましだ」
言われて自分の装備を再確認していた隆は顔を上げた。フロントウィンドウの向こうに大型の灰色がかったトラックが走っているのが見える。
運よくちょうど自分達の走っている車線に現れたその車はどう考えても道路を走ってきたとは思えない。実際、ずっと前方を向いていた聡一はいきなり前方にトラックがワープしてきたのを目の当たりにしていた。
ゲームの裏側、制作上のバグを見てしまったようで、何ともモヤモヤしたモノが胸に溜まるのを感じながら、彼はワゴンのスピードを上げた。
だが、もちろんそんな冥界からいきなり現れた幽霊車のような登場の仕方も予想の内だ。でなければ、彼らも連中もここにいない。身もふたもない話、ヘリでも飛ばして指定されたポイントにくる前のトラックを襲撃すればその方がリスクはないのである。
しかし、いつもはそういったルール上の隙などを裏手に取る手法を好む校長だが、今回は作る側に回っている。突かせたくてわざと作る好きならともかく、『プレーヤーを追い詰めたい』とこのイベントを作ったのならば、そんな思惑外れな行動を取らせるわけがない。

イベントがプレーヤーをいたぶるためにあることはイベント2で確認済みで、そのためには化け物の瞬間移動などという仮想現実なのにリアリティーのない演出までやってのけることも確認済み。

ならば、トラックにしてもポイント19にいきなり現れると考えるのが妥当だ。

校長についてよく知っている者達は、だからこそ危険を冒して件の場所へと集結している。

「さぁて、どうする？どうやって止めるんだ？」

「そう・・・だな。やっぱ降り――――ッヤバイ！聡一止まれ！」

「あ？」

「連中が地雷仕掛けてんのすっかり忘れてた！」

話の話題に上がって、かつアスファルトの上に乗った銀色の円盤を視界が捉えたところでやっとそのことを思い出した隆の声に、聡一が何とか反応、進行方向を斜めに反らす。

だが、そんなこととは無関係に直進するトラックは赤外線センサー式地雷の下を通り、

――バシュッ！

そんな今まで何度も聴いた爆音とは違う破裂音の中に金属を裂くような音が混じった異音がワゴン車をも通り過ぎた。

カスタム使用の自動車だ、パンクぐらい何ともないのだが、ガクンという揺れにハンドルを誤って切り、車体は大きく傾く。何とか四輪を地面に着けたかと思うとあらぬ方向へと進路を変えた車の先にショーウィンドウが見える。

何とかブレーキを踏み激突を免れた隆達だったが、トラックからいくらか離れてしまった。

車体から降りてパンクにより停止したトラックへ急ぐも、すでに発火能力（パイロキネシス）者の連中が先行している。

その背中に向けて銃弾を浴びせてはみるものの、防弾着を着ている連中に大してダメージを与えられはしない。

止めることもできず、追いつくにはゴールまでの距離が近すぎる。

連中の内2人が運転席と助手席双方に回り込み、フロントドアを開けた。
そして、
「「は？」」
そんな間の抜けた声を出す。
幽霊車。その比喩から受ける印象は無人で彷徨っているというモノではないだろうか？
もちろん、神出鬼没な出現についても幽霊車のイメージではあるけども、幽霊列車ならぬ幽霊車などという比喩表現を使ったことから分かるとおり、彼らは当然ながらトラックは無人で走っていると思い込んでいた。
当たり前だ。イベント2の化け物ワープ、そして今回のトラック登場の仕方。そんな非現実的なモノを見ておいて、今更無人で走るトラックの存在を疑う者などいない。
しかしながら、もしここに久遠未来がいたのなら、自慢げに講釈を垂れるだろう。
『トラックは乗り物ですよ？動いている以上、誰かが運転してるに決まってるじゃないですかー』
そういうわけで、連中2人が開けたドア、その運転席にいたのは赤い体表の化け物であり、
「「はぁあ！？」」
ソレは徐に手を伸ばして拳銃を手に取ると襲撃者たる人間の頭を打ち抜いた。
そんな様子を間近で見せ付けられて、隆や聡一達はぶつけようのない怒りを天に向かって叫ぶ。
「「校長ぉおお――――ッ！！」」
前のりになりながらも何とかブレーキのきいた足を無理にひねってユーターン、もちろん逃げる先はワゴン車だ。後ろではトラックから降りた化け物が新たに持ち運びできるようにはできていないはずの機関銃を持ち上げている。

「ちくしょー！」
最後の最後まであの風貌も中身も中学生な校長の手の平で踊らされている自分達の情けないナリにそう言わずにはいられない。
「聡一お前武器は！？」
「ふはははは！俺の武器はこれだくそったれ！」
聡一の手に握られているのは1丁の銃。
中を透かせるオレンジ色のボディ、上部に備え付けられたタンク状のマガジン、そしてシールで張られた銃の名称『ウォーターシューター☆ネオ』。
・・・まごうことなき水鉄砲。
「死ね！死んでしまえ！よくその装備でワゴンから出れたな！」
「うるせえ！最初っからこれだったんだから仕方ねぇーだろ！武器は拾わなかったんだよ！！」
そんな馬鹿な罵り合いをしている彼らの上を黒い影がひゅんっと過ぎる。思わず顔を影の去った方へと向けると、非難手段であるワゴンの上に赤い化け物が着地するところだった。
ガグンガグンと揺れるも潰れることなくその身を維持する装甲ワゴンをさすがというべきか、文字通り重りである重機関銃を肩手持ちにしたまま超人的跳躍を見せた化け物をさすがというべきか・・・。
「ぁあああああああもぉおおお！！」
重ね重なり不利になる状況に対する喚きの混じった叫びを上げながら　弾雨を浴びせる隆と聡一。片方弾雨という言葉が比喩になっていない。
が、その攻撃でむしろ効いたのは聡一の水鉄砲の方で、水を浴びた化け物は機関銃を落として自らもワゴンから転がり落ちた。見れば、水のかかった辺りが溶け出している。
「ッ！聡一顔面だ顔を狙え！頭がなくなりゃさすがに死ぬ！」
「お、おう！」
何故水が効くのか戸惑いつつも、この好機を逃すわけにもいかず、

昔ながらの水鉄砲からかなりの進化を遂げた威力追求型の水鉄砲を化け物の頭部めがけて射出した。

タンク残量を考えないまさしく”浴びせる”ような攻撃はやがて頭をドロドロと溶かし、途中まではじたばたと足掻きを見せていた化け物は動かなくなった。

「よ、よし・・・？」

あまりのあっけなさに脅威が去ったことを信じられず疑問系。

水鉄砲の先で突いてみるがピクリとも動かない。

「ぉ・・・お？」

今になって周りを見渡せば化け物の登場にさすがに戦意を喪失し逃亡したのか人気が随分と減っている。

つまりそれは、俺らが武器をゲットしたとみてよいのではないだろうか？

そう思い至って、その意味をかみ締めて、

「「ぅうおおおおおおおおおおお！！！」」

雄叫びを上げた。

「やったぞ！」

「おっしゃあああ！」

「苦労がっ、苦労が報われた！」

思えば海の襲撃に始まった多くの災難。狙撃、盗聴、そして圧倒的に足りない数と武器に苦しみながらも進み続けた努力の勝利である。

名誉の負傷、名誉の帰還。ボロボロになったけど、胸を張ってタワーに帰れる。

校長の思惑にはさせない。打倒校長（うんめい）！打倒校長（さんげき）！生き延びてやる！

そんな彼らの歓喜が響く中、

「あーあー、マイクテストマイクテスト」

彼らのしていたイヤホンに軽やかな声が流れてきた。

よく知っている、少女らしい高音を無理に落ち着かせて使っているような、幼声。

耳元でささやくような音量でそれを聴いただけだというのに、先ほどとは打って変わって声の主を知っている隆と聡一は沈黙し硬直し、そして絶望する。

彼らには元は海の持ち物だったトランシーバーからのその通信が、霊界からのお迎えのように聞こえていた。

「ねぇ知ってる？リンゴって知恵の果実って言われてるけど、それって後付けなんだって。当時のメソポタミアにリンゴは生息してなかったらしいよ？」

いきなりの脈略のない雑学に、けれど言い返す心的余裕などなく、

「まぁともかく、かくして人間は楽園を追われ、知恵をつけてからというもの低レベルな争いばかりを繰り返したわけだ。うん、見っとも無い。

相手を殺す（けおと）なんて目的で死に物狂いで武器を求める君達もそれと同じだよね。愚かしいと思わない？

というわけで、そんな罪深い君達に罪の果実ことアップルをプレゼント！」

台詞が終わると共に、上方からゴトゴトとトラックの荷台に何かがいくつも落下してきた。

トラックから道路にまで転がったその１つを確認すればそれは緑がかった球形の――――Ｍ６７破片手榴弾（アップル・グレネード）。

武器を積めるだけ積み込んだ発火物の缶詰にそんなことをすればどうなるか、言うまでもない。

＃

瀬川香魚子と波風九鈴。

殺傷係と治療係のコンビであるこの２人は、どうせ積極的に参加してもやられるだけだと再開してからずっととある高層ビルディン

グ、最上階という分かりやすすぎる階層は避けてそのいくつか下の『株式会社ウスキ製薬資料倉庫』と呼ばれる資料室の中にいた。
　現実世界にも存在するこの場所が、アンダーグラウンドの住人御用達の極秘情報データバンクとも知らず、一般人が本来侵入可能ではないことも知らず、そして仮想現実という世界に構築されたこの場所が現実ではあり得ないことを可能にする裏技として故意に作り出されたことも分からず、彼女らはただ暇つぶしとばかりに資料を漁っている。
「見て見て！ＳＰＩ都市伝説解説読本だって、懐かしいー」
「あーあったわねそんなの。出版社がＵＭＡやらＵＦＯやらのインチキ臭いモノばっか出してるからイマイチ信用できないアレでしょ？」
「そうそれ。・・・『最も殺傷力のある能力は何か？』だって。手榴弾と発火能力を比べてどうするんだろ？どっちかって言うと発破能力だよね？」
「どっちにしたって、手榴弾は基本破片を飛ばして殺傷させる武器なんだから、火やら爆発とは純粋に比べられないわよ。能力者の技能によるし、そもそもこれに書いてある平均能力ってどうやって割り出したのよ」
「それもそっか。まぁでも、それをいっちゃあ手榴弾にだって種類で個差あるよね。
　そういえばさぁ、手榴弾の俗称って面白くない？アップルとかレモンとか果物の名前が多くって」
「ジャガイモ潰し（ポテトマッシャー）やら赤い悪魔やら他のもあるわよ・・・」
　不謹慎なことを言う九鈴を嗜める意味も込めたその台詞だったが、彼女の方はそんなことはお構いなしに、
「で、これがレモンの先行型のパイナップル」
　そう言って自分の初期武器であるパイナップルの名前で親しまれる手榴弾を取り出した。
　出されたそれには確かにパイナップルの果実のように網目上の凸

凹があるが、
「あんまりパイナップルらしくはないわよね」
「だよねー」
「それで九鈴、そのパイナップルの葉っぱに当たるはずのピンはどこやったの？」
「え？あれ？・・・・・・あ、小指に引っかかっちゃってた」
「はぁ・・・気をつけなさいよ、もう」
えへへーごめんとあまり反省しているとは思えない彼女の仕草に香魚子は溜め息を吐いてから肩を竦める。
昔からの腐れ縁だ。こういうことはしょっちゅうある。今回たまたま手榴弾などと危険極まりないものが彼女の手にあったからこうなったわけで、香魚子に言わせれば普段とさほど変わったことはない。
「まぁこうなるとは思」
――――そんな結末がいつもの2人である。

第４６話－　果実盛籠。－Ａｐｐｌｅ－（後書き）

やたらと手榴弾の出てくる今回の話。
それゆえにタイトルが『果実の盛り合わせ』です。
武器は別に知らなくても読めるようにしたつもりですが、どうでしょう？

今回は１－Ｂの仲の良さをかけて楽しかったです。たぶん次回もそんな感じ。
できれば次で仮想現実編を終わらせたいと思います。
が、今回の感じだと、また執筆速度はともかくとしてアップが遅れる気がします。

で、前から思ってたんですが、そういう情報ってどこで提示すればいいんでしょう？
『なろう』では最近活動報告なるものができましたが、これってお気に入り作家に登録してくださった方にしか新着報告の有無が確認できなくないですか？
あんまり見られてないようなので、イマイチ報告媒体として効果がない気がするんですよ。
まだサイトの方で書いた方がいいんでしょうか？
活動報告の方にご意見いただければ幸いです。

――――さて、いつも思うのですが、こういう話になると葉月はホラー要員になるため、どうしても途中途中の行動が分からなくなるんですよね。
主人公でヒロインなのに。
ですが、考えてみてください。
病棟から脱出するために自棄になって手榴弾を使い、その爆煙で咽

かえっている姿を！
聖書なんて知らないくせにリンゴのくだりを喋るためにわざわざ書籍を調べるという地味な努力をしてる姿を！
ホラー演出のために見えないところでがんばってる葉月に萌えましょう。
『エキ日々。』って目に見えて萌え要素いうやつがあんまりないので、行間と裏側を読んでそういう隠れ萌えを探してください。

では長くなりましたが最後に次回予告を。

『無情な現実を突きつけられ民衆は絶望の淵にいた。
度重なる圧政と非道なる重税に苦しみながらも彼らは酷く非力だった。
暴悪な王は彼らに更なる圧制を、陋劣な官人は彼らに更なる徴税を。
しかし、そんな折１つの吉報が耳に入る。それは虐げる者に生じた小さな綻び。
千載一遇の好機を得て、今こそ彼らは立ち上がる！
さぁ今こそ革命の時！
弾雨を降らせ、爆煙に身を焦がせ！
綻びを裂き広げにっくき支配者の首を処刑台の泣人草に供えよ！

……次回、人民革命。　－Ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ－』

うそです。本気にしないように。

第４７話－　仲間潰合。－Ｃｌａｓｓｍａｔｅｓ－（前書き）

小説の執筆状況をサイトの方で確認できるようにしました。
基本毎日更新します。

第４７話－　仲間潰合。－Ｃｌａｓｓｍａｔｅｓ－

イベント４

市営鉄道夏木駅にて化け物の卵が発見された。

これらの卵は３０分後に孵化、その５分後には成体となってエリアを徘徊する。

増殖を阻止したければ時間内に卵を破壊せよ。

トラック爆破で幕を閉じたイベント３から１０分ほど、四十万隆達がボロボロになってジャベリンタワー帰ってきてから３分ほど経ってそんな新しいミッションが告知された。

見ての通り生存者撹乱（プレーヤーキラー）の類であるこのイベントと今までの３つを並べてみると任意ミッションと状況変化が交互に並んでいるわけだが、まぁ、そんな法則性などはともかくとして、今回と同じく状況変化型である前々回について特筆するべきはトラックの出現でも垣間見えたリアリティーよりもゲーム性を重視した設定だろう。

それはその前の化け物が不規則転移するというイベントで顕著だった通りで、もしあれが化け物共がぞろぞろと一点に向かって歩いていくというリアリティー厳守なものだったなら彼らの進行方向と逆に進むだけでイベント２の脅威から回避できたはずなのだ。そういった予兆がまるでなく、先が読めないからこそプレーヤー達は右往左往したのである。

そしてやはりこのイベント４においてもゲーム性重視で問答無用な状況改変は健在であり、何の前触れもなく不利な状況下に置かれるというゾッとするようなシステムの被害者も当然ながら存在するわけで。

さて、ではそんな不幸宅配サービスＦｒｏｍ校長の当選者について描写してみよう――――、

イベント告知と同時に今まで何もなかったその場所に化け物共の卵はいきなり現れた。
今まで無人に等しかった駅構内のプラットホームを埋め尽くす青と緑の米型の卵。
天井から床にまでへばりついている卵鞘(ほごまく)らしきドロドロしたゲル状物質。
そんな映画にありがちなオブジェクトに囲まれ、深柄科は非常通報装置を通して希(こいねが)う。

「助けてくださいお願いします」

「もう無理です勘弁してください」
対してモニター越しのジャベリンタワー。
イベント4に指定された夏木駅を確認したところ、偶然見つけた級友のヘルプコールに3分前に戻ってきたばかりで身も心も疲れきっている隆は即答した。
聡一以下トラック争奪戦に参加したメンバーも同じ気持ちだろう。
しばらく何もできる気がしない。
『ちょっ！冗談抜きでマジで助けて！ここヤバイんだって！』
「あー俺らは駄目だって。他の奴らにきてもらえ」
隆はブラブラ手を振り気力のなさをアピールしてみせるが、
「無理よ。他人のクラスメートを助けに行ってくれる人なんていないわ」
朝風椎に指摘され大きく溜め息を吐いた。
まぁ確かにその通りだろう。ここにいる連中はバトルロワイアルを勝ち抜くために利害一致で集まっている。今回の件に関しては他の勢力に任せるのが得策だという認識を既にチーム内で共有している。戦略とは無関係の級友救出に手を貸してくれるとは思えない。
実際の友人たる隆達が参加しないというのだからなおのことである。

だからといって隆達としてはイベント3以上に危険度が高いモンスターパニックイベントに自ら首を突っ込むのはやはり遠慮したい。自分がしなくても誰かがしてくれるだろうし、駅構内を逃亡中に発火能力者（パイロキネシス）のトマホークが飛んできでもしたらたまったもんじゃない。

つまりイベントをこなしに行くというスタンスはこの場合成り立たず、化け物退治で得られる利益は科単体ということになる。

そこまで考えて、隆はあの激戦を生き抜いた者達の代表として結論を出す。

「仕方ない。科は諦める方向で」

「貴様そうやって僕も見捨てたよな！」

先ほどの戦闘に参加していない分元気の有り余っている飛騨真幸の非難を鼻で笑う。

「だったらお前いけよ。俺らは無理、あまりの不条理に立ち直れない」

『いいから早く助けて！そこら中粘々してて気持ち悪いし！なんかいっぱい化け物もうろついてるっぽいし！

もう耐えられない～～～～！！』

「僕も無理です」

「すっこんでろ役立たず（クズ）」

そんな愉快なやり取りだが科にしてみれば全く笑えない。ふざけているようにしか見えず、むしろ苛立ちが積もる。

『女の子がピンチなんだよ！？こういう時こそ男を見せてよ！』

「見せて何になるってんだ」

「リスクとリターンが吊り合ってない」

「科ルートは要らん」

隆、真幸、聡一。他人からの自己価値に効果が左右される捨て身の台詞を見事切り捨てられ、生々しすぎる精神ダメージにモニターの向こうで科は膝を着いた。

もちろん男子陣が本気で言ってるわけではないことぐらい分かっているのだが、割り切れないものがある。

「はぁ・・・いい？3人とも」
その様子を見かねて椎がオフィスチェアから立ち上がった。
「体育祭でバラバラになって悔しい思いをしたのを忘れたの？
あの時私達はチームワークの重要性を学んだ」
床に寝転がる男共の間を行き来していた足を止めそこで1度台詞を区切って、周りを見渡す。そこにあるのは自分を胡散臭そうに眺める隆達の顔。それらを黙殺して彼女は続けた。
「あれから過ぎた月日はクラスの繋がりを強固なモノにしたはずよ。
そして学園祭で団結力は最高潮にまで高まっている・・・。
私達はクラスメートなのよ。仲間を助けないでどうするの！」
白々しく演技がかった仕草で熱弁する椎は最後に親指を上に立てた拳を突き出して言う。
「さぁ行きなさい野郎共。私はここで援護に回るわ」
「「・・・・・・・・・・・・」」
無言の彼らに椎の笑顔は陰影が濃くなり、拳が上下逆転した。

ともかく、こうして1-Bという女性社会下におかれる男子3人はイベント4に参加することになったのだった。

＃

モンスターパニックにおいて、何よりも先にまず確認し頭に入れておかなければならないのは自殺方法だと久遠未来は前に織神葉月に説いたことがある。
飛び道具に対して相性の悪い代わりに桁外れの身体能力を有する葉月が恐怖というモノを武器に取り入れようと独学以外で学ぼうとした結果がその談義の始まりで、その学習の結果が夏の惨劇だったりするのだがそれはこの際置いておいて、その前置きに未来はこう続けた。
「考えてもみてくださいよ。モンスターパニックのストーリー上仕

方ないとはいえ、危険区域から逃亡を試みるってことは得体の知れないグロテスクな化け物に食い殺される可能性があるってことです。そしてその可能性は非常に高い。なのに主人公達がそんな成功率の低さとリスクの高さが反比例するような賭けを選択するのっておかしくないですか？

リアルに考えたら、化け物に追い詰められた状況下で生きて逃げ切るんだなんて発起する人間よりも自害した方がいいと考える人間の数が多いはずなんですよね。無惨に食い殺されるという危険を冒してまで生存の可能性を取るか、痛みと恐怖から逃れるために生存の可能性を捨てるか。現実問題こんなの言われるまでもなく後者です。どこから襲ってくるかも分からないような怪物に下半身から食われたり頚動脈掻っ切られたり全身の骨を折られたり気持ち悪い寄生虫を植えつけられたりするぐらいなら自分で死んだ方がマシ。実際目の前でそんな様を見せ付けられたら心なんてすぐ挫けちゃいますよねぇ。

だから、そもそもの前提として、それでも逃げようって人物は自殺の手段を用意しておくものです。『いけるところまで行ってヤバくなったらさっさと自殺』、これがモンスターパニックに巻き込まれたか弱き人間共の心理。

襲う側としてはそこに付け入るわけですから、人に恐怖を与える際は絶対に絶望させちゃ駄目なんですよ。自殺されちゃあ恐怖も何もあったもんじゃありません。程よく生き残れると思わせることがより深い恐怖を呼ぶのです！」

食玩とゲームカセットだらけのテーブルに足を置いて右手を突き出す未来、そしてパチパチと素直に賞賛する葉月。

将来、そんな2人の足元に無惨に食い物にされた連中が転がるだろうことはさておき、しかしながらこの場合の彼女の言う自殺というものは苦痛伴わないことが大前提であることを忘れてはならない。

モンスターパニックの多くが洋画なために忘れがちなのだが、武器が銃器であるとは限らないのだ。引き金を引けばいい銃と頚動脈

を切らなければならない刃物とでは自殺でも難易度が違いすぎる。痛くないからこそ自殺は化け物よりマシな選択肢であり、即死できるからこそ限界まで生存の可能性を探れる。なのに自殺が痛く苦しいのでは2択の天秤は成り立たない。

一縷の望みにかけて逃走するにも武器にすら不安がある。自殺するのもハードルが高い。

そんなどっちつかずの状況に追い込まれた時、人間は身に詰まった不安や絶望、やるせなさに怒りなどを吐き出すように、

「ぁぁあああああああもぉーい〝やぁぁあああああっ！！」

叫んでみたり。

そうして、後になってその愚行に気づいてみたり。

・・・さて、まぁそんなわけで、深柄科の武器は果物ナイフだったり。

まぁ、ともかく、叫び声という愚かすぎる理由で居場所がバレた科は元いた地下3階から逃げ出し、現在は地下2階の階段にいた。と言っても階段の影から地下1階の様子を覗いている体勢なので、正確には地下1．1階と表現するのが正しいだろう。

下のフロアは青と緑のデロデロとした卵に埋め尽くされている代わりに化け物はたまに顔を出すだけだったのだが、地下1階は科が見る限り常に2匹は改札口の辺りを徘徊していて抜けれそうにない。線路の方もプラットホーム近くはともかく、先に進めば連中がいることは唸り声で分かっていた。

（せめて店の中に飛び込めれば・・・）

そうは思っても、視界の奥に見えている店舗までは距離が遠すぎる。広いという南改札口の利点はこの場合不利にしか働かない。自分の身体能力と化け物の身体能力を比べればその距離は致命的な長さだった。

（隆くん達早くきてよ～）

『助けてくださいお願いします』。

彼女の救援要請に四十万隆達が到着するのはまだ先のことだ。

「さぁて、まず現状確認だ」
引っ張り出してきたコピー機で印刷した計１２枚の地図を張り合わせて長机の上に広げる。
中央に位置する『市営夏木駅』の文字を赤ペンで囲んで隆はまず舞台となる駅構内について説明を始めた。
「市営夏木駅は地下駅。地下１階改札フロア、２階３階がそれぞれ下り上りのプラットホーム。問題の卵はこのホーム２箇所に産み付けられている。
科はここ下りホーム・・・つまり地下３階、路脇の避難スペースで縮こまっているわけだが、ここまでのアクセスはおおよそ３つだ。
１、南改札口。これはそのまま地下街に続く最も広い改札だな。２、北改札口。こっちは地上からしか侵入ルートがないサブの出入り口。３、線路。文字通り線路に沿って侵入する方法だ。
ちなみにそれぞれの出入り口には化け物がうろついて卵を守っているのが確認されてるんで・・・迂回ルートもくそも一本道の２と３は難しい。ここまではいいな？」
「化け物を正面突破するのは？やつら水に弱いだろ」
「それは大量の水が用意できればの話だ。とりあえずアクセスを考えるぞ。
この南改札だが、これがまた厄介なことに地下街で他の『夏木駅』と繋がってる。いわゆるハブ駅ってやつだな。多数の鉄道が重なってるせいで地下内が相当入り組んでやがる。
南改札に行くだけでも地下商店街『なつちか』『ジャパンライン夏木駅』『夏冬鉄道　夏木駅』にあと地上階段３つにエレベーター２つの８つもルートが存在する」
隆の説明を聞いていた真幸が炭酸を一気に飲み干してから訊く。
「結局それで行っても改札で化け物と遭遇するんじゃないのか？」
隆は地図の上に市営夏木駅の構内図を載せて指を滑らした。

「いや、ここは広いからな・・・化け物共の目が拡散されるのが唯一ここだ。南改札からプラットホームに降りるルートもエスカレーターが2箇所とエレベーター1箇所と結構離れて設置されてる。これならうまく注意を逸らせれば戦闘せずに進める可能性が高い。言ったとおり南改札の外はすぐ地下街だ。囮が化け物を撒けるとしたら入り組んでるここしかない」

「なーる。改札までのルートが多いから例え地下街の方にもCPがいても迂回できるし、問題になる突入も地下街が利用しやすいわけか・・・。

で、そこまでうまくいったとして科と卵はどうするんだ?」

「そこだよなぁ・・・爆発するにしても時限式のしか俺らは持ってねぇし・・・科連れて逃げる間にドカーンなんて嫌だし。うまくタイマーあわせるしかねぇな」

「同じルートで逃げるしかないんだろうな・・・やっぱ改札通らずに線路そのまま行かないか?それの方が行き帰り楽だと思うが」

「化け物を倒したことがそんなに快感だったかウォーターシューター聡一。だからその水をどっから用意すんだって」

「消防車パクれば何とかならねぇか?」

「あれは消火栓から水汲むんじゃなかったっけ?無理だろ地下内だと」

「あー水槽付の消防車はあるっちゃあるが、そんなの地下にまで引っ張り込めるかどうか・・・」

言って真幸はうん?と眉をひそめた。

「・・・・・いや待て、そんなことしないでもスプリンクラーがあるだろ」

ピタっと南改札までの最善ルートを探っていた隆の手が止まる。

「それだ。トンネル内にも確かあったろ、安全対策の一環で」

「・・・何でそれを思いつかなかったよ」

聡一は構内図をどかして地図で『夏木駅』に行く上り線を確認する。線に沿って指を滑らし、タワーからの最寄り駅に×マークをつ

けた。
「まぁ、これでどのルートも可能性は出てきたろ。
北改札はともかく線路は化け物を倒せる勝算があるなら最短だ。
どこに化け物がいるかも分かりやすい。
ぶっちゃけこっちの方がいいだろ」
「そうだなぁ・・・」
隆は自分に配られた缶ジュースにここで初めて口をつけ、そのまま一気に飲み干した。
「何故か生き生きしてる聡一のやる気に水を差すのは悪いし、どっちもと行こうぜ」
「・・・はい？」

「いや待て無理だ！何で僕1人なんだよ！」
防弾着にバックパック、その中に手榴弾やら爆薬やらを詰め込んで、最後に緑色のヘルメットを被せて隆と真幸は相対する聡一に敬礼した。
聡一が提案した水攻め、そして隆の南改札ルート。3を2で割れば2と1に分かれる以外分け方などあるわけもなく、
「俺の方は囮がいるんだよ」
というわけでこのペア決めは必然と言えるのだが、対して1人で暗い地下鉄を歩き、化け物と対峙しなければならない聡一は無情にも自分を送り出そうとしている級友に喚いている。
「ただでさえ少ない戦力を分散させるのはまずいって！僕も改札ルートでいいからさ！」
「いやいや、ただでさえ少ない戦力を一気になくすわけにはいかねぇ。ここはリスクを分散させるべきだ」
「だな。がんばれ聡一」
グロい化け物相手に1人で立ち向かう必要のない分余裕ができた2人は白々しくそう言って踵を返した。

「嘘だ！絶対嘘だ！ちゃんとやる気ねぇだろ！どう考えても僕の方が先に着くじゃないか！さては途中で離脱する気だな！？」

まだ愚痴っている聡一を無視してワゴン車に乗り込むとエンジンをかける。線路から侵入する聡一は最寄の駅から夏木駅の手前まで電車で移動する手はずになっているのだ。

広さに比べて自動車というポピュラーな移動手段が極端に少ないことからこういうプレーヤーとの鉢合わせの可能性がある公共の交通手段は稼動しているだろうという彼の推理は正しく、電車が無人で動いていることは先ほど椎が突き止めている。トラックの件があったので無人かどうか何度も確認したが、どうやらそういった場所ではプレーヤー同士でぶつかり合わせる魂胆らしかった。

それはいいのだが、それとこれとは話は別だ。

さっきから隆や真幸の台詞には誠実さやら真剣さやらが全く篭っていない。級友を思いやっての発言は皆無である。

そんな流れ（ノリ）で決まった分担作戦に今、命運が任されようとしている。

「人でなしーーーーー！」

聡一の激励を背中に受けつつ隆と真幸は元はといえば聡一の所有物である黒ワゴンを発車させた。

＃

監視システムは言ってしまえばモニタールームである。

中央に特に大きな画面を置いてその脇に3つずつ別のモニターを並べ、それを作業テーブルのPCで操作するという想像に難くないありきたりな部屋でそれがタワーの1フロア丸々使って設備されている形だ。

トラック襲撃時には別勢力の内情を探るのに使われていた巨大モニターは今、夏木駅周辺の映像を映し出し、自分達以外に化け物の卵を排除しにきた連中の動向を探る用意がなされいる。

もちろんそれには深柄科の救出という目的もあるのだが、本来見知らぬ生徒と共同戦線を張っている状況であまり自分勝手な行動はできない。3名ほど選抜されたモニター係の1人である朝風椎のできるのは自分のPCで科を追跡することが精一杯だった。

無論、化け物の孵化を阻止するというのはジャベリンタワーチームにとって利益になることではあるので、こうしてフォローすること自体は咎められないが、チームの総意としては『他の勢力がやるだろう』という他人任せな結論に達しているため、今回の隆達の行動はあくまで個人によるものだ。

（まぁ・・・たぶん助けられないと思うけど）

自分がけしかけたとは思えない見解を内心に秘めつつ、彼女はPCの画面を2つに割ったもう一方で、本来やるべき作業を並行する。

クラスメートの捜索。これはもちろん隆から依頼されたことでもあるのだが、彼女自身にも目的がある。

今のところ他の勢力では確認できていない。となると、恐ろしいことにこの状況下で個人のまま動いていることになるのだが、そうなると捜索が面倒だった。

最悪自分達以外の級友が全滅している可能性もある中、ありそうな場所を1つ1つ潰していくという作業は精神的にきつい。

タワーのレストランから盗んできた飲料水をわざわざストローでちびちびやりながらできるだけモニターから顔を離して作業する。

「うちの連中変にしぶといからなぁ・・・」

どう考えても自分は勘定に入れてない評価に関して文句を言う者はいない。その彼らは彼女に外へと放り出された。

今まで映していた区域から今度は気分転換も兼ねて一気に場所を変えてみる。

港に程近い工業地帯。上空から見るとコンテナの積荷が行われるらしいクレーンなどがあるエリアに並んで工場がいくつも収まっている。

その1つから煙が上がっていた。

ピックアップしてみると、どうやら戦闘があったらしき跡があった。弾痕、そして火。燃えるというよりは萌えるといった感じで床から芽吹くように炎が生えている。おそらくは石油でも撒いて着火させたのだろう。

主材料が鉄の工場だ。油以外燃料がないだろうに炎がまだ燃えていることから、まだそれほど時間は経っていない。

急いでモニターの視点を変えると、そこには彼女の求めるモノが映っていた。

画面手前に工業機械の陰に隠れている西谷絵梨、奥に銃を連射する朽網釧。

ビンゴ。

ビンゴなのだが・・・、

銃撃が止むやいなや、防御に徹していた絵梨は抱き込んでいたポリタンクを下方から振り上げる。開けられたタンクの口からガソリンが放物線を描いて釧の方へと放たれ、次に彼女の放ったマッチの火で着火し小爆発を起こした。

構図は1対1の飛び道具での戦闘なのだが、武器がおかしい。

「・・・・・さすがは」

我がクラス、と思わず呟く。まさか銃にガソリンとマッチで対抗しようとは。

気を取り直して戦況を観察すれば、当然といえば当然釧が有利のようだった。ここに至るまでにどんな攻防があったかは分からないが、まだ予備の銃を数丁持っている釧に対して絵梨のポリタンクはあと3分の1ほどしか残量がない。血が出ない代わりに破けた衣類が何度も被弾していることを示している。

こういう場合、不利な状況にある方に声をかけるのが定石なのだが、さて、どうやって連絡をつけるか。

そこがこの監視システムのネックなところだ。

トランシーバーやら携帯やらの通信機器を持っていない相手とやり取りするのが難しいのだ。

工場のスピーカーを使えば釧にまで声が届いてしまうし、そもそも通信機器なんて1人で行動している絵梨が持ってるわけもない。

工場の図面を引き出して確認すると、今彼らのいる作業区から廊下を渡った先に事務区があることが分かった。

事務、ということは電話がある。検索をかけて電話番号を割り出しいつでもかけられるように通話ボタンを待機させる。

問題は絵梨がここを釧より先に通ってくれるかどうかだが――――絵梨は椎の思惑通り物陰から廊下へと駆け出した。

まぁしかし、そうなるだろうことは想像に難くない。先に逃げ出すとすれば追い詰められている絵梨であり、彼女の攻撃が着火というフィールド炎上の追加効果を孕む以上、どの道1箇所に長居はできないのだから。

あとはうまい具合に着信音を鳴らし、

『はいもしもし！』

こうして哀れな絵梨を吊り上げるだけである。

「はろー絵梨ちゃん」

『しぃゆん!?助けて！やべぇ！くしろんやべぇっす！あれは本気で私を殺す気だ！』

常人離れした攻撃法で対抗している割りに追い詰められているらしい。

それを知ってなおさら椎の心はくすぐられた。

「えー？どうしよっかなぁ？」

ついつい悪い癖が出る。

『やめて！ふざけないで！』

固定電話の持ち運びながら追ってくる釧から逃れるようとするもすぐさま移動限界がくる。咄嗟にオフィスデスクの物陰に飛び込んだが、

『ひぃっ！』

追いついた釧の銃撃にその薄い鉄板はやすやすと貫通された。

そんないつもは自分がふざけている彼女の慌てふためく姿を堪能

してから椎は本題に入るため口を開いた。
「絵梨、ねぇ助けて欲しい？」
『いやいやいや、いやいやいや！電話かけてきたのそっち！そっちだから！！そんな選択肢あるの！？』
「だって釧君もクラスメートだしねぇ・・・私としてはどっちを応援すればいいのか分からないもの」
暗に助けて欲しけりゃこっちの益になるような情報を晒せと要求する椎。
こういったことは直接口に出さないのが美学なのだと彼女は――――、
『嘘だ！私にかけてきたんでしょ！？負けてる方が手玉に取りやすいとか思ったんでしょ！？この腹黒！』
「助けて欲しかったらさっさと貴女の持ってる情報を吐きなさい」
思い直した。無駄なモノを省いたシンプルで効率重視な交渉もたまにはいい。
そもそも最初からこれだけが目的で級友を探していたのだし。救助など二の次だ。
『ひどっ！ひどいぜしぃゆん！』
「何？ないの？切るわよ？」
『ある！あります！化け物の弱点知ってます！
緑は火、青は電気！あいつらは色で弱点が決まってるんです！』
「へぇ・・・」
それを聞いて椎は化け物の巣窟に突入する前にしていた隆達の会話を思い出していた。
それから、イベント3でトラックに乗っていた化け物の体表を記憶から引っ張り出してくる。あれは確か、
「じゃあ赤い化け物は？」
『赤？・・・赤なら水！』
「よねぇ・・・」
なんて安易な設定だろうと呆れつつ、分割されたモニターの左側

にチラッと視線を向けた。
そこには何故かエレベーターに閉じ込められている深柄科が映っているが、そんな彼女を助けるべく動いている男連中は重大な勘違いをしている。
緑は普通で、青は武器を、赤は乗り物まで扱える。グレードの低いモノの個体数が多いだろうということは言うまでもなく、彼らが出会う駅構内の化け物が全て赤色をしている確立は幾ばかりのものか。
スプリンクラーで倒すなどと言っていた聡一の戦略は成功することはほぼ0%、返り討ちが確実だし、隆達にしてった水で倒せるという誤認が致命的な隙を生む可能性は十分ある。
この情報は彼らの生死に関わるだろう。
「分かったわ。援護を1人送ってあげる」
『よぉおし！』
嬉しい情報を得られた椎は上機嫌で鼻歌交じりに通信を繋ぎ替えて、改めてマイクに話しかける。
「兄さん、私のクラスメートが窮地に立たされててね？
あら？男の癖に引き篭もってばっかりで情けなくないの？そう、それでいいわ。
場所は・・・」
自分のＰＣではなく大画面に向けて彼女は続けた。
「『ジャパンライン　夏木駅』の東口。えぇ、女の子にいいところ見せてきてね」
夏木駅付近を写す中央のモニター群の中で、彼女の指定する場所には特に化け物の多くいる場所だったが、そんなことを彼女の兄が知る良しもなく、もちろんくるはずの援護がまるで見当外れの場所に向かおうとは絵梨も思うまい。
別に兄を巻き込む必要はなかったのだが、何せ機嫌がいい。こういう気分の時は奮発してみるのも悪くはない。
（卵があるんだし、化け物にも性別はあるでしょうよ、たぶん）

わずか3名で化け物共に喧嘩を売りに行かされた隆達、成功するとは思えない救助を待ち続ける科、こない援護を頼りにする絵梨、番外編（おまけ）として化け物の雌にいいところを見せに逝った朝風柏。

滅多に経験できないせっかくのゲームなのだ。ゲームというは何かしら目的を持って動かないとつまらない。しかし勝者になる気はない彼女にとってこの世界はあまりにもフリーダムだ。

なら、自分で縛り（テーマ）を決めればいい。

――――さて、今回彼女が自分に与えた課題は『直接手を下さずにクラスメートを自爆させること』である。

織神葉月をして腹黒いと言わしめるどす黒委員長朝風椎に司令塔などという大役を与えたことが過ちだと彼らが気づくのは何時だろうか？

＃

四十万隆達のワゴンは『夏冬鉄道　夏木駅』に向かっていた。

そこがタワーから最も近く、地下街もほどよく入り組んでいて侵入しやすい経路だと踏んだからである。『ジャパンライン　夏木駅』より市営夏木駅との距離があることが難点ではあるが、安全には代えられない。最悪、『やれることはやった』というポーズだけ取って退避することも考えられるのだから、逃げ道は多いほうがいいのだ。

深柄科には悪いがこの作戦が成功するとは朝風椎と同じく隆達も思っていなかった。

本当に死ぬわけじゃあるまいし絶対に助けに行かなければならないという意気込みがまずない上、モンスターパニックという見るのもできれば勘弁したいタイプの代物に参加させられるという点でモチベーションはただ下がりだ。

だいたい人間、できることとできないことがある。

織神葉月に喧嘩を売るほどではないとはいえ、人外の怪物相手にモンスターパニックの主演を張れるわけがないのだ。
何事も身の程は知らなければならない。
と、そんな言い訳を並べつつ、隆と飛騨真幸はトラックをそれでも爆走させていた。
やる気のなさと最善を尽くさないのとは別次元の話であって、卵の孵化までおおよそ２０分の現在、駅まで5分突入に7分爆弾の設置に3分脱出に4分と考えても時間がない。
突入と脱出の割り当ての差は行き化け物にエンカウントしないよう注意が必要な分時間がかかることを考慮してだが、問題は脱出の方で、思い通りに進まず時間が押した結果逃げおおせる前に孵化なんぞされた時には目も当てられない結果が待っている。
「東口から地下街に入ったらとりあえず椎に化け物の有無を確認してもらいながら進んで南改札まで行く。その後はスプリンクラーだ」
「へ？囮作戦じゃねぇの？」
「倒せる相手に囮使ってどうするよ。聡一にああ言ったのはあいつを1人で行かせる口実だ」
「ひでぇなぁ・・・」
「元々線路の方から出れるならそれに越したことはないし、脱出ルートは予備もあった方がいいからな」
言って、足元に置いたバックパックから時限式の簡易爆弾を取り出し飛騨真幸へ放る。
「爆発時間は理想4分だ。とりあえずセットよろしく」
「へいへい」
生返事を返してデジタル式のタイマーを操作しようとした指は、けれどボタンに触れることなく逸れて表示パネルへ。ぐぎっと嫌な音がした。
いきなり、車体が揺れたのだ。
「おい隆・・・・・つっ！？」
文句を言おうと手元から顔を上げた彼の視界に黒い影が映る。そ

れは、緑色の化け物。フロントガラスいっぱいを覆うように飛び込んできている。
その完全に不意を突かれた襲撃に、隆が咄嗟の判断でハンドルを切ったのがさっきの揺れだったらしい。
だが、ほぼ９０。の右回転は新たな進行方向に別の化け物を見つけるだけに終わり。回避にならずに今度こそ正面から衝突。その瞬間、両手を振り下ろしたソレの猛攻にガラスが飛び散り、ワゴンは盛大にバランスを崩して特攻を仕掛けたその１匹をひき殺しながら横転した。
「がっ、くそ！何だ一体！？」
青色、赤色と知能が高い故に武器を使えるのだろう種類ではない低能な緑色の化け物による連係プレーおよび周到な襲撃に戸惑い、カスタマイズ仕様にも関わらず一撃でスクラップにされたワゴンから這い出る。
「何で化け物がいきなり・・・っ！」
ゲームでなかったらガラス片で大惨事だったろう彼らは、それ相応にライフゲージを減らしつつ、これ以上のダメージを防ぐため追撃を逃れようとワゴンの影に飛び込んだ。
「・・・・・・・・・・・？」
しかし、次の攻撃はやってこない。
あからさまにおかしい時間の空白を開けて、場は沈黙している。
あと１匹いるはずの化け物はどうしたのか？何故襲ってこないのか？
（何だ？どうなってる）
そんな疑問の答えは向こうからやってきた。
コツンコツンと、わざとらしく足音を鳴らして。
「やぁ、隆に真幸」
ソレは人間らしく人間の言葉をかけてくる。
聞き覚えのある声に２人がワゴンから顔を出すと、そこには若内楚々絽がいた。

・・・化け物と並んで。
「楚々絽・・・？」
「な、何で？」
何でこのタイミングで現れるのか？何でわざわざ面倒な卵駆除に出向くプレーヤーを襲うのか？何で化け物と肩を並べているのか？
「卵を壊しに行くつもりなんだろう、ご両人？悪いがそうはさせないよ」
「「は？」」
間抜けな声を上げる2人に彼女はコスプレ衣装のポケットから香水らしき小瓶を取り出して見せる。
「これが私の初期武器でね。中に入ってるのは化け物（かれら）のホルモンだ。これをつけていれば襲われないどころか言うことを聞かせることもできる。
化け物増殖？むしろ願ったりさ」
だからさせない、と。いつもの口角を吊り上げた意地悪な笑顔で言う。
対して、隆と真幸の顔が引きつっていることは言うまでもない。
「おいおいおい、待て楚々絽。
俺達はクラスメートだ、仲間だ、友人だ。仲間を化け物に売るっていうのは人としてどうかと思うぞ？」
つい先ほどその仲間を勝算の薄い作戦に1人で放り込んだことを棚に上げる隆。
「そ、そうだ。いくらなんでもそんなのは人間的良心が許さないよな！
仲間同士協力し合おう！な？」
その仲間である隣の級友に見捨てられたことは今現在真幸の頭の中にはない。
「仲間、仲間ねぇ・・・」
クスクスとそこだけ可愛いらしい仕草で笑って、彼女はパチンと指を鳴らした。

それに合わせて今まで物陰に隠れていたらしい化け物達がゾロゾロと集まってきた。
「紹介しよう」
まずは先ほどから彼女の横にいた1匹を指差す。
「彼はマイク。少々引っ込み思案の三男で、走り幅跳びが得意」
そして次、
「それから彼はドミニク。負けん気が強くて世話が焼ける。で彼女がミシェル。見た目ほどか弱くはないな。足も速いが手も早い」
そこで台詞を区切って彼女はのたまった。
「私の仲間だ」
「「・・・・・・」」
「どうだい？お互い親交を深めるために握手でも」

救助班本命の2人が化け物と親交を深めようとしている頃、単独行動を強制された矢崎聡一はようやく市営鉄道の最寄駅に到着した。
『市営鉄道　秋葉駅』と書かれたプレートのかかる階段から地下へと降りて、途中自販機で炭酸飲料を3本買い込み、改札を無視してホームへと駆け込む。
幸い、化け物はいないらしい。
右手に水鉄砲、左手にポケットにスプリンクラー対策の発煙筒を絶えず握る彼は油断なく辺りを見渡しながら時刻表を見て電車の到着時間を確認した。
あと2分ほどで到着。ちょうどいいタイミングだった。
もし化け物が現れてもすぐに行動に移せるよう立ったまま壁にもたれて電車を待つ。
見つからないように隠れてもいいのだが、不意を突かれなければ怖い相手ではないと高を括っていた。
あの外見だ、いきなり飛び出してこられたらパニックになるが、

対処法も知って対峙しての戦闘ならばそれほど怖い相手ではない。
化け物が水に弱い。それを訂正する椎からの連絡は当然なく、ある意味彼は自滅への道を一歩一歩進んでいるわけだが、もちろんそんなこととは思いもしまい。
元々、こういう非現実的な要素が欲しいという気持ちが人一倍強い彼だ。
隆らを助けた時もそうだったが、仲間のピンチを救うというシチュエーションは燃えるものがある。
だから、隆達に文句をつけはしても、活躍できるチャンスが与えられたこと自体は歓迎だった。
早く戦場に飛び込みたいと、こうやっている時間をもどかしく思いながら待つこと2分。遅れる要素がなく当然時間通りにやってきた地下鉄に聡一は乗り込んだ。
座ることなくドアの脇に先ほどと同じように持たれて視線を少し上にすると、車内広告が目に付く。『危険物を見つけた場合は』というお決まりの物もあれば『東ノ宮神社　定期骨董市１１／１』、『なつちかＢＡＲＧＡＩＮ！！』といった広告も数多くある。
それら人工世界とは思えない作りこんだ設定は芸が細かいの一言に尽きる。実際この仮想世界の構想にどれほどの時間をかけたのか彼の知る由ではないが、時間や手間以前にこれはそのゲーム媒体が幻想現実だからこそできたリアリティーだ。
能力研究に伴ってこの国の科学技術が上がっているとはいえ、現実的な話これほどの情報量をプログラミングすることは不可能に近い。
そもそも現代においていくら直接脳波でやり取りする五感体感装置ができたところで、現実世界のモノの性質や触感をスキャンする技術が発展しなければ仮想現実は実現できない。
ゲームと現実がモニターで遮られている現在だからポリゴンもリアルに見えてはいるが、実際その中に入って触るとなると話は違ってくる。極端な話、かくかくのポリゴン人間が徘徊する緑単色の原

っぱや葉っぱが円錐な木になるリンゴなどをリアルに体験してもどうしようもないのだ。

だからこそ、現実をそのまま仮想世界に複製する技術が重要になってくるのだが、そんな高度な技術を実現しているのが、『夢』と言える。

夢では五感全てが現実と遜色なく再現される。

この世界は、そんな人間誰しも持っている脳内（ゆめのもと）の体験記憶を引き出して再現しているのだろう。

地面を踏む足の感触、背中越しの硬い感触、肘に当たる鉄パイプの感触、そして視界の全て。

これが1人の能力者によって作り上げられていると思うと尊敬の念を抱かずにはいられない。

彼自身、視覚を切り離すという能力の持ち主だ。根本的なベクトルは似ている。目標たる先達の技術をこうして体験できることはそれだけで胸が熱い。

これが再現できれば、彼がこの学園にきた目的は達成させられると言って過言ではないのだ。

さて、忠実に再現された車内を鑑賞している内に電車は目的地の夏木駅の1つ前、鼓々芽舞駅に着いた。

ここからが勝負だ。

閉ざされた電車内という空間で少し緩んだ緊張の糸を張りなおし、座席においておいた玩具にしか見えない武器を真剣に確かめる。

「よし」

声に出して気合も入れる。

それから開いた自動ドアから一歩足を踏み出し――――ふと思った。

（あれ？そういえば、俺が降りた後、電車はどこに向かうんだ？）

それはあまりにも馬鹿らしい疑問だった。そんなのは夏木駅に決まっている。

（で、なんで俺は降りようとしてる？）

敵地に乗り込むというシチュエーションに、無意識に移動できるのは目前までと決め付けていたのではないか？

そうだ、線路には化け物がいて守ってるはずなんだ。

だから、線路はここまでで行き止まりなのだと勘違いしていたが、よくよく考えてみよう。

もし自分がここで下車したとして、電車がそのまま夏木駅まで行ったとすれば、この鉄の箱は途中トンネル内で侵入者を見張っている化け物をひき殺し、連中の守る卵の前でその扉を開けるのではないだろうか？

「・・・・・・」

そんなことにも気づかなかった自分に対する非難が変な汗として溢れ出てくる。

下車なんて馬鹿馬鹿しい。

その頃地上で安全だろう手段を選んだはずの2人が今までにないほどの危機に陥っているのだが、そんな自業自得など知ったところで気にも留めないだろう彼はそのまま夏木駅まで乗っていくことにした。

しかしそんなおいしい話ばかりがあるわけもなく、彼が夏木駅に着いた時、そこで救助を待っているはずの深柄科の姿はないわけで。

何せ、彼女が勝手に移動していることも椎は伝えていないのだ。

まず正面からの振り下ろされた一撃を後退することで避けて、隆は咄嗟に抜き出すことができた３８経口拳銃（ベレッタM92）を急接近してきた化け物の額めがけて連射する。しかし致死弾数に至る前に横から別の化け物に体当たりされて地に足を着け続けることすら許されずに吹っ飛んだ。すんでで身体をずらしたにも関わらずのこの威力に、空中その一瞬に舌打ち、着地はいえない墜落に加え勢いを殺しきれず転げ回る。

拳銃ではらちが明かない。だが余裕がないこの状況で頼りのサブマシンガンを背中に背負ったバックパックから出すのは難しい。無駄な会話をしている内に取り出すべきだったと今更後悔しながら、代わりにバックパックのサイドポケットから手榴弾を取り出した。が、しかしこれをどのタイミングで使えばいいのか？その一瞬の迷いを突いて、３ｍほどをらくらくと跳躍する脚力を持った化け物数匹が突進をしかけてくる。その威力はついさっき経験したばかりだ。しかも今回は四方からの同時攻撃、圧殺される自分が脳裏に浮かんだ。

「ぐぅっおぉお！」

まだ立ち上がれてもいない体勢で無理に身体を捻って飛んでくる化け物と化け物の隙間、浮いた足の下にできたスペースに飛び込むように前方へと飛び込む。肩をひっかけてさらに体勢を崩した身体がまたもや無様に地面に打ち付けられる。だが、今度も連中は待ってはくれない。群がろうとする化け物共に隆は今度こそ迷わずに手榴弾にピンを抜いた。それを最も彼らの壁が薄い場所へと放り自らも同じ方向へと走り出す。トラック争奪戦でもやった戦法だ。連中にも生存本能があるだろうと考えての行動だったが、化け物は放物線を描く凶器に目もくれず自ら突撃してきた隆を組み拳（アームハンマー）による叩きつけで地面に沈めた。

「がっ」

地面とバウンドまでさせられた彼に止めの一発として眼前に落ちてきたのは自分で投げた手榴弾である。

「・・・・・ッ・・・ッ！」

文字通りの爆音。もはや聞きなれたといえ近距離で聞いていいものではない。殺傷片と黒煙が爆風で広がり、周りの化け物をも吹き飛ばす。ギリギリ化け物の後ろに回り込んだ隆は、盾となった化け物の焼死体に押しつぶされていた。

強靭な化け物のお陰で助かった形だが、それはつまり連中の強度の高さを示すことでもあり、直撃したはずの手榴弾ですら特に近か

った3匹しか倒せなかったという事実が絶望的な現実を思い知らす。
ぐるりと身体を回転させて焼けた重りから身を開放して、化け物共が次の攻撃に入る前に今度こそ用意してきた―H&KMP5《サブマシンガン》を取り出した。口径こそベレッタと変わらない9mm弾だが、連射性のあるなしでは化け物への効果も大分変わってくる。これをバックパックから取り出す前随分にとライフを削られてしまったのは痛いが、これで今度こそ。
ダメージと一緒に機動力も削がれた身体を前のりに、ちょうど連中の頭部の高さに固定して引き金を引いたままに直進。目指すのはオフィスビルのエントランスだ。
室内ならスプリンクラーが使える。
立ちはだかる化け物を撃ち崩しながら、銃弾に崩れ去ったガラスの向こうへと飛び込み、体勢を崩しつつも広いエントランスホールに身を滑らした。
何度も地面に擦って衣服がボロボロだが、次は濡れることになるのだ、今さら無用な心配だろう。マシンガンと違いこっちはポケットに入った発煙筒3本のキャップを一気に捻って外す。同時に煙を吹き始めたそれらを天井向けて放り投げた。
――ザアァァァ・・・・・・
作動したスプリンクラーに身体がずぶ濡れになる。仰向けに倒れていたために、半開きになった口にまで容赦なく水が入り込んできて咽てしまった。
それでも余りある達成感に天井に向けてガッツポーズを取り、そのままその手を支えに起き上がる。
そこで、ガラスを裂く凶音。そして咆哮。連中は行動1つ1つにうるさい効果音をつけずにはいられないらしい。実際目で確認する必要はない、化け物共がエントランスに突貫してきたのだ。
休む暇も逃げる暇も与えてくれない猛攻だが、すでにやることをやって勝利を確信している隆はフラフラになりながらも勝ち誇り、無駄に前に自分がされた『地獄に落ちろ』のジェスチャーまでやっ

てみせた。
しかし、そう無駄に。
手榴弾の時のように慄(おのの)くことなく消火雨へと飛び込んだ連中は瞬く間に溶けて・・・・・・消えるはずもなく。
彼らの体表は緑色。弱点は火であり水など全く効果はない。
室内の豪雨の中残されたのは、溶けず存在し続ける化け物共、そして親指を下に向けて間抜けなポーズをする哀れな似非不良である。
「・・・・・・・・・・・・」
思惑外れな現象の原因はともかくとして、完全に詰んだことを悟った隆は叫びながらバックパックごと化け物の方へと投げつけた。
「ジ・エンドォォオオォ！」
・・・手には着火装置代わりの手榴弾が握られている。

化け物が迫ってきてほんの数拍、隆が突進を食らって吹っ飛んだ辺り。
初撃が隆に集中したことが幸いして始めからバックパックにしまっていたＦＮ　Ｐ９０を構えれた飛騨真幸は、それを自分に向かってくる化け物ではなく若内楚々絽に向けて発砲した。
装弾数５０発、分に９００発をもぶち込む彼の凶器は広義ではサブマシンガンに分類されるが、狭義では朽網釧のと同じＰＤＷだ。
正式名称ファブリックナショナル・プロジェクト・ナインティー、長方形という特徴的なフォルムをした、およそ銃のイメージからかけ離れた代物である。
しかし、いくら武器が優れていようと数の力には勝てない。
そう考えて潔く自己防衛を諦めた彼はまず化け物共の統制を崩しにかかったのだ。
目の前の敵を蹂躙する化け物だけなら逃げ切れる可能性がある。
だが故意に自分達を追う悪意が存在する限りは生存は絶望的だ。全ての元凶を排除しなければならない。

「はっ、いいねぇ・・・！」

対して、その行動は予想外だったらしい楚々絽は1発脇腹に食らうも、すぐさま化け物の影に回り自分を守るよう指示を出して化け物の壁を作ってしまう。

（さすがは対応が早い）

もう少し慌ててくれればいいものを可愛くねぇなと毒づく。

これではジリ貧になることを分かりつつも、防戦に徹するしかない。けれど、それではまずいのだ。

（とにかく、状況を変えなきゃやべぇ、なぁ）

まともに思考する余裕も与えられず、主の負傷に立ち止まっていた化け物は再び動き出した。今度こそ無視できない突猛が時間差で前と右から迫る。右足に目一杯力を込めて左に跳んだ。左に回避したのでは前はともかく右方からの攻撃は避けれないが、それでいい。

左からの強靭的な身体能力を有した怪物全身の攻撃に彼の身体は容易く宙に浮く。本当の痛みの代わりに体中を鈍い痺れが襲い、まともな着地など期待できそうになかった。

それでも、ほとんど包囲された中を自分で突き進むよりは遥かにマシだ。

――――彼から見て左方、そっちには車体がひしゃげたワゴン車がある。

飛び越えないように身を低くして直撃（インパクト）を待ったかいあって、放物線状というよりは直線に近かった彼の空中遊泳はワゴンに背中を強打するという終わりを迎えた。

「がっ、ぐっ！」

ショートカットの代償としてライフを大分持っていかれた彼は、痛みに怯むことすら惜しんで車内を露呈したワゴンを探る。

そこにあるのは襲撃直前に彼がタイマーをセットしようとしていた時限爆弾である。

設定ボタンを押すとまず始めに出るのは『００：００：１０』の表示。下ボタンを確認せずに数回連打して決定し、

「たぁぁあああまやぁぁあぁあああ！」
同時にそれを砲丸投げよろしく楚々絽のいる方へとぶん投げた。

黒く重い粒子の煙の中に小さく煌く赤き火炎、高層ビルという谷底を覆う霧のように煙幕がかかる。
２つ重なった轟音、特に１つは近距離での爆発に、化け物でなければ人権問題必死の肉の壁も耐え切れずに吹き飛んだ。
真幸の投げたのは元々プラットホーム全域の卵を死滅させようと用意した爆薬だ。威力だけは折り紙つきである。それをいくら放り投げるとはいえ、高々数十メートルの距離で爆発させようなど自爆行為としか言いようがない。
自分に向かってくるギフトを目視して、それの元の用途を理解して、防御壁が役に立たないと直感、全速力で距離を取った上に化け物一匹を盾にした楚々絽は何とか爆撃に耐え切ったが、隆と真幸をいたぶっていた時とは一転、アスファルトを滑(スライド)ったり撥(バウンド)ねたりして地面に伏した。
「っつー、いったいなぁ！」
近くにいたはずの化け物(たて)が別の場所に吹き飛ばされたのかすら確認できない黒い煙の中、悪態１つと共に素早く立ち上がる。
まるで自分の位置が確認できないのは痛い。
（あの爆発だ、死んでるだろうが・・・）
道連れ行為に近い一撃だ、盾もなかっただろう真幸に爆発に耐えられたとは思えないが、この煙幕もが彼の作戦だとするなら生存もあり得る。
だとすれば、どうくるか。
警戒しつつじりじりと後退、給仕服のポケットからスティック・スタンガンを取り出して攻撃に備える。
だが、不意打ちは思いもよらぬところから、
「やぁーと捕まえたぜ楚々絽ちゃーん」

思わぬ人物によってなされた。
お馴染みの後頭部に銃口を押し付けるという分かりやすい方法で、抵抗できないようにスタンガンを持った右手は背中に回して固められる。
細い川に美しい樹あるいは細いそうめん川流し、羊大樹いと書いて細川美樹。
普段おっとりを通り過ぎてべったりとしている彼女だが、体育祭の時自ら織神葉月に向かっていくなど、案外武力行使は得意分野なのである。
「もうっ、なかっなか隙を見せてくれないんだもん、ストーカーも楽じゃないんだよねー」
「趣味悪いなー。何?私のこと好きなのかい?」
「あははは好きよー?厄介だから真っ先に狙いたいぐらいに」
「・・・・・・」
「いやぁ隆くん達のお陰で助かっちゃったぜ。期待はしてたけど期待以上ー。
さーてさて、それじゃ2人には悪いけど、いいとこ全部この美樹ちゃんが頂いた♪」

「は?待ておい、どういうことだ!?」
大した苦労もせず敵地に中心部へと侵入を果たしたものの、保護対象が勝手に移動したことをつい先ほど椎に悪びれず伝えられた聡一は通信の相手に静かに怒鳴った。
『どうもこうもねぇよ。楚々絽に襲われたからそっちにはいけない』
電波の向こうにいる隆はそんな彼の焦りの混じった台詞に気のない返事をして、
『というわけでがんばれ聡一、科を助けるのはお前しかいない』
今回課せられた任務を丸投げする。
「待て待て待て!楚々絽は撃退したんだろ?遅れてもいいから援護

にこいよ！」
『・・・・・聡一、想像してみろ』
「あ？」
『意気揚々と走らせてたワゴンをいきなり大破させられた挙句に『化け物は友達』とか言ってもったいない女に襲撃され、散々のた打ち回って追い詰められて悪あがきをしていたらいつの間にか電波娘に助けられてた男子の心情を』
「・・・情けねぇなぁお前ら」
『というわけで戦意喪失中だコノヤロー。
大体そうじゃなくても爆薬は真幸が使っちまったし、俺だってバックパックのに詰めた武器ほとんど火薬代わりにしちまったから武器がねぇんだよ。
だから、お前が助けてこいや。電車使うんだろ？俺らは次の駅で待っとくからよ』
実は美樹がタクシー会社から盗んできた車両に大量の武器があるので、『武器がない』というのは嘘になるのだが、会話でのやり取りだ見抜けるはずもない。
こうして完全な単独行動が決定した彼はまず時刻表で次の電車到着までの時間を確認する。
上りおおよそ6分、下りおおよそ8分。構内を移動するだけならば十分の時間だろう。
「椎。とにかくホールに下りてこいと椎に伝えてくれ」
『あー無理ね。あの子今エレベーターの中に閉じ込められてるから』
「何でまた・・・」
『エレベーターで脱出を図ったら昇った先で化け物に見つかっちゃってたらしいのよ。慌てて降下しようとしたら振動で安全装置が作動、出るに出られず現在に至る・・・と』
「本っ当になにやってんだあいつは・・・」
どうやら向こうから自力でホームにまでやってくることは不可能らしい。

科が自分でここに来るまでの間に爆弾を仕掛けてしまおうと考えていたが、そうもいかないようだ。

聡一はとにかくバックパックの時限爆弾をホールの中央に置き、9分に設定してからエレベーターを構内図で探す。

見るとそれは南改札のエスカレーターの脇を奥に進んだ先にあった。小さい北より南の出入り口の方に設置されているのだろう。『夏木駅』はハブ駅だ。上りである地下3階ホールの方が人の行き来する量が多いのは想像できる。

地下3階から地下1階へ直通のエレベーターの脇、斜辺の長さに比例して長い底辺分の道を進むと、大人2人分ほどしかないひっそりと、天井だけがやけに高い通路の行き止まりに小さなエレベーターが肩身が狭そうに収まっていた。

幸いにもそこには化け物の姿はない。が、もし、今この状況で後ろから化け物が入ってきたらと思うと気が気ではない。何せ、唯一の移動手段であるエレベーターが停止状態だ。逃げ場がない状況でわらわらとやってきた連中に襲われれば一貫の終わりである。

手早くナイフをドアの間に入れててこの原理で指の入るほど隙間を開けたら、後は強引に両腕で鉄の扉を開ける。幸い最下層なので下には1mほどのスペースがあるだけで、見上げるとちょうど地下1階と地下2階の間ほどに鉄の箱が挟まっていた。

(地下2階から開けるべきだったか・・・。

しっかし、どうやって底を開ける?銃でミシン目に・・・?いやさすがに銃声でばれるだろ・・・)

とにかく近くで様子を確認しようと、ロープにしがみついて上へと昇ってみる。彼にとっては天井であるエレベーターの底を叩いてみると思った以上に頑丈らしかった。

「な、何!?」

叩いた音に反応してくぐもった声が天井から聞こえてくる。

「俺だ」

「聡一くん!よかった、きてくれた!」

「ったく、助け呼んどいて動くなよ。
なぁ・・・、床そっちから開いたりしないのか？」
「無理よ。天井だって開かないんだもん」
「やっぱ破壊か・・・けどなぁそれだと絶対バレるしなぁ・・・」
気が進まないが、あと5分ほどでは他に手を考えている余裕もないだろう。
となると、それでも最善となる策は、
「電車に遅れがないのが幸いしたな・・・到着したタイミングで脱出、化け物が来る前に電車で離脱、これしかない」
「い、いやぁ難しいでしょ、それ」
「だとしてもこれしかない。その時がきたら下からマシンガンぶっ放して円状に切り取り線開けるから蹴り落とせ。それまでは端にいろ。
タイミングは・・・電車の制動（ブレーキ）がかかった辺りがいいかな。撃って開けて出て走って乗って・・・ちょうどそれぐらいだろ」
「分かった。
・・・そういや隆くん達は？」
「あいつらは途中でバックレた。何でも楚々絽に襲われたとかで燃え尽きたらしい。まー最初っからやる気なかったけどな」
「何それ！？根性なし！甲斐性なし！」
「で、最終的には美樹に助けられたんだと」
「うっわー、情けねー」
そんなだからここぞという時にしくじるんだとか、ああだからそういうところに漬け込まれるんだとか、時計の針を気にしながらそんなここにはいない人物の悪口を言って時間を潰す。
作戦上、時間までは動けないのが辛いところだ。ギリギリの状況なのに、どれほど最善を尽くそうと思ってもやることをやり終えてしまったら時間を持て余してしまう。無駄に時間があるというのは焦燥感ばかりを引き起こすから厄介である。
そんな心臓に悪い精神負荷を軽減できるのなら、級友の犠牲など

安いものだ。
「・・・そろそろ時間だな」
大方愚痴を言い終わった後、分かりきったことを再確認するように呟いた。飛騨真幸が持っていたのと同じサブマシンガンFN P90を上向きに構える。
1度シュミレーションとして、どの辺りを打ち抜くのか銃口を回して円を描いてみた。人1人分がスムーズに脱出できる大きさをイメージして目測で調節していく。
落ち着きなく何度も銃を握りなおして、気を落ち着かせる。
全く似合わないブランド店から持ち出した金色の腕時計の針が予定の時刻を指した。
微かに車両がホームに入ってくる音が聞こえる。
特に注意して耳を澄ませなければならないのはレールを車輪が滑る音だ。
近づいてくる空気の振動に僅かながら金属音が混じり始めた。それはブレーキがかかって摩擦が増えたためにできる独特のモノ。
（・・・ここだ！）
「いくぞ！」
かけ声1つ、ずっと構え続けていたPDWの引き金を引く。
清々しいまでにけたたましい銃撃音。
これで完全に化け物共をおびき寄せてしまった。いよいよ後には退けない。
発砲をやめたと同時にガコンッと円形の蓋が開いて、科がロープ伝いに一気に降下してくる。
さすが、命がけとなると行動が素早い。誰だってこんな場所でグロテスクな孵化を終えたばかりの化け物に囲まれて終わりたくはないだろう。
「走れ走れ！」
細い道を一直線に抜け、開けたと同時にほぼ90。に曲がる。車両の開いた扉が閉まるまで時間はない。

エスカレーターの前を過ぎる際、唸り声を上げた化け物が数匹地下1階から3階の間を駆け下りるでもなく飛び降りるという方法で距離を縮めようとしていた。

2階層分の長いエスカレーターに1度では降りきれず途中の手すりを歪めてもう一跳躍、計2歩でホームへと着地する。

あれほどあった距離がもう１０ｍもない。扉までは３ｍほど。我武者羅に足の筋肉に力を込めて車内に飛び込む。

だが、今度は扉がなかなか閉じてくれない。

まだ安全圏でない電車内にて身体の向きを軸足も滅茶苦茶に半回転、バランスが取れずに床に背中から打ち付けるがそんなことはどうでもいい。仰向けに近い格好でバックパック分浮いた身体をそのままに、ＰＤＷを向かってくる化け物共へと撃ちっ放す。照準は驚くほど合わない。ほとんどがあらぬ方向へと行く中、いくつか当たった弾は牽制としては役不足だ。

そこでやっと、電動式の扉が閉まり始める。

それをもお構いなしな化け物の一撃がドアガラスを内部へとぶちまけた。

「きゃぁあああ！」

「叫んでねぇーで手伝え！カバンに銃が入ってる！！」

「聡一くんが乗っかってたら取れないわよ！」

言われてぐるんと一回転、その最中にバックパックを外す。

――がぎぃんっ、ぎぎぎぃ・・・！

ガラスが散ったことで取っ手ができたとばかりに、鉄扉を握り歪める化け物。

完全に閉まる前に止まったドア自体を剥がそうとしている。

その１匹だけじゃない。他の連中は窓ガラスを割り無理やり身体をねじ込もうとしていた。

もはや狙いを定める必要もなく、適当に撃てば勝手に当たる。逆接、そこまで肉薄したところにエグイ怪物がいる。

窓はともかく、扉が壊されればまずい。

銃撃に加わった科と共に扉を守ろうと銃弾を叩き込むが、外れた弾が鉄板を打ち抜き、かえってその強度を落としているような気がした。

重い腰を上げ加速を始める電車。

化け物共の足場が動き出す。踏ん張ることができなくなって、彼らの力が緩んだ。

「ぐぉおおおおおおお！！」

気合を入れ、最後の一押し。

がんっという小気味好い音共に化け物達はホームの端にある柵にぶつかって引き剥がされた。

扉諸共持っていかれて、大きく開いた穴から強い風が吹いてくる。

しかし、全力疾走に加えてのギリギリの攻防戦で息荒く汗もかいた身体には心地よい。

「脱出っ・・・成功！」

夏木駅から上りで次の駅で下車した聡一らがハブ駅と比べるまでもない小さな駅を出ると、すぐ近くに白いミニバンが止まっていた。

「よう、情けない男共」

「うるせー、苦労を知らねぇ若人が」

憎まれ口を挨拶代わりに交わして3列目に2人して乗り込む。運転席隆、助手席美樹、2列目が真幸1人で、3列目に聡一と科。

これでとりあえず、クラスメートが5人揃った。

「で、これからどうする？タワーに向かうか？」

そうしたそうにアイドリングしていた車を発車させながら隆が問う。

「いや、別にいいんじゃないか？わざわざイベントの度に行ったり来たりしなくてもさ」

「そうよ。またすぐイベント告知あるかもしれないし」

「すまん、本音を吐露しよう。帰らせて」

「治療薬でライフは回復してるんだろうが。踏ん張れよ」
夏木駅脱出組に却下されて溜め息、スピードが乗ったミニバンを適当に走らせる。目的地がないのだから仕方ない。
「ったく、トラックは最後の最後に葉月に爆破されるし、楚々絽には化け物をけしかけられるし散々だ。
さすがにもう気力がねぇ」
「へぇー、はづちゃんに遭ったんだ?」
助手席でカーナビを弄っていた美樹が顔を上げて訊いてくる。設定し終わったらしくカーナビが音声案内を始めていた。『南春花埠頭』、それが彼女が決めた行き先らしい。
「あぁ、イベント3のトラックを上から落とした手榴弾で爆破されたんだ。ひでぇよな」
「ふぅん・・・、私も一回はづちゃん見たけど何もなかったなぁ」
「・・・・・・・・・・・――――何?」
ぴたりと、ハンドルをきる予定だった手が止まる。
「ん?」
「葉月に遭った?」
代わりにブレーキをかけ急停車、念を押すように訊きなおす。
「向こうはお前に気づいたのか?」
「うん、ちょっと目があっちゃったから。ヤベェスと思ってすぐ逃げたけど何とか撒けたみたいー」
「いやおかしいだろ、それ。葉月の嗅覚相手に撒けるはずがねぇ・・・」
「おいおい待て待て。そうだよ、おかしい。
トラックの時だってわざわざ遠距離から・・・生き延びた僕らにトドメを刺しにもこなかった!」
「まさか・・・でも能力は使えないし、底上げしてる五感も・・・?」
額を押さえ眉に寄った皺をぐりぐりと伸ばした。
他の彼らもその可能性に気がついて、各々の反応を見せている。

「いや、いやいや、いやいやいや・・・だが」
「だとしたら・・・」
「それって・・・」

「「つまり・・・・・・今なら殺(や)れる――――!?」」

いきなり、隆がシートから狭い車内立ち上がった。
思い切り頭を天井にぶつけたが些細なことだ。
今、大切なのは、
「この機を逃すわけにはいかねぇ!」
そのただ1点である。
この世界でのチャンスを逃せば一生葉月に勝てない。ならばこんなところでくすぶっている場合じゃないのだ。

「今こそ男を見せる時だ!!」

その台詞に飛びかかろうとする後方の科を真幸と聡一が必死に押さえつける羽目になった。

第４７話－　仲間潰合。－Ｃｌａｓｓｍａｔｅｓ－（後書き）

さて、今回も2週間以上経ってしまいました。
前回、『次回でゲーム終了』とか言ってたのに、気持ち完結編の３分の１の時点で５０ＫＢ越えが見えてきたので諦めて分割しました。
そのせいで今回イマイチ動きがないですね。うーん分割したくなかったんだけどなぁ。
三人称怖い……あれよあれよとＫＢ増えるんだもの。
そのせいで前回の次回予告が中途半端に。
まぁとにかく人民が立ち上がりました。

今回も仲の良いクラスメート達が書けて楽しかったです。
仲良く身内で潰し合い。
次回もそんな感じでがんばります。

第４８話－　鬼畜生。－Ｑｕａｇｍｉｒｅ－（前書き）

先日祠堂学園で起きた虐待事件の実行犯である少年が取り調べで、「あれは悪魔払いだった」「あの人の皮を被った悪魔を懲らしめたかった」などと供述を繰り返していることが新たに分かった。対して被害を受けた女児は「毎日のように虐待を受けた」「お腹を何度も蹴られた」「椅子の角で殴られたこともある」と虐待の深刻さを語り、警察は殺人未遂など余罪を追及する方針だ。

……とある記事より

第４８話－　鬼畜生。－Ｑｕａｇｍｉｒｅ－

『というわけで葉月を探してくれ、椎！』
「待ちなさい！私達はチームで行動してるのよ！？勝手な行動はやめなさい！」
『このチャンスを逃せるか！頼んだぞ！』
何やら自称男気スイッチらしきものが作動したらしい四十万隆の暴走。イヤホン越しにそれを悟って朝風椎は内心で舌打ちした。
（まっずいなぁ・・・）
織神葉月の弱体化、それはいい。願ってもないチャンスだ。だがしかし、そのために彼女自身が動かせるはずだった駒がコントロールできなくなるは痛い。
そもそも、今この時彼女の思惑通りなら彼らはリタイアしていてもおかしくはなかったはずなのだ。それが途中に乱入してきた若内楚々紹まで撃退し、細川美樹という仲間まで増やしている。
今はまだいいが、自身の離反に気づかれたら身が危ない。
（そろそろしとめないといけない、か）
思いを新たに彼女は決意する。『クラスメイトを倒す』・・・と。
通信が切れたことを知らせるモニターのウィンドウを閉じ、通話ソフトにもう一度とある番号を打鍵する。
それは、このゲームが始まる前親の会社の関係で面識のあったこの世界の創造者（クリエーター）との密謀により得た番号。
――――隠し番号（シークレットナンバー）に繋げた者は板川由を１度だけ使役できる。
『私も気兼ねなく参加できるしな』。その言葉通り、作成側として今回の件に参加した彼は自身をゲームに組み込んで、知り合いにその権利を配ったのだ。
「あ、由先輩。はい、そうです。ちょっと私のクラスメイトを蹴散らしてほしくって」

#

「南春花辺りはねー、激戦区になってるんだ」
南春花埠頭。ナビゲーションに設定されたその場所に向かうに当たってその狙いについての質問に細川美樹はそう答えた。
「おそらくこの世界で最も大勢力な発火能力者（パイロキネシス）チームと軍事（ミリタリー）マニアチームの大乱戦」
「ミリタリーマニア？」
「そー。あの辺りにはそもそも軍事基地があったんだけど、ゲーム開始直後運よくそれを知った発火能力者（パイロキネシス）チームがまずそこを物色してイージス艦を見つけたわけね。ちなみにトマホークはそこから飛んできてるのよん。
で、そうやって『やったぜ俺ら億万長者！』ってやってる内に、同じように基地に気づいた軍事（ミリタリー）マニアの連中が照らし合わせたわけでもなく集まっちゃったのが争いの始まり。
武器が有り余る基地での争いに、ひとまず武器をできるだけ積み込んで海に逃げた発火能力者（パイロキネシス）と港の軍事（ミリタリー）マニアがお互いの武器目当てに潰しあってるんだぜ」
「見てきたみたいに言うね」
「まー私、マニアチームで参戦してたからね。途中で裏切ってきたけど」
あははーと笑う彼女。腰に吊るしていた拳銃を取り出して、座席横に置いた弾薬箱（パッケージ）から取り出した銃弾とマガジンの中を取り替えている。パッケージに入っているのはホローポイントという殺傷性の高い銃弾だ。
そんな彼女をチラッと見て、四十万隆は先ほどの話で生じた疑問を口にする。
「発火能力者（パイロキネシス）チームは海に逃げたって言ったが、連中陸にもいなかったか？」
「二手に分かれたんだよ。海じゃ武器を補給できないじゃん？で陸

にもとりあえず本拠地を作って武器を集めながら、マニア連中を挟み撃ち・・・といこうとしたみたいだけど、イベント3は失敗しちゃったんだね。

海と陸の発火能力者（パイロキネシス）、軍事基地のマニア、ジャベリンの私達。今残ってる主な勢力はこの3つ。

漁夫の利といこうと思ったんだけど、標的ははづちゃんに変わったし、とにかく行って探そう」

「葉月がそこにいるって確証は？」

「今いるかは分からないよん。

でも、トラックを爆破したことからも分かるとおり弱体化したはづちゃんが今一番恐れているのは敵に武器が渡ること。

埠頭にいるならいるで連中の相打ちを狙ってるだろうし、こうして私達が向かえば阻止にくるんじゃない？」

どっちにしてもあそこ戦の渦中だぜ、と楽しそうに銃を構えて美樹はご機嫌に笑った。

＃

織神葉月は思春期という成長期において、全く発育していない。

形骸変容（メタモルフォーゼ）という能力上、無意識に身体を最善の状態に保つようになってから、老化も止まって、わざわざ自分で成長しようとも思わないままに現在に至る彼女の身体は元々未発達気味だった１２歳ほどの身体のままだ。

低身長に細い体躯。その身体は四十万隆とは比べるまでもなく、朽網釧と比較しても低い。

少女、悪くすれば幼女にすら見える。はっきり言って戦える身体ではない。

そんな子供の非力さは現在彼女自身が身に染みて経験しているわけだが、だからと言っておとなしくしているなど彼女には考えられない話だった。

トラックは爆破した。その前に存在だけは確認していた埠頭での争いもその間に戦況は大分進んでいるだろう。終盤なら特に好ましい。弱ったところを両者とも奇襲する。

そういった策略を胸に彼女もまた南春花埠頭にいた。

持っている武器はバケットに詰められたアップル・グレネードと途中で運よく拾った拳銃1丁だけだ。手榴弾は言うまでもなくおいそれと使える武器ではないし、拳銃など反動で彼女の腕があらぬ方向へとずれてしまうために連射ができない。そのため絶対に外さないゼロ距離で使うことが前提になってしまう。

つまり、はっきり言えば武器不足。いや、武器に恵まれていない。

埠頭でうまい具合に扱える武器のおこぼれをいただければそれに越したことはないし、敵に渡って状況だけが悪くなることだけは避けたいわけだ。

（うーん、よく分かんないなぁ・・・）

望遠鏡すら持っていない彼女はいつもなら裸眼で十分見通せる距離も確認できず、仕方なしに戦場に近づかなければならない始末。ロースペックな自分の現状にげんなりする。

（ナイフ、ナイフが欲しい）

毎日持ち歩いているダガーナイフをこれほど恋しく思った日はない。

あれなら十分勝機がある。あれなら一撃で頸動脈を切れる。あれなら一瞬で殺れる。

物騒なことを頭で考え、口ではナイフナイフと呟きながら、戦場を避けつつできるだけ軍事基地へと回り込んでいく。誰か倒れていてくれれば装備が剥ぎ取れるのだが、周りを見渡してもそううまくはいかないようだった。

高い柵で覆われた軍事施設の領土、その周りに隣接する貿易倉庫や工場群で入り組んだこのエリアは潜伏するにはもってこいだが、隠れるわけにもいかず、敵との対抗手段も見つかっていない葉月にしてみれば面白くもない状況だ。

常時であれば丸腰でも十分に戦場に飛び込めるというのに、今や身を守備すら固められず体勢を整えられていない。

今、敵に遭えばただでは済まない。しかしいずれは誰かに遭遇する。その前に何とか攻撃と防御の手段ぐらい見つけておかなければならない。

けれど、状況は待ってくれないものなのだ。

「よぉーぅ、葉月ちゃーん」

そんな皮肉の込めた低い声。壁に響くいくつもの足音。

振り向くことなく立ち止まった。

背中の向こうに四十万隆がいる。それだけでなく他のメンバーもどこかに控えている。

そして、こうして向こうからやってきたということは、自分の弱体化について感づかれているということだ。

振り向けない。振り向けばそれは相手に銃撃にタイミングを与えることになる。

だから葉月は振り向かず、最小限の動きで右腕にかけた籠からリンゴ1個のピン（ヘタ）に指を入れ、後ろへと思い切り振り飛ばした。

遠心力で飛ぶ緑の果実、それが全ての引き金だ。

始めの始めから―H&K　MP5《サブマシンガン》を構えていた隆による銃撃と葉月の身を捻った回避。避けきれるはずもなく背中に数弾被弾する。それに怯むことなく葉月は横っ飛びに物陰へ飛び込んで、身を一回転させ立ち上がり駆け出した。

「待てやぁあ！」

「誰が待つか！」

飛んできた手榴弾を潜る形で突っ込んでくる隆、その他のメンバーはさすがに同じ行動はとれず、爆発備えて蜘蛛の子を散らすようにそれぞれバラけてしまう。

（ひとまず、よし）

数で押し切られる可能性を一時的に低下させることには成功した。まずは切り離せた隆をどうするか。

相手は５０ｃｍ以上あるサブマシンガンを持っている。近距離、中距離は射程は範囲内。ここまで近づかれている今更になって距離を置くのはかえって危険だ。

（ならば超近距離、銃身よりも内に入る・・・！）

曲がった角で急停止し右足に力を入れて進行方向を１８０。変更する。リンゴの入った籠を落し、床を蹴って一歩、追って角を曲がってきた隆に激突せんばかりに肉薄した。

「ッ！」

そのあまりにも突飛な行動に生じた思考の隙を見逃さず、葉月は左腕を振り下ろすというよりは滑らすように銃身に乗せて銃口を下に向けさせた。残った右拳底を喉仏に叩き込む。

「がっ！てめぇ・・・」

反撃に転じようと右腕の銃を持ち上げようとするが、手ではなく腕全体で押さえつけている彼女がそれを許さない。

男子中学生に比べて、全く力のない子供の腕、だがその力の使い方が違う。

「非力が弱さに直結すると思わないことだね、タカ。

これでも施設育ちでの運動不足は道場で解消してた人間だ」

いつも化け物染みたスペックでの力押しで台無しにしている葉月本来の能力である。

もはや彼女の左脇に挟みこまれた銃、次に彼女は彼の体の外に出るように左足を軸に右回転し、隆の握ったグリップを無理やり引き剥がす。ごとんっと落ちたマシンガンを蹴飛ばしてから、同じ方を向いて並ぶような立ち位置になった葉月は隆の横っ腹に肘内を食らわせた。

次いで、よろめいた彼に全体重をかけた右手を傾きかけた側頭部に押し付ける。バランスを崩しかけていた身体はあっけなく地に伏した。起き上がろうにも頭を抑えられては力がうまく入らない。隆のもがきすら許さない手際の速さで葉月は左手で腰のリボンに挟んでいた拳銃を引き抜いて、ガツンと打ちつけるように頭へ。ゼロ距

離、どれほど手がぶれようが、一撃で相手を静められる。今の彼女にとっての一撃必殺だ。

だが、ガンッと側面からの突進。衝撃に耐え切れず隆から引き剥がされてしまう。ゴロゴロとなすままに転がって距離を取りながら、目をやると飛騨真幸がその犯人だと分かった。

（しくじったっ）

素手の相手ならともかく、飛び道具を持った複数に非力な身体1つで対抗できるはずがない。1人1人沈めていかなければ勝ち目は薄いというのに、トドメを刺す前に合流されてしまった。

籠を置いた場所へと駆けてそれを拾うとまた逃げに転じる。もどかしい話だが引き離さなければどうしようもない。

「はづちゃん！」

「っ！？」

いきなりの呼びかけに振り向くと細川美樹が低い姿勢で右から接近してきていた。もう一度籠を落とし足で滑らして端へ追いやり美樹に備える。下からの掬うような右の拳底、それを首をずらして避け、するりと肌と肌を滑らしてその腕を絡めて自分の方へと引き込んだ。が、対する美樹は引かれるままに左手を前へと突き出す。その手を左手軽く受け止めて葉月自身まで後ろへと倒れ込む。緩やかな転倒は途中から巴投げに。けれど美樹もただ投げられる人間ではない。受け止められていた左手に力を込めて体勢を整え、葉月の体をマット代わりに側転の要領で1回転、着地した。

隆の時のようにはいかない。それは体育祭の時に分かっていたことだった。

力に逆らわず沿い逸らして相手を制する。

それが葉月、そして美樹のスタイルだ。はっきり言って相性が悪い。『暖簾に腕押し』の暖簾同士の戦いなのだ。

そもそも相手の力を汲むという彼女の体術はつまり護身術に他ならない。はっきり言って相手を殺すのには不向きである。だからこそ彼女は常時ナイフを持ち歩いているのだが、今はそれもない。

決定打がないままずるずると絡み合いだけが続いてしまう。
殴り合いではなく、引き引かれの組み合いは、やがて床に伏してのマウントポジションの取り合いになってしまった。
そしてそんな時間の消費はこの状況下で葉月にとって不利に働く。
「美樹捕まえてろ！」
向こうには仲間がいる。足止めを食らっている時点で相手の手中だ。
すぐさま追いついた隆と真幸が問答無用の凶弾をくれる。子供１人相手に過剰すぎる攻撃を床でもみ合っていた美樹を盾にしようと、美樹はされまいと互いにごろんごろんと転がって敵味方関わらず被弾する羽目になった。
「ちょっ！当たってる当たってる！」
「ちっ！」
銃撃を諦めて駆けつけた隆はちょうど上を取った葉月の横っ腹に重い蹴りを食らわす。
「きゃうっ！」
先ほど体当たりで引き剥がされた時と同じく、幼い筋肉は暴力に耐え切れずに吹っ飛んだ。
軽さに比例して伸びた滞空時間、ぐるりと回って、今自分が襲われている場所を視界が巡る。
体育館の数倍ある広い工場、ただっ広いその空間を入り組ませる大型機器の数々。
落下の瞬間受身を取ってダメージを和らげようとするが、運動神経に身体の方がついてこれない。お世辞にもまともとはいえない落ち方をしてひゅっと肺の空気を吐き出した。
「女の子のお腹蹴っ飛ばすなんて・・・この鬼畜！」
げほげほと咳き込みながら隆を非難し、すぐさま立ち上がる。
「うるせぇ、お前は女子カテゴリーには入ってねぇんだよ！」
美樹と離れたことで再開された射撃に同じ場所に立ち続けることを許されない。駆けて照準をズラし物陰を盾に弾雨を凌ぐが、この

ままでは攻撃に転じるまでもなくジリ貧になって追い詰められてしまうだろう。

そしてどうやら隆は本気で葉月を殺るつもりらしい。

本来、彼女が言った以上に『女の子の腹部を蹴りつける』という行為は難しい。その内にある精神体がどんなものであれ、外見というのは一種の防御機能だ。動物の赤ん坊の愛くるしさに保護を求めるという意味合いがあるのと同じく、葉月が成長しないまま、女の子という外見を保っているのにも打算的な理由が含まれているのだ。

にも関わらず躊躇なしの一撃。

（鬼め・・・）

とんでもない暴言を心中で吐きつつ、機械と機械の間をすり抜けていく。

やはりこの状況は不利だと確信して葉月は戦線離脱に脳を切り替えた。置いてきてしまったリンゴが惜しいが仕方ない。あそこまでされた上に隆にだけは負けたくないのだ。

目指すは自分がここへと侵入した時にも使った出入り口。そこまでうまくたどり着けば、後は一度通った道だ。相手を撒くことぐらいはできる。

「うお！？」

「っ！」

が、そううまくもいかない。お互いに死角だった交差路で矢崎聡一に遭遇。出会い頭に腕を押し込み転倒させるが、先へ進もうとした左足を掴まれた。

抜いた拳銃を足にしがみついている彼の頭頂部に突きつけるが、またもや引き金を引く前に妨害が入る。それも今度は銃撃に右手の得物まで弾かれてしまった。

「うらぁああ！」

さらに飛び掛ってきた隆を避けれずに組み合って床に背中を打ちつける。それでも後頭部は首に力を込めて何とか守った。転倒から間髪入れずに押さえつけられた右手の代わりに左手で両目を突こう

とするが、その手も捕まれて床に固定された。
「観念しろこの悪魔！」
「やってることはそっちが悪魔だ！」
言い合って、隆は葉月の手を掴んだまま腕を首に持っていこうとし、葉月は自由の効く膝で隆の背中を打ちつける。ちなみに聡一は葉月とマウントポジションを取った隆の間に腕を挟まれ悶絶している。時々葉月の膝が彼の頭部に当たっては短い悲鳴を上げていた。
「今日こそ退治してくれる・・・！」
「女の子に暴力振るうってどういう了見なの！？」
力の差から徐々に隆の腕が首元へと近づくにつれて、葉月の抵抗も激しくなり、聡一の悲鳴も大きくなる。床を叩いている彼に2人は気づいていない。
「きゃー助けてっ、犯されるぅ！」
「白々しい演技をするんじゃねぇ！」
ついに首にまで腕がきたタイミングで今まで握っていた葉月の手を離し、代わりに細い首に押し付ける。うまく隙をつけたお陰でがっちりと嵌り込んで、腕を掴む葉月の抵抗程度ではびくともしない。
「これでトドメだ！」
言ってることもやってることも結構どうかしてる隆。
あとでそんな自分の姿を見てどう思うのだろうと、罪悪感から戦闘に全く参加していない深柄科はそんな初めて不良らしく見えた彼を傍観している。彼女にも聡一は見えていない。
（あ、さすがに堕ちるかなー）
手持ち無沙汰になった彼女はまだきていない真幸達に位置を伝えようと顎の下に曲がっていたマイクを口元に持っていく。
その時だった。
いきなり、身に覚えのない爆発が工場の壁を突き破り、数多ある何かしらの製作機を蹴散らした。
ごぅんごぅんと鉄板が歪む時に発せられるような低音が工場内に跳ねて、からからと申し訳程度に壁片が崩れる音がそれに続く。

「げほっ、こぱっ、うぇ・・・しぃゆん、騙したな・・・」
最後に煙の中から煤だらけの西谷絵梨が足を引きずって姿を現し、直後、その後方からの銃撃を背中に浴びて倒れ動かなくなった。
そして、
「よぉし、死んだ？死んだな？全く、あそこまでしぶといとは・・・」
同じく煙の中、絵梨を屠った朽網釧が現れる。
「あれ？皆何してるんだ？」
それはこっちの台詞です・・・などと言えるはずもなく沈黙する彼ら。
釧が黙る級友の状況を確認してみれば、隆が馬乗りになって葉月の首を絞めている。
「・・・何してるんだ？」

「悪魔祓いを！」
「襲われた！」

両者同時に叫び、釧は銃口を隆に向けた。
ＰＤＷの弾雨に隆は引き離され、それによって葉月と聡一は開放される。頭を何度も強打した彼より先に立ち上がった彼女は、
「酷い目にあった！」
頬を膨らませてちょうどよい位置にあった聡一の頭を蹴っ飛ばした。
少なくても彼女に鬼畜だの悪魔だのと人を罵る権利はない。
「くそっ」
最後の最後で詰めを誤ったことに悪態を吐いて、隆は再び葉月に飛びかかる。
前に自分達がそうだったように葉月を盾にすれば銃撃は止められる。一度離れてしまったことが悔やまれるが、まだ間に合うはず。
「はん」

そんな隆を鼻で笑って地面を蹴るために開いた彼の股の間にするりと足を滑り込ませ、そして蹴り上げる。

「〜〜〜〜！〜〜〜〜ッ！」

悶え苦しむ隆。痛覚に補正が効いてるとはいえ、そこは男の弱点である。考えられうる最低な攻撃だ。

枷（そういち）のせいで遅れを取ったが、そうでなければ似非不良に負けはしない。

「べぇ――――っだ」

赤い舌を出して、いまだ悶絶する隆にあっかんべーをする。

だが、隆もやられたままで黙っていはいない、局部の痛みに耐え、膝をついた体勢から、

「だらぁあっ！」

いきなり腕を伸ばして葉月の左足首を掴む。

「っ、このぉ！」

その頭を足蹴にして剥がそうとするが力のない少女の足では全力の中学男児をどうにもできない。

「葉月！」

低く伏せていたさっきとは違いさすがに葉月に当たる可能性を考えて銃を下ろした釧が代わりに彼女に向かって武器を投げた。

それは折りたたみナイフ。ただし銃で有名なS&

や」

攻守逆転。追う者が追われる者に。黒い赤頭巾は狩人に狼は獲物になった。

「そぉれ！」

――フォンッ

未発達な筋肉でもちゃんと使えばナイフは高い効果を持つ武器だ。ブレのない一閃は空気を軽く引き裂ける。

葉月の攻撃が手の長さから攻撃範囲は広くはないため、尻が床に着いたまま足で後ずさりして葉月の斬撃を回避できていた隆だが、少しずつ距離を詰められその刃が届く間合いにまできてしまった。

「ちっ！」

このままではやられる。そう判断し彼は後ろポケットにしまっていたスタングレネードを取り出しピンを抜いた。

（使いたくはなかったんだが、なっ！）

それを釧がしたように葉月へと放る。

「・・・げっ！クシロ、目と耳塞いで！」

閃光と爆音。

言葉にするのは簡単だが、その計４文字で言い表せないほどのすさまじさをもって戦場は初期化（リセット）された。

網膜に焼きつくような熱を持った光と平衡感覚をぐちゃぐちゃにかき混ぜる音。無効化を目的としているとは思えない、対策なしに防ぎきれない暴力だ。

まともに食らえばしばらく戦闘不能、でなくても大きな隙ができる。

しかしそれは隆の方も同じことで、自分までもやられかねない諸刃の剣。

だから使いたくなかった。こんなもの、遠くに投擲するために使うべきなのだ。

光と音が消えた頃、鼓膜を突き破るほど深く両人差し指を外耳道（みみのあな）に突っ込んでいた葉月はその指を抜いた。もちろん血はついていな

いし鼓膜も破れてはいない。そこまでのリアルティーはゲームとして必要ないからだ。

周りを見渡すと隆はいなくなっていた。

耳を塞いでいる隙に攻撃、というのもあり得たのだが、どうやら自分の身を優先したらしい。

ちなみに隆以外の級友は釧の登場辺りで彼を見捨てて逃げている。聡一も解放された時に離脱していた。

「クシロ、は・・・回復したら追ってきて。僕はとりあえずあの馬鹿を殺ってくる」

ぐわんぐわんと頭を揺らす釧を見てそう言って、葉月は若干ふらふらしながらも駆け出す。途中落とされた拳銃とリンゴバケットを拾ってから工場を出た。

低い建物の多い埠頭だ。屋内から出た瞬間に開けた視界に相変わらずの曇り空に立ち上る爆煙が混じっていく様子が映る。

ここが激戦区だったことを思い出し、基地の方へと視線を向けると相変わらず港と船でやり合っているようだった。

その内弾は尽きるだろうが、今はそれよりもにっくき仇敵だ。

空から地上に帰した視界の端を白いミニバンが掠めた。エンジンは既にかかっている。先に逃げた連中がかけて待っていたらしい。

走り始めたそれにアップルでもお見舞いしてやろうかという考えが一瞬過ぎったが、どうせ間に合うまいと考え直して手榴弾を握った手を下ろす。

「はぁ・・・」

釧が移動手段を持っていることを祈りつつ、置いてきた彼を迎えに暗い工場へと戻った。

「くそっ、もう少しだったのに！」

運転交代で今は細川美樹がハンドルを握るミニバンの中、自分で挑んで逃げるという格好悪い失態を晒した四十万隆が拳を自分側の

ドアに叩きつける。
「それを言ったら向こうだってこっちを殺せる機会はあったろ。お互い様だ。
しっかし、釧が絵梨を襲撃するとはな」
「それこそ”お互い様”だよねー」
などと、科の言葉遊び。
「というか手伝えよ、科」
「いやぁ・・・鬼畜にはなりたくないし」
「釧のやつ裏切りやがって！」
「妥当な判断だろ」
周囲と自分の温度差を感じて隆はそれ以降口を閉ざした。
ナビに目をやると先に設定したらしいジャベリンタワーまでのアクセスがピンク色の線で引かれている。今日始めての街だ、案内なしに根城にも帰れない。車の運転や武器の扱いはゲーム補正があるのだが、そういう専門知識外のことはかなりシビアな世界だった。
（いや、”助ける”ことに関しても補正があるのか？
俺と聡一で2回もすんでのところで助かってるのは虫がよすぎる・・・）
大して意味を成さないことを考えながら、ずっと握りこんでいたことにさっき気がついたスタングレネードのピンを弄る。
見た目、知恵の輪に見えないこともないが、外れることなどあるわけもなくそれもやはり意味のない行為だ。
さて、そんな価値のない輪っかが外れる前に、ミニバンの眼前に人影が現れた。
ポニーテール（ボンテージ）に交差編み衣装、その上にボタンを外したままの浅股（ローライズ）ジーンズ。
扇情的かつ個性的なファッションだが、それはさておき、
「「・・・・・・」」
隆達は知っている。
葉月も好むこの手の演出は相手の心情を弄び、恐怖を与えて楽し

むために使われる要はサディスティックな愉快犯御用達の方法だ。
こういった登場の仕方をする人物はまともではない。
それを踏まえて運転者である美樹は、
「よーし」
頷いてアクセルを思いっきり踏み込む。
「このまま轢こう」
彼女も存外鬼畜だった。
現実でやれば殺人罪は免れない直進コースと清々しさすら感じる的確なコントロール。
ぐしゃっと拉げるボディ。車内を揺らすインパクト。悲鳴を上げる――――ミニバン。
真っ二つになった廃車決定の鉄くずはしばらく奇跡のようなバランスを保って激走し、制御の利かなくなった運任せの走行の結果最後には転倒した。
「うん、何というか・・・愉快な連中だよね」
躊躇なく自分を轢き殺そうとした彼らをそう評して彼、板川由は自分の両脇通り過ぎた車へと振り返る。
無残に移動手段を奪われた彼らは大破した車体から這い出てきたところだった。
そんな彼らに彼は優位者として余裕のあるこやかな笑顔。
「やぁやぁ第一中学1－Bの哀れな子羊共、初めまして。
私は板川由、能力者幻想現実で、この世界の創造者（クリエーター）だ。
朝風のご令嬢である椎ちゃんの命を受けて君達を殺しにきましたよろしくね」
そして、轟音。
走れば走るほど減っていく体力ゲージとか、頭部被弾即死のシビアな当たり判定とか、超能力なしだからこその武器による戦闘とか、そんな今までゲームプレイ中に経験した全てがどうでもよくなるようなそんな一撃。
ただ高速で走り寄って蹴っ飛ばしただけですが何か？そう言いた

気なあまりにも気軽さを以って、挨拶から一拍、アスファルトを蹴って科に接敵、その際蹴られたアスファルトがゴバンッと反動に耐え切れず黒い花を咲かせ、は？と間抜けな声を最後に腹部を蹴っ飛ばされた科は、そのまま道路をまっすぐいった丁字路に建つビルディングに突っ込んだ。

その威力に耐え切れず建物自体が瓦解し始めた頃になってようやく事のヤバさを理解した隆達は今まで散々危機を乗り越えてきた間に培った判断力（ほんのう）に従い、戦線離脱を開始する。

戦闘とも言えない数秒間にて深柄科、即死（リタイア）である。

あんな出鱈目に挑むのは愚か者のすることだ。

しかし、当然のことながら自分達を標的にしている彼がそれを許してくれるはずもなく、先と同じくアスファルトの花を咲かせて、空中から真下へ、真幸の背中を背負ったバックパックごと踏みつけた。

げふっと蛙が潰された時のような声を出して蛙が潰された時のような体勢で平らな舗装路にめり込む。

「畜生！何でこう次から次へと！」

口から出てくるのは、車輪の踏面に轢かれたような無残な姿になり下がった級友へかける言葉ではなく、この状況への愚痴。

それのついでに隆は棒状柄付手榴弾（ポテトマッシャー）を生死すら確認できていない真幸もいる蛙型をした穴へ向けてぶん投げる。

一撃一殺。狙いを定められたらまず生き残れない。一撃一撃の間にかかるタイムは3秒ないし5秒。それもおそらく虐（あそ）んでいるからこその隙だ。

（せめて、時間が稼げれば・・・！）

逃げられるかもしれない、そう思っての手榴弾だった。

だが、

「っ！」

少々深く抉りすぎた穴からちょうど出てくるところだった由はそれを避けた。

（・・・？何故わざわざ手榴弾を避ける？）

その違和感に彼は思い至る。

避けたということは当たるとまずいということ。当たるとまずいということは守備力もしかするとライフゲージそのものが低いということ・・・？

ありえない攻撃力とスピードに騙されていた？

（いや、それだとミニバンで轢いた時のが説明・・・待てよ、受けたんじゃなくて攻めたのか？）

狙い通りアスファルトの穴へと吸い込まれていた危険物がここで爆発、もちろん人間業ではない身体能力を持った由はその被爆範囲外に軽々と脱出している。

それを見て確信。

（守備じゃなくて攻撃！ミニバンはぶつかる前に蹴り千切ったな！・・・つーことは攻撃が効かないわけじゃない！）

ならば逃げるのはまずい。せっかく勝機があるというのに、それまで棒に振ることになる。

短機関銃を由に向けトリガーを引いた。無論、神速を持った彼にあたるはずもないが、次の標的を誘導することは可能――――その思惑通り彼は逃げ惑う彼らの中で唯一反撃に転じた隆に狙いを定め、３度目となる縮地で彼の懐に入り込む。そして、３度目の隙。移動から攻撃に移る際にできる空白。近づいたことを相手に認識させるための、恐怖を与えて虐（あそ）ぶための余計な時間だ。

これを待っていた。

これでもかというほど近づいた由に隆はプレゼントを渡す。

銃口を向けた辺りでピンを外していた手榴弾（レモン）。

「はっ」

それを見て愉しそうに笑った彼は、その贈り物を右手を振るって弾き飛ばした。

当然。この距離だ、避けるまでもない。

が、右手を手榴弾の排除に使ったことによって、彼の攻撃はさら

に先延ばしになる。
超近距離にまで向こうから接近させ、そしてこちらからの攻撃を通す間も得た。
この瞬間こそが、隆の狙いである。
レモンを由の前に左手で放ると同時にやや後ろへ倒れるように片足分下がりながら、彼は右手に持ったサブマシンガンを手放し、代わりにホルスターのベレッタを抜く。それを躊躇いもなく先輩たる由の口内に押し込んだ。
ガリッと前歯に当たる感触があったが、むしろそれが彼を怯ませたようで、銃身は半分ほどめり込む。
あとは引き金を引くだけ。
そこまできて、いやだからこそのタイミングで、
――バシュッ
軽い動作音、そして降りかかる網。
それは逃走する犯人を捕縛するのに使われる網であり、絡めて動きを封じることによって相手を無効化するバズーカータイプの防犯グッズだ。
そんな代物が由の後ろから迫る軽トラックから放たれたのだ。
隆が睨んだ通り、この世界ではゲームをより盛り上げるために補正がかけられている。
正確には援護補正ではなく介入補正。
その内容は戦闘において第三者が介入を試みた場合、事象の前後を多少入れ替える、つまり間に合わせるというモノである。
例えば手榴弾（レモン）の爆音のせいでトラックの接近に気づかなかったことにしてもそう。偶然にしては出来過ぎている。
実際考えてみればあまりにも都合のよい現象の連続、そして強引にも見える物語（ストーリング）。
人はこれをご都合主義と言う。
絡まった網に機動力を大幅に封じられた由と思いもよらぬ第三者の介入にトリガーを引き忘れた隆、その2人目がけてトラックはそ

のまま突っ込んだ。
　ゴガッという音を立てて2人は数十メートル吹っ飛ばされてアスファルトに転がり、フルスロットルで突撃した軽トラは車体に悲鳴を上げさせながら１８０。回転ドリフトを成し遂げ、ターンしてべちゃりと地面に伏す彼らの元へと戻ってくる。
「うぉおおぉおお！！」
　それを見て隆は転がるように危険区域から脱出を図る。けれど、網に捕まった由はそうもいかない。
　そんな、うまく転がした標的の頭部を向って右の前車輪にて轢く殺人トラック。
　その運転席に口角を釣り上げた葉月を、助手席に唖然としている釧を見とめて、隆は休憩（インターバル）になっていないインターバルの終わりを知る。
　由の死亡（リタイア）を知らせる嫌に鈍い音をゴングにセカンドステージがスタートした。
　そして、それだけでは終わらない暴走トラックは進行直線方向で怒涛の展開についていけずに呆けて突っ立っていた美樹を巻き込んで、ギャギャギャギャッと地面を何かで擦りながら、衣服ブランド店のショーウインドウに激突する。
　今度こそちゃんとした運転法でバックし車体を回転させて向き直った白い軽自動車規格のトラックはそのフロントガラスを無残に砕けさせ、ボンネットを拉げさせていた。
　けども、それに見合った戦果は挙げている。
「さーてさて、粛清の時間です、よっと」
　楽しそうに告げる彼女のボロボロだった服は治療薬を使ったのか元の新品に戻っており、先ほどの苦労がすべて水の泡になったことを示している。
（また始めっからか・・・くそ）
　生き残った隆と聡一に向き合うために一時止まっていた軽トラが再度前進を始めた。

肉体的ハンデを理解している葉月はこのまま車体を武器に、降りてくるつもりはないらしい。
距離にして３０ｍほど、ぐんぐんとスピードを増しトラックが接近してくる。
「聡一！ミニバンにグレネードランチャーあったろ！頼む！」
「分かった！」
今まで逃げようと遠ざかっていたミニバンに向けて聡一は走り出し、隆はそんな彼に気づいて彼の方を標的に定めた葉月達の足止めにかかる。
トラックの後ろにあるミニバンへと彼女らの横をすぎた聡一を追いかけて背を向けたトラックの荷台に散々世話になった手榴弾最後の１つを放り込んだ。
ゴトンッという物音に気付いた釧が慌てた様子でそれを葉月に知らせる様が後方のガラス越しに分かる。
危険すぎる異物の排除に助手席の釧が走行中のトラックから身を乗り出して荷台へと乗り移ろうと試み、車の走行速度が若干下げられた。ここぞとばかりに隆は動かしていた足にさらに力を込めてスパート、縁に手をかけ上半身に重心を傾けて荷台に乗り込む。
走行する車体での行為だ。どちゃっと頭からの格好悪い着地になる。まだ痛い顔をあげると釧が荷台の手榴弾を投げ飛ばしていた。
安定しない荷台で無理に立ち上がろうとせず、低く保った姿勢から釧の足を引く。バランスを大きく崩した彼も狭い荷台に転がった。
サブマシンガンは捨ててしまった。拳銃は撥ねられた際にどこかに飛んでしまった。手榴弾は使い切ってしまった。バックパックに残るのは裏切り者に通じる通信器具本体と薬などのアイテムにもう一丁の拳銃だけ。それを取り出す暇のない現状、隆の武器は己の拳のみである。
（だが！）
マウントポジションを取って、上から殴りつける。葉月ほどではないにしろ釧もか細い体つきをしている。純粋な腕力では負けない。

葉月が運転で手が離せないこの状況、ランチャーが間に合わなくても釧を沈めてから彼女に対処することができる。
などと、そんな隆の考えを嘲うかのように、トラックがいきなり大きく揺れた。それに合わせて彼の体が浮く。
「え？」
遠心力による振り落とし。
大回転ドリフトで生じた慣性力に隆、そして釧は荷台の外へと放り出されたのだ。
不意の乱暴な強制下車に無残にも体のいたるところを打ちつけ回転しながら地面に叩きつけられた彼らに迫りくるは、この目でその雄姿を目撃した殺人トラックの猛進だった。
「のわぁっ！」
今度こそ間一髪というところで何とかそれを避けた隆と巻き込まれかけた釧。
そんな彼に隆は叫ぶ。
「見たか今の！あいつお前まで轢こうとしてたぞ！」
わざと大声で指摘して動揺、もしくは無力化を狙ったそのセリフに、
「何をそんな・・・」
言って釧は微かに肩をすくめる仕草をした。
「当たり前のことを」
「目、を、覚、ま、せ――――っ！」
がくがくと彼の肩を揺らす隆。
そんな馬鹿なことをやっている内にトラックはさらにターンして帰ってきた。
「くそ！」
釧を突き飛ばして轢き殺そうと激走する軽トラから逃げるために走り出すが、完全にこっちを標的に換えた葉月は執拗に追ってくる。
体力切れが先かランチャーが先か。そう脳裏に過ったその時、待ち望んでいたそのグレネード弾がターン時の隙を狙って発射され、

そして着弾した。
荷台を吹き飛ばす豪快な破壊音が響き、破裂（バースト）の前に飛び出した葉月も軽い身体が仇となって宙返り前転前転開脚前転と爆風に押されるがまま連続マット演技をアスファルトでやる羽目になった。
隆はそのチャンスを見逃さない。
今まで休みなしのギリギリの攻防を続けてきた身体と精神（こころ）は限界まできている。それでも『打倒葉月（おれいまいり）』を達成してやるという意地が彼を動かしていた。
傍目、少女相手に執拗な嫌がらせを繰り返す性質の悪い変質者に見えていることなど、彼女を負かすことに比べれば些細な問題なのだ。
運動能力はともかく運動神経はいい彼女は開脚前転の体勢からすぐさま立ち上がり攻撃に備えるが、飛びかかってくる１７０？の男子生徒を受け切れずに押し倒される。
２回目のこの状況だが、今度は葉月もしっかりと扱える武器を携帯している。釧からもらったナイフをグサグサと馬乗りしている隆の背中に突き刺した。
「がっ、く、こ、このやろっ！」
１度轢き飛ばされたことで随分とライフを減らしていた彼にとってこれ以上のダメージは致命的だ。せっかくのポジションを解いて葉月の攻撃圏内から脱し、十分距離を取ってからしまってあった拳銃（ロフ）を取り出して、ロクに狙いを定めずに発砲する。
けん制、その間に背後の聡一が２発目のグレネード弾を発射する。それを止めに行った釧は間に合わず、放たれた凶弾は葉月の近くで爆発を起こした。
ライフを回復させてからまともな攻撃こそ受けていない葉月だが、極端に低い防御力では爆風にすら堪え切れない。２回目の被曝では強制的に手バネ前転（ハンドスプリング）首バネ前転（ネックスプリング）をさせられ、最後に首をぐぎっと言わせてバタンと背中を打ちつけた。
そんな彼女を今度は蹴り飛ばすことで隆は死亡（リタイア）させようと試みる。

釧は聡一とランチャーを取り合っていて援護にこれない。となれば、時間がかかっても反撃の間を与えないハメ技で削っていくのが正しい判断だろう。

その考えは正しく、葉月は蹴り転がされる瞬間何度も隆の足を取ろうとするのだが、元々の非力さと腹部を蹴られることで力自体が入らずに失敗している。

（よし、このまま・・・）

けれど、

「どくんだ隆くん！轢き殺しちゃうよ！」

それはいきなりやってきた。

轟くディーゼルのエンジン音に重厚な二重車輪、紛うことなき１０ｔトラック。

運転席にいるのは美樹である。死んだと思われていた彼女は潤沢にあったステータス強化アイテムの効果で一命を取り留めていたらしい。轢かれてショーウインドウのマネキン共々屋内に叩き込まれた彼女はそれを利用してうまく戦線から抜け出して重量級の車両を探し当てていたのだ。

その理由はもちろん葉月への報復。やられた分はやられた方法でやり返さなければという分かりやすい動機である。

「待て待て待て！葉月は俺が！」

抗議する彼の言葉など耳にも入れずに美樹はスピードも緩めずに葉月と彼へと向かってくる。どうしようもない、隆はせめてちゃんと轢かれるようにギリギリで葉月からなくなく足を退けて横に跳んだ。

仰向け、それも寸前まで蹴られ続けた葉月に回避行動に移るだけの余裕はなく、

――ガッ

妙に軽い音を最後にトラックの底へと吸い込まれていった。

だが復讐劇はまだ終わっていない。大型トラックはその魔の手を釧に伸ばす。聡一ともみ合っていた彼は葉月が轢かれるのを目の当

たりにした時点で逃げ出していたが、事故防止のためにリミッタで制限されている限界速度９０ｋｍ／ｈで事故を起こそうと迫りくる貨物自動車に逃げること叶わずに追突され最後には美樹自身がやられたようにコンクリートへと押し込まれた。

「おぉう・・・」

葉月がやった時以上の惨状に思わず顔をしかめる隆と聡一。

最後、崩れ落ちる破片のお世辞にも綺麗とは言えない物音が長き戦いの終わりを賞賛った。

＃

（さて、どうしようか）

切り札（ワイルドカード）のつもりだった板川由がまさかの撃退を食らい、そのせいで裏切りが完全にバレた彼女、朝風椎のジャベリンタワーへと四十万隆達３名は帰還しようとしている。

１、帰る前に先手を打つ。２、帰った直後に不意打ちする。３、モニタールームに入ってきたところをシステムもろとも爆殺。

１と２の場合はタワーに残っているチームの人間を誤情報でけしかければいいわけだが、その手の手段が数回に渡って失敗している現状、あまり気の乗る選択肢ではない。３は３で愉快な方法ではあるものの自分が安全地帯から追い出されることも意味している。

（まぁ、くるところまできっちゃったって感じだものね・・・）

裏切り作戦を選んだのだ、初めから最終的にこういう展開になることは予測していた。もとよりこの状況になる前に何人リタイアさせれるかが勝負だったのだし、そのあとのことなど割とどうでもよい話だ。

つまるところ、椎にはあまり真剣に策を練る気はない。ここですぐさまリタイアしてもかまわないと思っていた。

それでもこうして面倒くさがりながらも考えを巡らしているのは、まだ彼女がリタイアしていないからであり、ゲームプレーヤーとし

て生存者である以上、次の行動に移らなければならないからである。
それが、まぁ、鬱陶しくもあるのだけど。
（・・・ぁあ、そっか。それでいいじゃない）
そこまで思考が行き着いて、彼女はふと１つの結論に達した。
「ん～～～」
懸案事項もなくなり、今後に関して一切不安要素がなくなった彼女は席から立ち上がって伸びをする。それから部屋を出てジュースを取ってきたチームのアイテム保管場所へと向かう。
せっかくだから甘いスイーツでも食べて自分の労をねぎらおうじゃないか。

＃

軽自動車とはまた違ったエンジン音を響かせる１０ｔ以上の荷物を積載できる大型トラックは埠頭にきた時の道を逆走し、彼らが懐かしき家であるジャベリンタワーを目指していた。
その行為に明確な意味がないが、ミッション毎に外へと出向くというスタンスを取っていた四十万隆と矢崎聡一にとってタワーは根城であり休める場所である。
ハイテンションになって撃ち合い殴り合い蹴り合い轢き合いをしていた時はよかったのだが、そんなお祭り騒ぎが終わってしまった今となっては疲労感からまともに動く気にもなれない彼らはとにかく休みたい一心で帰路に就いたのだ。
運転席には当然細川美樹、助手席に隆が乗り、余ってしまった聡一はどでかい箱形の荷台。トラックというものは移動手段としてはいまいち便利とは言えない。
「いや、それは椎ちゃんをそんな役どころに抜擢するのが悪いぜ」
無線を使っての会話、葉月戦がややこしくなった一因である板川由の介入に対して美樹は隆の不満をバッサリ切り捨てた。
「そりゃ椎ちゃんには人をまとめ上げる能力のあるよ。だけどねー、

その能力を悪用する性格も持ち合わせてるんだからさー。
いくらチームプレイを要としても結局個人戦であるこんなゲームで信用できるタイプじゃないね」
『ほれ見ろ。科の救出作戦にしたってありゃ僕らを殺すためじゃないか』
「今さら文句言ってんじゃねぇよ。今問題なのはあの野郎をどうやって潰すかだ」
「うーん。無理じゃねぇっすか？
私達が生き残ってるのは誤算だったはずだもん。裏切りがバレたことには気づいてる。となれば確実に監視するでしょ。
こうして無線でやり取りしてる以上こっちの情報は向こうに筒抜けだよん」
「あぁ、なるほど。じゃあとりあえず無線切るか」
『待てこの野郎、こんなところに追いやった上に仲間外れにする気か！』
ガチッとスイッチを送受信ＯＦＦのところまでスライドさせて彼の文句を黙殺する。
「前提として椎にはこっちの動きはバレバレ・・・不意打ちは無理だ」
「問題はそんな椎ちゃんに真意を悟られずに隙を突くかだけどもさ。あー、無理っぽ？
もういっそのこと椎ちゃんは無視して行動した方がいいんじゃねー？」
「俺ら今タワーに向かってんだぞ？」
「会ったら会ったでいいじゃん、その時考えよう。どうせまともな策なんて思いつかんぜよ。
もしかしたら逃げてるかもだし。まー何か罠張ってるかもだけどそれは避けようがないよ。向こうの方が持ってる監視（ぶき）システムからして有利なんだから」
気楽に言って、彼女は危なっかしくハンドルを切る。軽自動車の

時はそうでもなかったのだが、大型車両ともなるとゲームの補正度も低いらしい。大量にモノを輸送できるというメリットの大きい分扱いづらいというリスクも大きく設定されているようだ。

「むしろ気になるのはイベントの方だよ隆くん。今までぶっ続けだったイベントが4つ目で止まってるのが『卵の破壊に失敗した場合に発生した化け物がプレーヤーを減らすための時間配分』だとしてもそろそろ頃合いだと思う」

「・・・次は何だろうな？」

「1はウォーミングアップ、2は化け物で錯乱、3の施しときて4が化け物の増殖パニック・・・。

化け物はこのゲームの要素だということは間違いなし。

ゲームはそろそろ終盤。さすがにここまできてお恵みがあるとは思えない。

つーことはですよ、化け物絡みでかつゲームを盛り立てるイベントって言ったら体育祭でもあった――――」

イベント5

これ以後5分おきにエリアが縮小される。

閉鎖エリアは付属の地図を参照せよ。

なお、逃げ遅れた場合は武装強制解除の上で化け物の餌食になるので注意されたし。

けれど言い終わる前にその内容はそのイベント告知に先を越され、

「・・・ほらきたやっぱ」

そんな彼女の自慢げな台詞は、

――ガシャンッ！

ドアのガラスを割られる音に遮られた。

不意の告知に次ぐ不意打ちはこの場合予定調和。

告知のコマンドで視界が覆われ、注意力が削がれたその絶好のタイミングで、単発での使用にしか腕が耐えられないというハンデを

1発で確実に当てるという手段を以って制す。
拳銃による距離３０?ほどからの狙撃は、側頭部に被弾しその結果は当然即死。
銃弾の開けたガラスの裂け目に突っ込まれた細い腕はドアのロックを軽々と外し、放たれた扉から走行中の車内に風が入る。
「邪魔！」
そう言って伸びた手は今度は死体と化した美樹を車外へと放り出した。
そしてついに姿を現した闖入者の正体は想像どおりの長い黒髪に小さな体をした少女の皮を被った悪魔。
轢かれた時小さな身を低く保って何とか難を逃れ、車底にへばりつくというベタかつ根性のいる方法で今こうして再び襲来せしめた織神葉月である。
やはりしっかり最後まで悪魔払いをやるべきだったのだ。あるいはせめて轢いた際に葉月の死体を確認しておけばこんなことには・・・。
釧を轢き潰した時一緒に瓦礫に埋もれたんだろうと都合のいい解釈をしなければ、いや、壁に激突させるなど余計なことをしなければ、割れずに済んだサイドミラーで彼女の存在に気づけたはずなのに。
銃撃、開扉、清掃と流れるようなあまりにも手際のよい一連動作に呆気にとられ動けずにいた隆はここにきてやっとのことで腕を伸ばし侵入者の手を剥がしにかかる。こいつを入れてはいけない。体力腕力のアドバンテージを差し引いて有り余る戦闘経験差があることは身をもって思い知ったのだ。車体にしがみついて力をうまく使えていない今の内に対処しなければまずい。
「いい加減にしつこいぞ！」
「さっさとおっ死ね！」
両者の応酬が泥沼化した結果、引くに引けない状況に陥っている。負け損は食いたくない、ただそれだけが彼らを動かしていた。
手を引き剥がそうとする一方で身を押し込もうとする葉月の腹を

蹴り戻そうとする隆、逆に身体を捻じ込もうしつつ隆は排除しようとその足を持って引っ張る葉月。

だが、それにばかり気を取られていた2人は今の戦場が運転手を失った走行中の自動車ということをうかっり忘れていて、ごぃんっとトラックは街灯にぶつかり進路をわずかに変えた。

「っ！」

あらぬ方向へと進みだしたトラックの進行方向を元に戻そうと左手でハンドルを握る隆だったが、葉月の右手がそれを妨害に入る。定まらないハンドルは車体を左右に酷く揺らした。その代わり、元は隆の足を引っぱいていた彼女の右手がハンドルに回った分彼の足は動かしやすくなった。その足で大して腹筋もない腹を何度も蹴る。

左手は引きはがされかけているし、右手は可動するハンドルを握っている。車内にかけた右足半では身体を支えるほど力が入らない。彼女の大勢はさらに不利になってしまった。

もう一押し、そう確信した隆は今まで車線と並行になるよう維持することに努めていたハンドルを右に大きく切る。右折を指示された車体は車外に葉月を露出させたまま建物を形作るコンクリートの壁にサイドをぶつけた。

「くぅ！」

一層ハンドルを妨害する手に力を込める葉月だが、力比べでは勝ちはない。

何度も繰り返して壁に叩きつけられた葉月の力が緩んできたのを見定めて隆は最後の攻撃に出る。車体がさらに損壊することを承知で”ぶつける”のではなく”擦りつける”。そんな状態で腹を蹴って押し出せばどうなるかは言うまでもない。

摩擦に耐え切れずに、壁の方に身体を持っていかれた葉月は完全に車外へ放り出され、地面を転がった。

本来ならコンクリートのおろし金でスプラッタな赤い芸術作品が壁に描かれていただろう。

後方に遠ざかる倒れている葉月がぴくりとも動かないのを確認し

て運転席に腰を下ろす。本当はちゃんとリタイアしているか戻ってでも確認したいのだがそうもいかない。

邪魔が入ったせいで確認できなかった閉鎖エリアの地図を確認すると案の定ナビの示すトラックの現在地は第1段階の領域内だった。

南春花埠頭のその先には当然ながら海しか広がっていない。縮小される範囲に埠頭付近が含まれている可能性は容易に想像がついていた。

「っんとに、次から次へと！」

残り時間5分とちょっと。

アクセル全開、まずはエリア縮小の影響下から抜け出さなければ。

＃

バトルロワイアルというゲームシステムは、終盤になるにつれて戦況が膠着（こうちゃく）するというデメリットがある。

ゲーム開始直後は体勢の整えられていないプレーヤー同士の混戦が始まり賑やかなのだが、生存者が減っていく終盤にかけて初めに用意したフィールドがどうしても有り余ってしまい、いよいよ勝負の決するクライマックスに盛り上がらないという観戦者にとってはつまらない展開になるのだ。

それを解消すべく付け加えられたシステムが短いゲーム中に根城を構えた者を誘き出し、人口密度の低いエリアに散らばったはぐれ者を導き、最終決戦へと向かわせる開催者側として最後の梃入れ、エリアの縮小である。

しかしそれは、堅牢な砦を築いたチームにしてみれば痛手でしかない。

せっかく自分たちに有利な戦場を作り出し、守りを固めながらも確実に勝ちを取りに行くという固い戦術が嵌っている状況を無理やり改変させられるのだから、迷惑極まりない。

最悪優劣が逆転してしまうという事態になりかねないのだ。

そんな運の悪い連中がつまり発火能力者（パイロキネシス）の海チームだった。

当たり前だ。彼らの砦はイージス艦であり、広すぎて今まで描写する必要性もなかったことだが海に浮かぶ人口島という形を取っているこの世界ではエリア縮小となればまず海が初めに消える。

イベントが発表された時点で陸に進めない彼らが基地であり最大の武器は時間と共に沈む運命だと判明した。このままだと自分達まで道連れになってしまう。

さてそうなると問題は港から少々離れた場所に浮かぶその鉄の塊から脱出することになったわけだが、陸地の軍事基地には敵対する軍事マニア（ミリタリー）チームがいるということだ。

時間はない、同じく逃げなければならないはずの敵は基地で張っている。そう、不幸なことに、彼らの前に立ちはだかる連中は軍事マニアなのである。そうそう乗り込める機会はないイージス艦を手に入れることこそが最初から最後まで連中の動機なのだ。リタイア云々など関係がない。

そんな板ばさみの中で発火能力者（パイロキネシス）は内部分裂。我先にと陸地へ戻ろうとして迎撃されたり、イージス艦自体の主導権を握ろうと内輪もめしたりと統制が取れず最終的に最大勢力だった彼らはバラバラに散らばってしまったのである。

陸地にたどり着けた連中も追撃に遭い人数と武器を減らしていき、その勢力はどんどんと減衰していったのが現在。

何とか第1段階エリア縮小から逃れた内の1グループが陸路を足で移動移動していると、前方に何やら黒っぽいモノを発見した。

警戒しつつ近づいてみると、それは小さな少女の形をしている。

「・・・死体か？」

リタイアしたプレーヤーの死体は一定時間を過ぎれば消えるようになっていることから、死体であるならこれはかなり最近のものだろう。

それは近くに別のプレーヤーがいることを指す。

さらに警戒を強めながらも、歩みを止めるわけにも行かない彼ら

が通り過ぎようとした時、その死体らしきものが動いた。
　ソレはゆるりと立ち上がると、自分に銃口を向ける彼らにわざわざライフを回復させてまで新品にしたコスプレ喫茶『Ｅｌｙｓｉｏｎ』黒衣装のスカートを摘み上げて一礼する。
「御機嫌よう皆々様。私（わたくし）はシークレットアイテム―黄金の林檎《Ｔｈｅ　Ａｐｐｌｅ　ｏｆ　Ｄｉｓｃｏｒｄ》。
　争いの神エリスが”全ての神が招かれた”テティスとペーレウスの結婚式に自分だけ招かれなかったことに腹を立てて、『最も美しい女神にあたえる』と投げ込んだ不和の林檎。トロイア戦争の遠因にまでなったその罪の果実が私の名前であり、与えられた役目です」
　機械的に、あるいは真面目に焦点の合っていない瞳で真正面を見据えて、淡々と放たれた電波な発言に若干引き気味の彼らは、関わるべきでないという本能の叫びを理性で何とか押し込めて、言う。
「・・・どー見てもプレーヤーだろあんた」
「ふむ・・・。人間の形をしているこの見て呉れではそう思われても仕方ありませんが、しかし想像してもみてください。表面に顔の書かれた金色の林檎が喋っている姿を見て皆様楽しいですか？この姿の方が皆様の目を楽しませることができると思うのですが？
　私の製作者は私が言うのもなんですが、変態です。職場にまでネット環境とゲーム機を持ち込むゲーム依存症、今回のようにゲームがやりたいという私情を挟みまくったイベントを強行したりと社会人としてまず終わっています。加えて、同校の保健女医と事実婚（ゆり）な関係を持っていて同棲中。
　常識的な思考回路は持ち合わせていない。そんな人物がわざわざ『シークレット』と冠したＣＰを顔つき林檎ちゃんなどというビジュアルで済ませると思いますか？」
　早口で羅列された長台詞に押されて反論のできない様子の彼らに彼女はさらに畳みかける。
「確かに、文化祭後というタイミングですからこの衣装ではＣＰであることを証明するに至りません。

しかし、この容姿はどうですか？文化祭に営業側で参加できるのは中学生から。この後夜祭にしても同じです。

今日び中学1年生でももう少し発達しているでしょう？まぁ胸は・・・製作者の趣味ですから無視してください。私は一応小学生という設定ですから」

発火能力者（パイロキネシス）達を言い包めるためとはいえ、自分で自分のトドメを指す行為にダメージを受けつつも鉄面皮を保ち続ける葉月。

その精神的負荷に耐えるためにどこぞの校長や保険医を道連れにしたことなど彼らには知る由もない。

「・・・・・・」

完全に沈黙――――つまり葉月を小学生と認めたのと同義だが――した彼らに彼女は必要以上に考える暇を与えない。

「不和の林檎は予想以上に戦況に偏りが見られた際発動するシークレットアイテムです。

皆様は運がいい。この私が手を貸してあげましょう」

言葉を区切って今まで無表情だった葉月はまるで感情のない人形が無理に笑ったような、『解剖学的にこう筋肉を動かせば笑っているように見える』という方法を実行したロボットのような笑みを浮かべる。

「ジャベリンタワー」

それはトラックの制御権を奪取しようとした時に見たカーナビに設定された四十万隆達の目的地。

「全ての布石はそこにあります」

こうして散らばり勢力を落とした発火能力者（パイロキネシス）海チームの生き残りを彼女は駒として得た。

腹を蹴られたり首を絞められたりトラックから突き落されたり、この数十分ほどでの屈辱をまだ彼女は返していない。

今現在、そのために作り物染みた個性（P）の塊（C）を演じる彼女の表情からその決意のほどはイマイチ感じ取れないが、それでもこれだけは言える。

――――織神葉月が本気です。

＃

多くのプレーヤーがエリア縮小、その逃げ遅れた場合のペナルティーに脅え命辛々脱出を図っている頃。

忘れられているかもしれないが、寝たことも、これから先寝ることもないだろう豪奢な天蓋つきのベットの誘惑に負け、ゲームそっちのけで眠ってしまった布衣菜誉は、そんなついに閉鎖された第１段階のエリア内にいた。

よく眠り気持ちよく目を覚まし、その目でベッドの周りを囲むグロテスクな化け物共を確認。何でもう少し寝てなかったんだと自分を責めて、間の悪さを呪う。

最後、諦めが入った笑顔で言った。

「あははー、何かこのオチ予想できたー」

第４８話－　鬼畜生。－Ｑｕａｇｍｉｒｅ－（後書き）

１か月以上も空けてすみません。
毎日ちょくちょく書いていってはいたんですが、なかなか終わらず……
結局８８ＫＢと執筆活動中の１話最大ＫＢを更新してしまいました。
短編「罪扉」が８２ほど。あれより重いとか（笑）
「罪扉」も重すぎて観覧ページが開きにくいために連載の形で分けて投稿したわけで、今回の話をわけないわけにもいかず……断腸の思いで２分しました。

第４９話－　台無死。－Ｂａｄ　Ａｐｐｌｅ　！！－（前書き）

「エキ日々。」初の一日連投！
こうなるんだったら１か月も開けずに１５日おきに出したかった。
……打算的な話、頻繁に更新する方がアクセス数稼げるんですよね。

第４９話－　台無死。－Ｂａｄ　Ａｐｐｌｅ　！！－

『やられました――――！』

そんな無線が入ったのは四十万隆が葉月を蹴落とし、縮小エリア脱出後空席になった助手席に荷台の矢崎聡一を乗り換えさせるために停車、再び発車した頃である。

暗闇の中状況も分らないままトラックが揺れるというハプニングにパニくった彼にことの顛末を伝えながら、エリア縮小が完了した際にそのほぼ中央に位置することになるジャベリンタワーを目指していたところに、今までの窓口であったはずの朝風椎ではなく、他の監視システム班員らしい少女の声が入ってきたのだ。

「どうした！？」

「というか椎は？」

『それが・・・！その朝風さんが目を離した隙に自爆を――――！！』

「あーはいはい、あの裏切り者逃げるのも面倒になってリタイヤしやがったか。美樹の言う通り考えるだけ無駄だったな」

「まぁ、モチベーションそれほど高そうでもなかったものな」

『違うんです――――！監視システムもろともチームメイト巻き込んで自爆したんですよ！』

「やりやがったな腹黒ぉぉおお――――！」

『おかしいと思ったんです、いきなりお菓子いっぱい持ってきて食べ出すわ、ＴＮＴ火薬まで待ってくるわ・・・・・そしたら私もお菓子なんて思って出て行った間に！』

「何で気づかねぇ！？」

「じゃ、じゃあシステムは！」

『完全にアウトです。他にも用意してあった通信機で連絡自体は取れてますが、私達のチームのアドバンテージはほぼなくなりました！」

サイテーだ、と助手席の聡一が両手で頭を抱える。片手しか使えない隆はこめかみをぐりぐり押して何とか損害分を補給する手立てを考えようとしていた。

だが、彼女の報告はそれだけでは終わらない。

『そ、それでですね？実は朝風さんの置手紙がありまして・・・・・。

えーと、はぁい皆の敵愾心（アイドル）の的椎ちゃんです。せっかくこの手で引導を渡してあげようとしたのに、しぶとく生き残った１－Ｂ諸君に最後一言だけメッセージをば。がんばってね♪・・・だそうです』

「向こうに戻ったら覚えてろぉぉ！」

「畜生――――！結局僕らは椎の手の中か！」

＃

もはや人も化け物も姿を消した路上を疾駆したトラックはやがて懐かしき根城へと到着した。

上部が崩れて刃先がこぼれてしまった天への投げ槍（ジャベリン）は当初の壮観さを失い内部から脆く朽ちていく彼らがチームを表しているようだったが、それでも四十万隆と矢崎聡一は帰ってこれたことに対して胸にこみ上げるものがあった。最多５人にまで膨れ上がったチーム１‐Ｂは両者意地を張った争いの間に出発した当初より数を減らしてしまったし、あの戦闘の中で生き残れるとは思っていなかっただけにまだ生きているという実感がここにきて沸いてきたのだ。

だが、それはそれこれはこれ。感動に浸っている場合などではなく、今現在の状況は芳しいものではない。

イベント５によって現在進行形で縮小されているエリアはジャベリンタワーを中心に狭まりつつあるこのタイミングで監視システムの損失はあまりにも大きな被害である。

唯一と言っていいタワーを根城にする利点が無に帰した現時点においてタワーは格好の標的だ。

ジャベリンタワーを戦場の中央に据えるこのイベント内容は別段、ご都合的な理由ではない。

エリアの最果て、南春花埠頭へと軍事基地という分かりやすい名称に釣られた連中に散々戦わせた挙句、最後エリア縮小イベントでかっちりと嵌めるためであり、そして神の目を持とうとも力押しには弱いタワーに居ついた連中を追い詰めるため――――つまり発火能力者（パイロキネシス）も隆達もそんな製作者の罠にまんまと引っかかったというわけだ。

ともかく自由度の高すぎるゲームをストーリーづけるべく用意されたイベントはうまく発動した。

ここまで来てしまえばもはや体勢を立て直す猶予などはありはしない。

離陸した後になってエンジンと降着装置（しゃりん）に問題が発覚して内部に大混乱を孕んだジェット機2機が正面衝突しようとしているようなものである。

５つのイベントを通し、数多の戦闘をくぐり抜け、生存者達が天高く聳え立つ槍の塔へと終結する。

今こそ決着の時、と格好つけるにはダラダラと続きすぎた束の間の脇役（しゅやく）達の宴は最後の戦いへ。

さて、そんな終わりの始まりはまずこんな描写で始まる。

「殺す！殺してやる！！何でてめぇはいちいち俺らの前に立ちはだかるんだ――――ッ！！！」

今日何度目か数えるのも面倒くさい、理不尽にも降りかかった厄災に対する絶叫。

損壊した頂上部の様子を見に上がった四十万隆らが無駄に開けた最上階から地上に多くの黒い点を見つけたのは、帰還を果たして十数分後のこと。

逃げるにも範囲の狭まったエリア内で逃げ切れるとは思えない、どうせ戦闘は避けられないのならタワーに残った方がいいのではな

いか。最善とは言い難いが限られた選択肢の中で次善策を捜し求め、今まで自分たちが貯めに貯めたアイテムを信じて籠城作戦に出ようとした彼らは上から下界を見下ろした際に黒い群衆を見つけた。

ついにきたか。そう武者震いしつつ、これから始まる大乱闘に敵情視察と双眼鏡で連中を確認すると、その中央に織神葉月がいた。

ほぼ無傷で生き残っていた地上班の発火能力者（パイロキネシス）チームと合流し数を増やした彼ら『葉月の言いなりチーム』がタワーに攻め込んできたのだ。

そして冒頭の雄叫びである。

「やっぱトドメを刺すべきだったじゃねぇか！俺の馬鹿野郎ッ！」

しかし、後悔とは先取りできないから後悔というわけで、自己嫌悪している場合ではなかった。

よりもよって、あの葉月が相手。

素直に籠城させてくれる敵ではない。現時点で何かしらの策を持っている可能性が高いし、どの道こちらの守りが固いと分かれば何らかの手を打ってくるだろう。

そもそも制限時間制ではなくバトルロワイアル制なのだ。攻める敵の疲労を狙う消極的な籠城作戦はそもそもが状況に合った作戦ではない。勝ちではなくとある人物達を狙う相手には、特に。

「どうする？当初の予定じゃあロビーはくれてやって階段で上からの優位性を利用しながら少しずつ上に逃げてくって算段だったけどよ。

エレベーターは落すのか？ＧＯサイン待ってる連中が待機したままだぞ」

矢崎聡一に言われて隆は唸る。

確かに。高層ビルという構造上籠城するためには上に逃げるしかなく、それはつまり少しずつ自分で退路を絶っていくことに他ならないが、資源が有り余っているのなら悪くない手段ではあった。監視システムを使って日和見主義の連中を囲えるだけ囲った結果戦力も申し分ない。

けれどどうだろう?葉月相手にそれが通用するのかどうか。
自信はない。が、それ以外に採れる策はなかった。
「エレベーターは落とす。戦闘配置は話し合った通り・・・より固めよう。2階に兵を固めて3階には補充要員、5階単位で武器の供給班を配置して、階層を占拠される毎に繰り上げ。
それと追加でオープニングセレモニーをやろう」
「セレモニー?」
「連中をロビーに入ってきた瞬間ぶっ飛ばす。数を減らせるに越したことはないからな」
「あぁ、そういうことか・・・。となると囮がいるな。1階に誰もいないとなると向こうも怪しむ」
「それは俺らがやるんだよ。何だかんだで世話になりまくりだし、やっぱ俺人に指示するの苦手だ」
「そう言って椎に主導権与えたばっかりにこんなことになってるんだけどな?」
うるせぇと吐き捨てて彼は同じ場にいた、通信越しで朝風椎の顛末を伝えてくれた彼女に爆撃の旨を伝える。
「さて、と。いくか」

静けさのある1階フロア、ロビーまたはフロントと呼ばれるタワーの入り口。
太い支柱の間にガラス張りという中身のよく分かる造りとなっている唯一の侵入経路を見渡して葉月はふぅんと一言、持っていた一眼鏡を持ち主に返した。
件の中の様子は葉月の思っていたのとは少々違った様相だった。
ロビーに元からある待合のためのソファー類が主に出入り口の方に集められ簡易的なバリケードをなしていて、人海を防ぐつもりらしく持ち込まれた折りたたみ式の長机などが倒されてある。
そして何より問題なのが、静か、だということ。

（人員が少ない・・・元々そうなのか、あるいはわざとか・・・隆達がいるのも気になるし）

これから敵を迎え撃つにしては要の1階フロアの守りが薄いのだ。バリケード等防御準備はしているくせに肝心のそれを使う人間がいない。

となれば、あれはバリケードではなくカモフラージュということなのだろう。

（どうせ壁はガラス張り、割られて多方向から攻められたら1階は守り切れないと踏んで捨てたな？

上階に上がるには階段とエレベーターだけ・・・侵入ルートは絞れる、あとは持久戦。

なるほど面倒くさい抵抗をしてくれるよね。1階は罠か）

「ソファーの物陰に爆薬を仕込んでるようですね」

「な！？どうするんですか！」

ここまでくる道中で言葉使いを敬語にまでランクアップさせられた哀れな先輩に彼女は事もなげに言う。

「そんなに爆発したいならこっちから誘爆させてやりましょう。タワーを倒壊させるわけにいかない連中とは違って私達は外にいますから。

遠慮なくぶっ飛ばして瓦礫の下敷きにでもなってくれれば万々歳です。

幸いゲーム補正で爆発規模は爆発物の数だけ乗算されますし、有りっ丈の手榴弾でもお見舞いすればいいんですよ」

「チッ、バレたか！」

（カーテンを下ろさなかったのがまずかったか）

中の様子をわざと晒して相手が攻めやすくなるようにと思ってのことだったが、どうやら感づかれたらしい。

一斉掃射、加えての投擲弾発射銃（グレネードランチャー）による明らかに誘爆狙いの贈り

物に隆達デコイ役数人は階段を駆け上っていく。
作戦は半ば失敗。だが、半ば成功である。
敵の構成員を葬れればベストだったとはいえ、まぁどうせ思いつきで実行した粗い作戦だ。失敗したところで悔しいほどではない。むしろ、敵の武器を消費させられただけでも僥倖と言うべきだろう。
化け物の卵の破壊に出た時に先述した通りタワーチームの爆破系アイテムは時限装置と爆薬が主であってはっきり言って使い勝手はよくない。破壊し尽くせばいいというのならともかく、自分たちが籠らんとするタワーを破壊するわけにもいかない現状では特に扱いづらいアイテムだ。
対して、元発火能力者（パイロキネシス）チームはそれをランチャーで処理したのである。元はと言えば軍事基地からくすねてきたのだから、それはただの爆薬などではなく加工された武器であるのは当然と言えば当然のことで、隆達の仕掛けた爆薬とは利便性が違う。
ここまできて武器の補充ができるとは考えにくい以上、相手の武器をどうやって消費させるのかというのは重要なポイントになる。
つまり、使いづらいアイテムで相手の武装を剥いだと考えればこの作戦はうまく行ったと言えるのだ。
（耐え切れれば勝機はある）
しかし、葉月が武器消費のリスクを無視してまでも、相手にとって要らない捨て玉である爆薬の威力を借りてまでも、大爆発を起こそうとしたのはだからこそだ。長期戦には持ち込ませない。短期決着させる。
長期戦になるか短期戦になるか。いわばこれは賭けである。
一方は全力で守り、一方は全力で攻める。武器が尽きれば負け。どっちに転ぶかは分からない。
背中で連発しつつもかき消し合ってただ1つどでかい爆音を聞き、何とか2階フロアにまで逃げ切った隆達はすぐさま防御に転じる。
エレベーターわざわざ1階に止めてからロープを切ってあるため、

上へのルートはフロア西と南、非常時用の階段3つとなる。非常階段は誰もがイメージする通りの無骨な鉄製階段で横幅が狭いため防御は容易いが、問題は客用の広い残り2つ。これらは長机でのバリケードで無理やり身体をねじ込むような強行的侵入は防げても、即席の防御壁ではすぐに押されてしまうだろう。

折り返し階段の踊り場にあらかじめ並べておいた長椅子の陰に入って隆はそこに置いておいた歩兵用自動小銃（アサルトライフル）を手に取った。

前々から思っていたことだが、手に余る大きさの武器に限って肩がけがないのは製作者の意地悪なのだろうか？バックパックにしまう必要がなければ、今までの戦闘はもう少しマシに推移しただろうに。

重さを感じながらそんな感想を抱く。束の間の、気を落ち着かせる儀式のようなもの。的外れな思考で気を紛らわせる。

いかにも商用ビルのロビーですと言わんばかりに天井の高い1階フロア。よく響く足音が近づきそして、

「いたぞ！林檎嬢のご命令だ、ぶっ殺せ！」

「この際チームがどうなろうとどうでもいい！葉月だけは地獄に落とす！」

怒鳴る声。

ついに現存する最大チーム同士が激突した。

挨拶代わりのロビー爆破を終えて次のステージへ、階段上下での策なしガチンコバトルは物陰に隠れるでもない葉月の言いなりチームが捨て身で階段を駆け上る形でスタートした。

生き残ろうとするな、活きて逝け。潔く散ってこい。そんな激励を受けた彼らは血路を開くために群がっていく。イージス艦や陸本拠地を失った時点で彼らは堅実に成果を積み重ねようという考えを捨てている。被弾（チマチマ）を気にした死角からの撃ち合いは一切なく、ただただ数と身体の暴力で防壁を突破せんという決意がそこにはあった。

だから、突破しようとする味方がいる長机バリケードに向かって手榴弾を放り込んだりロケット弾を撃ち込んだりするのだってわけない話だ。

「させるか！」

戦慄の動作（モーション）を取るそんな彼らに銃撃を浴びせて妨害するタワーチームだが、そうすると懐が留守になり、接近してきた連中が近距離で攻撃を仕掛けてくる。

（思った以上に厄介だな、くそっ）

防ぎきれなかった凶弾（ばくだん）をバリケード内に放り込まれ1．5階の踊り場から2階へと退避。捨て身の厄介さを身に染みて理解させられて聡一は隣の隆に叫ぶ。

「上の火薬類持ってきた方がよくないか！？こんだけ群がってきてんだ、一気に潰した方がいい！」

「だな、弾使うのが勿体ない！」

殺虫スプレーから蒸散式殺虫缶に変更するような言い草だ。

インカムで援助物資を要請するために一度後ろに下がった隆はそのついでに2階のテナント店から手頃な椅子を持ち出して階段から投げ落とした。無理やり駆け上がろうとしていた1人に当たり、ゴロゴロと数人を巻き込んで転げ落ちていく。

早くも弾切れになったらしい仲間もパワーストーン専門店のショーウインドウに飾ってあったらしい加工前のただ巨大な原石（みばえだけの）を投げつけ始めていた。岩石の内側に結晶が詰まっているという珍しい形をしたアメジストジオードが砕けて紫の雨を降らせ、メノウ板が手裏剣のように宙を舞う。

弾雨に交じって鈍器舞う戦場。もう1つの階段でも同じ様なことが繰り広げられているのだろう。

避けるに避けられなくなってきた雑多な弾幕の中に混じって入り込んだ1つの手榴弾を気づいた1人が慌てて投げ返そうとしたが間に合わずにバリケードの3分の1ほどを巻き込んで爆発した。

「退避ッ！」

崩れた防御を立て直す時間が勿体ない。2．5階には控えていたメンバーすでにバリケードを組み上げてある。こうして0．5階単位で下がって少しずつ敵の戦力を殺ぐ。実に嫌らしい作戦ではあるが確実な方法だ。

予想よりも遙かに早いペースで侵攻されてはいるが、このペースですら最上階にまで到達するには果てしない時間を費やすことになる。戦況はタワーチームに有利なはずだった。

だが、そんな彼らの心的な余裕は次の瞬間打ち砕かれる。

どがしゃん、といきなり彼らが足場が崩れさったのだ。

「「――――っ！！！」」

言葉にならない言葉は状況を理解できない叫びとなって、彼らごと落下していく。落ちた先は1．5階の踊り場。

そんな彼らを何とか崩落を免れた隆と聡一は上から見下ろして、そして気づく。

（やら、れた！）

1．5階の天井は2．5階の床なのだ。

（下から爆薬を貼り付けて・・・！）

粘着剤（ねんど）をくっつけた爆弾天井に投げつける連中の姿が容易に想像できる。

それだけじゃない。

強制的に上らされた3階の床にまで穴が開いていく。

2階の天井は3階の床。

（あれだけ強引に突っ込んできたのはこのためか！）

1階ロビーの天井は開放感を演出するために別階のほぼ2倍ほど高い。爆発物を投げつけるのも難しければ、何より上ることが困難だ。

そう、この作戦を実行に移すためにはどうしても2階を占拠しなければならない。

椅子でも利用しているのだろう、まんまと作戦を遂行した連中が複数の穴から侵入を開始していた。

混戦していたとはいえ、上と下という敵味方の配置がハッキリしていた今までの戦況が今変わろうとしている。
「もう1段上に逃げよう！」
上に逃げる気でいる彼らにとって先に上を取られるのは死を意味する。
「モグラ叩きだ！上から撲殺するぞ！」
体制を整えるために4階へと逃げ込んだ彼らは良さげな鈍器を手に取るや廊下に戻り、2階と同様3階にも穴を開けて這い上がろうとするその頭に全力の一撃を見舞う。上もしくは横からの顔面強打にのけ反り落ちる連中へ銃弾を打ち込んでトドメも刺していく。
1度でも防衛ライン内に侵入を果たされたら命取りになる。言うなればこれは徹底的に全て叩き潰さなければならない難易度の高いモグラ叩きだ。ただし頭を出したモグラは引っ込むことなく這い出て襲い掛かってくるわけで、ゲームというには両者死に物狂いの攻防を演じている。
「おらおらおら！さっさと堕ちろ！」
「おまっ、仮にも先輩に向かって！」
両腕でパイプ椅子を振り下ろし、もう1つ飛び出た頭は足蹴にする隆。その間に拳銃で頭を撃ちぬく聡一。
上と下との位置的優位性はまだ有効だったが、ノーミスクリアを要求される状況下で気の休まる暇はない。
だいたい、何だこのやたらモチベーションの高い軍隊は。
イベントという名の理不尽な暴力によって行き場を亡くしたはずの連中がここまで統制され、自己犠牲を行ってまで目的を達しようとするのは理解しがたい光景だ。
葉月が何か吹き込んだのだろうとは分かる。この侵攻方法にしても彼女が教えたのだろう。
けれど、だとするならあまりにも正攻法すぎはしないか？
よくつるんでいる身として隆はその点が引っかかる。
爆弾には爆弾を、侵入経路がないなら作ればいい。一見、実に葉

月らしい手段ではある。が、そもそも何故正面突破する必要がある？

『侵入経路がないなら作ればいい』というのなら、そもそも正面からぶつかって正面から無理やり穴をこじ開けなくても、タワーの横っ腹に何かしらをぶち込んで風穴を開けるだとかもっと別の方法があるはずなのだ。そっちの方が葉月らしい。

無論、そういった手立てがないという可能性もなくはない。しかし、急造の防衛プランに穴がないはずがない。隆はそれに関しては自分の策に自信を持って言える。この防衛網は穴だらけだ。

にもかかわらず、わざわざこちらの策に乗ってきているのはどういうわけか。そこが問題だ。

何かを見落としている。見逃してしまえば致命的な、何か。

それが分らないもどかしさを感じながらも、変形してしまったパイプ椅子を振り下ろし続ける。

鈍い音と悲鳴が断続的に耳に入るがほとんど聞こえてはいない。

『隆君きましたよ！上からヘリが１機です！』

通信班からの伝達。しかしそれは予測していた事態だった。

「分かった。手筈どおりに頼む」

屋上のヘリポートにはすでに爆破準備が整っているし、着陸自体をさせないために誘導弾バズーカーも用意してある。

多少心配ではあるが、そっちの様子を見に行くわけにもいかない。上の防衛ラインは役目を負った連中に任せて、今はこの執念さえ感じるモグラの頭蓋骨を砕かなければ。

ＡＨ－６４は愛称をアパッチというアメリカ陸軍主力の攻撃ヘリコプターであり、それ故に映画やテレビでその姿を１度は見たことがあるのではないだろうか？通常ヘリに比べて平べったい形状をして両側面に羽を突き出しその下にロケット弾を搭載した、いわゆる戦闘ヘリという単語から誰もが想像するであろうフォルムをしたヘリである。

それがこの度上からやってきたヘリ――――発火能力（パイロキネシス）者の陸上班が軍事基地から持ち出していた切り札だ。

入り組んだ高層ビルの森上空を飛びタワーへと接近してきたそのヘリを確認したタワーチーム屋上班はその獲物に対して初弾2発の誘導弾を撃ち放った。

煙を上げて正面から迎え撃つ凶弾にヘリは身を捻るが、そもそもがビルとビルの大きく立ち回れない空間での回避行動に大した効果はない。避けれそうにないことを悟った操作主はあっさりと回避を諦めた。

代わりに、主回転翼（メインローター）を止め、

「なっ！」

そのいきなりの奇行に唖然とする屋上班の眼前を垂直落下。９０。の方向転換に誘導弾はついていけない。だが、このままでは結局墜落する運命である。だからこんなもの回避行動にはなっていない。

では、一体何が目的なのか？

その疑問は回答を考える暇もなく明らかにされる。

自分から墜落を選んだヘリはその途中、再びローターを駆動させる。勢いづいた落下速度に対して虚しく回転する羽。無論間に合うはずがない。けれど、進行方向を変えるぐらいなら、できる。

ロケット弾諸々を装備された戦闘ヘリの描く軌道はタワーへとさらに近づく形で修正され、４階、中の仲間から得たタワーチーム防衛ラインの現在フロアに――――突っ込んだ。

『上の連中に任せて・・・』そう考えていた隆は、まさかこの目で件のヘリを拝む羽目になるとは思っていなかった。

何度繰り返したことか、頭を出す連中を殴り飛ばし、階段から這い上がろうとする連中を撃ち沈めていた彼の視界の端に、ガラス越し見えるはずのないヘリが映ったかと思うと、そのままそれは突っ込んできて、挙句搭載ロケット弾を撃ち出したのである。

ガラスを飛び散らせ機体を激しく損傷させながら侵入する戦闘ヘリ、狭い廊下を駆け巡る爆発物。当然の帰結としての大爆発。

まさしく『タワーの横っ腹に何かしらをぶち込んで風穴を開ける』行為である。

考えてみれば、空飛ぶ戦車ことアパッチは2人乗りだ。例えうまく屋上に着けたとしても上から侵攻するために兵士を送り込むという作戦は初めから採れない。堂々と空からやってくるわけだから隠密行動など不可能だし、持ち込める武器もたかが知れている。それ自体が『武器』であるヘリだが、輸送には向いていない上に今後屋内戦に完全移行してしまえば使う機会すら逸してしまう。

故の特攻。それは葉月がいつか夢で見たとある狼の採った手段と同じだったりもする。

さて、防衛ライン最前線であった4階は酷い有様だ。味方がごっそりやられてしまい、ただでさえ手一杯だったモグラ叩きのパワーバランスが一気に向こうへと傾いてしまった。

いきなり武器も人も大幅に減らされて補充が間に合わない。

ラインが維持できないと判断した隆達は3階上にまで繰り上がった補充班のフロアまで一気に退く。

7階。短期間でそこまで攻め込まれてしまった。

しかしそれでも、その何十倍もの階数がある。

(なのに、何故真っ向から攻めてくる?)

ヘリをぶち込まれてなお、彼はその疑念を払拭できずにいた。確かに、『タワーの横っ腹に何かしらをぶち込んで風穴を開け』てはきた。きたのだが、それが防衛ラインを突破するのに使われたことが気にくわない。

ヘリ一機で3階分。それは果たして犠牲に見合った戦果と言えるのだろうか?否、まだ上に幾らでも逃げられる相手に効果のある攻撃ではない。

なのに成果の上がらない正攻法に労力を割く意味はどこにあるのか。

その生温い感触が首を滑るような嫌な感じをそのままに、時間は流れ戦況は動いていく。

葉月のいいなりチームに押されてタワーチームの防衛線はついに１９階まで下がり、さすがに武器不足に喘ぎ始めた彼らが銃器から鈍器へと武装チェンジし、壮絶な殴り合いを始めた頃。

ついに、葉月の張った罠が発動する。

実際のところそれは葉月に因るモノではない、それはいわば天の声だ。

彼女が直接動く必要もなく、自動的に発動する理不尽な本日６回目の魔法。

イベント６

核ミサイルがジャベリンタワーに向けて発射された。

ミサイルは１０分後に着弾する。

軌道を変更したければタワー地下にある変更装置にタワー展望台の望遠鏡から見える暗証番号を入力せよ。

「そういう・・・・・ことか」

ここにきてやっと葉月の思惑に気づく。

（俺らを上に追いやったのはこのためかあの野郎・・・）

もちろん、イベントの内容を事前に知ることはできない。だが、予測することは不可能ではない。美樹がやったのと同じように、作り手側に立って考えれば大まかにアタリはつけられる。

判断材料は前のイベントとそれの直接的な理由で動いた事柄。それを改めて確認していけば問題点が浮かび上がる。

イベント５を思い返してみれば、やはりどう考えても軍事基地当りにいた勢力に不利すぎたのだ。タワーに目を向けさせることで塔の勢力を追い詰めるという狙いがあったにせよ、居場所を追われるという直接的な被害にあった発火能力（パイロキネシス）者チームとエリアの縮小の二次被害で場所がバレてしまったタワーチームとでは被った損害がま

るで違う。偏りが、あり過ぎる。
ならば、その歪みは正さなければならない。つまり次のメインターゲットはタワーチームであることがこの時点で分かる。
では次はどうやって追い詰めるのか。それについてはエリアがタワーを中心に極端に狭められた次のステージで戦況がどう動くのかシュミレートすればいい。
実際には朝風椎に破壊されてしまったが、そうでなければタワーには監視システムがあるわけで、それをその旨みに誘われて集まったタワーの勢力が手放すとは思えない。籠城することは目に見えている。そしてシステムが上にある以上、その構図は上対下のはっきりと2分された形になるだろうことも容易に想像がつく。
そんな状況下でもし自分がタワーチームをターゲットにイベントを投下するとしたらどんなものにするだろうか？
『上以外の地上、もしくは地下にキーポイントを配置して、上に閉じこもった連中を下に引きずり出す』である。
あとはそれにゲームの最後を飾るのに相応しい要素でも付け加えてやれば、ほらイベント6の出来上がり――――。
「畜生最悪だ・・・」
そのイベントに嵌めるために、彼らを上へと追いやるそれが連中の作戦。統制された行動も、自己犠牲もそのモチベーションは最後に嫌がらせをしてやろうという根性のひん曲がった動機からきていたのだ。
そしてそんな葉月の罠にかかった隆としては意地でも負けるわけにはいかないのである。
この逆境を乗り越える。それはもはや脅迫概念に近い。
２０階、非常事態に一時戦場を離れた隆と聡一は屋上にいる通信班と対処について検討する。
「地下？待て待てこのタワーに地下なんてなかったろ！？」
『1階より下に続く階段だってないはずですよ？エレベーターだって1階からですし・・・』

「エレベーターの裏技だろうな。ほらあるだろ、マンションなんかで屋上と地下、ボタンがあるのに押しても点かないフロア。
マンション内のガキの間で解除法なんかが流行ったりしたな、そういえば。
はっ、校長が好きそうな話だ。ボタンがなかったのはさすがにバレたくなかったんだろうぜ、最後の打ち上げ花火なんだからよ」
「おいおい、エレベーターっつったって・・・」
その問題の経路はロープを切られ安全装置によって下の階層で停止、縦穴を塞いでいるのだ。
籠城するのにエレベーターは邪魔になる。破壊するだろうということも計算済みというわけである。
「何とかこじ開けて行くしかねぇよな。爆弾投げ込んで籠を潰して、一気に降下、侵入・・・。
かなり成功率は低いが」
エレベーターの縦穴からの進行など、すでに気付かれている可能性が高いし、少なくても籠を爆破する際に気づかれる。待ち伏せされるのは覚悟しなければならない。
階段にルートを絞り今まで侵入者を上から叩き潰してきた彼らが、今度は下から串刺しにされる立場になったわけだ。
「俺が行く」
危険な作戦行動に名乗りを上げる隆。しかし、それを聡一が止める。
「いや、僕が行こう。隆は残れ」
「あ？」
「何だかんだいってチーム動かしてんのはお前だ。指揮者がいなくなるのはまずいだろうが。
・・・暗証番号は分かりました？」
『あ、はい！望遠鏡４つで数字が確認できました。１、５、７・・・順番は分かりませんけど６通りですね』
「１５７・・・了ー解。葉月の方は任せたぞ」

ガンッカン・・・ガカンと落下中側面に何度かぶつかったらしい手榴弾（ポテトマッシャー）が最後籠の上蓋に落ちてから数秒、先に落としておいた火薬を巻き込んで爆発を起こす。

地下侵入において邪魔になるエレベーターの籠を丸ごと吹き飛ばすために大判振る舞いした火薬は案の定というか近くの階層の出入りドアまで吹き飛ばし、どう見ても今から侵入しますよと伝えているようなものだ。

使いどころが難しい火薬はともかく手榴弾は今のが最後の1つ。時限装置がなくなってしまったためこうするしかなかったとはいえ、偶然仲間の1人が残していたチーム内でも貴重な1本である。籠城序盤とは違い武器の温存にシフトしている現状、聡一以下3名の核回避チームの装備もかなり貧弱だ。各々の持つ替え弾倉のない拳銃、後は非殺傷手榴弾（スタングレネード）が7つ。それだけが頼りの綱だ。

故に、いきなり下から狙い撃ちにされるのは勘弁願いたい。爆発直後下の様子を確認し、待ち伏せがいなければ今度は連中が駆け付ける前に降下する。慎重さと迅速さ、それがすべての勝敗を決めることになる。

こじ開けられた19階のエレベータードアから下に銃口を向けて5秒。何の音もしないことを確認して、まずチームメイトの1人がタオルを切られずに残ったロープの1本に巻きつける。19階にまで追い詰められた彼らは当然その階層からの降下しなければならない上に、降下途中に相手の攻撃を受けることだけは避けなければならない。タオルは一気に下がる際の摩擦対策だ。

足を穴の側面にかけて、覚悟を決めるために一息吐き、靴底を壁から離す。それに続く他のメンバー。一応隊長ということになっている聡一は最後にタオルを巻いて残った布を手放さないように手に絡め、そして

「「ひ、ひゃぎゃぁあああああああああ！」」

悲鳴を聞いた。

「化け物だぁ！？」

『ああ！それも地下のエレベーター口からうじゃうじゃとな・・・』

「あのクソ校長め・・・！」

『とにかく、チームは僕以外全滅、作戦は初っ端から失敗だ』

「『失敗だ』じゃねぇよ！そっちなんとかしないことにはデッドエンドしかねぇんだぞ！」

『拳銃1丁で何とかなる相手じゃない！重火器を導入できない以上攻略は無理だって！』

「補充班に事情を話せ！多少浪費してもいいから何とかしろ！」

『ちょっ！？そんな丸な』

抗議の途中で通信を切って、隆は改めて自分の戦場を見渡す。

武器が鈍器に代わってからタワーチームは押されぎみだ。後先考えずに突っ込めばそれで目的が達せられる連中とはやはりモチベーションの差から戦況に影響が出ている。全く核を止める気のない連中はイベント7の告知でさらに士気を上げたようにも見えた。

正直状況はよろしくない。

守り切れば勝ちだと思っていたからこその籠城が完全に仇になり、追い詰められてしまっている。

特にこちらから勝ちに行けない、というのが精神的にキツイ。こっちにも勝利条件があればいいのだが、向こうはチームで行動しているというよりは群で襲ってきているという有様で、全員倒すまで侵攻は終わりそうにない。悪知恵を吹き込んだのは葉月だろうが、今更葉月を討っても止まるまい。

隆個人としては葉月にさえ報復できればそれでいいというのに、その葉月が見当たらない。

（散々やり合って直接手を下すのは無理だと判断したのか？）

自分で言うのもなんだがあれだけ蹴られまくって、葉月がそんな

大人しい対応をするだろうか？その自問に隆は首を振った。そんなことはあり得ない。

（なら、どうくる？どうすれば俺らに屈辱的な敗北を与えられる？）

考えても答えは出ない。それはイベント６の罠の時にも思い知らされた通りである。

それでもできることがあるとすれば、流れに逆らうことぐらいなのだろう。不自然な行動をわざと取って、向こうが張る罠をかい潜る、それしかない。

けれど、核弾頭に籠城作戦と目下その２つのことで首の回らない彼らにはそれすら難しい話だった。

もし、こんな状況下でさらに問題事が増えれば、あっけなく防衛線は決壊してしまう。

どうもかなり弱気になっていたらしい。地下に化け物が待ち構えていたこと い動揺しているようだ。

ここまできてここまで追い詰めておいて、まさか化け物まで用意するなど校長も容赦がなさすぎる。

しかし、逆に言えばこれ以上状況が悪くなることはない。むしろ開き直れるというものだ。

いっそのこと自分もエレベーターを使って下階層の敵の懐に飛び込んでみようか。数人なら何とか動かせるだろうし、うまくいけば敵の攻撃を緩められるかもしれない・・・、などと考える隆。

が、

「――――イベント７」

開き直りすら許さない悪魔のお触れが、ここにきて発令される。

「――――チート・ミクが現れた☆」

今以上に状況を悪くする天からの声。

そう、それはもはやコマンドで表示する必要もなく。

「――――これより無作為にプレーヤーに襲いかかりまーす★」

ばこんっ！と実に軽い効果音を発して、タワーの１９階から上全てがへし折られた。

あまりにも広く開けた曇り空の天井に実に見慣れた人物がいる。
よく分からない架空のロケットブースターを背負いホバリングし、よく分からない架空の巨大な銃を両手に持って、今の今まで行われてきたリアルな銃撃戦や白兵戦をすべて台無しにする大人げない大人。
「――――ガンバって楽しませてね♪」

「・・・

まれたことだ。
　必死に懐中電灯を動かし、目を凝らし暗い視界に色を見い出そうとする。
　しばらくそんな格闘を続けいると、ふとあることに気がついた。
（もしかして・・・暗くて見えないんじゃくて元から黒い？）
　だとするなら、これまた新種ということになる。頭の痛い話だ。
　しかしそうだとして、こいつらの弱点は一体何ということになるのか。
　緑は火、青は電気、赤は水、では黒は？
　そこで、彼の脳裏に最悪な考えが浮かんだ。
　・・・減法混色において三原色を混ぜると黒色になる。
（まさか・・・弱点が、ない？）
　と、その思考もままならない内に、タワー全体に響き渡る大音量で例の告知が始まった。
「――――チート・ミクが現れた☆」
（何やってるんだあの人・・・・）
　それを聞く限り隆の方も大変のようだ。けれど、核回避の命を任されている聡一にそちらを気にしている余裕はない。科救出作戦に続いて地下突入まで丸投げされた身としては気にする広い心も持っていない。
　ざまぁみろと呟いて、ともかく排除できないのなら誘導するか別のルートを使うかどちらにしろまずは武器の確保が先だ。校長が隆達を襲うとすれば武器をやり繰りしている班も危ない。
　自分も現在高さ的には１９階にいるわけで、さっさと下へ降りた方が無難だろうと、かけていた足を片方ずつフロアの床に戻そうとして――――、
「――――これより無作為にプレーヤーに襲いかかりまーす★」
　あまりにもふざけた台詞と共にばこんっ！という音がして１９階から上が根こそぎ消え去り、天井から滑車で吊るされていたロープも弛み、

「へ？」
重力の暴力が彼の身に降りかかる。
「嘘だろぉぉおおおお！！」
落下、墜落、激突。不吉な文字が続いて浮かんでは消えていく命綱なしのフリーフォール。途中恐ろしい早さで過ぎていくドアガラス越しの各フロアを走馬灯の如く巡らし、１８枚目の死前映像を映し終えたところで衝撃がきた。
「ごふっ、げふっ」
１９階もの高さから落下したにも関わらず、一命を取り留めたらしい。
・・・・・下で蠢いていた化け物がクッションになることによって。奇跡だろうと幸運だろうと墜落死した方がマシだった。
「ヴゴギャア！」
「ギョギョギョ」
「ガグォゴッゴゴッ！」
自分たちの上に降ってきた不届き者に対する抗議らしき声を上げているソレらに聡一は引きずり落とされ仲間の躯の転がる狭い穴底に。
気分はさながら怪物の巣に引きづり込まれて子供の餌にされる哀れなモブキャラクターである。
（考えろ考えろ！攻略不可能なんてゲームじゃない、何か・・・何かあるはずだ！
黒の反対は白・・・白色の攻撃って何だ！？
白い物質？白い自然現象？白白白のイメージっていったら・・・）
そこでやっと、思い至った。
（光か！）
震える腕を突き出して手にまだ握っていた懐中電灯を向ける。上から何度も光を浴びせていただけに効果がないと思い込んでしまっていたが、あれだけ離れた場所からでは光は拡散してしまう。そのせいで自分が化け物の体色の判断に苦しんだのだ。今思えばあれで

は効果の程を知ることはできない。光という有り触れて、かつ発見した化け物にまずプレーヤーがするであろう行動を見透かした上での精神的な罠。

近距離で当てられた光線に今度は怯む化け物共を見て聡一は確信した。

今なら分かる。気づいてみれば実に簡単な回答だ。エレベーターの籠が破壊されて外への扉は開かれたというのにアレらが薄暗い穴底にいるのは、外には光があって出れないからなのだと。

懐中電灯では弱い。

ならば。バックパックを背負うまでもない貧弱な装備のもう1つ、スタングレネードのピンを引く抜く。厄介なのは光と共に出る三半規管を狂わせる大音響だが、致し方あるまい。

「ぐぁっ！っぅ・・・！」

塞いだ瞼を通り抜ける白光と飛行機のエンジン音すら超える爆音にのたうち回ってしばらく、べちゃっと見えない目の代わりに辺りを探っていた手が何かに触れる。視界が戻ってから確認すると、それは水をかけた赤の化け物と同じ様に溶けた化け物らしかった。

「うげぇ・・・」

懐中電灯で照らしてみると思った通りの気持ちの悪い光景が広がっている。そしてその先、本来ならエレベーターの扉があるだろう、爆破されて吹っ飛んだ地下への入り口の奥にはどうやらある程度開けた空間が広がっているらしいことが分かった。

最悪ダンジョン状になっている可能性を捨てきれなかった聡一としてはその発見はありがたいものだった。この期に及んで化け物の巣窟探検など誰がやりたいものか。

まだ残っていた仲間の死体から残りのスタングレネードをかき集める。あと6発。地下の奥はどうなっているかは知らないが、この限りある切り札をうまく使わなければそれまで（ジ・エンド）。

狭い暗闇の中深呼吸、覚悟を決めて一歩地下フロアへと踏み出す。

と同時に、パチッという聞きなれた音が部屋に響いた。

それはほとんどの人間が毎日のように聞いている音だ。部屋に入る時に鳴らす、作業音。部屋から出る時にも鳴らす、効果音。

その答えは天井から降り注ぐ。蛍光灯の白い光。

明かりを灯すロッカースイッチ。

暗く細部の分からなかった部屋は明るく照らされ、まだ生き残っていた化け物共呻きながら溶けていく。

地下空間はフロア丸々そのままの１つの巨大な部屋になっていた。いくつかエレベーターのドアとボタンがあるだけで壁も床も天井も白一色で統一されている。

唯一、この部屋の機能でもある核軌道の変更装置はその最奥の壁にあった。壁に映し出される『Ｐｌｅａｓｅ　ｅｎｔｅｒ　ＰＩＮｃｏｄｅ．』の文字と入力欄、マンションのエントランスにあるような台型の入力装置。

そして、本来なら入口の近くに設置するはずのスイッチは当然の如く部屋の奥にあり、それを点けた人物もそこにいた。

織神葉月。

タワー総力戦の間中影を潜めていたか弱き少女。

ここぞというタイミングで、これぞというシチュエーションで、やっと彼女の出番がやってきたのである。

彼女は実に愉快そうに微笑みながら壁から離れて入力装置の上にお尻を乗せた。

聡一はそんな彼女の余裕な振舞いにカラカラに喉が渇くのを感じながらも、ゆっくりと距離を詰めていく。

しかし、何故だ？なぜ葉月がここにいる？

侵入経路は他にもある、それはいい。だが、どうやれば１人で、化け物に襲われず、化け物を殺さず潜伏できる？

問題なのはそこだ。たった今地下にいた化け物を自分が殺したばかりなのだ。一体どんな魔法を使ったというのか？

思って、そしてその答えにたどり着く。

（化け物のフェロモン・・・香水）

そんなアイテムがあることを別行動をしていた隆に聞いていた。
若内楚々絽が使用していたというふざけたレアアイテムだ。
（確か、楚々絽を倒した際に隆達を助けるのに美樹が使用してはずで・・・）
だとして、もしもその使用したアイテムを彼女が何気なくポケットにしまいこんでいたとしたら？
（トラック運転中美樹はやられ路上に引き落とされて――――！葉月もその後蹴落とされた！）
ぞっとするような想像は、実際ぞっとするような現実となって今目の前に立ちはだかっている。
葉月は冷や汗をだらだらと流す彼を満足そうに眺めて、ごそごそとスカートのポケットから丸い果実を取り出した。
M67破片手榴弾（アップル）。知恵の実、罪の身の象徴、そして不和の林檎。
そのピンを抜いて彼女は笑い始める。
「あはっあはははっ！」
見ると、彼女の足元には籠いっぱいの各種果物（しゅりゅうだん）。爆発規模は爆発物の数だけ乗算されるこのゲーム内でその狂気の盛り合わせはどれぐらいの威力を持つのか。
全てを理解して、聡一の口からも乾いた笑い声が漏れる。
「は、はは・・・はははっ・・・・・・」
インカムを口に寄せる。意思に反して吊り上ってしまう口角と鳴り続ける喉を何とか押さえつけて、彼は裏返った声で戦友に告げた。
「すまん・・・核回避、無理だった」

文句を返す暇もなく途絶えた聡一からの通信に、彼らはバトルロワイルに時間制限がついたことを知る。

その追加ルールの意味するところはつまり、核着弾までのあと３分以内にプレーヤーに未来を含めたプレーヤーを全滅させなければいけないということで、残り時間も状況もそしてラスボスも何もかもが鬼レベルの難題だった。

タワーがぽっきりと折られた時点で上に控えていた補充班や貴重な武器類は丸ごと損失し、タワーチームにもはや手立てはない。

上るべき階層もなく野ざらしになった天井部分からは理不尽が、１８階以下のフロアには統制者の不在にも気付かない言いなりチームが、そして天上から降りかかるだろう劫火が待ち構えているのである。それを悟った時点でチームワークは崩壊しチームは壊滅。言いなりチームにしても攻略すべき相手が分解してしまったせいで目標を見失い、なおかつ未来の無差別攻撃の前に翻弄され、今までチーム対チームの対戦だった戦場は大乱戦へと姿を変えた。

丸裸にされた元タワーチームのメンバーを上から狙い打つ外道な攻撃に、元言いなりチームと共に下階へと逃げ出す彼らだったが、１９階に目ぼしい獲物がいなくなってしまったと見るや祠堂学園の悪魔はフロアごと５階層ほどぶっ飛ばした。

逃げ遅れたプレーヤーが宙に放り出される様を振り返りざまに直視して隆は叫ぶ。

「こんちくしょう！あんたマジで人間の屑だな！」

誰が敵で誰が味方か、そんなのは分かりきったことだ。あの空に浮いている心身ともに子供の学び舎責任者をおいて他にない。

慌てふためき逃げ惑うプレーヤー達の中、廊下に転がる一Ｍ２０対戦車ロケット発射器（ロケットバズーカー）が隆の目に入った。タワーチーム同様”決め手”として温存しておいた物なのだろう。それを引っ掴むと身を転がして身体の向きを変え、慎重さなど欠片もない雑な照準でトリガーを引く。発射されたロケット弾は何とか標的に向かって飛んだが、未来に当たるやいなや、ごぃんっと不気味な音を鳴らして跳ね返り

的外れな場所へと着弾し爆発した。
「だろうとは思ったけどな！」
チートという言葉が出た時点である程度予想できたことだ。
しかし板川由の時と同じく防御力だけ低いという期待がなかったわけではなかったので、改めて理解した状況の酷さに泣きが入りそうになる。
バズーカーを放り出して、狙いを自分へと移した未来から逃げるようにもう1段下階へ。が、基本的に滞空体勢を変える気がないらしい彼女は邪魔な１４階フロアを消し飛ばす。
これまでの蹂躙で分かったが、右手に持つ方の銃が連射性能を持つ攻撃力の低いタイプで、左に持つのがフロアを一撃で破壊する大火力タイプのようだった。特に左の方は発射前にギュィンッとＳＦチックな音を出すので判別がつく。まぁ、もっともこのフィールドでは撃ってくることが分かったところで逃げ切れるとは限らないのだが。
それにどっちにしろこちらの攻撃が効きそうにないのだ。逃げ惑う以外できることはない。
いっそ一撃で屠ってくれればいいものを、そんな無力な教え子達を安全圏からわざわざ右の銃で1人1人狙い打っていくわけだから性質が悪い。
あぁ、とここにきて隆は要らないことに気がついた。
このゲームのジャンルはガンアクション、つまりシューティングアクションだと校長は始めの始めに言った。しかしその実、ゲームの内容は素手だろうが罠だろうが何でもありの多要素混在アクションで、ジャンルを銃撃に絞るには自由過ぎることに引っかかりを覚えたプレーヤーもいたはずだ。
何故、校長はジャンルをシューティングに絞ったのか？
その答えは今の状況ではないだろうか。
左手にすごくふざけた凶器（ＳＦ）を持っているのにもかかわらず、チマチマ撃ち殺すことに執着する校長の姿を見て思う。

（・・・・・・・・・的は俺らか）

なんてことだ。内容とジャンルの合っていない説明を受けたゲーム開始直後、あの時得た違和感に従って自害しさっさとリタイアし安眠を勝ち取ることがこのゲームの攻略法だったとは。

しかしもう遅い。選択肢を誤ったノベルゲームの如く回避不可能のバッドエンドへと直行を始めてしまっている。

「どりゃあああ！」

効きやしないと分かっていながら落ちていた手榴弾を投げつけ、銃弾で撃ち射る。そうしなければ気が済まない。ささやかな復讐だ。

だけれどそれこそ今更だった。無慈悲なゲームシステムは意味のない気持ちだけの復讐に時間すらも与えてくれない。

見上げれば、青い空に白い糸。迫りくるは実際使われないことを祈るばかりの最新型の核弾頭。

思えばずいぶん長い間雲のかかった空の下奮闘したものだったが、青空とロケットという映える組み合わせを実現させたいという理由だけでいつの間にか空は晴れ渡っていた。リアリティーとゲームバランスがどこかへ行ってしまっているのは前々から分かっていたことだ。

もはやチート・ミクが手を下すまでもない。バトルロワイアルというゲーム上誰も予想しなかった結果が現実のものとなろうとしている。

相打ちでもなく自爆でもなく生き残りもまだ複数人いる中での一撃を以ってしての全員死亡。

「どぉっっっちくしょょよよおおおおおおおおおぉぉおおおおおおおおぉ！！！！！」

――――叫んで、思わず身を起こすとそこは自室のベットの上だった。

寝た覚えもなく、眠れた覚えもないままに、枕元の時計とカーテ

ンから漏れる日差しだけが無情にも文化祭から一夜明けたことを示している。
実際寝ていたのだとしても精神的疲労はむしろ増えただけで、それに加えて睡眠時間を無駄にしたという嫌な気分が纏わりついていた。
両手で顔を覆い、思わず呟く。
「・・・・・・なんつぅ悪夢だ・・・・」

第４９話－　台無死。－Ｂａｄ　Ａｐｐｌｅ　！！－（後書き）

後夜祭　脇役どもの　夢の跡

……というわけで、ひどい女性群に翻弄される男性群のお話は終わりです。
ちなみに、ゲーム攻略の本当の正解は「核回避せずに、シェルターを探して１人で籠る」でした。
長かった…計１９７ＫＢぐらい？三人称の練習だったはずなのにより一層苦手意識が芽生える不思議。

さすがに疲れたので『エキ日々。』は少しの間手をつけないと思います。
次の話のプロット考えなきゃいけないし、違う話も書きたいし。
まだ黒咲さんは「罪扉」の続編を諦めてねぇ！
せっかくキャラは作ったんだし、ＩＦやら何やら色々プランはあるんですよ！
要もまた書きたいのに！
全ては作者の集中力のなさと遅筆のせいだ！
……あと、「語るモノ」。
テンプレが思いつきません。誰か助けて。
気分転換に書くなら「語るモノ」なんですがネタがない……。

執筆状況等はサイトの方でちょくちょくお知らせしますので、よかったら覗きにきてください。
では。

第５０話－　放火魔。－Ｂｌｕｅ　Ａｌｅｒｔ－（前書き）

遅くなってすみませんでした――――！
何か最近こんなことばっかり言ってる気がするので、亀更新を克服するためにも一応次の更新予定日を晒します。
二週間後の１０／２４に次話を更新できたらなと思ってますので、よろしくお願いします。

第５０話－　放火魔。－Ｂｌｕｅ　Ａｌｅｒｔ－

イベント６とイベント７の凶悪なコンボに、成すすべないと思われたあのゲームの攻略法は『核回避を諦めて地下シェルターを探し１人で籠る』だったらしい。

なるほど。攻略できないゲームはゲームとは言わないわけで、解答があることを前提に考えてみれば、時間がないわりには生存者の多かったあの状況で一気に型をつけられる方法はそれぐらいだった。

ロケット弾を跳ね返してみせた校長にしても、一定値以上の攻撃は通るのかあるいは他の理由で耐えられないのかはともかく、ゲームの結果が『全員リタイヤ、よってドロー』である以上そうなのだろう。

・・・・・そうだとしてもあれがクソゲーだという事実は変わりないが。

難易度が高すぎる。あの差し迫った状況下でそこまで頭を回らせなければならないなど、校長は学生に何を求めているのか。

いや、まぁただ遊びたいだけだったんだろうけどな。

そういう意味ではあの後夜祭は大成功なのだろう。

あれから随分と経つが、あの夢のような実際夢のゲームの攻略談義は絶えず、攻略サイトまで立ち上がっている。

学園としても研究価値が疑問視されている超能力の有用性を示せたのだろうし、園の内外共に満足できる結果だったはずだ。

でなければあんな娯楽を学園理事長が許してくれるはずがない・・・と思いたい。

実際会ったことがないだけに理事長がどんな性格をしているのかは知らないが、校長の進化形態だとすれば学園は根本から腐っていることになる。

「う〝ー」

学園の将来に一抹の不安を抱きつつ声のした方に目を向けると、

葉月が自席で頭を抱えていた。
それを見てごく自然にザマァミロと浮かんだ俺を責めないでほしい。
「どうしたんだよ？」
「うーん、それがさぁ・・・沖縄で買ったお酒が結構スペース取っちゃってね」
未成年の悩みじゃねぇ。
「アパートが狭くなっちゃったからどうしようかな・・・と」
「・・・警察いけ」
真剣に悩んでるんだよと唇と尖がらせて避難する葉月。俺も本気で言ってるんだがな。
しっかしそんなことが悩みであるところからして――――法律的にはどうであれ、なんとまぁ世界は平和なんだろうか。
１１月。秋という季節らしく、のんびりとした日々が過ぎていく。
「夏休みも１０月も何だかんだで忙しかった気がするもんなぁ。まったり過ごすのもいいか」
「まったりねぇ。そういえばマロングラッセって食べたことないなぁ」
・・・『ま』と『っ』以外に同じ文字がない上に、発音すら似てねぇ。
「よし黙れ、もう黙れ」

／

１０月が終わり、１年の終わりもあと１か月と迫ったイメージほどゆったりとはしていない秋という季節。
収穫という太古から最も重要な意味を持つはずの時期であり、春と気温などはほぼ同じであるところの秋なのだけど、四季の中で最も存在感の薄くいつの間にか過ぎ去っていく気がするのは僕だけだろうか？

街路樹として植えられたイチョウの木が黄色い葉を纏っているのを確認して、改めて秋だとは認識してもイマイチパッとしない。

今はまだそれほどでもないけれど銀杏が無残にも街路のタイルに落ちて潰れ始めでもすれば、あるいは秋だと実感できるのかもしれない。

「それはそれで嫌なんだけど」

あの匂いは苦手だ。嗅覚が数段に跳ね上がった現状、アレに耐えられる自信がない。

まぁいい。アパートの最寄駅からイチョウ並木の間を通る間、秋の存在感のなさに思い耽るのも終わりにしよう。

イチョウにしろ、秋にしろそんなモノはスイーツを食べる口実程にしか価値がない。

読書の秋だのスポーツの秋だの食欲の秋だの、この季節は何でも最後に『の秋』とつければもっともらしく聞こえるから有り難い。

農を蔑ろにしがちな現代日本人にとっての秋の恩恵はこれが最も大きいんじゃないだろうか。

今、僕の目指しているのはその先にあるデパートである。神戸といっても繁華街と反対のニュータウン側の地域ではある終点駅のくせに、ここの駅前には場違いに洒落たデパートが構えているのだ。

立地条件は一等地なだけに市から借りている土地代は馬鹿にならないだろうに、大して観光客もこない駅では利益が上がってるとは思えない。何時閉店してもおかしくないというのがニュータウンの住民の見立てだ。

入ってすぐ、1階フロアのテーマはお土産――――つまりこの場合は神戸らしく様々な洋菓子を扱った店舗のブースが並んでいる。

無駄に高級感を漂わせるチョコや芯についたままのバームクーヘン・・・。住宅街であるここらの住人にとっては生活の需要とかけ離れすぎるフロアだけれど、この感じならありそうだ。

お目当ては当然のことながらマロングラッセ。

口にしたせいか、食べたくなってしまったのだ。食べたい、すぐ

食べたい。そうとなればこの高ぶる欲求を抑えるのは難しく、こうして普段は行かないデパートに足を運んだわけである。

今まであまり見て回ったことのないその階層をしばらく探し歩いて目的のそれを見つけ購入した後、今日の晩御飯の材料も買ってデパートを出た。本当はスーパーの方が安上がりなんだけど、たまには手間をお金で支払うのも悪くはないだろう。

帰り道、そういえば洗剤やら日用雑貨も今度補充しなきゃいけないなぁなどとぼんやり考えながら帰宅、早速晩御飯・・・今日はカツ丼を作り始める。

カツ丼ならきっちり1人分作れるので残りが出ないし栄養価は高い。卵も摂れるし、野菜は青汁で補うつもりでいるのでバランスはそれほど悪くはないはず。

今更別に栄養失調で倒れるような身体ではないけど気を使うに越したことはない。

油を使うのが少し面倒ではあるけれど固める薬剤があるので処理自体は楽だし、カツ自体は冷凍食品の上使うのは卵と汁を火にかける親子丼用鍋だけで後かたずけも最小で済む。

面倒を最小限に留めるというのは一人暮らしには必須のスキルなのだ。

何より、さっさとデザートを味わいたい。

実に分かりやすい本音に突き動かされて、急ぎ気味にパック保存しておいたカット玉ねぎを取り出してすでに火にかけた鍋に入れる。

手間も時間もかからない丼モノは本当に有難い料理だ。

次はカツに取り掛かろうと油を入れたところで、ポケットに入れた携帯が鳴った。

そう言えば制服から着替えてすらいない。マロングラッセに随分気を取られていたらしい。

反省反省。

開いて画面を確認すると、通話で相手は『礎囲智香』と表示されている。仕方ないので、切ボタンを押して携帯をしまい直した。

残念ながら今はカツ丼ひいてはマロングラッセのことで忙しい。
が、再びの着信。
むぅ・・・、今ので拒絶の意思は伝わったはずなのに。
「はぁい、もしもしさようなら」
挨拶を済ませて再度切ろうとしたら、『はぁーづきちゃーん!!』
と怒鳴り声の応酬がきた。
ただでさえ優れた聴覚に大音量は痛いぐらいに響く。
『切っちゃ駄目よ!重要事項!ウラカタの召集っ!』
「えぇ～、今忙しいんだけど。油モノやってるから手が離せないし」
言ってから油の鍋を火にかける。大丈夫、バレやしない。
『火を止めればいいでしょ!こっちは緊急を要するのよ!』
「いや、マロングラッセが」
『はい?マロ・・・ちょっと葉月ちゃん?』
・・・・・しまった、つい本音が。
『油モノっていったじゃん!嘘吐き娘!』
「心外な!カツ丼の後のデザートとしてまったりとマロングラッセを食べようってだけで油は使ってるよ!」
『まったり!?忙しいって言ったよね!?この大嘘吐き!』
「あーはいはい、それで?要件は?時間がないんじゃなかったの?」
『うわっ、あからさまに話逸らしやがったよこの娘っ子!
・・・はぁ、いい?さっき連絡が入ったんだけど――――』

ボロアパート最上階である7階よりもさらに上、普段は閉鎖されている屋上に無理やり侵入してみると、なるほど確かにそれはあった。
秋になりたちまち早くなった日暮れ時を過ぎ十分に暗くなった夜の街、人工光に星が存在を奪われたとしても、アレまではかき消せなかったらしい。
フェンスから乗り出して眺める先、遠くも視認できる距離に赤い

光が浮かび上がっている。
いや、この場合規模がそれだけ大きいと見るべきなのか。
火事、それが今回の事件であり、その対処が仕事なのだと彼女は言った。
事のあらましはこうだ。
最近行方の掴めなくなってた学園都市界隈で噂の放火魔がいつものように放火作業に勤しんでいたところ、何らかの原因で能力制御が狂い暴走、最近行為がエスカレートしていると懸念していた事態が現実となり、さらに彼が火を纏いながら徘徊したため周りの建築物を巻き込み大火災が発生したという。
そういえばクシロがそんな噂話をしていた。
そこまで噂になっている放火魔を行方も掴めていたのに何故放って置いたのかとか、懸念してたのならなおのことさっさと対処しておけばとか、色々と思わないでもないけれど、考えてみれば通り魔の時も同じ様なずさんさだった。
今回の件だって実際不利益を被らなければ学園都市としては放って置いたことだろう。
人為的であれ火事は火事。本来ならば消防署の管轄だ。
問題なのはこれが超能力者の起こした事故であり、対外的によろしくないという点である。
有効利用の可能性を前面に推し出している学園にとって、超能力の直接的な施行が暴力に繋がると世間に認識されることは致命的打撃になる。
これ以上騒ぎを拡大したくはない、だが火事の原因が水や薬品で消火できる類のものではない。
そこで白羽の矢が立ったのが裏方というわけだ。
つまり、今回僕達に課せられた任務は火事の鎮火ではなく、今もなお辺りを燃やし尽くしている発火源を止めること。
それさえ鎮圧してしまえば後はただの火災。消防車で対応できる。
逆接、それができなければ、火は止めようがなく被害は拡大して

いくことになる。
確かに緊急を要する任務だろう。
火災は時間が経つにつれ状況が悪化していくし、目立つ上に隠しようない性質上呼びたくもない人々を集めるのだから。
騒ぎと被害が拡大する前に大火災の火中にいる犯人を絞めろ・・・か、厄介な命令をされたものだ。
「さぁて・・・」
場所は確認できた。後は移動するだけだ。
「よっと」
乗り出した上半身を屋上内へと引っ込めて、後ろ歩きで１０歩ほど下がる。助走距離はこれぐらいで大丈夫だろう。今退いた軌跡をなぞるようにコンクリートを駆け、最後フェンスの細い鉄板を右足で踏み締め、蹴った。
重力が身体を地面に繋ぎ止めようとする以上の力で斜めへのベクトルを持った身体は離れた屋上から別の屋上へと着地、その勢いを殺さないでさらに次の屋上へと飛び移っていく。
これ、一回やってみたかったんだよね。
流石に普段やれないし、今なら大義名分も成り立つし、あとオマケに早く目的地に到着するし一石三鳥だ。
秋になって粘り気のなくなった風が肌に心地よい。次々と視界を過ぎ去っていく景色の様も楽しくて仕方ない。
傍目相当ヤバイ人に見えるのだろうけどまたやりたいな。
さて・・・、火の海が目前に迫ったのを見計らってガンッと自販機をワンクッションに地面に降りる。
その衝撃で壊れたらしい自販機が延々と吐き出し始めた商品の１つを拝借し、近くで改めて火事の様子を観察する。
遠くの俯瞰から見れば海の様だった火の塊はこの距離だと森と呼ぶ方が近い形容をしていた。
窓を突き破り上へと伸びていく火の形や固い建物の表面を覆う有様が雑草やコケを思い出させるからだろうか？

一際炎を纏った1棟のアパート、これがおそらく火事自体の火元だ。ここから燃え広がり始めた火災がこの惨事の原因だろう。

燃え広がるのに暴走能力者が手を貸しているのだとしても、火事は可燃性の物質に燃え移ってこそ起こる。

超能力者単体なら人間大のライターが点火し続けているにすぎない。そうでないからこの話はややこしいのだ。

「おーい！こっちだ織神！」

声をかけられて振り向くと、アホ・・・瑞琉君がいた。手まねきする彼に従いついていく。熱さを直に感じる距離からは離れて全体が見渡せるポジションとなるポイントに他のメンバーも集まっていた。

変身佐々見雪成に触媒岸亮輔。雪女の音羽佐奈、スタンガン礎囲智香の2人がまだきていない。携帯の会話で居住地から遠く遅れると言っていた。

「さてま、今きた織神に説明がてら現状を再確認するぞ？

まず今回の件が俺らに回ってきたのはおよそ11分ほど前、受け取ったのはいつも通り智香だ。

内容は端折って言えば『暴走した保駿啓吾（ほとし　けいご）を止めろ』。

すでに周囲のアパート、住宅の避難は終わっていて、消防隊が後方で待機中。

騒ぎがこれ以上大きくなるのは裏活動する俺らにとっても痛い。時間はあって10分ほど。

避難完了地区と消防隊の待機位置から鑑みて、俺らの防衛ラインは向こうの・・・」

瑞琉君が指したのは、この辺りでもワンランク上の高級アパートだった。

「あのアパート。あそこまで燃え広がった時点で任務失敗だと考えていい」

「それで手段は？」

「暴走を止めるには気絶させればいい。幸い日常的な赤の常時発現（コード・レッド）

は取得してないから殴って意識落とせば火は消えるだろ。
で、問題なのはどうやってその一撃を与えるか・・・・・・。見ろよアレ」
言われて目を向ければ奥の方に暴走君がいるらしき火の塊が見えた。確認するまでもない。赤と紅をした周りの火に比べ、そこだけが青白い炎を上げている。あれが発火源であることは間違いない。
なるほど、そうなると確かに問題だ。
本体が確認できないほどの炎の壁、アレを破って攻撃しようとするのは難しいだろう。
あんな状況で燃え尽きても窒息死してもいない点からみて、暴走してるくせにちゃんと身体の安全と呼吸経路だけは確保してるようだ。
「俺や亮輔には手も足もでないから織神の髪で首を絞めて落としてもらう」
「完全に面倒を投げられた気がするんだけど」
「だって俺何もできねーもん」
そりゃそうだ。意識体になったら炎を抜けられてもモノに触れられないし。
いや、考えてみればここにいるメンバーってほぼ特殊工作系じゃない？
変身にしても媒介にしても攻撃は専門外。形骸変容（メタモルフォーゼ）だって肉弾戦の方が得意で、ああいう飛び道具系のＰＫとは相性が悪い。そんなことは沖縄で嫌というほど知らされた。
そもそもここにいないＰＫ２人組にしたって雪と電気。発水能力ならまだしも、空気中の水分がほとんどないこの状況では撥水すら役に立たないだろう。
火というのは超能力的にもポピュラーでありながら相手にするのが厄介だ。攻撃になり防御になり、制御下を離れても燃え広がり大抵のものを破壊できて相手の不利な状況を作り出せる。
今のところそんな火の防壁を突破可能と思われる手段は僕の髪ぐ

らいのものだろう。けど、
「うーんどうかなぁ、それ」
作戦を実行するにあたっての懸念事項を解消すべく、中身を飲み干したアルミ缶を青い炎へと放り込んでみると融点の低いアルミニウムは瞬く間に溶けて消えてしまった。
当然だ。青白いあの炎の温度はおそらく１６０００Ｋ以上、つまりは１５７００℃以上だ。融点の高い鉄でさえ１５００℃ほどで溶けだすのだからその温度の高さは異常すぎる。そんな異常温度の炎が高密度で壁を形成しているとすると、いくら僕の髪に耐熱性が備わっていようと耐えられはしないだろう。防壁の中が本体を守るために適温保たれているのだとしても、そこにたどり着く前に燃え尽きるのオチだ。
「無理だね、この様子じゃ」
それを聞いて、どうも楽観視していたらしい男組はあからさまに『え？』という顔をした。
完全に僕を当てにしていたな、この役立たず野郎共。
「せめて温度を下げないと無理」

・・・ということで、冷ますことにした。
もちろん暴走君の体力切れを待つわけではなく、強行手段――――消火ホースによる放水で、炎の壁に穴を開けようというのである。
ただ流石にそんなにうまくはいかないもので、重力に負けて放物線を描くこともなく力強く直射される水は青き炎に触れた瞬間に大きな音を立てて一気に蒸発した。水蒸気に視界を遮られて防壁の状況は視認できないけれど、この様子では表面温度を冷ませても奥にまで貫通してるとは考えにくい。
ホースを持つ雪成君の方が踏ん張り続けることに限界がきそうだ。
これ以上待っても意味がないと判断して放たれている水に特に強化した髪を１房滑り込ませる。水の管の中を流れに任せて伸ばして

いくが、どうも手ごたえがない。おそらく炎塊にまでは届いているはずだ。そこから伸ばしても伸ばしても燃え尽きていっている、そんな感じ。

あの高温にこれ程度の水では文字どおり焼け石に水と言ったところか。

予想はしていたことだが、いよいよ面倒だ。

「やっぱり無理み・・・ッな！」

報告しようとして口を開いた途端、台詞に思考を割く余裕がなくなるほどの障害がいきなり目の前に広がった。

紅の球。それも2球で視界を覆い尽くすほどの大粒が5つ、こっちに向かって飛んできた。

対処を考えている猶予がない。いまだホースを握ったままの彼の首根っこをひっつかみ明後日の方向へ投げ飛ばす。この一動作で距離はほぼ縮まってしまった。速い。逃げれないと直観し防御に切り替えて、背を向け髪束を総動員して広げる。並の炎や打撃ではびくともしないはずの折髪防壁は一撃であっさり爆散した。その一拍の間に脚力限界の跳躍で着弾点から離れることに成功。が、まっすぐと飛んでいたはずの火球は進路を変えて追尾してくる。

「ッ・・・！」

その、予想外の挙動に反応が遅れて、直撃を言わずも3つほど連なって爆散した炎と爆風を浴びた。

身体のいたるところを擦りながら転がり跳ね返り、ようやく止まった時にはボロ雑巾のような有様で損壊した舗装路に抉り込まれれていた。

「っぅううう・・・」

下敷きにされたアスファルトの残骸を蹴り飛ばす。擦過傷はともかくとして火傷、特に溶けたアスファルトの付着したところの火傷が酷い。

しかし、問題はそこじゃない。

明確に攻撃してきた。それにあのホーミング弾。

追跡制御？暴走能力者が？

おかしい。

本人周囲の制御は生存本能の影響を強く受けていると説明できるが、今の攻撃は解せない。

あそこまで細かい制御できて、かつ意思の通り能力を操っている人間を暴走していると言えるのだろうか？

暴走していない？

いや、けれど現にこうして大火事にまで発展している。

又聞きとはいえ、発火能力者（パイロキネシス）のことなら信用度の高い火兎な鮮香さんは彼の能力を『掌を覆う程度にしか火が出せない』と言っていたのだ。

あれからしばらく経っているとはいえ、これだけの惨状を引き起こすだけのレベルアップはまず不可能だろう。

それに彼は燃えるか焦げるかの瀬戸際の緊張感に快感を覚える性質という話だった。無論宗旨替えの可能性もなくもないけれど、この火事は彼の趣味でないはず・・・。

技量以上の火力、というのが引っかかる。

そこだけみればまさしく暴走だ。

暴走、悪いイメージしかない言葉ではあるが、反面潜在能力ギリギリのパフォーマンスを行えるという利点が確かにある、本能にインプットされている生存のためのプログラム。

本来制限されているリミッターを外すことで身体の損壊を無視した力を引き出せる――――。

そこまで考えて、１つ嫌な心当たりが見つかった。

暴走、それを制御できればより強力な能力者が得られる。そんな理念から研究を繰り返す廃人達の収容所。

取り押さえられた彼が逝く場所だとばかり考えていたが、逆だと、したら？

本当に、本当に嫌な考えだけども、筋は通る。

仮称裏方。名前もないその組織の性質を考えれば、むしろその方

が納得がいく。
『利己的な暴走』、箍の外れた発条。
自滅を免れた暴走者を造り出すことを目的にするという至極追探組織。
これが実験だというのなら、今この時は成果の回収といったところか。
なるほど、確かにその研究はいい線までいっているようだ。防衛本能を備えた暴走、全くもって厄介な相手である。

／

着火してしまえば自分の制御を離れて燃え広がってしまう火種を人のいる建設物に押しつけて、その限界点を見極めようと手が震え胸が高なり瞳孔が開閉を繰り返すその瞬間が放火魔である彼は好きだったのだろう。
火は着きやすいモノには着きやすいが着きにくいものには着きにくい。素材、湿り気、その要素はともかくとして、そんな燃えにくいモノに炎を当てて楽しでいたのが、放火の始まり。
コンクリートは燃えにくく、しかし焦げ目はつくのでお気に入りの対象物だったけれどすぐに飽きた。新聞紙を試したがさすがに燃えやす過ぎて、湿らすと今度はうまく燃えてはくれない。その調整が面倒臭くなって回収時間を無視し早めに出されたゴミ袋を燃やしたこともあった。あれこれと試している内に感覚が麻痺してきたのか、もっと刺激的な緊張感を求めて木造家屋に火を近づけて――――。
超能力を持った人間がその特異的な能力にアイデンティティーを求めることはよくある話だ。
他人と違うということに快感を覚えたり、安心したりと”自分”というモノを形成する青少年という時期なら特にそうだろう。
しかしながら、超能力の多くは日常において使う機会が少なく、

せっかく得たはずの自己を表現できないという状況はむしろ苛立ちを積もらせることもあり、『力を誇示したい』そんな能力者が犯罪に走るのは珍しくはない。

そういう事情を知っているからこそ犯罪まがいの彼の行為を咎める人物がいなかったのが、あるいは悲劇の始まりだったのか。動向を追えていることに油断していた発火能力（パイロキネシス）者の自治ネットワークから忽然と姿を消し、再び現れた今になっても精神は帰ってきていない。

さて、ところで渦中の保駿啓吾という人物がそこまで『燃やす』というものに執着する理由はなんだったのか？

そのこともこの事件で不明瞭な点である。

それこそ上記したようにありがちな話を重ねてみれば補完できる放火そのものの動機はともかくとして、その動機の動機、彼の原点だけは想像や推論では測り切れない領域になってしまう。

超能力は使う機会がないとはいったが、発火能力はその例外の部類に入る能力だ。生活において火を能力で代用できるシーンはいくらでもあるだろうし、もっと派手なモノを好むというのなら花火のように打ち上げればこれ以上のパフォーマンスはないはずなのだ。

何故『燃や』さなければならないのか、その意図については彼本人の心内に秘められたままだ。

しかし、今回は切り裂き魔小島継が『無抵抗な子を痛めつけるのが好き』『自分よりは体の小さい子を苛めたい』『痛みに耐えられず漏らす嗚咽が好き』『血が滲む傷口を震えて押さえる様子が好き』『自分を傷つける相手に縋（すが）るあの表情が好き』と自らその動機を告白してくれたようにはいかないわけで、彼のその執着心が能力を得てから生まれたモノなのかその執着心が彼に発火能力を与えたのか、そんな鶏と卵のような疑問に答えを得ることも望めまい。

・・・・・もしくはひょっとして、夏の蒸し暑い公園で、手持ち花火の火を草むらの虫に向けた――――そんな幼き・・・古き良き風景、その情景が彼の原初衝動なのかも知れないけれど、結局の

ところそんな想像でしか彼を語る術はなく、語る心を失った彼に解答を求めること自体が無駄な行為だろう。

無駄とはつまり無価値ということで、個人的な興味に答えも期待できない以上彼にもはや用事はない。

そう判断して織神葉月は言った。

「保駿啓吾を殺そう」

燃やされてセミロングになった髪を気にして毛先をいじりながら、手や足の水脹れを残った手でぐちぐちと潰す彼女に感情の揺らぎはまるで見られない。

それを聞いた朝露瑞流は肺に溜まった空気を吐き出してそのまま組んだ腕へと視線を落とした。

個人感情としてそれをどう受けるかは別として、彼女の判断に異議はない。

ただの暴走能力者ならまだしも、故意に、それも暗部に関わる研究所の手のついた能力者を生かしたまま沈静しようとするのは骨の折れる作業だ。それは先ほど体験したことでもあるし、そもそもが自業自得である彼を危険を冒してまで助ける義理はない。何よりこれが箍の外れた発条の研究対象というのなら助けたところで彼に救いはなく、逃亡まで手助けしようものなら自分たちの立場まで危うくする。

デッドエンド、救いようのない行き詰まりである。

殺す。この場合それが最適な方法で、救いのない廃人収容所に収監さて解剖されるよりはここで打ち止めにしようというのが同じく研究所出身である葉月の情けなのだろうと思われた。

佐々見雪成もそのことは心得ているらしく、目を閉じ黙りこくっている。

今更性善説など持ち出す気になれないほど、理由があれば人は人を殺せるという事実は身に染みて分かっている。言い訳めいた説明

を頭で繰り返して自分を言い包めるのに時間がいるだけだ。
個人感情との折り合い、そのための沈黙。
けれどそんな中で、
「ちょ、ちょっと待ってよ」
1人、口にし出して抗う者がいた。
岸亮輔、接触不良の媒介能力者。
いつも会話にほとんど入ってこない、空気と同化して存在を悟られないように縮こまっているいつもの彼からは考えられない行動だが、瑞流や雪成には彼をそうさせるモノを知っている。葉月にしても発言自体は予想外だろうと、その動機は予想できるモノで、大して表情を変えたりはしなかった。
彼の能力は他人の能力に干渉するタイプで、彼は人と触れ合うのを極度に嫌っていて、そして今回の事件の中心人物は”暴走”能力者だ。
実に分かりやすい構図だろう。
しかし、そんな彼の事情など今の状況で考慮すべくもない。
「そんな、簡単に・・・」
その先を言わせずに葉月は台詞を被せる。
「いくら考えたところで最善策なんてないよ」
「だからって・・・」
「ただでさえ時間がないのに無駄なことはできないし」
「無駄じゃな・・・」
「それに彼をそこまでして助ける義理もない」
「・・・義理なんて関係ない！今話してるのは命の話なんだぞ！」
小さな呟くような台詞の数々を遮られ続けて、ついに我慢の臨界を超えたらしい亮輔が声を荒げた。
人より聴覚のいい葉月はそれに耳を塞ぐ仕草をしただけで、やはり動揺した風もなく、だんまりを決め込んでいた瑞琉は短く溜め息を吐く。それから口を開こうとして、葉月に手で制された。
「そう、命の話だよ。だからこそ義理が大切なんだ。

自分の命を危険晒してまであの暴走君を助ける道理があるのかないのか。命を取捨する以上必要な問答だろうに」

「命は、どっちを取るかなんてモノじゃないし、諦めていいものでもない！

まだ・・・まだ手を尽くしたわけじゃないだろう！？・・・君は本気で助ける気があるのか？」

「ないね、全く、これっぽっちも。

君と同じく個人的な話をするとね、亮輔君。むしろ僕には彼を殺してやりたい理由があるぐらいだ」

「な・・・！？」

何で？、その分かりきった問いがくる前に彼女は言う。

「彼のせいでスカートがボロボロになっちゃたんだよ」

そこでやっと少し拗ねた表情でもはや衣服の体をなさない腰についた布切れを両手で摘み上げた。

「クシロが見繕ってくれた、スカートが」

制服のスカートとはいえ、それを用意してくれたのは朽網釧であるということ。

つまるところ、それが彼女の全てである。

泥底（ヌタ）を相手にした際は本人が危険に晒されていたために二の次だったが、あの時だって大切な服を破棄しなければならなくなったことが彼女の不機嫌に一役買っていたのだ。

「っ・・・・・君は、彼の命とスカートへの愛着を比べるのか」

「比べられないとでも？

『命の尊さ』なんて君みたいなのが好む言葉にどんな根拠があるっていうの？

失えば戻ってこない？かけがえがない？

子供の抱いてる縫い包みだってお気に入りの枕だって本人には失えば戻ってこないかけがえのないモノだ。

抱いている感情が同じ以上、その２つの内実もまた同じ――――

『命の尊さ』というのはね、生物に対する愛着を言い換えただけの

言葉なんだよ」

「違う！どうしてそんな考えができる！？命を想う感情が、根拠がなくても確信を持って重んじれようとする感情が――――」

「あるんだろうねぇ、君らには。まぁ、実際、生物が塩基たった４つの組み合わせを後生大事に遺伝していく様には執念染みたモノがあるし、遺伝子を後世に伝えるプログラムとしてそんな感情がＤＮＡに刻まれていてもおかしくはない・・・。

けど、そんなモノ僕は持っていなし、こういう類の話は同じ価値観を共有できなければ分かり合えやしない。こんな話論じたところで堂々巡りになるだ」

そこで一息、溜息を挟んで葉月はガラッと口調を変えた。

「あーいいやもう、面倒臭い。結局さぁ、僕達には彼を助けるだけの策も余裕もないんだよ」

「・・・・・・・・・・・髪の質を上げて何とかできないのか？」

「分子構造を弄って新素材開発なんてそんな面倒芸当がすぐさまできると思う？そんな労力をかけると思う？僕に期待しないでよ。

この期に及んでまだそんなこと言うか君は。

そんなこと言うぐらいなら、別にやる気のない僕を頼らなくてももう１つ手段はあるじゃない」

「え・・・？」

「君の媒介だよ。他人の能力に干渉して力を引き出す、制御するそれが触媒（メディエーター）能力の専門分野なんだからさ」

「そ、それは・・・・・・」

「それさえできれば話は変わってくるのにねぇ？あの炎を弱めるなり防壁に穴を開けるなりそれさえできれば僕の髪も通用するかもしれないのにねぇ？」

「う・・・ぅ」

彼女は言葉に詰まる彼に嘲笑混じりに畳みかける。

「そうすれば万事解決、君は自分の我を通せるし、僕は僕の我を通せる。それぐらいなら手伝ってあげるよ？」

「でも・・・・・・だからっ・・・それはっ」
できない。それができれば彼はそもそもここにいない。
握る手を震わせて、意地の悪い彼女の言葉に耐えていた彼だったが、
「あっ、ごめーんできないんだっけ？臆病な亮輔君は暴走君どころか自分の能力も制御できずにトラウマになっちゃって？怖くて怖くて人にも触れられない役立たずだもんねぇ？」
「・・・っんのぉおお！」
トドメの台詞に、ついに亮輔の両腕が葉月の首元に伸びた。
大学男子と中学女子、その身長さにも関わらず彼女の体は持ち上がることはなく、亮輔の行動に眉一つ動かさず正面切って彼の怒気に満ちた顔を見据える。
力ずくで掴まれて焼け崩れた胸元の布がついに耐えきれず千切れた所で、沈黙を破って葉月が口を開く。
「僕だってね、君が勝手にやる分には何も言わないさ。自分じゃ何もしようとはしないくせに文句だけは吐くから言ってるんだ。自分の我が侭を通すのに他人の力を借りようとするなよ」
人に触れられない。他人の能力に干渉することにトラウマがある。だから無理だなんてそんな甘ったれた理由は許されない。
葉月はそう言い、彼に問う。
――――で、どうするの？
そう訊かれて改めて彼は自分に自問する。
できるのか、できないのか。自分を圧するプレッシャーに打ち勝てるのか。
その答えはなかなか出ない。そう簡単に踏ん切りなどつくはずがない。
それでも、彼の手は今、彼女に触れている。
震えつつも確かに他人に触れている。
「やれば、いいんだろ・・・！」
「最初からそう言えばいいんだ」

「・・・？どうかしたの？」
それからすぐして到着した礎囲智香と音羽佐奈と合流した。

第５０話－　放火魔。－Ｂｌｕｅ　Ａｌｅｒｔ－（後書き）

葉月が酷い（笑）
そしてシリアスパートのはずなのにコメディの臭いが消えてない。
大丈夫かなぁとは思いつつ続きます。
次か次の次かぐらいで放火魔編は終了予定です。
結構細かくプロットで描写は描けているで、書き詰まることはないと思うんですが、どうなることやら。

そして、本腰入れてるのがこんな状況なくせにＰｉｘｉｖに登録しました。
ユーザーネームは名前を平仮名にしたもの……お暇な方は調べてみてくださせぇ。
ロクなもの上げてませんが。酷い落書きばっかです。
一応意味あってイラストの練習もしてるんですけどね。

では！次こそ予定通りの更新を！

第５１話－　藻屑蟹。－Ｕｓｅｌｅｓｓｎｅｓｓ－（前書き）

Ｕｓｅｌｅｓｓｎｅｓｓ＝役立たず。

亮輔君、どうしてこうなったかなぁ……。

第５１話－　藻屑蟹。－Ｕｓｅｌｅｓｓｎｅｓｓ－

暴走が始まったとみられるアパートは全溶し、発火源はのろのろとした歩みで移動している。今はまだ燃え広がった範囲内だからいいものの、そのエリアから出てきてしまえば１歩１歩が被害拡大に直接結びつく。火災自体の防衛ラインは先ほど決められた通り高級アパートまでだったが、彼に対す防衛ラインは別に設定する必要があるのだ。

炎が燃え広がってもアウト、暴走能力者が火事場から出てもアウト。

礎囲智香、音羽佐奈を加えて裏方のメンバーが揃ったところで、はっきり言ってそんな状況が変わるわけではない。

発電と冷却の能力者。単純な戦闘力ならまだしも、こういった特殊な状況下では戦力外だ。

メンバーの中で使える人材は触媒媒介の岸亮輔、そして辛うじて織神葉月の２人だけ。もっとも、それですら亮輔の一念発起で可能性が見えてきた程度だが。

それも、彼を動かすに当たって条件が殺害から保護に格上げされたことを考えれば、むしろ状況は悪化したと言える。

殺すなら、手榴弾なりロケットランチャーを持ち出せば不可能ではない。爆風で一瞬でも隙ができれば殺傷片が彼の脳に再起不能な損傷を与えるはずだ。

だが、生かすとなるとそうはいかない。手加減するというのは想像以上に難しい作業である。

制御の利きにくい兵器は使えない。作戦は制御しやすい自己能力にのみ頼らざるえない。

そうなれば方法は自ずと絞られる。

まず亮輔が外部から彼の能力に干渉して防御に隙を作り、そこから葉月が髪で首を絞めて彼の意識を落とす。能力が途絶えても辺り

は火の海だ。気絶させた後すぐさま回収できる葉月の髪がこの場合最適な手段となる。

最初の作戦とあまり変わりはしないが、前段階としての亮輔の干渉がうまくいかなければこの作戦は成り立たない。

にも関わらず彼は触媒能力者としては三流で、触れていなければ干渉できないレベルの力しかないのだ。

非接触での他能力を制御。今、ここでそれを成功させなければならない。ストレスに弱い彼にプレッシャーがかかることになるが、葉月に乗せられ啖呵を切った手前引くことはできない。

改めてみてもまともな策とは思えない酷い作戦だが、残念なことに問題点はさらにある。

彼を助ける。その選択をしたことにより、自分達への依頼主――――この場合治安維持機構を騙った箍の外れた発条(フォールアウト)を敵に回すことになるのだ。

連中にとって保駿啓吾は貴重な実験体、それを逃がそうとする連中許すわけがなく、こっちの意思が知れた時点で敵対することになる、のだが・・・・・・、

「どー見てもアレ、レギオン部隊よねぇ」

どうもすでに雲行きが怪しい。

啓吾の能力を操る成功率をあげるのにできるだけ接近するため、とりあえず上ったまだ被害の少ない彼の移動ルート上にある建物の屋上からまず目に止まったのは、彼ではなく封鎖されているはずの現場に向かってくる赤いライトを煌かせた集団だった。

量と密集具合からみても車両とは思えない。となればあれは脚足(レギ)戦車(オン)にだと考えるのが妥当、そこまで分かって気になるのは連中の目的だ。

何をしにきたのか?それは自分達の今後にも深く関わってくる事柄であり、無視はできない。

そこで智香が改造携帯のカメラズームを使って連中の様子を窺って、その小さな液晶から得られる情報をメンバーに伝えている。

「小型機種（サワガニ）にしては少し大きい。中型？イワガニ・・・・・・じゃないモクズガニよ！」

「モクズ・・・ってあの、最近できたアレか？他方傾向念力追究所と共同研究の？」

「能力波を反射する反響汎濫（バウンディング・エコー）を人工的に再現しようっていう・・・対、ＰＫ・・・戦略兵器だよな」

そこまで言って朝露瑞琉は握った拳で額をトントンと叩いた。なかなか穴から出てこないお御籤の棒を取り出そうとするように、纏まらない思考を揺すって整理しようという表れだ。

すでに自分達という人材を派遣しておいて、連中を引っぱり出す理由・・・・・・1、純粋に援護。2、裏切りがバレた。

無論、1を取るのは少々楽観的すぎる。レギオン部隊は目立つため隠密活動には不向きだ。だからこそ代わりに自分達が抜擢されただろうことを考えても、今更連中が出張ってくるというのは楽観視しできる方ではないだろう。

結論を口にする前に、射程距離に入ったらしいモクズガニの鋏の裏からミサイル弾が発射された。

「くそっ、会話だだ漏れじゃねーか！」

本来なら大事になっただろうミサイル弾の爆発は火事現場という特殊な状況にカモフラージュされる。

それを見越しての威嚇射撃が3発。特殊装置に場所を取られ他の兵装が大幅に削られているモクズガニにとってそのミサイルは1機に1つしか積んでいない貴重な1発だったが、だからこそ出し惜しみをするつもりはないらしい。

連中の使命が裏切った裏方より先に啓吾を回収することであるとするなら、その最善策は出会い頭に邪魔者を蹴散らして反撃を許さず最速で彼を掠め取っていくことだ。インパクトのある一撃を与えることが彼らの成功をより固いものする。

対して、そんな先制を許してしまった裏方メンバーに余裕はない。
着弾により損壊した建物の残骸が落下に際しわずかに炎を揺らめかせる頃には建物から脱出、そのまま一息も入れずにレギオンの去った方へと走る。
追いつく前、視界に連隊の尻尾が入った時点で智香が片手に貯めた電気を放った。そのまま手の形を模した網状の電撃は広がりながらレギオンへ広範囲放電を浴びせるが、降り注ぐことすらなく青白い網はぐにゃりと歪んで霧散してしまった。元々対超能力者兵器だ、例え攻撃が通ったとしても大した効果は得られないとはいえ、それすらも届かないというのは嬉しくない情報だった。
「電撃凶器（スタンガン）じゃやっぱり分が悪いわね。電磁パルス使えれば無効化できるのに！」
「能力反射は鋏の部分だけのはずだが・・・ああやって陣形組まれると厄介だな。死角を隠してやがる」
「陣形を崩しましょ。瑞琉と佐奈は最寄のポイントから武器かっさらってきて。私らは足止め」
「ラジャ！」
瑞琉の何やらこの状況を楽しんでいるような声を合図に裏方メンバーは2手に分かれた。ちなみにこの人選に意味はない。電撃、冷却、変身、幽霊、媒介とモクズガニを相手にするには役割不足過ぎる。唯一攻撃の通る葉月さえ残れば他がどういう構成だろうと大した差がないという悲しい現実が、今彼らの現状だ。
そもそも葉月以外に残った3人にできることはない。電撃も連中のバリアを何とかしなければ話にならないし、変身能力の使いどころは見当たらない。そして何より――――、
「・・・そーいやさ」
他のメンバーにとりあえず歩みを合わせながら葉月はポツリと口を開いた。
「言いにくいんだけどね・・・」
「何？」

「モクズガニ、あれさえ奪えば亮輔君要らないよね？」
「「・・・・・・・・・・・・」」
そう、作戦上どうしても外せなかった亮輔の能力はモクズガニの登場で呆気なく不要になったのだ。
「僕、胸倉掴まれた分損じゃない？」
「・・・・・織神、それ以上言ってやらないでくれ。亮輔が泣く」
「ちょっと！何よ、私置いてきぼりなんだけど！」
ともかく、戦力は葉月だけ。彼女がせめて彼らを足止めしなければ、武器を取りに行った2人も間に合わずに終わるだろう。
「はづきちゃん、よろしくね」
「はいはい・・・・・よっこら・・・しょっと」
そんな可愛らしい掛け声とは裏腹に『よっこら』の部分で道横の電柱を蹴り折って、『しょっと』で倒れてきたそれを両手に抱える彼女。引きちぎった電線から火花を散らせたまさしく矛先を前方に向けて、やり投げの体勢で駆けだした。
レギオンと呼ばれる脚足戦車は大きさから大中小に分けられ、その内小型のモノをサワガニ、中型のものをイワガニと言った風に通称がつけられている。モクズガニ、というのはそんな中型のイワガニに特定の武器（はさみ）をつけた状態を指す名称で、その名づけ方はそのまま最も特徴的な鋏の形状から取られることが多い。シオマネキもその中に入るわけだが、モクズガニの場合は『賢者の石』から得た対ＰＫ用の能力波反射ユニットを装着したタイプのことを指す。
通常のサワガニやイワガニが装備している剥き出しそのままのロケットランチャーやマシンガンといった小鋏とは違い、モクズガニの平べったく厚い存在感のある鋏は多くの人がイメージする通りの『普通の蟹鋏』で、その装甲部分に反射ユニットの出力盤が備わっている。そんな見た目は『普通の蟹』であるそのタイプが数あるカニの種類の中からモクズガニと呼ばれるのは、ユニット発動時の鋏の状態が――――裸眼では確認できないのだが、能力波可視化条件で確認すると鋏の甲から無数の触手に似た力場を構成していて、本

来のモクズガニのように毛に覆われたように見えるからである。
さて、つまり纏めるとモクズガニと呼ばれているが本体自体は中型レギオンの素体であるイワガニと変わらず、問題は鋏の部分だけであり、出力盤がそこにしかない以上彼らの反能力シールドには死角が存在するということになる。
回収する対象がああもきっちり自らの周りを火炎で覆っている以上、モクズガニといえども単独での彼の能力放射域突入は自殺行為である。だからこその陣形。
数にして１２機、その内遠隔操作に頼らない操縦ポッドのついたものが４機。残り８機の無人機はその防御陣を組み立てるために用意されたと見て間違いない。
前方、側面、後方、そして上方と楕円型に押しくら饅頭をするように、それぞれが鋏を外側に向けて走行している。真ん中のモクズガニが上方を担当し半球状のシールドを完成させ、隊の周りを覆っているのだ。
それを能力波を裸眼で可視化できる眼で確認している葉月の狙いはもちろん彼らの陣形を崩すことだ。せめて智香が参戦できる状況を作らなければならない。
今まで全く力を入れて走ってはいなかった足に全力を注ぎこみ、レギオン隊に追いつくと共に抱えた槍を突き出す。城の門を突破する丸太棒の如く、城門の代わりにモクズガニ１体の眼球を捉えた一撃。威力に耐え切れなかったカニはブレーキがかかり切らずに脚のバランスを崩して横隣のカニを巻き込んでいく。トドメとばかりに突いた電柱を横にスライドさせて３体ほどごっそりと隊から脱落させた。
前方と中央辺りいるポッドを搭載したカニは巻き込めなかったがこれでとりあえず防壁は崩れた。
「智香さん！」
「あいよ！」
モクズガニが再び陣形を組み直す前に智香が今度は一点集中させ

た電撃を地面すれすれで放つ。装甲に覆われた外殻ではなく、走行中以外は格納されている脚の車輪、その中にあるモーターが狙いだ。配線に負荷をかけ電力供給を妨害して車輪を止めてしまえば、カニは著しく移動能力を低下させることになる。元々脚は歩行のためにあるのではなく、重火器使用時の滑り止めと悪路用の非常移動の目的からつけられたモノであり、移動には適してはいない。

雷の縄はちょうど隊中央のカニの足を絡め取った。脚の1本だけ車輪が故障したモクズガニはその脚をアスファルトに擦りながら、速度を落としこれまた陣形から外れる。が、隊のすぐ後ろに控えているのは葉月だ。アリジゴクが落ちてきたアリを逃がすわけがない。搭載ポッドを貫通する恐怖の右腕が鉄のカプセルから抜かれた際には鮮血で染まっていた。

5体欠落、残り7体。流石に看過できないと判断したらしく、今まで抵抗を見せなかった彼らは陣形を自ら解いて分隊して向かってきた。回収班は4体で足止め班3体、それを見るに4体が啓吾を回収する際に必要な最低数なのだろう。逆に言えば4体以下まで追い詰めれば連中を妨害するという目的は達成できるということだ。

しかし、ただ殴られ続けてくれていた先ほどとは違って、元々対能力者兵器のレギオンは相対するとなると厄介な相手である。

「きたきたきたぁ・・・！」

優先順位を繰り上げられ、完全にロックオンされたことを車体を捻って向かう方向を自分達に変えたモクズガニの様子で確信して雪成が叫ぶ。

「どうする!?俺と亮輔には対抗手段ないぞ！」

「囮になってくれれば僥倖だよね」

「だって。がんばれ2人共」

攻撃手段を持つ女子2人は他人事への興味のなさを隠しもしない。

「前々から思ってたけど、男子に対する態度が酷くないか織神君！？」

「そんなの、最近の世間全体の傾向だよ」

反論する雪成に『君』の言葉を無視した上でしれっと返した。
少しずつ移動ペースを上げているらしい発火源から離れすぎない程度に逃げに転じた彼ら、そしてそれを蹴散らそうとするモクズガニ。追う追われるの立場は逆転した。
どの道時間に余裕がない中で逃げ回り続けることはできないと、葉月は丁字路を右曲がった時点で角の死角を使う”いつも”の攻撃に転じる。古典的でありきたりな手だが、奇襲こそが連中に対して肉弾戦でしか対抗できない葉月の武器だ。
だが、この方法は自分も相手が見えないという欠点がある。目を狙ったつもりの彼女の右腕はモクズガニ自慢の装甲鋏に突き刺さった。
「いっぎ・・・」
軽量化のために装甲の薄い本体とは違い、防壁としての役割の与えられ、反能力波ユニットというデリケートな装置を搭載している鋏の強度は数段高い。いつのもつもりで殴りつけた手の方も派手に損傷し、何より引き抜けない。一撃で戦闘不能にできれば問題ないが、今回は違う。無事だった右鋏裏の小型マシンガンが向けられる。
――ガガガガッ！
近距離の鼓膜を破らんとする大音響に対しては事前に察知できたことで事なきを得たが、動きが制限されている状況で弾を避けきることはできなかった。肩に3発、それだけの被弾を許しながらも鉄の穴に挟まった手を強引に引き抜く。その場で棒跳びの要領でブロック塀を飛び越えた。向こう側にあった駐車場のアスファルトに打ちつけた身体をすぐさま持ち上げて場を離れる。
「っ、つつ」
3発撃ち込まれた銃弾に左腕は骨と筋のほとんどを千切られわずかな皮と肉で繋がっているのみで、無理やり抜いた右手は金属片で切り裂いたせいでごっそりと知能線の当たりから肉が削げて人差指と中指に関しては存在すらしていない。
・・・なるほど確かにさっきの行動は知的とは言い難かった。

それらをさっさと治してから自ら破った鼓膜を張り直して耳を澄ます。聞き取りたいのははぐれたメンバーの声だが、モノが燃える音や建物の崩れる音が四方で絶えず起こっているような条件下では望み薄だ。葉月は代わりに銃声を拾ってだいたいの方向を確認し、そちらに向かうことにした。

障害物を飛び越えることで直進、丸腰では分が悪いことを改めて理解した彼女は慎重になりながら周囲を確認していく。もはや素手で相手をするつもりはない。もはや救援物資が届くまではむやみに手を出す気にはなれなかった。

そうなると問題点が間に合うかに集約されてしまうため、本来ならリスクを分散させたいところだが選り好みできる余裕などないのである。

武器が間に合わなければ反撃にでれない。反撃に出れなければ妨害ができない。妨害ができなければ啓吾は向こうに回収される。回収されればゲームオーバー。

どれか1つでも条件をクリアできなければならないという状況下にいるということは戦う者としては恥と言っていい。大抵の場合そういう立場に追い込まれるというのは敵の罠にまんまとかかったことを意味し、無智を証明するのと同義なのだ。

あーやだやだと溜息混じりに呟いて、跳び上がる葉月の視界に追われる裏方メンバーが現れる。距離を詰められて先ほどと同様に脚のモーターを狙った電撃を放とうとする智香。ただ前の時と違い向こうも今度は攻撃してくるのだ。電撃放るモーションと銃弾を撃ち出す時間、どちらが早いかは言うまでもない。そもそも正面を向いている対ＰＫ用モクズガニにその攻撃が通るとも思えなかった。

「ちっ」

すんでで髪で銃口をそらして、そのモクズガニを重りに自らの身体を地面に引き寄せる。カニと智香の割り込む形で戦場復帰を果たし今度は自分が狙われる立場になった葉月は、今度こそ狙いを定めてレギオンの一眼を蹴り潰した。片鋏と目を破壊された1体は戦闘

不能、これで追ってくるのはあと2体だ。その2体も潰れた1体に道を塞がれている。
が、次に自分達へと迫りくる音は後ろからやってきた。
今まさに逃げんとする道先を塞ぐのはシールドを崩す際に薙ぎ飛ばしたモクズガニ。大した損傷を受けなかった彼らはまだ戦える――――、
「ヤバッ」
残り2つという見積もりは計算違いという現実となって突きつけられ、温存していたらしいランチャーが1発、挟み撃ちにされた裏方メンバーへと打ち込まれた。

#

武器を取りに行け。
そう言われたものの、考えてみれば火力に特化した能力者を相手取る前提に作られたレギオンに対して半端な火気は効かない。
そのことを留意した上で用意しなければならないと気づいた時点で朝露瑞流と音羽佐奈は最寄の場所ではなく、少し遠いビルの地下駐車場に隠されている倉庫へと向かうことにした。
あそこには従来の重火器以上に”貫通”に重点を置いて製作された対戦車ライフル巨人(タイタン)弾槌がある。
巨人(タイタン)弾槌は『銃弾が装甲を貫通する力は弾速の2乗に比例し、質量に比例して増大する』という法則通りに、従来規格外の火薬量と質量を増量した銃弾を新たに用意し、それに合せて強烈すぎる反動を抑えられるよう砲身を開発したモノだったが、威力と貫通力を重視しすぎたためにやはり反動が抑えきれず撃った本人が脳震盪を起こすという笑えない結果になり研究終了となった火器だ。
名前の意味は『巨人の如く威力を持った』ではなく『巨人に殴られたような反動がくる』というものであって、この兵器にどれほどの資金が費やされたのかを考えると洒落にもならない。

一応、強影念力（サイコキネシス）などを利用すれば使えなくはないために当初開発された分だけは保管されているが、今まで使われたことはない。

ならば今こそ使ってやろうと瑞流は考えたのだ。

織神葉月ならできる。

そんな無責任な台詞を、マロングラッセのお預けを食らった辺りから時間列と共に機嫌が悪くなっている本人に聞かれれば、この役立たずという蔑みと共に自分の身がモクズガニに向かって放り投げられることになろうが。

ともかくそうして、使うにもそもそも1人では持てそうにないそのデカ物を1つと補助にしかならないだろう火器類を手に彼らは引き返しすことにした。

しかし家事現場にまで戻ってきた2人が最初に見たのはメンバーの姿ではなく、できればご遠慮いただきたい連中だった。

サワガニの集団。

最初に事件に介入してきた連中はモクズガニだけ・・・。つまり言うまでもなく、その連中は後からやってきた援助部隊である。

ここにきての敵戦力増加なんぞ泣いている子供の口の中に生きた蜂の子を捻じ込むほど酷い話だ。

「・・・・・とりあえず隠れよう」

「あぁ、俺の幽体離脱で状況を確認した方がいいなこれは」

こうして、迅速かつ優秀な敵側の援助隊とは対照的な裏方の援助はさらに遅れることとなった。

＃

撃ち込まれた1発目のランチャーに続いてもう1発撃とうと後ろに控えていたモクズガニは、遠距離操縦者がトリガーを引く前に前方の1機共々宙を舞った。

かなりの重量を持つ鉄塊が地面から離されて踊る様は酷く滑稽だったが、何より予期しないその現象に場は凍りつく。

それをやったのは葉月でもなく、他の3人でもない。もちろん援護に戻るはずの2人でもないし、連中の仲間でもない。

闖入者は女性である。闖入者は長い髪を紐で雁字搦めにしている。そして闖入者は、

「おーぅ」

男言葉でしゃべり、脚足戦車を蹴り飛ばせるような怪力の持ち主である。

暴引大将、若内鈴絽。

こういった有事に際し、しばし顔を出す厄病神だ。

モクズガニを蹴飛ばしてそのまま高く上げていた足をゆっくりと下ろしながら、彼女は言う。

「すげぇ楽しそうじゃねぇか、俺も混ぜろよ」

「足手まといにならないんならご勝手に」

対して言葉をかけられた少女は、繭状に展開していた折髪を解いてから答えた。

本来なら例外を除いて年上に対しては丁寧語でしゃべる彼女がぶっきらぼうな態度を取るところからして、その不機嫌さが知れる。

そんな彼女の足元には実際役に立っていない3人がいて、岸亮輔に限っては度重なる役立たず宣言に泣きが入っていた。

#

11月の今更になって勉学習慣を見直そうと、とりあえず授業でやった内容はその日の内に整理して頭に押し込むことにした四十万隆はまだ定着していないその作業を終わらそうと机に向かっていた。

けれど、今までできなかったことが発起してすぐにできるようになるわけもないし、計画にしろスローガンにしろマニフェストにしろ立てる際にはうまくやれる気がするものだが、実行に移す段になって目標が高すぎることに気がつき支障が出るというのはよくあることだろう。

1教科ならともかく1日5、6教科ある科目をそれぞれ復習するのは学業に興味のない彼にとって辛いモノである。

どう足掻いても集中力が切れてしまう。2、3日で早くもそれを悟り、無理にやり通そうとすると続かないと感じた彼は対象を苦手な科目にしぼることにした。

ところで、彼の苦手科目は国語、英語、数1、数A、理科、社会である。

「・・・・・・・・・・・・やっぱ無理だろ」

どの道挫折は近い。

一向に解けない数式との睨めっこをやめて能力の練習がてらシャープペンシルに発破をかけて指を使わずにペン回しを始める隆。

そっちの方は割りかしうまくいっていて、小さな爆発でなら指先のように操れるようになっていた。

となれば就職先に超能力関係の仕事を選ぶことで上がりそうにない学績をカバーするという手段も選択肢に入ってくるわけで、勉強に対するモチベーションはさらにどんどん下がっていく。

「そもそも釧や葉月ができすぎなんだ・・・」

自分の怠慢を他人のせいにしながら、教科書とノートを端に追いやる。代わりに持ち出したのは日常的な赤の資料（コード・レッド）だ。流石にゲームを取り出すのは気が引ける。

PK、それも発破発火の能力者なのでそれほど重要度の高い技術ではないのだが、自動発動について書かれた部分は自己防衛に応用可能だということを発火能力者のとある先輩から聞いていた。

中学1年生。まだまだ進路を考える時期ではないと思われがちだが、学園都市生徒の就職平均年齢は23歳である。

中高卒業と共に同能力者の経営する企業に入る者が大勢いるし、大学に進学する生徒にしても超能力の研究に携わろうという意欲的な学生が多い。特別指定された大学はモラトリアムとして通うには学費が高すぎるため、必然的に中高で好成績を修めた生徒が奨学金をもらっていく生徒がほとんどだからだ。

そういった事情を考えると超能力で職を探すにしても早い内に決めておかないと痛い目を見る。

元々富裕層の学童が通う祠堂学園にしても、自立に関してかなり高い水準を生徒に要求してくるのだ。

某校長が好き勝手やっている学業を放りだした学校というイメージがつきまとっているが、『自分が何をしたいのか』を問い求め、がむしゃらに走るために用意された箱庭こそがあの学園の本質である。

人生に必要な科目は目標がなければ判断つかない。そんな状態で期限に追い詰められてする受験勉強が将来役立つわけないが、『やりたいこと』さえ定まっていれば他は後でついてくる――――とそういうことなのだろう。

と、資料のページを3ページもめくらない内に携帯に着信が入った。

相手は隅美月。

この時間で通話とは珍しいと、学業以外で時間を潰す免罪符を手に入れた彼は電話を手に取る。

通話ボタンを押してこちらから応答する前に切羽詰った彼女の声がスピーカーから漏れた。

「――――・・・た！」

「んぁ？何だって？」

「逃げ遅れた――――っ！火事火事火事っ！火、ヒィ！待ってホント待って・・・待てっていってんでしょ――ぉ！！ね、ねねね寝てたら寝過ごし・・・違っ警報聞こえなくって！ア、アパートのは、6階でっ、飛び降りれなくてっ！玄関燃えてて・・・だからこないで火ぃ――！」

第５１話－　藻屑蟹。－Ｕｓｅｌｅｓｓｎｅｓｓ－（後書き）

今回は予定通りに更新できました！
やっぱり予告した方がいいですね。
次回は１１月７日の予定です。

第５２話－　火中栗拾。－Ｌｕｃｋｙ　Ｇｉｒｌ－（前書き）

※アンケート実施しました。　詳しくは後書きにて。

執筆中に亡くなられたキーボート、そして今壊れたイヤホン、最後にあまりにも可哀想（笑）な亮輔のご冥福を祈ります。

簡単に下剋上ができるほど甘くない、妙なところで厳しい物語。
それが『エキ日々。』です。

そして結局締め切りを大幅に遅れてしまい申し訳ございません。
あー守りたかったんだけどなぁ。
ともかく第５２話お楽しみいただければ幸いです。

第５２話－　火中栗拾。－Ｌｕｃｋｙ　Ｇｉｒｌ－

タンパク質という性質上、どれほど立体構造を組み換えようと熱には比較的弱くなってしまう織神葉月の髪だが、純粋な頑丈さでは生体生成物の中で最高の部類に入る。

どれほど大仰に表現したところで映画ではあるまいし、結局爆発自体ではなく貫通と殺傷片で敵を傷つけるのが目的である対戦車砲弾では彼女自慢の艶髪には傷１つつけられなかったという現実が今、目の前に突きつけられている。

加えてこのタンパク質は電気刺激で構造変化を起こし硬化するという化学的特徴を持っているため、今までのように防御の度に能力で髪の組成を変える必要がなくなり、大幅な燃費削減が可能になった彼女の今秋自信作だ。

が、硬化はともかく防壁として編み込むという動作に能力を使わなければならないのは相変わらずで、故に使わないに越したことがない。

能力使用による体力切れ、特に髪を使っての非効率的な能力運用は彼女が度々今後の課題に挙げていたことだ。

それ故に、今までできるだけ能力を使わずに戦っていたのだが、大いなる役立たずのせいでそういうわけにもいかなくなり、ついに彼女の友人以外に対してはない等しい堪忍袋の緒がぶち切れた。

やってられない。短期決着にモードチェンジ。さっさと終わらせてマロングラッセ。

形骸変容（メタモルフォーゼ）の力を使えばこれ程度の相手は圧倒できる。保駿啓吾に執着しているのは岸亮輔であって、彼女自身は邪魔をする気はないにしろ援助する気もないのだから、障害物を蹴散らした後は他のメンバーに丸投げしても構わない。

というわけで、葉月は足元の亮輔を蹴り上げた。

直後、髪の防壁が解かれたことで攻撃を再開したモクズガニによ

る弾雨が地面に穴を穿ったが、そこにいた人物は代わりにそれなりのダメージを腹に受けつつも致死は免れて地面に転がる。続いて動いたのは若内鈴絽で、葉月達の横を通り過ぎ勢いそのままにモクズガニの左前足を蹴り折った。

3体から2体へ、それから2体加えて2体吹き飛び・・・と短い間に目まぐるしく数を変えたレギオンは今現在の機体数をさらに2から1に減らした。

「鈴絽さん！ヘタレ共お願い！こっちはモクズの鋏もいでから追いかける！」

「よっしゃ！よく分からんが了解だ！」

振り向きざまに呆然としている礎囲智香と佐々見雪成を両手で引っつかんだ彼女は残った亮輔を蹴り飛ばして、登場した路地から戦線を離れていく。片脚を折られたカニが体勢そのままに鋏だけを向け直し追撃を試みるが、銃弾が飛ぶより前に絡みついた髪が銃口を逸らした。極細の糸による強摩擦によって鋭い線筋が爪痕のように装甲に刻まれたが、流石に鉄塊は切断できなかったようだ。

本当は鋏の切断が目的だったのだが仕方ない。アームの部分ごともいで持っていこう。

巻きつけた髪を自ら千切り、狙いを変えた髪房を放つのと同時に、次は後ろに控えていた唯一無傷のモクズガニがブロック塀が崩れるのを無視して無理やり身体を乗り出してきた。出された鋏は左、搭載されているのはランチャーの方だ。先ほどからワンパターンの攻撃だが彼らに他の武器（せんたくし）はないのだ。

先ほどより近距離での人間ならば致命的な一撃も自ら課した能力制限を解き払った彼女には意味を成さない。単身である今ならば身を守る必要すらなく、ランチャー弾の方を髪で包みこめばそれで事足りるのである。

爆発自体を隔離され悲痛な断末魔を上げた砲弾を尻目に、こちらも1歩踏み出した葉月は傷のついた右鋏を蹴りあげた。すでに髪が巻きついていたアームはさらに加わった摩擦に耐え切れずついに切

断される。先ほど手で痛い目に会い、身体能力という能力において先達たる鈴絽が足に安全靴を履いているの参考に、髪で保護した足を今度はカニの一眼に振り下ろす。脚と鋏、そして目を潰されて完全な戦闘不能に陥ったカニから先ほどランチャーを見舞ってくれたカニに標的を変えると、崩れたコンクリート片に塗れたそのカニは銃弾を撒き散らすでもなく、自慢の鋏を突き出してきていた。

（なるほど、そういう攻撃もありか――――）

サワガニや普通のイワガニに比べて重厚な鋏はそのままでも十分な威力を持つ打撃武器になる。

少しばかり感心しつつ、けれどそのなけなしの知恵を叩き潰すべく左腕を振るう。比較的太く調節した髪がカニの脚を引っかけて盛大に転ばせた。脚で移動する、というのもかなりのデメリットを孕んだ仕様だなと彼女は無責任なことを思いつつ、今度は物理的にカニを蹴り潰した。硬い装甲が剥がれれば中は精巧な電子機器であるレギオンはその中身を無残に吐き散らしていく。一通りやって気が済んだところで踵を返し、わざわざ切断した鋏を回収しようとして・・・・・立ち止まった。

「はぁ・・・」

外見に変化は見られないが、能力波を視覚化できる彼女の目はそれが役立たずに成り下がったことを見取っていた。

薄々そうだとは思っていたことだが、やはり電力によって反能力作用を得る仕組みらしい。

そうとなると、遠隔操作ではないポッドつきのモクズガニそのものを壊さずに奪い取らないといけないが、それはかなり難しい注文だ。暴走した啓吾然り、殺す壊すより無力化するという方がよっぽど難易度が高い。

面倒に面倒を重ねたような現状は前の後夜祭に似たものがあるが、今回はしくじると痛い上に命を脅かす。

（亮輔君の火事場の馬鹿力に期待・・・・・は無理か）

バッサリと先輩を切り捨てて腕を組む。すぐ追うと鈴絽に言った

ばかりだが、当てが外れた以上考え改めなければなるまい。
有人モクズガニはもう啓吾を回収にした数機しかいない。連中と違って炎防壁に1か所だけでも穴が開けられれば意識を刈ることはできるこちらとしてはカニが1機あれば十分ではあるが、よしんば1機を掠め取ったとしても連中が妨害に入るのは目に見えている。機体を破壊されては元も子もない。自分達の1機を残して全滅させる、それが最善ではあるが、そこまでを望める状況かどうか・・・。
鈴絽という闖入者が少なくても裏方メンバーよりも使えるとしても、自分と同じく物理攻撃が主な彼女はレギオンと相性がいいとは言い難い。
（瑞琉君達がどんな武器を持ってくるか・・・それに左右されそうだ）
その彼らが動けもせずにいることを知らない彼女はイマイチに当てにならない不確定要素を考慮し結論を先送りにして、1度首を回してから歩き出した。

＃

「あー、つまり暴走野郎が発条に狙われてて、終着越境がマロングラッセなわけだな？」
モクズガニのいた場所から離れたところで礎囲智香と佐々見雪成を解放し、代わりに見た目ほど可愛くない怪力の女性2人に散々蹴り回され完全に気絶した岸亮輔を抱えた若内鈴絽は、端的にされた説明に対してさらに端的になった解釈を返した。
「・・・・・本当に分かってる？」
「だいじょーぶ、分かってるって。つまり結局はモクズガニがその絶対領域とやらに侵入しようとしたところを後ろから蹴り飛ばせばいいんだろ？」
その返答にさらに不安が増したが、乱暴ながらその即席作戦が最も有効そうなので押し黙る智香。人命がかかっているのだ、慎重を

期したいのは当然といえる。しかしそれが許されることが極稀であることも彼女はよく知っていた。

ならばできることはその運任せに近い作戦の成功率を上げる努力ぐらいだ。

どうすれば成功は近くなる？

それが彼女にとっての議題である。

「どの道・・・はづちゃんがいないと難しい・・・」

「まぁな。全く、俺と能力（キャラ）被ってるくせに向こうは髪まで操れるってのはずりぃぜ。

とにかく問題の暴走野郎のとこまでいかねぇーとな。・・・・・・本当にこっちであってんのか？」

辺り一面真っ赤に染まった住宅街は方向感覚を狂わせる。燃えてしまっては建物の特徴すら掴めない中ではすぐに迷ってしまうだろう。

それでも地理を大方把握している智香の案内の元移動しているのだが、保駿啓吾の姿は一向に確認できない。

「移動したのよ！あぁもう、さっきはここら辺を回ってたのに！」

すでに赤く塗られた画用紙に新しく赤い線をつけたところで判別できようもない。四方が火事では啓吾の移動した方向など分かるはずもなかった。

「ちっ、めんでぇーな。・・・ぁ？あん？」

愚痴を吐いた鈴絽はその口を閉じる前に眉をひそめた。進行方向とは反対へと振り向いて耳を澄ます。

「おいおいおいおい・・・マジか？」

「どうしたの？」

「モクズガニ、残り４体だったよな？」

「ええ」

「だとすっと・・・いや、どっちにしろエンジン音が違うか。

途中参戦のお客さんみたいだぜ。おそらくサワガニが３０機前後」

耳だけでそれを判断できる彼女のレギオンとの交戦経験もさるこ

となが ら、その情報にメンバーは驚いた。
「学園都市でもない住宅街にそんな数を!?智香、ヤバイぞ。時間もないが、俺達の立場もいよいよ危うい!」
「思った以上にあの保駿啓吾は連中にとって大切な素材らしいわね・・・」
「どう思う?連中がモクズの防衛につくか、俺らを排除にくるか」
言うまでもなく後者である。攻撃は最大の防御と言わずも、わざわざモクズガニに張り付いて自分達が近寄ってくるのを待つまでもない。近づけないように攻撃に出た方がよっぽど効率的だ。
「連中が暴走野郎のところまで連れてってくれれば楽だったんだがなぁ」
自分達が置かれている現状からすればのんきなことを言う彼女に智香は呆れ声で返した。
「そんなこと言ってる場合?こっちはモクズガニで精一杯なのよ?」
「モクズガニだからだろ?サワガニなんぞ大した脅威にはならねぇよ。
ご自慢の機動力はこんな街中じゃあ発揮できない。むしろ３０っつう数は足を引っ張る。自分らの機体で道を塞ぐのがオチだぞ」
「だとしても妨害としては十分な数だ・・・」
「どうする?二手に分かれるか?俺がサワガニぶっ潰してる間に啓吾探してお冠なマロンちゃんと連絡取るってのは?」
「できればそうしたいけど、私ら見つかったら瞬殺される自信があるのよね・・・」
「そもそも、その場合肩に乗ってる亮輔はどうするんだ?どっかに置いてくってわけにもいかないだろ」
「・・・・・盾?」
作戦のキーマンという立場からこの短期間で随分と酷い暴落ぶりである。
「分かれるのはなしの方向で・・・」
分かれる場合気を失った亮輔をどうするかで一悶着あるだろうし、

鈴絽が持っていくことになれば囮や盾にされないか気が気でなくなるだろう。
結局今の状態が一番収まりがいい。
「・・・後から7機、前から5機」
「もう追いつかれたの!?」
「大方ケータイのＧＰＳで位置バレてんだよ」
「忘れてたぁ!!」
「いーよ、今更切っても仕方ねぇ、だろっ！」
ゴドン、という音が響き渡る。見れば今まで見ていたモクズガニより一回り小さな機体が路地を勢いよく転がっていった。交差路から飛び出した瞬間、その姿が視界に残るよりも前に鈴絽によって蹴り飛ばされたらしい。
規格外。そんな言葉が智香と幸成の脳裏に浮かぶ。それは主に織神葉月に対して使われる単語だったが、この若内鈴絽なる人物にも十分通用する称号だろう。
彼女が蹴り飛ばしたのは対超能力者用の戦車なのだ。銃弾飛び交う戦場での使用を想定され作成された従来の戦車という性格と超能力者と対峙にするという新たな目的の元改良されたという性格を合わせ持っている戦闘兵器。
銃弾すら容易く通さない装甲に能力者1個体を相手にすることを想定した小回りの効く機動力、１８０。を超える視界、相手に合わせて替えられる鋏の装備・・・元々超能力者とレギオンの間には大きな戦力差がある。
どれほど強力な電気や炎を放てる能力者であっても鉛弾の硬さと冷たさの前に膝を着くものなのだ。
それを全くものともしない彼女は能力者としても逸脱している。形骸変容（メタモルフォーゼ）でもない普通の能力者であるからこそ、余計に。
（あぁ、なるほど。こうして熱狂的なファンを増やすのか）
さながら映画のワンシーンのように単身で強靭な敵を倒す様を見て幸成は得心した。能力の運用が、募金詐欺、寸借詐欺、結婚詐欺

や美人局に霊感商法など詐欺の方向へと向いてしまう形態変身（トランスフォーム）の嫌われようを知っている彼にとってそれはかなり身近な話である。

吹っ飛ばされた1体を皮切りに残りのサワガニが姿を現した。鈴紹の台詞を信用すれば前からは4、後ろからは7。道幅の狭さから実際一度で迫ってこれるのは2体ずつが限界だが、遮蔽物などありはしない道中にいれば4つの銃口の餌食になることには変わりない。

排除が目的であるサワガニの今回の銃の仕様は最もスタンダードなマシンガンだ。剥き出しのままの銃器が本来の沢蟹同様小さな銃にも見える。それでも装弾数はモクズガニのものとは比べものにならないほど多い。ポッドは搭載されておらず無人でいるのが分かる。

――チチチッチュンッ

智香が後方のカニに向かって電撃を放つが、電気はその速さのために自分でも制御するのが難しい。途中で軌道を変えられないために最初の狙いがモノを言うのが電撃（スタンガン）タイプの発電能力者（エレクトロキネシス）だ。故に追われて余裕がなくなっている際の命中率はよろしくない。

それを考えてもさっさと一掃したいものだが、彼女の電撃に脚を取られたのは前の2体だけだった。

その2体にしても移動を車輪ではなく脚そのものに変えれば問題なく動くのだから効果があったとは言い難い。

「てめぇら伏せろ！」

自分のあまりにも情けない戦果に呆然としている彼女の後ろからかけられた声。思わず振り向くと、サワガニが自分達に向かって飛んできていた。

かなりギリギリのところでそれを避けたが、背後で聞こえてきた不吉すぎる轟音に身がすくむ。いくら機動力があろうとも過密状態だったサワガニがアレを避けられたとは思えない。

しかし、それを確認する前に前方に目をやればそこからきたはずの4機は見当たらない。自分が一撃を食らわす間に全て片づけたらしい。

ここまで実力に差があると泣きたくなってくる智香である。

サワガニ1体をぶん投げて反対側に先制をかました鈴絽は智香達の横を走り抜けて仲間の下敷きになってもがいているカニ共の鋏を踏み潰していく。使い物にならなくなった仲間を押し出して参戦しようとする後ろに控えたレギオンの銃口が彼女に向くが、ガィンという聞きなれない音がして鉄筒にトランプが3枚ほど突き刺さった。

彼女の手の平にはいつの間にかトランプのデックが収まっている。手に持ったプラスチック製のカードを親指で弾き飛ばすという指弾や羅漢銭に近い奇術であり、手裏剣やナイフ投げといった1枚1枚飛ばす方法とは違って連射の利く技術である。

流石に鉄銃を切断することはできないが照準を狂わせるぐらいはできる。攻撃は足の安全靴で、防御はカードで。それが脚足戦車戦での彼女のスタイルだ。

彼女が蹴りを繰り出す度に金属が悲鳴をあげ、銃口が火を噴く度にコンクリートに穴が開く。近距離で銃を相手に渡り合える人間はそうそういない。

そうやってサワガニと交戦していた彼女だが、新たに入った音源に舌打ちした。

「おい、後ろからくるぞ!」

「またかよ!」

まだ無事だったサワガニのマシンガンを取り外そうとしていた雪成が叫び、残骸からモクズガニ奪取に使えそうな部品を探っていた智香は心底嫌そうな顔をした。

きたる敵に備えて三度電気をチャージしだした智香に鈴絽が言い放つ。

「こいつ邪魔だ、預かってくれ」

「へ?」

「いくぞ?パァース!」

言うやいなや、彼女は今まで肩に担いでいた役立たずを砲丸投げスタイルで投げ飛ばした。が、

「あ」

力加減をかなり間違えたらしく、亮輔の身体は智香達の上を超えて鈴絽が初めの1機を蹴り飛ばした辺りに転がった。そこはつまり交差路の角であり――――そのタイミングで彼女自身が言った追加のサワガニが到着し彼を轢いていった。

「うわぁあああ！ちょっ、あれマズいって！」

「ヤッベ！」

流石に鈴絽も自分のしでかした事態に冷や汗を垂らす。気絶した彼が戦車の脚を避けれるわけもなく、超重量の機体が彼の肢体の上を通ったのだ。慌てて回収にサワガニの群れに飛び込む彼女だったが、それに反応したのはレギオンの中の1体だった。基本両腕にマシンガン搭載していた中において数少ないランチャーを仕込んだ1機がごちゃごちゃと仲間もいる中でそれをぶっ放したのである。サワガニに有人ポッドは搭載されていない。だからこその、最も厄介な敵を潰すための有効手段、自爆。

「げっ！！」

その声は爆発音に呑まれていった。

＃

炎の明るさに反して家だったモノは黒く塗りつぶされる。

能力者の手を離れた劫火は通常の火災よりも断然早いスピードで住宅街を飲み込んでいくが、それでも幸いだったのは火元である暴走能力者が同じルートを徘徊しているために被害の拡大が通常の”燃え移り”で済んでいることだろう。

否、済んでいたと言うべきか。

今現在保駿啓吾はそのルートを外れ、火災の外へと足を踏み出している。

足が踏み出される度にアスファルトは蒸発し、剥き出しになった地面は赤黒く溶けて焦げつき、比較的低温だった炎に塗れた街路樹や建築木材に火が移り新たな『火災』が生まれる。

その1つに朝露瑞琉が防衛ラインとした高級アパートも含まれており、すでにタイムアウトであることを告げている。

「くっそ、随分と・・・火が」

そんな中を携帯片手に四十万隆は駆け回っていた。

切れば安否が分からなくなる。向こうの精神が持たなくなる。そういった理由から通話はそのままで、隅美月のいるというその高級アパートに彼は踏み込んだのである。

しかし、逃げれなくなった人間を助けに行くのに、そう易々と合流できるはずもない。

通常階段、非常階段とすでに2、3階辺りで火の壁が出来上がっており6階の彼女の部屋まではいけそうになかった。

彼女の済んでいる部屋はアパートで最も高い位置にあり、その下のフロアが全焼に近い状態である現状では非常経路を含めたアクセス方法がほぼ使えないと言っていい。

玄関から中に入れたのすら幸運としか言いようがないのだ。炎に包まれたこの建物の最奥にどうやって侵入すればいいというのか。

（よしんばたどり着けたとしてそっからどう脱出する・・・？）

うまく火を回避しながら進めたとしても帰りもそのルートが使えるとは限らないのだ。

加え、問題は空気。酸素はすでにほとんどないし、一酸化炭素による中毒が怖い。自分も、そして美月の方も、だ。

考える時間もないのだから泣きたくなる。

それでも何とかして助け出さなければならない。その決意は変わらない。

忙しなく赤く染まった周りを見回し、エレベーターに目が留った。

災害時は使えないという常識に囚われていたが、中の箱すら何とかすれば上へと通じているはず・・・。

後夜祭ゲームで同じ様なことを嫌というほどやった覚えがある。

常識的行動などを今更気にならないほどに、こういったことには慣れていた。

全力でですら悲しいことに大した威力にならない発破でボタンを押しても開かない鉄の扉をふっ飛ばし、本来内側から開かない天井も吹き飛ばす。1度上に飛んだ鉄板や蛍光灯の割れたガラスがエレベーターの床に降り注ぐのを待って中に乗り込んだ。

ぶらぶら揺れているロープをしっかりと握ると壁に足をかけて登り始める。

＃

「右！右！」

ガチ、ガチンッと鉄と機械のアームが可動域限界まで伸びて、己らに向けられた銃口に対しての警告を佐々見雪成が発し、それに応じて礎囲智香が微量の磁力で照準を狂わす。

若内鈴絽が爆発に巻き込まれた時点で逃走を図った2人は現在、追いかけてくる3機のサワガニの追撃をかわしながら見失ってしまった保駿啓吾を探していた。

電撃（スタンガン）では防御もままならないと思い知った彼女は電磁力（マグネット）系の知人と電話を繋げ、現在進行形で電磁力の応用について講義を受けつつ逃げているのだ。

『だからぁ、力んでやっちゃ駄目なんだって！ぐるぐるよ、ぐるぐる』

「んな説明で分かるかぁあああ！もうちょっとちゃんと説明しなさいよ！」

『こんな夜中に電話してくる不届き者に懇切丁寧に教えてあげてるってのにひっどい言い草ぁ』

「今8時過ぎ！9時前！夜中じゃないわよ！」

『・・・・・寝る時間じゃん？』

がーと頭をかきむしる智香。

「漫才やってる場合じゃねぇ！左から2体追加だ！」

網目のように道が離れては合流する道路の1本から新たに現れた

サワガニに脚のバランスを崩させようと磁場を発生させるものの、すでに後ろから追ってくる機体への能力使用で集中力を割いてしまっている。もはや中途半端にしか能力は利かない。慣れない磁力操作では対応できる数が少なすぎる。

対ＰＫユニットを搭載した分重く、動作が鈍いモクズガニと違って、彼らのマシンガンはすぐ照準を定めてくる。

飛んできた凶弾を何とか逸らして防御するが、効率化のできていない力任せの能力運用で体力の方も限界が近かった。

「・・・！アホから着信だ！切るね、レミ。

・・・・・瑞流！何してたのよ！？早くきなさい！」

『保駿啓吾を見つけた！』

「どこ！？」

『最初いたアパートの辺りだ！建てもンの中を溶かしながら進んでる！

さっきからモクズがあいつの周りをぐるぐる回ってやがる・・・中型レギオンじゃ建物内に入れねぇらしい。チャンスだぞ！』

「こっちはピンチなのよ！武器は？」

『巨人（タイタン）弾槌』

「死ね！使えるかんなもん！」

『織神に持たせれば鬼に金棒じゃねぇ？』

「今絶賛逃走中！逃げてるの！固定式の対戦車ライフルなんて何時使うのよ！」

と、頭に血が昇ったのが良くなかった。

元からぐらぐらだった磁力制御が完全に切れ、銃口が彼女に向いた。さらに、そのことに気を取られている内に前からやってきたサワガニに気づくのが遅れる。

前と後。そして集中力と体力の限界。

首筋に刃物を突きつけられたような致死の予感が全身を巡る。

取り返しのつかない失敗による、どうしようもない死亡直前の走馬灯で今までのことを思い返した結果、

「瑞琉絶対呪い殺す」
的外れな呪詛を吐いて眼を閉じ、
――――そしてサワガニは吹っ飛ばされた。

今までの自分達の矮小な能力戦が嘘にしか思えない豪快な音と共に、前方は織神葉月、後方は若内鈴絽によって。
「あー参った参った、ランチャーとか人に向けて撃つなよな。身体中鉄片だらけだ畜生。
嫁入り前の生娘になんてことしてくれる」
「治るくせによく言うよ。こっちだってモクズの鋏の中に指の肉と骨がごっそり残ったままなんだけど。
アレ、どーせ機構が回収するんだろうなぁ。ストーカー行為で訴えられないの？」
「はっ！なんて説明するんだよ？『私の使用済みの指を集めてる男がいるの』ってか？できの悪いホラーだぞ、ソレ」
「できの悪いヒーローにそんなこと言われてもねぇ・・・。
あーもうやだ。帰ってマロングラッセが食べたい。あとお酒」
「おいおい酒は二十歳になってからって教わらなかったのか？」
「ヒーローごっこは小学生までって知らなかったの？」
お互い、顔も合わせずに言葉の応酬を繰り返し、仲間の下敷きになりながらも何とか立ち上がろうとするサワガニへと向き直す。
その際、鈴絽は抱えていた岸亮輔を今度こそちゃんと智香達へ放った。
「さぁて行くか、さっさと終わらせようぜ」
「ホント、長引くのだけは勘弁だよ」

＃

エレベーターを伝って6階にまでこれたところまではよかったが、

隅美月が脱出できないという以上侵入できないのもまた然り。
閉じていて火の手を逃れたエレベーターの縦穴内と打って変わって、足を踏み出した廊下は紅蓮に染まっていた。他の火災からの延焼で燃え始めたこのアパート自体の火元は1階部分だったはずだが、すでに上の方までかなり燃え広がってる。
火の勢いが強すぎる。能力者を離れたはずの火だが、あるいは彼の能力の性質をいくらか受け継いでいるのかもしれない。
しかし、そんなことを考えてられるほど四十万隆に余裕はない。
彼女の部屋まで２５ｍほど。その距離がかなり遠い。
炎の高さが腰より下なら突っ切ろうとも思えるが、一瞬でも全身を覆うほどに火は高い。だいたい、その高い炎が視界を遮ってどこにどの程度の炎が密集しているのかも分からない状態だ。通り過ぎれると容易に踏み込んで、考えていた以上に火の壁が厚かったりすれば即火達磨になる。
ならどうすればいいか？
先のゲームで状況打開を絶えず求められてきた彼はここで一か八かの賭けに出ることにした。
爆風で炎を弱める。
最悪、それに触発されて大爆発が起こらないとも限らない、危険な方法だ。
だが、ここに潜り込む途中何故か待機している消防部隊を目撃した彼は、正規の救助がないだろうことを知っている。
これはあの時のゲームじゃない、間違えれば死ぬことは重々承知だ。けれど、あのゲームを経験していたからこそやる勇気の持てる手段である。
バフッと火の粉を最小限に留めた爆風が室内の空気をかき交ぜて炎を揺らめかせた僅かな隙に身体を捻じ込む。
絶えず身体の周りに風を通して服に着火するのを防ぎ、揺らめいた炎の先にルートを探って目的地へと向かう。
綱渡りにもほどがあるが、これぐらいしか思いつかないし力もな

い。
学校指定の白い靴はすでに底のラバーが溶け始めている。水を被ればよかったのだがそれに気づけたほど冷静な判断力は保たれていない。
当たり前の話ではあるが、そんな苦肉の策が通じるほど現実は甘く、まさしく細い綱を勢いのままに渡らんとするような危なっかしいバランスの上に成り立つ彼の突入は残り１０ｍのところで行き詰る。
壁だ。火の壁。
無論保駿啓吾の防壁に比べれば焚き火程度の温い炎ではあるものの、人間が通るには少しばかり無茶振りな炎の障害物。爆風では揺らめきは微々たるもので、どうやら住人が玄関においたらしい環境植物がその火種のようだった。
「くそっ、どうする！？」
廊下をそのまま突き進むことはできない。ならば他の方法を、迂回策を考えなければ・・・、落ち着くことのできない感情がぐるぐると同じ場所を回り、思考がからからと空回りしている。
何か他に。それはここにくるまでも何度も思った言葉だ。
目の前に映るのは煌々と燃え盛る炎と、その苗床となった倒れた観葉植物。
よりもよって、乾燥すれば燃えやすいモノが玄関に置いてあるとは――――、
「ベランダ！」
下のベランダが火の海で非常階段は使えない。だが、横にならどうか？
マンションやアパートのベランダは隣と非常時に貫通できる仕切り板で区切られている場合が多い。
それもかなり怪しいルートではあるが仕方ない。全く知りもしない表札を一瞥して、ドアノブに手をかける。鍵がかかっていた。
当たり前だ。既に火の手が迫っていたならともかく、あらかじめ

出された避難命令に応じたはずのここの住人には戸締りをする余裕はあった。

だが、ここで隆は思い出す。ドラマなんかによくあるベタな話だ。部屋の予備キーを鉢植えの下に隠すという古典的な隠し方。

はっとして床を探せばお目当てのものは黒く酸化しつつも形を保って存在していた。

開錠してみればひんやりとした空気が頬を撫でてきた。廊下よりは冷たい空気が部屋の中にあるのだ。

その理由は一目瞭然。入り口付近は燃えていないからだ。

おそらくは廊下とベランダ越しに火が燃え移っているために、ドアの閉まった部屋の内玄関は炎の進行ルートの最奥にあたるのだろう。

アパートといいつつ３ＬＤＫはある部屋をベランダへと突っ切れば案の定火の海だった。

しかし、この部屋にある何かしらを利用すれば何とかなるかもしれない。携帯以外何も持たずにきた彼にとってこの部屋に入れたことは二重の意味で幸運だったと言える。

まずはシャワーで全身を濡らし、無事だったカーテンやベッドから布団を剥ぎ取ってこれらにも水を含ませる。両手にそれらを抱えてベランダに出て塞がっている手の変わりに能力で非常壁を吹き飛ばした。

到底通れそうにない炎に濡れた布を被せて威力を弱め次、さらに次へと進んでいく。

「美月！今ベランダからそっちに向かってる！」

しばらく会話を交わせてなかった携帯に叫んだが、その返答は別の方向からダイレクトに聞こえてきた。

「隆くーん！ここ！ここ！」

どうやらもはやそこに追いやられたらしく、ベランダでホース片手に焼け石に水な散水を行っていた美月の顔が壁から覗いている。

その姿に幾分余裕を取り戻した隆は最後の壁をぶち抜いて、２人

は完全なる再開を果たした。
抱きつかれ、頭部と腕で万力のように締め上げられながら、彼は今きた道なき道を振り返る。
ひと時彼を通す程度に火を弱めてくれた布切れは既に乾き、炎の肥やしとなっている。
――――さて、どうやって脱出したものか。

＃

ギリギリ2車線ほどの細い路地を両端から自らの機体で塞ぐように集るサワガニに追い詰められた形になった織神葉月らは自分達が潰したサワガニの機体を盾に攻防戦を繰り広げていた。
機能がマシンガンしかない連中の鋏は代りに切れたマガジンを自動で入れ替えれる優れモノで、弾切れを待つには蟹の形をした遮蔽物は心許なすぎる。早く決着をつけたいが、数を武器にした出鱈目な弾雨に足止めされては接近戦を仕掛けられない。
何よりこの場凌ぎの戦闘はもう限界で、目標の回収をそろそろ真剣に考えなければいけないところにきている。
殺傷能力抜群のトランプはレギオン相手には決定打にならず、さっきから放たれ続けているカードがアスファルトに散らばり、若内鈴絽は今5つ目のデックを開けていた。
「この役立たず！」
「ちょっ、お前がそれを言うかぁ！？」
「うるさいなぁ！集中できないじゃないか！」
そして、礎囲智香と鈴絽がくだらない言い合いをしている横で葉月はせっせと裁縫をしている。
この状況、実は彼女の髪の繭に包ったままゴロゴロと移動するという脱出手段があるのだが、主に鈴絽が『嫌だ、格好悪い！』と駄々をこねた結果最後の手ということで今次善策を実行している最中

なのだ。
　髪を使って布を織るところから始まった彼女の家庭科実習は今現在出来上がった布地を型抜きし縫い合わせる段階にまで進んでいた。寸法はもちろん鈴絽に合わせてある。
「おーだいぶ出来上がってんのな、すげぇすげぇ」
「布織る所で集中力が切れた。もーやだ、何でこんなことやってるんだろ・・・」
　その台詞に嘘はなく、彼女の目にはぐるぐると黒い何かが渦巻いていた。
「袖口はもう少し広げてくれ、あと内ポケットをここら辺に・・・」
「よくこの状況で言えたなそんな台詞！」
「いーじゃん、せっかくなんだから凝りたいんだよぅ」
「あんた子供か！？うわっ、あっぶなぁ！」
　佐々見雪成のすぐ横を跳弾が掠める。直撃はないものの、さっきからこうしてちょくちょくと銃弾が飛んできていた。
　布作りから解放された時点で今まで総員していた髪を防御に回している葉月だが、すでに集中力が底をついた彼女の能力には荒が目立ち始めている。
「やっぱり転がって逃げればよかった・・・」
　鈴絽のテンションにノせられた結果がこれである。
「おいおいこれぐらいで弱音吐くなよ」
「別に僕は戦闘好きなわけでもないんだよ・・・」
「ふぅん、俺は好きだけどなー。昔の馬鹿騒ぎ思い出すし」
「昔からこんなことやってたんだ・・・」
「というか中3よね？・・・小学校からドンパチやってたの？」
　可哀想なモノを見る智香の目をスル―、鈴絽は葉月の髪の檻を無理やり突っ切って近づく連中の脚を羅漢銭でぶらしながら言う。
「んー、ガキの頃よく遊びに行った奴のところがあってな。そいつによく連れてってもらったんだよ」
　まるで近所の大人に遊園地に連れていってもらったような言い草

だが、
「戦場に？」
「うん」
　場所がだいぶズレている。しかし、連れていかれた本人はまさしくテーマパークに行ったような口ぶりで頷き、アトラクションの感想を口にするように語りだした。
「ある時、そいつ・・・いい年した大の男なんだが、そいつが言うわけだ。『あるところにとんでもない悪党がいて悪行を働いている。成敗しなければならねぇ』。
　で、正義の味方らしく真正面から敵のアジトに乗り込んだら、流石は凶悪組織、戦闘員の奴らこの日本国で拳銃を所持してやがる。それをバッタバッタと相棒のコップ底で殴り殺していくそいつの後ろに私らはついていったわけだが・・・過程中略して、最終的に悪の親玉を追い詰めた。
　すると、悪玉君はお約束通りに『俺を誰だと思ってる』なんて言ったりしてな。何のつもりかかざしてきた手帳には旭日章が――――」
「分かった、もう黙れ」
　旭日章、それは警察手帳につけられている黄金のマークである。
「まぁとにかく、そいつのところでよく遊んだんだよ昔は。俺と楚々紹と風（ふう）とあともう1人と」
「風・・・は風々か。もう1人は？」
「可愛い子でね。俺らの中では怒気覇鬼（ドキバキ）と呼ばれてた」
「・・・発音からして可愛い人間につけられるあだ名じゃないよね」
「キレると手がつけられなかったからなぁ」
　のほほんと過去の思い出に浸っている彼女を心底嫌そうに眺めながら葉月は最後の仕上げに取りかかる。布地はすでに目的の形を成しているが、彼女の要望である内ポケットやらがまだ残っている。
「何でそんなロクでもない知り合いばっかりなんだろこの人」
「おいコラ、自分もそん中に入れてんだろうな」

「何で？」
「いやいやいやはづきちゃんまさか無自覚だなんてそんな」
・・・・・云々かんぬん、そんな場違いな話合いをそれから数十秒やったところで、お目当てのモノは完成した。
「おー軽い軽い」
「当たり前でしょ。素材なんだと思ってんの？馬鹿なの？死ぬの？」
「うわっ、マジで機嫌わりぃーなマロンちゃん」
「そのうるさい口も縫いつけてあげようか？」
「こぇーなぁ。さてさて、しっかしまぁありがてーことに連中も随分集まってくれたみたいじゃん？とっとと潰しちまおうぜ」
「そのためにわざわざ籠ったんだからそうじゃないと困るよ」
もはやボロキレと化した衣類の代わりに自分の髪を纏い、葉月は一方を指差した。
「問題のアパートは向こう。合図と共にモクズに向かって突貫、暴走野郎を回収するヒット&アウェー。
何があっても足を止めずに全力を持って駆け抜ける」
「聞いた、瑞琉？そっちの情報逐一伝えなさいよ」
通話状態の携帯に声をかけ、智香はイヤホンを差し込んで本体は胸のポケットにしまい込んだ。先に用意しておいた電磁力（マグネット）系能力者のレミからのアドバイスの書かれたメモ用紙を確認するが、何故か渦巻きマークが走り書きのあらゆる箇所に存在しており、よくもまぁこんな説明を書き残したものだという有様だった。
それもしまって今度は巾着を取り出す。中に入っていたのは白い撒菱のような代物だ。テトラポッドのミニチュアと表現すればそのまま当てはまる形で、言うなればこれが彼女の切り札である。
「高いのよね・・・これ」
１つ２５００円。数回限りの消耗品かつ、複数使うのが効果的。
とはいえ、ここぞという時に使えなければ溝に捨てるようなものだ。
「ここからが本当の反撃だ。てめぇら準備はいいか？・・・・・・

んじゃあ・・・GOォ！」

鈴絽の掛声、そして一拍も開けずにゴシャリという嫌な音が響いた。

葉月の髪が進行方向を塞ぐサワガニ、その最も外側にいる3機の脚を纏めて絡めて引きずり込んだ音だ。脚を取られたサワガニは内側にいる仲間を巻き込み、葉月達のところへと勢いをもって接近してくる。

鉄甲が地面との摩擦に火花を散らしながらごちゃごちゃと鉄の塊になっていくカニ団子が、彼らの防壁となっていた仲間の躯と激突する寸前、智香と雪成は葉月に前へと掴み飛ばされる。

しかしその頃には、宙を舞う無防備な2人を狙うはずの反対側のサワガニは鈴絽に引きつけられていた。

どれほど身体強化を施し、常人離れしても葉月と違い鈴絽にとって銃弾は致死的な脅威だ。トランプの小細工にしても銃口をぶらせても銃弾そのものの防御としては働いてくれない。よってどうしても銃器に対しては守りがちになり本来の力を出し切れないのが常なのだが・・・、そんな彼女が弾雨の中暴れ回れる理由、それが葉月の裁縫の成果である。

素材は葉月の髪、それを丁寧に織り込み、何重にも重ね合わせ、同じく髪で縫い合わせてできたのが、今鈴絽の着ている黒い外套。

完全には威力を殺しきれないが、銃弾の貫通はほぼ不可能な規格外の防弾具だ。

銃弾への防御手段を得た彼女は、掛声の後、葉月が髪を引っ張るその後ろで反対側を塞いでいるサワガニの牽制に物陰から飛び出していたのだ。

弾切れを待つまでもなく、凶弾を気にすることもなく直進し、トランプを使う必要もなくなり自由に使える右手を振るい、見た目ほど軽くない機体を横殴りにして吹っ飛ばす。それによって狙い通りに彼らが標的を鈴絽へと定めた時分には、葉月の髪で根こそぎにされた向こうのカニの塊が真ん中の躯をさらに巻き込んで迫ってきて

いるという――――そういう算段。
もちろん衝突前に葉月と鈴絽は棒高跳びのように海老反りで、哀れ底引き網漁のように引きずられていく塊を飛び越え、爆発こそなかったが派手な轟音をバックに綺麗に着地してみせた。
「瑞琉！目標は！？」
『依然屋内を移動中だ！連中倒壊が怖くて中に入れないらしい』
啓吾が移動した場所は虫食いのように穴が開く。そのせいで建っていられなくなった建物に押しつぶされる危険性を彼らは恐れているようだ。
休む暇なく走り出した彼らを新たなサワガニが捕捉した。わずか2回の右左折で追いついてくる辺り、連中も必死である。
今度は智香が手に握ったミニテトラポッドを、形のまんま撒菱としてアスファルトにばら撒く。サワガニがその上を通り過ぎるタイミングで智香が待機状態だった能力を発動させると、撒菱は発電し散らばった各々の間に電気の網を作り出した。地面すれすれにネットを張ったような見た目はそれほど派手ではない電撃だが、狙いが脚の電子系統であればこれほど効率のいい方法はない。
テトラポッド型のその秘密道具はモクズガニの鋏と同じモノから派生している。どちらかと言えば体育祭の時に配られた能力波に弱いペンダントに近いが、詰まるところ『賢者の石』研究の副産物だ。
威力強化と座標強化の効能を持ち、その使用法はばら撒くに留まらない。
火球などをうまく投げつけられないＰＫはこれに能力を込めた上で投げればいいし、狙いが定まらないのならば先に投げておくのも手だ。
転移座標の正確さに欠けるテレポーターの訓練にも使えれば、五感を移すＥＳＰの補助にも効果的だろう。
応用の広さを考えても２５００円の価値はある。
その切り札のお陰で追ってくるサワガニの脚を止めた一行はノンストップで瑞琉の言うポイントに向かう。

その最中、まだ残っているサワガニがしつこく食いついてきたが、その度に後ろからなら智香が前からなら葉月と鈴絽が蹴散らしていった。

集まった時が結局一番接近できていた啓吾の許へ、最後の角を曲がったところで、視界が開ける。今まで住宅街の迷路のような路地を走り回っていた分、開けた道路の開放感が強く感じられた。

火。炎。

再び火事の中心部へと舞い戻ったことで、事件の凄まじさが分かる。

道路と地面を構成していた何かがナメクジの這った後のように赤黒く溶けて線を引いて、啓吾の移動ルートを示していた。しかしそれも所々であって、その大方は建物内へと伸びている。

ぽっかりと穴が空いたコンクリートと鉄筋の壁がそこら中にあり、おそらくは葉月達と同じくモクズに対しても放たれた火球が開けただろう跡が見て取れた。

加えて木製でもなく燃えにくいだろうそれら現代建築物に根を生やしたように絡みつく炎。

辺り一面火の海である。

にも関わらず、消火活動はまともに行われずに、夜空に赤いライトと灯らせる消防ヘリの音は崩れ落ちる瓦礫の音で聞き取れない。

葉月の視界が奥の方に輝く青白い光を捉えた。その近くに黄色いモクズガニの姿もある。

「あれか！」

しかし、すぐさま目標を発見できたのは運がよかったわけではなく、啓吾を包んだ青い炎が遮蔽物のない屋外に出ていることも意味し、

「やべぇーぞ！あいつら回収体制に入りやがった！」

状況はデッドヒートの模様を呈してきた。

「織神これ使え！」

智香達より一足早く彼らまでの距離を縮める葉月ら2人に携帯か

らではなく肉声の朝露瑞琉の声が飛ぶ。道横の火の手を逃れた数少ない物陰に瑞琉と音羽佐奈は身を潜めていたらしい。

彼が指指す先にあるのはこそこそと隠れ続けている間に部品を組み立てた巨人弾槌（タイタン）だ。

銃身約１．５ｍ、黒くごついシルエット。その見た目通りごつい反動を抑えるための三脚もやはりがっしりとした造りをしている。

啓吾との距離は約１０ｍ。連中に追いついても妨害までは間に合わない。そう判断した葉月は有り難くその怪物兵器を拾い、高さを調整するために燃え尽きて鉄フレームを露出した路肩の自動車を蹴り飛ばしてその上に三脚を突き刺した。

手際よく照準を合わせて引き金に手をかけ、

「～～～～ッ！はづきちゃん待っ――――」

そんな智香の制止の声も間に合わずに、巨人弾槌（タイタン）は火を噴き、そして吹っ飛んだ。

葉月が。

巨人弾槌（タイタン）は『従来規格外の火薬量と質量を増量した銃弾を新たに用意し、それに合せて強烈すぎる反動を抑えられるよう砲身を開発した』代物だ。

ではその『強烈すぎる反動を抑えられる』ギミックは何か？硬い地面に火薬で杭を打ち込み固定する三脚架である。

それをしてもなお脳震盪を起こすほどと言われるその反動を固定具なしでモロに食らえばどうなるか。

失敗作故に、使えないモノの知識は乏しい葉月には巨人弾槌（タイタン）の情報がなかったことが災難だった。

加え、瑞流の考えにも誤りがある。

葉月は頑丈ではあるが、その頑丈さと体重は比例していない。

反動の衝撃に耐えられる防御力はあっても、衝撃に踏ん張れるほど体重はなく、表面積の小さな足で、それも靴越しに地面にかじり

つけるような脚力は持っていないのだ。
結果、体重の軽い葉月は固定されずに爆ぜた銃身に叩き飛ばされ、横に建つ燃え盛るアパートへと突っ込んでいった。
「・・・まぁ、大丈夫だろギャグ補正で」
「アレがギャグで済んだら医者は要らないわよ！」
思わず立ち止まってしまった鈴絽の呟きに智香が突っ込む。
問題の方へ向き直ると一応は銃弾が当たったモクズガニ1機がひっくり返っていた。搭乗ポッドを貫通しているところからして、操縦者はひとたまりもなかっただろう。
「う・・・ぅっ」
ここで、今まで気を失っていた岸亮輔が目を醒ました。
「ぅ・・・あ、あれ？」
目まぐるしく変化していった状況にあって、そのほとんどを寝て過ごした彼が現状に戸惑っている中、鈴絽は止めてしまった足を踏み出し、そして踏み留まった。
「おいおいおいおいおいおい・・・あれこっちに近づいてねぇ？」
追いかけていたものにいきなり方向を自分達へと変えるとどうしてか逃げ出したくなるのは何故だろうか？
いや、そもそもモクズガニを突っ込ませたところでできた隙を突いて葉月の髪で絞め落とす手筈だったのに、その肝心の葉月がいないのだ。
考えてみればできることがない。
「しまったぁあああ！！」
頭を抱える一同。智香はすぐさま無意味な瑞流の通話を切って葉月に電話を繋いだ。
「もしもし！はづきちゃん早く戻って！保駿啓吾がこっちに近づいてるっ！」
『分かった。上に昇っ・・・機会を・・・・・・・駄目・・・携・・・が溶そ・・・・・・』

「ッ切れた！」

携帯電話が使い物にならなくなったらしい。平然としした態度の葉月だったが、火事現場に突っ込んだのだ。辺り一面火の海で酸素もほぼない環境で大事に至らないのは彼女だからこそと言っていい。

あまりにも平然とありえないことをやってのける人間が2人もいると大したことがないように思われてしまいそうだが、彼らは逃げ遅れればすぐ死ねるほどギリギリでチキンレースをやっている。

死因としては窒息死、中毒死、焼死、銃弾による脳損壊や臓器損壊に出血死・・・ほかにも数えだしたらキリがない。

気絶していた間に何があったか説明されていないが、それはつまり説明に割く時間さえない切羽詰った状況なのだとも理解できる。

そんな中で気を失ったお荷物の自分を見捨てずに運んでくれた仲間に感謝すると共に、亮輔は自分の無力さに奥歯を噛み締める。

試しに右手をかざすも、目の前に映る青白い炎壁は揺らぎもしなかった。

元々接触でしか能力を発動できない彼がいきなり遠距離での能力発現ができるわけがない。智香が電磁力をその場凌ぎ程度にでも発生させられたのは能力の使い方の問題だったからで、彼の場合は単純に実力が足りないのだ。

左手を見ればどこでそうなったのかぽっきりと折れていた。頭が朦朧として気づかなかったが、体中のあちこちに血が滲んでいる。

使えない左手。使えない自分。

それがあまりにも惨めで腹立たしくて、彼は立ち上がり、他のメンバーがあれこれ言い合っている最中駆け出していた。

遠隔介入が無理でも、左手で直に炎に触れればあるいは。

意識の外にあった彼のあまりにも突発的な行動に反応に遅れた彼らはその考えに気づく。

しかし、その考えにはあまりにも大きな欠陥があるのだ。

腕は瞬時に蒸発するだけで済むだろうが、沸騰した血液は身体を循環するという致命的事実が彼の頭から抜けている。

先に待っているのは血管破裂や脳細胞の死滅のみで、能力を使う暇などあるわけがない。
「・・・ッ馬鹿野郎ォ！」
足と手を伸ばす鈴絽、けれどそれを邪魔するように突如横からモクズガニが現れた。
啓吾が溶かした虫食い穴を逆に通路として利用し、アパートの中から不意をつく形で飛び出してきたのだ。
今まで屋内を頑なに避けていたのは残り４機という安全に啓吾を回収できるフォーメーションを建物崩壊で損なうことを嫌っていたからで、葉月に1体ぶち抜かれた時点で慎重を期する意味はなくなっている。
何より、巨人弾槌（タイタン）は看過できない障害だと認識されたようだった。
ともかくこれで、
「りょーすけ止まれぇぇえええ！！」
彼を止めることができなくなった。

＃

マロングラッセを食べ損ねた。指が削げた。何か吹っ飛んだ。携帯が溶けた。
散々な目にあった葉月はブツブツと呪詛を吐き散らしながら上階を目指していた。
突っ込んだのは3階部分であったが、火の手が酷く視界が開けないこの場所ではいまいち自分の位置も周りの状況も確認できない。
建物の地図を確認がてらエレベーターのありそうな方へと廊下を進み、目的のものを見つけて構内構造を頭に入れた後、上階に上がろうとエレベーターのドアを蹴り飛ばした時点で、うん？と小首を傾げた。
下から火の手が上がってきている。
鉄のドアに隔離され、火の侵入が遅いと思われるこの空洞内に？

と疑問に思ったまま上へと視線を上げると、埃に手を置いたらしき真新しい後が見えた。

ここら辺のアパートは火が上がる前に住人の避難が完了していたはずだ。つまりこんなルートを通るのは燃え広がったこのアパートに侵入しようとしている人物だけである。

嫌な予感がする。

侵入者の移動経路を埃の後から推察し6階だと判断し、どの道向かうつもりだった上階という理由もあって、彼女は屋上ではなく6階フロアに降り立った。

刺さったままの鍵のついたドアからベランダへ、ぶち抜かれた非常用の壁を進んだその先に、抱き合ってうずくまる四十万隆と隅美月を見つける。

「・・・・・・・・・・・・何で葉月がここに?」

その隆の問いに葉月は何とも形容し難い表情で返した。

「・・・・・・それはこっちの台詞だよ」

2人のやり取りに1人ついていけない美月は「え?え?」と交互に目を行き来させている。そんな彼女に隆は助かったんだと声をかけた。

「というかね、最初から助け呼びなよ」

「・・・いや、まぁ・・・そうなんだろうが・・・・・・というか葉月は何やってるんだよ?

何かおかしいだろ、この火事」

「ん、それを何とかするのがお仕事――――ってヤバイ、忘れてた!」

何か自分に置かれている状況とかけ離れたモノを見たせいで忘却してしまった本来の目的を思い出して、ベランダの柵に乗り出す葉月。

保駿啓吾の意識を落とす役割は自分にしかできないのだ。電話も繋がらない状況で下のメンバーはこちらの合図を待っているはずだった。

彼女が下界の様子を見下ろそうとした瞬間、ゴゥンと建物が揺れた。

それが鈴絽に向かってアパート内から突撃したモクズガニによるものだと彼女らには分からなかったが、もっと切迫した事態が彼女らに降りかかる。

「え？」

美月立っていた足場が脆くなっていた上に先の振動で限界を迎え崩れ落ちたのである。

「あぁもう！」

咄嗟に葉月が髪を伸ばすも、

「ひぃぃいいいいお化け嫌ぁあ！」

彼女はそれを避けた。それはもう、見事に。

「ちょっ・・・！何で避けるの！？」

説明しよう、彼女は体育祭で失禁して以来とある髪お化けがトラウマになっているのだ。

もう一度掴もうとする葉月の髪をさらに美月は身体を捻ってかわす。空中でのそんな動き、常人ではなかなかできない芸当なのだが、これこそが岸亮輔の持っていない火事場の馬鹿力というやつである。

そしてついに掴み損ねた彼女の身体は６階という高さから――――亮輔の上に落下した。

「「・・・

ムラグがある鋏の反能力波ユニットが啓吾の絶対防壁に風穴を開けた。そこを狙って元々は美月を助けるために伸ばした髪を滑り込ませる。髪は首に巻きつかずに、髪先を首筋に突き刺した。

どうせ防壁に穴が開くのは鋏の残っている一瞬だけ。電力が切れればその瞬間穴は塞がり髪は切れる。意識を落とすだけの時間を稼げるとは思えない。

そのことに思い当たった時点で葉月は、絞め落とすのではなく注入すれば効果の出る麻酔という手段に切り替えて、用意しておいたのだ。

いつぞや沖縄で自分に対して使われた神経麻痺毒を再現したモノを。

どうやらその効果が現れたらしく、厚く熱かった炎の壁は消え去り、当の啓吾は毒の激痛にのた打ち回っているが、まぁどうでもいい話だった。

いやむしろ気が晴れたという意味では葉月的に実に意義のあるリアクションである。

保護するつもりで今まで追っていた対象が激痛にゴロゴロと転がっている様に何とも締まらないもやもやとした気持ちになる鈴絽達。全くもって締まらない有様だが、しかし、それでも、

「状況、終了・・・だな」

これにて事件は終わったらしい。

＃

「よぉーし、後はどっかでこそこそ様子を窺ってる風(ふう)に任せようぜ。紹介してやるよ。どうせこれからお尋ね者だろ？」

「はぁ、助かるけど・・・まず医者か医療能力者関係当たらないと・・・りょうすけがあれじゃあね」

「あー、ろっ骨折れてるよな、あれ。肺に刺さってんのか？腕は単純骨折みたいだけど、体に刺さった鉄片抜かないとヤバイのな。

まぁ、それこそ朝空風々の人脈に期待しようぜ」
「後ろ半分あんたのせいだけどな・・・」
「はぁーあ、これで高給取りな仕事ともおさらばだな」
激痛によって保駿啓吾が気絶した後、そんなやり取りをして裏方メンバー達は去っていった。
事実上の雇い主の意向に背いた以上、彼らに居場所はない。
元はと言えば、織神葉月という人間を監視・調整するために用意されたメンバーだ。
葉月の能力と相性の良いＰＫ２人に、能力に介入できる抑え役、監視役の幽体離脱に能力の方向性が似通っている形態変身（トランスフォーマー）。
武力集団とは言い難いが、対葉月用の裏方構成員達。
そんな彼らと葉月との関係は大して強くはなく、『トリッキーズ』、そんな名称を自称していた彼らは今回をもって解散。
ただ巻き込まれ続けただけの葉月は何ら感慨も抱かずに彼らの背中を見送ったのである。

そうして、その名残として残った駅ビルの、主をなくした秘密基地は散乱していたゲーム類を綺麗さっぱり吐き出して、代わりに整然と並ぶアルコールを並べた保管庫へと様変わりしていた。
かつてゲーマー達が携帯ゲーム機を突き合わせて囲んでいたテーブルにマロングラッセの箱を大量に積み上げた葉月が、並々とワインをグラスに注いで超薄層テレビ（ペーパー・ウィンドウ）に目をやり、酷く上機嫌で鼻歌交じりに広げられた栗洋菓子やチーズ、その他サキイカや柿の種に手を伸ばす。
それが、今の秘密基地の日常で――――、

世界というのはどれほど緩やかに思えてもどこかしら変わっていくもので、何にしても移ろい行くその流れを変えることはできない。
枯れ葉を集めた焚き火騒ぎも鎮火して、急かされるように秋は過

ぎ去り季節は冬。
　白と黒、そして灰色の色落ちた世界にしんしんと冷たい雪が舞い堕ちる。

第５２話ー　火中栗拾。ーＬｕｃｋｙ　Ｇｉｒｌー（後書き）

これを書いてる最中ずっとＹｏｕＴｕｂｅで『双子はプリキュア』を聞いてました（笑）。
予定よりかなり遅れてしまいましたが、『エキ日々。』秋、放火魔編改め焚き火編終了です。

そして――――次からようやく物語の本題に入れます。
戦闘シーンばかりで作者が食傷気味ですが、やっとやりたい話に入れるので気合入れてきます。
第２章最終編突入、今まで付箋の如く貼りまくった伏線の回収に伴い、やりたかったアンケートも実施しました。

ズバリ、葉月の元ネタは誰か？　です。

ずっとやりたかったんですが、答え合わせできるところまで話が進んでなくてずっと我慢してました。
ついに解禁！
尋常じゃない作者のテンションがお伝えできなくて残念です。
もしお時間があればご参加くださいませ。

第５３話－　降誕前夜。－Ｃｏｏｌ　Ａｎｇｅｌ－（前書き）

短い、そして温い。
こんな感じで大丈夫、か……？

第５３話－　降誕前夜。－Ｃｏｏｌ　Ａｎｇｅｌ－

――――朝、最後のクリオネが死んでいるのを見つけた。

うつ伏せになって厚い雲に覆われた空を眺めていると、見上げているのではなく実は見下ろしているのではないかという錯覚を覚える。

寒空に浮かぶ厚く灰色の雲は太陽の存在を覆い隠すが、僅かな隙間からその陽を漏らして自らの陰影を濃くする。

雲のうねりや襞（ひだ）、そして影によって演出された奥行きを見て、ふと珊瑚礁のようだと思った。

透明度の高い海水の中、浅い海底に広がる珊瑚礁のそれに色がないことを除けばよく似ている。

ならばむしろ自分の方が宙に浮かんでいて、水中に屈折されながらも揺らめく陽の光は自分の後ろから差し込んでいるのではないかと夢想する。

焦点の合わない視界の端には実際煌く白色が映っていて、あながちその想像は悪くはない線を行っているだろう。

けれど、そんな錯覚は自らに向かって降り注ぐ雪によって否定される。降り積もる白銀に反射する陽の光在っての夢想は同じ雪によって否定される・・・その皮肉さが気に入って顔を綻ばせた。

・・・・・そんな静かな時がしばらく、

「なーにやってるの？」

静寂を破ってかかった声を契機にして現実に意識を戻し上半身を起こした。その際、寝転がっていた間に身体の上へ積った雪が振り落とされる。埋もれた足を掘り起こして立ち上がった。

声のした方には誉ちゃんがいて、こっちに向かって歩いてきていた。

場所は中学校の屋上。彼女と2人きりというシチュエーションはこの場所がほとんどだ。
「ちょっと暇つぶし。バイトまで時間があるから」
まずは彼女の問いに答えて、それから訊く。
「そっちは？」
「グループの集まりがあったの。で、その帰りに寄ってみたらはづちゃんが居たわけ」
予知夢系のグループに集まってまでする話題があるのか疑問に思うも口には出さずに、脇を過ぎていった彼女を追って柵に身体をもたれかける。
校庭を見下ろせば積った雪で雪合戦や雪だるま作りを行っている生徒がかなりの数残っていた。
昼時だが、今日は終業式だったため学校としてはすでに解散しているのだけど、やはりというべきか大多数がまだ学園に残っているらしい。
「毎年っちゃあ毎年だから有り難味が減っちゃうけど、やっぱり雪っていいよねぇ」
１２月２４日。学園都市では毎年この日雪が降る。神戸だろうが沖縄だろうが学園都市限定で、天候操作に青春を捧げる超能力者達がホワイトクリスマスを演出するのだ。
どこで水蒸気を発生させて、どのように学園に運び、どうやって冷気をぶつけるのか。裏ではそれらの綿密な計算と計画がそれこそ青春映画のようなノリで展開されているのだろうけれど、そんな情熱に溢れた熱い話はこの際考えないことにして、とにかく西日本太平洋側では珍しい大雪が学園にこんこんと降り、屋上から眺める風景は一面白銀に染まっていた。
「知ってる？今日から年末までイベント尽くしだって」
「学園のネットチャンネルがサイトにできてるらしいね。『今年の煩悩１０８カミングアウト』とか『年末カウントダウン』とかそんな番組がどうとか」

騒ぐこと、目立つことが大好きな学園都市らしい番組内容ではあるけれど、民間放送も年末はこんなものなのだったろうか？
考えてみればテレビというものにいまいち自分が興味がないことに気がついた。
「カウントダウンは実際見に行った方が楽しいらしいよ？臨場感があるってさ。
火に飛び込んだり水で打ち上がったりスカイダイビングしたり学園１つだけでもいっぱいあるから毎年違う場所行けるし」
確かｎ新年を親戚と過ごさない生徒にとっては暇を潰せる有り難い話だ。
まぁ、ネットテレビはともかくイベントに参加しようとは思わないけど。
「カウントダウンは別として他のイベントもそんな命知らず野郎万歳な感じなの？」
「いやいや普通のパーティーとかもあるよ？ほら、隆君が行くのだってその１つのはずだし」
「・・・あぁ、美月さんと行くやつね。あれも学園主催なんだ。高級料理がどうとか言ってたけど」
「料理なんて学園都市に通ってる時点で富裕層なんだから今更な話よねー。あのリア充め・・・」
「リア・・・？確かにクラスの中で一番青春してるよね」
「そーゆーはづちゃんだってどうなの？今日は釧君とこ行くの？」
「うん？いや、別にいつも行ってるし。特別予定はないよ」
「くそぅ！自覚がないなんて・・・なんて贅沢な！」
「はぁ・・・？」
何やら彼女は自分で振って自分の地雷を踏んだらしく、１人ガーッ！と頭を抱えたり掻き毟ったりと悶え始め、
「いーもん、私は１人で枕濡らしてるもん。夢の中なら彼氏いるもん」
最終的に捨て台詞らしき台詞を吐いて去っていった。きてから大

して時間も経っていない。一体何をしにきたのだろうか？
訪問者がいなくなり、屋上は再び静寂に包まれる。
見上げれば変わらず降る牡丹雪。
あぁ、珊瑚の産卵と捉えればあるいは・・・・・・。
暇を持て余した思考が再び天と地を入れ替えた。

＃

午後６時半、親父さんの気遣いにより早めにバイトを終えた僕は前々から手に入れたかった書籍をコンビニで受け取ってから帰路についた。
それほど距離があるわけではないけど、どうせ予定もないのだから急く必要もないとネットで購入したその本に目を通すべく包装紙を開けてみる。
『軟体動物の解剖学』。繁華エリアの大型書店で『生物』や『解剖学』のジャンルから同じ様な本を何冊が見繕ってはみたものの、やはりというか何というか・・・・・・僕のような用途で使うおうと思う人間はいないため欲しい情報は手に入らず、ネットで載っていそうな文献を探した結果これに行きついた。
先代変容の資料が手に入ったとはいえ、結局は独学になりがちな形骸変容（メタモルフォーゼ）今冬の自主課題の教本だ。
タイトルからしてそのままだし、中を見る分、他の参考文献と合わせれば事足りるだろうという感触もある。すでに大方形にはなっているので、実用化さえできれば完成だ。
髪の方はそれなりに成功した攻守手段だけれど、能力に愚直に頼りっきりでスマートな方法ではないし、極細の髪檻は逆に自分の運動能力を制限する上にレギオン相手には効果が薄かった。
身体能力を生かした白兵戦は近距離かつ少数戦でなければキツイ。複数相手の主要手段がこれだけというのは隙が多すぎる。
まぁ、要するに大火力の攻撃法が欲しいのだ。元々派手な能力が

欲しかっただけにその憧れは強い。ドカンバカンと相手を蹴散らす感じの戦闘がしたい。

１つなくもないのだけど隠し玉だから普段は使えないしなぁ。今回のアプローチが結果としてちゃんと実ればいいのだけど。

どうせ頭の中に入れれば忘れないので、使い潰すつもりでピックアップしたページの端を折っていく。特に欲しかった図のページは破って財布の中にしまった。

はい終了。通勤電車内の３０分学習も真っ青な帰路3分勉強法である。

これだけのために３０００円も取られるのだから専門書は高い買い物だ。

ほぼ用を成してしまった本を鞄にしまって、今度はコンビニで買ったホットレモンを取り出した。

身体強化のお陰で大して意味はないのだけど、今日になっていきなり降りだした雪に感覚的に寒くなった気がするのだろう。

ミニペットボトルを手の平でころころと転がし、まだ落ちてくる雪を仰ぎながら歩けば、数分もしない内にボロアパートに辿り着いた。

階段前のポストから郵便物を回収して7階まで上がる。疲れはしないが面倒くさいのは変わらないものだ。いい加減エレベーターのあるアパートか低い階に引っ越そうか？

手を変容させて開けるという横着な手段で解錠して部屋に入り、身体についた雪を玄関で払ってからあがる。電気ケトルのスイッチを入れてテーブルに腰を下ろした。酷く電圧を食う家電沸騰器がその特有の音を発し始めたのをぼうっと聞いていたけれど、ふと時間の無駄だと気がついた。

沸き上がる間に郵便物を確認しよう。

『今年もやります！超能力徹底議論』、『能力パフォーマンス、就職活動に是非』、『今年の煩悩１０８、あなたの煩悩を生放送中受け付けます』・・・。

年末年始の学園イベントの勧誘がわんさと入って季節感を感じさせる。あとはピザや寿司の宅配サービスなどのチラシ、それから――

「・・・・・ふむ」

あまりにもシンプルな茶封筒。

Ａ４用紙三つ折りにして入れるような、いわゆる定形郵便用の封筒でその割には紙が分厚い。無骨ながらも皺や折れがない丁寧な仕上がりになっていてみすぼらしさはなく、封するのにも配達するのにも気を使ったのがよく分かる。そんな極上の一品。

・・・とまぁ無駄に多い表現をしてみたけれど、つまりはシンプルここに極まりといった感じの代物だった。

何せ宛名も宛先も差出人も、当然ながら切手も消印もない。ここまでくるといっそ清々しいぐらいだ。

無論こんな語らずとも自己主張の激しい封筒が誰からのものかなんてことは分かり切っている。

岩男こと内海岱斉。

わざわざここまできてポストに入れていったのだろう。

封を切って中身を取り出すと、入っていたのはたった1枚の紙切れだった。通常の白い用紙にプリントアウトされたパソコンの文字。

２行だけのあまりにもそっけない文章に目を走らせる。

「・・・・・・・・・・・・」

大して感慨も沸かない内容を数分吟味して、今後の自分の趣旨を再確認する。

気づくとケトルのスイッチが跳ね上がっていて湯気を上げていた。

立ちあがる。わざわざ沸かしたお湯をそのままに、今度はクローゼットにしまってあったコートを取って部屋を出た。

／

ピンポーン。

テレビ以外の音源のない広すぎる部屋にそんな軽いインターホンの電子音が響いた。
ドアスコープを覗けば、ちょこんとニット帽を頭に乗せた丸い双眸がこちらを見ている。扉を開けるとダッフルコートを身に纏った葉月がそこに立っていた。
「あぁ、きたんだ」
予告なしの葉月の訪問は別に珍しいことじゃない。
「うん、なんとお土産もあります」
言って右手を持ち上げる彼女の手にはケーキだろうと思われる箱が握られていた。

金色で店の名前を箔押ししてある白い箱に入っていたのは苺のショート―ケーキだった。
ポピュラーで無難なチョイスだが、そもそもクリームが苦手な葉月の好みではないし、特に俺の好みというわけでもない。
どうしてこのチョイスを選んだのだろう？
そんな疑問が顔に出ていたらしい、
「流石に最近栗とか食べすぎたからシンプルなのをね」
そう言って葉月は紅茶にブランデーを垂らして2人分のティーカップを皿に添えた。
ケーキと紅茶、他には高級そうな缶クッキー。ちょっとしたお茶会としては十分だろう。
準備を終えて向かい合って座る。中学に上がってからは他のクラスメートも参加する機会も多くなったが、その前までは大抵こうして2人で駄弁っていたものだった。
「そういえば、タカはうまくやってるのかな・・・？」
言われれば隆は今頃美月さんとデートのはずだ。
あの2人会った当時はそうでもなかったのに、ここ数カ月でいきなり進展したんだよな。

葉月はどうもその辺りの事情を知っているようだけど教えてくれない。
友人のいまいち見えてこない恋愛事情にもやもやとしている俺とは違い葉月は興味がないらしい。
「あぁ・・・、苺があれば案外甘くても・・・」
「・・・・・・」
上に乗っている苺を器用に分割して1口1口に割り当てようとしていた。
その無邪気な様子を見て、それから自分達の状況を鑑みてみる。
クリスマス、ケーキ、2人きり。
デートらしいシチュエーションというならば、こっちも同じなのだが・・・、
「葉月、今日が何の日か知ってるよな?」
「うん?クリスマス・イヴだよね?」
この通りである。
質問の意図が読み取れてない辺り全くの無自覚なのだろう。
この話はここまでにしよう。自分がダメージを受けるだけだ。
紅茶に1口口をつけてからクッキーを摘む。これは確か誰かからのお歳暮だったような気がするが誰からだっただろうか?
「クリスマス・・・クリスマス・・・?」
さっきの解答がどうやら間違いらしいとは感づいた葉月が何やらブツブツ考えていた。
・・・・・これ以上考えさせたら墓穴を掘りそうだ。
「科が言ってたけど、今年のカウントダウンスカイダイビングは人間花火やるらしいな」
「ライト持って陣形組んで?でも、そもそも真夜中のスカイダイビングなんてそうでもしないと面白くないよね」
「今までは真っ暗闇の中飛んだり落ちたりのスリルを楽しむ趣向だったとか・・・。
流石に危険だとかで去年が最後になって、今年から新しくそうい

う試みをやるって言うんで、必要以上に人員が割かれてるんだと」
「ああ、それで嘆いてたんだ彼女。『イベント行けない～』とか何とか」
「他には誉もか？何か色々忙しいことになるとかぼやいてた」
「へぇ・・・？放課後グループで集まってたのは聞いたけど、予知能力者のイベントなんてあるの？」
確かに。言われて気がついた。占いなんて地味な出し物がイベントになるとは思えない。
ならば他にどんな応用が予知能力に可能なのかと言われると、答えに困る。
記憶の中からイベントの一覧を思い出そうとするが当てはまりそうなものは浮かんでこない。
「さぁ・・・なかったと思う」
葉月自身も思いつかないらしく、だよねぇと呟いた。
これまた大して興味もなかったのかすでに意識をクッキーに移していた彼女は横着にもケーキ用のフォークでクッキーを刺そうとして――――固く脆い洋菓子は当然ながら刺した傍から砕けた。
「・・・・・・」
さらにその砕けた欠片に突き刺そうとして砕き、
「・・・・・・っ！」
また砕き、
「～～～～ッ！」
やはり砕き・・・・・・最終的にクッキーは粉々に。
眉を寄せてしかめっ面をする彼女は笑いを堪えている俺に視線を寄こす。
「・・・・・笑わないように」
ごめん。それ無理だ。
「笑わない！」
・・・一通り笑った後、目の前にはふくれっ面をした葉月様がご降臨されていた。

彼女の両手が伸びてきて頬を思いっきり抓られる。
「ひはぃひはぃ！」
ただでさえ強い握力で頬肉を捻られて悲鳴を上げる俺に構わず指の力はさらに増していく。
「ほへんなしゃい、おりぇがわりゅかったから！」
謝るも力が弱まる気配はなく、どころか、
「そうそう・・・」
痛いを通り越して感覚がなくなってきたというのに、葉月はこの状況で別の話を振るつもりらしい。
まだ続くお仕置きに旋律を抱かざる負えない俺に、けれど葉月は妙に平坦な口調で言った。
「クリオネ、死んじゃったんだよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「今度、買ってくれる？」
そのお願いに頷くと、頬を抓っていた手は離れていった。
改めてフォークを持ち直した葉月は半分ほど残っていたケーキをさっきより早いペースで食べ始めた。
今度は刺さずにフォークの腹に乗せるようにしてクッキーを運び、紅茶に浸したり、皿に残ったクリームをつけたりと変化を楽しんでいる。
親の相続を期待していない委員長がついに法人関係の法律書を読み始めていたとか、同じ様に保健委員の香魚子も傷害事件に関する資料を集めていたとか。
その後もしばらく他愛のない会話に花が咲いて、用意したお茶とお菓子がなくなったところで葉月は席を立った。
「そろそろ帰るよ」
時間を確認すると午後9時。遅くもないが早くもない時間帯だ。
今更泊まることを躊躇するとも思えない。明日から冬休みであることを考えても、帰宅するのは面倒ではないだろうか？
そういえばくるにしても今日は少し遅かった・・・。

本当はくるつもりはなかったんじゃないだろうか？
何かしらあって予定を変えた？そんな疑問が無意識に口を開かせていた。
「葉月、今日は何できたんだ？」
その脈略のない質問に首を傾げつつ、彼女は、
「・・・うーん・・・・・・さぁ？」
答えを自分でも得ていないのか少し困ったような顔をしてそう言い、
「じゃあね」
振り向き際に小さく手を振った。

／

――――12／25　13：00　臼田物産第2倉庫
1月が待つ

第５３話－　降誕前夜。－Ｃｏｏｌ　Ａｎｇｅｌ－（後書き）

またかなり遅れてしまった感があります。すみません。

葉月アンケートなのですが、

『性格的ではなく能力的な観点でみた』

元ネタでお願いします。

じゃないと絞るのが（正否判断的にも）難しいかなと。

アンケート自体は１日で複数回答制限と解消されますし、

今後の展開でヒントらしきものも出ると思うので、思いついたりしたら気軽に答えていただければ幸いです。

第５４話－　万可統一。－Ｇａｒｄｅｎ　ｏｆ　Ｅｄｅｎ－（前書き）

遅れてすみません。
まさかの作中と現実が同日という投稿になりました！
ええぇ、２年ほど回りに回って。

そしていつもの如く章の最終編なので『欠片－２　虚夢。－Ｈｅｒ　Ｄｒｅａｍ－』あと『第４話－　心理戦。－ＥＳＰ－』辺りを読み直して頂いた方がいいかもしれません。
第４話に関しては約２年越しの伏線回収ですよ。もはや賞味期限切れてますよね。

第５４話ー　万可統一。ーＧａｒｄｅｎ　ｏｆ　Ｅｄｅｎー

自由を許されない箱の内で天を仰ぐ行為には虚しさしかない。
ズリズリと身を削られる焦燥感を感じながらも逃れられない監獄。
濃厚な負の空気の掻き混ざるヌルヌルとした感触が血管を守るにしては薄すぎる首筋の皮膜を舐める。
閉じ開きしすぎた瞳孔が定位置を忘れて、目に映る周りの景色はいつでもぼやけたまま。
真綿で首を絞められる残酷な感覚の日々は、精神を蝕んでまともに息すらできはしないほど。
建物の外。
グランドではしゃぎ回る同類の姿を目で追うも、その焦点は決して合わせない。
友達と呼称した１人が何時の間にか消えていることに気づいたその日から、

――――私は彼らを識別することを止めた。

／

日をまたぎ振り続ける雪は厚く積もり、銀世界というには少し不格好な凹凸のある白い布地を学園に広げる。
調整を誤ってか例年より少しばかり振りすぎた雪が交通を麻痺させ、学園が力を入れて例年より盛り上がったクリスマスイベントに集まった人々は多くが未だ会場で騒いでいる。
住宅街に続く、学生寮の多いそのエリアにイベント会場は集中し、対してその反対方向に広がる研究所群や倉庫の固まったエリアは時期が時期だけに人気はない。
臼田物産第２倉庫。

その倉庫はそんなエリア内でもとりわけ静かに佇んでいる巨大倉庫で、研究所が取り寄せた材料の余りを保管する物置としての役割しか割り当てられていない。故にこんな日に人が訪れる心配もなく、周りの環境も含めてここ以上に隠密性に優れている舞台はない。

１２月２５日。イヴを超えてついに降誕当日を迎えたその日、倉庫一帯は外界から切り離された。

精神的にもそんな場所を気にかける者などなく、物理的にも武力行使に抗える者もない。

そこへ辿りつける人物がいるとすれば、それは招かれたたった２人の客人だけ。１人目はすでに席に着き、もう１人は思いの外準備に手間取っているらしくまだ来ていない。

相変わらず空は雲に覆われ僅かに陽を漏らすに留まっている。思えば最も太陽が近づくこの季節にその姿も温もりも感じられないというのは皮肉めいてはいないだろうか？

風は強くないが感覚が麻痺するぐらいには外は寒い。こんな日に体が鈍るなんて状態は許しがたく、そういう意味では場所が屋内だったのは有り難い。

１月、そう呼ばれる彼女は空を遮る天井を見上げながらそんなことを思い、首を元の位置に戻して着込んだジャケットのボタンを留めるか外すか気にし始めた。ずっとポケットに入れていた手を外に出した瞬間かじかんで痛さを覚える。元より細い体躯だがここ最近は特に酷い。寒さに耐えるだけの血の巡りすらままならない指先を見つめてからボタンをしっかりと留める。

落ち着かず今度はうねる髪の毛を手で弄くる。頑固な跳っ毛や癖毛のせいでうまく伸ばせない髪はショートにせざるを得ず、漆黒の髪を伸ばすのが彼女の秘かな願いだ。

――――と、そこで、ガコンッという音が倉庫内の空気をかき交ぜた。

静かな内界故にその音は大きく響き、その後の来訪者が足音もまた反響してくる。

音の主は大して気負った風もなく、音の間隔はマイペースなものだった。それが彼女を焦れさせる。

まだかまだかと待つ行為は、かえって感覚を狂わすものだ。どれほどの歩数を数えたのか分からなくなった辺りで、足音はカツンと軽快なピリオドを床に打って止まった。

倉庫に音が生まれてから瞳を閉じていた彼女は目を開き、見据える。

ほんの１５ｍほどの眼前に立つ織神葉月を。

ショートパンツを穿いているのか太腿を隠すダッフルコートの裾からは素足が覗き、この寒空の中マフラーもつけていない。

大方動きやすさを重視したのだろうが、そんな発想で衣類を選べる時点で彼女らの格差は明らかだ。

彼女と違い彼女の髪は痛みもせず、後で団子結びできるほど長く、長くできるほど癖がない。同じく薬物投与の副作用で節々にガタがきていたはずの彼女の身体は健康そのもので、この気温の中寒さなど感じてはいないのだろう。

目の前にいる８月は彼女の持っていないモノを、手放したモノを全て持っている――――。

それが妬ましくて、彼女は心底楽しそうに言った。

「よぅ、折り紙の８月。オレの名前は・・・はん、お前風に言ってやるなら『色紙の１月』ってとこか」

まぁ、呼ばれてねーけどと彼女は付けたし、彼女は興味がなさそうに胡乱な視線を彼女に寄越した。

「色神睦月（しきがみむつき）ね。ふぅん・・・・・機構が造ってたもう１つは君か。で？ここに呼ばれたわけを訊きたいんだけど？僕と違って君はどうやら事情を把握してるようだし」

不敵に笑う睦月に葉月はそう判断し、葉月の台詞に睦月は自分がアドバンテージを持っていると判断する。反発はしていないが協力的でない葉月と違い、積極的に計画に関わっている彼女の持つ優位性はしっかり働いているようだ。

ほんの少しだけ心に余裕ができた彼女は、一息吐いて、もう一度彼女に目をやった。

健康で幼いながら女性的な身体、血の巡りの良い白い肌、艶やかに長く伸びる黒髪。

それはまさしく正常の象徴で、彼女にとって平穏の偶像だ。

今まで諦め続け、夢見てきたモノを手にするために、まずはソレを手に入れなければならない。

だから、それらを取り戻すべく彼女、色神睦月は宣言した。

「オレの能力は内潜変容（メタモルフォーゼ）。お前の形骸変容（メタモルフォーゼ）を貰いにきた」

その言葉と共に小さな火が彼女の右手の平に灯る。それは橙色をした灯火ほどの小さな火球だったが、一瞬で色みを青白く変えると指に纏わりつく紫電になった。光速で暴れ回る電流の動きが緩慢になったかと思えば今度は水流となって手から零れ落ち地面を濡らす。

なるほど、と葉月は微かに頷いて内潜変容（メタモルフォーゼ）の意味を理解する。

発火、発電ときて発水。

多重能力は決して珍しいモノではないが、ここまで系統の離れたモノを扱える能力者は少ない。それも、２つ以上となれば尚更。

例えば、多くの発火能力者（パイロキネシス）は発火と発破の両方を使えるし、発電系能力者にしても電波、電磁、電撃とタイプ別にさらに系統が枝分かれはするが、それらをオールマイティーに使いこなす能力者を誰もが目指す。

そもそも生物の系統樹じゃあるまいしＤＮＡ配列などの根拠ある精密な分類ができているわけがないのだ。方向性や成長過程によってすら名称は左右される。

そんな大雑把な分類であるからこそ、多重してるかのように思える能力者はいくらでもいるし、ＰＫとＥＳＰという植物と動物ほどにかけ離れた能力を操る真正の多重能力者もいる。

とはいえ、それは本人の素質によるところが大きいし、何より増やしたいと思って増やせるモノではない。

けれど彼女は『貰いにきた』と言った。

好きな能力を手に入れる。それができる能力はただ1つ、原始素能（ホワイトノート）だけだ。

内潜変容（メタモルフォーゼ）――――名前同様に形骸変容（メタモルフォーゼ）と対応させてそう呼んでいるのだろうが、その内実は原始素能（ホワイトノート）と変わらないモノだろう。

ただし、原始素能（ホワイトノート）とは手にできる能力数の制限に違うがあるのだとも推測できる。でなければ潜在能力を変容（メタモルフォーゼ）するという大仰な名称を冠することはできまい。

それを理解し、彼女の台詞を理解しても葉月は大して何も感じなかったのか黙ったままだった。そんな反応の薄い彼女に睦月は少し拗ねたような顔をしたが、気を取り直して語り始める。

「なぁ、オリガミ。オマエはこの学園をどう思う？学園都市システム・・・30年ほど前提唱・採用されたこのシステムだが、実際のところ採用する価値があったと思うか？

確かに能力者同士の技術共有は能力の向上に役立ってるだろーよ。お陰で日本は世界に見る超能力大国だ。

けど、能力開発を閉鎖的な研究所でやるってのにもメリットがないわけじゃあない。ただでさえSPSは成分不明の薬だし、能力者研究に人権侵害を訴える連中は多いんだ。

SPS薬の使用権を研究所が独占できれば、非人道的な研究にも成りたがりはサインするさ。

超能力なんて新技術に沸いた4、50年前ならともかく、今じゃ能力研究は経済的貢献がなければ成り立たねー。長いスパンを要する”教育”より”研究”の方が効率的だ。

なら何故、この国は学園システムを取ったのか？」

「情報プール・・・って言いたいんでしょ？」

実際には『情報プール』などという言葉はないが、近いものとして『遺伝子プール』というモノがある。

それは生物学の用語であり、その意味するところを誤解を恐れずに言えば、とある生物の集団全体を遺伝情報を溜めておくプールに見立てて、そこに色んな遺伝子を貯蔵しているという考え方だ。

情報プール、彼女がそう表現したのは『学園』という集団が超能力という『情報』を『貯蓄（プール）』していること指している。

もちろん学園システムは彼が言った通り元々能力者の技術情報をストックする場所としての意味合いを与えられているので、それ自体は新しい見方というわけではない。

だが、能力を入力（インストール）する能力者の存在を最初か計算に入れていたとすればその意味合いは違ってくる。

超能力そのものをストックし続ける学園は、いつくるか分からない収穫祭に備えて高位能力者を実らせ続ける苗床だ。

能力の素質（たね）を貰い受けることができると言っても、それには元になる生きた能力者の存在が不可欠であり、冷凍保存するわけにもいかない超能力は生命と同じく生殖によって伝えていくのが最も効率的な手段となる。

遺伝子さながら世代を超えて能力を伝えていくために用意された学園は、超能力の遺伝プールと言えるだろう。

研究所の閉鎖的研究では絶対に得られない学園都市システムのメリットはそこにある。

その通り、と言い、そして睦月は続ける。

「学園だけじゃない。至極追探組織（コード・レッド）は一体何を創ろうとしていた？

三重録音九法研究所は番外。日常的な赤は持続と自動性で能力補助し、箍の外れた（フォールアウト）発条は各組織で使えなくなった生体サンプルを扱う。朝代研究所は医療能力者を作り出すことが目的だった。それじゃあ、古き良き風景（クラシック・ビュー）は？神々の輪笑は？一体どんな役割を割り当てられてた？ＥＳＰ追究所は全知を司り、そして我らが万可は何を司る？

連中は２つの駒を用意した。１つは織神（折紙）、変幻自在の生命樹。１つは色神（色紙）、自由自在の知恵の樹。形と色の変幻自在が司るのは万能だ。

『万可統一』。連中の目的は隠しもせずに掲げられてる。

形骸変容（メタモルフォーゼ）だけでは足りない同一同在者（ドッペルゲンガー）のピースは何か？

鍵（ヒント）は超能力が自己証明（アイデンティティー）の1つであるこの学園都市で形骸変容（メタモルフォーゼ）だけでは同一者を名乗れないことで、答えは内潜変容（オレ）だよ。

けれど、何でも知ってて何でもできるソレを同一同在者（ドッペルゲンガー）とは普通呼ばない。

同一同在者（ドッペルゲンガー）は蔑称なのさ。

全知全能（カミサマ）――連中はそれをずっと待っていた。

御籤の『神』籤、織『神』に色『神』。特にこの三つはその要だと言っていいわけだが・・・。

なぁ、オリガミ。全知を司る現界把握はともかく、何でお前の形骸変容（メタモルフォーゼ）が何十年と研究され続けるほど重要視されてると思う？」

そう言われて葉月が思い出すのは何時ぞやの御籤唯詠と交わした会話だ。

彼女は『情報を演算する脳には限界がある』から『人の脳では完全なる未来視は不可』だと言った。

加えて『脳の構造を変えれば、人間とは違う・・・特に現存しないような思考法を取れば』とも、そして読心術攻略（テレパシー）のために脳の構造を変えた葉月に彼女は嬉しそうに笑って呟いたのだ。『そうも簡単に人をやめれるなんて、君壊れてるよ』と。

「人間の脳では能力全てを使いこなせないから・・・・・・でしょ？」

「ごめーとー。学園中に数多ある能力者はソフトだとすれば、オレはそれらを操るOSだ。けれど哀しいかな、元から持ってるハードではスペックが足りないし、形骸変容（メタモルフォーゼ）以上に人体に無理強いしてる内潜変容（メタモルフォーゼ）は寿命が短い。だからどうしても高性能なハードが要る」

だから、

「現界把握は手に入れた。次はオマエを消費する番だ」

何より自分のため彼女はここに立つ。

対してただ呼ばれただけの葉月は、今まで大人しく彼女の演説を聞いていた葉月は、睦月のその台詞にようやく二重の瞼を見開いた。

「へぇ・・・」

けれどそれは自分への死刑宣告に対する興味ではなく、
「御籤唯詠を消費した？」
ただその一点が琴線に触れたからで、
「ぁん？」
睦月は今の今まで表情が乏しかったはずの葉月が口角を吊りあげたことに怖気を感じた。
搾取する側の自分とただ搾取される側である彼女との間にあるはずの絶対的優位性が、まるで働いていない。そんな、嫌な予感。
それを拭うべく、睦月は口を動かす。
「アイツは大して戦闘能力が高くなかったから簡単だったぜ？動きを封じてスタンガンを取り上げちまえば何もできねぇ。あとは――」
「スタンガンで心臓でも感電させた？」
自分の台詞を、それも推測できるとは思えない台詞を取られて今度こそ睦月は笑みを消した。
「どうして君は数ある選択肢の中からわざわざスタンガンを使った？彼女がそれを持ってたから？皮肉のつもりで？
彼女がスタンガンを武器として使っていたから君はそれを使ったのか、君がそうすると分かっていたから彼女はスタンガンを持ち歩いていたのか、さてどちらなんだろうね？
ね？ね？ね？・・・君、まさか彼女が酔狂であんなファッションをしてたとでも思ってたの――――？」
葉月は彼女に構わず今度は自分がしゃべる番とばかりにさらにまくし立てる。
「君のお陰で心臓の発信機（チップ）は破壊され」
故意に壊せば気取られるからこそ、彼女にとってその時こそ最大のチャンスだった。
「加えて役割を終えた彼女の監視は薄くなる」
後の問題は徊視蜘蛛と生の監視だけ。
「青に統一されたフード付きのフェザーコートとジーンズ、茶髪の

三つ編みに右目の眼帯。人間の目は嫌でもそれを目印にしてしまうが故に」

監視の目が捉えるのは彼女自身ではなく、

「すり替えは、いともたやすい。

トイレで入ってきた利用者にお金を握らせて服を着替える。眼帯で人相は隠れ、フードから切り取った三つ編みを垂らせば”御籤唯詠”のできあがりだ。

あとはバッサリ切った髪をヘアカラースプレーで黒く戻して、堂々と学園都市から去ればいい」

『あの系統は代々他にちょっかいを出す』と内海岱斉は言い、『今に始まったことでない』からこそ『その度に過剰反応を示す必要はない』と至極追探組織はそれを黙認していた。

それこそが、彼らのつけ入る隙だ。

自嘲試作品（プロトタイプ）は『その内今居る施設を出るつもりだ』と言ったが、彼は朝空風々の目の前で、彼を巻き込んで、逃亡の果てに死んだ。その日泥底部隊（ヌタ）が決して少なくない被害を受けたのは別として、結局は彼は逃げれずに死んだ。

しかし、それは本当に失敗だったのだろうか？

学園と組織から逃げ果せた唯詠は一体どこに身を寄せる？ＥＳＰ最強の能力者を欲しがるのは誰か？

唯詠は葉月の許を訪ね、風々もまた訪ねた。それがあるいは彼らの接点となったとすれば葉月はその媒介として利用されたと言える。

彼は得意分野を人格奪取（ハッカー）と話したが、別にそんな能力を使わずとも人を思い通りに動かしてみせたのではないか？

来る日、後継者が逃げること確信していたからこそ、彼らは長い年月をかけて少しずつ牢の床を掘り進めるように監視を削り続けた。

そう、彼らは失敗しても負けてもいない。

何世代も重ねに重ねて今代まさにそれをやってのけ、彼ら――

――『神籤』一世一代の大脱出マジックショーは、決して派手とは言えないまでも多くの観客が静かに鑑賞する中で大成功を収め、

「お見事！」
葉月は拍手代わりに手を1度だけ打ってそれを讃えた。パンッと乾いた音が倉庫に響く。
「世代を超えて受けつ続けてきた計画、未来を視ることこそが本領の連中が望む未来を導き出すためにばら撒いた伏線（タネ）、長い時を経てついにそれら全てが実を結んだ・・・・・実に素晴らしい！
いいね。そういうの、大好き」
けれどそこから一転、彼女は目を細めて合わせた手を口元に持っていった。目も口も全くと言っていいほど笑っていない。
「それに比べて・・・『神を創る』？はっ、馬鹿なの？そんなことをしてなんになる？
全く・・・ここまでくれば連中の目的も分かると思ってたのに・・・・よりもよって・・・」
いきなりテンションを上げてしゃべったかと思えば今度はブツブツと言い出した彼女に、睦月はもはや口を挟むことすらできなかった。
動画で見るとの実際会うのとでは違い過ぎる彼女の異常性に呑まれ、その様を傍観するしかない。
「全知全能？・・・可能性が広すぎる・・・目的が絞れない・・・・・大は小を兼ねるだなんて・・・ここまで大がかりにやっておいてそんなリスクを・・・？いや、いやいや・・・・・手段じゃない？・・・けれど目的として・・・・・意義はあるだろうけど・・・否、そうでなければならないのか？・・・・・・・・・・・・・・・だとすればむしろ・・・狭く・・・・・・・・・・・・・・・

「――――そういうことか」

葉月は一言呟くと、視線を正面に戻した。くだらない、と低い声が漏れる。

「本当、くだらな過ぎて苛々する。はぁ・・・、台無しだよ全く。別にこんな能力ぐらいあげてもよかったし、死んであげてもよかったんだけどさぁ。こうも不愉快だと・・・・何か夢見が悪くなりそうで。あーもう、嫌だなぁこういう感じ。

んー・・・・・決めた。予想を遙かに超えて馬鹿らしい君らの計画に水を差してあげよう」

「ぁあ？」

その疑問に対する答えは彼女の開いたダッフルコートの下、ホルスターで吊下げられたＶｚ．６１やベレッタＭ９２、手榴弾という形で返され、

「君が死んだら連中も悔しがってくれるよね？」

その台詞と共に引き抜かれたＶｚ．６１は躊躇なく睦月の頭へ向けて銃弾を吐き散らした。

＃

内潜変容（メタモルフォーゼ）が原始素能（ホワイトノート）の上位能力だとすれば、それは能力自体を手にできる能力ではない。

原始素能（ホワイトノート）はあくまで超能力の種火を分けてもらう能力であり、使えたとしても最初から使いこなせはしないのだ。

組織と深い関係を結んでいるらしい彼女がこの日に備えて技能を伸ばしていただろうことは容易に想像できるが、特に厄介な『全知』に関しても、会話の展開が読めなかったことやコートの中身を見せた時の彼女の表情から読心術（テレパシー）も未来視もうまく扱えていないところからして、その程度が大して高くはないと葉月は確信していた。

その考えは正しく、一能力者の許容量をはるかに超えて能力を使

えるという葉月以上の反則能力者は、その分１つ１つの能力技能の向上に時間を割かなければならず、結果としてどうしても広く浅くしか能力を高められてはいない。

よって凶弾を念力（サイコキネシス）でもってしても完全には止め切れない彼女は、一時的に動きの鈍った銃弾を動いて避けるしかなく、１分に８００発を吐き出す短機関銃の追撃はかなり辛い。

しかし、死蔵倉庫の名に恥じない豊富な遮蔽物の１つに睦月が飛び込み、今度は葉月が避ける番となった。

気がついて葉月が身を捻った、手首のあった場所に金属板がいきなり姿を現し、さらに続けて二転三転舞いのようにステップを踏む彼女を追いかけて鉄板が現れては床に甲高い音を立てて落ちていく。

能力波が見え出現場所が分かる葉月だからこそ避けられるが、どこから来るか分からない上にいとも簡単に致命傷を与えられる座軸転移（テレポート）は能力史上最もえげつなく敵にしたくない能力者と言われてる。

遮蔽物から顔も出さない睦月がこれほど的確に転移を仕掛けてくるところからしておそらく透視能力（クレアボイアンス）も使っているのだろう。

能力の並行発現。最も懸念していたことだが、やはり使えるようだ。

容易くはないとはいえ避け続けて相手の体力切れを待つことも出来なくはないのだろうが、向こうに頭を使わせるのはまずいと判断する。

自分がそうであるように睦月も状況適応力の高い能力だ。変に能力を混ぜられたくはない。

ステップを踏みながら葉月は吊していた手榴弾を器用に手に掴むと睦月が逃げ込んだダンボール壁の後ろへと放り投げた。

体感時間の遅くなった世界で悪魔の果実が放物線を描く。が、逆に言えば転移させる時間あるということで、睦月はそれを葉月の許へ送り返そうとして、果実から転移先である葉月の方へと意識を向け直したところで、その葉月が注意の逸れた一瞬で面前まで迫っていることを知る。それは言うまでもなく透視能力（クレアボイアンス）を通しての視界で

あって、本来は2人の間にダンボールの壁があり、当然葉月の振るう左腕が切り裂くのもダンボールだが、
「くそっ！」
崩れたダンボールの降り注ぐ先には睦月がいる。それに加えて先ほど投げられた手榴弾。
爆発。殺傷片自体はダンボールが防壁となって大したことはないが、爆発を待たなければならないそのロスタイムは葉月相手にはキツイ。
避けることなく爆発を皮膚に赤筋を入れる程度でやり過ごした葉月は動きを封じた彼女に右手の引き金を引く。
すでに2つ目の弾倉（マガジン）を消費しているＶｚ．６１（スコーピオン）から放たれる弾はしかし、ダンボールを貫くことなく弾かれて跳弾した。
結晶結合（クリスタライゼーション）。物質の硬度変えるその能力に葉月も心当たりがある。
「このッ！能力使えよ卑怯者！」
睦月の怒声と共に今度こそ爆炎と爆風による本当の小爆発が起こり、ダンボール共々葉月を吹き飛ばす。
「時間も場所もわざわざ指定されてるのに準備もせずにくる方が馬鹿なんだよ愚か者」
難なく着地した葉月はその非難を鼻で嗤って、さっきの爆発でオシャカになった短機関銃を捨てベレッタを引き抜いた。
ダンボールの下から立ちあがっていた睦月はその照準が自分に合う前にさっきの爆発同様に発破を葉月の手を狙って放つ。
どうしても溜め時間のできる転移と違い、感覚で操作できる発破や発火は能力波で察知されても避けることは困難だ。
どっちつかずの睦月にとってＰＫ系能力は火力不足になりがちで決定打には欠けるが、葉月相手にスピードのない攻撃は当てることができないのも事実。
威力を捨ててでもまず追い詰めることに専念すべきと考え、まずは厄介な武装を剥ぎにかかったのだ。
グリップ辺りが破裂して手がぶれたが葉月はベレッタを手放さず

に構わず銃弾を撃ち込んだ。それを念力（サイコキネシス）で遅らせつつ反時計回りに移動しながら今度は指を鳴らす。中指の腹が手の平を打ちつける音は音弦変調（ボイスチェンジャー）によって大音響となって倉庫に響き渡り、耳の良い葉月を一瞬怯ませた。

そんな葉月のすぐ横で電気が発生し、それの当たった葉月の右手は拳銃を手放してしまう。痺れたわけではなく、『手を開く』という生体電気信号を強制的に流すことによる簡易的な人体操作の結果だ。

自在に電気を操ることはできない睦月は、やらせたい動作を先に自分が行わなければ使用できない能力だが、それでも実戦投入に値する能力だろう。

両者の距離は約５ｍ、これ以上遠いと睦月のＰＫは使えない。遠距離攻撃だからこそ生まれる、ほぼ肉体強化の上位版としてしか能力の使えない葉月に対しての優位性は睦月にはないに等しい。

言うまでもなく身体強化の能力を使っている睦月ではあるが、その能力で葉月を上回れないことは重々承知している。むやみに近づけばやられるのは自分だと分かっているからこそ、肉弾戦には持ち込めない。

中途半端な５ｍという距離間が睦月にとってのベストポジションであり、向こうの跳び道具を潰してこの距離を保ち続けながら体力切れを狙うことがベストプランなのだ。

対しての葉月にとってその距離は何のメリットもない。攻撃できない逃げれない、あまつさえ武器の１つすら落とさせられた。

何より生体電気による人体操作の届くこの距離はマズ過ぎる。

自分を囲みながら襲ってくるスーパーボール大の火球を避けつつ、葉月は睦月の手を観察する。

先ほどから絶えず開いたり握ったりしている手はおそらく葉月が次武器を取り出す際の人体操作を見越しての予備動作だろう。

睦月の全体的な能力等級の平均が４等級辺りだということを前提に考えれば、彼女が自分が自身の体に送っている生体電気を飛ばし

てきていることぐらいは分かる。
武器は持てない。それを理解して葉月は右足に力を込め跳躍、体を焼く火の玉を無視して自分がベレッタを落とした場所まで移動すると床に落ちているその１ｋｇ近い鉄の塊を蹴り飛ばした。
「ぅおわ！」
今度も顔を狙われた睦月は当たれば鼻の骨を砕きかねない凶撃を上半身を逸らして避け、バランスを崩しはしたものの踏ん張る。その間に急接近してきた葉月の手から持っていた手榴弾を落とさせるも、すでにピンは抜かれていた。
爆弾は落とされようが無効化できない。さらにそれを葉月は蹴り上げ、自分自身もまた睦月へと手を伸ばす。
「ッ！」
なびいたマフラーの端を掴まれた睦月に逃げるという選択肢はなくなり、空いている右手を振りかぶる葉月に大して発破を行う。バカンッバカンッと連続して起こる爆発は葉月のダッフルコートを雀り、胸と腹から焦げたシャツを露出させたが、葉月は手を離さない。
接敵されること自体が致命的になる睦月としては手榴弾から逃げるためにも葉月から離れるためにも人体操作ではなく発破を使ったのだが、それが仇になったらしい。
（最初から生体電気で・・・っ！）
とりあえず枷を解かなければどうにもならない。睦月はまず自分の手を開き、そしてその指先から静電気程度の電流を発した。しかし解放されたはずのマフラーは葉月の手から離れない。
見れば鉤爪（かぎづめ）のように伸びた彼女の爪が布地に突き刺さっている。
「能力の使い方がセケぇぞ！」
叫び、彼女は葉月の顔を発火で焼き飛ばそうと試みるが、葉月の耐久性は煤がつく程度でそれを済ましてしまう。
大きさとしてはその顔サイズの火が彼女の発火限界だったのだが、やはり効きはしなかった。
発破生体電気、最後の発火と連続して攻撃を受けた葉月の方もこ

こでやっと左手の攻撃を通し、右腕で庇ったものの、睦月は二の腕辺りの血肉をごっそりと持っていかれる。

「つぅっ！」

あれだけ攻撃を仕掛けてほぼ無傷の葉月に対して一撃喰らうだけでこの有様だ。

挙句手榴弾によるチキンレースもまだ継続中ときている。この距離の危なさを再確認させられた睦月としてはすぐさま離れたい。

「らぁああ！」

マフラーを燃やし、同時に葉月を蹴って転げるようにして離脱を図る。

床を鈍くバウンドした手榴弾はその1秒後爆発し、念力（サイコキネシス）で致命傷を辛くも防いだ睦月は休む暇なく追撃を目で追おうとするが、爆発地点に葉月はいない。焦って周りを見回すもその姿は見当たらなかった。

「隠れやがった・・・？」

右腕の切り傷を治癒能力でとりあえず皮膚をさせて塞ぎ、身体に刺さった鉄片を抜きながら睦月も遮蔽物に身を潜める。

織神葉月という超能力者としても例外の極みにいる存在に対抗するために、万可より渡された資料から対策を練ってはきた睦月は、転移そして治癒能力は特に訓練を積んできた。

自己治癒のできない能力者はそもそも葉月と相対することすら叶わないだろうし、固い身体に致命傷を与えられる攻撃手段を持たない能力者は絶対に勝てはしない。

そんな相手と戦っているかと思うと嫌になってくる。一応銃も手榴弾も使い切らせはしたが、そう言った武器に頼らない葉月の攻撃はむしろ読みにくい。

逃げ切って体力切れを狙うのはかなり賭けであるため、できれば負傷させたい。

透視能力（クレアボイアンス）で葉月の現在地を確認した睦月は転移の届く範囲まで近づいて死角から自分に刺さった鉄片を飛ばしてやろうと音を立てず

に距離を詰める。しかし自分の血のついた殺傷片を葉月の心臓を狙って放とうとしたところで予想外の出来事が起こった。

積まれた段ボールの隙間からどばっと黒い髪の毛が現れて彼女の足を絡めてダンボール壁へと引きずり込もうとしてきたのだ。

透視能力（クレアボイアンス）で捉え続けていた葉月本体には動きがなかった。ならこの髪は一体どこからきた?その答えとして何時ぞや同じ会社の倉庫で葉月が千切れた腕を動かしていたのを思い出す。

「悪霊かオマエは！」

重いダンボールの崩落に巻き込まれながら睦月は結晶結合（クリスタライゼーション）でダンボールを固め葉月の攻撃に備える。

ゴウンッと低い音共にダンボールの防壁は容易く崩れ去り、姿を現した葉月は皮膚を裂き血を飛ばし肉を抉る腕を両方を振るわんとしていた。

しかし睦月も何度も同じ様に接近されるほどくみしやすい人物ではない。

手元にあったダンボールを葉月がくるであろうポイントの頭上に転移させ、どうやら大型の質量分析機が入っていた箱は葉月の頭を直撃した。

空中で体勢を大きく崩した葉月と一緒に今度は2人ともダンボールの下敷きになる。

先に這いだした睦月は同じく這いだそうとしている葉月の背後をついに取った。

内潜変容（メタモルフォーゼ）は相手の脳から能力の情報を抜き出し、それを自分の脳で再構築するという2段階で発動する能力だ。

言うなれば能力素（インストーラー）を読み込んで展開（セットアップ）するというソフトのインストールそのものの作業であるが、これに加えて操作にはマニュアルが使いこなすには慣れがいる。

実際能力を使っている際の脳波データが取れれば文句なしだが、最悪能力素さえ取れば睦月に課せられた『形骸変容（メタモルフォーゼ）の取得』という任務は完了となる。

正直、今までの攻防からこれ以上葉月と関わりたくないという結論に達した睦月としてはこれで終わりにしたいと右手を彼女の後頭部に伸ばし、それに合わせるように葉月のお団子が解ける。

髪に隠されていたのは手榴弾（アップル・グレネード）。ピンが既に抜かれた丸く緑がかったそれは睦月の額にコツンと当たり、

「――クソッ！」

いきなり体勢を変えれない睦月をそのまま巻き込んで、床に着く直前、爆発した。

ぱたぱたぱた・・・。

次から次へと滴り落ちる血が床を打つ音、肉を削がれ骨が露出した脛に肉片の代わりに傷を埋める破片。

上半身は辛うじて守れたが下半身はそうはいかず、血にまみれ立つのもおぼつかない睦月は声も上げられずにタンボールへと倒れこむ。

だが、それに葉月が追撃するのも叶わない。風切り音を纏った見えない斬撃が彼女の背中を袈裟切りし、左目を切り潰し、左足の腱を切り裂いた。

さっきまでと明らかに威力の違う攻撃に葉月は攻撃を諦め撤退を計る。離脱際に新たに右の小指を持っていかれたが気にせずに遮蔽物に隠れながら距離を取る。

両者、自己再生のための束の間の休息を得て、先に立ちあがったのは当然ながら葉月だった。

頑丈な身体に桁外れの治癒能力と実に便利な彼女の能力だが燃費が悪いという欠点がある。武器の持参はその対策の一環だったのだが、さっきのアップルを最後に全て使い切ってしまった。機動性に重きをおいて装備を厳選したのが仇となったかと少々後悔しつつ、今後自分の能力だけでどう戦うかを考える。

飛び道具。向こうの主な武器だが、あれがキツイ。特に斬物風刃（カマイタチ）は当たれば深手を負う。

治癒に能力を割くのは得策ではないし、よって避けないわけにもいかない。しかしそうなると遠距離攻撃の苦手な葉月はかなり不利だ。

睦月は彼女の頭へと手を伸ばしてきた。それが内潜変容（メタモルフォーゼ）の必要動作だとするなら必ず接触してくるだと確信し、その時こそが最大のチャンスになると考えた。

問題はそれは同じく自分も隙を与えるということで、やはりできれば安全地帯から敵を倒せれば文句はないのだが、そうするにも向こうは透視能力（クレアボイアンス）がある。気付かれる可能性が高いし、離れての攻防では転移能力を使わせる余裕を与えてしまう。

生体電気の人体操作に対処してから近距離戦に持ち込むしかない。

（さて・・・どうくる？）

何にしても相手の出方を窺いたい葉月は目を閉じ感覚を研ぎ澄ます。

足の裏から感じる僅かな振動から睦月が足の傷に何らかの処置をし終えたことを知り、次の瞬間、今まで防御にのみ使われていた念力（サイコキネシス）が葉月の背後にそびえる高々と積まれた箱の壁を崩したのを知った。

横に跳びそれを避ける葉月の背後から今度はさっきと同じ風刃が襲いかかる。それをあえて後ろへと上半身を逸らし避けた葉月の視界は逆さまに睦月の姿を捉え、腕を振るいさらに風の刃で切りつけようとした睦月の動作を見て彼女はブリッジに近い体勢から床に背中で着地して横へ転がる。コンクリートの抉れる音と飛び散る破片に追われ葉月が体勢を整えられずに転がる中睦月は駆け出した。

葉月のロングスタイルに戻った髪がそれを向かい撃つが、睦月の身体に触れることなく軌道が逸れる。

念力（サイコキネシス）で身体を覆いバリアを張っているらしい。そもそも自在に動く髪の毛で人を小間切れにできるような葉月を相手にしようというのだからその対策は講じてあるのが当然だ。

「らぁあああああああ！！」

止むことのない斬撃をかわしながら少しずつ体勢を立て直し、やっと膝を立てた葉月に飛びついた。
絡みつき身を切断しようとする黒髪とそれを見えない鎧で防ぎつつ葉月の額へと伸ばされる腕。
馬乗りの体勢になりながらも2人は一か所も身を接してはいない。隙1つで死に至るゼロ距離戦だ。睦月は額に当てる手の平以外のバリアを解くつもりはない。
伸ばす手と防ぐ髪。右腕は葉月の左手に念力(サイコキネシス)ごと掴まれて、使えるのは伸ばしている左腕だけ。
重力操作で圧をかけているからこそ仰向けの葉月を押さえつけられる睦月だが、これ以上の並行した能力使用は難しいし、現状維持も長くは持たない。
「このっ、諦めれ！」
「さっきから馬鹿のひとつ覚えみたいに念動力に頼って・・・！ちょっとは工夫したら!?」
「便利なんだよ念力は！オマエだって困った時の髪頼みじゃねぇか！」
「試行錯誤はしてるからいいんだよ！」
醜い言い争いの末、
「貰ったぁ！」
睦月の左手がついに葉月に届いた。しかし、そこで吊り上げたのは葉月の口角で、眉間に皺を寄せたのは睦月であり、
「ッッッ――――ッ！！！」
睦月は斬物風刃(カマイタチ)で自分の腕を切り落とした。
接触面から自分の手と葉月の額が癒着し始めている。もう少し遅れれば腕から自分の制御を奪われかねなかった。
接触できない。そのあまりにも致命的な新事実に動揺して、重力の拘束を解いてしまった睦月に今度は葉月が睦月の脚の下敷きになっていた右手を伸ばす。
だが、額にくっついたままだった左手の切断面から滴り落ちる血

が葉月の目を潰し、そのチャンスに今度こそと睦月の右手が自分の左手へ突き出される。
葉月の形骸変容（メタモルフォーゼ）はあくまで自分の身体を操る能力であり、まだ取り込まれていない右手は彼女の支配下にはないはずだ。すでに切断された腕から神経を侵すことはできない。
葉月の癒着・神経奪取から逃れるために、すでにその餌食となった自分の躯を使うというもはや何がなんだか分からない状況だが、それでも睦月は己が夢のために手を伸ばして、

その腕を紅の炎に焼かれた。

「ぐうううううう！」
念力（サイコキネシス）は物理的な攻撃には問答無用で強固に働くが超能力による攻撃にはそうはいかない。だからこそ能力波の反射率を上げた反響汎濫（バウンディング・エコー）という能力が存在しているわけだが、今ここで問題なのはそんな能力に覆われていたはずの彼女の腕が焼かれた理由である。
堪らず完全に葉月と離れてしまった睦月は火傷を負った皮膚と死んだ細胞組織を蘇生させながら葉月へと視線を向ける。
額へと呑まれていく彼女の左手、そして葉月の前で燃え続ける紅橙色の火。睦月のものではないその炎に彼女は見覚えがある。
鳳凰、瑞桐小鳥の絢爛浄火。
もし本当に彼女の浄火そのものならば右手そのものが消え去っているところだったが、それでも彼女の特殊の目はともかくその発火能力を葉月を有していることはその火の色からしても明らかで、その事実にも動揺する彼女に額から垂れた血を舐め取りながら葉月は言った。
「はぁ・・・もうちょっと隠しておきたかったんだけど、まぁ仕方ないか。
えーと、何だっけ？『お前の形骸変容（メタモルフォーゼ）を貰いにきた』だっけ？『オマエを消費する』だっけ？

大層ご立派な話だけれどね睦月ちゃん。
――――他人（ヒト）の能力を奪うのが自分の専売特許だと思うなよ？」
布裂く音と共に彼女の背から黒い何かが幾つも生え始める。それはみるみる内に長く細く成長し５対計１０本の触手になった。
肩甲骨辺りから生えるソレらは一見羽根のようにも見えなくはないが、その用途が絡みつき接触した皮膚から癒着して人の中に侵入することだと思うとかなりエゲツない。
睦月は引き攣った笑みでその様子を眺め呟く。
「人の皮を被ったバケモノめ・・・」
それに、何を今更と答えて、
「人は人を人の形（容）にて人と認識し、人は人を人の内（色）にて人と識別する。
僕が人形（ヒトガタ）をしてるのは単にその擬態が最もこの世界で有効だからだけど、それでも人の形を取っていれば人は人だよ。
だいたい人の中身ばかり集めて自分を失くした君が言えたクチなの？
さてと・・・じゃあ」
１０本にもなる伸縮自在の触手を生やしておきながら、小さな人間の手を差し出して葉月は屈託なく微笑んだ。
「君の脳髄、頂戴」

第５４話ー　万可統一。ーＧａｒｄｅｎ　ｏｆ　Ｅｄｅｎー（後書き）

さて、こんな状況下で言うわけです、葉月の（能力的な）元ネタはなんでしょう？ただし一番最初に浮かぶのではありません……と。
作者の人格は歪んでますね。
そんな作者を負かしてみませんか？アンケート募集中です。ちなみにまだ正解者はいません。

さて、ついに物語全体の『転』期がきました。
今回は第一章の最終編とは違い少し話が長くなりますし、戦闘シーンだけではない予定です。
釧のこととかありますしねー。彼は最終編から次章全般に渡ってちゃんと活躍することになってます。
しっかし……何か初めて超能力バトルらしいバトルを書いた気がする。おかしいなジャンルは超能力×学園バトルモノなはずなのに。

それから人生　素人様、感想を読ませていただいた際、『あなたがエスパーか』と焦りました。まさしく書いてる時だったもので。返信かなりぼかしてかかせていただきました、すみません。

――――さてさて、もう一つご連絡が。
実は今公募しようと書いてる小説の一部をあげてみよう思いまして。
エキ日々。にも『話の端』辺りでちらっと話に出てきた探偵２人組の話です。

まだかなり未熟な出来ですが、自分で黙々と書いてチェックしてとやるだけだと辛いかなと。

お暇があれば作者ページから覗いてみてくださいませ。

第５５話－　織神葉月。－Ｔｒｅｅ　ｏｆ　Ｌｉｆｅ－（前書き）

『第２０話－　学園都市。－Ｒｅｖｅｒｓｅ－』最後らへんの内海岱斉と加藤倉光の会話より

「なるほどなるほど。つまりお前さんはバランスが悪いと言いたいんだろ？片方が抜きん出ていても意味がないと。で、お前さんは一体どっちが抜きん出てると思ってるんだ？」

「言うまでもないが？（葉月に決まってるだろ？）」

「ははん、まぁそうか。なら・・・そうだな。もう少し時間を置け。あれ（睦月）にはもう少し”学習”させるべきだな」

「能力的な差がさらに広がるぞ？」

「総合的な技能を合わせて考えるべきだな、カップリングさせるのが目的なんだ。対峙させて（葉月が睦月を）瞬殺なんてされたらそれこそ水の泡じゃないか」

「ちなみに参考として聞くが、総合的に見てお前はどっちがどっちを殺すと思っている？」

「言うまでもないね（葉月に決まってるだろ？）」

←

というわけで睦月に『全知』を覚えさせました。使いこなすのは無理でした。しかも何か逃げられました。

←

琉球学園都市の万可の予期せぬ介入。葉月は発火能力をねこばばしました。能力を奪うという発想を得ました。

←

１２月２５日　睦月が期待に胸膨らませながらお披露目しました。
けどなんか馬鹿にされました。
万可の予定ではここで能力を奪うという発想を葉月に植えつけるはずでした。けどなんか知ってました。
結局２人のバランスは取れてないことが今発覚しました。万可では２人が額にしわ寄せてます。

←

おや？葉月の様子が……？
「脳みそ頂戴」
……神は死んだ。　↑今ここ

第５５話ー　織神葉月。ー Ｔｒｅｅ　ｏｆ　Ｌｉｆｅー

『生物』が生きているモノを表す言葉だった昔、生きるモノには生命が宿っているのだと誰もが信じて疑わなかった。

実際生物と無生物の違いは見て明らかだったし、視覚的経験からもその差を生み出す確たるモノが存在するという考えは受け入れやすいものだったから。

生命を持つモノが生物――――ならば、生命とは何だろうか？

当然出てくるその疑問を人々は解剖行為に求め、時計を分解する童心のような好奇心はやがて人々を学問へと導いた。

生命を知る。

生命の神秘に憧れを抱いた人々は生体を解剖することを覚えた。

それがそもそもの間違いであることに気づかずに、解剖の人類への貢献度が故に過信して。

皮膚と肉に覆われた内部に分化した臓器を見つけた時、彼らはそれが空気や食物を動力に変える機関であることを理解し、――皮肉にもそれらが部品でしかないこともまた理解した。

熱く強く鼓動する唯一無二の臓器に触れた時、彼らはそれに心が宿るのだと歓喜し、――けれどその誤りに肩を落とした。

硬い頭殻に守られた深く皺を刻んだ神経組織の機能を知った時、魂はここに在るのだと狂喜し、――けれどその過ちに目を覆った。

どれほど分解しても、どれほど分析しても、どれほど解析しても。

どこにも生命の本体は見当たらない。

憧れた神秘を求める行為を繰り返せば繰り返すほど、生命は輝きを失っていく。

解剖の果てにあるのは身体の全てが『機能』という2文字に変換されるという現実だけで、生物は生命によって生物となるという考えは解剖という光に当てられて居場所をなくし、ついに生物の定義は『膜』、『自己複製』、『代謝系』へと取って代わられ、生命と

いう幻想は残酷なこの現実世界へと堕天した。
そして19世紀にはクローン技術が産声を上げ、その後に肺性肝細胞技術も産湯に浸かる。
未受精卵を体細胞と細胞融合させるという技術や分化以前の細胞に恣意的な方向を持たせようという試みに人々は生命の冒涜を幻視し、高らかに生命倫理を叫んだ。
けれど、それは傲慢な勘違いだ。
どれほど彼らが自画自賛して『人間が犯してはならない領域』と大仰に騒ごうが、それらの技術が”生きた”細胞を弄り回す技術である以上、生命を犯すことなどできてはいない。
いくら遺伝子を弄繰り回しても、いくら細胞を操り回しても、その細胞が一から作り出したわけでもない、生体から取り出したモノである限り、その生命の起源は私達と同じであって、それを受け継がせるという行為は生命が今までやってきた自己保存と大(生殖活動)した違いはないのだから。
生きているモノからしか生きているモノは生まれない。結局のところ、生命という神秘は昔から人の手が届かないところに在り続けている。
解剖しても見つからなかった。身体のどこにも見当たらなかった。
それなら・・・・・生命とはどこにあるというのだろうか?

その答えを生命樹に求めるならば、それは果実を実らせた枝の大本、美樹(幹)を支える根元にまで遡る追憶の旅だ。
全生物の共通祖先、生物の始まりは気の遠くなるような遙か過去

――――――

38億年以上もの太古の昔、生命は産声を上げた。
その始まりは膜。外と内を分け『他』から『己』を切り離し『個』を作り出したその時から『私』は生まれ、膜という名の境界で外と

自らを分けた『彼女』は自然の摂理に従って混沌（カオス）へと向かおうとするこの世界の中、己が内には秩序（コスモス）があることを望んだ。

物質は放っておけば拡散する。濃度の違う液体や気体は混ざり合い均一化する。それが水と人が低きに流れるように”なりやすい”状態だというのなら、膜の内に秩序を、外界と差別化された内なる世界を創り出すことはその摂理に反する現象だ。

にも関わらず、生命はそれに固執する。まるで意思を持つように、意地のように執着する。それはヒトが脳組織から生ずる意識から生を尊むのとは全く異なったトコロからくる意思だ。

意思という機能が入り込む隙などない原初の生命すらが抱いたその感情は、例え生物が代謝系という機械（システム）に還元されても解明されないであろう場所からやってくる。

『秩序でありたい』。どこからやってきたのかも、どこにあるのかも分からない、その在りどころの見えない意思こそが生命の根源であるとするならば、

――――生命とは秩序を望み続ける”我が侭”だ。

幼女のように駄々をこね、童心のままに我を通す彼女の我が侭に導かれ、生命は自らの内にある秩序を新たな秩序に受け継がせることを覚えた。生物的分化は毒であった酸素すらを克服し、ソレらを呑み込んで生命はさらに跳躍する。海の中は多様性に満ち、草が生え魚は泳ぎあるいは海底を這うモノも生まれた。波に揺られた光を受けて植物達が吐き出し続けた酸素が大気を満たし動植物は陸へ。不毛の大地に舞い降りた地衣類は根付き光を浴びて生を謳歌し、やがて死に逝く彼らの躯は地に栄養を与え植物の種はそこに芽吹く。過酷な環境下でも生きられる草花が枯れた後に富んだ土は造られ、多くの草木が萌えればそれらを食べに動物は集まる。その動物を食べる捕食者が誘われ、食べる側も食べられる側もいずれは土に全てを還す。その繰り返しに大地もが生命の世界へと塗り替えられて・・・、それでも生命は進化を止めない。彼女の我が侭は彼らに光の色を教え、彼女の我が侭は彼らに息することを教え、彼女の我が侭は

彼らに地を這う感触を教え、彼女の我が侭はやがて彼らを空へと羽ばたかせた。狂おしい時を経て姿かたちを変えながらもその生命の火はその始まりからずっと燃え受け継がれ続け、今もまだ彼女は進化を止めていない。彼女はずっと生きつづけ、彼女はずっと想い続け、彼女は誰にも内緒にしている想いのためにこれからも我が侭を言うのだろう。

彼女、それは系統樹の始まりに名を刻む生命の根源。例え無生物と生物との間に大した差異がないのだとしても、生物が化学反応を維持し続けるシステムに過ぎなくても、ただひたすら続けてきたその執念に不可視の彼女は宿る。

彼女の名は生命（エヴァ）の始まり。

そして、

そして彼女は言った。

「君の脳髄、頂戴」

そのあまりにも人間離れした台詞に合わせて、触手がしゅるりと舌舐めずりしたような気がした。

■

動機構のない髪を動かすには能力を動力源として使用しなければならないが、形骸変容（メタモルフォーゼ）の欠点が燃費の悪さである以上、織髪はそう何度も使える代物ではない。

準備さえしておけば能力を使用しないで済む化け物の如き身体強化も、僅か１ｍほどの範囲にしか届かない人間の腕ではＰＫ相手に分が悪い。

遠距離戦への対応。

それは今までの戦闘の中で絶えず織神葉月に与えられてきた課題

だ。

『進化』が形骸変容（メタモルフォーゼ）の代名詞である以上、いつまでも不便さに甘んじている『彼女』ではない。

腕よりも遠くに伸ばせる手が欲しく、それが捕食手段になり得れば勝手がいい。

人間の矮小な身体が足手まといになるというのなら、そんなもの捨ててしまえばいいだけのこと。

そんな枯渇を知らない欲望の答えが”ソレ”だった。

細く長く伸びた筋組織でできた、触手あるいは触腕と呼ばれる軟体動物の器官。

黒く、髪と同様に蠢くそれは糸としての殺傷力こそないものの、一度造ってしまえば能力に頼らなくても動かせる上、この状況下――色神睦月を捕縛してどこからでもいいから脳みそを吸い出せば勝負が決まる中では十分すぎる凶器となる。

何より超能力者の生態ピラミッドに君臨する頂点捕食者としてそれ以上相応しい手段もない。

進化は何時も不可能を可能にしようと分化の枝を伸ばす。

神様が人類をエデンの園から追放したのは、知恵の実と生命の実の両方を食して人が神となることを恐れたからだという。

知恵の実を食べた人類、睦月は生命樹の実を手にし神に進化せんとするが、翻ってそも進化の系統樹そのものである葉月に智恵の実は必要ですらない。

今回彼女が見せた触手という進化の意義は燃費の効率化によるコスト削減だった。

より便利に、より低コストに。それは人類が掲げるスローガンだが、元はといえば全ての生命が持つテーマに過ぎない。

この世には人がその存在を知る遥か前から電気を使う魚類がいたし、太陽光を電気に変える器官を持った蜂すらいる。

それどころか、多様性は今でも多くの生物が毒としてるヒ素で増殖する細菌や宿主を性転換させるバクテリアまで存在を許している

のだ。

どれほど人間が叡智を誇ろうと、それらは概出した発想でしかなく、人類がそれを模造できるという特殊な存在であったとしても、霊長類という生物的分類の範疇に収まる彼らの能力に相応しい表現は『猿真似』だ。

生命そのものには――――『彼女』には敵わない。

ずるり。

まずは1本、そんな手軽さで今まで手持ち無沙汰に身をよじっていた触手が確かな意思を与えられて持ち上がる。

それを見上げて睦月は僅かに腰を落とし、その僅かコンマ秒後には横に跳ぶことを余儀なくされた。

残像、そして何かが叩きつけられる音。

見れば、さっきまで彼女の居た場所が凹んでいる。

触手による攻撃。その恐ろしさは纏わりつくおぞましさだけはない。

イカが捕食時触腕を素早く突き出して獲物を捕えることからも分かるように、触手はイメージ程愚鈍ではない。

ある意味筋組織の集大成と言えるその器官はしなりを生かすことで骨格を持つ手足よりも強力な破壊力を得ることができるのだ。

鞭のように振るわれる彼女の一撃が生身に当たれば捕縛以前に身体が千切れかねないし、何より問題なのはその俊敏さである。

（クソがッ！予知使ってもギリギリじゃねぇか！）

一般人に対応できる速さを超えてしまっている。

葉月と違って極めて人間的な身体であり、戦闘経験自体の少ない睦月には戦闘感性（センス）が欠けている。それを補うために、使いこなせないまでも全知の素能を対葉月用に組み直して、負担にならない程度の粗い予知で勘の代わりをさせているのだが、それですら避けるのが精一杯だ。

念力（サイコキネシス）で守っているとはいえ、あんなものを喰らえばただでは済まない。かといって見切って隙を突くのは難し過ぎる。

両者の間合いは６ｍほど。その距離は睦月にとってレベルの低い技能でのＰＫ有効範囲ギリギリを意味するが、それと同時に触手の威力が最も大きいだろう距離でもある。

離れれば今度は自分の攻撃が当たりにくくなる。けれどあの触手相手に逃げ回るのは無理。数の上でも自分の身体に足は２本しかなく、２つある腕のうち左に関しては手首から先を喪失してすらいる。

当然睦月は距離を取ることを選んだ。

それを追い打つ触手がコンクリートの床にクレーターを作り、欠片を飛散させながら元の位置に戻っていく。そしてその頃には次の１本が打ち出され、他の触手はじわじわと追い詰めるように迫ってくる。

その様子を観察して睦月は気づく。

打撃用に使われているのは４本だけで残りの６本は比較的動きが鈍い。

（はっ、やっぱりな。いきなり手が増えて使いこなせるわけがねぇ）

それは彼女自身経験として知っていることだった。

能力をどれほど蓄えても同時に使える数には限度があり、その数もやはりおおよそ４つなのである。

もちろん睦月の限度枠のことは葉月の方も知っている。

喧嘩ならともかく戦闘では既知の能力であってもその程度を計るためにまずは様子を見るというのが定石だ。未知の能力ならばなおのことである。現に前哨戦であった銃撃戦を葉月はそのために費やした。

撃って切り裂いえ爆破して、そうやって得た情報から勝利までのルートを構築して戦況を動かしていく。それが本当の意味での戦闘だ。

相手が倒れるまで考えなしに殴り合うような戦い方は愚行もいいところである。

葉月は触手への対応を強いることで睦月の同時発現の限度枠を越えさせエラーを起こす、あるいは能力の乱用、特に負荷のかかる身

の丈に合わない高位能力の使用での体力切れを狙い、睦月も触手を片っ端から切断することで肉を削ぎ再生を強いることで体力を奪うという作戦を即座に立てた。

片や念力（サイコキネシス）で攻撃が通りにくく、片や癒着が怖くて接触できないこの状況、2人にとっていかに相手を消耗させるかが重要になってくる。

よってこの先展開されるのは相手の体力を奪わせるための攻防戦に他ならない。

そのためにも体勢を整えたい。とにかくまずは距離をおこう。

俊敏に動くことができずに追い詰めるために回された6本の内2本を斬物風刃（カマイタチ）で切り刻んで退路を確保しようとした睦月に切断面から透明な液体が降りかかった。

同時に気管支に刺激を覚えて睦月はすぐさま風で辺りの空気をかき混ぜ、一撃の風刃を天井に放った。

有毒ガス。刺激系だ。ヘモグロビンと結びついて呼吸困難に陥らせるような窒息性はない。

おそらくは酸。特に攻撃に使われるような酸はかなり身近な生命が保有していることを彼女も知っている。

（蟻酸・・・もはやなりふり構わずに仕掛けてきてやがる！）

触手という武器が持つリスクを向こうも分かってちゃんと対策を打っている。むやみに切り刻めない事実の発覚に心中で舌打ちして睦月は代わりに比較的得意な発電能力に攻撃を切り替えることにした。

もちろんあの軟組織の中に血が通ってなかったことからして痛覚もありはしないのだろうし、電撃にもすぐに対応されてしまうだろう。

よって攻撃法は電撃自体ではなく高周波電流による熱を利用する。医療分野使われる電気メスの原理だ。切断と同時に切断面を焼いて塞ぐ。これなら噴射を抑えられる。

ちょうど迫ってきた1本で試し切りし、びたんびたんとのたうつ

触手の切れ端を尻目にまだ多く残っている死蔵物の山へと身を隠す。
もちろん、それで隠れきれるとは思っていないが、開けた場所よりはマシだ。
本体とはかなり離れてしまったとはいえ、地道に迫ってくる触手を切断していけば勝機はある。元々小柄な葉月の体躯では再生の材料もそう多くはないだろう。
タンパク質の焼けた嫌な臭いが充満する中、一息吸って睦月は両手にチャージしておいたレーザーメスを上へ向けて放つ。二筋の光が交差する頃には触手を構成していた肉片がボタボタと降り注ぎ始めていた。
長く伸ばせば伸ばすほど触手は弛(たゆ)んで鞭のようには使えなくなる。６ｍの距離ほどで対峙した時よりはいくらか鈍った触手ならまだ対処できる。
けれどそれはいささか甘い考えで、葉月がただで自らの血肉を差し出すわけもない。
落ちてくる残骸の数々から黒い根のようなモノが無数に生え、それらはお互いに絡み合って１つの網を作り上げると睦月を覆わんと頭上から迫ってきた。
切断では対処できない。睦月はそれを理解してレーザーを線ではなく面に、波長を色素に作用する高さに変更した。レーザー脱毛がメラニン色素に反応させて発毛組織を破壊するのと同じ原理で、黒色をしている葉月の触手片は高熱を持って内側から死んでいく。
まだ生きた肉片が残るその場所を嫌って駆け出した睦月に葉月の触手はまた迫ってきていた。
天井から１本、後ろから２本、そして前からも１本。
荷物の壁でできた道を移動する彼女に横に逃げるという手段はない。わざわざ２本迫ってくる後ろに方向転換するわけもなく、前の１本に対してさっきと同じレーザーを放つがレーザーの熱が細胞を殺す前に触手は壁であるダンボールを乗せた鉄ラックを引っ張り倒した。

「つっ！うお！」

前どころか側面そのものが塞がれて、なだれ込んでくる研究資材は睦月の頭上を舞う。それに対応すべく置いてあったダンボールが落ちてスペースの空いた、今まさに倒れてこようとしているラックの間に身体を滑り込ませた。それを追うのは後ろから来ていた1本で、辛うじて彼女の足・・・が纏った念力を掴みだのと積み荷が本格的に雪崩を起こすのは同時だった。

「舐めッやがッ！・・・・・・てぇえぇ！？」

何とか難を逃れ、崩れた資材の隙間から立ち上がった睦月を迎えたのは2本の触手の間に煌く火球。触手はそれを何の躊躇いもなく乾ききった紙箱へと放つ。

（何が離れた方が、だ！本体に害がないからってやりたい放題じゃねぇか！）

自分の判断を呪って睦月は火の山と化した資材を脱し、今まで逃げてきた方向へとUターンし始めた。

触手から肉を削いでいくのはリスクが大き過ぎる。直接本体を叩く方がいくらかマシだ。

正直アレと対峙するのは勘弁したいという気持ちが強いが仕方ない、透視能力（クレアボイアンス）で本体と触手の動向を確認しつつ自分の能力が葉月に届く距離にまで接近する。

５m、それは同時に未だ１０本生え揃った触手の猛攻が最も強い距離でもあるが、睦月は鞭打ち以外の攻撃なら多少受ける覚悟で臨む。

右手に一際高エネルギーをチャージしながら、左で迫る触手をレーザーで刻み、空気を割く４本の鞭を避ける。電撃、予知、念力、身体強化のフル稼働でそれを成し、溜め時間を稼ぎ終わった彼は右手をかざした。

狙いは葉月の胴体。そのため今回のそれは色素とは無関係に純粋に熱で切り刻むレーザー光線だ。

ジュシュッという嫌な音、そしていくら吸っても慣れない嫌な臭

いが発生し、爆発的にあがった蒸気らしきモノが晴れて現れたのは黒い繭だった。それが半ば焼失して中身が見えている。

「あっぶなぁ！」

「チッ！素直にくたばりやがれ！」

自慢の艶髪をボロボロパサパサにされて葉月が叫び、流石に無理をし過ぎて頭痛のする頭を押さえながら睦月も叫んだ。

髪を解いた葉月は再び触手を広げ、初動作なしで鞭打ちを放つ。それをギリギリで――――凹んだ床の窪みに後ろ足が掛かる程度にギリギリで――――避けてもう一歩前に出て睦月は今度は電気ではなく水による刃で葉月の頭上から切りかかった。

しかし葉月に触れる前に水刃は爆発を起こしてしまう。その現象に葉月の唯一のＰＫである発火能力（パイロキネシス）を思い出し、一気に沸騰して爆散したのだと理解した。

同時に不可解なことに気が付いた。それは能力を得る能力者である彼女だからこそ身に染みて知っていることだなのだが、何故葉月はこうにも能力を使いこなせているのだろうか？

少なくても彼女が発火能力を使ったと記録にあるのは琉球学園で、その時は瑞桐小鳥を介してのみ。それもその能力を盗んでいたなど誰も予測だにしていなかった。万可統一機構から葉月の情報を得ていた睦月が知らなかったその能力は、当然ながら機構にも隠し通されていたはずだ。機構が常に彼女を見張っていることから考えても、葉月が発火能力を訓練する機会はなかった――――否、

（箍の外れた（フォールアウト）発条の放火魔事件！ヤロウ隠れて練習してやがったな！）

それに加えて、おそらく熱や電気というエネルギー体は葉月にとってかなり馴染みのあるモノだということも思い出す。

能力の体力消費を克服するために彼女が生成エネルギーの効率化を図らないわけがない。ミトコンドリアすらを弄っているのは間違いなく、彼女の髪色は最も光を吸収する黒色であることも忘れてはならない。発火能力は彼女にとって元から操りやすかったはずだ。

爆散した水飛沫を浴びた葉月を確認し、もう一撃と今度は袈裟切りに水刃を振り下ろそうとした睦月の片足に真央後ろから触手が絡みついた。気づいた時には既に強く引きずられて一気に距離を詰められる。急遽刃の狙いを捻じ曲げて触手を切り離すが、それを見越して用意されていた鞭打ちを避けることはかなわず、重い一撃を腹に喰らってしまった。

「ごっ！こはっ！げふっ、がほっ！」

まず肺の空気を押し出され、続いて損壊した胃腸の血液が食道をせり上がってくる。腹筋がまともに機能せず起き上がることすらできない。

その切羽詰った状況下、睦月は辛うじて発現できた斬物風刃（カマイタチ）を葉月ではなく天井に放った。

鉄を割く音を合図に穴の空いた天井から勢いよく注がれるのは大量の雪水。それは屋根に降り積もった雪が天井まで燃え広がった葉月の発火による火事で融けたモノで、予期せぬ冷水に葉月が僅かに怯んだ隙に睦月は冷却能力を発現させた。

水浸しの床、水浸しの葉月。

両足が床に固定され、追撃する睦月の右手は光を帯びている。その光が先ほど織髪を半焼させたモノと同じであることを感知し葉月は織髪を広げようとして、それが念入りに凍らされていることを知る。

（最初の水刃の狙いはコレか！？）

元から冷たい水は凍らせやすい。冷水でも十分ではあったのだろうが、特にクリアすべき問題であった髪を封じるために、自分の能力を伝えやすい自分で作った水を先に振りかけておいたらしい。

けれど、それを今更理解したところで時は既に遅く、凶刃は葉月の腰を焼き切った。

千切れて舞う髪、固定された下半身はそのままに、切り離された上半身は支えをなくして床に――――、

落ちるわけもなく、足の代わりに触手４本が身体を支えた。

「・・・・・で？」
「だよなっ！」
ある意味予測できていたオチに睦月は叫び、少しは痛みが引けた身体を仰向けからうつ伏せに転がして立ち上がり、葉月の方も離れた身体をくっつけにかかった。
くっつける、と簡単に言うが、直径１０ｃｍはあるレーザーに焼き切られた接合部は焼失した部位も多く、焼けて死んでしまった細胞もかなりある。血肉という意味でも体力という意味でもかなりのロストだ。そういう意味では睦月の攻撃は効果のある一撃だった。
その証拠に葉月の触手は右より左の方が短くなっている。手のなくなった左腕を無意識に庇った結果がその片寄りなのだろうが、その不均等な長さを調整できるほど葉月にも余裕がないことが分かる。
再生を躊躇する程度には効いてきている。ならば今がチャンスだ。
（まずは対応の厄介な触手を削ぐ！）
未だ黒色である触手を対象にするなら色素の反応波長によるレーザーで事足りる。最大出力でゴリ押しする問答無用のレーザーメスよりは負担が少なくて済む。
鞭打ちに使われている主な触手を狙ってレーザーを放とうと握った右手を開く睦月、けれどその照準は側面からきた触手を避けるために外さざるを得なかった。それでも遅れた反応分の距離を稼げずに避けきれず横腹を強打してしまう。
よろめくも何とか踏ん張って立ち止まらずに横へ跳んだ。
（おかしい）
前に喰らった一撃の傷が癒え切っていない分、応えた腹を摩りながら睦月は思う。
（触手の動きがいきなり俊敏になりやがった）
今まで葉月が直接攻撃に使用した触手は４本で、他の触手は動きはしても鈍かった。
それが分かっていたからこそ油断して、さっきの攻撃を食らってしまったわけだが、その突然の変化が不可解だ。

脳が触手の操作に慣れたにしては急すぎる。何か別の理由があるはずだ。

それを探して、葉月の指に目が留った。

動いているのだ、指が、忙しなく。

そしてその動きが触手と対応していた。

指に送る生体電気を触手にも送っているらしい。

２本しかない腕に対して指はちょうど１０本だ。腕を振るうように触手を振るうのではなく指を動かすように触手を操るという認識の違いがその結果だった。

だとするならばいよいよマズイ。

今でも対応しきれずに足を取られるほどなのに、これ以上手数を増やされると反撃すらままならなくなる。

（なら！）

睦月は賭けに出る。うまくいくかは分からないが葉月の発想を利用させてもらう。

腕の１本より指の５本。かざした右手を開き指の先を出力点としてレーザーを放つ。当然制御は難しくなるが手数が増えた分切り刻める触手の量は多い。

光の線をくぐり抜けようと蠢く１０本の触手と触手の侵攻を防ごうと交差する５本の光。

ボタボタと落ちる触手の残骸が二人を隔て始めた頃、もう１発左腕で葉月本体を叩こうと睦月が手のないその腕を伸ばそうとして、残骸だったはずの肉片が弾ける音に怯んだ。

見れば、一口サイズに切られた千歳飴のような形をした黒いそれらは皮を破いて中から無色透明の気体を吐き出している。

今になってのその挙動を、睦月は不審に思い、そして蟻酸のもう１つ性質を思い出した。

発火性。

蟻酸という選択の理由が酸による直接攻撃だけではなく、むしろ本命がそっちだったと、もし初めからそれが狙いだったとしたら？

（まさか今まで切った触手も!?）

風穴を開けたとはいえこの倉庫内にかなりの蟻酸が充満していることになる。何より、ソレが目的ならば、蟻酸は”燃料”で”爆薬”は他に用意するはずだ。

例えば、床に無残にも切り落とされた肉片の中、とか。

思えば自ら肉を差し出す愚行を今まで葉月が許していることがおかしいのだ。

さっきのガスは最後の仕込み。もはや一刻の猶予もない。

出口に踵を返した睦月が最後に見たのは三日月型に吊り上る葉月の唇と触手の間に生まれた紅の炎。

広く浅く能力を得ている睦月にとっては特にだが、能力による現象に対して念力（サイコキネシス）は鉄壁ではない。

――――起こると分かっていたところで心構えなどできるはずもない、大爆発という名の暴力が倉庫内を暴れ狂った。

＃

人は母胎から生まれ出た瞬間、産声を上げるために初めて息を吸う。

生きている。その実感を呼吸という行為に生を実感するのはそのせいだろうか？

あるいは汗を滲ませ苦しみに耐え抜いた末、山頂からの景色を拝んだり冷え切った空気の感触を肌で感じた時。

もしくは命の危機に晒された次の日の朝、静寂を唄う小鳥のさえずりと光の色を感じる透明な視界を、ゆっくりと浮かび上がる意識が実感した時。

生という体験は、その何の根拠もないくせにやたらと在るのかも分からない心や魂を揺さぶる経験は誰もが少なからず得るものだ。

けれど翻って。

翻って、死とは何だろうか？

死後の意識や世界の話は今はおいて、そも生という状態を明確に定義し得ない人智に死というモノもまた把握することはできない。

多くの動物は心臓や脳を潰されれば死ぬ。

それは生命が自らを保持し続けるための機能を損なうからだが、しかしだからと言って臓腑がなくなった瞬間に命が消え失せるわけではない。

人は死を医学的に心、肺、脳機能の不可逆的停止としているが、それら循環機能が死に酸素と栄養の供給が断たれても、生命は身体を構成する細胞一粒一粒が死に絶えるまでもがき続ける。

死は、いきなり訪れはしない。

故に切り離され、もはや肉塊でしかないモノであっても、死にゆく定めにあっても”生きている”には違いなく、彼女が繋がりを絶たれた肉片を動かせるのはそれに由来するのだろう。

けれど、そんなことはどうでもよく、爆発に巻き込まれた睦月がまず思ったことは『死ぬかと思った』の一言に尽きる。

生の実感どころか、爆炎の包み込むあの中で息などすれば肺が焼け爛れて死んでいた。

あの可燃物と爆発物とで起こされた大爆発の中、避けれないと理解した睦月が咄嗟に取った行動は得意で信頼のおける発電能力に頼り電磁力で金属の繭を作り出すことで、だから衝撃がくる直前に彼女の頭を支配していたのは『ぐるぐる』だった。

もちろん目が回ったわけでもなく、ＤＮＡの二重らせん構造のことでもなく、何かのおまじないでもない。

『ぐるぐる』、それは彼女が電磁力（マグネット）系の能力を友好的に手に入れた際、ご丁寧にも講釈までしてくれた発電能力者の口癖である。

事ある毎にぐるぐるぐるぐると意味があるのか疑わしい台詞を口走っていたが、それがあったから今生きていられる。まさにぐるぐ

る様々だ。
女神様！と8時就寝が習慣の栗毛ウェーブ少女を心中で拝み倒した睦月は所々焼けた身体を治癒しながら熱気に包まれた息苦しい倉庫に水と空気を送ろうと3回目の風刃を屋根に放ったが、落ちてきたのは水ではなく屋根そのものだった。
触手だけではなく倉庫の壁や柱まで焼き切っていたレーザーに触手の打撃破壊と爆発。
もはや2人の周りへの影響を考えない戦闘に倉庫が耐えられなくなっていたのだ。
爆風から逃れたと思った次には瓦礫から身を守ることを強いられ、再び防壁を作って耐えた後、嫌にすっきりと開けた視界の中彼女が見たのはさらに触手の短くなった葉月の姿だった。
それを再生させる様子もないところからみて、そろそろ限界がきているのだろう。
触手の再生、切り離されてからの物質生成、上下半身の接着。
特にあれは肝臓、膵臓、腎臓、脾臓という重要臓器全てを持っていかれいたために見た目以上の負担がかかっていた。
攻撃にも能力を多用していた葉月はおそらく大爆発で全てを終わらすつもりだったのだろう。
その思惑は外れ、その代償は大きいと見える。
息は安定しているが、血の気は悪い。脅威である触手もこれ以上は再生できない。
今が勝機だ。手を休めずに追い詰めて一気に方をつける。また厄介な攻撃手段を思いつく前に、体力を回復される前に倒す。
（・・・今なら倒せる！）
そのために、もっと適した武器が欲しい。
レーザーは使い勝手はよいが、動きが直線的すぎて読まれやすい。
風刃は威力は高いが、負荷が大きく連発は避けたい。
火と水はそれほど得意ではない。
なら、どうすればいい？どうすれば化け物を倒し得る？

そこでふと睦月の目に留まったのは蠢く葉月の触手だった。
散々痛い目に遭わされた動きの読みにくい軟組織。葉月はそれを指へ送る生体電気で操っているらしい。
触手、生体電気、そして指。
そして自分の左手を見る。応急処置でつるりと切断面を覆った皮膚、その先にあるはずの、なくなった手の平と指。
それを動かす感覚と感触は、まだ残っていた。
（・・・――――――――）
一瞬動きの止まった睦月の隙を逃さずに葉月が伸ばした触手が、宙を舞う。
一時で多方向に細かく刻まれた肉片を見て葉月は唇を歪めた。
「へぇ？」
ほぼ前に突き出すようにして出した触手が輪切りにされている。対峙している位置関係では直線に放たれるレーザーにそんな切断はできない。
その結果をもたらしたモノ、それは確かにレーザーだった。
ただしその挙動はおおよそ光らしくはなく、グネグネと身をよじっている。
喪失した睦月の左手から生えるソレはまさしく触手だった。
「何が人の皮を被った化け物だよ。この人の面した化け物め」
その容赦なく血肉を焼き切る凶悪過ぎる光の触手を観察しながらそう言った葉月に悪びれず睦月は返す。
「『人は人を人の形（容）にて人と認識し、人は人を人の内（色）にて人と識別する』んだろ？
だいたいコレはオマエの発想（モノ）じゃねぇか。バケモノが元なんだ、バケモノらしくていいんだよ」
睦月はさらに続けて、
「自分の能力（発想）が自分だけのモノだと思うなよ、バケモノ」
そして、オレンジを帯びた光の触手を手の平のように広げ、挑むような笑みを作ってみせた。

「ヒトのモノはオレのモノ、バケモノのモノもオレのモノだ」

第５５話－　織神葉月。－Ｔｒｅｅ　ｏｆ　Ｌｉｆｅ－（後書き）

人狩り行こうぜっ！
きっと下位は『絶命領域』でこれは上位。
報酬は織髪で作成できるのは『火中栗拾』で鈴絽の着ていたあのコート。
若干火に弱いもののふざけた防御力を誇っていそう。
必要数が一防具につき5枚という鬼畜具合なんだろうなぁ……と。
そもそもどう攻略すればいいのか思いつかないけれども。
ちなみに作者は上位にちょっと入ったところです。

というわけで、捕食者ｖｓ捕食者の生態系の頂点の座をかけた戦いが本格的に始まりました。
『人間（超能力者）ｖｓ化け物』というコンセプトになってます。
一応、泥底の時は『人間（銃器）ｖｓ化け物』でした。
なんか完全に人類ｖｓエイリアンという構図になってる気が。
頑張れ睦月！人類の未来はお前にかかっている！
……ヒロインはどこいったんでしょうね？ね？
今更ですが、この小説って『残酷描写あり』にした方がいいですかね？
Ｒ－１５？Ｒ－１８？……もしかしてＲ－１８Ｇ？
感覚完全に麻痺ってるんで自分で判断できないっていうね……。
まぁ、触手なんてワードが入ってるのにエロはかすりもしてないわけですが。

さて、今回は葉月側――生命の樹でしたが、今話のタイトルと終わり方で分かるように次は睦月側――知恵の樹のお話になる予定です。
あ、ちなみに生命うんたらかんたらの説明はフィクションですのでないとは思いますが信じないようにお願いしますね。

第５６話－　色神睦月。－Ｔｒｅｅ　ｏｆ　Ｋｎｏｗｌｅｄｇｅ－（前書き）

さぁ、皆さんご一緒に！「人間万歳！」

※ご質問等が後書きにありますので、目を通していただければ幸いです。

第５６話ー　色神睦月。ー Ｔｒｅｅ　ｏｆ　Ｋｎｏｗｌｅｄｇｅ ー

生命が動物界脊索動物門脊索動物亜門哺乳綱霊長目ヒト科ヒト属ヒトに分類される人類の産湯であったにせよ、人類がこの世界で他の生物とは明らかに異なった進化をしてきた事実に変わりはない。

二足歩行の恩恵か、はたまた突然変異の結果か。諸説あれど、知性を獲得したその時から人類の進歩は始まった。

知るコトを知る――――知恵こそが人類の代名詞である。

鋭く尖った石が獲物の皮と肉を剥げるのは何故なのか？火を通した肉の日持ちがよいのは何故なのか？乾いた枝木が燃えやすいのは何故なのか？

時計を分解する童心のような好奇心に導かれ、経験と体験と考察を繰り返して人々は学問を作り上げた。

生命を知る。

生命の神秘に対する解剖行為もその１つ。

筋肉と脂肪の中に整頓された臓器の存在を知った時、彼らはそれが生命維持に不可欠な仕掛けであることを理解し、――部品であるのなら替えが利くのではないかと思いついた。

血潮を身体に巡らせる唯一無二の臓器に『心』臓と名付けた時、彼らはそれこそ生命の核なのだと歓喜し、――それを替え続ければ命を繋ぎ止められる考えた。

頭殻に収まった他の動物より明らかに発達した神経組織に人類の特異性を見出した時、彼らは自らと他の生命とに一線を画し、――それにさえ替えが利けばという発想にまで行き着いた。

分解すればするほど、分析すればするほど、解析すればするほど、人類は新たな可能性の発見し狂喜乱舞する。

憧れた神秘の探究はやがて実用性を求める旅へと変化して、その貢献によって人々の生活や社会は進化していく。

産業革命以降、生命の歴史として地中に閉じ込められていた二酸

化炭素が大気に放たれ、急加速した技術進歩に今まで生命が創り上げてきた環境は著しく変貌していった。

人類が環境を蹂躙し始め、人工という言葉は自然の対義語に。19世紀にはクローン技術が産声を上げ、その後胚性幹細胞技術も産湯に浸かった。

臓器を替える。それは自我の成熟故に生命の継続を、不老不死を願い続けた人類の夢の一片だ。

拒絶反応などの問題から未だ未完成な臓器移植を完成させ、がたのきた部品を交換し続けることで生を維持する。老化と共に減少していく脳の細胞をも継ぎ足し続け得る未来を彼らは確かに見据えている。

生命を見失った人類が最も命に執着しているというのはなんとも皮肉。

何にせよ、それらの技術が人間の叡智の象徴であることに揺るぎはないけれど、知性はそれ単体で技術にはなり得ない。

尖った石の切れる理由を知っていようとも、加熱殺菌という考えを持とうとも、乾湿の性質を分かっていようとも、それは結局個人の経験を出ず、その知は朽ちる身体と共に地に還り、次世代に受け継がれることはない。

知識を積み重ねられない以上、人類は同じ場所をぐるぐると回り続け、文明は発展しなかったはずだ。

ならば・・・・・その発展は何に起因するのだろうか？

その答えは知識の伝達（生殖）。生命が自己保存で栄えたというのなら、知識の継承こそが人類の自己保存であり、情報が彼ら第二の遺伝子だった。

ＤＮＡとは違った自己保存、それが人類と他の生物とを別(わか)っている。

言葉で知識を伝え、文字で知識を記し、社会で知識を生かし、文

明で知識を実らせる。多くの価値観が混じり合い淘汰し合って、より支持されるモノが後世に残っていく。

生物淘汰の焼き直しであり、それは彼らの技術にも言えることだろう。

既出している発想の模倣。

けれどそれは決して猿真似などではない。

電気を使う魚類がいようが、太陽光を電気に変える器官を持った蜂がいようが、それを体外でかつ勝手よく造り出せる生命は人類だけで、ヒ素で増殖する細菌や宿主を性転換させるバクテリアがいるのなら、そんな生命の発想すらをモノにするのは人類の特権だ。

より便利に、より低コストに。人類が掲げるそのスローガンは彼らの指標である。

自ら目標を定め進む限り、技術という生命の呪縛から逃れた第二の進化は人類の支配下にある。

子供の頃目を奪われた光景、いつかあんな風に・・・、そんな憧れや望みに支えられ技術進歩は絶え間なく続いていく。彼らの欲望は彼らの未来に希望の光を照らし、彼らの欲望は彼らに息吐けぬ宇宙を教え、彼らの欲望は彼らに地に眠る生命の価値を教え、彼らの欲望はやがて彼らを新たな境地へと羽ばたかせる。

発想し、あるいは模倣し、それらを応用するそれこそが人類の叡智であり、――――知恵の進化と知識の遺伝の世界が人類の独壇場だ。

■

一旦色神睦月の手中に戻った5本の光の束が再び自分に向けられて織神葉月は斜め前へと踏み出す事でそれを避けた。

触れれば焼き切られると分かっている触光相手に触手は分が悪い。ある程度操作が利くようにはなったとはいえ、結局は背中から生えている葉月の触手は根元を狙われれば簡単に焼き切られてしまうだ

ろうし、これ以上無駄に血肉を消費できる余裕もなかった。故に攻撃手段を発火能力（パイロキネシス）に変更して額前に小さな火球を無数に作り出す。

そのまま、自慢の脚力を使って一気に距離を狭めにかかるが、睦月は葉月という生物の接近に対して必要以上に慎重になっている身だ、触光に葉月を追わせながら右手に発水能力で水を溜める。

方向転換してきた触手を目で見ず背中でしっかり感知してそれが迫る前に間合い５ｍほど詰めた彼女は先に作り出しておいた火球を睦月に向かって飛ばした。それは睦月が思っていたよりも速さを持っていたが、彼女も先に用意していた水分で膜を張ってそれを防ぐ。

厚さ２ｃｍほどの防壁越し、火球を消し去った際の波紋で歪んで見えていた葉月の姿が、次の瞬間には物理的には紙に等しい水の壁を破り肉薄する。

（光の屈折で距離感が・・・！）

それに気づいた時にはもう葉月は手の届く範囲にまで踏み込んでいた。発破で距離を取ろうと再び右手を振ろうとして、それよりも先に葉月の足が睦月の腹を捉えた。

しかし、並の打撃ではビクともしない念力（サイコキネシス）の防壁にその蹴りはあまりにも貧弱だ。

何がしたいのか彼女が一瞬思考を鈍らせている間に葉月はそのまま睦月の起伏の乏しい身体をまさしく壁のように駆け上り、勢いを生かしてバク宙した。

それによって、飛び散る水滴と葉月の体で隠れていた触光が目に入った睦月は、自分がそれらに『自分に向かってくる葉月を追尾する』よう命じたことを思い出し、念力（サイコキネシス）が能力に弱いことも思いだす。

自爆、それを狙ってのバク宙。

それに気づいた時には既に触光は１ｍも満たない距離に迫っていたが、所詮は自分の能力なのだから発現自体を切ってしまえばそれだけで危険は回避できる。それに対して、葉月は回避行動の取りにくい空中にいる。

だが、この好機に身体をバラしてやろうと左腕を向けたところで、

葉月の方もさっきとは比較にならない大きさの火球を用意していることを知る。
躊躇なく顔面を狙って放たれた火球。
睦月は咄嗟にまだチ発破をチャージしていた右手を突き出した。
発火と発破、合わされば起こる現象は爆発以外にあり得ない。
宙にいる葉月は言うまでもなく、睦月も吹き飛び、崩れ去った倉庫の屋根に降り積もる新雪に身体を埋める羽目になった。
「なーぁるほど」
身体の温度を上げて雪を溶かして立ち上がった睦月は呟く。
「なるほど、なるほどな」
これなら触手を相手にしていた方がマシだったということを彼女は理解した。
触手という便利な器官が使えるのなら、無駄に身を危険に晒さずにいることがベストだったさっきまでは守りに入っていた。
確かに触手はもう勘弁願いたいが、受けに回っていた分動きの少なかったさっきと比べて攻めに転じた彼女の攻撃は凄まじい。
対応し切れなくなればアウト。それも体勢を整える時間を彼女が与えてくれそうにない。
睦月と同じく雪から脱した葉月が飛ばしてきた１０ほどのバレーボール大の火球を見ながらそう思った。
けれど、
「多重能力の扱いでオレに勝てると思うなよ」
左手の触光、そして右手の撥水。
５本の伸縮自在の光の触手が火球を迎え撃ち、雪へと突っ込ませた右手を伝って撥かれた雪が葉月の足場を崩す。そのまま続けて彼女の下から弾け飛んだ雪の欠片を結晶化（クリスタライズ）して今度は葉月に向け撥き飛ばした。
それが突き刺さるのを確認すると今度はそこから発破をかける。
真皮層まで届いていた欠片は肉を巻き込んで吹き飛び、ぱたぱたと白い雪に赤い染みを作る。

葉月は大して気にした風もなく、その染みに目をやって少し動きを止める。意味の分からない停止の後、彼女は踵を返して走り出した。

場所が悪いと考えたのか、あるいは体力の限界か。

傷を治さずに雪の積もった路地へと出た彼女を追って睦月も走り出す。そして、先ほど葉月の立っていた所に差し掛かった瞬間、足の裏に痛みを感じて転げた。

シューズを突き破って、クリアレッドをした氷柱が足に刺さっている。血痕が周りの雪を巻き込んで突起したらしい。

立ち上がって、葉月の去った方へと向けた視界には彼女の足跡と血痕が混じり合って一本道へと続いている。

「くそっ、時間稼ぎかよ」

狭い道路であの血痕撒菱を避けて通るのは良策とは言えない。

睦月は透視能力（クレアボイアンス）で葉月の位置を確認しながら迂回することにした。

未だ振り続ける雪は道を５０ｃｍほど埋めて、柔らかい新雪は踏みしめる度にきゅ、ぎゅと音を鳴らす。

馬鹿げた機動力を持つ葉月ならともかく、この悪路では睦月は大幅に能力が落ちる。仕方なく、足に熱を帯びさせて雪を溶かしながら進む。

しかし・・・、と睦月は疑念を抱いた。葉月の速度は決して逃げ切れる速さではない。

（じゃあ、何で移動し続ける？）

ここら一帯雪に覆われてるのは葉月も承知のはずだ。葉月の有利な狭く入り組んだ場所に連れ込まれるつもりもない。

ならこの行為の真意は何なのか？その疑問に達した時、睦月は左足を思い切り引かれた。

雪に隠れていた細い髪。

考えてみれば雪の積もった道の上など罠を仕掛け放題もいい所だ。

崩れた倉庫の雪は鉄屑が下敷きになっていて迂闊に動き回れなかったが、ただ降り積もっただけの路地の雪なら何が埋もれているか

は予測できる。足を引っかけたりして転びでもしたら睦月にチャンスを与えかねなかった倉庫跡は葉月には動きにくいフィールドだったのだろう。

それに比べれば、ここなら好き放題に暴れられる。

雪を被りながら引きずられていく睦月は、虎の口に至る前に雪で窒息しかねないことに気が付き慌てて熱気で雪を溶かした。

結合が弛んで液体へと変わった雪水がどばっと彼女の身体を濡らしながら流れていく。その水をいくらか口に入れてしまいむせながらも彼女は呼吸と共に回復した視界の中、ピンと張った黒い髪を何とか切断した。

気管支に入った水分を吐き出そうとして止まらない咳に顔をしかめて、まさか窒息が狙いかと疑ったが、それは甘い考えだということを次に視界に入ったモノで理解する。

曲がり角の壁に赤色をした氷柱が自分に突き出していた。串刺しにする気だったらしい。

もちろん、念力で守られている彼女には効かない・・・と、彼女自身がそう考えてかけて、さっき自分の足に刺さった鋭い痛みの感触を思い出し、血痕の付着した道を避けた自分の無意識にも思考が及び、そして止まった。

（何・・・で、念力を突き破れるッ！）

最初からそれができたとは思えない。できるのなら髪の一撃でバラバラにされているはずだ。

いきなり破れるようになった？それなら何時だ？

そこで思い出すのは自分の血を見つめていた葉月の行動。

（あの時か・・・）

それと同時に不可解な行動にも目がいく。単純に念力を破れるようになったのなら、髪に絡まれた時点で彼女の左足は切断されていただろう。

それはできない。けれど特定の条件下ではできる。

それが何なのか、睦月にはすぐさま分析できなかったが、とりあ

えず血には気をつけることに越したことはない。
研究所の屋根をこちらに向かって移動してきている葉月を確認しながらそう結論付け、もはや寄らせまいと広範囲高出力の火炎放射で迎え撃つ。
視界を覆い、かつ熱感知（サーモグラフ）も潰したところで、自身を守る念力を切り、攻撃に転用して葉月を思い切り殴り落とした。制御の難しい念力を睦月は2か所いっぺんに発現させることはできない。そのため今まで防御にしか使っていなかったのだが、絶対防御として機能しなくなった今はそうも言ってられなかった。
地面に叩きつけられた葉月は雪のクッションでダメージを負うことなく、埋もれた身体を捻って立ち上げ、そのまま睦月へと突進する。その最中に右手の甲を噛み切ったのを見て睦月は血と念力突破の関係性に確信を持った。
左手の触光を伸ばし応戦するが、葉月の運動神経で避けれない速さではない。もう一度殴り飛ばそうとした念力はそれを察知した葉月の触手が鞭打ちで相殺する。筋組織の悲鳴と空気の軋む音が響いて、距離およそ３ｍで葉月は火球を吐いた。
能力を破る凶弾が顔面めがけ飛んできては動いて対応するしかない。身を低く保ち、撥水能力で葉月をこかそうとして、自分の足場に雪がないことに今更気付く。自分がとかしてしまったせいで染み込んだ雪水が申し訳程度にあるだけだ。
それでも何とか撥き飛ばした水滴に葉月は止まることなく、伏せた睦月の顔面を殴りつけた。
念力の防御で彼女が物理的に飛ばされる事はなかったが、代わりに睦月と右拳の間にあるはずの透明な防壁を氷柱状に変化した血が突き破り、当然ながら彼女の頬とも突き破った。
動力に能力を使ってもあくまで摩擦による切断である織髪は防げても、超能力に弱い念力（サイコキネシス）では変化する能力である形骸変容（メタモルフォーゼ）は止められない。念力突破、解けてみれば大したことはない絡繰だ。
だが、突破されたという事実は痛みと共にその重大さを示してい

る。

「がっあぐぅ」

血氷柱を噛み砕いた睦月は、一度切って生み出し直した触光で葉月の右腕をふっ飛ばし、左肩、右足、横腹2か所を貫く。

焼ける肉の臭い、口の中でする溶け始めた血の味、痛みに朧げになる生の感覚。

離れた葉月も、左頬を庇う睦月も、もう満身創痍と言っていい。

一見睦月が押されっぱなしに見えはするが、つけられた傷を治す余裕もなく、触手も使わず危険な肉弾戦に持ち込もうとしている様子からも分かるように葉月もかなり追い込まれている。

べっとりと血がついた右手を振るう睦月から逃れ、葉月はまた逃げに転じる。

それに悪態を吐こうとするが、頬の傷から空気が抜けてかまともに声も発せない。何とかそれを塞いでから睦月は葉月を追った。

#

野村椿（のむらつばき）はその戦いの様子を見て、おおよそ人の所業ではないと結論づけた。

比較的遠方からの監視を任された泥底（ヌタ）部隊の彼女は倉庫内での戦闘を直接見たわけではないが、その倉庫が崩壊した時点でその出鱈目さが分かろうというものだ。

むろん一般的な能力者でも同じ様なことができないとは言わない。発火能力者（パイロキネシス）にはあれよりもえげつないことをやってのける火兎だっている。

けれど、逃げることなくその爆発の中に留まるようなふざけた暴挙に続き、瓦礫から出てきた2人には事もなげに身体を修復した上、何故か一方には黒い羽根のようなモノを背中から生やし、もう一方は光の性質を無視しているとしか思えない挙動をするレーザーで反撃している。

超能力者との殺し合いに慣れているはずの彼女ですら、あれには畏怖を覚える。

あり得ないとは言わない。普通できてもやらない、というのが正しい。

人間性を失っているとしか思えないあんな方法を取る連中を人間とは呼べない。

それに・・・、彼女は鉄榴処女（アイアン・メイデン）のスコープ越しに葉月を確認して、反吐が出ると吐き捨てた。去年8月に兄を殺したその人間もどき。あんな化け物の存在を許すべきではない。

彼女がこの地区で比較的高い研究所の5階で構えている鉄榴処女（アイアン・メイデン）という名の設置式の狙撃銃は、例の拷問具自体ではなくその伝説に語られる、処女の血で洗えば肌が綺麗になると信じた狂女が血絞り機として使用したという記述に基づかれて作られた頭のおかしいとしか思えない銃器だ。弾自体ではなく内部の殺傷片で負傷させるという仕組みは榴弾と変わりないが、仕込まれている殺傷片が通常使われる釘ではなく絡繰刃であり、着弾と同時に暴れ狂う刃に血抜きどころか肉も削げる。否、死体の惨状など考えたくもない有様であること請け合いである。

それをもってしても、対葉月の非殺傷兵器扱いなのだ。

研究だとか実験だとかそんなことで生かしておいていい生物ではない。

スコープに収まるその姿を見て思う。

・・・ここで殺しておいた方がいいのではないか。

もちろん、そんなことをすれば彼女自身も先がない。けれど、それでも今の内にという得体の知れない焦燥感がある。

自己犠牲など泥底（ヌタ）部隊に所属する時点で捨てていると自分でも分かっているが、兄のことを抜きにしてもあれをこのまま野放しにしておくことを考えると背筋に悪寒が走る。

もしもあんなものが世に出てしまえば・・・。

「ふぅ・・・」

息を吐いて、瞬きを数回、改めて両目に映る映像を見る。

倉庫から路地へと場所を変えた2人の戦いは逃げる葉月を睦月が追うという形に定まりつつあった。

ちょくちょくと凶悪なトラップを葉月が仕掛けることはあっても基本的に攻撃を仕掛けているのは睦月だ。

消耗させるつもりなのか葉月は睦月の能力有効範囲ギリギリを保っているし、睦月は少しでも肉を剥いでやると言わんばかりに触光を放っている。

その度に研究所の塀がごっそりと崩れ去り、火球に飲まれて数千万する研究資材が吹っ飛びと傍目狂気の沙汰だった。

戦闘が始まってからもう随分と経っているが2人の猛攻が収まることはなく、研究所から追い出された科学者たちが戻ってきたら泣き崩れるだろう。

ブロック塀へと突っ込んだ葉月が雪の粉塵舞う中から出てきた時には両手には崩れた巨大なコンクリートが握られていて、それを投げると同時に口から火球を吐き飛ばした。火炎の残りが口から漏れている。

当たれば身体が潰れかねないコンクリート塊を無動作で跳ね返し、電柱やマンホールや周囲の壁をも巻き込んで撥水能力で弾ける雪、止めてあった乗用車が宙を舞い、地面に戻る前に葉月に蹴り飛ばされ睦月の念力に弾かれスクラップになった。

さらにどうやら力加減を間違えたらしく水道管が破裂した強烈な水飛沫の中、魚の水を得たるが如し睦月は手をかざすが、その前に葉月の何らかの手段によって水は一気に蒸発してしまう。水蒸気が立ち上り姿が隠れ、葉月はまた移動している――――そんなやり取りがずっと続いているのだ。

戦場は次から次へと移動し、最初は遠くにあったはずの姿がかなり近くに見える。

右腕を生やす余裕はないくせに、大人しくはしているが未だ背中に触手はついている。血を使うのも難しくなってきたのか、攻撃は

ほぼ発火能力（パイロキネシス）に限られてきていた。
しかし、そう言った純粋な能力戦なら睦月に軍配が上がる。程なくして葉月は雪を気化させて煙幕代わりに姿を消した。
透視能力（クレアボイアンス）を持つ相手に大して意味がある行為ではないだろうにと、彼女はそこで疲れの出た目を休めるためにゴーグルを外した。鉄榴（アイアン）・処女（メイデン）と繋がっているそれは電子制御されたスコープだ。科学技術の粋を集めた次世代兵器を筒状のスコープを覗いて使ったりはしない。
汗ばんだ目元を拭って肩を解す。もう何時間もロクに動かしていなかった身体は油を差し忘れたモーターのように動きが鈍い。
監視という何時もに比べて温い任務とはいえ、その対象がアレだと緊張も半端なかった。集中力を持たせるためにもいざという時のためにも身体を労わる。
と、その時後ろで物音がして、
「――――ぇ？」
彼女は。

＃

場所と時は移ろい続け、傾き始めた陽の光は赤色を帯び始め、臼田物産第2倉庫から随分と離れた。
縦ではなく横に広がる研究所の中、5階という比較的高い建物に葉月が逃げ込んだことを水蒸気越しに確認した睦月は、一旦透視能力（クレアボイアンス）を切った。
逃げる葉月を追って能力を連発したツケが回ってきている。
ガンガンと響く頭痛に耐えながら、エントランスを左手で焼き切って建物に侵入する。人気（ひとけ）のないこの類の――――学校や病院といった施設はあまりにも不気味だ。
葉月に有利な屋内に入ることには躊躇はしたが、既に彼女自身限界が近い。早く追い詰めなければならない。休む暇を与えたくはなかった。

ガラスの破片を踏み砕きながらリノリウムの床を進む。
その間、念力（サイコキネシス）は切らさず、血痕が仕掛けられていないか注意する。脳と直接繋がっている目を使うせいか頭痛を激しくする視力系の能力はできる限り使いたくない。
待ち伏せという彼女懸念は、けれど、向こうからやってくる音源にかき消された。
悲鳴と足音。余裕のない声の主が近づいてきていることが大きくなる金切り声で分かる。
何が起こっているのか、状況が掴めないまま警戒を強める彼女の目の前、右に折れた廊下の向こう側から血だらけの女性が一瞬、転げながらとも四つん這いとも取れる滅茶苦茶な動作で姿を現したかと思うと、見覚えのある触手に出てきた陰へ引きづり込まれていった。
濁った悲鳴が1度、それ以後声らしい声はなく、次に廊下を支配するのはさっきとは違った音。
こつこつ、ずるしゅる、ぴちぴちびち、ぎちぎちべきり。
足音、触手の擦れる音、水音、そして何かがかしいで折れる音。
女性の代わりに廊下の角から姿を現した葉月はどこか満足げに赤い舌で唇を舐めてみせる。
今まで出番がなくて縮んで大人しくしていた触手がもごもごと蠢いていて、その隙間からさっき女性のモノらしき生足が見えた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
固まっている睦月を見て葉月は何を思ったか触手の中を探り、ベキリと音をさせてもいだあらぬ方向へとねじ曲がった腕を新しく生やした右手で取り出して言った。
「・・・要る？」
「要らねぇよ！！」
形骸変容（メタモルフォーゼ）を手に入れても絶対にそれだけはやらないと心に誓った睦月の叫びに、そう、とだけ返して背中に腕を戻す。おそらくは触手の奥に口があるのだろう。アノマロカリスの口と触手が背中につ

いていると考えれば分かりやすいかもしれない。
べきべきと骨が砕ける音と床に零れる血の音がしばらく、呆けている場合ではないと気付いた睦月が触光を伸ばすよりも前に葉月は踏み出していた。
食事で血と肉がダイレクトに戻ったためか、その速度がいささか早くなっている。
廊下という空間が限定された場所では触光の軌道は読みやすく、容易くそれをかわした葉月はついさっき睦月に差し出した食べかけの腕をもう1度取り出して振るう。袈裟斬りと同じ軌道を描いたそれは睦月の念力（サイコキネシス）に当たって肉が弾けた。骨の砕ける音とほとんど絞り取られた血の残りが飛び散る。
惨状。まさに惨状だ。
その中で葉月は笑みを深くした。
念力の強度が大分落ちてきている。
けれど、次の瞬間には眉間が寄せられた。
足りなくなった血と肉とを補充するのに野村椿の身体を使ったのはよかったのだが、速効性を重視して能力で血肉を自分のモノに変換したのは失敗だったらしい。能力使用に体力の方が底を尽きかけ、急激に体調を崩し始めた。滲む球の汗零れ落ちて血溜まりを僅かに薄める。
今度はそれに気づいた睦月が口を歪めるが、その次の葉月の行動は早かった。前腕部分が砕け散った腕を今度は火を纏わせて投げつける。それを睦月が触光で切り飛ばした時にはスプリンクラーが作動して天井から水が降り注ぎ始めた。その水が睦月に利用される前に根こそぎ水蒸気に変える。これまで何度も使用してきた手段ではあるが、屋外、それも冷気で満たされていた今までと違って狭い屋内で行われた熱気は凄まじい。
睦月が怯んだ一瞬に葉月は命綱として結んでおいた髪を一気に引く。体調に関係なく、離脱装置は剛速で彼女の身体を外へと放りだした。

「それじゃ、また明日」
「は？」
不吉すぎる台詞をフェイドアウトで聞いた睦月は、晴れた視界に葉月の姿を確認できず、改めて台詞を咀嚼して意味を理解した。つまりは、
「に、にににに逃げっ・・・！」

＃

冬の昼は短い。夕暮れ空を仰いだかと思えば、すぐに薄暗い藍色の絵の具が空を塗り潰している。
全く服として用を成さなくなってしまった衣類を捨て新しく買い直した葉月は自分の住むアパートの正反対、繁華街へと移動していた。元々研究所地帯は繁華街寄りであるというのもあるし、何よりアパートに帰るには葉月の体力がもたなかったからだ。
銃器を使っている内はよかったのだが、本格的に能力戦になった際、睦月の手数の多さに能力を多用せざるを得なかった。誤算、というわけではないが、ここまで切迫した戦闘は葉月にとって初めての経験だった。そういう意味で引き際が分かりやすく体調で洗われたのは幸いだったのかもしれない。
普通に電車を使って釧の住む街にまでやってきた葉月は、当然ながら彼の部屋に寄ることなく近くのホテルに宿を取ることにした。その際に拘ったのはワインセラーがあるかどうかで、部屋に入ってまずワインを口にしたのは言うまでもない。
酒は百薬の長とは言ったもので、どこぞの鬼ではないがそれだけで身体がいくらか楽になる。３本ほど空にした後、彼女は身体を清めて更に代謝を上げてから食事の注文をした。スイートルームだから大抵のことは許されるという偏見の元、肉類を中心に可能な限りの食べ物を持ってこさせた。
それらを平らげながら、ネットから学園都市のチャンネルを視聴

する。
超能力を見世物にした番組を眺めて考えるのは、睦月の能力を打破する手段だ。
戦闘を一時打ち切りにしたことはメリットもあるがデメリットも大きい。向こうに休息と策を練る時間を与えてしまうのだ。せっかく追い詰めただけに惜しくはある。
明日、彼女の念力はまた絶対的な防御力を誇ることになるだろう。それをどう突破するか。
念力能力者（サイコキネシス）が厄介すぎる能力者だとは知っていたが、実際対峙してその鬱陶しさがよく分かった。
あれはない。
しかもそれだけではなく、他の能力まで操れるというのだから卑怯もいいところだ。
手羽先１０本を骨ごと噛み砕いて胃に収め、ワインをラッパ飲みし、ステーキをレア・ミディアムレア・ミディアム・ウェルダンと焼き加減で食べ比べ・・・・・そうやって彼女の夜は更けていった。

＃

雪と汗と血に塗れた身体を繁華街のスパで清め終わった睦月は、左手がなくなったことで幾分不自由しながらも携帯を弄っていた。両手操作派である彼女にいきなりの片手操作は難しく、時間をかけながらメールを一通打つとそれを送信してポケットにしまう。
買い直したマフラーを巻き直し毛糸のニット帽を深く被って、しばらく伏せていた顔を上げる。動かし続けた足が行きつけのファミレスまで身体を運んでくれていた。
宿はカプセルホテルでも取るとして、まずは空腹を訴えてくる身体に燃料を押し込まなくてはならない。葉月と違って他人の血肉で腕を生やすような真似はできない睦月だが、身体強化で代謝を上げ

ることで効率的に身体を癒せる。
食べて寝て。それが身体を労わる最善だ。
いっそ奮発して高圧酸素カプセルでも利用しようかとドアをくぐりながら考えていた睦月はテーブルを探そうと意識を店内に向けて・・・固まった。
眉をひそめ、小口が開いたまま数秒、止まっていた思考が再起動して彼女はすたすたと早歩きで目に入ってきたとある人物の許へと進み、向かいの席に座った。
「よぉ、クサミクシロ。しばらくぶりの予期せぬ再開じゃねぇの。ところでオマエ金は持ってるな?持ってるよな?よし奢れ。拒否権はねぇ、オマエはオレに奢る義務があるんだ」

エスカルゴのバター焼き、リブステーキ、ハンバーグ、チーズハンバーグ、グリル、ポテトフライパーティー盛り、イカスミスパゲティー、タラコスパゲティー、お子様セット。
テーブルに次々と置かれていく注文した品々に朽網釧はもはや呆れるしかない。メニューを開いて矢継ぎ早に注文している際にはそんなに食べれるのかと呆れたものだが、実際それをすごい勢いよく胃に収めていく様を見ると今度はよくそんなに食べれると呆れてしまう。
ドリンクバーで混ぜてきたらしい緑かかった黒いジュースで流し込むようにしてステーキやハンバーグを平らげて、きた時よりは冷めたエスカルゴに取り掛かった睦月はふと思った。養殖のリンゴマイマイ、哺乳類だって乳児期にしか飲まない乳を加工した乳製品、当然栽培したガーリック、それらを加熱した調理法。まさに人間の食事だ。夕方に見たスプラッタな食事風景と比べれば雲泥の差がある。
「人間万歳!」
いきなり叫んだ彼女に釧が変なモノを見るような目を向ける。

それを無視して彼女はあっという間にエスカルゴを食べ終え、今度はポテトフライにケチャップを大量にかけて食べ始めた。その1本を摘んで釧は自分が唯一頼んでいた珈琲を口に含む。それからとんでもない闖入者が現れたことで忘れかけていたそもそもの目的を思い出して、バックから1冊の本を取り出した。

『PKの系統と色別の理論ー色彩混合の可能性についてー』。最初は読むのに苦労したが、最近は何とか意味が分かるようになってきた物だ。

「ん？何だそれ」

それに気づいた睦月の質問に表紙を見せて答える。すると返ってきたのは予想とは違った反応だった。

「・・・いやいやいや、まてコラ。何で持出禁本（そんなもん）持ってやがる」

「え、葉月に貰ったんだけど？」

その答えが彼女にとっては予想の斜め上を行く答えだったらしく目を覆って嘆いてますとばかりに呟いた。

「本当、やりたい放題だよな・・・色別理論は他方傾向追究所の専門で基本的に極秘事項なのに」

「へぇ、そうなんだ。というか、さっきからその言い方だとこれについて知ってるの？」

「当たり前だオレの専攻だぞ色別理論は。つーか、その門外不出の情報をオレが手にするために作られたのがソレであってだな？オマエが持ってるのがおかしいんだ。返せよ」

「嫌だ。せっかく読めるようになったのに！」

「読めても使えねぇよ！宝の持ち腐れもいいところだ！」

言い合い、取り合い、両手の釧に力及ばず、思わず左手を伸ばして、その先がないことに後で気がついた。

初見ならともかく左手が健在の時分に一度会っている以上、その変化は釧の目に留まる。だからテーブルの下に隠しておいたというのに、気が緩んでいたらしい。今更後悔しても遅い。

「・・・・・その手どうしたんだ？」

その問いにオマエの彼女に盗られた、と言えるはずもなく、
「別に大したことじゃねぇよ」
適当に濁して返して、その内生やすとも付け加える。
もちろんその治癒法が葉月の能力を奪って、ということも当然言えない。
「・・・そういえば、前に会った時に君さ――――」
「ムツキだムツキ。教えただろ」
「睦月・・・君？」
「・・・・・・一応、オレにも女のプライドってものがあってな？」
微笑みながら言う睦月だが、目が全く笑っていなかった。
「失言でした睦月さん」
「まぁいい。で？」
「その内生きるか死ぬかする人間だとか何とか言ってなかったっけ？」
何で生きてるの？ある意味そうも聞こえるその台詞にどう答えていいものか悩む。
「そーいやそんなこと言ったなぁ・・・」
というか、つい数時間前その生きるか死ぬかの状況を体験してきたばかりなのだけれど、まさにオマエの彼女に殺されかけてたなんてやっぱり言えるはずもない。
考えてみれば彼に対して言えないことが多すぎる。そんなことは分かっていただろうに、どうして自分は彼に絡んだのか。今更になって首を傾げた。
「まぁ、冗談と予知を交えた真実だと思ってくれ。
それよかオレも訊きてぇんだけどよ。オマエ、オリガミの教育どうなってんだ？」
「は？」
「は？じゃねぇ。前にも増して頭ぶっ飛んでるぞアイツ、どー考えてもオマエの調教不足だろ」
「いやいや、調教って」

「手綱を握るのが彼氏の役目」
「いやいやいや彼氏って。そりゃ、葉月は可愛いけどもさ」
「・・・・・・」
あまりにも自分の目の当たりにした印象とそぐわないその言葉に睦月は釧を得体の知れないモノを見るような表情で凝視して、しばらく考えた後人差し指を彼に向けて口を開いた。
「オマエ目は・・・」
「節穴じゃないよ」
「脳は・・・」
「腐ってないから」
「熱は・・・」
そう言って今度は釧の額に手をやる。
「ありません」
「やっぱ脳が逝かれて・・・」
「ない。というかさっきから失礼な」
「いや、コレばっかりはオレが正しいって！」
睦月の脳内を締める葉月のイメージは髪と触手と炎を操るバケモノだ。時が経ってないが故に鮮明に思い出されるトラウマモノの記憶を探っても『可愛い』という表現は掠りもしない。
一瞬、『地獄の箱入り娘★悪魔っ子はづきん』という恐ろしいフレーズが脳裏を過ったが、どれだけデフォルメしても葉月が『可愛い』キャラクターになることはなかった。
釈然としない気持ちを持て余しながら、彼女はイカスミスパゲティーを食べ終わり、次にお子様ランチに取りかかる。
「うーん、可愛い？ぷりちー？」
何やら難しい顔をしてしょうもないことを考え始めたらしい彼女を放って釧は結局奪われなかった本を開き直した。
第６項のＥＳＰのＰＫ的分類。前に読んだ際に引いた赤線に手を当てながら数秒思案、メモ帳を取り出して図形を描いてみる。本のページにあるグラフを眺めて、その２つにある関係性を理解しよう

と試みるが、教科書のように教えるために書かれてはいないこの書物は行間が読みにくい。
しばらく考えて、思えばこれの内容をよく理解している人物が目の前にいることに気がついた。
顔を上げてみると、彼女は最後に残しておいたらしいプリンを嬉しそうに掬っていた。
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・何だよ」
視線に気がついて口を尖らす睦月。羞恥心はあるのか頬が少し染まっている。
「いやぁ、何でも。・・・あぁこれ教えてほしんだけど」
えー、と不満を言いつつも彼女は本を引き寄せる。さっと内容とマーカーを確認しただけで何につまづいているのか分かったらしく、メモ帳とペンを取ってグラフを描き始めた。
「ＥＳＰだのＰＫだのってのは要は見た目での分類なんだよ。能力波の観点から見た場合この２つの違いってのは横軸の幅・・・周波数の違いで縦軸はあんまり変わんねぇの。念力能力（サイコキネシス）から別色に変更するのに縦軸を変動させたように横軸を弄ってＥＳＰをも使おうって考えなんだが、これにはＥＳＰとＰＫの明確な差である出力の仕方が問題になってくるんだ。ＰＫは基本放出しさえすればいいが、ＥＳＰは知覚操作が基本だから能力波の使い方が違う。で、それをどう理論的に説明するかってのがこの文で――――」
・・・・・こうして、彼女の夜も更けていく。

＃

グランドではしゃぎ回る同類の姿を目で追うも、その焦点は決して合わせない。
友達と呼称した１人が何時の間にか消えていることに気づいたその日から、私は彼らを識別することを止めた。

ここには何もない。
ここでは何もいらない。
大切なモノができてしまったら、耐えられなくなってしまう。
だから、友はいらない。
だから、心はいらない。

――――それでもきっと、彼女にはそれらを捨てることなんてできなくて。

第５６話－　色神睦月。－Ｔｒｅｅ　ｏｆ　Ｋｎｏｗｌｅｄｇｅ－（後書き）

※不老不死……には大して憧れませんが、世界の終わりとやらは見てみたいとどこぞの最悪染みた事は戯言を読む前、随分昔に思った事が（笑）

　そういえばどっかの国に、死体を冷凍保存して将来技術が進歩したら生き返らせる……というサービスやってる会社ありませんでした？

　身体全体のプランと頭部だけのプランがあったような。

※未完成な臓器移植……「日本で最初の手術につき、記者会見を行いたい」　ｂｙ和田寿郎

　今年のバレンタインデーに死去。彼については和田心臓移植事件を参照。彼のせいで日本の臓器移植は遅れたと言われているとか。

　今では免疫抑制剤なんかも副作用が少なくなってきて技術は向上してるようですが、やっぱり脳死判定は未だにネック。こればかりはねぇ。

　それはともかく、京都大学による人工多能性幹細胞研究成功が２００６年、臓器移植法改正２００９年。何故に脳死ばっか議論するし。

※自己保存・遺伝子……ちなみに人工多能性幹細胞は精子や卵子も作れるので同性同士の子供を成す事も可能らしいです。

　まぁ、だとしてもいつの時代も技術より社会が受け入れられるかが問題になるのでしょうけど。

　「どこかやっぱり足りない感じがする。遺伝とかのせいでしょう。マイノリティーで気の毒ですよ」　同性愛

者について　ｂｙ　石原慎太郎都知事
「自分の子供を持つということは男性的な欲求でもなければ女性的な欲求でないのです。それは人間的な欲求なのですよ」　男性として子供産んで　ｂｙ　トーマス・ビューティ
→悪意を持って台詞を選択してみました。
並べてみるとますます酷……うん、何にしても言っていい事と悪い事ってあるよね。

※野村椿……彼女にしてみれば葉月も睦月も化け物。兄、翼くんの活躍は『第２９話－　絶命領域。－Ｇｅｎｏｃｉｄｅ－』を。

※形骸変容を手に入れても絶対にそれだけはやらない……葉月が人間じゃないので食人主義ではありませんよきっとたぶんおそらく。でも普通やらない。

※「に、にににに逃げっ・・・！」……馬鹿野郎！だからあれほどペイントボールの効果が切れてないか確かめろと……！

※『ＰＫの系統と色別の理論－色彩混合の可能性について－』……『第３２話－　先輩後輩。－Ｙｏｕｔｈ－』にちゃんと既出。しかし忘れられている気がするので伏線になってるのかは自信がない。

※「オレにも女のプライドってものがあってな？」……けれど胸はない。

※「葉月は可愛いけどもさ」……脳が腐ってるというより、ひよこの刷り込み。とうに手遅れ。そして活躍はもう少し先。

－－－

さて、知恵の樹－ｔｒｅｅ　ｏｆ　ｋｎｏｗｌｅｄｇｅ　（ｏｆ　ｇｏｏｄ　ａｎｄ　ｅｖｉｌ）－。別名『善悪の知識の木』のお話です。何故か葉月が押してるように見える上に、展開的には動きが少ないなぁと思わないでも。
そして1カ月1話のペースになってる気が……ごめんなさい。
ただでさえ戦闘シーンに食傷気味なのに公募と一緒に進めてるのでどうしても遅いんです。

そして葉月の捕食シーンは、『ホラーやモンスターパニックと同じ扱いなので残酷な描写ではない』のか『人間でヒロインが触手使って共食いしてるので残酷な描写』なのか……。
けれど触手の使い方はあれであってるんだ、生物的に。

公募締め切りは4月10日。残り50日を既に切りました。
そして進行具合は40%ほど。一応物語的には半分行ったのですが、推敲の事を考えるとそれぐらいの進行度に。
大丈夫、私は追い詰められてできる子なんだ！
……公募の方を取りあえず優先させていただきますので、やっぱり次も遅れるかもしれません。

公募の方はちょくちょく『白桃シロップ』の方に上げるつもりではいるので、3月・4月中はそっちの方を様子見して貰えば更新してるかも。
『白桃シロップ』は名探偵×百合ものです。

それで『白桃シロップ』に関して質問なんですが。

1、フォークダンスで円になって踊ってるイメージがあるのはマイム・マイム？オクラホマミキサー？

2、『大好きです』と『愛してます』どっちがいい？

作者的にはマイム・マイムで、『大好きです』なんですが、如何せんフォークダンスなんて踊った事がないので馴染みがない、『愛してます』の方が意味合いが強い気はするものの語呂が悪い気がするなぁ……と微妙なので。
結構大事なシーンで使われる予定なので是非お教えください。

あ、それから葉月の元ネタ、次話辺りで発表しようかなと思ってますので、思いつきましたらこちらも投票お願いします。

では。

第57話ー　万物と生命の境界。ー"for　Eve"

大変長らくお待たせしてしまいました。すみません。
『エキ日々。』再開です。以下、注意事項です。

※　前回・前々回・前々々回の話の再読を”強く”お勧めします。
（作者も色々忘れて読み直しましたー）

※　大災害を想起させる可能性のある表現が含まれておりますので、
ご気分を悪くする可能性のある方はお読みになるのをお控えいただけると幸いです。

第57話ー　万物と生命の境界。ー"for　Eve"

そして見つけた。
壁から唯一覗く彼岸の建物の屋上に、1人の人物。
ここの同類が着る簡易すぎる緑の着衣、自由にならない髪はしばらく切られていないのか随分伸びて、男か女かは不明。
その顔には表情というものがない。
意思というものがない。
精神がない。
心がない。
命がない。
ない。何もない。
そこに在り続けるだけで、何にもない。
そもそもそこにいるという行為を成していることすらが信じられないほどに、何も汲み取れない。
夕焼けを背にして、ただただ突っ立っているだけ。
なのに、
イメージは紅。
濃黄から山吹、夕赤に濃紅。
赤き空を従属して佇む黒き塊。
紅の逆光がソレを黒く見せて、その輪郭を強調する。
その口が、何かを紡いでいる。
ひたすら呟き続けている。
身体も頭も視線も固定したまま虚空に意識をやっているソレは、口だけを動かしている。
聞こえもしないその声がまるで呪詛のようだと印象付けられて、見るだけでも精神を冒されそうな光景なのに目が離せない。
紅を通り越して混沌として密度を増す黒い絡繰人形。
「・・・××××××・・・」

何を、
「・・・・・・××××××」
何を言っているのか？
「××××××・・・・」
分からない。分からないけど、
「・・・××××××」
その言葉を知っておかなければ、いけない気がして――――
「――――・・・××××××」
その唇が今まで繰り返していたのとは違う台詞を口にしたのだと理解した時、
ギュルリと、今まで何も見ていなかった目がこっちを向いた。

＃

――――お互いがお互い、様子見とばかりに能力の全力使用を嫌った結果が、昨日の決定打のない戦闘だと理解して、今日こそはと意気込んだ結果、引き起こされたのは惨状だった。

初めて地球に雨が降った日。
それは大気温度が３７４度を下回った瞬間だったという。
大気の大部分が水蒸気で満たされていた地球誕生当時、飽和状態だった水蒸気は、富士山頂の低気圧下で沸点が下がるように、高圧下で上がった沸点の限界温度である３７４度を切ったその時に、一気に水になり大量に降り注いだ。
もちろん始めは、またすぐに蒸発してしまっただろう。
降っては上がり、注いでは昇り・・・熱を奪うことの繰り返しの果て、ついに大気は冷やされ、雨は地表にたどり着いた。
それが海となってから４０億年以上経った今、冷えた大気は雨を雪に変え、生まれた頃とは様変わりした地上へと舞い降りていく。

クリスマスから一夜、キリスト教がそれほど浸透していないこの国でも大して意義も分からず祝うだけ祝う日とはいえ、そもそも休日ではない聖誕日から1日も経てば、繁華街の様子はいつもと変わらないものに戻っていた。

もちろん、冬休みに入って羽目を外す若者も多くいて、平日そのものとは言わないけれど、サラリーマンやショッピングに勤しむ人々が、まだ朝に分類される時刻とはいえ、繁華街を行き交っている。

そこに、いきなりの爆音。

彼らが見上げる先、ホテルの部屋から煙が上がっていた。割れたガラスと共に飛び出してきたのは黒を纏った少女で、彼女が部屋の内外でいきなり変わった気圧ではためくカーテンの端を掴んだ。

が、それとほぼ同じタイミングで、轟音が高層ビルの間を乱反響し、後頭部に衝撃を受けたらしい少女は再び宙に放り出された。

さらに続く轟き、それがどこから来るのかは分からない。

けれどその非現実的な音が、どうやら狙撃による銃声だと『へいわのくに』の日本人でも気がつきだした頃、3発目の弾が、少女――織神葉月の顔面を襲った。

それを難なく口で受け止め、吐き出して、目下26階から急落下中の彼女はホテルの壁を蹴っ飛ばし、どごんと大きな音をさせて跳躍。それによって剥がれ落ちたコンクリート片が落下し、駐車場の送迎バスがへしゃげたのを見て、やっと地上を這う人々はその異常事態に悲鳴を上げた。

11時13分。色神睦月、ホテルで寝入る葉月を襲撃。

泥底（ヌタ）部隊の1人を使い、マット型の薄っぺらい爆破装置を彼女が泊まった部屋のドア下から滑り込ませての爆撃。対し、葉月は窓を破って跳躍し、ホテルから脱出、発火から発展させた発破を付加した一跳びで、狙撃犯睦月に急接近した。

狙撃不可と判断した睦月が空中の葉月に向けレーザーを放ち、葉月がそれを爆炎で弾き飛ばし軌道を逸らした結果、高出力の光線はオフィスビルを襲い、その角を三角錐型に切り取った。

切断された四面体の塊はそのまま下にいた通行人を巻き込んで更なる悲鳴を上げさせたが、それはほんの序の口にすぎず、次に落ちてきた少女の形をした化け物は、通勤者を乗せた市営バスに墜落し、真ん中からひしゃげたバスは、背中を折って自らの頭と尻を激突させた。

それはまるで怪物の襲来だった。

鉄の裂かれる耳障りな音、人の金切り声と呻き声。

路面の汚れを巻き込んで黒ずんだ道路の雪解け水に赤いモノが混じり、ガロガロと地から離されたバスのタイヤが虚しく空回りしている。

べきべきと、最も衝撃を受けたはずのバスの中心部から何かが出てこようとする物音を聞いた時、群衆のパニックはピークに。

逃げまどう人々の中、睦月はビルの屋上から滑空でソフトに降り立ち、葉月は鉄塊の中から姿を現した。

両者、ゆっくりと歩み寄り、５ｍの距離を残して対峙した。

「モーニングコール、どうもありがとう」

「いやいや気にするな。本当はフロアごと焼き払うつもりだったんだが、なーぜか小規模になっちまって申し訳ないぐらいだ」

「そうだねぇ、どうしてか僕の部屋の周りをうろつく人間がいたからさ、手足ちぎってあげたんだけど、まさか爆破スイッチが奥歯に仕込んであるとは思わなかったなぁ」

「あーかわいそうに、手足切断される前提で作戦に組み込まれるなんて、使い捨ては辛いなぁ」

「その駒を利用した人間が言っちゃあ駄目でしょ。全く、人員を借りるのはどうかと思うよ？」

「おいおい、人の血肉を借りたヤツに文句をつけられる筋合いはないぜ？」

あははうふふと笑い合う２人。

逃げまどう群衆など目に入らないかのように、しばらくの場にそぐわない笑顔を振りまいた後、先に動いたのは睦月だった。

容赦ないオレンジのド太い一線。
５m、それも光速で一直線に向かってくる攻撃を、予備動作から見抜いて葉月は避け、光の筋はそのまま後ろにあったバスの残骸を直撃した。
高熱に晒されてか、あるいは切断による出血のショックか重要機関の損壊か、聞こえる悲鳴が絶えた辺りで、横に避けながら睦月に向かっていた葉月は太股にホルスターで吊したダガーナイフを引き抜いた。
袈裟斬り、物理攻撃のそれを念力で受けようとして、効かないことは前日に分かっている攻撃をわざわざ仕掛けてくる彼女に違和感を覚えて一歩下がる。が、わずかに伸びた――――能力によって変容した刃に新調したコートが１０ｃｍほど斬り裂かれた。
（なるほど・・・一度体内に取り込んだな？）
となると、腰の拳銃の弾も念力で防御するのは止めた方がいい。
２撃目、突き出される刃を発破で腕ごと逸らし、睦月は左手に触光を作り出した。
逃げ場を与えないように覆おうとする光の触手を、睦月（ほんたい）自身を発破で引き離すことで回避して、対抗するように背中に生やした４本の触手で後ろ焼き焦げた鉄塊を睦月へと放り投げる。
彼女自身はともかく、逃げ遅れていた通行人にとっては溜まったものじゃない。
睦月が弾き飛ばした塊がまだ人のいるビルのエントランスに突っ込み、建物を揺らした。

その日、繁華街の周辺を歩いていた彼らが、そのことが致命的な不運だと気づいたのは、空から注ぐ軽自動車の数々を目の当たりにした時だった。
放物線を描き落下する、人を乗せたままの車体が車道を抉り、人を押しつぶし、あるいは巻き込みながら８車線の道路を襲来したか

と思えば、次に目に映ったのは天を劈く高音を響かせながら、橙の筋が近くの高層ビルを一線、開店準備中の店もまだ多い商店街のアーケード内を潜り抜け、その奥のターミナル駅2階の喫茶エリアを消し飛ばしていく・・・。

進化能力と進化能力、進化する相手を叩き潰すために進化しようとした、相互作用の結果、十数時間の間に飛躍的に能力が底上げされたものの、それがお互いにそうであることを再会の時点で理解した2人は、能力で打ち負かすことをあっさり諦めて、昨日同様エネルギー切れを狙った戦法に切り替えた。

葉月はそこら辺のモノを使った派手な物理攻撃で念力を過剰に使わせることで、睦月はとにかく彼女を切断して再生で体力を使わせることで体力を削りにかかり、それが先ほどの惨劇へと繋がっていて、それは今も継続している。

砕けるアスファルトに鳴り響く地響き。

念力対策として、触手の鞭打ちと同じように、許容限界を超える暴力で攻撃を通すという、シンプルで正攻法な対策を一応は考えていた葉月の腕力や脚力は、正直もはや洒落にならない破壊力を保有している。

疾駆すれば蹴られたアスファルトは後方へと吹っ飛び、拳槌が地面を捕らえれば振動で跳ね上がる。

本当なら自動車を投げつけるのではなく、その手と足で何十回と殴りつけて内蔵破壊を狙いたいのだが、さすがに睦月はそれを許さない。

前日に比べて明らかに異常発達した電熱線の威力と有効距離。それは身体強化系と相性がよい出力系なのにも関わらず、昨日は生かせなかったその有効性を今度こそ最大限に利用してやるという意志の表れだ。

能力使用を控えたい葉月にとって、一撃でも熱線を食らうことは避けたい事態で、どうしても接近戦に慎重にならざるを得ない。

それをいいことに、彼女は発電能力からかなりかけ離れたモノに

なっているレーザーを連発する。
だが、その派手な攻撃に反して消費エネルギーは少ない。
葉月が身体の改造に重きを置いていたとするなら、彼女はエネルギー運用の効率化に力を入れ、一晩考えた結果、一緒くたに発電能力で行っていた発電と操電を分けて、エネルギー源を発電能力そのものに頼らずに、もっと高エネルギーを作るのに適した質量をエネルギーに変える方法を利用している。
質量をエネルギーにする。それは質量保存の法則から外れた、物質誕生――――宇宙誕生に纏わる原理だ。
物質の誕生は宇宙誕生から数十分後。ビックバンの熱が2兆Kほどに下がった頃、陽子と中性が生まれ、衝突し重水素は作られ、それがさらに中性子を取り入れ三重水素が、その核分裂でヘリウムが発生。とりあえずはそこまでで止まった元素合成は、恒星内の核融合反応で周期表の鉄までの原子核を、さらに超新星爆発によってそれ以降の原子を生み出すに至り、現在の宇宙や星を創った。
これがいわゆる宇宙の歴史、物質の誕生なわけだが、これらのことから分かることは、原子核はビックバンのエネルギーから生まれるということであり、裏を返せば核を崩壊させることによってエネルギーを得ることができるという理屈が成り立つのだ。
核からエネルギーを取り出して、陽子や中性子の数を変化させ、質量の違う物質、つまり別原子を作り出す。
原子核分裂。原子核融合。
恐れられ、あるいは忌み嫌われるその反応は、そもそも我々の存在の根底にある。
放射線が生物にとって害であるのは、身体や遺伝子を構成するアミノ酸や糖が破壊されてしまうからだ。
太古の地球、現在とはかけ離れた組成だった大気に雷が落ち放射線が差し、その刺激で起きた化学反応の結果生命の素であるアミノ酸が生まれた。酸素すらなかった大気に放射線を遮ることはできず、そのままでは再び分解されたであろう生成物が破壊されずに生命と

なれたのは、雨が作り上げた母なる海の加護があったからにほかならない。

核反応で生まれ、放射線で産まれ、そして今なお放射能に翻弄される人類が、それでも効率的なエネルギー生成を求めるというのなら、人類の英知を司る色神にこれほどふさわしい方法もないのだろう。

核子操作。陽子と中性子を操れれば、核融合も核分裂も、放射能の除去も可能。

そもそも放射線だって電磁波――――可視光線や紫外線の仲間なのだ。

レーザーとして使用するのに、これほど適した副産物はない。

有効射程範囲５ｍだった彼女がいきなり数百ｍと範囲を伸ばせた理由は前夜に手配したプルトニウムから取り出した莫大なエネルギー故で、その大げさな火力はむしろそうでもしなければ熱が残って危険ですらあるからだ。

思惑以上に出力の出た光線がまた一筋、カラオケの入った５階建ての建物に穴を空けた。

お返しとばかりに触手で二輪車を飛ばした葉月は、見えない壁に当たりクラッシュして跳ね返ってきたそれを、発破でさらに跳ね返し、睦月の放つ２撃目（レーザー）に盾としてあてがった。細かい部品をまき散らしながらスクラップになって鉄屑に成り下がったバイクは歩行路の電柱を歪めてから地面を転がった。

線から触光へ。直進からしなやかな動きに変わった光が葉月の足を絡め取ろうと向かってくるが、右足を軸に一回転、豪速にて放たれた背中の触手に弾かれ、睦月は道路を吹き飛ばされていった。

直接的なダメージこそないものの、通常なら振動自体を通さないほど物質に対し有利な無物質の壁越しに、地から足を離れさせるほどの衝撃を与える出鱈目な威力に睦月は戦慄した。

腹に痛いのを食らった経験があるだけに、かなり堅くしておいたはずなのだが・・・。

「これだから化け物は・・・！」

４回のバウンドの末に乗り捨てられたワゴンにめり込んで停止して、彼女は体勢を整えるために周辺のアスファルトを熱で溶かし時間稼ぎをする。

が、そんなことでは全く臆しない葉月は、泥濘（ぬかるみ）直前で跳んで、熱にやられていない一点、つまりはワゴンに着地した。ガガンッと大きく揺れた車体の中から、５本の蠢く光がフレームを突き破って彼女の左太股を貫き、横っ腹と二の腕を掠めた。

なるほど、この体勢は思った以上に自分に不利だと悟った葉月だが、やられた分はやり返す。

鞭打つ触手が睦月に打ち込まれ、衝撃を受けた車は跳ね上がり、熱されたアスファルトにいくらか沈んだ。

どろりと粘質の炭素水素化合物が主成分の混合物に囲まれては脱出が困難だ。元よりそうするつもりで用意していた冷却能力で一気に熱を奪って、後部座席にねじ込まれた身体をやっと解放させた睦月は、撥水で近くにあった水道管を破裂させた。

道路にできた噴水、それを無視して睦月へと駆け出した葉月は、熱された後も降り続けていた雪が溶けて隙間に入り込み、脆くなっていたアスファルトが本格的にひび割れ始めたことに気づく。

そこに、睦月はさらに手を加えるべく、噴き出す水へと腕を突っ込んで・・・・・、水は一気に蒸発、体積の大きくなった水分子の圧力に耐えられず破裂したのは水道管で、爆発と言って遜色ないエネルギーに晒されて道路は吹き飛んだ。

それは遠目から見れば、ビルの谷間から白い山脈がいきなり生えたかのような風景で、一緒に巻き上がった雪の粒がその上に天使の輪（エンジェル・リング）を作り上げていた。

それがその形を保ったまま下へと墜ちていく中、束の間静寂を取り戻したかに見えた光景に、足を止めた人々が次に目にしたのは、その輪っかを突き破る直径数１０ｍはあろうかという火柱。

噴火にも思える紅の炎が姿を消し、一間、息を呑むのにちょうど

いい時間を空けて、今までしんしんと舞っていた雪の代わりに、大きな音を立てて大雨が降り注ぎ始めた。
雲が暗さを増したのは錯覚だろうか。
水と共に落ちてくる瓦礫やマンホール、跳ね返る道路だった破片。
爆発に大通りはすっかりと廃墟へと姿を変え、水蒸気と霧になった水分に湿度が高まり、息の詰まりそうな世界。
大粒の雨に打たれコートやマフラー、ニット帽を濡らした睦月に、撥水性に優れた自前の黒い衣装――――オーバーバストコルセットとスカートが一体になったようなドレスに、兎傘鮮香がしていたように発破能力を使って飛ぶために硬質に創られた編みブーツ姿で、衣類よりも髪が濡れるのを鬱陶しそうにしている葉月。
再びの対峙。
前髪を垂れる雨粒を振り払って、今度は葉月が先手を取る。
睦月の真下、露出した地表から姿を現した触手が彼女の左足に巻きつき、対処する間も与えず横のビルへと突っ込ませていく。葉月を中心に３６０。弧を描いて、すでに半壊していた建物を凪払い、最後、まだ無事に建っていた堅そうな建物の壁をめがけて投げ捨てた。
トドメにブティックの入っていたその横長3階建て建築物を火柱で丸ごと焼き払う。
２回目の大火力だ。
元々能力の効率化とエネルギーの生産強化に力を入れていたことと、昨日の戦闘で経験値を得たことで、一般発火能力者に比べてもかなり高い火力を使えるようになった葉月だが、これを連発するのは正直のところ避けたかった。
あくまで体力は変容のために取っておきたい、それが本音だ。
それでもこうして発火能力を使うのは、あることへの仕込みと、それが念力に対抗する有効手段だったからだが、
「あぁ、やっぱり対策は練られてるか・・・」
昨日の時点で葉月が物理的手段だけでなく出力系能力という攻撃

法を会得していることが分かっていた睦月も、それへの対策は構築済みだったようだ。

お返しとばかりに燃え盛る火炎の中から赤みを帯びた光の暴力が葉月に向けて放たれた。

それを避けずに、自分の前に熱気を作り出す葉月。

アスファルトを固めるために冷やされた、地表近くと熱気との温度差が生んだ蜃気楼が光を歪めて拡散、アトランダムに反射させられたレーザーはまだ避難が済んではいない辺りにまで飛び散って新たな被害を増やした。

数日間降り続けている雪が片っ端から水蒸気になり白く辺りを多い隠し、２０階以上ある建物は上が見えない。

あまりに唐突な災厄の襲来で混乱しカメラに収まっていなかったことと、中の惨事を霧が外から覆い隠してくれたことは万可統一機構にとっては有り難いことだったのだろうが、反抗期真っ盛りとばかりに人目をはばからず、むしろ機構への当てつけのように繁華街で大能力戦を始めた２人は自重する気はないと見えて、黒く厚い雲の下、そのもう１つの雲とも言うべき白い固まりから一筋、飛行機雲のように尾を引きながら彼女達は再び大衆の前に姿を現した。

睦月の右手が葉月の首に、触手が睦月の左腕と左足を押さえ、他の２本は睦月の触光に焼き切られている。さらに肉を削ごうと蠢く光を発火と発破で捌く中、隙を突いた蹴りと発破が葉月を下界へ向けて吹っ飛ばした。

新聞社の社名の入ったビルを斜めに貫き、さらに下に激突。

体勢を整える暇はなかったはずだ。そのために、首を絞めて血流を押さえて思考を鈍らせ、かなり力を溜めて蹴飛ばした。

もはや人間じゃない彼女にそれらにどれほどの効果があったのかは定かではないが、どの道そろそろ――――２人共も大業の大判振る舞いとはいかなくなってきた頃合いだ。

さっさと決めてしまいたかったのが本音だが、やはりというべきか、両者そう簡単に討たせてくれる相手ではなかった。

重いのは腹に一発だけとはいえ、念力で攻撃を受けすぎた睦月も、強化しても生身である身体が何度も攻撃を食らって傷み始めた葉月も、コンディションが低下しつつある。

葉月の身体で開いたビルの穴めがけて照射された直径2mはあるレーザー、それを火炎の柱が逆方向から迎え討ち、新聞社ビルを爆散させ、崩壊を告げる轟きが鳴り止むより前に、発砲音に似た音が連続、視界を遮る煙を突き破ってきたのは発破で宙を駆ける葉月だった。

わずか7歩で数百mの距離を縮め、銃を抜く。3発、おそらくナイフと同じで念力で防げないだろうそれを避けたところで、睦月の頸動脈を狙うダガーナイフの刃が煌めいた。

仰け反って危うく回避、けれどその隙だらけの体勢を葉月が見逃すわけもなく、再生はせずに右2本だけが残った触手で右足を取り、自らの右足で胴を構わず蹴りつける。

まず蹴られたことで血を吐いた睦月は、その衝撃に体勢を維持できずに、あらぬ方向に固定された右足を捻る羽目になった。

葉月にしてみれば、本当は胴を捻りたかったところなのだが、それが膝の関節に変わったところで睦月にとって最悪の事態には変わりなく、再生能力の面では葉月に遠く及ばない彼女には、その膝の故障はすぐに直せるものではない。

「がっ、く！」

激痛に耐えて、触光を滅茶苦茶に展開し、何とか離脱を図れた彼女だが、葉月はそれを見越していたようで、左手が光を放った時点で、発破を使って強制的に距離を取り、身体を刻まれるのを回避していた。

近づき辛い、という睦月の有利性も失われつつある。

葉月と同じく発破に飛ばされた睦月は、霧のまだ残る被害地帯の中心に落ち、葉月もそれを追って再び湿気に満ちた世界へと舞い戻った。

白色で霞んだ視界に、睦月の姿を認めた葉月が着地点の物々を破

壊しながら降り立ったのは幅の広い橋。混在する他社間の駅や駅ビルなどを繋ぐために作られた歩行者用の連絡橋だ。

橋面が濃淡2種類の灰色煉瓦を使って、中央に向かって両端から矢印の模様を描いている。それに誘導されるように中央に向かって葉月と睦月は歩き出した。

さすがにビル貫通の衝撃に無傷ではいられず、肋骨やら何やら自分の折れた骨で内臓器官をあちこち破損していた葉月の息は荒く、右足の関節が逝かれ、ついでに左手もないという満身創痍の睦月の歩きはぎこちなく、それでもこれでやっと2ラウンドに突入したといったところで、ここからが本番だ。

昨日と同じく消耗戦になりつつあることは辛いところではあるけれど、お互い全力で殴り合ってすら痛み分けになる程度に、実力にも能力にも差がないことはよく分かった。

刃を一度取り込んで組成を変えたナイフは無事だったのだが、さすがにプラスチック部品を多用している拳銃（グロッグ）の方は破棄を免れない状態だったらしく、彼女はホルスターごとそれを投げ捨てた。

へしゃげた銃が床に当たる音。

そして、衝撃。

仕掛けたのは睦月、見えない暴力が死角である後方から葉月を殴りつけた。

前のりに身体が傾く先――――頭部の位置を見込んだそのポイントに、能力波が集まっているのを視認して、避けた葉月の横顔を掠めたのは転移してきたガラス片だった。

もし能力波が見えなければ、入出力設定がややこしい能力でなければ、睦月が使い慣れていれば、一撃必殺となりうる攻撃。

けれど、その行為の意味するところ（・・・・・・）を汲み取った葉月は、相手の余裕のなさを改めて確認して、凶悪な笑みを作った。

風切り音、左横から迫る触手、防御できない攻撃に睦月は後退してそれを避けようとするが、それを追いながら葉月の2手目、上か

ら叩きつけてきたもう1本の射程距離からは外れることができなかった。
右に避けて、それをやり過ごした彼女の頬を打つのは砕けた煉瓦の破片で、反撃しようとかざした左手は往復してきた1本目に弾かれる。
腕にくる強烈な痺れ、けれどそれ以上に脳が警告音を響かせる光景が目の前に展開されていく。
開いた懐に滑り込んだ葉月、握られたダガーナイフの一閃。
降り下ろしと同時に変容で伸びる刃が左肩を深く切り裂いた。
あくまでも物理的なエネルギー活動にしか影響できない睦月の念力と、あくまでも能力的な動的エネルギーである変容。ひどく相性の悪い組み合わせだ。
昨日は気づかれなかったからよかったものの、触手の形を変容させながら巻き付かれれば、念力は効かずに肌に接触され、皮膚から癒着されていた。
正直もはや、接近戦で戦える相手ではない。
が、距離を取れば取るほどに攻撃を回避される率も高くなり、機動力の高い葉月相手では決定打を生み出せない。
これまで圧倒的に有利な戦いしか経験してこなかった睦月には辛いジレンマである・・・・・だが、それでも、殴り返すだけの根性は彼女だって持ち合わせている。
斬刀水圧。
この湿度の高い、それも天雨の中で、その能力を応用した結果、雨粒や霧がネジあるいは粉末ダイヤの研磨剤のように、葉月の皮膚を削り取り、目立って大きな傷こそできなかったが、全身から貴重な血液を流し出させた。
もっとも、それで止まるほど葉月は傷つき慣れていないわけで、十分に近づき、自分の近くからならどこからでも発火させることができる彼女は、睦月の先のない左手に火をつけた。
「がっあぁああ！」

別に負傷させることが目的ではない。火傷による感覚麻痺を起こさせることで、厄介な触光を封じ込めようというのが狙いだ。

それが功をそうしたかは分からないが、とにかく隙のできた睦月にさらに畳みかけて、ナイフを右太股に突き刺す葉月。

「ぐぅううぅう！」

けれど、そのうめき声は葉月から。

その右腕をナイフ共々肘まで高熱で溶かされた。

睦月はよろめきながらも葉月から離れようとし、風刃を放った。

その軌道の先に比較的皮膚の薄い首があることを理解して、これ以上の大量出血を避けたい葉月は残った左手でかまいたちを受け、指を3本持って行かれた。

さすがに両手が被害を受けた状態で、これ以上追い込みをかける気にはなれなかった彼女は、橋と繋がっている駅ビルへと逃げ込む睦月をとりあえずは見逃し、両腕を能力で治癒させることにした。

全身の切り傷の方は浅く、強化された身体の自己治癒でほとんど塞がっている。

しかし流した血の量は馬鹿にならなかったのも事実だ。

攻撃に使っていないだけで変容もかなり使わされているし、正直そろそろ決め手がほしい。

天を仰げば拡散し始めた霧は密度が薄くなっていて、雨雲が見えていた。

（そろそろ・・・もう少し）

しばし熱を持った身体を冷ますために肌を生命を育んだ天の恵みに晒して、彼女もまた光も雨も遮る無粋な人工物へと入っていった。

＃

どこからか音が聞こえる。

それが正確に何がどうなって立てている音なのかは、彼女の知る由ではなかったけれど、建物が傷みに耐えられなくなって悲鳴を上

げているのだとだけは分かっていた。
朝、あるいは昼と呼ばれるの時刻。この季節とも相まって、積もった雪の反射光にも照らされて光が溢れているはずなのに、目に映るのは空気に炭を混ぜたような景色だけ。
・・・・・ここはどこだろう？
飛び散った窓ガラスが踏みしめる度にジャリジャリと鳴る。
人気（ひとけ）はない。いや、正確には生の気配がない。
少なくてもこの周辺で生きているのは自分だけであるという直感が、妙なぐらいすとんと胸に収まる。
ふらふらと歩み寄った窓枠に手をかけ、顔を外へと出した瞬間、ぬるっとした外気に肌を舐められた。
外に雪はなかった。外にも人はいなかった。
辺りを覆い隠す濃霧が薄まってちらりと見えた景色は、彼女の見知った場所ではなかった。
道路はひび割れ、長い長い信号待ちにいつも苛立っていた信号機も、それを引き起こす絶え間ない車の列も見えない。
お洒落な衣装を身に纏った顔なしのマネキンが、溶けて割れたガラスを張りつけている。
見上げるのが楽しかったオフィスビルや独特の形をしたホテル、いつも内容の変わる広告看板、それらが崩れ剥がれ落ち、しっちゃかめっちゃかになっている。
ここはどこだろう？
再びの分かりきった疑念に、けれどいつも答えてくれる母親の姿はない。
どこかへ行ってしまった。
視線を建物の中にやればそこにあるのは瓦礫の山。上の階層が落ちてきたものだ。
だから、そこに少し前までいたはずの店のお客達はいきなりいなくなってしまった。
何かを紡ごうとした口は僅かばかり開いただけで何も発すること

はなく、ガラガラと小石ほどのコンクリートや粉塵が舞って、外とは別の意味で息苦しい世界の中では、意味なく開いた口から砂利が入り込み不快感が増すだけだ。

ここをでなきゃ。

今更すぎる決断に、一歩、踏みだそうとした足は、少女の身には大きすぎる瓦礫が上から雪崩落ちて、つま先をかすっていったところで硬直してしまった。

ただでさえ状況に置いてきぼりを食らっている頭を、さらに一杯にする騒音。

思わずしゃがんで縮まって、目を閉じ耳を塞いで堪え忍ぶ。

長い崩落の音が終わって、ぎゅっと閉じていた瞳を開けた時、彼女の視界に射し込んだのは光、だった。

蹂躙に耐えられず崩れ落ち、天井が抜け、遮光する屋根すら抜けた大穴からの、明るい光。

少しばかり晴れた霧と雲の間から漏れる陽は、水を多分に含んだ大気に揺らめき輪郭が優しくぼやけていて、降り注ぐ雨が、光を受けて煌めいて、他の音全てを遮断するノイズ音を響かせている。

天を仰ぐ少女は、その浮き世絵離れした光景に惹かれ、手を伸ばした。

（あぁ、ここは――――なんだ）

そう思い込んで、その勘違いに縋ろうとして、さらに伸ばした腕を誰かが掴んだ。

どこか近くで建物が崩れる鈍い響きを聞いた。

瞳を閉じて大きく深呼吸。

生存本能がリミットを外した余韻で未だ高速回転する脳が、最も多く情報を送り込んでくる視覚を一時的に遮断されることでいくら

か落ち着きを見せる。
（左肩は、駄目。逝かれた。右足は何とか・・・移動には使える、けど、戦闘には無理だな）
神経をばっさり切られた左腕はおそらくこの戦闘中は使い物にならず、右足も動かすのが精一杯。関節が壊れたというより骨が裂けていて、骨を補強しているからこそ立っていられるが、今が戦いの最中でなければ絶対安静を求められるコンディションだ。
やっぱり形骸変容（メタモルフォーゼ）の再生能力はずるい、と睦月は苦々しく思った。ただ単純に与えられたダメージを計算すればどう考えても、葉月は致死に足る損傷を受けているはずだ。もちろんそれには、形骸変容（メタモルフォーゼ）にはない内潜変容（メタモルフォーゼ）の攻撃での優位性が大きく関わっているのだが、それにしたってあの耐久性は卑怯だろう。
（こちとら、身体は普通の人間だっていうのにな・・・）
暗闇から半壊した建物へと視界を戻す。
あるのはフィールドの方が壊れかけているという現実だが、さて、どうやって織神葉月という化け物を打破するか。
化け物を化け物たらしめている能力を封じ、手足に口と触手を封じる。
答えは出ていても攻略は難しい。
けれど、それ以外に彼女に道はなく、その道はなお悪いことに退路もなく、相手は少しの間を待ってもくれないようだ。
「ふぅん、逃げないんだ？」
「最初っからそのつもりはねぇよ」
溶かした右腕も、切断した左手の指も元通り。少なくても2回分の変容を使わせたことにはなるのだろうが、負傷が自分と違って戦闘に影響しないというのは困った話だ。　もっとも、さらに困るのは、その血肉を彼女は何で補ったかということで、口元の血と唇がくわえた指から思い浮かぶ想像はおぞましさしかない。
「はっ、また人喰いかよ。同じネタを使い回しやがって」
「ん。残念、それが微妙に違うんだよね。前回は生きてたけど、こ

れはそこにあった死体から失敬してきたやつだから。
でもさ、どっちなんだろうね？」
「あん？」
「腕の持ち主は、僕か君か、どっちの攻撃で死んだと思う？」
「・・・・・・」
「まぁ、どっちでも同じか」
ケラケラと大して興味なさそうに笑って、彼女は自分の周りに火球を現出させた。
揺らめく赤色は数珠状に輪になって回り始め、球が線に見えるほどに高速に達したところで、睦月に向かって放たれた。
回転しながら迫る火の玉は軌道が読みにくい。否、読んで避けたところで、その隙こそが葉月の狙いなのだろうし、何より右足のこともあって彼女はあまり動きたくない。
回避という選択肢は取れない。となれば、防御か、攻撃か。睦月が選んだのは、『相手の攻撃ごと吹き飛ばす攻撃』だった。
左肩は使えない。右手をまっすぐ廊下の先にいる葉月に向けて、彼女は放射線をも含んだオレンジ色の一撃で迎え打った。
直径２ｍはある攻撃だ。狭い廊下では避けるに避けれない。屋内に入った理由はそこにある。
だが、葉月は視界を覆い尽くすように迫る光に慌てることなく、実に単純明快な回答で答えた。
足の一蹴りで床を崩し下層へ。
姿の見えなくなった一瞬で距離を詰めてきた彼女の触手が床を突き破って睦月もを下へと引きずり落とした。
緊急防御、制御なしのめちゃくちゃな左の触光。
じゅりじゅりと肉を焼く嫌な音と臭いがしたが、器用に重要機関は外した葉月はいくらか焼き切れた筋肉繊維などお構いなしに睦月の身体を床に叩きつけた。
ゴロゴロと転がりながらも、しっかりと高熱を纏った右手で引っかいて、葉月の左肩の肉を削いだ睦月は、まだ攻め続けようとする

彼女に対抗するために、足に力を入れ、そして右足の激痛に立ち上がり損ねる。
（しまっ・・・！）
怪我のことをつい失念していた。
関節が外れたのとは訳が違う。木刀を雑巾の如く絞ったが様に、捻られてベキベキと骨が割れかけているのだ。
とっさに捻る、曲げるのできる足じゃない。
痛みに腕の力までが抜けて、顔を床に打ちつけ、再び顔を上げた時には、１m前で葉月の右足が自分の頭を蹴っ飛ばそうとしているところで、打撃自体なら耐えられたとしても、インパクトの瞬間に念力殺しの変容で足を槌状にでも変えられれば、頭が潰れたトマトになる。
左手は使えない、右手は塞がっている。
発破では威力が足りない、レーザーは方向を決めるのに手をかざす必要がある。
水も空気も強化された彼女の足を刻めるほどの威力はないし、防御には向かない。
防御に向いている念力は打破済みで・・・・、
（間に、合わっ・・・！）

――――グプァンッ！ビシャ、ビチビチビチビチ・・・

血と肉が弾けた音。
破砕と破裂の威力が強すぎて、木っ端微塵になった葉月の足。
「ぃぎ、がっ」
生命維持本能を失わないために痛覚を切ることをしていなかった葉月は、いきなりの現象に神経を切って痛みに備えることができずに、もろにダメージを食らい、それでも発破能力で自分の身体を後方へと吹っ飛ばした。
「ぁあああ！！」

ビチャビチャと右太股から血をまき散らしながら廊下を転がり、追撃されることからは逃れる。

痛覚をちぎるように遮断して、失血と足の再生。

先ほど食べた腕はまだ胃の中に残っている。変容ではなく胃の消化に任せて体内に取り込もうとしたからなのだが、そんな、まだ自分の中にまでは入っていない補給分に対して、新たに流した血と失った肉、使った変容は吊り合わない量だった。

けれど、問題は怪我よりも能力の方だ。

目に見えない能力、というのはいい。そのための能力波を視る視力なんだし、彼女にしてみれば能力の形態は対して重要ではない。

要は能力波が集まっているところを避けてさえいれば言い訳なのだから、念力だろうが転移だろうが見えないという点が脅威になることはない。

なのに、喰らった。

視えなかった訳じゃない。確かに彼女の目は集まった能力波を捉えていた。

だが、避けるまでの時間がなかったのだ。

能力波が集まって、それが発現するまでの時間差。それがほぼない。

捉えても避けれなかった。

しかも、そんな速攻にも関わらず、貯め（チャージ）の必要がないにも関わらず、強化に強化を重ねた葉月の足を爆散させるほどの威力がある。

睦月はそんな攻撃をやってのけた。

厄介極まりないし、しかもそれが、葉月自身よく知っている能力なのだから、彼女も心穏やかではない。

ただ、それは逆に言えばその能力の弱点もよく知っているということで、立ち上がった睦月が利用価値に気づいたその能力を使うために接近してくる前に、自分が踏み砕いて貫通させた上のフロアへと跳躍した。

あの能力はコントロールが致命的なまでに利かない。

本来の使い手がそれに散々苦労していることは物陰から覗いていて知っているし、それに対する努力の成果が最近実り始めているのも知っている。

さすがに辺り構わず粉砕してしまうのはまずいと、完全な制御は一端諦め、ある程度能力に方向性を持たせることで応急措置を取ろうとした結果、近頃ではとりあえず視界の下から上へという順序で能力を発現させるにまで至っていたはず。

逆にそれ以外の制御がまるっきりできず仕舞いなのだが、殺人能力としては十分すぎるスペックだ。

速い、強い、しかも燃費もいいときてる。

そしてだからこそ、持ち主を無視して暴れるあの能力は使いこなすのが難しい。漫画などでよくある芝刈り機に振り回されるシーンなんかを思い浮かべれば分かりやすいだろう。

上へと場所を移した葉月を追って視線を上げる睦月だが、だからといって粉砕能力は葉月の姿を追ってくれない。一度発現して上へと上り始めた能力は、どれだけ視線を動かそうが、消すまで最初発現した視界の上下そのままに上り続けるのだ。

だから、移動し続ければ照準を合わせられないという弱点がある。

怖いのは、あくまで接近戦でいきなりやられる時だ。発現の開始地点と同じ位置に身体の一部があった場合は対処のしようがない。

（幸い、クシロと同じで射程は２ｍちょいみたいだけど・・・最悪の近戦殺しだよね）

逆立ちでもしない限り、一番重要な頭は大丈夫だとしても、軌道力が武器の彼女にとって足をやられるのはきつい。

接近は不可。ならば、もう体力温存などと言ってもいられない。

走り、睦月を下に引きずり込んだ時に開けた穴を飛び越えるついでに、下層を火で焼きつくす。

当然、そんな攻撃をものともしない睦月がその穴から現れたのを見計らって、触手の鞭が唸りを上げた。

頭しか上層に出ていない睦月を狙った触手の位置は、床すれすれ

で、睦月の視界ではなおさら下にある。
勢いよく破裂する触手。その飛び散った肉片と血しぶきが、楔型に変形してさながら榴弾の殺傷片のように彼女の顔面を襲った。
浮遊能力を切ってしまい落下し、何とか顔の傷を修復した時には触手がさらに迫っていて――――、衝撃と共に睦月は建築物から無理矢理吐き出された。

粉砕念力を使うに当たっての弱点その2。
いや、これは能力自体の弱点ではなく睦月の弱点なのだけれど、複数の能力を同時に使えても、同じ能力を分けることが彼女はできない。
両手で文字を書ける人間はいても、片手に2本の鉛筆をもって書ける人間はそういないのと同じだ。レーザーと触光を同時に使えないように、念力を使って攻撃する以上、防壁としての念力は解除されてしまう。
もちろん、ほとんど自動防御と化しているだろうから、粉砕念力を使っている最中に限るのだろうけれど、弱点は弱点だ。
両足を犠牲にすれば素手でも殴れる。
そのことにも気づいた葉月だったが、リスクがリスクだけに、今はまだ実行には移さない。
肉どころか骨も粉砕を許してしまうその一手は最後の手段だ。
睦月を壁に叩きつけるついでに、狭さで動きが制限される建物から場所を変え、空の見える場所に出た葉月は、転がる睦月を巻き込んで火柱を天に突き立てた。
液体へと返り地上を湿らした水分が蒸発して、雨がまた激しくなる。
火炎が消え去った後、満身創痍ながらも火中で立ち上がるぐらいの余裕はあったらしい睦月が姿を現した。
「さっきのあれ、クシロのだよね」

「あぁ、全く、一応と思って拝借しといてよかったぜ。
まさか・・・これほど使えるとはな」
「まぁ、制御を捨てて照準も威力も形態も全てをパターン化した念力だからね。応用が利かない代わりに、能力を最大限に機能させれるのが最大の強みなんだろうけど・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・でも、ふぅん、クシロに会ったんだ?」
何故だろう、睦月は彼女のぽつりと言ったその台詞に、自分が最大級の地雷を踏んだ気がした。
葉月の表情はあくまで微笑だ。
にも関わらず、その笑顔に睦月は冷や汗が止まらない。脳裏に引っかかる、既視感を手繰り寄せれば確かにそれは、前に見たことあるもので、「君の脳髄、頂戴」そういった時の笑みと全く同じ物だった。
ガン、という音。再びの殺し合い。
一瞬の間に引き抜かれ投げつけられた信号機が睦月に当たることなく歪んで潰れ、それと同時に左側からきた触手は切断されて明後日の方向へと飛んでいった。
3打目は蹴り上げたアスファルトの塊が正面から。
受け構えるまでもなく、大音量を響かせつつも睦月の前で制止した1m四方ほどの黒色、それに一瞬奪われた視界に隠れて急接近してきた葉月の右拳がその塊ごと睦月を襲った。
ダイレクトでない分、威力が足りなかったのか、何とか踏ん張った彼女の腹にもう一発、かなりえげつないのをお見舞いしようとして、今度は葉月を支える両足が砕けた。
念力の両刀使いができない以上、こうして攻撃されている最中に防御から攻撃に念力を転用はしないだろうと考えていた葉月の油断を突いた、捨て身の攻撃。
右足がまた膝辺りまで、左は足首までを持っていかれ、うまく立てなくなった葉月は無理矢理、触手に身体を引かせる。が、髪か触手か、そのどっちにせよ、そういう風に退避行動を取るだろうと経

験から分かっていた睦月に、斬物風刃で命綱をちぎられあえなく落下、しっかりと足で着地したとはいえ、まだ流血し続ける足のない脚ではまともに立てもしない。
何にせよ立たれた状態では、粉砕念力で致命傷を与えられないと踏んだ睦月は、まずは葉月の頭を地面につけさせようと接近して、そこで彼女の唇が吊り上がるのを見た。
ここにきて、この状況で。
「きた・・・！」
葉月はそう言い、その意味を睦月が考える間もなく、答えは天から落ちてきた。
元からあった分厚い雪雲、度重なる熱は当然上昇気流となって上空に昇り雪を雨へ、激しさを増した雲の中で衝突を繰り返した氷粒により溜まった静電気はやがて限界を越え、あまりにも強烈な光と轟きとなって降り注ぐ――――、
（神、鳴り・・・っ！）
光速だ、避けれるわけがない。
葉月が睦月のレーザーを避けれていたのは予備動作とかざされる手から出力方向が分かっていたからで、単なる自然現象であり、葉月自身に予備動作は必要ないこの攻撃は、成り損ないの現界把握ごときでは察知すら困難だ。
直撃。
電流はいい、電圧もいい。
そんな物理攻撃は葉月の鉄拳に比べればどうということはない。
問題は光と音。
これらだけは無理なのだ。
もしも念力がこの２つまで遮断してしまえば、睦月の世界は暗闇と静寂に包まれることになる。それが分かっていて無意識的に対象から除外してしまっている彼女の念力は、その２つだけは遮れない。
網膜と鼓膜、目と耳が一気に潰れた。
「ぁあああっぁあああああああ！！！」

そんな過酷な状況下にも関わらず、対策を取っていた葉月は視覚も聴覚も守りきり、素早く足を再生させた。
攻守逆転。目を焼く激痛と、視神経から脳を冒し暴れ狂う光という情報に睦月が怯んでいるその隙に、彼女の脳味噌を喰らおうと右手を伸ばし、そして手の平は空をかいた。
（自己転移（テレポート）っ！？）
そもそもそんな能力が彼女に初めからできていれば戦局はもっと違う形になっていただろうことから見ても、彼女の転移能力の不格好さを見ても、今の今まで自分を転移させることはできなかったはずなのだけど。
この土壇場に、生存本能に従って、転移能力の優劣を分けるその壁を越えたらしい。
転移先はまともに設定できていない無茶苦茶な転移だったようだが、かなりの早業だった。
葉月の髪や触手に対応する、彼女の緊急回避手段と言うべきなのか。
何にせよ、
「何なんだろうね・・・あの主人公体質」
2回追いつめて2回とも避けられた葉月は不愉快そうに、手持ち無沙汰になった手を引っ込めた。
「けどまぁ、逃がさないけどね」
彼女の後ろで稲光がして、音速を超えた衝撃波が音になって聞こえてくる。
攻撃と探知両方を兼ねる自分の仕込みがちゃんと機能していることに、彼女は尖らした唇を笑みに変えた。

「クソったれ、なるほどな・・・そういうことか」
2撃目は直撃だけは避けれた睦月は、ランダム転移した先、一角が自分の能力で切り取られたビルの屋上にいた。

網膜と鼓膜を治した後、1回目にしろさっきのにしろ、何故自分に向かって稲妻が落ちるのか気になって目を凝らしてみれば、極細の糸が念力越しに蜘蛛の糸の如くくっついていたのだ。

念力には触覚はない。それを見越して戦闘中に巻き付けたのだろう。実際蜘蛛の糸のように分岐してあちらこちらに伸びているその軽すぎるワイヤーは、葉月の作った上昇気流に乗せられて空へ伸びていく。切れてもいいし絡まってもいい、とにかく空と彼女を繋ぎさえすれば、おそらく鉄分を含んでいるその糸は、自動で雷をリードしてくれるという寸法だ。

気づかなかったが、おそらくこのフィールド上の至る所に糸が張られているのだろう。

その分、自分が思っていた以上の変容を使っていたことは有り難い情報ではあるが、この作り出すのが困難なシステムは、完成してしまえば対処が難しい。

いくら身体の糸を取り除いても改めて付着させられれば意味がないし、葉月自身とは無関係に、人間がまだ制御をなし得ないその自然の猛威はやってくる。

(屋内に逃げるか？いや、あいつは中を嫌ってた。建物自体を焼き払われるのがオチだな)

その火力をあれが保有していることは知っているし、それで使われた熱は上昇して新たな雷を生み出すことになるのだろう。

どうするか。

だが、対処を考えさせてくれるほどの時間を向こうも与えてくれないらしい。

柵に持たれていた背中越しに、猛烈な熱気を感じて振り返ると、太陽のように煌々しい火球。

「激しーなおい！」

右手からの光の筋がそれを貫くが、火を生み出した本人はすでに次へと行動を移している。

火と煙の下を潜るように、発破を使った空中跳躍で屋上に迫り、

鉄の柵を着地の衝撃でへしゃげさせた。
落下分の威力を上乗せして、着地の後に睦月めがけて叩きつけられた触手2本は、直接当たらなかったが、目的としては十分なダメージを屋上に与え、脆くも崩れ始めた建築物の瓦礫に足をつけたままの睦月は浮遊能力で飛び上がろうとして、頭を葉月の絡めた両腕に打ち落とされた。
足が地に着いているのならいざ知らず、ただでさえ念力を抜いてくる衝撃を空中で喰らってはひとたまりもない。
加えて、懸念していた事態もが起きていた。
念力の強度が落ちている。
もう、ふつうの打撃すら身体に頂くのはまずい。
だが、釧のことが出てから葉月の攻撃は明らかに激しくなった。
それが弱点だったのか、向こうにも余裕がなくなっている。
ここが正念場だ。
力の入らない、動きもしない左腕が、落ちる身を襲う暴風にはためくままに、触光を発現させる。火傷のこともあってうまく操作はできないが、とにかく葉月の身体を傷つければいい。
向こうももう再生の材料がなくなる頃合いだし、変容を使う体力も尽きかけているはず。
切断と貫通と共に肉を焼く嫌な臭い。
砂埃が目と口に入り不愉快この上ないが、構いやしない。
触手が右足に絡み、嫌な方向へと足を曲げようとする。
そうされた以上、念力を攻撃へ転じれない彼女の顔面を狙う葉月の右手。それを無理矢理、葉月が皮膚に絶縁性を持たせて以来使っていなかった電気信号をねじ込んで神経が途切れた左手を盾にした。
びちりと弾け飛ぶ腕。
元々手首から先はないのだからと思っていても、形骸変容（メタモルフォーゼ）があれば再生できると知っていても、思わず顔をしかめてしまう光景だった。
血を止める間もなく、葉月の頭突きに顔がぶれる。

口内を切った。鼻血もが逆流して、舌が鉄の味で滑る。
右手の放つ熱線が葉月の左腕を消し炭にしたが、ついに右足が関節と真逆に曲がり、その後にねじちぎられて飛んでいった。
きりもみ状態で落下していく2人は、相手を一部を削ぎ取ることだけに執着し、備えもせずに瓦礫の山に突っ込み、上から注ぐ比較的軽かった落下物に押しつぶされた。
発火や発破で、相手ごと吹き飛ばそうとした両者だったが、場所が悪かった。
崩落により粉塵舞う中でのそれら能力は爆発を引き起こし、予想以上に大きかった爆風に葉月も睦月も吹き飛ばされた。
剥き出しになった地面は雨水を含んでドロドロと軟化していて、それに混ざる血の赤黒い汚らわしさに吐き気がする。
身体中を泥に塗れさせながらも、先に立ったのは葉月。
せっかく生地から編んだ勝負服はズタボロで、左肩はほとんど炭化してしまっていた。
雨に濡れて張り付く黒髪をかき上げて、彼女は吐き捨てるように言った。
「あぁもう、うっざい！パクリ女はしつこいし、万可(やろうども)その他は役に立たないし！
クシロを巻き込むなんて・・・・・あれほど言ったのに・・・」
「はっ、随分とお冠じゃねぇの・・・そんなにアイツにオレが関わるのが気に食わないわけ？」
睦月も皮を張って止血しただけの膝から先のない右足を手頃な瓦礫に乗せて立ち上がった。
頬についた泥を払い、もはやどう考えても戦えるものではない身体で虚勢を張る。
「気に食わないね。毒舌幼女の時僕がぶち切れたの知ってるでしょ、君は。それが分かっててやったってんだから、なおさら気に食わない」
「よく言うぜ。オマエだって「ＰＫの系統と色別の理論」なんて極

秘資料渡したくせに」
「あれは念力所の資料でしょ。至極研究所に含まれてるけど、あそこは念力研究の最高峰で、初期にできた研究施設だからそう呼ばれてるだけ・・・。あそこは万可と直接的な関わりもない。あの本からクシロが調べても、万可の深部には行き着かない・・・と思ってたんだけどね。その様子じゃああれ、君繋がりだったわけだ。・・・・・全く、幼女のことがあったし、保険のつもりで誤誘導（ミスリード）させようとしてたのに」
「・・・・・テメェが死んだ後、アイツが調べてもたどり着けないように、か？」
「機構から調べても何も掴めないだろうことはクシロも知ってる。調べるとしたら僕の渡したあの本からだ。幸いにもクシロの親は溺愛の放任主義だし、それなりの名士だし、彼はそう簡単に殺せない。彼がよっぽど深いところに入らない限り機構は手を下さない」
「そのために、アイツを守るために、アイツはそれを知りもせずに見当はずれのところを必死に駆け回るわけだ。
クソッ、あぁそうだよな・・・嫉妬とかジェラシーとかそんなのオマエに・・・・・オマエ、要はアイツの気持ちなんてどうだっていいんだ。
人の気持ちなんて、他人（ヒト）の気持ちなんて、まるで理解できねぇんだろ」
言って、睦月は口に残っていた血を唾と一緒に吐き捨てた。
頭に浮かぶのは、彼氏と言われた時のクシロの顔、「可愛い」と眼前の人形（ヒトガタ）と評した時のクシロの顔。
自分にはないモノを持っていながら、自分が捨てたモノを持っていながら、それらを蔑ろにする彼女。
自分の憧れすらが汚された気がして、睦月は拳を握りしめた。
「オマエは正真正銘のバケモノだよ。そんなヤツに、そんな屑に、死に損ないに殺されてやんない」
ごきん、と転がった際に変に曲がった首が鳴る。

傾きが直った視界、そこに佇むバケモノを睨みつけた。

「オレは絶対、オマエには負けない」

跳んだのは泥。

葉月の跳躍に、ごっそり抉れた土と水の混じりモノが派手に飛び散る中、息する間もなく接近した彼女の背中に触手は４本。

２本再生し、残った２本の長さも戻っている。

先に下からアッパーを繰り出した触手の１本が、念力に阻まれる前に純粋な水圧に弾かれた。上、もしくは斜めか横からならともかく、すくい上げるようにして繰り出した触手では威力が弱かったか。元は釧の念力を使わせて、防壁を消させるのが狙いだったが仕方ない。

葉月は右手を振るい、その軌道が首筋に向かっていることを理解して、全体的に薄くなった念力の密度をそこへと寄せた。

いきなり強度を増した壁に剥がされた爪が葉月自身の頬を切る。

けれど葉月は止まらない。

勢いを乗せた右回転、まさしく鞭となった触手３本が睦月の横っ腹を強打した。

防御の薄くなっていたところへの一撃、とっさに水刃で２本切断したが、ダメージを軽減することは叶わなかった。

遅れてちぎれ飛ぶ長細い肉塊。前と違って中から出てくるのは赤い血だ。

それを止血させる余裕を与えるわけにはいかない。

内蔵を損傷しただろう激痛に耐えた睦月の右手が熱と光を帯び、まだ横っ腹に引っかかっていた触手を焼き切って、そのまま葉月の横っ腹に凶刃（おかえし）を向ける。

５ｃｍほど肉に食い込んだ光の刃、だが右腕を葉月の左手で捕まれてそれ以上進めない。

力比べは分が悪い、ならば正直人間離れしていてやりたくはない

のだが、いつぞや葉月がやっていたように口から――――そう思って彼女が口を開くより先に、残り1本になっていた、最初下から攻撃を放った触手が、睦月の先のない右脚を、乗せている瓦礫から落とそうと引っ張った。

バランスが崩れ、口の照準がズレる。

しかも、その状況で再び襲いかかってくるのは葉月の右腕。

ゴッ、バンと粉塵をまき散らしながら、爪の欠けた右手は睦月のいた台座代わりのコンクリート塊を粉砕した。

睦月はいない。

自己転移、かなり雑な転移になってしまうが、それでも通常の転移よりも素早くそれを成し遂げれるようになった彼女は、葉月のすぐ後ろ、逆さまに空中に転移した。

その刹那、発現させるのは粉砕念力。

視界が逆転しているこの体制ならば、足ではなく頭から潰せる。

ヂッ。

しゃがんだ際、なびいた髪の先が細切れになるのを感じつつも、葉月はその予測できた攻撃にカウンターを叩き込む。

素早く振り向き、右足で彼女の頭を蹴り上げ、迫る念力を解除させた後、口からの火球。

嫌な音を鳴らす首、それでも折れることは避けたが、炎の追撃に打ち落とされることにはあらがえなかった睦月は、空中で体勢を何とか整え、残った左足で着地した。

そこを狙った葉月の触手を切り落とし、足裏に発破をかけて超速で詰め寄る彼女に、粉砕念力で攻勢に出る。

あらゆる方向に向かって念力が入り乱れて発現し、まず踏み出した右足が砕け始め、次に左もを巻き込み始めたところで、睦月の左腕に葉月の右手が届いた。

撥水能力の水圧と発破、その2つで防ごうとしたものの、手首の骨を砕いただけで二の腕の肉を取られるのは免れなかった。

いや、どうせ肘までしかなかった腕だ。それで済んだのならむし

ろ上々と言える。
念力が防壁に戻り、足の損壊を右足首と左足の筋肉を剥ぎ取られるに止めた葉月の3手目は髪。
今日に限って今まで使ってこなかった髪を動かすのではなく、変容で伸ばして薄く膜を張っただけの睦月の右膝の傷口から侵入を図る。
「が、・・・のっ！」
けれど、ここまできてもう離脱す気は睦月にはない。
癒着されることまでは覚悟している。
手でなく足からならば脳に辿り着くまで時間を稼げる。そして何より懸念していた髪の動きを逸らすことができた。
それぐらいのリスクを犯さなければ決定打を与えられないのは、激痛を以て知らしめられた。
ここで逃げればまた同じことの繰り返しだ。
だから、退かない。ここからが勝負。
「こ・・・のぉ！」
髪を無視し、雨と霧を使った斬刀水圧で、葉月の全身を刻む。
弾ける血潮。豪雨の勢いにも負けずに赤い華が開いた。
葉月の口から火が漏れる、その前に自らの右手を突っ込んだ。能力である炎に火傷はしても、念力が阻んで指は噛み切られない。
渾身の力で首を横へ。
上がった炎が作り出す水蒸気などお構いなしに、葉月は睦月の抵抗を抑え込もうと彼女の首根っこを掴んだ。
左手はない。右手もほとんど焼けて炭になった。
だが、手も足も口も髪も触手も、全て封じ込めた。
（さぁこい！）
やっと、これで、全てが整った。
自然すらを手玉に取るのが生物なら、生物の智恵を奪うのが人間だ。
葉月が用意した雷雲だが、それを利用できるのは彼女だけではな

い。
発電能力があれば葉月の糸を逆に辿って誘電することぐらいはできる。
落雷。
轟音と光の暴力は睦月に。
再びやってくる視覚と聴覚の濁った世界。
念力が弱まっていたせいで痺れもきた。
それに対して葉月もダメージがないわけではない。
睦月に癒着した髪を伝って電圧と電流が流れ込み、そして目と耳も一時的に使えなくなる。
葉月が雷に耐えられるのは、強烈な光や音に焼かれない目と破れない鼓膜を持っているからだ。
いくら彼女といえ、落雷の瞬間、目が見えて耳が聞こえているわけではなく、
今なら攻撃を避けられることはない。
――――今、この時こそが最大のチャンス。
「いっけぇぇえっ！！」
予期せぬ痺れと光と音で動きが止まった葉月に向けて向けられる焦げた右手。
けれど、攻撃は葉月の背中から。
電磁力に引き寄せられた瓦礫の中の鉄骨、ねじ切れて尖ったその先が、葉月の細い腹を貫いた。
「えごっ、ぉおぇ！」
計3つ、葉月を貫通し太い鉄釘。その1つは勢い余って睦月の横っ腹をも刺していたが、気に留めるほど深くはない。
かざした右手を振りかぶる。今度はレーザーの一線が葉月の腹を通り過ぎた。
ばたばたばたと口から逆流した黒い血が、自らを貫く凶器に振りかかる。
胴体は完全にちぎれ、内蔵器官のほとんどが駄目になった葉月の

身体は、横隔膜がうまく機能せずに息すらできない。
昨日のようにくっつけられる前に、視力・聴力がやっと戻った睦月は、彼女の下半身を発破で吹き飛ばした。
それでも葉月の上半身が落下しないのは、彼女が離さずに首を締め続けている右腕があるからで、その手が遂に念力の防壁を抜いた。
「が、あ！」
それへの対応より先に、右足から未だ侵入を試みる髪を燃やせざるを得ず、対処の遅れた分締まった気道から呻きが漏れる。
だが、そもそも手首の骨が折れた腕だ。力はそれほど強くはない。
手を退かすより、葉月自身を止めた方が早い。
そう判断して、おそらく体温調節すらままならないだろう彼女の身体から冷却能力で熱を奪いにかかる。
そこへ、突如衝撃が睦月の背中を襲った。
切り離した触手が元々片足でバランスの悪い彼女を前へと押し倒し、それに押し潰される前に葉月は右手を離した。
泥と血でできた地面に打ちつけられる織神と色神。
方や下半身と左腕がなく、方や両腕と右足が使いものにならない。
２人共無事と言える状態ではなかった。
服も肌も、顔も髪も、体中が痛々しい有り様だった。
容赦のない潰し合いなのだ。
血肉が華やぐ度に、生命が咲き誇る、命そのものの戦いなのだ。
一歩も譲らない殺し合い、そして生き延び合い。
だからこそ、そう簡単に決着などつくわけがない。
生命維持こそが宿命。
故に、これ以上この場に留まることが死に直結すると分かりきっている葉月は逃げに転じた。
無茶な発破に任せて身体を打ち上げ髪を伸ばし、さらに遠くへ。
上半身だけで空を飛ぶという怪奇現象で、逃亡に出た葉月を追いたくはあった睦月だったが、こっちもこっちで片足がない上、絡みつれた触手に手間取って追うことができなかった。

両手がないため手で払うわけにもいかず、彼女は能力でそれを引き剥がさなければならなかったし、移動の方も能力なしにはできそうにない。

いくつかの能力を平行発現するのにも、精神的な限界が近い状態で無理はできない。

ひとまずは息を整えつつ、触手の方に専念した。

どうせあの怪我だ。

遠くに行けないし、ここら辺一体は自分達が焼き尽くして死体すらそうは見つけられない。

見つかったとして、もう体力が尽きかけている彼女には、身体を再生させることも辛いだろう。

血と肉をあれほど抉ってやったのだから、体積的にも肉を取り込まないと再生自体難しいだろうし、取り込むにしても、胃腸が潰れた彼女は変容を介さなければそれすらできない。

変容能力の使いすぎは体調に大きく影響することも昨日の時点で確認済み。

どの道、状況が葉月に不利であることには変わりない。

昨日と違って、今日ばかりは体力を回復させる時間を与えるつもりはないのだから。

＃

水溜まりを歩いていた足が、その中に混じっていたガラスの破片を気づかず踏んで血を滲ませた。

もう、自分の身体は堅さを保っていない。

何とか下半身を再生させることはできた。できたのだが、その材料をかき集めるのに、今まで身体の強度を上げるのに使っていた血肉を極限まで削ることは避けられず、それですら足りなかった分は身体全体を縮めてバランスを整えるしかなかった。

結果、１０歳ほどの体躯になった身体は、まさに姿相応の身体能

力しか持っていない。
「さっきのはまずったなぁ」
ふらふらと身体を揺らし、廊下の壁にもたれ掛かりながら移動する。
左腕を再生する余裕なんて当然なく、本当は身体の再生に能力を使うのも正直やりたくはなかったのだが、さすがに生命維持に支障をきたす致命傷だけにそうもいかず、移動手段として最低限、足も再生させたのだがこの様だ。
足を再生させずに、発破で移動した方がまだマシだったかもしれない。
そんなことを後悔しながら、葉月はとてとてと裸足で建物内を移動していた。
廃屋確定の建築物に逃げ込んだのは、時間稼ぎと血肉の補給を目的にしていたのだが、なかなか後者の当ては見つからない。
この身体では足で逃げるのはまず無理だろうし、さっきの如く髪で逃げようにも、能力的に体力が持つのか疑問だ。否、髪の量が持つかも分からない。極細で強度のある髪糸を作り出すのは精神的にきつい。
体の再生の際でもかなり変容の精度が落ちていた。
だいたい、これらはあくまで崩壊した地帯から離脱を図る方法で、睦月から逃げきることとは別だ。
昨日のこともあって、何より手と足にあれだけの被害を受けながら自分を追いつめた顔所が、引くはずもないし、何より逃亡対策は取っていることだろう。
ならば返り討ちを狙うべきか？
それが一番可能性がある方法だ。
ただし、発火と幼女の身体能力でどう対抗すればいいのかが問題なのだが――――、その知恵を絞る時間はやはりと言うべきか、与えられなかった。
色落ちしたオレンジ色が、通ってきた廊下を焼きながら迫ってき

た。

直径１０ｃｍもない、一時期のようなビルごと切断する威力もない熱線だ。

向こうも相当疲労している。

それでも飛び道具を得意とする向こうに分があるのは火を見るより明らかだろう。

遮蔽物のない廊下はまずい。

近くの角を曲がって、天井の誘導板を確認しようと顔を上げた瞬間、塗れた床に足を取られバランスを崩した。

曲がった先が自分達の攻防で半壊していたようだ。斜めになった廊下をずるると滑って、その先にさらにあった広い階段を転げ落ちた。

２０台ほど並ぶ改札機と滑る前に見た誘導板の『→　中央改札口』の表記から、転げた先が新幹線と普通線をも結ぶ巨大駅構内の、最も人の出入りが激しい改札口だと知り、その性質上空間が広く取られていることに舌打ちした。

改札機のある反対側は、下を通るいくつもの路線を見下ろせるようにと一面全てガラス張りの壁になっていて、丁字型の両方向から各路線の客をここへ集める廊下すらが太い。

ガラスがなくなって吹きさらしになった構内は寒く、浸されたという表現がふさわしいほどにびちょびちょに塗れている。

ボロ切れになった黒い布を身体に巻きつけて、とにかく立ち上がり、遮蔽物になりそうな改札機へ駆け寄ろとして、追ってきた睦月の撥水に足を取られてまた転がった。

追撃を避けるために後ろに向かって放った発火（ブースト）が脆く霧散し、そこから飛び出した睦月の発破を喰らって、改札機に背中を打ちつける。

肺から空気が抜けて息苦しさを覚えるも、さらに飛んできた風刃に息を整える暇もない。

機械の後ろに隠れて避けたが、大して大きくも頑丈でもない遮蔽

物は一撃でかなり損壊してしまった。
その陰から睦月の様子を窺えば、向こうも酷く息切れしている様子だった。
無くなった右膝下を浮遊能力で補って歩行しているらしいが、加減が難しいのかバランスが時々崩れている。
なら、普通に飛んで移動すればいいのだろうけれど、それをしない辺り、得意ではない浮遊系の能力ではそこまでの力を出せないほど弱っているのだろう。
念力と浮遊、予知は身体能力の低下した自分相手にもう要らないとみて切っている。となると能力並行の枠は残り2つ。
やっぱり純粋なＰＫ戦となれば勝てそうにない。
遂に切り裂かれた改札機から横の改札へ。それもが風に耐えられずに悲鳴を上げている。
射程距離外だからこれぐらいで済んでいるが、近づかれれば近づかれるほど威力は増すはずだ。
２ｍを切った時点で釧の念力の有効範囲。
アレを使われたアウト。
あんな出鱈目な攻撃は避けられるものではない。
（っとに応用が利くなぁ、あっちの能力はっ！）
二の腕を掠めた風に皮膚を裂かれながらも飛び出して、改札内から死角になる切符売り場の壁にまで何とか移動しようとするも、直撃ルートの斬物風刃（カマイタチ）に途中で止まらざるを得ず、身体を隠した頼りない盾はいとも簡単に半壊した。
壁までは後3分の1ほど。
（せめてちゃんと身体を作れるだけの材料があれば・・・）
そう思いはしても、ないものはしかたない。
形骸変容（メタモルフォーゼ）がどれほどこの物的世界で有利性を持った能力であろうと、無から有を創り出せない。
だからこそ、体積を補うために先代変容だって３０年前鉄鋼竜（ドラゴン）になるのに鉄工所の鉄を――――、

（・・・・・鉄工所の鉄、骨？）

はっとして彼女は自分の足を見る。

細い太股、その中の骨はスカスカで、筋肉もほとんどない。

カルシウムにリン酸、コンドロイチン・・・その他筋組織を構成する細胞材料・・・・・とにかく足りないモノがありすぎてまともに身体を構成することができなかった結果だが、例えば今自分が防壁にしている鉄屑を取り込んだからといって、その足を健康状態に戻せるかと言えば答えはＮＯだ。

鉄から手にはいるのは鉄原子であって、足りない骨や筋肉の主成分はほぼ含まれていない。

だから自分は必要組織を満たしている同じモノを探していたのではないか？

そして、それは先代も同じだったはずだ。

鋼鉄の鱗を持った堅牢な竜。

その体長がいくらだったかは知らないが、元からの自分の持っていた筋肉で、体重を支えられたとは思えない。

明らかに内部組織の材料が足りていない。

それでも先代がそれを成し遂げたとするならば、鉄骨を取り込んだのが純粋に体積だけの問題だったとするならば、

（形骸変容（メタモルフォーゼ）は陽子や中性子、電子すら操れる？

核子組み替えができるのなら・・・いや、そもそもどうやって取り入れた？）

形骸変容（メタモルフォーゼ）はあくまで自分の身体を操る能力だ。

例え核子まで操れるとしても、それは体内に限っての話。

自分が口や背中から噛み砕いて人体を取り込んだように、あるいは今日のために用意しておいた銃弾やナイフを口から呑み込んで吐き出したように、取り込むという動作を経ない限り能力の対象にはできない。

しかし鉄骨なんて、そんなもの口からは入れられるわけがない。

（アメーバや白血球の食作用のように身体全体で包み込んだ？・・・

ちょっと待った）

体内に取り込んだところで鉄骨は鉄骨だ。胃で分解して取り入れるのとはわけが違う。

分解しようがしまいが元は外にあった物質であることには変わりないはずだ。

（外物質を自分のモノするって、考えてみればどう定義すれば・・・いや、それを言うなら逆だって・・・）

思い出すのは夏の倉庫。銃弾にもげた腕。

神経が繋がっていなかろうが、アレは動かせた。

あるいは切れた髪や触手、血液だって、大して気にしていなかったが遠隔操作できていた。

千切れていようが、元は生命活動の結果として体内で作られた物質だから動かせたと仮定するのは簡単だが、今日使った銃弾やナイフは胃に取り入れて、強化するのに多少原子構成をいじったぐらいで、銃弾は元から銃弾だ。

そもそも、いじる際に変容を使ったのだから、胃に入れた時点で形骸変容（メタモルフォーゼ）の基準では体内物質としてナイフは扱われていたのだろうし、身体の外に出して後、睦月を切りつける時には変容で刃を変形させることもできていて――――つまり、体外に出したにも関わらず、あのナイフは身体の一部という認識だったことになる。

（けど、だったら外から内へ入ってきたものだって、外の物質には違いないし・・・いや、そもそも人間の身体なんて数年もすれば構成する分子は全部入れ替わるんだから、外か内かなんて定義しようがない。

形骸変容（メタモルフォーゼ）は自分という生命と周囲の別のモノとでどう境界線を引いてる？

自他を・・・生物と無生物をどう区別する・・・？）

細い自分の右手を見る。

それは紛うことなき自分の手で、生きている身体だ。

手から焦点（フォーカス）をずらし、今までぼやけて見えていた周りの風景を意

識を移す。
コンクリートの壁、鉄の枠格子、水溜まり、ガラスの破片に改札機。
生きていない、モノ。
全てが無生物に分類されるモノ。
そこに生命は宿っていない。
そもそも生命が生体のどこに宿っているのかすら解明できない現状、その有無で生物を分けることなどできはしないけれど、それでも自らを周囲のモノと隔てる何かがあると考えるのなら、生命が産声を上げたその瞬間にこそ、生物と無生物が別った要因はある。
遙か昔、自然の摂理のまま混沌（カオス）であった世界に、秩序（コスモス）を求めたわがまま娘の誕生は、
その始まりは膜。外と内を分け『他』から『己』を切り離し『個』を作り出したその時から『私』は生まれた――――
そう、それまでは『他』も『己』も『個』も『私』も、みんな同じモノだった。

＃

下にあるフォームを見下ろせる展望壁（ショーウィンドウ）はガラスが飛び散り、枠だけが斜光に当てられ格子型の陰を中央改札へと落としている。
いつの間にか、あれだけ厚く天を覆っていた雲は晴れ、久しく顔を出した冬の空は橙色の光。
水溜まりがその陽を反射して、床はオレンジ色に輝いていた。
もう1撃。
もう1撃で葉月の身を隠している改札機を弾き飛ばし、彼女を遮蔽物から放り出せる。
そうなれば、次はもう次の盾に隠れる暇を与えず、トドメを刺し

にいける。
そのつもりで黒焦げた右腕を振るおうとした時だった。
黄金の光を受けて影を伸ばす鉄屑の陰から、ヒラヒラと何かが舞い上がった。
夕陽の中、静かに舞う黒い羽。
その形は揚羽蝶に似ている。
だが、
(蝶・・・じゃねぇな)
近くを通り過ぎた1匹を一目見て、睦月はそれが何か理解した。
確かに蝶だ。けれど本物ではない。
蝶々結びされたリボンが、蝶そのもののように舞っているのだ。
あるモノは滑空するようにほとんど羽ばたかずに舞い降り、あるモノははたはと羽を広げて舞い上がり、あるモノは糸を足のように使って水溜りや瓦礫にとまり・・・・・気づけば何十匹もの黒い蝶が改札の至る所で己が自由を謳歌していた。
それが何の紐で作られたモノなのか、その分かりきった答えは、目に見える形で示された。
自ら姿を現した葉月の髪がロングからショートヘアに変わっている。
いや、ソレはいい。黒い物体が飛び出した時点でそれは予測できていた。
不気味なのは、今の今まで攻撃を避けていた彼女が、その脆い身体を晒しているこの状況だ。
何らかの対抗策を思い至ったのは明白。けれど、何を考えているのかがまるで分からない。
髪を舞わせて、一気に攻撃させたところで睦月には核分裂による高熱がある。
それを纏われれば髪では攻撃を通せないのは向こうも分かっているはずだし、例え他に小細工のバリエーションを思いついたにしても身体を晒す必要はない。

どうしてもそうしなければならない手段なのか、あるいはそれほどまでに優位に立てる手段なのか。
そのどちらにしても、肝心の手段に思い当たらない睦月が、とにかく蝶を近づけさせないようにと警戒を強めたところで葉月は口を開いた。
「隠れんぼ」
「・・・あ？」
「隠れんぼ、しよう」
何言ってやがる、そう言おうとした瞬間、睦月は横からの見えない暴力に、数十mは離れた売店へ突っ込んだ。
（ん、な、念力だと！）
商品棚に打ちつけられながらも、すぐに立ち上がった睦月は距離が離れた葉月を睨みつけた。
（できるはずがない・・・できたら初めからやってるはずだし、オレから奪う機会もなかったはず！何、で・・・）
葉月の起こした不可解な現象にばかり意識がいっていた彼女は、
「あれぇ？隠れないでいいの？」
そんなさっきとは逆に、余裕を持った葉月の台詞に我に返り、
「隠れないと死んじゃうよ？」
その言葉と同時にまたもや、今度は腹を殴られるような衝撃を受けて床を転がった。
各路線と中央改札を繋ぐ、売店が連なる廊下。
床のタイルを巻き込んでコンビニや土産屋の店前を数件過ぎてやっと止まった睦月は、応急処置をしただけの右膝の皮膚が再度破けて出血しだしたのにも構わずに、風刃を葉月に放った。
本来なら葉月の身体を裂くはずの風の凶器は、彼女に届くことなくいきなり消えた。
ならば熱線は、と黒焦げた右腕を伸ばすも、途中までは直進した光は空間の歪みに吸い込まれるかの如く捻れて霧散してしまった。
（逃げ・・・！）

ようと、使った自己転移は発現すらせず、爆発を起こすための発破もがうまく作動しない。
さっきは使えた出力系能力が使えなくもなったことを、葉月が近づいたせいだと瞬時に判断できても、近づいてくる彼女を止める術は思いつかない。
だから、”隠れろ”なのだと今更ながら理解して、足で逃げようとした背中をさらに追撃された。
「ぁ・・・が」
効かないと分かっていても使わずにはいられずに、葉月を追い払うように放たれる彩り溢れた弾幕は、あらぬ方向へ逸れ、弾かれ、捻れ、消え、跳ね返るだけだ。
（くそ、何でいきなりっ）
とにかく葉月から遠のいた上で、自己転移で離脱する。
それぐらいしか対策の思いつかなかった彼女は、同時に、近づかれ過ぎれば右足を浮かしている浮遊能力すら使えなくなるという最悪の状況も思い浮かび、自らの焦燥感に拍車をかけてしまった。
焦りもあって考えなしに、無理やり浮遊能力で身体全体を持ち上げて、展望壁から外に出ようとして、無念にも打ち落とされた。
肺の空気を吐き出し、おまけに左腕の怪我までが開いた。
すでに出血量が限界に近かった彼女は、吐き気に襲われ胃液をぶちまけてしまう。
うぇ、と呻き漏らす彼女に容赦なく放たれた葉月の不可視の暴力は、彼女をさらに後方にまで追いやった。
水浸しになった身体。
血の気のどんどんと抜けていく身体。
治癒能力の応用で軽減させていた痛覚もが戻りつつある。
動かすことすら辛い身体になけなしの力を込めてもたげた視界を、黒い蝶が通り過ぎた。
（そう、コイツだ。コイツらが出てきてからおかしくなった）
だが、その仕組みが分からない。

何か仕掛けてくると、初めから警戒していたからこそ彼女には分かる。

コイツらは何もしていない。

この不吉な蝶が何か不審な動きをすれば、何か掴めたはずだ。

そのつもりでずっと観察していたのに、殴りつけられている間、この蝶はただ舞ったりとまったりしていただけだ。

葉月が意味のない行動を取るはずもないのだから、そこに在ることがソレの存在意義なのだろうと、完全に策中にはまった今なら推測できる。

しかし問題は、在るだけでどうして役割を果たせるのかで・・・・・。

改めて、葉月の起こした現象を振り返ってみて、睦月はやっと思い当たった。

形骸変容（メタモルフォーゼ）の有効範囲を体外に範囲を広げることができるとしたら、先ほどの現象を説明できるのではないか――――？

（形骸変容（メタモルフォーゼ）の適応対象ってそんな曖昧な・・・？いや、体内体外の境界線の方が不明瞭なんだ。

・・・・・っ！そういうことか！蝶は自分の体内を再認識するため！そうだよな・・・形骸変容（メタモルフォーゼ）の有効範囲が概念的なモノという考えに至ったとしても、そう簡単に今までの認識を変えれるわけがねぇ！だから・・・）

外と内を分け『他』から『己』を切り離すために、自分の一部（髪）で囲った。

膜という名の境界を定め直す行程を経ることで、一から『個』を設定し直した。

つまり結界を創り出した。

（どおりで隠れんぼなんてほざいてたわけだ）

夏、葉月がしでかしたことを思い出して、睦月は口に残っていた胃液を吐き出した。

あの時も葉月は同じことやっていた。

倉庫を密閉し、外界から切り離して、その中に異質を内包することで異界を創るという、魔術的な下ごしらえ。

別に本当に魔法をかけるわけじゃない。要は自己暗示なのだ。

ぶち壊れた、狂気染みた世界を演出することで、雰囲気すらを呑み込んで、自分すらを暗示にかけ、この世界もが自分の一部なのだという突拍子のない考えを信じこませた。

蝶とそれと、2つ合わせてようやく発動する形骸変容（メタモルフォーゼ）の第2段階。

ならば、せめて蝶からさえ逃げ切れれば、と頭では分かっていても、彼女はある疑念に囚われて動くことができなかった。

万可統一機構は形骸変容（メタモルフォーゼ）の進化の可能性が、能力奪取ではなく、境界越境にあることを知っていたのだろうか？

彼らの望みであるという全知全能は形骸変容（メタモルフォーゼ）だけで事足りる。もし彼らがそれを知っていたとすれば、内潜変容（メタモルフォーゼ）の重要性は高くない。それでも自分という存在を用意した理由は、葉月に対する当て馬――――だったのではないのだろうか？

そんな考えがぐるぐると巡って、そもそも形骸変容（メタモルフォーゼ）を得るのに戦闘に臨む必要性がないことや、この戦いに自分達のどちらが生き残っても万可にとっては同じことなのだと思い至って、挙げ句、

「もーいーかい？」

葉月の楽しそうな壊れた声を聞いて、いっそう惨めな思いになった。

そう、考えてみれば、葉月が改札機から姿を現した時点で勝負はほぼ決まっていた。

体内ならば自在に操れるのが形骸変容（メタモルフォーゼ）なのだから、蝶に囲まれた時点で、自分の殺生与奪の権利は完全に葉月に移っていたはずだ。

「もーいーかい？あははははっ！」

なのに、彼女は殴りつけるだけで、決まった勝負をわざと長引かせ、今もこうして愉しんでいる。

「もーいーかぁい？」

こちらに歩きながら、そんな台詞を吐く壊れた葉月をせめてもと

睨みつけようとして、
「もぅーいーよ」
今まで繰り返してたのとは違う台詞を口にした彼女の目が、ギュルリとこっちを向く様直視し、そして思い出した。
イメージは紅。
濃黄から山吹、夕赤に濃紅。
赤き空を従属して佇む黒き塊。
紅の逆光がソレを黒く見せて、その輪郭を強調する。
見上げた屋上、そして呪詛を吐く絡繰人形。
そんな、過ぎ去りし日の情景。
「ぁ・・・」
縮んだ身体に、短くなった黒髪。
儚い蒼色が西から迫る紅色に追いやられ、赤の女王が支配する夕空は赤い。
そんな、今この時の風景。
その2つが重なった時、彼女は理解した。
「あぅう」
ソレが何なのか、ソレを動かすのが何なのか、どうしてどのようにしてそこにあるのか。
織神葉月という存在の在り方を理解した。
意志も、精神も、心も、命もをモノを取り除き、死に近づいてこそ姿を現す、生命の在り方を理解した。
彼女は一生命の始まり「エヴァ」、何もかもが混じり合った世界で生と死とを分け隔て、生きること始めた、それまでは生きていなかった、わがまま娘。
在るのか無いのかも未だ解明されていない、どこにあるのかも分からない、隠れんぼ好きなわがまま娘。
生を定義できない以上、死もまた定義できない。
形骸変容（メタモルフォーゼ）がそんな生と死、自と他の境界線にある能力だとすれば、どうやれば葉月を殺せるというのか。

もがれた腕はそれでも生きていた。ちぎれた上半身はそれでも生きていた。生命維持に呼吸器も循環器も必要としない葉月に、死と呼べる状態が本当に存在するのか。能力発現に関わる脳を破壊すれば可能性はあるが、脳を半分失っても生きている前例はいるし、脳だって発達した神経細胞でしかない。

いや、そもそも能力を奪うことが目的だったはずなのに、いつの間にかそれを逸して殺すことばかり考えていた時点で、自分の敗北は決まっていたのではないか？否、全力で戦って互角の相手に対して、自分は手加減しなければならないような勝利条件が提示されたところからして――――、

（やっぱり私はっ）

「うぇ・・・」

そこまで考えが至った時、睦月の心は折れた。

タイルの剥がれた床、そこに溜まった水。

そこに頬をつけて、涙なのか鼻水なのかも分からず顔を汚している自分。

酷く、惨めな、気分。

近づいてきた葉月の裸足が視界の端に写った。

右脇を掴まれ持ち上げられ、今日何度目かの対峙を果たす。

「泣いてるの？」

彼女の顔を見て、心の底から不思議そうに、葉月はそう言った。

程なくして脇下と接した手から、皮膚が融け合い始め、

そして、腹が弾けた。

「「ぇ？」」

それは2人とって驚きで、2人共に痛みを与える一撃で。

ボトリ。

本当に、そんな間の抜けた音を立てて、睦月の下半身が床に落ち、

”自分”と再認識した結界内を貫かれ、体内をかき混ぜられたよう

な感覚に襲われた葉月は、睦月から手を離した。
鉄榴処女（アイアン・メイデン）、仕込み刃で血を絞る凶弾。
ごぷごぽと口から血を吐き出し、腹を押さえてくの字に体を曲げつつも、そのあんまりな横やりの犯人を探し辺りを見回した葉月の目が、視界に青いフードの人物を捉えた。
（風々・・・！？）
隣に幼い少女を連れているのにも気がついたが、今はそんなことはどうでもいい。
何でここで、と全てを台無しにした男に怨嗟の念を送ろうとして、足が掴まれる感覚に視線を下ろした。
睦月が手を伸ばして足首を掴んでいる。
「ぁっ、ぁぅ・・・えぁっぅ、ぅ、ぅ、ぅ」
呻いて、意味なく必死で自分にしがみつこうとする彼女の姿を冷めた目で見て、葉月は大きく息を吐いた。

＃

色神睦月、射殺。
その知らせを受けて万可統一機構は騒然としていた。
睦月が死んだ。確かに損失は損失だが、それは自体はいい。
葉月と睦月を戦い合わせたのは自分達なのだし、その過程でどちらかが死亡するという可能性は最初から分かっていたことだ。
だが、射殺。それも昨日、葉月が食べた泥底（ヌタ）が持っていて、その後なくなった鉄榴処女（アイアン・メイデン）だというのが大問題だった。
葉月はあの銃を持ち出してはいない。なのに、睦月はその凶弾にトドメを刺されたという。
つまりは第三者による介入があった可能性が高い。
昨日の時点でもそうだったが、今日にしても辺り構わず破壊の限りを尽くした彼女達の戦いは、人員や徊視蜘蛛のような遠隔カメラどころか、雲のせいで人工衛星ですら監視することができなかった。

それ故に、その可能性は機構に激震を走らせたのだ。
実のところ形骸変容（メタモルフォーゼ）の境界越境などという発想など持っていなかった機構は、純粋に内潜変容（メタモルフォーゼ）と形骸変容（メタモルフォーゼ）の2つが揃わせることを今回の目的にしていた。
どちらが死のうが、とにかく能力が1つになればと考えていた機構の連中にとって、第三者に1人が殺されたという事実は作戦失敗をも考えられる事態だった。
『駄目です！色神は完全に死亡！腹部で身体がもげていて、これじゃあ蘇生のしようがありません！』
声と共に前方の大画面に映されている、吐き出す血すらがなく青ざめた睦月の死体。
その有様を見て研究者の1人が叫んだ。
「くそ！脳が完全に死滅する前に織神を呼べ！あいつはどこへ行った！？」
『近くにはいません！それより早く冷却能力者を！このままでは・・・！』
「待て、賢者の石だ！賢水ならば劣化を止められる！」
「そんなものを持ってくる余裕はない！冷却能力者なら繁華街の近くにもいるはずだろう！？」
「馬鹿か貴様！半径数キロに渡って崩壊した街に誰がいるってんだ！」
『なら、機構と契約している能力者を派遣――――』
「それだったら水を用意するのと同じだ！いや、いい、とにかく両方用意して――――」
「黙れ！」
喧々諤々とした室内、響いたのが内海岱斉の怒鳴り声。
普段、感情の篭った言葉を発することのない、神戸万可の最高責任者の怒号に、部屋と現場の双方は静まった。
「・・・頭蓋を割れ」
『は？』

一瞬、意味が分からず聞き返した現場の人間に彼は再度声を荒げた。

「頭蓋を割って脳髄があるか確かめろと言っている！」

『は、はいぃ！』

その、脳の保存とは真逆を行く命令に戸惑いながらも、逆らうという選択肢のない現場班は睦月の死体を俯けに、それから数十秒の間を開けて結果が伝えられる。

『あ、ありません！頭蓋骨の中は空洞です！』

「・・・・・織神葉月は内潜変容（メタモルフォーゼ）を手に入れた」

そうこともなげに言って、彼は続けた。

「これより織神は呼称を千代神に改め、万可統一機構は第2段階へと体勢を移行する」

第57話ー　万物と生命の境界。ー"for　Eve"

千代に八千代に受け継がれる命の境界。
乙女達の戦いの終わりは教会の鐘の音と共に。

あれ？おかしいなヒロインの姿が見えない……。
ヒロイン？もちろん釧のことですが何か？
あやつは昨日、睦月に教わったところを徹夜で勉強して、この話の間中ぐっすり眠ってます。
うん、いつもの釧だ。
そして何故か本人より先に活躍する釧の念力。
射程に入ってしまえばまず避けれない、防御しようがない、内部から木っ端微塵になる粉砕念力……えげつないですね。
葉月の天敵です。
本人も次から出てきます。

しっかし、こう……もっと華麗に戦えないものかね、うちの子らは。
何で血反吐吐かないと殴り合えないんだろうね……。
今回は（も）結構書くの大変でした。
アレですアレ、1人で将棋やってる気分になるんです。
矛と盾で戦えば矛が勝つとか言いますが、最強の矛と盾の両方を持った2人が戦うと、もう……ね。
まぁ、楽しくはあったんですが。
キャラの中でもお気に入りの1人である睦月を一杯書けましたし。

さて、もうかなり昔のことな気がしますが、例の葉月の元ネタのお話をば。

アンケートで色々な回答を頂いたわけですが、正解はありませんでした。
たぶん正解はでないと言っていたので、まさしく予想通りの結果！
すばらしい！　※作者は大人気ない愚か者です。

ニードレスのイヴ
ブラックキャットのイヴ　（『Ｔｏｌｏｖｅる』は『エキ日々。』開始より後だったかと）

たぶんこの辺りが多いと思って『最初に思い浮かぶものではない』と言ったのですが、やっぱりでした。
ふはははは！思惑通りに事が運ぶのは楽しいものよのぅ！
※作者は性根が腐ってます。

ちなみにダブルブリッドの片倉優樹さんは、前にそう言ったことがあった気がするのですが、今回の趣旨（能力的な元ネタ）とは別。
何で別なのかは後で説明します。
他には『戯言遣い性転換』やら、私の知らない作品などもあり、逆に興味が湧いたりもしました。面白いなーこういうアンケート。

さてさて、それでは発表といきますが、その前に……皆様、私めは今まで葉月ちゃんを色んな言葉で表現してきました。
葉月に対して人間らしい表現をあまり使わず、異形チックな表現を多用してきました。
ここいらの話では触手も生やしてとどんどん人間離れしていきました。
化け物、クリーチャー、モンスター。そう化け物です。
そんな化け物葉月ちゃんのモチーフが人間・人型なわけないじゃないですかっ！　※作者は（以下ｒｙ

葉月の元ネタは漫画作品からじゃないんです。
アニメでもなければラノベでもないんです。
特撮映画は平成ガメラシリーズから、

『ガメラ３　邪神〈イリス〉覚醒』より、――――イリスが葉月の元ネタでした。

うん、怪獣です。
だから、人間味を持たせるために、人と怪の交雑雑種である優樹さんを参考にしたんですよ。
ヒントは触手、火球、遺伝子情報を取り込んでコピーする能力辺り。
ガメラシリーズ全体では『レギオン』という言葉が何度も出てきてますし、『第４５話－　思春。－Ａｄｏｌｅｓｃｅｎｃｅ－』で誉ちゃんが「ギャオス」とか叫んでます。
他にも今回の戦いは、かなり似通った点があるはずです。

まぁ、知ってる人にしか分からないんでしょうけどねー。
「ガメラ？知らねぇよ」って人は機会があったら是非。ちなみに監督の金子修介さんはデスノートの監督もしてました。
ガメラ３なんかは終わり方に賛否両論あるらしいですが、雨×炎×京都の描写が綺麗で私は好きですし、ガメラ２は自衛隊の描写がすばらしい。
ゴジラと違って『Ｇ対策～』みたいな特殊機関ではなく、自衛隊ってのがいいです。全面協力だったらしいですね、自衛隊。

ふぅ……、このネタは書き出すと止まらなくなりそうなのでこの辺で。
気が向いたら、作者の活動報告辺りで駄弁るかもしれません。
それでは、今回はこの辺で。

第５８話－　無垢。－Ｆｉｇ　Ｌｅａｖｅｓ－（前書き）

――――禁断の果実を食べた少女は羞恥心を得、

第５８話ー　無垢。ーＦｉｇ　Ｌｅａｖｅｓー

微かに聞こえる水音に目が覚めた。
うつ伏せで枕に突っ伏していた顔をもたげると部屋の中は真っ暗で、カーテンの隙間から漏れる光もない。
携帯で時刻を確認するともう夜だった。
昨日の邂逅で得た収穫をきっちり自分のモノにすべく机に向かい、思いの外熱中してしまった結果、眠りについたのは今日の午前５時ほど。
そう考えると起床にはいい頃合いだろう。
どうせ冬休みなんだから昼夜が逆転しようが大した弊害はない。
寝返りでズレていたヘアバンドをひとまず外して、手櫛で髪を整えてから部屋を出た。
ドアを開くと同時に大きくなった水音は浴室から聞こえてくるようだ。
葉月がシャワーを浴びているのだろう。ここにインターフォンなしに入れるのは彼女しかいない。
寝ぼけた頭を起こすのに炭酸でも煽ろうとリビングに入って、冷蔵庫からサイダー缶を取り出して一口つける。
横目で見たテーブルに葉月の携帯を見つけた。
何やら随分と傷がついているが、それでもちゃんと機能はしているみたいで、赤と緑のランプが点滅して着信を知らせ、ディスプレイに「岩男」と表示されている。
珍しい。あの男は基本的に現代文明の恩恵というやつを使わない人間だ。大抵の場合パソコンの方かあるいは手紙でことを済ますのに、何か急ぎの用事なのか。
そのことが少し気になったけれど、干渉しようのない話だ。
携帯から意識を外してもう一口煽ったところで、シャワーから揚がった葉月が入ってきて、その足音に振り返った俺は盛大にむせた。

「葉月・・・ちゃんと服着てから出てきてくれ！」
「ん？んー」
俺の切実な叫びに生返事を返して、葉月は胡乱と眠たげにしている瞳を擦った。
どこやらかなり疲れているようで、首がぐにゃぐにゃと傾いで、身体もフラフラと揺れている。
それをバスタオル一枚を巻いた姿でやるものだから、酷く扇状的だった。
返事を返したものの、内容はまるで耳に入っていなかったらしい彼女は服を着には行かず、幅がそもそも足らない上にちゃんと巻けてもいないタオル姿のままに歩み寄ってきて、俺の手から缶を取り上げると一気に飲み干した。
間接何ちゃら・・・まぁ、今更だけど。
どうやらそれが炭酸飲料とも判断がつかないほど意識が朦朧としていたと見えて、辛そうに顔をしかめ、それから目を閉じたまま天井を仰いで身体を揺らし、
「ぁー・・・もぅ無理」
気だるそうにそう呟いたかと思えば、リビングデッドのような足取りで歩み寄ったソファーに倒れ込んだ。
形骸変容を発現してからはこうもあからさまな疲弊を見せなかった彼女だったのだが、どうやら身体強化をも越えた疲れに身体を支配されているらしい。
せめて自分の部屋のベッドまで我慢したらいいのに。
そう言おうとして、それ以前に結局着衣という大問題が解決されていないことに気がついた。
「葉月、だから・・・服！」
けれど、葉月はもう顔を上げることすらせず、
「・・・寝てる間に着せといて」
さらりととんでもないことを言ってくれた！
「あのな、一応俺も男・・・なん、だけど・・・・・・葉月？おー

い葉月さん？」
「下・・・着は3番目・・・の、引き出し・・・だから・・・・」
俺の抗議は軽くスルーし、むにゃむにゃと半分以上寝言のようにそう言って、葉月は本当に寝入ってしまった。
空しく開いた口をそのままにしばらく突っ立った後、その行動が葉月の半裸を凝視してるのと変わらないことに気がついて首を振る。
自然と太股に目がいってしまっていたことに激しく後悔。
・・・・・布団かけてやるか。
タオル一枚では寒いだろうし、俺の目にも毒だし。
飲むだけ飲んで返却された空き缶を捨ててから、葉月が女になってからあまり入らなくなった部屋に入った。
中はなんだかんだで女の子していて、そのアイテムのほとんどがクラスメートの詰め込んだモノとはいえ、それでもちゃんと使っているようで安心した。
布団を畳んで、ついでに廊下をあの姿で徘徊されるよりはと、服の方ももっていくことにする。もちろん着せるつもりはさらさらない。
上下の服は簡単に取り出せたが、問題は引き出し3段目に入っているという・・・下着。
意図せず停止してしまった腕を伸ばして取っ手を引けば、中には丸く畳まれた布が几帳面に並んでいた。
気恥ずかしさにロクに目も向けずにその内の1つを素早く引っつかんで閉める。
一息吐いて、それを着替えのシャツとズボンの間に挟んだところで、今自分が手に持っていたモノが上下の下だけだったことに気づいた。
「うっ・・・」
仕方なくもう一度開いて、今度はちゃんと目的の物を探し出して手にする。
それだけの作業でかなり疲れがきた。

それも着替えにサンドして、さらに畳んだ布団に乗せてから布団ごと持ち上げる。
厚みのある布団を抱えると自然と顔に当たった。
鼻腔をくすぐる香りに、葉月が女の子なのだと改めて意識させられる。
その気恥ずかしさったら・・・！
これで、ちゃんと本人もその自覚を持ってくれればなぁ。
いや、それともやっぱり羞恥心の問題なのだろうか？
考えてみれば、男同士でも半裸を晒したり、着せ替えを頼んだりなんて普通はないし、実際男の頃の葉月とそんなやり取りがあった覚えもない。
体育祭の時にからかわれたことがあったし、女であることに自覚はある？
うーん、でも絵ロ梨（エリ）がけしかけたことを意味も分からずやってるだけの可能性が高い。
そうでなかったら、葉月が俺に・・・・・ということになるけれど、それは自意識過剰にもほどがある。
リビングに戻って、布団をとりあえずテーブルに置く。
まずはソファーの背もたれを倒して簡易ベッドにしてやろう。
そう思って、背もたれに手をかけたところで、さっきとは体勢が変わっている葉月の姿に慌てて顔を逸らした。
うつ伏せから仰向けに、巻いていた布は外れて身体の下。
それでも癖なのか両手は行儀よく前で組んでいるものだから、完全に胸がさらけ出されている。
勘弁してくれ・・・。
だから、俺も男なんだって・・・・・・。
簡易ベッド作成をとりあえず諦め、布団をかぶせて、そのままその場に座り込んだ。
動悸が激しい。顔が尋常じゃなく熱くなっているのを感じるし、ムズかゆさも。

後ろでもぞもぞ布団のすれる音が聞こえてきて、さらに心臓が痛くなった。

「あぁもう・・・、本当にっ」

ああいうところ、どうにかしてほしい。

・・・・・そう思いつつも、頭を巡るのはつい先ほど見た葉月の全裸姿なのだから、我ながら情けない。

背中越しの規則正しい寝息に、呼吸と共に上下していた乳房を思い起こされて、体育座りで両足に挟んだ両腕をきつく締め付ける。

座り心地の悪さを感じて、腰の位置を何度も替えた。

うぅ・・・辛い。

今、自分が煩悩を起こしているのは、自分が保護者的立場を含んで接してる相手なのだと言い聞かせるために葉月の方へ振り返る。

と、

「ん？」

よく見れば、彼女の髪はショートになっていた。

首筋にかかる程度の長さを残して、ばっさりと切り揃えられていて、目を凝らして観察すると、いつもより艶もなく髪先のハネが多い。

そんな分かりやすい変化に気がつかなかったほど視線が他のところに釘付けになっていたのだと思い知らされて、情けなさが増した。

髪の違いに気づけば、次に目がいくのはうなじで、乱れた髪の隙間から見える生え際が妙に色っぽい。

寝返りにうなじが隠れ、代わりにこっちへ向いた顔にドキッとする。

閉じられた瞳の作る三日月型のまつげ、薄く色づいた木の葉型の小さな唇。

その唇に思わず手が伸びて――――すんでで、はっとして引っ込め、もう片方の手で締めあげた。

危なぁ！何をやってるんだ俺は！

無意識の行動に言い表せない恐怖を感じた。

今、俺は何をしようとした?葉月の唇に指を当てて?・・・その後は?

続きの想像に飛び起きて、跳ねながら距離を取り、１ｍほど離れたところで足の力が抜けてストンとへたり込んだ。

その際、腕に固く熱い感触を得て深く息を吐く。

・・・・・・。

・・・・・・もう言い逃れはできまい。俺は完全に葉月に欲情してる。

他人の入り込めない部屋の中２人きりで、葉月は無防備に寝入っている。

かけた布団さえ剥がせば、女の子の裸体があるという状況。

深く眠り込んでいる彼女は、今更布団の有無に気づきもしないのだろうし、俺が劣情のまま行為に走っても責めもしなければ、態度も変えないんだろう。

襲われないと信頼しているわけではなく、それの意味するところをちゃんと理解しないまま、別段構わないと許すんだろう。

そう考えると何故か身体の熱がいくらか冷めた気がした。

落ち着きと言うよりは萎えたような感覚に、今自分の思考の中に気に入らない何かがあったのだと知るも、それが何なのか霧がかかったように霞んで分からない。

俺は葉月に何を求めているんだろう?

最初は危なっかしい、目の離せない友達を保護するような、感覚だったはずなのに。

それが変わったのは何時からだ?

女になってすぐじゃない。見方は少しずつ変わっていったのだろうけれど、親友をそういう対象で見るようになった決定的な要因が何かあったんだ。

一番に思い出すのは暑い夏の日。少し遠出して入った水族館。

その時、だろうか?

水槽に釘付けになって、ジンベイザメやチンアナゴを目を輝かせ

て眺める姿に普段とのギャップを・・・女の子らしさを感じたのかもしれない。

それとも夕方の観覧車？感嘆の息を漏らす彼女の横顔に見ほれたあの時？

ワインセラーのボトルを片っ端から開けていったお茶目なところか、あるいはほろ酔いの彼女にされた『舌下投与（キス）』でなのか。

その時の感触と共に、さっきしようとしたことまで思い出して、首筋辺りまで熱くなった。

学園祭の時にはもう、間違いなく女の子として見ていた。

仮想現実（1．5）が創り出した『不思議の国』の世界で、俺は葉月と・・・・・する夢を見たぐらいなのだから。

思春期まっただ中、そういう想像や夢を見ること事態はどうしようもない話だけど、その相手が葉月だというのが問題で、しかもそれが本人にバレてたみたいで、あの時のことを考えても、俺が間違いを起こしても葉月の振る舞いはそう易々と変わらないだろう。

それが嫌だというこの感情は、葉月が女子として迫られたらという考えに対して自分が思ったモノとよく似ている。

人間味を持ってほしいという想いは女の子であってほしいという想いに変わり、でも取られたくないという独占欲が心のどこかにあって・・・「可愛い」、俺はそう思えるほど、「彼氏」と言われて内心喜びが沸き上がるほど・・・・・。

火照った頬を両手で覆う。息が熱くなるほどのぼせた頭を冷まそうと首元を仰いでも、動悸ばかりが激しくなっていく。

目が潤んでしまって葉月を直視できない。

あぁ、俺、葉月に恋してるんだ・・・。

だから、例え行為に及んでも、葉月が今のままでは、彼女がその意味を理解しないままでは、きっと俺達の仲は変わらないと分かっているから――――、

それでは満足できないから、受け入れて、そして応えてほしいから。

俺は。

＃

どこまでも暗く、終わりの見えない夜の空が白んできた。
早朝を知らせる小鳥の鳴き声が聞こえる。
ずっと、ずっと座り込んで物思いに耽っていた俺は、「ん・・・」と葉月の立てた微かな声に凝り固まった身体を跳ねさせた。
意識の方も覚醒したようで、布団の中から出した手で目を擦った彼女は、ゆっくりと身体を起こした。
その際に、かけてやった布団がズレ落ちて、上半身が露わになったが、やはり葉月はそれを気にも留めない。
「葉月、胸隠してくれ」
「あー、まぁ、うん・・・」
言葉ではそうは言うものの、実際行動に移そうとはしない彼女の様子に溜息が出た。
・・・一晩、ずっと考えていたことを実行しよう。
逡巡後、決心がぐらつきそうになる前に、躊躇いごと振り切るように立ち上がった。
大丈夫。台詞は何度も繰り返し練習したし、大したことをするわけじゃない。
これはただの意思表示、今まであやふやだった事柄をはっきりさせるだけだ。
そう言い聞かせて近づいて、呆っと虚空に目をやってしばしばと瞬きする彼女の両肩に手をおいた。
「そぉい！」
力を込めて、上半身を倒させる。小さく軽い彼女の身体は簡単に仰向けになった。
肩を掴んだまま、その上にまたがって目線を落とせば、少し驚いたような表情をした彼女と目が合う。

そのまま、しばしの沈黙を挟んで、口を開いた。
「葉月・・・俺達の友人関係、解消しよう」
その言葉に、微かに息を呑む音がした。
いつも表情が薄い葉月の瞳に不安と動揺が混じってのを見て取って、安心してしまう自分に少し罪悪感。
ここまで言ってはもう引き返せない、胸の鼓動が乱れ乱れているのを感じながら続きの言葉を紡いでいく。
「俺さ、たぶん、葉月のこと女の子として見てる。
だから今のままじゃ駄目だと思う・・・・・このままだときっと今の関係すら保たない。
別にさ、だからどうってわけじゃないけど、ん、その・・・男の時のように接するのはやめてくれ。
俺がどう見てるかってことだけは覚えてて・・・・・いや、欲を言えば女の子らしく・・・自覚を持ってくれると嬉しい、です」
最後、微妙に弱気になって口調がおかしくなったが、これで言いたいことは言った。
もう内心は一杯一杯で、これ以上見つめ合うことなどできるはずもなく、脱力しかけの身体を何とか葉月から離して、ヘロヘロとリビングのドアへ向かう。
去り際、
「服、テーブルに置いてあるから」
振り返って、押し倒された格好のまま動きが止まっている彼女にそう言ってから、精神的に参った頭を休めるために自室のベッドへ倒れ込んだ。

＃

目を閉じて、再び開いたら一瞬の間に3時間が消し飛んでいた。
全く夢見のなかった就寝に満足感は薄く、二度寝の誘惑に負けそうだ。

しかし考えてみれば、昼夜が逆転していたのだから今ここで寝たらほぼ1日を惰眠で過ごすことになる。
シャワー浴びよう・・・。
その後、ネットで学園の動画チャンネルでも回って時間を潰して、昼からは念力の訓練所に行こう。
ベッドから抜け出して、パソコンの電源を押したところで、ドアがノックされた。
きぃ・・・と躊躇いがちに開いた隙間から、顔を出す葉月。
つい数時間前までショートだった髪はいつものロングに戻っている。
「それじゃ、私帰るから・・・」
「あ、あぁ」
閉まる扉、遠ざかる気配、そわそわと落ち着かない自分。
ドアに背中を預けて、玄関の鍵が閉まる音を確認してから廊下に出た。
まずはリビングへ行って、結局あまり飲めなかった炭酸を今度こそ一缶煽った。
1人でいる時の寂しい癖でテレビの電源を入れてから浴室へ。
どうせ同じモノを着るつもりで服を洗濯籠に引っかけて、タイルの床に足をつける。
熱湯を顔に浴びせて、次は髪を濡らそうと頭(こうべ)を垂れたその時、赤い何かが目に入ってきた。
頭から流れ落ちるお湯が床を流れていく中、流れることなく留まり続けている少し黒ずんだ赤色のソレは、外縁が波打った円を象っていて――――、まるで、血のように見えた。
遠く、リビングから番組の音が聞こえる。
緊急ニュースと何度も告げるアナウンス、現場にいるというレポーターの声。
「昨日神戸を襲った大災害は近接する特別指定学園都市との関連が噂され、実際超能力者らしき人影を複数目撃したという声もあり―

――」

「・・・最も被害の大きかった駅を中心とした数キロは地盤も緩み、繁華街は壊滅的な被害を受けた模様です」

第５８話－　無垢。－Ｆｉｇ　Ｌｅａｖｅｓ－（後書き）

前回とのギャップが酷い（笑）
しかしこれで予定通りなんだぜ？
前の７０ｋｂに比べて今回は１３ｋｂとかなり短いですが、前の長さが異常だっただけで、長い最終編の小休止としてはちょうどいいんじゃないかと。

しっかし乙女回路だなクシロちゃん。
書いてる方が恥ずかしかったヨ。
作者はこういう桃色な話は書くの苦手です。

第５９話－　甘言。－Ｌｉｌｉｔｈ'ｓ　Ｓｅｄｕｃｔｉｏｎ－（前書き）

――――甘き果実の味をリリスは囁く。

第59話ー　甘言。ーLilith's Seductionー

地球温暖化、あるいは全球凍結。
何にせよ地球環境の劇的な変化がもたらすであろう驚異に超能力者によるアプローチがなされている昨今、環境問題はいくらか下火になりつつある。
その気になれば天候すら操れる連中がいるこの世界では二酸化炭素量の変化など微々たる影響でしかない。
代わりにその超能力者の虫の居所如何が、地球の危機に直結するのだから、身近にある危険という意味では大して変わりはないのだろうけれど。
１２月、そんな超能力者の、局所的天候操作の恩恵によって降り続けていた雪がいつの間にか姿を消し、１月も中旬に差し掛かったこの頃は学園都市の色は白から灰色染みたモノへと変わっていた。
それはもちろん冬休みの終わりという気だるさからも来ているのかもしれない。が、原因は何か？そう考えて一番最初に思い当たるのは、繁華街方面の大惨事のことだろう。
マンションの近くでの出来事だったにも関わらず、寝過ごした俺はその様子をニュースを通してか、事後の現場を遠目に眺めるぐらいしか知ることができなかったが、それでも十分事の重大さが分かるほど被害は甚大なものだった。
何でも放射能までが検出されたとかで、周辺一帯が立ち入り禁止地域になり、俺も住んでいたマンションから退去して今は別の所で寝泊まりしている。
クリスマス直後を襲った悲劇、超能力都市関与か？
そんなコンセプトでどの放送局もが番組を組んでいるのだが、特別指定都市制度の見直しを提案する、実際被害には遭っていないキャストや街角アンケートの結果にどれほどの意味があるのだろうか。
環境問題然り、超能力研究で実用化された技術を受けている連中

が、事故現場も知らず叫ぶ意見に責任感があるとは思えない。
正しく現場地帯にいたことはいた俺は、しかし被害らしい被害を受けてないが故に、この事件に関して恐怖を感じてはいない。
そりゃあ、もし少しでも場所がズレていたらとゾッとはするが、経験も体験もしていない以上何を思おうと、何を語ろうと他人事の域を出ない。
俺ですらこんな感じだ、もっともらしく語る画面越しの人間の言葉をどうも信用する気にはならなかった。
放射能の除去に別学園の超能力者を呼んでいるというニュースも流れ、それを能力者のパフォーマンスと捉える評論家まで現れたが、この一件に関して、世間で言われる『超能力者暴走説』には実は一つ大きな難点がある。
神戸学園都市には放射能操作のできる超能力者はいないのだ。
だからこそ、別学園に出動を要請したわけで、該当する能力者の事件当時の所在も明らかになっていた。
学園の把握していない超能力がいたとしても、それでは学園に全責任を問えない。話題を求めるマスコミが目をつけたのは当然至極研究所だった。
前々から穏やかではない噂が立っていた施設だ。何かやっていたのではないか？そう煽ることで責任を追及し、今まで深く突っ込めなかった研究所へスポットライトを当てたのだが、それに対して各研究所の責任者は口を揃えてこう言った。
「放射能能力に秘匿する価値はない」
確かにその通りで、核子操作の能力研究など、エネルギー分野の研究所で堂々とやればいいようなことだ。隠す意味が微塵もない。
そう言われた時点でマスコミは敗北、今まであった噂の類もこういった無責任な煽りだと反対に指摘され、さらに追い打ちをかけて、現場の放射能濃度は放射線をそのまま放ったとしては低すぎることが明らかになり、逆に神戸の発電能力最強である筒芽旭が紫電一閃でここまでの威力は出せないと証言した辺りで路線を変更、放射能

はどこからきたのか？と延々と議論を繰り返している。
しかしもうすぐ1ヶ月となる最近になると世間の関心は移ろい始め、授業が再開した生徒にしてみれば、超能力という一つの学業に対して世間の向ける自重を強いる圧力は鬱陶しいものでしかない。
わざわざ超能力開発禁止を訴える署名活動を、学園都市の駅前でやっている連中を無視して通ってきたクラスメートの話題は惨事の被害についてではなく、超能力のこれからや就職への影響といった事柄に完全移行していた。
しかし、それはあくまで一般的な生徒の話であって、俺の場合はそうはいかなかった。
大惨事のこと、その日異様に疲れを見せていた葉月のこと。
放射線と葉月の能力とは直接結び付けられないけれど、神戸学園都市に放射能操作系能力者が公式的にはいないとしても、相手の能力を得る原始素能（ホワイト・ノート）という能力だってあるわけだし、超能力者犯人説が最有力なのには変わりがない。
そんな相手が、万可統一機構と繋がりがあったとして、あの日何があったかは知らないが、その結果葉月がくたくたに疲れるような、もはや隠しようもないような出来事が起こったということは十分に考えられる。
容易に関連付けるのは危険とはいえ、事件と葉月には繋がりがあるという、嫌な予感。
それを振り払おうとしながら過ごしてきたここ数日、今日も登校の道すがら、他愛もなく超能力エネルギーの将来性について、就職に影響するかを議論していた俺と隆と葉月の3人は、就職する気がない、興味がない、意味がない、とそれぞれの結論に達した辺りで学校に着いた。
「そういや葉月、九鈴が言ってたが撥水系の施設に道場破りしに行ったって？」
「うーん、まぁ別に破りに行った覚えはないけど・・・・・・まぁ、最近の日課でね。

今日辺りは光反迷彩の能力者と鬼ごっこをやる予定」
「うわぁ、かわいそうに・・・」
「道場破りより性質悪りぃよ」
いくら透明になれようと、鼻の利く葉月からは逃げれまい。
ピクニックにでも行こうという気軽さで、このためにペイントボールを用意したことを嬉々して語る葉月に隆は引いていたが、自分は茶目っ気に受け取れるから困ったものだ。
とうに感覚が麻痺してるんだろうと、隆が葉月に注意するのを横目にしながら思った。
教室のドアをスライドさせ、2人が入るのを待ってから自分も入る。席に鞄を置こうとして、
「うん？」
葉月のそんな声に振り向いた。
見ると、彼女の机の上にはすでに何かが置かれている。
白地に店の名前がプリントされたビニール袋。
怪訝そうな顔つきで、袋に突っ込んだ手が取り出したのは長方形をした紙の箱である。竹皮の模様の印刷されているそれは弁当屋でよく見かける物だ。
「何だそれ？」
隆霧ってきて葉月にそう問うが、彼女も身に覚えがないようで「さぁ」と首を傾げる。
中身を確認すべく輪ゴムを外して蓋を取ると、入っていたのは赤飯だった。
それを見てなぜか固まった葉月は、ぷるぷると震え始め、ぐしゃりと蓋を握り潰した。
「ほ～ま～れ～ちゃ～ん～！！」
叫びながら教室を飛び出した彼女の声にどうやら犯人が誉らしいとは分かったが、赤飯の意味はよく分からない。
葉月を動揺させるだけの何かがあったようだけど・・・。
足音が遠ざかりしばらくして聞こえてきたのは悲鳴。

まぁ、光反迷彩でもない彼女が葉月から隠れられるわけもないか。
運動場まで逃走劇を繰り広げていた2人の様子が窓越しに確認できた。
息も絶え絶えに走る誉を追う葉月はわざと力を加減しているようで、体力的・精神的に追いつめるつもりらしい。
誉がへとへとになったところで、いきなり目の前に現れた火球に彼女は驚いて転び、その上から大量の水が降り注がれ、びちょ塗れにされた身体を発破で砂地の上を転がされていく。
数十秒後にできあがったのは細長い泥団子だった。
呆然としている彼女を葉月が引きずっていくのを最後に2人の姿はフレームアウトし、その10分後ジャージ姿の誉が教室に連行されてきた。
力なくうなだれている彼女を席に座らせた葉月は、自分の机に置かれた赤飯を彼女の前に置き、割り箸を突き立てた。
まるでお供え物だ。
トドメとばかりに葉月が発火で火をつけたために、よく燃える木製の割り箸から煙が上がり始める。
それが線香のようで、崩れた誉を余計に哀れに見せていた。
が、そんなことよりも俺の目を惹いたのは、その火の光の方。
「何で・・・」
何で葉月が――――発火能力を、発破能力を、発水能力を使えるんだ？
葉月の能力は形骸変容（メタモルフォーゼ）だったはずだ。
あくまで、身体を変化させる能力だったはずだ。
それらの応用・・・？いや、そんなことができるとは思えない。
ならどうして・・・・・・・・・・・・まて違う、そうじゃない。
問題はそこじゃない。
気にすべきはどうしてではなく、”何時から”かだ。
あの日、葉月が疲れきって帰ってきた日の惨事。
関わっているのは、超攻撃性の能力と放射能。

その2つが同一のモノかは置いておいて、それはおそらく非公式の超能力者の仕業だ。
元々存在を隠していた核子操作系能力者か、あるいは現存する高等級のそれ系の能力者の素能を複製した能力者か。
何にしてもそれと葉月が衝突が先日の事だったとして、その結果が葉月の今の行動だとするなら？
道場破り・・・てっきりそのままの意味だと、打ち負かすという意味だと思っていたけれど、「今日辺りは光反迷彩と鬼ごっこ」――それがその額面通りの意味だとして、前回は水操系の施設を、もしかしたらその前には別の能力施設に能力を得るために通っていたとすれば、あの日放射能を放った能力者は後者である可能性が高い。
「どうやって」かは分からないが、その能力を葉月を手にしたとしたら、全て辻褄が合うんじゃないのか？
そんな疑念がぐるぐると回ったまま突っ立って、気づけば線香代わりの割り箸が半分ほど灰と化してた。
まだ燃え続ける紅の炎を見つめている内に、もう1つ思い出す。
火事。
隆と美月さんが急接近するきっかけになったらしいあの火事。
葉月はどうしてか、その理由を知っているようだった！
逆接、隆もその時のことを知っているはずだ。
そう至った途端、居ても立っても居られなくなって、隆を屋上にまで連れ出していた。

＃

「つってもな・・・俺もよく知らねぇよ」
それが、今朝問いつめた隆から帰ってきた言葉だった。
「俺と美月は単に火事に巻き込まれただけで、そこに葉月がやってきただけで・・・・・仕事とか言ってたな。

何つってたっけ?グループに入れない分、違う何かに入ったって言ってたろ?」
「・・・あぁ」
「たぶんそれ関係だと思ってたけど、違うのかよ?」
「分からない」
原因は能力者の暴走ではないかとまことしやかに噂されるその火事。
葉月がその時発火能力を得たとも考えられたが、その頃葉月は道場破りなんて真似はしていなかったし、つい先ほど自分が今回の繁華街崩壊時に能力を得る能力を得たのではと仮説を立てたばかりだったことに気がついた。
あの火災を鎮火させることがあの時の葉月の仕事だったとして、万可統一機構の被検体である葉月に裏処理に関する仕事を機構自ら命じる理由は思いつかなかった。
いや、そもそも自分は万可の目的というものを、行動原理というものを、知らないのではないだろうか?
万可は『特別都市における次世代教育の体系化』を目標として掲げている。
そんなことはそれこそ、パンフレットにも表記されているし、ちゃんと孤児を引き取り教育するという体裁も取っている。
実際、万可育ちの大人も居るし、そういった人間はたいてい逸脱した才能を発揮してもいる。
だが、本当にそれだけならば、一定年齢まで外出を禁じるような徹底管理をする必要はないし、何より葉月はそんな規則の例外だ。
万可が葉月を特別視していることは間違いない。
けれど、それは何故なのか?
その推理材料を俺はまるで持っていない。
水族館で彼女は万可は脳を弄ると言った。
それがそのまま、あの機関の隠密性に繋がるにしても、そこまでして天才を作り出して何がしたいのか。

確かに国から支援を受けている組織であるし、才能ある国民が増えることは国にはプラスだろうが・・・それだけで地方都市の経済中心を崩壊させるようなリスクを負う理由がない。
何か、一本筋の通った狙いがあるのは確かだ。
それが分からない内に判断するのは危険すぎる。
調べよう。そう思い至って新たな自宅に帰ってからずっと、ネット情報を漁っている。
隆の方も発火能力者関係で探ってくれると言ってくれたし、何かしら情報は掴めるだろう。
火達磨先輩と出会った時、彼は放火魔のことを気にしていた。
少なくても彼は火事関連の出来事にはかなり敏感なはずだ。
となれば、俺の方が調べるべきなのは万可についてと繁華街の件。
盛り上がっている掲示板は粗方回ったが大して収穫は得られなかったことから、ピンポイントに放射能操作系能力者の個人サイトなどを辺り、彼らの考察や呟きを参考にさらに別サイトへ飛ぶ。
放射線そのものとしては放射汚染量が少なすぎるところからあくまで攻撃は別のモノではないか？
壁に空けられた破壊の痕跡から放射能が検出、放射線が混じってたのはたぶん本当。
そんな文章をメモ帳ソフトにコピー&ペーストして大分埋まったところで出力する。紙媒体に移った情報から特に気になる文を蛍光マーカーでピックアップしていけば、尾びれ背びれのついた噂と多様で多量過ぎる情報から掴めみづらかった事件の概要が少しずつ見えてきた。
最初、銃声のような音があったのは確からしい。
ビルの密集地帯だったために、かなり遠くまで反響した音を聞いたという人間が複数いた。
それ以前に爆発があったというモノもあったが、これはよく分からない。
被害中心地帯にいた人々はほとんどが逃げきれずに亡くなってし

まったようで、その辺りを判断するに情報量が少ないし、生還者もショックが大きすぎて当時の状況を正確に把握していたとはいい難い。

バスが潰れた。火柱があがった。ビームが街を破壊した。

それが本当なのか、ビームに見えた別の何かなのではないか。いくらでも捕らえようがあるが、ともかく人間業とは思えない何かが原因で崩壊が始まったようだ。

いきなり雪が雨に代わり、霧のようなモノが上がり、覆い隠されてしまった被災地は、それが晴れた頃には崩れ今の姿に変わっていた。

空白の時間、民衆の目の届かなくなったその間に何があったのかそれも分からない。

結局、災害の初期にも中間にも、確定的に何があったとは言えないが、それでも噂が立つほどには、いくらか妄想を膨らませる材料は存在している。

なのに、そんな中で最も注目されているはずの全ての原因、あるいは犯人についての目撃情報が見られない。

霧に閉ざされた後は仕方ないとして、その前、事の始まりに際して誰が目撃していてもおかしくはない。

ホテルが爆発した。バスが潰れた。

信用性はどうであれ、そういった目撃談がある中で、それを起こしたモノには触れられていない。

調べ不足と言ってしまえばそれまでだが、その点が気になって仕方がなかった。

重傷者や中心近くにいた人間は放射能汚染されている可能性が考慮されて特別措置を病院で取られていた。

つまり一時的に隔離されていたことになるのだが、事件の目撃情報はそれ以前にネットに上げられたものがほとんどで、措置後の情報は見当たらない。

そこに万可が介入したとのだとすれば・・・・・記憶操作か。

それを行える人間は予知能力者同様少ない。
いや、予知能力者と呼ばれる人間はこの学園にも百人単位で存在しているが、夢見といった例外を除いて、一般的に言われる予知能力は今ある状況から結果を予測演算するものに留まるために、今回のようなあまりに突拍子な出来事を予知するのは難しく、実用的な危険予知ができるかで言えば、予知能力者としてのアドバンテージはない。
真に未来予知と呼べるような、完全に自分と切り離された未来をも予知できる能力者の数は微々たるものだ。
それでもいないとは言わないし、そういった未来予知の卵というのなら誉がまさにそれに当たる。
予知夢は、リラックス状態にある脳は時として大災害も予測できると言われるが、逆に見たい未来を選べないという不便性も合わせ持っている。
世の中、都合のいいことばかりではないという教訓そのものだが、それが記憶操作にも当てはまる。
一時的に物事を忘れさせはできても、ニュースで繰り返しその話題を耳にするような今の状況で、それが効き続けるとは思えない。
あるいはそんなまがい物の記憶操作とは別に、本物とも言える完全な人心操作が存在しているのかもしれない。
もしそうだとしたら、個人の全てを脅かす能力者は隠すだけの価値はある。
どこかの組織がそれを研究していたとして、今回その能力が使われたとすれば、間接的にしろ直接的にしろ万可に繋がっていることになる。
「駄目だ・・・」
悪い方向にばかり想像が向かっていく。
実際のところは何の確証もない妄想にすぎないのに、それが正しいのではないかと急く思考を止められない。
プリントから目を離し、ＰＣを待機モードに切り替えてからベッ

ドに突っ伏した。
明日、隆の話を訊いて判断しよう。

＃

「あの火事の件には関わらねぇ方がいい」
隆から事情を訊き、わざわざ直接会いに来てくれた達磨先輩こと邦明さんは開口一番そう言った。
その表情は真剣そのもので、俺の身を案じてくれているのだと理解できるが故に、ことが重大なのだという実感がずしりとのしかかり、元々あった不安が体中に広がっていく。
握った手の平に汗を感じながら、乾いた口を開く前に先輩は続けた。
「火災があったのは確か、消防車が出動したのも確か、だが消防も消火には当たってない。火は能力者により鎮火、発火原因は小火だったとなってるが、その後監視してた能力者が行方不明。あからさまなＮｏｋｉｎｄだ」
「ノー・・・カインド？」
”存在しない奴”でＮｏ　ｋｉｎｄ。『ないことにしておけ』っていう超能力者間の符号のことだ。
グレーゾーンに関わってる人間が最後の一線を越えずにうまくやっていく上で、絶対守らなければならない鉄則だよ」
「触らぬ神に祟りなしってことですか？」
「あぁ、火事の一件はそれに当たる。だから触れるな。
隆に聞いたが、友人が現場にいたんだったか？」
「・・・はい」
「そいつが関わっていたのか、関わっていたとしたらどう関わっていたのか、それは知らない。
だが、今その友達は生きて傍にいるんだろ？ならいいじゃねぇか。めでたしめでたし、それで納得しろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・できねぇか？」
黙ってしまった俺の様子に先輩は頭を掻いた。
自分では見えないけれど、今自分は先輩を睨んでいるのかもしれない。
彼はお門違いの視線を気にした風もなく、ただ黙って俺の返事を待っている。
何と言えばいいのか纏まらず、何度も開閉させては声にならずに噤んだ口は、しばらくしてやっと言葉らしい言葉を吐き出した。
「・・・その友達は、今回の事件にも・・・関わってるかもしれないんです」
それには眉を跳ね上げた彼は、今度は顎に手をやった。
「なるほど・・・それじゃ、ま、無理か。
それでも俺は関わらないことを勧めるが、止めはしねぇよ。
ただ、そういう関係になると俺の情報網は役に立たん。すまんな」
そう言って去っていった。

#

ないことにしろ、それが暗黙の了解であり、不可侵領域の事情である以上、学園都市へ普通に通う人間に助力を請うことはできない。
身の程に合わない行為は自殺と同義だ。
それをやろうとしている自分の方が間違いで、頼ることで相手にも迷惑をかけてしまう。
それを理解して、学園内の人間には相談できず、けれどそうはいっても、何も分からずただ疑心に刈られているしかできない自分が1人で突破口や解決策を思いつける訳もない。
だから、俺は学園外でかつ学園の事情に詳しそうで、厄介事にすでに顔をつっこんでいるらしき、唯一頼れる人間を――――師匠に連絡することにした。

いつもの、ＤｅＣｏｍｕ経由のチャットではなく、非常用の肉声回線で。
個人情報、あるいはそれに類する言葉は使わないという2人の間にある取り決めが取り払われる回線で。
５秒ほどのコールの後、ＰＣ画面のアプリケーションに通話の緑ランプがつき、聞こえてきたのは透き通った女性の声。
「どうしたの？」
そして、簡潔な質問だった。
「クルナさん、前に・・・前に友達の話をしたことがあったしょう？」
「あぁ、情緒のおかしいとか笑わないとか泣かないとか相談してきた・・・双芥中学から進路を変えさせた施設育ちの男の子？」
「はい。その友達が、どうも危険な立場にいるのかも、しれないんです。
前から危なっかしい奴だと思ってたけど、けどそれはあくまで本人の問題だと・・・でももしかしたら施設そのものが――――」
「待って、よく話が見えてこない。その子、ちゃんと別の中学に通えたのよね？
だから私はその施設自体たいしたことはないと・・・もしその子が施設にとって重要な素材なら進路変更なんてそもそも受け付けないわ」
「ええ。でも、最近になって施設関係の用事を受けてるんじゃないかって」
「重要度が変わったっていうこと？」
「たぶんＳＰＳ服用から・・・能力発現からなんだと思います。
おかしいとは、ちょっとは思ったんです。２等級能力を発現した時に。
でも、きっとそれ以上に、嬉しさもあって・・・だから、けど・・・・・形骸変容（メタモルフォーゼ）なんて発現しなければ・・・っ！」
「形骸変容（メタモルフォーゼ）・・・？」

俺の言葉に、息を呑む気配がスピーカー越しに伝わってきた。
「今、形骸変容（メタモルフォーゼ）って言った？」
「そう、ですけど・・・」
「施設ってまさか、万可統一機構なの？」
「・・・はい」
「苗字は織神？」
「はい」
「いや、待ってよ、そんなのあり得ない！
だって、だってその子、男の子なんでしょう？」
「え、えぇ。でも今は女の子ですよ、形骸変容（メタモルフォーゼ）で――――」
「違う。そうじゃないの、形骸変容（メタモルフォーゼ）に男はいない。あれは女性しか発現しないのよ。
・・・あぁ、もうっ！やられた！女子能力者を探しても引っかからないわけだ！
男、そうね。表現型（男）がそうでも遺伝子型ではＸＸ（女）型って場合もある・・・仮性半陰陽か、あるいはそこまで弄った？」
「クルナ・・・さん？」
「あぁ、ごめん。
全く！ビンゴよビンゴ、大当たりもいいところよ。そこまで期待はしていなかったのになかなかどうして・・・・・・。
はぁ、そうね釘。事、君の関わっている問題がそういう類だとするなら、状況を解説するのは難しいよ。
そうね、超能力史以来６つ前例があるのは知ってるわね？
その１例目は４０年以上前の東京にあった万可の前身機関、続いての２例がイギリスの大学付属研究所。
形骸変容（メタモルフォーゼ）発現に成功したそれらの研究施設が統合、万可ができたのはイギリスが３番目を発現させてから２年後、日本が特別指定学園都市システムを取った３０年前頃に６人目が逃げるまでの約十年間で６人。
なのにあなたの言うお友達が発現するまでの３０年間ではまるで

生まれてこなかった。
　これ、どういう意味か分かる？」
「・・・・・形骸変容（メタモルフォーゼ）は自然発生しない？」
「そうよ。結局6・・・いや7例全てが施設、それも限られた施設で生まれてる。それにも関わらず万可が同じことを繰り返している理由は、前例5つの形骸変容（メタモルフォーゼ）が不安定すぎて発現後間もなく死亡してしまったから。
　その気になれば形骸変容（メタモルフォーゼ）を発現させること自体は難しくないのよ。問題なのは安定化させることで、それができず彼らは何度も繰り返した。
　そうやってやっと6例目を安定的に生み出すことができた彼らは、被検体には逃げられたものの、ヒントを掴んだ。
　1、SPS服用は第一成長期後。2、脳の特定部位に施術すること。
　だから彼らはソフィの唱えた『脳波学習法』を隠れ蓑に指定学園都市構想を持ち上げ、孤児の次世代教育を謳ったのよ。
　形骸変容（メタモルフォーゼ）は能力研究の中心原理（セントラルドグマ）、学園都市は形骸変容（メタモルフォーゼ）のために造られた。
　危険な立場ね。ははっ、確かに全ての中心ではあるわ。
　――――一ヶ月前のアレが、気づいた原因？」
「・・・・・はい。あれから、ちょくちょく葉月が他の能力者施設を回ってるらしくて」
「そ。それなら、少なくてもフィードバック（ころ）されることはないんじゃない？
　もっとも・・・万可の呪縛から逃れられるかは分からないけれど。
・・・・・さっき学園都市は形骸変容（メタモルフォーゼ）のためにできたっていったけれど、その理由にはもう1つあるの。
　ヒントその3、安定した形骸変容（メタモルフォーゼ）には安定した超能力者の遺伝子を。
　薄々気づいていると思うけど、特定の能力者を大量生産するには

クローン体を造ればいい。
ところが、そもそも動物のクローン技術は未だ未完成なのよ。
確かにＤＮＡは遺伝子の本体だけど、遺伝子の全てじゃない。細胞質基質・・・ミトコンドリアを含めた細胞内にある膜系細胞小器官には、染色体経由ではなく細胞質遺伝――細胞質の分配で継承されるものもある。
細胞質の排除される精子と細胞質を持つ卵子では、卵子の方が遺伝する情報量は多い。
卵細胞に核移植をしたところで、その本人の卵子を使いでもしない限り、同じ遺伝子情報を持った人間は生まれっこない。
能力の形が遺伝子で決まる以上、その差は大きいわ。不安定な出来損ないを生み出したようにね。
超能力者を温存（プール）する学園は、そんな出来損ないの欠陥を補う遺伝子情報を採取する場として必要だった。
葉月ちゃん、だっけ？
葉月、旧暦の８月。８。
何でそんな名前が付けられると思う？
万可は１ヶ月に１度、形骸変容（メタモルフォーゼ）の種になる子供を受精させるの。
８っていう数字はね、その年の８番目って意味なのよ。
人工授精に遺伝子組み替え（デザイナーチャイルド）、その子はまず間違いなくシャーレの中で命を受けた。
彼女、産まれる時ですら泣いたことなんてないんでしょうね」

＃

通信が切れ、しばらくして自動で待機モードになったディスプレイは黒く、大きな光源を失った部屋は暗闇に包まれていた。
マイクを外した以外、動くこともできずに背もたれに預けた身体は力がまるで入らずに、じんじんと痺れている。
胸が痛いのは、心臓からなのか精神的なものなのか。

汗が何度もまつげを濡らして、視界をぼやけさせる。
近すぎて焦点の合わない水滴の煌めきに、光の存在を求めれば、それは待機中のＰＣの青白い点灯ランプだった。
チカチカ揺れる光の煩わしさに電源を落とし、天井を見上げる。
丸い蛍光灯の形状を僅かに象るだけの闇、その色が拒むことを許さず葉月の黒髪を連想させた。

――――好きなモノ？何それ、それって必要なの？
透き通っていて、意味がなく、素っ気なくて、純粋で、色すらなく・・・・・・そう、透明、そう表現するのがしっくりくる、そんな黒色。
晴れ渡る青い空に満ちる空気の色を『透き通った』と表現するように、どこまでも黒い世界も透明な色合いをしている。
混じりっけのない、むらっけのない色合いはそれこそ空の蒼さのように綺麗に見えるが、起伏のない地平線はむしろ歪だ。
俺がまだ”ぼく”だった頃、転入性としてクラスにやってきた少年は男とも女とも取れない中性な姿をしていて、何よりひどく異質に見えた。
だからこそ、惹かれたのだろう。
友達もなく、クラスメートを冷めた目で見ていたが故に、彼の差異に目が奪われた。
けれど、翻ってみて向こうはどうだったのか？
「それって必要なの？」
心の奥底からそう言って、その目に何も映していなかった、当時の”ぼく”以上に世界を平たく（フラット）に見ていた彼は、どういう過程を経て、自分のことを『クシロ』と呼んでくれるようになったのか。
変化がいつ訪れたのか、今になってははっきりとは分からない。
思い出せるのは人形に話しかけるのと変わらない行為を繰り返す自分の姿。
ロクに反応も示さない、返事からも得られるモノはほとんどない、

けれど拒絶はしなかった彼に、一方的に話しかけていた自分の姿。
傍目、無様なものだっただろう。
けれど、”ぼく”はそんなことを気にも留めずに、一年後までは毎日、クラスが替わっても時々は、ひたすら話しかけ続けて2年間を過ごし、少しずつ・・・少しずつ表情が見え隠れし始めて、彼だった彼女は他の生徒とも受け答えをするようになっていった。
そして、再びの同じクラス、その3日後のあの出来事。
苛めっ子達に再起不能のダメージを与え、”ぼく”に手を差し伸べてくれた。
あの時、何だろう。確かに葉月の目が”ぼく”を捉えたのは。
決して大きくないない体躯で、か細い腕で、それでも躊躇なく助けてくれた葉月。
それが格好よくて、嬉しくて。
憧れを抱いて、”俺”だなんて一人称を使うようになって。
なのに、今の俺はどうだろう。
真っ暗な部屋に籠もって、うじうじと。
葉月は”ぼく”を助けてくれたのに、”俺”は葉月の助け方も分からない。
それがあまりにも情けなくて泣きそうになる。
相手は巨大で全貌も掴めなければ、取っかかりも掴めない。
あるのは胸を締め付ける痛みと焦燥感だけで、汗の滲んだ手では目尻すらうまく擦れない。
無力だ。
苛められていたあの頃と同じように、自分から何もでない。
強がったところで、自分の本質は相変わらず脆弱。
どうしようもなく、無様な有様。

でも、それでも俺は葉月が好きだ――――失いたくない。

／

翌日午後7時13分。
臨時に入ったバイトを終え、アパートに帰宅してきた織神葉月は1階の集合郵便受けを確認した。
あれ以来、定期的に四十万隆曰く道場破りや能力狩りを指定する連絡は便箋でなされている。
緊急連絡でもない限り、そんなレトロを貫き通すところが、あの男らしいと釧と同じく葉月も思う。
切手も宛先もなにもない真っ白な封筒。
おそらく本人が来て入れていくのだろうソレが、朝した時と同様に入っていないことを確認してパタンとスチールの蓋を戻した。
明日の放課後は自由らしい。
久しぶりに駅ビルに貯蔵しているワインでも呑みに行くかなと、考えを巡らせている最中に携帯が鳴った。
ディスプレイに表示される相手の名前は「岩男」。
通話ボタンを押し、スピーカーに耳を当ててすぐ、
「何故そこにいる？」
聞こえてきたのはそんな台詞だった。
「――――え？」
一瞬、何を言っているのか分からなかった。
けれど、回転の早い彼女の頭はすぐさまその一言から現状を導き出していく。
今日、予定は入っていた。
昨日の夕方にも今日の朝にもそれを知らせる便箋は入っていなかった。
誰かが取った。
他のモノを物色した様子がないことから見ても、その便箋が目当てだった。
その人物はそれがどこからのモノかを知っていたし、内容にもある程度は予測をつけていた。

その人物は自分への指示がアナログな手段であると予想でき、かつその便箋がまっさらだという特徴も知っていた。
そんな人物は1人しかいない。
携帯が、手から滑り落ちた。

／

そこは倉庫だった。
もしも、彼が葉月やそのバックボーンに関わることがなければ、それこそあの夏に逃げ込んだ倉庫と同じく一生足を踏み込むことはなかっただろう、非合法用途に使われることもある倉庫。
その中で、放置された機材段ボールの上に腰をかけて訪問者を待っていた彼は、シャッターが上がる音に瞼を開けた。
そして視界の捉えた者が自分の予想していた姿でないことに少し驚き、それから神妙な顔つきになって招かれざる客人を観察し始める。
一通りそうしてから、
「僕は久遠将来（くおんまさゆき）。ここで千代神さんを待っていたんですが、貴方は？」
そう自己紹介めいた台詞を吐いた彼に、
「朽網釧」
やってきた少年は手に持った白い便箋を握り潰して放り捨てて言った。
「葉月は来ない」

第５９話－　甘言。－Ｌｉｌｉｔｈ'ｓ　Ｓｅｄｕｃｔｉｏｎ－（後書き）

ついに釧（盛大なフラグと共に）立つ（笑）

※　全球凍結　…　地球が寒冷化する時期を氷河期というのは広く知られてますが、それどころか地球そのものが凍っちまったことがあったっていうのがこれ。
　スケールが違うってよっ！それも3回以上あったというから驚きですね。
　しかしそもそも、現代って一応氷河期なんですよねー。地球温暖化？地球全史で考えたら温すぎる（笑）

※　「放送局もが…」　…　実は作者はあの震災頃あまりニュースを見てません。よってここら辺の描写は結構想像。

※　赤飯　…　えーと、何時の話にこの伏線張ったっけか……？

※　ＤＮＡは遺伝子の本体　…　でも全体ではない。ミトコンドリア・イヴ説を思い出してもらえば分かるように、卵子の細胞質で代々遺伝しているモノもあるわけで。
　よくクローンを『年の離れた双子』と表現しますが、同じ卵子由来でないので一卵性双生児とも言えません。
　人間の染色体は２ｎ＝４６。減数分裂で半分になったｎ＝２３の遺伝子を、精子・卵子として公平に子供に遺伝させる……と思いきや実はそうではなく……。
　ちなみに、人間の場合性染色体はＸとＹでＸＸで女性、ＸＹで男性になるわけですが、これはＹ染色体

に精巣形成を誘導するＳＲＹ遺伝子と言うものがあるためで、
この遺伝子が発現しなければ男性化しないことから、人間のデフォルトは女性であるという考えまであります。というかこれが主流だっけ？
また、カエルの未受精卵を針でつついて単為発生させることができることから分かるように、精子と融合せず、染色体が半分の卵でも生物として発生できなくもないという……ね。
時々生物学は男性に辛い（苦笑）

第６０話－　蜜と罪。－Ｌｏｓｔ　Ｅｄｅｎ－

時の流れは久しく、古き良きあの頃の風景は遠くに霞む。
過ぎ去りし子供だった日々は黄金に輝く夢の中へ沈み、身を包む愛情を知らず童心のままに在れた楽園は失われた。

だからきっと、もう、

■

「好きなものはなんですかっ？」
焦点の合わない世界を眺めるのに眼球すら動かすのが億劫で、この世に在るのに息をするのも億劫で、何もかもに価値を見いだせない全ての失われた視界の正面、転入生と自分を表す単語にはしゃぐ子供達の姿もやはりぼやけていた。
自己紹介という名の「他人を知る」作業にすら、何故他人のことを知るのにわざわざ齟齬の生じる言葉を使うのかが分からなかった僕は・・・”僕”だった私は首を傾げた。
自分と他人の境界もありもしないのだ、好き嫌いに至ってはあまりにも無意味な事柄ではないか。
だから、生徒の１人のしたその質問に、自分はその必要性を問うた。
自分が嫌いでも君が好きであるのなら、それはきっと同じこと。
だってそうでしょう？
”僕”と君のその差異も区別も境界も、結局はあるようでないようなモノなのだから。
そんな応答の後、席に着き幾ばくかの時を経て、辺りが騒がしくなったと認識した辺りで、「ねぇ」、そう声をかけてきたのがクシロだった。

それが、出会い。
当時の人格と共に記憶の底へと沈んだ想い出の欠片。

――――音がした。

携帯がコンクリートに落ちた音。
飛んだ意識が覚醒して、跳ねた携帯が再び地面に着くその前にかすめ取る。
足は駅の方に向いて、足に込められた力に地面の方が削れた。
約束の場所がどこなのか、それを岩男に叫び問う。
駅に着いた辺りで、電車を待つ時間さえが無駄だと思い直して、路線に沿うように進路を変えた。
学園都市までは山3つと谷を1つ越えたほどの距離だ。
走った方がいい。
舗装された路線上なら尚更。
そこでやっと息を継いで、再び携帯に向けた言葉は相手について。
前は反光迷彩だった。
相手が攻撃性能力を持っているとは限らない。
けれどそんな淡い希望は岱斉の答えによって砕かれる。
古き良き風景（クラシック・ビュー）、久遠将来。
その能力は――――

／

「時行割断。時を司る僕に勝てると思っているのかな？
いや、それ以前に・・・千代神さんは来ない、ですか。
確かに招請されていることを知らなければ、来れないんでしょう。
ですが、貴方は自分のやったことの意味を・・・万可やアレの邪魔をすることがどういうことなのか分かっているんですかね？」
将来の問いかけに釧は沈黙で答える。

ひたすら強い瞳で自分を睨みつける彼に、将来は口角を吊り上げた。

「その覚悟は買いますけど、しかし貴方」

と、自分が千代神と呼ばれる少女について調べた際についてきた朽網釧という少年の情報を引っ張り出しながら続ける。

「騒乱念力（ポルターガイスト）の能力ではいくら何でも力不足だと思うな。言っておくけど僕は千代神さんにだって引けを取る気はないんだ。だからできれば――――」

退いてくれると嬉しいんだけど。

そう言おうとした彼の台詞を遮ったのは、倉庫の床を砕くおぞましい音。

コンクリートの床が粉々にめくれ上がり、自分が座っていたパイプ椅子までがひん曲がり鉄屑に化したのを見て、彼は目の前にいる、それをしでかした少年を見据えた。

「君・・・」

精神的余裕をアピールするための丁寧な言葉遣いは、わずか数分で剥が落ちた。

周りの惨状を確認し、そして空気椅子状態になっていた身体を立たせる。

明らかに直撃していた、もし自分が時間列の違う層を皮膜として全身に纏っていなかったら床の染みになっていた、容赦ない一撃に顔の筋肉も少々ひきつっていた。

「君、本当に騒乱念力（ポルターガイスト）か？」

コンクリートは脆く思われがちだが、その耐久性は使い方次第で１００年単位にもなる強固な人工石だ。

物を動かすことが主な仕様である念力は、破砕するのにはあまり適していないし、ましてや鉄パイプをねじ折るほどの力を発揮する念力能力者は少ない。

灯秋高校の人間圧搾機、綿吊醐楓がその１例ではあるが、あれだって「押しつぶす」という比較的念力らしい使い方をしている。内

側から爆砕するようなものではないのだ。
そもそも騒乱念力（ポルターガイスト）は能力をちゃんとコントロールできない低技能能力者につけられる、能力名というよりは程度を表す言葉に近いモノだ。
ここまで威力を出せる騒乱念力（ポルターガイスト）なんて存在しない。
だが、そんな事情に疎い釧は「ああ」とそれを肯定し、そして手をかざした。
「ただの無力で弱虫な騒乱念力（ポルターガイスト）だよ」
破裂音が響き、同時に将来のいる辺りの床が一気に吹き飛ぶ。
飛び散る大小の破片に思わず顔を庇い、力の奔流の中心で改めてその威力を体感して呟いた。
「何が無力だ・・・」

／

景色が流れていく。
夜闇に染まり、灯りを灯した街並みは光の筋に変わって、黒と白や赤の線を幾重にも走らせた視界が後ろへ消える。
自分の息が大きく感じる中、足を踏み出す度に揺れる頭は何を考えているのかもよく分からない。
周りの景色に意識をやる余裕などありはしない。
けれど、どれほどのスペックを誇ろうと目的地にたどり着くには時間がかかる。
手持ちぶさたに空回りし続ける思考は、走馬燈のように様々な過ぎた景色を浮かび上がらせるばかりで、現状を打開する最適な方法を導き出してはくれない。
囁きほどの小さな幻聴がクシロの声を幾度も繰り返して、壊れそうなほど耳が痛い。
「ねぇ、君の名前ってどういう意味なの？」
「君の目ってちょっと薄くてきれーだよね」

「いーな、髪さらさらで」
「ねぇ、学校楽しい？」
「いや・・・ないか。・・・いつも君を連れてくる男の人ってお父さん？」
「車椅子してるけど、歩けないわけじゃないもんね。歩くのって嫌？」
「というか喋るの嫌い？」
「・・・・・実は、こう喋りかけられるのも鬱陶しい？」
――――そう、オドオドした態度でされた質問に、”僕”は初めて答えを返した。
何て返したのかは思い出せないけれど、きっと否定の言葉を口にしたはずだ。
何も考えず、何も思わず。
入ってくる景色にも意識を向けず、ただ、何故か話しかけてくる少年の言葉を耳に受けて過ごしてきて、あの時初めて。
私は、その少年に意識を向けた。

／

削られるように、抉られるように、平らなコンクリートが耕され、一部は壁の鉄筋までが無惨にささくれだって切断されている。
仮にも数十年は耐久性を求められているはずの倉庫はすでにボロボロ。
倉庫には荒れ狂う騒音が絶えず響き、耳が壊れたのではないかと錯覚するほどだ。
体育祭で本戦に参加できず、これまで使う機会のなかった釧の能力は、今まさに真価を発揮していた。
逃げ回りながら、物を壊させて相手の能力を見極めようとしていた将来は、自分の想像のさらに上をいくそのでたらめさに心の中で素直な賞賛を送った。

鉄筋コンクリートを破砕できるのなら、人体などいともたやすく粉砕できるだろう。

ナノメートルもない薄い皮膜とはいえ、時間を極端に遅らせた層を挟むことで、疑似的に時間と空間を周囲と割断している彼は直撃しても一切ダメージを受けることはない。

能力波は彼の人体に届く前にその層で受け止められ、数時間かけて層を通過することになるため、能力も物理攻撃も通らないほとんど無敵の防壁と言っていい。

数時間も同じ場所に立ち尽くすことはまずないし、移動さえしてしまえば攻撃からは簡単に逃げられる。

だからこそ、戦闘に際しては「攻撃を受けたら移動する」ことを習慣づけている彼にとって、めちゃくちゃに攻撃を仕掛けてくる釧はなかなかに厄介な相手だった。

しかも倉庫が半壊するほど乱発しているわりに疲れが見れない。

この威力で燃費がやたらいい。

それが問題だった。

先に燃料切れになるのはまずい。だが、お得意の時間操作で殺そうにも、相手は自分の時間を止められることを恐れて一定の距離を保っている。

最初に能力名を言ったのは失敗だった。

止められる時間の範囲が１ｍほどの将来には、今の距離でそれを行うことはできない上、そのことはどうやら相手に知れたらしい。

時間操作の能力者を相手取るにあたって一番に懸念する問題事項はクリア。

ならば距離を取って体力切れを待つ。

それが向こうの算段だろうと将来は当たりをつける。

幸い、能力適応範囲以外の情報はまだ渡っていないだろうが、こうして逃げ回り続ければ気づかれる恐れはある。

（まぁ、気づかれたところで対処できるようなモノじゃないけれど・・・）

何より問題なのは、彼からの攻撃手段だった。
無抵抗な相手に一方的に攻撃できる応用技があるとはいえ、時間操作自体に攻撃性はない。
そのため拳銃を用意してはいたのだが、試しに1発撃ってみれば、それは釧に当たる前にへしゃげて明後日の方向へ飛んでいった。
相手もある意味で規格外らしい。
せめて背後に回れればと思うが、それができるぐらいなら能力の届く範囲まで接近してる。
幾度目かの直撃を食らい足場を崩されながら、能力的ではなく肉体的にも体力を消費する状況に少々嫌気がしたが、彼もただ防戦一方だったわけではない。
相手の能力を何度か観察すれば、規格外念力の制限も分かってくるというものだ。
正面、下から上という方向性。
加えて、一度使えば次の一撃に切り替えるまでに隙ができる。
つまりは操作性には優れていない。
うまく隙を狙えば銃弾を撃ち込むことは不可能ではないだろう。
しかし、持っている弾は現在マガジンに入っている分だけで、残りは6発。無駄遣いはしたくない。
薬剤が入っていた箱の側面が破れ、ＰＴＰ包装シートがバラバラと雪崩れ、緑や黄色に彩られたアルミと共に中の薬がさらに粉々になって空気中に舞った。
何の薬かは知らないが、白い粉がもうもうと段ボールから上がっていくのを横目に、将来は距離を縮めるべく前方に走る。
すでに足場がかなり悪くなっている。
距離を離されたままこれ以上床を壊されて物理的に離されるのは避けたかった。
一歩踏み出せば、靴底から床が砕かれていく感触が伝わり、途端にバランスを崩しそうになる。
時間を隔離しているとはいえ、地面に足をつけ重力に縛られる彼

もまたその影響から逃れることはできない。
空中で自分の周辺の時間を止めたところで落下が止まらないのと同じだ。世界の全てが止まるわけではない。
４mと目測でそのぐらい近づいたところで、手の拳銃を頭部を狙って片手で構える。
（このまま突っ走って、ゼロ距離でしとめる！）
そのシンプルで必殺の策は、けれど完全に床が抜けたことで頓挫した。
地下があったために比較的薄かった床は崩れ落ち、巻き込まれた彼は地下1階へ。
痛さはないが落とされたという事実には冷やっとした。
さらに、聞こえた上からの大音に見上げれば、おそらく念力が天井まで上がっていったのだろう、削り取られた巨大な瓦礫が彼に向かって落ちてきていた。

／

彼はクサミクシロというらしい。
彼は自分の癖っ毛を気にしているらしい。
彼は僕に話しかけてばかりいる。友達がいないらしい。
そして、彼は趣味が悪いらしい。
答えもロクに返さない、表情も動かさない人形のような自分に話しかけ続けるなんて、そうとしか思えない。
椅子にただ佇む自分の正面で、相変わらず机の上で組んだ両腕に顔を乗せながら、話しかける彼。
自分がそれを赦したとはいえ、楽しいわけもあるまいにやめようとしない彼に微かな疑問が沸いた。
何で彼は自分に構うのか。
何で彼は自分と他人の差異を気にするのか。
何で彼は人形に話しかけるような、結局独り言めいた――――自

分との対話に価値を見いだせるのか。
興味。失ったはずのそんな人間としての機能が再生し始めたのは、たぶんその頃。
毎日のように顔を合わせ、目の映す顔や耳に届く言葉に意識を向ける。
いつしか彼の様子を目で追うようになって、気がついた。
彼は人に嫌われることを怖がっている。
それが何故なのか、私には理解できず、まだ首を傾げるという人間らしい動作も、訊くという言葉を介した手段も取り返してはなかった。

／

もしも生身なら頭部が潰れて死んでいただろうコンクリート塊は将来の頭に直撃し、転がり落ちた。
遅滞した時間に表面が接した瞬間に運動エネルギーの伝達が極端に遅れ、膜に触れていない大部分が重力の影響を受けて落下する。
それが彼の絶対防御。
ほとんど無敵だと自負する鉄壁だ。
けれど、それとこうも攻撃され続ける不快感とは別であり、圧倒的優勢、上位という立場にいると自覚している分その度合いも大きい。
「いい加減、苛立ってきたよ、全く・・・」
どうせ付着することなく滑り落ちる埃を自ら払い、再び上を見上げる彼。
ただ、そこから釧が降りてくることはなく、距離は離しておきたいが、下にいられると攻撃ができない彼は自分の立つ床に新たな穴をあけて落ちてきた。
ごほごほと咳をして、髪を塵で白くして、目だけは将来を射ぬいている。

「いや、ホントその覚悟すごいよ。
内実はどうであれ、騒乱念力扱い（ポルターガイスト）の能力で向かってくるわ、致死確実の攻撃を初っ端から放ってくるわ・・・・・もし何かの弾みで僕の能力が切れたらズタズタになるってのに、何の躊躇もなく殺しにかかってくるし」
何とか身体で覆って守った銃を三度構えて将来は言う。
「でも、調子に乗りすぎだ。施設出身でもない、名字（なあざな）もない、３等級止まりの一般能力者が踏み入れていい領域じゃないんだよ」
再び試みられる接近。
しかし、今度はまだ真新しい床で、これ以上地下もない。
加え、踏み込む位置に前もって時間遅滞をかけて壊されるのを防ぐ。
ガリガリと大げさな騒音を携えた見えない暴力が嵐のようにそこら中を傷つけていくが、今度の接敵は止まらない。
少し手間をかければ簡単に看破できる。
確信して、１．５ｍほどに距離が縮まり、釧が下がって壁に背中をついたところで彼は最後の一歩を踏み出し、飛びかかろうとして床から両足が離れた瞬間、無色透明純粋な爆発に似た力を受けて吹き飛んだ。
「っく、ぅお！」
元いた場所にまで転がらされた将来が起き上がる前に、今度は聴覚を狂わせる弾雨が追撃してきた。
夏に、葉月から預かったＶｚ．６１（スコーピオン）を釧が弾数も照準も気にせずに撃ち込んできているのだ。
どうせ訓練を受けているわけではないので狙い撃てるわけがなく、細い腕は反動に耐えきれずいずれ逝かれる。
ならば、その前に全て撃ち尽くす。
そんなシンプルな攻撃の的になり、クリスマスツリーの装飾のように弾丸で飾り付けられた将来は、しかし冷静に考える。
さっき自分が飛びかかったのは偶然だ。

もし普通に距離を詰めていたら、彼に接近を止める手だてはなかったはず。

限定的な時間操作は空間操作に似ている。

特定の物体の時間だけを遅らせれば、世界全体の時間とその物体の時間に相対関係ができる。

全体時間から物体時間を流れるモノに干渉することは確かに困難だが不可能というわけではない。

木から落ちる林檎の時間を止めても、全体時間の空間的に重力は働いて林檎は落ちる。

痛む痛まないの違いはあるが、世界そのものを止めでもしない限り時間操作は空間の影響から逃れられないし、例え落ち前の林檎の時間を操作しようと、枝ごともがれれば結局は落ちるのだ。

床から足を離せば、座標位置の変更という空間干渉を受けるし、離さなかろうが床全てを破壊尽くされれば吹き飛ばされる。

先ほどはその前者を食らったわけだが、だからといって釘がそれを計算に入れていたとは彼は思わない。

ゴリ押しで攻撃してきているだけだ。

そもそも2等級という他の能力とは一線を画す能力持ちに対して、何の対策もなしにのこのこやってくる相手に策があるわけもないではないか。

勝てる。

攻撃を通す手段も思いついた。

駆けだした将来と、マガジンの弾を全て吐き尽くした小機関銃を放り捨て能力で迎え撃つ釘。

念力の能力が及ぶ前に将来の拳銃から弾が放たれ、空中で止まる。

床の一部ごと時間遅滞して位置を固定させたまま、彼自身は走り続け、あと3歩というところで、上へと昇り始めた念力を潜るように滑り込んだ。

能力の影響化にないことを確認して、その位置からもう1発撃った銃弾は釘の左ふくらはぎを掠めた。

念力を切り、もう一度将来に狙いを定めようとした釧だったが、駄目押しは過去からやってくる。
時間操作を解除された1発目の弾が念力に阻まれることなく、今度は彼の耳に穴を開けた。

／

それまで毎日見ていたクシロの姿が数日おきに変わってクラス替えがあったことを、進学年になったことを、一年が過ぎたことを知った。
思えば、いつの間にか私の世界は彼を中心に動いていた。
新しい学年になって、新たにクラスメートとなった同年代の子供達と、かつて6月の名前で呼ばれた少女を含めた白い同類達と接していた頃のように応じれるようになり、幾らか人間味を得た”僕”は酷く大人しく、無表情ということを除けば、問題のない生徒のように周りに見えているようだった。
クラスが違うのにクシロがやってくるという習慣に変わりはなく、その日を待っている自分に気づいたのは何時だったか。
なんて、無意識に意識が宿る瞬間なんて分かるはずもないのだから、詮もないことではあるのだけれど――――何にせよ、その頃、今は”私”当時は”僕”という自人称を使い使っていた意識は芽生えたのだろう。
ある日、定期的に機構の職員が切ってはいたものの、1年以上の月日が経ってさらに伸びた髪をいじる彼を観察すれば、袖口の隙間から青痣が垣間見えた。
別の日、襟口に掴んだような皺が寄っているのを見て首を傾げ、それを問おうとして止めた。
クラスが変わってから少しクシロの様子が違ってる。
それでもそれを自分に知られたくないらしいことが分かってしまって、いつものように彼の言葉に耳を傾ける日々が続いた。

次の年度の3日後までは。
クシロを苛めている奴らがいる。
薄々気づいてはいたけれど、実際この目で目撃した瞬間我慢できなくなった。
目障り。耳障り。
こんな連中は消えてしまえばいい。
そこに躊躇はなかった。
だって、そんなの前にもやったんだから。
今度は言葉ではなくて、この手で。
そう思った時には椅子の足を掴んでいた。
嫌――――好きも嫌いも、自分も他人も同じこと、そんな思考をしていた私は、その感情をもって再び自他の境界を切り離し、腕を振り降ろした。
鳴り響いた音はあまりにも心地よく、握る手にくる振動もまた心地よく。
久しぶりに見た血の色。
対して興奮も味わえない汚れ血を一瞥し、呻く大根や南瓜ほどにも価値を見いだせない連中を無視して、私はクシロの元へ向かった。
相変わらず全てが等価に見える世界で、それでも価値を見いだして、〝僕〟は手を差し伸べた。

／

耳はともかく、ふくらはぎの痛みに膝を着いた釧に、将来はトドメを刺しにかかる。
１m、そこまで近づけば勝ち。
だが、生命本能がもっとも活性化するのは命の危機に瀕した時であることは、睦月がそうだったことからも分かる通りで、床のコンクリートごと丸々持ち上げられて彼は気づいた時には天井に叩きつけられていた。

「面倒・・・臭い相手だ・・・・・・・」

心底、そう思う。

人はそう簡単に死なないと何かで読んだ覚えがあるが、超能力を持っていても殺人の難易度は変わらないらしい。

足を接した面の時間を遅滞して天井に身体を縫いつけ、逆さまに彼は走り出した。

下から上という制約上、釧の念力が上にまで到達するにはタイムラグがある。

その前に接近できればいい。

十分なところまできて下へと飛びかかる。案の定やってきた念力を自分に届く前に遅延時間の中に閉じ込めてくぐり抜けた。

ただし、天井から床へという上下逆の世界へ帰還するのに、運動能力の高くない将来に空中で身体を一回転させるような芸当はできず、当然宙で銃を向けるような真似も不可能で、タックルするような形で釧に迫ることになった。

それを前のりになりながら横に逃げ、距離を取ろうとする彼へ将来が銃を向けるのと、釧が振り返るのは同時。

弾は放たれたが、銃身を抜ける前に銃の内部構造ごとねじ曲げられた。

銃の中もコーティングしておくべきだったと後悔しても遅く、使いものにならなくなった鉄屑を捨てた。

もう後半歩近づけばいい。

そこまで迫っているからこそ、必死に抵抗されている。

だがもう一踏ん張りだ。

そう思って足ばかりが先走り、注意が散漫になっていた彼に上から砕けた天井が降り注いだ。

（またッ！）

つくづく閉鎖的な場所で相手をするべきではない能力と思いながらも、離れさせまいと無理に進んだ目先に一際大きな固まりが落ちて、進行を妨害される。

「くそ！」
同時に粉塵だか薬塵だかが地下にまで落ちてきて２人は咳込んだ。
口に入った粉を吐き出し、口を拭う。
そこで釧の手は止まった。
（っ！そういうことか。あぁもう、何でもっと早く・・・っ！）
時間割断という彼の能力の性質と弱点に気がついたのだ。
けれど、そこまで思い至って湧いてくる感情は後悔。
もっと早く気がつくべきだった。せめてＶｚ（スコーピオン）．６１を残しておけば。
気づいたからこそ彼には自分の能力と相手の能力の相性が悪すぎることが分かってしまう。
（地面に伏せさせないと話にならないな・・・）
苦々しく心中で呟いて、釧は広くない倉庫の中央に突き刺さった瓦礫を見た。
１階部分床はほとんど抜けてしまい縦にだけ広い空間、屋根にも穴が開いて夜空も伺える。
なんだかんだで、物理世界の影響から完全に切り離すことはできないのは前に吹っ飛ばした際に理解した。
床一面ごと崩してしまえば体勢を崩させることは不可能ではない。
問題は立ち上がる前に、もう一度念力を当てるのが難しいことだ。
能力のオンオフに隙ができる釧の能力では、間に合うかどうかは微妙なところだろう。
タイムラグを縮めるためにはギリギリまで近づいた方がいいが、その辺の目測も将来の能力有効範囲がはっきり分からない釧にはかなり分の悪い賭になる。
それでもやるしかない。
先制して念力で瓦礫の山を崩し、その向こうに将来の姿を見つけ走り出す。
狙いは足場だ。
床ごと抉り出すつもりで発現させて、すぐに切るイメージで。

今まで近づくことを忌避していた相手が突進してきたことに将来は戸惑った。
自分の防壁が破られるとは思わないが、ただ無闇に突っ込んでくるような馬鹿なら最初からそうしている。
策を思いついたのは確かだ。
それが実際自分に有効かどうかは置いておいて、優位に立っている自分がわざわざ迎え撃つ必要ない。
今度は彼から離れようと後退したところで、その足が空を掻いた。
ゴリゴリと今までで最もおぞましい音を響かせて、巨大な爪が抉り飛ばしたような傷が地下の床のほとんどを剥ぎ取っている。
その様を空中で確認し、さらに将来の目は接近してくる釧の姿も捉えた。
後ろに飛ばされ、壁に身体を打ちつけて凸凹になった床にうつ伏せで倒れるという3連打を食らうも傷一つつかなかった彼は、すぐさま立ち上がろうとしている。
それをさせるわけにはいかない。
釧は自らが崩し走りにくい足場を駆けた。
だが、

／

あれからずっと、私達は一緒だった。
クシロは同じ中学に行けるようにしてくれた。
水族館につれていってくれた。
好意を抱いてくれていた。
・・・なんて滑稽な話。
人形のように魂のない私に、愛情なんてものがあるわけもなく、それが出来損ないの愛着だと気づくこともないままに、今になってそれを思い知っている。
まるで刷り込みのようだった。

歪な、関係だった。
孵ったばかりの雛が親を認識するのと同じで、そこに感情など関係なく、だから間違えた。
他人も無価値で自分も無価値。例え愛着心を得たところでそれは変わらずに、自らを想えないモノに他者を想えるわけもなく、クシロが私のためにここまでの行動を取ることなど思いもしなかった。
あぁ、何で今まで気づかなかったんだろう。
殻を破った雛が最初に見るのは他人の顔で、自分の姿ではないなんて、そんな分かりきったことに。
自分の方が、先に死ぬと確信していた。
当然だ。どうせガタガタの身体だったし、いつ解剖（フィードバック）さてもおかしくはなかったんだから。
だからクシロが先にいなくなるなど考えもしなかったのに、今はそのことが頭から離れない。
間に合わなかったら？クシロが死んでしまったら？
胸が痛いのがオーバーワークのせいなのかも分からない。
巡る想いが、溢れる想い出が止まらない。
机に顎を乗せるクシロ。
念力の練習で落ち込んでいる姿。
青く光を透す水槽の前で。
ワイン1杯で上半身を揺らし始めたこともあった。
文化祭で女装して恥ずかしがっている顔。
この前のソファーの上・・・。
それらが全て過去に記憶に成り下がろうとしているという実感が襲ってくる。
クシロがいなくなった後のことなど想像もできないというのに、私はその立場に立たされる人物のことなど考えもできずにいた。
縫い包みを友達と幻視する子供のような、ボロボロになった枕カバーの切れ端をひたすら抱きしめる子供のような、愛情崩れの愛着をずっと抱き続けた無様で酷く惨い有様だったのだ。

「このままだときっと今の関係すら持たない」
そう、クシロが言った通りだった。
そんな関係がいつまでも続くわけがなかったじゃないか。
そんなままで、支障がでないわけがなかったじゃないか。
息がうまく吐き出せない。
胸の圧迫感と身体を揺らす心臓の鼓動。
滲んだ汗が熱を持って身体を蒸らす。
自分の身体を完全に支配下に置ける能力が恨めしい。
そうでなかったら、ここまで乱れるわけがない。
目に入った汗を拭って、開きっぱなしの顎を閉じた。
「俺さ、たぶん、葉月のことを――――」
耳の奥でガンガンと、その台詞が響いて痛い。
「俺がどう見てるかってことだけは覚えてて・・・・・・」
それが意味することは分かっていたはずなのに。
全部、私のせいだ。
あの時でも遅くはなかった。あの言葉にちゃんと向き合えていれば、もっと気を払えたはずだから。
あるいは夏休み最後の日でもよかった。倉庫で分かれた時の、クシロの心配げな表情を見過ごさなければ、カイナの言葉に耳を傾けていれば。
いや、同じ中学に通うよう説得するあの真剣な眼差しに、自分の姿が映っていることに気づいていればよかった。
・・・・・でも、人形を抱くヒトガタに待っているのは、きっと最初から惨めな結末。
後悔まで混ざって、ぐちゃぐちゃになる思考の中、目を背けていた結論が気泡のように湧いてくる。
あぁ、そっか・・・私は――――

／

だが、釧の進行は止まり、唇を歪めたのは将来だった。
時間遅滞されたのではない。
だとしたら止まっていることを知覚することすらできないはずだと釧は今も思考している。
ならばこれは何なのか。
その答えは釧の足が停止した位置にある。
将来が釧の念力を時間遅滞させて隔離した場所なのだ。
キューブ状に隔離されたままの時空間に接したために、ちょうど壁に当たったように進めなかった。
もしそんな状態で釧の凶悪な粉砕念力が隔離された時間体が開放されればどうなるか。
その結末は現実となって示されることになる。
乱気流のような方向性でもって力が拡散していく力の奔流に呑み込まれ、下から上へと釧の身体は引きちぎられた。

■

時の流れは久しく、古き良きあの頃の風景は遠くに霞む。
過ぎ去りし子供だった日々は黄金に輝く夢の中へ沈み、身を包む愛情を知らず童心のままに在れた楽園は失われた。
だからきっと、もう望んだ将来はやってこない。

第６０話ー　蜜と罪。ーＬｏｓｔ　Ｅｄｅｎー（後書き）

次回、最終話「生命虐殺。ーＢｉｏｃｉｄｅー」

――――というプランも初期にはあったという怖い話。

将来の弱点は考えりゃすぐ分かりますねー。
睦月にも通じる弱点でしたが、その辺は次回以降で。
時間空間の説明は合ってるか不明。温かい目で見てください。
あーゆー概念は苦手なんです、頭がこんがらがって。

前回指摘を受けました、
『その辺から拾える元素から（常識的範囲で）合理的に核エネルギーを取り出した場合、副生成物は鉄より軽い非放射性物質が大半で、放射性の副生成物も自然な放射性物質に紛れてしまい、（存在する事を前提に精密調査しない限り）検出は不可能です。質量エネルギーのみを純粋に取り出した場合も（中略）検出は実質不可能です。』
のことですが、
『この超能力とんでもバトルをこうも専門的な観点から見てくださるとは思わなくて全く描写してませんでしたが、睦月はウラン（か、プルトニウム）を持参してきてます。』
とお答えしたのですが、実際にアップした文章にはないので、明記すべきか迷ってます。
過去すぎて定かではありませんがどうせ当時の私が、『震災のこともあるし、プルトニウムとかの表記は避けよう』とか思ってそうしたんでしょうが、後々の展開を考えたら『持参』でも『現地調達』でもどっちでも行けそう……というかどっちもメリットがあったのでどうしようかと。
まぁ、いずれ決めたいと思います。

さて、またもや遅れましたすみません。
なんというかもはや謝罪が安っぽいなぁ。
次話こそはと思うんですが、次話こそ（作者的に）山場なんで確約（そもそも信用ないですが）できない！
進行スピードは残念な状態ですが、これからも全力で執筆させて頂きます。

そういやまたあらすじ変えました。

第６１話ー　産声。ーＢｉｒｔｈ　Ｄａｙー（前書き）

タイトル通り難産でした。

第６１話ー　産声。ー Ｂｉｒｔｈ　Ｄａｙー

時の流れは久しく、古き良きあの頃の風景は遠くに霞む。
過ぎ去りし子供だった日々は黄金に輝く夢の中へ沈み、身を包む愛情を知らず童心のままに在れた楽園は失われた。
それでも思い出の神秘な絆を忘れずに、ひたすら抱き続けたのならば、ふと、浮かび上がる夢の欠片。
とうに萎れてしまったはずの花冠を再びかぶる未来がやってくる。

#

大腿骨についていた筋肉は弾けて飛び、太い骨も軽い音を立てて、骨折という言葉が可愛くみえるほど悲惨に砕け、胴に差し掛かった辺りで腸がこぼれてはちぎれていく。一際大きく見えた肝臓が形をなくした辺りで他の臓器など表現するのも馬鹿馬鹿しく、心臓が潰れて頸動脈なんてものの損傷など既に気にならないほどに血しぶきが上がっていた。
どう考えても手遅れ、まさしくもって生と死の間をさまよっている、そんな状態。
なのに、それらは。
止まっていた。
折れて広がる肋骨も、血管をなくしてなお流れを作る血潮も、身体を構成していた部品がバラバラに分解し、残りは頭だけという寸前で、頭部は支えがなくなったにも関わらず宙に浮き続けていて――。
時が、止まっている。
その表現は、時行割断という能力を持つ彼にこそ遠い言葉だ。
時間を止めることはできない。それが彼の出身施設が出した答えであり、だからこそ時の流れに敏感な彼にとって、時が遅くなると

いう現象に慣れている彼にとって、時間停止などという言葉は迷信や伝説みたいなものなのだ。

それが今はそうとしかとれないほど、時間が遅滞している。

自分の能力の比ではなく、だから時を止めているのは彼ではない。

自分のモノとは異質な時間遅滞を行っている者がいる。

そしてその人物は、どうやら５００ｍは離れたところからこの芸当をやってのけているらしいことも感覚で分かった。

今まで自分が１ｍという距離を縮めるために苦心していたのが馬鹿らしくなるような能力の有効範囲。

その存在が何なのか、彼は知っている。

伝説、そう伝説だ。

学園最強にして無敵、万可すらが干渉を諦め現在は白澤を介して協定を結んでいるにすぎず、先代の鳳凰から眼を複製（ぬすみ）し、先代変容は相手にすらしなかった。

その能力を完成させてから現在に至って、まだ1秒たりとも自らの時を経過させていないというふれこみで、銃弾は当然として、体内の時間を好きに操るその能力は窒息死もあり得なければ、毒を飲んだところでそれが効き始めるより先に太陽膨張で地球の生命が死滅するという。

もはや出鱈目としか言いようがない、自分の先代。

古き良き風景の最高傑作（クラシック・ビュー）。

それがそこまで来ている。

敵対すべきでない相手を敵に回してしまったかもしれないという思考に身体は痺れてしまって動かない。

そうこうしてる内に、その存在はついに倉庫にまで辿り着き、地下へと飛び降りてきた。

走ってきたのか、その息は荒く汗もかいていた彼女、久遠未来は「全く、もう・・・」と吐き出すように言った。

「この私に”間に合わない”なんて思わせるなんて、ホント釧ちゃんも葉月ちゃんも、罪作りよね。そう思わない？」

「と、とと時喰らい・・・」
「あははー、そーでーす。時喰らいの未来ちゃんですよー。無茶する可愛い生徒ちゃんを回収にきましたよーと」
彼女はそういうと、釧の所へと足を運んで彼の頭部を手に取った。
「ホント無茶しちゃって。他の部位はもう駄目ですねぇ。まぁ、頭だけあれば十分でしょう。それじゃあ、私の劣化バージョンちゃん、私はこれで失礼させてもらいます」
「ふ、ふざけるな！」
本当にそれだけと言わんばかりに背を向ける彼女に、まるで自分に眼中に入れない彼女の台詞に彼は耐えきれずに叫んだ。
「い、いきなりやってきて・・・・・帰る？好き勝手がすぎるんじゃないですかねぇ！？挙げ句、この僕が劣化だと！？出来損ないというなら今あなたが抱えてる男の方がそうでしょう！？自分の生徒か知りませんが、僕はあなたと同じ施設出身の人間だ。贔屓する相手を間違っ――――」
「黙れよ童（わっぱ）。私の足下にも及ばないポンコツをなんて呼ぼうが私の勝手でしょうが。
好き勝手？それの何が悪い？力のある者に自由が許されるのは殊学園（この）世界じゃ常識でしょう？
私の生徒だから助ける。私が助けたいから助ける。
ポンコツと天秤にかけて釧ちゃんの方が私には大切なの。
それにね、私だけじゃないのよ。
つい先ほど、私に彼を助けるようお願いしてきた人物が2人いる。
1人は0と1の世界に逃げた化け物、もう1人は神戸万可の無愛想男。その2人が2人とも最悪あなたを殺してもいいと言ってきたわ。
出来損ないってそれだけで罪よねぇ。
私があなたの身の程知らずの台詞をにこにこしながら聞き流してるのは、葉月ちゃんに殺らせてあげるつもりで取ってるってだけよ。
だから、あんまり怒らせないでね？

じゃないと本当に――――」

ペロリ、と赤い舌を覗かせて彼女は時喰らいと呼ばれる所以を口にした。

「あなたの時食べちゃうわよ？」

その台詞に彼は後ずさり、そんな彼の様子すら興味のないらしい伝説の少女は時を止めた生徒の首を大事に抱えて表舞台から再び姿を消していった。

#

薄くオレンジの色味を帯びた白い色調の壁。緑色のクッションをした3人掛けほどの長椅子。

狭い廊下は3つのドアを間隔をおいて左右に配置していて、その内の1つにはドアの上に四角いランプが備え付けてある。

1つは外へ繋がる出入り口。1つは薬剤を保管してある倉庫。そしてもう最後の1つは――――けが人を処置するための手術室。

「手術中」と書かれたランプは点いていないが、それは元々点灯すらされていなかった。

唯一駆けつけた葉月がその治療に当たっていたのだからランプを点ける意味がなかったし、行われたのは手術とは言えないような出鱈目な治療だったのだ。

いくら死にきる前に時間ごとパッケージしたとはいえ、生首だけでは本来手の施しようがないはずだった。

が、それをどうにかできるのが形骸変容ということか。

「不可能を可能にする」。それが生命の進化であり、変容能力であるのだろうが、だからといって自分の身体の中で自分の細胞に釧の細胞核を融合させ、その上たった6時間で兆を越える個数にまで、それも分化させて体組織を作り上げつつ増殖させるなど、医療系能力が泣いて崩れ落ちるような技術だ。

こんなもの手術とも治療とも言えない・・・人造というべきだな

と、白澤と呼ばれる最高位の医療能力者は心中で呟いた。
まさに神業。
けれど、その偉業を行った神様は長椅子の端に小さく縮こまっているのだから、世の中というのは皮肉なものだ。
よほどショックだったらしい。
まぁ、連絡を受けて息を切らせながら駆け込んで、目の当たりにしたのは首だけになった釧の姿だったのだからそれも当然だろう。
「容態は安定、大丈夫ですよ。時がきたら起きます。白澤や私が居るんです、万が一もありません」
そう、毒舌幼女が嫌味の1つも言わずに去ってからしばらく経っていたが、葉月は動く気配がない。
病院のような内装をしてはいるが、ここは荷稲と未来の住居に隣設されているけが人の処置棟だ。別に誰の迷惑にもならないといえばそうなのだが。
さっきまで手術室に備え付けてあるベッドに釧を運び様子を診ていた荷稲は、廊下に出たところで目に留まった、そんな精神的に参っている葉月に近づいた。
荷稲の接近に気づいた彼女はより一層体を縮込ませた。
「・・・カイナ」
「釧はよく寝てる。未来が死を認識する前に時を遅らせたからな。時が来たら起きる。お前も寝ろ。人体ほぼ丸々再生させたんだ疲れてるだろ」
「カイナ・・・僕、私に・・・」
「うん？」
「前に・・・・・・夏の、時に言いましたよね。バカって・・・バカって」
「うん」
「その前にも・・・唯詠にも、御籤のにも言われたんです。
「自分の生にも死にも興味を持てないくせに、他人（ゆうじん）の欠落に脅える馬鹿野郎、他者にとっての自分の欠陥の意味も知れず、欠落の意義

も思考できない愚か者」だって・・・」
「・・・うん」
「私は・・・！私は残されたクシロがどう思うか、どうなるかまるで理解してなかった！考えれてなかった！」
「うん」
「自分の命を蔑ろにすることは想ってくる相手の気持ちを踏みにじることなんて、そんなことも分からずにずっと過ごしてきた！」
「うん」
「なのに、いざ自分がその立場に立たされたら、こんな・・・・・・クシロが死んじゃったら・・・って、死んじゃったらどうしようって・・・！」
「ホンット、大馬鹿野郎だよお前は」
ビクリと肩を跳ねさせて、振るえ出した彼女の頭に手を置き、荷稲は乱雑に撫でた。
「うぇ・・・」
それが引き金になったらしく、嗚咽が小さくなった葉月から漏れ始める。
「うっ、ぇぅ・・・っく、ひっ」
拭っても拭ってもこぼれる涙に頬を濡らし、眉頭を歪めて。
下唇を噛み必死に押さえ込もうとした声はすぐに耐えきれなくなって。
まるで歳相応の子供のように泣きじゃくって。
――――その日、少女は生まれて初めて泣いた。

#

一通り泣いた後、皺の寄った袖を伸ばして葉月は立ち上がった。
「行くのか？」
「はい」

「体力は？もつのかよ」
その問いに腕を伸ばして手の平を見せた。
何もない。が、閉じてもう一度開いた時には銀色をした成形された石ころのようなものがあった。
「これがありますから」
「おい・・・まさかプルトニウムかよ。なんてもんもってやがる」
「睦月の体内から見つけたんです。エネルギーはこれから取り出せる。物は使う者次第。まさに現代版賢者の石ってやつですよ。
あぁ・・・、こっちの賢者の石、クシロに渡しといてください。私には必要ないので」
今度はポーチの中から普通に取り出された数字のない白いサイコロ。世界に数個しかない代物を渡され、うげっ、と悲鳴を漏らす彼女を尻目に、葉月は使いモノにならなくなっていたシューズを脱いで長いスカートをちぎり腰に巻き付けた後、動きやすさを確認してから長く息を吐いた。
「さて、と。――――売られた喧嘩は全力で買う、借りは2倍の2乗して返しってね」

第６１話ー　産声。ーＢｉｒｔｈ　Ｄａｙー（後書き）

ーーーＨａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈ　Ｄａｙ，　Ｈａｚｕｋｉ！
ちょっとあっさりしすぎてる気もしましたが、今の自分の筆力だとこれ以上やるとくどくなりそうなので文字数はすくな目に。

かくしてヒロインは産声を上げ、ついに生まれましたとさ。
うん、６０話もやってきて今更何言ってんだって話ですよね。
今までこのシーンを書くために頑張ってきただけに、感無量です。
えぇ、葉月を泣かせるために頑張ってきたのですからね！　↑作者は性根が腐ってます
このタイトルだけは１年以上前から決まってました。　↑亀更新なだけ
このシーンのために葉月の化け物らしさを際立たせてギャップを狙ったんですが、結果自分がそのギャップに苦しむとは……！　↑自業自得

さて――――次話で二章が終わります。そして最終章。
『エキ日々。』もここまで来たんだなぁとこれまた感慨深いものがありますが、これらは読者皆様の感想・ご指摘・応援があったからこそでございます。
じゃなきゃ三日坊主の作者が数年に渡り書き続けるなんてこと、できるわけがありません。
改めて感謝申し上げると共に、これからもお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

前に言っていたプルトニウムの件は本編の通りにすることにしました。ご指摘ありがとうございます。

……今後、夏季休暇に入り、公募作にも取り掛かりますので、他の小説を上げる機会も増えると思います。
実際、前の公募に出した作品をアップしたり、今後書いていく作品のプロトタイプを出していますので、お暇があればそちらもよろしくお願いします。

第６２話－　月振る夜。－（Ｃ）ＹＡＭＡＮＡＳＨＩ－（前書き）

――――そして少女は楽園を追われる。

※

小型脚足戦車のことをサワガニ。

中型脚足戦車のことをイワガニ、かつその中で能力波反射能を持つ鋏を装備しているものがモクズガニ。

大型脚足戦車は装備が一種類だけなので、全てをシオマネキと呼称。

……さぁ、お嬢様が通ります。

第６２話－　月振る夜。－（Ｃ）ＹＡＭＡＮＡＳＨＩ－

○一一三時、万可統一機構の召還命令が規格『千代神』になされた。

書状での命令文及び、拘束指示を受けた２３名の泥底隊員らが久遠・宮沢宅に赴き、受託を求めるも○一一四時、同位置を含めた学園都市研究所密集地帯にて能力性爆発が発生。部員２３名は蒸発、周囲約１００ｍの研究施設は焼き尽くされる。

万可及び学園機構（システム）はこれを背反を見なし、３０年前の前例を考慮し前もって設置した対策本部は攻撃作戦を開始した。

○一一九時、第３歩兵小隊投下。全滅。

○一二二時、第５歩兵・小型脚足戦車編成小隊、足止めならず。損耗８０％。

○一三〇時、第７小・中型脚足戦車中隊、交戦中。損耗３０。

依然として目標は――――、

「・・・北北東に進路を取り、研究施設を破壊しながら規格『久遠』の待機する倉庫に向かい侵攻中とのことです」

「くそったれ・・・！あんな化け物を造るからだ！奴は３０年前の焼き増しをやる気だぞ！」

万可統一機構のある地帯に近く、久遠将来が強制待機を命じられた例の倉庫から見て北方に立てられた本部で指揮を執る都濃仲昭（つのなかあき）は通信手の報告に悪態を吐いた。

テント中央の机に広げられた学園都市研究地区の地図は、通信で送られる情報によって刻一刻と変化している。

千代神を表す『Ｔ』のイニシャルの入った赤い三角（デルタ）は数分おきに進行し、それに対峙するように配置された彼らの戦力である凸型は、時には全てが取り除かれ、一回り大きな凸型を並べては、数を次々に減らしていく。損害は大きく効果は少ない。ついでに自分達に使える火力も少なく、志気は全くないと言っていい。

何せ相手はあの『折り紙の8月』で、突撃する彼らの心境は死に赴く境地そのものなのだから。

だからこそ死体を作るために指令を出しているような自分の有様に彼は憤慨した。

歩兵ではそれこそまさに死にに行かせているようなものだ。小型脚足戦車（ワガニ）では足止めもできない。小型（サワガニ）と中型（イワガニ）の混合部隊も損耗は激しく、そう長くは持たないだろう。

大型（シオマネキ）を保有した泥底部隊の華、蓮華隊（ロータス）の出動要請を行ったが、許可は下りていない。まだ学園中央部、学生の多い地区とそう離れていない距離でシオマネキのアレを放つのは危険だという判断だ。

確かにそれは正しい。彼自身もその危険性についてはよく理解している。だが、千代神の危険性はそれの上をいく。

今はまだ目立って危険な攻撃法していないが、それであっても火炎というより超高温のエネルギー体で所構わず溶解と蒸発、昇華させていっているし、彼女の本来の能力である形骸変容や色神の内在変容（メタモルフォーゼ）の応用度の高さは無視できるものではない。

あれは化け物だ。こんな生温い火力では相手を挑発するだけで、被害を拡大させかねない。

だってそうだろう？参謀として席に着き、報告を待ち作戦を進めている現在だって、設置されたモニター越しに彼の仲間が脚足戦車（レギオン）ごと火達磨になって転がっていっているのだから。

30年前、鋼鉄竜（ドラゴン）を模した先代変容が当時の研究データを塵にしながら逃げ仰せた事件の始まりは、1人の研究者が彼女の逆鱗に触れてしまったからだった。

喪失、そして復讐。

動機も行動も、今回の件はそれによく似ている。

もしこれが、ソレの二番煎じだというのなら、その結末もまた繰り返す可能性はある。

いや、どの道研究成果が燃やされていくというこの状況は、学園都市にとって非常に困った事態なのだ。

千代神は止めないといけない、その結論に変わりはなく、その作戦のために投入された歩兵は近づいた時点で蒸発していった。

辺り一帯の研究所を高熱戦で溶かして行っているのだから、人もまたそうされることは分かっていたことなのだが、まさか戦闘に入る前に一瞬で全滅になるとは彼らも思わなかった。

なまじ、超能力者との戦闘経験の豊富な彼らだからこそ、戦い方もセオリーも能力の怖さも強さも分かっている身だからこそ、その理不尽さに恐怖を覚えた。

戦えないのでは勝てはしない。

歩兵では無理、ならば脚足戦車ならどうか？

今までに既に2回、脚足戦車との戦闘を行っている例を見るに、少なくても足止めにはなるだろうと考えらていた中型ですら、火力を得た彼女との相性は最悪だった。

対能力者用の装甲はある程度の時間を稼いでくれても、熱され続けて高温化した背負っている有人ポッドの劣環境から操縦者を守れはしない。無人機にしても足を潰されればそこまでで、有人機のように搭乗者の臨機応変な対応は望めない。

研究地区は轟々と建物を溶かしながら燃え、その中心には小さな少女が1人ゆっくりと歩いているだけだというのに、未だ彼らは傷1つつけられないでいる。

第5歩兵・小型脚足戦車編成小隊の生き残りと第7小・中型脚足戦車中隊が進路も速度も変えもしない彼女の周りを走り回っては鉄屑に変わるという状勢も変わりはない。

1匹のサワガニが前方から発砲、7．62mm弾が一時（ひととき）の間に数十発と飛んで、正確に千代紙の方に吸い込まれていく。

けれど、人差し指ほどの大きさのある弾は彼女に当たる前に念力に妨げられ潰れて停止、その隙を狙って後方左から飛び出した歩兵隊の2人組に、彼女の左手の一振りで念力に慣性を与えられて、彼

らの身体に穴を穿った。
　前からさっきのサガワニが突撃してくるが、その無人機は念力以前に彼女の足に踏み潰されて柔らかくなっていたアスファルトにめり込んだ。
　ポシュッ、そんな間の抜けた効果音をさせて、距離を取った位置からモクズガニの擲弾筒（グレネードランチャー）から打ち出された手榴弾が彼女周辺に転がる。これなら直接当てる必要はない。加えて、対千代神にと準備されたその手榴弾は閃光と爆音と殺傷片を二段階で飛散させることで、能力発現を妨げつつ相手を殺す能力者に使うことを前提に作られた代物だ。うまくハマれば能力者にも効果のある武器、だがそんな小細工が効く相手ではなかった。
　閃光と爆音（スタングレネード）の響いた時点で眉１つ動かさなかった彼女は、殺傷片（フラグ）を先ほどと同じ要領で受け止め、打ち返す。現存する物質より堅く、彼女でも変容させることができなかった賢者の石の劣化品であるモクズガニの鋏が盾となり歩兵が庇われたのを見て、直径２ｍほどの熱線を動作なしで放出、追撃した。ビーム光線をイメージすればそのままの見た目の熱線は当たれば致命傷は避けられない。能力波を歪める鋏がその軌道をねじ曲げて防御したが、当たらずとも高熱で血液が沸騰した武装のみの隊員達はショック死し、完全には反射しきれない鋏もじわじわと溶け始める。精密機械である藻屑鋏が破損した時点で一気に熱線を浴びた中型脚足（イワガニ）は後方に押し飛ばされた。
　それだけでは放射の終わらなかった凶悪な紅い光は左回りの軌跡を描いて辺りを一掃、燃え盛る炎はさらに勢いを増した。
　静かになった。
　控えていた泥底部隊（ヌタ）が消えて攻撃が止んだことは、彼女にとってそれ程度の認識だ。
　１ヶ月ほど前ならいざ知らず、火力という点でも、防御という点でも、スタミナという点でもその問題を解決してしまった彼女に今更高機動を武器にした戦い方は必要ない。
　避ける必要もなく、攻撃手段には事欠かないというのはここまで

楽なモノなのか。今まで殴る蹴るといった近接攻撃が主だっただけに、動く必要のない戦いというのは些か達成感に欠ける。

これが単なる作業としての戦闘ならともかく、憂さ晴らし、当たり散らしを兼ねているだけにそれでは困る。

わざわざゆっくり歩いてあげてるんだから――――そう心内で呟いて視線を前に戻そうとした彼女は、すぐさま空を見上げた。

音。まだ小さいが、爆音に近い音がする。

飛行機、それもかなり大型の。

月にも雲のかかった藍色の夜空は、むしろ火災の発生している地上の方が明るいくらいで、その姿は確認しづらいが赤いランプがちらちらと見えた。

どんどんと姿が大きくなるシルエットを視認して彼女は得心した。

超大型戦術輸送機（マンタ）だ。

手っとり早く前線に戦力を投下するつもりらしい。

真上を通過していった後、いくつものパラシュートが咲いたのが見える。それらはある程度の高度まできたところで白く丸い花を切り離して落下に近い強引さで地面を揺らして着地した。

脚足戦車（レギオン）。それも中型（イワガニ）に分類されるモクズガニが多い。重さの分、いくら減速させているとはいえ着地時には相当の衝撃があったはずで、だからこそ投入された機体にポッドはついていない。遠隔操作の無人機だからこそできる芸当だ。

しかし彼女が気になったのはそのエキセントリックな投入方法ではなく隊の編成の方で、モクズガニの多さに彼女は連中の狙いを見通した。

前の暴走能力者騒動で、モクズガニが行ったフォーメーションによる超高温火炎の対処法。あの鋏が能力の威力に関係なく能力波を反らすことができるのは彼女も見て知っている。

編隊を組まれると厄介、そう判断した彼女は自分を囲むように降り立った、まずは前方の数機を潰すためにゆっくりと腕を伸ばし、再び上から降ってくる音に顔を上げた。

どうやら戦力増員はもう1機分あるらしい。
２機目のマンタが1回目と同じ戦力を投下すると仮定すれば、モクズガニが計２４機、サワガニが6機になる。数が多いほどフォーメーションを取られる確率が上がる。優先度を入れ替えて、手をそのまま天に。４m大の火球を2つ作り上げ右斜め前の方角からやってくる巨大飛行機に向けて放った。

類を見ない輸送容量を確保するために、マンタの形に似た形状をしたその輸送機は機動力がほとんどない。空気抵抗から飛行速度すらが通常機よりも劣り、本当に重装甲戦車の類を運ぶだけしか能がないのだ。
そんな鈍速デカブツのレーダーが熱源が前方から迫ってきているのを捉えた。
限界まで速度を上げて、ぎりぎりで山なりに避けることで正面からの直撃は免れたが、まだ船尾を追ってきている。
ミサイルにも見えるが、敵から考えて能力による炎弾。
そうとすれば、赤外線追尾でもレーザー追尾でもなく手動操作だ。
炎が消えるか有効範囲から出るかするまで追ってくるだろう。
赤外線欺瞞装置（フレア）は囮にならない、電波欺瞞紙（チャフ）も同じく、電波妨害（ジャミング）も効果はない。
しかし速度の出ないマンタでは逃げきることは不可能だ。
機体には一応赤外線追尾のミサイルが6基ついているのだが、真後ろに飛ばせるものではなく、操作している千代神を狙うにも地上は火の海で感知が難しい。
正攻法はないと咄嗟に判断したコックピットに乗る４人の内１人が操作したのは赤外線欺瞞装置（フレア）のトグルスイッチだった。
途端に機体から幾つもの光の粒が煙を引いて放出され煙の羽を広げる。
大げさなほどの量を放たれる、大きさにして２０ｃｍ四方のマグ

ネシウムなどの金属粉末を詰め込んだ箱型（フレア）は、その様子から別名『天使の羽根』と呼ばれる非殺傷兵器。火球を直接打ち落とすことなどできはしないが、それを操作している千代神は地上から彼らを確認している。煙を目くらましにして、かつ芯がない分形が不安定な能力性の火の玉がフレアにかき乱されて消滅してくれることを期待しての行動だ。

その思惑は半分ほど成功し、1つは霧散してフレアの煙に飲まれていった。残りのもう1つは機底に当たり、火が燃え移るようなことこそなかったものの外板を破損、貨物部分が近かったのは不運としか言いようがない。ベリベリと外板が剥がれていき、開いた穴のその近くにあったサワガニが落下していった。このままではさらに穴が広がれば他の脚足戦車も落とす羽目になる。

まだ予定地点についていないが、損害が拡大する前に投下するべきだ。

そう判断し、マンタに投下命令を送ろうとした時だった。

レーダーが知らせたのは新たな危険物。前方から火の玉が4つが飛んできた。

今度こそ後ろに回られて使えなくなる前に紫外線誘導ミサイルを発射して4発とも打ち落とすことに成功したが、残りのミサイルは2基、向こうに残弾は関係なく、レーザー上にさらに表示された点滅は2つよりも多かった。

「投下っ！」

彼らの任務は脚足（レギオン）戦車部隊を戦地に送り込むことだ。それを成さずに撃墜されるわけにはいかない。正式部隊（アクティブ・オーダー）を隠れ蓑にした底辺の人間であろうと、そこに誇りはある。

しかし、貨物室の開閉を行う前に左のエンジンに被弾し、主翼もが大幅に削がれたことによりバランスを崩し始めた機体は大きく揺れた。

空を泳ぐマンタがガタガタと悲鳴をあげる中、今度は無線機が何かの電波を捉えたらしくスピーカーから何かが漏れてきた。騒音に

遮られ、所々音が飛んだその音を最初は聞き取れなかった４人だったが、だんだんと大きくなっていくそれが女の声だと判別するに至り、ついにはっきりと聞こえた台詞の意味を理解する。

「邪魔」

実にシンプルな死の宣告と共に、一条の光が彼らの船を直撃。

フレア同様、煙の尻尾を振りながら赤く燃えた破片が散らばっていく最中、――――それでも白い花がいくつも咲いた。

「輸送機二、積載火力を予定地点から北北東４００ｍの地点にて投下・・・・・撃墜されました！」

「モクズガニは陣形組みを開始、現在の数は２４機、損耗なし。予定通り１５機で陣形を、５機は控え、残り４機とサワガニ５機で牽制中！」

新たに加えられた情報を地図上に展開しながら、指揮官である仲昭は祈るように状況の変化を知らせる声に耳を傾ける。

モクズガニの陣形、これの如何で戦局は大きく左右する。

現状、大火力を誇る千代神に対抗するに不可欠な防御力が彼らには欠けている。ただでさえ戦力など限られているというのに、投入する度に全滅させられていては戦闘行為とも呼べないだろう。

まずは戦力を維持する必要がある。そのためにモクズガニに対能力の防壁を作らせる。これが最低ライン、第一段階だ。

第二段階は攻撃手段。こちらの防御の薄さに比べて、向こうは念力で物理的な攻撃を弾いている。そのおかげで今まで好きなように攻撃されてこちらの攻撃は通らなかったが、いつまでも手をこまねいているつもりはない。こちらも超能力で対抗する。

少々許可を取るのに手間取ったが、もうすぐ超兵も前線に到着するだろう。

だから、どうかそれまで持ちこたえてくれと彼は祈るのだ。

２度目の投下後、全方位から同時に銃撃と対能力榴弾を食らい目くらましされ、次にアグレッシブにちょこまかと動きながら射撃してくるサワガニの１匹を高水圧で斬り捨て、千代神は進行方向に密集したモクズガニの姿を確認した。

１５機が道を塞ぐように並び鋏の甲を、その後ろに控える残りがその合間から機関銃を向けている。

試しに放った紫電は屈折し霧散。フォーメーションが組まれバリケードは完成したようだ。

やばいなぁと彼女は心にもないことを思い、客観的に３０体というのが中型戦車（イワガニ）と一度に相対する限界数かもしれないと考察する。

（まぁ、もっとも・・・・・・）

と、彼女が心内で付け加える前に、後ろから両鋏を損壊し装甲も剥がれ無骨な内部構造を露出したサワガニが奇襲を仕掛けてきた。

最大速度で突進を仕掛けるソレを念力の見えないランスで串刺しに、能力系が効かないならこれでと前に投げ飛ばそうとして、そこで弾雨を食らう。さすがに同能力の平行使用ができるにまではなっていない彼女はカニの串刺しから防御に念力を切り替えた。

念力、敵に回すと厄介なことこの上ないこの能力は、実際使ってみると使い勝手が良すぎる。大抵の物事にこれ１つで対応できるという応用の自由度は変容に通じるものがあった。

そういう意味でもこの能力は早くも彼女のお気に入りだったが、視界を覆うほどの大粒の豪雨はさすがに厄介だと認識せざるを得ない。

強固な念力を作るには高密度にする必要があるが、それには当然体力を使うのだ。今更体力を気遣うつもりはないが、防戦一方というのは面白くない。

煙たく立ちこめる硝煙の臭い、音源が多すぎて氾濫する轟音、水溜まりを雨水が叩くような激しさで飛び散る火花。

彼女の体重と銃弾の総重量では後者に大きく傾くだろうことが容

易に予想できるほどの集中轟雨が目の前に展開され続けるのに辟易した彼女は天を仰いだ。

曇ってはいるが空はこんな細々とした地上より広大な世界を広げていることだろう。

（そういえば――――）

ＳＰＳ服用日、クシロに滑空自在（スカイ・スライダー）で高層ビルから飛び降りたら気持ちよさそうと、そんな会話を交わしたことを彼女は思い出していた。

無人運用に際して、どうしても問題になる再装填。それをクリアするために脚足戦車（レギオン）の鋏用機関銃は自動装填装置が組み込まれている。

むろんリロードに時間を要するのは変わらないが、それでも戦地に人員を送り込むのを避けれるというのはありがたく、犠牲者を減らせるというのならそれに越したことはない。兵器の馬鹿高さからしてその損失は痛くはあるが、人命には変えられないのだ。

そういう意味では前線に人がいない現状は、おかしな話泥底にとって最も危険の少ない戦況とも言えた。

相手は少女の姿をしているとはいえ、能力史今世代最大の化け物だ。

火を噴き、雷を操り、守りは堅い。

こっちの人員は蟻の如く踏み潰されていくというのに向こうは息すら上がっていない。

こんなことなら囮として倉庫に待機させている久遠が直接相手をすればいいものを――――それは無人機を別の場所で動かす隊員を含め誰もが思っていることだった。どうやらその本人は千代神に勝つ自信があるようだしと、そうも思うのだが、それが本当だとするなら彼らは戦場に放り込まれはしていない。

人に、子供に撃ち込むモノというには余りに大きな金色の弾をと

りあえず帯状装弾（ベルトリンク）されている分撃ち尽くし、機銃掃射を終える。
分かってはいたものの彼らの敵はやはり無傷で、弾丸はまるで撥水コートを滑る水滴のようにざらざらと落ちていった。
けれど、それよりも彼らの目を惹いたのは標的の頭部上にいつの間にか浮かんでいた光の輪だ。
ゆらゆらと不安定に揺らめきながらも確かに輪っかを形成するソレを冠する姿は天使に見えなくもないが、黒い髪と周りの赤黒い背景からしてどちらかと言えば堕天使で、その見かけも長くは続きはせず、天使の輪は瞬く間に空へ打ち上げられた。

天へ返上されていく天使の輪をモニター越しに確認して、本部はにわかに慌ただしくなった。
今までとは毛色の違う行動も、直接攻撃ではない能力の行使も、正体不明の光も看過するには不気味すぎる。
超能力者を相手取る戦闘において、最も重要なのは相手の能力の分析だ。非常識なことをやってのける連中のしでかす現象を正しく見極め、対処すること。それが時には生死に関わる。
だから、当然今回の戦闘にも観測班というものが配置されていて、各種光線や電波に能力波などの観測機器を使って状況を逐一確認しているのだが、その光に対して観測班が出した答えは――――、
「波長３９０から７００ｎｍに加え１０ｐｍ以下も確認・・・？Ｘ線、いやガンマ線だと？」
１つ目は驚くようなものではない。３９０から７００ｎｍの波長の光というのは可視光線のことだ。光が目に見えている以上、可視光線であることは間違いないのだから、検出されて当然と言える。
だが、２つ目の１０ｐｍというのは、ナノメートルよりも小さなピコメートルが単位して使われていることからも分かる通りかなり短い波長であり、人の可視光域を大きく外れていて見えるものではない。

放射線の一種だが、それを打ち上げるという行為に何の意味があるのか、とそこで仲昭は１つ嫌な考えに思い当たった。

「・・・ガンマ線・・・を・・・空からっておいまさか・・・・・・・・まずいぞまずい！光を見るな！電磁パルス（ＥＭＰ）だ！！」

その悲痛な声とほぼ同時刻、高度１７ｋｍほどにまで上がった天使の輪っかは爆発的な勢いで光を拡げ、空から多種多様の周波数が混じった強電磁波が学園都市に降り注いだ。

核爆発の際に出るガンマ線が空気中の分子から電子を押し出すことによって生じる電磁波は電磁パルスと呼ばれよく知られているが、特に高高度で爆破させることによって核爆発自体の被害をさけつつ、極めて密の薄い大気中でガンマ線を放射させることでその効果域を１００ｋｍ以上の広範囲に渡って及ぼすことを可能にした、大量破壊兵器を使った非致死性の攻撃手段は高高度核爆発（ＨＡＮＥ）と呼ばれる。

千代神がしたのはそれよりも高度こそ低かったが、効果の凶悪ぶりに大差はなく、大切な通信機能は一瞬にして失われた。

通信機は無線・有線と共に逝かれ復旧は難しいがそれはいい。問題は前線に出ている脚足戦車（レギオン）は全てが無人機でありアンテナを介して操作されていたということだ。確認するまでもなく全滅だろう。

ＥＭＰの兵器使用が想定された時点で、各国の軍部では電磁パルスから通信手段を守る手段は講じられてはきたが、ここは学園都市で、彼らは対能力者を前提に作られた部隊だった。放射能の類を操れる能力者は少ないのだ。それも高度数十ｋｍにそれを打ち上げられる能力者となれば、日本を丸ごと熔解させうるという火兎こと兎傘鮮香レベルということになる。そうそういるものではしないし、神戸の学園もあまたの伝説染みた連中を保有しているが、放射能系の能力者がいないことは１２月一件でニュースで言われていた通りだ。

元々必要もなく、色神というイレギュラーによって初めてそういった事態を想定するべき状況になった彼らだが、そう素早く設備が整えられるわけがない。

つまり対策が取れていない。

そこに食らった電波障害攻撃はかなり痛いものになった。

何より彼らの希望である蓮華部隊のシオマネキはＥＭＰと絶望的なまでに相性が悪い。出動要請が通る可能性は絶望的だった。

「光ファイバーを使って通信を回復させろ！

そうだ。それと向かわせていた第六超兵小隊の現状報告！彼らにはモクズガニの防壁は崩壊したものとして行動、待機せよと伝達！

有人機を後何体組めるのか種類と数を確認次第、代案を用意する！」

「・・・・・・・・・・・・繋がりました！超能力部隊は後方２ｋｍのところで停止、待機中とのことです」

「残存戦力の確認取れました。学園の保持戦力は壊滅的、淡路島基地からの輸送になりますが、モクズガニが残り４４機、サワガニ６７機、人員は２００人が限度と・・・内２３名能力者を確保できるそうです」

「千代神の現在位置は？」

「ＥＭＰ後およそ５０ｍの前進、速度は変わっていません」

「よし、能力部隊はさらに１ｋｍ下がらせろ。輸送機（マンタ）一を使い島から学園北東の能力下生態研究所の実験湖（ビオトープ）にモクズ２０サワガニ３０の有人機編成隊を投下。

能力者に多人輸送が可能な者は？」

「２名です」

「そいつに超兵は運ばせろ、待機している部隊との合流後、３班に分けて行動。１班が牽制、モクズガニの防壁を再度組み直し、２班は防壁越しに攻撃をかける。念力の高位能力者を2班に組み込め。対念力措置通り常套手段（マニュアル）を採る。３班は後ろから先に投下されたモクズガニの状態を確認、使えそうであればポッドで人員を投入、不

可能ならば新たに脚足戦車（レギオン）を投入、３班を援護しつつ能力を主力にして攻撃、挟み撃ちにする！」

○二三一時、ＨＡＮＥによる電波障害発生。学園全土に被害、作戦本部一時機能停止。

○二三七時、本部及び前線の伝達機能復旧。

○二五〇時、超兵部隊一班攻撃を開始。

赤い火炎を後ろに広げ、前方に佇む黒い暗闇へ侵攻を続ける千代神に、右斜め前から斬刀水圧（ウォーターカッター）による直射が向けられた。

念力に関して色神の保有していたものを使っているにすぎない彼女は能力波を屈折させるほどの技能は持っていない。水鉄砲と言うには凶悪すぎる水圧の水を千代神は念力で防御することはできないはず、だった。

水刃が砂埃を舞い上げ、瓦礫を砕いて彼女のいた場所を通り過ぎた後、粉塵が晴れた中にその姿はなく、上がったのは発水能力のものだと彼らが記憶している男の悲鳴。べきべきと骨が軋む音を響かせて断末魔は途切れた。

今まで、どれほど猛攻されようと歩速を変えず、回避ではなく防御に徹していた彼女がここにきて活発な動きを見せたのだ。

それも防ぎ切れないから避けた風ではなく、能力者がきたから動き始めたといった感じで――――実際、彼女は彼らを待っていた。

せっかくの機会だ、能力も貰ってこう。

腹いせに連中がもっとも嫌がる研究所の破壊をしつつ、やがて投入されるだろう超能力を手に入れる、一石二鳥だ。

そんな気軽な思いつきが実行されたこの破壊活動は、すでに多くの人命を弄んでいる。失うことを恐れるようになった分、むしろ仕返しのえげつなさが増したことは彼らにとって不運以外の何物でもなかった。

突然の行動に、追いきれず視界から姿を外してしまった別の能力

者が、攻撃の機会すらなく彼女の毒牙にかかったことを告げる悲鳴を上がったところで、やっと彼女の位置を捕捉したサワガニが銃弾を撃ち込んだ。

それはやはり念力に止められて、紫電による反撃を向けられる羽目となったが、サワガニに当たる前にまっすぐ伸びるはずだった電撃は不自然に曲げられた。

誘電現象、発電系能力者。耳に棘刺すような不愉快な音を立てて向きを変えられた高圧電流は地面に流れる。電気のか細い光は蜘蛛の巣のように瞬いて消え、そのわずかな時間にそれを成した能力者の姿を光りの中に見いだした彼女は地面を蹴った。

今度、飛びかかろうとする彼女を阻止したのはガラクタと化したモクズガニをぶつけた強影念力者（サイコキネシス）で、カニ足に絡められて地に落ちる彼女を残りの能力者達が一斉射撃する。

その多くはいつの間にか完成していた第二のモクズバリケードの陰からだった。

自分の攻撃が通りにくいと悟った彼女はその連携に賞賛を送りつつも全てを髪で受け止めて、身体を拘束していたカニを熔かして立ち上がる。

道を塞ぐ彼らをちらりと観察。その弱点は実に分かりやすい。

対抗策のために一間立ち止まった彼女に向けてさらに放たれる電気や炎に水氷。そこに加えて銃撃、弾の無駄にも思える行為だが、ぐにゃり、そんな感覚を得て彼女は咄嗟にその場を離れた。

今さっき、彼女の意と反して念力で張った障壁が歪んで確かに穴が開いた。どうやら能力波への干渉が行われたらしい。

他人の能力波に干渉するというのはかなりの高等技術と言えるが、考えてみれば念力は元より能力にも影響を及ぼせる可能性を秘めた透明な力だ。発火や発電の様に色に染まっていない分、相手の色にも合わせやすい。

念力能力者はさっき存在を確認した。奴がさっきの現象を引き起こし、彼女の念力を封じ込めた。

「あぁ、いいね・・・・・欲しいな、ソレ」
ぼそりと呟いて薄く笑う彼女だが、光り物を見つけた代わりに自分がやろうとしていた策の方が露出してしまっていた。
さきほど彼女のいた地面から彼女の背中に繋がる４本の黒い触手。地中を掘り進んだソレらで陣形を組むモクズガニの足を引きずってやろうと考えていたのだが、移動してしまった今、その目論見はバレバレだった。
すぐさま触手はちぎられて、短くなった自分の第二の手、もしくは羽根を見て彼女はわざとらしく悲しそうな顔をした。
後方、奇襲をかけてきたサワガニを触手の１本を伸ばして叩きつけ、さらにその奥に身を潜めていた能力者を引きずり出す。足を砕き、それが大した能力を持っていないと知ると放り捨てた。
上手（かみて）からバリケードに隠れる２班とは別の能力者による衝撃波が騒音（ソニックブーム）を伴って放たれ、聴覚を封じ込め、その対応に彼女の意識が逸れている間にまたもや後ろから、次は銃撃が。しかしそれはサワガニによるものではなく、ＥＭＰで駄目になった脚足戦車（レギオン）の鋏を取り外した物で、反動のキツいそれを等級の低い念力能力者が身体を固定して撃ってきているらしかった。
そこに先ほどの能力波介入を行った別の念力能力者が彼女を念力を封じ込め、彼女が代わりに防壁として広げた硬化した織髪は音弦（ボイスチェンジャー）変調が固有振動を利用して破砕、進行路を塞ぐモクズガニの方からも能力と鉛弾の弾雨が降り注いでくる。
その中彼女の耳は、
「そうは持ちません！早く・・・！」
という能力波介入してきた念力能力者の声を捉えて、彼女は連中の本命がこの連携のさらに次にあることを理解した。
銃撃による負傷は目的ではない。核子操作による原子合成のできる彼女は泥から血肉も作り出せる。傷をいくらでも直せる彼女に単なるダメージはあくまで補助であり、本命は能力使用の封印と考えるのが妥当。

ならば、次くるのは。

・・・・・その結論は真っ正面から撃ち込まれてきた。

彼女がまだ遭遇したことのない麻酔弾という形で、けれどそれを彼女が食らうという結果は訪れない形で。

銃撃も能力攻撃も、そして麻酔弾もが、空中で停止し、それから水面に映し出された像が揺らぐように変形して霧散した。

その結果は彼らにとってはあまりにも予想外であり、その驚愕は筆舌に尽くし難い。

念力のことは知っていた。織神が色神を取り込んだ時点で念力を防御に使うという可能性は考慮済みだった。

だが、まさかそれ以外に見えない壁があるなどと彼らは知る由もなかったのだ。

何せ、彼女がソレを会得した12月のあの日、あの場所は水蒸気に隠され、なおかつ廃屋とはいえ屋内でのことで、万可すら知らなかったのだから。

借り物の念力ではなく、彼女自身の能力である境界越境。

その発現には色々と条件があるのだが、少なくとも彼女自慢の髪が無惨に散らばる範囲内は彼女の領域だ。

そうそう侵せるものではなく、侵せない以上彼らに勝ち目は万が一にもありはしない。

それでも彼らに退避という選択肢は存在せず、無意味な銃撃は再開、免疫が作られることを恐れて、一発一発中身の違う高価な麻酔弾も撃ち込まれていくが、ついには念力への干渉すらが絶たれ――――いや、ついにそのメカニズムを解読されて逆干渉された強影念力（サイコキネシス）者は内臓破裂で血を吐いた。

念力に対する常套手段（セオリー）もまた消えてしまえば、彼女にとって防御とはますます楽なものになる。

否、能力波干渉という形骸変容（メタモルフォーゼ）に応用できそうな技術を手に入れ

たことですでに満足で、もうそろそろ攻撃に転じてもいい頃だと彼女はそう考え、背中の触手を広げた。

黒く直径１０ｃｍほど、長さ４ｍほどの触手はまるで髪の毛が痛んでキューティクルが剥げたようにささくれ始めるのを見て、彼ら前線で戦う勇者達は初め、それが何なのか分からなかった。

けれど、その攻撃は彼らにとってあまりにも致命的で、それの意味を知ることになるのは、彼らの内１人が高熱を出し嘔吐し失明し全身麻痺を起こし呼吸不全を起こし血を吐いて死んだ時だった。

「ウイ、ルスだと」

「は、はい！嘔吐、吐血の他麻痺などの症状が見られると。ウイルス、もしくは細菌。目標の散布行動と見られる挙動が見られてから２分で１人目の死亡を確認。感染は空気感染と見られますがかなり強く、潜伏期間はほぼなく発症、病状の重篤度合いと該当病原体が特定できないところから見て・・・・・・」

「新型ウイルス、治療法（ワクチン）なし、感染力大、致死性あり・・・・・・・・・・完全にリスクグループ４だぞ！

レベル４（ＢＳＬ－４）実験室でしか扱えないような代物を学園（こんなところ）で！

学園機構（システム）に緊急連絡！強毒性ウイルスがバラまかれ学園都市中央部にも拡大の恐れあり！

観測班に連絡、現在の風向と風速から拡大予測を立てろ！」

「都濃指揮官！」

「何だ！？」

「観測班からＥＭＰで機器が逝かれて計測不能の伝達です」

「・・・・・・っ！分かった。現在現地に空調を操作できる超兵は何人残っている？」

「多くの隊員が死亡、生存している連中のほとんどにも病症が見られると・・・・・・その、例え空気操作でウイルスを閉じこめても、超兵自身が感染していた場合・・・・・・」

言いにくそうに言葉を紡ぐ彼の台詞を最後まで聞かずとも、仲昭は何が言いたいのか理解した。

感染していた場合、途中で能力者が死ねば結局ウイルスは漏れるし、あるいは能力者自身がウイルスの媒介になってしまう可能性もあるのだ。

今前線にいる人間を無闇に動かすことはできない。

ならば、と彼は苦肉の策を口にした。

「板川だ。板川由に連絡を取れ！空間隔離で拡大を止める！」

「いやしかし、彼は一般じ――――」

「構わん！全責任は俺が取る！ウイルス感染拡大だけは何としても止めんだ！」

「指揮官！光ファイバー経由のＩＰ電話で板川由との連絡つきました！」

それを聞き、彼は通信兵から受話器を引ったくって耳に当てた。

しかし、彼が口を開き依頼の言葉を発するより前に、聞こえてきたのは、

「えーおかけになった電話は現在電波の届かない空間にあるか？電源が入っておりませーん。ってことでまっ、頑張ってねアハハハハハッ！」

そんな無慈悲な録音による台詞だった。

携帯ならばともかくＩＰ電話にこんな台詞を録音しておく辺り、板川由はこうなることを知っていた。

けれど何故？

その答えは千代神のクラスメートから。

予知能力は未来演算。演算する数字がなければ予知は不可能であり、物理現象には強いが人為現象には弱い。ある程度未来予知と呼べるような、大災害を予知できるパターンは予知夢などの脳の活動が限定されている状況下においてのみであり、見る未来を選べないというデメリットがあるが――――何にせよ、千代神の近くにいて、今回のことをその一端でも予知し得た人物は１人だけだ。

布衣菜誉、浅夢予知（くもりゆめ）。
彼女による情報が板川に流れ、この留守番音声に繋がっている。
「お、おおおおのれぇぇえええ！」
受話器を叩きつけた彼。
だが、凶報はそれだけではなかった。
「指揮、官。観測班からの連絡です」
「次は何だ！？」
「これは目視による観察で・・・その、正確ではないのですが・・・」
「だから何だ！？」
「本部に向けて、１０ｍを越えると思われる火球が曲射されたと・・・・」
その報せを聞いて彼は身体の力を抜いた。
「ああ・・・」と息が漏らし、テントの暗い天井を仰ぎ見て、それから一言最後となる言葉を口にする。
「くそったれ・・・・・・」
彼らの戦いは終わった。

／

朽網釧との戦闘によって、すでにボロボロになった倉庫の１階部分に将来はいた。
何カ所も穴を開け、全体にヒビが走っている建物は頼りなく、等級の極めて低い能力者でこれでは、あの化け物相手ではどうなるのかは想像するのも馬鹿らしい話だ。
ある意味そのシミュレーションがつい先ほどまで行われていたようなものだが、倉庫に新しく持ってきたパイプ椅子に座りながら待機していた彼にはその詳しい情報は入ってきていない。
もし入ってきていれば、いや・・・どの道彼の余裕な態度に変わ

りはなかったかもしれないが・・・、とにかく彼は自分の力量をあまりにも量り間違えていた。
　自分と同じ規格に劣化、ポンコツ扱いされたこともあり彼は気が立っていたし、自分の能力を疑いもしなかった。絶対防御と彼が言う時間の防壁は破れるものではない。能力波干渉ですら、能力波の伝達速度が落ちるために時間遅滞の前には無力なのだ。
　だから彼は千代神と今は呼ばれる織神葉月がついに到着した際に、こう口走った。
「あぁ千代神さん、随分遅かったじゃないですか。連中相手に手こずってたんですか？
　ははっ、どうしたんです？目元が赤いでッ」
　――バチンッ
　台詞を皆まで言わせずに、彼女が放ったほんの小さな紫電が耳に進入して、脳を程良く焼かれた彼は倒れ、戦闘とも言えないまま、彼らの雌雄は決し、
「で、でででっ、で・・・でぇでででで」
　痙攣して言葉にならない彼に彼女は一瞥、冷たい視線をくれてから能力も使えなくなった彼の頭を踏みつけた。
「・・・未来ちゃんに、君が能力を得た頃の写真を見せてもらったんだけどね？
　ここ数年で随分成長したみたいじゃない、身体。
　これで君が彼女みたく身体の老化を止められるほど器用じゃないってことは分かった。
　なら君のバリアは単純に時間遅滞させた割断層を纏っているだけだ。
　そうとくれば一つ問題が浮上してくる。未来ちゃんのように任意的に透過性できない君の場合、光も音も当然速度を落とすはずで、本来ならクシロの時も今も会話が成立するはずがない。
　ではどうしてコミュニケーションが取れるのか？答えは簡単、少なくても目と耳の箇所には穴が開いている」

それは、実のところ睦月の念力の際にも気づいていたことだ。
物理的に強固である念力の壁は、無色であるから光は透過するが空気は遮断してしまう。今回のようにウイルスでもまいてしまえば、あの時だって瞬殺することはできた。
それをしなかったのは、彼女自身が戦いというものを楽しんでいたというのもあるし、結局のところ自分と相対する存在である彼女と存分に殴り合いたかったというのもある。
何だかんだいってあの戦いで彼女は睦月に対し真摯にぶつかっていた。
だからこそ、面白味もない卑怯な戦法は採らなかったのだが、今回は違う。
相手は単なる憎いガキ。戦闘に何の興味もない。興味があるのはこれからすることについてだけだった。
「あぁそれから、君がクシロに勝ったのは相性がよかっただけで、クシロが弱いわけじゃないからね？
コントロールの効かない上に、下から上っていく能力上弱点が突きにくかっただけ。
こんな単純な弱点にも気づけないなんて君ってホント馬鹿だよね。あまつさえ、私に勝てると？思い上がるなよ。
私がこうしてここにいるのは純粋に報復のため。君の能力なんていらない、そんな価値なんてない。
・・・・・やられた分は2倍の2乗だ。足の指から順番に折って砕いてちぎって太股は肉を骨から剥がして手は捻りちぎって腕は骨の形がなくなるまで踏み砕いて腹を裂いて臓腑を1つ1つ握り潰して肋骨を口に詰めて心臓が壊れるまで痙攣させて頭皮をちぎり頭蓋を砕いて散らした脳漿を眼かに詰めて発狂するまで苦しませて痛みつけて・・・・・虐めて殺す」
そんな淀みも曇りもない宣言と共に、荷重のかかった頭蓋骨にベキリとまずはヒビが入った。
すでに戦いは終わっていて、今から始まるのは一方的な虐殺であ

り、なぶり殺しであり、処刑である。
その顛末はあまりに凄惨で語れるモノでもなく――――お話にすらならなかった。

／

「ひでぇ・・・・」
状況終了・・・・・もちろんこの場合泥底部隊（ヌタ）の惨敗という結果での終了を以て、餌を入れておいた倉庫での出来事を彼女を刺激することを避けるために観察するのもはばかられた万可統一機構は、全てが終わってから嵐が去った後の現場に踏み入れることとなったのだが・・・。
研究員の誰かが漏らした冒頭の台詞に彼らは同意するしかなかった。
人間スープという言葉がある。
死んだ人間を微生物らが分解し、形を無くしてドロドロになったものをそう表現したりするのだが、経緯は別としてまさにそんな感じの有様だった。
血なのか何なのか、ただ赤いだけではない液体に僅かに浮かぶ白や黄色い欠片。形が残っているのはその欠片ぐらいで、眼球も骨も臓器すら判別できそうにない。
あるのは床の染みとスープの具のようになった諸々だけ。
人1人がいたとは到底思えない。
どうやったらこんなことができるのか、考えたくもなかった。
それでも一応研究のためにと、破片を回収する辺り研究者としてのプロ意識が見られるのだが、いくらこういったモノを見慣れている彼らでも吐いてしまいそうな光景で、果たして吐しゃ物とコレとの差異は何だろうかと想像してしまったことで吐き気がさらに増した者もいる。
そんな中、普段ならこんな場所にこないような人物が2人、現場

を遠目に観察していた。
　内海岱斉と加藤倉光だ。
　岱斉は自分のところの自慢の娘がしでかしたことを鉄面皮のまま眺め、倉光は最初こそここまで続く外の被害について興味を持っていたようだったが、『潰すならカエルの形がよかったのに』と意味不明な言葉を呟いたのを最後に、場にまるでそぐわない携帯ゲーム機をいじり始めていた。
　いきなり外へと駆けだしていく研究員を横目に、『とにかくヤバい』ということ以外分かりそうもない現場から意識を倉光に向けた岱斉は、老人が珍しいものを持っているのを見て尋ねた。
「それは？」
「ゲームだよ。主に若者の間で流行っているらしい。あの子がやっているを見て私もやってみたんだが、これが興味深い。『ビオサイド』、知っているかね？」
「いや」
「施設から逃げ出した少女が体内のウイルスをばらまくというゲームでね、制作者は――――」
　言って、彼は岱斉にゲーム機を渡した。
　そこにはゲームをクリアした後のクレジットタイトルらしくスタッフロールが流れていて、黒い画面を下から上にスタッフや企業の名前が上がっていっている。
　それがしばらく続いて、その最後にこう表示された。

『（Ｃ）ＹＡＭＡＮＡＳＨＩ』

「ＹＡＭＡ・・・ＮＡＳＨＩ、やまなし、月見里・・・・・・月見里、絵里香・・・・・・！」
「どうやら眠り姫のお目覚めは近いようだぞ、岱斉」
　――――どこか、この世ではない場所で、白い少女が微睡みの中

唇を三日月に歪めた。

第６２話－　月振る夜。－（Ｃ）ＹＡＭＡＮＡＳＨＩ－（後書き）

まさか『ビオサイド』が伏線とは思わなかっただろう！？ふはははははッ！

というわけで……第二章最終話『月振る夜』です。

『振る』は『神や霊魂・精神をゆり動かして活力を呼びさます』、『神輿や神座をかつぐ』、『神を鎮座させる』などの意味。

『降る』の変換間違いではなくわざとですが、さてどの意味が一番合っているのか。

葉月の『月』は月見里の『月』。ここらの関係は『第３７話－　幼老虐々。－Ｄｉｓｔｕｒｂａｎｃｅ－』の最後辺りと『第５９話－　甘言。－Ｌｉｌｉｔｈ'ｓ　Ｓｅｄｕｃｔｉｏｎ－』のクルナの会話から推測可能ですねー。というかあからさまですねー。

いいところを何故か誉ちゃんと、そしてついに名前が出てきた絵里香ちゃんが持っていきましたがある意味『エキ日々。』の平常運転。

月見里絵里香ちゃんのお話は『第７話－　裏方食会。－Ｓｏｐｈｉｅ－』を参考にすれば予測できる……かも？

あと『エキ日々。』にはいませんが、別の世界観で彼女の弟がちょいちょい出てる『白桃シロップ』辺りを読むと彼女について分かります　↑宣伝

あ、それから作者は軍・兵器に詳しくないのでその辺りは暖かく見守ってくださいませ。

ふぅ……『（Ｃ）ＹＡＭＡＮＡＳＨＩ』という、ある意味最大の伏線も回収し、ようやく役者が揃いました。

今後、最終章に向けて張った伏線の回収ラッシュが始まる気がしますが、

実は今回もかなり大きな伏線が張られています。気づきましたか？
よくよく考えてみると違和感に気づく方もいらっしゃるかもしれません。
こんなこと『罪扉』でも言ったナー　↑宣伝
まぁ伏線のタイプは確かに『罪扉』と同じです。参考になるかは分かりませんけど。
……分かっても内緒ですよ？

・学園の諸々
・１２月の騒動が大きくなったこと
・先代の行方　３０年前の諸々
・月見里
・５０年前の話
・ＳＰＳ、超能力の話

まだ明らかになっていない話が沢山ありますが、すっきりできるようにこれからも頑張っていきたいと思います。
他にも『ここはどうなってるの？明らかになるの？』っていう疑問点がありましたら、感想や活動報告にお気軽にコメントください。

シリアスモードが結構長く続いている『エキ日々。』ですが、
コメディーパートのノリが読みたいという方は作者が今公募用に書いて上げている最中の『だから僕は作者を殺す』をば。　↑　本日３つ目の宣伝
こちらはギャグな感じの仕上がりになる予定です。

それでは。

欠片－3　霊夢。－Ｈｉｓ　Ｄｒｅａｍ－

意識が浮上する感覚には、えも言われぬモノがある。
その時まで、まるで存在していなかった思考が、ふと機能を取り返す瞬間。知覚するには一瞬の、無と有のその境界線こそが、唯一人が生と死に僅かばかり振れられる瞬間なのかもしれない。
自らに自我が宿る一時を、人は知ることはできない。
微睡みの中、夢に生き、無意識の海へと死んでいくサイクルを繰り返しながらも、その機会の多さに反して、人間の感性が命という、自我の根元に至ることはないのだ。
生命のありどころは不明瞭のまま、生命のあり方は形のないまま。ただそこにあると自覚するしかなく、知覚するにはあまりに一瞬。
「目覚める瞬間はそんな神秘を有してるんだよ」
囁く声に、瞼を開ける。
霞んだ視界に、黄金の光が差し込む世界が見える。
夕陽の暖色は実際に熱を持って注ぎ、空気を暖めているようで、部屋の中は蒸し暑い。
ベッドの上、心地よい感触。
汗で貼りついた布地が掛け布団と知って、自分が今裸だと知る。
視線を下半身にやった先に、同じ格好をした葉月がいた。
布団越し、上に乗る体勢。
こちらに向けられた瞳、彼女の声。
「生物が生命を宿した有機物の集合体であるとするなら、どれほど小さな微生物にも命は存在する。
けれど、私達が命を語る時、そこには自意識がその存在を認めているという前提があるんだ。
『生きているから生きている』という言葉は、言葉遊びのようで真実をついている。
生物と分類されようと、意識の宿る器官のない微生物やその他多

くの生物に自身が生きているという感覚はない。
彼らにとって生という言葉も死という言葉も意味を成さないんだ。
命は、生とは、生物と無生物の境界線でありながら、ほとんど人間にとってしか思考する価値のない命題だよ」
「それは、命というよりは魂についての話じゃないかな」
「魂・・・・・そうだね、人が怖がるのは命を失うことではなくて、自分を失うことだから。
自分の精神を創り出す核がどこかに存在していると思いたいのかもしれない」
「けれど、結局のところそんなモノが存在しているという確証は得られない。
死という意識がない無の世界は認知できず、生という状態しか知らない僕達には比較することができない。
生きていると僕達が感じる感覚は幻のようなものなのかもしれない」
「魂にも生命にも実体はないんだ。映写機で幕に映し出された映像みたいなものなんだろうね。
そういう意味では生物の体は生命を映し出す装置なんだよ、きっと。
夢が脳が創りだした仮想世界であるように、命もまた、有機物の化学反応が創りだした儚(ひとのゆめ)」
「人は夢と同じ所から生まれてくる」
「蜃気楼だよ。無いけれど、確かにそこに有るモノ。
自我が、意識こそが生命の証明というのなら、人は眠りにつく度に死んで逝く。
魂に実体がないのならば、無意識の海へと沈むことはまさしく死。
けれど、人は朝に当然のように生き還る」
「実体としての身体が無に還った魂を覚えているのかも」
「身体は楔、この世界に意識を留めておくための紲(きずな)」
「なら、もし夢の中に楔を打ち込めたなら、向こうに留まれるわけ

だ」

「・・・・・・夢は好き？」

「・・・・・・・・・・・・・・夢なら脆弱な自分も情けない自分もいない。

夢なら何でもできる。何でも叶う。

少なくても、後悔だけはしなくて済む。

それは・・・なかなか魅力的だよ」

「・・・私はね、現実も夢も等しく同価だと思ってた。

生も死も、自分も他人も、何もかもがフラットで、天秤がどちらかに傾くなんてこともなかったんだ。

でも、今になってやっと分かった」

「何が？」

「人は大切なモノがある方を現実だと認識するんだ。

現実と夢はやっぱり同じモノなんだよ。

私達の見る世界が身体を通した、五感による情報から成り立っている以上、世界はあくまで「あると感じること」だ。

身体（殻）の外に広がっていようが、精神（心）の中に広がっていようが、自分が知覚する世界として差異はない。

物質であるか、質量があるかなんて関係なく、現実味を感じれるだけの世界であれば現実としての価値を内包できる。

私達の脳は実のところ夢も現も見分けられないんじゃないかな？

それでも人間が毎夜死を繰り返しながらも、違う世界（ユメ）ではなく、現実と自らが称する世界へ還ってこれるのは、肉体が私達と世界を繋いでいるからだよ。

大切なのは数多ある世界から、戻ってくるための紐。

私にとってそれが、君だった。

世界の全てが無価値に変わって、肉体が楔でなくなって、フラフラと夢現を彷徨っていた私を、引き留めたのは君だった」

「・・・・・・僕はただ、好奇心と孤独感を紛らわせるために君に話しかけた」

「でも、それが紲。そうして私は今生きている。だから、ね？」

胸を押されて、半分ほど持ち上げていた上半身が再びベッドへ誘われ、鼻と鼻がくっつきそうなほどの、唇と唇が触れ合いそうな距離にまで、葉月の顔がいっきに近づいた。

「そろそろ目覚めの時間だよ」

――――瞼を開いた世界は青かった。

青白い光が白いカーテンを透いて差し込んで、開け放たれた窓の風を受け揺れている。

その色合いを見るに、夜明けが近いらしい。

1月の早朝間近の空気は冷えて、その冷気が流れ込んだ室内もまた冷えている。

「おっ、起きたか」

眠気のまだ残る頭をかきながら振り向くと、荷稲さんが点滴のパックを取り替えていて、どうやら自分の寝ている場所が治療室の類なのだと気づく。

そして、当然、そうなった経緯のことも思い出し、自分の身体が無事であることにも気がついた。

「・・・・・荷稲さん、僕がミンチになりかけてから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何があったんですか？」

「未来がお前を助けた。で、葉月ちゃんがお前の身体を造り直した。医療系能力者が聞いたら首吊りそうな技術のオンパレードでな。・・・身体の方はどうだ？違和感は？」

「ない、と思います」

「ま、何にせよ慣れるまでしばらくはリハビリだ。

あぁ、そういう意味では学校がないのは都合がいいのか。再開の目処がまるで立ってないっていうのが問題だが」

「え・・・・・？」

その言葉の意味が分からず、疑問の声を上げた僕に、荷稲さんはベッドから離れて窓へと歩み寄り、カーテンを引いた。

窓の向こう、広がっていたのは焼け野原だった。

コンクリートの建築物すらが崩れ、煤にまみれ、アスファルトの道路は溶けて道をなしていない。

またくすぶっている火が所々で煙を上げていて、陽が遮られた空は薄暗い。

高い建物がなくなった景色は、あまりにも平たく、遠くまで、その被害を見渡せた。

「・・・・・・研究施設エリアはほぼ全壊。

一般人の被害者は少なかったものの、公にできない機関の隊員５００名以上が蒸発、死体も残ってない。

久遠将来は死亡。死体の回収も困難なほどに損壊だと。

電磁パルスの影響で現在も通信障害が残ってて学園都市は混乱状態だ。

主要研究施設が崩壊したお陰で、学園都市自体の機能が停止。復興は壊滅的。

まさに３０年前の再現だよ、これは」

「葉月は・・・・・・葉月はどうなりました」

「・・・だから、３０年前の再現だよ。散々破壊活動を行った挙げ句、形骸変容（メタモルフォーゼ）は――――」

そうして。

そうして、朝、二度とこないはずだった目覚めを迎えた僕に告げられたのは、葉月が学園を去ったという、ふがいなく、結局は何もできなかった自分の眠っている間にあった、事の顛末だった。

欠片－3　霊夢。－Ｈｉｓ　Ｄｒｅａｍ－（後書き）

しかし、鬱展開はこれっきり。
次回からは……○○で××で△△な展開に。

第６３話ー　後日白昼。ーＲｅｃｏｖｅｒｙー（前書き）

知ってた？『エキ日々。』の主人公って僕っ娘キャラ交代制なんだぜ？

第６３話ー　後日白昼。ーＲｅｃｏｖｅｒｙー

長い間住み慣れているとはいえ、いや住み続けているからこそ、その場所の変化というものはよく目につく。

かつては学園都市駅から繁華街の手前まで広がっていた、超能力研究所の多くは取り壊され、母体が別の学園にある施設も再建することなく閉鎖することになって、神戸学園都市は急激に寂れていった。

万可統一機構を含め、幾らかの研究施設は残されたものの、教育施設という一面を確かに持ちながらも、技術革新を求められる超能力産業としては、神戸の学園は役割を果たせる状態とは言い難い。

規模縮小を避けることはできず、多くの学園が手を引く中、祠堂学園もその内の１つだった。

幸い、学園都市は他にもあり、学園も他の土地にも存在する。今後も超能力に関わっていこうという生徒は学園から離れることはできないが故に・・・、中学１年生の、あまりにも特異だったと今なら思える、かつてのクラスメート達はバラバラになった。

唯一、神戸に残ることになった僕もまた、あの頃とは随分立場が変わり、神戸に残りはしたものの、中卒後は学業を続けることなく、学園都市に行くこともほとんどないままだ。

焼け野原と化した土地には、研究施設の代わりに研究資料を纏めたデータベース施設や記念資料館などが立てられ、観光客を呼んでいる。それを再興と言っていいのかは判断しかねるが、結局学園都市は学園都市、超能力と切っても切れないものなのだろう。

＃

仕事を終え、地元に帰ってきた僕は、空港（マリンエア）からモノレールで人工島を出て、繁華街に足を運んだ。

この辺も一時は壊滅的被害を受けていたけれど、今ではその傷跡は見当たらない。

完全復興まで２０年。マスコミが当時騒ぎ立てていたそんなフレーズはなんだったのか。

ターミナル駅の二階から、そのまま連絡橋を渡って隣の建物へと移動する途中、他のビルに張り出された大きな壁広告に顔をしかめた。

サングラス、かけていて正解だったな。

燦々と陽の注ぐ空を見上げてみる。

いい天気だ。約束の場所はカフェテラスだったはずだから、この天候は嬉しい。

考えてみれば、しばらく直接顔を合わせてはいないあいつの顔を思い浮かべ、２年ほどの間にどれほど変わったのか想像してみる。

前に会ったのは、確か葉月のバイト先でもあった楽気苑の先輩が結婚した時だったか。

そう言えば、あの店にもここのところ行っていない。

近い内に蕎麦を食べに行こう、そんなことを考えて建物へと入っていった。

ビルディングの４５階、『Ｒｏｍａｎ』。

その階よりも上はフロアの面積が狭まるために、高層建築物の中間層でありながら、さながら屋上のように開放的になっている空間を、うまく利用して売りにした人気の高いカフェテリアだ。

別段緑化計画の一環というわけでもないのだろうけれど、人工芝が敷かれた敷地は、ビルの建ち並ぶ人工物だらけの土地ということもあって、瑞々しさが際だつ。

本格的な珈琲の一杯でも頼んでゆっくりと味わいながら、時折当たりを歩いてみるというのがここの楽しみ方なのだろう。

その上品さに負けず劣らず、一杯でもいい値のするカフェだが、

まぁ、時にはこういうのも悪くはない。
結構なハードスケジュールで日々過ごしている身としては、今日の待ち合わせは羽を伸ばせる絶好の機会だった。
あいつがこんな洒落た場所を待ち合わせ場所に指定したのが意外であると言えば意外だけれど。
・・・海外生活でセンスが洗練されたのだろうか。
約束の時間まで数分となり、長ったらしくて名前を覚えられないような・・・・・・とりあえず本格的であることだけは伝わってくる珈琲をチビチビと口に含んでいたところで、「よっ」と呼び声がかかった。
いじっていたケータイの液晶から顔を上げ、二次成長を迎えて太く頼もしく変化した声の主を視認する。
「久しぶり、隆」
渡米して、爆破屋を始めた彼は、伸びた背を似合わない薄茶のスーツに包んでいた。
変わらない金の短髪に懐かしさを覚えるが、似非不良はもはや完全に社会人へとクラスチェンジしたと見える。
「あぁ、先輩の結婚式以来だな、直接顔を会わせるのは」
対面に座る彼に、自分のところに寄せていたメニューを渡す。彼がオーダーを終えるのを待ってから、改めて僕たちは対面した。
「婚約おめでとう」
まず、言っておかないといけないだろうことを口にする。
「美月さんはどう？元気にしてる？
妊娠３ヶ月ぐらいだろ、つわりのピークだ」
「まぁ、母体は安定してる。大変だったのは俺の方だ。
この歳で子供作ってから、両親に報告だぞ？
向こうの両親の時が修羅場過ぎた」
「そりゃそうだ。歳はともかく、まず婚約しておけばまだマシだったろうに。避妊してなかったのか？」
思春期としても落ち着いているこの年頃、今更性行為の話題に羞

恥を感じることもないだろうと、聞いてみたのだが、向こうの反応は何故かぎこちないものだった。
「いや・・・その、だな・・・・・・」
「うん？」
「いつの間にかゴムに穴が開いてて・・・」
「・・・・・・・・・・・・やるなぁ美月さん」
そっちからだったか。あの人、押す時は押すからな。加えて、やたら運がいいし。
「いや、誉められたことじゃねぇからな。
会社のことで甲斐性がアピールできたから何とか認めてもらえたが、もうちょっと考えて行動してくれねぇとマジで困る」
「まぁ、よかったじゃんか。会社も順調なんだろ？」
「順調なんだろ？って・・・おい親会社の社長様よ、その辺はちゃんとチェックしとけや」
「忙しいんだよこっちは・・・・・・」
『お前のせいで』という意味を言外に込めて言ってやると、隆はにやっと笑い、親指で自分の背後の方角を指した。
「あぁ、そう言えば、ここにくる間にでっかい広告あったな。化粧品のＣＭの。
良かったじゃねぇか、そっちも好調で」
「良かないよ、どっかの誰かさんが人のプロフィールをタレント事務所にぶち込んでくれたおかげで、破壊工作に勤しむ時間がないんだから」
「うん、良かったな。そのまま目指せ女装タレントの星」
「あのさぁ、別に好きで女装してるわけじゃないんだよ、僕は」
「葉月がいなくなった後、いきなり聡一に「女装の仕方教えてくれ！」なんて口走った時には、あぁ・・・ぶっ壊れたかって思ったけどな」
「失礼だな。単に男より女の方が衣装の幅が増える分、変装しやすいと思ったんだ」

「正体隠さないとまずいことやろうって時点でぶっ飛んでんのには変わりねぇよ・・・。
まぁ、お前の近況はテレビで確認できるからいいとしてだ、他の連中は？
定期的に帰ってきてるとはいえ、知らない奴が結構いるんだけどよ」
「んー、僕も別に全員知ってるわけじゃないんだが、そうだな・・・・・委員長のことは知ってる？」
「椎か？聞いてないな。何だ、腹黒さに磨きがかかってるとか？」
「うんまぁそんなところ。兄と揉めに揉めて会社が二分、兄妹で商業戦争してる」
「うげっ、こえぇ話だな」
「で、うちの会社としては委員長側として参戦中」
「お前も大概じゃねぇか・・・ってか、それ間接的に俺の会社もってことだよな」
「まぁそうなるね。今やってるＣＭもその一環。兄と違って委員長は手広くやってるからなぁ。
あぁ、それと副委員長は能力生かして警察の科捜研に所属してる」
「残留思念読取（サイコメトリー）だもんな。能力を生かした進路か」
「敵にクラスメートがいるっていうのは複雑な気分だけどね。優秀なのが困り物」
「敵言うな。行政機関だろうが。
誉は？あいつの予知夢も職に生かせそうだろ」
「ポエミー誉？大して面白味もなく学生だったと思うけど？」
「いや、普通は学生でいいんだよ。お前とか傑物委員長らがおかしいんだ。
その他の連中も学生か？」
「そうかな。あ、でも楚々絽は鈴絽さんについてよくどっか行ってるらしくって、留年しまくってまだ高１とか言ってたな」
「何考えてんだあいつは・・・」

「後は・・・・・あ、これはあんまり吹聴して回ることじゃないんだけど、最近九鈴が男子にフられた」
「マジ？何だ青春してんなぁ」
「隆には言われたくないだろうな・・・。
それでさ、そのフり文句が酷くって、『傷だらけな女の子は無理』だと」
「あー、あいつ、他傷にばっか目が行きがちだけど、自分でも結構怪我するもんな」
「で、その男は現在入院中」
「香魚子が切れたのか？」
「いや、それを聞いた在りし日の級友ら１３人が照らし合わせもしてないのに殴りに行った結果」
「・・・お前等ホント素敵なクラスメイトだよな。
・・・・・・・・・・・ん？待った１３人？クラスは１５で葉月と俺、張本人の九鈴除いたら１２だろ」
「ああ、プラスαは楚々紹についてきた鈴紹さんだ。ちなみに入院の決め手も彼女な」
「何やってんだあの人は・・・。で、そいつどこに入院してんの？」
「何で？」
「俺はまだ殴ってないからな」
「隆も大概いいクラスメイトだよなー」
「あーでも、何だ。恋愛だとか、そういう話聞くと時間の経過を実感するよな。
恋愛って言えばあいつらは？絵梨と真幸」
「さぁ？何も聞いてないし、正直どうでもいい話だし」
「絵梨には冷たいなお前・・・」
「散々からかわれたもん。あいつに恋愛事は知らないね。
ま、何にせよ、だいたいの連中はそんな感じかな。
問題なのはとりあえず１人だけ」
間を挟むためにカップを取った僕に合わせて、隆も来ていたカッ

プに口をつけてそれを置くと、向こうから切り出してきた。
「電話じゃ美樹が、って話だったが・・・」
僕は頷いた。
「青森万可に拉致された」
「そりゃあ・・・・・何というか面倒事だよな」
「かなり低レベルのものとはいえ、形骸変容（メタモルフォーゼ）を発現。難しいと言われている原始素能（ホワイトノート）による第二等級能力の複製。全く、格好の被験体だよ。神戸なら何とかなったんだけど、さすがに青森となるとね」
「皆違う学園に散らばっちまったのが仇になった形か。東北やら向こうの研究所としては、質のいい素体がやってきたようなものだしな」
「本人曰く『みょみょみょ～んが利いたぜ』だって・・・」
「何だそれ？」
「さぁ？
とにかくだ。そっちを何とかしなきゃいけないわけなんだけど、救出後が問題でね」
「だから俺の出番か？アメリカに逃がすと」
「いや、米国を経由してウェールズに送ってやってくれ。本人の希望なんだ。ほとぼりが冷めるまで観光したいんだとさ」
「あいつ、へにゃっとしてる割に神経太いよな。
分かった。こっちの会社でしばらく預かってから送る」
珈琲を飲み干して、隆は席を立った。
「学園に行こうぜ。あれからどう変わったのか見てみたい」

＃

学園都市駅から徒歩１０ほどで、目的地であるまだ新しい煉瓦作りの建物は見えてくる。
記念公園。

正式名称はもう少し長ったらしいのだが、存在を知っている人にはそう呼ばれるのが常な、例の１２月・１月大災害の記念碑公園だ。公園の至る所によく分からない芸術家の作品が飾ってあり、中央には２つの火をあれらの日以来絶えず燃やし続けている装置と記念碑がある。

僕自身、そう何度も足を運んだ場所でもないのでそれぐらしか知らないのだが、敷地内の半分を占める森林と人工的に作られた川や池などのビオトープは地元民には人気らしい。

それらを一望できるのが、赤煉瓦で建てられた展望台で、長い階段を上った先には開けた場所が現れる。

見た目こそ小ぎれいな建物だが、煉瓦を敷いた地面の隙間から雑草が茂って、月日を感じさせた。

「こんなところ、出来てたんだな」

「災害から半年もかからなかったんじゃないかな。

ほら、体育祭で校舎が丸々なくなったりしてたろ？建築技術に関しても学園都市は変に発達してたから」

茶色い塗装のされた鉄製のフェンスに寄りかかり、２人してそこからの景色をしばらくぼうっと眺める。

記念樹なのか、名前のかかれた板のかかった桜の木がいくつも生えている。この季節、咲いてもおかしくはないはずだけれど、育っていないのか花はよく確認できない。

人工的に水を汲み上げて作り上げられた浅く広い池には子供の姿があった。虫取り網を持って、掬う動作を繰り返しては、時々ほとりで母親が持っている容器に捕まえた何かしらを入れていく。

草原が坂になっているのを利用して、段ボールで滑ろうとしている子らもいるが、あれはかなり勾配のきつい坂でないと成功しない。案の定、途中で止まってしまい、無理に進ませようとして転んでいた。

視線を遠くから近くへと移動させてみると、手を置いていたフェンスには傷をつけて文字が書かれている。

遠足などでやってきた学生の仕業だろう。
相合い傘の中に2つの名前。それをからかう文。記念のつもりなのか日付の入ったモノ。たくさんの言葉が所狭しと書き綴られていた。
「もう4年か・・・」
「あの頃中学1、2年生だった奴が今は大学受験を控えてる」
「僕らには関係ないけどな。
小学一年生は高学年、赤ん坊は4歳。
年を重ねる毎に大災害を知らない世代や、経験していない世代が増えてくる。
今でだって、あの時の面影はほとんど残ってない。災害を伝える記念碑があろうと、子供にとってここは遊び場という印象が強い」
「20年経てば、本当に当時の様子を知らない人間が大人になる。
いや、10年でも薄れていくんだろうな。
戦争のあった時代のことを俺らが知らないように、それはある意味幸せでもあるのかもしれないが・・・・・例え当時のことを伝えようとする人々がいたとしても、経験者が絶えてしまえば、記憶は記録になる。
実感として得られない情報は、人の心に残りにくい・・・・・」
「戦争も災害も、その辛さが繰り返されないことを望まれるが、実際平穏が続くほど危機感が薄れていく。
悲しみを知らずに一生を過ごすことは幸せだが、そうであればあるほど人は悲劇を忘れて過ちを繰り返す。
皮肉な話だ、4年前のことだって結局は約35年前の焼き増しなんだから。
こうして記念公園が建てられようと、いずれ人は忘却していく」
「人は忘れるから生きていけるって言うだろ。
まさにその通りだ。忘れるのも悪くはないさ。
子供だった時分のことを大人になって忘れても、彼たる人格を構成するのは過去の自分でしかない。忘れようと亡くしてしまうわけ

じゃねぇ。
　見ろよ、フェンスの落書き。公園の趣旨なんてまるで無視した内容だが、それでも人がここに足を運んでるんだ。
　ここが完全に子供の遊び場と化したとしても悪くはないさ」
「カッコつけてるとこ悪いけどさ、『リサｃｈａｎ愛してるよ　胸はないけど』って書いてあるぞ、ここ」
「・・・・・・。ま、そんなもんだって。
　でもこっちはまだそれっぽいぞ。『がんばれＹＯ！幸せになるのだ』だとよ」
「『私はなおきＫｕｎが大好きです　遠くても会いに行くもん』
・・・・・・恋愛系多いなぁ」
「まぁ、そりゃそうだろうが・・・おっ、お前みたいな奴がいるぞ」
「え？」
　視線を移動させて隆の指さした所を見ると、そこにはこう書かれていた。

　ホントは雪ちゃんが初恋なのに・・・
　嬉しくて嬉しくて涙が溢れたのに
　どうして今あなたは側にいてくれないの？
　あなたために生きたい
　もう一度あの頃に戻りたい
　今でもずっと愛してる

「・・・・・・・・・・・・・・美月さんの尻に敷かれて死にやがれ」
「いや亭主かん――――」
「隆には無理」
「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」
「はぁ・・・、ま、恋愛についてはおいおい何とかするとして、その前に僕はアクション映画の撮影で青森だ」
「そりゃ、おめでとう。後でスケジュールちゃんと教えろよ。

ちなみにその映画のタイトルは？」
「『破砕☆粉砕☆こっぱみじん☆虹色魔女装子くしろんと不思議な学園』なんてどう？」
「子供向けアニメ映画のタイトルだろ、それ」
「いいじゃん、それで。
適度にピンチでご都合主義で、悪役滅んでハッピーエンド。
あの頃とは違うんだ。いつまでもやられっぱなしでいるつもりはないね」
そう、あの頃とは違う。
――――あれから４年の月日が経った。
それは確かに長い月日ではないけれど、決して短い月日でもない。
何も知らなかったあの日々、僕は周囲の悪意を退ける力もなく、ただもがくだけが精一杯だった。
けれど、湿っぽい話はもうおしまい。
ここからはこちらの番。
「さぁて、反撃開始といきますか！」

第６３話ー　後日白昼。ーＲｅｃｏｖｅｒｙー（後書き）

嘘予告の答え合わせ。『今から嘘吐きます』が嘘。

どうしてこうなった（笑）

頭のネジが１０８本ほど抜けた釧ちゃん。

ある意味バッドエンドとも取れなくない気もしなくもない。

その暴走を止めるべく奮闘した隆の頑張りは全カットされてますが、国際テロリストから女装タレントへの進路修正は彼の努力の賜物。

隆頑張ったマジ頑張った。

他のクラスメートも４年の間にいろいろあったりなかったりするんですが、その辺の小話を書くかは不明です。

香魚子と九鈴の恋愛事情とか、さらりと出てきたけどややっこしいことになってそうですよねー。

←キャラ表です。未完成モノですが、現在と照らし合わせたい人がいれば。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｈｉｇａｎ－ｎｏ－ｈａｎａ．ｎｅｔ／ｎｏｖｅｌ／ｅｘｔｒａｓｅｎｓｏｒｙ－ｄａｙｓ／ｃｈａｒａ．ｈｔｍｌ

さて――――美樹に関する伏線もさっそく回収し、未熟だった登場人物も成長し（中学一年の割に精神年齢が高いという指摘も無事回避しｗ）、ついに、最終章に入ることができました。

第一章は『過去』、第二章は『現在』。そして、最終章は『未来』に向かっていく――――そんな話になればなぁ、と思っています。

第６４話ー　此方に。ーＯｖｅｒ　ｈｅｒｅー

朝焼けや夕焼けはサイコーである。特に雑音のない、見晴らしの良い場所で見る景色は格別。

故に学校の屋上というのは私の心のオアシスだ。

中学時代から放課後によくやってきては、柵に寄りかかり、下校する生徒や色合いを劇的に変化させていく空を眺めてきたのだ。

時折、そこにはづちゃんも加わって他愛もないことを話しながら過ごしたりもした。

その習慣は場所を変えても、高校生になっても変わっていない。

・・・・・ちなみに、大学受験を控えていても変わってないし、進入禁止の屋上であろうと変わってない。

張り紙と施錠を無視して屋上に上がる不届き者に対抗して、チェーンやどでかい南京錠でロックされるようになってもだ。

断固として私はやめない。何が何でもやり遂げてみせる。

それが私、布衣菜誉のささやかな拘りである。

そういうわけで今日も今日とて、ピッキング道具とペンチを使って中に侵入した私は今、勝利を噛みしめながらブルーシートを敷いた上に寝転がっていた。

水筒のミルクコーヒーに口を付けながら、明日テストのある英単語帳を脇に、今開いているのは大分くたびれた大学ノートだ。見てくれは悪いけれど、これでもそれなりの価値がある情報が詰まっていると自負してる。

その横に新聞を5社分ほど積んで、そこにタブレットケータイを立てかけつつ、テレビ機能でニュースチャンネルを受信中。流れる内容は私に何の関わりもないだろう殺人や出来事だが、”ニュース”であることそのものに意味がある。

『本日、種子島基地から打ち上げられた人工衛星「ロゴス」が無事大気圏を突破し軌道に乗りました。ロゴスは――――』

「これは・・・あったこれだ」
大学ノートのページに同じ単語の並ぶ項目を見つけてオレンジ色で丸をつける。
『中国がＩＳＰＯに提出したＳＰＳ薬供給枠の拡大要求は棄却されました。兼ねてから超能力開発に不可欠なＳＰＳ薬の提供量が少ないことに不満のあった中国政府はこの棄却に対して遺憾の意を――』
これは見当たらない。駄目だったか。
ノートの端に青色で×印とニュースの内容を加える。
そう、このノートは私が浅夢予知（くもりゆめ）で見た未来予知について書き留めている物なのだ。
的中率、重要な事象を逃していないか、どういった未来が見やすく、あるいは見にくいのか。
そういった事柄を分析するのに使っている。
これも一応は大学受験の一環なのだけど、それ以上に扱いにくい自分の能力を生かしてやりたいという気持ちが強くあった。
せっかくの能力だし、結構便利な能力だし。
どこぞの万能ちゃんやどこぞの女装子ちゃんなど、周りにおかしな能力者がいて実感が沸きにくいが、これは普通に考えればかなり有効な能力なはずなのだ。
副委員長だった亜子の残留思念読取ぐらいにはポピュラーで汎用性があると思う。
いや、この際はっきり言おう。
私は受験勉強をしたくないであります。
あーどこかの能力研究所付属の大学か会社が引き抜いてくれないかなぁ！
まぁ、戯れ言もいいとこだけど。
・・・閑話休題。というか現実逃避終了。
さーて、現実を見ますか。明日の英単テストも散々なんだろうっていう現実も、ついでにな。

一通りニュースをチェックし終えて、今度は新聞の記事を見出しだけ確認していると、ケータイが鳴った。
午後5時29分にセットしておいたアラームだ。
ということは――――と、施錠を解除した屋上の扉へと視線を向けたのと同時に、そのドアノブが回った。
おいでなすった。
この予知も的中、と。
ノートに丸をつけてから私は起き上がり、進入禁止のこの場所にやってきたお客を手招きした。
「お久、楚々絽」
「ん、そうかな。そういや全然学校きてなかったっけ？」
「・・・ちょっとは気にした方がいいよ？後何年留年する気なの？」
用意していた紙コップにコーヒーを注いで渡してやると、男子用制服を着こなした残念美少女は礼を言って受け取り、柵に寄りかかった。
全く・・・。ロクに学校にも来ず留年し、校則違反ではないとはいえ、男子制服に身を包むという奇行に走っているというのにこの娘、2歳年上という僅かながら大人の雰囲気を出しているからか、学校にくる度に男子同級生の好意を集めているらしい。
そのモテ度を私にいくらか分けてほしい。マジで。
「いやぁ、結構最近忙しくってね。
姉様についてってるのもあるけど、私自身色々やってるから。
視覚傍受を発展させて、多重視角複合（マルチポイント）を完成させたのはいいんだけど、今はカメラなんかの映像を傍受しようとして試行錯誤中」
「ふーん、いいなぁそうやって自分で開発の方向性決められて。
私の浅夢予知（くもりゆめ）なんて操作性ないから観察するだけでやっとって感じなのに」
「でもその代わり、予知夢系の施設はいたせりつくせりだって聞くけど？
高級羽布団から低反発ベッドまで、何でも借りれるって」

「まーそうだけどさー。それだって能力開発の試行錯誤なのよ？どの布団が寝夢見がいいかとか、寝やすいとか。予知的中率上げるために真剣に考察してるってのに怠け者扱いされるんだから嫌になっちゃう」

「そんなものかねぇ。

私の場合はあんまり学園の施設使えないのが困りものなのだけどね。能力の情報を極力隠しておきたいから。

はぁ・・・、それはそうとまたしばらく学校にこれなくなるんで、何かあったら連絡よろしく」

彼女の飲み干したコップを受け取って、私は溜め息混じりの台詞を口にする。

「あーあ、今年もまた留年かな、これは。言っとくけど、私は来年いないんだからね？

それよりか、今更だし留年はもういいとして・・・・・・服装は直した方がいいと思うなぁ」

現に、今観察しても彼女の制服は酷いもので、シャツはくたびれ、ズボンの足裾が破れ、ネクタイに関しては捻れて紐のようになってしまっている。

「この期に女の子にイメチェンしてみたら？」

「えー？ほら、ちょうど女装してる友がいることだし、服装入れ替えたってことで・・・」

「あっちもあっちでおかしいのよ・・・。

私は両方元に戻った方がいいと思う。

楚々絽もせっかくの一生に一度の１７歳を謳歌すべきよ」

「ご忠告どうも。それじゃあ、高校１年生の私は存分に青春を謳歌させてもらうよ。

誉も１７歳の青春を存分に受験勉強に捧げてくれ」

「も・う・か・え・れ！」

睨む私を見て彼女はケラケラ笑い始めた。一通り声に出して笑った後、「そうだ」とポケットから小さな紙袋を取り出して投げて寄

越してきた。
「お土産」
さっそく開けてみると、中身は小さな鐘の付いたストラップだった。本来は手首を通す、今では形骸化されて単なる飾りになっていて、細長い布地に『Ｌｉｂｅｒｔｙ　Ｂｅｌｌ』と書かれている。
「アメリカ行ってたの？」
「あぁ、ペンシルバニア州にな。ソフィＰ・Ｓ記念研究所があるだろ、あそこ」
「自由の鐘かぁ・・・・・私の自由はどこなんだろうねぇ」
「世間体とか保身とか放り出して後先考えず行動しようとさえできれば、人は何時だって自由になれるもんだよ？」
「それはヤダ」
「わがままな奴め。さて・・・そろそろ行くよ」
「そっか。それじゃあこれ」
お土産のストラップを仕舞い、入れ替わりにハードカバーの本を取り出す。
タイトルは「夢見る人工ニューラルネットワーク」。３０年前に書かれたもので、蔵書している図書館がなかなか見つからなかった一品だ。
「前に借りてた本、結構面白かったわ。色々参考文献もメモれたし図書館で探してみる」
「おーう。じゃあな」
受け取った本で掲げて去っていく彼女の背中を一瞥、扉の閉まる音を聞いてから、私は予知のチェックを再開した。

／

返却された本を脇に挟んだ楚々絽は、学校の敷地を出、神戸とはまた違った学園を後にした。
神戸とはまた違った学園に出入りするようになって、神戸はバラ

ンスのよい場所だったのだと彼女は思う。
学校としての機能と研究所としての機能が特別指定学園都市には求められるが、他県の学園都市では必ずしもその2つ両方がバランスを取って存在しているかと言えば、そうでもない。
北海道は学業重視だし、研究所がほとんどを占める所もある。沖縄の要塞都市はまさにその典型と言えるだろう。
学園都市ごとに差別化が計られているというのが、彼女の考えだった。
地下鉄に乗り、人の集まるターミナル駅に着いた彼女は、売店でチューイングガムを購入。その場で包装を破りながら溜め息を吐いた。
（徊視蜘蛛は振り切ったが・・・）
1枚口に放り込んで、目を閉じれば浮かんでくるのは2つの別視点での視界だ。その両方共が自分の姿を捉えている。
（尾行は2人。男と女。
まず男だな。体格差は視線の高さから１０ｃｍほど、股下はちょうど膝蹴りの位置。
股に一発、身を屈めたところにもう一発。肋骨を数本折ってダウン。
女の方は化粧室で・・・がベストだがそうも言っていられないか。
こっちは平和的に線路につき落として、上がってくる前に巻いてしまおう）
こういう時、視覚を傍受できる能力というのは便利だと彼女は実感する。相手が自分の姿を見失っているのかどうか、相手の視点で確認できるのだから確実に尾行を巻ける。
しかしまあ、巻けるといって、学園に入る度にあとをつけられるのは勘弁願いたいものだとも思う。
おかげで自然と足が遠のき数度目の高校1年生の春を迎えてしまった。
もういっそのこと中退した方がいいかもしれないとも思うが、少

なくても誉がいる内はメリットもあるからそうもいかない。
（まー何にせよ、今は後ろのうっとおしい連中を何とかしようか、ね）
人混みの中、相手が見失ったのを確認して足を止めた彼女は、男が後ろに接近したタイミングで振り向いた。
（まずは――――股っ！）

股蹴りから数十時間後。
アメリカから日本へ渡った後、すぐさま別行動を取った楚々絽とその姉鈴絽は、ここ数年の間に自分達を完全に敵と見なしたらしい学園都市暗部の手をのらりくらりとかわし、再会していた。
場所は群馬からも離れたとある県の、寂れた・・・というより本来住民すらいないアパートの一室で、雨天使用不可というお世辞にも心地よい空間とは言えないが、まぁ隠れ家とはそんなものだと鈴路は思う。
幼い時分に自称正義の味方と行動を共にした記憶を探っても、ヒーローのアジトというのはみすぼらしいものだった。
まぁ、ここを選んだのは、その方が雰囲気が出るという理由もあったのだが、さすがに屋根が破れているのはなんとかするべきかもしれない。
買い物が用事だった彼女は、自らがやたらと買い込んだ戦利品の包装箱を開けながら、少しだけ雨の心配をした。
傍らで楚々絽が誉に会ってきた成果を話しながら、買ってきたコンビニ弁当をつついている。
誉の様子から見て学園で目立った動きはないことや、一応まだ自分が学園都市の学校に在籍できている程度には脅威と見られていないこと、
「で、男の方は沈めて、女の方は落として・・・念のためローカル線使って遠回りしてきたわけ」

そして毎度の尾行のこと。
「いつもながら懲りないよなぁ。いや、学習能力がないのか？」
「んー、発信機仕掛けてたし前よりはレベルアップしてるんじゃないかな。
まぁ、ガムでくるんでくっつけて、明後日の方向に向かわせたわけだけど」
「ＥＳＰに電子機器は相性悪いってのによくやるよな。
しっかし、発信機ね。やっぱり狙いは俺かぁ」
「だろうね。彼らに取って私は大した驚異じゃないはずだし。
・・・・・それで？姉様の方はどうだったの？
見る限り色々手に入れてきたみたいだけど、自作パソコンでも作る気なのかい？」
鈴絽が床に広げていく、電子機器の部品であるのは明らかだが、何の用途に使うのかはイマイチ分からない品々を見てそう訊いた楚々絽に、彼女は「似たようなもん」と答えた。
「『機械なんて殴れば止まる』とか言ってた姉様が？」
「破壊活動だけじゃ限界があるからな。
次の目的はクラッキングだ。万可のメインシステムにあると思うんだが、欲しい情報がある」
「情報？」
「今日衛生打ち上がったろ。アレに学園が関わってる。
葉月が消えて以来、学園は監視システムの充溢に血眼になってた。
ロゴスにその完成品が載ってるとしたら無視できない」
「なるほど、どこまでの性能か知らないとオチオチ破壊活動もできないと。
でも、それならプロに頼めばいいだろうに」
「何事も自分でやらなきゃ面白くないだろ。
それに万可は内部に入らないとクラッキングは難しいんだ」
「何だ、結局殴り合いじゃないか」
そう指摘されて鈴絽は肩をすくめた。

「問題は俺ら2人じゃキツいってことだが――――」
「いや、それなら当てがある。万可ならどこの学園都市でもいいんだろう？」
割り箸で折りたたみテーブルの上に乗った分厚いハードカバー本を指す楚々絽。
それを取った鈴絽はパラパラとページをめくり、半分ほどいったところで手を止めた。
「・・・・・っ！さっすが誉ちゃん！愛してる！」
「これで人数の問題は解決。ついでに決行日も決まり・・・と」
「だな。けどせっかくだ、もう1人ぐらい場を賑わせてくれる奴が欲しいよな」
にぃっといたずらを思いついた悪餓鬼の笑みを作り、彼女は栞代わりに本に挟んであった紙を取り出した。

／

長く青や藍で染められた空が短期間に色を変えていく様は、いつ見ても私の心を虜にする。
中学生の頃から相も変わらず、早朝と夕方、雲が覆っていない限り一日に2回も繰り返す頻出イベントを眺めるという習慣を私は続けている。
わざわざ屋上にあがるのは、人の多い場所では物思いに耽ることができないからだけれど、逆に1人きりというのも少々寂しくもあるのは・・・・・きっと、中学での1年間ははづちゃんとよく一緒だったからだろう。
答えを求めない、取り留めのないような戯言を言い合いながら、私達は赤く青く染まっていく空を見送っていた。
「”自然”の反対？”人工”でしょ」
それに人工物は結局”人”という自然物の産み出したモノでしかないと彼女は言った。

生まれたばかりの地球には酸素がなかったという。その時代、酸化されることが生命にとって脅威だった。そんな中、酸素発生型の光合成を行う生物が現れ、爆発的に増えた結果、地球に酸素が満ちたのだと言われている。このことをよくよく考えてみれば、酸素が大気や海中に満ちるということは、当時では環境汚染に等しかったはずだ。

けれど今、こうして私たちはその大変化した環境を基盤に生きている。人類が汚染した環境に適応した生態系は必ず出てくるだろう。となれば、”人工物”という言葉はやはり”自然”の対義語にはなり得ないのかもしれない。

しかしながら、あれから時を経て、私の考えは少し変わってきている。

人を自然と切り分ける1つの手がかりらしきモノを私は発見したかもしれないからだ。

とは大仰に言っても、これは予知能力者なら誰もが感じていることだけれど、人為的介入がない、あるいは少ない自然的現象は予知しやすいのだ。

予知には基本的に演算予知と予知夢といった2つの分類がある。

1つ目は通常よりもこの世界からの情報を多く読み取る一観察眼「ＥＳＰ」に起因し、その情報を演算処理することで生まれる予知。

2つ目は休眠中の脳作用による予知。

1つ目は任意的に予知する対象を選べるが、高精度を求めると演算の結果が出る前に予知したい未来の方がやってきてしまうというデメリットがあり、殊、人の意識が深く関わってくる未来に関しては精度が落ちる。

2つ目は対象も能力の発動ですらも融通が利かない代わりに、テロ事件といった人為的活動に関しても予知できることがある。

この2つの差がどこからくるのかはイマイチ分かっていないものの、結局のところ予知は人の関わってくる現象に弱い。

自然現象が物理法則に従って進行していくことを考えれば、その

演算が可能なのは当然と言える。
けれど、それを言ったら心理学というモノがあるのだから、人の行動もかなり正確に予測できないとおかしい。
いや、実際私が織神葉月のバイオハザードを予知できたのも、美樹の能力複製と同様に彼女との接触が多かったからだろう。
よく知っている人間の未来に関しては予知できるというのは、私のような予知夢系だけではなく演算予知系でも確認されている。
人間の心理・行動パターンをインプットすることで精度が上がることは実証済み。だが、その向上分を含めても今日予知能力は実用的ではないという不名誉な烙印を押されている。
・・・・・要は、他に人為的行動と自然現象を隔てるファクターが存在しているはずなのだ。
その要因が何かは分からない。
でも、もしその真実に至る者があるとすれば、それは私ではないんだろう。そんな予感がするのだ。
『命の価値は思い入れから生まれる』と言ったはづちゃんはあの頃、ぬいぐるみを抱き続ける少女のような童心で命を語り、生物と無生物の境界線は曖昧だと口にした。
生命という大きな枠組みですらそんなものだ。人とそれ以外を隔てる境界なんて、さらにあやふやに違いない。
将来の夢や目標や願望を訪ねた時、彼女は自分はもう死んでいるような者だと暗喩した。
生きているようで前進できるだけの気力もなく、今死んでも未練はないと言った彼女。
命を絶つほどの理由がないから生きているだけ。
生き続けているから、ただ巻き続けているだけ。
列車の終点で1人ぽつんと待っている、そんな連想。
あの日、私は彼女を哀しい人だと思った
だから、活きている彼女をみたいと思った。
あれから月日は過ぎ、多くの出来事が彼女の周りを通り過ぎてい

き――――現在。
彼女の心の在り様も変わっていることだろう。
その心で、あの時の問いに対する回答をもう一度訊いてみたい。
答えを得るとすれば彼女であろう、人と世界の間にある真実もを含めて、今はどう思っているのか訊いてみたいと思うのだ。
どうせ私には力不足。身の程は知っている。『布衣』とはまさに庶民の意。名前の通り私は普通の人間だ。
これから起こるだろう出来事を予感しながらも、できることは多くない。
けれどまぁ、それならそれで私なりの方法でやらせてもらおうじゃないの。
すでに打てる手は打ったことだし、１００％の精度とは言えないまでも、予知能力者としての誇りを以って宣言しよう。
――――私の出番はもう終わり。
だけどせめて、その代わりに引き金は私が引かせてもらう。

開かれたノート、書かれた予知。
オレンジ青の夕焼けの如く色合いをした文字列の中に、楚々絽に渡した紙と同じ未来が書かれている。

『４／２２　１７：０４　朽網釧　青森万可襲撃』

第６４話－　此方に。－Ｏｖｅｒ　ｈｅｒｅ－（後書き）

プロローグ２。
物語が動き出すのは次話からになります、すみません。

第６５話－　青森学園。－Ｈｏｔ　Ｗａｒ－（前書き）

釧、お前もか。

第６５話－　青森学園。－Ｈｏｔ　Ｗａｒ－

リンゴの生産高日本一、面積も全国８位と広い土地を持つ青森は日本トップクラスの農業産地として国民に知られている。

他にもニンニクの生産高も日本一だし、菜の花の作付け面積も日本一で、菜の花畑の延々と広がる景色は印象深い。

むつ市にはかの恐山を、南西部には世界遺産の白神山地をと自然に恵まれている一方、核燃料リサイクル施設や国内最大級の風力発電施設といったエネルギー問題に関わった建物をも内包したこの県は、本州最北端であると同時に多くの分野において日本という国を支えている。

その施設の中に特別学園都市も含まれているのだが、リンゴ畑に菜の花畑、田畑に加え多くの山々の広がるこの地で纏まった面積を取るのは難しく、解決策として青森学園都市はそのほとんどを地下に埋め込まれることとなった経緯を持つ。

主要研究所が地下へ施設を拡張していき、学習施設もまたそれに倣い、それぞれを繋ぐ地下通路が発展していった結果、県地の下に巨大な地下街が広がり、やがて１つの都市へ。

それが地下学園都市と呼ばれる青森学園都市の特色であり、厄介なところでもある。

地下という閉鎖空間は地上（そと）に中の出来事を漏らしにくく、セキュリティーも組みやすい断然守り側に有利なフィールドになっている。

入り組んでいる上、方向を知る目印は少ない地下は迷いやすい。

それだけでも１つの防壁として機能するというのに、進路を塞ぐだけで侵入も防げるし逃げ道も塞げるのだ。侵攻者にとってこれほど不利な状況もない。

非常に隠密性が高い分、各学園都市に支部を持っているような機関においても、重要な資料などが集まる傾向にあるのだが、侵攻にも後退にも高威力の能力が要求されるこの都市は、破壊活動を行う

には難易度も高い。
そんな難攻不落の通称『蟻の巣』に挑もうという朽網釧は、現在標的である万可統一機構の地下施設とは離れた宿泊施設にいた。
地下でありながら外の景色を映し出す窓、新鮮な空気を送り出す空調音が静かに鳴る室内・・・・・・。
これらはこの学園都市のホテルとしてはベーシックなモノだが、間取りは限られた地下空間にしては広く取られている。
その点は満足だったのだが、2人部屋としても十分なスペースが取られているにも関わらず、彼は同行人のせいで狭苦しさを感じていた。
入った瞬間ベッドにダイブし、荷解きすればバッグから出てくるのは必要なのかも怪しい機材で、挙げ句どたばたと走り回る。
自分よりもかなり年上のはずなのだが・・・と思いはするも、それなりの期間この老人と関わってきて、考えるだけ無駄ということは理解していた。
そんな落ち着きのない老人は放っておいて、彼も彼で荷解きがてら、この学園都市の地図を何枚もベッドに広げていく。
都市全体を移したモノから、特定の経路だけを抜き出したモノまで。厚さの薄い紙質は重ねて合わせられるようにとの工夫だ。
地形を頭に入れる作業はここにくるまでの飛行機の中でもやったのだが、念には念を入れてもう1度確認しておく。
手始めに現在地を探し出して、それから万可の位置を目で追ってみて、――――思わず溜め息が出た。
「一応、万可機構間での交友学習って名目できてるのに、ゲストである僕らの宿泊場所が当の万可から離れてるって・・・。
これ完全に気取られてるよなぁ」
「そりゃあそうだろう。ほとんど強引に細川美樹を囲ったタイミングで、かつての級友が建前でしかない『組織間連携』を盾にやってくるというんだ。
奪取目的以外に何がある」

期待していなかった同行人の返しに、ごもっともと彼は肩をすくめた。
広げた地図をしまい、次はボロボロになったメモ帳を取り出すと、これまた数ページめくって内容を確認する。
中身は完璧に頭にインプットされているが、こうして再確認することで気分を落ち着けるのが臨戦前の儀式になっていた。
しばらくして気がつけば、あれほどはしゃいでいた老人が背後からメモの中を覗き見ている。
「ふむ、それが例のＰＫ波状図か。それぞれの座標軸を記録しているわけだ。
その粗末なメモ帳だけで一千万は下るまい」
「・・・価値分かってるなら、人の努力の結晶を盗み見ないでくれないかな。あんた研究者だろ」
「私は別に自己顕示欲があって研究をしているわけではない。
私にあるのは好奇心だ。それを満たすためなら土下座でも何でもするぞ」
そう言って、実際土足であるホテルの床で土下座をしてみせる彼を、釧は無視してメモ帳をポケットにしまった。
「けど、いいのかねぇ。一応、万可所属であるところの僕が別支部といえ万可に攻撃仕掛けても」
「構わんさ。元より万可同士強い繋がりがあるわけじゃない。
支部ということになっているが、目的を同じくしているだけで、そこへの至る手段は多少異なっている。
上層組織としてはどれかの万可が目的を成せばそれでいいと考えているんだろうな。
収斂進化（しゅうれん）みたいなものだ。
別の洞窟内にいる魚共は示し合わせなくてもそれぞれ眼を退化させるように、異なった場所であっても進化の方向性を同じくする。
むしろ交流の少ない方が、至る手段が多様になるメリットがある。
だいたい強行手段というなら、前に琉球万可に８月を拉致されか

けたこともあったが、それも別に咎められなかったようだしな」
「それ、初耳だぞ加藤」
「そうだっったかね？
まぁ、あの時は向こうさんがこっぴどくやられたわけだがね」
「で、形骸変容（メタモルフォーゼ）を手に入れようとして今度は青森が被害を被るわけだ？
神戸もあーなったってのに、生命の樹の実を手にしようなんて懲りないよな・・・」
「はんっ、しかしそれが人間だろう？」
自慢げに胸を張って原罪まみれ（こうきしんぐるい）の老人に、釧は再度肩をすくめた。
「それじゃあ僕は、その『人間』代表としてちょっと頑張ってきますか」

＃

幾重にも層を重ねる地下学園都市は、地下街という様相こそ呈してはいるものの、実際にはそんな瀟洒な造りをしてはいない。
『蟻の巣』の名の通り、天然の穴蔵を思わせる地下世界は、ビルの階層のように各フロアの広さや形が同じわけでも、間取りが似通っているわけでもないからだ。
フロアの形や面積が上下ではまるで違い、同じ”地下４階”であったとしても、降りる階段を間違えれば隔絶した別個の階層に行き着くことすらある。
地元の学生でも地下内の地図を常に持ち歩くほどに入り組み、迷いやすい。
そして、なお悪いことにこの特徴は一施設内においても同様なのだ。
地上においては、例えば学校の廊下と登校路の違いなどは目に見えて実感できるものだが、建物として外観が露出することのない地下施設では、施設内外の境界は門を潜るかどうかほどの差異でしか

ない。
地下街の道路、施設内の廊下と言葉で違いを表せど、結局壁に囲まれた地下道だ。
それは施設が一つの閉鎖系であると同時に、それを含んだ地下街そのものが巨大な閉鎖構造を取っているに等しい。
つまり脱出という、最も緊迫する状況がその分だけ長く続くということだ。
地下に潜るというのはそれだけで圧迫感を感じるものではあるが、いち早く逃げなければならない身で、逃亡困難な地下迷路の奥深くに潜らなくてはならないというのは、想像ですら恐怖が重くのしかかる。
実際、精神的なことを差し引いても、侵入を試みるには分が悪すぎる。
が、かといって、他の戦略を採ることが難しいのも事実だった。
地下なのだから空調パイプを破壊すれば兵糧責めにできなくもないのだが、空気の貯蔵もあるだろうし、外からの増援が駆けつけた時点でタイムオーバー。挟み撃ちにされるだけだし、それ以前に釧の場合は目的が美樹（いきもの）なので使えない。
向こうを炙り出せればいいのだろうが、基本スタンスが『貴重資材の保存と保護』である青森万可は、自らの役目と得手を自覚している。敵の挑発に乗ってはくれまい。
侵入者（チャレンジャー）である以上、攻め入るしかない、それしか相手に採らせない、防御に回られると青森学園はまさに難攻不落の要塞だ。
あるいは敵と認定した瞬間に口を閉じる、食虫植物（ハエトリソウ）。
そんな虎の口――――万可の門前に釧は立っていた。
予行演習がてら、宿からここまでの嫌みなほど長い道のりを、なんとか地図なしでやってくることができた彼は、
「いやぁ、本当迷うかと思いましたよ」
そう門番に話しかけながらＩＤを見せた。
「ははっ、私なんかも時々迷いますよ。むしろ一発でここでこれた

のは幸運だ」

笑いながら思ってもいない言葉を返す彼に、釧も同じくらい胡散臭い笑顔で応えた。

「えぇ、随分ここから離れた宿舎だったんで不安立ったんですけど、道すがら神戸とは違う雰囲気が楽しめてよかった」

「ははっ、それはよかった。

・・・もう少し待ってくださいね。中から迎えがくるはずですから。

施設の中はさらに複雑で、案内役なしでは回れないんです」

「てめぇらよくも嫌がらせしてくれやがったな」という応酬に、「馬鹿なことを考えるなよ?」という暗なる牽制。

表面上はにこやかに談話する彼らだったが、釧の目が門番というだけにはやたらとごつい自動小銃にいき、その視線に気づいた彼と目が合ったことで、2人の間に嫌な緊迫感が流れ始めた。

「あははっ」

「ははっ・・・」

再び笑顔を交わした、その面皮の下で釧は考える。

(まぁ、予想していたことだけど、全くもって平和的交渉の余地がなさそうだ)

いくら学園の制式部隊(アクティブ・オーダー)が銃の携行を許可されているとしても、施設の護衛職でしかない彼が銃をぶら下げていい理由にはならない。

万可が悪名高き組織であろうと、わざわざそんなことで諍いを起こしたがるわけもなく、いつもなら彼だってそんなものを携帯してはいないはずだ。

それが、今日に限ってこの装備ということは、明らかに彼を警戒している。

(いや・・・、僕自身も狙いか?)

わざわざ宿を遠くに取り警告し、一端の門番に武装させてまで警戒しておきながら、それでもこうして自分を招き入れようとはしている。

一見矛盾しているようだが、これらは向こう安全策なのだろう。
警告を受けて彼が躊躇してくれればそれでいい。警戒しておいて彼が行動に移さなければそれでもいい。
彼が強引な手段に出たところで警戒しておけば素早く対応できるのだし、防御においては確固たる自信がある。
なにより、釧自身が今や神戸万可に属する、織神葉月の作った身体という意味合いでも貴重なサンプルである以上、捕縛できればそれに越したことはない・・・。
自ら率先して動くことなく、甘い蜜で獲物を自分の体内に誘う。ハエトリソウというよりウツボカズラだな、とそんなことを釧は思った。
だが、それならば、わざわざ相手の思惑通りに行動してやる必要はない。
もちろんお互いの内心を隠しつつ、施設の中に入ってからの方が、侵攻の手間はいくらか省けるのだろうが、相手に自分を囲う暇を与えてしまうのも事実だ。
向こうの思惑が分かった以上、こちらも最初から攻め入った方がいい。
（さっさとこの門番を潰して入ろうか？顔面に一発・・・いや念力で・・・）
女装してタレントデビューという将来設計図に全く描いてもみなかったイベントを通して、無駄にうまくなった微笑み。その裏で、結構ゲスいことを考えていた彼は、不意に開いたシャッター型の分厚い門の先に、案内というにはちょっと大勢で、ちょっと豪勢なお出迎え・・・・・もとい、自分を拉致る心づもりを隠しもしない武装集団が出てきたことで、躊躇なく今まで談笑していた門番の顔を殴りつけた。
「ぶふっ！」
壁に埋め込まれた、チケット売場などでよく見かけるような門番所で、ガラス越しに話していた相手を、その防弾ガラスごと殴ると

いうでたらめな暴挙に出た彼。
それに反応した部隊の連中が、銃を構え制止の命令もなく発砲してくるのを、門番所から引っこ抜いた男の身体で防御した彼は、とりあえず一端やってきた道の曲がり角まで後退した。
盾して利用した中年男を乱暴に放り出すと、うめき声が聞こえた。
生きてはいるらしい。
その理由は彼が防弾チョッキ、それも葉月の髪を手本に作られた繊維を利用したチョッキを身につけていたからというのともう1つ、中から出てきた部隊の使っている弾があくまで捕縛を目的にしたものだからだろう。
どの道、彼にしてみれば食らいたいものではない。
同じく捕縛用の麻酔弾の入っている名も知らない自動小銃を手にし、彼は角の陰から飛び出した。
万可の壁に向かって照準を合わせずに銃を乱射して、威嚇してみたが連中はまるで怯みはしない。
まあ、弾が非致死性というのもあるし、・・・連中が犯罪者を寄せ集めた使い捨ての泥底(ヌタ)部隊ではないというのもあるようだ。
神戸のように一応は開けた土地柄であり、通常の学園の体を取っている場所と違って、ここは物事が一般人に知られにくい性質を持っている。
守りが主になるここの学園の施設では質のいい部隊を飼っていることも多い・・・・とは加藤が釘に話していた内容だ。
適当に打ち込んで、打ち返されて。彼はそれらの銃弾を念力で止めて、一瞬の逡巡後せっかく手に入れた銃を捨てた。
代わりに、ファンシーなポーチから自分で持ってきた拳銃を取り出す。
自動小銃の方を捨てたのは、彼が撃った銃弾が非殺傷弾と勘違いされるのを防ぐためである。
見える位置から撃つのであれば、銃の種類で見分けはつくのだが、遮蔽物越しで銃撃をする際にはその限りではない。

ＰＫ能力者という立場上、銃に威嚇以上を求めていない彼にとって、弾数よりも威嚇にならない可能性の方がデメリットは大きかった。

そもそも、彼の目的は一応美樹の奪還ということになっているし、彼自身の私情を挟んでも、連中のような能力者でもない人間を相手にしてもうま味がない。

接近しつつ拳銃を彼らの顔の高さに合わせ、再度銃弾を打ち込むが、やはり怯む様子は見せなかった。

狙いはわざと外しているのだから当たらないのは分かっているのだが、向こうにそれが気取られているのが問題だ。

適当に蹴散らすつもりだったのだが、銃は役に立たないらしい。

「まぁそれならそれで・・・」

銃撃戦の最中、遮蔽物すらない道の真ん中で釧は悠然と拳銃をポーチにしまった。

それから、『数撃ちゃ当たる』ではなく『能力を使わせ続けて集中力が切れるのを待つ』ために弾雨を降らし続ける、前座でしかない連中に向けて不敵な笑みを漏らし、

「やり方ってモノがあるんだけどね？」

その台詞から一拍置いて、地下空間に響き渡ったのは、すさまじい打撃音と振動だった。

＃

外敵を寄せ付けない要塞であり、取り込んだモノを逃がさない監獄であり・・・・・当然それに見合った強固な造りをしているはずの万可地下施設を揺さぶる振動に、こういった有事に際して使われるオペレーションルームで『神戸万可の異端児捕縛作戦』の様子をモニターしていた者達は思わず天井を見上げた。

施設の正面出入り口――――万可施設のフロア１は地下５階、彼らがいるフロア１３は地下１７階に相当する地下深くだが、かすか

に振動が感じられるほどの何かが起きたらしい。
　一瞬にしてカメラ映像を映し出していたモニターを黒く潰した現象に、青森万可室長である車良二（くるまりょうじ）は眉をひそめ、状況を確認すべく指示を出した。
「状況確認、部隊の生存者の有無、何があったかのか報告。まだ使える近辺のカメラをかき集めて接続、標的の再補足」
「了解・・・・・・・・・・・・・・・B部隊『巳』からの無線です。『標的の攻撃は念力によるもの。死者なし、エントランスフロア半壊』だそうです」
「フロア1（エントランス）、生きているシャッターゲート」
「・・・・・・奥から2つです。エレベーターのある区画はすでに隔離、フロア4から下も部隊搬入ルートを除いた全てのゲートを締めてます」
　良二はそれを聞いて考える。
　エレベーター自体も電源は切ってあるが、隔離壁（シャッター）を突破され破壊されると、フロア4まで繋がっている。
　施設の性質上、最下部まで直通しているようなエレベーターは存在せず、幾つものエレベーターやエスカレーターがバラバラに配置されている間取りになっているため、すぐに脅威にはならないが、どうやら標的は壁自体を砕けるほど協力な念力能力（サイコキネシス）を保持している。
　時間稼ぎにしかならないだろうが、ゲートはできるだけ閉めておきたい。
　ならば、地下4階にまで侵入される前に部隊を上げてしまって、搬入ルートも締め切った方がいい。
　一応、閉鎖された場所だからこその切り札もあるのだが、セキュリティーレベル1のエリアであるフロア4までの比較的薄い壁（ゲート）では失敗することは分かりきっている。これはさらに侵入された場合の保険としておいておくとして、では守りでなくこちらからの攻撃はどうすべきか。
　現状、昏倒する程度には強力麻酔弾を装備させているが、弾にだ

って限りはある。
外敵を拒絶することが専門のこの地下施設は、裏を返せば物資の供給が苦手である。
兵糧責め。釧の破棄したその手段は、確かに実現できれば効果的ではあるのだ。
麻酔はやはり効かない。まずは弱らせなければ。
とすれば非殺傷弾から殺傷弾にチェンジさせるのも手だが、それだって念力の前では大した効果は期待できない。
相手の体力を尽きるのを待つ前に、フロア５以下のセキュリティーレベルの高い層にまで侵入され兼ねない現状下では、時間稼ぎではなく効果のある攻撃が要求される。
仕方ない。彼は最終的にそう判断した。
「残りのＡからＦ部隊までをＫ装備でフロア４、超兵を４部隊フロア６へ・・・」
しかし、
「室長！」
「・・・・・・どうした」
その指令は言い切る前に遮られる。
「標的を捕捉しました、Ｍ－３モニターに映像出ます！
場所はフロア３、エレベーターの方へは向かわず・・・・・・・・・・・念力で床を掘削している模様！」
「・・・・・・！？」
攻めと守り、そのスタンスの違いは大きい。
どうしても備えに意識をやりがちの守りに対し、体力切れというタイムリミットを持つ攻めの釧は、デメリットもあることを承知しながらも力を温存せずに、ゴリ押しでのスピード決着を狙っているらしい。
備える暇を与えず一気に片を付ける、というのは心理的に攻める側だからこそのスタンスだ。
モニター映像の中、フロア３の床をもぶち抜いた強引すぎる侵入

者が、さらに1フロア下への侵攻を果していた。

＃

接敵より6分、戦闘開始より3分でセキュリティーレベル1を無傷でほぼ突破。

予測より早い侵攻速度でもって、地下万可自慢の堅い殻を真っ向から食い破る侵入者に、彼らはここにきて余裕をなくした。

いくらアレが、千代神喪失以来神戸万可が手塩にかけてきたスペア素体だとしても、結局は念力能力者であると彼らは考えていた。

葉月が作った身体という意味では非常に価値のある代物だが、葉月の変容能力を複製している美樹の方が彼らには価値がある。

だから、釧がこのタイミングで青森にやってくると聞いた時、その意図を理解していながらも、むしろチャンスだと内心ほくそ笑んだ。

棚からぼた餅、飛んで火にいる夏の虫。

美樹という甘い蜜に釣られ、彼女ほどではないにしろ貴重な被験体がもう1人、このウツボカズラの中へと舞い込んだ。

これで青森万可は他の万可よりさらに一歩リードできる、と。

だが、そんな思惑はあまりに甘い思い違いだったのだ。

加藤が収斂進化と言い表したように、『連携しないのが連携』である万可同士は情報もお互い晒すことを嫌っている。

釧が祠堂学園のデータから念力能力者だったことぐらいは知っていたが、その程度がまさか６０ｃｍほどあるコンクリートを抉るほどとは予想だにしなかった。

美樹は指令室と同じセキュリティーレベル４の区画に軟禁しているのだが、これではすぐさま到達されかねない。

そして、それが彼らには最も恐ろしいことでもある。

難攻不落であるために逃亡することを捨てた彼らに、逃げ道はない。

自慢の防御がシュートカットまでされて突破されている現状は悪夢に近かった。
「標的はフロア４に侵入！依然として堀進行動を継続中！
このまま行動を許せば一気にセキュリティー４まで侵入される！」
先行していたＢ部隊は死傷なしと言えど重傷者も多く、非殺傷装備であることもあって戦線を離脱。
本来は後ろから追撃させたいところではあるのだが、泥底（ヌタ）と違って使い捨てでない彼らには相応の治療を施さなければ、他の隊員の士気に関わってくる。
無理をさせて、これから施設を守って貰わなければならない別部隊の忠誠心まで削ぐのは愚かしい。
念力に”圧”倒された彼らは外部の治療施設を頼って万可施設からも離れ始めていた。
「何としてもあいつの掘削作業をやめさせろ！
殺傷弾使用許可が下りている、弾雨に晒して気をこっちに引くんだ！」
けれどその代わりに、残りの常人部隊ほとんどが下から戦場へと送り込まれることになった。
その先陣を切ったのはＦ部隊。
オペレータールームの操作によって一時的に解除されたシャッターゲートを潜り抜けながら、部隊の隊長『辰』は隊員達に呼びかける。
「全員、用意はいいな！？」
本来、無線があるのでわざわざ叫ぶ必要はないのだが、超能力者との対峙前にはこうして大声を出すのが慣例になっていた。
自分達と比べものにならない力を持った化け物に立ち向かう前に士気を上げ、恐怖を振り払うための儀式のようなものだ。
隊員達の応答を聞き、頷いて、『辰』は他の１１人のメンバーを率いて最後の角を曲がった。
「標的と接――――」

が、接敵を告げる言葉すら言い切る前に、彼らは凶撃によって壁に叩きつけられた。
攻撃を許すつもりもないという意志表示と共に、掘る作業を中断して攻撃に転じた釧の念力が炸裂していく。
それは侵入が目的であるからこそ、部隊との戦闘よりも堀進を優先するだろうという万可連中の思い込みを突いた、釧の辛辣な駄目出しだった。
フロア全体を不可視の巨大ハンマーで叩き潰すような圧倒的な暴力は、遅れてやってきた残りの部隊も同じように這いつくばらせるには十分で、地響きを伴った剛圧の雨が収まった時には、釧の周りに煩わしい音を立てる人間はいなくなっていた。
それを確認してから彼は悠々と掘削作業を再開した。
彼にしてみれば堀り進めて美樹のところにまでたどり着こうが、やってきた連中を根こそぎ叩き潰してエレベーターで下りようが大した違いはない。
どうやら敵も一応一掃できたようだから、階段でも探して下りてもよかったのだが、わざわざ相手の危機感を煽らせる方を選ぶことにしたらしい。
もちろん理由はある。
常人部隊相手にこれだけの圧勝をしてみせたのだ。
ここまで追いつめられたら彼らは”連中”を出すしかない。
『神戸学園都市』対『千代神葉月』の時でも投入が遅かった”連中”、個人個人が個性的でありすぎる故に統制が取りにくいとされる”連中”――――超兵、超能力者部隊。
地下という特殊空間であるからこそ、特に投入が躊躇される彼らはまさに諸刃の剣だ。
戦闘力が高く、能力者に対しても有効だが、攻撃力がある分、被害が拡大しやすい。
だが、通路が狭いために脚足戦車（レギオン）が一切使えない地下万可に他の手段は取れまい。

「さてそろそろ・・・」
と、釧がセキュリティーレベル1最後の階層であるフロア4からフロア5へ降り立った瞬間、彼の頭部に水弾が襲いかかった。
威力はともかく、まだ能力を反射できるほど制御できている訳ではない釧は念力でそれを受け止めれずに被弾する。
頭に受けた衝撃で床を転げた彼めがけて次に飛んできたのは紫電で、電撃に床から身体を弾かれた後、仰向けになった彼に向けて上から氷柱が10本ほど落とされた。
そのままいけば、釧の身体を串刺しにしただろう氷柱。
けれども、それが刺さったところで大して彼は気にもとめなかっただろうし、そもそも刺さることさえなく、氷の槍は蒸発して霧散してしまった。
「ふぅん」
先ほど受けた攻撃のダメージなどまるで感じさせずに起き上がり、釧は言う。
「水に電気に氷ね。
思ってたのとは違うけど、まぁそれほど期待してなかったし、いっか」
「はっ、随分なコト言ってくれるじゃねーっすか、先輩。
けど、見た限り不遜な先輩の念力は能力波を跳ね返せない。
余裕かましてますがいいんですかね?念力の弱点は能力ですよ?」
立った釧の正面に1人、後方に2人。
『先輩』と言った正面の彼を見ると、歳は確かに釧より下のようで、部隊とはいっても発展途上の能力者を子飼いにしている一面が見て取れた。
常人部隊と違って身を隠すことをせずに対峙する彼らに釧はうん、と素直に頷く。
「確かに僕の念力はPK能力全般に対して防御としては脆弱だ。
けどさ、物事には何であれメリットとデメリットがあるものだろ?
君らの能力だってそうだ。水にも電気にも氷にも弱点はある――

――」

そう言うと、少女の風体をした彼は、身体をほとんどなくし、生まれ変わって以来、本来の二次性徴を経験しないままに成長した中性的な顔を綻ばせ、指をパチンッと鳴らした。

途端、音を呼応するように暗い廊下に輝いたのは紫電を散らす電気の塊だった。

「水には電気」

今度は左手に水玉が泡をポコポコと言わせて揺らぎ現れ、

「電気は誘導してやればいいし」

彼の頭上に炎もが上がった。

「氷は炎に弱い。

あと、草にも炎だよね。飛行には電気、毒にはエスパー格闘もエスパー。

・・・昔はエスパー強かったのに、今じゃ結構弱点が増えたよねぇ。

ゴーストには悪。鋼にも炎。・・・アレ？炎強くない？

ま、いいか。で、ドラゴンはアレだ、育てにくい・・・・・・」

彼が言葉を発する度に、ボコボコと能力の塊が発生していく。

その様に、何か口にしようとしてはパクパクと口を開閉させる超兵部隊の先兵達。

彼らのそんな様子を見て釧はますます笑みを深くする。

「君は何が好き？

電気？水？炎？氷でも、もちろん念力でもいいよ？

さぁっ、どれにする？」

悪びれずしれっと怖いことを訊いてくる彼に、正面からその笑顔を受けていた1人がようやく言葉を発した。

「・・・・・・・・・・・・何それセケぇ」

――――知識は遺伝する。

発想し、あるいは模倣し、それらを応用することが人類の叡智で

あり、知恵の進化と知識の遺伝の世界が人類の独壇場だ。
知恵の樹、『人間』色神睦月。
その系統は確かに受け継がれている。

「いやぁ、そんなに誉めないでよ。
さて、ではでは不肖、他方傾向追究所と万可統一機構の変わり種（ハイブリッド）、色別理論規格（ルート）の『色神』朽網釧がお相手させていただきます。
なーんてね。せいぜい足掻いて僕の糧になって頂戴」

第６５話－　青森学園。－Ｈｏｔ　Ｗａｒ－（後書き）

神戸万可にロクな奴はいない（教訓）
と、いうことで遅くなりましたが、６５話目です。
サブタイトルは『破砕☆粉砕☆こっぱみじん☆虹色魔女装子くしろんと不思議な学園』。
ちゃんと（「嘘」というのが）嘘予告の１つを回収しましたよ。
（、・ω・´）ドヤッ

ちなみに釧の『色神』には能力奪取能力はありません。
どちらかと言えばラジオのチューニングといった感じの能力です（その辺は次話辺りに出そう）。

青森いったことないのに描写してますが大丈夫でしょうか？
今回は学園と万可の描写に始終した風になってしまい、展開が前回・前々回同様スローになってしまいましたが、もう少しスピード感が出せればと思っています。

Ｐ．Ｓ．
更新が遅く、かといって他の作者さんほど活動報告のネタが思いつかないので書きようがないまま、活報も更新できず……。
ただ、作者が生きてるか分からないのはマズイんだろうなと危機感をもちまして、気分転換に描いたイラストでも活報に上げてみる試みをば、やってみようかなと思ってます。
三日坊主なのですぐやめるかもしれませんが、気が向いたら覗いてみてくださいませ。

第６６話－　能力色々。－Ｃｏｌｏｒｆｕｌ－

秋野乃一（あきの　のいち）は、体勢を崩すのも構わずに前へと跳びのいた。
膝、肩と打ちつけたが、常人部隊と同様に戦闘服を着込んでいる彼にはダメージにはならない。
だが、彼の先ほどいた場所にクレーターができているのを見て、肝の方は十分冷えた。
念力を思い切り上から叩きつけたのだろう。とんでもない一撃だ。
一度でも直撃すれば戦闘不能は免れない上、他のＰＫと違ってアレは攻撃方法や特性が分かっていても防ぎようがないから手に負えない。
放射されるのではなく、純粋に上から下に降り下ろされる攻撃では遮蔽物がほとんど役に立たないのだ。
机の中という手もなくはないのだが、ここは廊下部分でそんな物はないし、あの威力では机ごと潰されるのがオチだ。
物理干渉に対して有利であり、能力に対しても時にして干渉してくる、それが念力。
――――ＰＫ系で念力ほど怖いモノはない。
それは、彼の部隊の先輩の教えであり、彼の経験から導き出された答えでもある。が、
（それに加えて他のＰＫも使えるたぁ、話が違うじゃないかよ！）
標的が人体を砕けるほどの威力を持った能力の使い手だと、そう聞いていた。
その力がコントローラブルになっているのも知っていた。
その対処も考えていたのに、蓋を開けて出てきたのはマルチに対応したふざけた能力者だった。
（これじゃあ・・・）
心中で愚痴りながら、彼は身体を起こすために手に力を加えた。
が、起こしきる前に、次は左へ両腕をバネに身体をよじらざるを

得なくなった。
間一髪で頭上のあった場所にガッシャン！と、３０ｃｍ四方はある氷塊が叩きつけられ、その破片が頬にかかる。
（これじゃあ策なんて役に立たない！）
能力波を反射できない念力であれば、こちらのＰＫ攻撃を防げない。
だから、攻撃の隙を与えずに大人数で攻撃を集中させれば勝てる相手のはずだった。
そのための人員が、今もこのフロアに向かって上がってきている。
それまでの時間稼ぎが彼ら先兵の役目で、そういうこともあって転移能力者によって先に送り込まれた。
しかし、他の能力も使えるとなると、
（念力以外でＰＫを防ぎ得る術を所持している可能性がある！）
念力と違って、他のＰＫ同士は干渉し合うのだ。
（くそっ！しかも戦闘のペースまで向こうに取られてる・・・・・・逆境もいいところだ！）
今度こそ起きあがると、彼は他の２人へ攻撃が向けられているのを確認して、その場を離れた。
状況が変わったことを伝えなければならない。
廊下の角を曲がり、自らの身体が隠れるところまできてインカムに話しかける。
「こちら超兵Ａ『酉』、緊急報告。標的に念力外のＰＫ能力を確認！繰り返す、念力以外のＰＫを確認！
こちらの攻撃に対し防御能を持っている可能性大！
作戦変更を！時間も稼げそうにない、緊きゅっ――――ぐおっ！」
言い切る前に背中を預けていた壁が抉り飛ばされ、彼は床を転がった。
打ちつけた頭部から破片を払い、口の砂利を吐き出す。
気取られた。
作戦変更を待ってから行動に移す暇も与えてはくれないようだ。

瓦礫の中を這いだしたところをに念力の叩打を食らい、左足が巻き込まれた。

「あが、ぁあああ！」

自分の骨が砕けた音が聞こえ、呻き声も漏れる。

が、手足の動きを止めるわけにはいかない。

止めたらアウト、最悪殺される。

迫る敵から目を離さないためにうつ伏せから仰向けに身体を回転させて、右足で床を蹴りながら移動し続ける。

敵の姿は穴の開いた角越（コーナー）しに確認できた。

他の2人は・・・・・・既に沈んでいるらしい。

（常人部隊に能力者2人を瞬殺とはやってくれる）

常人と言えど銃は携帯していたはずだし、メンバー2人の電気と氷は厄介な能力であるはずなのだ。

天井から氷柱を降らせ続けて追いつめる『垂氷滝』にしても、運動神経を誤作動させる『電伝無視』にしても、1人で対処するのは難しいタイプだ。

それをこうもあっさり片づけられたのは、ひとえに釧の手数の多さ故だろう。

自分の能力は発水能力。

分が悪いとは知りつつも、乃一はまだ戦意を失っていなかった。

釧が一歩踏み出した瞬間を狙い、全力の一撃を食らわせる。

消防車の放水同等の強い水圧が炸裂したが、若干反応されて直撃とはならなかった。

横っ腹を掠めて後ろに飛ばされる釧。

派手に飛びはしたが、どうせ大したダメージにはなっていないはずだ。

痛む左足を無理に立たせ身体を起こす。

稼げたのはほんの僅かな時間だけ。

その雀の涙ほどの猶予を使い、彼がした行動は一定距離ごとに備え付けられている壁のコントロールパネルのボタンを押すことだっ

た。
赤い非常運用スイッチをＯＮにして作動させ、味方のみが知っている暗号コードを打ち込み、システムに命令を送る。
戦闘スペースを確保するために、このフロア４のゲートは下層への昇降ルートを塞いでいる物以外は開いたままだ。
それを閉じて、さらなる時間稼ぎとする。
先兵隊、そして包囲戦法という現在実行中の作戦では歯が立たないと彼は確信していた。
部隊の損失を押さえて、策を立て直す時間を上層部に与える必要がある。
（さっきの連絡で標的の危険性の認識が改められていればいいが・・・）
――――と、閉じたシャッターゲートを食い破ってくるだろう敵に備えて身構える彼だったが、その予想に反して一向にゲートを削る音が聞こえない。
しばし瞬きし、・・・そして気づいた。
「しまっ！」
（野郎！オレを無視して下に！）
相手が侵入を目的にした人物であることを失念していた。
釧が掘削作業から彼らの相手に切り替えたのは、さすがに念力に意識を向けながら連中の攻撃を防御するのは難しかったからで、こうして自分と相手が分断されてしまえば――――。
そしてもう１つ、まずいことに気がついた。
下からは今も部隊が上がってきている可能性が高い。最悪鉢合わせになる。
監視カメラが生きていればオペレーションルームから、逐一情報と的確な指示が送られているだろうが、あれだけ釧がフロアを壊した後なのだ。
既にフロア５に侵入されていると気づいていない可能性すらある。
慌てて彼はインカムを口元に寄せた。

「こちら『酉』！標的はフロア５へ・・・・・・くそ、壊れてやがる！」
だが応答がない。
受信機が攻撃を食らった時に故障したらしい。
「あぁ畜生が！」
もう一度パネルに戻り、今度は緊急回線を繋ぐ。
「こちら『酉』、インカムが故障。標的はフロア５に侵入。状況は！？」
『転移能力者による移動を中断、既に上がっていたメンバーがフロア５で交戦中。
火の玉に出動要請が出ている』
「明野さんに？・・・一気にカタを？」
『フロア７のオープンスペースで接触させる予定だ。
・・・状況変動が激しい。無線が使えないなら離脱するように』
「了解した」
どのみち左足が折れている。この足では戦えない。
問題は同様の理由で離脱も難しいことだが・・・・・、何とかして伸びている先兵メンバーの２人に起きてもらうしかない。
シャッターを解除して、彼は鈍くなった足で歩き始めた。

#

戦闘がフロア４からフロア５に移った頃。
「おーぅ、すっげぇ、さすがだな」
万可のボロボロになったエントランスに若内鈴絽とその妹楚々絽は姿を現した。
常人部隊が着用していた防弾服のオリジナルとも言える黒い外套を羽織った鈴絽。
暴力担当の彼女の代わりに機材を入れたバッグを背負っている楚々絽。

２人は堂々と門を通過し、釧の仕業である破壊の痕を見物していく。
「いいねぇ、正面突破、清々しいよな！」
「念力で穴を開けるんなら最初から奇襲かければいいのにって思わなくもないけども」
フロア２に繋がる穴を覗き込んでいた楚々絽の最もな意見に、彼女は肩を竦めた。「ロマンだよロマン」
「けど、そのおかげで俺らは楽に侵入できるわけだ。あー、本当は俺も堂々正面からいきたかったんだけどなー」
「姉様の言ったとおりになりましたね。エントランスにすら誰もいない」
「連中は釧ちゃんのことで手一杯だろうぜ。
そもそもここの万可は『頻繁に』狙われることを考えてはない。
『侵入しにくい』ってことはそれだけで大きな守りになるからな。
過激な能力者達の間でも『青森万可に侵入するなんて死にいくようなものだ』ってのが共通の認識なんだ・・・・・連中もまさか一日の内に３度も襲撃されるとは思うまい」
「でもふーさん、よく誘いにのったなぁ。私らよりお尋ね者で大変なのに」
「あー、それな」
楚々絽の何気ない問いに、彼女は唸りの混じった言葉を返した。
「実は気になっちゃいたんだが、あいつ、襲撃地が青森だって言ったらすぐ飛びついてきやがったんだよ。
ここ、他にも何かあるのかもしれないぜ？」
「嫌な感じがひしひしするなぁ・・・・・」
「ま、開けてみましょうパンドラの箱ってね」
誰もいない、カメラも壊れた――――顎の外れた虎の口を、２人は他愛のない会話をしながらピクニック気分で突破していった。

#

セキュリティーレベルが2に上がったフロア5は、今までのフロアと間取り自体が違う。

廊下が狭くなったのと同時に研究室の数が増え、セキュリティーを担うシャッターゲートも至る所に配置されているのだ。

セキュリティーレベル1が万可の表の顔ならば、レベル2は表の研究施設といったところか。

重要度は高くないが、隠密性を最大限に利用した多様な研究が行われていて、部屋の大きさや数はかなりの数にのぼる。

このため、フロア4に比べて飛び道具専門のPK能力者にすると、廊下では応戦しづらい造りになっていて、自然に釧と超兵の戦いも廊下から部屋へ、・・・・・というより部屋の壁を突き破って部屋に移動しながらというモノになっていた。

基本的に釧が逃げつつ、超兵がそれを追っている形だが、時折後ろに向けて釧の放つ念力が能力者の数を少しずつ削っていっている。

そして、今まさに――――新たな轟々とした騒音が生み出され、天井の一部が崩落し始めた。

落下物に部隊の1人は足を挟まれ、3人ほどが行く手を阻まれ、動きが止まってしまう。

そこを真横のベクトルを持った念力で薙払われて、一気に片づけられた。

口内を切って、血の混じった唾を吐いた他の隊員が、仲間が向かいにいなくなった機を見逃さず斬鉄風刃（カマイタチ）と繰り出したが、釧はそれを同じ能力で相殺し、次に右方からきた身体強化系能力者の投げたコンクリート塊を念力で受け止めた。

さきほど念力で横殴りした内の1人が放った斬物水圧（ウォーターカッター）をコンクリート塊で防いだことにより、抉れた破片と水しぶきが室内に飛び散っていく。

止まらない斬物水圧（ウォーターカッター）の攻撃を、釧は彼の頭上の天井を砕き崩すことで封じ、飛び散った水を利用して、撥水能力による攻撃に転じた。

撥水能力は発水能力と違って水を生み出すことはできないが、その分能力発現までのタイムラグが短く、操作も楽だ。
どうしても技巧が浅く広くになりがちな色神には有り難い。
散弾のように飛散した極小の水滴に身体を弾かれて、釧を囲もうとしていた数人は蹴散らされる。
が、1人、身体強化者だけは踏みとどまり、戦闘が始まって以来初めて彼の懐まで到達した。
踏み込み。
床を穿ったその一歩により、沈んだ床とは逆に釧の立っていた場所はシーソーのように浮き上がる。
足が床から離れて踏ん張れない状況下、彼のせいけん突きが炸裂した。
一瞬、空間が軋んだように揺らぐ。
それは本来無色であるはずの念力が、強力な衝撃を受けて傾いだからで、身体強化者のレベルの高さを物語っていた。
「やっぱ、物理じゃ分が悪いか！」
「分かってて仕掛けてくるんだから、君は随分肝が据わってるよね」
すかさず繰り出される蹴り上げを、純粋な身体能力で身体を捻ってかわした釧は数歩下がり、右手をかざした。
爆炎が放射され、薄暗い空間がにわかに明るくなる。
火加減（て）はしているとはいえ、普通の人間なら火傷を負う火炎だったのだが、その火の中から腕が伸びて釧の首を掴んだ。
「そういう君もとんでもない恐れ知らずだ！
この青森万可に、単身で乗り込むなど正気とは思えん！」
そのまま、ガンッとおおよそ人の立てるものとは思えない音をさせて、床に叩きつける。
その際瓦礫の粒までが舞い、かなりの力で叩きつけられたのは明白だった。
だが、
「ちっ！」

釧は大してダメージを受けた様子もなく、涼しい顔をしている。
試しに首を絞める力を強めたが、首筋に指が食い込むことすらなかった。
「念力！」
「いや、単純に身体を硬化させただけ！」
逆に蹴り上げられ飛ばされた彼は部屋の机に激突した。
額から血が流れるのも構わずに立ち上がり、ちょうど足下にあった６０万は下らない卓上型ＰＣＲ装置をぶん投げる。
もちろんそれは釧によって容赦なく砕かれて無惨に床のゴミと化した。
「・・・・・変容か。下にいる奴にも会ったが、厄介だよな。何より俺の能力同等の効果兼用できるってのが気に入らん」
「厄介？おいおい、身体強化ぐらいにしか使えないぼくの変容や美樹の変容を見て『厄介』とは侮辱だね」
「いやてめぇこそ喧嘩売ってんだろ。身体強化能力者相手に言うことかよ」
「そもそも美樹の変容だって、身体構造をいじれる程度だろうに、どうしてこう躍起になって手に入れたがるかねぇ」
「それだけアレが重要なんだろう？」
その返答を釧は「はっ」と鼻で嗤った。
「さぁどうだか。連中の目的を知れば知るほど僕は疑問ばかりが浮かんでくるけどね」
「あ？」
「こっちの話だよ。
・・・・・・・・・・で？さっきから廊下から僕の方を狙ってる水系能力者にそろそろ撃たせたらどうなのさ」
「っ！？」
「別に貯蔵（プール）してる能力がＰＫだけとは言ってないけど？」
「一千里眼「ＥＳＰ」かよ。はっ・・・だがお生憎様。
待機してたんじゃない。チャージしてたんだ。

それに狙いはお前じゃねぇ――――」

彼は自慢の脚力で思い切り跳んで、ドアのなくなった部屋の出入り口から外へと待避した。

「よ！」

その言葉尻を合図に、斬刃水圧（ウォーターカッター）が放射された。

部屋の壁を貫通した強力な圧の水が、釧ではなくその近くの床を切り裂いていく。

滅多にお目にかかれない等級３の超高威能力に、さすがの要塞も無事では済まない。

２階分のコンクリートを貫通し、同時にカットされた床と天井の多重は支えをなくして傾き始めた。

「うわぉっ、これはすごいな！」

バランスを崩しかけた釧は、何とか崩落する塊にしがみつき、

「素敵！是非とも取得したい！」

軽口を叩きつつ崩落から逃れるため足に力を入れようとして、・・・元より下に行くのが目的だったことを思い出し、それをやめて重力に身を任せた。

釧が落ちていくのを確認して、身体強化者の彼は地下で崩落というあまり考えたくない現象と、こもる分よく響く音に顔をしかめたまま、インカムに向かって報告した。

「徴兵Ｄ『牛』、標的をフロア７へ誘導完了。

・・・・・後はよろしくお願いします、火の玉先輩」

＃

美樹はフロア１３から１５まであるセキュリティーレベル４エリアの１４階。車良二室長のいるオペレーションルームより下の層の宿舎めいた空間にいた。

部屋の中はかなり広い。

その上、３ＤテレビにＤＶＤやＢＤの納められた棚、漫画や雑誌

の本棚、ベッドもシャワー室もあり、ゲーム機も棚の上に乗せられている。

元は超兵部隊の待機場所として用意された休憩室の１つがなのだが、それが彼女にあてがわれているのだ。

当然、電子ロックで施錠されているが、時間を潰す道具には事欠かない、不自由な過ごせる最高の場所と言えた。

が、それでも軟禁されているという認識があれば羽目を外せるはずがないのだが・・・と監視を任されている女能力者は監視対象の様子を見て溜め息を吐いた。

非常に柔らかい沈み込み、脇に抱えたスナックを頬張りながら、７５インチのテレビ画面でリリース間もない映画を鑑賞している美樹にそういった神経はないらしい。

軟禁されたと伝えられた時も、自分を迎えにかつての友が駆けつけてきたと知らされた時もずっとこの調子だ。

この難攻不落の地下要塞に進入する友を心配する素振りすら見せない。

画面で少女が大男の股間を強打するシーンでひとしきり笑った後、その美樹は唐突に彼女に喋りかけてきた。

「ねぇ、実ちゃん。今外がどうなってるか聞いてる？

釧君は今どこまで侵入してるのかにゃぃ？」

侵入者が捕まるという可能性を考えもしていない台詞に、彼女は首を振って答えた。

彼女に戦況は連絡されていない。

彼女の任務は美樹を逃がさないことだけだ。

「そっか」

と彼女は素っ気なく答え、

「でもま、そろそろでしょー。

釧君がやってくるにしても、室長が私を手放す決断をするにしても」

そう続けた。

「・・・・・・・・・・・・どうしてそこまで自信をもって言えるんですか？」
あまり良いことではないが、釧がくることは彼女の身の安全にも関わってくることだ。無視できずに思わず訊いた。
「うーん、まぁ色々あるけど、釧君には守護神が憑いてるってのが大きいよん」
「守護神？」
「そ。それに、彼はあれで抜け目ない男だぜ？
考えもなしに正面からやってくるようなタマじゃねぇっす。
むしろわたしゃ、どうして君らが自分の守りに自信がもてるのか疑問じゃよ」
「・・・・・・守りでここに勝てる万可なんてないでしょうよ」
「そーかもね。
でも、難攻不落というバリューネーム故の見落としもあるぜよ」
「え？」
「分からないの？ならいいよ、気にしないで」
手を振り彼女はそれっきり、画面の方に集中してしまう。
言いたいことだけ言って会話を切るという自由奔放な美樹に、何て無理な注文だと彼女は毒づいた。

#

ドミノが倒れていった時のように、床が斜めに陥没していく中を、その斜面を滑るように移動していた釧が最終的に着いたのは、今までの廊下や研究室とは違った明るく広く広い空間だった。
高さだけも５ｍはあるその天井からいきなり放り出された彼は念力にクッションに着地し、それからまず腰に吊していた黒いケースの中身を確認した。
中に入っているのは機械で、高価な上精密で壊れやすい。
崩落の最中受け身を取り損ねた際に壊れていないかチェックして

いると、「やぁ」と声をかけてくる人物がいた。
「随分余裕じゃないか。周りの確認よりも先に、荷物の確認とはね」
「落とされた時点で罠だって分かってるんだから、改めて警戒する必要もないでしょう？」
視線を機械から前にいる自分より年上の男に向け、代わりに指を機械に向けながら、「それに高いんですよ、コレ」と釧。
「能力者の能力波を受信する機械と見たが・・・」
「ご名答。能力波の座標を測定・記録できる優れ物ですよ。コレがないとチューニングするのに苦労する」
「能力パクる上に機械だよりっていうのはどうかと思うけどね」
「いやいや、加藤との共同開発とはいえ、コレを作るのには僕も携わってたし、僕の『色神』ってやつはラジオのチャンネルを合わせるのと同じで、相手の能力をコピーするのとはちょっと違うんです。そういう言葉は下の美樹に言ってやってください」
「どっちみち、そんなに能力を集めてどうするつもりだい？器用貧乏になるだけだとおもうんだけどな」
「葉月がいない間、学園に貯蔵（プール）されている能力を集めるというのが僕ができることですから。
あと万可の駆逐。彼女が帰ってこられるように掃除しておかないと。その一環が今のこれです。
実のところ、美樹のことは大して気にしてないんで」
「ひでぇ奴だな」
「いやぁ、美樹もぽやぽやして見えて結構エグいですよ？
さーて、お話はお終いにして、そろそろやっちゃいませんか？わざわざこんなステージを用意している辺り、あなたは中ボスぐらいには強いんでしょう？
是非とも能力を教えて貰いたい」
釧の振るった右手から、先ほどコンクリートを砕いたモノほど力は劣るとは言え、通常より強力な斬刃水圧（ウォーターカッター）が噴射した。
「・・・・・っ！さっそくか！」

「さっきの攻撃を待った甲斐がありましたよ。
水系能力はＰＫの中でも操作が難しいですから。
本来なら水を集めて圧を作るのにはコツがいるけれど・・・・・・
この機械があれば同じ攻撃は真似できる！」
床を線引きながら追ってくるウォーターカッターに、彼も釧と同じく腕を振るった。
急激な蒸発が起き、一瞬の内に白で染まった視界に釧は彼の姿をロスト。代わりに、前方から能力波の塊が襲ってくるのを感じて回避行動を取った。
元は念力の能力波しか分からなかった彼だが、多くの能力者に触れた今では、純粋な能力波そのものを感じられる。
全てを機械に頼っているわけではない。
釧は透視能力（クレアボイアンス）で相手の位置を確認しつつ、彼を中心に弧を描きつついて移動していく。
（炎系能力者は迂闊に近づけない）
特に、有効範囲が分からない内は近づきたくない。
だが、そんな釧をあざ笑うかのように、彼のいる範囲を容易く覆い、天井いっぱいに光が広がった。
それは青緑色の炎で、その揺らめきが消えると同時に、刃の雨が降り注ぎ始めた。
炎が刃に変化した。
「な――――！」
これには釧もさすがに驚きを隠せない。
「・・・何これセコい！」
刃が床に刺さる音、刃同士がぶつかる金属音、床を跳たね刃が他の刃に当たりまた跳ね返る音。
様々な現象とそれに伴った騒々しい音が鳴り響いた。
カンッカランッ。
最後の刃が、そんな実際の激しさと反した間の抜けた音をさせた後、ようやくして猛撃は止んだ。

突き刺さり、あるいは折れて床に散らばった刃の残骸の中――――、

「いやぁ、すごいな。物質のはずなのに念力で防げない刃なんて。お陰で結構食らっちゃった」

数カ所切り傷ができた釧はそれでも立っていて、火の玉と呼ばれる彼は素直に賞賛した。

「謙遜すぎる。あれだけの数を、しかも上からの攻撃を避けきるなんて普通できない。

初見殺しと自負していたのになぁ。

・・・・・あぁそうだ。自己紹介がまだだったよな。

いや、する前に大抵今ので勝っちゃうんで、機会自体が少ないわけだが・・・。

僕の名前は明野香大（あけのこうだい）。『火の玉』、『炎色反応』あるいは『錬金術師』なんて呼ばれてる」

「ふぅん、それは奇遇ですね。

『彩色念力』、朽網釧。

僕も『魔女』だなんて呼ばれてます」

第６６話－　能力色々。－Ｃｏｌｏｒｆｕｌ－（後書き）

『色』対『色』の戦いの始まりと、色んな人達の悪い思惑が交差中。
『火の玉』は既に名前が出てましたね。これで『鳳凰』『火兎』『火の玉』と３人揃ったわけですが・・・・・。
何でだろ、この小説はやたら発火能力者を推してますよね。

できれば次も早めに書きたいなぁ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9725e/

エキストラセンソリーな日々。

2011年11月23日18時18分発行